神宮司廳藏版

古事類苑

政治部一

古事類苑刊行會

古事類苑

政治部第一冊目錄

上編

啓

解

辭

牒

移

政治部九

上編

封事

政治部十

上編

印 華押圖

政治部十一

上編

古事類苑

政治部一

上編

政治總載上

政治部二

上編

政治總載中

政治部三

上編

政治總載下

政治部四

上編

詔勅

政治部五

上編

宣旨

院宣

令旨

政治部六

上編

符

下文

政治部七

上編

表

奏

政治部八

上編

啓

解

辭

牒

移

政治部九

上編

封事

政治部十

上編

印 華押附

政治部十一

上編

奉使 附使附

政治部十二

上編

除目上

政治部十三

上編

除目中

政治部十四

上編

除目下

政治部十五

上編

補任上

政治部十六

上編

補任下

政治部十七

上編

薦舉

貢舉

讓官位

政治部十八

上編

賣官位

所充

政治部十九

上編

上日

宿直

休假

政治部二十

上編

定考 小定考併入

列見

擬階奏

政治部二十一

上編

考選

政治部二十二

上編

功過

政治部二十三

上編

任限

交替

解由

政治部二十四

上編

辭官

致仕

政治部二十五

上編

敍位

古事類苑

政治部一

上編

政治總載上

政治部ハ、分チテ二編トス、上編ハ神代ヨリ孝明天皇ノ慶應三年ニ至ルマデ、總テ公家ニ關スルモノヲ收メ、下編ハ後鳥羽天皇ノ元暦元年以降、專ラ武家ニ係レルモノヲ載セタリ、但シ事ノ上下二編ニ貫聯スルモノニ至リテハ、固ヨリ其一方ニ收メテ、必ズシモ此限ニ拘ハラザルモノアリ、

政治ハ、法令ヲ施行シテ國民ヲ統治スルヲ謂フナリ、古來政事、又ハ政道ト云ヒ、邦語ニ之ヲマツリゴトヽ謂フ、蓋シ祭事ト同訓ニシテ、原ト神祇若シクハ天皇ニ服從ヒテ、其事ヲ承ハリ行フ義ヨリ出ヅト云フ、太古ハ祭政一致ニシテ、官亦文武ヲ分タズ、敬神尙武ハ實ニ我建國ノ皇謨ニシテ、歷代天皇常ニ能ク其意ヲ體シ、以テ內外ヲ總攬シ、海寓ヲ統御シ給ヘリ、三韓ト交通スルニ及ビテ、我制度文物漸ク備ハリ、雄略天皇ノ朝ニハ、臣連伴造ハ日每ニ朝參シ、國司郡司ハ時ニ隨テ朝集スルノ法アリ、舒明天皇ノ時ニハ、群卿百寮ハ卯ノ始ニ朝參シ、巳ノ後ニ退出ス、並ニ鐘ヲ以テ節ト爲スノ制アリ、孝德天皇大化ノ改新ニ至リ、隋唐ノ法ニ則リテ、更ニ朝參ノ制ヲ定メ、有位ノ者ハ、必ズ寅剋ニ朝堂ノ南門外ニ羅列シ、日出ヲ待テ庭ニ就テ再拜シ、終テ廳ニ侍ラシム、若シ遲參スル者ハ入ルコトヲ得ズ、午剋鐘ヲ聽テ後ニ罷ラシム、尋デ天武天皇ノ朝、文武ノ官人及ビ畿內ノ有位者ハ、正月、四月、七月、十月ニ朝參セシ

メ、若シ朝集スルコト能ハザルモノアレバ、當司ヲシテ其理由ヲ法官ニ具申セシム、文武天皇大寶ノ制、文武官初位以上ハ、朔日每ニ朝堂院ノ庭上ニ會セシム、其儀、五位以上ハ東西殿ノ前ニ列シ、辨官ハ辨官殿ノ前ニ列シ、六位以下ハ式部辨官殿ノ後ニ列ス、其行立ハ各、位次ニ依リテ次第シ、位同ジキ者ハ、五位以上ハ授位ノ先後ヲ用ヰ、六位以下ハ年齡ヲ以テス、親王ハ前ニ立チ、諸王諸臣ハ雜ラズシテ東西ニ分立ス、若シ雨泥ニ逢ヒ、日蝕、國忌等ニ當ル時ハ、並ニ朝會ヲ停メ、尋常ノ日ハ唯廳座ニ就カシム、而シテ朝參ノ刻限ハ、京官ハ卯ノ二刻、第二開門鼓ヲ擊訖テ、朝堂院ノ南大門、即チ應天會昌ノ二門ヲ開ク以前ニ參會シ、退朝鼓擊訖テ、閉門以後ニ理門ヨリ罷下ラシメ、外官ハ日出ニ參上シ、午後ニ退出セシム、若シ政務繁ケレバ、事畢ヘテ後ニ還ルヲ得シム、醍醐天皇ノ比ニハ、內外諸司ノ官人ニシテ、或ハ朝參ヲ怠ルモノアリ、是ヲ以テ延喜ノ制、元正ノ日、若シ朝セザルモノアレバ、五位以上ハ三節ニ預ルコトヲ得ズ、又散位五位以上ニシテ四月七月ノ朔日朝參ヲ闕キ、及ビ正月十七日ト、五月五日トノ兩節ニ不參ノ者アレバ、新嘗會ニ預ルコト無ラシメ、六位以下ハ並ニ季祿ヲ奪フノ法ヲ設ケタリ、然レドモ後仍ホ之ヲ怠ルモノ尠カラザリシカバ、堀河天皇ノ如キハ、特ニ叡斷ヲ以テ、年終ノ追儺ニ出仕セザル公卿ハ、元旦ノ小朝拜ニ參ルコトヲ嚴禁セシメ給ヒシコトアリ、而シテ百官朝參ノ日ニハ、多ク天皇臨朝ノ儀アリ、

臨朝ハ、又臨軒トモ稱ス、天皇大極殿ニ御シテ、朝政ヲ聽キ給フヲ謂フナリ、後之ヲ紫宸殿ニ於テス、其儀每日未明ニ、百官各、其版位ニ就キ、尋デ天皇出御アリテ、親シク萬機ノ政ヲ裁シ、四方ノ訴ヲ聽キ給フ、若シ奏聞繁多ニシテ、時刻推移スル時ハ、御座ニ於テ朝餉ヲ聞召シ、朝罷ムノ後、或ハ樂ヲ奏シ、宴ヲ侍臣ニ賜フ等ノ事アリ、因テ之ヲ朝政(アサマツリゴト)ト稱ス、此儀ハ嵯峨天皇ノ朝、藏人ヲ創置シテヨリ漸ク衰微シ、文德天皇ノ仁壽以降、一旦中絕セシガ、清和天皇ノ貞

暦十三年、更ニ再興シテ、時人之ヲ慶セシコトアリ、然レドモ後復タ遂ニ替廢シテ、代始、及ビ告朔、旬等ノ政ニ於テ、僅ニ天皇臨御ノ儀ヲ存スルニ至レリ、

告朔ハ、字又視告朔ニ作リ、並ニカウサクト云フ、或ハ視朔トノミモ書セリ、毎月朔日、天皇大極殿ニ御シテ、諸司ノ進奏セル公文ヲ視給フ朝儀ナリ、告朔ノ國史ニ見エタルハ、天武天皇五年九月丙寅紀ニ、朔不告朔トアルヲ以テ始トスレドモ、其起原ハ之ヲ詳ニセズ、大寶ノ制、文武官ノ初位以上、朔日毎ニ朝會シ、各、當司前月ノ公文ヲ注シテ進奏セシム、弘仁承和ノ交、尙ホ毎月朔日ニ此儀ヲ行ヒシコト見エタレドモ、延喜ノ頃ニハ、既ニ之ヲ四孟月ニ行フノ例ヲ開キ、且ツ多クハ公卿ノ朝堂ノ座ニ著スルノミナリシガ、後又旬政盛ニ行ハルヽニ及ビテハ、告朔ノ名ハ、殆ド所見ナキニ至レリ、

旬政ハ、毎月一日、十一日、二十一日、及ビ十六日ニ、天皇紫宸殿ニ御シテ、政事ヲ視給フ朝儀ニシテ、此日宴ヲ群臣ニ賜フ、之ヲ旬宴ト稱ス、朔日ニ置酒シテ群臣ヲ宴セシコトハ、既ニ天武天皇ノ五年十月紀ニ見エタリ、當時未ダ旬ノ名ヲ擧ゲザレドモ、其實既ニ前古ニ起リシヲ知ルベシ、後世旬ハ夏冬ノ二孟ニ行ハルヽヲ例トス、即チ四月朔日ニ行ハルヽヲ孟夏旬ト云ヒ、十月朔日ニ行ハルヽヲ孟冬旬ト云フ、又之ヲ併セテ二孟旬トモ稱ス、此日天皇紫宸殿ニ出御シ、先ヅ御鎰ノ奏アリ、次ニ官奏アリ、畢テ御膳勸盃ノ儀アリ、次ニ六衛府ノ番奏アリ、次ニ見參及ビ目錄ヲ進リ、各、祿ヲ賜ハリ、拜舞シテ退出ス、其儀二孟共ニ異ナル所ナシ、唯夏ハ扇ヲ賜ハリ、冬ハ氷魚ヲ賜ハルノ別アルノミ、二孟旬ハ必ズ朔日ニ行ハルヽ例ナレドモ、日蝕等アルトキハ、翌二日ニ行ハル、又停旬ハ、多ク諒闇ノ時ニ於テス、平座ハ、天皇出御ナキ時ノ略儀ニシテ、宜陽殿ニ於テ行フ、後世朝憲廢弛シ、旬政ヲ行ハズシテ總テ平座ノ儀ナリ、二孟旬ノ外ニ、新所旬、萬機旬、朔旦旬等ノ名アリ、新所旬ハ、内裏新造ノ時、萬機旬ハ、新帝即位

シテ始テ萬機ニ臨ミ給フ時、朔旦旬ハ、十一月朔旦ノ冬至ニ當ル時、祥瑞ニ屬スルヲ以テ特ニ之ヲ行フ、又臨時旬アリ、旬ノ日以外ニ、別ニ吉日ヲ擇ビテ之ヲ行ヘリ、

朝堂政ハ、天皇告朔ヲ視給ハザル時、大臣代リテ朝座ニ著キ、朝政ヲ聽クノ儀ナリ、其儀、大納言以下先ヅ含章堂ノ座ニ就キ、大臣ハ昌福堂ノ座ニ就ク、訖テ乃チ大納言先ヅ進デ昌福堂ノ座ニ就ク、時ニ大臣召使ニ命ジテ中納言以下ヲ召サシム、中納言以下共ニ稱唯シ、進デ昌福堂ノ座ニ就ク、若シ大臣不參ナレバ、大中納言ヲシテ堂ニ當テ政ヲ聽カシム、五位以上ハ色ニ隨ヒ階ヲ昇リテ座ニ就キ、六位以下ハ倶ニ庭ノ案下ニ就キ北ニ向テ立ツ、辨一人申シテ曰ク、司司ノ申セル政申給ト申ス、史次ニ依リテ讀申ス、一事畢ル毎ニ大臣處分シ、事ニ隨テ稱唯ス、訖テ六位以下退テ堂後ニ立チ、五位以上亦退キテ堂前ニ立ツ、立定テ倶ニ昇テ堂上ノ座ニ就ク、訖テ左史一人申シテ曰ク、申セル政、辨宣シテ曰ク、申セルマヽニ、史等倶ニ稱唯ス、右史亦之ニ倣フ、參議以上次ニ隨テ退出シ、少納言辨及ビ諸官等亦次ニ隨テ退出ス、延喜ノ制、凡ソ百官ノ庶務ハ皆朝堂ニ於テ行ハシム、但シ三月十月ノ二ケ月ハ、旬毎ニ朝座ニ著キ、四月ヨリ九月ニ至ル六ケ月ハ、朔日毎ニ之ニ著ク、而シテ其節會、及ビ雨泥日ハ之ヲ停メ、十一月ヨリ翌年二月ニ至ル四ケ月ハ、太政官ノ正廳ニ著テ行ハシム、後ニハ九月毎旬、及ビ十一月朔日ニモ亦朝座ニ著キシコトアリ、而シテ後世四月、七月、十月ノ朔日、若シ告朔及ビ朝座無キ時ハ、大臣以下官廳ニ就テ政ヲ行フ、之ヲ官政ト稱ス、

官政ハ、大臣若シクハ中納言以上、太政官ノ曹司廳ニ就テ、内外諸司申ス所ノ政事ヲ聽クノ儀ナリ、大寶ノ制、太政官内ニ少納言、左辨官、右辨官ノ三局アリテ、左辨官ハ中務、式部、治部、民部ヲ管シ、右辨官ハ、兵部、刑部、大藏、宮内ヲ管ス、其餘管セラレザル諸司モ亦各、事ニ隨テ左右ニ分隷ス、而シテ大納言以上ハ兼テ之ヲ通攝セリ、後世左大史兼テ左右ノ辨官局ヲ掌リ、此

ヲ官務ト云ヒ、外記ノ上首、此ヲ局務ト云フ、仍テ兩局ト稱セリ、局務ハ恒例臨時ノ公事、除目敍位等ノ事ヲ奉行シ、官務ハ官中ノ文書悉ク之ヲ知ラザルナシ、（兩局ノ事ハ、官位部太政官篇ニ在リ、）而シテ其政ヲ申ス刻限ハ、貞觀ノ式ニ據ルニ、二月八月ハ巳ノ一點ニシテ、三月ヨリ七月マデハ辰ノ三點、九月ヨリ正月マデハ巳ノ二點ナリ、後世此刻限ハ外記政ニ移リテ、官政ハ別ニ二月ヨリ七月マデハ辰一點、八月ヨリ正月マデハ辰三點トセリ、延喜ノ制、凡ソ諸司諸國申ス所ノ庶務ハ、辨官總知シテ太政官ニ申ス、若シ大臣在ラザレバ中納言以上ニ申ス、其重キモノハ臨時ニ奏聞シ、自餘ハ例ニ準ジテ處分セシム、後ニハ大臣ニ申スモノト、中納言以上ニ申スモノトニハ、明カニ之ガ等差ヲ立テ、奏ヲ經テ裁可スベキモノト、例ニ準ジテ處分スベキモノトニモ亦之ガ區別ヲ設ケタリ、而シテ臨時ノ大事、卽チ大祀、若シクハ國用ヲ支度シ、及ビ官員ヲ增減シ、國郡ヲ廢置シ、流罪以上ヲ斷ジ、兵馬一百匹以上ヲ差發スルガ如キモノト、又中務、式部、兵部三省ノ申政、卽チ考選目錄、及ビ六位以下ノ位記ニ請印スルガ如キモノトハ、並ニ辨官ニ經レズシテ直ニ太政官ニ申サシム、而シテ諸司ノ申政ハ、其辨官ニ係ルモノト否トニ關ラズ、皆先ヅ外記ニ經レテ然ル後ニ申サシム、其儀、參議以上、官ノ東門ヲ入リテ、先ヅ東廳ノ座ニ就ク、時剋座ヲ起テ更ニ廳座ニ就ク、少納言、左右辨、及ビ省輔等ハ、先ヅ進デ南廳ニ就キ、次ニ外記、左右史、及ビ省丞錄等、後ニ走テ後版ニ就ク、立定テ大臣命ジテ、召セト云フ、五位以上倶ニ稱唯ス、次ニ六位以下倶ニ稱唯ス、訖テ五位以上色ニ依テ座ニ就キ、六位以下官次ニ依テ進デ庭ノ案下ニ就ク、三省政ヲ申シ、了テ大臣處分ス、輔及ビ丞錄稱唯シ、訖テ次ヲ以テ退出ス、然ル後ニ辨官、政ヲ申ス、其史讀ミ申スコトハ、省司ノ次第ニ依ル、若シ數事ヲ申セバ各、神事ヲ先ニス、史申シ訖リテ辨之ヲ判ス、判シ畢リテ卽チ史仰セテ縱シト云フ、其中文ハ、民部省ノ返抄、及ビ宮內省ノ百度文各、二枚ヲ用キル例ニシテ、請印ノ儀、政畢

テ退出ノ儀、侍從所ニ著キ、及ビ參內スル儀等ハ、大抵外記政ニ同ジ、後世官政ハ漸ク廢替シテ、僅ニ官結政ヲ以テ此ニ代用スルニ至レリ、

結政ハ、カタナシト云フ、カタナシトハ、結ネ爲スノ義ニシテ、卽チ諸司諸國ノ申文ノ政ニ預ルベキコトヲ、政ヲ行フ以前ニ先ヅ披閱シテ讀上ルヲ謂フナリ、其之ヲ太政官廳ノ辨官結政所ニ於テ行フモノヲ官結政ト云ヒ、之ヲ外記廳ノ南舍、卽チ外記結政所ニ於テ行フモノヲ外記結政ト云フ、申文ヲ結ヌルニハ總テ國訓ヲ用ヰル、之ヲ結詞ト稱ス、之ヲ唱フルニ口傳アリ、結政ノ請印ハ、急事アリテ、外記政ヲ行フコト能ハザル時ニ行フ儀ニシテ、參議ノ、少納言、外記等ヲ率キテ、結政所ニ著テ、官符ニ捺印スルヲ謂フ、後世ニハ官結政モ亦外記廳ノ結政所ニテ行フ流例ヲ開キ、更ニ外記政始ノ結政ノ如キハ、外記政ト通用スルニ至レリ、

外記政ハ、大臣以下、外記廳ニ著テ、諸司申ス所ノ政ヲ聽ク儀ナリ、每月朔日、四日、十六日ヲ以テ式日トス、其刻限ハ既ニ官政ノ下ニ於テ言ヘルガ如シ、其儀、上卿先ヅ左衞門ノ陣ニ著ス、召使時ヲ申シ、乃チ廳座ニ著ク、上卿門ニ入ル時、官掌結政ノ座ニ居テ鳴高(ナリタカシ)ヲ唱フ、大臣ハ東戶ヨリ入リ、納言ハ中戶ヲ用ヰ、參議ハ西戶ヲ用ヰル、次ニ申文ノ儀アリ、上﨟ノ辨起テ、司司ノ申セル政申賜フト申スト云フ、訖テ史次第ニ之ヲ讀申ス、其申文ハ式日每ニ相替ル、卽チ朔日ハ民部省ノ返抄二枚、宮內省牛乳文一枚ヲ申シ、四日ハ左右辨官ノ管セル諸司ノ要劇文各一枚、宮內省百度文一枚、十六日ハ民部省ノ糙米文一枚、宮內省ノ百度文二枚ヲ申ス、民部省ノ申文ヲ申ス時ハ、上卿宜シテ、縱シト云ヒ、宮內省ノ申文ヲ申ス時ハ、給ヘト云フ、若シ申文無キ時ハ、外記法申ノ事アリ、訖テ辨少納言以下、座ヲ起チテ下ヨリ退出ス、次ニ請印ノ事アリ、若シ內印ノ文アレバ、先ヅ上卿ヲシテ之ヲ內覽セシム、畢テ鑰書ハ之ヲ停メ、驛符ハ之ヲ破リ、自餘ノ奏文ハ、史生上宣ヲ待テ之ニ外印ヲ捺ス、枚文ヲ先ニシ、卷文ヲ後ニス、捺ス

三十枚以上アリト雖モ、猶ホ三十枚ト申ス、內印ハ五十枚ヲ過ギ、外印ハ三十枚ヲ過グル時ハ、少納言請奏スルガ故ナリ、政畢リテ上卿座ヲ起チ退出ノ儀アリ、之ヲ出立ト云フ、外記政ハ下臈ヨリ退出シ、官政ハ上臈ヨリ退出ス、次ニ侍從所ニ著キテ申文ヲ申シ、儀ヲ居テ勸盃スルコトアリ、終テ參內シ、或ハ侍從所ニ著カズシテ直ニ參內スルコトアリ、若シ甚雨及ビ夜ニ入ル時ハ、外記廳ヨリ直ニ退散セシム、

政始ハ、毎年正月、公卿始テ太政官廳、若シクハ外記廳ニ著テ、政事ヲ議スル朝儀ニシテ、御齋會ノ儀ノ畢ルヲ待チテ、吉日ヲ擇ビテ之ヲ行フ、其太政官廳ニ於テスルモノヲ官政始ト云ヒ、外記廳ニ於テスルモノヲ外記政始ト云ヘリ、年首政始ノ外ニ、新帝踐祚後、改元後、新宮遷幸後、廢朝後等ニモ、亦此儀ヲ行フヲ例トス、若シ政始未ダ行ハザル間ニ、事ノ官符ヲ下スベキアレバ、則チ宣旨ヲ以テ之ヲ行フ、

吉書奏ハ、年首、代始、改元後等ニ、始テ官奏ヲ行フ朝儀ニシテ、吉書ノ名ハ、吉辰、吉日ナド云フニ同ジク、其始ヲ祝シテ稱スル名ナランモ、後ニハ官奏ノ一ナル、國司ガ鉤匙ヲ給ヒテ、不動ノ倉ヲ開カンコトヲ申ス奏文ノミヲ、特ニ吉書ト稱シタルコト、江家次第等ニ見エタレドモ、諸記錄ニ據リテ見ルニ、必ズシモ然ラザルガ如シ、蓋シ猪隈關白記承元二年正月ノ條ニ、非官奏、唯當吉書也ナドモアレバ、當時猶ホ官奏ト吉書奏ト同一ナラザリシコトヲ知ルベシ、吉書ニ政所吉書、官方吉書、藏人方吉書等ノ別アリ、又仙洞吉書、中宮吉書、東宮吉書等ノ名アリ、年首吉書ハ、毎年正月吉日ヲ擇ビテ之ヲ行フ例ナリ、建武年中行事、及ビ公事根源ニ、吉書奏九日ニアルベシ云々トアレド、未ダ其例ヲ見ズ、後世ハ朝憲衰頹シ、爲メニ延引シテ歲末ニ及ブコト常ナリシト云フ、

陣定ハ、大臣以下、陣座ニ著キテ政事ヲ評議スルヲ謂フ、陣座ハ又仗座ト云フ、通常左右近衞

ノ陣ヲ稱スレドモ、宜陽殿ノ公卿ノ座等ヲモ稱スルコトアリ、陣座ニ著スルヲ著陣ト云ヒ、又著座トモ稱ス、但シ著陣ハ陣座ニ限リタル稱ニシテ、著座ハ汎稱ナレバ、固ヨリ陣座ニ限ラザルナリ、凡ソ諸儀式ヲ行フ時ハ、公卿常ニ宜陽殿ニ著シ、尋常ノ時ハ、假リニ近衛ノ陣ニ著ス、宜陽殿ハ公卿ノ本座ニシテ、近衛ノ陣ハ武官ヲ帶スルモノヽ本陣ナリ、故ニ公卿ノ始テ著陣スルヤ、先ヅ本陣ニ著キテ次ニ本座ニ著クアリ、前ニ本座ニ著キテ後ニ本陣ニ著クアリ、家ニヨリテ各、其次第ヲ異ニセリ、陣定ノ日ハ、上卿勅ヲ奉ジ、外記ニ仰セテ諸卿ヲ催サシム、諸卿參會シテ上卿勅旨ヲ傳フ、若シ文書有レバ、先ヅ辨ニ給ヒテ先例ヲ勘ヘシメ、或ハ外記ヲシテ勘文ヲ奉ラシメ、諸卿一々看下シテ意見ヲ陳ベ、最末ノ人ヨリ言上セシム、上卿參議ヲシテ定メ申ス旨ヲ書セシメ、藏人ニ付ケテ奏聞シ、輕事ハ詞ヲ以テ奏セシム、

御前定ハ、親王及ビ公卿、清涼殿ノ御前座ニ參著シテ、臨時ニ緊要ノ大事ヲ議定スル儀ナリ、御座、庇ニ在ル時ハ、王卿孫庇ニ就キ、御座若シ御簾ノ前孫庇ニ在ル時ハ、王卿簀子敷ニ候シテ之ヲ定ム、御前定ノ定文ハ、通常之ヲ書カザル例ナレドモ、神鏡定ノ時ノ如キハ、猶ホ之ヲ書スルコトアリ、

殿上定ハ、親王以下、侍臣以上、清涼殿ノ侍所ニ於テ、臨時ニ重要ノ政務ヲ議定スル儀ナリ、後世御前定ノ議ヲ評定ト稱スルニ對シテ、殿上定ノ議ヲ僉議ト稱ス、殿上定モ亦定文ヲ書カザル例ナレドモ、不堪田定ノ時ノ如キハ、大臣之ヲ行フト雖モ、猶ホ大辨ヲ經タル納言ヲシテ之ヲ書カシム、

院殿上定ハ、院ノ殿上ニ於テ、臨時ニ公卿ヲシテ政務ヲ僉議セシムルヲ謂フ、白河法皇以後盛ニ行ハレシガ、院政ノ衰フルニ及ビテ全ク其跡ヲ絶テリ、

廢朝ハ、又輟朝トモ云フ、天皇朝ニ臨ミテ政事ヲ視給ハザルヲ謂フナリ、其日數ハ一日、又ハ

三日、若シクハ五日ニシテ、此間常ニ淸涼殿ノ御簾ヲ垂レ、音奏警蹕等ヲ停止スルヲ例トス、大寶ノ制、凡ソ天皇二等以上ノ親、及ビ外祖父母、右大臣以上、若シクハ散一位ノ喪ニハ、天皇事ヲ視給ハザルコト三日ニシテ、國忌ノ日、三等ノ親、百官三位以上ノ喪ニハ、天皇事ヲ視給ハザル事一日ナリ、廢朝ハ又神事ニ依リ、病ニ依リ、火災ニ依リ、或ハ雨雪、風寒、日蝕等ニ依リテ行セルコトアリ、

廢務ハ、諸司政務ヲ廢シ、百官出仕セザルヲ謂フ、其日數ハ一日ヲ限リテ行フ定ナレドモ、或ハ三日、若シクハ五日ニ亘ルコトアリ、大寶ノ制、日蝕及ビ先帝ノ國忌ニ當ル日ハ、廢務セシメシガ、後ニハ神事ニ依リ、佛事ニ依リ、或ハ御惱ニ依リ、火災若シクハ異變等ニ依リテ、廢務ヲ行ヒシ例尠カラズ、

名稱

〔類聚名義抄 九〕政 之盛反 マツリコト ノリ タヾス マサシ ヲサム 〔同 一〕正 音政 マサシ マツリコト 和 若シ

〔伊呂波字類抄 八末〕政 マツリコト 司空、司徒、司寇、賓、師、之八政、化也、入政、食、貨、祀、 治 鑒 マツリコト 巳上同、反正字、

〔書言字考節用集 九 言辭〕政 マツリゴト 朱子云、政謂法制禁令也、

〔運步色葉集 麻〕政事

〔神皇正統記 上 序〕上古は、神と皇と一にましまししかば、祭をつかさどるは、すなはち政をとれるなり、政の字の訓にてもしるべし、

〔日本釋名 中 人事〕政 まつりごと 神武天皇より開化天皇までは、殿中に天照大神の神體を安置し奉らる、是神勅によれり、朝廷にて天照大神の祭をつかさどれる人、即天下の政務を行ひし故、政をまつりごとゝ訓す、

〔倭訓栞 前編 二十九 末〕まつりごと 政をよめり、祭事の義也、よて祭政一致ともいへり、源氏に、まつりごたんといへるは、たむ、反つなり、

○按ズルニ、祭政一致ノ事ハ、官位部古代官職總載篇ニ載セタリ、宜シク參看スベシ、

〔古事記中神武〕神倭伊波禮毘古命、(自伊下五字以音)與其伊呂兄五瀨命、(上伊呂二字以音)二柱、坐高千穗宮而議云、坐何地者、平聞看天下之政、猶思東行、卽自日向發幸御筑紫、

〔古事記傳十八〕政は凡て君の國を治坐す萬事の中に、神祇を祭賜ふが最重事なる故に、(他國にも此意あり、皇國は更なり、)其餘の事等をも括て祭事と云とは、誰も思ふことにて、誠に然ることなれども、猶熟思に、言の本は其由には非で、奉仕事なるべし、そは天下の臣連八十伴緒の、天皇の大命を奉はりて、各其職を奉仕る、是天下の政なればなり、さて奉仕るを麻都理と云由は、麻都流を延て麻都呂布とも云へば、卽君に服從て、其事を承はり行ふをいふなり、(されば都加閉麻都留は、奉服從なり、又服從は奉仕にて、皆本は一ツ意より出たり、書紀雄略卷大御歌に、波賦武志謀、飫裒枳瀰儞麻都羅符とある、麻都羅符は奉仕るをよみ賜へり、又万葉二に、不奉仕とあるは、服從のことを云り、これらを以て、言の相通ひて、本同意なることをさとるべし、又神を祭ると云も、其神に奉仕るにて、本同言なり、されば政とは、天皇の神に奉仕り坐ますとせむも、言の本の意は同じけれども、其祭祀の事に因て云稱にはあらず、臣連等の天皇に奉仕る方に就て云稱なり、)故古言には、政と云をば、君へは係ず、皆奉仕る人に係て云り、上卷天照大御神の詔に、思金神者、取持前事爲政と見え、輕島朝の詔に、大山守命爲山海之政、大雀命執食國之政以白賜、宇遲能和紀郎子所知天津日繼也と見え、又下に引る續紀卅一の文など、皆然るを以曉るべし、(然れば、言の本を以て見れば、麻都理碁登には政字は當らず、此字になづむべきに非ず、されど臣下の奉仕る萬事は、卽君の國を治め賜ふ御事なれば、末は一ツにおつめり、麻都理碁登は令服事なりと云說もあれど、若然らば麻都禮碁登と云されば、自他の違あり、麻都理とは自奉仕るを云言、麻都呂閉は、他をして奉仕らしむるを云言なればなり、)

〔古事記中崇神〕爾自東方所遣建沼河別、與其父大毘古共、往遇于相津、故其地謂相津也、是以各和平所遣之國政而覆奏、

〔古事記傳二十三〕和平所遣之國政而は、麻氣都流久邇能麻都理碁登許等牟氣氐と訓べし、政とは此は歸化ふ者を懷け、不服者をば討て、其國を平治むる事を云、其も皇朝に仕奉る事の一ツな

れはなり、凡て麻都理碁登とは、臣下の天皇の御命を承りて、仕奉る事を云、服部連なり、此事は傳十八の七葉に委く云り、考へ合すべし、倭建命段に、所遣之政とあるも是なり、さて政を和平と云は、何とかや穏ならぬ如く聞ゆれども、若櫻宮段にも、令奏天皇政既平訖參上侍之、此は天皇の命を承りて、言趣け和せる事を、獻とは云るなり、と見え、書紀舒明卷にも、平水表政とあり、古語には如此さまにも云しなるべし、これらは其政を行ひたるを、和平とは云るなり、

〔古事記仲哀〕其大后息長帶日賣命者、○中略新羅國者、定御馬甘、百濟國者、定渡屯家、○中略故其政未竟之間、其懷妊臨産、

〔古事記傳三十〕其政とは、韓國御征の事を云なり、凡て麻都理碁登と云は、臣連八十伴緒の、朝廷に仕奉る事と云義なる由、白檮原宮段の傳十八の七葉に委く云るが如し、故此は古は皆仕奉る人に就てこそ云へれ、君に係て云る例はなきに、此に如此あることは、此度の御征は、天照大御神の大命を承賜ての御事なるが故に、其由は上に見ゆ大御神に仕奉り賜ふ事なり、

〔古事記中應神〕大山守命爲山海之政、大雀命執食國之政以白賜、宇遲能和紀郎子所知天津日繼也、

〔今昔物語二十六〕陸奧國府官大夫介子語第五

今昔陸奧ノ國ニ勢德有ル者兄弟有ケリ、兄ハ○中略國ノ介ニテ、政ヲ取行ヒケレバ、國ノ廳ニ常ニ有ケ、家ニ居タル事ハ希ニゾ有ケル、

〔名目抄諸公事音〕萬機政

〔伊呂波字類抄疊字〕政事　政務　政理　政途

〔運歩色葉集世〕政道　政事

〔書言字考節用集九言辭〕政事マツリゴト左傳、在君爲政、在臣爲事、又大曰政、小曰事、出東、政道、政務、

〔令義解六儀制〕凡太陽虧、有司預奏、○中略皇帝不視事、百官各守本司不理務、過時乃罷、謂不視事者、不御政事、○下略

〔禁秘御抄下〕給馬部吉上

臨朝名稱

貞觀政要、賞疑從重、罰疑從輕、殊勝明文也、以不行和爲政道專一、

〔古今著聞集政道忠臣三〕村上御所、南殿出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるが、南階の邊に候けるをめして、當時の政道をば、世にはいかゞ申すと御尋有ければ、目出度候とこそ申候へ、但主殿寮に松明たへ候、率分堂に草候と奏たりければ、御門大きにはぢおぼしめしてけり、

〔日本書紀崇峻十五〕五年〇中略正月、白髮天皇崩、是月、皇太子億計王、與天皇讓位、久而不處、由是天皇姉飯豐青皇女、於忍海角刺宮、臨朝秉政、自稱忍海飯豐青尊、

〔延喜式太政官十一〕凡天皇孟月臨軒、〇中略大殿親朔、若不臨軒者、辨官告知式部、〇下略

〔康熙字典車部酉集下〕軒(中略)鏡俗之末曰軒、(中略)又殿堂前檐特起曲椽無中梁者亦曰軒、天子不御正座而御平臺曰臨軒、

〔漢書八十二史丹傳〕建昭之間、元帝被疾、不親政事、留好音樂、或置鼙鼓殿下、天子自臨軒檻上、隤銅丸以擿鼓、師古曰、檻、軒闌板也、

〔新撰姓氏錄〕上新撰姓氏錄表

先朝臨其假濫、留慮根源、昧旦臨軒、仄景忘膳、

〔伊呂波字類抄安疊字〕早朝アサマツリゴト

〔白氏文集長恨歌十二〕長恨歌

楊家有女初長成、〇中略一朝選在君王側、〇中略從此君王不早朝、承歡侍宴無閑暇、

〔源氏物語一桐壺〕人めをおぼしてよるのおとゞにいらせ給ても、まどろませ給ことかたし、あしたにおきさせ給ふとても、あくるもしらでとおぼしいづるにも、猶あさまつりごとはおこたらせ給ひぬべかめり、

〔續後拾遺和歌集雜十六〕うへのをのこども、三首歌つかうまつりしついでに、朝草花、

御製〇後醍醐

霧よりも猶ことしげし荻の戸のあくればいそぐ朝まつりごと

(太平記四)備後三郎高德事附呉越軍事

都ヲ御出有テ後、廿六日(元弘二年三月)ト申ニ、御船隱岐國ニ著ニケリ、佐々木隱岐判官貞清、府ノ島ト云所ニ黑木ノ御所ヲ作テ皇居トス、(中略)中殿ノアトヾニ入セ給タモ露マドロマセ給ハズ、萩戸ノ明ルヲ待レ朝政ナケレ共、巫山雲雨御夢ニ入時モ、誠ニ晩ゴトノ御勤、北辰ノ御拜モ不怠、(下略)

(江次第鈔第一)二孟旬

朝政ハ每日ノ事也、ソレガ五日目ニナリ、十日メニナリ、月ノ一日ニナリシテ次第ニヤミテ、此時ハ二季ノ一日ニアリ、今ニナリタハ一向無之也、

(標注職原抄別記上)中臣井朝政

朝政とは朝廷の政事といふ事なり、朝廷とは早朝に出仕する所なるよし也、舒明紀に、群卿及百寮、朝參已懈、自今以後、卯始朝之、また公式令に、凡京官皆開門前上とありて、義解に、開門第二開門鼓前也と見ゆ、第二鼓とは、宮衞令に、凡開閉門者、第一開門鼓撃訖即開諸門、第二開門鼓即開大門とあるこの大門を開く鼓の事なり、大門は八省院の會昌、應天の二門なり、義解に依るに、撃鼓時節可有別式と見えて、たしかならねど、假如卯之二剋可撃第二鼓と見えたれば、日出より以前の朝參なる事明らか也、(陰陽寮式に依れば、時節によりて開閉に遅速のけぢめありて、大極殿閤門を開くは宮門の開、大門を開くは朝集殿の門なり、)今昔物語に、昔官のつかさに朝參といふ事を行ふ、いまだ晩に、火をともしてぞ人はまゐりける、などあるをもあはせて、政事の早朝に行はるゝを知べし、官事を勤といふも、都登(ツト)は早朝なり、女(ム)は助辭にて、むむると活用けば意なし、たゞ早朝に出仕する事をいふ、政字を麻都里許登と訓み、祭字を麻都里とよむ、その言の同じきを以て、祭祀と朝政との別ならぬを知べし、

(續古事談一王道后宮)昔平城天皇ノ御時マデハ、此國ニモ朝マツリゴトシ給ケリ、ソノ儀式、イマダ

御大極殿

ホノ〳〵ノホドニ、主上イデ、南面ニオハシマス、群臣百寮ヲノ〳〵座ニ揖ス、四方ノ訴人、サウナク内裏ヘ參集テ、タカキ机ノ上ニ、ウレヘフミノハコトイフ物ヲ、ヲカレタリケレバ、アヤシノ民百姓マデ、申文ヲモテ參テコノハコニイル、史、外記、辨少納言ナド、次第ニトリアゲテコレヲヨミ申、群臣ヲノ〳〵コレヲ評定シ、主上マノアタリ勅定ヲクダサル、ウレヘ〇本作ウメヘ、一モシ左右ニアレバ、スナハチメシトハル、カタ〳〵ノモノ、當時ナケレバ、シリゾキテトハルベキヨシヲ仰ス、申文オホクシテ、事ノホカニ日タケヌレバ、ヤガテソノ座ニテ供御ヲマイラス、諸卿御膳ヲオロシテ、各コレヲタフ、ソノマツリゴト、モシシハテヌレバ、ソノノチゾ舞樂御遊ナドモアリケル、君ノ御コヽロニハ、民ノウタヘヲキコシメシテ、御コトハリアルヨリ外ノ大事ナカリケリ、徴旦取衣饌會者少トイフ本文、コレヨリオコレル事也、アテマツリゴトニイブル事ハ、イマダタラキホドナレバ、衣ノタビヲサグリウル事カタシトイフナリ、嵯峨天皇ヨリコノカタ、コノ事スタレニケリ、コノ君事ノホカニ放逸ニシテ、マツリ事ヲ御心ニイレ給ハズ、サレドモソノ儀式ハ猶アリケリ、五位ノ藏人二人ヲサシテ、御倚子ノ傍ニスヘテ、ウレヘヲキカシメ、群議ヲキカシメテ、ノチニキコシメシテ成敗セサセ給ケリ、コレ今ノ職事ノハジメナリ、嵯峨ノ別業ナドヘ常ニオハシマシケルユヘニ、御イトマナクシテ、ミヅカラアサマツリゴトニアハセ給ハザリケルナリ、又

見塵添壒囊抄四

〔日本書紀皇極二十四〕四年六月戊申、天皇御大極殿、

〔日本書紀天武二十九〕十年三月丙戌、天皇御于大極殿、

〔續日本紀文武一〕二年正月壬戌朔、天皇御大極殿受朝、

〔續日本紀文武二〕大寶元年正月戊寅、天皇御大安殿、受祥瑞、如告朔儀、

〔續日本紀聖武九〕神龜二年閏正月丁未、天皇臨朝、詔敍征夷將軍已下一千六百九十六人勳位、各有差、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年八月辛亥、天皇臨朝、始聽庶政、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年閏十一月壬寅、天皇臨朝、召諸國朝集使等、　八年正月辛丑、天皇臨朝、　十一月戊寅、天皇臨朝、　九年二月戊午、天皇臨朝、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年閏三月乙卯、天皇臨朝、

〔類聚國史二十八帝王〕延暦十一年二月丙戌朔、皇帝御大極殿聽朝、竟也、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年三月乙未、天皇始臨朝、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月戊戌、天皇除素服、着黒緋御冠、橡染御衣、以臨朝也、御簾及屏風之緣並用黒染細布、但御座者、施疊於延褥之上、不立御椅、

〔類聚國史二十八帝王〕天長五年十二月壬子朔、御紫宸殿聽朝、朝罷之後、賜宴侍臣、左右近衛奏東國之歌、賜綿有差、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年七月甲午、天皇御紫宸殿、始覽万機、

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年二月十四日庚寅、天皇御紫宸殿視事、承和以往、皇帝毎日御紫宸殿、視政事、仁壽以降絶無此儀、是日帝初聽政、當時慶之、　十七日癸巳、天皇御紫宸殿視事、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年五月十一日庚午、天皇御紫宸殿視事、親王公卿並侍、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年七月二日庚申、天皇御紫宸殿視事、親王公卿侍焉、　十一日己巳、天皇御紫宸殿視事、　八月己丑朔、天皇御紫宸殿視事、太政大臣已下參議已上侍焉、　九月戊午朔、天皇御紫宸殿視事、　十一月戊午朔、天皇御紫宸殿視事、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年二月廿一日丁未、天皇御紫宸殿視事、大臣以下參議以上並侍、從五位上行少納言兼侍從橘朝臣春行執版位、奏請踏印官符、　四月乙卯朔、天皇御紫宸殿視事、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月辛亥朔、天皇御紫宸殿視事、〇事字依一本補、六府番奏如常儀、

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年四月二日乙巳、天皇御紫宸殿聽朝、

〔日本紀略醍醐一〕寬平九年八月廿一日甲子、天皇御紫宸殿臨万機、但停奏音樂、

〔日本紀略朱雀二〕承平元年十二月廿五日戊寅、天皇始出御南殿、〇紫宸殿臨視万機、

〔日本紀略圓融六〕安和二年十一月十四日丁巳、天皇卽位之後、初臨万機、

〔日本紀略花山八〕永觀二年十月十七日癸巳、天皇始臨万機、

〔小右記〕永觀二年十月十七日癸巳、參院、今日始聽事、依可出御南殿、不著聽座、午時參內、申時出御南殿、初臨万機之日也同時著御帳中御座、內侍執御劒等置右置物御机、左近將曹率近衞開左腋門、此間下官著左近陣座、依出居事、是稱御事闈司入自同門就版奏之、勅答云々、次監物鎰等參入、就版奏之、卽閉門、官奏左大臣源雅信〇起座著靴出居、先欲昇之間、上卿示有奏之由、是例也、卽早起著靴甚失前例、仍出居不昇、左大臣經宣陽殿壇上、立軒廊西第一間、西面未有如此之儀、南面北面已有兩說、西面之說不知其由、如何、取奏參上、到御帳許膝行奏、奏如例、卽歸出、立御屛風後伺覽、不覽可置左置物御机、了置書狀、先突左掾、次奏右掾置之、是未知事也、唯突掾置之、是故實也、進御帳下給奏、相退、加太〇〇〇也、下官此間又歸、方不見子細、大臣退下立軒廊西一間、西面史給書歸陣之間、再三被催出居所、依存故實不昇之、大臣踞座訖昇上著座、次公卿參上、此間主殿秉燭、采女昇御臺盤到西二間之間、召內豎二聲、稱唯卽參入、立軒廊前、宣御飯給、次立公卿出居坐前臺盤、余仰令置匕、卽大臣仰事由、置一小盤、令渡箸匕、尤奇々々、置臺盤上、是先例也、供膳、次臣下饌如恒、但供四種之後入御、左大將稱警蹕、此間下器欲渡、仍暫令停、先待還著御座〔口〕時、可渡間、違惟成示送云、唯今可出御者、小時出御御座、卽仰事由、渡下器、自余云々、此間出居侍從參上著座、左中將懷忠、大藏卿奉淸等也、太遲引也、二獻之後、開左腋門、闈司執內案就版、勅答云々、昇自南階參上、就御帳西方奏云々、退立南廂、勅答云々、舉退下、就版唯稱退出、次播部立案、少納言就案奏云々、勅答云々、又出御、向案奏云々、少納言元忠不召鈴、亦大失也、退出閉門、次三獻、采女撤御膳、余召內豎二聲、稱唯、內豎等於東階下稱唯、失也、須於日花門外稱上、卽仰云、數多將來云々者、卽

奉來令敍公卿着饗遲御、二時京刻無番奏、依非旬日也、先例如此之、又無議事云々、○下略

○按ズルニ、花山天皇ハ此年十月十日即位シテ、此日ニ始テ萬機ニ臨ミ給ヒシナリ、是ヨリ先、八月二十七日圓融天皇ノ讓ヲ受ケテ、九月二十二日ニ政始アリ、事ハ新帝政始條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔日本紀略 十二三條〕寛弘八年十二月十六日乙卯、始聽政、

〔經信卿記〕治暦四年十二月五日、今日始有御出三〇後三條南殿之事、昨日召使來催、仍午刻參內、關白被參殿上、又上達部兩三輩參侍、次內大臣以下參侍陣座、招頭中將被奏云、先例代始御出南殿必有官奏、而此一兩度不候、今日可被依何例乎、又番奏見參等候歟、庭立如何、仰云可有官奏、庭立不可有、番奏見參等內府召大外記被問、可有庭立、奏所司具否之由、次內大臣被示、左大辨云可有中文歟、大辨起座、着敷床子、仰可有中文之由、歸着陣座曰、僕、僕出陣被居床子、右中辨左少辨等同、次祗候少史來立前床子、次左少史章貫取歸中文於筥、置予前床子、僕見中文如例、三通文見了、史來取文著床子、退入、次僕着陣座、次左大辨見中文、此間內府被命外記令置廳座還着作法如常、次史插文差寶上卿、結申如例、次見奏作法如例、上卿令辨內覽、次有闈門御鑑奏、但右近陣官人着被闕褌袴、擧番長二人、褐衣出自陣南小戶、內大臣曰、僕被示、此官人裝束如何、可相尋歟、仍召官人、召如尋問、申云、先例只着褐衣開門、而今日依左陣仰、着被闕者、開門之時、着褐衣、不可、御入闈直入歟、叙失也、上卿被聞內侍出由、起座着靴、自西中門被參上、○中略奏後被歸着陣座、左大辨候座被下奏了、次出居中將基長參上堂上、昇自中門口出居參上之間、關白被示給、上卿參上後可能之由、仍退歸之處、陣上達部被示、早可參上之氣色、仍先以參上云々、此事有兩說歟、次內府以下着靴經陣座前、經庭昇自西階、着兀子床子等、今日次第儀式大略如例、但上卿以下大盤上先居器四種等、仍上卿召內豎、內豎撤四種、又最初下器、不居小器、又歸渡之後、不合盛粉熟、直昇西階御之、又內府不覽內案、闕司依催直被持參、件事西宮文者、近代上卿不見物案、失也云々、可尋、此外指事

不聞、

〔台記〕康治元年十二月十五日癸酉、今上〈○近衞〉即位後今日初御南殿、〈土御門烏丸内裏〉依幼主無官奏、庭立依寛和〈○和一本作治〉天仁保安等例、勅番奏、唯有鈴奏、大臣及按察使不參、左右大將已下參候云々、依大將爲貫首、率諸卿先上殿、次出居頭左中將經宗朝臣引侍從前少納言雅國朝臣昇殿、〈依無出居次將一人〉大臣大將參時先昇殿、次出居、次將昇、大納言大將爲貫首之例未分明、余案理爲大將者大臣納言其儀可同、又撿先例、天慶四年右大將實賴爲貫首、件日王卿上後出居、次將上、今大將之所爲叶理、又不違先例、供三獻了入御云々、如此入御時不撤御膳臣下膳、而今度撤御膳云々、可謂違失、公卿不知故實待撤大盤、經宗朝臣云、入御之後更不撤之、爰諸卿退下、傳聞記之

不御紫宸殿

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年四月七日丙辰、天皇不御紫宸殿、勅於省家令行其事、　廿日己巳、式部省奏諸國銓擬郡司擬、天皇不臨御、右大臣奉勅、於近仗下令式部少輔從五位上藤原朝臣佐世讀之、大臣下筆點定後奏、　十二月十日甲寅、天皇不御紫宸殿、中納言從三位藤原朝臣山陰執奏、

朝參名稱

〔倭訓栞前編三十美〕みかどまゐり　日本紀に、朝參をよめり、

朝參日時

〔日本書紀十四雄略〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、與百寮辭訣、握手歔欷、崩于大殿、遺詔於大伴室屋大連與東漢掬直曰、方今區宇一家、烟火萬里、百姓艾安、四夷賓服、此又天意、欲寧區夏、所以小心勵己、日愼一日、蓋爲百姓故也、臣連伴造毎日朝參、國司郡司隨時朝集、何不罄竭心府、誡勅慇懃、

〔日本書紀二十二推古〕十二年四月戊辰、皇太子親肇作憲法十七條、〈○中略〉八日、群卿百寮、早朝晏退、公事靡盬、終日難盡、是以遲朝、不逮于急、早退必事不盡、

〔日本書紀二十三舒明〕八年七月己丑朔、大派王謂豐浦大臣曰、群卿及百寮、朝參已懈、自今以後、卯始朝之、巳後退之、因以鍾爲節、然大臣不從、

〔日本書紀二十五孝德〕大化三年、天皇處小郡宮而定禮法、其制曰、凡有位者、要於寅時、南門之外、左右羅列、

候、日初出就座再拜、乃侍于廳、若晚參者、不得入侍、臨々到午時、聽鐘而罷、

〔日本書紀二十九天武〕十二年十二月庚午、詔曰、諸文武官人、及畿內有位人等、四孟月必朝參、若有死病不得集者、當司具記申送法官、

〔日本書紀三十持統〕四年七月壬午、詔令公卿百寮、凡有位者、自今以後、於家內著朝服、而參上未開門以前、(蓋昔者[illegible])

〔令義解七公式〕凡京官皆開門前上、(門謂第二開門也)閉門後下、(謂退朝鼓也)外官日出上、午後下、務繁者、量事而還、(謂[illegible])(是開門後[illegible]、事[illegible]還、宿[illegible]也、)宿衛官、不在此例、

〔令義解五宮衛〕凡開閉門者、第一開門鼓擊訖、即開諸門、(謂[illegible]第一開門鼓、[illegible]之二[illegible]、可有開式、[illegible]宮之一朝、[illegible]外、內外諸門也、)第二開門鼓擊訖、即開大門、(謂朝堂南門也、)退朝鼓擊訖、即閉大門、晝漏盡、閉門鼓擊訖、即閉諸門、(理門[illegible]門、[illegible]監人出入、謂之閉門也、不在此限、)

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年十二月丙午、勅、自今以後、左右大辨、八省卿、彈正尹、准參議已上、聽開門以

侍廳就朝堂

〔延喜式十八式部〕凡參議以上、及左右大辨、八省卿、彈正尹者、開門之後、皆聽就座、

〔延喜式四十一彈正〕凡諸司官人、開門以後就朝座者、卽加糺彈、但參議以上、左右大辨、八省卿、彈正尹、不在此限、凡諸司官人等、未閉門間下去、宜嚴糺之、

彈限

〔令義解六儀制〕凡文武官初位以上、每朔日朝、(謂朝者、朝會也、言尋常之日、唯就朝座、至於朔日、皆於庭會也、○中略)若逢雨失容、及泥潦並停、(謂泥潦也、)

〔令集解二十八儀制〕釋云、番上亦同也、古記云、文武官初位以上、謂長上唯分番准此耳、穴云、初位以上、謂主典以上、但番上人亦朝耳、問、雜人之徒朝由爲何耶、答、爲朔日是朝儀、故番上以上集耳、跡云、初位以上、謂番上亦令朝也、朱云、初位以上、謂一位以下也、○中略釋云、朝、朝參也、古記云、每朔日朝、謂朝參

也、朱云、每朔日朝、謂雖受假、必此日朝者、(未明、私先不同也、)又云、每朔日朝者、若朔日當大陽虧日何、二日朝、若下文准逢雨哉、答更不朝也、准下逢雨時、直送辨官、可納中務省也、但依令釋令史等、可送納中務者、未見明文、何宜送者、或云、問、每朔日朝、未知除朔日外、无朝參日哉、答、師云、有常朝參、但爲示朔日儀、或別立參顯耳、問、朔日若當日蝕國忌等者何、又武官如文官常就上位哉、答、朔日若日蝕國忌者、准逢雨及泥潦之日、入中務耳、又武官依文朔日朝參、但每日居上位者、不見正文、又女官朔日之行事不見也、(在穴)又或云、朝參儀式、五位以上列東西殿前、辨官者列辨官殿前、六位以下列式部辨官殿後也、(在釋)

〔令義解公式七〕凡文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序、位同者、五位以上、卽用授位先後、六位以下以齒、(謂、年齡也、謂、親王立南、分立東西也、謂夾道、而諸王諸臣、各依位次、不雜分列、謂自親王行降一等、諸王立西、諸臣列東、)

〔延喜式式部十八〕凡賀正之日、內外諸司、五位已上解任之輩、未得解由、(但宴會不在此限、五位部司亦同、)諸司雜色人、諸國四度使雜掌、及入京郡司、皆聽朝拜、卽季冬下旬、(大月廿八日、小月廿七日、)惣集諸司、預令習禮、其參議、及三位以上不在集例、

凡元正行列次第、參議以上在左、(太政大臣就列之時、右大臣在西、)親王、諸王、及餘官三位已上在右、自外五位以上隨便左右、其四位參議雖是下階、列同色上、孫王諸王同色、先列孫王、六位已下次以位階、不依官秩、外位不得列內位上、

凡諸節會行列次第、親王、及參議已上、幷諸官三位已上在左、諸王左右行列在諸臣上、其申政之時、以官秩次、但五位已上位色不同、雖是下官、猶先高色、

凡非執政二位者、列中納言之下參議之上、三位者列四位參議上、

凡國司五位已上就朝集使入京者、皆聽預節會、但五畿內及近江、丹波等國司者、雖非奉使亦聽、(若元日不朝者、雖不聽也、)預參、其賀茂兩社祝禰宜、若帶五位者亦聽、

〔古事談 六亭宅諸道〕任衞大臣,才學雖ㇾ非二絕倫一,主上每ㇾ有二勅問一,事明必申云々,是每參內,所ㇾ入事之書一帙,於二途中一見ㇾ之,勅問事必今日所ㇾ見之事也,仍主上深思二食才學由緒在ㇾ之由一,總夙夜格勤超倫云々,甚雨烈風之日,左衞門陣官上云,雖ㇾ非二在衞官一,參日也云々,其詞未ㇾ終ニ,笠ヲサシ,フカ沓ヲハキテ參ケレバ,見ル人皆感ケリ,

〔延喜式 十八式部〕凡元正之日,若有二不朝者一,五位以上奪ㇾ預二三節一,七十以上者、不ㇾ在二此限一、六位以下奪二春夏祿一,六位以下著有中祿者、不ㇾ在二此例一、但宮內,主殿,典藥,內膳,造酒,采女,主水等省寮司,莫ㇾ責二不參一,侍醫,東宮學士亦同,

凡內記,幷內藏,內匠,縫部等寮,莫ㇾ責二諸節會不參一,

凡散位五位以上,闕二四月,七月朝參一者,勿ㇾ預二新嘗會一,

凡正月十七日,五月五日,兩度節不參五位已上,侍二兵部移一,無ㇾ預二新嘗會一,六位已下官人奪二季祿一,

〔續古事談 一王道后宮〕堀川院ハ末代ノ賢王也,ナカニモ天下ノ雜務ヲ,殊ニ御意ニ入レサセ給タリケリ,職事ノ奏シタル申文ヲ皆メシトリテ,御夜居ニ又コマカニ御覽ジテ,所々ニハナミガミヲシテ,コノコトタヅヌベシ,コノコトカサネテ問ベシナド,御手ヅカラカキツケテ,次日職事ノ參リタルニタマハセケリ,一遍コマカニキコシメス事ダニ有ガタキニ,重テ御覽ジテサマデノ御沙汰アリケム,イトヤム事ナキ事也,スベテ人ノ公事ツトムルホドナドヲモ,御意ニ入テ御覽ジ定メケルニヤ,追儺ノ出仕ニ故障申タル公卿,元三ノ小朝拜ニ參タルヲバ,コト〳〵ク追イレラレケリ,去夜マデ所勞アラムモノヽ,イカデカ一夜ノ內ニナヲルベキ,イツハレル事也ト被ㇾ仰ケリ,白河院ハ此ヲ聞食テ,キタトモキカジトゾオホセラレケル,アマリノコトナリト思召ケルニヤ,

〔名目抄 恒例諸公事〕視告朔 クワウ、讀字不ㇾ讀之例也、正四七三ヶ月朔有ㇾ之、

〔九條年中行事 四月〕朔日,著二朝座一事,自二是月一迄二八月一,每月著,若天子御二朝堂一之時,名云二告朔一,

朝參例 不朝參 告朔名稱

〔年中行事歌合〕五番　右　視告朔正月十一日　女房
そをだにと殘しをきける諸越の羊の跡をなをや尋ねん〇中略
告朔は、唐土の文の心と、我國の儀と、聊差別あるにや、論語にいへるは、月毎に朔を廟に告といへり、吾朝の儀は、百官の行事上日をしるして、月毎に天子の御覽するなり、されば告朔の文を見そなはすと申心なり、假令ば唐の文より起れる事にてある上は、羊を曳出たるも事たがひたる事には侍らじ、此羊の事は、告朔の政とゞまりたれば、羊をも止むべき由、子貢申侍しに、羊の殘は猶禮の殘るにて有べしと、孔子ののたまひし事也、是は事新しき樣なれども、事の次に申也、さて視告朔と書て、唯こくさくと二文字によむが口傳にて侍也、定て家々の所存も侍らん、

〔公事根源正月〕視告朔　二日
是は百官の行事上日をしるして、月毎に天子の御覽せらるゝ也、告朔の文をみそなはすと申す心也、天子大極殿に出御なりて見給、天武天皇五年九月には、雨によりて告朔なしと日本紀にあれば、此時より前に始りぬとは知ぬべし、論語にいへるは、月毎に朔を廟につぐるといへり、それをも告朔といへり、字はおなじけれ共心は替たり、言葉意別と申は、かやうの事にや、此事、或は一日に有、又四日など也、視告朔とかきて、たゞかうさくと二文字によむが口傳にて侍なり、こくさくとは不讀なり、

〔壒嚢抄四〕視告朔事　是ハ正月二日也、告朔ト曰名ハ唐ショリ起リテ、論語ニモ侍レ共、本朝ノ儀ハ聊カ差別侍リトナン、我朝ノ儀ハ、百官ノ行事ト一上〇一恐上臈日ヲ注シテ、月毎ニ天子ノ御覽ズル也、告朔ノ文ヲ視ト申ス心也、視告朔ト書ルヲ、只コクサクト二字ニ讀テ、視字ヲ讀ヌガ口傳ニテ侍ルトコソ承ハレ、論語ニ、子貢欲去告朔之餼羊、子曰、賜也、汝愛其羊、我愛其禮ト侍リ、鄭玄ガ注ニ

每月朔ヲ廟ニ申スト云、羊ヲ廟ニ繫テ朔ヲ廟ニ告祭リアリ、此祭絶テ久シケレバ、羊ヲモ去ント申ヲ、羊ノ有ハ禮ノ殘ルニテ有ニ、羊ナヘナクバ、皆此禮アリト知人モアラジト惜ミ給ナルベシ、名ハ同ジケレ共心ハ替リ侍ニヤ、是每朔ノ事ナレ共元正ハ事多故ニ、二日ニ行ル、也、餘月ハ朔日ナルベシ、

〔論語註疏〕三子貢欲去告朔之餼羊、注、鄭曰、牲生曰餼、禮、人君每月告朔於廟、有祭、謂之朝享、魯自文公始不視朔、子貢見其禮廢、故欲去其羊、

〔[illegible]淺江六〕告朔、[illegible]

續日本紀卷二、文武天皇大寶元年正月乙亥朔戊寅、天皇御大安殿、受祥瑞、如告朔儀、トアル告朔ハ、何ナルコトゾト問フ人アリ、コレハ下文二年九月戊寅朔、詔司告朔文者、主典以上送辨官、速納中務省、トアル告朔ニテ、卽天武紀五年九月丙寅朔、雨不告朔、トアル告朔ナルベシ、天武紀此下告朔數出谷川氏ノ通證ニ、韻[illegible]國史ヲ引タルニテハ、其事跡タシカニシラレズ、延喜式ト弘仁式ト公事根源トヲ引タルニテシラレタリ、公事根源云、是ハ百官ノ行事上日ヲ記シテ、月每ニ天子ノ御覽セラルヽナリ、サテコノ告朔ノ讀ヤウニ疑シキコトアリ、告ハコクトコウト兩音ナルヲ、コウト讀ハ何カナル子細ゾト疑フルニ、コノ告朔ハ、兼良公公事根源正月ノイハルヽ如ク、古[illegible]書ニハアルベケレド、爲秀卿年中行事歌合判詞ノ唐ノ文ヨリ起レル事ニテトイハルヽ、ウベナルコトナレバ、西土ニテ告朔ヲイカニ讀ニカト尋ヌルニ、告ノ字入聲コクトコムナリ、[illegible]シカレドモ古來コミクセト云コトアリテ、其義ノ當否ニ膠泥セヌコトナドモアリテ、コレシカシナガラ一ツノ典故トナルコトモアルモノナリ、今コノ告朔ハ、爲秀卿ノ云、視告朔ト書テ、タヾコクサク塙本如此ト二文字ニ讀ガ口傳ニテ侍也、兼良公ノ云、視告朔トカキテ、タヾカウサクト二文字ニ讀ガ口傳ニテ侍也、コクサクトハ不讀ナリトイヘリ、又舊刊ノ名目抄ニハ、視告朔コウサク、視ノ字不讀之例也遠水氏校刊名目抄ニハ、視告朔コウサク、視ノ字不讀之例也

告朔儀

トアリ、名目抄ハ東山左大臣實熙公ノ撰ナリ、視ノ字ヨマザルハ、死ノ字ニ音カヨヘバナランカ、告ノ字ヲコウトヨムハ、入聲コク、去聲コウノ分別ニハアラデ、コクヲナダラカニコウト音便ニイヘルニテ、〔注師ナホウシトモ云、入聲ニ呼アニヘアラヌト相似、〕去四聲ノ去入ニカヽハリタルニハアラジカシ、兼良公ハ爲秀卿ノ語ヲ其儘ニ用ヒラレタルヤウニミユレバ、塙本ノ年中行事歌合ノ判詞ハ誤寫ナラン、〔古寫本ナドアラバ校對スベシ〕兼良公詞ヲソヘテ、コクサクトハ不讀ナリトサヘイハレタレバ、コウト讀コトハタシカナルベシ、舊刊ノ名目抄ハ、ユクリナクコクト傍訓シタルヲ、遠水氏ハ兼良公ノ指南ニヨリテ校訂ナレタルモノナルベケレバ、必コウサクトヨムベキコト也、實熙公、兼良公同時ナレバ、當時ノ名目ニ同異ハアルマジキ理ナルニヨリ、遠水氏ハ兼良公ニ據テ改正アリタルナルベシ、文武ノ大寶元年ニ、太政官處分、王臣五位已上上日、本司月終移式部、然後式部抄錄、申送太政官トミエ、同二年制、諸司告朔文、主典以上送辨官、官捴納中務省トアリ、コレ上日ヲ告朔ト云證也、視告朔ノ字ハ、類聚國史七十五〔部歲時〕淳和天長元年四月庚辰朔、天子御大極殿、視告朔事トアルゾ始ナラン、又視朔トノミモ云也、コレモ類史ニ桓武延曆十九年四月己巳朔、御大極殿視朔トアリ、

〔周禮注疏春官二十六〕大史、○中頒告朔于邦國、〔注、天子頒朔于諸侯、諸侯藏之祖廟、至朔朝于廟告、而受行之、〕

〔春秋左氏傳僖公五〕五年春王正月辛亥朔、日南至、公既視朔、遂登觀臺以望、而書、禮也、〔視朔、親告朔也、〕

〔春秋文公〕十有六年夏五月、公四不視朔、〔諸侯每月必告朔聽政、因朝於廟、今公以疾闕、不得視二月、三月、四月、五月朔也、〕

〔令義解儀制六〕凡文武官初位以上、每朔日朝、〔謂朝者朝會也、言尋常之日、唯就廳座、至於朔日、特於庭會也、〕各注當司前月公文、五位以上送著朝庭案上、〔謂其被管諸司、皆送所管上司、故云五位以上也、若无五位官、名預申官、令式部臨時差充也、〕即大納言進奏、若逢雨失容、及泥潦並停、〔謂泥濘也、潦淹也、〕辨官取公文捴納中務省、〔謂逢雨及泥潦、停告朔之時、諸司五位以上、以公文送辨官、辨官受取納中務省、即納書之後、不可更奏、其視告朔之時、大納言奏後、亦中務受取、〕

〔續日本紀二文武〕大寶二年九月戊寅，制諸司告朔文者，主典以上送辨官，官總納中務省，

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣，施藥院告朔帳，承前之例，收於辨官，自今以後，宜改之收於太政官者，

弘仁四年正月一日　少外記船連湊守奉

〔類聚三代格十六〕太政官符

應言上向京公私船數及勝載事

右得大輪田船瀨使所牒偁，勘料雜物，及所役水脚等，每年四季造帳進官，其來尚矣，今檢彼帳，直錄物色人數，無顯其國船，便勘公文事理不穩，被右大臣宣偁，宜下符諸國，每年令申與彼使帳相共計會，仍須下知所部，勘錄向京公私船數并勝載及挾抄姓名等，每月附告朔部司令申，至于年終，總計造帳，附稅帳使言上，不得練略，

承和五年三月廿三日

〔延喜式十一太政官〕凡天皇孟月臨軒視朔，大臣預點殿上侍從四人奏事者二人，所司各供其事，其日辨一人執公文函，〈太政官告朔文、辨官點進入、記、內人取自置之、付中務官、令進、〉奉讀司五位以上執函者，〈若無五位者、臨時擬定、〉執版各置案上，〈事見儀式〉若不臨軒者，辨官告知式部，其函令進辨官，即納中務，令進奏，

〔延喜式十二中務〕凡視告朔者，前一日置版位於大極殿前庭，〈事見儀式〉

〔延喜式十三大舍人〕凡視告朔日，舍人四人，候昌福堂東北，于時殿上侍從喚舍人二聲，舍人共稱唯，少納言替升，〈事見儀式〉

〔延喜式十九式部〕孟月告朔前一日，省置龍尾道以南版位，告朔大夫預習儀式，其日質明，省令省掌立漆案於中庭，〈事見儀式〉乘輿不御之日，省掌直立辨官廳前，立曹司廳亦同，

〔延喜式三十八掃部〕凡〈中略〉四月告朔設御座，如朝賀儀，〈但不設少納言位、并執函徽女孺等座、皇太子及大臣座、於東廊下、〉

〔延喜式三十八掃部〕凡陣章堂告朔、諸司五位已上座者、毎朔日旦、以掃料鋪之、〈官司准此、〉但皇帝臨軒不須、

〔延喜式十八式部〕凡應昇告朔文案者、其日平旦、簡差諸司官人六位七位容儀合禮者令候、

凡應進告朔文、當司無五位以上官者、其文申送辨官、即仰省、令差他司五位諸官執文、〈天皇不御之日、先申其由於辨官、令例官已上執之、〉

凡告朔日陪從五位以上預朝參之例、

〔延喜式十二内記〕凡天皇御大極殿視告朔者、諸司大夫進置函於案上、奏者奏畢復本列、訖侍從令舍人喚内記、〈相候龍尾道階下、〉内記二人稱唯、昇東西階、就版位立、侍從宣曰進文收之、稱唯、案下指笏昇案、退降東階、出蒼龍樓掖門、〈公文總送中務省、〉

〔延喜式四十一彈正〕凡進告朔函時者、辨官、式部、兵部、彈正五位以上者、立本司廳前、他司五位已上者、立東西廳前、諸六位已下、立辨官式部廳後、

〔北山抄一正月〕毎月一日、奏去月上日事、〈外記錄參議以上及少納言外記上日、少納言付內侍、弁官錄弁史上日付之、左近陣錄出居侍從內記等上日、校書殿進物所侍付內侍奏之也、〉

〔小野宮年中行事七月〕朔日、視告朔事、〈又見九條年中行事〉

〔九條年中行事十月〕朔日、視告朔事、〈○又見小野宮年中行事〉

〔北山抄十二月〕朔日、視告朔事、

侍朔例

〔類聚國史七十五歳時〕延暦十九年四月己巳朔、御大極殿視朔、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月甲子朔、御大極殿視朔也、

〔類聚國史七十五歳時〕天長元年四月庚辰朔、天皇御大極殿視告朔事、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年四月辛巳朔、天皇御大極殿、聽〈○聽一本作視、本朝月令作聽、〉告朔、

不告朔例

〔日本書紀二十九天武〕五年九月丙寅朔、雨、不告朔、　十一月乙丑朔、以新嘗事不告朔、　六年五月壬戌朔、

不告朔、十一月己未朔、雨、不告朔、十二月己丑朔、雪、不告朔、

〔撥塵集 上 年中行事〕十月 旬事

〔遺塵抄 五〕旬事 是ハ四月一日ニアル事也、天武天皇十二年ニ始トナン、文武ノ官人畿内ノ住人向ヲ、正月ニ必ズ朝參スト云々、無御出時ハ宜陽殿ノ平座ニシテ行ル、トヤラン、旬ト者、夏冬ノ季ノ改マル初ニ、臣下ニ御酒ヲタビ、政ヲ聞食ス也、旬ニ種々ノ儀アリ、内裏新シク造ラレテ、始メテ南殿ニ行ハセ給フハ、新所ノ旬ト申也、位ニ即セ給テ始テ政ニ望ミ給フハ、萬機旬ト申ニヤ、此四月ノ旬ト申也、此旬ニハ内侍扇ヲ持テ上達部ニ賜ヘバ、謹テツキテ請取給作法ナンド侍ルトナン、多ハ十月朔日也、

〔左人抄 一〕萬機旬之事

新帝即位ノ後、始テ政ニ臨ミ行ハル、ヲ萬機旬ト云、

新所旬之事

内裏ヲアラタニ作ラレテ後、始テ南殿ニテ行ハル、ヲ新所旬ト云也、

〔倭訓栞 前編十一〕しゆん 朝家の公事に旬あり、張說詩に、旬宴美成功と見えたれば、唐制に沿者也といへり、内裏あたらしく造られて、初て南殿に出させおはしますを、新所の旬と申、位につかせたまひて、政にのぞみたまふを、萬機の旬と申と、年中行事歌合に見えたり、朔旦の冬至なれば群瑞とし、旬を行はるとて臨時の節會あり、夏の初冬の始に扇を賜ひ氷魚を賜へり、よて物事にその時に至り、其度に中るを俗に旬といへり、字書にも、徧なりとも滿なりとも見えたり、

〔全唐詩 二之四 張說 四〕三月二十日一作三月三日詔一作承恩宴樂

遊園賦得風字

樂遊形勝地、表裏望郊宮、北闕連天頂、南山對掌中、皇恩貸芳月、旬宴美成功、魚戲芙蓉水、鶯鳴楊柳

旬

奥、春光石欲暮、天喜戀無窮、長袖招斜日、留光待曲終、

〔江次第抄六月〕二孟旬儀
今案、始自二月、毎月朔、十一、十六、廿一日有旬儀、但除廢務日、朔日六衞府上番奏、十六日下番奏也、二孟月有御出、

〔小野宮年中行事二月〕朔日旬事

無旬

〔西宮記十月〕旬
同〇延喜八年二月、旬、御南殿、六位藏物奏御覽、御定

〔日本紀略一醍醐〕延喜七年十二月十六日己未、旬、天皇御南殿、

〔日本紀略一一條〕寬弘二年七月一日丁未、旬、諸卿不參、仍無政、

旬宴

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年三月癸丑朔、置酒田村舊宮、賜祿有差、

〔類聚國史七十五歲時〕延曆十二年五月戊寅朔、曲宴、賜五位已上物有差、七月丁丑朔、曲宴、賜侍臣衣、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年七月庚申、十一日是中旬之初也、上御紫宸殿、賜侍臣酒、乃至設親王大臣座於御床下、令以圍碁焉、夕暮而罷、賜親王大臣御衣、次侍從已上祿、各有差、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年三月丙午朔、天皇御紫宸殿、侍從廚獻御贄、設酒饌、侍臣具醉、賜祿有差、八月甲辰朔、天皇宴群臣於紫宸殿、左右近衞遞奏音樂、勅令四位已上開襟、至夕宴罷、賜祿有差、八月甲午、二十一日天皇御紫宸殿、侍從廚獻御贄、爲侍臣設酒饌、賜見參五位已上祿、各有差、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年三月庚子朔、天皇御紫宸殿、賜侍從已上酒、具醉而罷、庚戌、十一日是中旬之初也、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、至御床之下、促侍臣座、令以圍碁、且彈琵琶、日斜酒罷、賜大臣御衣、六月戊午、二十一日天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、且令圍碁、天皇依炎熱脫御靴、勅侍臣同亦脫之、喚相撲司鼓、令奏音樂、侍臣具醉、賜親王已下、五位已上御衣有差、

二孟旬

〔類聚國史七十三歳時〕延暦十六年十月戊辰、○十六日曲宴、賜侍臣物有差、

大同二年六月壬申、○十六日曲宴、賜五位已上被衣、

弘仁四年七月丙寅、○十六日宴于後庭合歡樹下、賜四位綿三万、五位二万、

○按ズルニ、類聚國史第七十五歳時部ノ旬宴ノ條ヲ、刊本ニハ一本ニ據リテ曲宴ト改メタルハ、校訂者ノ誤ナリ、旬宴ハ、一日、十一日、二十一日ノ宴ニシテ、類聚國史ニハ、十六日ノ宴ヲ附出セリ、蓋シ十六日ハ、月ノ半ニシテ、下十五日ノ初日ナレバ、朔日ニ對シテ、此日宴アリシナラン、

〔公事根源四月〕孟夏旬　同日○一日

是は天子夏冬の事のあらたまるはじめに、臣下に御酒をたび、政をきこしめす義なり、おほよそ旬には色々有、○中略夏のはじめにおこなはるゝをば孟夏の旬と申、冬のはじめをば孟冬の旬と申にや、この夏冬のをば二孟の旬とも申也、

〔江次第鈔第一〕二孟旬

四月十月ノ節會也、旬トハ十日メグリ旬ト云子細アリ、旬ハキハメテ平座也、實ハ弘仁ノ時分アナマツリ事ノコトアリ、毎日ノコトナンパツヤカスニ依テ、十日メニ旬ニ用ル也、故官奏、監物鈎奏、六府番奏、闈司奏アリ、此ヲ合テ庭立奏ト云ナリ、宇治關白記ニアリ、

〔九條年中行事四月〕二孟旬儀（天慶二年九月晦日、依内裏仰、大閤下所被作儀式文也、）

□既畢、皇帝御殿、内侍臨東檻召人、大將先參上、（謂大臣兼大將也、若納言兼大將時、次將先昇、）次親王以下、參議已上著座、畢近衞次將率出居侍從、入從日華門、參上著座、著南廂座、二人外又他親王參入之時、出居次將召掃部、掃部官人稱唯、隨親王數取兀子參上、立母屋北上、親王參上著座、了進物所始供奉御膳、采女昇御臺盤、至南庇西第二間之北、出居次將召內竪二聲、內竪於日華門外同音稱唯、即一人（六位別當頭等之類）趁進櫻樹邊、次將仰云、給御飯、稱唯退出、內竪等持臺盤參入、立臣下座前、次內竪持下器、度西至進物

所受索餅還度、（此間供御索餅）於日華門外辨備、給殿上親王以下、次侍從以上、□御膳幷臣下給饌、采女口供御酒、次酒番侍從參上勸盃、次內豎持下器度之、次左近將曹率近衞開左掖門、次闈司自同門參入就版奏云々、勅曰、令申（與）、闈司稱唯退出、次六衞府佐參入、各番奏了、勅曰、置（計）諸衞佐共稱唯、闈司二人自左掖門參入、各取簡三枚、昇從西階、付內侍奏聞、（但勅闈司王卿昇時、諸衞佐退出）下、此間御酒二獻、了闈司一人又自同門持內案文參入、就版奏之、勅曰、持來、闈司稱唯、昇從南階進奏、御覽聞、闈司候南廂、御覽了勅曰、令申（與）、闈司下自南階、就版稱唯、歸至長樂門壇上、召少納言、此間所司立捺印案、次少納言參入就版申、了後勅曰、取之、少納言二步、喚主鈴二聲、主鈴稱唯參入、少納言進向立長樂門前、□出印後共向案下捺印如例、少納言奏云々、勅曰、給、稱唯罷歸、收印退、此間所司撤御酒、三獻後、左右近衞奏亂聲、遞奏音樂舞等、畢外記取見參祿目錄等奉大臣、大臣參上、付內侍奏聞、返給、下殿、見參書賜少納言、目錄書給辨、少納言更出日華門還入、就版唱之、殿上諸臣各稱唯就列、北面西上、（參議已上一列、四位五位一列、）再拜舞踏各退出、但出居次將不就此列、猶在本座、爲皇帝歸本殿之時稱警蹕也、此日遲參王卿、未下御箸以前者、參上著座、御箸下之後者、不能參上退出、此由見故式部卿親王延長四年十一月一日記、親王二人座在南庇下、親王先參著件座、其後上臈親王參入欲著座、其時下臈聞此由、暫降殿、令上臈著廂座、下臈人著母屋座、是仁和寺禪君說也、親王二人參入、□參之時、出居召掃部寮二音、其由見延長六年十月一日左近陣記、又御出之後降雨者、於中門奏樂之由、見寬平二年四月一日右近陣記、（南□割、東宮記也）

○○○給御扇、（不常、五六月、）番奏之後、內侍執御扇（盛御筥）出自御座後方、居御屏風南端、于時出居將若侍從起座、入自母屋北間進跪插笏、取入扇筥、退還居前座、進立王卿座前、（西面）即以右手取扇給之、王卿以下一々起座、插笏以左右手取御扇、取笏復座、侍從以上給訖、執筥之者跪取自料扇、（或取扇入置中、但御扇隨筥座人數）以空筥置大盤下、把笏復本座、了王卿以下、侍從以上、下殿列立櫻樹西頭拜舞、（北上西面、參議已上一列、四位以下一列、）昇殿復座、

以後之儀如例、或給氷魚、(九月)十、第二度下器之後、番奏之前、采女二人、(一人執氷魚、一人持汁鐺、)自御前來座、上手、時第一王卿一人下座、跪於大盤西頭、其片膝、取采女所持氷魚并汁等、一々置大盤西端、采女賚御盤退還、隨卿一王卿座、令內豎等曳下、(目出居次將、令召內豎、)王卿以下、各以匕攪、取件氷魚、至于侍從一々如此、

〔西宮記十月〕旬

天慶八年十月一日甲子、(丈記)天陰、勸學院權樹怪之物忽當今明日、然而爲勤公事、欲參內裏、先參殿中、承旬日儀式中頗有疑之事、因之申問除、

一如內裏式者、可有監物進遣御鎰之奏、而年々日記且注給時之奏、不注返時之奏、若此日記略歟、仰云、件事雖存式條、見年々之儀、敢无返進奏者、

一旬日、親王三人以上參入之時、出居之次將召掃部、令立兀子、例也、今疑者召掃部之後、他親王又參入者、出居重可召掃部歟、仰云、重召掃部之由、所未見也者、

一延喜二年日記注、一下器之前侍從厨家獻御贄之由、而年來一下器之後獻之、今案之、件御贄、是爲備御膳也、然則依延喜二年之例者、

一四月駒牽之日、獻物并諸歌發音及臨時之獻物之時、必待問稱、所獻相次奏物名、而見近代之例、旬日侍從厨家之御贄、不待問稱之、依有事疑、引勘年々日記、元慶八年四月一日記云、殿上侍臣問云、何爲物哉、五位稱唯、申云、侍從厨家所獻之御贄者、今從件例者如何、仰云、此事尤可然、但先帝之御時、被乱行諸事、然而彼時猶不問、元慶之例、若誤歟、爲當改定歟、猶可注近例者、

一見年々例、日上著陣座、看見參文、而延喜三年日記云、大臣獻偶床子、外記持見參并目錄書等、奉覽大臣者、何爲善乎、仰云、著陣座者看見參、此可也者、

一殿下仰云、出居之次將召掃部、一音歟二音歟、申云、二音也、延喜六年十月一日、左近陣日記注、此由也、又某任少將之比、尋問先達所陳如此、仰云、我不經近衞中少將、仍儀不存出居之職掌者、

孟夏旬

一殿下仰云、今日旬給氷魚之儀、陪膳采女、隨天氣執供御膳之氷魚、奉於王卿之座、貫首者跪、待取置大盤、還著本座、令召內豎引下、每人以匕一度搔取者、

一仰云、四月一日旬、給御扇之儀、大底如此者、申云給御扇之後、若有拜舞歟、仰云、拜舞之由不慥者、

〔小右記〕寬仁二年十月一日庚寅、今日不出御南殿云々、問遣因何事不御出哉之由於頭辨經通許、報云、今月依多事也者、孟旬無指事之時、必有御出者也、但今明攝政〇藤原道長御物忌歟、

〔江家次第 六四月〕幼主時二孟旬

侍從厨遣請奏、藏人奏下上卿、他物同、但至于米者、續此石例覆奏、

被定供奉女房十人、件夾名實事也、幼主之時攝政書之、給行事五位藏人、內侍二人、命婦四人、藏人四人被催、出居將幷侍從以殿上四位用之、外記兼催之、

當日出御、幼主之時垂髮類、闕腋位袍、糸鞋、御倚子、前有承足、攝政被候御帳之中艮角菅圓座、〇中略次大臣著陣見見參目錄、見畢參上、付內侍奏之、大臣還仗座、召辨幷少納言給之、近代無召唱事、次大臣復座、

主上入御、幼主之時無官奏幷庭立奏、依未覽文書也、

〔年中行事歌合〕十一番　左勝　旬四月一日　殿中將

もろ人のつらなる袖に通ふなりたまふ扇の風ものどけく〇中略

左、扇を臣下に給にて、題の心は侍べきにや、旬と申は、天皇の政に臨み給儀なり、是は四月一日の旬の事にて侍り、夏冬の季の改まる始に、臣下に御酒をたび、政をきこしめす也、旬には樣々の儀有、內裏新しく造られて、始めて南殿に出させ御坐まして、政を行はるゝをば、新所の旬と申、位につかせ給て、始めて政に臨み給をば、万機の旬と申にや、此四月の旬には、內侍扇を持て、上達部に給へば、跪きて請取作法などあるにや、

〔公事根源 四月〕孟夏旬　同日〇一日

此孟夏の旬には、二獻の後、内侍扇を入たる櫃宮を持て、御屛風の南のはしに置たるを、出居の次將とりて、王卿の坐のまへにつきて、扇をむかちたまふなり、扇の押とていと興ある事にこそ、今は旬の儀絶果て、陣の座にて平座をぞ行侍る。

〔北山抄一 四月〕同日〈二孟〉旬事〈十月同之、但十月延例不出御、〉

裝束儀御南殿、着御座之後、左近將曹〈已上或府〉率近衛、令開左掖延政兩門、大舍人叫門、闈司奏〈入自左掖門、闈司着於承明門之云々、〉勅答〈令申〉次監物御鎰奏〈監物奏〉勅答〈取鎰〉、了典鎰大舍人官人〈近例不參、外官人、〉率大舍人等取御鎰退出、次將曹閉門還入本陣、内侍召人、出居次將出本陣進行之間、大臣云、有奏、即復本座、〈大臣兼大將者、次將〉〈無先例〉、大臣着靴、經宜陽殿壇上、進立軒廊西一間、〈南面、東上、大臣陣座立、先是於陣座見奏文、如恒、但見奏時、又還本府着座、又外記覽官奏、〉〈賢少納言覽内裏、近衛御弓奏、依舊例不奏云々、見延喜十年六月記、見延喜五同年十月記、〉〈云々、例延喜九年、一門人開御鎰奏、可退出、有其儀、後方奏右奉之、〉史持官奏、進經小庭跪、率大臣、〈於納言者着所、史入於軒廊、先例奉之、〉大臣取奏具、自東階立簀子敷西向、磬折候天氣、天皇目之、大臣稱唯、自東廂北行、入自母屋北間參進、〈經御障子戶之後、云々、〉不及御帳六七尺許膝行、〈三度〉進之、天皇執奏、畢置〈御机〉持文杖膝行、起而右廻、立障子戶西邊柱西、〈置會時、立明〉叡覽畢結、中置々物御机上、〈從御座見天覽畢由〉、大臣跪片膝、〈右膝、見延喜九年入年十一月二日記〉取文杖、進跪膝行、取奏文、退居御帳臺東六七尺許西向、開文結申、隨天許稱唯、畢結文、起而右廻、至御障子下、西向跪片膝、取副文杖、左廻退下、立廊軒、〈初如〉史來給奏插文杖、立小庭東邊、大臣度小庭、乍着靴昇陣座、〈左足引上、右足跪立、〉史進奉奏文、此間出居次將參上、〈若无官奏時、次將先參上、但大臣兼大將者、大臣先參上、次皇太子以下參議已上着座畢、次將率出居侍從入自日華門參上、歸大臣兼大將、有官奏時參畢、次將先參上云々、〉大臣傳奏報、如常儀、皇太子參上、次王卿次第參上着座、〈於敷政門外着靴、上卿若親王、兀子二脚外、計敷之、親王二人外、又一人參入者、出居侍從參上、從次將召掃部寮、〉〈兀子着之、西面北上、但上臈參者、下臈起座、上臈代着、後着侍座、〉次出居侍從參上、次進物所供御膳、采女昇御臺盤、至南廂西第二間之比、出居次將召内豎二音、稱唯參入、立櫻樹邊、仰云、御飯給、稱唯退出、此間采女取傳造酒司酒器、立南廂西第二間、内膳下器立第一間、東宮采女立御臺盤、内豎昇大盤立臣下前、次置箸匕、〈舊例自此本置之〉此

間酒番侍從著座、采女供御四種、次東宮采女供之、（從東宮戸出入、毎供采女一人前行先供奉、）次給臣下、次內豎持下器西度、（前儀、從階下往還、）至進物所受索餅、還至版位坤之間、供御膳索餅、次給太子、內豎於本所分盛、給王卿及出居、次下御箸、太子以下揖笏同下箸、次侍從厨家別當以下取御贄、進稱物名、（元慶八年四月一日、侍從同奏之、而延喜以來無其例、）西度、次供鮑御羹、（供索餅後、）次供御飯、次給太子、次給親王以下、次供御菜并御汁物、次給臣下、御箸下、臣下又隨、次供御酒、次酒番侍從唱平勸盃、（其儀如二宮大饗、但先行南座親王、次公卿、次出居座、共自北、）一獻後、內豎持下器西度、就西階下、受下物、還來給臣下、（毎物三箸各分取、）次供御菓子干物等、次給臣下、次開左掖門、闈司入自同門、就版奏、勅答（令申與、）畢退出、次六府番奏、（上番左奏、下番右奏、若上番無左官人、右奏之、次官不參之時、判官帶弓箭在後、隨欲奏時任官次無前列奏之、或有一二府不具奏例也、四位侍從官次可列立、侍奏之次第可違歟也、天曆十年四月一日例如之、）勅答（令置、）訖、闈司二人入自左掖門、列立六府上、次將等一々手傳授闈司、闈司各取重三枚、（或左次將取重授之、）至橘樹下之間、左廻退出、闈司昇自西階、付內侍、內侍二人取左右近衞、就御帳東奏覽、次供御酒、次給臣下、二獻後闈司取內案、就版奏、勅答（持來、）畢昇自南階、西行入南廂西第三間、至御帳西進之、取文杖退立南廂西第三間、天覽畢勅答（令申與、）後下自同階、就版退出、次掃部寮立案、（版位南、）次少納言就版披文奏、（或取文奏、）勅答（取之、）畢、傍行召主鈴、出印捺印、（少納言見文、主鈴捺之、）又奏、勅答（給之、）畢稱唯、令納印退出、（近代無此儀例、）次撤案、次閉掖門、此間供御酒、畢左右近衞發亂聲、御盃離御手之間、大將目各陣令發之、先發聲爲勝、退奏舞、（各二曲、三獻、）畢大臣著陣座、外記進見參祿目錄等、（侍從以上一紙、非侍從一紙、預臨時宴內記侍從四位等類也、七十以上人雖身不參預之、但王參議以上不在此限云々、或雖非參議、勝非節會侍之、）大臣參上、付內侍奏之、返給退下、（此間太子退下、）著陣、召少納言給見參、召辨給目錄、畢參上著座、少納言入自日華門、就版唱見參、畢加列、（兩儀立宜陽殿第三間南上、）王卿稱唯下殿、（出居一人、稱唯不下、）列立庭中、（版位巽三許丈西上北面、參議以上一列、四位五位一列、兩儀立宜陽殿西廂第三間以南、侍從立春興殿西廂、）拜舞退出、天皇入御、出居稱警蹕、　番奏之後、二獻之前、暑月給扇、其儀內侍取盛扇楊筥、出自御帳北座御屛風南妻、目出居次將、次將進取之、立王卿座前給之、（片手取筥、片手取扇給也、）給者先懷本扇、把笏起座、更插腰賜扇、又把笏復座、賜畢次將跪置筥、賜自料、以楊筥置大盤下、（或返給內侍云々、天曆三年五月一日有拜舞、北上西面異位重行、准給馬例、參議以上可立一列云々、延喜十二年外記

謂ニ御座失也、然而已上御出、依宮闕無之、此時御記不見、無由、不可有也云云、

〔年中行事秘抄 四月〕旬事（無御出時、宣陽殿平座事、自二御所謂、卯、無御出御儀、同可行之由、）

日本紀云、天武天皇十二年始之、詔曰、諸文武官人、及畿内有位人等、四孟月必朝參、

儀制令云、若逢雨失容、及泥潦並停、

弘仁式云、天皇御大極殿、不御南殿之時、於宣陽殿有平座、（見內用庫旣、）

〔小野宮年中行事 四月〕同日（○一日）旬事

若有文侍從闕者、未御南殿之前、奏大臣定補之、或於陣頭定申、正月一日、十六日、九月九日、及十月一日、又有此事、若無出御之時、令藏人仰上卿侍從等可給御酒之由、公卿着宣陽殿座行事、其見參并祿目錄、付藏人奏之、

〔建武年中行事 四月〕ついたち、御衣がへなれば、所々御しやうぞくあらたむ、（中略）旬をこなはれぬ年は、上達部陣のざに候よしきこしめして、出たまはず、あとによりておこなへと仰す、

〔日本紀略 宇多〕寛平三年四月一日、旬儀、　六年四月一日、旬、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜四年四月一日、日蝕、　二日、旬、平座、　五年四月一日、日蝕、　二日、旬、　六年四月一日癸未、日蝕、　二日甲申、旬、但不御南殿、於陣頭行之、

〔日本紀略 村上三〕天暦元年四月一日丙辰、天皇御南殿、有旬事、親王大臣不參、大納言藤原師輔卿候官奏、野家別當不參、以權右少辨好古爲代、　三年四月一日甲戌、天皇御南殿、有旬事、

〔西宮記 十月〕旬

吏部記云、天暦三年四月一日、旬云々、左大臣先進軒廊、左大史三國是隆執官奏文隨、大臣執之、升自東階奏、了降、出居代昇、（先是在陣王卿起座、左大辨留候奏也、大臣卜着陣座、諸卿在座、无御故也、）史是隆進軒廊、大臣奏畢、廊北庭、跪陣座南端、史進奏、大臣執之、先賜鉄紙、了史是紙（○紙恐隆誤）且付奏文、一々仰奏報、了率諸卿升殿云々、

〔九暦〕天德元年四月一日、旬儀、右兵衞佐兼家番奏事、

〔日本紀略四村上〕天德二年四月一日壬子、旬、平座、　三年四月一日丙子、旬、平座、天皇不御南殿、依御物忌也、　四年四月一日庚午、旬、天皇出御南殿、但無音樂、天下病患也、延喜九年例也、

〔九暦〕天德四年四月一日、旬儀事、依樂人不足不奏音樂、

〔日本紀略四村上〕應和元年四月一日癸巳、日蝕、　二日甲午、旬、平座、天皇不御南殿、依昨日蝕、有明親王事、　二年四月十日戊子、依御物忌不御南殿、旬儀、　三年四月一日壬午、旬、

〔西宮記十月〕旬

應和三四一、有旬、酒番侍從一人、右將仰少納言懷忠行酒、

〔日本紀略四村上〕康保元年四月一日丙午、天皇出御南殿、有旬事、　三年四月一日丙申、今日天皇出御南殿、依旬也、先是被勸當神事之時、旬、節會御出事、

〔西宮記十月〕旬

康保三年四月一日丙申、此日平野松尾等祭也、未剋出紫宸殿、年來无旬日當祭日出御之例、而嘉祥二年四月一日、當平野祭、其日天皇御南殿、宴饗樂今依彼例、雜事如常、三獻了、左右近發亂聲、遞奏音樂云々、

〔日本紀略六圓融〕天祿二年四月一日丙寅、旬、平座、天皇依御忌月不御南殿之故也、

〔日本紀略十一條〕長保元年四月一日癸丑、旬也、天皇出御南殿、

〔本朝世紀〕長保元年四月一日癸丑、今日旬也、仍在御出紫宸殿、○中略　左右有音樂事、但無立奏、

〔小右記〕長和二年三月卅日辛酉、召使申云、外記爲長令申云、明日依旬可出御南殿者、

〔法成寺攝政記〕長和二年四月一日壬戌、有御出、旬事奉仕官奏、給奏書不結退下、是大失也、雖候奏未如此事、奇思、有番奏勅答、左近奏後被仰、今二府後奏唯稱、是御失也、又聞司三人出來是非例、內侍奏

御覽、參從東面從西來、又失儀、無庭立事、不及祇王納言料、可有色目除如常、

〔日本紀略十二後一條〕寛仁元年四月一日己巳、旬、天皇出御南殿、

萬壽三年四月一日丁未、旬、天皇出御、

〔左經記〕萬壽三年四月一日丁未、早旦參內、催行南殿御裝束事、其儀主殿掃除南庭等、并撤火爐、近屋左右衛門數師、主殿女官掃殿上、掃部女官掃御帷帳、(南東西)掃部寮南面端疊四枚敷、帳臺上、(如常)(御子立)立平文御倚子、東西立置物御机、如常、御倚子下不敷毯代、(萬壽三年十月一日旬、御毯代東使令敷之、)御帳乾艮角立太宋御屛風各一帖、(高各七尺、南北行立之、)又帳臺坤角立小机、階騏草墩等如常、母屋西行第四行第四柱北立中文倚子、爲皇太子座、南廂西行第四柱以東立几子敷御床子二脚、爲王卿座、二東廂南一間隔子下立床子二脚、爲出居座、宜陽殿西廂北行并三間壁下立床子二脚、爲酒番侍從座、(件床子白)聞、設西廂北三間以竿上之階下座如節會時、又南殿北廂西行第四間、廻立大宋御屛風二帖、其中敷小莚二枚、立赤漆倚子一脚、爲御裝束物所、又御帳後敷繧繝端長疊二枚、爲內侍座、又御障子外敷同疊并長莚等、爲女房等座、午剋右府被參入、左大辨余於陣床子見奏文、此間出御南殿云々、闈司三人經敷政門起左腋門、右府〔藤原實資〕於左仗座有宣旨、候補次侍從并出居侍從、右府自書之、覽奏之後、召中務丞光成於膝突賜、次侍從宣旨、次召左近將監出居侍從宣旨、次大辨著陣座中奏由、右大史行貞覽奏文、如常、次右府召余被命奏文可內覽之由、余喩歸出陣腋取史所持之奏文、參南殿北方候氣色、即有召於殿北廂(北中障子)覽之、御覽了、卷結下給、余給之、一々結申如例、即歸陣腋返給史、進膝突申內覽了之由、右府被命之、令日壇立奏可、有其官符等令作僞者、余歸出仰大夫史貞行宿禰、外記取官符令覽、歸出之後、少納言經長取內案覽上之儀皆如常、次左近開左腋門、闈司奏勅

畢、次有御鎰奏、監物須下對奏之後、歸立長安門邊、賜鎰出、而直出自左腋門、乘時剋不還入、率鎰使歸入給鎰退出、甚違例也、次内侍臨檻、次右府起座、於壁外著靴、經宜陽殿西壇上并軒廊等、立同廊西一間、離北立西第二柱下南面、史行貫取書杖、經宜仁門并石階軒廊東一間等、自廊内蹲跪上卿前、敬屈候、上卿插笏、史獻杖進之、自本道歸入門内、右府昇立階上、遙望龍顏、主上目之、右府唯入自殿東廂中央北行、折入自母屋東面北、小間斜進西、漸進出南、當御座程進行也、自御屏風南妻漸膝折、候臺東四五尺許跪膝行、三度敬屈進奏文、主上取之置右疊物御机上、右府膝行遙遙、右廻立北障子戸西柱下、顧押上、上開文一々覽、如本卷結置左疊物御机上、右府突右膝置杖、叉手進行、如始膝行取文、及取之不登壇、膝行遙遙居、向西、開文一々結申、隨御封唯稱、如本卷結、左廻到杖下、漸左廻西向廻立、突右膝取杖、左手持文、右手持杖、以杖置文上、取文持之、左廻自本道下立廊下、始所南面、史自始道進跪上卿前、賜書并杖、一度取加給之、史以兩手給之、即杖置地、文卷整結插杖、本路歸出立右階南方、離階折、立西向、上卿取笏經軒廊東二所并小庭等、進陣座、踞片尻居、以右足膝地、引上左足之居也、出居右少將良顯朝臣、經宜陽殿西壇并軒廊等上、自東階著座、左大辨進著陣座、次史進跪奉文、宣下之儀如常、此度大辨進著之由、不見年々記文、未聞事也、仍寮内權大納言并藤源兩納言、被示更不覺之由、右府又不案此儀之由被示云々、若有所見者歟、爲當時尋常奏儀所著歟、雖可尋也、但上卿作著靴見之心爲事後事也、執中書大臣作靴見之時、大辨何進著後、仍先例無此儀歟、能可尋、史歸出之後、右府以下次第經宜陽壇上軒廊并殿南簀子敷等著座、參議床子著之、源相公座定後、余著靴取笏入自日華門斜北行、入從軒廊東二間、登自東階、北折經少將後著北床子、自床子北居之、進物所物進御膳、采女傳供、出居召内豎、六位別當參、承仰退、此間采女昇御酒器立南廊西二間、下臈先行、並立又之、而入、内豎立大盤於王卿并四尺四脚、八尺一脚、出居前、四尺一脚、八尺一脚、須立四尺二脚、而本自無者、隨有立八尺、酒番侍從著座、供四種、給臣下、下器、須加器渡、而懸持盤渡、供索餅、給臣下、御箸臣下應之、侍從不著、別當章信朝臣著靴、笏插取楊子、入自日華門、内豎三人取之、皆昔深列立版位東畔、西上北面申云、侍從厨貢御贄各稱物名、渡馳道付進物所、不還渡供蚫羹、供御飯、給臣下飯、供御菓物、給臣下、菓汁下、御箸、臣下應之、供御酒、酒番勸盃、下器渡、供菓子、給臣下、右近開左腋門、闈司就版奏、勅令申、奏、闈司退、六府番奏、左衞門不儲簡、仍起座取左近官中簡進出云々、是本府懈怠之甚也、勅曰、置介、闈司取簡昇、六府退、供御酒、酒番勸盃

孟夏旬賜酒饌

三獻了、左右衛督奏舞各三曲、(龍王納蘇利有之中)右府於陣座見見參目錄、了昇奏之、即給之、歸著陣座、召少納言、給見參、召辨給目錄、此間還御、少納言(書杖)入自日華門、立版位、唱見參、右府以下人々下立南庭、(西上北面)及卿相立之後、少納言唱自名、唯、左廻立列、(侍從不列立、公卿後)共拜舞退出、(少納言自宣仁門退出、公卿自日華門)右府還昇著宜耳、還弓場殿奏慶云々、今日依可有庭立奏、少納言以內豎令覽上卿、依及深更有仰停止此奏云々、同六日、右府被命云、大將奏事處所見、吏部王記、以(○以下[illegible])又民部卿被示之、奏者上卿突左膝、置杖并取杖之心、尤被御所也、自然云、上於東階則先右足、上於西階則先左足、(○下略[illegible])今案此文、以立方足爲故也、尤可突左也、

長元四年四月一日戊寅、參殿、(○中略)御共參內、及未剋內府(○敎通)[illegible]被參入、召余被仰可有奏之由、余於殿床子見文、(結文三枚、先見左少辨見之)於陣座申行如例、史退去後、召左辨被仰奏文可內覽之由、辨於陣腋取奏文、進南殿北廂內覽了、(先是余上陣[illegible]令[illegible]給云々)奏文返、史進膝突中、內覽了之由、頃內侍出、內府著御後、立軒廊西一間東柱下、(南面)史經右階斜渡小庭、進跪上卿御後、自右腋奉文、把笏自本道歸入陣腋、上卿奏覽之儀、如去十月一日事、了下立本所、史自始道進跪上卿後、給文杖、(自右給之)於同所卷結插杖候、(經東[illegible]廊座西)上卿居陣座、余還居座、史斜渡小庭、奉文、(此間[illegible]左少[illegible]座)上卿取文被見了、給史之儀如常、史退出、余起座、次內府以下昇殿、余依座狹、從軒廊歸出、依無座不候之由、觸頭辨退出、

(愚昧記)仁安二年四月一日、今日日蝕、二日、陰晴不定、今日禊祭出車并再禊前定、又平座也、(○下略)

(類聚國史七十五曲宴)延暦十二年四月己酉朔、曲宴、賜五位已上衣、

(日本紀略淳和)天長六年四月庚戌朔、於紫宸殿賜飲侍臣、賜祿、

(續日本後紀一仁明)天長十年四月戊午朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、音樂之次、右京大夫從四位下百濟王勝義奏百濟國風俗舞、晩頭酒酣、賜四位已上御被、五位御衣、

(續日本後紀六仁明)承和四年四月癸巳朔、天皇御紫宸殿、皇太子侍焉、賜群臣酒、酒酣賜祿、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年四月癸丑朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年四月辛未朔、天皇御紫宸殿、皇太子入覲、恩盞頻下、群臣具醉、殊召從四位下藤原朝臣雄敏、令彈琵琶、後令諸大夫知音者迭吹笙笛、更奏歌謠、日暮賜祿有差、

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年四月庚寅朔、上御紫宸殿、皇太子侍焉、公卿及侍從已上、鐘鼓歌舞、日暮賜祿有差、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年四月丙戌朔、日有蝕之、　二日丁亥、天皇不御前殿、於左仗頭、賜飮親王以下次侍從以上、賜祿各有差、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年四月辛巳朔、帝御前殿、賜宴侍臣、次侍從被召侍右仗下、左右近衞府遞奏音樂、日暮酒酣、親王公卿促席御前、各奏絲竹笙歌起舞、非侍從及外吏五位未得放還、并外記史內記六府將監尉以下、門部以上預見參者、賜祿各有差、參議以上別加賜御衣、夜分之後、盡歡而罷、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年四月乙巳朔、天皇不御前殿、於右近仗下、賜侍臣飮祿如常、喚左右近衞樂人於北殿東庭、奏音樂、中宮〇皇后藤原明子別賜中將以下、近衞以上、御衣并布、各有差、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年四月癸巳朔、天皇御前殿、宴于侍臣、奏樂、賜祿如常、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年四月辛亥朔、天皇御前殿、宴于侍臣、賜祿各有差、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年四月戊子朔、天皇御紫宸殿、賜飮侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜祿如常、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年四月癸未朔、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、賜祿各有差、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月辛卯朔、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜祿有差、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年四月乙卯朔、天皇御紫宸殿、親事、〇中略賜宴侍臣、左右近衞府奏樂、賜祿有差、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年四月甲辰朔、日有蝕之、　二日乙巳、天皇御紫宸殿、聽朝、賜宴侍臣、左右近衞

府跪奏番奏、賜祿有差、

〔世俗淺深秘抄上〕一旬之時有番奏者、次將兩人可▢出居、奏事上卿令還出、簀子ヲ立時無揖、又旬出居大臣無揖、不著床子、是故實也、

〔公事根源十月〕旬　朔日

十月一日は、先御衣がへあり、掃部寮夏の御裝束を撤して、冬のにあらためかふ、天皇南殿に出御有て、宴會あり、是を孟冬の旬とは申なり、二獻の後氷魚を群臣にたまふ、孟夏の旬にはあふぎをたまふ、大かたの儀は孟夏におなじ、ちか頃は宜陽殿にて平座あり、賜氷魚儀、陪膳采女隨天氣、御膳の氷魚をとりて王卿にたまふ、已上捨取之なり、箸をそへてたまふを手にさして食ふなり、

〔年中行事秘抄十月〕旬事（無出御時、宜陽殿平座事、）

其儀同四月、

〔西宮記十月〕旬

天皇御出、監物御鑰奏、（監物申鑰、以六位藏人二人、御鑰、可令申、由在南殿、以御監止、）近衞將曹（左近府生云々）闈左腋門、闈司就版、勅令申、監物立版奏云々、勅取之、稱唯退出、典鎰（相具闈等）閉門、將曹歸本陣、內侍出、（有奏之時出居、昇大臣云、有奏出、）

錄、大臣奏、（內侍出）大臣著靴經宜陽殿壇上、軒廊立西一間、南面、顧寄東迫北立、史北面跪進之、於納言不說、（式文大臣四間）大臣取奏杖登立階上、緣西面蹲折、史歸有天氣、稱唯經東庇母屋障子邊西行、過障子戶之間蹲折、不及御座七八尺、跪膝行三度進之、

九記云、天皇取文置西机、（云々）見了卷結置東机云々、天皇取以欲御覽、大臣退起持杖、右廻立障子戶西柱、天皇覽了如元結中置机、大臣突左膝置杖、叉手跪行取奏、及取之昇板臺邊巡跪居、（去七八尺）一々披文結中奏文、稱唯結文中、逡巡左廻起而還本所、或記云、有右字尤有便宜、突右膝取杖、左廻下階立軒廊西一間南面、史趁給文并杖、更插文立庭中西面、大臣經小庭著陣、乍著靴踞尻、出居昇、（史昇云々、居▢座、突一史）

進著、藤突進、大臣、大臣一々給文候氣色、大臣仰奏報旨、史唯作法如例、小野記云、有大臣大將者、先昇著座、次王卿著座、次々將率出居侍從、入自日華門、著座、有納言大將者、次將先昇、次王卿昇、次侍從入自日華門、昇之、王卿侍從昇、寛平、延喜、康保三、先太子參上、主殿侯北庭、如例、侍從自日華門、昇、无奏、有大臣大將者、大將昇後出居次將侍從等昇自日華門、出居南、侍從北上、親王不過二人、有後參親王者、出居召舍人、令立兀子、母屋三間柱北邊、北上西面、太子參上之時、立二間、云々、下臈著母屋、無初參、下臈著母屋、御著下臈不參上、

內膳進物所供御臺盤、入自日華門、就西階、不昇、采女等相迎供之、一脚立御所、一脚立小臺盤、陪膳著草塾、出居將召內豎、西二音、御臺盤過母屋二間程、召內豎、於門外、參進、出居仰云、御飯給へ、太子參上之時者、立太子臺盤之後召之、內豎稱唯、退、或文云、此間采女傳取造酒司酒器、立南廂西一間、內豎等立王卿已下臺盤、入自日華門、五尺四脚、入凡二脚、一脚立出居前、置臣下著匕、又請之、供四種、居臣下四種、下器渡、內豎四人執下器、出自日華門、渡就道、就道物所受索餅、還分盛數盃、號索餅、供索餅、云々、別當辨并少納言六位、別下器渡、參進供、次給臣下、入方盛給之、臣下座之、號臣下居之、御廚家獻物、天曆二年正月一日、供內豎四人著之、後供云々、別當辨入自日花門、殿上立、飯中云、侍從乃所乃進御贄、中物名、了諸物、付進物所不能、二孟外及降雨不獻、天曆十四一、別當不參、又降雨、仍停止、供御飯、次此先供進物所御物、次居臣下飯汁生物窪坏物、供御箸、御之、一獻供御酒、酒番侍從四人、入自日花門、就脂膏之、採氏云、四種前著座、給臣下酒、前侍從二人、一人執盃、一人執瓶、立座前、唱平、飲、第一人持懸、著、獻盃先飲、下器渡、內豎四人渡殿道、就西階、自采女所受殿、堅魚、蛭、干鯛、若鮑、蒸鮑、蛸等、進立王卿前、臣下一々分取加飯上、天曆十年四月一日、供而自階下往還、供干物菓子、居臣下、

北山抄一、四月、同日、日〇朔旬事、十月同之、但月例不出御、

十月給氷魚、其儀采女二人、陪膳一人、取氷魚指盛一片、供之、進來、坐貫主人西頭下座跪給之、置臺盤上、復座、目出居令召內豎、內豎二人參上、取氷魚等、次第持列、各以匕一度掻取指鹽沃上、延喜十一年五月、給甘葛煎等、其儀同氷魚、

日本紀略宇多、寛平二年十月一日、旬儀、六年十月一日、旬、不奏音樂、

日本紀略醍醐、寛平九年十月一日、旬、

延喜九年十月一日、旬、十二年十月一日、乙亥、旬、出御南殿、有祓歌事、

本朝世紀、天慶二年十月一日、是日天皇御南殿、有旬宴事、略、〇下

日本紀略村上、四天德二年十月一日戊寅、旬也、天皇出御南殿、三年十月一日癸酉、旬儀、天皇御南殿、

有音樂、

(九暦)天德三年十月一日、旬儀事、

(日本紀略四村上)應和二年十月一日乙酉、旬、　康保元年十月一日癸卯、旬、天皇出御南殿、　二年十月一日丁酉、是日也、天皇御南殿、依旬也、無音樂、依止菊宴也、

(日本紀略七圓融)天元元年十月一日癸丑、天皇出御南殿、依旬也、有音樂、

(日本紀略八花山)寬和元年十月一日辛丑、有旬事、天皇出御南殿、有音樂、

(日本紀略九一條)正暦三年十月一日辛酉、旬事、天皇出御南殿、

(小右記)正暦六年〇長德元年十月朔日甲戌、雨降終日不止、參內、〇中略未二剋出御南殿、頭中將齊信伺候、仰右大臣、藍物候乎、令奏云、大藍物輔義重服、永道患日、仍不參、又令奏云、降雨不止、少納言奏五府奏等、如何、仰云、可有番奏、至于少納言奏、若日暗可止、又大藍物皆有故障、不可有御鎰奏者、內侍臨檻此間奏之讀、右大臣起座著杖、〇中略史惟光置於杖座宣陽殿壇上、就大臣左膝奉奏、須於奏者前奉也、大臣執奏昇東階、立寶子敷候龍顏、余於御帳子綾伺見帝目、揚笏、其聲甚高如何、登東庇、入自母屋北小間邊、倚御帳東膝行奉奏、左廻退立御屏風後柱下、〇註略天皇覽了如本結奏置給東置物御机、大臣突膝取奏杖進倚、膝行給奏退出、但不候、披奏如例、加多爾申、了右廻到杖下、突膝執杖退下立軒廊、史進給奏、〇下略

(日本紀略十一條)長德元年十月一日甲戌、旬、天皇出御、無庭立、有番奏、

(權記)長德元年十月一日、今日出御南殿、甚雨之間、已失禮儀云々、無庭立、有番奏云々、延喜八年雨儀、無番奏、有庭立奏云々、今日御裝束御覽、不讀下名、者、卿相下立、右大臣覺左大將候奏云々、一獻之後賜氷魚、康保三年例、出居右少將明理朝臣、

(日本紀略十一條)長德三年十月一日壬辰、旬、天皇出御南殿、于時庭立奏之間、太宰飛驛使參入云、〇下略

(權記)長德四年十月一日、日蝕、　二日、依可有旬事、令召上卿一人、不參、依仰停止、

(小右記)寬弘二年十月一日丙子、參內、諸卿參入、未剋出御南殿、左大臣於仗座見官奏、但史季隨無

孟冬朔旬酒饌

色稱唯進之、大排行成叱留、少時大臣示氣色、更稱唯著膝突云々、皆之有監物奏、次内侍臨檻、左大臣著靴經宣陽殿壇上立軒廊西第二間、（可立二一間歟）官奏儀如例云々、奏者還降退陣之間、出居左中將顯定朝臣參上著堂上座、（中略）○次節儀如例、（中略）○依入夜無庭立奏、出居侍從不參上、一二獻御盃放御手之間、左右亂聲、（右先奏曲）無曲三曲、左大臣奏見參、於仗座給見參祿目六等少納言辨等、少納言守隆進南庭唱見參諸卿、次第起座之間、守隆還入、甚奇怪也、卿相拜舞、（西上北面一列）侍從不見失例事也、亥刻許事了、今日番奏右衞門佐不參、仍六位候矣、但列五位後是例也、（下略）○

（法成寺攝政記）寬弘三年十月一日庚午、天晴、午二刻參内、未一刻御南殿、諸卿遲參仍遠也、有官奏、無庭立奏、有樂、監物奏開門、右近將曹奉黃衣近衞四人開門、尤違例也、閉門褐衣近衞二人、可有一人也、戌時事了候宿、

（日本書紀天武二十九）五年十月乙未朔、置酒宴群臣、

（日本後紀平城十七）大同三年十月己酉朔、宴五位已上、賜綿有差、

（續日本後紀仁明二）天長十年十月癸未朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、至大臣以下五位已上及内命婦、賜祿綿各有差、

（續日本後紀仁明六）承和四年十月辛卯朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、

（續日本後紀仁明八）承和六年十月己酉朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、召散位從五位下伴宿禰雄堅魚、備後權掾正六位上伴宿禰須賀雄、於御床下、令圍碁、並當時上手也、（雄堅魚下石二路）賭物新錢廿貫文、局所賭四貫、所約總五局、（須賀雄輸四籌、雄堅魚一籌）亦令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏彈琵琶、群臣具醉、賜祿有差、

（續日本後紀仁明十）承和八年十月丁卯朔、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、親王已下五位以上、歌舞庭中、日暮賜祿有差、

（續日本後紀仁明十三）承和十年十月丙辰朔、天皇御紫宸殿、内宴于皇太子已下侍臣已上、賜祿有差、

(續日本後紀仁明十四)承和十一年十月庚辰朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、

(類聚國史七十五)承和十二年十月乙亥朔、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、日暮賜祿有差、

(續日本後紀仁明十八)嘉祥元年十月丁亥朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、

(三代實錄清和三)貞觀元年十月癸未朔、日有蝕之、　二日甲申、於右仗頭賜飲親王已下次侍從已上、祿見在坐者奏之、賜祿有差、

(三代實錄清和四)貞觀二年十月丁丑朔、日有蝕之、　二日戊寅、天皇御南殿、賜飲侍臣如常、

(三代實錄清和五)貞觀三年十月辛丑朔、帝御南殿、賜飲侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜祿如常、

(三代實錄清和六)貞觀四年十月丙申朔、天皇御南殿、賜飲侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜絹各有差、

(三代實錄清和九)貞觀六年十月甲寅朔、天皇御南(〇南字原本無、據類聚國史補、)殿、宴于侍臣、左右近衞府奏音樂、賜祿如常、

(三代實錄清和十一)貞觀七年十月己酉朔、天皇御南殿、賜飲侍臣、(南殿謂宮殿本、)

(三代實錄陽成二十六)元慶三年十月丁巳朔、天皇御紫宸殿、六府少將佐等就版奏當番所、上近衞兵衞等名簿、賜宴侍臣、左右近衞府奏雅樂、幷賜祿如常、

(三代實錄光孝四十六)元慶八年十月戊子朔、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、左右近衞府遞奏音樂、勅令參議右衞門督藤原朝臣諸葛、前伊勢守藤原朝臣諸藤兄弟彈琴爲歌、日晚賜祿各有差、

(三代實錄光孝四十八)仁和元年十月壬子朔、皇帝御紫宸殿、賜宴侍臣、左右近衞府遞奏音樂、日暮奏和琴、作和歌、群臣具醉、極歡而罷、賜祿各有差、散位從五位下良岑朝臣遠年、以吹笛被喚昇殿、預非侍從辨大夫外衞佐等例、賜祿焉、

(三代實錄光孝四十九)仁和二年十月丙午朔、日有蝕之、　二日丁未、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、親王太政大臣及參議已上並侍殿上、六府奏番上簿於庭、左右近衞府遞奏音樂、酣暢之後、勅令參議右衞門督藤

原朝臣諸葛彈和琴、王公並作歌、天皇自歌、宴樂畢歡、

停孟月宴

〔三代實錄 清和 十二〕貞觀八年四月乙亥朔、天皇不御紫宸殿、以停飮宴也、

〔三代實錄 清和 十三〕貞觀八年十月壬申朔、天皇不御紫宸殿、以停宴飮也、

〔三代實錄 清和 十四〕貞觀九年十月丙寅朔、停孟冬之宴會、

〔三代實錄 陽成 三十五〕元慶三年四月庚申朔、停平野松尾等祭、及賜宴侍臣之儀、以太皇太后崩也、

〔三代實錄 陽成 三十九〕元慶五年四月戊寅朔、停孟夏之宴、諒闇也、親王公卿侍仗下、造酒司、侍從厨聊進酒饌、

〔三代實錄 陽成 四十〕元慶五年十月丙子朔、停孟月之宴、諒闇也、親王公卿侍仗下、造酒司侍從厨聊進酒饌、

停孟旬

〔日本紀略 冷泉 五〕安和二年四月一日戊申、無旬事、警固之故也、

〔日本紀略 圓融 六〕天祿三年四月一日庚寅、無旬、依御忌日也、

天延元年四月一日甲申、依御物忌無旬儀、　二年四月一日己卯、依御物忌、無旬節會、但厨家羞膳、

貞元元年四月一日丁酉、納言不參、仍停止旬、平座、但進見參、　十月一日甲午、依御物忌無旬、　二年十月一日戊午、依御物忌、無旬事、右大臣以下移著宜陽殿、有酒饌見參、

〔日本紀略 圓融 七〕天元二年四月一日己酉、無旬事、

〔日本紀略 一條 九〕永延元年四月一日癸巳、依攝政障止旬事、

〔日本紀略 一條 十〕長保五年四月一日庚申、無見參、依上卿故障也、

〔小右記〕寬弘九年〇長和元年四月一日戊戌、按察納言送書云、今日平座、旬若可有哉否、先例如何者、答云、諒闇間無例之由、

〔日本紀略 後一條 十三〕長和五年十月一日壬申、止旬宴、但平座見參、

〔小右記〕寬仁二年四月一日甲子、將曹正方云、今日旬、不可開食由、□□□假被仰者、問不可出御之案

内申云、不承依何事不可聞食之由者、〈中略〉資業云、旬停止、昨日上達部被申云、御元服之後未聞食旬、當因會日、不可出御□□□停止者、

(中右記)寛治八年〈○嘉保元年〉四月朔日辛未、今日依當欠日、無旬事、御元服後未有旬之故也、

天永二年四月朔日癸巳、聞今日可有旬之由、先日雖有其議、又被止了、近日皇后宮不例、御出御忠長三條宅也、仍不可有音樂歟、被止歟、不可有旬、故凡被止旬云々、〈中略〉平座、聞中納言忠教、修理權大夫新宰相中將參入、辨二人、少納言三人及五獻、〈[illegible]〉

(建中抄上年中行事)四月　一日、ころもがへ、旬なければ、ひらざあり、

十月　一日、ころもがへ、旬なければ、ひらざ、

(江次第抄六四月)二孟旬〈無出御儀〉

今案、平座是也、出御之時者、公卿著南殿兀子、無出御之時者、著宜陽殿平敷座故也、

(西宮記十月)旬、平座〈宜陽殿北上、非常南上也、今日北上、侍從等可著南北之故也、〉今日王卿已下參入之後、藏人若殿上辨、依勅仰、可無御出由、〈[illegible]〉上卿仰辨令敷宜陽殿座、居饗、〈[illegible]〉王卿等移著、〈[illegible]〉辨少納言著、〈[illegible]〉三獻、〈[illegible]〉居汁物立箸、食、〈[illegible]〉參議仰録事、〈[illegible]〉見參、〈[illegible] 天慶四年十月一日、依内裏燒亡、[illegible]〉

(建武年中行事四月)ついたち、〈中略〉旬をこなはれぬ年は、上達部陣のざに候よしきこしめして出たまはず、あとによりておこなへと仰す、上卿宜陽殿のひさしに御裝束せさせてうつりつく、三

獻あり、弁少納言末のだん上に座しきてあり、侍從代少納言へたる物、おなじくつく、四獻のたび、盃くだりてけんすんをのましむ、見參藏法めして奏す、つねのごとしめしとなふることあれば上達申、南庭につらなりたつ、南庭の東の一間のとをに上首たつなり、少納言見參を持てまつ、庭にすゝみてめしとなふるほどに、かんたちめはすゝむ、みな立とゝのほりて拜舞していづ、

〔建武年中行事十月〕一日、〇中略ひらざ、四月におなじ、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十二年四月一日、平座、依東院皇后御忌日、不御南殿、

〔本朝世紀〕天慶元年十月一日甲戌、午後中務卿四品重明親王、大納言平伊望卿、中納言藤原實頼卿、參議源清蔭卿、紀淑光朝臣、著宜陽殿西廂座、但例座南上、今日改座爲北上也、今明日御物忌、仍天皇不御南殿、〇下略

〔日本紀略三村上〕天曆元年十月一日壬午、今日天皇依御物忌、不御南殿、平座見參如恒、　二年四月一日庚辰、天皇依御物忌、不御南殿、召平座見參無祿、

〔日本紀略四村上〕天德元年十月一日甲寅、依御物忌、天皇不御南殿、平座見參如恒、　三年四月一日丙子、旬、平座、天皇不御南殿、依御物忌也、

〔西宮記十月〕天德四年十月一日、左大臣令申、二孟日不御出之時、於宜陽殿取見參、而今無可行所、爲之如何、令仰云、於侍從所令取見參、入夜左大臣令奏公卿侍從見參自餘等、

〔日本紀略六圓融〕安和二年十月一日乙亥、天皇不御南殿、依御物忌也、仍平座見參、天祿二年四月一日丙寅、旬、平座、天皇依御忌月、不御南殿之故也、

〔日本紀略七圓融〕永觀元年四月一日丙戌、旬、平座、無見參、

〔日本紀略八花山〕寬和元年四月一日乙亥、依贈后御忌日、無旬御出、上卿參入、奏平座見參、

〔日本紀略十一條〕長德二年四月一日辛未、平座見參、依天皇不出御也、依東三條院御悩也、

長保四年四月一日丙寅、依諒闇無平座見參、

(左經記)寛仁四年十月一日戊寅、參內、(依御物忌不參上)及晩帥中納言皇太后宮權大夫侍從宰相被參、著左仗、藏人左少辨奉勅、被催座、無御出之由仰、帥中納言仰事上宣、仰史令敷宜陽殿座、諸司依例敷座居饌、上達部移著之後、辨少納言入自日華門著、一獻少納言、二獻右少辨、三獻左少辨、(○中略)次侍從宰相依上宣可召侍從之由仰少納言、少納言起座召之歸著、四獻余、次居汁、次見參目錄奏聞後、召少納言給見參、召辨給目錄、各退出、

(永昌記)長治三年(○嘉承元年)四月朔日壬戌、御物忌也、依有平座事、晩頭參內、(○下略)

(中右記)嘉承元年十月朔日己未、後聞平座宰相二人(能俊顯實)參仕、而上卿不參、頗難被相催、遂以不參、仍平座止了、誠不便歟、

元永二年四月朔日丙子、藏人談云、藏人等今日可著多裝束由存云々、此事返々不便也、日蝕之日雖無平座、先々可著夏束帶也、

(台記別記)久安三年十月二日壬辰、今日有官政及平座事、(今日例會)依昨日食也、是天慶六年四月二日之例也、

(兵範記)仁安元年十月二日壬申、被行平座、昨日依日蝕、及此儀、晩頭藤中納言實房、參議家通朝臣參、著仗座、孟冬三獻少納言定家、辨爲親、時忠朝臣勸之、次少納言信康給見參、辨爲親給目錄文云々、

二年四月一日戊辰、天晴日蝕、(○中略)無平座儀、

(康富記)應永廿二年十月二日甲申、今日孟冬平座也、昨日依日蝕延引、(去應永五年十月一日、同十四年十月一日日蝕也、皆二日被行之、其外例雖有所見、且不及注之、)兼日奉行職事被尋例於兩局(大外記師胤朝臣、官左大史爲緒、)之間、近例注進之、仍取合仙洞被伺申云々、爲他州蝕之間、唯可被行歟之由有其沙汰、雖然可延引之由被仰下云々、

嘉吉二年十月一日戊子、旬平座也、上卿日野中納言兼鄉、職事頭左中辨明豐朝臣、(官方闕行)少納言菅原

繼長、權少外記予、(分配)右大史安倍盛久、內竪川忠行等參陣也、參議不參也、其儀如例、勸盃一獻也、頭辨從之、二三獻被略之間、少納言不從之、見參目六奏下如常、但祿法被下少納言、少納言下予、見參被下辨、辨下史候間、予內々此分申安大史、於陰取替見參於目六了、

合見參次侍從五位已上

從一位　關白　從一位　權中納言藤原朝臣兼鄉　正五位下藤原朝臣繼長　藤原朝臣行資

嘉吉二年十月一日

合見參非侍從五位已上

正四位下藤原朝臣明豐　從五位上藤原朝臣永親

嘉吉二年十月一日(○中略)

合見參五位已上

大臣三人料綿七百五十屯(各二百五十屯)　中納言一人料綿百五十屯　四位一人料綿三十屯

五位二人料綿四十屯(各二十屯)

應下

用殘　綿　五千五百屯　綿　五百七十屯　綿　四千五百三十屯

嘉吉二年十月一日

文安四年十月一日庚申、旬、平座也、公卿權大納言藤原隆盛卿、參議左中將同親通朝臣、少納言菅原繼長朝臣、辨不參、少外記淸原忠種、史盛時、內竪頭康里等參陣、辨不參時、祿法被下少納言哉、又被下史哉、不審之由、給侍中(○淸原業忠)被相尋之由、上古見參被下少納言、祿法召外記被下之、或近例見參祿法、共被下少納言、少納言分給外記史事有之、未被下史之由注遣之、宜陽殿御裝束、上卿於奧座被召仰史之由、見應永卅二年十月一日平座了、今夜儀可尋注之、前關白依無內覽、不奉入重陽見參、今夜

開南殿、開可尋申之、高辻少納言坊城頭左大丞被尋候間、注遣分、辨不參年々長德三四一、見參給少納言、祿法給外記、寬弘六四一、召少納言給見參、依辨不候、召外記給祿法、康保四四一、召少納言給見參、召外記給祿法、仰云、明日可給辨、嘉應元十一、見參祿法共下少納言、貞治元十一十五、見參祿法被下少納言、少納言分給外記史了、應永廿二年十月一日、見參祿法下少納言、少納言分給外記史了、又上卿於陣座召史、仰宣陽殿御裝束了、此分各注遣了、

○按ズルニ、平座ノ事ハ、歲時部九月九日篇ニモ在リ、宜シク參看スベシ、

〔公事根源四月〕孟夏旬　同日〇一日

おほよそ旬には色々有て内裏あたらしくつくられて後、はじめて南殿にて行はせたまふをば、新所の旬と申、〇下略

〔西宮記十月〕遷宮後儀

應和元十二、月例、〇中略

天皇出御、有御鎰井官奏、〇恐下有脫字、了內侍出居御屏風南妻、大臣起經東庇母屋北一間、至御帳東邊、遣候天氣、勅云、音樂令奉仕、勅、大臣稱唯、歸本座、召出居等、出居稱唯、左右人云々、立、大臣傳勅、仰云、音樂令奉仕、勅、共下殿令亂聲、不待三獻依略例、歸了內侍又如初、出居大臣參奉勅、大臣歸座召出居、出居參進大臣傍、大臣仰令立草墪、稱唯、下殿之後、掃部官人以草墪立列御帳東北、一行、大臣經東廂母屋一間、著北一座、次召場儀公卿、各入自大臣道、自餘可在本座、圖書女官以倭琴筌笛出自北障子、一々授候人人、非參議候公卿後、公卿獻盃、出居執瓶、巡勸之、

〔日本紀略村上四〕天德四年十一月四日庚子、天皇自職曹司遷御冷泉院、七日癸卯、遷宮之後有旬事、天皇出御南殿、

應和元年十一月廿日庚辰、節會也、天皇出御南殿、今日亥二點、天皇自冷泉院遷御新造內裏、十二

萬機旬

月一日庚寅、天皇初出御南殿、開承明門、官奏、奏音樂、有御遊、

〔日本紀略 六 圓融〕貞元二年七月廿九日戊子、天皇自堀川院遷御內裏、　八月一日己未、旬儀、天皇出御、造宮人々加階、

〔日本紀略 七 圓融〕天元四年十月廿七日辛卯、天皇遷御新造內裏、　十二月一日甲子、有旬議、賜造宮人爵、

〔日本紀略 十一 一條〕長保五年十月八日甲子、天皇自一條院遷御新造內裏、　十一月一日丁卯、遷御之後、有旬事、

〔日本紀略 十三 後一條〕長和五年六月二日甲戌、戌剋、天皇自左大臣〇藤原道長上東門第遷幸一條院新造御殿、　七月十六日戊午、天皇始出御南殿、有旬事、

〔公事根源 四 月〕孟夏旬　　同日〇一日

およそ旬には色々有〇中略位につかせ給て、はじめて政にのぞみ給ふをば萬機旬と申〇下略

〔西宮記 十 月〕還宮後儀

應和元十二月例、御遊旬、萬機之初、寛平九十二、無樂番奏、承平九元〇天慶、十二、天慶九無樂云々、〇中略

延喜十六年、立鳴平云々、大臣有氣色、立院御座下、奉勅復本座、召出居云、御階下坐奏、稱唯退、殿上次將等取祿物、出自障子戶、各給公卿、近衞將監又給侍從辨少納言祿、大臣已下降拜舞、萬機始無番奏樂見參、仰從由、但可有御鎰奏、庭立奏云々、

〔江次第抄 六 四月〕二孟旬儀

無奏申、　直辨內覽畢、來著軾、申覽了由、大臣令同辨奏申、於常宮奏者有奏申、旬儀無之、但治曆四年萬機旬有奏申、資仲卿次第云、有內覽無奏申云々、

〔夕拜備急至要抄〕一萬機旬（參議以下、於陣座、奏之例也）日時（於陣座、以藏人奏之）　大臣已下諸卿　大辨（直廬）　劍璽

內侍二人　內侍扶持次將（以藏人役之）人　闈司二人　御草鞋　屬從女房（扶持藏人役之）人　式筥　御靴（藏人二人）

左近將曹一人　近衞二人　大舍人　御鎰奏（監物主鑰）　召內侍一人　出居次將　殿上侍從

（役之）御膳采女　內豎　臣下大臣　酒番侍從　庭立奏　少納言　主鈴　掌燈（入夜可供之）　官外記

〔小右記〕永觀二年十月十七日癸巳、午時參內、申時出御南殿、（初出御南殿之日也○花山天皇八月十日即位、中略）無番奏、依非旬日也、先例如此也、又錄事云々、

〔日本紀略〕（一九條）寬和二年七月廿二日戊子、天皇（一條）○即位於大極殿、　八月八日甲辰、旬事、

〔經信卿記〕治曆四年十二月五日、今日始有御出南殿之事、昨日召使來催、仍午刻參內、關白（教通）○（藤原）被參殿上、又上達部南三間參侍、次內大臣以下參侍陣座、招頭中將被奏云、先例代始御出南殿、必有官奏、而此一兩度不候、今日可候依何例乎、又番奏見參等候歟、庭立如何、仰云、可有官奏庭立、不可有番奏見參等、內府召大外記被問可有庭立奏所司具否之由、次內大臣被示左大辨云、可有申文歟、大辨起座著膝床子、仰可有申文之由、歸著陣座、目僕、僕出陣膝居床子、右中辨左少辨等同次祇候、少史來立南床子、次左小史章重取南申文於筥、置子南床子、僕見申文如例、（備文三通）見了、史來取文、著床子、還入、次僕著陣座、次左大辨見申文、（此間內府被見申文）還著、作法如常、次史插文差覽上卿、結申如例、次見奏、作法如例、上卿令辨內覽、次有闈門御鎰奏、但右近陣官人著膝闕腋袴、率番長二人、（褐衣）出自陣南小戶、內大臣目僕被示、此官人裝束如何、可相尋歟、仍召官人、召如尋問、申云、先例唯著褐衣、開門、而今日依左陣仰、著膝闕者、（闈門之時著闕腋袍、入御之後不著、可入門也）上卿被聞內侍出由、起座著靴、自西中門被參上、（史相從此）聞可。奏後被歸著陣座、左大辨候座被下奏了、

〔愚昧記〕仁安三年四月七日戊戌、今日萬機旬也、午刻參內、

〔吉記〕治承四年十一月十二日辛酉、今日萬機旬也、（御即位以後、雖可被行、遂々相障、自然延引、豐明節會以前必出御南殿、任所被行也、依未被行旬、不）

（此ニ御豐明節會、近例必不出御故也、）于時公卿漸以參集、早可出御之處、大膳職所課公卿僅于今不持參、相待之間、空經時剋、

〔玉海〕元暦元年十二月廿五日庚辰、今日萬機旬也、右大將爲上首、出居頭中將通資朝臣、行事職事藏人左衛門權佐親雅云々、未剋大將著東帶、唯○中略參內、予剋歸來語云、每事懈怠之間、戌剋事始云々、凡次第違亂不可敢云々、大略行事職事如泥歟、所司又不存歟、儀儀之體、偏同節會云々、

〔園太曆〕文和四年四月廿六日、右府、萬機旬、南殿官奏儀不審也、就當時皇居體可注送之旨、先日被示、予於今老耄之上、如此事曾無執心、仍雖非本意、被命亦難默止、仍此間聊安連注付、今日獻了、　六月一日乙卯、右大臣被投狀、萬機旬并改元定等事、且旬次第兩本被遣見、大概無相違歟、彼狀續之、

改元定可爲旬以後候云々、人々申詞、大略一同之由、頭辨語申候キ、

蔭暑超過例年候、属涼氣、細々可有光臨候哉、抑萬機旬可爲來十七日候云々、可稱參之由存候、官奏之儀、先日委注給候キ、粗散不審候、

十一月廿八日庚戌、右府被送狀、條々有被示事、問答續左、

萬機旬不審條々

一職事下日時勘文之後、上卿移著端座之時者、於勘文者可懷中歟、可取副笏歟、（本儀如此可候、但又懷中モ不苦事候、）

一內侍臨檻之時、（內侍進出之間）上卿小揖拳之、（如此可候歟、又不可有殊儀色也、）

一傳召之間、上卿進立之所、中門ノトヲリ歟、宜陽殿壇上邊歟、（准大內儀ハ入宣仁門、宜陽西壇北邊歟云々、然者入中門、壇北邊可宜歟、）

公事之次、著陣之次、略申文吉書許下也、（常儀如此儀歟、常事候歟、）

十二月五日丙辰、今日被送消息、萬機旬可爲來廿三日之由、有其催、其次可遂一級拜賀著陣參內之時、車簾卷垂事被談、先奏慶之時卷候歟之旨申了、　廿四日乙亥、右府被談萬機旬并著陣儀事、

萬機旬、明日必定之由、其沙汰候歟、出仕方計會、周章可有賢察候也、

御明夜著陣連用之儀、先著陣奥、予移端可相待吉書候哉、又職事來奥座下吉書、次移端可下辨候[illegible]日時勘文、御下知了、[illegible]內々御書候略、二通可作、御返事候、萬機旬日時勘文、吉書ハタヽ、後勿論事候者、略○中

廿六日丁丑、抑今日當代萬機旬也、連々延引、今日建被行、珍重、右大臣爲日上被候、官奏大納言參仕之次、一級拜賀著陣吉書拜、達之、上卿西園寺大納言參向之云々、

（歷代皇紀後土御門）文正元年十二月廿六日、萬機旬被行之、

（公事根源四月）孟夏旬　同日○一日

おほよそ旬には色々有、略○中十一月一日冬至にあたる年、行はるゝをば朔旦の旬と申、略○下

（江家次第十一月）朔旦旬

冬至宴會、始自神龜二年十一月己丑、天皇御大安殿受冬至賀辭、又神龜五年、天平三四年等有宴會、聖武以上四年一章之朔旦、朔旦冬至宴會儀式、延曆三年十一月戊戌朔、行賀禮、龜田祖云、是本朝朔旦冬至始見國史也、○中略

第一大臣以外記令仰上卿儒士令作賀表、略○中大臣令奏事由、召仰外記、外記來立軾之前、未得解由者、可令候座事、若日及晚者、御解可令付內侍所、略○註番奏或亦付內侍所、見元四年例、但御輿、主上渡御南殿、略○註內侍出居東階上、大臣以下列立陣前小庭、略○註大臣一列、納言一列、參議一列、北面西上、大臣揖離列自軒廊東第三間入、略○註次公卿復座、略○中次外記二人撤案、大臣令藏人奏事由、召仰外記、略○下

（年中行事秘抄十一月）有朔旦冬至年旬事

國史云、神龜二年十一月己丑、天皇御大安殿受冬至賀、

（柱史抄十一月上）朔旦時儀

今日被行旬節會、公卿奏賀表、件表儒宗多作之、又公卿儒有例、

（台記）久安元年閏十月十四日乙卯、造朔旦旬次第了、又草同節會笏紙二枚、一枚有御書、一枚無御書、十六日丁巳、今日依日次宜、卽日不可仰之由有職、仰爲仰朔旦賀表事、遣召左大辨、略○中此次朔旦旬次第給師安、

臨時旬

〔朝隆卿記 朔旦冬至部類記所引〕久安元十一一日、朝間遙天晴、午後微雨降、但不及濕地、今日朔旦冬至旬也、

〔歷代皇紀 土御門〕建仁二年十一月朔旦冬至、仍有賀表以下旬儀云々、

〔歷代皇紀 伏見〕永仁六年十一月、朔旦冬至也、被行旬儀、

〔大外記良枚記 朔旦冬至部類記所引〕正和五年十一月一日戊辰、今日朔旦冬至旬也、

〔大外記顯元記 朔旦冬至部類記所引〕建武二年十一月一日戊申、朔旦冬至也、仍被行旬儀、

〔歷代皇紀 後小松〕應永十八年十一月一日、有朔旦冬至旬事、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜十三年四月七日、臨時旬、

〔中右記〕嘉保元年十二月十九日丙戌、今日依為吉日、初出御南殿、(旬)先御裝束如常、所司供奉、人々參集之後、又改替御裝束、是裝束使大失也、甚奇怪歟、左大臣被參之後、依可有官奏、左右大辨并予著仗座、覽申文於左大辨、(史盛親、先下官、次左右大辨、)左大辨進仗座、(左少史盛率候奏、大史不候、仍大辨被召、大臣氣色許之後候也、)次直辨予參、大臣令內覽、(吉書三枚)此間殿下御座殿上御倚子前也、仍於小板敷內覽、(不著杖)歸出陣申內覽了由、次主上(堀河○)出御南殿、(中時吉時也、而殿下令候給、)掌侍二人持璽劔前行、女房八人扈從、大豎物行高御鎰奏、(先闕司奏)次召左大臣、官奏、出居大進權中將顯實朝臣、侍從宗信朝臣參上、次次事等存先規歟、漸臨晦不能委記、一獻之程已乘燭、香奏左少將忠教朝臣、右少將有賢、左衞門權佐有信、餘之府判官等也、列立庭中奏如例、(但闕司不奏、闕列立、大失也、不相儀歟、仍止闕司奏了、)公卿多雖參入、依座不足、不著堂上、唯被候座人々、左大臣、帥大納言、藤大納言、新大納言、左大將、左大辨、新宰相中將、(宗)許也、御膳行事藏人兵部大輔通輔、戌剋事了、還御本殿、

今朝有政、是左衞門權佐時範、擬非違使官符請印者、早旦參結政、左大辨左衞門督被參、左少史廣親為座頭覽文、(伯耆國範文)南申文三枚、次第如常、後參陣、旬間被仰下昇殿之由、前兵衞佐長忠朝臣、備前守國明朝臣、治部大輔敦兼、刑部大輔行信四人者、

下官任辨之後、初今日候官奏、

今日旬御盤奏官奏畢、此外無他奏、又無音樂、事了殿下還二條亭給、

〔延喜式 十八式部上〕凡朝堂座者、昌福堂太政大臣、左右大臣、含章堂大納言、中納言、參議、承光堂中務、圖書、陰陽、明禮堂治部、雅樂、玄蕃、諸陵、延休堂親王、含嘉堂彈正、顯章堂刑部、判事、延祿堂大藏、宮內、正親、(已上入堂)暉章堂少納言、(以北爲上)左右辨官、(以中爲上)康樂堂民部、主計、(以西爲上)主稅、(以東爲上)修式堂式部、(以東爲上)兵部、(以西爲上)永寧堂大學、(以東爲上)其長官、次官前行、判官、主典中行、史生後行、

凡在京文官皆就朝座、○(謂縫殿、主計、主稅等、)但神祇官及監物、中宮、大舍人、縫殿、內藏、內匠、隼人、囚獄、織部、大膳、木工、大炊、主殿、典藥、掃部、內膳、造酒、采女、主水、左右京職、東西市司、春宮坊并管司修理職、勘解由使、及諸武官皆不就朝座、

凡就朝座者、昌福堂北階太政大臣、中階左右大臣、南階大納言、中納言、參議、少納言、左右辨、延休堂北階一品、中階南階二品以下四品以上、各當其座昇降、含章堂北階大納言、中階中納言、參議、南階少納言、左右辨、皆至於階下、北向而拱、退亦如之、東堂昇先右足、降先左足、西堂昇先右足、降先右足、盡級聚足、不可越階、至於床下、進退皆拱、餘堂准此、但北向堂昇降皆避馳道、其親王及太政大臣、任從南階後階昇降、諸司五位以上皆從前階、(若任二例官以下者、從便階昇降、)但暫出入者任從後階、六位以下皆從後階、不在禁限、

○下略

〔日本書紀 三十持統〕四年七月甲申、詔曰、凡朝堂座上、見親王者如常、大臣與王、起立堂前、二王以上、下座而跪、

己丑、詔曰、朝堂座上、見大臣、動座而跪、

〔延喜式 十八式部上〕凡在朝堂座、見親王及太政大臣者、皆磬折而立、若見左右大臣、及左右大臣見親王及太政大臣者、並起座、即就座及出門訖、乃以次就座、其少辨以上初就座者、外記、左右史以下皆起、(若大辨一人先就座者、見後來大辨以下不起、中辨以下先就座者、見後來大辨即起、)省臺卿尹初就座者、輔弼以下、及所管寮司長官以下皆起、(刑部大判事准此、)輔弼初就座者、省臺寮司主典以下並起、(判事屬准此、)若長官先在座者不起、(寮司長官就座者、主典以下不起、但於曹司跪、)○○○○(太政官)部○

起也、〇中略

凡次侍從者、職事、陪從行幸闕朝座者、侍中移乃聽之、近處行幸者、朝座畢後追參、

（延喜式十八式部）凡彈正在朝堂失禮儀者、省加糾正、

（延喜式三十八掃部）凡朝堂院、昌福、含章、延休等堂、〇中略並以備料舖之、（朝堂座起三月至十一月〇中略）

凡暉章堂告朔諸司五位已上座者、毎朔日旦以備料舖之、（曹司廳准此）但皇帝臨軒不須、

（延喜式十八式部）凡昌福堂、含章堂、及含嘉堂版位、並置前庭向正北、餘司各置堂後、其版位皆二枚、（公事就朝、私事就後、）

著座日時

（延喜式十一太政官）凡百官廳政皆於朝堂（〇入省院）行之、但三月、十月旬日著之、正月、二月、十一月、十二月、並在曹司（〇太政官正廳）行之、

（延喜式十八式部）凡諸司皆先上朝座（〇入省院）後就曹司、不得經過他處以闕所職、若無故空座、及五位以上須不參、經三日以上者、並省推科附考、其節會雨泥日、及正月、二月、十一月、十二月、並停朝座、但三月、十月旬日著之、

凡諸司五位已上朝堂無座者、皆毎朔日就省受點、（散位五位已上亦准此、）其停朝座月、有座無座皆就曹司受點、但太政官不在此限、其解由使亦同、（毎旬一進、史生據其座、不若不在者、不記其日、）

（九條年中行事三月）朔日、及十一日、著朝座事、（是月毎旬著之、但廿一日廢務、〇又見小野宮年中行事、）

（小野宮年中行事四月）朔日、著朝座事、

自是月迄八月、毎月著、若天皇御朝堂時奏告朔、七月、十月同之、若無朝座者、於官廳行政、

（九條年中行事四月）朔日、著朝座事、（自是月迄八月、毎月著、若天子御朝堂之時、名云告朔、）

（小野宮年中行事九月）朔日、及廿一日、著朝座事、（是月毎旬著、但十一日廢務、）

（九條年中行事十月）朔日、視告朔事、

同日、及十一日、廿一日、著朝座事、〈○又見二小野宮年中行事一〉

〔九條年中行事十一月〕朔日、著朝座事、

〔北山抄十二月〕朔日、親告朔事、

同日、著朝座事、

○按ズルニ、朝堂ニ出入スル制限ノ事ハ、朝參條ニ在リ、參看スベシ、

〔延喜式十一太政官〕凡朝堂座者、昌福堂北端、太政大臣、次左右大臣、大納言、中納言、參議、並西面北上、少納言及左右辨並一列、北向東上、但勅使座當大臣座北面、含章堂、大納言以下參議以上、並一列西面、大納言以下、必先就含章堂座、大臣就昌福堂座、訖乃大納言先進就昌福堂座、于時大臣喚召使二聲、稱唯就版而立、大臣命曰、召大夫等、召使稱唯、退就含章堂版、北向召之、中納言以下共稱唯、進就昌福堂座、〈若大臣不參者、大納言宣之、中納言亦同、〉訖左右辨官了〈○了一本作申〉一拍、五位以上於堂前降立、六位以下於堂西降立、少納言、左右辨、先進就前版而揖、外記、左右史後走就後版、並北向〈以東爲上〉立定、大臣命曰、召之、五位以上俱稱唯、次六位以下俱稱唯、五位以上隨色昇階就座、訖乃六位以下俱引就庭(座)下、北向而立、辨一人申云、司司〈官名〉申〈官名〉政申給〈止〉申、史依次讀申、每一事畢、大臣處分、隨事稱唯、訖六位以下先以次退、至於堂後而立、次五位已上亦退、皆於階及版下揖、至於堂前、立定五位以上依次揖昇就座、六位以下俱昇就座、訖左史一人申曰、申〈官名〉政、辨宣曰、任申〈弁一人、先弁手書、然後〉史俱稱唯、〈右亦如之〉參議以上隨次而退畢、少納言、辨、史依次退出、諸官乃退、

〔延喜式十八式部〕凡諸司在朝堂中政者、隨便廳道、

凡含章堂、并顯章堂官人、不得從顯章堂修式堂後通東門、承光堂官人不得通西門、

凡辨官史已下直丁已上出入、聽用東方掖門、

〔延喜式三十八掃部〕凡朝堂院昌福、含章、延休等堂、并太。政。官。曹。司。及。廳。座。者、並以儲料鋪之、〈朝堂座、起三月一至十一月、曹司〉

申政刻時

官政儀

座、年中、

凡太政官聽政廳幷侍從所及大藏省出納官物諸司座、並日別鋪之、其參議已上座、從穢造替、

〔延喜式 三十八 掃部〕凡廳座者、親王及中納言已上倚子、五位已上漆床子、自餘白木床子、

〔西宮記 臨時 四〕官西廳座

廳母屋西邊、立比獨床子前机、爲辨座、以下中上東西、左辨北、右辨南、史南北面立床子、(左史北、右史南、)史生、官掌、左右居史後、(史生座前居朱漆韓櫃、官掌等見朝臨儀也、)左右辨各入自南北戶、參議大辨入自中戶、

承平三年四月十九日、貞公御記云、新大納言(恒佐)爲著座到待賢門、而聞外記結政所物忌歸去、但其倚子者、元右大將著、(保忠觸穢、)

同年五月三日、貞公御記云、新大納言(恒佐)爲欲著座、外記立倚子也、而依降雨不著新作倚子也、

同六年四月、大納言右衞門督等著、(恒佐、實賴、)

〔九條年中行事〕申政時(見貞觀式)

二月巳一點、自三月至七月辰三點、　八月巳一點、自九月至正月巳二點、

〔延喜式 十一 太政官〕凡辨官申政時刻、自三月至七月辰三刻、自九月至正月巳二刻、二八兩月巳一刻、

〔拾芥抄 中末 申政刻限〕申政刻限

自二月至七月辰一點、自八月至正月辰三點、(已上辨官)

〔小野宮年中行事 四月〕朔日、著朝座事、

七月、十月同之、若無朝座者、於官廳行政、

〔北山抄 一 四月〕朔日、著朝座事、(此日有官政、七月、十月同之、)

〔令義解 一 職員〕太政官(○中略)

左大臣一人、(掌統理衆務、擧持綱目、○義解、謂陳其大綱、綱目必擧也、其諸司諸國之事、由辨官者、辨官受取、申於大臣、大臣位高任重、不可細碎、故唯擧其大綱、請其緒)

[illegible]右大臣一人、掌同左大臣、

〔延喜式十一太政官〕凡內外諸司所申庶務、辨官惣勘、申太政官、其史讀申、皆依司次、若申數事、各先神事、申神事日、史不申凶事、御本命日、中宮、東宮本命日亦同、及朔日、重日、復日、亦不申凶事、

〔禁秘御抄上〕賢所

凡禁中作法、先神事、後他事、旦暮敬神之叡慮無懈怠、〇下略

〔禁秘御抄下〕廢朝

廢朝儀、米行政以前、神事外他事、有議多者不行也、

〔延喜式十一太政官〕凡庶務申太政官、若大臣不在者、申中納言以上、其事重者臨時奏裁、自餘准例處分、

〔九條年中行事〕申大中納言雜事

諸省雜物事　免除損戶交易事　置未納事
免除無直交易事　授田授口帳事　年貢御馬事
諸國齋生得度事　申請不動倉鉤匙事　年貢御馬逗留狀事
改名改姓事　加授神位事　補譯師撿非違使事（復任亦同）
判公廨充國儲事　解卸宿衞事　大小兩領闕事
官人無故不上依病不上事　貢采女事　國營田事
開用不動事　歸鄉叙事　諸氏閏月料米事
新委不動事　御佛名導師給度者事　准出擧正稅數春進年料米事
民部主計主税省察官人食料米事　不堪幷損田等使勘定帳事
庸綿准調綿進納事　諸修理支度事　覆勘修理事
年終斷罪事　補太宰府十郡司事　節祿事

除棄無實官舍事　齋院在前衣服事　申請口分田事

諸司諸國依恩詔免除勘出雜物事　諸國停諸司大粮春充正稅例用不足事

已上奏

訴訟事（若事重者奏）　捕罪人事（若事重者奏）　神社官舍破損事

官舍破損勘錄損色事（下所司令支度、其後上奏、）　相補雜物見乘事（但不可以前司剩補當時見上、）

依雜事給賣符事　勘判報符未到之間、雜物暫置勘出勘濟公文事、

下雜物口宣事（但親王源氏衣服月料等未行以前、木中若或史誤申者還給、）　校定實錄帳事

不與解由狀事　諸寺年分度者事（延喜十三年以往奏、十四年來依格不奏、）　解由事（皆介不署中第一、）

勘知帳事　交替延期狀事

追給雜物事　燒亡事　補諸社禰宜祝等事

補定綱寺別當三綱事（七大寺別當三綱、經三司者亦同、）　補諸司才伎長上事

補國掌事（或國解、或弁官給、）　郡司服闋之後復任事　弁官給主政帳事

國司遭喪事　國司卒死事　補國分僧事

相撲人依病不上事　擬使主典申請事　擬使季祿幷借物事

勸職寫田地子使事　不堪幷損田等預申事（風雨、旱蝗、疫死、地震等之類、）　衛士仕丁養物幷逃當任料事

諸道得業生未行月料幷時服事（得貫同者緣亦同之）　補定額僧事　補年足王事

調物在前進納事　御齋會講師事　補勘解由使史生書生事

贖物事

諸國申請押領使事

○○○

申一上事

雜物色替事（成文讀申次上、不預讀申例、）　位祿王祿改年改國事（失錯）
大粮改申他國事　不堪幷損田坪付帳事　二分一分大半損事
賑給百姓事　申請交替使事（外國）　唐人來着事（渤海客、幷異國同、）
給復百姓事　大宰府例進絹綿事
隣里有勞僧等加位階事（諸國申、府寺同、）　延暦寺出山僧等授滿位事
維摩最勝兩會竪義僧等叙滿位事（興福寺、山寺同、）
以上奏
大粮充國事　弁史充所々別當事
位祿王祿衣服充國事（一上預日有勅者、隨上處分、中次上、）　無介署解由事
出納諸司季祿口宣事　七月十二月兩度大給事　年料米可進京事
年料鎰事　國使遣期事　節祿加減事（一上有勅者、隨上處分、中次上、）
諸節會充諸司季祿未行事
〔北山抄七都省雜例〕中。一。上。官奏。事。（廳著奏之時、大弁之時、勅令讀文云々、至于所司[illegible]、文書、本所讀數、內給[illegible]注其由、不可爲例、）
恩詔賑給事（[illegible]）
天暦定法、宜皆依倣例（彼實、入状勘文者、不申官云々、是勘時申請事也、官例充宜旨云々、）
不堪佃田事（天曆文、依奏日、不副他文、諸有例今勘申奏聞、）
雜物色替事（前司任終年、幷當任始國雜物色替、不申上、○前司以往受國處分、或便申次上、不爲替例、）
位祿王祿改年改國事（失符序同、以充遺給替年、位祿者、官符副注其年、）
大粮改申他國事
不堪幷損田坪付帳事

二分一分大宰損事

唐人來著事（渤海客并異國人亦同）

申請交替使事（外國）

賑給百姓事（據饉例入秋解文來者、不申上、是官例、无宜旨云々）

給復百姓事（无損事、國申給復文、不可申上者）

太宰府例進絹綿事（定例分明行數、部可申行）

階業有勞僧等加位階事（僧綱申、延暦寺亦同）

延暦寺出山僧等授滿位事（申綸被）

維摩最勝兩會竪義僧等叙滿位事（粟山寺六月、事山寺又同）

已上奏

大糧國充事

乖違格式臨時申請事（覆狀奏）

弁史充所々別當事（或有被許、申以次上）

位祿王祿衣服國充事（一上經日有例假者、隨意分申次上、位祿失符敕、國司給國位祿者、注守介名）

無介署解由事（明有介无署也、長官署名、例官主典、或假或病、一關不署者、不還却）

出納諸司季祿口宣事

七月十二月兩度大給事（或有被許、申次上）

年料米可進鼎事（或有被許、申値上。加一合精代稻納、延喜七年宣旨）

年料餞事（還卿不立用、此注流也、則納租穀租舂交易雜物直稅帳事）

調使遣期事

節禄加給事（[illegible]）

租舂米并到納租穀用錢停留國可運京庫及寫不動事、

諸節會充諸司季禄未行事

正月元日、七日、十六日、　七月相撲召合　九月九日　十一月新嘗會　行幸時左右近衞各二百端（各百五十端、）左右衞門各百端（各七十端、）左右兵衞各百五十端（各百端、）左右馬寮（召合之時、服狀宛給、如此雜事上申文也、）

○○○○○○申大中納言職事

諸省雜物事（[illegible]）

免除損戸交易事（[illegible]）

免除諸國交易事（[illegible]）

諸司諸國依舊例免除勘出雜物事（[illegible]）

徵未納事（[illegible]）

申請不動倉鉤匙事（[illegible]）

國用不動事（[illegible]）

新委不動事（[illegible]）

准見納正稅數存進年料米事（[illegible]）

諸國停諸司大粮充正稅例用不足事（[illegible]）

庸綿准調綿運納事（[illegible]）

割公廨充國儲事（[illegible]）

畿內中穀倉院調錢運抄事（[illegible]天德四年例加入、）

民部二寮官人食料米事（[illegible]）

源氏申閏月料米事續給例、未行以官田地子給之、內親王料內給、

歸鄉糧事續給例、奏報、民部本貫勘文、

齋院在前衣服事續給、不勘文、

年貢御馬事續前例、

同逗留事無續文、近代史申一國弁、次申大弁、次弁申上奏之、所謂續申文也、

貢采女事續符案、奏報、本司勘文、

節婦事近代無例、可續傍例、

官人不上事無前例奏報、可續文、

解却宿衛事續前例奏報、

諸國書生得度事續傍例符案、奏報、

御佛名導師給度者事續奏報、

補符師撿非違使事續傍例、復任本國、

大少領闕事續前例、并本人任符、式部勘文、是不待時所奏也、

補太宰十郡司事不見申請例、

加授神位階事續前例符案、奏報、神祇勘文、諸國申加三位以上解文、不可申上、

改戶改姓事續傍例符案、奏報、民部貢戶勘文、副宣旨、若申本族由者、可續姓氏錄歟、

申戶田事續改戶符案、前例民部勘文、京職絕戶勘文、

授田授口帳事近代諸國不進、

闕營田事續前例民部勘文、

王臣家申請封戶改國事續省符案、民部封數、主計寮丁數用文書例奏報、近代內給、或奏、或家司加署、依申返、申請京庫之時上宣、仍續舊給、大藏省、及諸司符案、先申官廳、後外記、

上大中

不堪損田等使勘定帳事

請修理文度事 副本國色文

雜勘修理事 副本支書

除無實官舍事 近代無申請例

年終斷罪事 同上

已上奏

調物在京進納事 雖有例、近代不申

相撲人物欠負事 雖有例、而以無國司不補當任欠

勘判親符未到國雜物定量勘出公文事 雖有例符宣、國解由勘文、副宣旨、從例申大納言以上

齋士仕丁養物先弁進當任料事 近代不申

依國事○令給貢符事 雖有先例、未行

追給雜物事 雖有先例、未給

贓物事 雖有先例

請道得業生未給月料衣服事 雖有例、大學大炊兩寮問者歸聞

交替實錄帳事 見雜文

不與解由狀事 同上

勘知帳事 近代不申

交替延期狀事 雖有先例

解由狀 受領、雖主計調庸返抄請不、主稅稅帳勘不任用、二寮乘使光介署申之、上

補諸社禰宜祝事檢前任符案除例、太神宮司奉勅官符、八幡神主諸社上宣、鹿島香取枚比、名、宗像上宣、宇佐奉勅、作上宣官符、安房出雲紀伊國造奉勅、續前例、

補勘解由史生書生事續先例

諸國申差押領使事

補諸宮宮主諸司才伎長上事續前例、幷前任符案、宮主、龜卜長上、神琴師、上宣官符、圖書諸長上、內記典獄、內匠長上、雅樂物師、縫部文師、木工長上、續本勅官符案、

郡司服闋復任事續本任符案、宅例服闋之內、奏擬服解之後上宣、續宣旨案、

補國掌事同上、或國解、或弁官給、

弁官給主政主張事續給主申文、式部勘文、

補年足王事

補定額寺別當三綱事續前任符案、僧例七大寺三司解、三綱經三司名奏聞、興福寺不經三司、自餘不經三司、內給、

御齋會讀師事不見其例

補定額僧事續先例

諸國講讀師立夏文事本符續講師日表之

諸國分僧事續先例符案、勘解由、治部勘文、當寺僧中、擇堪事者補、不得新度、先中闕狀、符補符、諸寺心圖者、擇百姓年六十以上新度補、又年少五人度之、

諸寺年分度者事延喜十三年以往奏、其後依請不奏、无續文、

擬使主典申請事續官例使官符

同使季祿幷借物事同上

勘職寫田地子使事續先例

不堪幷損田預事風雨、旱澇、蝗死、地震等類、

國司卒去事无續文

同遺喪事同上

相撲人依病不上事〈不載代見〉

燒亡事〈亡、雜史〉

諸條事形事〈謂、此中、謂宮中、及大嘗、攻中、上所、宮、衛、年祭、婦、又關之、〉

神官舍破損事〈謂上、宜、雜、又關之、〉

關剋鎭損亡事〈同上、謂下、同、令、文、應修繕、〉

訴訟事〈謂、先訴、事、重、〉

捕罪人事〈同上〉

申請口分田事〈謂、請班、給、田籍、付、戶口、計、帳、續、申、交、〉

已上上宣

〔令義解一〕〈職員〉太政官〇中略

左大臣一人〈掌統理衆務、〉〇謂、總統衆務、太事也、論、令公式令論奏式、所言之事、不由上官、直中大臣、事、應任官之類也、〇下略

〔令義解七〕〈公式〉論奏式

太政官謹奏其事、〈謂、依令條、太政官論奏、用正統事之類也、〉〇中略

右大祭祀、〈謂、神祇令所云大祀、及臨時大祀之類也、〉支度國用、〈謂、太政官、每年豫量用度、令年事不入、家寧留用、年事皆入、乃後其物之類是也、即與主計寮支度國用、文用、〉增減官員、〈謂、增減官職、及主典以上之員數也、〉斷流罪以上及除名、〈謂、此所司不得專斷、事必須論奏者、於官議定、然後奏、六議、但本罪、〉〈謂、太政官斷、不依令者、亦須論奏、但判官以下及諸國斷流以上、及除名官當者、速寫案申太政官、太政官覆審、可斷者、依獄令、令覆定、且得入此條、〉〈謂、文云除名、不稱免官、當、已是除名、即入論奏事、〉廢置國郡、〈謂、廢、停廢也、置、建置也、〉差發兵馬一百匹以上、〈謂、差發兵馬者、其馬兵也、文唯稱馬、不云人者、其馬不可獨用、必有人、謂、知數、若發兵少、不滿百人、亦准此式也、〉用藏物五百端以上、錢二百貫以上、倉糧五百石以上、〈謂、其自餘雜物、准價相當者、亦准此式、則節所用、〉〈謂、兵仗、及位祿季祿等、雜物多數、事是尋常、故入下條也、〉奴婢廿人以上、馬五十匹以上、牛五十頭以上、若勅授外應授五位以上、〈謂、除勅授外、官議會叙者、其擬叙五位以上者、入論奏事式也、〉及律令外議應奏者、〈謂、雜令依年內定、叙此以其條正文、即爲律令之外也、〉並爲論

奏、畫聞訖、留爲案、御畫後、注奏官位姓、

〔延喜式太政官十一〕凡庶政申太政官、○中略其考選目錄、及請印六位以下位記者、中務、式部、兵部三省、不經辨官、直申太政官、中務申夏冬時服、及式部補文學家令以下傔仗、惟亦直申、

〔西宮記二月四〕三省政申（不行代）

申文前、三省立版、上卿召す、三省唯著床子、三省丞申擧、上卿云、與之、三省稱唯退出、次少納言辨外記史三省參入、上卿召す、稱唯著座、辨申云々、三省錄次々讀目錄、上卿云、與之、輔稱唯、丞錄退、次有常政、

〔北山抄七都省雜事〕三省申政事（考選目錄、弁官申文之前申之、擧讀目錄、披引之、弁官後申、但中務省、依女官、最後申之、）上卿著廳、弁官申文之間、中務、式部、兵部三省輔、丞、錄等、列立版位、上卿召之、稱唯、各著床子、如恒、先弁、法申、次輔起座申之、次錄讀申、一々申擧、遞判云、與之、輔等起座稱唯、次六位稱唯、訖退出、次史讀申云云、

〔延喜式太政官十一〕凡諸司申政於太政官者、先經外記、然後令申、

〔延喜式式部十八〕凡應引諸司申政太政官者、少納言、左右弁、及省輔、先進就前版、次外記、左右史、及省丞錄後走就後版、立定大臣命曰、召之、五位以上倶稱唯、次六位以下倶稱唯、訖五位以上、依色就座、六位以下依官次、進就庶案下、三省申政了、大臣處分、輔及丞錄稱唯、訖以次退出、然後弁官申政、

〔延喜式太政官十一〕凡諸司諸國申政之時、史讀申已訖、辨判曰云々、擧卽史仰云、縱（讀曰與志）、

〔延喜式式部十八〕凡上廳申政時者、外記立於辨官史上、八省丞亦立史下、但因考選事被率日者、立式部下、

〔延喜式式部十八〕凡省與他省共申政之日、不得申補家司、及傔仗、

〔延喜式式部十八〕凡辨官政未了前、諸司不得無故輙退、

〔西宮記七月〕官政

一日有官政、此日上官著官結政、

讀申文

二省進補任帳外記藏人所、藏人所給出納等筆、〈年料例、夏等筆、自正月一日至六月三十日上日百六十日給三十七、百三十日以上十七、〉

〔北山抄七都省雜事〕官政〈四月、七月、十月朔日有官政、仍不聞東外記結政所云々、七月朔日、納言官中政例、以參議、五位事中文讀中二枚、先中請事、不讀二枚、不可奏事之、〉

參議以上入東門、先着東廳座、大臣參入之時、納言以下起座如常、〈如常起之、〉又時剋起座、於廳後屏北着靴、〈大臣於主殿寮着、自餘如之、陣屏西邊、〉納言經屏東邊、〈或經屏外、或經上西邊、〉入自中戸着座、參議經西邊用西戸、申文請印等儀如常、

但中文史有四人、少納言、弁起座、副弼着座并退出時、有三段揖、〈開揖出之時、以四揖例不揖、東北第二揖、伊周卿爲上、依揖爲之、〉

〈日、件揖三々、或見來如是、先例如此〉五位以上着靴、史生着深沓、事畢、始自上臈起座、於初處脫靴、上卿立東門內壇上

南面、以次納言立西北壇、參議先到立壇下、〈東面南上〉下臈爲先、出門北行、史外記弁少納言隨出北門、於艮

角辻、華社御前、〈弁少納言在一人者、大夫外記、史同揖之、〉至侍從所門前、史外記列立門外北頭、〈西面南上〉弁少納言當門前列、

立路西腋下、〈東面南上〉參議以上直入列立如恒、上卿至門前、先揖弁少納言、次揖外記史入門、〈近例、向説方一揖云々、〉

自餘儀又如恒、

〇按ズルニ、官政畢リテ退出スル儀、及ビ侍從所ニ着ク儀等ハ、略、外記政ニ同ジキヲ以テ、同條ニ併載セリ、

〔朝野群載六太政官〕官中政申詞

讀申文四枚

返抄二枚

民部省申久、主計寮乃申セル、美濃ノ國乃、去ヌ年乃、御調進使少目秦乃則安、此物收畢ヌルニ依テ、返文可給官申給ヘト申ス、

民部省申久、主計寮乃申セル、讃岐國乃、去レヌ年乃、計帳進タル使少目伴乃連世、此ノ文勘畢ヌルニ依テ、返文可給官申給ヘト申ス、

百度文二枚

官政例

宮内省申久、大膳職乃申セル、官物收下司々乃人等乃、此乃月乃百依分乃魚六斤、鹽二斗給ラント申律、

宮内省申久、大炊寮乃申セル、官物收下ル司々乃人等乃、此ノ月乃百依乃料乃米、三坂給ラントト申律、

〔台記別記〕久安三年四月一日甲午、今日行官政、中略

廳申文

民部省申久、主計寮乃申セル、美濃國乃、去久安二年乃、御調進使少目伴連世、此物收畢仁依天、返文可給ト申給ト申、

民部省申久、主計寮乃申セル、讃岐國乃、去久安元年乃、計帳進使大目秦則安、此文勘畢仁依氏、返文可給ト申給止申、

宮内省申久、大膳職乃申セル、官物收下須司々乃人等乃、此月乃百度分乃魚六斤、鹽二斗給ト申、

宮内省申久、大炊寮乃申セル、官物收下須司々乃人等乃、此月乃百度分乃米三坂給ト申、

〔三代實錄 三十八 陽成〕元慶四年十二月十九日戊戌、先是自太上天皇 和清 崩、公卿於仗下聽辨官政、是日就太政官候廳 謂之外記 聽常政、

〔本朝世紀〕天慶元年七月廿三日戊辰、中納言藤原實賴卿、參議左大辨源是茂朝臣、於辨官曹司廳聽政、此日召給成選位記日也、其儀式如常、事在別記、　八月三日丁丑、中納言藤原朝臣實賴、右大將 參議源朝臣是茂 右大辨 於辨官廳聽政、有申文、

〔台記別記〕久安三年四月一日甲午、今日行官政、此事久絕不行、余爲一上、應復宮中之復古風、故興廢行之、兼日仰可行官政之狀於右大辨 雅俊朝臣 非參議 須仰左大辨顯業卿也、而件卿常患疾不朝見、无留心於公事、故仰右大辨、昨日賜次第於大外記師安朝臣矣、左大史師經宿禰申曰、依式日事不能上達

館以下者、仰曰、此證久絕、世有守證參之人乎、令告仰可宜者、師經又曰、列見非式日被行之時、使官掌催納言參議、而官掌皆有障、爲之如何、仰曰、使史催何事之有乎、右大辨來曰、官政日、大辨見〇〇申文之儀无所見、但西宮文十勸物之文者、史奉觀說、上卿已下座定、大辨著北廂西戶外床子、史取文奉大辨、不知試大辨取之置床子端、一々開見了、下史之後着座、史插杖中上之儀如例、予故左大辨經賴云、後日雜件例无所見、又聞先達不聞事也、予可尋云々、然則欲奉觀說、經賴不許之、經賴卽外祖也、進退惟谷、爲之如何、但不見出儀式、唯可奉觀說乎、對曰可然、辰二點參官、入自北掖門、及東門、(式政官)如令從立事於陽明門、引率經營如列見、〇〇著東廳兀子、如列見、相繪二相公經輔、參入著床子、余令召使召大外記、申未參之狀、卿章之者也、久之參上、問辨少納言參否、申曰、少納言成隆使長參候、少納言能忠未參、但可參云々、右大辨參候、自餘未參、但左大辨經權右中辨師信可參、此外申障者、仰曰、然者有法申、可有請申文也、頃之權大納言宗輔卿一七十參入、立東門、使召使觸參入由於參議云々、申余此事先例不見、然而非可无咨、因之示可被參著之由、卽入來著兀子、政刻辰三點也、而漸及巳一點、召使不申刻、是故相議令參議遂召使、召使入自東幔、立庭東第四間壇下、門外可立東二間、立西門、失也、申曰、巳二、可申辰三、申巳、失也、卽出自東幔了、于時左大辨權辨少納言能忠參入云々、使召使問結政事具否、申漸具由之時、到來東廳床子下著靴、此間、一納言二相口問北屏北著靴、余以下著廳如常、欲著廳之間、少納言成隆來曰、右大辨朝臣申曰、今日之儀希代、而辨一人立申文、可謂違例、西宮勸物云々、粟田左大臣爲義、參議大辨之時、立申文云々、依彼例、家上宜立之如何、報曰、西宮勸物、雖有此事、未知其年紀、難信用歟、此外无還例者、不可然者、良久權少外記三善康光自西壁外進出、余命令退之、參議大辨著廳之後、可有法申之故也、示參議、催著左大辨、使有足思、召使扶持到戶下、依足思不著靴歟、次外記康光著深沓、出自西壁外、自南廂斜行、立西一間、遂南、與壇下柱、不頭向、向艮申曰、大炊火乃官乞政欲申給ト、大炊火大夫壹人侍、余宜令申與外記稱唯、自本道退去、外記經柱外、立西二間壇、上可申之由、見長元六年八月十一日師賴記、但天延三年八月十七日奉定、推正記、外記法申道如令日、而不書失由、若有此說歟、然而承平三年六月七日任郡司、淸愼公記云、外記於南廂西二柱下法申、

（請帰云、當西二間可申者、）次申文之儀、一同列見、（少納言候一員、權右中辨能、外記一人、史四人、）今日无一失、次請印之儀、一同列見、（史生著深沓、又同列見、少納言成陳、外記職先、）少納言欲入自母屋西一間、更覺入自二間、自床子上著、（入自一間、是自上著也、）請印了、起座、（同列見、）經本道到著靴之處、著淺沓、納言、參議、又同歸、自東廊柱外壇上、（是本道也、）降自北面石階、（戸間）出自同間幔、（召使饗之、當戸間東頭、有不饗幔之處、召饗件處、列見亦同、是又稱入之處也、）使立東門内南腋壇上、（北面）土御門大納言、立同北腋壇上、（南面）三相公立西壇下、（南上東面）更爲先下馬出門北行、（召使一人扶左大辨、）先之、辨、少納言、外記、史出北門、列立艮辻、（辨、史、東面、少納言、外記、西面、並南上、五位外記、史同列、）予出門後、辨、少納言以下北行、（辨、史西、少納言、外記東、）官掌二人、在史外記之前、（東西各一人）召使在官掌前、（東西相分）追前拂雜人、外記、史列立侍從所門外北三許丈、（西上南面）少納言、辨列立西屏下、（當侍從所門、南上東面、依位次、）（件屏籬側、其引主殿寮幔、）代納言、參議不揖而直入、入侍從所門、列立門内南方、（東上北面、外記政列立處、）予到門西、（門外）向乾一揖、少納言、辨、外記、史答揖、（揖六位磬折、作立揖、不同外記政出立儀、是故實也、）予即入門、（揖了即入）到小屋南一揖、納言、參議（小屋柱南去五許尺）各答揖、余即入北、著座之儀、一同外記政、但无替沓之事、納言、參議答揖了、即北行著座、一同外記政、但无平審及替沓之事、左大辨暫不著、依足恙、○（恙一作悬）欲歎度不起居歛、頭之、少納言成隨、著南廟座、召大舍人、外記政、大臣著南所、○（侍從所）者、少納言不待公卿著了早著、召大舍人、官政日又可同然者、予入門後、少納言一人不立直而入門早著、可召大舍人歛、而能忠、俊長共立直不早著、不可然、辨、少納言著座了、左大辨卿著北廟西戸（大臣、納言、出入戸、）北腋床子、（西面、歸日、可北面、未知是非、西面、共无所見之故也、件床子、始立參議出入戸四間北柳、予仰令改立、但不仰向方、无所見之故也、又四戸頭、及件立表、共大辨見文之間、太以无禮、因之忽引幔爲戸、待欲事了撤此幔、）右大史小槻永業、取副申文於笏進來、搢笏置大辨前床子上、（如西宮記物奉誠政者、但不立前床子、今日立之如何、但列見定考、於朽所、大辨見申文之時、立前床子云々、此所之儀、不可異于彼、左大辨所行、於理可然、）拔笏還、立壁北廟西一間壁、（始自此所進來）大辨見了、史進取之退歸、始所、左大辨、入參議戸著座、先之居公卿盤、左大辨著時、追又居其前、（雖左大辨未著、居公卿盤之時、同可居其前歟、）次史永業、申文之儀如常、史退立者、食禮又如常、（无酒盃）丁退出之儀又如常、（自侍從所門外、及陽明門出立、左大辨留侍從所門外、依足恙也、）自此可參内、而有所憚、稱疾不參内、後日、右大辨曰、廳申文丁、著北廳内床子、權辨（師能）同著、辨侍申直了退出、（依左大辨參入、右大辨不可著而依弁參議也、因之退也、）正禮、廳申文以前、（申文、辨少納言、）

〈起座床之後〉大辨及不立中文之辨着廳內床子、令申直、〈見國十卷〉宮面今日、无不立中文之中少辨、因之申文了、令申直云々、後日勘西宮外記政裏書、公觀朝臣〈公觀卿季觀也〉云、大辨遲參時、於南所見中文、儀以右結政之床子二脚立北面西一間壁外〈北面右南床子〉大辨著之、史置文於杖、退來自西方、指寄辨許、辨取之置前床子、史歸入西方、辨見了、史來取文歸去、更不結云々、

或者云、不插杖、只取手申之云々、

今案、官政日儀可同之歟、然則今日、大辨床子立所幷向方誤歟、是予告之師能申、可北面之由、已合此書說、

後日、少納言成隆語曰、使部二人前行、次御印、〈使部一人持之〉次成隆、次外記康光、次史生爲貞、相率出官北門右大臣之後、〈御金許文〉十大臣入侍從所門之後、權右中辨師能同申文、史答了、辨、少納言列立侍從所門北腋經道、〈南上西面〉外記、史列立其北、〈南上西面〉成隆向師能〈東面〉揖之、〈師能答揖〉少納言揖、次向艮揖外記史、〈各答揖〉了卽入侍從所門著廳、相續師能、及少納言入門著廳、

予問曰、相副御印、可入局門之由存之、汝揖外記史、卽入侍從所何哉、隆曰、西宮十六卷〈四月卷〉云、副於御印、少納言來會、先揖五位、揖六位、御預御印、入局門云々、此成文之勢、假揖六位、了直入侍從局門云々、因之所爲也、仰曰、以此文何必定不入外記乎、列見考定、迎送御印之少納言、參外記之由見舊記、至于政日何不入外記乎、汝所行失也、先當辨少納言第一人揖之、北行、當外記史第一人揖之、可入外記局也、

又列立辨少納言答揖了、卽可入侍從所也、

天慶二年十月一日九記云、少納言外記、副御印還局云、〈此日、先官政、公卿不參、〉九記文、〈侍從所〉明白也、可入局、不可致疑者也、

〔台記〕久安三年七月一日癸亥、巳剋參官、〈政、辰三點、今及巳剋、懈怠之甚也、〉依政也、華山相公之外、上達部不參、申文請印

了、著南所、依大辨不參居公卿盤後、左中辨資信朝臣云、無申文、予以下立著、今日差氷、不堪苦熱、未下著之前食之、又賜氷水、〈加入水〉余飲二盃、仍少納言更參役之、參內入敷政門、著左仗外座、欲令置軾、無陣官、仰稱太后御所〈依御悩、不參殿上、〉招藏人、密見去日殿上日記、自和德門退出、今日政儀、大略同、四月一日、仍不具記、勘御曆、〈故京極殿御記名也〉補藏人所別當後、以吉日行公事之由、不見目六、今後不擇日、勘御堂御記、〈文殿〉又擇吉日之由不見、〈御堂、長德元年七月廿八日、補別當、京極殿、治曆四年六月十四日、補別當、各見彼御記、〉

辨官政例

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年九月八日丁巳、遣正五位下守左中辨源朝臣直、右大史正六位上廣階宿禰八釣於伊勢太神宮奉神寶、是日太政官停尋常政、但非廢務之例也、

〔扶桑略記 二十三 裏書 醍醐〕延喜四年四月二日丙申、上卿遲參、辨官無政、四孟〇正月、四月、七月、十月、之日、正月元日之外、未有此例、時人悼之、

結政名稱

〔類聚名義抄 九 丸〕結政 カタナシ

〔江次第記聞〕結政所 カタナシ　カタナシトコロ

師〈光識〉〇揖部云、此ヲ曹子廳トモ、外記廳トモ云、三名一所ナリ、外記ガアヅカリ居ル所故名ナリ、拾芥云、陽明門大路南、達智門大路東云云、曰外記結政、又曰外記廳是也、

〔大內裏圖考證 二十一 外記廳〕糊家所傳官史紀曰、被移結政於官司之事、久安以後、每度被移官司、久安以前、或被移結政於人家事、有云云、

〔倭訓栞 前編 六 加〕かたなし　江次第に、結政所をよめり、かたね成の義なるべし、延喜式に、於辨官結政所捺印と見ゆ、除目などの數通の文を、一ッに束ねて結固むるを、かたぬるといふ也、

〔錦所談 二〕結政〈カタナシ〉

カタナシトハ、大辨以下參集シテ庶事ヲ受付、又八省以下ノ申文等ノ政ニ預ルベキコトヲ、以前ニ先カタチナスト云義ナリ、結政所ハ外記ノ正廳ノ南ニアリテ、西宮記ニ所謂南舍コレナリ、又

官ノ結政所ハ、延喜太政官式ニ、參議於辨官結政所捺印トアリ、コレ元來政ハ官廳ニテ行ベキヲ、其程遠ク不便宜ナルヲ以テ、外記廳ニウツリシナルベシ、外記廳ハ、三代實錄、貞觀十三年六月十七日壬辰、是日太政官候廳前晝見鬼跡、所謂候廳者、公卿聽政外記所直侍之處也トアリテ、既ニ續後紀ニ外記曹司廳トアルコレナラム、尤外記廳ハ建春門外ニアリテ陣ニ近ク便宜ナルヲ以テ、官廳ノ政自ラ外記廳ニウツリシナルベシ、又諸書ニ申文ヲ結トアルハ、披開シテ讀上ルナリ、コレ結綰ナドアルヲ以テ知ベシ、寶治元年七月廿三日葉黃記云、後日殿下於院御雜談之次被仰云、親賴作法不得其心事多々、中略又結文之音、太微音也、コレ親賴ハ辨官ニテ、其結綰ノ微音ナルヲ殿下ノ賞メ玉フナリ、

結政刻限

〔年中行事秘抄〕結政刻限

二月八月巳一點、自三月至七月辰三點、自九月至正月巳二點、

〔洞院家部類十一〕結政初參〇中略

刻限（自二月至七月辰三點、自九月至正月巳二點、二八月巳一點、）

結政儀

〔西宮記臨時六〕結政事（在外記廳官事中）

中務省度日（代儀、不見）政了、上卿欲入侍所〇侍從所之間、中務輔已下、內舍人等列立（當日結政間）春華門巽方道、西（東面北上）上向東之次、見遣省官等（參議以上入了）上省官敬折、上卿已下着座之後、省官入著小板敷（內上北面、敷設）錄把筆、納省官內舍人上日、退出行申文、

〔江家次第十八〕官結政

史立於西廊內、

大弁以下參入（若與上卿同道者、於長樂門下揖相別、若自陽明門參者、於東門前可揖、）中少弁立於西登廊中戶以西柱內（東上南面）

件道登自南所經柱北、與柱平頭立、弁少納言多參者、下臈或立欠間、

大弁參入、登自戸前階、立於東間、（南上西面）

　大弁參時、中少弁先例立直於南方、近代不然、違例、

史等出自門、經中少弁前西行、出自角間、經北砌西行、更南折、入自角間次南間、經座末著座、（南上西面）

大弁下自階、（欲進之時、中少弁等立直於南欄子下、北面、）上西行南折行草上、官掌下居自床子、弁侍居於井巽角、追前登自西廊西面階、（史先平伏）南行登西廳北塘上揖、跪脫沓著座揖、（史答揖）

右大弁亦如此、（但經左大弁後、著座）

次中弁以下參入、於階間南柱北頭揖、跪脫沓東度著座、（南上西面）史答揖、少納言著西、（南上東面）座定間外記著座、（與史對座）外記使部覽文於外記、

次史生覽文於少納言、

次有申文事、座頭史下申文、史起座著深沓、（起座東入著之）著庭中床子、結申文、其儀如常、

　插笏於緘、開文後結畢、四人渡南畢、

次外記度、次弁少納言相讓、少納言先起、

　是弁爲上臈之時也、四位弁可先起、

經庭中於西廳坤角著靴列立、弁西面南上、（少納言如上）史南面東上、（外記如上）

次入自大幔、（弁侍上之）少納言爲先、相去丈許、三段揖如恆、于時參議大弁著廳、非參議大弁著造曹司、未著座、參議大弁同著造曹司、

若無申文時、又無結政畢起座、

不奉仕申文之弁、西登廳內床子見物、

　弁侍申直

申文退時、或立版位揖、（左廻）左廻退、或立初立所、（三段揖如常）後說正官等用之云云、

但四位弁召使先昇退下、史先立、

雨儀。

大弁以下自廊著座、史於本座結巾文、南渡史經砌、（大[illegible]）到廳艮著深沓、弁又如此、入自西廊東廂南間、（柱内）立於北第二間柱内、史立其後、乍被揖、石疊有二段揖、舊如法退時無二段揖、

可尋事

大弁欲著結政時、弁少納言渡立南格子下、時欲進時立定時、共可有揖哉如何、

又大弁著座後、中弁以下自戸可昇歟、猶可經柱角歟、

〔公事根源正月〕外記政始

是は吉日をえらびておこなふ。○中略 事相當につく、これよりさきに、弁、少納言、外記、史、かたなしにて事をおこなふ、上卿めしあれば、大弁も廳につく、かたなしの事はて、、南の所にて勸盃あり、

〔猪隈家部類十一〕結政初參（[illegible]○中略）

剋限以前著束帶、（丸鞆帶）

蒙延尉佐者、野劍平緒、具門部隨身、非參議大弁馬瑙帶、參議大弁無文玉帶、

到陽明門階下扣車、

問上官參否、（弁少納言外記史中參否）扣車、

大弁問中少弁參否、但參議大弁下車著左衛門陣、

税駕入自南腋門、（南面東腋日北腋門）經中路西行、

備前少路以東行時、上達部參者、留立小路北揖、小路以西者不立留、故實也、直入外記門、（外記廳）○

舊例於外記門下相揖、或留立北垣下、近代無此儀、非參議大弁立留于口、參議已上參入、

於外記門築垣角下揖正笏、（去二築垣七許尺入）

弁侍進前（大中少弁各有雙高下、左衛門陣屋西敷圓座着之、）

兩儀弁侍不出居、有晴儀時出居也、雨下者自築垣角、弁侍擁笠入外記門、

入自扇門南扉（以右足爲先、）立假裝間（南上西面）

大弁立壁下、（北面）中少弁者依位次立屏第二柱以南、

遲參大弁經弁前立加之、中少弁經弁後立之、

此間上官列立于小屋前、

兩儀列立于打板前砌下、

弁立定揖、　上官答揖、　官掌著座

外記著座、　史等合眼於弁目、　史著座

此間大弁參者、立定揖、上官答揖、中弁已下不揖、

使部取入史文夾、

上官座定後、弁著出于壁西、望晴兩儀、

晴日者、於外砌内立床子、（晴政日如此、）

兩儀入庭中立床子、（尋常兩儀政、及無政日、弁初參、參着結政儀如此、）

退立剛表衫、更出柱外傍砌南行、

兩儀自北第一間入庭、自床子西柱東方西行、若夫自柱外行時、入念所歸出可著座、

大中弁參會者、自大弁著之、

大弁在座中、少弁參入者、自少弁著之、

大弁不參者、又自少弁著之、（或自上臈着之）

大弁一人在座、他大弁、及中弁參會者、自大弁著之、

入第三間自坤角柱內（入主柱）經史生座上并後官掌座前東行，自史座末到右弁最末座下，西面而深揖，

不立直御著座揖（以右為上，左右皆同，以左為上時，右弁著座，左弁不直著）

史答揖

左弁入第一間東面由指著之（不同時者，若右弁著座，則以左座揖，又揖之）

大弁著

弁侍進前（令中少弁會揖，也仍大弁著座揖下揖）

入壁下之間官掌進前一揖（以大弁最前，大弁前也）

參議大弁者召使令進前一揖，左大弁者直進著之揖，史答揖，中弁已下不揖，右大弁者經史坐後，史

平伏，大弁於後座末著（引左是也）史興經右弁後著座，以為直著（直且屬直之）

多時隨參著官掌居砂燈，

夏時置圓座，日每度敷設之，

大弁著後，史生參云，人念所歸出著座，

大弁示無事於史，

最末弁傳仰之（大弁直不仰也，仍最末弁傳之）

史解文束緒

座頭史讀荒文於竹笏，

若中少弁未參者，申荒文正等申云，自中弁下ナヨハ遲ク參來マウツ，結文無之，其後申文於大弁也，申畢參由之後，中少弁參者，覽荒文於參弁，若大弁不參，中弁以下著時，持荒文申云，結文無之，

弁不左右，次覽荒文如例，

凡中少弁者隨參見荒文，

下﨟史召文刺

　官掌召之

使部持參文刺

史插文懸案

左一史結緘申文 式日先結緘申文

　乍在座結之、無與奪不稱唯、

　口傳、史不足者、雖式日不結緘申文、

申文史取文杖著大弁前、膝突覽文、大弁取文置前、左右大弁共以右手取之 史平伏、

大弁見文返給

　史結申之

此間座頭史覽竟文於中少弁

　插文於笇、差寄下﨟弁前、自下次第見之、

　嘉保二年、自中弁覽之、且有先例歟、

　弁置笏取文、當胸暫持之、笏置左方、但舊人置右方、

　平家以左手仰取笇鳥口、以右手仰取文、是舊記云、執卷不伏手故也、仍皆仰手取之也、

　或家、左右手伏取笇拔文、

　或家、仰取笇、伏取文、

　或家、伏取笇、仰取文、

　左弁、或家以右手取笇、以左拔取文、

史置笇取笏

弁披覽文了、（先見端、後見奥、）卽押合置之持之、

覽文之間、大弁參者橫置前取筥、大弁著座之後又見之、

中弁以下參者不取筥、押合文持之、著座之後見之、

少納言、外記參者押合文、過了後見之、

弁見遣史方、

史差寄書竿、

弁左手取竿鳥口、以右手如初插文、

文小者頗拉前後、爲不令落脫也、

弁取筥、史給竿、

史取文結申、

弁稱諾、史稱唯、

當文覽古書、（初參人覽之、加署、諸官、儲官符等時同之、尋常不然、）

史若史生二人出來立櫚下、史生取筥文、持來置弁座前左方、（官符正文等內案也、奪在二宣內、左弁置二右方、）

初參人有數之時、自上次第覽之、

史生歸立于本所、

弁置筥引寄筥見之、（乍置中見之）

加署

正官符加作名、（其枚處）

內案書長名、（其枚端）

大弁無內案、仍加作名、

事了、推遣筥於本方、弁取笏見遣史生方、（或先以右取筥、次以左推遣、左弁以左取笏、以右推筥、）史生來取筥退歸、

弁侍申時移由、

舊例、或陰陽寮守辰丁申之、（口傳云、不讀丁字、又作三字讀之、）而儀弁侍不時申、

尋。政。（記○政外。）有無。

大弁被尋之者、次第申上之、（史申、最末弁申大弁、）

但初參人不稱此事、忌無字也、

當座上臈尋之、或座中相議尋之、

座頭史合年、（謂之疊字、）史等結文束結、弁侍出外記門追前、（著座出居追之）

官掌起座出外記角、呵叱雜人、（或弁出後、起座出之、）

大弁出、（先左、次右、揖、史皆揖、中弁以下不揖、）著沓立還、（左弁左廻揖、右廻退、右弁右廻揖、左廻退、）經本路過壁下之間、官掌追前、

右大弁過史座上之時、摩沓、

中少弁自上退出、（上臈弁到壁下間、次弁起座、）先正笏揖、（史皆揖、）乍蹲向座著沓、（先以右足可踏地、左弁以左足踏地者、故實也、）向座一揖、左廻經本路退出、（左弁右弁共左廻、）正笏出自外記門中間、退出人於假裝間召官掌、觸自其處有召之由、官掌告史、史不申上、次弁起座退出、

弁參著之間、有內及大臣召者、官掌立座示其由、弁即觸事由於座中退出、

有急事之時、亦立入急處、（起座倂座共無揖、是稱故實也、）

大弁立局門南棟楷北頭、

左西、右東、並北面、門南去二許丈、

中少弁列立于局門外、（西面北上、去一許丈、）立定揖、

上臈當門北腋、次人立其南、

中弁者當門北柱立、小弁者當垣形邊、
右大弁與右少弁大路相連續、或云、自外記門專不可連續、
上官尋門北垣列立、〈南上西面、去門五六尺、〉
任右西上南面、近來或東上南面、
大弁揖
中弁以下答揖、次第退出、
過外記角之間取笏、
大弁已下列陽明門、依上卿不參無出立、
雖然上卿有參議大弁之時、尚有出立、或參議大弁出立、無爲行儀、
入內儀〈如子親內、有於陽明門、無參內、〉
上卿弁揖乍笏、搢入陣內取笏、步入左衞門陣、〈入北邊、先右足、〉
總記云、出入君門由闑右、故人此門之時、寄北柱立也、
大々人離列、〈上臈人離之、〉如上卿經陣步列、到溫明殿巽角壇搢笏、經敷政門前橋、〈或弁書陣之外不經此橋、此外經南壇上也、〉各
立床子前、〈大中弁南、少弁西上南面、〉揖著之、
南儀官掌搦大弁笠、弁侍搦中少弁笠、到溫明殿巽壇上撤之、經南壇上著床子、
弁侍申云、正倉所司召々、上卿弁問云、申歟、
一人著時直仰之、又率分弁雖有他弁直仰之、匡房卿云、雖大弁問之云々、但此儀不然歟、
弁侍申云、然侍々、弁仰云御鎰給々、
大弁已下退出、〈入弁起座、中弁已下同起、〉
若人敷政門左青瑣門等參殿上儀、

結詞

大弁留、中弁以下參者、經柱外、

無大弁者經柱內

殿上弁置笏、於床子後長押上

非參議大弁、召官掌給笏、

大弁者入敷政門北邊

中少弁入同門南邊

已上越閾之時、先右足、

。。。

退出儀

經宣陽門、建春門、到陽明門、大弁揖、次弁駕車、（開之車下揖）次第如此、下臈弁揖、史駕車、

近代或無此揖云々、尤以非也、

初參弁歸家、使部等前行、呵叱雜人、到家饗應官掌、弁侍、使部等、

其儀侍廊撤大盤、二行敷紫帖、爲官掌座、其下横敷同帖、爲弁侍座、各居机饌、

上官五位著衣冠、持來使部見參、以同五位召上官掌弁侍、以同五位等爲勸盃人、又取祿給之、（官掌四人、白絹各一疋、弁侍二人、黄絹各一疋、）

下家司分給使部八十人祿、（白布各一反、饗料給短册、）

大弁者無此饗祿

〔朝野群載六太政官〕條事結詞

某姓某丸申、其事云々申セル實、

又某々事云々

實錄帳結詞

結政請印

某國乃申セル移替政勘使等乃申セル實錄帳、申上久止申セル旨、

勘出結詞

某國乃申セル任傍跡天、皆悉勘出天、年々乃間乃錯文、勘ヘ成ト申セル旨、

減省結詞

某國申任先跡天、任中四年乃間乃公廨雜々乃稻、每年爾被落省ムト申セル旨、

班符結詞

某國乃申セル仰文不下間、皆悉勘出天、年々乃田力文勘止申セル旨、

不與狀結詞

某國乃申セル前司守橘乃大夫四位止二大夫五位止二朝臣、解由不給狀文、申上久止申セル旨、

解由結詞

某國申セル、前司守橘大夫ニ、解由給ヘ止申セル旨、

不堪田結詞

某國申セル、當年不堪作田坪付乃文、申上止申セル旨、

大粮米

司々乃來年乃大粮ノ米充申セル旨、

〔葉黃記〕寶治元年七月廿三日甲戌、攝政〈兼經、藤原〉初度吉書奏之、權弁親頼候之、先有政、大宮中納言、左大弁以下參仕、後日殿下於院御雜談之次、被仰云、親頼作法不得其心事多々、欲屈行之時立留、于更屈行不可然歟、間應ヲ總事、太大輪也、如大臣不可然、爲賜文參進之時、膝行シテ不屈如何、是ハ於大臣者屈之、又結文之昔、太微昔也、

〔延喜式太政官十一〕凡式兵二省請印准蔭、成選等位記、先令印廿張已下、後更定日、參議於辨官結政所捺

了、所須丹膠等物、預先請受、

〔西宮記 臨時 六〕結政請印事

上卿著左仗、見官符、度緣不持入陣、參議令持官符外記向結政、出自敷政門、參議著北壁下、南面中間也、少納言著、西面在中、辨座許、外記著史座、史生居史座前印文、若印度緣枚數多者、史生相替之、舊例十二月比、請印大位記、

〔北山抄 七 都省雜事〕結政所請印事

上卿於陣座見官符、即示參議、其人可著之由、可示仰外記歟、參議起座、出自敷政門、率少納言外記、著結政所、令請印、更不加著座、

參議座南面、北一間中央、少納言西面著右少弁座程、外記著史座中間、史生弁座與史座之間、於土間中央捺之、如度緣多枚數之文、史生等相替捺之、

〔江家次第 十八〕結政請印除夜依受領罷公文、誠會、不堪事官符、皆有其例、

有急事不能行外記政間所行也

宇佐使祿官符

度緣件文不持入於陣中、面請印、但覽書解文、

流人官符

齋王歸京屋可作儲由、仰伊賀、大和、山城等事、間有其例、

結政所左右大弁座中間程、敷參議座半帖、有小筵、南面、

右中弁座程敷少納言座半帖、西面有小筵、史座中間入敷半帖一枚、外記可著右大史座程、北面、史座前地敷小筵一枚、爲印盤下敷、

上卿於陣見文畢、外記覽之入筥、參議在座、示於結政可請印於參議、參議起座出、自敷政門由云々、其人可著之由、上卿又可仰外記歟、少納言、外記、外記史生等相從、史生持文書、史一人向外記門邊行雜事、先少納言率外記、幷史

生等向外記文殿、令出印、（少納言留膝突座、）次參議著座、（自西、）次少納言著座、次外記著座、次史生捧印盤來居、於小盤上、（頗西、）捺印、（不中印可削、由削之由等、）若度數枚數多者、史生相替奉仕之、事畢、參議少納言令納印、次參議退出、次少納言以下出、

若及暗者、主殿寮舉燭火於史座乾角、（二間許了、）實角也、及請印期、寮進於左少弁座南柱南邊照之、

九記曰、於結政所請印時、參議更非沙汰文書云云、

承平八年五月廿九日九記曰、仁王會日、外記申曰、可請印急速官符、被付結政所宜乎、答曰、右大弁參入、示讓相公可令署、貞觀年中、仁王會日有請印事、以結政所爲備房、仍於食所行請印事、令准行彼例云云、　同五年十二月廿日、依左大臣仰、參議當幹朝臣就結政所、令捺印官符三通云云、但今日少納言各有障不參入、仍以左大臣宣、以左少弁源相職朝臣爲少納言代云云、

西宮四巻抄曰、舊例十二月比、請印大位記少納言座、

四巻抄、左中弁座云云、左當作右、四條記右少弁座云云、少當作中歟、但近代南寄、依彼記歟、

寛治二年十二月廿日、有結政請印、是濟任中公事之國々（和泉、家經、安房、宣基、）等、從不堪減省等請印也、敦家朝臣加賀任、任中公文濟之時、十二月廿日行結政請印之例也、

〔本朝世紀〕康保四年六月三日庚申、左右大臣以下諸卿參仗座、伊世美乃國關使覆奏、并解文到來、右大臣奏之、封符於結政請印、素服麻衣、黄服宴飲等官符、同加請印了、

長保四年九月五日丁酉、中納言藤時光卿、參議同忠輔卿著廳聽政、中納言藤公任卿、參議同有國卿、源俊賢卿等參左仗陣座、此日請印伊勢豐受太神神寶送官符、依有故東三條院服、不著右仗座、參結政座、右大辨事畢退出、

〔永左記〕承曆五年十一月三日乙酉、行内印事、次召外記、見外印官府返給外記了、次於結政可行請印之由、示左大辨退出了、于時申終也、

結政例

〔中右記〕寛治八年三月五日丙子、今夜大納言殿左大辨、被參仗座、〇中略 安藝國流人藤仲實、幷緣座者左下司男、並某丸可召返由成官府、左大辨少納言成宗、向結政官府請印者、

永久二年十一月卅日、從內有召、則參仗座、頭辨來云、白河新御願御封官符有政、須請印也、而從明日依神今食、不可成佛事之文、仍今夜可有結政請印也、仍可勤上卿役者、予著端座、令敷膝突、外記入官符於筥持來、見之處二枚也、一枚ハ給本寺之牒、一枚ハ給民部省官符也、見了返給外記、令大辨幷少納言宗兼遣結政令請印、使印符不內覽奏聞、只上卿見之返給外記也、

大治四年六月廿五日壬申、戌時許別當右衞門督實行卿參仗座、可召返流人由、被仰下右少辨宗成、了則作官府覽上卿、有結政請印、右兵衞督伊通、少納言俊隆、外記範兼、史重兼等行向結政云々、使々官使部等給食馬宣旨、今夜夜中令發向也、聊依有所念被召返流人等、

源明國天永二年三月十九日、流土左國、依切三人首也、經十九年、

仁寛永久元年十月廿二日、配流伊豆國、依謀反也、經十七年、

大學助源高行永久四年三月十三日、配流安藝國、依□□飲射花□宰相中將任通婦也、經十四年、

〔左經記〕長元七年七月十七日甲辰、參結政、史三人遲參、左少史政義依問左大辨參否、解文束者、次左大史孝親依問上卿參否、同解之、左少史公賴不仰雜事之前、欲解文束緒、孝親不令解、良久之後問政有無於公賴、令申不承之由、解緒、件公賴遲參之上、未仰雜事、欲解緒、須處申〇申一本作日恐也、然而余今日早參之中、公賴是不足言者也、仍不令恐也、剋限入內、頃之退出、　八月廿七日甲申、早旦參殿、頃之侍從中納言、左大辨、被參入、巳剋參內、納言被著左衞門陣、左大辨、余、權辨、右少辨、次第著結政、少納言共有障不參、仍無政云々、上卿起座入內、大辨幷候令申之、史政親所申之文五通位之中、一通許之、四通法師文、明日伊勢使可立、仍停之、　次入內、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年六月廿九日、早旦參結政所、是依爲要日也、右大辨相具入外記門、史五人列

立、各著座、史覽文、(伊豫國解文)尋政之行無、引出之間、於左近府前、權右中辨、左少辨參來、相共參內、於床子座、辨侍中云、正倉了、諸司召予與奪、　七月十七日、早旦參結政所、入外記門之間、史七人列立、(除大夫史)立、假裝間、官掌未參之由、史所申上也、數剋相待以不參、然間權右中辨重資參加、官掌參來、如例著座了、覽々文、(出納解文、先例未覽)文、予、左大辨被參、史申文、同權辨予等覽文、(申減省也)事了引參內、　廿三日、要日也、且可有政者、仍早旦參結政、入外記門間、史六人列立、次第著本座、頃而左少辨、右少辨、右大辨著座、史覽文、(史覽、文上總國解文也)於右大辨被尋政之有無處、申上云、上卿左兵衞督俄有故障不被參、仍政延引者、仍引渡參陣、各々分散、　九月十七日、早旦參大殿、次參結政、入外記門間、上官等列立引著座、左右大辨被參加、仍史二人左右相分(天)申文、此間又覽文於予、(上總國文)見了後、左少辨有信、少納言成宗、家俊參來、大夫史祐俊宿禰參來、先從暗路行南方更著座、(大辨依參也)　廿一日、從內退出之次、先依爲要日參結政、左右少辨參來、各著座、史覽三辨於覽文、(伊豫國)　廿三日、早旦參結政、大夫史以下史七人參著、史延行付竹竿覽文於予、(伊賀國文)抑今日座頭史已大夫史也、而相讓次史覽文條可尋知也、大夫外記定俊貫人從廳方還本座、異例、路若暫歟、又可尋、頃而右大辨參來、下﨟史覽文、事了後參內、　廿八日、依爲要日、早旦參結政、引史六人著座、史覽文於予、(相模國文)頃而右大辨、左右少辨來著、少納言成宗、惟信同參、可有政之由、外記所申送也、(是近江國司申請事、官符請印也)上卿左兵衞督、參議皇大后宮權大夫遲參、兩脚頻下、時剋推遷、右大辨有所勞、被退出了、予依早參心神屈了、觸此旨於官省則退出了、○中略　申四點、上卿以下政了、被渡參內、後聞依無大辨、不被著南所也、　十月十七日、早旦參結政、史皆參、各著本座了、大夫史覽文於予、(上野國)頃而右大辨、左右少辨參加、史時直覽文於右大辨、時移之後、渡參陣、直申如例與奪之、○中略今日要日、結政是古實者、

〔永昌記〕天永二年七月十七日戊寅、參結政、史致遠以下六人參著、致遠差文取結文氣色、答曰、今日晴儀也、然者不可解者、覽絢文、(美作)次問政有無、不可申上障歟、今日申之、强不可停止、先是申三箇國減省、

次弁侍追前、官掌申時、次下官退出、依可出立、當外記門南掖東面立、次史等出外記門北掖、以北副築垣、南上東面、立定、外記昌綱等座上、予一揖過上官前、引裾退出、可揖史等歟、右大弁可參著之由云々、數剋無音、仍及未終結政、次引參大内、

大治元年二月廿一日丁巳今日政、仍著結政所、右少弁宗成一人在座、大夫史雅重、指荒文、申無結文之由、史孝重申文、（式部省申以定安倍晴明得業、同申下得業生定賢課試、伊賀爲重解由、大隅有基解由等事、不結政、立文杖、今○結政一貫、覽正遂結之、）右少弁不見文、官掌行久結申、又欲差文有二失、政重結南文八枚、（式部省二通、解由二枚、伊賀社、上野社、近江社、廣隆寺定額、上卿解、前別當解文止之、）次著廳（依儀、故實）也、請印、次南所居饌、孝重申文、參院、

〔吉續記〕文永八年正月廿六日庚寅、今日外記政始也、午一點、著束帶、（丸鞆帶、具淺沓、）相參衙、（○中略）了退出、于時及秉燭、予歸蓬屋、今日自朝陰雲掩天、而天晴事了、無一失、無爲之條可悅々々、初參結政、與政通用、近例。也、其上故大納言殿、故中納言殿御例也、可謂佳例也、

〔續後拾遺和歌集雜十六〕外記廳結政座に、古宮の柱の今に殘れるを、まつりごとのついでに見てよめる、

中原師光朝臣

いにしへのならの都の宮ばしらこのかたなしに猶のこるかな

古事類苑

政治部二

上編

政治總載中

外記政

〔江次第鈔〕外記政

按ニ、此ハ外記ノ廳ニオイテ、申文ヲ覽スルノ儀ナリ。

廳座倚子

〔西宮記 臨時 四〕官外記廳座

東壁下西面立大臣倚子、(有横、敷茵、臣南面、置前机、有太政大臣座、不著座立之、)逐北柱西行南面立納言以下倚子、以上有前机、參議座立敷床子、隨著座設座、轉任間未著之時、倚立舊座、可立見任下、近代不改立、九條右大臣(○藤原師輔)爲大納言、初著廳座時、令下右大臣(○藤原實賴)見、爲大納言時座云々、

〔西宮記 臨時 八〕官外記廳座事、(及官東廳床子座事、各倚見他記也、)

大臣著廳、座皆立倚子、(内大臣不立座)倚子下敷塵蒋、有太政大臣者、左右大臣座立南面、納言已下隨著座立之、著廳之人昇進之時、重著廳之日撤舊座、不著座之間不改本座、著座人昇進後、不著座之間、舊座猶立本所、後任人早著者、廳下隔其座各立舊座上、小野大臣(○藤原實賴)任右大臣、爲大納言之時猶在本所、九條大臣(○藤原師輔)任大納言著座日、其座立小野大臣之舊座上云々、(近代新著次第立之)

申政日時

〔洞院家部類 十一〕結政初參(○中略)

式日(朔日、四日、十六日、或日參著具溝實、)

休日(六日、十二日、十八日、廿四日、晦日、)

著陣儀

〔年中行事秘抄 正月〕消懷公奏事
廢務休日之外、何無外記之政、大少有限之務、延期累月、内外請印之文、滿閣如山、

〔北山抄 七 都省雜事〕外記政、申政時刻、自三月至七月辰三點、自九月至正月巳二點、二八月巳一點、

〔江家次第 十八〕外記政
自三月至七月辰三點、自九月至正月巳二點、二八月巳一點、

〔拾芥抄 中末 申政刻限〕申政刻限
二月八月巳一點、自三至七辰三點、自九至正巳二點、巳上外記

〔西宮記 臨時 六〕外記政在廳例
諸卿著左衛門陣、大臣昇自石階、納言昇自脱沓、著南面座、參議昇自東南庇脱沓、著北面座、人多者、納言著北面座、兩儀、□□下脱深沓、或於官人座東脱之、諸卿著陣之間、著座大臣不入外記入内者、諸卿立陣座、共引入内、非著座大臣入内者、不動座、政不忽遽之間、執政大臣入内可用意、寄言不具可入内、□□著座上臈人不著、入内引可入云々、上卿著□□□□□□□官人立召召使、又无參議可令著□□著政□□參議大辨著靴、上卿召外記者、五位昇自南庇、候巽角柱下、六位立東庭幔下、兩儀立東砌下、顧寄南、召使申時、立樓北中、不論上下臈顧著中、次著廳、召使外記北廊、上卿已下入外記、召使申時之後、大臣參者、納言已下起座、鬼列外記東、東上北面、大臣於門前揖、納言入局北、著廳後床子、著靴入廳、上卿入自北庇中間入小屋、著床子、巳下列立西庇南砌下、東上西面、深入立、上卿入門内之間、官掌居結政座、唱鳴高、仍下外記南舍中廊、從者執深沓入小屋中、取淺沓出、召使同入、後近代□□從者出、□上卿出小屋、小倚東面、南面揖下臈、揖下臈、次第著座、大臣東戸、納言中戸、參議西戸、先立戸外、見定座程、從座右進著倚座、塞者取去著之、申公卿□□□□□軒廊南二間東邊砌下西日、立砌□□□目之、外記稱唯、渡庭自西四間直入至上卿座前、屈行進之、至大臣前可跪、上卿置笏取文時、此間外記退立庇西三間、上卿開文、見了卷置杌上、文端出杌端二寸許、取笏、外記跪置杖、屈行進倚跪文、還突片膝取杖、右廻自三間退出、

〔北山抄 七 都省雜事〕外記政 略○中
上卿參入、弁少納言若參會者、於外記門下相揖、往古无此事云々、近例或止、西北垣下云々、先著左衛門陣、著北、但納言多參時、或相分著南、參議无著北例、大臣參者從柱西著、著南、之人、先入門前砌内南行、召使申時、弁侍時移、提圓座入外記、召外記者、先可召召使之由仰吉上、吉上傳仰官人、令召、以召使召外記、舊說若所仰事繁多者、召上南庇仰之云々、大夫外記可如此歟、召使鬼外記門北扉、上卿以下列入外記、南面時、不登階、若上臈不申障者、鬼戸之後、一刻相待、若无參議、以召使令礼在結政所大弁上、

（作可然書辭、召使申云、事後、上卿著廳、近例、上卿著廳後、召使申人令仰、不待返事、）上卿經廳西庇中間、直入小屋、其外西庇南砌北面東上列立、召使一人放列入小屋內、上卿從者取深沓同入、上卿著深履、出小屋、順東進、揖而入廳後、從者取淺沓還出、召使出居次第如之、（在上之者入小屋內、後次々東進、）納言入中戶、（大臣用東戶、參議用西戶、）著座、（從座下方著之）

〔江家次第十八〕外記政（明細之儀、內略儀）

上卿參入自陽明門、

弁少納言若參會者、於外記門下相揖、近例或候北垣下、公卿先在左衞門陣者、於外記角南一許丈下馬、

先著左衞門陣、（納言以上著北、參議著南、）

大臣登自石階、

召使申時、

弁待時移從閤廳入外記、

若可召外記者、先可召召使由仰官上、官上傳仰官人令召之、以召使召外記、外記立南庭東階下奉仰也、大夫外記者召上南庭、

召使曳外記門北扉、（北扉下、外記北扉、）

若上臈不申障者、曳戶之後一剋相待、但始著政日不可然歟、若無參議以召使令觸在結政大弁、示可被著廳、

近例上卿著廳後、召使申大弁、仍不待返事、

上卿入自外記門、經廳西庇中間、直入小屋、（召使追前、官掌在結政云、鳴高、）其外人西庇南砌列立、（北面東上、）召使一人放列入小屋內、上卿著深履、（上卿從者一人、同入小屋、）出小屋、順東進、揖而入廳後、次次諸卿次第如此、（在上之者入小屋、後次次東進、）上卿入廳後中戶、（大臣用東戶、參議用西戶、）著座、（從座下方著之、）自餘次第著畢、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀

到待賢門下車略儀、或有入郁芳門之人、但於上卿者、頗不可然歟、

入南扉立、亘北路西行、其路進退、併准陽明門儀(外記廳)可知之、

入官東門著東廊座是經左衞門陣代也

次上卿外座令敷軾

見史捧杖、插文自敷政門前渡北、起座移著之、

大弁著座申云、申文ヘ、上卿揖許、

大弁屈面

史捧書杖跪小庭

上卿目許

史稱唯、趍進著軾擧文、

上卿披取文、暫待之、

史乍持杖磬屈候

次上卿一々披見文、結文二通、馬料一通、如例、畢引取禮紙、横置座前端方板敷、東西妻

其儀同南申文

次史置杖、取禮紙展置杖上、

次上卿次第取文給史

史給文披之、候氣色、

上卿與奪之

史一々開覽、卷文加禮紙取副、其儀東廊北面西第一二間設其座、（納言座在北、或又納言北、參議座在南、）

上卿參議入自角戶、（召使敷之、）經砌并東香殿分、著南北座、件座保安久安立兀子、其外假板敷平座也、

先之上官著西廊座、ツノ間々レタリ、召使申時、

上卿已下著座、（上卿不經令出、戶官座例也、座事由召使奏中上卿也、且依內々可仰含歟、）（又遣）

上卿已下起座出、經直西行、（或不出經間行、外記廳一人敷歟、）上經登廊南戶、更下北砌西行、（外切也、）入外記門代、至子

午廊南小屋代、（件座南第一二間、引儀、召小屋代也、）改著沓、（依外記廳、深沓也、或又有著靴之人歟、）更出砌、（此間已次納言參議、件廊西上、或東上列立、或戶北面西外立歟、）右廻相揖於已次、舉左廻南行、入中央戶、至母屋、自我倚子下廻南著之、（揖引著如例、）

已次納言、參議、次第廻列著較著、

揖了次口廳著之、（納言中戶々レタリ、大臣著用可用、）

參議大弁參者、此後著廳也、或不待列仰遣著之、或又無召之時不著之、大弁之外無他參議者必著之、

件座西廊母屋第二間（如二南廊第三間、）以北、立列納言倚子、參議兀子等、（東西上南面）東廂南第三間立請印案、（對上）（言納言北行立之、）

同北第二間立少納言、弁床子、（東西行、西上南面、）同間又廂南第二間立外記床子、北廂東第一間構申文史等長床子也、

〔達幸故實抄〕一政事

政聞事〇中略

大弁宰相著座事

仁安二三二、申文頗遲々、予問子細、召使曰、大弁若可著座之由、被待上卿仰歟、予答曰、專不可然事也、上卿示事者無他、參議之時也、於今日者、始大弁申行政、追可被著也、（大弁宰相著座事有四歟、我始著政時、年始、始弁一人參）

有申文時、皆追著之、無參議時、依上卿命著之、今日右大弁必可著座也、於陣大丞曰、近代著座斷畢、以政可准、而六角宰相爲上臈有憚不著也、此事專不可然、於上卿者爲上首著行也、於參議者雖有上臈全不憚、予任參議之時、右衞門督（實國）爲上臈被參也、

初任公卿可著時政事

仁安二四三、源宰相（資賢）始參政也、初參著時政事也、但公保、宗家卿、始著兩儀政云々、○中略

警固中政衞府官公卿裝束事

治承四々十六、還幸大内之後政始云々、後聞、今日有解陣事、三條大納言（實房）仰之、其後有政、（政以解陣公事不打任事歟）今日若解陣以前有政者、公卿著左衞門陣、并廳南所之時、不可著帶弓箭、可垂緌、參陣之時、帶之可著陣也、於溫明殿壇上替沓之所可帶也、

養和元十二十七、左少弁光長任弁官後、始可申官方吉書、（昨日拜賀云々）先日示送云、爲房卿應德代始警固之間、政了參陣、隨衞府上卿所爲、不帶弓箭著床子、起床子之後、帶弓箭參關白直廬、然者著床子之時、不可帶弓箭歟、所爲如何、予答曰、著政之時、雖警固不帶弓箭之故也、仍應德雖不帶之、猶案之、雖被引上卿至于床子座帶之可著之歟、然而先賢所爲不能示是非、今度至于吉書者不及被引上卿也、警固之時、於禁中爭不帶弓箭者、

政初參大弁參議雖不被催著座事

壽永元正廿六、經房起座經廳西庇中間入小屋、著深沓著座、今日政始之上、經房爲初度、仍上卿不催大弁進著也、○中略

政始日雖有他宰相大弁可進著座事

文治二七七、後聞左大弁（兼光）欲著座、召使守安示無先例之由、大弁狐疑申上卿、（家通）上卿答可在雅意之由、遂著座、政始日雖他參議大弁所進著也、

遲參公卿事

文治二七七、宰相中將雅賢遲參、仍不著座、暫著左衞門陣、出立之時列立外記門外、

〔西宮記臨時六〕外記政在廳例略○中

次中文、

朔日、四日、十六日、及政始、新著座、上卿著時有申文、式日无政、次日有政、有申文、當日遲參者、後朝有政、有中文云々、少納言一人、辨二人、外記一人、史三人著深沓、入自中門、立庭中、上卿召す、朔日入、自敷政門、具小戸、立廊下、少納言辨稱唯、次外記史稱唯、一々著床子、若有遲參者先著、上臈辨無答、乍居摩稱申云、司々乃申せる政申賜不止申、上卿無答、史次第仁讀申、上卿與奪、少日申文、如初聞取時、民部省乃申せる、云々、辨少納言乍居稱唯、外記讀申文、史立共稱唯、三人申了、自下退出、辨少納言自下經廊下退出、申文時、有辨一人者、外記入立廊砌下、申云、大粫火乃官政欲申仁、大粫火大夫一人乃見侍る、上卿云、令申與、外記稱唯出、申少納言遲參由者、上卿云、令大粫火大夫引云々、申稱火云申文、次有三省申文者、詔使申返事者、諸司退後、辨官申无申文者、別申无申文者、外記立廊下、申云、大粫火乃官申賜政无之、无可印文之時、又申上卿云々、雨儀立砌上、非參議大辨成立申文、

〔北山抄七都省雜事〕外記政略○中

先有申文、○略其儀、少納言一人、弁二人、外記一人、史三人、入自廊西戸、列立庭中版位、五位一列、六位一列、若有四位弁者、列少納言下、若有遲參者先著上、立定、上卿宣喚、五位同音稱唯訖、六位又稱唯、各著座畢、上臈弁起座、申申文之由、云司々乃申せる政申給、即居、第一史起而讀申、詞終申給止申、申者上宜之與詞終、給止申スト申者、上宜給倍、少納言、弁乍居稱唯、外記起座、與申文史同音稱唯、三人申畢、從下退出、朔日、四日、十六日、政始日、上卿初著日有此事、或日无政者、次日有申文、無申文者、先外記法申、上卿無答、

〔餘所議二〕外記法申

北山抄、外記政條云、無申文者、先外記法申、上卿無答、按スルニ洞院家廿卷部類、外記政條云、次上

膈弁起座、靴、（或先下居座）正笏微音ニ申云、司乃申セル政申給ト申ス、即居、（納ニ之法申）上卿無答、コレ申文ナキ時ハ、外記カタノ如ク申テ、其實ナキユエ法申ト云ナルベシ、

〔江家次第十八〕外記政（中略）○

先有ニ申文。○

少納言一人、弁二人、外記一人、史三人、入自西廊西戸、列ニ立庭中版位、（五位一列、六位一列、若有ニ四位弁ニ者、列ニ少納言下、著座時進置）上、立定上卿宣喚（須）、五位同音稱唯、乾六位又稱唯、各著座畢、

上膈弁起座、（或居乍）申云々、上卿不答、弁即居、第一史起座讀申云云、詞終申給止申、

上卿宣與之、少納言弁乍居稱唯、外記起與史同音稱唯復座、三人申畢、（民部省文上宣與之、宮内省文上宣給、）自下臈退出、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀（中略）○

次申文

其儀、少納言一人、弁□□外記一人、史三人、自廊南進出就版位、（弁少納言一列、六位列後、）

次上宣召ス、

上官稱唯（先五位同音、次六位同音、）

次少納言弁同時揖、離列參進（有三度揖、依ニ官廳禮ニ也、）著廳内床子、外記史同時揖、同參進同著廳内床子、

次弁法申（摩靴申云、司々申政申給ト申、）

上卿無答

次史三人申文

上卿答（民部、締之、宮内、給へ、）

外記廳申文

次政官經本路退去〈先外記史、次少納言弁、各隨時起座、先下臈退、〉

〔朝野群載 六太政官〕外記廳申文

朔〇日〇申〇文三枚〈乳牛文一枚、四度二枚、〉

宮内省申久、典藥司乃申セル乳牛七頭、此乃月乃爲草乃分乃米豆物、別四坂、依例天給ハント申津、

閏〇日〇申〇文〇三枚

要劇文二枚

左乃官司々乃人等合天、二百餘卅人加、去月仕奉日數仁依天、要劇乃料乃米、百坂四十坂給ハント申津、

右乃官司々乃人等、合二百餘六十人加、去月仕奉レル日數ニ依天、要劇乃料乃米百坂五十坂給ハント申津、

百度文一枚

宮内省申久、大炊寮乃申セル、官物收下ル司々乃人等、此月乃百依乃料乃米三坂給ハント申津、

十〇六〇日〇申〇文三枚

粮米文一枚

民部省申ス、司々乃直丁合天二千餘六百來月乃粮乃分、米千坂百坂、鹽十坂五坂、依例天給ハント申津、

百度文二枚〈同前申文〇略〉

覽內文儀

〔江家次第 十八〕廳覽内文

上卿着廳、〈申文之後、猶申文時、外記結申、〉外記覽内文、〈其儀如覽外文、但外記退立南廊西第三間柱下、上卿見了、如例云云、〉上卿見之如常、〈上卿密計枚數、或以指撫机上、標二十枚、內印文不過五十枚云云、〉

使任請位季長廳省

但省符者、少納言於局見文之次取留、不具於官符、仍不覽廳、史生取之、入內請內案令覽、又少納言於陣令覽官符之時、不覽省符返給、有事疑文等、入內之後召外記問之、此後覽外記文、行請印事、政畢入內、上卿著陣、（著外座、納言參議同一人可相具、若上臈候陣者、先顧案內行之、一上在南座者、申案內後、以官人令引下臈著、所司具擧後、[illegible]少納言代、[illegible]主鈴代、中務錄、[illegible]）

■少納言覽內案、（先於床子覽文）插書杖候小庭、上卿目之、少納言微音稱唯、就膝突進文、上卿取之、見畢（不卷返）返給之、少納言取文加杖退出、

若有長書濫難覽文者、（開之橫剌文。）少納言先就膝突申之、濫難覽（多寄）其文橫剌（仁候牟）、上卿許諾、其後橫插、

內案文剌覽之、若多枚數者、入筥先覽云云、猶可申橫剌詞計云云、

次上卿仰外記令內覽、外記插書杖內覽云云、

若內侍不候者、令藏人代、有用女藏人例、

內侍出於南殿艮角階上、（參進門內）少納言入自恭禮門付內案、（剌杖）內侍進御所奏之、（地下內侍付女藏人、書留御所、）

若有攝政者、內侍奏內案如常、頭藏人奉仰持參於攝政直廬、內侍出居南殿巽角階上、上卿起座渡小庭至東階下、（或上西廂、經宜陽殿西廂、）內侍宜（奏、或日早久、或無左右仰、）上卿右廻著本座、

若有臨時位記者、內侍取內案參上間、上卿召內記令進位記筥、內侍出巽角之時、上卿令持位記筥於內記付內侍、近例於東階之擅上取筥、昇階二三級授之、復座內侍進出返給、上卿進倚取筥、（可示覽又可奏之由、）

令持內記著座之後、召近衛府、少納言等立廊下時、少納言覽官符畢、上宣召中務輔、著膝突給位記筥、置印盤令捺印、少納言印位記畢、輔返進筥退出、畢後印官符、上卿令持內記付內侍覆奏、內侍早入時、或付藏人云云、或返給、或留御所、（女位記留之、餘返給歟、）

上卿宣、近衛司（左）大將者不論左右召曰、政人、將監在陣座稱唯、入自宣仁門候小庭、（帶弓箭、）仰云、印將監稱唯退出、播部寮立案於軒廊東二間、少納言率主鈴（持印櫃等、）將監等入自日華門出印、（此間少納言立長樂門前橋西、）

鋪、南面東頭、北上許、監立案下西頭之間、少納言跪案下、請監鋪、立軒廊南二丈許、主鈴置印板於案上、取官符、授少納言、有官符者、入內案、不覽、上卿、退立請監東、少納言跪膝突、還上卿、上卿見畢返給、少納言還案下、主鈴取官符捺之、畢少納言以下共納印櫃、撤案、少納言退出自日華門、

少將奉仕少納言代官例延喜十五年

權中將奉仕中務輔代官例延喜二年十月廿日、踐祚、

關白不覽內印事天慶四年十二月一日、貞信公記、

無內侍以命婦女藏人爲代官例

依讓位急打破例康和二年十二月三日

中少將爲代官、被召中務記、凡事違作式、難可奏聞云云、

少納言跪於小庭西記云、貞信公于時參、如此跪立云云、又云、凡人不可登、例云云、請時自庭上入於宣仁門、被經長橋跪可坐小庭、

〔左經記〕長元七年十一月一日丁亥、早旦參院、次參結政、先是權中納言定賴被着左衞門陣、剋限着廳、余已上納言見申文、令作法之後、依上卿消息着廳南廂依中納言在中也、不令着中丈、先外記申令覽內文、次式部丞錄出自結政北戶、立軒廊北二間、上召之、同音唯、着西壁下床子、先丞立申位記印可給之由、居、次錄立披文讀申、上宣給ヘ、丞立如同音唯退出、次少納言着床子、外記覽文、史生置印退、丞錄持位記筥居西壁下床子、外記取印文、於印案下召史生、史生進來、取文置盤上目錄、錄進史生許自南階上、到史上下、授位記筥歸本床子、史生作法了、上宣捺世、史生先位記請印結申、上宣給、少納言稱唯、史生取位記筥目錄、錄進取筥歸來間、丞立退出、錄相從出、次請印官符等了結申、上宣給ヘ、少納言唯自下退出如例、次上余共立、依申南所物忌、直入內、〇中略次權中納言被行內文、又有位記請印、內案位記等內覽之間、外記進小庭申御暦奏候之由、上宣暫可候者、外記唯出就、令官人召藏人、居膝突上令奏御暦候之由、藏人唯立庇、頃之來向、仰云、無御出、依例行、上卿召外記、仰可付內侍所之由、頃之外記內記歸參、少納言以內案付內侍、次上以

請印儀

位記、又付内侍令奏、皆如先例、事了退出、于時亥四刻、

〔本朝世紀〕仁平三年閏十二月廿八日庚寅、今日廳覽内文也、左將府令申行給云々、晩頭、中納言公能卿、參議師長卿著廳、辨官不參、權少外記中原祐安進出法申辨遲參由也、上卿無答、祐安退後、即捺内印文、覽上卿、退立廳廂西第三柱西際、北面、上卿覽畢、外記進取筥退出、次少納言成隆朝臣、少外記大江以隆、史生俊貞等從、外印請印、了引參陣、少納言著陣腋床子、少納言侍物部助正、取大辨前床子立少納言前、次史生俊貞入官符并内案於筥、覽少納言、見畢、史生取筥退出、插文杖、内案二枚插加立樣之、官符一通横刺、立敷政門代外、此間上卿召藏人長定奏事由、問内侍候否、次少納言起座、進就申言、請廳覽、太ル文横插冊候本、上卿許之、少納言退插笏取杖、居小庭、笏居、上卿目之、少納言微唯、就膝突覽之、了返給、即取副文杖退出、史生付内案於外記云々、納筥參殿下、左府内覽、歸付内案於史生云々、刺内案於文杖、立樣插也、少納言取杖立小庭、上卿起座、頃少納言可付内侍、而依内侍不候、上臈付藏人、就弓場、以藏人長定奏聞、不待勅退出、女官來床子座、付少納言云々、次召將監俊宗仰印事、次少納言成隆朝臣、右近將監俊宗主鈴等從事、於官符者、入筥置案上持參、次少納言取案上筥覽上卿、即返給、置案下、取出文書二枚請印、主鈴捺印、少納言進筥退出、次召外記下給云々、

〔西宮記臨時六〕外記政在廳例○中略

請印、右内文先可覽、外記持筥參進屈行、大臣前置上卿前案上、拔笏立南廂西二間、東面、上卿見文加判、乃外記取退、内文中有讀書者、入内之後仰外記、少納言著床子、入自西戸北行、雨儀入自南小戸、外記捧筥文入自西戸渡庭、史生捧印櫃在後、外記入自東第四間、至上卿前一許丈、秉筥屈行三度、置筥於上卿前案上、於大臣者、跪膝行三度置、此間史生入自印机間、即置印櫃於案上、取出印壺置櫃上、即出印置丹盤、外記屈行退立、拔笏左廻、經印机西柱西邊、以左袖摩柱西邊趍退之間、史生拔笏早速走退、了史生走下砌外、外記渡印机南、就南庇床子、在東二間庇、上卿置笏、左尻下、若劍置右方、以右手指入曳寄筥、先以奏文置筥外右邊、有毀符置筥左、元置横也、一々開筥文、有散落文不取留、急書可用意、次見奏文及毀符、訖毀符如元横置於文上、即以左右手推筥把笏、外記立床子、直通至上卿前、入自印東間也、插笏屈

行、三取寫（綿巻、上紐、仰結目、在外記方、外記又取寫、）插印机西柱西邊、立同机巽角、北面召史生名、史生於西戶外稱唯、（入自南小戶、）（申、）趨入立印机下、（當相立、）外記授寫於史生、披笏立矣、史生插笏取寫、置印盤西邊、即以鎮置右方、取文披置板上、以鎮尺展鎮其上、把笏退立六七尺許、申云、零文若干、枚文若干印須、（先印之枚、次零文、有以紀傳寫枚中數、枚數有之時、少納言無之故也、）上卿宜須（曾、）史生稱唯、就案插笏收袖捺印、史生披笏退立、申云、須（印了由、仍申畢、自下出立、）（若有相應、）上卿宜賜（見少納言之後可仰、）少納言摩稅作居唯、了史生就案入文於寫授外記、外記插笏□寫立矣、有毀符者、史生授寫於外記、舉印板西退、外記正向印机、置寫、開毀符申云、文若干枚々々（僧）、上卿云々（僧）、外記唯、（此間史生存印之儀、）破文入寫、史生取鎮置板上、取印入壺納櫃中、又置丹盤板上、即捧板右廻退去、史生出之外之次、摩右廻、外記開其背捧寫、右廻自廊西戶還出、（南廊外記行、自南廊行、史生自南上入、經故小戶、）少納言又自同廊下退還著本局座、

〔北山抄　七都省雜事〕外記政（中）

次有請印、其儀少納言著座、外記捧文寫、史生捧印櫃、各參進、外記屈行、置寫於上卿前机、就南廂座、（捧寫時體、置寫早出、）此間史生置印櫃於案上、出印退出、還上卿置笏、（當國人置右方、但揷一尻下、）以右手曳寄寫、先取零文、置寫外右方、若有毀符、次置左方、次以右手一々披文見之、（若有脫失文、故寄兀取見、）見訖帖之、次見零文、如元置寫內右方、次見毀符、横置文上、畢、先見遣外記方之後、以左右手推寫、外記進自東二間入母屋、來屈行取寫、若有書、上卿懸右指於寫、外記居面取笏、即仰其文可停之由、外記稱唯、起而取寫、立印机東、召史生給之、史生取文置案上、（若有錯書者、此間仰合史之、）以鎮尺置上、退申云、零文書若干卷、枚文若干枚、印刺（與有數十枚、猶申之、）枚（但有一紙枚以下、者隱有申之、內印手、為五十紙、外印不過、曾無之々、）上宜、（刺若依、紙數上卿之、）史生稱唯、就案捺印畢、又退申云、印刺シ、上卿先見遣少納言方、畢仰曰、給（僧）、少納言稱唯、史生授寫於外記、若有毀符、史生舉印板而去、外記就案南申云、文若干枚破（僧）、上宜（也僧）、外記稱唯、破文入寫、史生納印、捧櫃退出、（至南階上、摩香、）（塗）外記取寫、右廻退出、次少納言退出、

〔江家次第十八〕外記政○中略

次有請印。

少納言著座、（經壇下）外記捧奏文筥、史生捧印櫃各參上、（經庭、外記入自西第四間、進上卿前）外記屈行置筥於上卿前机、退就南廂座、（持筥後步、進筥後卑步）此間史生置印櫃於案上、出印退出、畢上卿置笏、（常例人置右方、但插尻下）以右手曳寄筥、次以右手一一披文見之、（若有卷文、先取置筥外、見枚文之後見之、若有落失文、更不見之）見訖帖之、先見遣外記方之後、以左右手推筥取笏、外記進屈行取筥、退立印机東、召史生名、（史生稱唯、來外記給筥）史生取文置案上、以鎮尺置上退、申云、卷文若干卷、枚文若干枚印刻、（凡外印不可過廿枚）上宣刻、（但隨延上字仰之）史生稱唯、就案捺印畢、又退申云、印刻、上卿先見少納言方、舉仰曰、給ヘ、少納言稱唯、史生授筥於外記、史生納印、捧櫃退出、外記取筥退出、次少納言退出、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀○中略

次請印

其儀、少納言一人自（コノ間キレタリ）（不經版）著廳內床子、少外記一人置筥文於上卿前案上、史生一人置印盤於机上、上卿見筥文、（其儀如例）見了取笏見遣外記方、外記參進、賜筥文捧之退歸、立机前召史生名、史參進、外記授筥文仰請印事、

外記著床子

史生警屈申云

枚文若干、奏文若干印申、

上宣、刻（書）、

史生請印フ、申云（印）、

上卿見遣少納言方、〈二字々レドモ、〉給少納言、取稱唯、史生捧印盤退去、〈先是置文於外記、〉外記同退、少納言退去、

次上卿參議同時起座、

（宇槐雜抄）保延二、十一、十二、請印政、

予〈賴長〉揷笏於右尻下、〈猶右尻也、〉以右人揷引寄寫、〈天〉見文、〈件文續不知名書作名、〉遇牢見程ニ有難〇書〇、〈件文十一月日ト書也、續文端書十一月十二日也、續書只一枚有之、〉見了、如本押折之、見遣外記方、以左右手押寫取笏、外記進來、揷笏取寫、予以右人揷臘寫、外記進取之、予云、有難書也、此時外記少退、跪取笏、予云、十一月ト書ナ落十二字、件文可俸之、外記揷笏取寫、上卿以揷臘寫之時、外記進欲取寄、依也、又示有難書之時、可稱唯也、而不稱唯、取寫、不知案內之所致也、史生置寫於案上、以鎮尺置上、申云、枚文若干印差ス、予仰云、差セ、次史生齎盃被見文、求難書也、至件難書、爪ヂカヘザマニ折テ、其後猶皆見文了、次請印、出中戶西行、至西廊南折、於西廊北間脫深沓、先是予問召使云、上卿不著南所退出之時、於何處脫深沓乎、召使云、アシコモトニシテ脫之、アシコモトヽ云ヘ、西廊北間トクモ、猶北方也、

（西宮記臨時一丙）出立

無少納言者、四位辨出立云々、召立南所門外之作法可尋之、

辨少納言立西屏下、當外記門南上東面、外記史列立辨少納言北、東上北面、北去三丈、官掌立後、追雜人、參議以上自下臈出門南邊立門南、北面雁列、末參議立門南四丈許、各間六七尺、上卿出自門北邊、〈只揖辨、門北枠立、〉即西向揖辨少納言、次乾向少揖外記史、〈大臣者、只乍向、見遣六位方許也、〉次南向、揖納言已下、納言已下共揖、左廻爲先下臈南行、〈依參議著左衞門陣、出立間如此、參入之後、參入故也、〉參議以上、直入南所內、立坤角樹西、西上北面、上卿欲入門見遣坤方、入門南向揖下臈、〈當小屋與柱南邊五六尺許、〉直入北、〈脫深沓、〉參議以上、共平寄列立小溝北邊、〈當門南枠、〉立、上卿從者、執深沓入小屋、次人一々至小屋巽角柱下著沓、南向揖下臈入北、可入北便所者、下臈

暫留待出便所、至北片庇也、有急事者、自北戸下可出、納言尙自入内之次可出云々、○中略

政畢退出儀 外○記○政○畢、自下臈起座退出、官○政○畢、自上臈退出、

各於著靴之所、脫靴著淺沓、大臣立東門内南掖、北面、雖次○上、爲貫首之日、猶立同所、納言立同内北掖、東上南面、參議門内去西一許丈立、東面南上、各立定、爲先下臈出門、先是少納言、辨、外記、史、出自北門、列立北路左右、少納言外記右、辨史左、召使等分立左右、呵叱往還雜人、上卿已下、爲先下臈北行、皆垂衣尻、外記史列立侍從所門北掖、去北二丈、西上南面、少納言辨列立西屏下、當門、東面北上、參議以上不揖、直入門立南築垣邊、上卿欲入門之比、向乾廻揖、少納言、辨、外記、史等、答揖如常、或記云、上臈先揖五位、次揖六位云々、外記政畢、出門揖在三曲、至此時只一時面入門、侍從所中文作法如常、甚雨幷入夜之時、不著侍從所、自東門分散云々、

〔北山抄七都省雜事〕外記政○中略

次上卿以下一度起座、從下臈出、若辨以下遲出、暫立北廂、待出畢云々、經西庇中間、出從門中央、從西垣邊南行、右旋北面、北上雁行、最末人當建春門南、外記門南去四許丈、各相去六七尺許、參議一人者、可立最末人立所歟、至于納言、可有用意云々、上卿出自門北邊、或說云、衣袖不及北扉二寸許、西向揖辨少納言、去門闌三尺許、次向乾方、小揖外記史、先身向、後西向、若不然者、外記史早揖、至于大臣只見遣之、次南向揖參議以上、參議以上一度左廻、下臈爲先南行、東、延喜記、直入侍從所門坤角櫻樹西邊、西上北面列立、最末人還當立、與樹平頭、

〔江家次第十八〕外記政○中略

次移著南所、上卿以下一度起座、從下臈出、若辨以下遲出立、暫立北廂相待、經西廂中間、出從門中央、從外記西垣邊南行右廻、北面北上雁行、最末人當外記門南四丈、各相去六七尺、上卿出自門北邊、右袖不及北扉二寸許、立門當下、去門闌三尺許、西向揖辨少納言、次乾向揖外記史、大臣者只見遣、次南向揖參議以上、參議以上一度左廻、下臈爲先、南行直入侍從所門坤角櫻樹西邊、西上北面列立、或東上、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀

(下臈先入門、上臈留後、……)

次外記門出立

其儀少納言、弁(諸五位二人、不論者一人、五位不論、闕位、或上南面、當門代、)外記、史(上門西方、南上東面、)等、揖列立、(江次第云、五位以列之、)參議納言等、先下臈出門代(参議以列……、闕已次第不揖、上官等、……)、右廻東行、最末人當切懸中央以東、右廻西面立留(但又隨人數多少、可斟酌、)、已次第列立畢、

上卿出門代(門代内、在北、)北面揖、弁少納言、各答揖、次引退左足向乾小揖、外記史、各又答揖、次右廻東面揖、已次卿々等、同時久揖畢、右廻東行、上卿相從(已上下臈爲先、)、昇登廊南戸、已次列立朝所殿南面、(小庭南邊西、)

(西宮記北上共)

〔達幸故實抄〕一〔二〕政事

政間事

康保元十二十五、中務對參內、大納言殿密々相具中將、爲令練習射場始賭弓等事令參內給、仍予所參會也、

猶仰云、外記門出立者、少納言當外記門南柱程立、路中央程、其北少弁中弁等列云々、次第南上東面列立、其末折東、外記史列立、次末座宰相出門間不揖、副築垣南行、當日上卿次人當門南築垣、自北第二門右廻向北立、下襲尻不引隨也、身許離立歸尻猶有前、其次人、前人之南方寄西方立、其體同前、如此雁行者人多之時、至于左衞門陣南屛邊也、然者末座人許上臈人數立留也、如此立定後、

上卿出外記門、向少納言弁等揖、有答揖、大臣者不揖、上官只頗顧面、次納言頗小揖、次向南行、向公卿揖、公卿答揖、次最末人左廻向南所、父爲上卿、其子不列者、揖之故也、父爲次上、於雁行者不憚也、

上卿未參之間、刻限至者、召仕於左衞門陣中時、在座宰相仰戶引々、仍開外記門、其後上卿參者、宰相起座下立、仍上卿知戶引之由、不著左衞門陣座、直入外記門、近代者雖刻限以後、上卿參入訖、召仕中時也、

雨儀

〔西宮記臨時六〕雨儀

參議以下、立廳西庇南端砌中、上卿於小戶前南向揖之、上臈爲先趣南所、雨降者戴笠、上卿入南門、北面脫沓、從者到來初在西小屋、參議以上、立屋西砌壓行、一々進北脫沓、立歸揖下臈入北面、

〔北山抄七都省雜事〕外記政○中略

雨儀

上卿入外記、降雨日參入者、入建春門前砌北進、於陣官座東、著淺沓、著座、就廳之時、於砌所著深沓、故實作、著深沓、著此陣云々、然而頗无便宜、召使列立結政所北庇壁外、參議以上列立西庇、頗北入而立、少納言以下出入、用結政所北小戶、以軒廊中間爲版位、外記法申之時、立砌內、政畢無出立之儀、參議以上下臈爲先、列立廳西庇南邊如初、上卿於小屋戶前、頗南進揖之、出中間取裾、向侍從所、次人次第揖、而出南間相從之、上卿直入北方、參議以上列立西砌、北面西上、南庇壁西砌也、上卿著淺沓、從者還出後、參議以上北進二三尺許、替沓揖下臈入而著座、事畢、弁少納言列立孫庇西砌葹下、上卿於同砌中央間、母屋中柱下也揖弁少納言出門參內、次第如此、從溫明殿壇上經巽角柱內西行、越溝垂裾、入敷政門、

〔達幸故實抄一〕一政事

政間事○中略

雨儀事

元曆元十一十、左兵衛督顯實曰、先日著行時。政。之時、於廳及秉燭、仍無出立、向南所、閉門令叩開、不儲儀云々、此儀忽以惘然、被見次第、求出此儀、至于南所西砌內相揖下臈退出、依雨下不解深沓、至于陽明門、其時新中納言經房爲參議所被參也、

著侍從所儀

〔西宮記臨時六〕著官政並政畢著侍從所事

延長元年五月廿三日、官政无印文、

大臣已下著東廊床子、外記申代官、於此所申之、則殿大臣起座、於同廊東面著靴、立床子前、降自右階、經艮角壇下、昇自一階、入自東一戶著座、以次上卿降壇經北屏北面、於同屏西邊著靴、經屏西邊進昇、納言用中階中戶、參議用西階西戶、著座、大臣經殿艮壇上著座、以次於西廊北戶東壁著靴、經殿乾壇上著座、各隨時、經壇下者、作有淺深、經壇上座、西廊云々、退出之時、降自西廊、經北廊北面、度東方相從大臣、自東門退出云云、

〔名目抄 殿舍〕南所(ナンジヨ)

〔大內裏圖考證 二十二〕侍從所

侍從所　續日本後紀、及文德實錄、三代實錄、日本紀略、扶桑略記、西宮記、北山抄、江次第、拾芥抄、左經記、權記、台記、作侍從所、　北山抄、及新任辨官抄、左經記、台記、山槐記、吉記、愚昧記、外記師尙記、作南所、　江次第、作食所、　左經記、作南殿、

〔西宮記 臨時 四〕所々座體

侍從所

西壁下有左右大臣座、或南上、親有太政大臣者、左右大臣在納言上、中文史知例、母屋北邊西上、有納言已下座、納言机中央、參議長食床具坐、南庇東上北面、有弁少納言座、長食床疊並有圓座、庇、弁已下臨次著座、母屋中央間南邊北面、一世源氏座、東庇南間有王少納言座、疊、无其人設座立机、盤筒等、　但件所北廊副西板戶下、有大臣昇階、其東北面有脫履等、又南面有殿上殿脫履等、又南庇北異角有閑、又南又庇有小板敷間、中將日給時著之、艮戶西簾立、中文史床子、異角庇地高火爐、有盃酌之時、於此溫酒云々、

〔西宮記 臨時 六〕著南所

上卿入南所之後、辨問史云、申文々々、有大辨者、史云、有々々、无大辨、史云、无々々、辨少納言並南行、辨東辨立南所戶北棟樹北、少納言入戶內、大辨出自結政南行、辨揖大辨、次辨立樹南、揖四位辨、有非參議大辨者、出結政入內者、五位辨乍立樹北遙揖之、次辨立樹南揖四位辨、四位五位辨立南所門、四位西面、五位東面、辨侍走來申云、正食乃、諸司召々、直辨答云、申畝、辨侍云、然侍々、辨云、御鎰賜留、辨侍稱唯、无傍辨者、无

中詞歟、座定後居盤、納言入自西戸、參議入自艮戸、辨已下入自南庇西一間、次第揖著座、少納言召大舍人稱唯、執盤居上卿已下前退下、大臣著時、少納言立座登東階、於母屋柱下取盤置大臣前退歸、次大舍人置納言已下前、无少納言者、辨先著召大舍人、○中略

申文

有大辨時儀也、有濕結政申文者、大辨於舍西北壁外立床子、坐立見文或記云、天慶　年――

上卿已下著座、史剌文申大辨、次有申文、

居上卿前盤之後、史剌文、人自艮戸立東壁下、上卿顧左、史稱唯、趍倚自上卿右方進文、上卿取之、史歸立本所、上卿小揖、史居戸西被床子、横刺文上卿披表紙、有横刺文取落、披表紙之間加入展座前、以文等提遣紙右邊、一々見了、以文置紙左、見文之儀、先見本解之小狀、次見望請所、次見年月續文、或自内見出、或見本解之後、更卷出自端方見入、見申文等之後、見不與之狀、見了、以右手引取表紙開、以置座右長押上、開紙之間、令有紙聲、史置書杖於床子、叉手趍倚取表紙、更開張長押上、上卿一々取文、先慥見定奉勅上宜等、取文本方賜之、史披文候氣色、上卿各有判許詞、可奏文ナメ、御云、申聞上宜文ナメ、揖許也、解由不與狀ナメ、云下所司セ、有雜書者、先同大辨、无會釋者可仰雜役、有相判許文者、云可申之聞上、所仰无定、可留か、无雜者云障二候へ、史每上宜稱唯、卷文歸退之次、取書杖出了、上卿取笏、未立箸之前、先是見西方之後、置笏立箸、歲末申文有三番、又外記申國忌上者、外記替史立云、明日乃國忌乃御拜乃上、上卿已下、一々隨リ、外記唯有等差、末參議雖有障、承諾之後稱實障、食上下立箸、少納言召大舍人、召了立箸、舍人唯、所監若所預登自東階、居巽角柱下插笏、大舍人執汁物盤等參上、所監手長、一一居參議以上前了退去、召厚皮者、此次仰、有非參議大辨、此間退出、膳部登居南座湯汁物、盤本自居也、預爲手長之時者、不取湯坏、膳部爲手長時者、執湯坏居之、手長者湯汁不足者、膳部還取之、食如例、无大舍人者、膳部自南座末、申上其由、至北座末申宰相、宰相拔箸、取笏申上卿、上卿揖許、宰相示之、膳部退、无宰相、有納言時者、膳部留南座上臈後、仍南座一人申、无大舍人由上卿許諾、仰許諾旨、膳部退居、然上卿見下臈食了、共拔箸、辨少納言共自下退出、立西門西屏邊北上、召使立南、上卿已下出門一許丈、揖辨

少納言判、左衛門陣離東取衣尻、辨少納言進出東方、少納言西面立並北上、辨相揖從參議以上入陣、

雨日、辨少納言立含西南砌下雁列、參議以上於母屋北柱下揖之出、雨降者於砌下取替、辨少納言歸入陣內、追相揖出次入內、

大臣著儀

少納言居大臣前盤之後、史經北東砌、進立實角階南西面、大臣目史稱唯、登階入自母屋西行、不及大臣座八許尺、膝行進文、逆膝行、右廻卻歸、就東階上長押下之圓座、（西面）見文了、卷文置机南、（大臣一度賜云々）史卽取書杖、叉手、（書置膝內、膝以膝於長押上）進跪披文、結申、大臣判許、史每度唯了、卷文左廻退去、至圓座下、突片膝、取書杖北面膝行下階、起退如道、次他史遞代、進立東階南、申云奏候、辨少納言披著降座、登自東階、進大臣計物、但辨爲手長、少納言取盤持盤之間、暫居實角柱下、若可依闕次歟、

无申文儀

大舍人居上卿盤之後、在南座上、闕辨申云、申文无之、上卿卽立著、少納言召大舍人、无辨之時、少納言申文无、（家例、如）當說云、少納言不申、此由以大舍人令申參議者、是荒涼說也、

申、除料文儀、辨少納言食了、不披著之前、所預採文趁出、始自南座末披文（天）、乍持令見渡、至上臈辨許、辨取文一見、卷調第、披著申云、所（乃）月（乃）分（乃）魚一月（如）分以直物賜（止）申（毛）（乃）、上卿揖、辨稱唯、立著懷文、一同披著、立座入內、居床子下、史（略）○中

南所盃酒事

（節會、及諸大夫新賀饗、舊例以諸司官人爲所職下、遞代總不行）

食後少納言、若辨獻盃、（立座、登自東階、於實角柱下、執盃、所監執盃子、或登長押上、執盃、進跪上辨前、上卿閑云、例御酒所獻者申云、某朝臣乃新賀奉仕レぬ）上卿受盃、（五位可取、納例以所監、辨遞代、無此例、）盃轉至參議末、參議目南座一人、進來受盃歸本座、巡行如例、但獻盃人、預巡行也、不過三獻、三獻過時、成大飲云々、

〔北山抄 七 都省雜事〕外記政 ○中略

上卿入門、(侍從所)故實、欲入之間、先見遣在西樹方、青侍從出立彼邊、仍爲知其有無也、或云、中務省廳日時者、官立春華門巽方、仍見遣其方云々、然而慣例云、西向揖諸大夫云々、於小屋南、小屋巽柱南去五六尺許揖、參議以上、北就北簷床子、參議以上相共北進、門內南邊溝北一許尺立、當門南梓立、上卿脫深沓、入北廂西戶著座、從者還出後、次第進小屋坤角、脫替深沓、先從左足脫替、顧向乾方、或說云、以左手押西垣、今不必然、從者儲在小屋內、南向揖下臈、入北庇戶、納言以上西戶、參議東戶、著座、上臈若入小便所者、次人暫留西軒廊上、待上臈出、次少納言著座、召大舍人、若無少納言、上臈弁召之、弁少納言著畢、大舍人置筥後、史插申文趁進、出聞鳴聲、先入自參議出入之戶、立東簷下、上卿左顧目史、稱唯進上卿右、進文、上卿置笏於左、取文持之、不與狀置之、或說、横斜文者不取落置云々、只持卷文也、如見左肩、見史、立定本所、小揖時、史卽著戶脇床子、持文杖、上卿置文、先披表卷紙、撥遣文於右方、一々取文、先見本解小狀、次見右狀、及望請之所、次見年月日幷人名、次見續文、或從端見入、或從奧見出、見定是非、置表卷左、見畢以左手抑文、以右手引取表卷紙展之、有墨置座右長押上、史立文杖於戶掖、進取紙、更展置之、上卿取文、慥見奉勅上宣等文、本結文、據發端、一々給史、不論奉勅上宣、隨當手下之、或先奉勅文、舊例取文下方給之、近年取上方、不見狀名、他文下畢、史卷表卷紙後、直撥遣之、史開本解、候上卿氣色、可奏文者、上宣申給、佐、上宣文者、上卿直揖、可申上臈文者、仰云、申上々、事旨煩碎可有人愁文者、仰云、申他上々、若有可勘事、仰其由、慥可弁決文者、仰云、候陣、佐、於陣重令申之、或召申文、史於陣腋仰案內、或後日召文書於里第、弁定理非、若有疑事、史披文候氣色之時、先問大弁仰之、或說、把笏問之云々、非也、可申他上之由、仰史之後、若可許、觸大弁可許由、仰申文史、弁見其例云々、史卷表卷紙出畢、上卿取笏、更又置笏下箸、最末之比、欲下箸、先見遣東方、依有二三番申文也、少納言召大舍人、居汁物、畢上卿以下就食、若可召厨物等者、大舍人置盤之次仰之、人々食畢、上卿拔箸把笏、

〔江家次第 十八〕外記政 ○中略

上卿入門、故實、欲入時、先見遣西方、於小屋巽柱南去五六尺許揖、參議以上直入北方、參議以上相共北進、門內南邊溝北一許丈立、當門南梓立、上卿於北廂脫深沓、入同廂西戶著座、從者取沓退出、自餘公卿進小屋坤角脫沓、先從左足脫沓、顧向乾方、以左手押西垣、從者儲在小屋內、南向揖下臈、入北庇戶、納言以上西戶、參議東戶、著座、上臈若入小便所者、次人暫留西軒廊、待上臈出、少納言

著庭、召大舍人、（若無舍人召之、）弁少納言著畢、大舍人置公卿盤、史插申文挾進、（出自西廊、先）入自參議出入戸、立東壁下、上卿左顧目之、史稱唯進、上卿右廻、進文、上卿置笏於左、取文持之、不與狀者、落置之、端置文者、或不落置之、只持卷文、如見左肩見史、立定本所、小揖、史即著床子、上卿置文、先披表卷紙、推遣文於右方、一々見文、（先見本解小狀、次見續文、次見年月日并人名、次見續文、）見定是非、置表卷左、見畢以左手抑文、以右手引取表卷紙展之、（今有置座長押上、）史進取紙更展置之、（史立於南戸、跪置床子上、）上卿取文、儀見奉勅上宣等、一々給史、（置下方、或先下本解文、納文見續文、副所文下方給之、遣年狀上方、其不與狀者、依文下畢、史書與紙、續、直屬置之、）史開本解、候上卿氣色、畢、（可與文者、上宣申給上宣文者直揖、）（有事觸之文、問上卿之、）史退畢、上卿取笏、史又置笏下著、少納言召大舍人、居汁物、畢上卿以下就食、（食畢飲酒、）人々食畢、上卿披箸把笏、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀（略）○中

次上卿以下著朝所、（謂南所也、）

其儀、上卿入廳戸向巳、次卿一揖、（巳次揖、）人經門小屋代、（經門南廊也、無其儀、仍如此、）改著淺沓、至西間沓脱下揖、顧右膝并巳次卿乎寄、（巳次一同時不揖、巳次一人之時無此事、）次人別離列於小屋代邊、改沓、立歸揖下臈、（下臈揖、）入經門著座、（經西上北面、參議者入東二間、南方也、）次弁少納言同時著東庭座、（南上西面、）

次少納言召大舍人、令居饗、

次申文、

史捧文杖著土庭床子、上卿顧面、史覽文、

上卿披取文覽之、畢返下之、（先覽紙、次申文、三通一々下之也、）史結申、上卿仰々詞、史退去了、

次上卿巳下著下、（不待申上、南所例也、）

次居汁物、（大舍人上臈、中、）公卿巳下食之、

侍從所出立儀

次飲䉼、先以箸挿之、次所上飲之、

次勸盃、五位取次而、

公卿最末人盃、擬少納言弁第一人、

次上卿以下同時抜箸取、揖起座、先弁少納言、次公卿等、

〔達幸故實抄一〕二政事

政間事○中略

南所居汁申上之事

文治二七七、左大弁兼光申上之、先下臈可申上之由、大丞觸中將、通責中將答、大弁可申上之由、仍

大丞申之、

〔北山抄七都省雜事〕外記政○中略

弁少納言先起列西門外、此間在東屋召使、度南砌前出西門、敬正羅人、其一人經北砌、開西戸出門外、

上卿以下次第起座、出西門、揖弁少納言、當門北柱、西去五許尺、到著左衞門陣之間、取裾參內、於左近陣炬屋下、

垂裾、西進入自敷政門、著陣座、

〔江家次第十八〕外記政○中略

弁少納言先起列西門外、召使度南砌前出西門追前、其中一人經北砌開西戸、上卿以下起座出西門、

揖弁少納言、當門北柱西去五許尺、與實首人揖、向陽明門、此間用北掖、未到件門、左兵衞府北門東程下、裾、自餘公卿留立、公卿歷行、向東弁少納言在

其西、去公卿四丈許歷行、史外記列其西、南面上臈、上卿不至陽明門當、四五許尺右廻揖、納言以上左廻而南出、自餘如此、或上卿出後皆南面

西、上官政立東上、南面、一々揖立、上卿以下參內下車、待上官以下下、後下、入自左衞門陣、經敷政門代戸東庭、入自同門著陣、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀○中略

次南。所。門。代。出。立。

其儀、弁少納言起座出敷政門、當門東上北面列立、次上卿已下次第揖起座、（自上臈也、）著沓降地右廻揖、左廻出閤門、一々揖、左廻到東門內籬垣下、取笏出東門、已次々次第相從如此、

待。賢。門。出。立。

上卿計其程留立、（未到門下、人許丈、）諸卿獨進行、此間已次卿、及少納言、外記、史、各留立、（東上東面列也、行立之間四五許尺、若大臣爲上卿者、弁少納言南上東面、外記、史列立大臣出門之後、一列如例立處也、）五位六位外記、史當公卿末立、（南上東面、）上卿引笏東行、至待賢門、（郁芳門謂之、）壇下南折南行、當南腋、右廻西面揖、位次人、位次人答揖、（上官以上同時揖也、）畢上卿左廻出門乘車、位次卿相次第如此、（但上卿揖了、左廻之後、已次列會南面、外記、史又加之、弁少納言列東、）卿相等各出門乘車、

次弁少納言、外記、史、次第相揖、

准先可知

〔達幸故實抄〕一政事

政間事（中略）

南所出立事者、以上臈爲中弁列、經橘樹西出、至橋匝辻、經壷路北、是九條殿御流所用之路也、橋匝辻東步路也、他家經辻西步路、上官者横切北上列行、前驅雜色經北橘樹北出、陽明門自北間雜人出之、自南間上卿已下退出、於南壇下立歸揖出、

上卿著左衞門陣者、宰相於外記門北辻下尻參入、雜色留之、凡又自件所不追前、

大臣者北座柱西、大中納言者柱東、宰相者經東砌立沓脫下揖、昇沓脫、脫沓、入中間、自後著南座柱東、與上卿對座也、

公卿著左衞門陣座、著座大臣入建春門者、存不可有政之由、公卿引率參內不著座、大臣參入者不

參內儀

參內、是政有無不知之故也、

大臣參內之時、過前之間、參議平伏也、

陽明門出立之時、不可有家禮事、

仁安元十二八、攝政令過給、至于陽明門南間立歸給、（藤令懸歸、於此所覺悟令下給、）揖令出給、左大弁云、依家禮此間可奉居哉、予答云、奉居內々事也、如此禮時不然歟、納言亦議、仍不居、納言以下立列路北、答揖如恒、攝政出給之後、外記史渡北如恒、次納言出儀如攝政、予又同前、左大弁（雅頼）於門內不立歸揖、〇中略

陽明門出立事

文治二七七、於陽明門上卿（家通）出了後、源中納言（通親、參議雅長、兼光、通資、）以下南面立直、源中納言出陽明門之時、不立歸揖、他人皆立歸揖、源宰相中將（通資）立歸揖、兄弟作法各別如何、

〔西宮記臨時六〕外記政〇中略

一、政畢、晴日不著南所入內儀、

政畢、南所有穢及急事時、上卿示參議、仰召使、令候沓履於左兵衛陣北方炬火屋後、（上卿沓、可候溫明殿巽角、）參議以上共爲先下臈、出外記門、參議等入建春門、立左兵衛陣屋南、當陣座北四間柱、北面西上、上卿揖辨史入內、欲至宣陽門下、向南揖、參議以上、卽入宣陽門、於溫明殿巽角脫沓、參議以上於左兵衛陣火炬屋下著沓入、此間辨史立南云々、此說非也、雨日召使申南所物忌穢等者、上卿以下直入內、於溫明殿東砌著沓、自南壇上入敷政門、政畢出立、無辨少納言、至南所不入北方、於小屋南脫沓、揖參議入內、不居儀之時同之、上卿著廳、无可請印文者、外記法申、上卿出立、或著南所、上卿著廳時、上臈加著者、次人立座退去、上卿著廳、外記進覽文、相議自上臈退出、上卿一人行政有例、而自安和不行、休日請印有例、晴日參議著左衛門陣、納言不參之時、大辨爲上臈者、參議下立離東、大辨參議依位階入陣、〇中略

官政畢、不著侍從所入內事、

中文作、大夫史一々取式、上卿已下座定、大内記着北面西戸外床子、史取文奉大弁、不弁取之置床子、畢、一々開見了、下史之後、着座、史結杖中上之儀如常云々、後日尋件例、已無所見、只聞先達、不知事也云々、又可尋也、

上卿已下、為先下﨟北行、外記史列立春華門前、東面北上少納言弁入自門、列立烏曹司前、西面北上参議以上列立左兵衛陣前、上卿到相対上﨟人揖入内、自此為先上﨟入内、無官政、自官入内、猶用春華門云々、延長八年四月一日、保記、御例、請印日、無政之時、無御前云々、

〔北山抄七都省雜事〕外記政略○中

不就南所参内儀

南所物忌﨟闕等時、召使令候後庭於左兵衛陣北廊後、上卿置者、候温明殿巽角、上卿参事者、示召使、令申物忌由、召使即来結政所告之、其外云々、政畢、参議以上起座下﨟為先出外記門、出西廊之間、召使申事由也、直入建春門、當左兵衛陣前、南座北第四柱程也、廊暫留北壺下、北面西上列立、上卿揖弁以下入建春門下道、揖参議以上入内、於温明殿巽角、脱深沓以次之人、於左兵衛陣坐屏北一許丈脱深沓、揖下﨟参人、南儀、上卿以下直参入、上卿於温明殿巽角庭内脱深沓、以次於同殿東第二間壁後脱之、或説弁少納言、當左衛門陣橡下、東面南上列立、一説、立弦門南、北面西上、外記史立其後云々、外記史同従、東面上卿當揖一揖面人云々、此説不見旧記、或云、出立如例、上﨟退出、一揖云々、可尋、○中略

官政略○中

不著侍従所参内儀延長八年四月一日記、依穢雜事上卿、

外記史列立春花門前西邊、東面北上少納言弁入自同門、列立烏曹司前、西面北上参議以上列立左兵衛陣前、西面北上上卿相對揖之、

〔洞院家部類十二〕外記政次第

官廳外記政儀略○中

入内

外記政例

上卿大弁等參内著仗座、次大弁申可見申文之由、〈近代氣色〉上卿揖許、

大弁起座、著床子見申文、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年六月十七日壬辰、是日太政官候廳前、晨見鬼跡、所謂候廳者、公卿聽政、外記所直侍之處也、

〔今昔物語二十七〕參官朝廳弁爲鬼被噉語第九

今昔、官ノ司ニ朝廳ト云フ事行ヒケリ、其レハ未ダ曉ニゾ、火燈シテ人ハ參ケル、其時ニ、史□□ノ□□ト云ケル者、遲參シタリケリ、弁□□ノ□□ト云ケル人ハ、早參シテ座ニ居タリケリ、其史遲參シタル事ヲ怖レテ、忩ギ參ケルニ、中ノ御門ノ門ニ辨ノ車ノ立タリケルヲ見テ、辨ハ參リニケリト云フ事ヲ知テ、官ニ忩ギ參ルニ、官ノ北ノ門ノ内ノ屛ノ許ニ、辨ノ雜色、小舍人童ナド居タリ、然レバ、史、辨ノ被早參ニケルニ、我レ史ニテ遲參シタル事ヲ怖レ思テ、忩ギテ東ノ廳ノ東ノ戶ノ許ニ寄テ、廳ノ内ヲ臨ケバ火モ消ニケリ、人ノ氣色モ无シ、史極テ恠ク思テ、辨ノ雜色共ノ居タル屛ノ許ニ寄テ、辨ノ殿ハ何コニ御マスゾト問ヘバ、雜色共、東廳ニ早ク著セ給ヒニキト答フレバ、史、主殿寮ノ下部ヲ召シテ、火ヲ燃サセテ、廳ノ内ニ入テ見レバ、〈略〉○〈中〉而ル間ニ夜曉ヌレバ、人多ク來リ集テ見騷ケリ、辨ノ頭ヲバ辨ノ從者共取テ去ニケリ、其後其東廳ニテハ、朝廳ヲ不行ザリケリ、西廳ニテナム行ヒケル、然レバ公事ト云乍ラ、然樣ニ人離レタラム所ニハ可怖キ事也、此事ハ水尾ノ天皇〈清和〉○ノ御時トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔三代實錄清和二十四〕貞觀十五年十一月三日甲子、太政官候廳成、此廳在帝宮建春門東、大臣已下尋常聽政之處也、始營之後、積代破損、命木工寮加修理、先是大臣已下於太政官曹司廳視事、今日始就候廳、公卿會飮、五位已上並侍、終日酣飮、極歡而止、以廚家及大藏省錢、給預席者各有差、

〔年中行事祕抄正月〕外記廳起

國史云、清和天皇貞觀十五年十一月三日甲子、太政大臣〈○大臣二字當作官一字〉候廳成云々、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月十九日戊戌、是日就太政官候廳〈○聽謂外記聽也〉常政、

〔本朝世紀〕承平五年六月二日乙丑、中納言藤原扶幹卿、參議藤原當幹朝臣聽政、參議左大辨平時望朝臣著結政所、新後左大臣參入、　七日庚午、中納言藤原扶幹卿、參議藤原師輔朝臣聽政、　八日辛未、中納言藤原扶幹卿、參議源清蔭朝臣、藤原師輔朝臣聽政、　九日壬申、中納言藤原扶幹卿、參議左大辨平時望朝臣聽政、　十日癸酉、中納言藤原實賴卿、參議源清蔭朝臣聽政、但實賴卿始聽政日也、

十三日丙子、中納言藤原實賴卿、參議橘公賴朝臣、藤原師輔朝臣聽政、　十四日丁丑、中納言藤原實賴卿、參議橘公賴朝臣、藤原師輔朝臣聽政、　廿日癸未、中納言藤原扶幹卿、參議源是茂朝臣聽政、

廿一日甲申、中納言藤原扶幹卿、參議藤原師輔朝臣聽政、　廿三日丙戌、中納言藤原扶幹卿、參議藤原當幹朝臣聽政、　廿五日戊子、中納言藤原扶幹卿、參議源是茂朝臣聽政、　廿六日己丑、中納言平伊望卿、參議源是茂朝臣、平時望朝臣聽政、有申文、此日伊望卿始聽政日也、

〔左經記〕長元元年八月四日丙寅、余申殿云、改元後依日次不宜、十一日以前不可始外記廳政、政始之實、行定考如何、仰云、不行外記政之以前、官政不可有、定考延日可行歟者、申可然之由、今朝外記物忌云々、丑未御衰日、余日々或重復、休日等也、仍所延引歟、及未剋歸、

〔定家朝臣記〕康平元年二月九日、召奉秀被問中納言殿〈○藤原師實〉初被著政日、〈康十三日甲寅〉殿下寬弘年中、四月三日甲寅、初令著給、　十三日、中納言殿令著政給、去八日依御衰日不令著給、　三年七月廿日、二位中納言〈○藤原師實〉被申大殿〈○賴通〉云、日來外記結政屋、加修理之間不行政、今日欲行政、而興福寺別當官符可請印也、大臣被任之後、最初政行僧事如何者、不可有憚由被示仰云々、

故入道殿〈○藤原道長〉長德〈○一〉元年六月十九日任右大臣、廿一日依太宰府申、停管國吏耆務、官符行結政請印云々、

四年十二月十三日、酉剋殿下〈○藤原師實〉可令任太政大臣給由有勅使、〈○中略〉今日別當被申云、今日令行奉行政、立春以前欲行著鈦政、而下名已前不行外記政、自茲難行廳政、欲隨御氣色者、立春已後著鈦例儀令勤之、可有左右歟、仍今日政令延行了、

〔永昌記〕大治元年正月十九日乙酉、有政、上卿新中納言、宰相中將家輔、予、〈○藤原爲隆〉右中弁、右少弁等參、史兼孝申文二通、〈阿波鉤文、大隅國實錄帳、〉官掌結申、爲頼結南文、予著廳請印之後、著南所、兼孝申文、伊賀解由、大隅實錄帳、事了分散、參新院、　三月十六日壬午、今日請政也、少納言忠宗初參、仍申行也、上卿源納言、予同車、參結政所、弁少納言未參、暫令相待、良久右少弁宗成參、著座相待、頭爲頼差荒文、〈宿面不參〉新史重兼先呼文、差左一、兼孝結、式日申文、重兼申文三通、〈馬料、鉤文、今一通明經得業生續文、不合、仍仰其由了、〉召使來催、官掌結申、爲頼答申文有之由、弁侍申時移、爲頼結南文、〈馬料、鉤文二枚、史[illegible]三枚、〉侍從所申無菜之由、重仰可勤之由、次著外記廳申文、〈少納言、弁一人、外記史□□〉著床子、宗成結申、〈忠宗、北床子著、〉史等次第申文宜如恒、次忠宗入參、外記覽官府、史生請印、上卿與奪又如恒、少納言不唯、未練之故歟、印了出立、弁少納言西立、外記史北立、官掌後立、卿相出時追前、予先出、立樹西一揖、上官答揖、〈可參乎〉上卿先揖弁少納言、次揖上官、次參議、予答揖、左廻副垣向南所、同內推立留、上卿相揖、於少屋改淺履、次著座、弁召大舍人、次居饌、次史申文、次著、次汁物、次新少納言勸盃、次予召上少弁擬盃、弁復座擬少納言、南所例也、各退出之、門外又卿相相揖、於陽明門出立、今臨時祭欲歸參之間、事及終頭者、病之無術、仍歸蓬門、

〔百練抄 六崇德〕長承三年四月廿五日、外記廳、結政、南所、修造之後有請政、

〔宇槐雜抄〕保延二年十月十六日庚戌、今日予〈○藤原頼長〉著座之後、始參政日也、〈從大炊御門亭參也、〉早旦以俊通爲使、問作法內大臣、俊通來之後著裝束、先是從大殿被仰云、著座之後參政日、令勘日時乎云々、不勘、早召陰陽師宗憲可令勘也、次宗憲來、令勘日時、著裝束了之後、見日時勘文、予問顯憲云、此勘文不注剋限事也、仍不注也、〈顯憲爲持來日時勘文、此日補家司也、〉見了後返給顯憲、顯憲持參大殿、次乘車、剋限雖可參、巳午剋歟、

發東圍邊々賦車檳榔、隨身褐衣胡六、臼狩袴、（下臈也）隨身上臈厚則依為御當、以番長下毛野武道為假隨身、從高倉至大炊御門、從大炊御門至東洞院、從東洞院至中御門、從中御門至堀川、從堀川至近衞、近衞ヲ西エ行テ、陽明門當南戶下車、供人使通取沓、這間隨身下臈步行、從陽明門南戶隨身走ル、入陽明門、暫行間、依南下令前驅指笠、近衞ヲ西行、至壬生大路間、垂南雖下笠ヲ引ノケシム、（今朝內府始政也、而不參外、仍無二ヶ同、被行也、）隨身在後、召使前行、次著左衞門陣、（隨身留陣前、在後、）著左衞門陣之間、左兵衞督宗輔、大貳實光、石階下下立、（陣內也）過前之間、予下尻相揖、昇從北面東第一間之履脫著座、予欲登從履脫之時、不揖、（是失禮歟）次左兵衞督、大貳等著座、次召使申時、此時左兵衞督云、召使アマリニ時トク申、上卿著座（天、）頭之コソ申ヽ、左兵衞督、申刻限召使ニ問曰、人々ハ參タルカ、（人々參否、上卿ノ尋事也、問欲左兵衞督內々尋也、）召使歸來云、皆人々參入、左中辨一人未參、（左中辨ト云ヘ、雅公行也、）次予召召使、尋人々參否、召使歸來云、皆參、予仰召使云、曳戶ヶ、召使曳戶、予揖起座著沓、沓脫ノ下ニオリテ、又揖入外記門、隨身發前聲、召使前行、左兵衞督、大貳相從入外記門、從廳西庇中間入小屋、前驅盛定持深沓來、凡盛定外外記門中、前驅隨身等不入、著深沓之間予見扇次第、著了後出從外記門、次予出小屋、左兵衞督、大貳等廳西庇內列立、（北面）次予出小屋南向ニ立テ相揖、入從北面中戶著倚子、（從座下方著之、揖如常、）次左兵衞督、大貳等著倚子、此間予見扇次第、

申文次第

少納言一人、（後闕）辨二人、（公行、雅兼、）外記一人、史三人、入自西廊西戶、列立庭中版位、（六位在後）立定之後、予仰云、召（爪、辨之高聲、少納言令聞辨也、）同音稱唯、各著床子、辨公行起座申上、（予無音、少辨見遣辨方、）辨少納言、外記史等稱唯シテ著床子、次上臈史起座申上、（其書給國云、其書ノ中文ル、）其書讀了、其後史見上予方、予仰曰、與之、（微音仰也）次史稱唯、外記助音、又第二史起座申上、（其書給國云、宣ノ書七ノ中文ル、）予仰云、タマヘ、史稱唯、外記助音、次最末史起座申上、（其書給國云、宣ノ內書中文ル、）予不答、（失禮也）史存テ稱唯、外記助音、內大臣ノ給、予次第ニ、史二人起座申上之由見タ

リ、仍不答、次辨少納言、外記史等起座、經本路退出、其後予問左兵衛督宗輔云、内大臣次第ニ、二人ト見タルニ、史三人申上、如何、被答云、予始參政見候ニ、史三人申上也、二人儀未見、内府ノ爲著座上卿之時、所被相具次第ヲ被與、宗輔其史三人之由見タリ、第三史起座申上ニハ、上卿返答タマヘト候也、

次官符請印

少納言一人、外記一人、（外記持官符筥）史生一人、（持印盤）外記進來テ筥ヲ置上卿前机上、外記著床子之後、予笏ヲ插在尻下、以左右手引寄筥、一々見書、（書有數枚、書ノ奥ヲ以紙ヒ子リテトヂテ端ニ押指也、）皆見了後、先遣見外記方テ、次筥ヲ以左右手押遣テ取笏、外記走來テ取筥、置印盤ヲ案ノ南頭ニ、立テ召史生名、史生走來、取筥置案上申上、予仰云、七ヒ、史生稱唯請印了、史生又申上、上卿遣見少納言方、仰云、タマヘ、（微音云也）少納言揖沓、微音稱唯、次少納言、外記史生等退出、次大貳起座、左兵衛督起座、頃之予起座、（座下方ヨリ立也）出從中戸テ、西行テ出從廳西庇中間、出外記門、（此間召使相從）出外記門之時、門ノ北ノツラヲ出也、當門北柱西向立、去北柱事三四尺許也、先揖辨少納言、辨少納言答揖、次向戌亥揖外記史、（少納言ノ揖ツルヨリハ淺ク揖也、）外記史答揖、次向南揖左兵衛督大貳、（辨少納言ノ揖ツルヨリモ、フカク揖也、）左兵衛督大貳答揖シテ南行、經樹東、予同經樹東行、召使相從、隨身發前聲、先下臈ヲ行也、次入南所門、次左兵衛督大貳等門中南ニ列立、（北面）予入門時、隨身等留、入門向南揖左兵衛督大貳等、人々答揖、次從屋西砌北行天、入自北面第二間著淺沓、（臺定持來淺沓、）（令ニ書吹、深沓脱出了、凡門中ニ前驅隨身不入、）入自西戸、立沓脱下、揖テ昇沓脱上、脫沓テ著座、（南面西上）次左兵衛督大貳等來著、次辨少納言來著南庇座、（東上北面）少納言召大舍人、令居饗、大舍人居饗、召使役送、

申文

史取文杖立東壁下、予左顧目史、史稱唯進來、予向西、（内府所被送次第云、向未申取文、雖然予偏思、偏書會東廊申文、平座申文、皆座ノ上方ニタルハシタ向ニ、差南所何スサカクヘキナ、仍向西也、）次笏ヲ置右方、取文史走歸、予右顧見史、史立定本所小揖、（内府給予次第、可左顧之由見タリ、）

南向西、圖欲左圖、凡□版之間人、予見史下、但北山抄云、如見左圖、以テ見史、然者圖可左歟、史則著床子、予置文於前、先披表紙、推遣文於右方、一

一取文披見テ置左、以左了、把文、以右手引取懸紙テ、展テ置座端、引懸紙之時、今合有聲、此時史走來テ取上紙テ

引寄、長押端磬折シテ立ツ、次予見文、給史、史結申、予少揖、史稱唯、今度給史文、爲ニ覽文、仍申給ヘト可、西揖、是少失禮也、次又見文

テ給史、史結申、仰云、申給ヘ、依爲返文、申給ヘトム也、史稱唯、次予見文、給史、史結申、予小揖、史稱唯、依爲ニ揖料、揖也、皆結了、

史稱唯シテ退出、予取笏向南、此間非參議大辨實觀起座、入先例也、立座間可立也、次著下、次居汁、次居湯、大貳取

笏、申上汁了之由、辨少納言座ニモ居了之後、可申上也、次人々飯ヲ汁ニツケテ食、次飲湯、以箸攪間シテ飲也、

不上湯攪也、此湯ヘモ□□小飲入事也、今日以土器湯過、時□□飲之云々、次少納言俊通勸盃、予受盃傳左兵衞督、此間少納言俊通取酌、

左兵衞督傳大貳、大貳目左中辨公行、公行來居大貳前、大貳傳公行、公行插笏、取盃歸座、此間少納言

俊通歸著座、公行傳俊雅、俊雅傳俊通、俊通流巡了、辨少納言起座、次予起座、左兵衞督起座、大貳起座、經本

路出門、今度ハ上官前行也、當門北柱西向立、揖辨少納言、辨少納言答揖、予經本路退出、此間隨身發前聲、召陣

前行、左兵衞督、大貳、辨少納言、上官等相從、近衞ヲ西折之間、前驅可出陽明門外之由、是先例也、左兵衞府ノ小門下

ニ當テ立留テ可也、前驅也、是知見事人、雖仰也、近衞ヲ西行ク、當左兵衞府小門下、下簾尻、少東行、更向西立、左兵衞督云

陽明門出立ハ、陽明門南戸端ヲ去、西四五尺許、上臈立也、仍予如然立、西面左兵衞督、大貳、辨少納言東

向立、予揖人々、皆答揖、次出自南戸、乘車、車副不知案內、習著座之時、立車於中間、此事不可然事也、仍

予令引車於南間乘也、次參內、從近衞至堀河、從堀河至中御門、從中御門至烏丸、從烏丸至二條烏丸

辻、車ヲカキオロス、暫待上官等下、後予從車下、俊通令著沓、二條ヲ東行、至東洞院、東洞院ヲ南行入

南四足、經床子座前著陣、具座、實光卿來著、於宗輔者不參、次予移著端座、次召官人令置軾、其次令直沓、次左

大辨實觀來著、此間大貳起座、實觀申云、申文、予目、實觀微音稱唯、左廻、史捧文杖候小庭、予目、史稱唯、

來、跪進文、予置笏於右、取文、史揖後予置文、次披表紙、推遣文於右方、毎見了置左、引取上紙、置座端、史

取之置前、次一々文ヲ少披見給史、史毎度結申、鑑文二通ハ申給ヘ、馬料一通ハ小揖也、凡闕ニ南所、但鑑文之時、忘テモ揖事ハナシ、史皆結了

後退出、此間予取笏、次實親起座、予招實光卿、實光著座、予問云、今ハ可出歟、實光云、然、仍退出、

〔百練抄 十六 後深草〕寶治元年七月廿三日甲戌、晴政也、一條中納言公持卿已下參行、雖爲弁二人有申文、

無外記政例

〔扶桑略記 二十三 裏書 醍醐〕昌泰四年〇延喜元年五月廿五日丙午、此十箇日許、公卿不參、又外記、左右辨、史等、皆依咳病不參、仍无外記政、往古近來未有此例云々、

〔本朝世紀〕承平五年六月一日甲子、上卿不參、仍無政、衙後、左大臣〇藤原忠平參入、　三日丙寅、上卿遲參、仍無政、　四日丁卯、上卿不參、仍無政、參議左大辨平時望朝臣、著結政所、　五日戊辰、中納言藤原扶幹卿、著左衛門陣座、而參議不參、仍無政、　十五日戊寅、參議源是茂朝臣、藤原師輔朝臣、著左衛門陣座、而上卿不參、仍無政、　十六日己卯、參議藤原當幹朝臣、同師輔朝臣、就左衛門陣座、而上卿不參、仍無政、　十七日庚辰、中納言藤原實頼卿、著左衛門陣座、而參議遲參、無政、　十九日壬午、上卿不參、仍無政、　廿二日乙酉、上卿不參、仍無政、參議左大辨平時望朝臣、著結政所、　廿七日庚寅、上卿遲參、仍無政、

天慶元年八月廿七日辛丑、大雨快晴、洪水溢、諸卿不參、仍無尋常政、

政始名稱

〔名目抄 恒例諸公事〕政始(マツリコトハジメ)

官政始

〔北山抄 一 正月〕官政始事

御齋會後、外記申一上、令勘其日、若有內宴、其後申行、

〔洞院家部類 十一〕政始次第(官廳儀、納言上卿要)

著束帶參官廳(蒔繪太刀、無文帶、相具深沓、或靴、)

待賢門下車入幔門、西行至櫛匣小路、(是達九條殿餘流說)南折至東門、

左衛門陣代座(以東廳北面一二間爲其所、西上南北面、)

上卿入幔門、自廊北柱外西行昇北面、脫沓著西一間座、(南面兩撰如恒、件座儲假板敷也、正治二十八政、笨頁歸如此、或入第三間、於假板敷來撰、脫)

（舍西行、著奥座北面、）

參議著奥座、或端、

中時已無召使者、以官掌爲代、

對問議者不申之例也、或對偽申之、

密々召召使、（近例）問廳事具否、（往古以上召召使、）

參不聞之說也、但事了者可申之由仰之後、不可有難歟、

歸來申座事畢之由、

是辨侍時移從西廊座向西廊方、上卿以下著廳、（無召使引戸儀、）

儀起座著沓出南外幔外、（召使褰之、）廳中西行後房登廳南腋戸正廳後、并西廊北面庭中、（以西廊北面爲結政座、其子午廊南一間西面設小壁代、爲改沓所、有二知親并廳身人、其間一人可役也、）

（歸立四無、仍開便外也、）入外記門代幔門、（召使道前、先[illegible]）

南行於西廳乾邊改著深沓、（小舍人取[illegible]、可[illegible]此間、）著畢

右廻廊西邊出、揖位次卿、（先是位次卿列立午廊西邊、東上南面、）揖畢左廻南行、入廳西面中央間、（大臣南戸、參議北戸、）著座、（南東面上、）經

我倚子下方（諸卿就座間也、）出前揖著之、位次人改沓著座之儀同前、（各不少揖于倚座、又雖暑熱不用扇云々、）

若無位次人者、上卿以召使告大辨宰相可著廳之由、（但政始之日、無其告、必著廳也、）

申文

其儀少納言一人、弁二人、少外記一人、史三人、入子午廊戸、列立庭中版位、（官次南上西面、異位重行、）上宣召、（各立爪、微音、以使正爲宣之、）少納言弁同時稱唯、微音、外記史又同時稱唯、高聲、少納言弁昇東面北階著座、（件床子在東廊北第二間、與北柱下、廳西上南面、安式云、無揖、下揖、皆自前著、保安三名三位揖、）

外記史入自北面、著辨少納言後長床子、（揖[illegible]）次上臈辨起座、座、（或作居、）（官厩之儀猶宜歟、）[illegible]、執法申、（其詞云、司司ノ申セル政申給フト申云々、）

云、

印居　上﨟無答

第一史起座、揖笏讀申文、（民部省）

上宣、緘（ヨシ）

辨少納言廉執稱唯、（微音）（不言、保延暢記云、申文稱唯、外記助音之者、）音頭外記申文等又稱唯、（高聲）第二史起座、指笏讀申文、（民部省、或宮內省、然者上宣給へ、）

　上宣以下如先

第三史讀申文、（宮內省）

　上宣給へ

　辨少納言先下﨟退出、（經東廊由、自北面、）

次請印

其儀少納言一人入廊戶幷北面、經東廊著第一床子、少外記捧筥文、經同路置筥於案上、直著床子北面、

史生取印盤相從、置机上退出、

上卿插笏於左尻下、（常例人置右方、）以右人差指引寄筥、（保延二十六、暢記云、以左右手引寄筥、）先取筥文、置筥外右邊、若有毀符者、置筥左、（本儀置之）次以右手（或用左手歟、西宮首書記、）乍筥內一一返見枚文、（就筥文也、文奥以紙捻閉重之、一重押折テ置之、等披見畢置筥右、縫披サマニ見之、見了一度押帖之也、若有落散文者、故實不取見、是爲風被吹落之類也、但急本可有用意、今案以左手輪可押歟、爲不落散也、）見畢如本帖之、次見卷文、（取上見之）如元置筥內右方、次見毀符、如元橫置文上、了以左右手頗推出筥、取笏見遣外記方、（西宮首書如此、或先見遣外記方之後推筥取笏、北山如此、）外記起座、直至上卿前、插笏屈行進來、

若有難書者、上卿縣右食指於筥、外記拔笏跪候、上卿仰難旨、（北山抄云、仰其文可停之由、保延五五十七暢記云、予見出難書一枚、仍折件枚續下要、此事北山抄無、外記錄行歟、取筥之此謂無指、間、予以右人指鉤筥下耳、外記拔笏候、予仰難旨、作法云々、）

外記取筥退立印机下、召史生名、（一音）史生參上、外記授筥於史生、史生揖笏取筥、置請印机、披文展置

机上、取筥退、弁申云、枚文若干枚、卷文若干卷ヲ印刷ス、上宣、刺セ、
史生稱唯、跪案下捺印、
次史生進立、申云、印刺ヌ、
上卿先見遣少納言方、後仰云給ヘ、
少納言磬折稱唯、
史生跪案下、入文於筥、授外記、外記帶筥取、筥立、史生取印具退出、〈出戸、經廊〉
外記聞史生音聲、捧筥右廻退出、
少納言同以退出
次上卿以下同時起座、〈上卿先可起、大夫人歟〉揖右廻出、從戸經本路、出外記門、〈先下臈也〉
若弁以下退出者、暫留廳後、〈今案、上卿當中戸ノ、西面、大夫立就角、南上西面、〉

外記政始

〔撰塵集上年中行事〕正月外記政始事
御齋會終日、外記令撰吉日、申殿下之後被宣之、十六七日間歟、避御衰日幷執柄衰日歟、
〔年中行事秘抄正月〕始外記政事
〔公事根源正月〕外記政始
これは吉日を撰びておこなふ、まづは九日なるべきなり、上卿以下位次の公卿あるおりもあり、事相廳につく、これよりさきに辨少納言外記史かたなしにて事をこなふ、上卿召あれば大辨も廳につく、かたなしの事はて、南の所にて勸盃あり、いでたちとて、出ざまに各作法あり、事はてて、參内して左近陣につく、外記は恒例臨時の政を執り行ふ官なるによて、正月には先づ當年の政を行ひ始むる意なり、檢非違使の廳の政をも同じく今日はじめ行ふ、〈〇又見建武年中行事〉

年首政始

〔日本紀略三十一上〕天曆元年正月廿五日辛亥、政始、右大臣〈〇藤原實賴〉著廳聽政、　二年正月廿三日癸酉、始

政、　三年正月廿五日己巳、政始、

〔日本紀略四村上〕應和三年正月十六日己巳、政始、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年正月廿二日庚子、政始、

〔日本紀略六圓融〕天祿元年正月廿二日甲子、政始、　三年正月廿二日癸丑、政始、

天延三年正月廿日癸巳、政始、

〔日本紀略七圓融〕天元元年正月廿一日丙午、政始、　五年正月十九日壬子、政始、

永觀元年正月十七日甲戌、政始、

〔日本紀略九一條〕永延元年正月廿五日戊子、政始、　二年正月廿日戊寅、政始、

正暦四年正月廿三日壬子、政始、

〔日本紀略十二三條〕長和元年正月廿日戊子、政始、

〔左經記〕寛仁二年正月廿一日乙卯、參結政所、今日政始也、按察大納言申文請印事畢、引被著南所、所監依例設垸飯、一獻了引被參陣、午後分散、

萬壽三年正月十七日乙未、參結政所、依政始也、○中略 時剋上卿以下著廳、次結政、作法了、（大辨以下著官符、辨詣南申文也、）左大辨立座著廳、次兩少丞立申文儀等、皆如先例、事了、上卿以下著南所、（藤納言有障、不著座退出、）申文食了少納言經長勸盃、至于源納言取次酌、（依父子儀歟、）事了引入內、

〔小右記〕萬壽四年正月十九日辛酉、今日政始、中將來云々、參內未三剋、諸卿參入、（大納言頼宗、中納言道方、師房、參議經通、資平、定頼、廣業、朝任、公成、）今日依吉日、仍令申文、左大辨定頼、右大史行高文三枚、（能登國上、大外記爲時馬料文、）其儀余著南座、大辨著座、敬屈云、申文、余小揖、大辨稱唯、見遣史方、行高持書杖跪候小庭、余自稱唯、著膝突之時、取置座披表紙、以笏置紙左端、搔遣書於右方、一一取見置左方、如元卷置板敷端、史給一一結申上文書仰申給へと、馬料文唯自每度稱唯、如元卷、以杖置書上趁出、大辨起座、參著奥座、定申定頼書、了卽付左中

辨經觸令奏、

〔左經記〕長元元年正月十四日庚戌、今朝大外記頼隆眞人、令余申關白殿云、官政始日時、先々奉御氣色令勘申者也、隨仰令勘申者、被仰云、任先々例可勘申者、四年正月十九日丁卯、參結政、有政、(今年始有政也)中文請印等了、上以下移南所申文食了入内、廿一日己巳、侍從中納言被著政云々、是去十九日政始之日、雖被參入、被日東宮大夫爲上卿、與家文書、仍今日重著、令申吉書之後、明日可被下諸國不與狀云々、余(左中辨)卿有障、不參入、昨日余申殿云、去月追上卿依不參入、無三番申文、仍諸國不與狀等、多依不下、舊吏等歎申之由云々、如此之時有御氣色、一日政、有被下兩三卷狀帳之例、爲之如何、仰云、未可然、上卿可申行者、歸里之後、以史奉政、有御氣色之由、令申侍從中納言、從明日三箇日可著之由有返事、

〔小右記〕長元五年正月十七日己丑、先日大外記文義云、射禮日、政始、已有其例、

〔左經記〕長元八年正月十五日庚子、天陰降雨、病者雖有、依爲政始、參結政、史等來著座、申云、依甚雨政始不定者、仍因指貫之間、左中辨經輔參入、觸此由、件相片廂中之間、大夫外記頼隆眞人參入云、今朝權大納言御消息云、今日政始甚雨之内、聊依有障參入不定者、仍令申有御障、儲承其由、令催申他上卿者、即被仰云、寄他事只今可參入者、必可有也者、仰史等令著座、次余著南中辨次第著、義賢朝臣荒文、插杖置之後、配廳申文、被見配一枚、下二枚、卷置打板上、季信結廳申文、卷置打板上、次少史頼政申文、(鑑文二枚、馬料一枚)此間義賢朝臣申文於南辨、(先例)中文了、右少辨參、義賢申文、次史生持來可署文、即署之、中少辨同署、其儀如例、頃之左少辨著、申文署文如前、次左大辨被參致親申文、史生取署、頃之上權大納言宰相左宰相中將被著廳、官掌問申文、義賢云、有官掌令史部告申有文之由於外記、次義賢結南申文了下之、頼政裹懸紙置文東上、次左大辨著廳、余同著之、少納言頼祐、(今年四位)率少辨二人出自南腋戸、立廳北第二間、(北上、東面)外記貞義、率史三人列、其後、上召少納言辨徵唯、外記史高唯、次第著座、申文如

常、次少納言經成著座、外記覽印文、請印如例、事了上以下被著南、預居盤、次申文了、所盤居汁物等、次少納言經成勸盃、（取次的）次食了引入內、頃退出、

〔經信卿記〕承曆五年（○永保元年）正月十七日乙巳、今日政始也、御齋會竟日時云々者、來廿三日可有政始者、面彼日可有大饗云々、仍被改今日歟、大外記貞俊異人云、大饗日有政始、其例所候也、然而右府（○藤原俊家）被仰改日可申行由、仍以改定畢了、射禮日口治安之比所候也者、巳刻參內、著右衛門陣座、人々未參、良久之後、別當參著、又左京大夫參入、其後辨少納言參入、午刻令奧戶、入著、始政有申文、（少納言基綱、頭辨師賢、左少辨季仲、此外外記一人、史二人如常、）畢次請印了、次著南所、他參議并左大辨、次少納言先著、喚大舍人、舍人稱唯、居上達部前盤、次史申文、次予目參議立箸、次少納言喚大舍人、次少納言起座、昇自巽橋居長押下、取盞來居予前擬之、飮了又酌授予、（少納言取二種的）予擬別當、別當仆箸收笏、起座進來受之、插笏取盞歸座、擬左京大夫、（少納言退去）大夫擬左大辨、大辨目頭辨、頭辨進來受之、取盞歸座下、畢、（勸盃少納言又飮如常）次大舍人居汁、次食畢、但渦不居、更令居、次仆箸、辨少納言先退去、次予起座退出、出待從所小門、揖辨少納言、（基綱覽立人後）參內人々固前、於陣有申文事、次退出、

〔中右記〕嘉保三年（○永長元年）正月廿日辛亥、政始也、早旦參結政、頃而左右大辨、權右中辨、左右少辨參加、少納言惟信、成宗參入、史盛忠、惟象申左大辨於文、（結文）又次々辨等座、次史成俊覽文、（同）次史生相分進吉書於左右大辨、皆被加署、又次々辨等各加署、此間上卿被著廳、民部卿、左衛門督、右衛門督、皇太后宮權大夫、南申文結了後、左大辨又被著廳、民部卿、左衛門督、右衛門督、皇太后宮權大夫申文、左右少辨、少納言成宗、廳事少納言惟信、事了被渡南、右大辨被退出、（○中略）予參殿下、藏人少將宗輔、初依申吉書也、權右中辨重資朝臣、新藏人雅職、又申吉書來加、頃而於小寢殿南面殿下御出、先權辨被申、（遲昇之後被申之）次藏人少將（兩度被申、初內藏寮申宣旨、結申、次近江國大功解文、不結、）次新藏人雅職、（一度申之）其次予內覽、

嘉承二年正月十五日壬寅、今日有政始云々、右衛門督（宗）藤中納言（仲）參仕、是依無著座參議也、左大

辨(兼)右大辨(時)權辨(資)左右少辨(實)少納言一人(時)(依)參仕、次節如常、渡參陣、有申文云々、(後聞申文略儀、其後雨下、)無(止)由(宜)評(云々、)

天仁元年正月十六日、天陰雨下、依有政早參仕、(政始間儀、猶不可行、但來廿二日除目云々、其間今日之外無日次、還內、殿下御宜日、戊由日也、以今日必可書行也、又問合左大辨之許、處、返事云、雖日行結始事先例間存、)於陽明門下、藤宰相顯實相逢、具先著左衛門陣、(予南面、相公北面、)召使申時、則尋辨少納言參否之處、(略)○(中)召使來云、外記史生參了、仍令引月、

天永二年正月十五日、依政始催、巳時許參入、(略)○(中)今日人々多被遲參、政所始之日、頗不便歟、就中右大辨遲參之間、廳事了之程也、史覽之、稱唯之聲、官符請印欲終之程也、甚違亂可謂不便歟、官政始之日、輪弃遣使廳政必始事也、而今日無使廳政云々、頗奇怪歟、　三年正月十五日癸酉、依有政始、巳刻參仕、先左大辨少納言宗兼參入、予著左衛門陣座、(略)○(中)予著廳、左大辨同著、少納言定通、右中辨爲隆朝臣、藏人辨雅兼、外記一人、史三人立申文、(六位外記不參、仍以官外記申請立申文、)次節如常、次請印、(略)○(中)今日無使廳政始如何、

永久六年(元永元年)○(元永)正月十五日戊戌、有政始、依催早參、衙右大辨(長忠)權辨(伊通)左右少辨實光、師俊、少納言宗兼、公章參結政、召使申時、史生遲參之間、巳及午剋、早可催由、以召使仰外記、許、史生巳申參來由、仰召使令引月、予著深沓著廳、大夫史結南申文、乗遙聞、頃而左大辨著廳、申文、少納言宗兼、左右少辨、外記一人、史三人列立前庭、予召之、次第著座了、史申文之間、失禮甚多、不待上卿仰唯稱、上官等不習作法、甚奇怪也、次請印、少納言公章、事了於外記門前出立、而左大辨立南樹之南頭、不似先々、如何、於南所申文之後食事、少納言公章勤盃事了、於南所門外幷陽明門內、有出立、渡參陣、依政始有申文、

〔長秋記〕

元永三年(元年)○(保安)正月十六日丁巳、今日政始也、仍巳時許參著左衛門陣座、右大辨顯隆(散三位)新頭辨(伊通)右少辨(師俊)少納言(宗兼公章)參入、而左大辨相公遲參之間、暫相待、召使來申時、有數剋、左大辨長

忠參入、(此人々、迎參如何、每度)辨侍提圓座入外記門、仰召使令曳戶、入從外記門著深沓、著廳、予傍左大辨、結政事了加著廳座、(中略)○此後右大辨顯隆出結政、直參內也、不著南所、此事可尋先例也、(中略)○史盛安申文、(鈎文三通)見了文置笏立箸、少納言宗兼召大舍人、居汁物、食了少納言公章勸盃著、(下略)○

〔永昌記〕大治元年正月十七日癸未、政始也、仍參結政所、上卿新中納言在左衛門陣、左中辨實光朝臣、右中辨師俊朝臣、少辨宗成等、兼參著、予入著、(召使追前、官掌相次、)起居小揖、史等答揖、政重宿禰、義盛朝臣、(去五日叙爵、位記筥、)爲賴、友重、行政、兼孝、時兼、孝重等在座、孝重喚文、差行政結式日申文、孝重來予前、(式部省申、明經得業生行忠課試文一通、安藝國鈎文一通、右大史爲賴馬料一通、)次吉書、(輸領入官)中辨覽鈎文、覽中少辨同前辨傳、申時結申、(官掌稱之、宿禰答、)次結南文三通、次著座、(仰下)少納言忠成、右中辨師俊(四位)少辨宗成、外記、次平、史友重、兼孝、孝重、列立廳庭、上宣召師俊、先著床子、(依四位也)次忠成、次宗成、外記史著壁下、師俊朝臣結申、乍居摩靴、史外記高唯、次第申文、上宣(兩度與之、後結之、)唯、(同音可稱之由、先々下知、然而獨加外記一人唯、)各自下起座、次又少納言忠成入著床子、外記高行、史生賴高參入前庭、賴高置印於案上、高行覽筥於上卿、著庇床子覽了參進、返給置案上、請印、上宣差セ、次給ヘ、次辨少納言、外記史出立、予立樹北、上卿先揖、辨少納言次揖、外記史次揖、予答揖之後、副垣入門、入立南腋、上卿入門答揖、相公改淺履著南所、予入北門、辨少納言著(於門下直申)召大舍人居饌、史孝重申文三通、上卿以下立箸、汁湯之後勸盃、少納言忠成失也、次予目左中辨實光、昇來轉盃、次拔箸退出陽明門、上卿立留、參議以下出立、次參內、於陣有申文、予稱之、兼孝申文、次退出、(中略)○今日依疱瘡被行大赦、宗光草之、大赦日政始、先例可尋之、

〔中右記〕大治四年正月廿一日庚子、早旦政始、上卿源中納言顯雅、參議伊通、少納言忠宗、左中辨實光、右少辨宗成參勤云々、新女御官符請印云々、陽明門內無出立、是依門頗倒間也、此事如何、渡參陣有申文云々、

〔台記〕康治元年正月十七日辛亥、政始如例、先參院、申斜參、外記實元、聊依病、自本在外記、仍余令曳戶、

直入、又實元依病不出立外記門、於南所、史不申奏儀、依幼主也、著座後、辨等良久不參、召使云、右大辨、左中辨頭外辨不候、予云、外記可注申、六位外記參自西戶申云、大納官政欲申〈間〉大納大夫一人了云云侍ヲ、余云、令申ロ、外記唯退、此間右中辨參如法、有申文、參內後申文、廢人有吉書、

(本朝世紀)久安元年正月十九日乙丑、政始也、廿日、左少史祿親恐惶〈右大辨會〉昨日政始之間、作法如泥之故云々、

(台記)久安二年正月十五日乙酉、政始、巳一剋與敎長同車參、著左衛門陣〈…〉二剋申時、仰令引戶、如事如例、著廳之後申文之前、季成朝參著、南申文加、不與狀問大辨云、政始有人解由不與狀類之例乎、申云、大夫史師經申、有例由入之圖結、申時仰云、下所司少納言成隆朝臣〈…〉所監有親朝臣多失、温座解頤、相引參內、了〈師下 經下 自車〉有申文、廢人方吉書參議敎長朝臣、南所事了向仁和寺、自餘皆參

內

(本朝世紀)仁平元年正月十五日丁亥、權中納言忠基卿、參議公通朝臣參太政官廳、依可有政始也、而兩大辨不參、仍延引、　廿二日甲午、今日政始也、權中納言忠基卿、參議敎長卿著太政官廳聽政、有申文、

(兵範記)保元三年正月十五日丙子、年。首。政。始也、辰剋先參殿下、次參結政、先是上卿左兵衛督〈雅通〉被著左衛門陣、左大辨〈雅〉右大辨〈顯〉右少辨列立外記門外、下官〈依□〉下、據臨其列、次大辨以下率入列、立假政間〈大辨列南北面、上首西、少辨列北、南上西面、下官〉上官自廳西庇進出、經辨少納言前著座、次南大辨著座、次下官進寄伺床子直人著座、次右少辨著頭之右中辨權方朝臣、少納言通能、重雅等、參著結政座、事了上卿被著廳、次申文、少納言通能、右中辨、右少辨列之、次請印、少納言重雅、次外記門出立、右少辨問申文、次上卿以下著南所、左大辨著座之後、下官先著座、召大舍人令居公卿饌、此間右中辨、右少辨門外作法了著座、史申文、次食了勸盃、新少納言奉仕之、右中辨進寄、賜左大辨盃、復座流行、次上卿以下起座、出立儀如

例、次分散、可請印文中、僧文拜阿闍梨、於少納言座抑留了、依爲年始政也、

（愚昧記）仁安四年（○嘉應元年）正月十九日丙子、政始也、未剋著束帶、（例帶、太刀等、）參到陽明門、（自腋宗、宗清、朝宗、護成、）公卿車不見、仍召召使問云、（○中略）早示可有參仕由之旨、下自車著左衛門陣屋、（○略註）即右大辨參入之、外記（參註）予謂召使云、結政座大辨後壁外、召使等列立、（南北行、西面東上、小庭云々、）上卿入外記門、渡小殿北頭之間、追前聞其聲、在座官掌唱鳴高聲、仍下外記南舍蔀云々、而近代無此例云々如何、召使云、近代不候也、召使不知子細候、又上卿不被誡仰候之故歟、予云、件例可有事也者、以召使相尋結政事了否之由、歸來云、巳了者、仍起座入外記門、入西廂中間、於小屋戸前著深沓、入戸內著也、然而依無巳次人如此、（○略註）著廳、（入中戸、著第二兀子、印机間、）即右大辨著座、（政始日、大辨過之、仍予不著之、）次少納言信康、左少辨爲親、右少辨重方、外記一人、史三人、入西戸列立庭中、（六位在後、）立定後、仰云、召ス、辨少納言同音唯、（稱）次外記史同稱唯、（○中略）次一史起座、搢笏磬折披文讀申、讀了、予云、與之、次二史讀申、與奪如先、次三史讀申、予云、給へ、已上每度、少納言以下稱唯、（辨少納言唯著、外記史聞之、）申文了、自下﨟退去、（經座）次少納言泰經著床子、次外記捧筥文、經庭中參進、置予前、左廻著南廂床子、予插笏於右方尻下、以右手引寄筥、以右手一々披見之、了以諸手推出筥、見遣外記方取笏、外記進來取筥、置印机巽、召史生、各史生於西戸外稱唯參入、外記授筥披笏立、史生展置文等於印盤上、以鐵尺置其上、退立、申云、予仰云、刺セ、次請印、了申云、予見遣少納言方、仰云、給へ、次史生納文於筥、授外記、取納印退去、次外記退出、次少納言起座、次予右大辨相共起座出、

（愚昧記）嘉應二年正月廿九日、今日欲參院、而左大辨於臺盤所言談之間、已及黃昏、仍不可參、明日可參也、大丞云、一日政始云々、上卿新大納言、參議左衛門督、六角相公云々、辨官只一人重方許也、申文之時不結申云々、人々奇之、於內裏大納言問此事於重方、重方云、辨官初參政日、（初任、若轉任之後事也、重方轉任之後初參云）云、若有辨一人之者、不結申之由、經賴卿某年記有之、又爲房卿嘉保二年記、同注此旨云々、此事未見不聞歟、尤不審、可尋、辨官初參之時、無他辨官之者、無外記結申（辨官一人候之由可結申）也、爲忽失此事歟、

〔山槐記〕安元三年正月十七日戊午、有政始云々、傳聞、藤大納言(實國)堀川宰相(頼定、任參議之後、年來未始政、今日始云々)、新宰相中將(實家、初度)右大辨(長方、任參議之後初度)(雅頼)右中辨經房朝臣、右少辨光雅、少納言師家、信季等參入、未剋被始行、有所々出立、向南所、參議列立門内之時、酉上、(頼定代、依新參也、雅頼爲上)(上)有勸盃、信季勸之、無初參辨少納言、而有勸盃、依政始歟、先例又如此、然而無可爲者歟如何、陽明門出立之時、宰相等雁列之間、東面云々、○中略

治承二年正月廿日乙卯、今日外記政始也、仍又有使廳政始事、蒙日道志相尋大外記、同日所行也、去十六日節會日、於禁裏召使申政始儀之由、仍午剋可參之由仰了、但上卿被參者、又可告剋限之由仰了、未剋參外記廳、(略)○中仰請印之時、少納言著座之、召使助貞來予(忠親)○原後、密中云、檢非違使重成爲左佐、(先例也)使參入、有申事者、予暫不答、左右史生捺印之時、密々召寄召使問子細、申云、重成中云、左佐中云、使廳政欲始行之處、無可入官書之囚、(十二月十七日、被行非常赦也)(略)先例忽不分明、觸太神宮訴之囚、非赦限之由、追被仰下、(使廳宣旨官符中、十二月廿六日成以前拘留了)則員凡關彼訴被禁在獄、件囚原免之後、未召取官時罪不候獄中人候囚如何者、予仰曰、早可使入候囚也、謹事也、被改了、當時不候獄者、内々儀也、准禁囚使人之可宜者、行外記政之間、成敗使廳希代事歟、朝家文武政、一身兼行公事之間、面目在此時歟、光雅(南)信季(北)外記史等出立外記門外之後、權中納言、右大辨出立、予出門、揖向南所、納言大丞列立門内南腋(大納言外記門)、予入門一許丈、相向納言揖、經侍從所西砌外入北庇、脱深沓著淺沓(在小庭、取淺沓來此所)、著東第二間(先是御座、仍所著也、經之時、今居之後可著也)、不權中納言、右大辨著座、少納言信季著座、即召大舍人、此後權辨右少辨(光雅上)(信季)新少納言等著之、予以下前居氣、權辨催申文、頃之史持書杖立東壁下、予頗左顧目史、史趁來自予右方進文、予置笏於左、披取文持、史趁歸立東壁下、(所也)(勿立)予如見左方、史即可著床子也、而猶立壁下、予仰、可著床子之由、史猶不覺悟、予又問納言并大丞、有不分明之氣色、予猶不見文、大丞示之、令史著床子、納言取出、次第見之、如仰也、史所失也者、史著床子之後、予見文引取懸紙、展而右方長押

上、史趍來立不取懸紙、予示之、令展置長押上、下又如恒、史退歸、手取笏、更又置笏下著、以下應之、信季召大舍人曰、立箸居汁、大辨不申上、(或申上之)予如食汁立箸、卽如飮湯伏箸、無勸盃、　三年正月十七日丙子、外記政始云々、後聞上卿不參、仍頭權大夫(光能)奉仰、催中御門中納言、(宗家)後日彼納言曰、未剋蒙催、仍申云、如儀僕遣召者、定及夜陰歟、年始政始秉燭例不候歟、可被延引歟、可隨重仰者、此良久無音、及晩頭有重仰、仍秉燭之後、著左衞門陣、相共著廳、依夜陰不可有外記門出立歟之由示之、權中納言被答曰、雖夜陰爲年始、猶可有出立歟、仍又令召仕、示合左大辨、(經房)答旨同納言、仍自外記門著南所、大辨不著之、此後無南所幷陽明門出立者、此事夜陰出立不穩、猶又准晝儀、枉可有出立者、無南所出立如何、於陣有申文、大辨不催、權右中辨親宗朝臣令申也云々、

依有外記政始、今日又行使廳政始、右志明基所奉行也、晩頭持來政申文、左權佐光長朝臣、尉中原章貞、源季貞、少志中原淸重、府生大石經弘、右尉中原基廣、少志明基公文左案主笠俊兼參仕云々、依無輕重犯者不免、

養和二年(○壽永元年)正月廿六日丁酉、今日有政始、十四日以後可有年首政始也、而去十七日有諒闇大祓、此後又可有政始也、兩方混合被行之、

〔玉海〕壽永二年正月九日乙亥、今日召陰陽頭泰親、問政始日、(○中略)光長奉行、政始十六日、　十六日壬午、此日年始政也、右大將(○藤原良通)初著行之、(去康治元年未著座公卿、可著行列見定考等常政之由被下宣旨、以來無著座之人、但宇治左大臣及兼長等著座云々、雖被許未著座、幷停止著座、然者事正禮法、雖可遂著座、近年此禮紀了、又無其用、加之余未曾臨官外記之廳、年來恨此事、仍□以依守宜旨所著行也、且是存奉公之故也、)辰刻、大將來此第、著束帶、(色目如恒、蒔繪劍、地平緒、件劍御堂御劍、故今日所用也、笏又大殿御笏也、)前驅六人、(上野守賴高、前馬助國行、散位保行、長俊、兼時、經康等也、嘉保、天永、前驅六人也、)隨身垂袴、壺胡籙也、僕從等來集、雖欲忩參、陰陽師遲參、(泰親朝臣、院御使參日吉、仍兼俊爲代官所來也、)巳剋、僅以參入、其後光長又遲參、已終參入之後、先令勘申日時、入宮、先覽大將、次覽余、(依有政剋限、不點時先例也、)擇申　可參給政日

今月十六日壬午

壽永二年正月十六日　大舍人頭安倍泰俊

其後參衙、左少辨光長遲參、取扈從(嘉保三年有御共、天永三年爲扈從、皆依爲辨官所伺儀也、猶依御共人、宰相中將定能、并右少辨兼忠遲參、各參會路頭云々、)于時已四點也、本初參著云々、而剣歸來、語云、文節無違亂、參議三人(右京大夫基家、左宰相中將定能、左大辨經房、)參入云々、中納言一人不參、後日聞、忠親實守等之處、實守卿爲上西門院御共參、忠親稱病不參、(昨日候御會也、今日不參、其如何、)又少納言事網左右少辨立申文、少納言有家勤請印云々、總及南所儀如存云々、每事無違亂無懈怠、爲悅爲悅、抑宇治左大臣入自陽明門、自門際至壬生、併用北路、而嘉保三年、經小路以西〈經〉路北、以東〈經〉中路之由見江記、又天永自中路多人給之由、見雅兼卿記、仍今日經以東用中路、以西用北路了、參退圖南也、政之間、作法見大將(〇中略)記歟、又改替之處、前關國行、番長厚大等參候、是又嘉保例、前關重仲、番長厚清等候例也、事了相引參陣、左大辨候申文、無藏人方吉書、依嘉保、天永等例也、天喜六年(京官除目)無申文、然而承曆三年(延二)以後、皆有申文、又近代政始多有申文、仍用近例也、

〔明月記〕貞永二年正月十一日丙辰、政始十四日除目廿二日始由、金吾示送、

〔園太曆〕貞和二年正月廿三日、今日自禁裏有御書、是政始、并縣召除目前後、并官。結。政。初參巳前、依別勅政參衙事等也、請文續左、(〇中略)

被仰下候旨、畏承候訖、(〇中略)抑政始、面々故障、以外候、除目中強不可被憚候乎、且先規も少々相存じ候と覺候、可被尋候、官外記候歟、不逢初參辨官參衙事、近例はさる事もや候らん、官爲存知事候、可有尋御沙汰候哉、請印政なとは、爲別勅參衙先規も候はんと存候、於晴政者、爲辨官之者、不逢初參候も、參衙等本儀者不相叶候歟、然而猶如近來沙汰者さもや候らんと存候、以此等之趣、可令計披露給候、公賢誠恐頓首謹言、

正月廿三日

頭辨殿（○中略）

抑外記政始、今日夜被行之處、上卿已下、皆以無領狀候旨延引了、儲日廿八日候云々、

新帝政始

〔日本紀略一醍醐〕寛平九年七月三日丙子、午三刻、太上皇讓天祚于紫宸殿、五日戊寅、始政、

〔本朝世紀〕康保四年六月廿三日庚辰、正統朝臣申、左大臣召陰陽師晴明、令進政始日時勘文、（來月十五日）七月十五日壬寅、政始也、有申文、　八月七日癸亥、政始也、覽內文、任符幷省符等也、右大臣以下參入、行請印事、又有騎牽事、爰代始

○按ズルニ、此年五月二十五日、村上天皇崩御アリ、而シテ冷泉天皇ノ卽位ハ、同十月十一日ニ行ハル、日本紀略ニハ、七月十五日ノ政始ヲ記シテ、八月七日ノ政始ヲ記セズ、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年八月十三日戊子、天皇讓位於皇太子、新主（○圓融）於凝華舍受禪、　十五日庚寅、政、讓位以後政始也、

〔日本紀略八花山〕永觀二年八月廿七日、先皇（○圓融）讓位於今帝、　九月廿二日己巳、政始、

〔日本紀略十二三條〕寛弘八年六月十三日乙卯、一條院天皇遜位於新皇、　七月八日己卯、今日奉葬先皇於北山長坂野、　十一日壬午、大納言藤原實資卿參仗座下、警固可付國司之宣旨、須以官符遣之、而未被行政之間、以宣旨遣也、　廿一日壬辰、被下停止相撲宣旨、依未始政、不賜官符、仍仰所府了、　八月廿三日甲子、政始、

〔日本紀略十三後一條〕長和五年二月七日壬午、天皇卽位於大極殿、　十三日戊子、政始、

改元後政始

〔本朝世紀〕治暦四年十一月七日丙子、政、御禊後政始也、仍用晴儀、（此事如何）　十二月十七日乙卯、政始也、

〔左經記〕長元元年八月四日丙寅、余申殿云、改元後依日次不宜、十一日以前不可始外記廳政、政始之前、行定考如何、仰云、不行外記政之以前、官政不可有、定考延日可行歟者、申可然之由、今朝外記物忌云々、　十二日甲戌、今朝大外記賴隆眞人云、十四日政始、上卿皆有御障、仍申事由於關白殿、被仰云、

源中納言除服可著之由可示者、自參可申也者、十四日丙子、參結政、有皆源中納言參右衞門陣、(註略)召外記宣任被問云、改元後最初政可有申文哉者、宣任申云、天慶元年有申文者、上宣云、依例可申行者、宣任以此由等仰示結政方、○下略

(永左記)承保四年(承暦元年)○十一月廿七日甲戌、此日改元之後初行政云々、○下略

(中右記)寛治八年(嘉保元年)○十二月十六日癸未、改元之後有政始、仍參結政、○下略

(本朝世紀)康和元年九月五日甲辰、改元後政始也、先定使異人參左大將亭、覽日時勘文、

(永昌記)嘉承元年四月廿七日戊子、今日改元以後政始也、右中辨并予參著結政、大夫史盛仲以下五人參候、少納言時俊、大外記師遠、六位外記等同候局方、良久右大辨被著座、(頭、内)○下略

(中右記)保安元年五月十日己酉、此十餘日、雨脚不止、今朝適得晴、改元之後有政始、去月廿七日雖可有政始、件日雨脚殊甚、就中近日外記廳破損無極、緣雨不留、依延引也、○下略

(永昌記)天治元年四月八日乙卯、改元以後政始也、仍參結政所、南屏下北面立、○下略

大治元年正月廿三日己丑、改元以後政始也、依忽之仰、又以馳參、○下略

(本朝世紀)康治元年五月十日壬寅、改元以後始有政、内大臣、權中納言藤原實光卿等聽政、參議不參、右大辨源俊雅朝臣、右中辨藤資信朝臣、右少辨同光頼、少納言源師教等參仕、權中納言宗能卿著陣云々、

天養元年二月廿五日丙午、改元以後政始也、(辨一人參入、依先例有申文、)上卿以下參内、有申文、

久安元年七月廿七日辛未、改元以後政始也、遂渡南所、依大辨不參、無申文、

仁平元年正月廿七日己亥、今日改元以後政始也、權中納言忠雅卿、參議經宗朝臣、著太政官廳聽政、

○又見古記、

(兵範記)仁平四年十一月一日庚戌、改元政始云々、

〔山槐記〕安元元年八月五日癸丑、今日改元、(去月廿八日改承安五年、爲安元元年、)後政始云々、○下略

治承元年八月九日丙子、改元、(去四日改安元三年、爲治承元年、)後、今日可有外記政始、任例又同日有使廳政始、(其儀略之矣)翌日左佐示送曰、昨日外記政臨暮延引云々、仍驚尋處、右大辨長方、右少辨光雅參結政之間、少納言師家依煩病不參、依延引、不知其旨行廳政了、不便事也、外記使廳同日行之、或使廳後日行之、希例也、而先行使廳政、於不慮儀何爲、

〔吉記〕壽永元年六月九日戊申、史能光入來、○中略又云、明日十日可有政始、可參之、答云、明日復日也、改元以後定有憚歟、　十六日乙卯、今日改元之後政始也、　三年(○元暦元年)四月廿日戊寅、今日改元後政始也、雖須早參、近代公事難守式法、仍未剋參入、○中略上卿被駕車之後、予以召使申云、非尋常政、改元後政始尤可異他、不具者可被延引也、事陵遲不及左右、官中如佐大辨下知敢難叶、職事經奏聞、尤可有尋沙汰者、早可申沙汰由有返答、

〔日本紀略〕(四村上)天德四年十一月四日庚子、天皇自職曹司遷御冷泉院、　十三日己酉、始有政、

應和元年十一月廿日庚辰、今日亥二點、天皇自冷泉院遷御新造內裏、　廿二日壬午、政始、

〔日本紀略〕(十二三條)長和三年四月廿三日戊寅、天皇遷御枇杷殿之後、政始、

〔日本紀略〕(十三後一條)寬仁二年四月廿八日辛卯、天皇與大后同輿遷幸新造內裏、　閏四月十一日癸卯、政始、

〔左經記〕寬仁二年閏四月十一日癸卯、參結政所、(遷宮之後始有政、)源大納言率群卿被著廳之後、左大辨令召使可著廳之由被申、上卿許諾了、左右兩大辨令史結申南申文之後被著廳、次申文、次請印、請印了出立、次上卿以下出立、作法了、被著南所、(有申文、)食了引被參陣、

〔中右記〕天仁元年十二月五日庚辰、政始也、依催參早衙、(遷御大炊殿之後、有政始也、)之剋限以前著左衞門陣、

永久二年八月十一日、著直衣參大炊御門御所、唯今從白河還御之間也、　十四日丙辰、政始也、巳時

許參結政、而左大辨少納言二人參入、中少辨一人不參、仍時剋推遷、或故障、或參放生會之間、假又尋假、及申剋、左中辨顯隆朝臣參入、予著廳座、右大辨重資同著、申文少納言宗實、左中辨顯隆申文、次請印少納言定實、事了外記門出立、渡南所、史申文、次食、予尋云、可有獻盃歟、左大辨云、年首政始、著座政始之時、各有獻盃也、然者不可有者、南所門外并陽明門內出立、了渡參皇居六條殿、有吉書申文、今日無使廳政始、參加右衞門也、

內裏燒亡後政始

〔本朝世紀〕康治元年九月廿六日乙卯、權中納言藤原宗能卿、參議源雅定朝臣聽政、右大辨源俊雅朝臣、右中辨同雅綱朝臣、左中辨藤原資信朝臣、少納言藤原成隆等參仕、事了著侍從所、所儲居如常、還幸土御門皇居之後、今日始被行也、　十月十九日戊寅、入夜天皇自土御門皇居遷幸一本御書所、〇中略內侍所同渡御、左近少將藤光忠朝臣、右少將同行通朝臣、藏人勘解由次官藤原光房等供奉如恒、依保安例、無政始、上官參衙如常、

〔山槐記〕治承四年四月十六日戊戌、今日還行大內之後、御讓之後、去九日始遷幸大內也、政始云々、　後聞、今朝有解陣事、三條大納言實房卿仰之、其後有政、政以前公事不行、打任事無、〇下略

〔日本紀略十一條〕長保元年八月十七日丁卯、政始、依內裏燒亡也、

〔清獬眼抄〕內裏燒亡後無不行政事

長保元年六月十四日夜內裏燒亡、仍無官政并廳政、七月十七日初被行外記政并廳政也、遣營之後又有政、

〔兵範記〕仁安二年十月九日癸卯、巳剋參內、依火事後政始也、先參殿下、次出左衞門陣、尋結政事之處、官掌國成申云、源少納言信康、兩大外記師業師會、六位外記等著座、〇下略

〔愚昧記〕仁安二年十月十一日、抑內裏火事之後、一作日政始云々、〇下略

〔山槐記〕安元三年〇治承元年五月十七日丙辰、大極殿燒亡廢朝後、今日始有外記政始、日時任例、衆日自外記告使廳、依又有廳政始、

中院後政始

〔山槐記〕安元二年九月五日丁未、中院以後政始云々、〇下略

廢朝後政始

〔日本紀略〕村上三天暦三年十月八日丁丑、廢朝後政始、

〔本朝世紀〕康和五年二月九日戊午、頭辨仰云、〇中略廢朝以後、政始以前他事例、三月除目例等如何、各注申畢、　十日己未、廢朝後政始也、不令勤日時、予〇清原重憲唯參右大臣殿、申政由、先例也、

〔本朝世紀〕天養元年五月廿日庚午、廢朝以後政始也、〇略、兩儀、久安元年九月七日庚戌、廢朝以後政始也、依甚雨用雨儀、仍外記注申、參議不參、又依大辨不參、無南所申文、右少史永業、季遠著結政座、今日之政、毎事違例、

〔山槐記〕長寛二年三月廿七日壬子、依國懸社火事、自去廿二日三箇日間、被行廢朝、其後今日始有政、〇中略上卿別當、顯長、去正月廿一日任中納言、今日始著行、予又同日任參議、始又可著、〇下略

使廳政始

〔年中行事秘抄〕正月始外記政事、〇中略撿非違使廳政、同日行之、

〔中右記〕永久二年正月十五日、依政始催、巳時許參入、〇中略官政始之日、撿非違使廳政必始事也、而今日無使廳政云々、頗奇怪歟、　十七日甲午、今朝官政始云々、仍又撿非違使廳政始也、志明兼申時許持來、官人見參、左佐以下五人著行也、院御幸之間、依候御共、撿非違使等多不參政歟、年首政始、殊不勤日時、唯以官政始日、使廳政始所行也、是故實也、　九月四日、今日使廳有政始、皇居遷御之後、左右佐有障、延及今日也、左佐重隆尉說兼、志行重、明兼、府生有貞、經則等參仕也、免者二人、

〔山槐記〕仁安二年四月廿三日庚寅、今日釵負廳、年始政始、于今懈怠、廳底陵遲之基也、治承二年正月廿日乙卯、今日使廳政始也、外記政同日行之例也、兼日遣志重成、尋其日於大外記賴業、佐以下、左權佐光長朝臣、尉中原章貞、源仲賴、志安倍資成、府生大江經廣、右尉中原基廣、志重成、公文左衆主笠俊兼參入、供給在左記、重成无免物、依無囚也、去年十二月七日、蓮花王院御堂供養被行非常赦、兼竭之後、重成

持來政中文、吉書因事、見外記政記、依實不註之、　三年正月三日壬戌、今日有廳始事、未剋官人等來、左尉中原章貞、源仲賴、志季貞、志清原季光、安倍資成、府生安倍久忠、右尉中原基廣、志中原明基、府生大江經廣等也、明基申云、見參之外、重奉官人左大史、尉大江遠業、志中原清貞、右尉平兼隆、志中原重成、府生紀兼康等也、今日延引之由被罷云々、若承誤件日、遠業不參歟、唯今遣召了、其後參入者、定及晩頭歟者、仍予著直衣、出廳、章貞覽吉書、其儀見去年記、吉書至于久忠許之後、予起座歸入、官人等相率立門、乳牛犯一人、仲賴仰之、事了、或歸著廳、或退出、此間清貞重成來、中剋遠業朝臣來、可有免物歟之由、明基兼所申也、先例有無不定歟、中見囚帳、無輕犯者、仍無免物、去年十二月廿九日渡此亭、三條東川立廳屋、依無吉日無廳始、今日所始也、　十七日丙子、依有外記政始、今日又行使廳政始、右志明基所奉行也、晩頭持來政中文、左衞門佐光長朝臣、尉中原章貞、源季貞、少志中原清重、府生大江經弘、右尉中原基廣、少志明基、公文左衞主笠俊兼參仕云々、依無輕重犯者不免、

〔名目抄恒例諸公事〕吉書奏キチシヨノソウ

〔江次第紀聞〕吉書之事

中納言已上昇進ノ人、陣ノ座ニツキ、始テ文書ヲ奏スルヲ吉書奏聞ト云、吉事ヲカキタルフミト云意也、

〔佐渡窠中編五〕きつしよはじめ　玉海、建久四年正月、始覽吉書と見え、御湯殿記に、正月十五日、御吉書、階の間の西のかたより、御硯のふたにすはりて、長橋いださるゝと見えて、さぎちやうに上らるゝ事也、寶永新殿遷幸次第にも、藏人覽吉書とあり、

〔江家次第九九月〕官奏附諸國減省

諸國減省

長門自定額任不申

秩滿替
死去替　死闕

講讀師

某乃寺乃申世佐大法師某達以天、某國乃講師某加ツカサミツ替達認給止牟武申世佐事川、

後不堪（關白殿御覽）

某乃國乃司乃申世佐、去佐某乃年乃不堪佃田乃坪付乃文申上久止申世佐事、

申鉤匙事（開之○吉書○）

某乃國乃申世佐鉤匙給天、不動乃倉開支撿止申世佐旨、

吉書不堪減省（種種）講讀師（有之）

往古一切奏書、莫非官奏、近例覽所入奏文如此、

〔江家次第九九月〕攝政時官奏

大辨并奏者辨於結政所若床子座見文如恒、（中略）○執柄被仰可裝束之由、奉仕出居方高麗端三枚、一枚中敷（西南）、其前置硯筥、（中敷西南）其南置筥子、敷菅圓座一枚、爲奏者座、執柄出給、（吉書奏井不堪奏束帶、自餘布袴、）

〔年中行事秘抄正月〕撰吉日事（中略）○

大臣候吉書奏事

近代必無此事、勤者及歳暮、

〔建武年中行事正月〕吉書の奏、九日にあるべけれど、よき日をえらびて、大臣參りて奏す、諸國の守鎰たまひて、不動の倉開かせかんがへんと申文也、政始にあひたる文なり、大臣陣の座につきたれば、大辨申文あるよしの氣色して床子につきて、その〳〵ちきの辨史などまで文を見る、さて見はてぬれば、六位史杖にはさみてすゝむ、大辨さきに本座につきて申文と申す、大臣きそくす

年首聽政

れば、大辨かへり見る、史宣化門より入て、宣陽殿の壇上をへて、小庭に杖を持てひざまづく、大臣目す、史はしりすゝみて、ひざまづきて文をまいらす、大臣文をとりて、見はてゝ、一づゝくだしたぶ、かみひねり、副してさしやる、史かたね申て、候べき文三ひらと申、いせうして杖に文をそへてまりぞく、大臣直の辨をめして、奏さぶらふよしを奏す、辨あさがれゐのまへの臺盤所の北のえんにて、左おほいまうちぎみ奏さぶらふと申、藏人かはりてまいりたれば、官奏の御裝束せよと仰らる、御殿御裝束は、晝御座の御れんあきたる下に、木丁たつるばかりなり、勸修寺の流には、つちゐをはしにむくるなり、御ざに出させたまひて、辨をめす、辨年中行事障子の下に候、御氣色にしたがひて、いせうして陣にいで、ゝめす、大臣ゆみばにすゝみて、無名門のまへにて、史にもたせたる文を、ともに左右の手して持て、左の手をいさゝかあぐ、青璅門よりのぼりて、年中行事障子の下にゐて天氣をうかがふ、御目の後、たかく稱唯して、ひろびさしを北へすゝむ、御座の次のまより膝行して、次第にふかゝらなりて、御前のまにひざまづきて、膝行してのぼりて、文をたてまつる、やをらひきぬきて御前にをかせ給、左の手して杖をとらふる事もあり、びんぎにまたがふ、大臣逆行して、ひざまづきつる所にて立て、次間を大輪にまはりて、下襲かへらぬ様にして、圓座に杖をもちながら候、御文を御覽せらるゝ、様、さきにまゐるしたり、先かみひねりをときて、のべて御覽じはてゝ、御前にをかるれば、大臣右の方にやをらならさでをきてすゝみ參てたまはる、まぞきてたにめぐりて、ざにゐてこれをひらきて、かたね申、御覽せらるゝ、作法のごとし、よみ申して、をし合て御氣色をうかがひて、いせうしてまく、三通まきはてゝ、かけ紙してゆひて、杖に取そへてまりぞく、このたびはとうゐのつなの西をふるなり、文御覽じはてゝ、かみひねりゆふをば、下ゆひなくて、ときよき樣にかたかぎにゆふなり、

〔中右記〕寛治六年正月十七日庚子、今日初覽文書、其儀先御出晝御座、御冠、御直衣、先權左中辨基綱朝臣

覽官吉書。(近江國年料米解文)結申如例、次藏人頭左中辨季仲朝臣進覽藏人方文書一通、(來四月平野祭幣料請奏)御覽了返給、結申如前、兩人出右仗座下、左大臣依件事被參仕仗座、書杖共用官奏文杖、藏人方吉書杖、來十九日、依吉日被初作云々、件吉書、後一條院治安例、初於御前被行除目時、同日覽吉書、而來廿三日除目可致行御前儀也、依當丙午有憚奏吉書、廿三日日次宜、雖然大內御物忌也如何、假除目以前初覽吉書例、被尋人々家記之間、右近少將顯實朝臣申云、故小野宮右府曆記云、前朱雀院、前一條院正曆四年初被行除目前、當日御覽官奏者、仍村件儀、假今日所御覽文書也、抑顯實朝臣雖不携文籍、家風之所扇、自傳舊事歟、

〔台記〕仁平四年正月四日丁巳、今日(中略)親隆朝臣(左衞)申致所吉書。(加賀國封戶解文、入宮)頭辨申官方。(近江國年料米文)藏人方。(大原野祭料文)吉書之、官方文頭辨先向內大臣家覽之、次內覽余、次內覽關白、次奏聞、下內府、內府下頭辨、(今朝先觀日、美作國年料文、可書儲也、而守遲日參使廳口可有憚歟、仰可書改之由)藏人方文、先內覽余、次內覽關白、次奏聞、(中略)下中納言中將、

〔玉海〕治承三年正月廿七日丙戌、申刻大夫史隆職來云、今月可被行吉書奏之由、爲權辨親宗朝臣奉行所被仰下也、問日次之處、明日廿八日吉日之由令擇申、先觸申左府(經宗)之處、被申所勞之由、今日參陣、以藏人通業奏事之由之處、參上可申事由旨所被仰下也者、余(于時藤原兼實、右大臣)早可參勤、但先々如此之時、職事奉勤來催者例也、大夫史來傳綸言事、未聞事也、奉行職事誰人哉者、隆職申云、未承其人、唯奉爲親宗朝臣奉行被仰下了云々、余云、至于此條者、候奏之大臣不能申是非、令驚達先規事許也、抑大辨、直辨等、早々相催可令申散狀、兼又如法申刻可參陣者、隆職退出了、　廿八日丁亥、今日官奏事、(中略)酉刻欲著束帶、(先是關白歸洛云々)而猶暫待兼光返事之間、即持來報狀云、今日官奏事、藏人方一切不承及、唯今親宗朝臣參上、申延引之由、時始承及者也云々、次第尤不審、以件返事問遣隆職之許了、此間史仲宗來云、今日官奏延引了者、問延引之由緒、申不知給之由、傳仰隆職可來之由了、入夜隆職申

遣云、自今修行所勞更發、扶得者、明日可參啓云々、凡今度官奏次第違亂、親宗未練之所致也、

〔猪隈關白記〕建仁二年正月三日己酉、午時許、著直衣冠等參殿、〈註〉上官等來、右中辨親國朝臣持來官吉書、見了返給、是年首吉書也、覽一上書也、而一上故障之間、覽余也、藏人木工頭宣定同持來藏人方吉書、正文可下辨也、

承元二年正月十日庚辰、今日主上成人後、始御覽吉書、非官奏、只常吉書也、下官未時許、著直衣參內、于時公卿無參之人、御車前隨身、〈註〉可參御本也、參御前、頭辨光親朝臣可覽吉書之日時勘文覽之、〈註〉余被覽了返給、不奏聞、頭辨云、先例或奏或不奏、光親一門之習不奏也、於藏人所勘也、即下之云々、有智左大臣隆忠參仗座、可被下吉書之故也、余退出直廬、改著衣冠、於出居座內覽吉書、兵部權大輔家宣先中事由、先官方吉書、左中辨清長朝臣中之、近江國年料米文、清長朝臣先於陣覽、左府云々、次藏人方吉書、頭辨光親朝臣中之、平野祭請奏也、各插杖覽之、余被見了返給、各結申退起如例、次余參上、主上著御御直衣、〈註〉紙中納言道具卿奉仕之、

主上出御晝御座、〈註〉余候三尺几帳內、御覽吉書、先官方、左中辨清長朝臣插近江國年料米文於杖參進、跪西簀子南方、主上目給、清長參進、自晝御座次間奏之、主上以左右御手披文、介置御座前給、清長退候簀子、主上開懸紙、御覽文給、如私作法、御覽了、如本卷懸紙、介置御座前給、清長置杖參進、給文如本退候簀子、結申之、主上目給、結申了卷懸紙、取加杖文、清長退出、次藏人頭辨光親朝臣、平野祭請奏覽之儀如官方吉書、次人御、次官并藏人方吉書等下左府云々、今日書杖用新書杖、去四日造之也、

主上御覽文御作法、被介奏了、余退下于宿所、著直衣參院、

〔岡屋關白記〕寶治三年〈○建長元年〉正月廿七日、入夜參內、有官奏、當年吉書也、左中辨定賴朝臣候之、美濃出羽紀伊題文奏了退出、

〔園太曆〕康永四年正月十六日、一右大將[illegible]長朝臣、以勅使人來、吉書奏神[illegible]神木計會[illegible]分、可被延引

歟、將又年始必可被行歟、可計申者、政始必可被行之上者、吉書奏強不可有憚之條勿論歟、但神木動座最中奏、大臣出仕難治歟、大納言已下被宣下雖非無例、吉書奏延引、剩及歲末之條常事也、若被延引被待大臣出仕之條可宜歟、可在時宜之由申了、　廿日、今朝帥卿送消息云、○中略

抑明後日廿二日政始、欲構參候之處、同日可被吉書奏、可令作奏之由、被仰下之間、卒爾雖仰天不欺申入領狀了、未練之質、初度勤仕、定比興事候歟、故入道內府度々參仕候之間、其時如形致習禮候、然而大略省之也、忘却仕候、不審事等、連々可啓之處、仰者恐悅候、就中里內之儀、不審事也、祖父內府永仁參勤候、彼時里內之次第見合分候、可注進候、參差事候、可被直下候也、明日若無御物忌者、隨體可參申入候、誠恐謹言、

廿日　通冬

〔壬生家文書 三〕始覽吉書事 建久承元記 代々例

後一條院　治安元年正月二十二日、於御前始御覽官藏人方吉書、

上卿左大臣　官方近江國年料解文 權左中辨經賴奏之　藏人方平乃祭幣料請奏

同日被始行除目、

於御前始覽吉書例

堀河院　應德三年十一月二十六日受禪、寛治六年正月十七日始御覽、十四歲

上卿左大臣　官方近江國司申年料米解文 權左中辨基綱申之　藏人方內藏寮申平野祭幣料請奏

同月二十三日被始行除目、

鳥羽院　嘉承二年七月十九日受禪、永久元年十二月二十七日始御覽、十一歲

上卿內大臣　官方加賀年料米解文右中辨顯隆奏之　藏人方內藏寮臨時公用米請奏

文杖渡官方杖也　同二年正月五日有叙位儀 御前儀也

近衛院　永治元年十二月七日受禪、久安六年十二月廿五日始御覽、十二歲

（上卿右大臣雅定公）官方美作年料解文左中辨師能奏之　藏人方内藏寮臨時公用米

文杖官方杖也　仁平元年正月六日有敍位儀、

高倉院　仁安三年二月十九日受禪、承安四年正月十日始御覽、十四歲

左中辨重方奏之　永久元年例云々

官方加賀年料解文　内藏寮申　藏人方平野祭幣料文

同月十九日被始行除目、

後鳥羽院（依及卿相無奏之歟）壽永二年八月廿日受禪、建久四年正月廿六日始御覽、十四歲

左中辨親經奏之

（上卿左大臣）官方近江年料解文　藏人方平野祭幣料文

文杖被新調、同日被始行除目、（敍位同日吉書、治安例云々、）

（土御門院）當今　建久九年正月十一日受禪、承元二年正月十日始覽吉書、（十四歲、五日敍位也）同十八日被始行除目、

上卿左大臣　左中辨淸長奏之　官方近江年料解文、藏人方平野祭幣料文、

文杖事　永久　久安（官方文杖）　建久（用代々之例、被用新調杖、）　承元二（被用新調杖、…藏人方…）

辨官事

治安（元年正月廿二日）近江年料　權左中辨經賴奏之、卽爲國司、

永久　美作解文　左中辨顯隆奏之、近江國司、

任寬治例、可被用近江之處、依爲國司、不奏之云々、

除目日覽吉書例　治安　建久

建久四年正月廿六日御記

丙初剋、左右內三相府、大納言實宗、隆忠、賴實、良通、中納言定能、通親、親宗、隆房、泰通、參議實教、定長、公時、雅長、光雅、公繼、參著仗座、依座狹、少々起座、經隱便宜所、抑今日始御覽吉書、早旦覽之、先左中辨藤親經奏下近江國年料米解文、依度々例、被用此國解文、早旦參左府、覽中之、次奏之、今所被下也、已略儀也、即返給、於床子傳予、次頭亮奏下內藏寮請奏之、平野祭料請奏也、寬治、天永、承安等例也、藏人方吉書也、今朝被奏、於杖者任代々之例、雖被召官杖、今度被用新調杖了、代々之例歟、家御所被召用也、召左中辨下給之、又傳予、次頭亮仰除目事、次有除目者、

承元二年正月十日、今日主上御土御門始御覽吉書、十四歲 申剋參陣、殿下家實御參內、御直衣 前駈衣冠 御隨身上﨟四人、冠 下﨟、布衣 今夜可有御供奉修正御幸之故云々、無程令入御直廬給、令改衣冠給云々、其次第委可尋、

左大臣殿隆忠公 令著左仗座給、次左中辨藤原清長朝臣立敷政門代邊、被尋近江國年料解文、此國右中辨兼宣知行 辨侍遲參之間、以下宿直守定獻之、頭右大辨藤光親同進立、左中辨進膝突覽解文、返給頭辨、相共參御直廬覽之、其後奏聞、先官方、次藏人方、頭辨覽之、內藏寮申平野祭幣料文也、主上於清涼殿西面御覽文杖、被用藏人方新調杖、當時以往皆被用官、此條臨事忘却不調、杖代備用官杖□爲流例、然而以忘却例□用官杖之條不可然之由、故九條入道殿被仰云々、奏聞之後、辨下上卿令御覽、返給辨、辨於床子傳予、乍居給之 次職事奏下、內藏寮請奏於上卿、上卿召辨下之、辨同傳予、此外無別儀者也、

當今順德承元四 十一 廿五御受禪

承元四年十二月五日始御覽吉書十四歲

近江年料解文左大臣○隆忠 權右中辨○宗行 □ 藏人方內藏寮臨時公用□ 藤中納言實宣 右中辨□實 文杖事被用藏人方杖歟、不審也、云々、辨事可□之由、□問職辨之、被告之

當今久仁○後深草 寬元四正廿九受 建長八 正 十三始御覽十四歲

近江年料解文平乃祭幣料請奏

職事例

治安元年　頭中將朝經朝臣　寛治六年　頭左中辨季仲朝臣
久安六年　頭右大辨朝隆朝臣　承安四年　頭左中辨長方朝臣
建久四年　頭中宮亮宗頼朝臣　承元二年　頭右大辨光親朝臣
承元四年　頭中將頼平朝臣　建長八年　頭左大辨經俊朝臣
弘安三年　藏人右衞門佐俊定

當今(後宇多)〇文永十一年正月廿六日受禪、弘安三年正月十七日始御覽吉書、
官方近江國年料解文(左中辨定朝臣候之)　藏人方平野祭料請奏(藏人右衞門佐俊定候之)

改元後吉書

〔本朝世紀〕寛治元年八月廿五日甲辰、於攝政御直廬、改元後始有吉書官奏事、晚頭、左大臣除服後參入、有吉書幷所覽申文事、次有位祿定、

天皇元服後吉書

〔玉海〕建久四年正月廿六日甲午、此日當今(後鳥羽)〇御元服以後、始御吉書、幷於御前始被行除目也、余自去夜祗候直廬、今日除目、蒙儀以前、可始御前議之由、豫仰執筆大臣已下、及官外記等、古昔白晝被行之、中古以來、雖及夜漏、猶粗有日中之例、當今毎事假被興行舊禮、仍仰此旨也、御覽吉書之後、可奏中文、其後可撰中文、仍日出之程、可有吉書之儀之由、兼以下知之、余卯剋著直衣、參御所、催行雜事、辰剋宗頼朝臣、長兼等參入、親經未參、重遣召了、辰四點親經參入、仍余向直廬、有吉書内覽事、直廬裝束如常、(不敷臨期敷等、在大饗事、不敷之儀、不可事内覽、仍不召寄也、)先長房(帶劔、取書)進來申云、親經朝臣吉書候、余目之、長房退下、次親經朝臣插書於杖、先跪眼路揖、候氣色、余目之、親經稱唯、進來覽文、(其儀如官奏)余取文置前、親經復座揖、(逡巡)(於長押下、如立蹲之儀、與官奏、)余見文如常、卷之插出置之、親經又膝行參進、取文退下、結申、余目之、親經揖退下、次長房又參、申宗頼吉書候之由、余目之、宗頼參上、奉覽之儀如親經、(但無揖、藏人方定例也、)余直仰、可有中文内覽之由、是御裝束未持參之由、女房示之、依事可解怠、容易儀也、而宗頼申云、皆具了云々、仍余改著衣冠、(是寬

（治以来例也）參御所、女房云、御装束未持參、尋問藏人、藏人申云、仰遣御服之處、今日不可叶云々、仍仰天之間、女房云、有舊御衣、（無單衣云々）余仰不可有苦之由、即著御御引直衣、（忠季朝臣奉仕也）即出御晝御座、（西面、余候御座北間母屋几帳内、如官奏、）余召人、宗頼朝臣參上、仰早可有吉書之由、宗頼退下、次左中辨親經朝臣捧書杖、當御眼路、深揖跪候、（西面、簀子南廂也、）主上令目給、親經稱唯參進、跪御座南間簀子、膝行三度、自同間昇長押上、又膝行兩三度、指寄杖平伏候、主上以左右御手取文、置御前、（疊上當外也、縁上置也、）親經取空杖、退候簀子、（深揖）主上御覽文、其儀以左右手披文、以右手披禮紙、以兩手引張禮紙右上下、（先上）以同手文ヲ、禮紙ノ右端ヘ押遣、以同手指文、以左手禮紙ノ左端ヲ引張、（先上、余作法、先引張下、而承安高倉院初度官奏、左端同先引張上給、件作法奉習故院給歟、仍追彼例也、）以左手取上文、御見了巻之、（文結緒引懸御手上、如常、）以左手置禮紙左端、傾寄右手巻始テ、其後不寄右手、以左手押付テ漸巻之、半過巻了、更取上以左手禮紙端ヲ、傾引懸左手上巻了、置御座前給、（疊上、置外）自疊端二三寸許指出テ置給也、親經置杖參進、取文引返退下、結申、上目給、親經稱唯、巻文取副、（以文爲杖上也、）深揖退下、次宗頼朝臣參奏、其儀同前、但無揖又跪時先突左膝、如何、可突御所方膝也、又退下之時以杖置文上、（是恒作法也）

官方吉書、近江國年料解文也、

寛仁例如此、寛治同前、永久雖可用彼例、爲國司之間、奏美作解文云、寛仁雖爲國司、猶奏進近江解文也、兩度例也云々、今度非國司、仍就兩度例用近江也、先例上臈辨候也、或右中辨候也、是則左中辨爲藏人頭之時例也、仍今度就上臈用左中辨也、

藏人方平野祭請奏

代々先例如此、雖下臈頭、取文書人取之歟、代々皆取文書也、下臈頭候也、仍宗頼朝臣候也、

文杖事

寛治、天永、用官文杖、是非除目當日、兼日有吉書、除目申文之時、用藏人所文指也、寛仁如今度當日覽吉書、然而文杖事無所見、今度如何之由、豫宗頼朝臣示之、余云、任吉例、於吉書者、用官文杖、

上表内書

有何事哉、而申文之時、又用官文杖之由無所見、日内事、用兩方杖之條、理不可然、於今度者、發日用蔵人方杖用兩方、尤可然、且是元永記忘却、不造杖之由記之存之者、仍用蔵人所杖也、

〔園太暦〕康永三年正月三日、參院、前庭四足、仙洞殿○先 吉書事談之、

抑明日、兩御方事、隆家中沙汰候、御參可爲何樣候哉、勸修寺前大納言不出仕候、直奏覽之條、無其例候歟、

後白河院御時、執事別當不參之時、年預季能卿著座事候哉、不被置執權時事候、然而別隆持卿可祇候候哉、隨御計可伺申入候歟由存候、誠恐謹言、

正月四日　　隆蔭

故年□□□抑明日吉書、尤可參仕之所、執著之餘不出仕候、執權不參、年預被候之條、何事候哉、故左府不參之時、唯以爲院司、一身參仕事々候々、而春宮大夫又不出仕候、黃門被著座之條、不可有子細候哉、但忿可令談勸修寺前大納言給候歟、謹言、

正月四日　　判

五日、殿上人三人、如昨日參會、令隆邦朝臣伺申吉書御奏前後由也、先可覽吉書云々、仍予著公卿座、隆邦覽吉書、加賀國解、枚也、入筥、予見了奏聞、被返下、又聊見之返下了、

貞和三年正月一日、右中辨長顯朝臣來賀、以人謝遣之、次仙洞吉書、可爲明後日、參仕可爲何樣哉之旨示之、可參之由趣了、　三日、申一點參院、如前日前庭、略○中 人々大略雖參仕、未出御、是勸修寺前大納言依法皇吉書參萩原殿、被待歸參云々、此間先有院御方吉書事、長顯朝臣覽之也、予候公卿座、長顯朝臣持參吉書、加賀國解文也、入筥、中豐原庄解文、式覽之歟、不然近年例云々、予披見之、付彼朝臣奏聞、少時返下、予又聊披見之、卸下、彼朝臣了、

中宮内書

〔山槐記〕治承二年正月十日乙巳、今夜中宮○高倉后○平德子吉書云々、權大夫時忠被參入、駕毛車、後日權大

夫被讀曰、先候宮殿上(云々)大進宗賴持(日時勘文、入筥)被見之、令宗賴啓之、返給下之歟、次持來吉書、(加賀國解、封、唐、米、召文、入筥)又披見之、令同人啓之、返給、又下宗賴、宗賴於便宜所書下書、居覆成令成返抄、(亮以下署)所覽大夫、返下之、大進基親、權大進宗賴、重賴、少進尹範、著廳行請印、著饗有三獻云々、亮難可著、今夜不著者、　卅日乙丑、大宮權大夫經盛奉示送曰、本宮許可申慶事也、答曰、可申內院、又曰、本宮可有吉書哉、答曰、大夫無吉書之由答了、

〔玉葉〕建久二年正月十日己未、此日宮(○後鳥羽后任子)御方年始吉書也、頭宗賴朝臣申先覽、余次覽大夫、(定能卿、此亨可使覽大夫也)次參內、啓中宮件吉書事、建禮門院之例、於廳請印、亮已下著廳云々、而永久之例無所見、又久安宇治槐門記、不漏巨細具錄之、而年始吉書事、又以無所見、疑無其沙汰歟、但大治(皇嘉門院后位之初、故殿定有御沙汰歟)、應保(皇后宮立后、故殿同御沙汰)、此兩度亮一人申吉書之由有所見、更無著廳之儀、仍以件兩度之例、唯宗賴朝臣所申吉書也、無廳之請印者也、

東宮吉書

〔三長記〕建仁二年正月五日辛亥、入夜、春宮大夫被參東宮、(○順德)御方有吉書事、亮長經朝臣覽日時勘文於大夫、次同覽吉書於大夫、啓御所、奏院御方、返下、大夫即被下之、亮加端書、次亮予(○藤原長兼)權大進宣房、仲房相率著廳、(以東宮東遷爲其所、隨身所也)一獻、次著下、次覽返抄(加賀、播磨、美作、御封返抄各一枚、同日六一枚也)亮以下次第加判、次清書了退出、　三年正月六日丙子、今日東宮有吉書、權大夫著殿上、予覽日時、被啓御所、次返下、次覽吉書、(加賀國司封解文)進被啓、被返下、次著廳、行請印、如例、亮稱故障不參、不知案內之故歟、不足言事也、吉書等難可參院御方、殿下令候給之間無便宜、又入夜可經時刻、仍不奏之、

攝家吉書

〔殿曆〕嘉承二年七月廿二日丙午、今日可有吉書、而其以前於陣可有申文、(○中略)人々自陣還來之後、出居家司泰仲朝臣來申云、人々申文、余(○藤原忠實)少揖、泰仲起了、官方右中辨長忠朝臣、伊與國年料米申文了、次藏人方頭中將實隆申臨時公用幷廣絹解文等、次顯隆同申文等、次六位藏人等皆申了、(上鑑第文數)次家司泰仲朝臣申政所文、(美作御封)申文了後、余參御前幷殿上方、即下宿所、　八月廿七日庚辰、今日

於家始吉書、余輕服直衣裝束也、今日政始也、仍上卿源中納言基綱、左大辨重資、藤宰相顯實、遣水來、余對面出居ニ居、著冠、有吉書、官方藏人辨顯隆申之、次藏人方同人申之、(近衞例也)家方家司重仲申之、書了、余示人々云、政所陪膳或早可參者、各々參了、官方美濃國年料米、藏人方内藏寮臨時公用請奏、家方伊與國封文等也、次余參内、次參院、御卽位間雜事等、先密々申之、有仰卽退出、參太皇太后宮、(今日參始也)

〔台記〕久安七年正月五日丁丑、今日顯隆申吉書始、有宿申、於出居令覽、隆書元服雜事、是先例也

〔續後撰集賀上〕和歌所のよりうどにまいりて、吉書そうすとて、

嬉しくぞわかの浦風のどかにてむれゐるたづの數にいりぬる

よをのがれてのち、なをかへりまいるべきよしおほせられしかば、まいりてまた吉書に、

嬉しさを猶たちかへりつゝみてぞこけの袖にも色はそへける

〔二水記〕永正十七年正月一日辛卯、今日山科子息元服也、仍遂一嘗、爲道書狀、書吉書和歌一首、任筆畢、

〔梅窓筆記上〕年始ノ試筆ノ吉書ニハ、天筆和合樂云々トカクヨシ、故長卿口傳筆法才葉ニミエタレドモ、和歌ヲカクコトモアリ、二水記、永正十七年正月一日、(取要)書吉書和歌一首、任筆畢、トアリ、

〔季連宿禰記〕天和二年正月一日庚戌、早旦於官庫、令心念、次讀書始、(延喜式太政官式)次吉書始、
陽春嘉慶、四海太平、王道武道、尤長久而、天恩神恩、彌增長、家門繁昌、官庫再興、文書安全、萬端滿足、心中快樂、仍試筆如件、
　天和二年正月一日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史算博士小槻宿禰季連

〔實隆卿記〕永正三年三月廿三日、神宮奏事始、明日可祇候之由申入候、　廿四日、參内、神宮奏事始也、此傳奏、近年侍從大納言(實隆)也、○中略奏事始事、有故障、及今日、尤恐怖、

古事類苑

政治部三

上編

政治總載下

〔名目抄 雜事〕仗議〈ヂヤウギ、陣定有之〉

〔左人抄 一〕陣座之事

非曰、陣座ト云ハ、天下公事ヲ行處ナリ、大内裏之時ハ太政官廳ニテ政ヲ行ヒ、近代太政官廳ナキニ依テ、万事陣座ニテ政ヲ行ナリ、最大内裏之時モ、公事ニ依テ政ヲ取行事有之也、元來陣座ト云ハ、左右近衞府之輩ノ陣列ヲ立ル處ナルニ依テ陣座ト云、其處ヲ借リ用ヒテ公事ヲ行ニ依テ陣座ト云、昔大將奏慶之時、陣座ゟ將曹已上陣座ニ付テ陣ヲ立ル事アリ、此事山槐記ノ時分マデ有之、又ハ拜賀部類ニモ有之ナリ、又仗座トモ云、仗儀ト云、仗ハノブルト云テ、近衞ノ事ヲ仗ト云、今次將列立スルヲ近仗ト云、左右ノ近衞者ノ陣ヲ立ル處ナルニ依テ陣座ト云、秀云、陣座ト云ハ、所ノ名ナリ、大内ノ時左右ニアリ、左右近陣ト云、此ヲ左右仗トモ云ナリ、仗ト云ハ上ノ注非ナリ、トルト點シテ、兵器ヲ取テ、天子ノ衞ヌナスヲ仗ト云、故異朝ニモ天仗、粹仗、靈臺仗、禁仗、内仗トテ、皆天子ノ守護ヲナス事ナリ、故此陣座ト云モ、天子ニ非常ノ事アラン時、非常ヲフセガン爲ノ陣ノ處ナル故、陣座ト云、又次將ヲ近仗トモ云、皆同意ナリ、

〔西宮記 臨時四〕左近陣座

西壁障子下敷大將座〈有二唐机〉二間東邊左右大臣著、一大臣著南座、〈一位大臣倚二四方著、參議前之時、敷二軒廊西二間〉御 太政大臣

親王已下南面、參議西面南上、雖納言爲日上者著南座、四位大弁、非參議大弁、有事著東座、三位宰相著南面座、或人云、中納言著南、行事者東一間云々、此說未詳、參議座南邊小橋、公卿外不踏、多大藏省懸紺幕、藏人弁等著膝突、給宣旨、申雜事、有上﨟之時、次々納言已下、出北壁外仰雜事、弁藏人又以官人候氣色、上卿立座出、或說云、自道出陣頭中家內卿立出壁外之後、申雜事云々、

右近陣座

王卿北上對座、是中少將本座、親王公卿東面在人將座、弁少納言著南庇垂板敷、北面東上、是六位官人本座也、外記史著南庇西邊列座、東面北上、東座王卿座上有膝突、御齋會時所著也、或記云、延喜十年七月廿日丁未、改敷左近陣公卿座、大臣東面、大中納言、參議、並南北面、但東端西面座者、是出居侍從、弁少納言、弁、少將等就事祗候之處也、左近衞府儲饌、着於外記內記以上矣、日暮酒酣、公卿已下淵醉、即獻寬平錢三十貫文、充裹錢也、

八月十六日癸酉、左近陣座尉家儲饌、着於王卿已下、殿上五位、并近衞少將、及少納言、弁外記史以上、數盃後漸及酡顏、尉家以寬平錢十貫文充裹錢、是賀去月改敷參議以上座也、

九記云、承平八年七月廿一日、除目後初參左近陣、先參殿申、左仗座在南北、初參之日可著何方、仰云、无定事、任意可著、但至于給宣旨時者、南座宜乎、午剋參內就陣座、大納言伊望卿在座云、可裝宜陽殿、今朝仰裝束史、令敷儀所座也、予謝而不起、大納言見此氣色、暫立避之、厥後著殿座、不幾而還著陣南座、右少弁相職來給宣旨二枚、其後大納言又還著座、申剋經敷政門退出、或曰、至于日上者經作門、已次上者經大門罷出、

九條記云、太政大臣著左近陣日、未知其處、若南座歟、將當北座歟、但故南院式部卿親王云、仁和先帝在親王時、參陣之日著南座、是故堀川太政大臣依著北座歟云々、但此說不定也、彼親王其時未見朝儀者、

〔西宮記臨時八〕左近陣座廊

總五間也、西第一間有本府大臣座、第二間東邊、左右大臣著、(左大臣南座北面、右大臣北座南面、今案太政大臣著、可著北面西第一間歟、而或說云、太政大臣著南面之第一座、仍親王爲太政大臣時著北面座、又下有免例云々、是座未得心也、是陣御事歟、)第三間東邊大納言著、第四間中納言著之、(大中納言座異間、)第五間橫切座、參議等著之、(南上西面著、依事參議大納言著件座、參議等皆外納言之上、納言之座、大臣行事大臣納言已下多著南面之座、)當參議座南邊北有小橋、是參議以上所蹈也、非參議已下敢無蹈、皆越其橋南邊溝、從砌上往還了、掃部寮人寄、參議之時北面上卿之時、幷自最末參議右方壁下敷疊、居上卿座良邊、中承雜事、

天長二年十二月九日、應鋪陣布幔狀中、於內侍司掌侍當麻眞人浦虫子、仰右中辨藤原朝臣愛發之、每年從十月一日迄于二月卅日、布幔一條鋪於陣、

右近陣座

王卿北上對座、(是中少將本陣、親王東面、公卿西面、)少納言北面東上、是六位官人本座也、外記史東面北、是物節本座也、

御齋會內論議日、王卿侍召之間、暫可著也、

(西宮記臨時四)所々座體

宜陽殿(在紫宸殿東廂二間、)

大臣北面西上、(右太政大臣、次左右大臣、東西面、)大中納言東西對座、(以上用中疊、大臣兩面、大納言繧繝、中納言深綠、)參議南上東西對、(淺綠長疊、)二孟平座、以北爲上、親王西面、納言以上東面、參議對座、除日上外西面、件座公卿本座也、仍初著座時著此座也、凡行諸儀式之時、公卿著此座行之、尋常時假著近衞陣、

(西宮記臨時八)宜陽殿座(件座在宜陽殿北角廂二間也、)

大臣北面西上、(但右太政大臣時北面、左右大臣東西面、)大中納言東西對座、(已上各用中疊、但大臣兩面端、大納言繧繝端、中納言深綠端、)參議南上東西面對、(以淺綠端長疊二枚也、)但二孟平座改座、都以北爲上、親王西面、納言已上東面、參議對座、又除日上之外、納言或西面、

以上座、(清涼殿御前座、清涼殿侍所座、宜陽殿座、)是公卿本座也、仍始著座之時著此座也、凡行諸儀式之時、公卿著此

著陣　著座

座行之、至于尋常時、假著近衞陣座也、但辨官幷藏人等、給宣旨奥公卿之時、昇從參議座北頭、經後上上卿座下、件事非慥說也、

〔名目抄私儀〕著陣（チヤクヂン）　著座（チヤクザ）

〔左人抄一〕著陣之事

此ハ右ノ陣座ニ付ク事ナリ、陣ト云ハ、表向ノ政ヲ取行所ナリ、故ニ大納言ニ新任スレバ、大納言ノ役ヲ勤メ、中納言、三木ニ任ズレバ、此所ニテ政ヲ取行ユヘニ、始テ大納言ニ任ズレバ、其大納言ノ付タル場所ニツキソメテオキ、中納言、三木ニ任ズレバ、其場所ニツキソメテオク、此ヲ著陣ト云、故ニ何ゾ公事アレバ、デキニ其所ニツク事ナリ、叙位任官シテ其所ニツキソメテオクヲ著陣ト云ナリ、今服解ノ著陣ト云モ此ト同心ナリ、若大納言、中、三木ノ類、服アレバ、昔ハ其間解官シテ、故障畢ルノ時、元ノ官位ニ復任スル事ナリ、何時公事ガアラフヤラ不知ニ依テ、服畢ノ後、復任シテ先陣ニツキソメオク、此ヲ今俗清ノ著陣ト云ナリ、

〔西宮記臨時五〕新任官敍位人

公卿取吉日、著宜陽殿及陣座、（東西面、公卿初參者、遮入自敷政門云々、尋常自可入自和徳門、大將著本陣者、不著本座、公卿初着日上行神事之時、召使官掌等給饗祿、辨官官掌、辨侍給祿、）

○按ズルニ、新任官ノ著陣、著座ノ事ハ、補任篇ニモ在リ、宜シク參看スベシ、

〔北山抄九羽林要抄〕陣座事

於左近陣定雜事者、大將及宰相中將著納言座、次將著參議座、若有酒肴、於座上勸盃、但宰相中將以上不參者、於幕內座定之、（一條院右陣可准之）若中將下臈、少將上臈者、陣座之間依職、他所依位、但如大庭射禮取御馬日等者、又可依職、

〔逢幸故實抄一〕一陣儀。。

依大臣命、參議以官人召仰外記事、

康保元正五、敍位、依右府命、左大弁宰相〈實長〉令官人仰外記召仰事、

於宜仁門、依參公卿例、上卿氣色著座事、

長寛二六廿九、廿二社奉幣予勤使、可書定文、遲參無便、續參、大納言殿兼令著端座給、予於宜仁門外、伺御氣色、取筥、令目給、予欲著座之間、上卿被仰云、直可著者、仍〈缺文〉

仗座人多之時、依上卿命上臈參議著端座、爲恒例之事、

長寛二十一一、朝旦多重、隆季、宗家、資長、予元任座、四人外無其所、仍予所起座也、上臈參之時、無其所者、下臈避座先例也、但人多之時、上臈參議依上卿命著端座恒例也、然而按察不被示其氣色、右府未被著陣、仍不被自由歟、

上臈參入無其座之時、下臈可起座事〈見前〉

陣座及暗之時、催燈事、

永万元七五、御即位定、左府被著陣、召官人令敷軾、平宰相〈親範〉召官人令催掌燈、〈相公密語云、大弁進可仰、自餘可待上卿御座者、予日、已以晴、然於今者不可待上卿仰歟、相公猶仰之、猶不被立明、如何、喚之主殿官人、取松明入小庭、〉

仗座自下臈起座例

永万元七五、予令官人召六位外記、返給硯筥起座、次左府起座、被參御前、

外記令參議傳申上卿事、

仁安元八十二

節會内弁令參議問外記史事、

嘉應二十二十四、任大臣、小雨降止不定、地甚濕、左府被命左大弁〈實綱〉曰、御装束晴雨儀如何、左大弁奉左府命逃陰、頗警屈、左府被命曰、只其ニテ可被尋、〈起座於床子、可問之由存知也、被催示歟、〉左大弁召官人、尋大夫史隆職、中云、御装束晴儀奉仕之者、左府被示人々曰、可隨只今之體事也、儲可被尋陰晴歟、左大弁

又尋之、官人申云、所天晴也、

仗座人多之時、上﨟參議依上卿命移著端座作法事、

治承元八四、改元定、奥座無所、仍左府示人々令著端座、參議又人數多、仍左府示之、令著端座也、相公(家通)著沓、超著也、

上卿兼在陣之時、後參參議伺氣色著座事、

壽永元九十四、大嘗會御禊侍從代定、翌日、修理大夫(經盛)被示送曰、宰相依及闕如參陣、上卿早參、經盛遲參、於宜仁門代邊伺上卿氣色著座、上卿被示曰、右大弁服者也、是神事也如何、經盛申云、然也、但日數過歟者、上卿被示云、可被尋大外記、令問之、賴業眞人申云、件服私事也、上不知食事歟、經盛申此旨於上卿、

依上卿命參議召問外記事(見右)

上卿兼在陣之時、追參公卿伺氣色著座間事、

文治二七廿一、陣定、中御門大納言(宗家)大宮中納言(實宗)源中納言(通親)藤宰相(雅長)右衞門督(隆房)左大弁(兼光)源宰相中將(通資)等著陣、每人於宜仁門代外氣色、隨大納言所許進著如何、相列之時、上﨟一人觸之、次々不然事也、又中納言不觸大納言事歟、

〔左經記〕寬仁元年十二月十日甲戌、未畢以前、有召參內、申刻、攝政殿(藤原賴通)令著陣給、(今朝有仰、令敷宜陽殿御座以西座東面南緣為宜陽殿、)大納言以下座、相分東西令敷之、(南上對座)攝政殿御座、以南面半疊令敷北面、(横座皆以長先、緣為下數、)著宜陽殿頭之移著左仗座、(著奧座、等中文、)頭之自敷政門退出、公卿相從被退出、(攝政令著座之間、他公卿被立陣腋、)自右衞門陣出給間、外記史等進出御前、有行氣色、外記等留跪右衞門陣座前、外記召召使、史召官掌、各留畢、召使官掌御前如常、又門內列立、如大臣召日儀、

〔定家朝臣記〕康平三年八月八日甲子、內府殿下(藤原師實)令著陣給、(申二點)先申文、(史良圖)次頭中將被下

吉書、召左中辨實仲朝臣給之、其後令退出給、於西陣外有出立云々、被留御前、但新中納言、別當右京大夫、左大弁、及弁少納言以下、相率令退出給、

〔中右記〕元永二年二月十五日、日入程參入、殿下〇藤原忠實 內府〇藤原忠通忠實子令參給、及深更、內大臣殿著陣之間事、引度々日記、所令沙汰給也、大將著陣次第、〃、此殿原作法、先著本陣、次著公卿陣、大辨申文、職事下吉書也、他之家。。〃。先著公卿陣、次著本陣云々、而此皇居東三條里亭、公卿座在左仗陣、又被作宜陽殿也、然者著陣作法、次第未量得也、大內左大將著陣例可相叶也、御堂〇藤原道長 宇治殿〇藤原賴通道長子例已無日記、二條關白〇藤原敎通道長子寬仁元年、任大將內裏也、已無日記、大殿〇藤原師實賴通子康平五年、皇居賀陽院、後二條殿〇藤原師通師實子大將、皇居六條、此關白殿〇忠實 寬治八年、皇居堀川院、皆無宜陽殿、如此之間、次第未案得之由、殿下所被仰也、此右府轉左大將、康和五年、皇居內裏也、且尋彼例、且問合左府、可令一定給由申畢、 十六日、夕方、從關白殿給御書、被仰云、大將著陣次第、問合左府之所、被返事云、付康平五年例、先著本陣、有大將作法、次敷著宜陽殿、又歸著仗座、大辨申文、職事下申吉書、可宜歟、仍隨左府命、可用此次第也、予申云、尤可然候事也、康平五年、皇居高陽院無宜陽殿、此皇居被作宜陽殿也、仍今度令著宜陽殿給儀被加、尤可然之事也、

〔永昌記〕保安三年十二月廿二日丁未、今日除目入眼也、〇中略 今夜予〇藤原爲隆 任左大弁、自少弁至大弁十八箇年、以上臈之不加、可爲朝恩也、 廿五日庚戌、今日巳時著陣、以參議之著陣、爲本、大弁之後又著陣也、先著宜陽殿、著奧座、依例不著端、大納言座、雖人々納言座、兩座有例、有何難哉之也、次渡著仗座、先居參議座、次歸近衞亭、頃之歸參大內、殿下〇藤原忠通、此月十七日、任左大臣、今日依有御著陣也、予候床子座、殿下參御、入御敷政門之間、起床子磬折、殿下入宜仁門、著御宜陽殿、其座北面次渡著仗座給、奧第一間下官著參議座、中央申請申文可作之由、殿下許、揖於床子、見文、史插杖歸來、予歸著仗座、南端深揖申云、申文、殿下目給、微音唯、右顧、史趁出候小庭、殿下目給、稱唯候膝突、獻書杖、披出文、御覽之、如本結申、令置給、史一々結申退出、次頭弁宜下吉書、內藏司請奏、次返給、次出

御、次御立出儀、廳司烏丸曳幔爲陽明門代、殿下出御、

〔中右記〕大治五年十月十三日壬午、（晴日）今日大殿中將（○藤原忠實次子頼長）著陣給也、巳時許、參殿下（○忠實長子忠通）御所、近衞室町亭、大殿令渡給、召陰陽頭家榮朝臣、令勘日時、今日未時、中將參內、給前駈二人隨意、件劉殿上人宗重依皇居近々步入、從西陣著右近陣、則退出給也、御隨身二人外未召加、召加府隨身二人給祿返遣、申時許退出、（○中略）

裏書

著陣次第

早旦召家榮朝臣、令勘日時、（今日未時）　刻限參內給、入從西陣、幷月華門、（依便宜也）著本陣端座、（西面、從北第二間中程）

次將監（忠方）置硯、（前座）次將曹（時秋北面）申簡、（戌南面）

次府生（忠清）開之付中（北面）

次將監覽日奏（入筥、有懸紙、）

次開見日奏加署（見參云々）

次如元卷之置筥內

次將監參進返給之

次覽大概米文（入筥、封紙二、筥加入件筥、）

次開見之、如本卷畢置筥內、

次染筆、取封紙書封字、（一筋書一字、仍兩度書之、）如元加納筥、

次將監參進給之

次將曹請印事了、從本路退出、（不參殿上）

議所

此皇居土御門作如内裏、仍校書殿東面爲右近陣、左ハ公卿座ニ著之、後移著帳中座、右近陣不著帳、中座只乍本座行之、

今日次第、大略寛治二年、大殿令著本陣給之定也、

〔百練抄 十六 後深草〕建長五年十二月十五日、參議藤原隆行卿著陣、〈從修理大夫後〉

〔名目抄 殿舍〕議所〈セウシヨ〉〈昔除目之時、於此所賀文、有勸盃等、自議座弓場列、〉

〔西宮記 正月〕一五日叙位議〈○註略〉大臣以下著議所、〈自左近陣、出日華門著、一人大臣入南面者、已下入自東面、大臣東面南上、納言已下對、件從圖殿、〉〈內豎立床子於議所、上官候北壁外、若依雨上官、金中納言以下分敷座、大臣東面、更進藏文觀、〉

除目〈有議所、所行、不置議所、有所饗、兼議事、○中略〉

當日、大臣已下自陣著議所、

〔北山抄 一 正月〕五日叙位議事〈或六日行之〉

大臣著左仗座、議所裝束幷備饌畢、〈弁申大〉大臣以下起座、出自日華門、著議所、〈第一人入自南面、右大臣以下入自東面、大納言爲上卿〉之日、〈謂可入自東面歟〉

〔世俗淺深秘抄 下〕一議所諸卿著時、〈如除目〉上臈大納言著端座、然而大臣一人著時、必上臈納言著奥座也、爲傳盃有便宜故也、

一太政大臣議所、幷宜陽殿座、關白兼太政大臣時、不及子細、左右大臣縦座也、不然時者、雖有太政大臣、猶如除目叙位之時、左右内府著横座、但攝政關白上、太政大臣間有之、其時ハ左大臣以下縦座也、所謂閑院太政大臣〈○藤原公季〉幷久我太相國〈○源雅實〉等是也、

〔本朝世紀〕天慶四年十二月十七日壬寅、此日於殿上有除目儀、午剋太政大臣參入職御曹司、大納言藤原實頼卿、權中納言源清蔭卿、中納言藤原師輔卿、參議源高明朝臣、同清平朝臣、藤原忠文朝臣、伴保平宿禰、藤原顯忠朝臣、同敦忠朝臣參入、著宜陽殿西庇座、未剋、諸卿著議所座、諸司依例弁備饌、此

陣定儀

間藏人頭左近中將藤原師氏朝臣、奉勅進議所、召諸卿、諸卿起座、入自日華門、出自內衙門、入自左青瑣門、就殿上座、

〔小右記〕天元五年正月廿五日戊午、早朝參左府、從明日可始除目之由依仰事也、　卅日癸亥、飛雪、仍仰掃部寮、令奉仕張筵、人々云、似有穩便者、申剋、公卿參上、昨今公卿不著議所、被妨風雪歟、今日雪積五寸許、從去廿八日、大相國被候議場、

寬仁四年八月廿八日辛未、今日京官除目、○中略余著仗座、諸卿同著議所座事、問左大弁朝經、答不知由、仰可問史公親朝臣之由、起座向陣腋、歸來云、如例奉仕者、余云、有橫座連座云々、仍所尋問也、如例敷座者如何、大弁起座、問公親、來云、太政大臣、左大臣(關白)座、敷橫座、右大臣、內大臣座對座(右南內北、入道禪室關白相定被談東司云々)仰者、次召外記問宮書事、申云、具候者、其後余著議所、(經宜陽殿柱內、兩儀出行日花門、入從議所坤戶門、)諸卿同著、(內大臣已下、入自敷政門、)○下略

〔西宮記臨時六〕陣定事

上卿奉勅仰外記、廻告諸卿、諸卿參會、上卿傳勅旨、若有文書、以其文見下、諸卿一々陳所懷之理、自下申上、(諸例自上定下)上卿或令參議書定申旨、付頭藏人奏聞、輕事以詞奏、

小野記云、大臣參時、到溫明殿巽角、向西一兩步也、移外記史等居之、舊行朝臣云、一品親王參時、又居、二品已下不居、而近日第一親王參時、雖非一品居云々、是卽故實也、

〔江家次第十八〕陣定事

大臣奉仰、定日催諸卿、

仰外記令催之、大臣外記自參催申之、自餘令召使催之、若給文書者、先給弁令勘先例、或又給外記令勘之、近例官卽續文、外記別奉勘文、諸國申請事等、唯雖有可定申之仰、給弁令勘例後定之、

大臣著陣(令置硯定、如恒)

諸卿參著

藏人下文（或自上給、書之時、令官人奉之、）

大臣下文書（時勘文第一々見之、有疑難之時、退且讀、見畢下之於文人、）之

參議見畢之後、令進讀、（或先進之大臣、奉大臣卿、召史卿之、又或富加入禮紙、細加禮紙等、）

次令參議讀之（大臣許勘者、依參議令讀、）

次自最末人定申之（西宮記云、上定申之、）自定畢後、令大弁書之、每書畢一條令讀擧、大弁加定文於本解進之、傳自座上次第進之、大臣付藏人令奏之、

〔禁秘御抄〕改元

代始改元者、即位次年定事也、其外依大事有改元、職事官外記等承之、而文章博士式部大輔又可然儒卿、少々稱申、諸卿於陣定申、職事奏其由、重可定申、被仰、或有論言、定以前職事奏勘文、有御覽返給、年號字內可然年號無之時、舊勘文被下常事也、寬治度被申院、近代每度如此、嘉保自上被定歟、年號定之後、主上於御前令書給、其儀無別事、高檀紙書年號字、（一枚）其後萬人可書也、　承曆元年也（不書月日、）（凡年號八分也、元年字書也、〇下略）

〔西宮記臨時六〕陣中文

不與狀國分僧文、不入陣中文、

上卿著陣南座、（中文、史持文刺、自南渡北床子之後、上卿著南座、一大臣本自在南座、）大弁著座、申云、申文、上卿許諾、大弁稱唯、（右顧）史刺文候、小庭、（蹲候、宜陽殿南邊上、）上卿目史、稱唯、跪進膝突、進文、上卿取文持、史挿、上卿一々見文了、以右手引取表紙、以左右手披張、置座前板敷上、史取表紙開展、置膝突前、上卿以文一々給之、（大臣一度給、史高聲給申、）史披文候氣色、上卿揖許、可奏文者、仰云、申給へ、上宜文者揖許、史稱唯、卷文加杖退出、大弁立著床了、陣申文、作官符之時、直辨加署、（無別事、尋常直令署官符、）

近代、申大中納言文、開檢不動倉文、（申納言文歟）七諸社祝禰宜文、補諸寺別當文、（七大寺、又別勅寺不申、）讀師六夏文、減省文、（歟）改姓文、（歟）采女文、（歟）得度文、御馬逗留文、（多平別歟）文申戶田、（歟）授神位、（上三儀歟）以御齋會講師度者、御導師度者、抄四府史生衆國、國營田、（歟）勘出文、（近代申大納言）解由不與狀、交替延期文、諸道得業生文、勘解由史生、補諸司才伎長上國掌文、諸寺三綱定額、（有公綱別當者不申上、直下宣旨、）依續文趣可判、（此外文類甚多也）

申一上文、恩詔賑給文、不堪文、（初度奏、今諸國定申、諸國定奏後、依諸國定申、舊例三度奏、載年々勘文可尋知、國）位祿、王祿、失符、大粮、申他國文、異國人來著文、給復百姓、太宰陸奧解文、加階位文、（歟）已上大粮文、史所充、外記所充、位祿充文、無介署解由、大給節祿、（國文經續書例、邦基卿爲大辨之時、初有續文例書也、）充大粮、（可尋年中行事、大臣著大辨在座、其所辨候官人座、史覽文、其所辨於私家定云々、辨爲維摩會勅使者、使部持官符、向會所取辨署、故實也、）

〔北山抄六備忘略記〕陣申文事（不與狀、國分僧文、不持入陣中云々、）

上卿著南座、（史插申文、自敷政門前北度後、以次上座著也、）大弁申申文由、上卿揖之、大弁顧面、（近例稱唯、可尋故實、）史取申文參進、跪候小庭、上卿目之、史稱唯、進膝著奉文、上卿置笏於左、（此座給宣旨時、可置右歟、或帶劍人可置右云々、然而拜舞時置左、左右只隨便宜也、多置左耳、）取文史、坐定後、開表卷紙、押遣文於右端、隨見畢、置左端、一々見畢、取表卷紙、展之置座前端方、史取件紙、又展置膝著前、上卿一々取文給史、史開文候氣色、判許之詞如常、給畢史退出、聞取笏、（大臣者、卷紙一度給之、史披文一々讀申、）

〔江家次第十八〕陣申文事

上卿著南座、（史插申文、自敷政門前北渡後、以次上座著、）大弁申申文由、上卿揖之、大弁稱唯顧面、（近代稱唯）史取申文進跪候小庭、上卿目之、史稱唯、進膝突奉文、上卿置笏於左、取文、史所持之杖定後覽、史定座後開表卷紙、（押遣文於右端、）隨見畢置左端、一々見畢取表卷紙、展之置座前端方、史取件紙展置膝突前、上卿一々取之給史、史開文候氣色、

依請（申ノマヽ）、留（中ヘ）、奏（達）、下所司（曾）

上卿判調如常、
　馬料〈申ノマヽニ〉鉤文〈申ノ中給ヘ〉
先下馬料、史退出間取寄、〈給讀〉
大臣者乍表卷給之、史高聲讀〈○讀一本作續〉一申給之、不與狀不持入於陣申文、而受領怠仕事、〈鉤匙〉依執柄仰於
陣下例間存、國分僧文〈不持入〉班符減省〈常中大納言、或中納言、例者有、〉故實當日不許、後日召史仰之、申大臣二人、
不堪文　　所充　　大粮文
〔本朝世紀〕正曆四年十月廿九日癸未、午後、權大納言藤原伊周卿、中納言源保光卿、參議藤原安親卿、
參入内裏、有陣申文、參議左大辨藤原忠輔卿、右大辨平惟仲朝臣、著結政座、
〔三長記〕元久三年〈○建永元年〉四月五日丙辰、新中納言親經卿著陣、〈蓋〉有趣越之歟、然有出仕之志歟、六
日丁巳、史宗清持來昨日新中納言著陣申文、〈有三通入筥〉紙、民部大夫康業相逢、留文返給筥、史稱唯退出、件
史相具折烏帽從一人、乘騎馬云々、近代上官口騎馬尤見苦事也、當時史等之中、乘車 三人云々、陣
申文目錄如此、
　元久三年四月五日陣申文〈新中納言右少辨〉
　　大和國司申請被給鉤匙開檢不動倉事〈貞〉
　　伊賀國司申請被給鉤匙開檢不動倉事〈貞〉
　　右大史惟宗佐員申請馬料韓權例合事〈參〉
　　　　　　　　　　　　　　左少史三善宗清
五月四日甲申、去二日政、南所幷陣申文目錄、史宗清使職等持來之、奉幣日時自陣送之、〈○中略〉
　建永元年五月二日陣申文〈藤中納言、權右中辨、〉
　　大和國司申請被給鉤匙開檢不動倉事〈貞〉

伊賀國司申請被給鈎匙開檢不動倉事缺

修理右宮城判官右大史三善業信申請馬料韓櫃剏合事依請

右少史三善宗淸

陣覽內文儀

〔江家次第十八〕陣覽內文儀

外記催所司、若無少納言、以少將代官奏事由、官掌召使部寮等、上卿先著陣、先是可令申關白可行陣覽內文由、令藏人申受領鎰符等可令請內印由、次奏可許後、令外記進官符等、有內案者、外記先引墨之入筥、上卿加檢察畢、作在本座、令外記內覽於執柄。。。。。許、若候御在所者、令殿上弁若藏人覽之、次與外記就弓場殿、令藏人奏聞、返給之後歸著陣座、外記持來官符、上卿目令退出、次上卿召曰、近衞司、大將者稱政人將監在陣座稱唯參進候小庭、上卿云、印、將監稱唯退出、掃部寮立案於軒廊東第二間、少納言主鈴、持印櫃鑰等、將監等入自日華門出印、此間少納言立長樂門前橫西頭、將監立東頭重北、少納言相率就案下、將監置笏留立軒廊南三許丈、主鈴置印板於案上、取官符授少納言、退立將監傍、少納言就膝突進上卿、上卿見畢返給、少納言還就案下、令主鈴捺印畢、或少納言返奉官符、上卿召外記給之、次如初納印退出、掃部撤案云云、

故行成卿行儀

奏官符歸陣、外記奉官符退出、召近衞司令出印、目少納言、少納言渡小庭著膝突、給官符令請印退出云云、入夜之時、近衞將監參入、上卿問曰、誰曾、將監稱姓名、其後仰下、或上卿召近衞司二音、此事不見重明記、

〔左經記〕長元元年五月三日丁酉、權中納言師房卿、參議經通卿、定賴卿、少納言源經長朝臣、相分自修明門參入、是爲被行陣覽內文也云々、少外記伴重通、幷史相從參入、抑上臈上卿退出、辨少納言、外記等相從祗候、而史一人不候、皆從修明門參內也、可謂違禮歟、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年九月六日、申時許、新中納言通俊卿參仗座、被行陣覽內文、先上卿在奧座、依

無上臈職事、令予可行内文之由被奏、仰聞食之由、次上卿移居端座、外記覧文、入筥、以外記令内覧、殿下御覧之事也、散剋還來、外記申内覧之由、上卿起座進弓場殿、令職事奏、六位藏人、外記持筥扈從、返給之後於仗座見文返外記、次陣座前立筵、中、次請印官符、少納言成宗、近衛將監一人帶弓箭、立其傍、事了上卿退出、

〔江家次第 十八〕陣覧内文次位記請印事

上卿先令奏陣覧内文、并位記請印由、奏可許着陣、若無叙人者、先例返引、

召外記問請司、

中務輔不參者、以近衛少將爲代官、若爲殿上侍臣者奏事由、雖有爲藏人頭中將奉仕例、猶外衛佐奉仕例云云、

主鈴不參者、以中務録主殿屬等爲代官、至中務録、依有永宣旨不申代官、

外記進官符、入筥、但内覧外記引之、

上卿見之畢、令外記内覧、

内記進位記、入筥、

上卿加捻撿、副宣旨者、見畢留、後返内記、位記狀隨人各異、有女位記者、男位記上横置之、見畢令内記覧之、

以上執柄若候御前若殿上、可令藏人若殿上弁覧歟、

次歸來進之、上卿令持内記并外記、著御所令藏人奏之、返給著本座、

外記持來官符、上卿目令進、

故行成卿被行儀、奏官符歸陣座、外記奉官符退出、召近衛司、令出印之後、目少納言、少納言渡小庭著膝突、給官符令請印退出、

内記持來位記、上卿留位記、内記退、上卿召近衛司、召大將者、召人、將監於宜人座方稱唯、出跪候小庭、入自宣仁門、臨日候宜陽殿壇上、

陣還出儀

上卿宣、印、（若入夜者、先可問誰曹、將監稱姓名、後可仰云云、）件名謁不見於舊記、將監稱唯出、少納言主鈴等出印、（入自日華門、出之、此間少納言立長樂門橋西頭、將監立東頭、並北面、雨日立廊中、）掃部立案於軒廊東第二間、少納言就案下、將監留立軒廊南三許丈、主鈴置印板於案上、上卿宣中務司、（主鈴若退、可立日華門外南廊歟、）輔、（於陣方稱唯、）入自宣仁門、候膝突、上卿給位記、輔給宮、渡小庭、就案下、（立少納言東、）少納言相共踏印、（輔操其一端、兩可印繼目、由見舊記、）訖返上位記、（上卿可加檢察、）輔退出、（備忘抄、上卿未檢察畢、已前輔退出、）次主鈴進取官符、授少納言、退立將監之西、次少納言覽官符、（渡小庭覽之、）上卿見畢返給、主鈴捺印於官符、訖、少納言以下納印、如初儀退出、（或請印訖、少納言返上、上卿召外記給之、）上卿令持位記於內記著御所、覆奏之返給、（女位記者、留御所、）

上卿還著陣座、返給位記於內記退出、

或記曰、若上臈候陣者、先觸案內行之、一上在南座者、申案內後、以官人令引下膝突、

攝政時、頭藏人奉仰、持參攝政直廬、

○按ズルニ、位記請印ノ事ハ、官位部位記篇印位記條ニ詳ナリ、

〔西宮記 臨時六〕大臣自陣退出事（入夜雨日無此儀、）

大臣退出、（敷政門、）辨少納言、外記、史、陪從、大臣出左衛門陣之比、至東籬下、外記史各一人、（外記右、史左、）從大臣左右趍進、且趍且向、大臣比至東屏南二柱、以扇若笏擬示可留由、外記史共跪稱唯、各退留、外記立局門前南邊西面、召召使、召使等稱唯、自局中走出相分、前行追雜人、大臣至陽明門前、納言已下、當左兵衞府小門留立、（東面雁行、）少納言辨列立其西、（去公卿西四許丈、北上東面、）外記史列立其西、（北上東面、）大臣不至門、當下四五尺許、垂尻右廻西向揖、納言已下共相揖、大臣出門之後、參議以上共南面、即一々東行、更西向揖、下臈退出、外記史更列立道北頭、辨少納言立定、次第揖退出、

雨日大臣出自敷政門者、揖在左陣腋、辨少納言、經溫明殿砌東行、辨已下不陪從、大臣至陽明門、揖、直退出、納言已下群立門內、一々揖退、一大臣著陣之間、次大臣不入自敷政門、而近代入、（親王入云々、又云、次大臣會可）

入云々、闕數未詳、

〔本朝世紀〕天慶元年八月七日辛巳、上卿不參、仍無政、衙後、太政大臣(忠平)〇藤原 大納言平伊望卿參入、(但大納言昨夜宿直夫參入、侍候之、)太政大臣候殿上、大納言就左仗陣座、被定行秋季御讀經請僧之事、參議源清蔭卿、同是茂朝臣、藤原顯忠朝臣參入、(但參議藤原朝臣、早朝參入、著左衞門陣座、)

〔左經記〕寛仁三年九月廿二日乙亥、參內、右大臣(公季)〇藤原 中宮大夫(齊信)〇藤原 權大納言(公任)〇藤原 左大將(敎通)〇藤原 右衞門督(實成)〇藤原 右大辨(朝經)〇藤原 侍從宰相(資平)〇藤原 等、於左仗被定申太宰解文、(筑前國所進、爲刀伊國被取壹岐對馬等人民二百餘人、副壹岐嶋解、并對馬解文等云々、)共申云、先召太宰府、使問定、依實可被行左右歟云々、

〔朝野群載(五朝儀)〕陣定

太宰府言上大宋國福州商客潘懷清參來可安置否事

内大臣春宮大夫藤原朝臣、(信長)〇藤原 左衞門督源朝臣、(俊房)〇源 右衞門督藤原朝臣、(忠家)〇藤原 權中納言藤原朝臣、(實季)〇藤原 右兵衞督藤原朝臣(伊家)〇藤原 等定申云、件事大概相同右大辨源朝臣定申、但貨物解文之中、注進佛像并文書等、而若被廻卻者、恐存不被用、如此佛像書籍、後來商客永不貢進、仍被免安置、被納方物、何事之有乎、權守中納言源朝臣、右大辨源朝臣等定申云、件懷清等治曆元年雖參來、依相違起請年紀、被廻卻符、去年歸郷已畢、而今年重參來、已似忘朝憲、又副進公憑案文、先例若不進正文歟、太宰府不被問此由、尤不審也、但如存問日記者、雖被廻卻、爲慕皇化、遠渉蒼溟、重以參來者、就之言之、誠雖侵憲紀之過、殆盡慎大德之遠情乎、況歲及臘月、寒浪可畏、仍下知旨趣、被免安置、殊有何事乎、凡商客參來、相定年紀之後、不必依起請之期、有被免安置之時、是宰爲公家、無指事妨之故也、抑至于貢進貨物等者、若被安置者、可被撿納歟、

延久二年十二月七日

〔續古事談(二朝廷)〕昔高麗國王惡瘡ヲヤミケリ、日本ノ名醫雅忠ヲ給ハラント申タリケリ、此事陣ノサ

ダメニ及デ、サマ〲ニ沙汰アリケルニ、師大納言經信申云、高麗ノ王惡瘡ヤミテシナム、日本ノタメニナニクルシト云ハレタリケル一言ニ事サダマリテ、ツカハスベカラズト云事ニナリニケリ、サテ返牒イカヾイフベキトイフサダメニハ、此事エ申トヲサズトイフベシトテ、匡房卿其狀ヲカキケルニ、申トヲサヌヨシヲカキオホセズシテ、二タビマデカヘサレニケリ、第三度ニ、雙魚難達鳳池之月、扁鵲何入鷄林之雲、ト云秀句カキタリケルタビ、メデノヽシリテツカハサレニケリ、後ニ彼國ノ商人來ケルガ、此句ヲ紳ニ書シテコソキタリケレ、ヒトゴトニカクカキテモタルトナンイヒケル、

古ヘ野干ヲ神ノ體トナシタル社ノホトリニテ、キツネヲ射タルモノアリケリ、コノモノトガアリナシノ事、障ノ定ニ及デ、諸卿サマ〲ニ申ケル中ニ、師大納言經信卿申テ云ク、白龍之魚勢懸預諸之密網、ト計リウチ云テキラレタリケリ、イミジキ神ナリトテモ、キツネノスガタニテハシリ出タラムヲ射タラムハ、ナニノトガヽアラムト云心ナリ、此事ハ龍ノ魚ノスガタニナリテ、浪ニタハブレテウカビイデタリケルホドニ、預諸ト云モノヽアミヲヒキケルニカヽリテ、カナシキメヲミテ、大海ニカヘリテ龍王ニウタヘケレバ、龍王コトハリテ云ク、ナニシニカ魚ノスガタトハナリケル、サレバコソアミニハカヽレ、今ヨリノチ、サル事ヲスマジキナリト云ケリ、今カク云ハ此事也、又或人申テ云ク、射タリト云トモ、其野干マサシク死タルヲミズ、トガヲモカラズト申、此日ノ定文ハ、宰相中將隆綱ゾカキケル、此人ノカタチヲカクニ、雖聞飲羽之號、未見首丘之實、トイフ秀句ハイデクルナリ、後三條院ハコノ定文ヲ御覽ジテ、餘リニ感ゼサセ給テ、隆綱ガ宰相中將ヲ過分ニ思ケルハ、ユヽシキ僻事也ケリ、伊勢大神宮正八幡宮イカヾオボシ召ケントゾ仰セラレケル、

〔永昌記〕嘉承元年四月十八日己卯、又御物忌、今日可有仗議、然而出車、定度々延引及于今日、上卿適

可參者、〈略〉○中此夜諸卿參陣、被定賀茂社穢有无事、法家勘申之、範政申、不可爲穢之由、資清申、可爲穢之由、依資清勘文、可爲穢之由被定申、〈下人住所雖垣内有隔、而一屋有穢人、仍一屋人用同門往反、但雖無隔、只非往還者、〉仍來十九日奉幣延引之由被仰下、又穢限及來廿日、社頭穢引來本院者、御祓可延引者、上卿又令頭辨奏諸道勘文、明經道勘云、春秋成公三年、經二月甲子新宮災、三日哭、公羊傳云、廟災三日哭、禮也、禮記云、有焚其先人之室、則三日哭、孔穎達正義曰、大廟有火廢朝、漢書曰、遼東高廟災、帝素服五日、說苑曰、魏文侯御廩災、素服避正殿五日、群臣素服哭、唐令云、五岳四鎮四瀆陽星帝不視事三日、謹勘件等文、宗廟御廩之災、祖廟靈祠史、天祠靈社之火、群以无所見、但別雷社者、一天鎮守之祠、四海尊嚴之廟也、今爲灰燼、何不驚感哉、五岳瀆四瀆陽之時、猶設不見政事之文、宜准宗廟例、可有廢朝歟、〈賴宗、定義、師遠、定政、依[illegible]連署也、〉紀傳勘文云、成公新宮、幷漢孝武皇帝高廟等災、同明經道、後漢書、孝順皇帝秋丁酉、茂陵原災、帝縞素避正殿、勘件文、依宗廟之火、成災痛之禮、而賀茂皇大神有宗社之儀、可有廢朝之事歟、〈實義朝臣、國通、勘文、在明賢朝臣、依在任國也、〉明法博士範政勘文云、儀制令云、大陽虧、有司預奏、皇帝不視事、二等以上親、外祖父母、右大臣以上、散一位喪、不視事三日、國忌日、三等親、百官三位已上喪、皇帝不視事一日廢朝之旨、立制如此、皆是人倫之法、則不預靈社之禮制、准行之儀、案據未詳、但國家之敬崇、除大祖廟社之外、欽仰无雙、如式者、預案上官幣、亦爲中祀、或遣齋内親王、立公卿之使、祭禮之日爲廢務、我朝雖无所指之文、頗嚴重之誠、慎何輕自内臣下之喪乎、須有三日之廢朝、資清勘云、同範政、但不可輕自散一位之喪、猶可有三日之廢朝歟者、〈當宗師明納言以上不見如此之勘文、仍不進者、但數政允勘文、未得其心、〉又依諸卿定申、可有三日廢朝之由被宣下、停止音奏警蹕、但依爲御物忌、本堂御籠、

〔長秋記〕大治四年五月十七日甲午、内大臣可定賑給使云々、鎭西社新免田、可停止否有陣定云々、

十八日乙未、午始參内、〈略〉○中口著陣、駿河、薩摩兩國條事、土左、伊豫兩國申損亡事、各有續文、權大納言事行欲定間、頭弁雅忠、昇自奥座、以加賀國解下權大納言、令定申者、權大納言云、諸國之事、多爲續文、

了後所僉議也、而於此文者、未續文者、後日可定申歟、將准伊豫、土左等例、可被定申也、〇中略大納言承諸、處人仰旨不得其意、申損亡之由、是非強急事、加續文後日令定申、有何難哉、此後召硯、上官一人不候、仍右武衞讀文書、諸國條事、任續文可被裁許、此事薩摩國申、相撲人元定、父元宗、長男元象、二男無指官符宣旨、各募免田不弁濟官物、可被停止者、件條下官申云、相撲免田事、雖無官符宣旨、出顯進輩給本府牒募來事、是奮貫者、稱官符宣旨之條、似無其謂者、被問本府、可被裁許歟、諸卿皆同之、三个國損亡事、暴國一年被給復、有何事哉、皆一同定也、依無紙筆、不書定文、又右兵衞督取文書退下、

諸卿參內日、上官不候陣、是奇怪事也、無上官不進紙硯、而押被行定文如何、末代公事法如此歟、

〔台記〕仁平元年二月廿七日戊辰、亥時參內、著右仗、先之中納言公能、忠基、參議經宗、公通參候、此外無參入之卿、定申巳講覺智、阿闍梨尊譽、相論理非、經宗讀、公通書、余以下、申覺智有理之由、唯經宗申可依勅定之由、余示執筆曰、後日、衣冠、持來定文、何事之有乎、

〔玉海〕元曆二年〇文治元年六月十六日丁卯、有仗議云々、　十七日戊辰、昨日定事、大外記師尙、示送參入公卿、

左大臣〇藤原經宗　內大臣〇藤原實定　皇后宮大夫實房　中御門大納言宗家

前源中納言雅賴　左衞門督實家　別當宗通　梅小路中納言長方

源中納言通親　新藤中納言經房　新宰相雅長　左大弁兼光

被定事

神社報賽事　神位事　同封戶事　兩社行幸事

改元事　山陵使事　德政事　爲亡卒修善事

定文草、被遣兼光之許之處、人々未注送申狀、到來可付上卿、明日明後日間可進云々、

〔資勝卿記〕寬永九年三月十三日辛亥、今日日光祭陣之義、上卿烏丸大納言、奉行淸閑寺辨也、先參仕

仕弁出、次召大内記仰宣命、少内記持參宣命草、又清書被見、次召弁被渡清書、奉行攝政殿ヘ持參宣命草被返下之時、清書ヲ取替又被爲、其後返給之時持歸、出陣進上卿、上卿披見了、奉行弁起座、次召少内記遣宣命、次徹軾上卿起座、今日上卿宣命被見之作法、向燈臺ナドヲ如讀如何ヶ樣ノ義、先代未聞也、

陣定雜載

〔野曲抄〕陣の座などにて、仰せごゑとてあり、ゆう〳〵とつよからずして、又のぶる言葉とにごりなくあとさきそろひ、人のき丶よく、その聲に位有、いきに苦勞なくして、ゆ丶しくかたりぬるぞ、次の澄にさし聲、ものめし、仰せ言葉などをもるし侍る、穴かしこ〳〵、ひとに聞せ給な、

御前定　殿上定

〔名目抄恒例〕評定（ヒヤウヂヤウ）有於御前　僉議（センギ）有於殿上

〔西宮記臨時六〕御前定

公卿座如除目時、無大臣圓座、只以圓座一枚、置大臣座前簀下、大臣已下被召參上著座、召封事筥、令置圓座前、大臣召藏事參議一人、參議著御前圓座、披文把笏、一々讀申、毎一條讀了、諸卿定、其旨大弁執筆記了、參議取筥退下、其筥不封、以木釘打上下、表書云、某官某人進云々、

〔江家次第十八〕陣定事（中略）

或有後日可書進定文之時、參議讀畢、隨身退出、事畢令撒硯、（執筆參議給之於史）或有以詞被仰下、令參議書之事、或又以詞奏諸卿所申之趣、或於御前（清涼殿）定申、（不必書）其座如除目時、（但不敷大臣圓座、如遣宮定時、又敷之、）但神鏡定時、撒御前儀、附書定文、或於殿上（○清涼殿侍所）定申、（不必書之）不堪田定時、大臣奉行、至書定文時、經大弁之納言留文讀上、令書之、（若無參議大弁、不令他參議書之、或令非參議大弁書之、）

〔西宮記臨時八〕所々座體類

清○涼○殿○御○前○座○

有事御座在前之時、王卿座在孫庇、（南第一間也）若御座在御帳前孫庇之時、王卿候簀子敷、（以菅圓座立各置之）

御倚子者、在南第三間東面也、臨時祭日太子參上長櫃云々

清涼殿侍所。

件所有四間、殿上事南第一間壁下立御倚子、南面同第三間立王卿大盤、四尺第四間立侍臣大盤二脚、五尺其盤西方戸北掖置日記韓櫃、其頭立日給簡、親王大臣參著日、可著小大盤之內外、大納言可著兩大盤中間、中納言以下正可著侍臣等大盤也、總大納言以下、非參議、皆可著長大盤也、但親王者可著奥座、其外公卿內外隨便、親王或著外座、但至于他處座、親王必尚可著奥座、

宣陽殿座○中略

以上座、是公卿本座也、○下略

〔世俗淺深祕抄上〕一臨時除目、於御前被行例有之、或公卿昇進、或不然時モ、被行大事時、必於御前有之、

〔續古事談一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和漢ノオ智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク〱キヽヲカセ給テ、御即位ノ後、サマザマノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事、長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿○藤原敎通マケテ申サセ給ケルニ、事カタクシテタビ〱ニナリケレバ、主上逆鱗ニヲヨビテ仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ、事ノ外ニ御ムツガリアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給トテ、大盤ヲハナチテノ給ハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハ、ケフウセハテヌルゾトイヒカケテ出給ケレバ、氏ノ公卿マコトニモ一人モノコラズ皆座ヲタチテ、殿ノ御トモニ出ケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリケル、主上是ヲキコシ食テ、關白殿幷ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニ

クリ、殿ノ御威モ君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテイミジキ事ニテナンアリケル、

〔神皇正統記 白河〕白河院〇中略天下ををさめたまふこと十四年、太子にゆづり尊號あり、世の政をはじめて院中にてしらせたまふ、のちに出家せさせたまひても、なほそのまゝにて、御一期はすごさせまし〳〵き、おり位にて世をしらせたまふこと、むかしはなかりしなり、〇中略圓融の御時は、やう〳〵しらせたまふこともありしにや、院の御前にて、攝政家の大臣承つて、源時仲の朝臣を參議になされたるとて、小野宮の實資の大臣などは傾け申されけるとぞ、〇中略この御代には、院にて政をきかせたまへば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、されどこれよりまたふるきすがたは一變するにやはべりけん、

〔中右記〕永久元年四月卅日辛亥、從昨日山大衆四五百人許、引率神人、昇神輿、參集院〇白河御所北御門邊、殿下〇藤原忠實寅時許、從內御宿所令參院御所給、皇居近隣之間、武士濟々在院幷內陣邊、大衆所訴申之事、於院殿上有定、殿下、內大臣〇源雅實以下公卿十餘人參集、從本候宿人々、殿下、內府、此外兩三人、〇余宗忠此晚參入人々〇直衣所訴申、權少僧都寬覺可被流罪事、被問諸卿、然而興福寺僧綱等全無過怠、推而被行罪過、豈以可然哉、仍人々只可隨勅定由、群議定、仰云、件事更不思食得、仍猶可切事由有重仰、此間大衆神民訴如入水火、神民等已進來北御門邊、揚聲大叫、武士等雖相禦、力不可敵、召山座主法印仁豪、頻可制止由、重被仰下、衆徒之怒、不可留止歟、群議之趣、不一決也、就中藤氏公卿卷舌閉口、敢不出詞、〇予藤原宗忠記主心中有恐、不如一言、先々大衆之訴、必有奏狀、今度祇園神民構被盜日記許也、只以詞可流寬覺之由頻訴申也、衆惡之甚、無所訴歟、〇事之根元在昨日記也天下上下畏大衆威、輕朝家威、天之滅時歟、被責衆徒、欲有裁許、人力不可及歟、群議未決、衆怒如雷、一人無可救之者、只是佛法王法共滅亡之秋也、叡慮可一決由、頻依被仰下、然可有沙汰由、大藏卿爲房定申許也、依件人定申、推而可被行寬覺僧都罪過之由被仰下、但又依興福寺大衆許、被罪延曆寺僧綱時、不可訴申由、同被仰下、仍大衆成

慶歸散畢、衆人如脫虎口、纔如存運命、誠哀哉何爲、漸及未剋、衆徒歸散之後、院有御幸、　二十一日、入夜著東帶參院、殿下、左大臣、(○源俊房)內大臣、民部卿、(○源俊明)源中納言、(能俊、已上直衣、)大藏卿、(衣冠、○藤原爲房)候殿上之間、有召參御前、法皇御于東廊南戶內、人々候其南簀子敷、(疊數、圓座、)雖御物忌、依爲大事、召御前也、法皇仰云、南京大衆參上、與山欲企合戰、度々雖被制止、已不承引、又申請之旨、可被裁許歟否之間、可定申、大藏卿爲房朝臣、先讀上山奈良奏狀、後、定申云、衆徒申請旨、忽雖左右、猶重可被制止歟、權中納言源朝臣(能俊)定申云、可被裁許歟否條、被行御卜後、可被一定歟、予定申云、先南北大衆可被流罪僧綱之由、訴申之條、忽雖裁許歟、是無指罪過人被行罪、是有其恐事也、但凡裁否之條被行御卜、同權中納言源朝臣定申、民部卿、內大臣、左大臣、殿下大略被同申御卜也、重仰云、御卜於何處可被行哉、民部卿申云、於神祇官被行如何、予、內大臣申云、猶如此臨時事、可有軒廊御卜也、二季御體外於神祇官殊不見事也、仰云、雖有所勞、相扶所參仕也、於御卜上卿者、依可及數剋、雖奉仕歟、仰云、內大臣可奉行者、人々退出、件事兩方大衆欲企合戰、無左右可被制止也、若不隨宣旨者、共可被禦事也、而人々可被行御卜由、定申之條、其理可然哉、只是依朝威輕、衆威重、見世間形勢、大略被定申歟、何爲哉、今夜依爲御前定、予著東帶也、　二十九日、晚頭從院有召、則馳參、左大臣以下人々多以參集、南京大衆已以出本寺畢、下人走來申旨、隨兵千万、京中騷動、不可記盡、　內大臣、源宰相中將參仗座、行軒廊御卜、(先有日吉社、怪異御卜、)是與福寺訴申事、可有裁許哉否、令官寮卜申者、件卜形加封(內大臣自書下之云々)給官二枚、卜之後付合否、又書一二由給寮之人々、可定申由雖被仰、於予者雖申左右之由申畢、急退出、凡京中上下雷動、

〔長秋記〕大治四年五月卅日丁未、未剋參院、頭弁參會談云、曆論事、深筭重進申文、別當給家榮朝臣重令陳申、以其陳狀給上卿可被定云々、放職事、上卿內々宣下、其理可然、良久新院出御、臨晚南方有雲氣、上皇御覽大略經天之體也、　六月一日戊申、未剋參院、明日曆定變仗儀、於院殿上可有定云々、應召人、攝政、內大臣、權大納言、別當源相公皆先高才博覽之人也、　二日己酉、深筭大法師、與曆博士等

相論、今年御暦相違事、於新院殿上有公卿僉議、御暦閏七月小、深算申旨、七月大、閏八月小云々、各進勘文、二度三度、内大臣宣下、仰官被問暦道、次度深算内奏、院別當奉行不奏者直問、陰陽頭家榮朝臣以件後勘文、官座被下、於本勘文、内大臣相共被奏、清撰有限、應召人五人攝政、内大臣、權大納言宗忠、別當實行、參議師賴卿等也、各著直衣、深算被召候藏人町、陰陽頭家榮朝臣助宗□□等、候新院北面、以暦道陳狀被問深算、頭弁顯隆朝臣問之中旨不詳、唯號有奏狀、又聞家榮陳、深算述口傳之由、諸卿見申文、不讀畢、又不被書定文、師相公發語云、須問算道也、然而被是被陳之旨、大略其理書了、但於御暦付暦家說可被用、於宿曜事宜被用深算說歟、千羊皮不如一狐腋、深算申旨雖其說多、不可及家榮一言歟、諸卿同之、上皇又如此、仍被仰下其由云々、後聞、深算博士爲康問重上奏、問博士大夫史正重、宿曜師珍也同意、又助教信俊同暦家云々、是承新院仰大略記者也、後聞、深算重申文、家榮重陳狀、別當出座奉、攝政、於太解内大臣自懷中取出奉攝政給云々、

〔古今著聞集 三 政道忠臣〕治承四年秋の比より、伊豆の國の流人、前右兵衞佐賴朝謀反のきこへ有けり、追討使少將惟盛朝臣、さつまの守忠度、參河守知度等くだされたりけれども、源家の兵次第に歎そひければ、追討使等みな道よりかへりにけり、かゝる程に世の中しづかならざりければ、十一月卅日、新院高倉〇の殿上にて東國謀反の事評儀有けり、中の御門左大臣藤原〇經宗、左大將藤原〇實定、帥藤原〇隆季大納言、新大納言藤原〇實家、春宮大夫藤原〇忠親、左大弁藤原〇長方參られたりけり、頭弁經房朝臣綸言のむねをおほせけるに、左大弁發言して申けるは、ひとへに可被行德政、漢高被掠六國、承平年中に有將門謀反、和漢雖存先蹤、於今度は四ヶ月の中に、十よ國皆反、當時之政、若不叶天意歟、以之思之、法皇〇後白河は四代帝王父祖也、無故不知食天下、如元可開合政務歟、又入道關白被浴歸朝之恩者、可爲攘災之基哉と申たりけるを、諸卿聞てみな色をうしなはれけり、他人はたゞ德政を行はるべきおもむきをぞ申されける、彼兩事にはせられざりけり、法皇去年の冬より政に御口入も

廢朝

なく、殿下ゆへなくながされさせ給ひし事は、去かしながら平太政入道〇清盛の張行にて侍りけるに、左大弁おそるゝ所なくさだめ申されける、ありがたき事也、入道もさすが道理をばはぢ思はれけるにや、其後程なく十二月八日より法皇の御事もなだめ申、同十六日入道殿下もびせんの國より歸洛せさせ給けり、

〔百練抄十六後深草〕建長二年二月廿八日甲子、於院殿上被議定去年伊勢外宮遷宮時所取落之安宮瑠璃壺事、幷西寶殿血氣事、攝政已下參之、三年五月二日辛酉、於院殿上被議定伊勢豐受大神宮造宮使致不法之間、可被斷罪歟之由、神宮訴申事、攝政已下參之、四年十月十五日丙寅、於院殿上被定御元服事、攝政已下參之、五年四月廿日丁卯、於院殿上被議定宇佐正八幡宮炎上間事、攝政已下參陣、廿一日戊辰、於仙洞被評議沽價法事、

〔名目抄臨時〕廢朝(ハイテウ)

〔公事根源正月〕國忌　廿五日

廢朝廢務といふ事有、〇中略廢朝と申は、諸司の政は、よのつねにかはらずとり行侍れども、天子みづから朝にのぞみて、政をきこしめさぬ也、これをば輟朝(テツテウ)ともいふ、廢朝は數日にもをよぶべし、諸司は政事をとゞめざるゆゑなり、

〔年中行事秘抄〕廢朝廢務差別事〇中略

廢朝、諸司政如常、但天子不臨朝云々、輟朝同之、

口傳云、廢朝雖及數日、不可有擁怠云々、是諸司不停止政事之故也、

〔拾芥抄中末廢朝〕廢朝廢務差別事〇見西宮記中略

廢朝、諸司政如常、但天子不臨朝給云々、輟朝同之、廢朝雖及數日、不可有擁怠云々、是諸司不停政之故也、外記口傳云、廢朝之日、官外記政如常、但印書不可過五十枚、是過五十枚之時、可奏之故也、又內

印不可行、奏內覽之故也、

〔禁秘御抄〕下一廢朝

廢朝者、諸司政如恒、天子一人不臨朝政、廢務者、諸司不政、一日、或三ヶ日、廢朝後未行政以前、神事外、他事有議多者不行也、世大事、火事、急奏時有之、依事淺深、或五ヶ日、或三ヶ日也、廢朝三ヶ日被仰ヌレバ、止音奏警蹕、禁中無物音、垂清涼殿御簾、第四日可上御簾、而當暑日、或及數日、或無沙汰ニテ第四日上御簾例有之歟、但不可例事也、寬治八年陽明門院御事、二月十日奏遣令、廢朝固關、依上東門院例、三ヶ日也、而十二日御衰日復日也、十三日凶會復日也、仍十四日朝被上御簾、又同年顯房公薨、五日薨、八日奏、自此日止音奏警蹕、外記而十日十一日共復日也、仍十二日雖爲凶會日、强不忌、則上御簾畢、近正治刑部卿三位卒時被用彼例、自餘或不然、殊御衰日重復日忌、凶會、九坎日忌不忌、如此事在時議也、彼顯房公時、八日警固、十四日解陣也、雖可爲三ヶ日、依避日次、十二日忩上御簾、雖爲凶會日、及數ヶ日有憚之故也、於警固者、雖及數ヶ日、依吉日及十四日、或記如此、郁芳門院准母儀人也、仍殊重、五ヶ日廢朝、警固固關如恒、凡殊事五ヶ日、昔通廢朝三ヶ日也、承保四年、香椎宮火、承曆三年、神宮外院火、此等五ヶ日廢朝也、其後守彼例也、嘉承元、賀茂、元永二、鴨、大治二、神祇官等燒失、皆三ヶ日也、准之可知歟、

〔令義解六儀制〕凡〇中略皇帝二等以上親、謂有服之親、其子婦者、雖是二等、非有服者、故不在此例、案喪葬令、服紀者、兄弟子七日、又假寧令、七日服三日、今偏執令文、爲誤、謂皇帝不視事三日、即與職事官給假三日、例以爲君臣禮數、稱無甚一日萬機、理豈合然、則伯叔姑兄及姪孫等、俱依二等、而服紀是輕、事自同、不可偏守等親、以一概論、即稱不視事三日者、唯爲三月以上服故也、若於緦麻喪、皇帝不視事一日、理以爲允也、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、謂依喪葬令、從發喪日始計、至三日、其親王亦同、給喪及賻物、贈王散一位同故也、國忌日、謂先皇崩日、依別式合廢務者、三等親、百官三位以上、謂散位者非、其皇帝不視事日、百官不停理務、例者大臣薨、及國忌日、別立廢務之法、以外則無此文故也、喪、皇帝皆不視事一日、

〔九條年中行事〕廢朝事

一大陽虧、有司預奏、不視事、

一二等以上親、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、三日、

一國忌日、三等親、百官三位以上喪、一日、

〔小野宮年中行事〕廢朝事

朱云、皇帝不視事三日者、若此日内有國忌日、日蝕等者、猶計三日内也、不更日延也、凡三日以聞喪日爲始者、

古記云、一品准一位、

大陽虧、有司預奏、皇帝不視事、

弘仁太政官式云、大陽虧、陰陽寮預申中務省、省録申官、即少納言奏聞了、弁官告知諸司、

皇帝二等以上親、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、三日、國忌日、三等親、百官三位以上喪、一日、儀制令

彈正式、凡右大臣已上薨者、發哀三日内、諸司理事如常、不可問獄行刑、

應和二年十月卅日、甲寅、尚侍藤原貴子薨奏、侍臣垂御簾、垂御簾可在服親之喪、不聞朝之時、不可必垂、村上御記

謂散位者、非其皇帝不視事日、百官不停理務、何者太陽虧、及國忌日、別立廢務之法、以外即無此文、故也、

〔北山抄四拾遺雜抄〕廢朝事○中略

彈正式云、右大臣以上薨者、發哀三日之内、諸司理事如常、不可問獄行刑云々、因之當日無政、三日之内行之如例、但不行刑獄事、法家之說、發哀者、喪日以前、三个日爲限云々、而近例、薨奏以後計之、其間下御簾止音奏、但下御簾、多在服親之喪、或雖非服親、不視事限内、非無其例、然於昭穆遠者、不可必下、

之由、見天暦御記、昔奏事不論觸穢、外記仰内豎令止由、見外記記、（殿宮御在所）

〔北山抄（四拾遺雜抄）〕上皇皇后崩事

華山法皇崩時、依法家勘文、廢朝五日、依御葬日遠、不及彼日云々、

〔續日本紀（三文武）〕大寶三年正月癸亥朔、廢朝、親王已下百官人等、拜太上天皇（持統）殯宮也、

〔續日本紀（七元正）〕養老元年三月癸卯、左大臣正二位石上朝臣麻呂薨、帝深悼惜焉、爲之罷朝、

〔續日本紀（八元正）〕養老四年八月癸未、是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、帝深悼惜焉、爲之廢朝、擧哀内寢、○下略

〔續日本紀（十聖武）〕神龜五年九月丙午、皇太子薨、　壬子、葬於那富山、時年二、天皇甚悼惜焉、爲之廢朝三日、○下略

〔續日本紀（十九孝謙）〕天平勝寶七年正月辛酉朔、廢朝、以諒闇故也、

〔續日本紀（二十孝謙）〕天平寶字元年正月庚戌朔、廢朝、以諒闇故也、

〔續日本紀（三十五光仁）〕寶龜九年五月癸酉、三品坂合部内親王薨、遣從四位下壹志濃王等、監護喪事、所須並官給之、天皇爲之廢朝三日、内親王天宗高紹天皇異母姉也、

〔日本紀略（淳和）〕天長元年九月乙丑、是日無品因幡内親王薨、桓武天皇女也、　壬申、帝著素服、不聽朝、○下略

〔續日本後紀（四仁明）〕承和二年四月戊子、无品叡努内親王薨、天皇爲之不視事三日、

〔續日本後紀（十仁明）〕承和八年正月壬申朔、廢朝、諒闇也、

〔三代實錄（十六清和）〕貞觀十一年二月廿八日丙辰、无品柔子内親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、帝不視事三日、　九月廿一日乙亥、無品基貞親王薨、帝不視事三日、

〔三代實錄（十八清和）〕貞觀十二年五月五日丙辰、停端午之節、无品眞子内親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固

辭也、帝不視事三日、

〔日本紀略清和〕貞觀十三年七月廿八日、是日無品勝子內親王薨、天皇不視事三日、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年八月三日丁丑、釋奠停講論宴飮、以勝子內親王薨後、輟朝三日之限在此日也、

〔日本紀略清和〕貞觀十八年二月廿日戊辰、二品式部卿忠良親王薨、帝不視事三日、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、○中略天皇輟朝五日、

〔三代實錄陽成三十九〕元慶五年正月六日乙未、是日无品慧子內親王薨、○中略輟朝三日、

〔三代實錄陽成四十二〕元慶六年八月五日甲辰、無品巨勢親王薨、○中略皇帝不視事三日、

〔三代實錄陽成四十三〕元慶七年正月廿九日丙申、四品守中務卿兼太宰帥惟彥○彥一本作秀親王薨、○中略天皇不親○親一本作視事三日、

〔三代實錄光孝四十六〕元慶八年九月廿日丁丑、恒貞親王薨、○中略皇帝不見事三日、

〔三代實錄光孝四十七〕仁和元年四月二日丙辰、无品氏子內親王薨、不任葬司、綠喪家辭也、天皇不視事三日、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年六月廿九日丁丑晦、是日三品紀伊內親王薨、不任緣葬之所司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、　七月七日甲申、源朝臣寂子卒、今上之女也、上不見事三日、

〔日本紀略醍醐一〕昌泰二年三月十四日丁未、妃三品爲子內親王薨、天皇不視事三日、　三年四月一日戊午、皇太后班子女王崩、○中略年四十一二日己未、警固三關、停擧哀、不任葬司、天皇著素服、不視事三日、

延喜七年正月一日戊寅、○中略又不御紫宸殿、以識子內親王薨、不聞朝政也、

〔北山抄四拾遺雜抄〕上皇皇后崩事

延喜七年六月、七條中宮崩、廢朝五日、服錫紵三日、異繼母例、以諸道勘文、取捨彼此之文、於議所被定

行、
(日本紀略一醍醐)延喜十年三月廿四日、前皇太后藤原高子崩、(年六十九、二條大后、)天皇不視事、
(扶桑略記二十三裏書)延喜十七年正月廿二日壬申、无內宴、依寬平孫王卒也、天皇不視事一日、
(日本紀略醍醐)延長元年三月廿一日乙未、子刻皇太子保明親王薨、(年廿一、) 廿七日辛丑、葬皇太子於
□□□□□天皇著御服、不視事三日、
(扶桑略記二十四裏書)延長三年六月自廿一日至廿三日、天皇不視事、依皇太子事也、
(日本紀略三村上)天曆三年八月十七日戊子、太政大臣(○藤原忠平)薨、奏仰廢朝(三日)固關警固、 十月四日
癸酉、於法性寺修故大相國七々態、今日依陽成院御事、仰廢朝、依淳和天皇之例、五箇日也、 八日丁
丑、廢朝後政始、
(日本紀略四村上)天德二年四月十七日戊辰、參議正四位下源朝臣自明卒、今上之兄也、 十九日庚午、
可有賀茂齋院喪、而依自明卒、昨日下行殿、(本作昨日下、作明日可行殿、)一今日奏參議源自明朝臣去十七日卒
由、今上兄齋院(○樂子內親王)弟也、廢朝三箇日也、
(日本紀略十一一條)長保二年十二月廿七日庚午、聞終今日奉葬皇后宮、(○定子)三箇日廢朝、
(日本紀略十一一條)寬弘五年二月十一日壬寅、內大臣以下參著仗座、定行固關警固事、依花
山院崩也、依遺詔停素服舉哀、又自今日廢朝、 五月廿六日乙酉、奏媄子內親王薨由、天皇不視事三
日、
(日本紀略十二一條)寬弘八年十月廿四日癸亥、戌刻冷泉院太上皇崩于南院、 廿八日丁卯、齋信卿召中
務輔、給去廿五日詔書、大召敦頼仰云、自今日至來月十六日、可停音樂、并廢朝之由、可仰諸司、
(小右記)寬弘八年七月八日己卯、昨日案內、遣敦頼朝臣、其返狀云、昨日定事被參卿相、右、內府、(○顯光、公季、)
右衞門督(○懷忠)左兵衞督(○實成)其外悉被申故障、右府以敦頼被申、案內於左府、朱雀院御時御心喪三

月、廢朝四日、陽成院、花山時、廢朝五日也、日數不同、仰諸道可令勘申歟者、御返事云、五日是定例也、至于四日若日次不宜被行歟、如然之事可宜之樣可被申行、程遠重不可被仰者、今日被送遺詔之次、可被召仰歟者、○中略　敦康親王令奏云、○中略　從今日五箇日可廢朝之由被下宣旨、○中略　昨日諸卿定太不當也、依其定所被行歟、陽成院、花山院例等、依不更譲、只有五箇日廢朝歟、花山院崩給之時、被薄其禮之由諸人所申也、雖無□□之儀、可申譲國者也、而亦有五箇日廢朝、無御心喪之禮、至陽成院例、依非譲位之事、只有廢朝而已、○中略　今日院○一條御葬送也、○下略

〔日本紀略後篇十三〕寛仁元年五月九日丙午、太上天皇○三條崩于三條殿、御年四十二　十二日己酉、奏前三條院遺詔、可停止素服擧哀之由、自今日有廢朝、五箇日　六月一日戊辰、太皇太后宮藤原朝臣遵子崩、年六十一　五日壬申、奏前太后遺令、停止素服擧哀、官符給五畿七道諸國、又自今日廢朝、五箇日

〔小右記目錄〕萬壽二年四月廿六日、皇后宮崩奏事、三月廿五日崩給

同年同月廿六日廢朝五、今日警固固關等事、

〔小右記〕萬壽四年十二月七日癸酉、早朝中將來、參御堂者、薨奏等事有便、今可令遺漏之由、大外記頼隆眞人持口示、可來會余后之由仍早參、相待之間、弁來以頼隆傳關白消息云、外記勘文如此可計行者、○中略　余報云、以頼隆先有固關、後日有薨奏之事、只永祚也、○中略　此度已及歳暮事煩、可多被止使止計也、廢朝依勸申可被行、三ヶ日　且今日著御錫紵、第四日除可宜歟、　十日丙子、中將來云、卯時令除錫紵給云々、

〔續世繼一星合〕中宮○嫄子、中略、長暦三年八月十九日に、猶女宮うみたてまつり給て、おなじき廿八日にうせ給にき、御とし廿四、あさましくあはれなる事かぎりなし、いとゞ秋のあはれそひて、ありあけの月のかげも、心をいたましむるいろ、ゆふべの露のしげきも、なみだをもよほすつまなるべし、かくて九月九日に内より、ご中宮の御ために、七寺にみず經せさせ給、みかど御ぶくたてまつ

りて、廢朝とて、清涼殿のみすおろしこめられ、日のおものまいるも、ごゑたて、そうしなどすることもせず、よろづしめりたるまゝには、ゆふべのはたるをもあはれとながめさせ給、秋のともし火か、げつくさせ給つゝぞ、心ぐるしきおりふしなりけるに、廿日に解陣（げぢん）とかいひて、よろづれいざまにて、御殿のみすなどもまきあげられ、すこしはるゝけしきなりけれど、なを御けしきは、つきせずぞみへさせ給ひける、

〔百錬抄 四後冷泉〕天喜元年六月十一日、從一位源倫子薨、（天皇外祖母、左大臣室、號鷹司殿、）廢朝三ケ日、主上著錫紵、

〔爲房卿記〕應德二年十一月八日戊戌、今日寅剋、皇太弟（實仁、十五、云々、）薨給、　十日庚子、依召早旦參殿下、大依仰參左府、今日宣下、可被參陣定之由、巳剋殿下參御、卿諸卿等候仗座、○中略 卿令予下給、大外記貞俊諸申、皇太弟薨例文、（寛德五、延久元、同三年等例、）被仰云、東宮薨逝之由、傳有其聞、此間可被行事等、宜令諸卿定申、兼又今月諸祭宴會等停否如何、同可令定申、○中略 主上出御夜御殿戸下、關白殿令候戸前給、予依仰參上簾中、於御手水間奏聞、沙汰之間、數度往反於仗座、

奉司　素服　舉哀

　已上本宮定、被奏遺令歟、隨其旨可停止、

御錫紵　廢朝（後日殿下被仰之、御心喪服、延久三年太子薨、長元二年中宮崩、依之例不可有云々、）

　已上可限三日、但任近代後宮崩後之例、被奏遺令之日、可被仰下歟、○中略

件事等任諸卿定申、被宣下已了、　廿八日戊午、殿下早旦召頭辨被仰可令錫紵日時之由、○中略 卿被奏下、○中略 臨件前東宮亮師仲朝臣、參右衞門陣外、招少外記雅定令申云、前東宮遺令、素服、舉哀、葬官等悉可被停止者、仗座上卿來參、只示付外記退出云々、○中略 及深更、治部卿伊房卿參陣、以頭辨令奏此由、即歸御簾、又廢朝三日、內竪不奏時、諸衞警固、（上卿被仰外記、不召諸衞、）固關事（被付國司、）等、被宣下了、○下略

〔百錬抄 五堀河〕寛治三年十月四日、諸卿定申源隆子薨事、（右大臣室、）件人雖爲當今外祖母、前中宮（○賢子、）改姓

爲藤氏、仍令諸道勘申之、就所養不可有錫紵、但廢朝三ヶ日之由被定了、凡爲人養子之者、本生傍親服不可著之由僉議了、

〔永昌記〕大治四年七月七日癸未、法皇〇白河御心地之落給之由風聞、〇中略及巳剋遂以崩御、御年七十七、　十五日辛卯、御葬禮、此日上卿權大納言宗參仗座、入夜朽損、成通朝臣參陣外、奏法皇遺詔、〇中略上卿以頭辨被傳奏、〇中略頭辨還來、仰云聞食者、但不可任葬官之由、可朽損、使忘却歟者、上卿召外記聞食之由可仰者、〇中略次又召外記被下知遺詔之趣、任葬官、山陵、國忌可停止也、次又被仰廢朝五ヶ日警固等事、

廿五日、有政廢朝之後被始行也、〇下略

〔中右記〕大治四年七月七日癸未、巳時許下人來云、院〇白河御所人々騷動、京中馳車馬、〇中略巳時許令崩給了、御年七十七、　十五日辛卯、今夕太上法王御葬送也、〇中略去七日、太上法皇崩給、遺詔曰、國忌、山陵、素服擧哀可被停止者、〇中略次官人示頭辨雅兼、頭辨則來藤實、以件詞奏聞、只今殿下御坐殿上、則還來仰云、聞食、任喪司、國忌、山陵、素服擧哀可停止、廢朝、固關、警固五日、〇中略奉仰以官人召外記爲繼仰云、任喪司、國忌、山陵可停止、又廢朝五ヶ日、外記歸陣仰內豎令止音奏、又外記令召內豎、內豎參小庭仰云、〇中略

承保元年十一月、上東門院崩、廢朝三ヶ日　寛治八年正月、陽明門院崩、依承保例廢朝、三箇日件二箇度、帝之曾祖母也、爲三等親、主上不著御錫紵也、今度曾祖父已叶被二箇度、仍不著御錫紵也、但太上皇崩給時、廢朝、度々五ヶ日之由、大外記師遠所申也、仍五ヶ日由、所被仰下、由頭辨所談也、〇下略

〔百練抄五鳥羽〕永久二年二月廿九日、於院殿上被定主上外祖母薨逝事、實季卿室、去廿四日薨、任延喜七年、天喜元年例、錫紵可被行廢朝之由、諸卿定申了、

寛治隆子之時、賢子中宮依改姓無錫紵、

〔百練抄八高倉〕治承三年六月廿日、從三位平盛子中攝政室有贈位、去月十七日薨去、今日被仰廢朝、

依病廢朝

依大臣[illegible]

(法令全書)明治元年八月十一日

聖護院宮薨去ニ付、三ケ日廢朝之處、方今御一新機務御多端之折柄、不被及廢朝候事、

右之通被仰出候間、爲心得申達候事、

(續日本紀十二聖武)天平九年六月甲辰朔、廢朝、以百官官人患疫也、

(續日本紀三十光仁上)寶龜九年正月戊申朔、廢朝、以皇太子枕席不安也、

(日本後紀十二桓武)延暦二十四年正月辛未朔、廢朝、聖體不豫也、

(日本後紀十三桓武)大同元年正月丙寅朔、廢朝、聖躬不豫也、

(日本紀略桓武)延暦廿五年正月丙寅朔、廢朝、聖躬不豫也、

(日本紀略嵯峨)弘仁元年正月壬寅朔、廢朝、以皇帝不豫也、

(三代實録十五清和)貞觀十年二月廿五日己丑、詔下公卿及諸儒、博議山陵火災並爲禮制、從四位下行博士兼伊豫權守大春日朝臣雄繼議曰、禮記曰、有焚其先人之室、則三日哭、然則宜據禮而行之、文章博士從五位下兼備後介巨勢朝臣文雄議曰、漢書曰、武帝建元六年四月、高園便殿火、帝素服五日、昭帝元鳳四年五月、孝文廟正殿火、帝及群臣皆素服、山陵失火、未見故實、至于宗廟、前聞如此、公卿本乎漢家之故事、斟酌禮度之所宜、取文雄議而奏、於是帝避正殿服錫紵、權去常膳、進御蔬菲、輟朝五日、公卿及諸近臣皆失彩飾、一准凶儀、遣使於山陵、告以事由、

(百錬抄五白河)永保二年五月十日、諸卿定申神功皇后山陵樹木燒亡、廿一日、被仰廢朝三ケ日、

(中右記)大治二年三月廿五日、裏書、

神社火事廢朝例

承保四年七月十七日、依香椎宮火事廢朝、五日

永暦三年二月廿五日、依太神宮外院火事廢朝、五日

嘉承元年四月十八日、依賀茂火事廢朝、三日、

元永二年十一月二日、依鴨社火事廢朝、三日、

〔日本紀略 後一條十三〕治安二年二月廿六日丙寅、定申宇佐宮火事諸道勘文、○中略賴澄申云、貞觀十年山陵火災之例、任彼例五日輟朝、

〔百練抄 後一條四〕治安二年二月廿四日、諸卿定申諸道勘申宇佐宮炎上事、廢朝五ヶ日、

〔百練抄 白河五〕承曆元年四月三日、諸卿定申去二月五日香椎廟燒亡事、可准治安元年宇佐宮例之由被定申、十日廢朝、日數幷仰諸道勘申、七月十七日、依諸道勘文、諸卿定申廢朝日數幷造營事、廢朝五ヶ日之由宣下、

〔扶桑略記 白河三十〕承曆三年二月廿一日庚申、伊勢祭主輔經言上、去十八日未時、大神宮內宮外院六十餘字拂地燒亡、印鎰幷累代文簿同爲灰燼、　廿五日甲子、令右中辨藤原通俊發遣伊勢大神宮爲實錄也、自今日廢朝五箇日、

〔百練抄 白河五〕承曆三年二月廿一日、伊勢太神宮內宮之外院、去十八日燒亡、　廿五日、諸卿定申諸道勘申廢朝事、廢朝五ヶ日、天子不視事也、

〔百練抄 堀河五〕嘉承元年四月十三日、賀茂別雷社燒亡、御正體奉移貴布禰社、令諸卿定申其間事、廢朝有無、仰諸道勘申之、三ヶ日之由被定云々、

〔永昌記〕嘉承元年四月十三日甲戌、今日御物忌、遲明、賀茂社權祝成長幷成文等、(成繼男)參入射場殿、令藏人仲光奏聞云、去夜寅剋、別雷社寶殿燒亡、火起於西經藏、東西寶殿已爲灰燼、於御體幷御裝束、神寶等者、併奉取出者、仲光仰云、早以解狀可經奏聞、○中略晡時、右衞門督宗通卿、適以參陣、奏事由、仰下可勘日時之由、卽予(○藤原爲隆)令勘之、行事被點右中辨長忠、而依火事私參向彼御社者、重遣召之間、內大臣以下諸卿漸以參集、仍宣下日時於內府、○中略被下右中辨長忠朝臣彼朝臣、率史廣信、史生官掌

等、騎參社頭、遷宮雜事雜物、社家相儲、遷御假殿、次殿間火起云々、先是宣下云、賀茂社火事間、事何樣可被行哉、又齋王御禊并祭可延引歟否、又廢朝有尤日數等、宜令定申者、內大臣民部卿源朝臣、春宮大夫藤原朝臣、右衞門督藤原朝臣、權中納言源朝臣、右大辨藤原朝臣定申云、被尋先例、且依日次早可被造立、○中略　祭并齋王御禊、期日猶遠、早被遂行何難有哉、如此大事、或及廢朝、然而太神宮、八幡宮之外、未聞先例、且召諸道勘文、可被計行歟、右大辨源朝臣、左近衞中將源朝臣、參議藤原朝臣定申云、○中略　令予奏、被仰云、依定申、御禊祭不可延引、廢朝事令諸道勘申、○中略　兼令官寮卜申、又定申之趣、猶令書奏、明日可淸書之由議定、諸卿漸以退出、　十八日己卯、依諸卿定申、可有三日廢朝之由被宣下、停止音奏警蹕、但依爲御物忌本垂御簾、

〔百練抄五鳥羽〕元永二年十一月二日、諸卿定申鴨社炎上事、廢朝三ヶ日、

〔百練抄七二條〕長寬二年正月廿八日、紀伊國日前國懸社燒亡、　三月五日、諸卿定申諸道勘申日前國懸社火事、　廿二日、被仰廢朝、

〔中右記〕大治二年三月八日、從殿下給御消息云、神祇官火事、可有廢朝哉否、於直廬可有定由被仰、然而服日數內、神事定如何、若於仗座可被行歟、隨示給可奏傳、予進返事云、御憚內、於御直廬申定、尤其憚可候也、但件旨令奏給、有重仰者、只可令定給也、新院殿上若仗座可宜歟、但如此之間、偏可令隨御定給也、　廿日、神祇官燒亡之後、○中略　予定申云、於廢朝者尤可候也、神祇官者、禮天神地祇、崇宗廟社稷之砌也、豐樂院時、數被廢朝、尤可候也、於神祇官者、今年當御忌方、後年被作也、　廿四日、未時許參內、頭中將未被參之間、暫候仗座、以消息、參入之由告頭中將、只今馳參之由有返報、不經幾程、頭中將來、仰云、依神祇官燒亡、從今日三个日、可有廢朝者、予奉仰、移着端座、召官人令敷膝突、令召外記、新外記親盛候小庭、不入外記候也、予目之、稱唯來膝突、仰云、依神祇官燒亡、從今日三个日廢朝、外記稱唯起座、外記仰內豎、止音奏、聞此事、藏人垂御簾云々、且又頭中將、件旨示藏人等也、則退出、

依宮室未成廢朝

〔百錬抄八高倉〕治承元年四月廿九日、還幸閑院、被仰廢朝、依大極殿火事也、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年正月丁亥朔、廢朝、以新宮未就也、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年正月庚辰朔、廢朝、以宮室未成也、

〔類聚國史七十一歲時〕延暦十三年正月乙亥朔、廢朝、以宮殿始壞也、

〔日本紀略桓武〕延暦十四年正月庚午朔、廢朝、以大極殿未成也、

依神事廢朝

〔扶桑略記二十四裏書醍醐〕延長八年八月十七日戊申、廣瀨社祭廢朝也、去月依穢延引、又釋奠內論議、博士等依廢務日還遣之、無先例、由外記申云々、

依朔旬廢朝

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年正月丙申朔、廢朝、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年正月己未朔、廢朝、　十八年正月癸丑朔、廢朝、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年正月丁丑朔、廢朝、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年正月癸卯朔、廢朝、

天平勝寶元年正月丙寅朔、廢朝、

〔續日本紀三十七桓武〕延暦二年正月戊寅朔、廢朝也、

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年正月壬戌朔、廢朝也、

〔日本紀略仁明〕嘉祥二年正月丙辰朔、廢朝、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年正月十一日丁卯、天皇不御紫宸殿、付內侍奏、　四月十一日乙丑、天皇不御紫宸殿、詔於本省行之、

依雨雪廢朝

〔續日本紀七元正〕靈龜二年正月戊寅朔、廢朝、雨也、

〔續日本紀九元正〕神龜元年正月壬戌朔、廢朝、雨也、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年正月甲戌、廢朝、雨也、　五年正月戊戌朔、廢朝、雨也、

依風寒廢朝

天平二年正月丙戌朔、廢朝、雨也、

(續日本紀 三十六 光仁)寶龜十一年正月丁卯朔、廢朝、雨也、

(日本紀略 桓武)延曆廿一年正月戊午朔、廢朝、雪也、 廿二年正月癸丑朔、廢朝、雨也、

(日本紀略 嵯峨)弘仁七年正月丁卯朔、廢朝、雨也、

(三代實錄 光孝 五十)仁和三年正月乙亥朔、廢朝、雨也、

(續日本紀 八 元正)養老三年正月庚寅朔、廢朝、○本注略、廢朝二字據一代要記補、大風也、

(日本紀略 平城)大同三年正月癸未朔、廢朝、以風寒異常也、

(日本後紀 十七 平城)大同四年正月戊寅朔、廢朝、風寒異常也、

(日本紀略 嵯峨)弘仁十年正月庚辰朔、廢朝、緣風寒急殺也、

依日蝕廢朝

(扶桑略記 二十四 裏書 醍醐)延喜廿三年○延長元年十月一日辛未、日食、廢朝、

延長六年八月一日癸酉、日蝕、廢朝、

廢務

(名目抄 恒例 時節)廢務

(公事根源 正月)國忌 廿五日

廢朝廢務といふ事有、廢務は、諸司政をせずといへり、是は一日をかぎりて天下諸司の政をとゞめらる、是數日に及びて、萬機の政を捨をかれては、かなふべからざる故に、一日をかぎりて廢務日とは申也、今この廿五日の御國忌も、廢務日にて侍べし、

(年中行事秘抄)廢朝廢務差別事

西宮文云、廢務、諸司不政云々、

口傳云、廢務一日可被行也、不及數日、是万機之政、數日不可被弃置之故云々、仍限一日云々、但有三个日廢務例、

依日蝕廢務

〔拾芥抄 中末 廢朝〕廢朝廢務差別事 見西宮記

廢務、諸司不政云々、但廢務有三日例、口傳云、廢務者一日可被行也、不及數日、是萬機之政、數日不可被弃置之故云々、仍限一日、

〔令義解 六 儀制〕凡大陽虧、有司預奏、謂大陽者日也、虧者觸蝕也、有司者陰陽寮也、皇帝不視事、百官各守本司、不理務、過時乃罷、謂不視事者、不聞政事、過時乃罷者、假令日蝕在申者、酉時得罷、是爲過時罷也、

〔三代實錄 三十一 陽成〕元慶元年四月壬申朔、夜丑一刻、日有蝕之、虧初子三刻三分、復至寅二刻一分、皇帝不視事、百官不理務、不擧樂祭、先是中務省豫奏陰陽寮所言、四月朔夜太陽虧之事、詔命明經紀傳明法等博士、議日蝕在夜一〇夜據本補廢務以否、〇下略

〔扶桑略記 二十三 醍醐 裏書〕寛平十年〇昌泰元年九月一日戊辰、日食、廢務、

延喜二年六月一日乙亥、日食、廢務、　四年四月一日、日食、廢務、　十月一日辛卯、日食、廢務、　五年四月一日己丑、日食、廢務、　六年四月一日癸未、日食、廢務、　十月一日辛巳、日食、廢務、　七年九月一日乙亥、日食、廢務、　八年二月一日壬寅、日食、廢務、　八月一日庚子、日食、廢務、　九年八月一日、日食、廢務、　十年七月一日戊子、日食、廢務、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜十一年正月一日丙戌、日蝕、廢務、

〔扶桑略記 二十三 醍醐 裏書〕延喜十一年六月一日癸丑、日食、廢務、但自未時雨降、　十二月一日辛亥、日食、廢務、　十二年閏五月一日戊申、日食、廢務、　十一月一日乙巳、日食、廢務、　十三年五月一日壬寅、日食、廢務、　十一月一日己亥、日食、廢務、　十四年四月一日丁卯、日食、廢務、　十一月一日癸巳、日食、廢務、　十五年三月一日辛酉、日食、廢務、　九月一日己未、日食、廢務、　十六年三月一日乙卯、日食、廢務、

九月一日癸丑、日食、廢務、　十七年三月一日庚戌、日食、廢務、　九月一日丁未、日食、廢務、

〔扶桑略記 二十四 醍醐 裏書〕延喜十八年正月一日乙亥、日食、廢務、仍无朝賀、　八月一日辛丑、日食、廢務、

廿一年六月一日乙卯、日食、廢務、

〔日本紀略醍醐〕延喜廿一年十二月一日壬子、日蝕、廢務、

延長元年十月一日辛未、日蝕、廢務、　六年八月一日己卯、日蝕、廢務、

〔扶桑略記二十五朱雀裏書〕承平二年五月一日壬午、日食、廢務、　四年九月一日戊戌、日食、廢務、　五年三月一日乙未、日食、廢務、

〔日本紀略朱雀〕天慶二年七月一日庚子、日食、廢務、　三年六月一日乙未、日食、廢務、　十一月一日壬戌、日食、天陰不見、廢務、　五年四月一日甲寅、日蝕、不正見、但廢務、　十月一日辛亥、日蝕、不正見、諸司廢務、　六年四月一日戊申、日蝕、廢務、

〔日本紀略村上〕天暦二年七月一日庚子、日蝕、廢務、

〔日本紀略村上〕天德二年十一月一日丁未、天陰時々雨、日蝕、廢務、　三年十一月一日壬寅、日蝕、但雨降不見、廢務、

應和元年四月一日癸巳、日蝕、仍廢務、

〔日本紀略冷泉〕安和元年十二月一日己酉、日蝕、廢務、

〔日本紀略圓融〕天祿二年十月一日癸亥、天陰、日蝕、廢務、　三年九月一日丁巳、日蝕、廢務、

〔日本紀略後一條〕万壽三年十月一日癸酉、日蝕、仍廢務、

〔日本紀略後一條〕長元二年八月一日丁亥、日蝕、廢務、

〔春記〕長暦四年(○長久元年)正月一日丙辰、寅剋有四方拜事云々、右頭中將信長被蝕也、予仍退出、今日可有日蝕之由、有司預奏、仍昨日被仰廢務由畢云々、大外記頼隆付人令奏、仰下諸司云々、巳時許、參右府、只有謁經被密謁、□□□參督殿命云、今日不可出仕、依廢務、(○下略)

〔永昌記〕嘉承元年十二月一日戊午、今日可有日蝕之由、陰陽寮執奏、(○中略)而或白雲既覆、紅輪不見、或

大陽斜出、短晷欲暮、侵深筭、前日勘奏云、(○中略)後日、道言朝臣云、(○中略)此事今日不可被決、仍垂御簾廢務如例、

依月蝕廢務

〔台記〕久安四年四月一日戊子、依日食廢務、不正現、

○按ズルニ、日蝕ニ依リテ廢務スル事ハ、天部日蝕篇日蝕條ニモ在リ、參看スベシ、

〔長秋記〕天永四年二月十五日、今日月蝕也、供膳之間、人々依廢務不可警蹕、予(○源師時)稱(○稱一本作傳)之、其故者、大陽虧有司不奏事者、謂大陽圓者不同故也、人々皆同之、

依國忌廢務

〔令義解(六儀制)〕凡(○中略)國忌日(謂先皇崩日、依別式合廢務者也、)(中略)大陽虧、及國忌日、別立廢務之法、

〔年中行事秘抄(正月)〕廿五日、國忌事(廢務、贈皇太后藤原胤子、東寺、)

〔年中行事秘抄(三月)〕十七日、國忌事(廢務、桓武天皇、西寺、)　廿一日、國忌事(廢務、仁明天皇、東寺、)

〔年中行事秘抄(四月)〕廿九日、國忌事(廢務、皇后安子、西寺、平治元年國五月十三日、廢云々、)

〔年中行事秘抄(六月)〕廿一日、國忌事(廢務、贈皇后藤原旅子、)　廿四日、國忌事(廢務、西寺、)

〔年中行事秘抄(八月)〕廿六日、國忌事(廢務、光孝天皇、西寺、)

〔年中行事秘抄(十月)〕七日、國忌事(廢務、崇道天皇、件國忌近代下否轉之、)

〔年中行事秘抄(十二月)〕三日、國忌事(廢務、天智天皇、崇福寺、)　廿三日、國忌事(廢務、光仁天皇、東寺、)

〔續日本紀(二文武)〕大寶二年十二月甲午、勅曰、九月九日、(○天武)國忌、十二月三日、(○天智)國忌、先帝忌日也、諸司當是日、宜爲廢務焉、

〔日本紀略(淳和)〕天長元年三月丁巳、詔曰云々、五月四日者、皇太后(○嵯峨后橘嘉智子)昇遐之日也、何降忌景逸豫良遊、五月之節、宜從停務、

〔日本紀略(三村上)〕天暦元年三月十日乙未、國忌、(○桓武后乙牟漏)廢務、廿一日丙午、國忌、(○仁明)廢務、六月卅日癸未、國忌、(○宇多后胤子)廢務、九月廿九日庚辰、後山階太上天皇、(○醍醐)國忌也、諸司廢務、十二月三日

癸未天智天皇國忌、仍廢務、

〔百練抄五 鳥羽〕永久元年正月廿五日、〇中略 天仁元正廿五大記云、母儀贈后國忌、〇鳥羽母、藤原苡子 也、無論癸以前、任應德例、廢務、下御簾、止音奏、於轉輪院行之、

〔兵範記〕久壽三年正月廿五日丁卯、今日依國忌廢務、不被除目、中夜云々、

〇按ズルニ、國忌ニ依リテ廢務スル事ハ、禮式部國忌篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

依喪廢務

〔北山抄四 拾遺雜抄〕上皇皇后崩事

天曆六年八月十五日、上皇崩、〇中略 又至御葬日廢務、御心喪三月、〇下略

〔日本紀略四 村上〕康保四年五月廿八日丙辰、至于先皇御葬日、諸司可廢務者、

〔日本紀略十一 一條〕長保元年十二月九日戊午、廢務、依太后〇昌子內親王崩、　十一日庚申、月次神今食停止、依大后崩也、廢務、　十三日壬戌、覆奏之後、廢務五箇日、

〔小右記目錄〕院宮事

花山院

寬弘五年二月九日、花山院崩御事、

同年同月十二日、廢務三箇日事、

〔扶桑略記三十 白河〕永保四年〇應德元年 九月廿四日辛酉、主上悶絕、天下騷動、歷數剋後、復御尋常、每月廿二日、丈六彌陀佛各一體造立、每度修曼荼羅供、爲中宮職〇藤原賢子 御菩提也、周忌之間、天下之政皆以廢務、亦依今悲、久絕世上風波、誠是希代事焉、

依大災廢務

〔日本紀略四 村上〕天德四年八月廿三日庚申、今夜亥三剋、內裏燒亡、　廿四日辛酉、廢務三箇日、　九月廿三日庚申、今夜亥三剋、內裏燒亡、火出自宣陽門內方北掖陣、不出中隔外、〇中略 累代珍寶多以燒失、〇中略 丑剋火止、　廿四日辛酉、廢務三箇日、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年五月十一日丁丑、子剋內裏有火、火出自仁壽殿西面、但中重外舍屋不燒、十二日戊寅、自今日廢務三箇日、

〔日本紀略七圓融〕天元三年十一月廿二日辛酉、賀茂臨時祭、奏宣命之間、從主殿寮人等候所火焰忽起、○中略諸殿舍皆悉燒亡、○中略廿三日壬戌、自今日三ヶ日廢務、五年十一月十七日乙巳、夜寅剋內裏燒亡、十八日丙午、自今日三ヶ日諸司廢務、止音奏、

〔日本紀略十一一條〕寬弘二年十一月十六日庚申、依內裏燒亡諸司廢務、六年十月五日丙戌、寅剋、一條院皇居有火、○中略左大臣仰外記、自今日三箇日廢務、

〔百練抄七六條〕仁安三年十二月廿一日、伊勢太神宮內宮燒亡、廿九日、諸卿定申諸道勘申太神宮火災事、廢務可爲五ヶ日之由、定申之、

〔兵範記〕仁安三年十二月二十九日丙辰

一廢務日數事

左大臣定申云、廢朝五日之由、諸道勘申、而公卿勅使發遣之日、可被行廢務之由議定、先日數之條未定、所謂廟灾三日哭禮也、我朝、宇佐、香椎、石淸水炎上時、被行五日廢朝、太神宮事、異于餘社、仍長曆、外宮誤例之間、以希代之新議、有三日之廢務、就之思之、風火之變、輕重不伴、內外之宮、尊崇尙殊、然者事出於今、案例雖未曾有、任師元朝臣勘申、有五日之廢務、表太廟之異他矣、

右大臣定申云、廢務事、同讃岐權守平朝臣定申、內大臣按察使藤原朝臣、皇后宮大夫藤原朝臣、修理大夫藤原朝臣、右大辨藤原朝臣等定申云、五ヶ日廢務、雖爲權議、敬神之道、以重爲先、任師元朝臣勘申、可有五日廢務歟、

左大將藤原朝臣定申云、五日廢務可宜、雖無先例、依爲大事也、

中納言藤原朝臣定申云、諸道勘申之旨、多是廢朝歟、就彼趣廢朝五ヶ日可宜歟、廢務爲常事、如此

臨時非常大事之時、廢朝恒例也、天永元年依內宮心柱顚倒事、有仗議之日、沙汰切旱歟、但左右可在勅斷矣、

〔神宮雜例集二〕一顚倒例事

心御柱倒事

天皇我詔旨良万止、掛畏支伊勢乃度會乃山田原乃下都磐根爾大宮柱廣敷立氐、高天原爾千木高知氐、稱辭定奉留、天照坐須豐受太神乃廣前仁、恐美恐美毛申賜波久止申久、去年十二月乃比爾、宮司等乃解狀爾任天、從五位上行神祇權少副卜部宿禰兼政乎差遣天、內外宮乃殿舍乃損色乎令檢注志牟留仁、豐受太神宮乃正殿乃心柱朽損顚倒世留乎、不慮乃外爾見出世利、宮司等注申世利、此旨乎聞食驚天、且波有咎祟天所致歟止、仰有司天令卜求留、且波祭主宮司爾下知志氐、子細乎令為申之處爾、彼柱波廿年爾一度乃遷宮乃時爾、專仁儀嚴重之禮天、兼天有造立之期利、又先々顚倒乃例全無所見止、言上世利仁依氐、彌畏怖思食天、可改立否乃事乎、輙久難量天志、令諸道天可推據支例乎勘進女志、令諸卿天可立否乃議乎定申仁世留、其例不相似天、準的乎難取止、掛畏支皇太神爾、特爾奉祈請天、使爾令問占卜天、可隨吉凶止奉食議申世利、仍氐競偽給氐、今日與利三箇日暫輟朝務天、不視政事天志、無貳天叡情乎凝天、尤厚支冥助乎蒙止奉所念行天奈、故是以吉日良辰乎擇定天、王散位從五位下資清王、中臣祭主從三位行神祇伯大中臣朝臣親定等乎差使天、忌部外從五位下行豐後介齋部宿禰孝茂加弱肩仁太襁取懸天、禮代乃大幣乎持齋利令捧持天奉出賜乎、掛畏支皇太神、此旨乎平久安久聞食天、心柱乎可改立止毛、不可改止毛、龜兆爾相示毛爾令告給倍、其任爾隨卜食天可造止奉申利、〇中略

天仁三年〇天永元年五月廿六日

〔新儀式四臨時〕伊勢大神遷宮事〇中略

豫定進發吉日、先一日、行大祓、諸司齋并三日廢務、(或不齋、代々例不同也、)

〔西宮記二月〕祈年祭(廢務、先一日、少納言付內侍奏、○本作奏文、他廢務准之、)

〔北山抄二一月〕四日、祈年祭事(廢務、前散齋一日、少納言付內侍令奏齋文、月次、九月十一日奉幣、新嘗祭同之、)

〔年中行事秘抄二月〕四日、祈年祭事(廢務、有前後齋、)　廿五日、祈年穀奉幣事(廢務)

〔北山抄四一月〕四日、廣瀨龍田祭事(廢務○七月四日又同)

中申酉日、賀茂祭事(酉日廢務、祭停止時、尙有廢務、)

〔小野宮年中行事六月〕十一日、月次祭事(廢務)

〔年中行事秘抄七月〕廿九日、祈年穀奉幣事(廢務、廿二社、)

〔年中行事秘抄九月〕十一日、伊勢奉幣事(廢務)

〔北山抄十二一月〕中卯日、新嘗祭事(廢務)

〔年中行事秘抄十一月〕中卯日、新嘗會祭事(廢務)

〔北山抄十二二月〕十一日、月次祭事(廢務)

〔續日本後紀五仁明〕承和三年二月庚午朔、廢務、爲遣唐使祠天神地祇於北野也、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年二月甲午朔、爲遣唐使祠天神地祇於當國愛宕郡家門前、諸司爲之廢務也、(○也字、依日本紀略補、)

〔文德實錄一〕嘉祥三年六月丁卯、遣散位從五位下利見王、神祇少副正六位上中臣朝臣稗守等、參伊勢大神宮、告以卽位之由、百官齋戒、廢務三日、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年九月五日庚辰、奉太神宮神寶、使左大史正六位上善世宿禰有與、史生二人、官掌一人進發、凡伊勢太神宮神寶、二十年一度改作、前修之後十九年于玆、雖未滿限、改造既畢、仍奉之、是日諸司廢務、而神祇官不進解、又責過狀、

〔扶桑略紀二十四裏書醍醐〕延長五年六月廿七日丙午、依祈雨臨時奉幣諸社、仍廢務、

〔日本紀略 村上〕天曆元年四月四日己未、廣瀨龍田祭、仍廢務、　六月十一日甲子、神今食、廢務、　七月九日壬辰、廣瀨龍田祭也、仍廢務、

〔日本紀略 村上〕天德三年四月十七日壬辰、奉新錢於伊勢太神宮以下十一社、以神祇官人爲使、今日廢務、先例還不分明、可廢務之由、被仰下了、

應和二年四月四日辛卯、廣瀨龍田祭、仍廢務、　二年七月四日己未、廣瀨龍田祭、廢務、　三年六月九日己丑、奉幣伊勢太神宮以下十六社、依新年穀也、但伊勢幣帛可被付來十一日使、仍今日諸司廢務、

康保元年九月七日己卯、奉遣伊勢豐受宮廿年一度遷宮神寶使、仍諸司廢務、

〔日本紀略 冷泉〕康保四年十一月十九日癸卯、新嘗祭、廢務也、依諒闇停止、

〔日本紀略 一條〕正曆元年九月廿九日辛丑、大嘗於八省院東廊行之、但今日廢務也、

〔日本紀略 後一條〕長保二年九月七日辛巳、依發遣伊勢太神宮廿一年一度御遷宮神寶使、諸司廢務、

〔日本紀略 後一條〕長元八年三月七日辛卯、祈年祭、仍諸司廢務、

〔左經記〕寬仁元年七月三日己亥、午剋許、參攝政殿、〇中略又中云、七日造宮檜皮可葺始日也、而彼日可被立祈年穀幣使、仍廢務、然者何有他公事哉者、被仰云、尤可然事也、早仰上卿、以他日可令行奉幣事者、　三年九月五日戊午、今日依遷宮使立、諸司廢務、

〔永昌記〕嘉承元年七月四日癸巳、廣瀨龍田祭、依例廢務、

〔日本紀略 六條〕天祿元年三月廿日辛酉、終日雨下、被發遣一代一度大奉幣使、無。廢務。

依佛事廢務

〔扶桑略記 二十四 裏書 醍醐〕延長八年五月十七日庚辰、被修、有供無施臨時仁王會、仍廢務、是爲消除疫癘也、

依御燈廢務

〔江家次第 六 三月〕三日、御燈事、九月同之、但廢務、

自一日至此日御淨食、〇中略大嘗會年、九月御燈或停之、〇中略或不停、長元九年、治曆四年、延久五年、寬治元年也、永平六年、天慶十年、依

(穢雖無御燈、依例廢務、)依狐死停御燈事、寬平五年、依穢停時、輕服人不參、廢務如恒、(延喜十九年)

〈年中行事秘抄三月〉三日、御燈事、(廢務)

〈日本紀略一醍醐〉延喜十六年三月三日丁巳、御燈、廢務、

〈北山抄一三月〉三日、御燈事、(廢務、件書聞不可必忌之由、見康保四年御記、○中略)

延喜十九年三月、依去月九日內裏死穢御燈停止、然而輕服人不參、三日諸司廢務如常、

〈日本紀略三村上〉天曆元年三月三日戊子、御燈、廢務、　九月三日甲寅、御燈、廢務、　二年三月三日壬子、

御燈廢務、

〈日本紀略四村上〉天德四年三月三日壬寅、御燈、廢務、

應和元年三月三日丙申、御燈、廢務、

〈日本紀略五冷泉〉康保四年九月三日戊子、依諒闇雖無御燈、諸司廢務、

安和元年三月三日、御燈、廢務、(水心日記曰、今日無御燈、是諒闇之例也、)　九月三日癸未、無御燈、但停務、

〈日本紀略六圓融〉天延元年三月三日丁巳、御燈、廢務、

〈日本紀略八花山〉寬和元年九月三日甲戌、御燈依大嘗會停止之、但廢務、

〈日本紀略九一條〉永延二年九月三日丁亥、御燈、依齋宮群行停止、但廢務、

〈小右記〉寬弘二年十二月廿一日乙未、先問造宮日於陰陽寮、申云、明年三月十日、九月三日、諸卿云、九月三日廢務、○御燈可無便、　八年九月一日辛未、大嘗會年不奉御燈事、諸人不知、余又不知、○中略安和元年九月二日、九月御燈止事、連量勘申云々仍奉勘文案、勘申、有大嘗會之年、停九月三日御燈之例事、○中略承平二年日記云、九月三日壬午、依穢雖無御燈、依例廢務、

寬仁二年二月廿五日己丑、大納言公任消息云、仁王會大祓事、何日可行乎、來月一二日禊、更齋內三日廢務前例如何、大殿云、三日禊後、行大祓宜歟者、報云、左右可被命口後日大納言云、天曆六年三月

廢務雜例

有無日

二日行之云々者、引見外記日、○日恐今誤

(日本紀略後一條十三)寛仁二年九月三日壬戌、停止御燈、依可有齋宮群行也、又廢務、

(日本紀略後一條十四)長元二年九月三日戊午、御燈、廢務、

(中右記)天仁元年三月二日甲子、今日有奉幣、日吉一社也、○中略今日、上卿、辨、外記、史、頭、使等、皆著吉服、御燈以前奉幣例、○中略何況諒闇之年無御燈、由御祓、雖然明日廢務云々、

(小野宮年中行事三月)朔日及十一日、著朔座事、是月每旬著之、但廿一日廢務、

(小野宮年中行事九月)朔日及廿一日、著朔座事、是月每旬著、但十一日廢務、

(扶桑略記二十三醍醐裏書)昌泰四年○延喜元年九月十五日癸亥、廢務、

(扶桑略記二十四醍醐裏書)延長八年六月一日癸巳、廢務、

(北山抄二八月)十五日、率信濃勅旨御馬事、○中略

天暦二年八月十五日廢務、取信濃諸牧馬、○下略

(日本紀略六圓融)貞元元年五月十二日戊寅、仰六衞府、左右馬寮、兵庫寮、可警固之由、自今日廢務三箇日、

(日本紀略十二三條)寛弘八年七月四日乙亥、廢務、

長和三年二月十日丙寅、左大臣仰云、今日以後三箇日、可有廢務、

(台記)久安四年四月二十二日己酉、氣家來云、可令勅公卿勅使日時者、報奏云、今日廢務、明日可令勘申者、

(兵範記)嘉應元年六月九日甲午、今日禁中廢務云々、

(公事根源五月)有無日アンナルノヒ　廿五日

是は村上天皇の御國忌なり、宮中に有なしの日とや申にや、廢務日にあらざれども、政おこなは

れ侍らず、又急事などあれば假に政事有り、さて有なしの日とは申なり、

〔年中行事秘抄(五月)〕廿五日、村上天皇崩事、

官中謂之有無日、雖非廢務、無政并結政、

〔中右記〕嘉承三年(〇天仁元年)五月廿五日、今日官中號有無日、強無結政、或又有急事者、可行政歟、依隨體稱有無、是官中故實也、是村上先帝御忌日也、本雖不置國忌、我朝聖主、後人戀道德、依强不行政歟、明主仁風、遠及後代歟、史定政來、御齋會雜事申上之次、問云、今日結政有無如何、申上云、無結政、是及今存古風歟、

〔讀史餘論〕〔一〕本朝天下の大勢九變して武家の代となり、武家の代又五變して、當代におよぶ總論の事

神皇正統記に、光孝より上つかたは一向上古也、萬の例を勘ふるも、仁和より下つかたをぞ申める、五十六代淸和幼主にて、外祖良房攝政す、是外戚專權の始、(一變)基經外舅の親によりて、陽成を廢し光孝を建しかば、天下の權歸於藤氏、そののち關白を置き、或は置ざる代ありしかど、藤氏の權おのづから日々盛也、(二變)六十三代冷泉より、圓融、花山、一條、三條、後一條、後朱雀、後冷泉、凡八代百三年の間は、外戚權を專にす、(三變)後三條、白河兩朝は、政出於天子、(四變)堀河、鳥羽、崇德、(白河六年、鳥羽十三年、)近衞、(鳥羽十四年、)後白河、二條、六條、高倉、安德、(後白河三十餘年、)凡九代九十七年の間は、政出於上皇、(五變)後鳥羽、土御門、順德三世、凡三十八年の間は、鎌倉殿天下兵馬の權を分掌せらる、(六變)後堀河、四條、後嵯峨、後深草、龜山、後宇多、伏見、後二條、花園、後醍醐、光嚴十二代凡百十二年の間は、北條陪臣にて執國命、(七變)後醍醐重祚、天下朝家に歸する事纔に三年、(八變)そののち天子蒙塵、尊氏光明を立て其主となしてより、天下ながく武家の代となる、(九變)

武家は、源賴朝幕府を開て、父子三代天下兵馬の權を司どれり、凡三十三年、(一變)平義時、承久の亂後

天下の權を執る、其後七代凡百十二年、高時が代に至て滅ぶ。二變（此時に攝家將軍二代、親王將軍四代有りき、）後醍醐中興の後、源尊氏反して天子蒙塵、尊氏光明院を北朝の主となして、みづから幕府を開く、子孫相繼で十二代にをよぶ、凡二百三十八年、三變（このうち南北戰爭五十四年、應仁亂後百七年の間、天下大に亂る、實に七十七年が間、武威あるがごとくなれども、東國は皆鎌倉に屬せしなり。）足利殿の末、織田家勃興して、將軍を廢し挾天子令天下と謀りしかど、事未成して、（凡十年がほど）其臣光秀に弑せらる、豐臣秀吉其故智を用ひ、自ら關白となりて、天下の權を恣にせしこと、凡十五年、四變其後終に當代の世となる。五變

謹按、鎌倉殿天下の權を分たれし事は、平清盛武功によりて身を起し、遂に外戚の親をもて、權勢を專にせしによれり、清盛かくありし事も、上は上皇の政みだれ、下は藤氏累代權を恣にせしに倣ひしによれる也、されば王家の衰し始は、文德幼子をもてよつぎとなされしによれりとは存ずる也、尊氏天下の權を恣にせられし事も、後醍醐中興の政正しからず、天下の武士、武家の代をまたひしによれる也、尊氏より下は、朝家はたゞ虛器を擁せられしまゝにて、天下はまつたく武家の代とはなりたるなり。

古事類苑

政治部四

上編

詔勅

詔勅ハ、並ニ邦語ニミコトノリト云フ、天皇ノ御言ヲ宣ルノ謂ナリ、又直ニミコト、オホミコト、ト稱ス、文武天皇ノ令ヲ定ムルニ至テ、始テ詔勅ノ制アリ、蓋シ臨時ノ大事ヲ宣スルヲ詔ト云フ、即チ蕃國使ニ命ヲ宣シ、及ビ改元、改錢、赦令等ノ類ナリ、其他尋常ノ小事ヲ勅ト稱ス、故ヲ以テ詔勅ノ式亦別アリ、而シテ當時ノ詔書ノ式ハ、皆國文ナリシヲ、後ニ漢文ノ式ヲ制スルニ至リ、國文ノ式ヲ宣命ト云ヒテ之ヲ別テリ、

詔書ヲ出サンニハ、先ヅ内記ニ命ジテ、草案ヲ作ラシメ、參議以上若シクハ内侍ニ付シテ、之ヲ奏セシム、可ナレバ、年月ノ下ニ日ヲ宸署シ給フ、之ヲ御畫日ト云フ、即チ之ヲ中務卿ニ給フ、卿受ケテ之ヲ大輔ニ宣ス、大輔奉ジテ、少輔ニ付シテ、太政官ニ送ラシム、故ニ其姓名ノ下ニ、各、宣、奉、行ノ文字ヲ注ス、卿若シ在ラザレバ、大輔ノ姓名ノ下ニ宣ト注シ、少輔ノ姓名ノ下ニ奉行ト注シ、大輔又在ラザレバ、少輔ノ姓名ノ下ニ併セテ宣奉行ト注ス、若シ少輔在ラザレバ、丞以下亦準ジテ之ヲ行フ、即チ之ヲ留メテ案トシ、別ニ一通ヲ寫シ、印署シテ太政官ニ送ル、官之ヲ受ケタル後、外記詔書ノ後ニ、太政大臣以下大納言以上ノ姓名ヲ注記ス、大納言更ニ之ヲ覆奏ス、時ニ年月日ノ次ニ、可ノ字ヲ宸署シ給フ、之ヲ御畫可ト云フ、即チ之ヲ官ニ留メテ案トシ、更ニ一通ヲ寫シテ、在京ノ諸司ニハ、之ニ官符ヲ副ヘテ行下シ、諸國ニハ、更ニ官

符ニ臨シテ施行スルナリ、京畿及ビ國司之ヲ受ケテ後、事百姓ニ關スルアレバ、次ヲ以テ之ヲ行下シ、里長坊長ヲシテ、部内ヲ巡歴シテ、百姓ニ宣示シ、明ニ其旨意ヲ曉ラシム、而シテ天皇幼冲ナレバ、攝政代リテ御畫ヲ加フルナリ、

勅書ハ、勅命ヲ受ケタル者、直ニ中務省ニ宣送ス、故ニ御畫日ナシ、省覆奏シ畢テ、卿以下少輔以上ノ署ヲ取リ、留メテ案トシ、更ニ一通ヲ寫シテ、太政官ニ送ル、官更ニ覆奏セズ、故ヲ以テ御畫可アルコトナシ、即チ大辨以下少辨以上連署シ、年月日ノ下ニ史ノ姓名ヲ注シ、留メテ案トシ、別ニ一通ヲ寫シテ施行ス、施行ノ式ハ、一ニ詔書ニ同ジ、若シ勅シテ五衞及ビ兵庫ノ事ヲ處分スル時ハ、本司又覆奏ス、延喜天曆以降、往々勅書ニ御畫ノ例アルハ、年中行事障子ノ文ニ據レルモノニシテ、勅書ノ正式ニハ非ザルナリ、

諸臣ノ辭官ノ表及ビ論奏等ニ答フル爲ニ、勅書ヲ賜フコトアリ、之ヲ勅答ト稱ス、新任ノ大臣ノ上表ニハ、三度ニ至リテ勅答アリ、自餘ハ度每ニ勅答アリ、中納言若シクハ近衞次將ヲ遣シテ、勅書ヲ齎ラシ、其第ニ就テ之ヲ賜ハシム、猶ホ奏篇及ビ表篇ヲ參看スベシ、

急速ノ勅旨ハ、太政官ニ緣ラズシテ、中務省先ヅ所司ニ移シテ事ヲ行ヒ、其正勅ハ後ニ式ニ依テ施行ス、又細事ノ勅旨ハ、中務省具ニ勅狀ヲ錄シテ、辨官ニ申送シ、施行ノ日ニ至テ、勅旨ト稱ス、即チ勅旨交易、及ビ勅旨田ノ類コレナリ、其他別勅及ビ口勅アリ、別勅ハ太政官ヲ經ズシテ、勅旨ヲ施行シ、口勅ハ勅命ヲ口達スルヲ以テ、天皇ノ自ラ宣ヒシアリ、或ハ諸司ニ命ジテ勅旨ヲ宣傳セシム、又宸筆ノ勅書アリ、

詔勅宣行以前ニハ、中務省ノ外輙ク看ルヲ許サズ、太政官詔勅ヲ頒下スル時ハ寫程ヲ給フ、

若シ稽緩スレバ罪ヲ科ス、詔勅施行スト雖モ、理不便ナレバ、所在ノ官司ヲシテ執奏セシメ、施行法ニ違ヘバ罪ヲ科シ、詔勅ノ文字誤脫シ、旨意ヲ失スレバ、改正シテ覆奏セシム、若シ奏

聞セズシテ輙チ改定シ、又詔勅ヲ受ケテ忘誤シ及ビ寫誤シ、又詔勅ヲ詐爲シ、若シクハ增減スレバ、罪ヲ科スル差アリ、
詔勅ハ並ニ黄紙ニ書ス、其案ハ所司ヲシテ庫ニ納メテ、永ク保存セシム、但シ施行ノ詔勅理ニ背クモノアレバ、燒却セシムル例ナリ、

〔日本書紀三神武〕四年二月甲申、詔曰、(中略)下

〔類聚名義抄五言〕詔(音照 ツグ ノル コト ヲシフ)　詔旨(ミコトノリ)

〔伊呂波字類抄〕詔勅　詔命　詔書

〔年中行事歌合〕四十四番　左(勝)　詔書　大藏卿〇藤原長綱
みことのりふたゝびうけてこの君のあづかりまうすくにぞかしこき

〇按ズルニ、類聚三代格卷一ナル神龜二年七月二十日ノ詔ノ首ニアル詔ノ字ニ、一本ニ濁點アリ、詔ノ字ハ或ハ濁音ヲ以テ音讀シテゼウト云ヒシナリ、

〔類聚名義抄八力〕勅(恥力反 イマシム ヲシフ ノタマフ)　勅(音飭)勅正、

〔運歩色葉集〕勅(チヨク)

〔伊呂波字類抄〕勅書

〔名目抄〕勅旨(チヨクシ)

〔拾遺和歌集九雜〕内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに、鶯のすくひて侍りければ、家の主人の女、まづかくそうせさせ侍りける、
勅なればいともかしこし鶯の宿はとゝはゞいかゞ答へむ

〇按ズルニ、右ノ歌ニ據レバ、勅ノ字ハ多ク音讀セシモノヽ如シ、

〔隨意錄四〕天子之命曰詔、天子之居曰禁中、戰國以上之書、未之見焉、蓋秦漢以降之稱、漢諱元后父名

禁、改禁中為省中、唐武后名照、故改詔為制、然曰詔曰禁、歷代通稱耳、

〔段注說文解字 三上〕詔、告也、見釋詁、按以言告人、古用此字、今則用告字、以此詔為上告下之字、又秦造詔字、惟天子獨稱之、文選注卅五、引獨斷曰、詔猶告也、三代無其文、秦漢有也、據此可證、秦已前無詔字、至倉頡篇乃有幼子承詔之語、故許書不錄詔字、鉉補之非也、

〔獨斷 上〕詔書者、詔誥也、有三品、其文曰、告某官、官如故事、是為詔書、群臣有所奏請、尚書令奏之下、有制曰、天子答之曰、可、若下某官云々、亦曰、詔書群臣有所奏請、無尚書令奏制之字、則答曰、已奏如書、本官下所當至亦曰詔、

戒書、戒勅刺史太守及三邊營官、被勅文曰、有詔勅某官、是為戒勅也、世皆名此為策書、失之遠矣、

〔獨斷 上〕策書、策者簡也、禮曰、不滿百文、不書於策、其制長二尺、短者半之、其次一長一短、兩編下附篆書、起年月日、稱皇帝曰、以命諸侯王三公、其諸侯王三公之薨于位者、亦以策書誄諡其行而賜之、如諸侯之策、三公以罪免亦賜策、文體如上策而隸書、以一尺木兩行、唯此為異者也、

〔唐六典 八 門下書〕凡諸侯王及四夷之君長朝見、則承詔而勞問之、臨軒命使、冊后及太子、則承詔以命之、　唐禮、侍中前承詔降、宣詔曰、冊某氏女為后、命公等持節展禮、冊太子亦如之、

凡制勅慰問外方之臣、及徵召者、則監其封題、若發驛遣使、則給其傳符、以通天下之信、凡官爵廢置、刑政損益、皆授之于記事之官、既書于策、則監其記注焉、

〔唐六典 九 中書省〕中書令之職、掌軍國之政令、〇中略 凡王言之制有七、一曰、冊書、　立后建嫡、封樹藩屏、寵命尊賢、臨軒備禮、則用之、

二曰、制書、　行大賞罰、授大官爵、釐革舊政、赦宥降虜、則用之、

三曰、慰勞制書、　褒賛賢能、勸勉勤勞、則用之、

四曰、發日勅、　謂御畫發日勅也、增減官員、廢置州縣、徵發兵馬、除免官爵、授六品以下官、處流已上罪、用庫物五百段、錢二百千、倉糧五百石、奴婢二十人、馬五十匹、牛五十頭、羊五百口已上、則用之、

五曰、勅旨、謂百司承旨而爲程式、奏事請施行者、

六曰、論事勅書、慰諭公卿、誡約臣下、則用之、

七曰、勅牒、隨事承旨、不易舊典、則用之、

皆宣署申覆、而施行焉、尙書典謨訓誥誓命之書、皆帝王詔制記於簡策者也、蔡邕獨斷稱、漢制、天子之書、一曰策書、二曰制書、三曰詔書、四曰戒書、〈○中略〉自魏晉以後、因循有冊書詔勅、總名曰詔、皇朝因隋不改、天后天授元年、以避諱改詔爲制、今冊書用簡、制書、勞慰制書、發日勅、用黃麻紙、勅旨、論事勅、及勅牒、用黃藤紙、其勅書頒下諸州用絹、

〔令義解〈七公式〉〕詔書式〈謂詔書勅旨、同是綸言、但臨時大事爲詔、尋常小事爲勅也、〉

〔北山抄〈六備忘略記〉〕詔書事〈改元、改錢、赦令等之類也、臨時大事爲詔、尋常小事爲勅、〉

勅書事〈遣唐使、改元、自餘賜皇子源氏姓、內親王准三宮、充封戶等類、可尋注、〉

〔日本書紀〈二十七天智〉〕天萬豐日天皇〈○孝德〉後五年十月崩、明年皇祖母尊〈○齊明〉卽天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子〈○天智〉素服稱制、

〔獨斷〈上〉〕制書、帝者制度之命也、其文曰制詔三公、赦令、贖令之屬是也、刺史太守相劾奏、申下土遷書文亦如之、其徵爲九卿、若遷京師近官、則言官具言姓名、其免若得罪無姓、凡制書有印、使符下遠近皆璽封、尙書令印重封、唯赦令贖令、召三公詣朝堂受制書、司徒印封露布下州郡、

〔日本書紀〈三十持統〉〕朱鳥元年九月丙午、天渟中原瀛眞人天皇〈○天武〉崩、皇后〈○持統〉臨朝稱制、

〔漢書〈三高后紀〉〕高皇后呂氏、生惠帝、佐高祖定天下、〈○中略〉惠帝崩、太子立爲皇帝、年幼、太后臨朝稱制、〈師古曰、天子之言、一曰制書、二曰詔書、制書者、謂爲制度之命也、非皇帝不得稱之、今呂太后臨朝行天子事、斷決萬機、故稱制詔、〉

〔續日本紀〈六元明〉〕和銅七年四月戊寅、制、諸國庸綿、丁五兩、但安藝國絲、丁二兩、遠江國絲三兩、並以二丁成屯絢也、

掌詔勅

靈龜元年二月丙辰、制、尚侍從四位者、賜絁准典藏焉、

〔續日本紀（八元正）〕養老三年五月辛亥、制、定諸國貢調短絹狹絁、麁狹絹、美濃狹絁之法、各長六丈、濶一尺九寸、

〔令義解（一職員）〕中務省（管職一、寮六、司三、）卿一人、（掌〇中略）審署詔勅文案、受事覆奏、（謂依公式令詔書、御畫日者、留中務省爲案、別寫一通印署、又依勅旨式、受勅人宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署是也、〇中略）大輔一人、（掌同卿、〇中略）少輔一人、（掌同大輔、〇中略）大內記二人、（掌造詔勅、凡御所記錄事、）中內記二人、（掌同大內記、）少內記二人、（掌同中內記、）

〔令義解（一職員）〕太政官（〇中略）大外記二人、（掌勘詔奏、（謂勘正詔書、及勘造奏文也、）及讀申公文、（謂上日行事之類、讀申於少納言也、）勘署文案、撿出稽失、）少外記二人、（掌同大外記、）

〔職原抄（上）〕中務省

內記（唐名內史局、又云柱下、）

大一人、（相當正六位上、唐名柱下起居郎、）（近代五位）

儒門之中、堪文筆者任之、草詔勅宣命故也、上下諸人位記、悉內記所奉行也、故雖爲中務被官、別云內記局、

少二人（相當正七位上、唐名著作郎、）（近代六位）

儒胤幷同門徒等任之

〔西宮記（臨時一）〕詔書

上卿奉勅、仰內記令作詔書、（無內記者、令奏事由、可仰博士、辨、辨副、爲逆之上卿、上卿仰外記召、宮入之奏、外記持候、）

〔北山抄（六備忘略記）〕勅答事

上卿奉仰、下給内記、令草勅書、（若无成業内記、令士儒官作之、）

〔禁秘御抄下〕詔書

上卿奉勅、仰内記令作詔書、（無内記之時、儒卿草之、凡天下大事、儒卿草之、）

〔日本紀略一十〕長德四年七月二日戊午、詔大赦天下、○中略右大辨忠輔作詔書、

長保元年正月十三日丁卯、詔改長德五年爲長保元年、○中略權少外記慶滋爲政作詔書、　四年九月

八日庚子、詔曰、大辟以下赦除、○中略左大辨忠輔卿作詔書、依内記遲參也、

〔日本紀略三十二〕長和四年五月廿六日乙巳、詔大赦天下、○中略右少辨資業作詔書、

〔令義解七公式〕凡諸司受勅、不經中務傳來、及宣口勅者、（謂、口勅者、宣於中務、既云不得承用、即不可更覆奏也、）不得承用、若奉口勅

索物者、不須經中務所司承勅即進、（謂、有勅之司、直奉口勅、奉進也、）仍附狀奏聞、（謂本司附狀奏聞、即奏聞之後、申太政官知、）

〔延喜式十八式部〕凡依内侍宣敍位者、必經大臣乃聽授、

凡内侍仰事、若非緣詔勅、勿輒承行、

〔延喜式五十雜〕凡緣敍事須、不得輒稱勅旨、（勅旨田之類、）但中務奉勅具錄勅狀、申送辨官施行之日、當言

勅旨、

〔類聚國史七十九法制〕延曆二十二年二月庚子、制、奉行勅宜據令條、不更經中務省、

〔唐書百十七劉禕之傳〕垂拱中、或告禕之受歸誠州都督孫萬榮金、與許敬宗妾私通、太后遣肅州刺史王本

立、鞠治、以勅示禕之、禕之曰、不經鳳閣鸞臺、何謂之勅、后以爲拒制使、賜死于家、年五十七、

〔令義解五宮衞〕凡詔勅未宣行者、（謂未宣太政官也、）非司不得輒看、（謂除中務少輔以上之外、皆爲非司、未宣行、關門司輒看、故設此制也、）

〔令集解二十四宮衞〕釋云、司、謂守當一人耳、一云、中務少輔以上、一云、爲門司開見立文、古記云、問詔勅未

宣行者、非司不得輒看、未知司誰、司答依公式令、詔謂中務少輔以上、勅謂主典以上是也、又此條爲

門司制立文也、穴云、司謂中務少輔以上也、古私記云、於勅錄以上是者因古令生義耳、於新令不合、

中務承送太政官訖者、爲施行訖、其內記造間无煩他氏見歟也、爲无可見他人事故、問案公式令太政官留爲案、更寫一通施行、又云、太政官施行詔勅案成後頒下者、皆給寫程者、案之以太政官施行、未知何定、答或師云、於太政官見施行時云爾耳、但中務送官之後、爲已宜行了耳、稱宜行者、宜奉行意也、行、施行意也、可撿穴在跡云、非司、謂中務少輔以上皆爲預司、自餘雖門司而不得見耳、朱云、中務少輔以上爲司何、若爲注宜奉行、抑未知何、貞云、然此宜奉行者、宜奉行心也、然則宜奉行了者、雖未施行、他司見不側者、或云、問詔勅未實行者、未知宜者宜奉行之心歟、爲當施行之心歟何、兩先云、施行之心者未明何、貞云、未然宜奉行之心者、在跡、

〔令義解公式七〕詔書式

明神御宇日本天皇詔旨、謂以大事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御宇天皇詔旨、謂以次事宣於蕃國使之辭也、云々咸聞、

明神御大八洲天皇詔旨、謂用於朝廷大事之辭、即立皇后皇太子、及元日受朝賀之類也、云々咸聞、

天皇詔旨、謂用於中事之辭、即任左右大臣以上之類也、云々咸聞、

詔旨、謂用於小事之辭、即授五位以上之類也、云々咸聞、

年月御畫日

中務卿謂其於大少輔、亦注中務者、詔書事大、所以重言、即勅旨式、既不重注、是制作之情、因有差別也、位臣姓名宣

中務大輔位臣姓名奉

中務少輔位臣姓名行謂凡詔書者、內記於御所作訖、即給中務卿、卿受詔書、更宣大輔、大輔奉以付少輔、令送太政官、故曰宣奉行也、

太政大臣位臣姓謂自是以下、皆是外記之於自中務來詔書之後、所注記、故外記職掌云、勘詔奏也、

左大臣位臣姓

右大臣位臣姓

大納言位臣姓名等言、謂大納言四人、皆共連名、於最後名下、乃注等言也、

詔書如右、謂從下條詔字、是令闕字、爲令平出、即是誤失也、請奉

詔、付外施行、謹言、

年月日

可、御畫、

右御畫日者、留中務省爲案、謂御畫日者、使依詔書式、取署留爲案、爲顯宣奉行故也、但以御畫爲驗、不可更印、即下文云、畫可訖、留爲案者、亦准此也、別寫一

通、印署、送太政官、謂同寫一通、書名、少輔自寫、爲例、官以下不得署預也、大納言覆奏、畫可訖、留爲案、更寫一通、誥訖施行、凡謂施行詔書、於在京諸司、直寫詔書、副官符行下、若其外國者、更謄官符施行、故下條云、太政官施行詔勅、案成以後頒下者、各給寫本也、中務卿若不在、即於大輔

姓名下注宣、少輔姓名下注奉行、大輔又不在、於少輔姓名下、幷注宣奉行、謂若輔一人在者、亦准大輔也、若少

輔不在、餘官見在者、並准此、謂大少輔並在者、亦以次注宣奉行、爲准少輔以上故也、前令云、少輔不在者、爲見在者准此、今改云餘官見在者、欲知餘亦得也、

○按ズルニ、賜外國詔書條、及ビ詔書例條ニ引ク、日本書紀大化元年、同二年ノ詔書ノ辭ハ、公式令ノ詔書ト合ヒタレバ、當時既ニ詔勅ノ制ヲ定メラレシモノナルベシ、

又按ズルニ、大寶令ノ制ニハ、邦語ヲ以テ皇命ヲ宣スルヲ詔ト云ヒ、漢文ヲ以テ宣スルヲ勅ト云ヒシガ如シ、然ルヲ其後詔モ勅ト同ジク漢文ヲ用ヰルコトゝナリ、因テ邦語ヲ以テ宣スルヲバ、宣命ト稱シテ、之ニ別ツコトゝナレリ、尚ホ宣命條ヲ參看スベシ、

〔延喜式十二中務〕詔書式

詔云々、主者施行、

年月御畫日

中務卿位臣姓名宣

中務大輔位臣姓名奉

中務少輔位臣姓名行

〔內裏式下〕詔書式、

內記作詔書畢、（或自內裏仰內記令作、或大臣奉勅令作、）納筥、令參議以上若內侍進御所、御畫日訖、置殿上机上、（掃部寮預立漆案、）而退下、須臾參議以上一人升殿、喚內豎召中務省、稱唯出、（出入日華門、）喚輔以上一人入、自左掖門就版位、（若有雨水、通自南廊立承明門內東第二間、他皆效此、）勅曰、參來、稱唯升自南階、立簀子敷、（當御前、）勅曰、書賜、（禮、）稱唯進取勅書筥退出、（用同門、）既而御畫日者、留爲案、別寫一通、印署送太政官、大納言覆奏、畫可、（詔書畫可字、論奏等畫聞字、）訖留爲案、更寫一通施行、（頃年所行、更不寫一通、畫可字者付辨官令施行、畢卽收外記、）

〔延喜式中務十二〕凡奉詔書者、使內豎喚省輔、稱唯入閤門、進就版位、卽奉勅執詔書筥退出、（事見儀式、）別寫一通、印署送太政官、（慰勞詔書不在此限、）

〔延喜式內記十二〕凡節會及尋常詔旨者、內記預書、（○註略）但臨時詔勅者、承旨卽內記作詔書、畢納筥、令參議已上若內侍進於御所、

〔西宮記臨時一〕詔書

上卿奉勅仰內記令作詔書、（無內記者、令奏事由、可仰博士辨、副筥進上卿、上卿仰外記、召筥入之、奏、外記持候、）卽令齎內記就御所、奏草及清書、賜御畫日、（十日廿日類、）畢著本座、召中務輔若丞於陣膝突下賜、（敎時召擬非違使仰、）省寫一通、（年號奧輔一人加名、）進外記、（本文留省、）外記連書大臣以下諸卿署所、（奧新續紙書之、下臈名下注等字、舊例、奧又注年號、）史生次第取諸卿名、卽署畢覆奏、大納言著陣、外記申詔書覆奏候由、（大臣參會時、先申大臣、候許可、可申大納言、）大納言許諾、外記插覆奏候小庭、大納言目之、外記進文、取見返賜、外記插杖立庭巽、大納言就御所、付藏人奏聞、（返賜、次可加捻云々、於東階下付內侍、御可訖、返給、大納言至階下、取奏杖給外記、還著本座、）（无內侍之時、進御所、）天皇書可字、（公卿連署、次年號奧上、書可字、或連署奧無年號失也、）返賜、著陣、外記於陣前小庭候、上卿氣色、大納言加捻返賜、（或不見目外記、）外記稱唯持退、或外記持候於膝突、上卿取以開、見御可有無、返給外記、外記退出寫一通渡官、或云、更不寫一通、以正文其上卷紙一枚封之、其上橫點墨令持、時若史生渡官、官寫取一通、如

故加封口返給外記、外記令成施行官符、大納言有障者、中納言可奏云々、可尋、或大臣奏云々、不可為例、詔書有誤改正時、進上儀如下時、

天暦六年八月廿二日乙巳、詔書覆奏、不付内侍、直進御所奏之、依年來之例也、

○按ズルニ、本書ニ、史生取諸卿名、即署畢覆奏トアルヲ、北山抄ニハ、參議已上署畢、大納言覆奏トアリ、

〔政事要略 三十年中行事〕天慶元年五月廿二日戊辰、略○中大臣乍在陣座、召藏人右少辨相職朝臣、令奏件詔書、詔書云、御物忌、大臣以御書申、御所可令奏、此詔書、而乍在陣座令奏聞、是不可為例、奏聞之後、相職將歸、奉於大臣、大臣召中務少輔源朝臣要給之、略○中且要朝臣持詣本省、更令寫一通、書宜奉行捺印、差少錄御立維宗、令進外記局、外記等即詔書與續紙、令書公卿名所、差史生一人、令給公卿署名、自上臈令給其署名、

〔北山抄 六 備忘略記〕詔書事

上卿奉勅、仰内記令草之、即令實内記、候御所令奏、返給令清書之、用黃紙、又參上令奏聞、御畫日、月日字已上内記書之、一日二日、是御畫也、見令縫記、畢還著本座、召中務輔給之、乍入内記所筥給之、見貞信公延喜十四年二月十五日記、輔若不參給丞、丞已上不參者、不召諸令所記、傳給之、為例也、省寫一通進外記、參議已上署畢、大納言覆奏、外記進之、大納言披見返給、外記退立、上卿起座、次縫文杖、持參座、代、乍插文杖覽之、若大納言不參者、中納言奏之、或大臣奏云々、中納言又不參時例也、内侍不候之時、進御所付藏人奏聞、御可畢、年號勘文附筥、與奏書之、一字、自下返給、大納言至階下、取奏給外記、於本所給之、外記立階二、開函讀上、上卿取奏返給、還著本座、外記持候膝著、上卿取之、見御可之有無、舊例外記退出後、更入筥覽之、而近代如此、○下略

〔江家次第 十八〕勅書

太上天皇尊號事

上卿著陣、奧、次移著外座、召官人令鋪膝突、藏人仰可令作太上天皇尊號詔書由、上卿令官人召内記、仰之、内記若不候者、可令儲者、撰作之、隨可奏其由、内記進草、入筥、辨作時副筥進之、上卿召外記筥入之、上卿見畢令内記内覽

之、消書內覽或申請之辨作時令外記內覽之、或令藏人覽之、次令持內記、進弓場殿奏、付藏人辨作時令持外記返給復座、次仰內記令消書、黃紙次又進弓場殿奏之、如初返給、上卿取宮給內記之後、披見御畫日有無、次復座、內記置宮退出次召中務輔、先可仰外記令召歟、可尋作入宮給之、輔若不參者、可給丞、又不候者、可令外記傳給於錄、丞有例也、

詔書覆奏

上卿大納言若無者、中納言、著陣、外記申詔書覆奏可候由、上卿著外座、令陣官人敷膝突、召外記令進詔書、外記進之、插書杖、上卿見畢返給、外記插之立小庭、上卿付御所、令藏人奏之、○中略寬治四年九月詔書、大輔有賢下註宣奉行三字、失也、詔書覆奏無內覽、依執柄加署也、若關白詔書覆奏者、可內覽、依無關白署所也、

〔禁秘御抄下〕詔書

上卿奏勅、仰內記令作詔書、無內記之時、辨草之、凡天下大事ハ儒者草之、上卿令持內記奏之、入宮天子覽之、書日返給、上卿著本座、召中務輔若丞、於軾下給、不入宮省寫一通、年號奥輔一人加名、詔書式曰、別寫一通、印署送太政官、日之書樣、其日ヲ月ノ下ニ書也、他字ヨリ墨黑ニ、大ニ書之、

寬治四年十二月二十日宸筆二字也、廿日餘ハ廿ト書也、

承曆二年三月廿五日如此

改攝政爲關白詔書、內記不書其日、主上加其日、猶幼主儀也、未覽吉書トモ、主上令書入給、其日計也、寬治、永久、大治皆如此、

詔書覆奏

上卿奏之、天子覽之、書可字返給、年號奥聊上書也、只可字一字也、

可字書樣

天仁二年八月十日

可〈寫年號、多ハ最ヨリハ上ナラベ、可字モ／アヅカヘレ、年號ヨリハ一寸餘引上也、〉

年號在二所、編年號ニハ不書、公卿連署、其年號左上也云々、

保安奏號詔書覆奏之時、攝政〈忠通〉有評定、其年號書也、保安二可字ヲ主上年號上令書給、上卿宗忠示頭中將宗輔、公卿連署年號ノソバノ上也、仍被摺直畢、大外記師遠ト宗忠ト同心也、

〔日本書紀〕〈二十五孝德〉大化二年二月戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇〈アキツミカミトアメノシタシロシメス〉日本倭根子天皇詔於集侍卿等、臣連國造伴造、及諸百姓、朕聞明哲之御民者、懸鐘於門、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻蕘之說、親問爲師、由是朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道而來諫者也、皆所以廣詢于下也、管子曰、黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌、而主不蔽也、禹立建鼓於朝、而備訊望也、湯有總術之廷、以觀民非也、武王有靈臺之囿、而賢者進也、此故聖帝明主、所以有而勿失、得而勿亡也、所以懸鐘設匱、拜收表人、使憂諫人納表于匱、詔收表人、每旦奏請、朕得奏請、仍又示群卿、便使勘當、庶無留滯、如群卿等、或懈怠不懃、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、當可撞鐘、詔已如此、既而有民明直、心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在〈ウゴナハリヘル〉黎民、

〔〕按ズルニ、日本書紀、神武天皇四年二月甲申ノ條ニ、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、トアレドモ、當時未ダ詔勅ノ例アリシニ非ズ、蓋シ史官修史ニ臨ミ、ミコトノリノ意ヲ漢文ニ譯セシモノナラン、

〔續日本紀〕〈三文武〉慶雲二年四月壬子、詔曰、朕以菲薄之躬、託于王公之上、不能德感上天、仁及黎庶、遂令陰陽錯謬、水旱失時、年穀不登、民多菜色、每念於此、惻怛於心、宜令五大寺讀金光明經、爲救民苦、天下諸國、勿收今年擧稅之利、並減庸半、

〔續日本紀〕〈六元明〉靈龜元年九月庚辰、天皇禪位于氷高內親王、詔曰、乾道統天、文明於是馭曆、大寶曰位、

宸極所以居尊、昔者揖讓之君、旁求歷試、干戈之主、繼體承基、貽厥後昆、克隆鼎祚、朕君臨天下、撫育黎元、蒙上天之保休、賴祖宗之遺慶、海內晏靜、區夏安寧、然而兢々之志、夙夜不怠、翼々之情、日愼一日、憂勞庶政、九載于茲、今精華漸衰、耄期斯倦、深求閑逸、高蹈風雲、釋累遺塵、將同脫屣、因以此神器、欲讓皇太子、而年齒幼稚、未離深宮、庶務多端、一日萬機、一品氷高內親王、早叶祥符、夙彰德音、天縱寬仁、沈靜婉嫕、華夏載佇、謳訟知歸、今傳皇帝位於內親王、公卿百寮、宜悉祗奉以稱朕意焉、

（續日本後紀三仁明）承和元年十二月辛巳、施行天長年中所新撰令義解、下詔曰、納諸軌物、王道所先、制以度量、皇猷斯在、故知甹成五敎、銜勒萬方、垂拱而理、其法令乎、後太上天皇修機玄扈、比德丹陵、事勤遠圖、慮在長策、以爲法令文義、隱約難詳、前儒註釋、方圓遞執、豈使三家異說、輕重參差、二門殊趣、舞文弄法、永言於此、固切宸衷、爰勅在朝、通令討覈、稽之於典籍、參之以古今、迄于滯疑、祗稟聖斷、咸加辨析、已畫會通、裁爲十卷、名令義解、庶屈飛龍之妙譽、願汾陽之窅然、未有施行、藏之秘府、朕以寡昧、臨馭宸宇、思遵明範、導揚景業、宜頒天下、普使遵用、畫一之訓、垂於萬葉、

（朝野群載十二内記）朔旦冬至

詔、古之撫璿圖、宰寶錄之者、莫不在璿璣於七政、和玉燭於四時、用能三百六旬、膏雨無破塊之聲、七十餘度、微風絕鳴條之響、朕以菲薄、忝纂重光、每思敎令之不明、常恐節候之無信、廼者有司奏言、今月朔旦推得冬至、終而復始、致在自然、朕自惟寡德、何以會嘉辰、豈非祖宗之鑒照、臣佐保持之所致乎、爲須與天下共此休祥、自昌泰元年十一月廿一日昧爽以前、徒罪以下、不論輕重、咸從原免、但八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、私鑄錢、常赦所不免、及欠負官物之類、不在赦限、若以赦前事相告言者、以其罪罪之、其門蔭久絕、才勤尤著者、特加榮爵、以穩朝章、又內外文武官主典以上、敍爵一級、在京正六位上諸吏及史生以下、直丁以上、幷天下高年者、宜量賜物、庶使出金斛者、沐德澤於再生之年、延爵賞者、戴恩光於一陽之日、布告遐邇、俾知朕意焉、主者施行、

昌泰元年十一月廿一日　　　　　　從五位下守中務少輔藤原朝臣宣奉行

大納言藤原時平

權大納言菅原道眞　　　　　自餘不注

詔、書如右、請奉

詔、付外施行、謹言、

昌泰元年十一月廿一日

可

〈本朝文粹二〉二條前后復本位詔　　　　　　菅三品〇文時

詔、朕以非虚、忝嗣鴻業、思施德義之政、以致治理之風、元慶皇后、在昔停徽號、稱前皇太后、椒庭之月長閑、芝砌之霜多改、未及換汗、早隔德音、往事在耳、朕猶慟焉、故追復本號、以慰芳魂、青苔故宮、縱無增光於雨露之影、白楊荒壠、庶更變風於山陵之聲、普告天下、俾知朕意、主者施行、

天慶六年五月廿七日

〈本朝文粹二〉停九日宴十月行詔 [illegible]　　　　　　後江相公〇朝綱

詔、綵五雲而穿闕、汾水之遊不歸、攀九霞而摧心、荆軸之駕彌遠、九月九日者、先帝昇遐之月也、故九日之節、歷而經年、丹桊無驗、徒傳附塞之方、黄菊失時、空綴泣露之夢、朕之長恨、千秋無窮、爰洛水春遊、昔日閣筆、商飆秋宴、今時寒筵、鹿鳴再停、人心不樂、詞人才子、漸吞吟詠之聲、詩境文場、已爲寂寞之地、孔子曰、文王巳沒、文不在茲乎、宜開良讌於十月之首、以張餘芳於五美之叢、凡厥儀式、一准重陽、主者施行、

天曆四年九月二十六日

〈本朝文粹二〉減服御常膳幷恩赦詔　　　　　　菅三品

詔、儉者德之本也、明王能致、惠者仁之源也、聖主必施、朕以寡薄、謬守洪基、居黃屋而不驕、役丹符而自約、而化非春風、澤殊時雨、愼日之日空積、有年之年難逢、況頃者甘澍不降、苦旱久盛、國圖不見靑草之色、壠階多含赤地之愁、夫德政防邪、善言招福、般宗雉鼎之雊、昇耳之妖自消、宋景退舍之星、守心之變非異、其朕服御物、幷常膳等宜重省減、左右馬寮秣穀、一切擁絕、諸作役非要者、量事且停、又棲圄之中、恐有冤者、遣命所司、申慮放出、加之天下諸國有水之處、任令百姓灌漑、先貧後富、高年鰥寡孤獨、不能自存者、量加賑贍、又免除五畿內七道諸國、去天曆五年以往、調庸未進在民身者、但東海東山山陽三道、驛戶田租、限三箇年、殊從原免、若丹誠有感、蒼穹無欺、則降霈澤於不日、望豐稔於如雲、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

天曆十年七月廿三日

〔本朝文粹 詔二〕改元詔　慶保胤

詔、唐堯之馭民也、敬兼授時而未號、漢武之撫俗也、初以建元而爲名、自爾以來、或遇休祥以開元、或依災變以革曆、朕以庸虛、猥守神器、愼日是幾多日、計年只十五年、天之未忘、屢呈妖怪而相誡、德之是薄、難致兢惕而不消、去年黍稷之遇炎旱矣、民戶殆無天、宮室之爲灰燼焉、皇居唯有地、欲修又作百姓之費、將廢素非一人之居、惻隱于懷、寤寐難忍、方今上玄之譴便如是、中丹之謝欲奈何、宜改正朔以易率土之聽、施德政以解圄扉之冤、其改天元六年、爲永觀元年、大赦天下、今日昧爽已前、大辟以下罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、咸皆赦除之、又一度竊盜計贓三端已下、同始赦免、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、又老人及僧尼、年百歲已上、給穀四斛、九十以上三斛、八十已上二斛、七十已上一斛、庶幾攘餘殃於未萌、期弊俗於有截、布告遐邇、令知朕意、主者施行、

永觀元年四月十五日

〔本朝文粹 詔二〕贈故菅右大臣太政大臣詔　巨爲時（以書作云）

詔、賢章表德、縱雖歿而長傳、彝典旌賢、素雖舊而不朽、故贈正一位左大臣菅原朝臣、鐵石銘勳、旗常記績、和羹梅于台鉉、韜鳳雲乎才藻、朕前加追策、照徽烈於百代之後、今申褒命、崇靈魂於九原之中、吁嗟、馬鬣年深、蒼烟之松雖老、龍光露暖、紫泥之草再新、贈以太政大臣、蓋增褒賞之故也、宜極人臣之職、式照泉壤之靈、布告天下、俾知此意、主者施行、

正暦四年閏十月廿日

(玉海)安元三年七月廿九日丙寅、後聞、今日、被行贈官位并院號等事云々、使惟基、

詔書、位記、宣命等、尋取燒之、

用實綱、

詔、有遇而後優者、歷代之彝訓、褒賢而追賞者、明時之舊蹤也、故左大臣從一位藤原朝臣頼○頼長、器韜珪璋、才叶廊廟、陰陽燮理之昔、漢牛無春喘焉、體句奏宜之時、胡馬不南牧矣、朕聞、其徽猷倫勳、哀念吁嗟、作繼屢改、遂思往行於金聲之秋風、絲綸惟新、更播餘聲於青鳥之晩霧、故可贈太政大臣正一位、庶極人臣之職位、式顯泉壤之幽冥、宜去保元元年丑九月宣命等燒却之、主者施行、

安元三年七月二十九日

(平戸記)寛元三年四月廿五日己丑、今日被下封事詔書云々、(中略)

詔、朕聞、人欲自照、必須明鏡、主欲知過、必藉忠臣、堯舜禹湯文武之君、稷契皐陶伊呂之臣、其君隨諫而從也、其臣無諂而直也、社稷因茲安全、寰○寰恐宸誤海因茲靜謐、朕以眇身、忝備元首、親萬機之政道、迄四載之年、德不合天、天須有變化、不合地、地屢有震、咎徴屢聞、至祥瑞更不聞、況亦帑藏猶空、乏萬國之貢珍、邦家未治、闕百姓之潤、靜言思治、積齋叡襟、補朕之不逮、懸臣之極諫、宜令參議已上各上封事、凡厥法令之不便於事、勿有所諱、政教之爲助於化、勿有所除、○此間恐有脱字有犯無隱之議、唯書○書恐盡誤益國利民之謀、詞總浮花、理納要實、益得忠實、早沃朕意、主者施行、

寛元三年四月廿五日

〔建武年間記〕改錢事、建武元年三月廿八日、有御沙汰云々、

詔、居聖人之大寶、理究變通、〇此間恐有脫字、天地之洪規事、〇此間恐有脫字、沿革察時制法、事〇事恐其誤、拘一途、國家有錢、其來尚矣、周武闢基、九府之圜法肇興、漢文應業、四銖之形製更彰、金錢之品、龜龍之類、象物匪區、同歸節用、本朝垂範上世以來、屢改官文、栽傳簡牘、所謂自天平寶字、至于天德十有餘度、綿歷最詳、降及近古、求之外聞、〇聞恐闕誤、擅數俗間、官法如忘、頗違彝典、復枉政令、今以新化、爲除舊弊、始造官錢、須頒天下、濟世便民、孰謂不爾、仍文曰乾坤通寶、銅楮並用、交易莫滯、仁義所原、定樂厥成、告以宸衷、若稽〇稽恐御字誤、天理、主者施行、

建武元年三月日

〔太政官日誌八十一〕九月八日御布告寫

今般御卽位御大禮被爲濟、先例之通被爲改年號候、就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ、屢改號有之候得共、自今御一代一號ニ被定候、依之改慶應四年、可爲明治元年旨、被仰出候事、

九月

改元詔

詔、體太乙而登位、膺景命以改元、洵聖代之典型、而萬世之標準也、朕雖否德、幸賴祖宗之靈、祗承鴻緖、躬親萬機之政、乃改元欲與海內億兆更始一新、其改慶應四年爲明治元年、自今以後、革易舊制、一世一元、以爲永式、主者施行、

明治元年九月八日

議政官輔相　岩倉右兵衞督具視　議定　中山儀同忠能、正親町三條前大納言實愛、德大寺大納言實則、中御門大納言經之、松平中納言慶永、山內中納言豐信、伊達宰相宗城、　參與　阿野中納言公誠、鍋嶋少將直大、三岡四位公正、福岡四位孝弟、小松玄蕃

頭清廉、後藤象次郎元燁、大久保一藏利通、木戸準一郎孝允、廣澤兵助眞臣、副島二郎龍種、横井平四郎時存、岩下佐次右衛門方平、大木民平喬任、

行政官

辨官事　坊城右大辨宰相俊政、勘解由小路左中辨資生、五辻彈正大弼安仲、秋月右京亮種樹、西四辻少將公業、神山五位君風、田中五位輔、

神祇官

知官事　鷹司前右大臣輔熙　判官事　植松少將雅言、福羽五位美靜、

會計官

知官事　萬里小路中納言博房　判官事　池邊五位永盛

軍務官

副知官事同樣　有馬中將頼咸　三等陸軍將　坊城侍從俊章　判官事　海江田五位信義

外國官

知官事　伊達宰相宗城　副知官事　小松玄蕃頭清廉

刑法官

知官事　大原中納言重德　副知官事　備前侍從章政　判官事　中島五位錫胤、土肥謙藏、

京都府

知府事　長谷宰相信篤　判府事　松田五位道之、青山小三郎貞等謹奉、

詔以施行

明治元年九月十二日

賜外國詔書

〔延喜式中務十二〕慰勞詔書式

天皇敬問云々大蕃國云、天皇敬問、小蕃國云、天皇問、

年月御畫日

中務卿位臣姓名宣

中務大輔位臣姓名奉

中務少輔位臣姓名行

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年七月丙子、詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子奉遣之使、既往短而將來長、是故可以溫和之心、相繼往來而已、又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國爲內官家、譬如三絞之綱、中間以任那國屬賜百濟、後遣三輪栗隈君東人、觀察任那國堺、是故百濟王隨勅、悉示其堺、而調有闕、由是却還其調、任那所出物者天皇之所明覽、夫自今以後、可具題國與所出調、汝佐平等不易面來、早須明報、

〔續日本紀文武三〕慶雲三年正月丁亥、金儒吉等還蕃、賜其王勅書曰、天皇敬問新羅王、使人一吉飡金儒吉、薩飡金今古等至、所獻調物並具之、王有國以還、多歷年歲、所貢無虧、行李相屬、款誠既著、嘉尙無已、春首猶寒、比無恙也、國境之內、當並平安、使人今還、指宣往意、并寄王物如別、

○按ズルニ、公式令ノ詔書式ニ、蕃國ノ使ニ宣スル詔詞ヲ載セ、延喜式亦慰勞詔書式ヲ載ス、然ルヲ續日本紀以下ノ國史、往々其詔詞ヲ載セテ勅書ト記セリ、蓋シ唐六典ニハ、詔勅ノ類ヲ總稱シテ詔ト云フトアリ、我邦ニテハ、總稱シテ勅ト云ヒシカ、

〔類聚國史殊俗百九十四〕天長元年五月癸亥、印遣渤海勅書、日月上一踏、

〔延喜式內記十二〕凡賜渤海國勅書函、臘上書封字、函上頭書中務省三字、

〔延喜式 十二 內記〕凡〇中略遣渤海國勅書、太政官賜者、主鈴封之、(勅書與內記共封之)

〔類聚國史 百九十三 殊俗部〕延暦十七年五月戊戌、遣渤海國使內藏宿禰賀茂等辭見、因賜其王璽書曰、天皇敬問渤海國王、前年廣岡等還、省啓具之、益用慰意、彼渤海之國、隔以滄溟、世修聘禮、有自來矣、往者高氏繼緒、每慕化而相尋、大家復基、亦占風而靡絕、中間書疏傲慢、有乖舊儀、爲此待彼行人、不以常禮、王追蹤曩烈、修聘于今、因請隔年之裁、庶作永歲之則、丹款所著、深有嘉焉、朕祗膺寶圖、臨奉神器、聲教傍洎、既無偏於朔南、區宇雖殊、豈有隔于懷抱、所以依彼所請、許其往來、使人之數、勿限多少、但顧湖海之艱險、非一葦之可航、驚風踊浪、動罹患害、若以每年爲期、艱虞叵測、間以六歲、遠近合宜、故差從五位下行河內國介內藏宿禰賀茂等、充使發遣、宜告朕懷、幷附信物、其數如別、夏中已熱、惟王淸好、官吏百姓、並存問之、略此遺書、言無所悉、

〔江家次第 十八〕詔書覆奏

攝政時、若御直廬若里第者、藏人可持參、畫可字返、(覆奏御畫可一字許、自年歟、御寶奏畫之、不揮翫返給之、)上卿傳給外記、(取返歸ヵ)近例於弓場殿開見、御可之有無、歸著陣座、外記持文插候膝突、上卿取之、返給外記、

康和四年、上卿(經實)給史、不可然云々、

〔季仲記〕寛治四年十二月廿日、殿下(〇藤原師實)給御書云、御畫事不尋得、可有院定之由被仰、〇中略取御書、參院御前、議申了、仰云、此事不思得、攝政可加之由、欲被仰則被納、攝政辭云、是(一)則關白由詔也、只今(一)非關白、又非攝政、仍難云(二)御畫、主上(〇堀河)欲令云御畫御、則今日准攝政儀、可行由、可被下宣旨、又主上未自萬機之間也、此趣(ヵ)汝行向攝政亭□□□也者、

〔玉海〕壽永二年五月廿二日乙酉、此日忠親卿著仗座、被行減服御常膳詔書、頭中將隆房仰之、大內記光輔進詔書、攝政加御畫云々、下給中務少輔兼親了、

文治二年五月廿七日甲辰、大將著陣、有減服御常膳詔書事、以親經先覽草、見了返給、小時進淸書(ヵ)於

鬼間、以藏人召書御座御硯、入御書日了、〈廿七日三ヶ字也、先例或不書日字、入廿七兩字、〉五年九月廿四日辛巳、詔書覆奏之由、衆不聞之間、不參內、而內記持來、不參內、於里第書御畫、忽間例之間、粗撿出先例、書可字、了返給、

建久二年五月七日甲寅、未剋左大將參陣、有詔書覆奏事、〈○中略〉余於鬼間見之、召書御座御硯、〈○中略〉奥之年號之奥ニ二寸許指上〈天〉書可字、如例返給、

〔改元部類 五十四〕寛永廿一年十二月十六日庚午、此日改元事、詔書〈○中略〉奏聞畢、返給之、攝政被加御畫、

○按ズルニ、江家次第以下ノ諸書ニ據ルニ、天皇幼冲ノ時ハ、攝政代リテ御畫ヲ加フル例ナリ、

詔勅案

〔令義解 七公式〕凡案成者具條納目、〈謂案成者、文案始成卷、此皆以十五日爲斷、卽本司文書、幷從他司來者皆是也、納目者、納藏也、目、目錄也、猶云庫藏之文書目錄也、此皆每目別卷、故云目皆安軸也、假令刑部納目云、一條以其甲、配流其處、一條浸入其甲、以爲官戶之類也、〉目皆安軸、書其上端云、其年其月其司納案目、每十五日、納庫使訖、其詔勅目、別所安置、

凡文案、詔勅奏案、〈謂其便奏小事、不必常留也、〉及考案、補官解官案、祥瑞、財物、婚、田、〈謂婚者、五位以上娶妻名帳也、田者、田籍、田圖也、〉良賤、市估案、如此之類常留、以外年別撿簡、三年一除之、具錄事目爲記、〈謂與上條納目同例、假令爲記云、除去事條合若干條、別注云、其事之類也、〉其須爲年限者、量事留納、〈謂假令準令、稅帳者是三年一除之書、而有懸違、應須詢問其人事、使先向外處者、計其還程、更亦留納之類、〉限滿准除、

書寫

〔令義解 七公式〕凡受事、一日受、二日付畢、〈○中略〉太政官施行詔勅、案成以後頒下〈謂臨詔勅之符案成、又案勅旨式、奉勅如右以下、是勅之案成、不必臨符、此是不給程、且臨且寫也、〉者、給寫程、五十紙以下、一日程、過此以外、每五十紙以上、加一日程、〈謂一百紙以上、二日程、一百五十紙以上、三日程也、〉所加多者、總不得過三日、其赦書、計紙雖多不得過二日、卽軍機急速、〈謂軍機急速也、〉與事有促限者、皆當日出了、若本司人少、量程不濟者、並聽差比司人助、〈謂假令左辨寫詔勅、人少不濟者、差右辨及外記局人、助寫之類、此注總據寫詔勅、非唯爲軍機急速、其內記造詔書、依律、常日成了、不可給程之、〉

用紙

〔伊呂波字類抄 世疊字〕詔紙

〔延喜式 十二內記〕詔書料黃紙者、隨事直奏、受藏人所、

誤脱

〔禁秘御抄 下〕勅書（書黄紙、或白紙用之、唐大、）

〔松竹問答 四〕詔書勅書等ヲ被認候紙ヲ强紙ト申候、こうしト唱候哉、こはがみト唱候哉、此紙内
内所持仕候、圖書寮ヨリ調進仕候哉、
詔書勅書等ノ料紙ハ、强紙ニタハ無之候、宣命紙同物ニテ、黄色ノ鳥子ヲ用候、圖書寮調進ニ候、
强紙ハこうしト唱候、

〔令義解 七 公式〕凡詔勅宣行、文字脱誤、（謂此宣行書之脱誤也、脱者、謂書中脱一字、誤者、謂書甲為乙之類也、）於事理無改動者、勘検本案、（謂在中務之正案也、言詔勅上下、論比則錯誤、理不動、分明易知、不更覆奏、即改從正、若有改動者、仍覆奏從正、）分明可知、即改從正、不須覆奏、（謂律云、詔書有誤、不即奏聞、輒改定者、笞五十、其詔書者、太政官謄寫、中務寫出、知本案之官司、覆奏從改正也、）其官文書脱誤者、諮長官改正、（謂言官之文書、其餘同文、自依下條也、）

〔律疏 職制〕凡受詔忘誤、及寫詔書誤者、事若未失、笞卅、已失、笞五十、轉受者減一等、（謂受詔之人、忘誤其事、及寫詔書、脱漏文字、并文字錯失、本書未失、謂未失詔書之意、已失、謂已失事意、而施行、轉受者減一等、未失其事、合笞廿、事若已失、合笞卌、故云轉受、及寫詔錯失、轉々受者、雖自錯誤、為承詔勅、故減一等、）一等者減一等、

凡詔書有誤、不即奏聞、輒改定者、笞五十、（謂詔書字誤、於理有失者、皆合覆奏、然不即奏聞、輒自改定者、笞五十、不即奏聞、○中略）知誤不奏請而行者亦如之、（謂知詔書誤不奏、知官文書誤不請、依錯施行、亦如之、謂官文書誤、得管五十、官文書誤、得依公式令、詔勅宣行文字脱誤、於事理無改動者、勘験本案、分明可知、即改從正、）不即覆奏、其有官文書脱誤者、諮長官改正、

〔西宮記 臨時 一〕勅書
主上年月外給可字、給施行官符下給之、有誤召本書、加下日返上、改正下給、

〔北山抄 六 備忘略記〕詔書事
下畢後若有誤、可改正者、召返奏聞、如下時儀、改畢奏聞、下給又如初云々、若有所誤、見者可奏也、若有落字、令奏事由、召詔書作者令書加、無殊儀、見天慶五年正月五日私記、

施行

〔日本紀略十一一條〕長保二年八月五日己酉、右大臣(藤原顯光)召博士中原致明、文章博士大江匡衡、仰云、去五月十八日詔書草昧事、各可勘申者、(中略)九月廿八日壬寅、博士中原致明勘申草昧勘文、仰云、傍儒不加判、可令加判、(中略)十一月十二日丙戌、右大臣以下諸卿、定申詔書草昧可有忌諱之由、明經道勘文、博士中原致明、助教大江淑光、惟宗爲忠等、候參議座末、(中略)十二月廿九日壬申、左大臣(藤原道長)以下、被定申去五月十八日詔書草昧事、以草昧爲薄德、(又見百練抄)

〔日本紀略十一一條〕長保三年五月十三日甲申、外記慶滋爲政可進怠狀之由被仰下、去年五月十八日詔書草昧二字之誤也、

〇按ズルニ、權記、長保二年五月十八日ノ詔書ニ、朕以草昧恭承鴻基ト見ユ、蓋シ草昧ノ二字、妥當ナラザルヲ以テ、儒士ニ批評セシメテ、薄德ノ字ニ改メラレシナリ、

〔春記〕永承七年五月十六日庚申、督殿命云、頭辨經家含關白命來云、非常赦詔文、無故殺謀殺之文、若書落歟、將有先例歟、若落失者、命書載如何者、令申云、先例詔書字落事是常也、後日更加入奏之、清愼公(藤原實賴)被行落施行行字、後日入之、又九條殿(藤原師輔)被行之時、落二ケ字、後日注入之、是等例也、但此度詔文、不載故殺謀殺之文、是尋先例所不載也、非落失、古昔之例、多不載此文、或又載之、仰內記令勘先例、令奉覽、其後可隨御定也者、頭辨云、經成卿以忠方說所申云々、奇怪事也、末代愚者、難先賢之所爲、太希有事也者、今以大內記廣經、可令勘注也者、

〔令義解七公式〕凡詔勅頒行、關百姓事者、行下至鄕、皆令里長坊長巡歷部內、宣示百姓、使人曉悉、

〔律疏職制〕凡被詔書、有所施行而違者徒二年、失錯者杖八十、(失錯、謂失其旨、謂其勅及論奏得罪亦同、依上條、稽緩詔書、注云謄詔勅符移之類、皆是、卽明詔勅之義、輕重不殊、其論奏御親畫聞、勅則承旨宣用、御畫不輕、承旨理與勅旨義同、)

〔類聚三代格十六〕太政官符
　合四箇條事(中略)

以前得七道觀察使解偁、今聞諸國司等、官符到日施行諸郡、郡司下知鄕邑、而後〇後恐役誤相俱點〇點恐默誤闕、曾无下〇下恐事誤指示、然〇然恐誤則百姓之愚可、共樂成、或暗、莪袤、何曉符旨、理須國司案檢前後詔旨格符幷官符之內所載事類、披覆散此、發明上下、委曲陳喩、再三教誡、則將黎庶知歸、手足有措、而偏執目前、須聽不聽、常懷違捍、可示無示、偸下官符、民疑尋問、良宰在境、豈其如之、伏請下符諸國、每事存情、務加教喩、無致愛〇愛恐誤頗謹請處分者、右大臣宣、依請、

大同元年八月廿五日

施行以前免罪

〔北山抄 六備忘略記〕詔書事

有非常赦者、下詔書後、召左右檢非違使佐、仰施行以前可免獄囚之由、〇又見江家次第

〔小野宮年中行事 雜事〕常赦免者事

詔書出後、詔書施行以前、任詔文可免輕犯者之由、被仰別當、有宣旨書、

〇按ズルニ、此文ニ據レバ、罪人ヲ赦宥スルハ、詔書ノ施行ヲ待タザルナリ、猶ホ法律部赦宥篇ヲ參看スベシ、

〔日本紀略 三十二後〕寬弘八年十月廿四日癸亥、戊剋冷泉院太上皇崩于南院、春秋六十二、權大納言齊信卿依外記勘申、御召少內記義忠、令草進大赦詔書、〇中略中務輔不參、後日可給加封外記、又檢非違使佐以下不參、左衞門少志清國參入、雖非例、於華德門前可免左右獄囚之由召仰了、〇中略廿八日丁卯、齊信卿召中務輔、給去廿五日詔書、

稽緩

〔律疏 職制〕凡稽緩詔書者、一日笞廿、〈謂詔勅在令各給程、程五十紙以下、一日程、過此以外、每五十紙加一日程、所加多者總不得過三日、其軍機急速、事有程限、皆依所限為程、出了、此外仍停者是、謂奏事給符、移之類皆是、故言之類、〉二日加一等、罪止杖一百、

〔禁祕御抄 下〕勅書

天德四年十二月廿六日、皇子給源朝臣姓勅書、明日當御衰日、仍延廿九日、勅書可忌御衰日歟、

覆奏

〔三長記〕建久六年十一月廿九日、今日可有詔書覆奏之由、外記申上之、上卿大納言各不參、依延引、中納言奉行之例是多、□申其由、猶被延引了、

〔北山抄〕(四拾遺雜抄)皇太子加元服儀

詔書覆奏事(延喜、應和、後日覆奏、如常例、)

〔日本紀略〕(三村上)天暦元年二月廿七日癸未、詔減服御常膳物四分之一、　三月十一日丙申、此日令覆奏去月廿七日詔書、又有內印、　四月廿二日丁丑、詔改天慶十年、爲天暦元年、(〇中略)　五月二日丙戌、改元詔書覆奏、

〔西宮記〕(臨時一)應和三年三月廿日、大納言源朝臣令藏人□□□奏去月詔書覆奏、內侍不候、令藏人仰、依請、暫源朝臣令奏詔書覆奏、畫可下給、

〔小右記〕長和五年六月十三日乙酉、入夜資平來云、今日攝政准三宮勅書、中務省覆奏、付內侍所、內侍傳奏、資平先取覽攝政、(坐御宿所、)攝政命云、可返給者、仍返給了、(無御畫、)中納言行成卿云、省更寫白紙、署印覆奏、以初黃紙勅書覆奏、不覺事也者、余今見公式令勅旨云々、右受勅人宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署、留爲案、更寫一通、送太政官、(前准詔書印署送、是詔書勅書、互相發明也、)少辨以上依式連署、留爲案、更寫一通施行云云、今案、件令以本勅書覆奏歟、覆奏後取署歟、行成卿所覺、頗渉荒凉而已、

〔中右記〕寬治八年(〇嘉保元年)十二月廿八日乙未、有詔書覆奏、大納言皆有障不參、依有別仰、治部卿(〇權中納言源通俊)被勅之、進弓場殿、付藏人木工助奏覽、

〔江家次第〕(十八)改元事

詔書覆奏以前、京官用新年號、

〔本朝世紀〕久安六年十月五日丁未、權中納言忠雅卿參仗座、去二日非常赦詔書、今日適有御畫日事、仍被下詔書、中務輔丞不參、召少外記大江佐平傳給了、件詔書、去二日大內記長光難持參攝政第、(當時)

執奏

（奏注性寺新造所給也）緑左右命、仍空退出、今日蔵人頭朝隆朝臣持參、附賜御畫也、御畫隔數日之條、未曾有例歟、

〔令義解（公式七）〕凡事、詔勅、及事經奏聞、雖已施行、（謂文書行下、其事未行也、）驗理灼然不便者、所在官司、隨事執奏、若軍機要速、不可停廢者、且行且奏、即執合理者、量事進考、（謂准其情狀、量而進之、不限考限、）知而不奏、及奏不合理者、亦量事貶降、

〔令集解（公式三十六）〕釋云、不便謂格後勅云、令循州造甲八千領、長史裏儼違奏不辨之狀是、○中略、跡云、不便謂附軍機事、及非軍機事皆在、且可行事者且合行、若全有可難行之事者不行耳、縱其物无處亡者、何得行哉、朱云、驗理灼然不便、謂於書首尾相違、驗可知誤之類者、未明、若不便者書不誤、凡事於時不便歟、答額云、然也、假物无處亡等之類耳者何、

詔書增減

〔政事要略（三十年中行事）〕詐偽律云、詐為詔書、及增減者遠流、注云、謂因詔勅成文、而增減其事、

勅旨式

〔令義解（公式七）〕勅旨式

勅旨云々、（謂勅施行之法、謂勅書也、）

年月日

中務卿位姓名

大輔位姓名

少輔位姓名

奉勅旨如右、（謂自卿至少輔位姓、皆是勅旨所注也、）符到奉行、

年月日史位姓名

大弁位姓名

中弁位姓名

少辨位姓名

右受勅人、宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署、留爲案、更寫一通、送太政官、(謂准詔書、印署送、是書勅書互相發明者也、)少辨以上、依式連署、留爲案、更寫一通施行、其勅處分五衞及兵庫事者、本司覆奏、(謂唯中務覆奏、而本司又覆奏、宮衞令云、中務省府俱奉勅者、中務不可覆奏、故但衞府奉勅者、中務不奏之、)皇太子監國亦准此式、以令代勅、

〔西宮記 臨時二〕詔書事

延喜廿一年、宣旨云、勅書准式中務覆奏云々、(中略)○以康子內親王、賚子內親王、敍一品、賜年官年爵、勅書給中務省、省准令以本書付內侍所覆奏、返給、寫案文、署印送辨官、左辨等連署、任公式令、成施行官符云々、

〔新儀式 四臨時〕勅書事

大臣承命、令內記草奏、淸書下所司、一同詔書、但無御畫日事、又後日中務省付內侍覆奏、無御畫可、直下之、

○按ズルニ、新儀式、將軍賜節刀事ノ條ニ、大臣奉勅、預令淸書勅書、御畫日畢、大臣返給ト見エタレバ、當時勅書ニ、御畫日アリシコトモアリシナリ、姑ク附記シテ參考ニ供フ、

〔西宮記 臨時二〕勅書事

上卿奉勅、令內記作勅書、(先可內覽草案歟、)令賚內記、就御所奏聞、御畫畢、(案年中行事文、詔書勅書、同皆可有御畫日并御可也、覆奏之儀事異詔書也、勅書可有御畫云々、)即給中務輔若丞下賜、中務以正文付內侍所奏聞、返給、寫一通渡辨官、作官符、其儀不同詔書歟、但如令文者、同詔書云々、而至于勅書者、无大納言覆奏之事、(公式令云、受勅人宣送中務省、中務覆奏訖、依式取署、留爲案、更寫一通、送太政官云々、仍今案、上卿給中務、中務付內侍覆奏返下歟、但無御可、如令文者、勅書者不見御畫可等事、)抑表勅答、差中使、遣臣家、更不下中務、如此之事、未詳其趣、(以近衞大將爲使、或遣子孫、康子內親王辭准三宮之時、以中納言兼明爲遣家、初勅答、或遣外衞佐云々、)年中行事御障子末文云、詔書勅書等、覆奏之文並畫可、而詔書給中務省云々、

勅書之事、無所見、仍案之、可布告遐邇之勅書、可給中務歟、(今案、本司覆奏、太政官不覆奏歟、)

天暦十年九月、論奏勅答、無御畫日、此日內記暗書日、被問案內上卿、被申延長例云々、

延長元年、以當帝皇子二人爲源氏、勅書无御畫日、

承平元年、貞信公上表、有勅答、有御畫日、今案、給所司勅書、依令文無御畫日歟、人々勅答有畫日歟、是若依事體有御畫日歟、猶可尋也、以貞信公可准三宮勅書、公卿連署覆奏之、頗違令文、或連署或准令、中務覆奏云々、公卿連署覆奏事、偏就年中行事文所行歟、尙可依令文云々、

〔北山抄六備忘略記〕勅書事

雖行法關詔書、但本省付內侍覆奏、無大納言覆奏之儀、又公式令不見御畫日可等事、○中略 然而古來有御畫日、又准詔書、太政官覆奏、未知其意、或返給本省、令覆奏云々、延長年中、貞信公被奏、依令文可無御畫之由、天暦十一年、依彼例被行之、又見康保三年御記也、

延喜廿一年正月七日御記云、掌侍有子奏中務省覆奏、去廿一日勅書、依令即奏、所給勅書、卽令返給也、

〔北山抄四拾遺雜抄〕御畫事

詔書、勅書、及勅符、並用畫日、詔書、勅書等覆奏文、並畫可、

今案、公式令勅旨式、無御畫日、又覆奏不可畫可、而舊例有之、依此年中行事文歟、是就何所注乎、但大唐六典發日勅如詔書、有御畫、用黃紙、勅旨式如本朝、然本朝不例此式、何依彼六典乎、延喜天暦之間、度々有此難、或不給御畫、○中略 而舊例有之、未知其意、

〔江家次第十八〕勅書　攝政御隨身事

藏人仰上卿、上卿召內記仰之如前、(可作給攝政隨身勅書、) 先奏草、(勅書內覽如前、) 次奏淸書、(黃紙無御畫日、) 次給中務輔如前、件勅書下後、若又可仰左右近衞歟、可尋、若以前且被下宣旨者、不可更被仰之、

〔禁秘御抄下〕勅書

上卿奏之、主上書日、但依事歟、

〔本朝世紀〕久安二年四月十六日己卯、今日有暲子内親王准后勅書事、○中略 内大臣仰云、暲子内親王准后勅書、附陽明門院之例可草進者、長光奉仰、歸被陣、成草持參、内大臣見畢、仰云、可有御畫歟、長光申云、不可候、内大臣仰云、延久之例有御畫事、彼日上卿京極大殿○藤原師實也、如何、長光申云、准后勅書之紀、一品聰子内親王也、彼時無御畫事、延久有之者誤也、

〔宗建卿記〕享保十六年八月廿七日、今日輪王寺宮公寛准后宣下也、勅書之略 後日殿下仰云、無御畫日、凡於勅書者、可無御畫也、然而近年被加御畫、仍豫樂院准后○近衞家熙宣下之時、有沙汰被留御畫者也、

〔三内口決〕一勅書事

本式勅書ト申候ハ、大内記黄紙相調候、奏聞候其時年號月日之間、其當日ヲ勅筆ニテ被遊人候、是ヲ御畫ト申候、是假令右筆ノ書タル狀ニ判ヲ加ル心ニテ候、當時洞家禪師號之勅書、世間流布候間、彼一紙被披見候者、文體分明可知候、又内々ニテ勅書ト申候ハ、勅筆之御直書候、堂上幷諸門跡等之外、聊爾不被染御筆候、或眞名假名、眞名交、或假名計、如此三重有品事候、然處近年武邊之權威恣候條、當時之計策以勅書被仰出事共候、雖似輕朝儀、當座之了簡候、但御文言勾當内侍令旨之分候、然時者縱雖被染勅筆、非御直書之道理候、如此用捨可隨時之宜候哉、

〔類聚三代格八〕勅旨、准令一位以下及百姓雜色人等、皆取戸粟、以爲義倉、是義倉之物、給養窮民、預爲儲備、今取貧戸之物、還給乏家之人、於理不安、自今以後、取中々以上戸之粟、以爲義倉、必給窮乏、不得他用、若官人私犯一斗以下、即日解官、隨贓決罰、

慶雲三年二月十六日○又見續日本紀

〔集古文書〕四近江國平田寺藏

施絁伍佰匹　綿壹仟屯　布壹仟端

稻壹拾萬斤　墾田地壹佰町

以前捧上件物、以花嚴經爲本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必爲轉讀講說、悉令盡竟、遠限日月、窮未來際、敬納彼寺、永爲學分、依此發願、太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道、

復誓、其後代有不道之主、邪賊之臣、若犯若破障而不行者、是人必得破辱十方三世諸佛菩薩一切賢聖之罪、終當落大地獄、無數劫中永無出離、復十方一切諸天梵王帝釋四天大王天龍八部金剛密跡護法護塔大善神王、及普天率土有大威力天神地祇七廟尊靈幷佐命立功大

臣將軍之靈等、共起大願、永滅子孫、
若不犯觸、敬勤行者、世世累福紹隆
子孫、共出塵域、早登覺岸、

天平感寶元年閏五月廿日

勅

奉勅正一位行左大臣兼太宰帥橘宿禰諸兄

右大臣從二位藤原朝臣豐成

大僧都法師行信

〔東大寺正倉院御物〕聖武帝震翰封戶勅書

勅旨

封伍仟戶

右奉入造東大寺料、其造
寺事了之後、壹仟戶者用
修理破壞料、肆仟戶者、用
供養十方三寶料、永年莫
動以爲福田、伏願以此无
盡之財寶、因施无相之如
來、普度无邊之有情、欲證
无餘之極果、

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

藤原皇太后法名

今帝法名隆基

〔東大寺正倉院御物〕孝謙天皇震翰封戸勅書

勅

東大寺封伍仟戸

右平城宮御宇後太上天皇皇帝、皇太后、以去天平勝寶二年二月廿二日、專自參向於東大寺、永用件封入寺家、而造寺了後、種々用事未宜分明、因茲今追議定如左、

營造修理塔寺精舍分壹仟戸

供養三寶并常住僧分貳仟戸

官家修行諸佛事、

分貳仟戸

天平寶字四年七月廿三日

太師從一位藤原惠美朝臣

〔朝野群載内記十二〕勅、明主任臣、資舟檝而濟世、忠臣奉主、同股肱而効功、故無爲昌化、唯委賢宰之元功也、有截傳蹤、是藉良佐之輔導也、朕齡在童稚、位登鴻基、冲襟雖富春秋之花月、叡慮未達政理之皇風、所憑者鹽梅之和味、所仰者棟梁之固基、舅氏右大臣藤原朝臣〇圓融外舅藤原伊尹山岳比其功名、朝野囂其德輝、整百寮而皆欽、總萬機而能辨、時務不滯、庶事有成、既與攝籙於槐庭之職、何齊列位於松樹之封乎、其寄最重、其階宜加、殊增褒崇於前蹤、將施威嚴於當時、可從二位、亦賜内舍人二人、左右近衞各四人、以爲隨身、伏願虎賁保鑾、含曉刃於秋霜、烏號自張、挾上弦於斜月、斯使盛其權衡、以可尊其儀、主者施行、

天祿元年七月十三日中務大丞正六位上藤原朝臣公忠　宣奉行

左大臣從二位藤原朝臣

右大臣從二位藤原朝臣

從二位大納言源朝臣

正三位行中納言源朝臣雅信　自餘不注

勅書如右、請奉

勅、付外施行、謹言、

天祿元年七月十五日

〔本朝文粹勅書二〕充華山法皇外祖母惠子女王封戸年官年爵勅

慶保胤

勅、漢武即位、感兒遇封、誠是睇代之恒規、抑亦前史之令典也、朕外祖母王氏、禮法在心、閫閾垂範、朕當幼日、早別先妣、祖母視朕亦猶子、朕報祖母未如觀、往年厭世歸道、出家爲尼、何以應俗之風、妄防觀念之月、授邑士三百戸幷年爵内外官三分等、聊爲湯沐之資、兼與役從之費、主者施行、

永觀二年十二月十三日

〔本朝世紀〕久安七年仁平元年○正月廿二日甲午、今日政始也、○中略權中納言忠基卿著仗座、召大内記藤原朝臣長光卿、可作進左大臣賜隨身勅書之由、○中略

勅、左大臣藤原朝臣中略○賴、契叶風雲、名亞元凱、四海歸仁、偏仰涸量之器、萬邦褰德、更稱岳降之神、因茲以傳輔導於累葉之家、興旁陶政務於迷枝之賢材、倩思公之忠貞、盍加朕之褒賞、宜分錯仗、將耀星階、仍賜左右近衞府生各一人、近衞各四人、爲隨身兵仗、庶幾早賜中閫之禁兵、永爲東閤之武備、主者施行、

久安七年正月廿二日

急行勅旨

〔令義解七公式〕凡事有急速不合出勅旨、若事緣太政官恐遲緩者、中務先移所司、謂假令有急速應須藏物而出勅旨、由太政官、謂各失事機、若中務書先移大藏出用之類、其正勅後行、謂依勅旨式行也、

緣事勅旨

〔延喜式十二中務〕凡緣徵事類、不得輒稱勅旨、謂勅旨交易、及勅旨田之類、但中務奉勅、具錄勅狀、申送辨官、施行之日、當言勅旨、

〔北山抄六備忘略記〕勅書事

勅旨田、勅旨交易等類、是小事也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應停止勅旨開田幷諸院諸宮及五位以上買取百姓田地舍宅占請閑地事、

右撿案内、頃年勅旨開田遍在諸國、雖占空閑荒廢之地、是奪黎元產業之便也、○中略 左大臣○藤原時平 宣、奉勅、○中略 宜當代以後勅旨開田皆悉停止、令民負作、○中略

延喜二年三月十三日

〔北山抄 八 二月〕七日、奉甲斐勅旨御馬事、　十五日、奉信濃勅旨御馬事、　廿八日、奉上野勅旨御馬事、

〔江家次第 八 八月〕里内駒牽儀 裏書 七日、甲斐勅旨牧、○中略 廿五日、武藏勅旨牧、

別勅

〔令義解 七 公式〕凡彈正、謂、巡察以上、其疏亦同也、別勅令權撿校餘官者、不得仍知彈正事、謂不關預彈正務、事知權撿校事、

〔延喜式 四十一 彈正〕凡臨時別勅、莫承辨史傳宣、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年八月辛亥、先是參議從三位中務卿源朝臣定上表、乞退所職、是日參議中務卿職依請許之、但別勅令食封百戶、

〔三代實錄 四十 陽成〕元慶六年六月三日甲戌、權僧正法印大和尚位遍照起請七條、○中略 式云、凡諸大寺并有封寺、別當三綱、以四年爲秩限、○中略 但僧綱別勅任別當者、不在此限、

口勅

〔令義解 七 公式〕凡諸司受勅、不經中務徑來、及宣口勅者、謂以口勅宣於中務、既云不得承用、即不可更覆奏也、不得承用、若奉口勅索物者、不須經中務、所司承勅即進、謂有物之司、面奉口勅、奉進也、仍附狀奏、謂本司附狀奏聞、即奏聞之後、申太政官知、

〔令集解 三十六 公式〕古記云、問、宣口勅、未知勅經中務省歟不、答、凡口勅雖經中務、不得受用、徑雖宣於所司、所司不可受用、跡云、不得承用、謂縱中務言不合承用、覆奏亦不給也、朱云、及宣口勅者、亦不經中務、宣可云、但雖經中務宣、此口勅者、除下條急事之外事者、不受用耳歟何、問及宣口勅者未知、此亦不得中務宣歟、爲當雖經中務未覆奏、先无文、直以言宣、亦同不承用歟何者、穴云、假令宣口勅來中務、不得承用耳、

〔類聚國史 七十九 政理〕延曆二十二年二月庚子、制、奉行○此間恐脫口字 勅、宜據令條、不更經中務省、

〔延喜式十二監物〕凡奉口勅出大藏物者、本司奏勅、經中務省、省輔一人、監物一人、與本司輔已上一人相共出之、（二省輔不在者、代之）三司共入奉進、即錄物數、三司同署、便附本司申送辨官、其出錢鐵等物者、省錄已上一人、監物一人、與本司錄已上二人、共出奉進、申送於官、亦同上例、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年九月丙戌、勅頒三十二條於巡察使、（○中略）又口勅十三條、具在別勅、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字八年七月丁未、召御史大夫從二位文室眞人淨三、參議仁部卿從四位下藤原惠美朝臣朝獦入於禁內、高野天皇口勅曰、前者卿等勘定而奏、依庚午籍勘者可從、汝是一理也、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月十五日甲午、遣左近衛少將正五位下兼行齋院長官近江權介藤原朝臣遠經、太政大臣（○藤原基經）枇杷第、宣口勅曰、此職太上天皇之所拜授、豈是朕之可自由乎、加之諒闇在時、威儀勿廢、須早視職、攝理如舊、

〔西宮記臨時一〕返給表、

天曆四十廿、參議保平致仕、遣左少將伊尹、口勅、許所請、（菅乃眞道例）

〔叡山大師傳〕大師諱最澄、（○中略）弘仁十三年二月十四日、勅施與傳燈大法師位、此實手詔宸筆、以爲後代珍也、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十二月八日己卯、天皇降手勅、遣參議正四位下行左近衛中將兼伊豫守藤原朝臣基經、階加從三位、任中納言、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月廿日己亥、太政大臣（○藤原基經）重上表、廿一日庚子、遣右近衛少將藤原朝臣清經、就太政大臣枇杷第、齎墨勅、喩旨、（○下略）

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年正月三日壬午、太政大臣（○藤原基經）第一之男時平、於仁壽殿加元服、（○中略）卽日授時平正五位下、其告身天皇親筆書黃紙以賜之、

〔本朝文粹二位記〕無位藤原朝臣時平　　橘贈納言（○廣相）

右可正五位下、

中務伯倉封島、辟彊侍中、杏爾時平、名父之子、功臣之嫡、及此良辰、加汝元服、鳳毛酷似、爵命宜殊、可依前件、主者施行、

仁和二年正月二日

〔西宮記臨時九〕内親王著裳

延長二三廿五、昌子内親王於承香殿西廂著裳、（中略）宸筆叙品、（三品）雖不后腹、依先朝恩云々、以黄紙書叙品、給上卿、令作位記、

〔太平記二十〕宸筆勅書被下義貞事

日ヲ経テ、越後勢已ニ越前ノ河合ニ著ケレバ、義貞ノ勢彌強大ニ成テ、足羽城ヲ拉ガン事、隻手ノ中ニアリト、人皆掌ヲ指思ヒヲナセリ、（中略）既ニ來二十一日（延元三年二月）ニハ、黒丸城ヲ攻ラルベシトテ、（中略）様々ノ攻支度ヲセラレケル處ニ、芳野殿ヨリ勅使ヲ立ラレテ、仰ラレケルハ、義興、顕信、敗軍ノ勞兵ヲ率シテ、八幡山ニ楯籠ル處ニ、洛中ノ逆徒、數ヲ盡シテ是ヲ圍ム、城中巳ニ食乏シテ、兵皆疲ル、然リトイヘドモ、北國ノ上洛近ニアルベシト聞テ、士卒梅酸ノ渇ヲ忍ブ者ナリ、進發若延引セシメバ、官軍ノ没落疑有ベカラズ、天下ノ安危只此一擧ニアリ、早ク其境ノ合戰ヲ閣テ、京都ノ征伐ヲ專ニスベシト仰ラレテ、御宸筆ノ勅書ヲゾ下サレケル、義貞朝臣勅書ヲ拜見シテ、源平兩家ノ武臣、代々大功アリト云共、直ニ宸筆ノ勅書ヲ下サレタル例、イマダ聞ザル所ナリ、是當家超涯ノ面目ナリ、此時命ヲ輕ゼズンバ、正ニ何レノ時ヲカ期スベキトテ、足羽ノ合戰ヲサシ置レテ、先京都ノ進發ヲゾイソガレケル、

義貞自害事

氏家中務丞、尾張守（足利高經）ノ前ニ參テ、重國コソ新田殿ノ御一族カト覺シキ敵ヲ討テ首取テ候、

へ、○中略是ゾ其死人ノ肩ニ懸テ候ツル守リニテ候トテ、血ヲモイマダ洗ハヌ首ニ、土ノツキタル金襴ノ守ヲ懸テゾ出シタリケル、尾張守此首ヲ能々見給ヒテ、○中略猶怪ケレバ、肩ノ守ヲ開テ見給フニ、吉野帝ノ御宸筆ニテ、朝敵征討事、叡慮所向偏在義貞武功、選未求他、殊可運早速之計略者也、ト遊バサレタリ、

〔西宮記臨時一〕返給表○中略

第三度賜勅答、上卿奏下、内記令作勅書、五々上卿之儀、使例、太政大臣攝政表、毎度有勅答、返表之時、初度遣中納言、用親人、遣中使到里第、付家司賜之、納言以下表、或辭状不許、召中使口勅、授勅答、中使入、或主人取函、於便所開見了、中使就倚子、有地敷、主人出庭中舞踏、未畢中使起下跪候階前、其可拜舞、主人仰家司、撤倚子、敷平座、用菅圓座、主人座敷疊、示中使著座、次四位若子姪取祿、白大褂一領、授主人、主人取以授中使、中使下殿、主人立座邊、中使再拜、置祿退出、主人有障者、上臈子姪代拜、取人到來時、可隨便宜有禮、○又見北山抄、傳中要、

○按ズルニ、表トアルハ辭官ノ表ナリ、

〔北山抄九羽林要抄〕返讓臣表事

爲中使、返王卿表及賜勅答者、即到其第、兩度返給、第三度令持勅書、不見賜、途中入裏、立例云々、

〔北山抄六備忘略記〕勅答事是上表者也、其中請臣上書、或辭讓之勅答、

王卿上表之時、可返給者、新任大臣、第一二度以口勅返給、第三度有勅答、攝政關白、毎度給勅答、但最初上表、如新任大臣、天長八年、安和二年例也、或初度有勅答、頭藏人奉勅、召内記下給、令寫案返上、本表留入本函、不給、紙二枚差近衛次將令返給、可有勅答者、上卿奉仰、下給内記、令草勅書、若無成業内記、令儒士辨官作之、第一召内記給、本表一無例、不可給之由見藏保御記、參上奏聞、辨官作時、令持内記若外記、可參上、清書後、又奏聞如常、

〔禁秘御抄下〕勅答

一切勅答、職事奉仰、仰儒者、使依其人、

勅答例

〔柱史抄下臣下〕大臣表事

近代大臣無三讓之表、臨時被獻之時、非執柄之外、無別勅答、往古間有之、近代無之、

〔本朝文粹二勅答〕答貞信公〈○藤原忠平〉辭攝政表勅　後江相公〈○朝綱〉

勅、省重表、具沖挹之懷、公風神深遠、德宇高聳、近取諸身、則四目之左眼、遠喩於國、則萬里之長城、故先皇寄以朕躬、付以朝政、旣親亦賢、物無異望、況公之於朕也、名爲君臣、志知父子、何嫌何疑、以讓以拒、方今酷罸之身、少未有識、嗟聞三讓之高古、猶恨百揆之擁今、上思先帝把臂之託、下知少子抱頸之情、凡厥攝行、一如前詔、縱濕方赤於公口、何下雌黃於朕脣、悉之耳、

延長八年十月二十日

答諸公卿請減封祿表勅　菅三品〈○文時〉

勅、朕以眇身、謬爲元首、遂屬澆世、道離淳源、近曾炎旱、人庶憂勞、崇神靈而無功、轉經王而不驗、是用躬親節儉、心期感通、乃稽舊章、重施新詔、衣彌慮無異綵、食亦嫌有兼珍、所以爲民也、而卿等不稱蒼天之厭德、還美紫泥於流謙、內合議於股肱、外引衆於朱紫、任至情而求析封、違往跡而陳減祿、朕猶怪焉、夫災害之興、必有所應、朕之不逮、蓋自招之、朕獨可對民而謝矣、卿等何刻己而同乎、況大夫等國恩是濫、私儲或乏、出於學館者、風月唯爲家貲、移自孝門者、水菽莫非祿養、來請之旨、曾所不容、猶歟非不悅助公之誠、非不高敦俗之志、然此省微、將止於予一人之身也、

天曆十年八月十九日

〔山槐記〕治承四年十月廿三日壬寅、今日攝政第二度表也、〈○中略〉勅。答。不。可。奏。依。幼。主。也、於宣命所奏也、只可內覽之、

勅答使

〔西宮記臨時一〕太子表

天曆太子初立、獻表、以中。納。言。給勅答云々、

〔北山抄 九〕春宮御上表時勅答使(康保元年例、初度藏人頭右中將兼家、延光、第三度中納言左衞門督師氏、)

〔北山抄 六備忘略記〕勅答事

東宮幷一品內親王上表、請停封戶之時、以納言遣勅答、(延長八年、攝政上表之時、又中納言有此例、但給本表也、)

〔侍中群要 八〕諸使事

勅答使(內親王、攝政、近衞次將、或納言、)

〔北山抄 六備忘略記〕勅答事

僧綱上表之時、以侍從遣給、(或近衞次將、但是給勅書、)

〔中右記〕寬治元年八月廿三日、殿下第三度上表、○中略 勅答使(權中納言實守、)

〔玉蘂〕嘉祿元年七月六日丁卯、今日攝政初度上表也、○中略 不拜勅使事、撿先例之處、子孫爲勅使之時、不拜之、還可然歟、昵公卿爲勅使之時、猶有拜也、○中略 勅答例近衞司、多有拜而已、而天仁家忠卿、保安顯雅卿、文治定能卿、皆無拜、尤追彼例、子細見保安四年法性寺殿御記、

〔三長記〕寬喜元年七月廿六日、關白初度上表也、○中略 入夜大內記遠章持來勅答草、○中略 件勅答事、攝政初度無此儀、以本表返給、關白初度表多有勅答、嘉保保安等是也、今准彼例有之也、

○按ズルニ、西宮記、北山抄ニハ、攝政上表ノ時ハ、每度勅答アリト見ユ、然ルヲ本書ニ攝政初度ノ上表ニハ、勅答ナシト云ヘルハ、蓋シ後世其儀ノ變ゼシモノナルベシ、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年九月癸亥、勅曰、逆臣仲麻呂奏右大臣藤原朝臣豐成不忠、故卽左降、今既知讒詐、復其官位、宜先日所下勅書官符等類、悉皆燒却、

〔續日本紀 三十七桓武〕延曆二年七月乙巳、詔曰、○中略 故太宰帥正二位藤原朝臣魚名、乃祖乃父、世著茂功、或盡忠義而事君、或宣風猷以伏時、言念於此、無忘于懷、今故贈以本官、酬其先功、宜去延曆元年六月十四日所下詔勅官符等類、悉皆燒却焉、

宣命

〔日本紀略醍醐〕延長元年四月廿日甲子、詔、故從二位太宰權帥菅原朝臣（道眞○）本官右大臣、兼贈正二位、宣秦昌泰四年正月廿五日詔書、

〔伊呂波字類抄（疊字世）〕宣命

〔類聚名義抄（六七）〕宣（思緣反ノブ　シタ　オホセコト　ノタマハク　ノタマフ　和セム）

〔令義解（神祇二）〕中臣宣祝詞（謂宣者布也、（中略）言以告神祇、讀祝詞、宣陳百官、故曰宣祝詞、）

〔歷朝詔詞解一〕まづとりすべていふ事ども

世にいはゆる宣命は、すなはち古の詔勅にして、上代の詔勅は、此外なかりしを、萬の事漢さまにならひ給ふ御世々々となりては、詔勅も、漢文のを用ひらるゝこと多くなりて、後の世にいたりては、つひにその漢文なる方を、詔書勅書とはいひて、もとよりの皇國言のをば、分て宣命とぞいひならへる、

〔延喜式（內記十二）〕凡節會及尋常詔旨者、內記預書、（元日賜群臣宴、及七日叙位賜宴、十六日踏歌、九月九日宴會、四月成選位記、同月任郡司等詔旨、內記前一日付內侍奏之、其十一月大嘗會等詔旨、當日進參議已上、正月十四日內侍執奏了、臨時遷授內記、內記當日早旦進大臣、其詞各見儀式、）

〔西宮記（臨時二）〕宣命事

神社、山陵告文、（應和三年三月廿四日、大納言源卿以藏人被仰云、新藥師寺七佛藥師堂、聖武天皇御願也、去年八月、爲大風顚倒、可令修造之狀、可載宣命者、凡書事其趣不見也、）遣山陵、宣命趣被仰了、立太子、幷皇后以上、任大臣節會、任僧綱、任比叡座主、及喪家告文等之類也、上卿奉勅、仰內記令作之、先上卿進御所奏草案文、（例宣命不奏草）次奏正文了、其宣制之儀觸事各異、仍不樣記、

故宇多院法皇、被內裏御賀之日、侍從所饗之時、有彼院宣命之文、其宣制之儀未詳、又以中納言源朝臣是忠、被賜親王號之日、有宣命文、（近代直下中務）

〔職原抄上〕內記（○中略）

大一人〈略〉〇中　儒門之中、堪文筆者任之、草詔勅宣命故也、

〔延喜式十二内記〕凡元日朝賀、依有滯故、延用二三日者、其宣命之辭猶稱朔日、

凡神社山陵宣命、大臣奉勅、命内記作之、内記作了進大臣、大臣給使、

凡宣命文者、皆以黃紙書之、但奉伊勢大神宮文、以縹紙書、賀茂社以紅紙書、

凡賀茂祭日宣命、前一日書、付内侍奏之、

〔延喜式十二中務〕凡内裏應有宣命者、丞執版位、入自承明門左腋、置於尋常版位以北相去一許丈、事訖更入撤、

〔内裏式上〕〈元〉會〈正〇〉

内記授宣命文於大臣、若中納言以上、（他皆效此）外記進見參侍從交名、（他皆效此）大臣進宣命文、及見參侍從交名、内侍轉取奏覽、訖簡堪宣命之參議已上一人、授宣命文、即受復本座、即皇太子起座、次親王以下下殿、殿東階、自左近陣南去三丈、更西折一丈、西面北上、不升殿者、見在殿上者兩三人下殿、則相應俱下、（復昇）（赤闕、他皆效此、）各立堂前、（東西面二丈、他皆效此、）即宣命大夫降自同階、就版位宣制云、天皇（我）詔旨（良万止）宣大命（乎）衆諸聞食（與止）宣、皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、皇太子先再拜、次親王以下再拜、（他皆效此）訖更宣云、今日（波）正月朔日（乃）豐樂聞食（須）日（爾）在、又時（毛）寒（爾）依（氏）御被賜（久止）宣、（若賜御衣者、時寒之上、可加爾毛布流之詞、）皇太子先稱唯、次親王以下俱稱唯、訖皇太子先拜舞、次親王以下復然、（他皆效此）

〔儀式五〕讓國儀

當日、〈略〉〇中　大臣召内記、令作讓位宣命、訖先以草案、就内侍奉覽、（若有可損益者、隨勅處分、筆、）返賜大臣、復本所、令書黃紙、插於書杖、〈略〉〇中　立定大臣喚宣命大夫、授宣命文、受之下殿、置立便所、（侍大臣下殿、就庭中列、）大臣下同階、就庭中列、受宣命大夫進就版、皇太子起座而立、宣命大夫宣制曰、明神（止）大八洲國所知天皇（我）御命（良万止）詔賜大命（乎）、親王等、王等、臣等、百官（乃）人等、天下公民衆聞食（止）宣、親王已下稱唯再拜云々、（臨時）

雜載

宣命、無任二定讀一、大臣以下稱唯、舞訖宣命大夫還二就本列一、

〔政事要略二十六年中行事〕十一月〇新嘗祭事

高橋氏文云、六鴈命七十二年秋八月、受レ病同月薨也、時天皇〇景行聞食而大悲給、准二親王式一而賜レ葬也、於宣命使一遣二藤河別命、武男心命等一宣レ命云、天皇加大御言止良麻宣久、王子六鴈命、不レ思保佐佐外爾卒上太利止聞食之、迷夜晝爾悲愁給比川、大坐須天皇乃御世乃間波、平天爾之相見佐牟止胡奈止波思保須間爾別利由分、然今思食須所波、十一月乃新嘗乃祭毛、膳職乃御膳乃事毛、六鴈命乃勞始成流所奈利、是以六鴈命乃御魂乎波膳職爾伊波比奉天、春秋乃永世乃神財止仕奉志牟、遂子孫等乎波長世遠世乃膳職乃長止毛、上總國乃長止毛、淡路國乃長止毛定天、從二餘氏一波万介太麻波天乎佐女太麻波牟、若之膳臣等乃不レ繼在、朕加王子等乎天、之他氏乃人等乎相交天波亂女志之、和加佐乃國波、六鴈命爾永久子孫等可遠世乃國家止爲止定天授介賜天支、此事波世々爾過利違傳志、此志乎知太比天、吉久膳職乃內毛外止護利守比太利天、災患乃事等毛无久在志太女給太戸止度思食止宣太麻不、天皇乃大御命乎、良麻盧川御魂毛聞太戸止申止宣太麻不、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年五月十日乙丑、公卿就二太政官曹司廳一、任二銓擬郡司一、策文云、天皇我詔旨良麻止宣大命乎衆聞食止與宣、今國々乃郡司任賜人等爾、冠位上賜比治賜波久止宣御命乎諸聞食止與宣、

〇按ズルニ、宣命ノ文體ハ、尙ホ文學部和文篇上古文條ニ在リ、參看スベシ、

〔三代實錄十四淸和〕貞觀九年正月十七日戊午、二品仲野親王薨、〇中略親王能用二奏壽宣命之道一、音儀詞語、足レ爲二模範一、當時王公罕レ識二其儀一、勅二參議一習二其音詞曲折一焉、故致仕左大臣藤原朝臣緒嗣、授二此義於親王一、親王襲持不レ失二師法一焉、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年二月戊寅、天皇御二紫宸殿一、引二見遣唐大使副使等一、參議右近衞大將橘朝臣氏公降レ殿宣レ詔云々、〇詔書、其紙二黃紙一、文略、

〔春記〕永承七年五月廿一日乙丑、督殿〇藤原資平命云、頭辨〇源經長書云、詔書〇非常赦詔勅文今明覽二關白一、命云、

先例多不載故殺謀殺之文、又延喜臨時格已不載此文、全是明鏡也、仍不可載此文者、督殿命云、可載故殺等之事、別當經成卿以源大納言令申殿下云々、太不覺者等也、以不足言而已者、明法博士成道云、不知法心之者致荒涼歟、是忠方所爲云々、

〔徒然草上〕常磐井相國〇藤原實氏出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、北面何がしは、勅書を持ながら下馬し侍りし者なり、加程の者、いかでか君につかふまつり候べきと申されければ、北面をばはなたれにけり、勅書を馬の上ながらさゝげて見せ奉るべし、おるべからずとぞ、

古事類苑

政治部五

上編

宣旨

宣旨ハ、勅旨ヲ傳宣スルノ謂ナリ、詔勅ノ制定リテ後、所司口勅ヲ奉ジテ、其旨ヲ傳宣スルヲ宣旨ト稱シ、以テ詔勅ニ別ツコトヽナレリ、蓋シ其宣旨ト稱スルモノ一ニアラズ、大臣及ビ大中納言宣シテ、外記之ヲ奉ズルアリ、或ハ辨官宣シテ、外記及ビ少納言之ヲ奉ズルアリ、或ハ大臣宣シテ、輔及ビ丞等之ヲ奉ズルアリ、或ハ外記及ビ輔等傳宣シテ、錄之ヲ奉ズルアリ、之ヲ官宣旨ト云フ、又大臣宣シ、辨官之ヲ奉ズルヲ大宣旨ト云ヒ、辨官傳宣シ、史之ヲ奉ジテ、在京諸司ニ下スヲ小宣旨ト云ヒ、辨官宣シ、史生之ヲ奉ジテ、諸國司ニ下スヲ國宣旨ト云フ、又事急速ニ出デヽ、官符ヲ下スコト能ハザレバ、宣旨ヲ以テス、其一タビ宣シテ、永例トスベキヲ永宣旨ト稱シ、預メ任大臣及ビ任大將ノ旨ヲ宣スルヲ兼宣旨ト稱シ、任大臣ノ後、舊ノ如ク大將タルベキ由ヲ宣スルヲ還宣旨ト稱ス、其他除目ニ用キル指宣旨、罪人ニ下ス灸宣旨等アリ、

檢非違使別當宣シ、屬官之ヲ奉ジ、以テ下スヲ別當宣ト云ヒ、或ハ廳宣ト云フ、

內侍口勅ヲ宣傳スルヲ內侍宣ト云フ、往古ハ內侍宣シ、辨官之ヲ奉ズル例ナリシガ、中古以降ハ、藏人之ヲ宣シ、屬官ニ下シテ旨ヲ傳ヘシメ、或ハ檢非違使ヲシテ、之ヲ奉ゼシムルコトトナレリ、後世內侍勅旨ヲ假字ノ消息文ニ記シテ、直ニ之ヲ下ス簡便法起レリ、之ヲ女房奉

書ト稱ス、

藏人口勅ヲ奉ジ、陣ニ於テ上卿ニ下ス、之ヲ口宣ト云フ、上卿之ヲ受ケテ案トシ、別ニ一通ヲ寫シテ外記ニ下ス、外記亦之ヲ案トシ、更ニ一通ヲ寫シテ之ヲ下スナリ、其口宣案ニ消息ヲ付シテ轉下スルヲ消息宣下ト云フ、往古ハ諸司ロヅカラ勅旨ヲ宣傳スルヲ口宣ト云ヒ、又辨官ヨリ大史ニ傳宣シテ、在京諸司ニ下スヲモ口宣ト稱シタリ、

辨官或ハ近衛次將等、綸言ヲ奉ジテ、官人及ビ社寺等ニ傳達スルコトアリ、之ヲ綸旨ト稱ス、

宣旨ハ總テ紙屋紙ニ書ス、其案ハ所司ヲシテ黄紙ニ抄寫シテ、永ク保存セシムルナリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 世疊字〕宣旨

〔名目抄 諸公事書狀〕宣旨(センジ)文ノ中ニモ入ベキ也、　宣下(センゲ)臨時公事ニモ可入歟、

〔名目抄詳注 諸公事書狀〕宣旨(センジ)宣旨ハ宿紙ニトヽノフナリ、吏學指南曰、宣、天子親臨詔命也、故無押字、以黄紙傳、始於唐、聞書曰、旨者立意於內、發言於外曰旨、法書王要抄曰、許爲宣旨院宣之者、可爲遺流、　宣下(センゲ)陣宣下、消息宣下アリ、

〔光臺一覽 二〕宣下 官位職定ニ付陣儀行之、被仰下事、　宣旨 宣下之旨を書付たる者

〔正字通 三〕宣 息緣切、音瑄、爾雅徧也、詩大雅來旬來宣、又小雅謂我宣驕、毛傳示也、又詔書別錄小字本曰宣、唐故事、中書舍人掌詔誥、皆寫兩本、一爲底、一爲宣、注中書可論敕、謂之正宣、唐王起傳、帝嘗以疑事質起、具爲于附使者上之、凡成十卷、號曰寫宣、會要崇文目、有宣底八卷、

〔正字通 五〕旨 凡天子諭告臣民曰詔旨、下承上曰奉旨、

○按ズルニ、中古ノ物語等ニ、せんじがきト見エタルハ、命令ヲ書スルノ謂ニシテ、宣旨ヨリ轉レルモノナルベシ、又女官ノ名ニ、東宮宣旨、中宮宣旨、女院宣旨ノ類アルハ、卽チ後世稱スル所ノ祐筆ノ如キモノナルベシ、

宣旨制

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨

下外記宣旨、除目間下人々給申文(留案、諸中否、)計歷、登省學生事、(奉勅上卿仰外記、外記仰省輔、)賜學問料宣旨事、(上卿仰外記、仰二

〈節會叙位宣旨、四〉諸文書事、親王預年給、令賀奏賀事、節會行幸類、諸事繁多也、不可計盡、上卿所仰行事外記多事行、

下官宣旨〈是永宣旨也〉　辨仰下雜事、一向官所知、下中務宣旨、紹書、勅書、〈上卿〉女官、相撲等除目、〈上卿〉補次侍從宣旨、〈上卿下〉

下内記宣旨　詔勅、宣命、位記、勅答等事、

下式部宣旨、叙位、〈名下〉除目、停任、復任、〈郡司復任、不經奏之間、官以上仰官掌、復任以諸官掌中下、〉儀仗、太宰一分品官除目計歷、〈任〉二合儀色、〈以一分身遷綱〉帶劍、省試問宣旨、

交替使、〈官宣〉文官人、召大歌事、

文官公卿並官遷任事、大臣召時、轉任公卿並文官者、依宣旨任之、

下兵部省宣旨、武官除目、〈復任、停任、〉補諸衞府生、馬醫師、史生宣旨、衞府官人召大歌事、統領事、衞士事、陸奧將軍儀仗事、

下彈正宣旨、〈不奉勅史宣、使官符所行也、〉禁色雜袍勅授、〈以上上卿奉勅左衞門督下也〉　牛車、輦車事、阿著試判事官人、參維摩會官人、修式所官人、交替使、〈以宣、召左衞門府、仰之、〉

下檢非違使宣旨、禁色雜袍、帶劍、〈上卿宣旨〉下著摺衣緋袴事、赦免事、〈上卿召官人仰〉闘亂殺害事、〈或内侍宣、遣所官宣、〉

臨時雜宣旨〈上卿仰官下、又上卿召官人仰之、或藏人所仰之、使遣檢非違使宣旨者、有爲官宣云々、〉

〔西宮記臨時一〕可被知宣旨

外記、官、中務、式部、兵部、彈正、内記、檢非違使、〈以上事、傳宣本所人、事可尋知、〉

所司所々申文有疑之時、上卿奉勅下辨、令勘舊例申文、外記史注、勘記下、勘返上、上卿奏聞畢、賜宣旨、

〔西宮記臨時二〕宣旨事

依内外諸司諸所々諸寺諸人僧俗等申請、所下宣旨、其色目不可計盡、權任計歷、親王源氏事、位祿季

祿等、總給官符宣旨等事、皆悉以下辨官也、

〔侍中群要 二〕下宣旨事

下宣旨之時、陣座上卿不候者、詣里第下奉、於御物忌之時、若藏人小數、差内豎可召遣上卿也、但近代例、件事不見、隨事可左右、有行事上卿事、尋其上可下、〈如賀茂祭等類也、臨時御讀經奏給僧名上卿可下、臨時奉幣・四角祭等、可尋未行上卿歟、但上古必不尋下給、而近代多尋其上卿、可隨時讓也、〉至于雜宣旨、有他上卿不可下、奉一大臣、雖非強事、近代所爲也、有得意上卿之時、密々副書狀奉宣旨、雖不穩便、從古所爲來也、

下宣旨事〈若於宮中上卿相遇者、隨便可下、不擇居處云云、假令上卿臨被候東宮殿上、宣昇可下之、〉

若有可下之宣旨、待上卿參入下之、先以書進上卿、一々結之、〈作法如恒〉刷衣衫、如宣仰之、上聞微音稱唯、卷書了後、更取笏欲揖給之間、不受揖早立了、〈若指人而有可下宣旨之時、件人若當座下﨟、令申事由、而後於陣腋下之、〉但至于内藏寮穀倉院、直召彼寮若院下之者、亦或記云、對策燈燭料問博士事、〈或奉勅宣旨、或上宣云々、〉各奏聞事由、上卿奉宣旨、令外記召仰云々、○中略

下宣旨事

凡申上之書ハ、必申當座上臈、若被問見參之後被下、給當日上臈之間、其上臈罷出之時、給其次人、仍必奏依先所奏之上臈罷出、給次人之由、若又給先所奏上臈之、上臈ハ問奏其由、是爲御目六下付也、

凡大臣ニハ、於陣及殿上之間奉下之、納言亦同、納言ニハ、或於陣腋弓場殿上邊、乍立奉下無憚、

凡爲奉下書參進時、大臣起座被退出、於陣腋捧書候氣色、還著座之後進注奉下、

〔侍中群要 七〕檢非違使帶藏人給宣旨事

緣使事、若給宣旨、從敷政門參入、〈帶劍取笏〉經小庭、其道如諸司、著膝突給宣旨、從本道歸出、大夫尉用座南小橋側道云々、

〔傳宣草 下〕諸宣旨事

下辨官宣旨（常事左辨官宣、内事右辨官宣、）

下中務宣旨（召中務以上於陣座仰之、或給仰詞外者、以外記傳給之、近代凡以外記傳宣、）

下内記宣旨（内記不候之時、以外記傳仰之、）

下彈正宣旨（著左衞門陣座、召忠以上給之、近代以外記傳宣、弼爲使例、）

下檢非違使宣旨（著仗座、召尉以上仰之、或以外記有傳給志以下之例、近代多以外記傳宣、）

〔年中行事秘抄正月〕遲參王卿申賜宣旨事

平相公抄、付藏人令奏之、四位記、令内豎傳參議、

〔禁秘御抄下〕追討宣旨

有僉議、三關警固、諸衞帶弓箭、追討使給宣旨、於陣邊大外記給其人、其人乍立給之歟、又被召御前之時、自弓場南戸參入也、只時不聞之、直職事給宣旨、

〔侍中群要一〕禁色宣旨

（家抄）禁色雜袍宣旨、三人已上書其名下給、三人以下依仰口傳云々、

〔延喜式十八式部〕凡（中略）○年中宣旨、並得色抄、寫熟紙以爲長案、

〔類聚符宣抄六〕右抄符史生石上善恒解申請處分事

請被下宣旨、請度外記長案寫抄所見失官符狀

合

寛平元年欠二卷、（宣旨上、六月諸司、）同四年欠二卷、（宣旨上、二月諸司、）同五年欠一卷、（六月諸司）同八年欠一卷、（諸國下）

延喜元年欠二卷（諸國下、十月諸司、）

已上八卷、自撰式所請度長案内之欠、

延喜五年欠二卷、（正月諸司、二月諸司、）同六年欠二卷、（二月諸司、十一月諸司、）同七年欠一卷、（五月諸司）

已上五卷、在文殿長案內之欠、

右官符宣旨等、其卷欠失、忽無所據求、因之不能寫抄、望請被下宣旨、請度外記長案、將寫抄件年々符案、仍請處分、謹解、

延喜十八年三月十七日　右史生石上善恒

被右大臣〈忠平〇藤原〉宣偁、年々長案、宜隨辨官抄符所請借行者、

同年五月七日　少外記葛井清明奉

〔類聚符宣抄　六〕參議左大辨源朝臣道方傳宣、左大臣〈道長〇藤原〉宣、年中所給宣旨官符、本書草案、及臨時所々行事記文等、全納文殿、須令勘抄、而如聞、近年間、長案類書既以脫漏、勘撿鎮致其煩、公事擁怠、莫不因斯、是則所奉史等早不下、番史生默而去職之所致也、宜加炳誡、自今以後件等文書、慥令辨度、每月晉錄、便讀番案主史生請文、敍爵之時、相加申文、備之進上、立爲恒例者、

長和四年八月一日　左大史但波朝臣奉

宣旨用紙

〔吉部秘訓抄　四〕文治五六八、經房記云、〈中略〇〉紙屋紙事、宣旨必可用宿紙、

〔松竹問答　四〕宣旨ヲ認候紙檀紙ト奉存候、何カ外ニ名目有之樣ニ承候處失念仕候、

綸旨、口宣案已下散狀等認候紙、宿紙ト奉存候、玄ゆくしト唱候、玄ゆくしト申人御座候、不宜ト存候、此紙所持仕候、

宣旨ハ被示候通り檀紙ニ書付候、兩局家ニテ相調候、宿紙被示候通り、玄ゆくしト唱候人有之候、熟ノ字ノ意ノ由ニ候、但、シユクシトスミ候方宜候、

宣旨例

〔左經記〕長元四年六月五日辛巳、右府御消息云、彈正忠大江齊信強姧齋院長官以康朝臣女子之事、於臺可令召問之由、有宣旨、大臣彈正式部官人於里第賜宣旨、是恒例也、然者召里第可仰下歟如何、令申云、召臺官人於里第被仰、更不可有傍難者、

太政官宣旨

〔玉海〕養和元年二月八日乙酉、宣下、以前越中守平朝臣盛俊、宣、爲丹波國諸庄園總下司、件宣旨、上卿時忠卿、職事行隆云々、余密々問云、以宣旨被補庄園下司、有例哉、如何、答云、未曾聞云云者、

〔源平盛衰記三十三〕頼朝征夷將軍宣附康定關東下向事
去程ニ、兵衛佐頼朝上洛不輙トテ、鎌倉ニ居ナガラ征夷大將軍ノ宣旨ヲ被下、略○中兵衛佐被申シハ、頼朝勅勘ヲ蒙トイヘ共、既ニ朝敵ヲ退ク、武勇ノ名譽、依難先祖、忝征夷將軍ノ宣旨ヲ下賜ル、都ニ不能上、私宅ニ乍居宣旨ヲ奉請取事、天命有其恐、若宮社ニテ可奉請取ト被申之間、康定八幡若宮へ參向ス、略○中サテ宣旨ヲバ、誰シテカ可奉請取ト評定アリ、三浦介義澄ト被定、略○中義澄ハ赤威鎧ニ兜ヲバ不著、右ノ膝ヲツキ、左ノ膝ヲ立テ、累葛箱ニ奉入處ノ宣旨袋ヲ請取奉ラント、左右ノ手ナヽグル時、康定使テ三浦介トハ承タ侍ドモ、抑御使ハ誰人ニテ御座ルゾト尋候シカバ、三浦介トハ不名乘シテ、三浦荒次郎義澄ト名乘儘ニ、宣旨奉請取、良久有テ、覽箱ノ蓋ニ、沙金十兩入テ返ス、

〔兼黄記〕寛元四年十月一日丙戌、維摩會文書、右少辨持參殿下、不足米文、即被返下之、辨下、知官、如例、大臣御兼帶之時、不及他上卿御奉行也、又攝政御時不及奏也、奉勅之宣旨攝政御奉行、宣旨書樣聊不審中、文問爲景宿禰處、頗相違、但不書攝政字、只某大臣ト書之、或又加攝政字云々、辨下、知官之時、又書大臣許歟、

〔史館本東大寺正倉院文書七〕紫微内相宣





千手千眼經千卷

新羂索經十部二百八十卷

藥師經百廿卷

料紙六千五百張（表紙五千五百張、麻紙一千張）且

右、奉内相（○藤原仲麻呂）宣、宣仰造東大寺司主典安都雄足、令奉寫者、謹奉宣如件、

天平寶字二年七月四日　　紫微少疏池原君粟守

（別筆）檢主典安都宿禰

案主建部廣足

〔類聚符宣抄 六〕右大臣宣、少納言依例所奏請印官符、理須候御南大殿時即奏、而比來怠慢、至還御北大殿乃奏、遂煩聰覽、甚乖道理、自今以後、仰少納言、莫令更然、

弘仁五年七月廿日　　大外記豐宗（○宗恐原）宿禰廣人奉

〔類聚符宣抄 四〕左大辨秋篠朝臣侍殿上宣、自今以後、奏故親王者、稱身退給之者、

弘仁十年五月八日　　少納言高階眞人淨階奉

〔類聚符宣抄 六〕中納言良岑朝臣宣、自今以後、外記立賜箱之處、置捺印者、

弘仁十二年二月廿二日　　少外記桑原公廣田麿奉

大納言淸原眞人宣、請印位記若七十張已上、自今以後、須三四張捺印、而後令參議踏印者、

天長九年九月十九日　　少外記韓室諸成奉

〔類聚符宣抄 四〕定皇太子服紀事

右右大辨安倍朝臣安仁傳宣、左大臣宣、奉勅、令義解云、天子絶傍期、三后及皇太子不絶傍期、自今而後、宜依此文行之者、

承和十四年三月九日　大外記朝原良道奉

（類聚符宣抄四）從五位上源朝臣叙

右人依闕、今月十五日稱崩使、解文侍從任、而今右大臣宣、奉勅、殊免此度者、

貞觀二年十二月卅日　大輔闕〇式　清原眞人瀧雄奉

（類聚符宣抄九）文章生試

文室朝臣長者　藤原朝臣有風　同興範

土師速風　惟良高望

右大臣宣、件長者等五人、宜令預寄文章生之試、

貞觀八年閏正月十五日　少丞藤原善友奉

（類聚符宣抄九）問者

少外記嶋田良臣仰云、右大臣宣、尾張掾滋野良幹方略之試、宜令大內記都宿禰良香問之、

貞觀十五年五月廿七日　少錄山口岑世奉

少輔正五位下菅原朝臣道眞傳宣、右大臣宣、奉勅、散位三統理平方略試、宜令大丞藤原春海問者、

寛平三年七月廿一日　少錄阿保連扶奉

明法得業生試

右大臣宣、宜以右衞門權少志惟宗公方、爲試明法得業生善道維則之博士者、

延喜廿三年（延長元年）二月廿四日　大外記伴宿禰久永奉

（類聚符宣抄七）權中納言從三位源朝臣當明宣、奉勅、停去延喜廿一年造省料一分代出雲弩師桑原直生宜旨、宜以小田豐雄改任備中國小田郡大領小田建津考解替、

天曆八年十二月廿九日　大丞藤原懷忠奉

國宣旨

〔類聚符宣抄九〕左大臣宣、奉勅、宜令散位正五位下橘朝臣仲遠講日本紀、又仰大學寮、其尙復紀傳明經生等各一人令差進者、

應和四年二月廿五日　大外記兼主税權助備後介御船宿禰傳說奉

式部大輔橘直幹朝臣奉
式部權大輔菅原文時朝臣奉
文章博士藤原朝臣後生依觸座穢、不堪參入、
左衞門權佐菅原朝臣輔正奉
勘解由次官紀朝臣伊輔奉

左京權大夫大江重光朝臣奉
大學博士十市宿禰有象奉
權右少辨大江朝臣齊光奉
大學頭高階眞人成忠奉
式部少丞三善道統奉

〔西宮記臨時一〕宣旨樣略○中

國宣旨尋常事左辨官下宣旨、凶事右辨官下宣旨、

左辨官　下某國

應早令辨進某物事

右某言々々、國宜承知不得闕怠、

年月日　史生尸名

某辨姓朝臣某此外亦有史書下於所々之宣旨、可尋注、

〔西宮記臨時三〕宣旨事略○中

右辨官　下大和國

應早令運供御日次外相撲料氷四駄事

右得主水司解偁、件氷國々申消失之由、僅所遺氷、晉大和國也、望請因准先例、被下宣旨、充用相撲料者、大納言藤原朝臣扶幹宣、宜下知國宰、早令運進者、國宜承知依宣行之、仍須毎日卯剋以前令運進、

用途有期、不得闕怠、

承平七年七月廿三日　右少史十市部宿禰春宗

右少辨大江朝臣朝綱

是謂國宣旨〇又見二九條年中行事一

(西宮記臨時七)祈雨止雨奉幣〇中略

國宣旨二枚從事　一枚下大和國丹生川上社　一枚下山城國貴布禰社、

(類聚符宣抄三)左辨官下大和國

應宛室生山龍穴社讀經請僧等供菜料米十一斛事

白米五斛伍斗　黑米五斛伍斗

權少僧都定澄　率〇率恐僧誤僧十口

右左大臣宣、奉　勅、件定澄爲祈甘雨、差遣彼社、始從今月十八日辰二點、五箇日間、殊致精誠、轉讀仁王般若經、祈請甘雨、其料用所在官物者、仍須期日以前運送彼社、取進其請文、給旨殊重、不得緩怠、官符追下、

長保四年六月十五日　大史小槻宿禰　權中辨源朝臣

(類聚符宣抄八)左辨官下美濃國

使右大史坂本忠國　從肆人

左史生川原文岑　從貳人

右史生大島爲範　從貳人

使部　從各壹人

木工少屬凡河內助連　從貳人

竿師雀部爲利　從貳人
長上日下部重安　從壹人
工長上山有直　從壹人
將領秦吉延
杖取伴安光
右左大臣宣、奉　勅、爲令撿錄彼國國分寺堂塔雜舍等損色、差件等人發遣、如件、國宜承知依宜行之、使者經彼之間、依例供給、路次之國、亦宜給食馬、官符追下、
寛弘元年閏九月十三日　史
右少辨藤原朝臣
〔類聚符宣抄三〕左辨官下大和國
應運送東大寺讀經請僧供料黑米參拾伍斛事
右、爲消除佐異、始從今月十一日午剋七箇日間、於東大寺大佛前、轉讀仁王般若經、請僧供料所宛如件、權大納言藤原朝臣行成宣、奉　勅、宜仰彼國早令運送、其料用所在官物者、國宜承知依宜行之、仍須差綱丁、依數運送、取進請文、事緣攘災不可延怠、官符追下、
萬壽四年八月八日　大史小槻宿禰
中弁源朝臣
〔古文書類纂上辨官下文〕順德天皇承久三年辨官下文京都教王護國寺所藏
左辨官下備中國
應令停止兵粮米責幷以同宛文及守護所自由下知、忝號地頭、不用領家使、押領最勝光院領當國新見庄事、

右夏比以來世間不靜、丁壯苦軍旅、老弱疲轉餫、稱貢籠何之粮道、會費華夷之編戶、已難辨濟、有限之兵粮、猶又責取無故之民稼、因茲諸方之貢賦不全、万人之愁訴無盡、神社佛寺之用途已多闕怠、權門勢家之所領不叶進止、爲上爲下不可不禁、仍宛賦備前備中二箇國於武士、被停止諸國諸庄三升米之譴責、加之稱爲地頭職、不用京下使之者多有之歟、本自帶下文知行顯然之者不及子細、今更號下知證據嫉爲之者、又以勿論、或以守護所之自由始置地頭、或以兵粮米之宛文恣號地頭、如此張行皆可停止、是豈非庄公蕃居之基、士民安堵之計乎、若背鳳銜之旨、猶有狼藉之輩者、可注進夾名、仰武士可被行其罪、權大納言源朝臣通具宣、奉勅布告五畿七道諸國、令知此意矣者、國宜承知依宣行之、

承久三年十月廿九日　　　大史小槻宿禰 花押

中辨藤原朝臣 花押

(東大寺續要錄 寶藏)左辨官下大和國幷東大寺

使右中辨藤原朝臣定嗣　從六人 略○中

右右大臣宣、奉勅、爲令運納東大寺勅封藏寶物、差件等人、發遣如件者、國寺宜承知、使者經彼之間、依例供給、官符追下、

寬元四年九月廿二日　　　少史中原朝臣 在判

右中辨藤原朝臣 在判

(忽那家古文書)宣旨

左辨官下　伊豫國

應令士卒民庶當知行地、不可有依違事、

右大納言藤原朝臣宣房宣、奉勅、兵革之後、士卒民庶未安堵、仍降綸綍、被救牢籠、而萬機事繁、施行有煩、加之諸國之輩、不論遠近、悉以京上、徒妨農業之條、還背撫民之義、自今以後、所被閣此法也、然而除

高時法師黨類以下朝敵與同輩之外、當時知行之地、不可有依違之由、宣仰五畿七道諸國、勿敢違失、但於臨時勅斷者、非此限者、國宜承知依宣行之、

元弘三年七月廿五日　　大史小槻宿禰在判

少辨藤原朝臣

○按ズルニ、此ト同文、能登總持寺文書、信濃市川文書、常陸吉田神社文書、陸前國分寺文書等ニ見ユ、而シテ其日附ハ、總持寺文書ハ二十三日、市川文書ハ此文書ト同ジク二十五日、吉田神社文書、國分寺文書ハ二十六日ニシテ、北畠顯家ノ裏判アレドモ、此文書ニハ萬里小路宣房ノ裏判アリ、

〔西宮記臨時一〕宣旨樣

大宣旨

某物若干下大藏

右今月何日、親王已下祿、彼省所請、

年月日

某大臣宣、宜充之、

某辨姓朝臣某奉宣旨者、史加名字、

〔九條年中行事〕絹二千匹下大藏　綿一萬屯

右今月十九日、新嘗會、親王以下、五位以上祿料、彼省所請如件、

承平六年十一月十六日

右大臣宣、宜充之、

右中辨藤原朝臣在衡奉

綿五仟屯下大藏

右今月十六日、踏歌庭積祿料、依例被省所請如件、

承平五年正月十四日　　左少辨大江朝臣朝綱奉

左大臣宣、宜充之、

是謂大宣旨、○又見西宮記

〔西宮記臨時一〕宣旨樣

小宣旨

左辨官下某司

某事

右某事々々、依例所請如件、宜承知宛行者、

年月日　　左大史姓名

少辨姓朝臣名

〔九條年中行事〕右辨官下左右京

夫卅人臨期十五人

右還今月十八日、始修内裏御修法裝束料、依例掃部寮所請如件、所職承知、以調庸錢厘充、

承平七年九月十八日　　左大史檜前忠明

少辨源朝臣相職

是謂小宣旨、○又見西宮記

〔西宮記臨時七〕祈雨止雨事幣○中略

小宣旨三枚　一枚下木工寮、仍二枚、　一枚下宮内、米五斗、件米不入請奏、　一枚下宮内、諷一枚又見江家次第、○

〔扶桑略紀二十三裏書臨闕〕昌泰元年三月廿八日丁酉、依天下疫、於十五宇寺、令行金剛般若一萬卷、依事

新制宣旨

急不給官符、以宣旨天下皆精進、

〔日本紀略 三十二 後一條〕寛弘八年七月十一日壬午、大納言藤原實資卿參仗座、下警固可付國司之宣旨、須以官符遣之、而未被行政之間、以宣旨遣也、

〔延喜式 四十一 彈正〕凡新有立制宣旨者、告示檢非違使、

〔玉葉〕建暦二年三月廿二日、被下新制宣旨廿ケ條云々、追可尋入、有眞名假名新制、可書入、

〔公家新制四十一箇條〕弘長三年八月十三日　宣旨

一可興行伊勢幣事

仰、宗廟之禮奠者、我朝所崇祗也、於自今以後者、宜被仰諸國司可進納年分所臨時奉幣及度々之時、往年相殘者可究償之、徒閣未濟國、宜懲來年、〇中略

藏人頭大藏卿藤原光國奉

永宣旨

〔西宮記 五月〕賑給〇中略

讃岐百五十石　土佐百石　美作五十石 已上永宣旨、四月内可進、但以庸米可充云々、〇又見江家次第

〔西宮記 三月〕季御讀經

天祿元年九月七日、永宣旨正月内、可進錢六十貫、〇註略　貞元二年二月九日、永宣旨、正月内可進施物絹百疋、

〔北山抄 七 都省雜事〕内印之事〇中略

無主鈴者、以中務錄主殿屬等爲代官、中務錄依有永宣旨、更不申代官云々、

〔江家次第 七 六月〕施米事

天祿元年九月八日、永宣旨、以年料米内、五月十日以前令進納云々、

備前百五十石　尾張五十石　紀伊百石　讃九十八石一斗四升五合　大膳職下

〔江家次第 五二月〕圓宗寺最勝會事
行事成請奏、奏下、(除永宜旨外所被也、○中略)
永宣旨國々(永保二年六月十六日宣旨、每年正月以前進納、)
米三百六十斛
十五石、(和泉)　四十五石、(近江)　卅石、(越前)　五十石、(備中)　五十石、(美作)　卅五石、(備後)　三十石、(安藝)　廿石、(阿波)
十五石、(紀伊)　十五石、(淡路)　五十五石、(讃岐○又見年中行事秘抄、)

〔侍中群要 八〕諸使事
諸寺覓使(除當時御念誦外所因以備、大舍人永宣旨、○中略)
同寺○中略諸司勞使(永宣旨)

〔侍中群要 十〕進物所預執事等事
以名簿下給藏人、藏人仰本所、(以本錄永宣旨)

〔內局柱礎抄 下〕寬治六年十月廿九日、內印、左兵衞尉知信爲代、主鈴不參者、以中務錄主殿島爲代、(至中御使、有永宣旨、不中代官、)

〔玉海〕建久元年九月廿六日丁丑、覲雅參上、仁王會用途闕如了、仍可被延引云々、猶必可果遂之由仰之、然而諸國永宣旨國々都以無濟成功之者、又一切不出來、佛供燈明斷絕、猶以不可叶云々、　二年二月十三日壬辰、棟範來申、大內修造之間事、淸涼殿飛香舍等、所課國之中狀不分明、早奏事之由、可其責之由仰之、件所課全非臨時事、永宣旨之國宛也、全不及豪催促、雖少破可加修理也、猶可仰聞此子細之由仰之、　十二月十一日乙酉、此日、月次祭神今食等也、申刻、貞實來云、月次祭永宣旨召物、諸國對捍事、奏聞之處、僅任法可被譴責之由有御定、早可責之由仰了、

〔東寶記 五僧寶〕安居執事　永宣旨律師事、院宣遣之候、尤可被納當寺寶藏之由、內々候也、恐惶謹言、

弘安八
十一月廿四日　權律師敎守

謹上　修理別當僧都御房

〔東寶記 八僧寶〕一永宣旨權律師

當寺講堂仁王經法賞事、早任被申請、以定額凡僧一臈、永代可爲權律師、守其闕、不經上奏、宜補任者、

院宣如此、仍執達如件、

康永元年六月廿九日　右衞門督判

謹上　東寺長者僧正御房

○按ズルニ、東寺ノ律師ノ永宣旨ナリシハ、蓋シ賞官ノ類ナルベシ、又法令全書ニ、明治二年九月、永宣旨ヲ禁止セラレシコト見エタリ、以テ維新ノ時マデモ、永宣旨ノアリシコトヲ知ルベシ、姑ク附記シテ參考ニ供フ、

〔長樂寺文書 五〕永宣旨

上野國新田庄世良田山長樂寺別院眞言院事

勅願所三者門徒中官位事、爲任持可被令下知之旨被聞食畢、彌專佛法興隆、宜奉祈寶祚長久者、天氣如此、悉之以状、

永正十七年後六月廿三日　右中辨 花押

眞言院住持殿

〔後水尾院當時年中行事 下〕一月のさはりの人、七日の間はまゐりものゝ淸き器に手ふれず、勿論毎朝の御拜に毎度御神事あれば、御所に宿せず、もし御神事なき時は御所にも宿する也、采女已下末のものは、月のさはりの中も淸き器にも手をふれ、毎度御神事にもはゞからず、是は至極衰微の時節よりあまり人なきにより、永宣旨にてゆるされしかば、今に其定なり、

〔公卿補任後一條〕寛仁五年〈○治安元年〉

右大臣　正二位藤實資〈六十五　七月廿五日任、去九日蒙兼宣旨、右大將如元、八月廿五日兼皇太弟傅、〉

〔定家朝臣記〕康平五年四月十一日戊子、左府〈○藤原教通〉獻辭左大將狀給、蒙被奏案內、仍依請申以左中將信宗朝臣被仰之云々、申剋頭辨參內府殿〈○藤原師實〉申有召由、卽令參內、蒙大將軍宣旨、晩頭令退出給、　廿二日己亥、今日有任大將〈師實〉事、

〔公卿補任鳥羽〕永久三年〈乙未〉

權大納言　正二位藤忠通〈四月十六日、任內大臣兼宣旨、四月廿八日任內大臣、四月廿八日任宣命、〉

保安三年〈壬寅〉

右大臣　從一位源雅實〈十二月五日、蒙任太政大臣兼宣旨、同十七日任太政大臣、〉

〔知信朝臣記〕長承四年〈○保延元年〉二月二日、大納言殿〈○藤原賴長〉可令蒙任大將宣旨給、仍大殿〈○賴長父忠實〉渡御東三條殿、午剋許、大納言殿令參給、晩頭大納言令參內給、檳榔御車、前駈六人、〈前甲斐守雅職〉　右京權大夫顯親、少納言雅國等扈從、御共□□參、著右仗座、承宣旨、〈可任大將、可勤仕中日時之由、先例也、〉　八日壬子、大納言殿令任右大將給、

〔台記〕久安六年八月八日辛亥、右大將來曰、今朝法皇手書曰、此月可任大臣、何日可蒙宣旨乎、卽問日於陰陽家、明日既吉、欲奏明日可蒙之由、如何、答可然之由、又示喜悅不可言之由、　九日壬子、巳剋法皇賜右大臣所上之書、〈如御書〉其狀如此、

蒙宣旨事、今日之由、返々恐悅、取諸身之慶、此外不候、依我君恩澤、已極人臣之職、今生不可忘候、抑任太政大臣之日、乃宣命ニハ依官次、叙從一位之由、可被載候、近ハ左大臣度其定候、依朝恩成太政大臣給、不列左大臣之上者、嗚呼第一事候、給消息ニモ出仕テ列左府之上、天子成大納言ハ、悅とこそ思はめとこそ候、

不然者、今日事、兼宣旨之事、暫沙汰不可候歟、以此趣可洩達給、實行頓首々々、謹言、

實行上

報狀如此、〇書陵部藏北山抄裏文書下

〔源平盛衰記　一〕清盛捕化鳥并一族官位昇進附禿童并王莽事

清盛、〇中略長寛三年ニ、權大納言ニ至リ、仁安元年、任內大臣、兼宣旨、并饗祿ナカリケレ共、忠義公〇藤原兼通ノ例トゾ聞エシ、

〔源平盛衰記　三〕殿下乘會事

攝政殿〇藤原基房ハ、十二月〇治承二年九日、兼宣旨ヲ蒙ラセ給テ、十四日ニ、太政大臣ニナラセ給フ、十七日ニハ御悅申アリ、此ハ明年御元服ノ加冠ノ料也、〇又見公卿補任

〔玉海〕治承元年二月七日丁丑、定能朝臣來語云、任大臣一定來十日也、當日可有太政大臣兼宣旨、於內大臣〇平宗盛者、不可有兼宣旨、是父入道相國〇平清盛之例云々者、不可有大饗云々、無兼宣旨被任大臣事未聞、末代之政、只如犬馬之戲、

〔三長記〕建久九年正月八日丙午、今日右大臣〇藤原兼雅著陣、又左大將〇藤原良經兼宣旨、中納言中將可被任給也、

〔明月記〕建久十年六月十八日、今夜右大將〇藤原賴實任大臣召仰云々、一度任大臣兩度兼宣旨始例歟、

〔百練抄　十六後深草〕建長四年十一月三日癸未、任大臣、太政大臣兼平公、內大臣公相公、兼宣旨也、

〔園太曆〕貞和四年十月廿日癸未、今日任太政大臣〇藤原公賢兼宣旨日也、

〔滿濟准后日記〕永享四年六月廿四日、今日戌剋、將軍〇足利義教御著陣始、并大臣兼宣旨、兩條同日之儀、先例兼有其沙汰處、度々例宜云々、仍同日也、

〔北山抄　八大將要抄〕大納言大將任大臣、自節會退出時、依未承還宣旨、隨身等解弓箭、著布衣相隨、

〔玉葉〕文治五年七月十日戊辰、此日右大臣召事、略○中 兩大臣待大將還宣旨、相具隨身拜賀、略○中 凡帶大將之大納言、任大臣日去大將、隨身被著布衣之後、被下大將還宣旨之後、拜賀云々、已流例也、

〔夕拜備急至要抄〕下一任大臣節會略○中

大將仰還宣旨、內大臣卽爲右大將、又大將如元、

〔夕拜備急至要抄〕下一大將還宣旨

仰詞內大臣右近衞大將如舊、

職事出陣、仰仰詞於上卿、上卿仰外記、外記成宣旨於其人許云々、

〔園太曆〕貞和三年九月十九日戊午、今日大納言著障也、大將還宣旨、便可奉行旨、頭辨來觸之間、領狀云々者、

指宣旨

〔西宮記〕二月一分召略○中

指宣旨一束中文書ニ一兩國也、要國字書歟、墨點、兩國之指宣旨、

○按ズルニ、指宣旨トハ、一分ノ官ヲ求ムルニ由リテ、請フ所ノ書ニ、一兩國ノ缺ヲ載セ、其中ニテ、省留ム國ノ傍ニ、墨ヲ以テ點シ、而シテ宣旨ニ、其請フ所ニ從テ命ズルヲ、指宣旨ト云フニ似タリ、蓋シ指宣旨トハ、其人ノ指ス所ニ從フノ義ナルベシ、

勅宣旨

〔沙汰未練書〕一勅宣旨トハ　仰重科輩之宣旨御教書也

〔源平盛衰記〕三十覺明語山門事

爰ニ白井法橋幸明ト云僧アリ、三塔第一ノ惡者、衾ノ宣旨ヲ蒙テ、山門ニハ安堵シ難クテ、當山千僧供ノ料所、愛智郡胡桃庄ニ忍居タリケルガ、大夫房覺明、木曾ニ付テ都へ上ルト聞テ、木曾ノ陣ニ行向テ相尋ケレバ、覺明、白井法橋ヲ請ジ入テ見參ス、略○中 木曾、幸明ヲ召シテ見參シテ宣ケルハ、山門ノ衆徒、平家ノ語ヒヲ得テ、源氏ヲ背ク由、其聞エアルニ依テ、仔細ヲ注シテ案內ヲ通ハシ

畢ヌ、イマダ是非ノ左右ナシ、衆徒ノ事深ク御房ヲ憑申、速ニ登山シテ、當家同心ノ秘計ヲ廻シ給ヘ〇中略ト語フ、幸明思ケルハ、我身當時衾ノ宣旨ヲ蒙レリ、當今平家ノ御外戚ナリ、源氏ニ忠ヲ盡シテ、平家ヲ追落シナバ、自身ノ難モ遁ナント思テ、〇下略

〔玉海〕建久二年四月廿六日癸卯、頃之座主申云、衆徒猶雖ㇾ愁無勅許、所詮件定綱〇佐佐木可ㇾ仰京畿諸國可ㇾ召進其身之由、被ㇾ下宣旨謂衾宣旨云々者、以之可ㇾ爲一分之裁許云々、

〔明月記〕建仁三年十月十一日、午時參上、人々云、昨日被ㇾ討法師、非堂衆學生之中、凶徒梶井法印被ㇾ籠置惡徒等悉被討了、去年於山上射座主御住房、被ㇾ下衾宣旨之輩、其後不ㇾ成憚、横行路中云々、

〔勘仲記〕弘安七年九月七日壬午、自院民部卿奉書到來、東大寺衆徒申、興福寺衆徒燒失手搔鄉、張本深慶被ㇾ召之處、不ㇾ應其召、可ㇾ被ㇾ下衾宣旨、忩可ㇾ宣下之由被ㇾ仰下、卽所ㇾ書口宣也、

弘安七年九月七日　宣旨

近曾興福寺衆徒等、爲ㇾ發凶器於多武峯、令ㇾ宛兵糧於手搔鄉、稱ㇾ對捍此儀、旣燒失彼所、張本深慶淨顯等、雖ㇾ召其身於寺門、早晦其跡於帝都、梟惡之企、狠戾勘棄、皇化陵夷、職而由ㇾ斯、宜ㇾ仰五畿七道諸國等、令ㇾ搦進其身、

藏人治部少輔藤原兼ー奉

勅定之趣口宣案、所ㇾ內覽殿下也、次下上卿花山院中納言了、口宣案一通、戸封〇封恐部不審之間、所ㇾ注遣也、花實相兼珍重之由被ㇾ褒美、頗可ㇾ謂面目、急速之口宣、職事第一之大事歟、

〔元德二年三月日吉社幷叡山行幸記〕正安四年四月の祭禮〇日吉祭に、大津生得の神人と、駕輿丁の輩と喧嘩を引出て、神人神輿を射奉るによりて、その日の祭禮なし、神人の方人は賴存憲猷なりければ、はやく衾の宣旨を下さる、

〔綸旨抄〕衾宣旨事〇中略

乾元元年十二月七日　　宣旨

延暦寺住侶弁豪、張從本社祭禮、奉射大宮輿、爲其罪業、召其身、停止觀稽古之業、既有叡山逐電之聞、早仰五畿七道諸國邊山、宜搦進其身、縦削跡於台嶽之外、護家全命、縦隱形於率土之中、何處容身、鋒因綸綍、敢莫怠慢、

藏人右京權大夫平仲高奉

(元徳二年三月日吉社幷叡山行幸記)延慶四年正月廿四日、武家奏聞申、日吉大宮閉籠因違事云、神輿入洛云因徒張新門主貫首其咎重疊、○中略かゝりければ、閉籠の輩快尊良俊等は、衾の宣旨を下されけり、

綸旨

(伊呂波字類抄利疊字)綸言　綸旨

(名目抄諸公事言說)綸言　綸旨

(名目抄詳注諸公事言說)綸言、禮記緇衣曰、王言如絲、其出如綸、綸綬也、鏡云、綸如宛轉絹、　綸旨史學指南曰、旨者立意於內、發言於外曰旨、

(西宮記臨時二)詔書、勅旨同、是綸言、

(日本後紀延暦十二)延暦廿三年十月甲子、勅、○中略如聞臣民多畜、遊獵無度、故違綸言、深合罪責、

(類聚三代格十二)太政官符

應禁制諸國禁野事

右件野可禁制之狀、代々先帝降綸旨、重疊下知已訖、○中略

貞觀二年十月廿一日

(雲州消息下末)近來側聞、被淫雙六之由、禁制綸旨先後重疊、○下略

(朝野群載傳十七)謹請　歲末御修法事

右依綸旨、從今日率廿口伴侶、可奉修不動法者、○下略

〔三内口決〕一綸旨事

綸旨者職事書出候、勅裁ト號スル此事候、地下堂上、幷諸寺諸社ヘ被成下候事、勿論之儀候、此外守護武士之中、或依勳功之賞、或就所帶、被成勅裁之儀、連綿在之事候、以此准據、近代猥被成下綸旨之沙汰共承及候、一向不打任儀候條、不可然候、

〔江次第記聞〕綸旨之事

御前ニテ、四位五位ノ職事仰ヲ承テ、其旨ヲ書付遣スヲ綸旨ト云也、

〔沙汰未練書〕一綸旨トハ、帝王奉書天氣所也ト可書、○中略

以上綸旨○中略者、無御判也、以時執筆乎、諸定實證也、

〔夜鶴書札抄〕綸旨上處ニハ、依天氣執達如件トモアリ、

〔曾我流書札法式〕一綸旨之事

綸旨、職事書出て、勅裁と號す、此事也、堂上、地下幷諸寺諸社へ被成下之、此外守護武士之中、或依勳功賞、或所帶につき被成勅裁儀、連綿之事候、

〔和簡禮經六〕勅書事○中略

綸旨ノ文章

三院衆徒企山訴、牒状如斯、台嶺及破滅者、朝廷忽ニ退轉之條、所歎思食也、且爲國家安寧、且爲武運長久、早令遣補者、可爲神妙之由、天氣之所候也、仍執達如件、

元龜元年十月廿六日　右中辨經之

織田彈正忠殿

〔勘仲記〕弘安七年六月廿七日癸酉、參院、以民部卿奏條々事、以二條前中納言奏神宮事、以帥卿被仰下云、水天供修中雨降、尤可感仰云々、書御教書遣之、

被綸言偁、水天供事、立〇立恐並誤依月蝕之變畢、蒙知秋稼之成實、修中廿箇天下普潤、法驗之至、叡感尤深之由、宜仰遣者、綸言如此、悉之謹狀、蒙仲頓首謹言、

六月廿七日　治部少輔蒙仲奉

進上　實相院僧正御房

七ケ所如此仰遣了、政所字幷某恐惶字、甚可奇歟、例在所候綸言之上者、勿論歟、末代事可思慮乎、

○按ズルニ、夕拜備急至要抄ニ、阿闍梨ニ下ス綸旨ヲ載ス、其文詞全クコレニ同ジ、以テ當時僧家ニ下ス綸旨ノ體ヲ推知スベシ、

〔太平記七〕新田義貞賜綸旨事

上野國ノ住人新田小太郎義貞ト申ハ、○中略源家嫡流ノ名家ナリ、然レドモ平氏世ヲ取テ、四海皆威ニ服スル折節ナレバ、力ナク關東ノ催促ニ從テ、金剛山ノ搦手ニゾ向ハレケル、○中略如何シテ大塔宮ノ令旨ヲ賜リテ、此素懷ヲ達スベキト、問給ヒケレバ、船田入道畏テ、大塔宮ハ此邊ノ山中ニ忍テ御座候ナレバ、義昌方便ヲ廻シテ、急テ令旨ヲ申出シ候ベシト、事安ゲニ領掌申テ、己ガ役所ヘゾ歸ケル、○中略今ヤ〳〵ト相待處ニ、一日有テ、令旨ヲ捧テ來レリ、開テ是ヲ見ルニ、令旨ニハアラデ、綸旨ノ文章ニ書レタリ、其詞ニ云、

被綸言偁、敷化理萬國者、明君德也、撥亂鎭四海者、武臣節也、頃年之際、高時法師一類、蔑如朝憲、恣振逆威、積惡之至、天誅已顯焉、爰爲休累年之宸襟、將起一擧之義兵、叡感尤深、抽賞何淺、早運關東征罰之策、可致天下静謐之功者、綸旨如此、仍執達如件、

元弘三年二月十一日　左少將

新田小太郎殿

綸旨ノ文章、家ノ眉目ニ備フベキ綸言ナレバ、義貞斜ナラズ悦テ、其翌日ヨリ虚病シテ、急ギ本國ヘゾ下ラレケル、

〔史徵墨寶考證 二編〕後醍醐天皇遺勅〇中略

元弘三年、足利尊氏、丹波篠村ニ義兵ヲ擧ル時、布ヲ截リテ伯耆ノ勅旨ヲ傳ヘ、諸國ノ兵ヲ募ル、其書今ニ阿蘇、島津、立花諸家ニ藏ス、阿蘇家ニテハ髻(モトドリ)ノ綸旨ト稱ス、使者ノ髻中ニ藏シテ遣ル故ニ、布帛ニ書キタリ、〇中略當時艱難ノ狀ヲ想フベシ、〇〇〇〇

〇按ズルニ、髻綸旨ノ事ハ、寺使僞密使條ニ引ク太平記ニモ見エタリ、參看スベシ、

〔建武年間記〕建武元三十六月蝕事

被綸旨偁、月蝕、天雖泛青玻瓈之色、月不掩黑水精之容、三才之和融也、一朝之光華也、法驗所露、叡感無極者、綸旨如此、悉之謹狀、

三月十七日　右少辨藤長

師僧正御房

〔寶簡集 三十〕金剛峯寺申、寺領紀伊國名手庄用水事、奏聞處、國司成敗之趣、被聞食畢、當知行不可有相違之由、可令下知寺家給之旨、天氣所候也、仍言上如件、經清誠恐謹言、

正平十八年十二月十九日　左少辨花押奉

進上　東寺長者僧正〇賴意御房

〔薩戒記〕應永卅三年十月十七日丁丑、依當番祗候內裏、只今以勸解由次官範景被仰下云、圓林院權大僧都不知實名、山法師云々、可致御祈禱由、可遣御教書者、可書禁裏御祈禱之由、有天氣云々、件御敎書書樣如何、予答云、如此事未知給、定是依申請歟、或爲號御祈願寺、或始爲稱坊舍號、諸寺諸山法師等、所申

請也、頓證有勅許事也、而近來如此事充耳、不當事也、於御祈願寺及上人號等之綸旨者、所見及也、如此事未知給、只以仰旨、一筆可被書歟、

可被勤修公家御祈禱之由、被仰下之狀如件、

十月十七日　　左中將隆夏奉

圓林院僧都御房

事之體甚不穩便、隨勅命書遺之、諸山寺之住侶、爭可准名僧禮哉、仍用諸大夫禮了、

（宣胤卿記）永正十四年九月廿日、頭辨來、爲松軒被執申永心都主申紫鼻續松田綸旨事、彼僧豈可被成綸旨事、可爲如何哉、可問愚臣之由被仰下、如何云々、先年定豪法印被下綸旨了、去年冬以其例、被下清法印、先年被下越前慈視院、或有賜御承仕例云々、不可苦之由申了、廿一日、頭辨來、昨日之綸旨書樣問之、如行不可有相違之由、天氣如此、悉之以狀ト書之、此條之由、不可然者、可然也之由ト書付ハ、天氣所候也ト書之也、定儀之由、令入魂了、寛所承心禪室也、

（鳳詔類纂一）來午年弘法大師千年忌、於東寺准御齋會、可被修行法會、報恩謝德事、豫被仰下都鄙門徒等畢、因玆宜衆徒戮力者、可爲神妙之由、天氣所候也、悉之以狀、

天保二年十月十九日　　右中將判

東寺御門徒中

内侍宣

（河海抄一桐壺）ないしせんじうけたまはりつたへて

内侍宣事、藏人奉勅宣下也、見西宮記侍中者内侍也、見前漢書金日磾傳不付太政官付藏人奏進は内奏といふ也、

（官職難儀）内侍宣とは

官位職を宣下するは、外記、史、内記、必それ〴〵につきて知る也、是は職事承て、上卿に下知して、次第の宣下あり、内侍宣と申は、職事上卿へ申さずして、直に藏人方にて出納、小舍人など申者迄次

第に下知し侍ると申候、藏人頭、五位藏人、六位藏人以下、藏人方のぎ、又昇殿を聽る、時は、皆內侍宣也、彼物語に、源氏元服の時、御前への召を內侍宣旨つたへて侍るやらん、昇殿は內侍宣にてあれば、かやうにかき侍るなり、

〔侍中群要 二〕下宣旨事

下宣旨之時者、○中略若事理重者、藏人必稱內侍宣、(內侍宣某奉、傳宣云々、)是依六位藏人直地不可承也、

〔侍中群要 九頭書〕雖事理重、下上卿事、不可稱內侍宣、仰撿非違使之類、稱內侍宣也、

○按ズルニ、上卿ニ下ストハ、藏人頭宣旨ヲ受ケテ、上卿ニ下スヲ云フ、

〔延喜式 十八式部〕凡內侍仰事、若非緣詔勅、勿輙承行、

〔西宮記 臨時三〕院宮事

中宮諸事、擬供御、○中略宣旨內侍宣行雜事、

〔延喜式 十八式部〕凡依內侍宣敍位者、更經大臣乃處授、

〔西宮記 正月中〕補藏人事○註略所別當公卿依召候御前、○註略藏人置紙筆、(入御宮)依仰書之、○中略書了、奏覽上卿退出、下頭若藏人、藏人下出納、令書宣旨、(給宣旨左近陣、頭藏人別奉宣旨、以內侍宣書下、應和二年正月十七日、以延光朝臣□仰遣可補藏人某等、大臣仰頭以內侍宣下、延長六正十九例、)

〔侍中群要 一〕補頭以下事

頭以下於御前定之、以內侍宣書之、

〔禁秘御抄 上〕藏人事○中略

凡補藏人、延喜天曆御記、頭奉勅向大臣亭仰之、又召御前仰之、或又彼時內侍宣也、頭已下五位藏人下知之、小舍人向彼家也、

〔職原抄 下〕藏人者、頭以下非上卿奉勅之宣、所謂內侍宣也、管領職事承仰、召仰出納、令告知其人也、藏

人頭以下六位藏人以上、書位署之時、書加其職名、是古來之例也、

〔侍中群要一〕初補闕事

近代無書御座儀、頭奉口宣仰之、

官位姓名(若藏)

右被別當左大臣(近代或無、內侍宣)宣偁、件人宜爲藏人者、

年月日　頭(若藏人官位姓名事)

〔北山抄六雷鳴記〕陣并殿事

藏人所別當大臣宣、頭藏人直奉者、稱內侍宣、往年仰近衛陣、

〔侍中群要十〕諸司官人代事

以本司奏下給藏人、藏人召本司官人仰之、(稱內侍宣)

〔傳宣草下〕一藏人方宣旨

諸司官人代事(藏人下本司官人、稱內侍宣、而近代被仰官歟、)

〔侍中群要十〕衞府藏人事

依神祇官解、以內侍宣令仰下神祇官、

〔西宮記臨時二〕五衞府事

以內侍宣召仰其人云々、

〔傳宣草下〕一藏人方宣旨

近衛擬近奏事(次將奏之、下官人、稱內侍宣、近代藏人奏之、)　猿女事(以縫殿寮解、內侍宣、或上宣、)

〔新儀式五臨時〕雷鳴陣事

昌泰四年閏六月廿九日、左中將仲平朝臣奉內侍宣奉之、

〔侍中群要七〕雷鳴解陣事

一條太政大臣（〇藤原伊尹）仰云、上卿之役、不論殿上地下、上卿若申障者、以內侍宣行者、（惟正朝臣奉）

〔北山抄十吏途指南〕延長七年八月十六日、內侍宣、有左右近陣、

〔北山抄九裏書〕天慶九年七月同記、（〇中略）今年當代（〇村上）始覽之、相撲已至于天判、可有阿容哉云々、（〇中略）

已三剋、御南殿、奏事例、左右近衞付內侍所、御書聞了返給、或付藏人奏之、

下彼官人、稱內侍宣之件等奏、近代付頭藏人等奏、

〔西宮記臨時二〕下撿非違使宣旨

敘免禁色事　雜袍事　帶劍（上卿宣旨下）事　闘亂事　御鷹飼著摺衣耕褥事　敘免事（上卿召官人仰）諸有

宣旨被仰下事　稱內侍宣

〔傳宣草下〕一下撿非違使宣旨

闘亂殺害事（給宣旨於使廳、急事時稱內侍宣、）

〔類聚符宣抄六〕應勘內案事

內侍宣、奉勅進奏之紙、麁惡者多、自今以後、簡清好者、應宛奏紙、若不改正執奏之、少納言必罪之者、當

番案主、宜知意勘之、不可遺忘、

延曆九年五月十四日

〔叡山大師傳〕臣弘世奉勅口宣、法會所用、不論多少、隨闍梨言皆悉奉送、唯除國內本無耳、是時奉勅所

簡定、諸寺大德道證修圓勤操正能正秀廣圓等、忽被內侍之宣、各竭尊師之法、受金剛之寶戒、登灌頂

之異位矣、八月（〇延曆二十四年）廿七日、內侍宣、（〇中略）方今最澄闍梨、遠涉溟波、受無畏之胎藏、近畏無常、冀此

法之有傳、然石川檉生二禪師者、宿結芳緣、守護朕躬、濫此二賢、欲昌佛法、宜相代朕躬、屈尊捐躬、率弟

子等、尋撿經教、受傳此法、以守護國家、利樂衆生、不可憚世間之誹謗也、

〔元亨釋書 二十三資治表〕延暦二十四年八月、最澄法師貢進天台密教經疏五百卷及道具器物等、帝大悦、向有石川檉生二禪師、帝之所歸信、長於澄也、帝詔二人受澄學、故其詔詞兼還所、謂内侍宣也、

〔觀古雜帖〕

使内舍人從六位下安倍朝臣廣主

右被内侍宣偁、奉太上天皇御靈、宜令奈良七大寺衆僧一七日讀經者、今依宣旨件人差使、令賫名香向東大寺、乞察此状、始自今月廿六日迄于來十月三日、如法行道、至心讀誦、委曲之旨、亦在使口、

延暦廿四年九月廿四日

參議左大辨菅野朝臣眞道

右眞道卿眞蹟、在於東大寺新造舍文庫、

〔類聚符宣抄 六〕太政官史生巳上、執務隨出入自殿階下、

弘仁七年四月十七日、在障例依内侍宣奉件宣

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年十二月丁酉、是日左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣年老病重、出入絶望、疾床引日、既過一紀、〇中略伏望停不當之號、開賢徳之途、然則天道無災、自作中興、非敢逃天澤之榮、名傷之利、内侍宣久、國老止志波獨能美坐世、朝夕政波不申給止阿禮毛國家事波、定申任志賜止、前々毛聞辭中事聞附氏、自今以後、如此久辭中事不得止宣岐、今毛又志賀奈毛思行須、然今進禮留辭書非御意志止

氏、左近衛中將從四位下和氣朝臣眞綱乎差使返給止宣、

〔類聚符宣抄六〕被中納言在原朝臣行平宣偁、奉勅、掌侍春淵朝臣治子、召仰諸司之宣旨、宜准典侍宜、而奉行者、

仁和元年九月八日　　大外記大藏善行奉

〔政事要略六十七〕典侍源朝臣珍子宣、奉勅、今日中宮被奉歌舞於賀茂神社、宜聽倡人等著摺衣者、(實仰藏人左近衛少將源朝臣實賴、)

延長五年四月五日　　左衛門大志惟宗公方奉

〔政事要略六十一糺彈雜事〕典侍從五位□藤原朝臣灌子宣、奉勅、別當中納言兼行右衛門督藤原朝臣朝忠令奏云、日者依有身病、不從公事、仍著鈦等例務、不得令催行者、使政不行、何得經日、須彼病間件雜務佐以下早勤行、若有可定承之事、宜參藏人所令申其由者、(實仰藏人頭右近衛中將源朝臣延光、)

康保二年五月五日　　左衛門尉藤原朝臣邦保奉

〔朝野群載十一廷尉〕左看督長重吉

典侍從四位下藤原朝臣方子宣、奉勅、別當中納言兼左衛門督藤原朝臣實行辭退之間、不從公事、仍在佐以下、暫令勤行雜務、若有可定事之事者、參藏人所、宜令申其由者、實仰藏人頭右中辨藤原朝臣顯賴、

天承元年五月十日　　右衛門少志惟宗成國奉

〔書札式上〕女宣旨使書留、假令ば、

此よし御こゝろへ候て、御ひろうまゐらせ候、かしこ、

みやうじ官

月日　　な乘判

勾當內侍どのへ

禁裏へ奉文傳奏奉行所へ付事勿論也、內々の文は、女宜旨使なれば長橋局まで申入るなり、大臣よりはヶ樣に書也、名乘の事、上字眞名の時は下字假名、上假名の時は下眞名也、女中へは何も此趣なり、長橋より大臣へは、

誰にてもの給へ

〔三内口決〕一女房奉書事

是ハ內侍宣ノ准據候、天子ノ御口ヅカラノ仰ヲ、內侍奉ヲ、其旨ヲ傳ヘラレ候、是ヲ內侍宣ト申候、以此准據諸事被書出候ヲ、女房ノ奉書ト申候、被成候品々ハ大略綸旨同前候、下々へ被仰出候事者、以宛所被書出候、

〔和簡禮經 六〕女房之奉書事 ○中略

或云、內侍宣は宣旨也、

たとへば

ゑやう國寺うんちやうゐんの中せうをん院の事、たいせいたう取きたり候所に、きんねんゆへなくあか松ていしゆうにけいやくのよし候、一かういはれざる事に候まゝ、前々のごとくたいせいたうへ返しつけ候へのよし、赤松に下ちをなされ候へのよし、むろ町どのへ、能々御心へ候て申され候へのよし申せとにて候べく候、

引合一かさねなり

仰

元和 五 廿八

封

あすか井
中納言とのへ

下の紙にかやうに書之、上の紙を如此うちへ折てをくなり、仰の一字をうへ、見せんがため歟、

右正親町院御字靈陽院殿御代也今以所持之

〔薩戒記〕應永卅二年十月九日乙亥、午剋許、自院以女房奉書勅筆也被仰云、政助僧都予弟候妙法院宮、政智僧正弟子也、依妙法院宮御執奏、被補長講堂供僧職、件院宣可下給汝之由、政智僧正所申也、仍被送遣者、

○按ズルニ宸筆ノ御書ナリト雖モ、其文詞女房奉書ニ同ジケレバ、猶ホ女房奉書ト稱セルナラン、

〔親長卿記〕文明十一年四月十八日、參內、明日宣下、昇進人々爲可被定候也、　十九日、早旦被下女房奉書、今夜小折紙可爲如此歟云々、

〔宗建卿記〕元文二年三月廿九日、兩人召御前、仰云、內々從青蓮院被願申、他門紫衣著用、自青門被命、著用可有之事被聞召候、依之今度自院中可賜女房奉書候、兩人令持參關白亭、此趣申達、可入見參之由、卽件奉書案、被爲見下之、仍兩人持參之於關白御第、女房奉書云、

去年よりたび〱御ねがひ候つる他門紫衣の事、これはおぼえさせられず候、所の御寺には、むかしよりのことにて候へば、いまより後も勅許をまたず、著用あるべき事ども、その心えにて、さまざま御申候はぬやうにと覺しめし候よし申被賴候、かしく、

〔官位稽籍雜抄〕今世、勾當內侍專掌奏請宣傳事、或將軍家於內々奏者、倚勾當內侍被奏之、內侍奏之、充其奉書於傳奏人、往反皆假名消息也、謂之女房奉書也、又近世大德寺、妙心寺、曹洞禪宗、或淨土、日蓮等宗、申請紫衣香衣、勅裁之時、其本寺屬於傳奏、申勾當內侍、內侍奏之、請其勅許、以女房奉書充職事、職事辨藏人仰勅許之由、職事書御敎書、副件女房奉書、與其人也、

〔三內口決〕一同女房奉書等御請事

綸旨勅書は、傳奏之方へ內狀如、常可、然候、嚴儀可、被、申入、候者、立文杉原紙料尤候歟、勅答之書札文言以下作法有、之事候、雖、然於當時、者、內々被、載、狀可、相應、候、

女房奉書之御請ハ假名文ニテ、かしこまりてうけ給候ぬ、なに〳〵このよしよく御心え候て御ひろう候へかし、かしく、　●　とも房

禮紙ニテ封ロメノ下ニ書

勾當內侍どのへ　參

〔和簡禮經六〕女房奉書御請事信長 兼者夕庵

信長官位之事、存子細候まゝ、先辭申候て、信忠によだつ可、申候、其上にても朝廷の御事、鶴以馳走いたすべく候、委細三條大なごんへ申含候、此よしひろうあるべく候、かしく、

のぶ長

勾當內侍御つぼねへ

〔名目抄諸公事言說〕口宣

〔名目抄詳注諸公事言說〕口宣公式令曰、凡諸司受、勅、不、經、中務、若事ニ口勅、案、物者、不、得、經、中務、所司承、勅、

〔山田常典記〕口宣案

口宣とは、天子の仰を上卿承りて、職事に下知せらるゝをいふ、職事其由をしるしたる扣書を口宣案といふ、案とはひかへ書の事也、俗にいへば、天子の御口達のひかへ書といふ事也、案なる故に宿紙を用ふ、宿紙はもと藏人所の反古をすきかへしたるもの也、それ故藏人所の外に用ふる事なし、又一名は紙屋紙といふ、紙屋川にてすき直したる由の名なり、紙屋川は西京にあり、北野と平野との間に、今カイ川といひて茶店ある所、此川の舊跡也といふ、反古のすきかへしなる故に、うす墨いろなり、

〔故實拾要二〕口宣

是五位以上ノ官位ヲ授ケラル、時、天子頭辨ヲ召テ有勅命、頭辨口宣ヲ調テ上卿ニ達ス、其文案ヲ口宣ト云ナリ、又口宣ヲ調ル時、羽林名家ノ兩義アリ、名家ニテ調ル時ハ令ノ字ナシ、又羽林名家トモニ、是皆藏人頭ヲ兼タル人、口宣ヲ調ル時ノ事ナリ、藏人頭トハ、名家ニテハ辨ニテ藏人ヲ兼タル人ノ事也、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

口宣

左大史姓尸某仰云、大辨姓朝臣傳宣、某上宣、某言宜令行者、

年月日　　　　　　　　　　某官屬姓某奉

〔侍中群要一〕初補間事

近代無書御座儀、頭奉口宣仰之、

右被別當左大臣〈近代或稱内侍宣〉宣、偁、件人宜爲藏人者、

官位姓名〈若在〉

年月日　頭〈若藏人官位姓名奉〉

〔標注職原抄上本〕被下口宣とは、藏人勅命を受て、直にその人に玉ふなり、但異字抄云、口宣者、藏人奉仰以宿紙書之者也、古法以口宣不直給其人、是藏人書口宣、遣上卿之許、則上卿受之爲案、書下知狀、遣外記之許、則外記受之爲案、宣旨遣其人之法也、蓋後世或直賜口宣者、非本式、とあるに依れば、本式は直賜にはあらざるなり、

○按ズルニ、夕拜備急至要抄、祈雨御祈ノ條ニ、職事書口宣、於陣下上卿、上卿仰辨、ト見エタレバ、當時猶ホ口宣ノ正式ノ存セルコト知ラレタリ、

〔江家次第十七〕當代親王宣旨事

藏人頭書下宣旨（無継紙）

少々時或有口宣例、然而猶以書爲吉歟、長暦小野大臣稱、無先例不下、範國宣旨書於大辨、

先段定罪後、於陣宣下、可然人有詔書、詔書大内記或儒辨草之、上卿奏之、只凡人口宣、上卿宣下也、

（禁秘御抄下）配流

（有職問答二）一口宣案位署事

口宣奉行の事、近衞方辨方、事によりて各別の儀を御沙汰候哉、其品具被仰出度候、（中沙汰候、但又辨方通用ノ事ニテ候、其儀ハ繁雑ニ候、）

（出雲風土記上）鄕陸拾壹、略中

右件鄕字者、依靈龜元年式、改里爲鄕、其鄕名字者、被神龜三年民部省口宣、改之、

（古語拾遺）勝寶九歲、左辨官口宣、自今以後、伊勢大神宮幣帛使、専用中臣、略下

（續日本後紀四仁明）承和二年十二月壬申、借遣唐大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位、副使從五位上小野朝臣篁正四位上、並大臣口宣、不授告身、

（續日本後紀五仁明）承和三年四月丁酉、賜入唐使節刀、大臣口宣曰、天皇我大命良万止、遣唐國使人爾詔大命乎衆聞食止宣布、大使共稱唯、略下

（九條年中行事）左大史尾張宿禰言鑒仰云、大辨平朝臣時望傳宣、右大臣宣、今月十九日新嘗會、親王公卿諸大夫已上祿、宜以太宰府所進絹仟捌佰漆拾匹、但馬國所進佰參拾匹、太宰府綿捌仟漆佰貳拾屯、出雲國貳仟參佰屯等、在下充行、但親王公卿等祿、宜以阿波國所進、在下充行之者、

承平六年閏十一月二日　少錄中臣國雄奉

左大史坂上經行仰偁、大辨平朝臣時望傳宣、右大臣宣、今日踏歌庭積祿綿、以太宰府所進內、在下充行者、

承平五年正月十六日　少錄麻績幹時奉

是謂口宣（○又見西宮記）

〔長秋記〕天永二年七月廿九日、陣定直物、上卿內大臣、頭辨實行、下賀茂住吉社司申文等可定申、又仰云、出羽守光國上洛自任國、留居美濃國所領、可被追下歟、將可替任歟、又明法博士資清、稱病數年不仕、無他道志、廳事擁怠、可被改補歟、然者可被任誰人哉、可定申者、內府（○源雅實）示人々云、於兩社司事者、被下申文、可被書定文、於光國資清事者、口宣也、以詞可定也、先可定何事哉、左大辨申云、雖神事可卜定後可候、先以口宣爲先便宜候歟、他皆同之、

〔玉海〕文治二年六月五日辛亥、午剋許、大外記師尙參上（在門外）申云、（○中略）今日依召參左大臣亭、上官不仕事、幷不奏月奏事等、被仰下了、先例如此之時、以口宣被仰下、而以職事折紙被下知、依不審雖尋申、何事之有哉、唯可下知之由有大臣命、仍從命欲下知云々、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月九日丙寅、及晚右武衞（○藤原能保）使者、到著于陣岡、所持參去七月十九日口宣也、（○中略）

文治五年七月十九日　宣旨

陸奧國住人泰衡等、梟心稟性、雄張邊境、或容隱賊徒、而猥同野心、或對捍詔使、而如忘朝威、結構之至、既涉逆節者歟、加之掠領奧州出羽之兩國、不輸公田之乃貢、恒例之佛神事、納官封家之諸濟物、其勤空忘、其用欲缺、奸謀非一、嚴科難遁、宜仰正二位源朝臣、征伐其身、永斷後濫、

藏人宮內大輔藤原家實奉

〔吉續記〕文永五年正月卅日、前大納言本座事、以口宣下權中納言、

文永五年正月卅日　宣下

前權大納言藤原朝臣爲氏

宜令列本座

〔夕拜備急至要抄 下〕一藏人所御占〇中略

藏人中宮權大進藤原經長奉

口宣書樣

弘安十年五月廿八日　　宣旨

旬日已來霖雨未晴、訪之占推、艮巽方神、依穢氣不淨成其祟云々、鴨稻荷等社、差遣官使、且令注進神事違例、穢氣不淨、且實檢言上稜社等四至內者、

藏人治部少輔藤原——奉

〔集古文書 五宣命〕後龜山院口宣

上卿野宮中納言

天授二年二月七日　　宣旨

右衞門少尉源忠久

宜任美作守

藏人左少辨平雄長奉

〔園太曆〕觀應二年正月廿九日、天下穢氣遍滿之間、諸社祭延引之由、被宣下云々、口宣案尋取讀之、

上卿新大納言

觀應二年正月廿九日　　宣旨、自去十五日、洛中有卅ヶ日穢氣、來月春日、平岡、牽河、園幷韓神、大原野等祭、宜可用穢限以後支干、祈年祭擇日行之、兼又釋奠宜令停止、

藏人頭左大辨兼春宮亮藤原仲房奉

〔集古文書 五宣命〕後花園院口宣

上卿三條大納言

永享四年十二月十五日　　宣旨

權律師長宥

宣叙權少僧都

藏人頭大辨兼長門權守藤原忠長奉

〔在長卿記〕文安元年五月廿九日甲戌、昨日安□□□奉拜、其后詣墳墓、被贈位之口宣案、今朝到來、外史懷中之、於御影前被讀申之、又於墳墓前同被讀申之由也、正文被納、被享、案文之寫之、被置塔頭了、

〔京都下京文書乾〕口宣案

上卿三條大納言

天文三年三月二日　宣旨

法印　嚴助

宣任權僧正

藏人權左少辨藤原惟房

〔太閤記四〕前田又左衛門尉利家末森之城後攻之事

各秀吉公の幸にひかれ、諸臣皆昇殿せられ侍る中にも、利家は大納言に任せられしとき、利家にも口宣の諸大夫召具せらるべきのむねによつて、高畠織部正、中川淸太郎を諸大夫に任じ給ふべきやと、秀吉卿へ望侍りしかば、尹鐸をも欺ばかりの忠義をなしたる利家なれば、其望然るべきむね仰られしなり、人皆いみじかりし任官かなと、うらやまざるはなかりしとかや、

〔改元部類五十四〕寛永廿一年八月廿六日辛巳、有年號勘者宣下事、　實豐仰云、仰知長朝臣、長純朝臣、大内記爲庸朝臣、可令勘年號字、即下口宣狀、

寛永廿一年八月廿六日　宣旨

令文章博士菅原知長朝臣、

大内記菅原爲長朝臣、文章博士菅原長貞朝臣、撰進年號字、

藏人頭右近衞中將藤原實豐奉

〔官職難儀〕假初にも、任官をば、小除目を行ひてなさるゝ也、是をも又臨時除目とも申也、一ヶ月の中にも數度に及べり、去程に、古へは口宣にて任ずる事は、希なる事也、一段と急成時、小除目にも及ざる時の事也、近代は除目を行ふ事、たやすくならざるゆへ、何事も消息宣下とて、口宣にて宣下せらるゝは、無念成事也、消息宣下とは、職事口宣を書て、消息を添て上卿に奉り、上卿外記に、又消息にて宣下するゆへ、消息宣下と申也、件口宣の銘に、口宣案と有を、田舍人などは、案文は如何と不審する事あり、是は正文は外記局にとゞまる間、職事案を寫して、其人に遣す也、又位のは内記局にとゞまり、官方の宣旨は官局に殘り侍る也、○中略 大臣は右に記し申ごとく、節會にてなさるゝ、火急なる時、陣にて節會に及ず、宣下せらるゝ、さへ、遲遲の事にて、聊卒爾至極の義也、結句近比は消息宣下例侍る、無念の事也、

○按ズルニ、消息宣下トハ、口宣案ニ消息ヲ附シテ、轉下スルモノナリ、中古以降別ニ其稱アルヲ以テ、姑ク類ヲ分チテ、此ニ掲載ス、

〔外記宣旨〕宣旨

藏人頭正四位下行左近衞權中將藤原朝臣公蔭

宣、聽著禁色、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

保延二年十二月廿八日　權中納言實光

謹奉　大外記殿

〔傳宣草中〕叙階事

應長元年十二月廿九日　宣旨

藤原朝臣合長

宜叙從五位下

權中納言兼右衛門督藤原判奉

口宣一紙藤原合長叙爵事奉入如件、

十二月廿九日　右衛門督判

大內記局

〔傳宣草下〕僧都以下

正和三年十一月八日　宣旨

大法師顯覺

淨圓

憲寶

已上宜叙法橋

藏人治部大輔藤原光業奉

口宣二紙獻之、早可令下知給之狀如件、

十一月八日　治部大輔光業奉

進上　左衛門督殿

〔傳宣草上〕行幸行事

元亨四年四月十三日　宣旨

按察使源朝臣故障替、以春宮權大夫源朝臣、宜令行行幸賀茂社事、

藏人頭中宮亮藤原藤房奉

口宣一紙

春宮權大夫源朝臣宜令行賀茂行幸事

右宣旨仰詞内々奉入、早可被下知狀如件、

四月十三日　春宮大夫判

大外記局

〔足利家官位記〕鹿苑院殿　義滿　貞治六年十二月七日、任左馬頭、消息宣下、非三陣儀、

〔康富記〕應永卅二年十月八日甲戌、宣旨案一通、消息案一通、注遣之了、○中略

獻上

宣旨

左中辨房長可爲裝束使事

右宣旨可令下知給之狀如件

十月　日　左中將隆夏奉

進上　按察大納言殿

後日、十一月三十日、頭中將被來示曰、使宣旨下按察大納言之處、於口宣書樣者無子細、消息之書樣有不審、近衞大略口宣一紙獻之書之歟、或款狀或社解寺解等奏下之時、用獻上宣旨也、如此之時、不書獻上宣旨歟由、都護所被示之也者、答云、此書樣非予今案、又如此之類、古今例不可勝計、雖然上卿稱不知例者、只口宣一紙獻之可令下知給之由、可被書歟者、但爲散彼不審、令見彼信輔卿抄於頭中將、中將

被借請之爲見按察云々、

〔薩戒記〕應永卅三年五月十六日己酉、左中辨房長四品之事、被宣下之由被仰下、口宣案被注賜者、則書之與之、○中略口宣一枚事、有成不審之輩云々、予有所存之由示之、或說云、二枚之時書枚字、一枚之時可書一紙云々、此事强不被借書一枚之例多シ、

○按ズルニ、口宣一枚以下ハ、口宣案ニ附スル消息ノ文詞ヲ云ヘルナリ、

〔薩戒記〕應永卅三年十二月十二日辛未、左頭中將送使者云、自仙洞可宣下之由、被仰下之折紙如此候、○中略件宣旨書樣、

應永卅三年十二月八日　宣旨

權少僧都房祐

宜轉任權大僧都

權律師覺審

宜任權少僧都

大法師隆精

宜任權律師

權大僧都弘盛

宜叙法印

藏人頭左近―奉

同消息云

口宣一枚獻之、早可令下知給之狀如件、

十二月一日　左中將―

謹上　中院中納言殿

(康富記)寶德元年十二月十八日癸巳、自四條大納言(隆夏)殿、有下知狀、今日歲宣旨本人許、予持參之、留守也、爲知音之間持向之、別儀也、上卿請文卽持參之、入見參申承了、件宣旨去月十九日也、○中略

口　宣旨一枚

右事入如件

十一月十九日　　權大納言(判)

權大外記局

寶德元年十一月十九日　宣旨

從四位上丹波朝臣篤忠

宜任治部卿

藏人右兵衞佐藤原綱光(奉)

從四位上丹波朝臣篤忠

從二位行權大納言藤原朝臣隆夏宣、奉勅、件人宜任治部卿者、

寶德元年十一月十九日　權大外記中原朝臣康富(奉)

二年六月九日辛巳、是日故日野中納言義資卿十七年忌也、依贈位贈官事被申請之、昨日被宣下、○中略陣儀儀不可事行之間、可爲消息宣下之由治定、贈官以口宣宣下例、未無先規、先年故少納言入道(夏賢道人)贈三位之時、非陣儀、消息宣下也、以件例可被准據歟之由、消少納言向頭右大辨亭、被申意見、○中略昨日藏人權右中辨綱光爲奉行、以消息被宣下了、

(宣胤卿記)明應三年二月一日、以書狀申大相國、○中略自然之儀示奉候間、不殘心底之其憚候、口宣書改、(一通少將、一通禁色、一通先任正五位下、)到來、○中略消息口宣三枚ト書之、依入魂也、

口宣一枚

從五位上藤原光任、宜敍正五位下事、

右宣旨奉入、早可令下給之狀如件、

正月卅日　　權大納言宣胤

大内記殿　　在數朝臣也、四品禮如此、

口宣二枚

正五位下藤原房家、宜任左近衞權少將聽著禁色事、

右宣旨、早可被下知之狀如件、

正月卅日　　權大納言判

四位大外記殿局

職事ノ口宣ヲ、禮紙ニ加テ、立紙上下以紙捻結之、不用宿紙事、先日記之、

〔足利家官位記〕法住院殿　義遐又義高後改義澄　明應三年十一月廿四日、敍正五位下、陞階、消息宣下、

〔御湯殿の上の日記〕永祿十年正月五日、あはの武家より、左馬頭の事申さるゝ、勅許せうそく宣下、だい〳〵の例よきとなり、同十一年二月八日、とんだの武家〇足利義榮将軍せん下あり、

〔宣順記〕宿紙承應三年十二月廿六日　宣旨

從五位下藤原高久武士也、藤堂、

宜敍從四位下

藏人左少辨藤原兼茂奉

宿紙承應三年十二月廿六日　宣旨

從四位下藤原高久朝臣

宣任和泉守

藏人左少辨藤原兼茂奉

口宣〈宣紙〉一枚　獻上之　調樣如常

早可其下知給候狀如件

十二月廿六日　左少辨兼茂奉

進上　中御門大納言殿

口宣〈白紙〉一枚　職事　調樣如常、職事口宣一紙ニ加書也

仰詞内々奉入如件

十二月廿六日　權大納言判　裏書判

大内記殿　高辻也、五位也、實父長繼卿次男也、

口宣〈白紙〉一枚　奉入

早可被下知之狀如件

十二月廿六日　權大納言判　裏書判

四位大外記局

(宗建卿記)享保十六年六月六日、輪王寺母堂經子、略〇註　叙從三位、〇消息〇宣〇下略

院宣

院宣トハ太上天皇ノ命ヲ宣スルノ謂ナリ、孝謙上皇及ビ宇多法皇屢、勅ヲ下シ、圓融法皇、源時中ニ官ヲ授ケ、藤原高遠ニ位ヲ授ケ給ヒシコトアリ、後世院宣ノ本ヅク所ナリ、白河天皇、

譲位ノ後、院中ニ於テ萬機ヲ聽斷シ、院宣ヲ以テ天下ニ令ス、是ニ於テ始テ院宣ノ稱起レリ、

名稱

〔伊呂波字類抄疊字〕院宣

〔名目抄院中〕院宣(インゼン)萬機御聽斷時、毎事被下院宣、

〔下學集中態藝〕院宣(インゼン)

院宣式

〔沙汰未練書〕院宣トハ、院法皇奉書也、御氣色所也ト可書也、〇中略

以上〇中略 院宣〇中略 者、無御判也、以時執筆乎、諸定實證也、

〔雜筆要集〕院宣書樣

被院宣偁、八幡宮寺所司權寺主勝覺者、御所中殊召仕者也、依之仰於社家、先日既被補于某庄預所職畢、然下司某與百姓等同意、令譴百姓、而不受勝覺之由有其訴、事若實者、尤以不當也、早如元令返居百姓、可用勝覺之由、〇由一本作旨 可被下知下司某之由、院宣如此、依執達如件、

ム月ム日　散位高階ム奉

八幡宮寺別當僧都御坊政所

〔夜鶴書札抄〕判形之事、院宣以下奉書ニテモ、從我下タル者方ヘハ、官途モ實名モナクテ、只判許スル也、

〔和簡禮經六〕院宣

一被院宣偁、――事者、依院宣執達如件、

年號月日　權中納言國資奉

――殿

院宣例

〔神皇正統記白河〕白河院、〇中略 此御代には、院にて政をきかせ給へば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、されどこれより又ふるきすがたは、一變するにや侍りけん、執柄世をおこな

はれしかど、宣旨官符にてこそ、天下の事は施行せられしに、此御世より院宣、廳の下文をおもくせられしによりて、在位の君又位にそなはり給へるばかりなり、世のすゑになれるすがたなるべきにや、

〔源平盛衰記十九〕文覺入定京上事

文覺佐殿（頼朝）ニ申ケルハ、（中略）疾々平家ヲ打亡シテ後、且ハ父（義朝）ノ菩提ノタメ、且ハ文覺ガ本意ノ如ク、大願ヲ果シ給ヘトイヘバ、（中略）佐殿ハ、勅免ノ院宣ヲ賜リ、平家追討ノ勅命ヲ蒙ラバ、爭カ思立ザルベシ、但御邊モ勅勘ノ身也、イカヾハト宣フ、文覺ハ忍テ上洛スベキトテ、（中略）夜ニ紛テ上洛ス、新都福原ノ假御所ニ參テ、院ノ近習者ニ前兵衛督光能ト云人ハ、文覺ニハ外戚ニ附テユカリ也、其人ノ許ニ行向テ申ケルハ、伊豆國ノ流人兵衛佐頼朝コソ、朝家ノ御歎、天下ノ亂ヲ承テ、院宣ヲ下賜ルナラバ、東八箇國ノ家人催集テ、都ニ上リ平家ヲ亡シ、仙洞ノ被打籠御座逆鱗ヲモ休奉リ、國土ヲモ鎮侍ナント申、（中略）イツトナク御心苦キ御目ヲ御覽ゼンヨリ、院宣ヲ被免下ロカシト奏シ給ヘト語、光能（中略）密ニ御氣色ヲ伺ヒケリ、然ベキ御事ニヤトテ、御免有ケレバ、御光能奉テ院宣ヲ書テ給ニケリ、文覺是ヲ給テ、上下向八箇日ニ伊豆ニ着、（中略）サラバ院宣進ツラントテ、懐ヨリ文袋ヲ取出シ、中ナル院宣ヲ進ル、佐殿ハ手洗嗽シテ、淨衣ニ紐サシナドシテ、是ヲ披見シ給ヒケリ、

平家追討院宣事

早可追討清盛法師幷一類事

右君子不直人者、令民成怨、姦臣在于朝者、賢者不進、彼一類者、皆非忽諸朝家、失神威與佛法、既爲佛神之怨敵、亦爲王法之朝敵、仍仰前右兵衛權佐源頼朝朝臣、宜令追討彼黨、早退怨敵、奉安宸襟矣、依院宣執達如件、

治承四年七月五日　散位光能奉

謹上　前右兵衞權佐殿トゾ書レタル、

〔吾妻鏡十〕建久元年三月九日癸亥、法金剛院領怡土庄事、可令去進地頭給之由、度々被下院宣畢、而奥州征伐之後、可隨仰之趣、先日被獻御請文之間、義經泰衡滅亡畢、然而猶能盛法師難知行歟之由、有御沙汰、被下院宣、今日到來云云、

法金剛院領怡土庄地頭事、子細度々被仰畢、而去々年仰遣之處、奥州事切之後、可隨重仰之由、令申給畢、於今者不及異儀事歟、加之彼院領異他之上、能盛法師相傳所帶、不知行之條、殊令歎申、非無其謂、不便聞食者也、不云是非、令止地頭給者、可宜事歟、依爲難去事、重所仰遣也、於委旨者、被仰含廣元、早可令存知其旨給者、院宣如此、仍執啓如件、

三月一日　權中納言藤

謹上　源二位殿

〔寶簡集二十三〕紀伊國相樂南郷庄者、故前齋院(○高倉皇女功子内親王)領也、而爲訪本願之菩提、被寄附當山蓮花乘院、先了、早任彼寄文狀、院家宜令進退領掌者、

院宣(○後鳥羽)如此、悉之謹狀、

承久三年九月廿日　參議(花押)

高野撿校覺海法橋房

〔文保三年記〕玄上爲盜人被取了、而今年五月六日出現、(○中略)院宣云、

玄上事、傳自巨唐萬里之海、備朝端之靈寶、至于正和五暦、於禁中令紛失、當代之始、不被用神宴、宸襟之底、尤所思食也、而糺彈玄像之所犯、召誡白波之凶徒、雖感聖代之德化、豈非追捕之殊功乎、偏是依叡感之至、宜被行不次之賞、以此趣可令下知官人章房給者、院宣如此、仍執達如件、

五月七日　宣房

讃上　別當殿○中略

此院宣等文章其體多シ云々、章房勘責事、後日有₂其沙汰₁、更非₂忠節₁、可₂被₃召₂返院宣₁之由、天下有₂口遊₁之間、及₂御沙汰₁云々、

詐稱院宣

〔法曹至要抄〕上一作₂詔書₁幷位記事

詐僞律云、詐₂爲詔書₁者遠流、注云、太上天皇宣亦同、○中略

案之、詐₂爲宣旨院宣₁之者、可₂處₁遠流₁、○下略

錦袋

〔源平盛衰記〕二十石橋合戰事

八月○治承四年二十三日戌時ニハ、大場三郎景親大將軍トシテ、三千餘騎ヲ相具シテ、石橋ノ城ニ押寄、○中略北條四郎○時政歩セ出シテ、汝知ラズヤ、我君ハ是清和天皇第六皇子、貞純親王ノ御子六孫王ヨリ七代ノ後胤、八幡殿ノ四代ノ御孫、前右兵衛權佐殿○源頼朝ゾカシ、○中略平家ハ惡行身ニ餘テ、朝威ヲ蔑ニス、是ニ依テ早敵一門ヲ追討シテ、逆鱗ヲ休メ奉ベキ由、太上法皇ノ院宣ヲ下サレタリ、錦ノ袋ニ納テ、御旗ノ頸ニ挾ミ給ヘリ、且ハ拜ミ奉ベシ、

○按ズルニ、平家物語ニハ、院宣をば錦の袋に入て、石橋山の合戰の時も、兵衛佐殿くびにかけられけるトアリ、

〔承久軍物語〕二さてもかやうゐん殿には、くぎやうせんぎありて、くに〳〵へゐんせんつかはさるべきよしにて、あぜちの中納言みつちか卿うけ給はつて、これをかく、そのおもむきは、うきやうのごん大夫よし時てうてきとなれり、はやくついたうせしむべし、とぞきこえし、以上七通なり、とうごくへは、たけだ、をがさはら、ちば、をやま、うつのみや、みうら、かさいにぞ下さるゝ、御つかひには、なれまつと申て、きはめてあしはやきものあり、かれをえ

名稱

らばれてぞくだし給ふ、〇中略せう久三年五月十五日のとりのこくに都を出て、〇中略同十九日のむまのこくに、かまくらちかきかたせといふ所につきけり、

〔太平記 二〕俊基朝臣再關東下向事

日已ニ亭午ニ升バ、輸進ル程トテ、輿ヲ庭前ニ舁止、轅ヲ叩テ警固ノ武士ヲ近付、宿ノ名ヲ問給ニ、菊川ト申也ト答ケレバ、承久合戰時、院宣書タリシ咎ニ依テ、光親卿關東ヘ召下サレシガ、此宿ニテ誅セラレシ時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡　今東海道菊河　宿西岸而終命

ト書タリシ、遠キ昔ノ筆ノ跡、今ハ我身ノ上ニナリ、哀ヤイトヾ增ケン、一首ノ歌ヲ詠テ、宿ノ柱ニゾ書レケル、

古モカヽルタメシヲ菊川ノ同ジ流ニ身ヲヤ沈メン

令旨

令旨トハ皇后、皇太后、太皇太后及ビ皇太子ノ令ヲ傳フルノ謂ナリ、後世女院及ビ親王諸王等ノ命令ヲモ亦令旨ト稱ス、皇太子ノ令旨ヲ出サンニハ、令ヲ受ケタル者、春宮坊ニ宣送ス、坊覆啓訖テ、御畫日ヲ留メテ案トシ、令旨ノ後ニ大夫、亮ノ姓名ヲ署シ、更ニ一通ヲ寫シテ施行ス、三宮ノ令旨ノ式亦此ニ準ズ、蓋シ皇太子監國ノ令旨ハ、最モ重キヲ以テ勅旨ニ準ズ、倘ホ詔勅篇勅書式條ヲ參看スベシ、

〔名目抄 院中〕令旨リヤウジ 同(春宮、四宮)仰也、并女院仰同之、又親王等之所命同歟、先規可勘、只令旨ト稱歟

〔有職問答 四〕一院のをば院宣、后のをば如何申候哉、

宣令旨

一親王幷宮々のをば令旨と申候哉　勿論候

〔唐六典〕一尚書都省　凡上之所以逮下、其制有六、曰制、勅、冊、令、教、符、

天子曰制、曰勅、曰冊、皇太子曰令、○下略

〔沙汰未練書〕令旨トハ、女院宮事書也、何モ女院令旨所ノ御也トモ可書、

以上○中略　令旨者、無御判也、以時執筆乎、請定實證也

〔令義解〕一職員　中宮謂皇后宮、及太皇太后、皇太后宮、亦同中宮也、職

大夫一人掌吐納啓令、謂納啓於上、吐令於下也、

〔令義解〕一東宮職員　春宮坊管監三、署六、

大夫一人掌吐納啓令、

令旨式

〔令義解〕七公式　皇太子令旨式三后亦准此式、

令旨云々

年月日

奉令旨如右、令到奉行、

大夫位姓名

亮位姓名

右受令人、宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留為案、謂准勅旨式、亦更寫印署也、更寫一通施行、謂或送太政官、或下被管諸司、

〔令集解〕三十二公式　穴云、中宮令旨、无令注令到奉行字、餘同之、

○按ズルニ、大寶令ニ勅旨式、○中略　皇太子監國亦准此式、以令代勅ト見エタレバ、皇太子監國ノ時、發スル令旨ノ式ハ、勅旨ニ準ゼラレシナリ、

〔雜筆要集〕令旨書様

皇太子令旨

中宮令旨

奉令旨、偁、來某日御行詣也、彼供奉出車裝束料、上品八丈絹數十疋、期日以前、可被調進之由、所宜如此、依執達如件、

某月某日　　　　姓名某奉

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月庚戌、皇太子〇光仁令旨、如聞道鏡法師、竊挾舐粳之心、爲日久矣、陵土未乾、姦謀發覺、是則神祇所護、社稷攸佑、今顧先聖厚恩、不得依法入刑、故任造下野國藥師寺別當發遣、宜知之、

〔令集解十二田〕大同三年六月六日格云、停止給新任國司等公粮事、右西海道觀察使太宰帥從三位藤原朝臣繩主奏、併准延暦廿五年三月廿四日令旨、〇平城新任國司、初到任所、未給公廨、資用之少、宜各准公廨四分之一借貸正稅者、然則新任之用以此足矣、而依舊給粮、於事重疊、望請當道公粮永從停止者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸道亦宜准此、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年四月辛亥、百官重復上啓曰、夫令者、隨代垂制、臨時定議、依事改張、備於權宜、謹案禮家、先君崩、嗣子位定於初喪、卽位既明、無疑遵行、臣等今月十三日奉啓、率迪舊章、欲申禮典、荼毒之始、不許所請、伏惟殿下〇平城叡情天縱、孝心自然、哀痛摧慕、抑禮不從、綸旨尚稱令、敷奏每曰啓、稽之禮家、當爲違失、求於人事、亦有不遑、〇遑恐惶誤臣等愚情、竊懷不穩、伏望改令稱勅、使易施行、報曰、余小子未忍卽稱帝號、然卿等數有上啓、義在難違、不果竊心、唯增擁威、

〔文德實錄一〕嘉祥三年三月乙巳、公卿奏言、施事天下、猶稱令旨、在於視聽、有所疑、請稟天旨、改令代勅、未之許焉、

○按ズルニ、此ニ擧ゲタル例ハ、皆先帝既ニ崩ジ、皇太子未ダ卽位セザルヲ以テ、猶ホ令旨ヲ以テ、天下ニ令シタルナリ、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應置淨福寺年分度者二人事〇中略

右、得中宮職〇皇太夫人、班子女王解偁、謹奉令旨、如聞解脫煩惱、究竟涅槃、□歸佛理、其道不行、結緣異如、兼修淨業、廉託仁祠、其事無階、是以至心發願、於山城國葛野郡、建立道場、〇中略

寛平八年三月二日

〔扶桑略記 二十五 村上〕天曆三年十二月十三日、中宮職〇村上中宮藤原安子自一七日、至七々日、逆修御諷誦文、作者闕

右事、令旨云、側聞人身無常、似霜露之逢朝日、世間不定、同芭蕉之待秋風、方今百年之期、差過其半、一生之質、漸少其殘、數年之後、枕席乖和、長信月光、迷苦霧而曝暗、永安竹色、受寒露而不鮮、雲母窓間、燐燎之聲不靜、翡翠簾下、同寢之訪頻闕、彼壯齒无病之日、猶起有爲之悲、暮春有恙之時、彌倍無常之歎、爰始自一七日、至于七々日、皇城東西二寺、天台嶺上五堂、遐仰遠近七箇之精舍、結構今後二世之因緣者、宮臣奉下命、所修如件、敬白、已上

皇太后令旨

〔扶桑略記 二十五 村上〕天曆七年八月七日、朱雀院御周闋、奉書寫供養一切經論五千三百七十五卷、目錄之外經廿六卷、奉皇太后宮〇朱雀母后藤原穩子令旨云、上皇昔有奉寫一切經之叡念、蘇子宅中、魚網蘚舊、張芝池畔、松煙非深、尋沖襟於昔日、畢繕寫於今朝、大小乘之並軸、貫春花而爭鮮、權實教之殊文、垂曉露而分點、彼一句半偈之功能、佛猶難算數、況八萬十二之按量、誰敢知淺深、於天台山、敬展講筵、秋山蓮心、所設者百羅漢之綺饌、麗延分味、所助者千比丘之齋飡、已上

女院令旨

〔寶簡集 二十五〕彼美福門院〇鳥羽皇妃藤原得子令旨云、以紀伊國荒河庄、永令寄進金泥一切經藏、每年初商忌長修一切經會、每月初二、一晝夜不斷誦尊勝陀羅尼、奉資鳥羽仙院之菩提、可期三會之曉月之故也、以彼所當充其用途、執行僧覺一山衆徒、殊任讓狀、相共奉行、至僧徵者、云法會、云念誦、無過差、無省略、只隨庄家所出、相議可計申也、抑功德者、在經王書寫之功、金字紺紙之一切經已爲殊勝、靈地者在大師入定之地、老少尊卑之一踏者、必可出離、仍卜此地、安此經堂、有比類哉者、令旨如此、悉之謹狀、

七月〇平治元年十七日　　花押本〇藤原朝隆

奉　金剛峯寺執行俊覺阿闍梨房

附箋

俊覺智蓮坊無量壽院先德也

〔天野山金剛寺文書〕被八條院〇鳥羽皇女暲子、二條准母、令旨偁、河內國金剛寺者、佛法興隆之庭、靈驗揭焉之砌也、往年寄進御祈禱所、久歷勤不退之御願、不被充置施供之間、止住之侶依怙空闕、仍經院奏可免除四至內田畠山野所當官物以下臨時雜事之由、被申成廳下文已畢、以件所當永充用佛聖人供、彌不可怠香花之勤、且如寺家申請、自今以後早可令定補院主三綱供僧六人、權覺頭一人、學衆三十人、夏衆三十人、預二人、承仕三人也、於院主職者、阿觀門跡之中、殊擇器量、宜爲其仁、師資相承、以讓補之、三綱供僧等以下、有其闕之時、院主相計可令補任者、令旨如此悉之謹狀、

建仁二年

阿觀上人房

〔集古文書七令旨〕永福門院〇伏見妃藤原鏱子令旨

美濃國銀庄可令知行給之由、永福門院令旨所候也、仍執達如件、

元弘三年九月六日　　花押

道亞上人御房

〔勘仲記〕正應元年八月十日癸亥、入夜先參院、次參內、今上〇伏見　一宮〇後伏見、中略、有立親王宣下、　廿八日辛巳、參院御方、若宮侍始也、

家司令旨予高檀紙書之、書續持參御所、

權右中辨藤原朝臣雅藤

內藏頭兼播磨守藤原朝臣隆政

右衞門權佐兼中宮大進藤原朝臣俊光

右人々、宜爲別當者、

正慶元年八月廿八日　別當權中納言兼中宮大夫藤原朝臣公衡奉

職事令旨

右近衞權中將兼皇后宮權亮藤原朝臣實永

右少辨藤原朝臣兼□

左近衞權少將源朝臣具俊

右件等人、宜爲藏人所別當者、

正慶元年八月廿八日　別當權中納言兼中宮大夫藤原朝臣奉

〔太平記〕六赤松入道圓心賜大塔宮令旨事

其比〇元弘二年八月、播磨國住人〇中略赤松次郎入道圓心トテ、弓矢取テ无雙ノ勇士アリ、〇中略此二三年大塔宮〇護良親王ニ附纏ヒ奉リテ、吉野十津河ノ艱難ヲ經ケル、圓心ガ子息律師則祐、令旨ヲ捧テ來レリ、披見スルニ、不日ニ義兵ヲ擧、軍勢ヲ率シ、朝敵ヲ誅罰セシムベシ、其功アルニ於テハ、恩賞宜シク請ニ依ベキノ由載ラレ、委細ノ事書十七ケ條ノ恩裁ヲ添ラレタリ、條々何レモ家ノ面目、世ノ所望スル事ナレバ、圓心斜ナラズ悅テ、先當國佐用莊苔繩山ニ城ヲ構テ、與力ノ輩ヲ相招ク、

〔忽那家古文書〕伊豆國在廳時政子孫高時法師、奉蔑如朝家之間、所被加征伐也、率軍勢、可被馳參戰場者、依大塔二品親王〇護良令旨、狀如件、

元弘三年四月一日　左少將隆貞

伊豫國忽那孫九郎館

〔結城古文書〕早令靜謐東國、可被擧義兵之由、所被下綸言也、相催坂東諸國軍勢、忩速可令追討尊

氏直義以下黨類給者、依宮〇義良親王令旨、上啓如件、

延元三年九月三日　右中辨光守奉

謹上　陸奧三位中將殿〇北畠顯家

〔集古文書七令旨〕牛尾茂左衛門藏

參御方、可致軍忠、有其功者、可致抽賞者、常陸親王〇宗良令旨如此、悉之以狀、

正平六年七月十八日　右兵衛佐判

中澤次郎館

法親王令旨

〔承久軍物語六〕法印〇覺寬あはれに思ひて、車のしりへにのり給へといはれけれども、のらずしてすでに六はらにゆき付ぬ、法印はせいたか丸をさきに立て、むさしのかみにたいめんし、令旨〇後鳥羽皇子道助法親王のおもむき、つぶさに申されければ、やす時このよしうけ給はり、ちごのかほをつくづくとまもりて、まことにうつくしきちごにて侍れば、君のふびんにおぼしめさるゝも御ことはりに候へば、しばらくあづけ奉るべきよし申されけり、

内親王令旨

〔寶簡集二十三〕南部御庄、御萬歲之後、可被付蓮花乘院事、全無異儀、然者下司職、其時可爲進止御山也、且恐靈御意趣候歟、而只今還被進覽證文之條、物忩爲沙汰之由、依令旨〇高倉皇女功子内親王執達如件、

十一月五日〇建久三年　源宗仲

逐申

油器　水瓶下遣之

香呂　佛器事、先日不令申、然者此御使不被付也、逐猶可有御沙汰候也、庄事沙汰者、可相尋候也、御年貢庄猶以之外候歟、

諸王令旨

〔吾妻鏡一〕治承四年四月九日辛卯、入道源三位賴政卿、可討滅平相國禪門淸盛由、日者有用意事、然而

以私計略、太依難遂宿意、今日入夜、相具子息伊豆守仲綱等、潜參于一院〈○後白河〉第二宮〈○以仁王〉之三條高倉御所、催前右兵衛佐頼朝以下源氏等、討彼氏族、可令執天下給之由申行之、仍仰散位宗信、被下令旨、而陸奥十郎義盛〈廷尉爲義末子〉折節在京之間、帶此令旨、向東國、先相觸前兵衛佐之後、可傳其外源氏等之趣、所被仰含也、廿七日壬申、高倉宮令旨、今日到著于前武衛將軍伊豆國北條館、八條院藏人行家〈○行家初名義盛〉所持來也、武衛裝水干、先奉遙拜男山方、謹令披閲之給、侍中者、爲相觸甲斐信濃源氏等、則下向彼國、〈○中略〉當于此時、令旨到來、仍擧義兵、寔惟天與取、時至行謂歟、爰〈○中略〉北條四郎時政主者、當國豪傑也、以武衛爲聟君、專顯無二忠節、因茲最前招彼主、令披令旨給、

下、東海東山北陸三道諸國源氏并群兵等所、
　應早追討清盛法師并從類叛逆輩事
右前伊豆守正五位下行源朝臣仲綱宣、奉最勝王勅偁、清盛法師并宗盛等、以威勢起凶徒、亡國家、惱亂百官萬民、虜領五畿七道、幽閉皇院、流罪公臣、斷命流身、沈淵込樓、盜財領國、奪官授職、無功許賞、非罪配過、或召鈞於諸寺之高僧、禁獄修學之僧徒、或給下於叡岳絹米、相具謀叛粮米、斷百王之跡、切一人之頭、違逆帝皇、破滅佛法、絶古代者也、于時天地悉悲、臣民皆愁、仍吾爲一院〈○後白河〉第二皇子、尋天武皇帝舊儀、追討王位推取之輩、訪上宮太子古跡、打亡佛法破滅之類矣、唯非憑人力之構、偏所仰天道之扶也、因之如有帝王三寶神明之冥感、何忽無四岳合力之志、然則源家之人、藤氏之人、兼三道諸國之間、堪勇士者、同令與力追討、若於不同心者、准清盛法師從類、可行死流追禁之罪過、若於有勝功者、先預諸國之使、兼御卽位之後、必隨思可賜勸賞也、諸國宜承知、依宣行之、

　治承四年四月九日　　前伊豆守正五位下源朝臣仲綱

〔源平盛衰記十三〕高倉宮廻宣附源氏汰事
治承四年卯月九日、夜深人定テ後、源三位入道頼政潜ニ彼宮〈○以仁王〉ノ御所ニ參テ申ケルハ、君ハ天照大神四十八代ノ御苗裔、太上法皇〈○後白河〉第二御子ニテ渡ラセ給ヘバ、太子ニモ立、帝位ニモ即セ

給ベキニ、親王ノ宣旨ヲダニモ御許ナクテ、既ニ御年三十ニナラセ給ヌ、御心憂ト思召候ハズヤ、平家ハ榮花身ニ餘リ、惡行年久シク成テ、運命末ニ臨メリ、子孫相續シテ朝ニ仕ヘン事、難ク見エ侍リ、當時如何ナル御計モナクバ、イツヲカ期セサセ給ベキ、愼ミ過サセ給トモ、終ニハ安穩ニ果サセ給ハン事モ有ガタシ、○中略急令旨ヲ下サレ、早ク源氏等ヲ召ルベシ、入道七十有餘、年闌侍レドモ、子息家人數多候ヘバ、一方ノ御固ト憑思召ルベシ、○中略ト細々ト申上ケリ、○中略天照大神ノ御計ニテモヤ有ランナド、不敵ニ思召立テ、國々ノ宗徒ノ源氏等ニ、廻宣ノ令旨ヲゾ下サレケル、○中略伊豆國流人前兵衞佐源頼朝ハ、源家ノ嫡々ナレバトテ、別令旨ヲ下サル、其狀云、

下　東國源氏幷官兵等所

應早且任遍宣狀、且以前右兵衞佐源頼朝、爲大將軍、令參洛事

右宣旨意趣者、我爲百王孫、雖期寶祚、猶依聖運遲々、未至即位、而淸盛入道以一旦冥怪、令治天下、誇非分權威、欲絕皇法之處、依有佛神之守護、不遂梟敵之姦望、未及王法失亡之條明矣、謹仰嚴旨、可責淸盛也、速致同心、勵微力、果其意趣、必進帝位者、朝恩爭可空哉、然者依淸盛武勢下知、既致都洛空役、我與皇恩以東北武勢、何不治天下哉、旁各可仰景迹也、若於背宣命者、早可致伐責之狀如件、以宣、

治承四年四月九日　　　　　前右少史小槻宿禰

トゾ下サレケル、

行家使節事

抑令旨ノ御使、誰カ勤ベキト仰ケレバ、三位入道申ケルハ、外人ハ憚有ベシ、新宮十郎義盛、折節在京ニ侍レバ、召レテ使節ヲ仰含ラルベキカト、然ベシトテ、義盛ヲ召、事ノ次第委下知セラレケレバ、十郎畏テ、○中略速ニ東國ニ罷下テ、同姓ノ源氏、年來ノ家人ヲ催上候ベシトテ、御前ヲ立處ニ、三位入道申ケルハ、令旨ノ御使ヲ勤候ハンニハ、無官ニテハ其恐有ベシト申セバ、然ベシトテ、當座

ニ藏人ニナサレケリ、十郎藏人ハ、義盛ヲ改名シテ、行家ト名乘、九日令旨ヲ給テ、十日夜半ニ、熊ノ笈ヲ肩ニカケ、柿ノ衣ニ裝束シテ、熊野ニテ見習タレバ、山伏ノ學ヲシテ、海道ニ係リテ下ケリ、先近江國ニハ、山本、柏木、錦織ニ角ト知セテ、令旨ノ案ヲ書與テ、美濃尾張ヘ越、山田、河邊、泉、浦野、葦敷、關田、八島ニ觸廻リ、又案書ヲ與テ信濃ヘ越、岡田、平賀、木曾次郎ニ相觸、又案書ヲ與テ、甲斐ヘ越、武田、小笠原、逸見、一條、板垣、安田、伊澤ニ相觸テ、案書ヲ與テ、伊豆國北條ニ打越テ、右兵衞佐殿ニ角ト云、佐殿ハ便宜被見ノ後宣ケルハ、平家追討ノ令旨ヲ下サル、事、當家ノ面目ニ侍、尤一門同心シテ、家人ヲ相催シ、上洛仕ベシ、但賴朝別心ヲ存ゼズトイヘドモ、當時勅勘ノ者ニ侍、身ニ當テ、令旨ヲ賜ラズバ、軍兵引率、其憚アリト宣ヘバ、行家ハ其事覺テ御沙汰アリキ、別シタル令旨トテ、笈ノ中ヨリ取出テ、是ヲ渡ス、佐殿ハ手洗口漱テ、是ヲ請取、領許ニ入テゾオハシケル、

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月廿三日癸卯、今日寅剋、武衞〔○源賴朝、中略〕陣于相模國石橋山給、此間以件令旨被付御旗横上、中四郎惟重持之、

〔兵範記〕仁平二年八月十七日己卯、今夕權辨光房朝臣依殿下〔○藤原忠通〕仰、書下三位少將家司職事、十八日庚辰、今日下家司盛方、持來少將殿〔○忠通長子基實、時從三位左少將〕家司令旨、其書樣、

散位正五位下平朝臣信範

被仰云、件人宜爲三位少將方政所別當者、

仁平二年八月十七日　　別當正四位下行權右中辨藤原朝臣光房

令旨一見了、返給、次與祿一領了、

古事類苑

政治部六

上編

符

符ハ古ヨリ音ニテ、フト呼ベリ、上官衙ヨリ下官衙ニ下ス文書ノ名ナリ、文武天皇ノ令ヲ定ムルニ至リテ、始テ符ノ制アリ、而シテ太政官ヨリ下スヲ官符ト云ヒ、八省ヨリ下スヲ省符ト云ヒ、彈正臺ヨリ下スヲ臺符ト云ヒ、其他京職及ビ國司ヨリ下スヲ職符國符ト稱シテ以テ之ヲ別ツ、其官符ヲ下サンニハ、太政官先ヅ辨官ニ命ジテ、符ヲ作ラシメ、官符ノ後ニ、辨史ノ位姓名ヲ署シ、年月日ノ下ニ、使人ノ位姓名ヲ錄シ、又其使ニ給フ驛鈴傳符ノ剋數ヲ注記ス、其諸國ニ下ス大事ノ官符ニハ、內印ヲ捺シ、在京ノ諸司ニ下ス官符ニハ、多ク外印ヲ捺シ、其本案ニハ、並ニ外印ヲ踏ス、其符ヲ出スニハ、使人ニ付シテ送達セシメ、其返抄ハ、歸京ノ日之ヲ太政官ニ送ル、若シ事急速ヲ要スレバ、之ヲ驛傳ニ付シ、又天下ニ官符ヲ頒下スルニハ、道每ニ各〻一通ヲ下シテ遞送セシメ、其他尋常ノ官符ハ、多ク在京使ノ歸國ノ便ニ附シ、或ハ雜掌等ヲ差遣シテ之ヲ送ラシメ、又諸國ニ發遣スル大祓使、及ビ伊勢造宮使、宇佐奉幣使等ノ事ニ由リテ、官符ヲ下スガ如キハ、卽チ其使ニ附シテ送達セシム、其遞送ノ官符ハ、辨官之ヲ京職ニ送リテ、發遣セシムルナリ、並ニ國司之ヲ受ケテ後、事百姓ニ關スルアレバ、之ヲ郡司ニ下ス、郡司乃チ里長等ヲシテ部內ヲ巡歷シテ、細カニ符旨ヲ百姓ニ陳喩セシム、

八省及ビ彈正臺ヨリ符ヲ出サンニハ、官符ノ旨ヲ受ケテ後、各〻符ヲ作ル、其符式、一ニ官符ニ

準ズ、卽チ其案ヲ副ヘテ、之ヲ太政官ニ送ル、官卽チ本案ト出符トヲ檢勾シ畢テ、出符ニハ內印ヲ捺シ、本案ニハ外印ヲ捺シ、而シテ其案ハ本司ニ返還シ、出符ハ辨官ニ留メテ、便使ニ付シテ送下セシム、中古以降ハ、其本案ニハ省印ヲ捺スルコトヽナリ、又省符ヲ出スコト頗ル多クシテ、繁劇ニ堪ヘザルヲ以テ、大事ヲ除クノ外ハ、省直ニ官符ヲ奉行シテ、諸司ニ下ス簡便法起レリ、又京職、國司、伊勢大神宮司、造東大寺司、及ビ其政所等、亦符ヲ下スコトアルハ、官省ノ符旨ヲ轉受シテ、施行スルガ故ナリ、

外官任國ニ赴ク時、其國府ニ下ス官符ヲ籤符ト云ヒ、又一通ノ符ニ、數人ノ事ヲ連載スルヲ連符ト云ヒ、又事機密ヲ要スル時、封緘シテ下ス符ヲ封符ト云フ、

出符誤失アレバ、所司ヲシテ改正シテ後、之ヲ下ナシメ、出符法ニ違ヒ、及ビ符ヲ詐爲スレバ、罪ヲ科スル差アリ、尙ホ法律部詐僞篇參看スベシ、

官符ノ案ハ、所司ヲシテ永ク保存セシム、但シ施行ノ官符、理ニ違フモノアレバ、燒毀セシムル例ナリ、

名稱

〔類聚名義抄八竹〕符 音扶 ツルシ

〔庭訓往來〕綸旨院宣者、大底之規式、令旨官符宣者、非今指南、

〔段注說文解字五上竹〕符、信也、漢制、以竹長六寸、分而相合、周禮門關用符節、注曰、符節者、如今宮中諸官詔符也、小宰傳別、故書作傳辨、鄭大夫讀爲符別、漢孝文紀、始與郡國守相、爲銅虎符竹使符、應劭云、銅虎符一至五、國家當發兵、遣使至郡合符、符合乃聽受之、竹使符、皆以竹箭五枚、長五寸、鐫刻篆書、第一至第五、張晏曰、符以代古之圭璋、從簡易也、按許云、六寸、漢書注作五寸、未知孰是、

〔唐六典一尙書都省〕尙書省下於州、州下於縣、縣下於鄉、皆曰符、

符式

〔令義解七公式〕符式

太政官符、其國司、

其事云々、符到奉行、

大辨位姓名　　　　　　　史位姓名

年月日　　　　　　　　　使人位姓名

鈴　剋傳符亦准此

右太政官下國符式、省臺准此、若下在京諸司者、不注使人以下、凡應為解向上者、其上官向下、皆為符、署名准辨官、其出符、皆須案成、并案送太政官檢勾、謂、凡諸國出符者、向太政官請内印、官即覆本案、檢勾出符、其案者以官印印之、還本司也、若事當計會者、仍錄會日、與符俱送太政官、謂使下條、有不會之事、故云當計會者、假如別紙書為徵驗、出符諸國者、即出符之外、更副別狀、云為徵驗、下其國符一紙、准例謂、印之類、附其別狀者、附官計會、故謂之會日、

符例

〔延喜式 式部十八〕凡改易常例、及立為永式之事、非官符不得奉行、

〔延喜式 民部二十二〕凡雜色人補任、有不合者、不得改補、若有奉勅官符、乃得奉行、

〔延喜式 民部二十三〕凡諸司諸家所領、庄院米一百石以上者、非奉勅官符、莫以奉行、

〔西宮記 臨時二〕諸寺僧別當三綱座主等事〇中略

十五大寺者、有封諸寺、御願寺等、給奉勅官符、自餘小寺、從官申上、給上宣官符、凡皆從官所申上也、

〇按ズルニ、官符ニハ、太政官勅ヲ奉ジテ下スト、又官上卿ノ宣ヲ以テ下ストノ別アリシナリ、

太政官符

〔政事要略 二十八年中行事〕太政官符七道諸國司

雜事

右自今以後、納穀進、不須檜杉等類、今以狀下符、

養老六年閏四月十七日

〔類聚符宣抄 三〕太政官符東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等道諸國司、

令臥疫之日治身及禁食物等事漆條○中略

以前四月已來、京及畿內、悉臥疫病、多有死亡、明知諸國佰姓、亦遭此患、仍條件狀、國傳送之、至宜寫取、即差郡司主帳已上一人、宛使、早達前所、無有留滯、其國司巡行部內、告示百姓、若無粥饘等料者、國量宜賑給官物、具狀申送、今便以官印印之、符到奉行、

從六位下守右大史勳十一等壬生使主

正四位下行右大辨紀朝臣

天平九年六月廿六日

〔東大寺要錄六〕雜格中卷云

太政官符、播磨國守正五位下多治比眞人國人等、

明石郡築水鄉鹽山地三百六十町東峯河、南海道路、西築水河、北太山堺、

右奉十一月廿日勅旨、偁、件地入東大寺者、國宜承知准勅施行、以狀下、符到奉行、

從五位下守右少辨縣犬養古萬侶、左少史正六位上○此閒恐脫勳字、十二等文忌寸上萬侶、

天平廿年十一月廿三日

〔類聚三代格八〕太政官符

一應禁斷出擧私稻事

右撿去天平九年九月廿一日勅、偁、□□私稻貸與百姓求利、悉皆禁斷者、今聞京畿百姓、出擧穎稻、名曰錢財、及於秋時、償以正稅、如此姦蠹、巧詐萬端、何得具陳、略示一緒、實是國郡司等、不加敎諭、遂乖勅書、自今以後、如有犯者、依先勅文、以違勅論、物即沒官、國郡官人、即解見任、○中略

以前兩條之事、具錄如右、

天平勝寶三年九月四日○又見續日本紀卷三十七

〔梅園奇賞〕近江國石山寺藏

太政官符　治部省

【】學僧空海 俗名讚岐國多度郡方田鄉戶主正六位上佐伯直道長戶口同姓眞魚

右去延暦廿二年四月七日出家【】

【】承和【】　度之符到奉行

□五位下守左少辨藤原貞□　左大史正六位上武生宿禰眞象

延暦廿四年九月十一日

〔類聚符宣抄七〕太政官符侍從厨

右少辨紀朝臣淑光

右右大臣宣、件人宜補預別當左少辨橘朝臣公頼、遷任近江權守之替者、厨宜承知依宜行之、符到奉行。

從四位下行右中辨兼山城守藤原朝臣扶幹　外從五位下行左大史香乃朝臣清方

延喜十九年四月十七日

〔類聚符宣抄一〕太政官符伊勢國幷大神宮司 内宮

使正六位上大中臣朝臣賴行

右爲修造舊宮、差件人宛使、發遣如件、國宮承知、緣造宮事、聽使處分、一事已上、不得闕怠、符到奉行、

位勳解由長官　左大史位

承平三年三月四日　驛鈴一口三剋

〔本朝文粹二官符〕太政官符 東海東山道諸國司

應拔有殊功輩加不次賞事

右平將門、積惡彌長、宿暴暗成、嘯招烏合之群、只宗狼戾之事、寛國宰而奪印鎰、領縣邑而事抄掠、較狡

之黨、愚蠢之徒、或欲免一朝之辱、自赴勸誘之馬、或擬延片時之命、多入劫略之中、將門不顧徼分、還忘朝憲、遂恣叛逆之意、更夾窺窬之謀、縱有帶甲之千萬、何犯畫象之化、縱有驍勇之數百、何越紆帶之城、獨知井底之廣、空忘海外之守、開闢以來、本朝之間、叛逆之甚、未有此比、適懷梟心之志、空遇殄滅之殃、皇天自可施天誅、神明何有秘神兵、抑一天之下、寧非王土、九州之內、誰非公民、官軍黠虜之間、豈無憂國之士乎、田夫野叟之中、豈無忘身之民乎者、左大臣宣、奉勅、宜仰國宰、若殺魁帥者、募以朱紫之品、賜以田地之賞、永及子孫、傳之不朽、又斬次將者、隨其勳功、賜官爵者、諸國承知、依宣行之、普告遐邇、令知此由、符到奉行、

天慶三年正月十一日、員外從五位下左大史尾張宿禰言鑒、右中辨正五位下兼行內藏頭源朝臣相職、○又見扶桑略記、

〔類聚符宣抄 四〕太政官符、神祇、中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮內、彈正、左右京、修理、勘解由、齋宮、齋院等官省、臺、職、寮、使、司、

太政官符、左右近衛、左右衛門、左右兵衛、左右馬、兵庫等府寮、詔書壹通、上尊號爲太上天皇、皇太后曰太皇大后事

右詔書頒下如件、諸司諸衛承知、符到奉行、

左少辨　　　　右大史

天慶九年五月一日

〔類聚符宣抄 一〕太政官符近江伊勢兩國司

應忌擧哀改葬事

右得神祇官解偁、齋內親王、來九月十一日、應向伊勢齋宮、今依前例、起九月一日迄卅日、應忌如件者、兩國承知、依例行之、符到奉行、

左少辨正五位下　　　　右大史

長曆二年八月廿五日

件符不觸京職、仍遣問史許、申云、依天曆三年符案所行也者、已違式宜、若彼符書落京職歟、

〔類聚符宣抄 一〕太政官符神祇官

應頒奉宮中京中諸神位記事

右左大臣宣、奉勅、件位記宜令頒奉者、官宜承知依宣行之、仍須於官書院披讀宣命、然後頒奉、符到奉行、

右少辨　　　左少史

天曆六年四月十五日

〔類聚符宣抄 一〕太政官符常陸國司

正六位上大中臣朝臣元輔

右去年十二月十三日、補任鹿島宮司畢、國宜承知、一事已上、依例令執行、符到奉行、

左中辨高階朝臣　　　左大史多米朝臣

長保元年二月廿八日　　　傳符一枚四剋

〔類聚符宣抄 八〕太政官符出羽國　外

權掾正六位上藤原朝臣貞光

右太政官今日下彼國、件貞光任符注傳符一枚四剋、而不給其實、國宜承知依例行之、符到奉行、

辨　　　史

永延元年七月廿日

〔類聚符宣抄 八〕太政官符近江國司　内

從四位下行右中辨平朝臣惟仲

右去年十二月十九日、兼任彼國權介畢、國宜承知、官物一事已上、依例分付、符到奉行、

辨　　　　史

永延三年三月二日

〔集古文書 七〕安藝國佐伯郡嚴島社藏

太政官符安藝國司

僧都樂　遣伊都岐島社

令齎佛舍利壹粒、入銀壺壹口、

右正二位行權大納言兼中宮大夫藤原朝臣隆季宣、奉勅、差件僧發向彼社、須下知牧宰宛食、具馬壹疋、令得往還、路次之國、只宜准此、但所放返抄、國郡押署加印言上者、國宜承知依宣行之、符到奉行、

承安二年二月廿八日

左少辨正五位下藤原朝臣判

正六位行左少史三善朝臣判

〔壬生家文書 二〕太政官符山陰道諸國司

雜事拾貳箇條

一應任式條令勤行年中諸祭事

右左大臣宣、奉勅、國之大事、莫過祭祀、因茲諸國調庸貢進之日、惣計年中祭物之數、可納別藏、勤其事狀、載延長四年五月廿七日符、而近年緣事所司稱習常例、每事怠慢、禮奠之庭、專背如在、供祭之物、多非本色、敬神之道、可其然乎、就中祈年祭者、京官外國相分、所奠之神三千餘座也、事繫日過、令闕神供云々、自今以後、先祭卅箇日、下知諸司、任式勤行者、

一應知法勤修年中諸佛事等事

右同宣、奉勅、年中佛事、皆是往古之洪化也、後代明王承成此願、乾坤致福云々、就中八省御齋會者、君臣之道、與天地共久、累世之政、與日月爭明之御願也、而時□季、人少信心、施供之物、毎色不法、最重大會、何致疎𤄃乎、自今以後、行事官等、先會一月、下知諸司、任式勤修者、

一應停止五節舞姫金銀風流幷獻□送物過差事

右同宣、奉勅、禁暴節儉者、明王之善政也、件等過差、悉可停止者、

一應禁制六齋日殺生事

右同宣、奉勅、禁斷殺生、嚴制重疊、違犯之科、格條已明、而今如聞、遊手浮食之輩、多當彼日、殊成此犯云々、內破佛戒、外忘皇憲、重加下知、慥令禁斷者、

一應令營築鴨河堤事

右同宣、奉勅、防河事、量可行之宜、定可勤之國、而近年各無其勤、殆失基趾云々、慥令催行者、

一應停止諸國濟物壹年中令責催壹任所當事

右同宣、奉勅、諸國調庸、各有期限、而諸司譴責、少分公用、責催數百之納物、計一年之所當、過四廻之租□□國之衰弊、尤任此事、任久安保元符、下知諸司、早令停止、

一應同停止私出擧利過壹倍事

右同宣、奉勅、出擧私物、格制殊重、況於非法利乎、而貧弊之民、被責窮困、竊以借用返償之間、悉盡資貯云々、如斯之類、縱出契狀、雖經多年、一倍之外、可停止非法者、

一應令有封社司幷諸寺別當修造本社本寺事

右保元二年十月八日符云、修造之勤、載在格條、隨破且修、何致大損、而諸司社寺官長、徒貪所領田園之利潤、不顧本所舍屋之破壞、頽毀之後、初經奏聞、申請別功、致其造營、論之朝章、理不可然、慥令本社本寺本司等、勤其修造、若背符旨、倘致懈緩、解却見任、永不敍用、其中顚倒無實、及大破等、私力

罪及者、各勤在狀、不日言上者、同宣、奉勅、任彼符、慥令遵行者、

一應慥搦進陸海盜賊放火輩事

右同宣、奉勅、近年盜賊之類、結黨成群、充滿都鄙、殺害人民、放火家宅、就中近日所犯、連夜不絕、宜下知諸國、隣里與力、搦進其身者、

一應同搦進諸社神人諸寺惡僧任反國中致濫行事

右同宣、奉勅、近年諸社神人、諸寺惡僧、或橫行京中、決斷訴訟、或發向諸國、侵奪田地、就中延曆與福兩寺惡僧、熊野山先達、日吉社神人等、殊以蜂起、同下知諸國、慥令搦進其身者、

一應停止諸國人民以私領寄與神人惡僧等事

右同宣、奉勅、諸國人民、以公田稱私領、寄與神人惡僧等云々、國之滅亡、無失於斯、宜任先符悉令停止者、

一應搦禁勾引諸人奴婢賣買要人輩事

右同宣、奉勅、如聞勾引諸人之奴婢、賣買要人之輩、充滿京畿云々、結構之旨、罪科不輕、宜令諸國搦禁件輩者、

以前條事如件、諸國承知依宣行之、符到奉行、

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣 判 修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰 判

治承二年七月十八日

〔集古文書 七〕相摸國鎌倉圓覺寺藏

太政官符相摸國司

應以當國大圓覺寺爲定額寺事

右太政官今日下治部省符偁、得沙門崇演〇北條貞崇今月□日奏狀偁、桂伽藍者、先父正五位下行相模守平朝臣時宗、弘安壽曆、大淵獻歲、并發弊信、專所草創也、雖徙文槐之鮮妍也、宛然香花開之奇麗、金容玉相之照耀也、就貴白毫光之嚴飾、於是不朽不退、修四種三昧之妙行、千晨千夕、致天長地久之精祈、料知王法藉佛法而鼎盛、佛法藉王法而紹興者乎、早以私寺、專爲定額、傳厥先蹤、不可殫論、且幸由斯成就寺之往躅、所奇准大圓覺寺之仁祠也、任彼貞慶之佳謨、將賜官符、勒勅願而已、何況丞擬宸衷、幸下馴襮、誠是希代之嘉謨也、豈非萬葉之美談哉、昔醍醐室高祖帝之操聖翰也、垂字點於大莊嚴寺之額、今本朝太上皇之染天筆也、耀榜額於大圓覺寺之月、在今思古、彼既環焉、抑崇演情願、至愚之庸材、早謝衆務之繁機、雖□佛陀之眞乘、猶惠社稷之安全、奉君之道、報國爲其□之歸也、凡當寺者、奉進將軍家、所爲御願寺也、然而高達鶴唳於九霄、宜飛鳳詔於千里、望請天恩、因准先例、被賜官符、以件寺爲定額寺、將奉祈國家令興隆教法、然則金輪運遐、永仰粟陸之日、寶算德久、鎭仲葎封之年者、右大臣宣、奉勅、依請者、省宜承知、依宣行之者、國宜承知、符到奉行、

修理右宮城使從四位上行右中辨藤原朝臣 判　修理東大寺大佛長官正五位下行左大史小槻宿禰 判

延慶元年十二月廿二日

（類聚要集）官符書樣

太政官符　左京職

應令早修治防鴨河堤并所々橋破損事

符、堤頽橋破、則是防鴨河使之所緩怠也、就中近來霖雨地震、旁以損之、然而防使乍見之、敢不奏之、所詮非一人之歎、尤萬人之煩也者、早不論老少、不擇貴賤、東西合力、南北同心、各守防鴨河使之掟、將成堰壞修復之勵也、職宜承知、符到准狀、以符、

謄詔勅符

年號ム月ム日々々々

〔嘉永明治年間錄 四〕安政二年三月三日、勅シテ梵鐘ヲ以テ火砲ヲ鑄ル事ヲ命ズ、○中略

太政官符

五畿内七道諸國司應以諸國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃事

右正二位行權大納言藤原朝臣宣、奉勅、夫外寇事情、固所深惱宸襟也、況於緇素何有差異、頃年墨夷再來、入相摸海岸、今秋魯夷渡來畿内近海、國家急務只在海防、因欲以諸國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃、置海國樞要之地、備不虞、速令諸國寺院、各存時勢、本寺之外、除古來名器及報時之鐘、其他悉可鑄換火砲、爲皇國擁護之器、及迨海无事之時、復又宜銷兵器以爲鯨鐘、不可存異議者、諸國宜承知、依宣行之、符到奉行、

安政元年十二月二十三日

〔令義解 七公式〕詔書式○中略

可　御畫

右○中略畫可訖、留爲案、更寫一通、誥訖施行、謂凡施行詔書者、於在京諸司直寫詔書副官符行下、若其外國者更謄官符施行、○下略

〔令集解 三十五公式〕問、義云、詔勅案成、謂謄詔勅之符案成者、下條云、文案詔勅奏案之類常留、以外年別檢簡、三年一除者、今謄詔勅之符、是官符也、然則其案須三年一除、依計會式、謄詔勅之符、則爲詔勅、常不可除、一書有兩號、留除不同也、未知其義以乎兩類、或云、太政官以正詔勅爲案、故謄之符爲官符、但於奉行所司、以謄符猶爲詔勅案、職制律知耳、

〔律疏 職制〕凡稽緩詔書者、一日笞廿、○略疏議、謄詔勅符移之類皆是、謂奉正詔勅、更謄以出符、移解牒書此故言之類、

○按ズルニ、右ノ謄ハ唐律ニハ謄ニ作ル、

〔正字通 十〕謄 徒恒切、音騰、説文、逐書也、今傳抄是也、(中略)六書故作謄、布口謄也、古單作朕、易朕口說也、俗作騰謄、

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年九月癸丑、勅筑紫府管内諸國官人百姓等曰、逆人廣嗣等本來凶惡、長益詐姧、其父故式部卿常欲除棄、朕不能許、掩藏至今、比在京中、讒亂親族、故令遷遠、冀其改心、今聞擅爲狂逆、擾亂人民、不孝不忠、違天背地、神明所棄、滅在朝夕、前已遣勅符、報知彼國、又聞或有逆人捉害送人、不令遍見、故更遣勅符數十條、散擲諸國、百姓見者、早宜承知、如有人雖本與廣嗣同心起謀、今能改心悔過、斬殺廣嗣、而息百姓者、白丁賜五位已上、官人隨等加給、若身被殺者、賜其子孫、忠臣義士、宜速施行、大軍續須發入、宜知此狀、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應增加鎭撫使官員事

判官一員　主典一員

右太政官去二月十五日下式部省符偁、太政官去弘仁九年四月十五日應勅符偁、件使官員、定長官一員、次官一員、判官二員、主典三員者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、前件二員、宜從廢省者、今得使解偁、所行之事、非啻鎭撫、局内雜務、觸類多端、差科無人、庶事有闕、望請還復本員者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁十二年七月十日

〔類聚符宣抄四〕太政官符五畿内七道諸國司

應下詔書事

右去月廿六日詔偁、朕忝膺寶運、濫握神符、上欽七廟之□心、深競惕、下荷兆人之責、念切憂勞、太上天皇功冠百王、道光四表、華夷染化、動殖霑仁、鳳衣（○衣恐穴誤）龍庭、咸受正朔、蟠挑播木、盡入提封、皇天之曆運未傾、寓縣之謳歌猶至、而厭彼垂衣、期茲脫屣、遂釋天下之重負、永懷物表之高居、勤遜萬機、隔遊臨於崇遊、想凝象妙、追恬惔（○惔恐澹誤）於玄黙、令抑太上之鴻名、垂清虛之令德、率順叡旨、恐虧朝章、既有恒

鑑符

規、何無舊典、善修先王之禮制、或副四海之仰瞻、宜上尊號爲太上天皇、皇太后曰太皇太后、普告遐邇、令知朕意、主者施行者、諸國承知、符到奉行、

左少辨　　右大史

天慶九年五月一日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應處分公廨事

右造式所起請偁、略○中仍案唐永徽祿令云、諸祿並依日給、京官據詔書出日、外官據籤符到日給者、今若一年公廨、總計爲分、各准歷任日數班給、則新舊之吏、甘心受賞、競爭之源、從茲永絶者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請、宜付所司施行、

弘仁十年十二月廿五日

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十月己巳、制、略○中弘仁十一年格偁、令云、諸祿並依日給、京官據詔書出日、外官據籤符到給之者、今賞之所行、理無偏頗、獨給全給、事乖通猷、宜不論權正、據籤符到給之、其間公廨遍共給之、

〔內外官交替式〕凡新任國司公廨、不論權正、據籤符給之、

〔類聚三代格三〕太政官符

應納國庫國分二寺僧尼度緣戒牒事

右得佐渡國解偁、略○中今國司等加覆審、僧尼度緣、或隨身遊行他國、或挾姧僞紛失、因此死亡之後、無由覆求、望請准國司任符、繳收國庫、其身死補替之日、隨即將進官、謹請官裁者、同宜依請、諸國亦宜准此、

承和十一年十一月十五日

〔政事要略 五十五 交替雑事〕太政官符治部省

合雑事八箇條

一應下令綱所預行諸國講讀師任符并度者度縁上事

右律師法橋上人位仁斅、去年八月十九日奏狀偁、諸國講讀師、孟冬簡定之後、綱所造擬補帳、省寮押署進官也、簽符捺印之後、綱所請符預行、是承前之例也、而年來諸國講讀師簽符、或留於官、外記不下綱所、是願以違例、(中略)望請依前例、綱所請件講讀師任符并度縁、將預行之者、從三位守大納言兼右近衛大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣實頼宣、奉勅、依請者、以前事條如件、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左少辨源朝臣　　左大史尾張宿禰

天慶四年三月廿日

〔三代實録 十八 清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、勅、(中略)○齋宮寮并所管諸司、始任者、並給簽符、

〔類聚符宣抄 八〕中納言從三位兼左衛門督源朝臣能有宣、奉勅、鎭守府權任官人簽符、宜令注替人之姓名、自今以後、立爲恒例者、

仁和元年七月三日　　大外記大藏善行奉

〔延喜式 十一 太政官〕凡少掾轉大掾、少目轉大目之類、簽符連修一紙、(太宰監典、諸國博士、亦准此、)

凡諸國權史生博士醫師遷任、并依讓相代之類、其簽符注所遷歷、

凡諸國受業博士醫師補任解文、并簽符、名下注各本業、

凡諸國史生博士醫師簽符、外記勘會補任帳、明知其補由、然後請印、

凡鎭守府權任官人簽符、注替人姓名、

〔類聚符宣抄 八〕從四位下行美濃守源朝臣頼信誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例不待本任放還給鎰符赴任國狀

右賴信、今月八日、遷彼國守、謹撿先例、分憂之吏、如此遷拜之輩、不待本任放還、早給任符之例、近則大江匡衡朝臣、從尾張遷丹波守、藤原公則朝臣、從同國遷河内守等是也、以往之例、不遑毛擧、望請天恩、被下宣旨、不待本任放還、給鎰符、將赴任國矣、賴信誠惶誠恐謹言、

長元五年二月廿日　　從四位下行美濃守源朝臣

〔朝野群載二十二諸國雜事〕從四位下行阿波守高階朝臣成章誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准傍例不待本任放還給鎰符赴任國狀

右謹撿案内、須待本任放還、給鎰符、赴任國也、而進發在近、相催無程、望請天恩、因准傍例、不待本任放還、被給鎰符、將赴任國、成章誠惶誠恐謹言、

長久五年二月廿八日　　從四位下行阿波守高階朝臣成章

○按ズルニ、中古以降、國司任國ニ赴ク時、太政官符ヲ以テ、其事ヲ國府ニ通知スルヲ、鎰符ト云ヘルナリ、而シテ鎰符ト稱スルハ、鎰ヲ其符ニ加ヘテ檢尋ニ便ナラシムルニ由レルナラン、

〔壬生家文書一〕鎰符

内印
建仁三年十月十六日　宣旨（權中納言左中辨）

正五位下行式部權少輔兼東宮學士淡路守藤原朝臣範時、申請殊蒙天恩、因准先例、不待本任放還、給鎰符赴任國事、

依請

下知付不見（可有内案）

鎰符也
太政官符（淡路國司）

正五位下行式部權少輔兼東宮學士藤原朝臣範時

承知符

右去建久七年正月廿八日、任彼國守畢、國宜承知、官物一事已上、依例分附、緣海之國、亦宜給粮、符到奉行、

左中辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰

建仁三年十月十六日

建仁三年十月、國宗宿禰引進馬於範時朝臣許、是爲神拜、來月十日、依下向淡路國也、存受領望之處、必可引云々、其次鑑符事、爲作儲官符、請印不經之間、于今不施行、近年被宣下給れば、鎮西奥州ノ外無沙汰歟、[　]請印事[　]被中沙汰之由、被示遣了、

〔魚魯愚抄 六〕從七位上藤井宿禰月清

望請諸國三分、太宰大監

右去年給二合、以藤井花久、申任下野大掾之處、非本望、不受任符之間、同十二月、以藤井月清、請任同國大掾之處、申文誤清字、作秋字之間、文字相違之上、依爲父名、殊成其憚、更不受鑑符、然者可被改任之狀、所請如件、

元亨二年正月廿二日　從一位行左大臣藤原朝臣實藤

〔類聚符宣抄 六〕大納言藤原朝臣宣、凡所行官符、即承知之符、可下所司、而頃年之間、或忘不行、遂令雜務稽留、諸使擁滯、此官史闕怠之所致也、自今已後、外記存意、不副承知、莫關踏印、

弘仁十年六月十九日　少外記宮原宿禰村繼奉

正三位行中納言兼民部卿伴宿禰善男宣、凡可經民部之色、惣用省符、而繁劇細碎、不堪如式、直下承知、實是棄累、但至免除之物、須必用省符、外記宜留意勘返、不可略漏、

貞觀四年七月廿七日　大外記賀茂朝臣岑雄奉

〔延喜式 二十三 民部〕凡承知官符、省奉行、直下寮、

遞符

凡免除雜官物符下省者、即承知符先下所司、〇中略

凡季祿位祿時服之類、及諸國地子等、承知官符、省加奉行、直下所司、

〔日本紀略 冷泉五〕康保四年六月二日己未、停止素服擧哀、宴飮、作樂、美服、承知官符、下左右京五畿七道諸國、合十八通也、

〔江家次第 十九月〕大粮申文

爲閏月之時、又願作代、其後成官符、近代諸司院宮、不待官符、成催牒、諸國物以件諸文、成承知符、最可恠、

〔類聚符宣抄 七〕太政官符式部省 承知下國 外

應補任造色紙長上從七位上阿曇兼遠事

右得圖書寮去八月廿一日解偁、美濃國今年四月廿一日解偁云々者、大納言正三位兼行中宮大夫藤原朝臣顯忠宣、奉勅依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左大辨　右大史

天暦五年九月十日

〔類聚符宣抄 七〕太政官符左衞門府 承知下彈正左馬寮 外印

正六位上行少尉平朝臣中方

正六位上行少志惟宗朝臣博愛

右左大臣宣、奉勅、件人等宜爲撿非違使者、府宜承知依宣行之、符到奉行、

左大辨　左大史

長保三年二月三日

〔伊呂波字類抄 登疊字〕遞符 上官六位已下、各作外一枚官符中注載數人目、諸國諸傳料也、

封符

永宣符

官符案

○按ズルニ、六位以下ノ官人ノ俸料等ヲ一紙ノ符ニ連載スルヲ、連符ト云ヒシコト知ラル、ナリ、

〔日本紀略三村上〕天暦元年三月十一日丙申、伯耆國驛驛解文到來、付大納言師輔卿奏聞、可給封一〇本封作封符之由、仰右少辨讓俊、

〔百錬抄四圓融〕天祿三年十月廿日、諸卿定申太宰府言上高麗國牒送事、宰府可賜封符者、

○按ズルニ、事ノ機密ヲ要スル時ハ、下ス符ヲバ、封緘セシモノナルベシ、

〔壬生家文書一〕太政官符　若狹國司

應永進納中宮職御月料糯春米參拾斛事

右得彼職今月十九日解偁、因准傍例、被給永宣符於件國、國以職納返抄、勘會公文、仍言上如件者、正二位行權中納言兼中宮大夫源朝臣重信宣、奉勅、依請者、國宜承知依宣行之、符到奉行、

修理右宮城使正四位下行權左中辨兼中宮亮藤原朝臣闕　修理左宮城判官正五位下行主計頭兼左大史竿博士小槻宿禰闕

延久六年七月廿三日

○按ズルニ、永宣符ハ、永宣旨ノ類ナルベシ、

〔伊呂波字類抄知疊字〕長案寫官符宣旨案三具、又官符案文、

〔西宮記臨時六〕近代外印文〇中略

無止官符、官寫一通、爲長案、請印後、外記又寫一通、爲長案、

〔類聚符宣抄六〕右抄符史生石上春恒解申請處分事

請被下宣旨、請度外記長案寫抄所見失官符狀

合

寛平元年欠二卷、（宣旨上六月諸司）同四年欠二卷、（宣旨上二月諸司）同五年欠一卷、（六月諸司）同八年欠一卷、（諸國下）延喜元年欠二卷、（諸司下十月諸司）已上八卷、自撰式所請度長案內之欠、

延喜五年欠二卷、（正月諸司二月諸司）同六年欠二卷、（二月諸司十一月諸司）同七年欠一卷、（五月諸司）

已上五卷、在文殿長案內之欠、

右官符宣旨等、其卷欠失、忽無所據求、因之不能寫抄、望請被下宣旨、請度外記長案、將寫抄件年々符案、仍請處分、謹解、

延喜十八年三月十七日　　右史生石上善恒

被右大臣宣偁、年々長案、宜隨辨官抄符所請借行者、

同年五月七日　　少外記葛井清明奉

〔類聚符宣抄　六〕參議左大辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、年中所給宣旨官符、本書草案（中略）等、全納文殿、須令勘抄、而如聞近年間、長案類書、既以脫漏、勘據鎮致其煩、公事擁怠、莫不因斯、是則所奉史等、早不下番史生、默而去職之所致也、宜加炳誡、自今以後、件等文書、慥令辨度、毎月實錄、便讀番案主史生請文、敍爵之時、相加申文、備之進上、立爲恒例者、

長和四年八月一日　　左大史但波朝臣奉

作官符

〔江家次第　十四〕固關事

大臣參議著陣、大臣（中略）仰辨官、令作官符、（或云、仰官史、而前例多仰辨、）

奏聞

〔類聚符宣抄　六〕右大臣宣、少納言依例所奏請印官符、理須候御南大殿時即奏、而比來怠慢、至廻御北大殿乃奏、遂煩聽覽、甚乖道理、自今以後、仰少納言、莫令更然、

弘仁五年七月廿日　　大外記豐宗宿禰廣人奉

〔江家次第　十五〕大神寶次第

奏官命五十三枚、令持內記、使官符十四枚令持外記、就御所奏之、頭幷六位藏人一人取之、於御前頭
覆奏之、返給、

覆奏

〔勘仲記〕正應元年八月廿七日庚辰、入夜參內、大奉幣官符、被內文請印、上卿中宮大夫公衡卿、少納言
兼有朝臣、外記覽官符、上卿進弓場奏聞、次著陣請印如例、
畿內　使官符一枚
東海　東山　北陸　山陰　山陽　南海　宰府　已上使符各一枚　幣料符各一枚、
〔西宮記臨時八〕內印(中略)
陣覽官符、(雜例)上卿著陣、外記覽官符、(入筥)上卿就御所奏聞、返賜著陣、
〔江家次第十八〕陣覽內文儀
外記候所司、(著靴、少納言、只二少納言弁官、若有代官、令申事由、官掌持、此有所尋)上卿先著陣、(先是可令申自少納言、無可行之由、覽內文)令藏人申受領位符等可令請內
印由、次蒙可許後、令外記進官符等、(入筥、若有內豎、外記引集之人等)上卿加檢察、畢乍在本座、令外記內覽於執柄、許、若
候御在所者、令殿上弁若藏人覽之、次與外記就弓場殿、令藏人奏聞、返給之後、歸著陣座、外記持來官
符、上卿目令退出、

官符捺印

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月丙申、太政官處分、凡位記印者、請於太政官、下諸國符印者、申於辨官、
〔續日本紀八元正〕養老四年五月癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐
煩聖聽、望請自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、差逃走衞士仕丁替、及催年料廻殘物、幷兵衞采
女養物等類事、使以太政官印印之、奏可之、
〔一〕按ズルニ、當時諸國ニ下ス小事ノ符ニハ、外印ヲ捺シヽアリ、
〔類聚符宣抄六〕請印官符事
右官符、少納言外記加覆勘、後日捺印、而即日捺頓不能勘、自今以後、宜入日細勘、後日捺印、當番案主

亦宜知之、

延暦十三年六月十五日

〔類聚符宣抄 六〕左大臣宣、頃年所行内印文書、満五六十通、乃令捺印、若不及此、更無請印、其間公務稽擁、乖違舊例、今須内印官符之類、一枚以上、多少随有、依式検察、毎日捺印者、

延喜八年五月廿六日　大外記阿刀宿禰春正奉

〔延喜式 十一太政官〕凡太政官下諸司諸國符、随事請内外印、其下須詔書、及預官社神、得度還俗、増減官員、遣驛傳使、并下驛鈴、新任國司并諸司在外國者赴任、五位以上出畿外、出納兵庫器仗、用正税、徴免課役、輸調庸物色、及賜人官物、給諸國者内印、給京庫者外印、公地封戸雑田、還収穀、百姓附籍、移貫、改姓、蕃人還國、御馬、廢置郡驛、断罪禁獄、放賤從良等類、並請内印、餘皆外印、諸省請印下諸國符、亦各准此、民部省符、治部省國分僧文、宮内省采女符、皆請内印類也、

〔延喜式 二十九刑部〕凡流移人者、省定配所申官、具録犯状、下符所在并配所、其人請内印、賤隷請外印、

〔西宮記 臨時六〕内印、○中略内印文、○中略諸國國司一分、郡司主政、主帳、講讀師任符、○中略主神司任符、下諸國勘判文、損田使文、民部省斷、減符、雜田○中略下諸國大祓文、賜京職者外印、

〔西宮記 臨時六〕近代外印文、近代所見也、此外極多、好可尋知、俸料差米官符、下八省官符、或中紙文叙符勅任符計歴文、諸國司申請條々文、諸國申充符、充符、成後有不動者、可申開用之、○中略給不動鈎匕官符、

〔北山抄 六備忘略記〕宇佐使立事

遞送等事、給官符并所牒於太宰府路次國々、○中略注近例不給所牒、給官符也、其遞送符者、請内印、

〔北山抄 四拾遺雑抄〕固關事

或三司警固付本司、三關付國、三司召仰官人、三關給内印符、

〔北山抄(七都省雜事)〕請内印雜事

下諸國符、五位以上位祿事、

〔○〕按ズルニ、内印ヲ請フノ符五十二事、外印ヲ請フノ符八十一事ナリ、又此ニ據テ、當時官省ヨリ下シタル符ノ數モ知ラルヽナリ、而シテ此全文政治部上編印篇ニアリ、

〔西宮記(臨時十二)〕延喜十三年二月十日癸未、鹿島使官符可捺印、而持不候、仍大納言外記庭(陪下)付藏人奏之、以少將爲少納言代捺之、

〔政事要略(三十年中行事)〕天慶三年二月廿七日癸亥、中納言藤原師輔卿、參議同元方朝臣聽政、(○中略)少納言令主鈴捺印於官符、了少納言持官符、還本座請印、(官符可覆奏上卿云々、而今案式、外記使不覆奏者、以此案覆上卿者非也、)

〔西宮記(臨時六)〕内印(○中略)

上卿召近衞府(大舍人)、召將監候小庭、(將監着日華門壇上)上卿云印天、將監稱唯、將監少納言主鈴召印、(將監出自敷政門、少納言將監入自日華門立庭中、)播部寮立案、(立軒廊中間)少納言就案、(主鈴置印案上、將監在南、)少納言覽官符、(有當符者不覽案)上卿見了返授、少納言持官符歸案下、主鈴取官符捺之畢、少納言已下共納印、播部撤案、少納言退出自日華門、(○中略)無主鈴者、又用中務錄主殿屬爲代官、

〔北山抄(七都省雜事)〕内印之事

播部寮立案於軒廊東二間、少納言主鈴(持印櫃)(從等)、將監等、入自日華門出印、(此間少納言立長樂門前、將監立東頭、並北面、)少納言就案下、將監留立軒廊南三許丈、主鈴置印板於案上、取官符授少納言、(有當符者、雖入内案、不覽上卿、)退立將監之西、少納言着膝突進上卿、上卿見畢返給、少納言還就案下、令主鈴捺印、畢如初納印退出、播部撤案、

〔宇槐雜抄〕保延二年十月十六日、今日予(○藤原頼長)着座之後、始參政日也、(○中略)次官符請印、

少納言一人、外記一人、(外記持官符筥)史生一人、(持印櫃)外記進來テ、筥ヲ置上卿前机上、外記著床子之後、予笏

ヲ插右尻下、以左右手引寄筥、一々見書、（書有數枚、書ノ奥ヲ以紙ヒ子リテトヂテ、端ニ押撚也、）皆見了後、先遣見外記方テ、次筥ヲ以左右手押遣テ取笏、外記走來テ取筥置、印盤ヲ案ノ南頭ニ立テ、召史生名、史生走來、取筥置案上申上、予仰云サセ、史生稱唯、請印了、史生又申上、上卿遣見少納言方、仰云タマヘ、（微音云也）少納言揖沓、微音稱唯、次少納言外記史生等退出、

〔孝亮宿禰記〕慶長十六年三月廿四日甲子、參二條殿、明日就御讓位、警固固關有之、仍官符宣三通書調之、　廿五日乙丑、今日警固固關有之、〇中略官符三通、奏聞請印畢後、奉行幷官務捺判也、

不捺印

〔北山抄　七都省雜事〕內印之事

若無內印之日、急書可請印者、（鹿島使官符、受領任符等類也、）上卿令奏事由、令持行（〇行一本作官）符於外記、就御所奏覽、還著本座、外記持來官符、目令退出、次召將監、請印如常、或請印畢、少納言返奉本官符、上卿召外記給之、

若無少納言、以少將爲代、

〔江家次第　十八〕結政請印

有急事、不能行外記政間所行也、

宇佐使祿官符、〇中略流人官符、〇中略

承平八年五月廿九日九記曰、仁王會日、外記申曰、可請印急速官符、被付結政所宜乎、答曰、右大辨參入、示彼相公可令著、貞觀年中仁王會日、有請印事、以結政所爲借房、仍於食所行請印事、令准行彼例云云、

同五年十二月卅日、依左大臣仰、參議當幹朝臣就結政所、令捺印官符三通云云、但今日少納言各有障不參入、仍蒙左大臣宣、以左少辨源相職朝臣、爲少納言代云云、

〔北山抄　五〕奉諸社神寶事

諸道使給官符鈴等、又給藏人所牒、（往年有遣白紙官符之例、見天德四年十一月鹿島使御記、以期日有限也、）

〇按ズルニ、東大寺正倉院文書、天平六年ノ出雲國計會帳ノ中ニ、白書壹通、神税等稻不合狀、トアルモノモ亦捺印セザルモノナラン、

官符署名

〔新任辨官抄〕宣旨官符加判事

下諸國諸司符加署名、雖諸寺符加朝臣二字、不注名、

官符頒行

〔類聚符宣抄三〕太政官符、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等道諸國司、

令臥疫之日治身及禁食物等事漆條（〇中略）

以前四月已來、京及畿內、悉臥疫病、多有死亡、明知諸國佰姓、亦遭此患、仍錄件狀、國傳送之、至宜寫取、（〇中略）其國司巡行部內、告示百姓、若無粥饘等料者、國量宜賑給官物、具狀申送、今便以官印印之、符到奉行、

正四位下行右大辨紀朝臣　　從六位下守右大史勳十一等壬生使主

天平九年六月廿六日

〔令集解二十八儀制〕一云、每村社置神人、名稱社首、村內之人、緣公私事、往來他國、令輸神幣、或每家量狀取斂稻、出擧取利、預造設酒、祭田之日、設備飲食、並人別設食、男女悉集、告國家法令、知訖卽以齒居坐、以子弟等充膳部、供給飲食、春秋二時祭也、此稱尊長養老之道也、

〔類聚三代格十六〕太政官符

合四箇條事（〇中略）

以前得七道觀察使解偁、今聞諸國司等、官符到日施行諸郡、郡司下知鄕邑、而後（〇後恐誤）相俱點（〇點恐默）附什無事（〇事恐誤）指示、（〇中略）謹請處分者、右大臣宣、依請、

大同元年八月廿五日

〔西宮記臨時六〕二省請印位記事（在行事中）

官符使

官符（無止官符、官事ニ一通爲長案、請印後外記又事ニ一通爲長案、頒七道官符自官下京職、京職各頒行下一通、一國官符尋例遣別使、）

〔令義解 七 公式〕凡京官以公事出使、皆由太政官發遣、所經歷處符移、（謂省臺出符、及府庫寮司出移也、）弁官皆令便送、（謂凡書籍及餘司符移、應下國者、皆送辨官、而請內印、官部附便使送下也、）還日、以返抄送太政官、（若使人更不向京者、其返抄付所在司、謂使人所至留之國、假令陸奧國司赴任、便付路次文書者、取路次返抄、付陸奧國之類、附便使送、即事速者、差專使送、）

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

凡送諸國官符、（略）○中事急者附驛傳、自餘附在京使幷雜掌、

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡（略）○中奏文踏印訖、（略）○註副之官符更下使局、（符直注奏文解文下其司某國及所司之狀、）使局受取須行、（下諸司奏文幷解文、副官符、召總官付之、下諸國、召雜掌付之、）

○按ズルニ、公式令ノ符式ニ據レバ、諸國ニ下ス符ニハ、必ズ其使ノ姓名ヲ載ス、然レドモ現存ノ符、未ダ其使人ノ姓名ヲ錄スルモノアルヲ見ズ、蓋シ中古以降、事急速ヲ要スルニ非レバ、概ネ在京使ノ（四度使ノ類）歸國ノ便ニ附シテ送達セシメ、又五畿七道ニ發遣スル大祓使及ビ伊勢造宮使、宇佐奉幣使等ノ事ニ由リテ、官符ヲ下スガ如キハ、卽チ其使ニ附シタルモノナルベシ、

〔西宮記 臨時六〕近代外印文（略）○中

一國官符、尋例遣別使、

〔將門記〕依前大掾源護之告狀、件護幷犯人平將門及眞樹等、可召進之由官符、去承平五年十二月廿九日符、同六年九月七日到來、差左近衞番長正六位上英保純行、同姓氏立、宇自加友興等、被下常陸下毛下總等之國、

〔日本紀略 二 朱雀〕天慶三年正月廿五日辛卯、遠江伊豆等國連署解狀來云、官符使卜部松見、於駿河國爲群賊被奪取了、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜五年八月十日、前陸奧守源賴義襲討俘囚安倍賴時之口給官符東山東海兩

道諸國、可運尤兵粮之事、公卿定申、又下遣官使太政官史生紀成任、左辨官史生惟宗貢行等、

〔季連宿禰記〕元祿十四年十一月廿二日乙巳、今日卯一點、壹井權現被授正一位神階宣下也、○中略

一今日使紫章朝臣、自陣于直進發河內國也、仍於三條京極人家暫休息、自彼邊乘船、云々高瀨官符可遣

使之許間事、與頭右大辨令申談、付使部藤井重康令齎遣三條京極之休所之處、請取給之由有返答、

官符案紀左(官符知遣候、請印之儀同樣調之、)

太政官符河內國

應奉神位記事

納韓櫃壹合

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宛夫貳人、

使從四位下行左兵衞權佐卜部朝臣紫章　從捌人

神部壹人　　　　　　　　　　　　　　從壹人

右從二位行權大納言藤原朝臣篤親宣、奉勅、爲奉壹井權現神位記、差件等人宛使發遣者、國宜承知

依宣施行、仍須國牧宰潔齋擇定便所、與使者共披讀宣命、然後國司請取位記奉之、不得違失、符到奉

行、

正四位上行右大辨藤原朝臣判　　修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰判奉

元祿十四年十一月廿二日

〔盈春宿禰記〕享保八年二月一日辛亥、今日辰剋、石見國柿本社神階宣下也、○中略

一官符者、如壹井社令持使部藤井重矩、(大被入之、氣賀)令持向于吉田、請取給之由歸申候、

太政官符石見國

應奉神位記事

納韓櫃壹合

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宛夫二人、

使從四位下行侍從卜部朝臣　從捌人

神部壹人　從壹人

右正二位行權大納言源朝臣通躬宣、奉勅、爲奉柿本大明神神位記、差件等人宛使發遣者、國宜承知依宣施行、仍須國牧宰潔齋擇定便所、與使者共披讀宣命、然後國司請取位記奉之、不得違失、符到奉行、

正四位上行左中辨藤原朝臣顯胤加署　從五位上行主殿頭左大史小槻宿禰判奉

享保八年卯年二月一日

官符遞送

〔伊呂波字類抄 由 疊字〕行符ユキフ 七道分給官符之時、道別遣之、官給左右京官、表書云、陸轉遞送之、

〔北山抄 七 都省雜事〕內印之事

若無內印之日、急書可請印者、鹿島使官符、受領任符等類也、上卿令奏事由、令持行符於外記、就御所奏覽、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

凡送諸國官符、〇中略 事急者附驛傳、

〔延喜式 四十二 左右京〕凡辨官及省臺下諸國符、〇中略 等、各受取遞送、

〔類聚符宣抄 三〕太政官符、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等道諸國司、

令臥疫之日治身及禁食物等事漆條〇中略

以前四月已來、京及畿內、悉臥疫病、多有死亡、明知諸國佰姓、亦遭此患、仍條件狀、國傳送之、至宜寫取、即差郡司主帳已上一人、宛使早達前所、無有留滯、〇中略

天平九年六月廿六日

〔享祿本類聚三代格 十七〕太政官符

應禁止開見驛傳官符幷言上解文事

右被右大臣宣偁、國家之事、最害爲先、而如聞、損一箇國、所下官符、路次諸國、各開見、載記之旨、未達彼國、途路之聞、漏泄内外、蹇專輒開見所致之漸也、宜告下諸國、自非國別事行以外、驛傳所下之符、及言上解文、並不得令開、若不遵行、猶致開見、隨狀勘責、永懲將來、國司撿察、莫致乖違、

承和八年八月廿日 ○又見續日本後紀

(類聚符宣抄三)太政官符五畿内東海東山山陰道諸國司 各別作

應轉讀仁王般若經攘除疾疫事

右、略○中 諸國承知、依宣行之、仍須官符到、卽國傳送之、早速前所、取進請文、符到奉行、

造大安寺長官正四位下行左中辨兼内藏頭中宮亮丹波守源朝臣 正五位下行左大史兼周防權介小槻宿禰

萬壽三年五月十三日

(伊呂波字類抄久毀)毀符 政之官符毀日、外記毀之、毎日廳立時、少納言毀之、

(續日本紀淳仁二十)天平寶字八年九月癸亥、勅曰、逆臣仲麻呂奏、右大臣藤原朝臣豐成不忠、故卽左降、今既知讒詐、復其官位、宜先日所下勅書官符等類、悉皆燒却、

(續日本紀桓武三十七)延曆二年七月乙巳、詔曰、略○中 故太宰帥正二位藤原朝臣魚名、乃祖乃父、世著茂功、或盡忠義而事君、或宜風猷以伏時、言念於此、無忘于懷、今故贈以本官、酬其先功、宜去延曆元年六月十四日所下詔勅官符等類、悉皆燒却焉、

(内裏儀式)少納言尋常奏式第五

官符若干枚印賜止奏、勅曰、取之、稱唯、略○中 若有可毀文者、不捺印、勅曰、乾、稱唯、卽奏云、緣其事賜志文若干枚、依事改毀曾、勅曰毀、曾、稱唯、

(延喜式太政官十一)凡毀内印官符者、其請毀之下注事由、外印符准此、

官符誤失

〔中右記〕長承三年七月廿六日癸酉、今日皇后宮御封官符請印、(○中略)件日官符、有沙汰被作改、八月五日可被請印也、於本官符可被破者、

〔西宮記 (臨時十二)〕天慶五年十月、貞公御記云、宇佐使雅文朝臣發向、中使公輔來云、下太宰官符、依承平例、有奉走馬狀、彼時臨時御祈也、而官誤請印了、爲之何、

〔類聚符宣抄 (六)〕權中納言源朝臣道方宣、奉勅、前安藝守藤原良資、申請任中減省官符、須注奏者、内大臣(○藤原教通)宣、而官史誤注申南所上卿宣、仍外記拘留件官符者、早出給可令勘會公文者、

萬壽元年十二月廿九日　大外記兼主税權助助教伊豫權介清原眞人(奉)

出符違注

〔律疏 (職制)〕凡事(○中略)應行下而不行下、不應行下而行下者、各笞五十、(中略)事應行下而不行下、不應行下而行下者、謂應出符移而不出行下、不應出符移而出行下者、各笞五十、

詐爲符

〔法曹至要抄 (上)〕一作官文書事

詐僞律云、詐爲官文書者杖一百、注云、符、移、解、牒之類、

〔續日本紀 (淳仁二十五)〕天平寶字八年九月癸亥、勅、逆賊惠美仲麻呂、爲性凶悖、威福日久、(○中略)乃以今月十一日、起兵作逆、掠奪鈴印、竊立氷上鹽燒爲今皇、造僞乾政官符、發兵三關諸國、奔據近江國、亡入越前國、官軍貢勝、分道追討、(○下略)

〔文德實錄 (十)〕天安二年四月癸巳、先是刑部大丞正六位上石川朝臣宗主、大錄正七位上難波連清宗等、詐稱官宣作省符、放免罪人佐伯宮人等、是日、下兩人於刑官、勘定其罪也、

〔類聚符宣抄 (六)〕中納言藤原卿宣、丹波國定額願皇寺氏人等、申請可停講讀師構領之由、依理不盡、所不判行也、而其官符在昨日廳覽之中、仍從返却、不令捺印、今如聞、官文殿使部大友安則、奸作件符、號先入文、入於外記、爰案主史生偏思有例、輙以受取者、凡辨官請印外記報牒、式條已存、何致違失、而載牒之外、別有受取、是則案主積習成例、外記少納言不加監察之所致也、(○中略)

天慶四年五月八日　大外記伊福部安近奉

〔神宮雜例集二〕一宮司改印事

神祇官符太神宮司、

右太政官去齊衡二年八月十日下中務省符云、得太神宮司從八位下大中臣朝臣伊度人去仁壽二年十一月三日解狀偁、太神宮司印、依無分付司中公文、田圖名籍符返抄等、捺太神宮之印也、今以商量、於事情不當、望請停宮印、被下公印者、官加覆審、所申有實、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請者、省宜承知、依宜行之者、鑄作件印、已畢、宜付下彼宮司者、廼遣如件、宮司宜承知依件順用、符到奉行、

從五位上行大副兼內藏頭大中臣朝臣逸志　正六位上行大史糸男代海山〇山字以無、據大神宮諸雜事記補、

齊衡三年二月廿七日

〔神宮雜例集二〕一外宮附四至內實撿并人宅壞退事

神祇官符伊勢太神宮司、

可定置豐受太神宮四至事

近四至去神宮大垣外四方各肆拾丈

遠四至東限赤峯并椅手岡、南限宮山、西限蓮尾岡并山端岡、北限宮河、

右得宮司去十一月廿七日解狀偁、彼宮神主解狀偁、謹撿案內、太神宮四至東南西深山無有人宅、北限宇治河者、其程去宮一里餘、此內不住人宅、禁制尤嚴、此則爲觸穢事也、此宮四至未被定置、〇中略望請准太神宮例、將被定置遠近四至、但汚穢之時、郡司行事出四至外者、司加覆勘、所申有實、仍言上如件、望請官裁依件定以嚴神事者、官依解狀下符如件、宮司宜承知、立彼四堺牓示、不可令致汚穢、符到奉行、

伯大中臣朝臣安則　大祐齋部□□

會符

大副大中臣朝臣奥生　　少祐大中臣正廉
少副大中臣利世　　大史直助監
延長四年四月十一日　　小史戸□□

〔延喜式太政官十一〕凡免除官物、先下符民部省、省修符請印、不得直下符於國、

〔類聚符宣抄六〕正三位行中納言兼民部卿伴宿禰善男宣、凡可經民部之色、惣用省符、而繁劇細碎、不堪如式直下承知實足棄累、但至免除之物、須必用省符、外記宜留意勘返、不可略漏、

・貞觀四年七月廿七日　　大外記賀茂朝臣岑雄奉

〔延喜式民部二十三〕凡免除雜官物符、下省者、即承知符先下所司、若有執申、十五日內令勘申、過此之後、請印下符、以承知符日、爲施行符日、

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、皆據去年帳、勘其出入、但死亡、篤癃、廢疾、服侍、隱首括出、幷中男鄕戸課丁等色、計會別簿、其依符入課、及雜色等類、勘合省符、若違符過免、幷可進而不進者、並即勘出、徵其課役、次計會去年大帳後死帳、與今年死亡帳、若名在後死帳、不載死亡帳者、亦勘出之、次勘神寺諸家封戸、幷應定納官人數及賦物、即勘抄損益惣目、明年正月一日申省、訖勘造應給返抄之狀、送主稅寮、即勘出擧帳之狀、便錄主計狀尾、官人署名返送、訖即申省、其依符所免、爲符損、○註略依符所進、爲符益、

〔延喜式民部二十二〕凡式部治部兵部等、入色之徒、應徵免課役、季帳者、四孟月十六日、各申官、官符幷帳下省、省更勘辨、每國造符、至後孟月申官行下、○中略

凡十一月新嘗會黑白二酒料米、九月下旬、省下符畿內、即舂省營田稻、送造酒司、

〔延喜式民部二十二〕凡載省符所行、諸院諸家官丁者、各注其散行之頭附、

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下行目小野臣淑奈麻呂

隱伎國送到移壹拾貳條

天平五年八月廿二日移民部省下符壹道（擬戸籍状）

〔東大寺要錄六〕雜格佛法僧中零

民部省符山陽道諸國司等

大安寺　藥師寺　興福寺　大和國法華寺

右寺別一千町

大和國國分金光明寺

右寺四千町（略）〇中

以前被太政官去天平勝寶元年七月十四日符偁、奉今月十一日勅偁、去四月一日詔書、寺々墾田地許事者、宜依件數施行、今以狀下、符到奉行、

天平勝寶二年三月廿九日

〔政事要略五十九交替雜事〕民部省符　定諸國事力副丁事、右衞士仕丁、縻土在京、以免調庸、更宛食粮、兼給副丁五人、以爲遠資、至于事力、不去鄕國、口量勞逸、理難一同、宜宛副丁四人、永爲恒例、

以前被太政官去閏正月三日符偁、造式所起請具件如右、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、宜付所司施行者、省宜承知依宣行之者、諸國承知、依件行之、

弘仁十年（〇十年、年誤）十二月廿三日

〔壬生家文書一〕民部省符　若狹國司

應奉宛中宮職御封貳拾伍烟仕丁壹人事

右被太政官今年七月十一日符偁、內大臣宣、奉勅、件封貳仟戸內、減肆分之壹、令奉宛者、應宛封戸具狀、謹以奏聞、奉勅依奏者、國宜承知行之、符到奉行、

正五位下行大輔藤原朝臣（判）　正六位上少錄菅野朝臣（判）

節度使符

大宰府符

職符

承保元年八月廿八日

〔朝野群載 諸國公文 二十七〕民部省符　主計寮

不收給佐渡國承德元、二、康和元、二、三、四、五、長治元、二、嘉承元、二、天仁元、二、天永元、二、三、永久元、二、三、四、五、元永元、二、并貳拾參箇年封戶事、

右年々封戶、不收給之狀如件、寮宜承知依件勘之、符到奉行、

正六位上行大丞藤原朝臣 在判

天治元年十二月　日

正六位上行少錄大江朝臣 在判

〔延喜式 中務 十二〕凡諸氏貢氏女、皆簡年四十已下、卅已上時無夫者、造解文、親署共署申省、作奏文奏之、畢勅送內侍司、卽下符縫殿寮、

〔延喜式 兵部 二十八〕凡廢置御馬驛家軍毅兵士器仗等者、造省符副案內進官、請印施行、但留案捺省印、

〔延喜式 刑部 二十九〕凡流移罪人者、省申官、遞請左右兵衞爲部領、卽授省符路次差加防援、令送前所、

〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國天平六年計會帳

石見國送到移貳拾漆條

天平五年七月　十三日、移節度使符壹道、(差點儲士井國司郡司等應會集狀)　十四日、移節度使符壹道、(國別應儲事狀 ○中略)

節度使符參拾貳條

天平五年八月　一七日符壹道、(將運雜工生伊福部小鳥等合六人狀)　以八月廿二日到國、○下略

〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下行目小野臣淑奈麻呂

筑紫大宰府符壹條

天平六年七月　一二日符壹道、(向筑前國筑紫府旅師從八位下生部勝麻呂等合四人狀)　以七月十三日到國、

〔續修東大寺正倉院文書 四十二〕職符　東市司

國符

鏁一具　正倉料

右、從市平價進上、依用可令捺鑰下、至今日不上、此今可用、知狀進送、持來之日、將給價直、符到奉行、

天平七年十一月五日　　少屬衣縫連人君

〔朝野群載二十一雑文〕左京職符

九條二坊二保

常澄宣方

右人補任刀禰職已畢、保内宜承知令執行之狀如件、故符、

康和五年二月十三日

大夫源朝臣　　少進紀

〔伊呂波字類抄古疊字〕國符

〔續修東大寺正倉院文書三十五〕國符　坂田郡司

東大寺天平寶字四年料租米百九十九石五斗三升

右、得造寺司今月五日牒偁、遣彼郡石山寺食料、便充件租者、郡宜承知依數進上、不得延遲、符到奉行、

記事忍坂忌寸麻呂

史生山口忌寸眞島

天平寶字六年四月八日

〔弘法大師年譜七〕國符　伊都、那賀、在田郡司、　右、得今年七月八日官符偁云々

守藤原朝臣文山　介縣江繼人　掾藤原朝臣

弘仁七年七月廿八日

〔朝野群載六神祇官〕國符

清原則房

右人補任小國宮司職如件、宜承知依件行之、符到奉行、

承保三年八月廿七日

守兼中宮少進藤原朝臣

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國符　赤穗郡司

應免除太皇太后宮大夫〇藤原公任家御領有年庄司寄人等臨時雜役事

司掾人〇中略

寄人肆拾壹人〇中略

右彼家去十月十五日牒、今月十三日到來偁、件庄代々相傳之舊地也、而本公驗等、去四月十三日、左衞門督〇藤原教通三條家燒亡之次、紛失已了、仍如本立券、免除司寄人等臨時雜役者、所仰如件、郡宜承知依件免除、不可違失、符到奉行、

大介藤原朝臣說孝

權大掾大和宿禰

大掾播磨宿禰

佐伯朝臣

權大掾播磨

大目刑部

小目刑部

長和四年十一月十六日

〔雜筆要集〕留守所符書樣

留守所符

可令下行諸色ム例給米十石事

符、件米爲鄕未進、可令下行之狀如件、以符、

年號ム月ム日

々々々
々々々
目代々々

藤原朝臣判

○按ズルニ留守所符トハ、卽チ國司ノ符ナリ、

〔續修東大寺正倉院文書四十二〕司符　經所領具原生人等

裂軸肆伯枚

右依彼所狀、繪料卽付生人、充遣如件、故符、

判官川內畫師祖足
上毛野君眞人

天平勝寶七歲八月廿九日

○按ズルニ、右ハ造東大寺司ナリ、

〔神宮雜例集二〕司符　飯野郡司

可早任先例進上大神宮御遷宮料天平賀造進穴祭物事

鐵壹口　鋤一口　鎌一柄〇中略

右件祭物等、任先例早可進上之狀、下符如件、宜承知不可違失、以符、

政所符

大司大中臣朝臣在列
權大司大中臣朝臣
少司大中臣
仁安四年四月　日

○按ズルニ、右ハ伊勢大神宮司ノ符ナリ、

〔續修東大寺正倉院文書四十三〕政所符　繪所領等
白綠卅三斤十兩二分　同黃十三斤五兩一分　胡粉七斤十兩唐　丹二百九斤三兩二分　錄
薄四百卅枚　金薄三百七十五枚　膠十八斤六兩　墨四廷一三廷唐一廷 唐角 大一 小二 小〇中略
右彩色大佛殿廂之天井幷須理等板料、下充如件、宜承知此狀、〇此間恐有脫字、到奉行、
判官川內惠師
次官高麗朝臣　主典美努連奧万呂
天平寶字二年三月三日

〔續修東大寺正倉院文書四十四〕政所符　經所
彩帙貳拾枚
右爲用中宮御願花嚴經之帙、充經所如件、故符、
判官上毛野君眞人
七月十七日　付與原生人

○按ズルニ、右ハ東大寺政所ノ符ナラン、

雜載

〔上野國多胡碑文〕弁官符、上野國片岡郡、綠野郡、甘良郡、幷三郡內三百戶、郡成給羊、成多胡郡、和銅四年三月九日甲寅宣、左中辨正五位下多治比眞人、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、右大

臣正二位藤原尊、

〔上野國三碑考〕多胡郡和銅碑

辨官符、今按るに、此碑文辨官符を寫記せるにあらで、其符旨を記せるものなるが、その文法いと拙く、調はぬところあるは、羊が私に書て建たるものなるべし、〇中略さて辨官は職員令太政官の義解に、謂太政官内總有三局、小納言、左辨官、右辨官是也、大納言以上、即兼通攝也、と見えたり、政事の旨に依て、大臣納言の宣をも傳る職にて、其傳宣の符を辨官符と云へり、〇中略かくて勞例によりて、此碑文を推考るに、三月九日甲寅宣とあるは、下文に記せる左大臣右大臣の内一人の宣なるべきを、左右の大臣を記せるは、當時在官の大臣の名を、後世にも顯はさむとなるべし、左中辨多治比眞人は、傳宣せし人を顯はせるなり、知太政官事穗積親王は、符文には載られつらめど、當時上官の一人なれば、御名を顯はせるなり、この姓名の記しざまによりても、符旨を私に記せるものなることを推量りえるべし、又辨官の辨を弁とも書ける、此はか古人の書るものにも見えて、今も然り、字義は異なれど、通音によりて書例となれるものなるべし、

〔純友追討記〕十二月〇天慶二年廿六日壬戌、資剩純友郎倶等、放矢如雨、遂獲子高、即截耳割鼻、〇中略公家大驚、下固關使於諸國、且於純友給敎喩官符、兼預榮爵、叙從五位下、〇又見古事談

〔扶桑略記〕二十五村上天曆七年三月廿日己亥、權少僧都明珍申給官符、向伊豫國溫泉治病、

〇按ズルニ、春記、長曆三年十二月二十五日ノ條ニ、雖地下人、或向溫泉之輩、給所牒、是例也、ト見エタレバ、當時官人私事ニ依テ、諸國ニ赴ク時ニモ、官符及ビ廳人所ノ牒ヲ給ヒシコト知ラルルナリ、猶ホ牒ノ條ヲ參看スベシ、

〔陸奥話記〕於是朝家止兼長朝臣之任、以源朝臣齊賴爲出羽守、令其擊貞任、而齊賴作蒙不次恩賞、全無征伐之心、諸國軍兵兵糧、亦以不來、如此之間、不能重攻、貞任等益横行諸郡、劫略人民、經淸率數百

甲士、出衣川關、放使諸郡、徵納官物、命曰、可用白符、不可用赤符、(白符者、經清私徵符也、不捺印、故曰白符也、赤符者國符也、有國印、故曰赤符也、)

下文

下文ハ、クダシブミト訓ズ、上ヨリ下ニ下ス文書ノ義ナリ、大藏省ニハ切下文ト云フモノアリ、白河上皇院政ヲ行ヒ給フニ及ビテ院廳ノ下文アリ、爾來女院法親王ノ廳ヨリ、檢非違使廳、留守所、及ビ攝關大臣家政所、勸學院政所、社寺等ニ至ルマデ、往々下文ヲ以テ事ヲ令スルノ風ト爲レリ、而シテ其書式ハ、初ニ何々下ト云フ文字アリテ、文尾ニ故下、又ハ以下ノ文字アルヲ例ト爲ス、

院廳下文

〔官職難儀〕廳宣と申は、檢非違使廳宣事也、院廳下文をも廳宣と云、去ながら檢非違使別當宣のごとくをし出しては申さぬ也、

〔神皇正統記〕(白河)此御代には、院にて政をきかせ給へば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、されどこれより又ふるきすがたは一變するにや侍りけん、執柄世をおこなはれしかど、宣旨官符にてこそ天下の事は施行せられしに、此御時より、院宣廳の御下文をおもくせられしによりて、在位の君、又位にそなはり給へるばかりなり、世のするになれるすがたなるべきにや、

〔法曹類林〕(二百公務)官外記明法博士等勘申散三位上臈與參議三位下臈署所上下事
左衞門督藤原朝臣(○實行)定申云、(○中略)抑白河院廳下文幷月奏等、顯季卿與爲房卿、有署所論之時、猶以散三位被書上臈、是依授位前後之故也者、例不可外求、尤可爲勝躅、就中當院(○鳥羽)偏被移彼院廳不被改其例、無殊難歟、

〔東大寺文書〕院○後白河廳下　伊賀國在廳官人等、東大寺所司等、

可且依文書理、且任國司廳宣、永爲當寺領、同所司等訴申、當國名張郡黑田庄出作、幷同郡內新庄等之事、

副下國司廳宣

承安四年十二月十三日

別當權大納言兼中宮大夫藤原朝臣在判

權大納言藤原朝臣在判

權大納言藤原朝臣

權中納言兼左○左恐右誤衞門督平朝臣在判

參議右兵衞督平朝臣在判

太皇太后宮權大夫藤原朝臣在判

右近衞權中將兼皇太后宮權亮藤原朝臣在判

修理左宮城使左中辨藤原朝臣在判

散位高階朝臣

遠江守藤原朝臣在判

權右中辨藤原朝臣

主典代大藏大輔中原朝臣在判

判官代左少辨兼右衞門佐平朝臣在判

左衞門權佐藤原朝臣

左少辨藤原朝臣在判

兵部大輔藤原朝臣

(神護寺所藏文書)院廳下　丹波國吉富庄官等

可早以當庄爲神護寺領事

右件庄内於宇都鄕者、依爲源氏舊領、前兵衛佐頼朝朝臣申請所奉寄彼寺也、至于新庄者、有別御願、同所被施入也者、以件鄕并庄、可爲神護寺領之狀所仰如件、庄官等宜承知、勿違失、故下、

元暦元年五月十九日　　主典代織部正兼皇后宮大屬大江朝臣 花押

別當大納言兼皇后宮大夫藤原朝臣 花押

判官代勘解由次官兼皇后宮權大進藤原朝臣 花押

權大納言藤原朝臣 花押　　木工頭平朝臣 花押

民部卿藤原朝臣 花押　　右衛門權佐藤原朝臣 花押

權中納言兼左衛門督藤原朝臣 花押　　左衛門權佐兼皇后宮大進藤原朝臣 花押

參議修理大夫藤原朝臣 花押　　右少辨平朝臣

參議左大辨兼近江權守藤原朝臣 花押

大藏卿高階朝臣 花押

右京大夫藤原朝臣 花押

從三位平朝臣 花押

左近衛權中將兼加賀權介源朝臣

修理左宮城使左中辨兼皇后宮亮藤原朝臣 花押

造東大寺長官右中辨藤原朝臣 花押

式部權少輔藤原朝臣

權右中辨藤原朝臣 花押

〔京都雨森文書〕七條院廳下文

七條院（藤原殖子、高倉妃）廳下　大和國檜牧庄官等

可任權律師長嚴寄文、爲御領事

在管宇陀郡　四至（東限嶺峯、西限比曾口、南限鷹峯、北限下津尾）

右今年八月日、彼長嚴寄文偁、件庄者縣清理開發私領也、清理讓縣仲子、仲子處分子息僧快秀、快秀處分舍弟平孝通、孝通讓加賀前司賴房、賴房讓子息僧寂覺、寂覺沽却眞源、眞源又沽却守廷、守廷處分守遠、相傳數代之間、敢無異論、而守遠知行之時、大夫局親房女始致濫妨之剋、屬敎覺僧都致沙汰之間、寄進輸勝院領、被停止局妨畢、而保元之比、敎覺勤勸之間、彼大夫局雖不帶一紙文書、得折節便宜、又令押領畢、但相傳文書有限之故、守遠以件手繼等正文、讓與嫡男平相遠、相遠處分嫡男守相、爰守相以彼文書正文等所讓賜于長嚴也、而敎覺僧都門弟寬海阿闍梨申云、讓與敎覺之時、正文等悉以相具畢、今守相所進文書者、更非正文云々、仍寬海雖進文書、又案文也、守相申云、祖父守遠讓敎覺之時者、令獻實狀幷文書案畢、全不相具正文、是又常例云々、依之被相尋正文於寬海之處、令燒失畢云々、令燒失者、定有紛失狀歟、可進之由被仰下之處、紛失之狀又無之云々、寬海所帶文書已無正文、又無紛失狀、尤有疑殆歟、而守相所帶文書爲謀書之由、寬海稱申之條、還顯其非、以之可被察歟、仍寬海文書等悉被返與畢、又當國（大夫局方雜掌）所進文書僞作代々之手繼、而稱相傳正文之間、疑殆甚以多云、沽却之文書云、直物之請文、前後判署、彼此已相違、謀略之蓄、其過重者也、仍件文書等、同以被返下畢、今被尋彼旁文書、不知守相所帶之證文、早停止大夫局方之押領、任相傳文書之理、爲令領掌、以件本券所寄進當院御領也、爰又於領家職者、任長嚴讓限、永代欲被補任矣者、爲御領任文書之理、可停止彼等濫妨、但於領所職者、任長嚴附屬、可令相承之狀、所仰如件、庄官等宜承知、不可違失、故下、

建久九年十月　日　　主典代右衞門少志安信（花押）

別當大納言藤原朝臣　　判官代淡路守藤原朝臣

大納言藤原朝臣　　勘解由次官藤原朝臣（花押）

權大納言兼右近衞大將皇后宮大夫藤原朝臣（花押）　　紀伊守平朝臣（花押）

前權大納言藤原朝臣（花押）　　皇太后宮權大進藤原朝臣

中納言兼民部卿藤原朝臣（花押）　　民部大輔藤原朝臣（花押）

權中納言藤原朝臣（花押）　　越前守藤原朝臣（花押）

皇后宮權大夫兼右衞門督藤原朝臣　　前常陸介藤原朝臣

造東大寺長官參議左大辨勘解由長官讃岐權守藤原朝臣（花押）　　治部權大輔平朝臣（花押）

修理大夫藤原朝臣（花押）　　薩摩守藤原朝臣

右兵衞督藤原朝臣（花押）　　前遠江守藤原朝臣（花押）

右京大夫藤原朝臣　　丹後守藤原朝臣（花押）

右大辨兼文章博士能登權守藤原朝臣

伯耆守藤原朝臣（花押）

丹波守藤原朝臣（花押）

右馬頭藤原朝臣（花押）

修理右宮城使右中辨藤原朝臣（花押）〇本書有誤脫、以東寺百合文書補正、

法親王廳下文

〔天野山金剛寺文書〕二品法親王〇守覺法親王、號北院御室、廳下　金剛寺所司等

可早任解狀旨、以當寺爲北院末寺、每年辨備修正壇供餠佰枚事、

右得去二月日彼寺解偁、當寺者無緣之道場、有驗之伽藍也、佛聖難備、立錐之地不領、僧侶無供、一鉢

之貢備空唯爲八條院女○鳥羽皇子御祈願所、鎮勤不退之御願、奉祈無窮之仙算、而當國住人源貞弘、歸依之心不淺、以寺邊私領田畠施入佛聖燈油料之後、國使亂入致其煩之間、可免除官物以下國役雜事之由、申請國司廳宣、御成賜後白河院廳御下文、一院○後鳥羽御在位之時、被下宣旨畢、件等子細、具于所進狀、以彼時之風聞、備□來之龜鏡、雖背嚴旨可致濫妨哉、然而殊有存念之趣、重爲募御勢、永所寄進北院末寺也、於寺務者任宣旨狀、大法師阿觀門跡相承不可有相違、但寺領狹少、田畠不幾、彼百枚御檀供之外、臨時寺役雜事不可被宛催者也、望請廳裁、任申請可爲末寺之由、被成下廳御下文、將致年貢之勤者、早任狀、以彼寺爲北院末寺、令辨備修正檀供餅百枚之外、宜停止臨時課役、於寺務者、大法師阿觀門跡相承、任彼讓不可有相違之狀所仰如件、寺宜承知、勿違失、以下、

建久九年三月　日　　公文法師判

別當法印權大僧都　　大法師判

權大僧都在判　　大法師判

權少僧都在判　　散位中原朝臣判

法眼判　　皇太后宮大屬中原朝臣判

法眼判　　院司威儀師判

法眼　　威儀師判

法眼判　　威儀師判

權律師判　　威儀師判

權律師判　　前威ト儀師

法橋判　　威儀師判

法橋判

法　橋列

法　橋列

法　橋列

法　橋列

大藏省切下文

〔職原抄上〕大藏省唐名大府寺

此省掌諸國租税諸公事之時、成切下文、令支配于國々矣、

〔標注職原抄別記下〕切下文（キリクダシブミ）略○中もし京都に於て、公事の雜用に充られむとするに、大藏の貯物不足なる時は、省より未進の國々へ、切下文といふものを送りて、催促せらるゝなり、標注に云る如く、切下文は、即今世の切手切符の類也、

〔夕拜備急至要抄上八月〕一四日北野祭略○中

幣并饗料任率分所大藏省切下文催諸國之外無他、

〔兵範記〕仁安三年九月七日乙丑、神祇官發遣五畿七道諸國幣使、略○中

件大奉幣幣物、以大藏省切下文、付諸國、日來催促、略○下

撿非違使廳下文

〔雜事要集〕撿非違使廳下文樣

撿非違使廳下　攝津國多田館

應被早搦進強盜張本某身事

副下　強盜交名注文一紙

右得去何日加輿丁友久解狀偁、謹考案內、去何日夜大強盜打入于友久住宅、令殺害友久妻子二人畢、即追尋行處、追得一人手負、捉而問之、皆是多田藏人滿重之郎從也云々、略○中然滿重恣振私之武威、失隣之公人、何況乎民乎者、早且爲傍輩之誡、召上彼犯人等、一々欲被禁獄者、如解狀者罪科不輕、

違任、注文旨、可召進之由所仰如件、宜承知、不可違失、故下、

年號某月ム日　　　ミミミミ

檢非違使別當ミミ

〔春記〕長暦四年八月三十日壬子、命〔○藤原資房〕云、前司〔○三河〕卒去之後、猶不可用留守所切文歟、可隨御定、者、

〔標注職原抄別記〕下切下文〔○中略〕長暦四年八月卅日春記に、命云、前司卒去之後、猶不可用留守所切文歟、とあるを見れば、切文ともいふ歟、または切字の下に、下字を脱せる歟、

〔寶簡集七〕留守所下　斗張郷幷尾道倉敷

可早堺四至打定牓示事

國使散位淸原有時

右去二月十八日御敎書、今月八日到來、狀云、斗張郷幷尾道倉敷事、先度隨御廳宣到來、令成施行符畢者、早堺四至可打定牓示之由者、任御敎書旨、可打定牓示之狀如件、宜承知依件行之、以下、

仁安四年四月廿二日

散位平朝臣

品治宿禰（花押）

淸原眞人（花押）

源　朝臣（花押）

淸原眞人（花押）

總大判官代淸原眞人（花押）

淸原眞人

目代散位橘　朝臣

攝關大臣家政所下文

〔常陸國總社文書〕可令早停止石河兵衞入道朝日非分競望、且任院宣國宣旨、且依重代相傳理、以清原師行爲當社神主職、神事以下社役任先例勤仕事、

右神主職者、師行爲重代相傳之所職之處、朝日帯七郞□郞師信之讓狀之由稱之、雖掠賜御廳宣、兩方糺明之處、如師行申者、師信親父師成、一旦雖掠給舍兄師元〈師行祖父〉所職、爲非據之間、無程被改替師元、如元令還補、經數十年、令死去畢、何以不知行之仁子孫讓狀可備龜鏡哉之由申之、如朝日申者、師信□夢想告令讓于朝日之間、就彼狀賜廳宣之由雖申之、改替仁讓不足證文之上、如去年七月十一日院宣者、在廳公人供僧名田畠、或沽却、或寄附、武家被官、或入置傍官在廳名之、有限公田減失佛神事國役怠轉、自今以後者、可糺返本主子孫云々、□同年十八日國宣者、任院宣可令安堵本主子孫之由明白也、此上者、以先日廳宣趣、雖破後日院宣者、且停止石河兵衞入道朝日非分競望、且任重代相傳道理、且依嚴重院宣國宣、師行爲社務職、令□以下御神領進退領掌、御神事以下社役無緩怠可令勤仕之狀□國宣承知、勿違失、以下、

弘安九年二月　日

國司代左近大夫將監橘朝臣〈花押〉

〔朝野群載七攝籙家〕政所御下文

攝政右大臣家〈藤原忠實〉政所下、伊勢國稻生社、幷栗眞御庄、

可早任年來例、且停止彼此非論、且召進濫行下手人事、

稻生社四至〈限西國府東岸河　限南井手橋南畔〉〈限東白子濱　限北奄藝川曲郡堺〉

栗眞庄四至〈限□□　限□□〉〈限□□　限□□〉

右以彼御庄解狀、令問社家之所、陳狀云、吉田大明神、依無指封戸田畠、敢無守護神民、因玆年來件社爲末社、以其地利、所勤仕時節供祭也、是亦諸社一同之例也、而御庄住人、耕作神田、旁構謀計、猥所押取也、爲糺子細、神民等度々行向之所、助任所從等帯弓箭、去長治三年十一月頃、神人五六人所打損

也、件下手人可召進之由、雖被仰下、未被決斷之間、濫行彌甚云々者、早任年來例、停止非論、兼可令召
進下手人之狀、所仰如件、社家宜并庄司等宜承知依件行之、不可違失、故下、

嘉承二年十二月日　　案主紀

別當式部大輔藤原朝臣　　大從主計允佐伯
散位高階朝臣　　知家事大膳屬大神
右大辨兼近江守平朝臣　　左京屬中原
前常陸介高階朝臣　　大炊屬笠
太皇太后宮權亮源朝臣　　左兵衛志宗岡
前淡路守源朝臣　　左衛門府生清原

〔古文書類纂上攝政家政所下文〕後鳥羽天皇文治四年攝政九條兼實政所下文

攝政家政所下　和泉國在廳官人并久米多寺
可早任國司廳宣并伊與守源季長朝臣寄文狀、以彼久米多寺、爲九條御堂末寺、免除他役、毎年備
進修二月壇供餅佰貳拾枚事、
右□□寄進狀云、件寺者、□□□□□時所相傳伊勢所知松山御厨也、其後代々國司敢無其妨、次第
廳宣已以炳焉、是則寺領田租本自爲不輸地之故也、○中略早任件等狀、以彼寺、爲九條御堂末寺、免除
他役、宜毎年備進壇供餅之狀、所仰如件、在廳官人并久米多寺承知、□□□□不可違失、故下、

文治四年十二月日　　案主中原

別當彈正大弼高階朝臣　　大從安倍
大藏卿兼備後守藤原朝臣花押
造興福寺長官右中辨藤原朝臣花押

權□□辨藤原朝臣
右衛門權佐兼和泉守藤原朝臣 花押

〔寶簡集二十二〕按察使家〇〇〇〇光親〇藤原政所〇下〇　神野眞國御庄官等所
可早御使御厩舍人近重相共致其沙汰、且停止柄淵庄新儀押領、且追却件使事、
右當御庄內眞國方、於三分之二者、爲彼庄被押領云々、相論雖經數代、々々無其妨之處、始自去閏六月廿五日、押領石走村之上、近曾亦加納最中在家等之由、御庄官所言上也、如狀者、自由之新濫也、縱有由緒者、可遂子細、未斷之間、無左右令掠領之條、結構之趣、理豈可然哉、早停止新儀妨、且御使相共可令追放件使等之狀、所仰如件、以下、

建保四年十月廿五日　　案主左史生高橋 花押
令前大舍人允中原 花押　　知家事左史生中原 花押
別當西市正大江朝臣 花押
中宮大屬中原朝臣 花押
散位中原朝臣 花押
前筑後守大江朝臣 花押
中宮權少屬兼右衛門大志中原 花押

勸學院政所下文

〔春日神社所藏文書〕勸學院政所下　大和國葛下、忍海兩郡司、并石井庄官等、
可早停止上人行俊妨、令僧尊珍領掌當庄事、
右尊珍訴狀偁、當庄者、本領主櫻島重經讓嫡男經成、又經成讓外孫阿闍梨玄信、次玄信讓與嫡弟子尊珍畢、既二百餘歲之間、先祖相傳更無妨、且手次證文等披見畢、爰行俊不帶一紙證文、寄事於大峯緣起、假企非論之剰、被下氏院、經對問之處、行俊申云、葛上郡（限東小山、限西葛木峯、限南新井鄉、限北奧田鄉）則四至內役行

者誕生所也、仍山臥長圓等知行來之處、長圓死去之剋、延久二年以後、始重經押領、傳之孫子、緣起相傳之行使、可知行之由所稱申也、凡行使一々狀、併虛誕也、石井庄者、稱申四至之外、去參拾餘町、則他郡葛下、忍海兩郡內也、勿論之事也、次重經延久以後申押領之由、如何、重經者、延久以往逝去者也、延久以前、往昔之時、重經領掌證文等明鏡也、此之上行使不能延申、且問注狀顯然也、爰先度被下院宣長者宣畢、重任理可被宣下者、停止行使妨、令尋珍可知行之狀、依長者宣所仰如件、不可違失、故下、

文治二年十二月五日

知院事右史生高橋 花押

別當興福寺長官修理左宮城使左中辨兼阿波介藤原朝臣 花押

大學允藤原 花押

陸子藤原

〔春日神社所藏文書〕使權專當維智、大知事光實、仕丁二人、

五師所下　葛上、葛下、忍海三箇郡刀禰司等所、

可早任下知、停止緣起聖人使者狼藉、兼糺返所押取物等、如員事、

右件使者等、不帶指院宣長者宣、寺家御下文、號聖人之下知、亂入彼三箇郡鄉々庄々、致濫妨之間、或淩躒住民、或追捕取種々物等之由、所々有其訴、事若實者、甚以不當也者、早件使者隨見來搦進其身、兼又所押取物等、如員可糺返之狀、依衆議所仰如件、在郡刀禰司等宜承知、不可違失、故下、

文治元年九月　日

五師所

大法師 花押

大法師 花押

大法師 花押

大法師 花押

大法師

〔寶簡集二十六〕金剛峯寺政所下　荒川御庄官等

早可令停止事

右、美福門院廳御下文云、當山執行相從、大衆相共令致沙汰、偏任當山之最可期三會之曉也云々者、若挿非理之古劵、寄訴訟於權門、或觸臨時之沙汰、取强緣於京都、於如此之輩者、忝違背令旨、偏蔑如御山者也、永不承引當傳子孫之狀、執行檢校、阿闍梨幷大衆議定如斯、庄官等宜承知敢不可違失、故下、

平治元年九月　日

執行檢校阿闍梨傳燈大法師花押

山上預法師花押

阿闍梨傳燈大法師花押

久住者法師花押

阿闍梨傳燈大法師花押

久住者法師花押

阿闍梨傳燈大法師花押

久住者法師花押

阿闍梨傳燈大法師

久住者法師

阿闍梨傳燈大法師花押

久住者法師

山籠大法師花押

久住者法師花押

山籠大法師花押

久住者法師

山籠大法師

久住者法師花押

山籠大法師花押

久住者法師花押

山籠大法師

久住者法師花押

山籠大法師花押

久住者法師花押

山籠大法師花押

久住者法師花押

山籠大法師花押

久住者法師花押

山籠大法師
山籠大法師（花押）
山籠大法師（花押）
山籠大法師（花押）
山籠大法師（花押）
山籠大法師（花押）
山籠大法師（花押）
山籠大法師
山籠大法師
山籠大法師（花押）
山籠大法師
年預山籠大法師（花押）
山籠大法師
山籠大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）

久住者法師（花押）
久住者法師（花押）
三昧大法師（花押）
三昧大法師（花押）
三昧大法師（花押）
三昧大法師
三昧大法師（花押）
三昧大法師

入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
行事入寺大法師（花押）
入寺大法師（花押）
入寺大法師

入寺大法師花押
入寺大法師花押
入寺大法師花押
入寺大法師
入寺大法師
入寺大法師花押
入寺大法師
入寺大法師
入寺大法師花押
入寺大法師花押
入寺大法師
入寺大法師花押
入寺大法師
入寺大法師花押
入寺大法師花押
入寺大法師花押

〔寶簡集入〕熊野山政所下　備後國先達神人等

可早停止亂入當國大田御庄内致狼藉事

右先達神人等狼藉者、本自有勅制之上、近日殊依金剛峯寺之訴、重可加禁遏之由、所被下院宣也、於自今已後者、亂入彼御庄内、不可致無道之狼藉、若有子細者、可言上御山之状、所仰如件者、宜承知、敢

勿違失以下、

正治二年五月　日

公文上座法師花押

正權寺主法師花押

通目代法師花押

權少別當法師花押

三昧別當法師花押

古事類苑

政治部七

上編

表

表ハ、皇太子以下、百官ヨリ庶民ニ至ルマデ、事ヲ錄シテ天皇ニ上ル書ヲ謂フ、文武天皇ノ令ヲ定ムルニ至リテ、始テ上表ノ式ヲ制ス、並ニ臣某、及ビ妾某ト稱シ、只名字ノミヲ稱スルヲ得ズ、但シ太上天皇ニ上表セシコトモアリ、而シテ五位以上ノ官人、上表スルアレバ、之ヲ中務省ニ送ラシメ、卿以下之ヲ檢シテ後、内侍ヲシテ事狀ヲ奏セシメ、然ル後之ヲ上進セシメタリ、

太上天皇封戶仗衞等ヲ辭スルアレバ、天皇必ズ御上表アリテ、叡旨ニ從ヒ給ハズ、又天皇讓位ノ時、新帝抗表シテ、辭讓スルコトアリ、之ヲ義讓ノ表ト云フ、但シ兄弟皇位ヲ繼承シ給フ時ニ限ルナリ、然ルヲ後冷泉天皇ハ、御父後朱雀天皇ヨリ受禪ノ時、上表ノ禮ヲ行ヒ給ヒ、又順德天皇ハ、御兄土御門天皇ヨリ受禪ノ時、御父後鳥羽上皇ノ命ニ依リテ、上表ノ禮ヲ缺キ給ヒシハ、並ニ違例ナリ、宜シク帝王部讓位篇ヲ參看スベシ、

諸臣上表シテ、其官ヲ辭スルヲ辭官ノ表ト云フ、後世ハ辭官ノ外、上表スルコトナキヲ以テ、辭官ノ表ヲ上表ト稱スルコトヽナレリ、辭官ノ表ハ辭官篇ニ詳ナリ、參照スベシ、又官職ヲ去ランコトヲ請フノ表、官職ヲ他人ニ讓ルノ表、致仕ヲ請フノ表アリ、又婦人辭官ノ表、僧綱辭官ノ表等アリ、皇太子、親王、封戶ヲ辭シ、又諸臣封戶隨身ヲ辭スル爲ニ、上表スルコトアリ、

其儀大略辭官ノ表ニ異ナルナシ、

國家慶事アレバ、百官必ズ闕ニ詣リテ、賀表ヲ奉ル、即チ立后、立太子、御元服、朔旦冬至、及ビ祥瑞ノ賀表等コレナリ、又諸臣諫言ヲ上リ、及ビ意見ヲ上リ、又諸事ヲ申請スル爲ニ、表文ヲ上ルコトアリ、其他上奏ノ表、謝恩ノ表、及ビ人民控訴表等アリ、而シテ控訴表トハ、官司ノ訴訟ヲ受理セザル時、上訴スル表ヲ謂フナリ、

名稱

〔類聚名義抄 六表〕表 方少反、マウス、和ヘウ、

〔獨斷 上〕凡群臣上書於天子者有四名、一曰章、二曰奏、三曰表、四曰駮議、〇中略表者不需頭、上言臣某言、下言臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪、左方下附曰、某官臣某甲上、文多用編兩行、文少以五行、詣尚書通者也、公卿校尉諸將不言姓、大夫以下有同姓官別者言姓、章口報聞、公卿使謁者將大夫以下至吏民尚書左丞奏聞報可表文報已奏如書、凡章表皆啓封、其言密事得皁囊盛、其有疑事、公卿百官會議、若臺閣有所正處、而獨執異意者曰駮議、駮議曰、某官某甲議以爲如是、下言臣愚戇議異、其非駮議不言議異、其合於上意者、文報曰、某官某甲議可、

〔唐六典 一尚書都省〕凡下之所以達上、其制亦有六、曰表、表上於天子

〔文選 三十七〕表上 善曰、表者明也、標也、如物之標表、言標著事序、使之明白以曉主上、得盡其忠、曰表、

〔文心雕龍 五〕章表第二十二

昔晉文受冊、三辭從命、是以漢末讓表以三爲斷、曹公稱、爲表不必三讓、又勿得浮華、所以魏初表章指事造實、求其靡麗、則未足美矣、至於文擧之薦禰衡、氣揚采飛、孔明之辭後主、志盡文暢、雖華實異旨、並表之英也、琳瑀章表有譽當時、孔璋稱健、則其標也、陳思之表、獨冠羣才、觀其體贍、而律調辭淸、而志顯應物、製巧隨變、生趣執轡有餘、故能緩急應節、逮晉初筆札則張華爲儁、其三讓公封、理周辭要、引義比事、必得其偶、〇下略

〔類聚雜考二十六〕授官表讓
古人授官、例有讓表、劉寔謂、本唐虞禹讓稷契皐陶之遺意、

掌上表官

〔令義解一職員〕中務省
卿一人、掌、○中略受納上表、謂凡上表者、不由太政官、直向中務省、皆受取、奏進畢也、○中略事、

〔令義解六儀制〕陛下上表所稱

〔令集解二十八儀制〕古記云、上表、謂進天皇之書、謂之上表也、

〔唐律疏議表〕皇帝陛下　唐儀制令、○中略陛下、對敭咫尺、上表通稱之、

表式

〔令義解六儀制〕凡皇后皇太子以下、率土之内、謂皇太子以下者、百官以上、其庶人者、自約率土之内也、率土者、率循也、言率土之濱、莫非王臣、是也、於天皇太上天皇上表、同稱臣妾、各稱名、謂凡臣下謂在君所、稱自名者、唯稱某甲、不言臣某、其太皇太后、皇太后於天皇太上天皇、及太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、相稱之辭、不見令條、待式處分之、

〔延喜式十二中務〕凡五位已上、有上表者、置表函於高案、以函盛案上敷布、卿輔已下、就曹司廳座、卿身若子弟四人、執表函案、進安版位後、卿共退出、須臾大輔已上一人宣、奉表收之、録稱唯、卿令史生四人共降、自西階、進立案邊、插笏持案、進置廳上、復本座、録進案下、執表置卿若大輔前、則置復本座、輔以上開函見了、卿録進執函、置案上、復座、訖共下座退、丞先入内裏、以狀申内侍、然後入進、事見儀式、

〔西宮記臨時二〕上表事
立皇太子、皇后、及大臣已下五位以上僧俗等、依私事、若有可上奏者、皆以上表、
○按ズルニ、令ニハ、皇太子以下、庶民以上、上表ノコトヲ載ス、然ルヲ延喜式、西宮記ニ、五位以上上表ノ式ノミヲ記セルハ、蓋シ中古以降、六位以下ノ上表ハナカリシ故ナルベシ、後考ヲ埃ツ、

天皇上上皇表

〔三代實録三十陽成〕元慶元年閏二月廿七日己亥、是日今上。。。。。。。。。。。抗表、請被納太上天皇和○。。清御封曰、臣諱言、今月十五日、右大辨從四位上藤原朝臣山陰至、奉宣天旨曰、讓還御封、蒋承慈綸、伏增霑駭、中謝臣諱若稽

故事、太上天皇者、御供有數、所司祗陪、陛下顧重國家、申詔抑損、敦訓切至、奉以周旋、然國之通規、率由漸久、一旦頓廢、千載貽譏、故仍先代、冲之抱之、舊制二千戶、以爲御封、臣猶恨壞少連亘、物非奇贏、而今更慮公費之繁多、不享土地之所輸、臣聞諸遺老、承和之始、前後太上天皇、並存於世、當斯時也、封分二天、租入兩處、理之所定、未爲多煩、況今陛下、一天覆育四海、幽顯頼其德化、公私有何難艱、加以古之所行、今有成典、至臣而闕、謂論者何、伏願陛下、日月照臨之明、必察寸款、河海含容之量、莫厭微涓、無任悚戰之至、謹奉表以聞、臣諱誠兢誠惶、頓首々々、死罪々々、謹言、太上天皇不許之、　三月廿九日庚午、今上重抗表曰、臣諱言、伏奉今月二十六日慈誨、不許充上御封、臣去月表聞、冀蒙允照、赤抱無効、玄鑒彌遠、（中謝）臣聞問道於崆峒、而不廢御俗之務、凝神姑射、而未忘理世之方、眞假兩存、古今一揆、豈有以寂寥之趣、違率由之規者乎、陛下降黃屋之尊、棄赤縣之富、削花衮冕、蔭廬石泉、今之御封、猶同撮壤、此而可厭、細塵安歸、陛下好謙之過、卽出理法之外、愛貴之至、欲居乏約之中、縱令陛下、上仙之厨、取足朝夕之饌、則恐左右下從之極、難給歲時之資、豈汚汾水之流、聊上献湌之餘、伏願陛下、使臣白花之志、申盡敬之誠、臣烏鳥之情、得反哺之便、則臣子禮達、忠孝道行、全舊式於當年、傳故實於來代、無任懇款之至、謹重奉表以聞、臣諱誠兢誠惶、頓首々々、死罪々々、謹言、

〔三代實錄 三十一 陽成〕元慶元年四月廿五日丙申、是日帝上表曰、臣諱言、伏奉今月二十一日天誨、許上御封、更有別制、諸司及諸衞府分直者、遣還本職、恭承命旨、情慮警廻、氷炭交懷、喜懼兼至、（中謝）臣聞上天垂象、禁衞嚴於紫微、皇王凝規、官職共於朱闕、故供奉無失、在曉夕而唯祗、威容所加、示遠近而可畏、亦夫不懈不忘、當守舊章、是率是由、詎廢故事、加之六軍之衆、單兵分從、百官之中、數司遞直、假之議者、未謂煩勞、況今新御別宮、有如客舍、宜有宿衞、以備徼巡、臣伏見人臣之家、且有隨身之仗、州郡之宰、非無耀武之兵、矧乃太上至尊、天皇崇重、巨細喩鳴於德澤、遐邇瞻仰於恩暉、伏願推陛下懷中之慈、允微臣膝下之請、無任悾款之至、謹奉表陳乞以聞、

〔日本紀略 淳和〕弘仁十四年四月癸卯、太上皇(嵯峨)差權中納言藤原朝臣三守、令齎辭皇太子書、上今上(淳和)、其書函并机等裝束、一同諸臣上表、但不經中務、直奉內裏、表曰云々、即令三守奉返、(○又見西宮記)

〔類聚國史 帝王二十五〕弘仁十四年四月辛亥、臣諱(嵯峨太上天皇)言、伏奉勅書、垂示恩慰、兼期除尊號、聞命兢惕、呫焦非遑、臣蒙昧無器、謬承鴻基、臨治十有餘載、然大寶者是至公之器也、天下者非一人之有也、臣之庸薄何可久妨、思欲託山水而送百年、瓶琴書以了一生、故以萬機之務傳於賢嗣、八柄之權、非復所知、苟欲答來詔之意、恐貽代庖之譏焉、因執勅書奉進、今上(淳和)即有還報、事不獲允、臣爲省累費、除上皇號、今上固據古典、亦不見許、心迹相違、伏惟垂照、　五月甲子、臣諱(平城太上天皇)言、先帝不棄丹朱、謬厤丕業、憎性不佞、遂以偏疾、仍僵尸位、禪太上皇(嵯峨)、太上皇帝、看賢讓國、遁跡頤性、屬斯能事、感激更遑、是以除號之書、奉太上皇帝、報詔曰、八柄之權、非復所知、因執臣書、奉進今上(淳和)、事不獲允者、膺斯綸綍、戰栗倍百、今明主固據古典、奇太上皇、尤合物宜、宇宙幸甚、唯至于臣之所請、未得允聽、乃雖恩出不世、而事匪宿望、蓋變時王家號、禮經所諱、抑以人欲天隨、復自茂典也、故緣心攸欲、除號徽物、所有諸司一切奉返、夫古聖所以垂範者、本爲濟國安民焉、上害下苦、豈謂禮乎、加之一國之內有兩太皇、瀛表寰中未詳前聞、伏願陛下曲垂鑒許、不任七日之哭、敢上萬死之狀、先太上天皇(平城)差散位從五位下秦奈理、令齎請除太上天皇號并撤服御物書、奉上今上、勅、此書首尾稱臣、此表體也、不可敢開、宜附使早奉返者、即副大臣、齎送前大和守藤原真夏所、

〔西宮記 臨時一〕新帝御表

天皇依義讓之時上表、(詞如臣下表、)新帝扶案、大臣已下舁表案、立前主御前、上﨟內侍取之奏返賜、公卿撤案、

後朝更可有上表、(前帝停之、新帝有此儀、)

〔禁秘御抄 下〕一表

天皇依義讓位之時上表、(詞如臣下上表、近代無之、)

(日本後紀十七平城)大同四年四月丙子朔、天皇自従去春、寝膳不安、遂禪位於皇太弟、(中略)後太上天皇涕泣固辭、乃上表陳讓曰、臣幽昧自天、教訓無染、逸遊率性、機務未渉、陛下辨飾忝茲儲貳、顧惟重託、罔攸寄顔、頃者聖體乖和、淹除日月、醫藥無驗、責在臣躬、今忽遜神器、傳之膺衰、事殊恒制、聞命兢惕、若登此皇階、當彼大寶、人神之望既缺、中外之心又沮、冀日復舊藥、祈天遠壽、佇昇平於宇武、濫(○濫恐監誤)庶績於一簣、無任懇迫之至、謹奉表以聞、天皇不許、　戊寅、上復抗表曰、臣聞天下神器、不可輕傳、皇業大寶、非聖不践、抗表冒請、庶蒙優容、丹款不孚、玄鑒悠邈、俯仰焦惶、心魂靡厝、臣學甄一物、動缺三朝、生長深宮、素闇稼穡、常欲辭忝宸位、周旋聖謨、頌王澤於泰平、覩至治之勃起、而陛下不察鄙衷、強授鼎祚、臣之檮昧、何堪之有也、但以君唱臣和、上下之分、綸詔忽降、敢不對揚、苟欲遂志違懼、稽命、臣冀咨詢公卿、攘(○攘恐擁誤)孫萬機之務、穆卜有効、當待翌日之擇、然後臨學尚宵、口進終年、在臣至願、實爲欣幸、無任悚戰之至、謹重詣闕奉表以聞、詔不許、

(續日本後紀一仁明)天長十年二月乙酉、皇帝(○淳和)於淳和院、讓位于皇太子、(中略)是夕今上抗表、辭寶位、曰、臣某言、照以明鏡、妍蚩難逃、遥以恩綸、喜懼失據、臣某誠恐誠惶、頓首々々、死罪々々、臣道德兩乘、進退多頤、情性雙昧、執守無常、謹昔凰先皇於姑射、優遊霜雪之光、順聖后於後園、匍匐章珮之陰、而皇帝陛下、枉恩紫霄、延登分外、啓榮耀於欲隊、導慈訓於未知、恭深所天、愛鍾猶子、辭不獲免、久辱游雷、露往霜來、十載於此、德誘不倦、顧恤殊甚、思欲隨形逐影、心神是役、終天畢地、身命不疲、今亦推大寶以錫昭華、遜樞極以授乾象、前愧未已、後懼更頻、實以纏綿塗重、轉轍任博、施之人事、尚有負乘之甄、求之天途、何無害盈之咎、伏願日月貞明之景、每照蒼生、雲雨行施之恩、永潤品彙、然則世寢喧嘩、臣免譏誚、若不蒙允容、悉徒乘驪、君臣之議、爾天下何、不勝傾我憂懼之至、拜表以聞、後太上天皇不聽、

(西宮記臨時二)上表事

天暦之初、太上天皇御弘徽殿、于時新帝有抗表之事、左右大臣、大納言、共昇表案、立前王御前、(其所未詳)新

帝扶其案編云々、但件帝村上天皇受朱雀天皇讓之時、有件奉表之儀、是蒙依謙讓之禮也、可有二箇例也、但納帝

登〔位〕表之者、非謙讓之表、未詳之、爲帝賢之典儀、伏〔唯〕真式可知、拜禮之事、於中國有其儀、云々、臣諱言、臣聞德書繁而之主、久應龍圖、化被飛沈之君、長闕鳳曆、伏惟陛下賢聖才明、最先之識益彌積、春秋富有、向後之風其猶多、百姓喁々、皆傾欣戴之首、萬機揔々、未倦經濟之心、而上德不德、忽謝洪基、無爲而爲、猝屬小子、初賜恩和於儲貳、即如涉春氷、今改詔命於三通、豈堪臨夏屋、朔生長深宮、拘求淺智、月輪不缺、遙掛漢明之口輝、天鼓無拳、難當唐堯之謙讓、上思圖治之降塞、緇色有餘、下恐群議之聚居、寒心不暇、伏願高察丹誠、保綏業極、則陛下獨出能諡、海內但兆之望、微臣審分、纔保井中三四之星、無任戰汗競惕之至、謹請行在所、拜表陳謝以聞、誠惶誠恐頓首頓首、謹言、

〔西宮記臨時一〕太子表

天曆初立獻表、以中納言給勅答云々、

〔代始和抄〕御讓位事

父子にあらずして、受禪の時は、皇太子奉上して、儲子につきて、上表の禮あり、天慶九年、村上天皇の、御兄朱雀院の御讓をうけ給ふ時、上表揖讓の義あり、其後安和二年に、圓融院の、冷泉院の御ゆづりを受給ひ、寛弘八年に、三條院の、一條院の御讓を受て、位につき給ふ時、皆この禮ありし也、幼主の時は、揖讓の禮なし、長和五年、後一條院の、三條院の御ゆづりを受給ふ時は、後一條院九歳なり、幼主たるにより、此禮なし、抑承元四年、順德院の、土御門院の御讓を受て踐祚有し時、順德院十四歳にてまし〳〵しかば、上表の儀式有べきに、上皇後鳥羽院の仰によりて、其儀なかりしかば、世以て難じ侍りし事なり、

父子讓國の時は、子たる道、よろづ父の命をそむくべきことわりなきによりて、義讓の事なし、幼主成人によらざる也、然かるに寛德二年に、後冷泉院の受禪は、父帝後朱雀院よりつたへ給ひし

請去親王號表

かば、揖讓の義あるべからざるに、上表の義ありし、是又ゑかるべからざるよし、其沙汰ありけり、

〔日本後紀　十三平城〕大同元年五月甲子、勅、諱（淳和）上表曰、臣聞、崇高者、天理忌其滿盈、卑下者、神道祐其謙虛、古今之攸同、聖哲之遺訓、臣諱、毓潤天津、分景扶木、每以沖退爲心、悚懼爲念、今陛下、龍德嗣興、鴻基紹構、萬物改旦、千齡配長、普天率土、沐浴恩波、凡厥臣子、莫不幸甚、唯臣之私情、宿懷降挹、事隨宜制、當在今辰、伏願陛下、納臣撝分之言、許捨親王之號、矜臣竭愚之志、垂同諸臣之姓、事君之道、無敢所隱、伏瀝中誠、實非外飾、无任懇款之至、謹奉表以聞、有勅不許、

辭官表

〔名目抄　私儀〕上表（ジヤウヘウ大將大臣等、辭退之狀ヲ獻ズルヲ云也、）

〔新儀式　五臨時〕五位已上上表事

上表之儀、具載內裏式幷儀式也、但不御南殿、中務丞以上一人、先就內侍司、申某甲上表狀、內侍以聞傳宣、中務丞以上四人、舁机到內侍所、內侍執函、詣御所奉獻之、（或不經中務省內侍司、子姪中若有五位以上昇殿者、付其人奏之、）覽畢遣中務、（近衛大將）於第宅告申請之許否、或返其上表、不許、或令內記作勅答遣之、新任大臣辭表、第一二度只返其表、第三度遣勅答、不許之、

〔西宮記　臨時一〕返給表

第一表、家司四人、舁表案進中務、（面下机、以支佐木作、以檜鏤立、以檜作高机、有數物、以陸奧紙一帖、以一枚重、以二枚卷、上又以一枚裹之、入宮、）省官付內侍、（加花足、內侍奏、）以近衛將返賜、（取囊紙等、以紙一枚、卷表上、入函、以紙一重裹結函上、返賜云々、近代結函上云々、上古不結云々、但不加花足、）二度以下、付子孫奉、（不加花足、以陸奧紙二重、裹函上、以陸奧紙二重、引延天、裹宮上、左右乃端乎推挫天、以紙一枚、又卷裹紙上、上作一枚紙加裹畢、參內、或付奏者、或自奏之、隨便也、）第三度賜勅答、（上卿下賜表、仰內記、令作勅答、）（云々、上奏之儀、皆倣例、）

太政大臣攝政表

每度有勅答、（返表之時、初度中納言、用親人、）遣中使到里第、付家司賜之、（納言以下表、或辭狀、不許者返表、許時、中使口勅、）授勅答中使人、或主人取函、於便所開見了、中使就倚子、（有地敷、）主人出庭中、舞踏未畢、中使趍下跪候階掖、（共可昇歟、）主人仰家司、

撤倚子、敷平座、〈用土敷、但人座敷例、〉示中使著座、次四位若子姪取祿、〈白大褂二領〉授主人、主人取以授中使、中使下殿、主人立座邊、中使再拜、懸祿退出、主人有障者、上﨟子姪代拜、親人到來時、可隨便宜有禮、

〔北山抄 四 拾遺雜抄〕上表事

任大臣初度表、以家司五位四人進中務省、〈中略〉第三度有勅答、中使至第、先遣案內、相逢時授勅答、〈或令家司御簾勅答、〉先披見之、拜舞如常、若被許衞府官者、脫劒拜舞、宿德人有所勞事之時、子姪代拜舞、若以子姪爲將返給者、更不令著倚子、直被祿、雨降時、成無拜舞、入夜時、有秉燭者二人、〈高明大臣初任表、成忠作之、只狀有掛冠可入山林之句、無例也、只仰依可然賢才之趣、不與倫休閑之表、書也、〉

〔侍中群要 九〕上表無勅答之時事

上表奏覽之後、藏人承仰、召近衞次將返遣表、但仰出納令書案二通、〈一通召內記給、一通納置之、〉

〔禁秘御抄 下〕表

攝政太政大臣表、毎度有勅答、大臣大將等表、近衞司若只侍臣、於殿上臺盤奏之、有御覽、置御厨子、〈中殿〉返給之時、返給之、大臣辭表有勅答、第一表以近衞將返給、二度已下、不加華足、三度給勅答、但太政大臣攝政之外、三度ニモ無勅答、大納言已下辭表、近代無沙汰、則當ナド時々有之、是大略同事也、納言已下表、辭狀不許者返給、許時使御口勅、

〔柱史抄 下〕攝關表事

兼日、堪能文之儒奉之、草進、其間作者內々告大內記、許者例也、勅答有無、隨時儀、無勅答之時、職事召大內記、〈令六位書之、先例也、〉參藏人所通案內、職事於弓場殿授內記云、令書留案文、正文可返上者、內記於藏人所書寫之、於紙者用紙屋紙若白紙、書寫了、於正文者返上職事、於案文者懷中退出、〈六位書之者、送大內記許之、〉件正文留裏紙、正文上卷一枚、入本函、遣執政第云々、有勅答之時、職事前日送書狀云、明日可有攝政御上表也、所請不許勅答、任先例可被用意者、其後內々行向表作者許、見表草、兼又令見勅答草、並故實

納辭表宮

也、當日參陣上卿著仗座、(件上卿、大中納言之間、職文之人、多以勤之、)內記參軾、上卿下給御表、仰云、攝政辭表不許勅答可作進者、內記稱唯、持參草、內覽奏下如恒、次淸書、(用黃紙也、無御畫日、)覆奏之時、留御所、上卿口陣座、內記退出、

〔柱史抄下〕大臣表事

近代大臣無三讓之表、臨時被獻之時、非執柄之外、無別勅答、(往古間有之、近代無之、)返給之時、召內記被書留案文、被納之時、被下正文也、有勅答之時、必被下正文也、

○按ズルニ、中古以降、新任ノ大臣ハ必ズ三タビ上表シテ、其官ヲ辭讓スル例ナリ、然ルヲ本書ニ據レバ、當時ハ必ズ三讓ノ表ヲ上リシニハアラザルナリ、

〔夕拜備急至要抄下〕一攝關三讓表勅答、(臨本所令行之○中略)關白初度表、(家司四人昇案、中務省持參、件案令立年中行事下、職事取表筥、持參御所、撤下表、引懸紙覆紙等、下上卿、)

攝政初度表(中務省付內侍所、無勅答、被返下表、先例也、勅使納言勤之、可相儀其仁、)　第二第三度　上卿以下同前(關白之時、被付上大臣者、依請之由宣下、關白者、不許所辭之由、令作勅答、)

〔唐六典二吏部〕凡授左右丞相、侍中、中書令、六尙書已上官、聽進讓、

〔公家諸法度〕禁中幷公家中諸法度

一器用之御仁體、雖被及老年、三公攝關、不可有辭表、但雖有辭表、可有再任事、(○中略)

右可被相守此旨也

慶長二十年乙卯七月日

昭實在判(○二條關白)　秀忠御判　家康御判

〔雅亮裝束抄一〕大臣ゑたいのふみいるゝはこをつゝむやう

だんし四枚を、二枚づゝうへしたにあてゝ、つゝみて、だんしをほそくたゝみて、うへのかさねのもとに、ひきときざまに、かたかぎにむすぶべし、宇治の大臣殿(○藤原賴長)の御時、大臣ゑせさせたまひしに、うるはしくはこにいれて、つゝみて、なほしもそのつゝみたるはこを、たかきあんにおき

て、あかぎぬのまて丁もちて、けいし二人、まきじ二人、東帯にて、あいぐして、兵部〇兵部卿中務卿ゑさうに、おくりつかはしたりしかば、いゑはうせて、あくそうちたりしまたにするて、かへりにき、きんだいは、まきじにつけてあるなり、

〔三長記〕建久七年十二月九日甲寅、參內、有太政大臣御上表事、

表筥圖



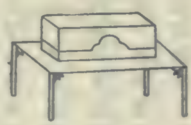
以檀紙二枚、各二枚也引テ加倍ヲ裹之、豐國紙、結中、左右端ヲ押合也、



以朴木作之、長一尺一寸五分、弘三寸一分、身高一寸七分、足高一寸、以甲文白織物押身內、不押蓋、表續紙二枚書之、端一枚、加裹紙、以檀紙二枚爲續紙、其上又卷一枚也、

〔貫勝卿記〕寛永八年十一月一日庚午、今日朔旦冬至、平座有之、〇中略賀表筥、床子座前ニ、使部兩人舁テ持參、置之、〇中略筥ハ、大文筥ノゴトクノミメノ蓋ニシテ、手形ヲ仕候、錦ニテハリ、筥ノカド、又フ

タハシノ手形ノナリニシテ、メツキ金物ヲ細ク打候テ、錦ノ端々ヲサヘ、打付申候也、臺モ錦ニテハリ、金物ヲ端ニウチ申候、四角ノ足ハ竹ヲ白木ニテ、葉ヲ脇ヘノビ候ヤウニ仕テ彫物也、



請去官表

〔中右記〕保安元年十二月卅日丙申、今夕左大臣〈○源俊房〉依病上表、使右中將師時朝臣云々、但表中以男師頼可拜任中納言詞被載者、左府年八十六、此十箇日、病惱云々、

○按ズルニ、官職ニ居リテ後、之ヲ去ランコトヲ請フ上表ヲ去官ノ表トシ、以テ辭官ノ表ニ別ツ、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、有私請印并上表事、〈○中略〉上表儀、〈今日公家御衰日也、然而例、宇治殿初度表、公家御衰日被獻之、〉〈○中略〉須臾持參清書表、〈以檀紙三枚書之、無禮紙、表中名三所、伊行書之、奥一枚空、仍余放之、〉次皇后宮少進雅亮、散位憲忠、〈已上藏人、束帶、〉昇表案、〈高三尺、短一尺一二寸許、長二尺一二寸許、楊足、件足上三四寸許、四方、横亘木、其上有包文、皆以檜木造之、塗胡粉、打金銅金物、以白生絹押案面、政所造之、〉入中門廊南端妻戸、北行立、對南弘廂東第一間、〈妻戸前、東西妻、〉次家司知經、〈五位、束帶、〉持覆、〈白生絹單、三幅、長一丈、〉并帶、〈白生絹、長一丈、弘六寸、縫其口、折之、弘三寸、〉經同路參上、置案上、此間余示可持來表函之由於右大將、右大將起座取函、〈以朴木造之、長一尺一寸三分、弘三寸、高三寸二分、下有牙象、以白生織物、文爲立冬時可用織物歟、縫花足上、〉持來置余座前、復本座、先是余見表了、開硯筥、磨墨染筆、朝臣下表上書名二字。訖、卷之間、便加裏紙一枚、〈檀紙重表端一枚〉次取檀紙二枚、乍重卷其上、次取檀紙一枚、卷其上了間、表函納之了、覆蓋、次覆硯筥蓋、次召親隆朝臣、給表函、〈加花足、〉親隆指笏取之、置案上、〈妻、東西、〉召皇后權大進憲親、〈○中略〉

相供加覆結之(片端)覽降披笏、與憲親供退下、次家司直講廣ゝ(五位、東宮)家司散位知紆、職事皇后宮少進雅亮、職事散位憲忠、人自中門廊南端妻戸、北進昇、案南行、降自中門廊南妻、知家事盛信、(前官掌)同重兼、(官掌)案主宗職、(官掌)同園成、(官史生、上東門)已昇、案出中門東行、出四足門、(昇案之家司職事相從)仕丁四人、(退紅、烏帽)於門外昇案向中務省、(中略)昇出表案之後、召茂明朝臣於對南廣廊給祿、(白褂一領、職事散位清依之、康和四年例、清書人不預祿、)茂明降自南階、(不著沓)北向再拜、自中門退出、(中略)申斜家司職事歸參、此中知經進對東簀子、申付省了由、(余在對東面孫廂南第五間)傳聞、省官持參內裏、付內侍所、(各在途中下部昇案、緋綱之、)闈司下子(敍千世、未立體八盤、)取表函、(加花足、置于案着、返給書官、)案掌侍房子(敍少)取之奏覽了、給頭左中辨光頼朝臣、光頼朝臣持參法皇御在所、(白川、花足、留內裏、)御覽了、持歸內裏、(自殿持參關白亭、依請也、九條不持參云々、)召少內記大江成周、令寫表、(光明給之、依大內記明詔然野川少內記、)遣內記寫了、返上本表、光頼撤表紙懸紙、以檀紙一枚(用寶紙之間)懸寫表上、納本函、以檀紙二枚裹函上、(裹紙重之、其檀紙二枚引重、端裏之、一枚押合上下條、不結中、不加花足、)置殿上臺盤上、中使左少將隆通朝臣(隆頼朝臣之)取之、令持隨身、(在後)向東三條、(余車中表函入、巳上日傳說記之、)

○按ズルニ、コレハ左大臣ヲ去ンコトヲ請フ上表ナリ、

〔台記〕久壽二年五月三日己酉、今日重辭左大臣幷隨身、(中略)先日問日於泰親、無日時勘文、又不擇吉時、隨先例、三讓之第二三度如此、今日表兼三讓、其間甚近、故准彼也、

〔玉海〕建久二年十一月廿六日辛未、此日復辟初度表也、(是攝政第四度表也)永久以來、復辟表只一度也、而永祚、寬仁、寬治、皆主上御元服之後、兩度被獻也、第二度被下關白詔也、億事理、宜如此歟、仍今度依寬治已往例、所上第四度表也、

〔勘仲記〕弘安元年十二月七日乙酉、今日攝政殿(藤原兼平)被上復辟御表、予所奉行也、令早參、令催促遲遲事、清書經尹朝臣遲參、再三所責仗也、(中略)大丞取副御表草於笏、膝行參進、置笏被讀申御表、置御前退出給、次予參進膝行、給御表草、(懷中、納之)可清書之由有仰、予逆行退給清書人、前左馬權頭經尹朝臣於北面書之、所司設儲硯紙等、(清書所兼設之、人不雜居、作名之外無人、有書賢儀、)但兼書儲懷中、端御名字許所書入也、此間

所司持來御表函幷檀紙等、(結緒在函使)予於藏人所端座、乍立指笏、取之横持之、檀紙上置函持參、自長押下膝行、於御前取直、反二サヽ進之、卽拔笏逆行退出、次持參清書御表取副笏、參進膝行進之、置笏先進御表、次隨召進筆、令加御署給、被返下筆、卽退、

〔三代實錄 十三清和〕貞觀八年八月廿二日甲午、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表言、竊以疲駘倦路、難責以逐日之能、病鶴忘飛、豈望其凌霄之効、伏惟聖朝陛下、聽跨軒昊、德邁成昭、泣辜之惠非深、扇暍之仁猶薄、臣以庸材、謬膺佐命、唯獻自誠之无比、潛欽日就而不晉、遂乃天從人願、神感聖仁、大成之日已來、歸老之期漸及、臣不敢忘盈滿之誡、又深企漢疏之風、然而聖慈不許出於直廬之外、臣誠不忍離自玉階之前、俳佪恩澤、猶侍禁中、而去六年冬、大病以還、體氣疲苶、心魂惘然、坐念立忘、昨知今惑、加以長樂宮御藥之事夙夜劬恩、無顧私第、自然心將事憤、性與物疎、唯欲勛衰以叨恩、那堪勤政以贊化、而今忽降綸言、更預機務、乍承寵倏、靜謝忘言、臣雖實情之愚薄、而當昔之全狀、唯以勤恪之力、幸獲免於罪戾、而今身已衰朽、勤勞何申、心已昏迷、恭恪胡施、卽知於公无益、爲私多僞、徒招眼下之恥、遠損身後之名、臣竊想古人教射之言、夫去楊葉百步而射、百發而百中、然其弓撥鉤、氣衰力倦、則百發之功盡廢矣、何況平生材望、幸賴僥中、器局力衰之後、更向百步之葉、假令雖尋愚者、猶當知其不可焉、伏願陛下察其深衷、矜其疲劣、更廻寵詔、改賜旄聽、則巍々聖帝、無偏之德彌新、款々微臣、有涯之生少損、無任誠懇之至、謹拜表以聞、不許、　廿四日丙申、太政大臣重抗表言、先傾丹實、(實〇實恐誤)仰叩紫闈、而天顧兆廻、叡情無感、愚衷尚屈、弊蒙彌申、貼焦原而非危、履虎尾而倍懼、臣聞日月猶示盈昃、山川未免崩冲、物理自然、人事何忒、臣德薄才拙、任重位高、儵賴聖哲欽明、天人叶贊、得免罪戾、久塵宸階、常愧深恩不窮、淺効無答、如踏鑪炭、似履春氷、況今老大遍來、疲病交集、藥餌無驗、每聞趍奉、素飡之慙、彌倍平常、安得以此疲勞、重掌機密、上黷幽衆、下貽身累、況復神監害盈、鬼瞰貽禍、何忘止足之分、坐待幽冥之責、臣頹齡漸追、殘命尙危、若能廻聖慈、矜臣深志、賜以優閑、任其將息、則再造之恩更遍、三舍之惠彌深、豈敢偏惜衰

朽之身、唯貪久視太平之化、伏願陛下、別垂哀許、不省其官、○以本有誤字、一本訂正、

（本朝文粹四）爲入道前內大臣辭關白表　江匡衡

臣道隆言、先瀝丹情之底、敢瀆玄覽之前、龍渙未收、鷗歎逾切、顧其殊寵之至重、供私之寵深、譬猶挾艤瀉而歷累卵、傾滄溟而注孤灯、若不重陳、恐涉飾讓、臣某中謝　臣聞、王者之御天下也、承天建官、象地分職、所選失道、則泰階不平、所受乖仁、則列岳爲異、臣伏撿家譜、列祖先臣之秉鈞柄者、多是老年耆德、莫不奇才大功、而今壯年而早昇、不才而妄進、三十餘初攝政、四十餘爲關白、位在三公之上、目眩易迷、身痰萬機之間、手繁難理、況女則入掖房、同體乎垂衣之化、男亦居遠府、增秩乎弱冠之齡、功淺賞隆、徒忝車丞相之軌、父榮子貴、自齊爲大宰之讖、夫然則股戰非可久立、顏厚非可寄居、重載之舟不厚、那堪濟川之用、再實之樹有截、未免待風之危、伏願陛下、憐臣辭病、允臣遁名、縱使履冰赴熱、恨往日於虛無、唯將麻月占尖、養餘年爲巳有、不勝奇懼屏營之至、某誠惶誠恐、頓首頓首、謹言、

正曆六年二月五日　關白正二位臣藤原朝臣某上表

（本朝續文粹五）二條關白辭內大臣左近衞大將皇太子傅表　實範朝臣

臣敦通言、楚鳳增價、事寡丹山之雲、商鉅守分、誰馳黃河之浪、名巳乖實、器以異途、臣某中謝　臣竊訪皇朝之前規、伏撿臣家之舊跡、內大臣者、靈龜早起、自鎌足、芳躅遂及于微臣、然猶當其任、多是咸一之上德、麤其選、莫不半千之英才、未有如臣朱愚白癡之陋質、偏以咸里之介胤、漸近三十年者矣、失口趨而登高、鑑參差刀於鼠刀之用、忘止足而就列、還履虎尾於龍尾之行、況乎居羽林而掌禁兵、象略俱疎、入宮闈而傅太子、訓導全闕、運策性頑、未尋玄珠於濟北之石、醉魄魂亂、如吞金角於河南之杢、臣有何一能、堪此事哉、夫明主不散虛授、忠臣不敢虛受、賞人必酬其功、爵人必甄其德、故妄進之責、非獨集于臣躬、失舉之識、恐亦貽于帝室、若像天工而猶私己、睽人望而不避賢塞、知萬代當然之敗、無代而無者也、臣縱榮華衰而類枯株、命根長存可以是、臣縱寵澤滿而如巨海、生涯忽類其何爲、伏願陛下、曲廻若木之

讓官表

餘輝、殊口匪石之懇款、停此三官之非據、擇彼百寮之所推、然則天下聚目而視、注耳而聽之者、皆以幸甚、不勝荷懼屏營之至、謹拜表陳乞以聞、臣敎通誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

長久五年六月廿日　內大臣正二位行左近衞大將皇太子傅臣藤原朝臣某上表

〔台記〕久安六年四月十二日戊午、請辭大臣、讓右大將藤原朝臣實能之狀、上書奏法皇乎、說曰、藤原朝臣、大將勞及數年、第一大納言、昇進大臣、尤當其任、但辭大臣、出仕朝廷、有先蹤乎、若有不仕之意、爲公爲私、事甚不便焉、

〔玉蘂〕嘉禎三年三月十日辛卯、是日予〇攝政藤原道家奉復辭表、此一兩年所思企旨、子細不遑具記、令讓補左大臣〇道家子兼經也、〇中略予表幷勅答、依母后仰宜下云々、是寬仁例也、

請去兼官表

〔續日本後紀十二〕承和九年八月乙酉、大納言正二位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房、抗表言、臣稟性愚蒙、璧花寂寞、陛下陳席不棄、故簡無遺、逐先時髦、須登淸顯、未堪一職、兼帶四官、臣感先花之早零、悼前咲之後發、恐高明之瞰鬼、戒寵祿之過量、伏靑蒲而上陳、仰丹闕而懇訴、天未從願、震灼戰兢、鑑組之花、則非飾身之地、珥佩之暎、誠是焦心之機、譬猶以虎豹之文、被犬羊之質、自知不可、誰曰其宜、加之陸奧國新任守從五位下藤原朝臣大津、此良房之叔父也、雖皇家舊儀無有明制、而遙撿行事、不異同官、嫌疑之門實所可避、又三官以上、有司執聞、蓋忌榮聚一門、寵歸一己、伏願停兼外秩、守拙內官、然則收韜略於朝直、上沸騰於輿人、無任悃款之至、謹奉表以聞、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年二月十四日庚辰、正三位行中納言兼右近衞大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世抗表曰、臣聞、寒暄代謝、牙角難雙、天道未能相進、人事何得兩立、臣功閱無聞、行能皆闕、倚日月之末光、帶文武之有職、兢恐之志、斯須未聾、夫大將之職、所統非輕、任握兵符、管領戎士、警巡之務、晝夜無閒、縱在少年、猶難稱職、况今春秋衰邁、筋力疲羸、雖僕尸祿於喉舌、而思罷官於爪牙、因玆前瀉乃懷、伏待恩許、而多曠居諸、未蒙冲旨、伏請殊恩、重鑒愚款、解臣大將之職、授以壯齡之人、則公私兼濟、物議

請致仕表

自停、无任征營之至、拜表以聞、不許、〇原本有二誤字、據一本訂正、

〔續日本紀 光仁 三十一〕寶龜三年二月癸丑、大納言從二位文室眞人大市、上表乞骸骨曰、臣以愚質、幸逢聖朝、拖紫懷金、叨掌喉舌、貪榮負貴、職過涉深、臣之如斯、不知所措、伏惟陛下、德洽仁厚、邦舊命新、維城之遇千年、締舉之儀一會、臣蒲柳向衰、桑榆方侵、病亦稍篤、垂盡無期、伏願辭官俊乂、賜老丘園、止足以送餘年、返初而待終日、則上有成物之主、下無尸祿之臣矣、矜老存疾、有國嘉猷、天鑒曲垂、寬懇朽邁、不任前路之至、促謹詣朝堂、奉表陳乞以聞、

〇按ズルニ、致仕ヲ請フノ表ハ致仕篇ニ在リ、

婦人辭官表

〔本朝文粹 五 奏〕爲尙侍藤原朝臣全姬請罷職表　菅贈太相國

妾全姬誠惶言、妾先陳悃誠、請解所職、重年遂隔、罪皆歸過、一二年來、愈增厚顏、今妾位崇三品、齡迫七旬、辭假所紛、以從事、常閑非扶杖之庭、欲催綺羅以勤公、丹悃慙懸車之義、妾不敢嫌退、白日惟明、妾亦無傷悃、蒼天在上、伏願殊垂降鑒、聽妾誠請、避高班於賢路、養殘氣於幽閑、妾全姬誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

元慶四年月日

僧辭官表

〔延喜式 玄蕃 二十一〕凡僧綱辭任者上表、其表盛以筥、置案上、玄蕃史生一人執賫、敷障章堂修式堂間、進北二丈許、史生二人執案、自會昌門東戶入、置案上退出、中務受取奏聞、

〔西宮記 臨時 一〕返僧綱表、

返僧綱表之時、以兵衞佐爲使也、

〔三代實錄 清和 十一〕貞觀七年十月廿五日癸酉、權僧正法印大和尙壹演、上表請停職曰、小僧壹演言、任非其器、則公私共迷、其僞分與其才、則道俗同羅其咎、壹演凡愚性拙、白業功疎、蠅雀還飛、水萍易合、徒縫慙愧、以爲衣、難繡弘誓以爲織、未遑救己、事及利他、伏見太政大臣藤原朝臣、仁風廣扇、德望高懸、利物

之功、希世而出、故及其臥病沈困之時、天下縞素、嘗憂父母、或事務於外、或心焦於中、依佛依神、競祈其命、卽如天答萬人之望、豈偏謂假一身之力乎、而今承黄紙詔命、以小僧爲活彼大臣、賜任權僧正、恩出非常、分彰不次、身毛盡竪、伏增赧顏、又其僧正之位者、天下之所瞻仰、四輩中之鎭也、當今才當其途者、寵溢有徒、而非智非行、起加其上、則恐遠乖世尊之敎、近貽聖朝之譏、伏願枉留聖聽、早賜哀許、不任丹款之至、謹上表以聞、

〔西宮記臨時一〕延長四年七月十二日、此日遣侍從内藏頭良峯仲連於延曆寺西塔院、告仰僧正、□今所上辭法務表、依請、

辭封戶表

〔西宮記臨時一〕康保元年九月廿八日、皇太子〇冷泉上辭封五百戶表、自中務省轉内侍、　十月一日、令延光朝臣仰大納言源朝臣、令内記外記勘申唐家本朝皇太子上表之時、勅答之例、入夜源朝臣令奏、大内記成忠勘申、東宮上表時、勅答由云々、　二〇二一本作三日、源朝臣令奏勅答草云々、使左近權中將延光朝臣、給勅答、上表□減之例　十三日、東宮重上表、□朝臣遂　十五日、仰源朝臣、令作不許所請勅答云々、源朝臣令奏勅答淸書時、申云、右大將藤原師尹申、太政大臣上表、又前年一品内親王上表使差公卿、若如彼例、遣納言宜歟、仰外記、令勘彼時例、　十六日、使左衞門督藤原、賜勅答於東宮、不許所請、以一品内親王上表勅答例、遣納言也、

〔日本紀略村上四〕康保元年十月十三日乙卯、皇太子重上表、謝封邑、勅不許、今日東宮上表、先例令中務省奏之、此度直被奏之、學士直幹作表、

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年十月十八日癸酉、无品惟喬親王上表、辭封邑曰、去九月二十一日勅旨、賜臣百戶之封、以助齋餠之費、仰承温煦、未悟比量、中謝臣往年病發、沈困不歸、謝簪纓於帝城、約香火於釋衆、菩提一念、身襞在草菴之中、空觀六時、心未離魏闕之下、大致臣合門、萬事皆隨省折、灰冷之服備避風、菜茹之食資送日、若更蒙新賞、猶滿舊封、水石幽閑之地、有嫌於貯藏、煙霞晩暮之家、無節於遊用、

陛下寵光不翅、恩之又恩甚深、臣虛受非功、過而再過、惟重伏願陛下、察臣丹款、照臣素情、著中緯於九重、留上腹之百戸、臣願足矣、臣望稱焉、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

〔西宮記臨時一〕天祿八年六月十九日、一品内親王令右中辨朝成奏辭封戸年官表、同廿日、遣左少將國紀、給勅答、不許所請之旨、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年四月丙子、右大臣從一位藤原朝臣豐成等上表言、臣等曾祖大職冠内大臣、踏義懷忠、許身奉國、皇朝藉其不世之勳、錫以无窮之賞、嵐子贈正一位太政大臣、確陳丹誠、抗表固辭、天朝節制、賜二千戸、傳及子孫、臣等以累世家門、久沐榮寵、豈悟逆賊仲麻呂、近出臣族、極凶肆逆、若斯之甚、今臣等既以凶逆之凶族、猶蒙忠嚴之餘封、以何面目、叨還殊厚、伏願奉納先代所賜功封、少塞天下之責、無任誠惶之至、奉表以聞、詔許之、

〔本朝文粹五表〕爲貞信公辭隨身表　後江相公

臣忠平言、伏奉今月四日勅命、賜内舍人二人、左右近衞各四人、以爲微臣隨身兵仗、伏惟羣雀短心、不思冲天之翮、瓦石脆質、豈期照乘之輝、驚寵之意、雖不反唇、某中略臣承先帝之遺託、攝萬機於庸才、省躬揣分、何以克當、白章三封、頻抽瀝膽之誠、玄渙一出、不降收汗之恩、爰綸旨彌透、蹐惶從事、朝露聚滿、何浸滄海之潮、夕螢積光、無助朝月之影、方今前新不遂、後賞更加、憂懼彙懷、冰炭同器、身毛皆豎、寒似赴鳥之畏寒、心魂共迷、甚於吳牛之喘月、況復器輕寄重、以榮爲慮、稟在羊質、難存見革之觀、飾以虎皮、猶動恐豺之憲、伏望憐此丹情、還以玄渙、停鶴樹之勳、收虎賁之兵、然則塞主不遺假寵之誹、愚臣自免貪榮之名、無任至情、上表以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十二月日　左大臣正二位藤原朝臣上表

〔愚昧記〕仁安二年十月廿日、小時參殿上方、相逢女房之間、藏人少輔參仕、今日攝政上表、爲内舍人云々、勅答事、可奉行之由、今朝此男所承也、○中略表使左近少將源顯信、佇立弓場邊、依藏人少輔示、持表置大盤上、○中略藏人中務少輔源延

俊、來自上戸、取表持參御所歟、

〔玉海〕壽永二年四月廿七日辛酉、今日攝政(基通〇藤原)上辭内舍人隨身表、(藤原光雅書之、)忠親卿行勅答事、大内記光輔作之、表使右少將成定、勅答使左中將通資朝臣云々、

辭年官年爵表

〔西宮記(臨時一)〕内親王表

康子内親王獻辭賜年官爵表、遣中納言兼明、被返表、

賀表

〔西宮記(臨時二)〕上表事

其上表之儀、立皇太子、皇后、及瑞物賀表、内裏式曰、國家有慶、事異恒所者、卽百官詣闕、共上賀表、其儀在南庭、共見式等類、奉其表案、立軒廊西第一間、外記昇立之、大臣已下列立陣前小庭案東頭、(大臣南面西上、納言西面北上、參議列其後、朔旦冬至賀表儀、亦如此、)于時内侍臨東階、大臣已下著靴、列立陣前小庭、西面北上、異位重行、立定、大臣就案下、插笏取表函、登階上、突片膝授之内侍、拔笏還於本所、公卿一々還退、朔旦冬至之時者、次天皇御南殿、但立皇太子、皇后等之表類、上奏之後、一兩日給勅答之儀、准之可知、

〔日本後紀(五桓武)〕延暦十五年十月壬申、先是渤海國王所上書疏、體無定例、詞多不遜、今所上之啓、首尾不失禮、誠款見乎詞、群臣上表奉賀曰、臣神等言、臣聞大人馭時、以德爲本、明王應世、懷遠是崇、故有殷代則四海歸仁、周日則九夷順軌、伏惟天皇陛下、仰天作憲、提地成規、窮日域而翥聲、布鳳區而向化、誠可以孕育千帝、卷懷百王者矣、近日送渤海客使御長廣岳等還來、伏見彼國所上啓、辭義溫恭、情禮可觀、悔中間之迷圖、復先祖之遺跡、況復緣山浮海、不顧往還之路艱、克己改過、始請朝貢之年限、與夫白環西貢、楛矢東來、豈可同日而道哉、臣等幸忝周行、得逢殊慶、不任鳧藻之至、謹詣闕奉表以聞、

〔類聚國史(七十四歲時)〕延暦廿二年十一月戊寅朔、朔旦冬至、百官詣闕、上表曰、臣聞惟德動天、則靈祇表瑞、乃神司契、則懸象呈祥、伏惟天皇陛下、則哲承基、窮神闡化、功被有截、德輝無方、伏撿今年曆、十一月戊寅朔旦冬至、又有司奏稱、老人星見、臣等謹按、元命苞曰、老人星者瑞星也、見則治平主壽、史記曰、漢武

帝得辛巳朔旦冬至、公孫弘曰、黃帝得寶鼎神策、是歲己酉、朔旦冬至、得天之紀、終而復始、今與黃帝時等、於是天子悅之、如郊拜泰一、玉律譜序、迎福之慶方長、金彩舒顏、延曆之期逾遠、豈非天鑒昭明、不愛其道、神心顯著、在應斯通乎、臣等生遇信幸、沾奉會昌、凡在八靈、略無抃躍、不任鳧藻之至、謹詣闕奉表以聞、

〔日本後紀十四平城〕大同元年七月甲辰、詔曰、〇中略於是百官奉表拜賀曰、亮陰之後、更建新宮、古往今來、以爲故實、臣等准據舊例、預請處裁、伏奉今月十三日勅、偁、朕爲民父母、不欲煩勞、思據舊宮、禮亦宜之、臣等忝聞綸旨、載喜載悲、誠以孝子克成父志、建昌重構者也、凡厥百僚、幸甚幸甚、臣聞明王執俗、溫恭寅愼、哲后經邦、濬治爲德、伏惟皇帝陛下、纂紹鴻業、欽奉文顧、稟成規撫揚郁烈、孝等被於万品、飜穢莅於兩儀、玄功於豐而激大雅之風、神用周流、以布中和之樂、道融有截、化治无垠、猗歟偉歟、盡善盡美、仍恐遐瀛之表、无聲讓歌、洪漲之程、有向風款、遂乃苞軌貢珍、事從簡寡、文書鬪役、務期罩疎、雲構非加、省口於梓匠、露臺輟作、愛費於金廩、苔砌之荒涼、再迎鳳蓋、栢梁之寂寞、重轉鸞輿、臣等親日遐和、望覽沐鴻、弄東海鷲而无倫、抑鶴、伐南山竹、而未足書恩、无任鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀以聞、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年正月丁卯、先是太宰府上言、慶雲見於筑前國、至是太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣〇中略等、上表言、臣聞泰以應而爲象、咸以感而成卦、明聖人在上、鬼神不能違其感、至德傍通、天地有以從其應、伏惟皇帝陛下、承累葉之皇基、纂重光之寶祚、握鏡揚猷、偶貞軌於就日、懷珠耕歲、宴景曜於絳雲、道冠二儀、歸功先德、化孚四表、推美神宗、伏見太宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏等奏偁、慶雲見筑前國那珂郡、玄黃蕭索之光、丹紫輪囷之彩、豈止唐帝沈璧、氣合於金方、媯后望河、形摸於車蓋而已哉、臣等謹撿孫氏瑞應圖曰、慶雲太平之應、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、孝經援神契曰、天子孝亦德至山陵、景雲出、夫自非仁霑幽顯、德配乾坤、亦何上符烟熅、呈茲靈祉、臣等時屬休明、恩叨簪紱、預聞嘉氣、非常洗心、叢部夏發、曲而不毖至美者、誠非賁音之客也、靈符舒彩、而不稱神功者、恐

非叶贊之臣、無任抃躍鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀、

〔三代實錄八 清和〕貞觀六年正月七日甲午、是日太政大臣從一位臣藤原朝臣良房〇中略等、上表、奉賀帝加元服曰、臣聞夫冠者、五禮之始、嘉事之重、古之聖主、必敬此道、固斯長幼能和、尊卑有序、表成人之茂典、裁訓俗之宏綱者也、〇中略伏惟皇帝陛下、紀高巻領、功邁千古、攄睿哲於生知、凝沈幾於日用、今陽履端朔旦、開歲惟新、元服肇加、禮容斯畢、玄武之象既彰、黃屋之尊彌劭、叶民之望、超七十二君之濟虛、承天之休、握万八仟歲之寶籙、是知一人有慶、万國歡心、凡在黎苗、孰不抃躍、臣等任忝股肱、喜深骨髓、太陽既照、更增傾藿之誠、廣廈斯成、倶獻賀燕之志、不任鼓舞抃幸之至、謹奉表陳賀、以聞、

諫爭表

〔續日本紀十三 聖武〕天平十二年八月癸未、太宰少貳從五位下藤原朝臣廣嗣上表、指時政之得失、陳天地之災異、因以除僧正玄昉法師、右衛士督從五位下下道朝臣眞備為言、

〇按ズルニ、松浦縣起ニ、此時ノ上表ヲ載スト雖モ、疑フベキ所多キヲ以テ、此ニハ掲載セズ、

建議表

〔日本後紀二十二 嵯峨〕弘仁三年六月壬子、大納言正三位兼皇太子傳民部卿勳五等藤原朝臣園人上表曰、臣昔歲不揆庸非、頻歷外任、自西及東、總十有八年、黎民疾苦、政治得失、耳聞目見、願無相錯、夫銜綸出宰、旣持綱紀、親民撿察、良在郡領、今依去年二月十四日詔旨、譜第之事、已復舊例、况乎終身之任、得其人則遷替之吏、高枕而治、奕世之胤、非其器則見任之司、還招罪責、是以精選堪務、沙汰言上、而在京他人、爭第競申、抑退國選、越舊被任、試之政事、未克宜風、訪之民間、誰有推服、國吏月敷不覺、郡內年弊而無異、不治之責、還及牧宰、外官之數、前後不殊、方今仁風遠覃、德政屢降、然彫殘之餘、百姓猶困、實由撫養之失人也、伏請自今已後、銓擬郡司、一依言上、若還非其人、政績無驗、則署帳之官、咸解見任、永不敍用、以懲將來、天恩垂察、儻允臣請、則今年擬帳、悉從返却、一定改張、明春始行、庶令理治之聲、起於當年、富康之謠、流於後代、不任犬馬懷主之懇、謹奉表冒死以聞、詔可、

〔日本後紀二十二 嵯峨〕弘仁三年九月乙丑、左大臣從二位兼右近衛大將藤原朝臣內麻呂〇中略等、上表曰、

謝罪表

臣聞、鉤陳六位、環北極以分耀、衛尉八屯、居西京而警夜、誠以紫宮洞切、周衛無虧、黄屋尊嚴、不虞是備、夫左近衛、元是依散長直、職掌既重、儀式亦殊、晝夜警護、不離禁中、常見官省之事、悉知出入之人、大同之年、爲左右府、即停長直、一從番上、自茲上番下番、還去還來、苟守當番之直、不顧長久之法、坐作進退、稍忘其儀、伏惟皇帝陛下、道高万古、功邁百王、漢光之懸制、政規何能踰美、魏武之切言、兵略未足稱奇、臣等猥以庸虚、忝預警衛、職司宿衛、身統禁兵、伏望左右近衛府、府別簡其驍勇者五十人、依舊長直、自餘相副、亦令番上、許之、

〔性霊集 四〕請赦元興寺僧中璟罪表一首

沙門空海言、空海聞、緩刑之文、聞在前書、宥責之言、聞于舊策、是以草纓艾韠、揚美於垂拱年、赭衣畫冠、流譽於無爲日、伏惟皇帝陛下、慈逾春風、恵濃夏雨、至尊之名、聲騰龍夕、弘仁之號、播御鳳朝、天地感應、風雨不違、四海康哉、百穀登稔、夫鄧林幹中、必有枯枝、無爲化下、非無枉撓、伊祁之子、不肖厥考、瞽叟之息、不似聖父、金石靈藥、物之對也、賢聖愚頑、何能相離、伏見元興寺僧傳灯法師位中璟、不護戒行、不慎圖典、身隨役場川、猥犯其罪過、則死而有餘辜、論其犯贓、則碎也猶未飽、非但一己之亡、身喪名、抑亦汚穢佛法、違越王制、下愚不移、蓋斯之謂歟、春生秋殺、天道之理也、罰罪賞功、王者之常也、雖然冬天無暖景、則梅麥何以生花、守法不貸盜、則秦人何以流美、況復大樹仙人、迷於曲城、慶喜道者、被惱于鄧家、往古賢人、猶亦未免、濁世凡夫、豈得無愆、遷過令新、隋之寛大、宥罪納贓、稱之含弘、見苦起悲、觀音用心、視危忘身、仁人所務、伏乞陛下、解網而泣辜、絶纓而報讎、去秦政之必罪、取周成之措刑、更與天下而新、然則木石知恩、人鬼感激、空海從聞此事、魄爛魂飛、口忘食味、心不安寢、明知身賤而言不行、口開而災禍入、雖然不任以身代物、輕瀆威嚴、伏深戰越、沙門空海、誠惶誠恐、謹言、弘仁五年閏七月二十六日某上表、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官符

應以高雄寺爲定額并定得度經業等事

右正五位下行河内守和氣朝臣眞綱等上表偁、昔景雲年中僧道鏡、辱僭法王之號、遂懷窺窬之心、逼邪幣於群神、行權謫於佞黨、爰八幡大神、痛天嗣之傾弱、憂狠奴之將興、神兵交鋒、鬼戰連年、彼衆我寡、邪強正弱、大神歎自威之難當、仰佛力之呵護、乃因御夢請使者、有勅喚臣等故考從三位行民部卿淸麿、面宣御夢之事、仍以天位讓道鏡之事、令言大神、淸麿奉詔旨、向宇佐神宮、于時大神託宣、夫神有大小、好惡不同、善神惡淫祀、貪神受邪幣、我爲紹隆皇緒扶濟國家、寫造一切經及佛、諷讀最勝王經一万卷、建一伽藍、除凶逆於一旦、固社稷於万代、汝承此言、莫有遺失、淸麿對大神誓云、國家平定之後、必奏後帝、奉果神願、粉身殞命、不錯神言、還奏此言、遭時不遇、身降刑獄、遂配荒隅、幸蒙神力、再入帝都、寶龜十一年、敷奏此事、天皇感歎、親制詔書、未行之間、遇讓位之事、天應二年、亦奏之柏原先帝、卽以前詔書、普告天下、至延曆年中、私建伽藍、名曰神願寺、天皇追嘉先功、以神願寺爲定額、今此寺地勢沙泥不宜壇場、伏望相替高雄寺、以爲定額、名曰神護國祚眞言寺、佛像一依大悲胎藏及金剛界等、簡解眞言僧二七人、永爲國家修行三密法門、其僧有闕者、擇有道行僧補之、又簡貞操沙彌二七人、令轉讀守護國界主經、及調和風雨、成熟五穀經等、晝夜更代不斷其聲、七年之後、預得度例、一則果大神之大願、二則除國家之災難者、右大臣宣、奉勅、得度一代之間、每年聽度一人、自餘依請、

天長元年九月廿七日 ○又見類聚國史百八十一、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官符

應度眞言宗年分者三人事 ○中略

以前大僧都傳燈大法師位空海表偁、花嚴、天台、律、三論、法相等七宗之敎、皆是先代聖帝賢臣、建立十三大寺、賜十二人年分度者、廣入田園利稻、充講說經論料、各令分業習學、是故從昔迄今、人法鬱興、師資不絕、今眞言一宗、人法新起、流傳年淺、猶漏天恩、後學無憑、謹案太政官去弘仁十四年十一月十日

符、稱右大臣宣、奉勅、異言僧五十人、自今以後、令住東寺者、伏望准眞言七宗例、歳賜年分者、○中略

承和二年正月廿三日　〔日本後紀〕○又見續日本後紀

〔續日本後紀五仁明〕承和三年五月甲子、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣○中略等、上表曰、臣聞順風呼者易爲氣、因時行者易爲力、今之所新蓋此之謂矣、故左大臣贈正一位藤原朝臣冬嗣、情深誘掖、義貴能施、遂乃折割食封千戸、貯收篤學勸學兩院、藤原氏諸親絶乏者、同氏子弟勸學之輩、量班與之、但封邑之實、人衆則已、所以買置田業、散在諸國、創業之始、傳利所擾、不須督促、全入院裏、大臣沒後、巧避多端、合輸不輸十而八九、此則物色非公、人情不發、州縣僻遠、按驗不由之所致也、伏以臣因舊績、永錫功實、慭慭眇身、靡不沾潤、夫毀家登國、臣節攸先、以此拜章、皇誠事遠、於是逃愿者哉、冀赴實者反、竝濺力大臣、理國宜然、而墳土未乾、陵遲儵及、在於生者、不忍緘吞、伏冀乾慈、殊賜接授、下知國司、令加撿送、然則勢易於走丸、其事同於轉圓矣、援公之妨網、而濟物之矜大也、庶彼幽魂、蘇光寵於窀穸、凡厥含靈、陶實化而偷仰、

〔三代實録十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、○中略貞觀四年四月十二日、下詔令參議已上各論時政之是非、詳世俗之得失、右大臣藤原朝臣良相上表言、伏惟皇帝陛下、德高雲霓、明並日月、闡開廣詢之路、遙降不諱之綸、右大辨南淵朝臣年名爲進士、職經內外、稍通治體、既居樞要、山城守紀朝臣今守所歷之州、風聲必暢、論之良吏、自爲先鳴、伊豫守豐前王、才學早彰、資歷淹久、無他異跡、足謂老成、○中略然則令件等人同上意見、詔曰可、

〔三代實録十二清和〕貞觀八年二月廿一日丁卯、左中辨正五位下丹墀眞人貞峯等賜姓多治眞人、先是貞峯等上表曰、因土命氏、百王之彝規、分姓戚親、千古之茂典、姓乖其本、何紀皇流、氏失其初、誰知天原、私撿古記、檜隈廬入野宮御宇宣化天皇皇子加美惠波皇子生十市王、十市王生多治比古王、此王生產之夕、鬛多治比花飛浮湯沐釜、以斯冥感、名多治比古王、成長之後、固執謙退、奏請求姓、因賜姓多治比

公、便以名爲姓、存其舊意、飛鳥淨御原天皇十三年十一月一日、定八姓十三氏、是時多治比古男左大臣正二位志摩公賜姓眞人、志摩眞人是貞峯之高祖父也、天平六年、遣唐使正三位行中納言兼皇太子傅式部卿多治比眞人廣成入唐之日、改作丹墀、復命之後、猶用舊姓、傳來百年、無心變改、天長九年四月二十五日、木工頭從五位上多治比眞人貞成等奏請、改多治比三字、爲丹墀二字、當于斯時、貞峯等身非氏長、不預私議、心懷不穩、無駁論之、夫物貴不失眞、理則容因實、豈偏貴入唐之新文、詭所生之舊字乎、加之竊案文辭、情思義理、丹墀眞人是涉忌諱、伏願以古多治字、換今丹墀姓、但緣須文、請省比字、聊除一字、稍謂不變、然則存先祖之盛生、貽孫謀於不朽、不勝懇款之至、拜表以聞、詔許之、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年九月十日甲子、中務卿三品兼行太宰帥諱（光孝天皇）親王抗表、請賜男子姓言、臣聞破家爲國、叡審之嘉猷、忘己利公、賢成之茂躅、（中略）臣才非兩獻、器謝雙河、荷國恩於丘山、耻身効於涓塵、今見息漸衆、祿賜居多、爲善未聞、損公彌倍、靜而念之、悚懼无限、臣素乏高人之行、猶深報國之志、比年每聞、官倉不贍、歲用難支、雖向人而不言、常通夜而忘寐、徒歎上祿之多情、却恨短袖之難舞、唯願削諸男之屬籍、與諸臣而同貫、罷祿賞於歲時、加絲髮於國用、夫男能自謀、女尤足悲、況亦祿留一身、公費斯淺、是以故一品葛原親王等除之、不入於改姓、臣之愚意、苟後（○後恐復誤）同之、竊見歸燕欲去、願戀彫梁、老驥將斃、徘徊伏櫪、禽獸猶然、況於人意、既謝皇蔭之尊、何无係慕之義、仍以宗室朝臣、欲爲其姓、伏望天慈、曲垂哀許、不勝悾款之至、謹拜表以聞、不許、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年八月廿二日癸亥、太政大臣從一位藤原朝臣基經、左大臣正二位源朝臣融（○中略）等上表、請立皇太子曰、臣基經等言、乾分七耀、仰前星以勝荒、坤載重溟、仰少海而導澤、是以上閱（○闕、一本作宮、）揖和、承祧之道克昌、元良開基、守器之方相屬、故知百王御邦、千帝膺圖、莫不建儲貳、賛庸經治、伏惟皇帝陛下、誕敷玄化、啓遐紫宸、代太上之憂勤、答群下之欣戴、日愼一日、雖休万方以事、四稔行及、猶久虧大本、未立元儲、青宮寂寥、黔首翹望、伏望憲章稽古、建震坊、昭宣天序、鍾慶於龍樓、崇明國貞、毓

德於稽朝、臣等不勝慺々之至、謹奉表以聞、

〔日本後紀 五 桓武〕延暦十六年二月己巳、先是重勅從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士菅野朝臣眞道 略○中 等、續日本紀、至是而成、上表曰、臣聞三墳五典、上代之風存焉、左言右事、中葉之迹著焉、自茲厥後、世有史官、善雖小而必書、惡縱微而无隱、咸能徽烈絢緗、垂百王之龜鏡、炳戒昭簡、作千祀之指南、伏惟天皇陛下、德光四乳、道契八眉、握明鏡以總万機、懷神珠以臨九域、遂使仁被渤海之北、貊種歸心、威振日河之東、毛狄屛息、化前代之未化、臣往帝之不臣、自非魏々盛德、孰能與於此也、既而負扆餘閑、留神國典、爰勅眞道等、銓次其事、奉揚先業、夫自寶字二年、至延暦十年、卅四年廿卷、前年勒成奏上、但初起文武天皇元年歲次丁酉、盡寶字元年丁酉、總六十一年、所有曹案卅卷、語多米鹽、事亦疎漏、前朝詔故中納言從三位石川朝臣名足、刑部卿從四位下淡海眞人三船、刑部大輔從五位上當麻眞人永嗣等、分帙修撰、以繼前紀、而因循舊案、竟无刊正、其所上者、唯廿九卷而已、寶字元年之紀、全亡不存、臣等搜故實於司存、詢前聞於舊老、綴叙殘簡、補緝缺文、雅論英猷、義關貽謀者、總而載之、細語常事、理非書策者、並從略諸、凡所刊削廿卷、并前九十五年卌卷、始自草創、迄于斷筆、七年於茲、油素總畢、其目如別、庶飛英騰茂、與二儀而垂風、彰善癉惡、傳万葉而作鑒、臣等輕以管窺、裁成國史、牽愚歷稔、伏增戰兢、謹以奉進、歸之策府、

〔延喜式 一〕上延喜格式表

臣忠平等言、竊以天覆地載、齊帝則之育民、陰慘陽舒、明王象之敕俗、雖則朴彫至、馳鶩之迹、古今不同、然而立法垂規、勸戒之道、夷隆一致、盛級太上天皇、化周天壤、澤覃淵泉、制格式之明文、貽簡冊於昆季、六典詳其綱紀、百寮無所依違、斯固納軌之楷模、經國之准的者也、貞觀先帝繼受寶命、廣肩洪基、教百王之澆漓、導万民於富壽、憲章所以疊矩、凡例由其重規、暨乎年代稍遐、質文遞起、莫不變通之道、南北分岐、號令之流、淺深別派、皇帝陛下、道四三皇、德六五帝、灑甘雨以運普天之澤、扇淳風而拂率土之

塵、重賞輕刑、雲雁之關忘、鴛省徭薄賦、野鹿之群不驚、然猶恐惠化未周、頑民陷法、遂降冲旨、彌繕隄防、增損往策之科條、裨補前修之遺缺、臣等謹奉綸命、忽履薄氷、於是搜古典於周室、擇舊儀於漢家、取捨弘仁貞觀之弛張、因循永徽開元之沿革、勒成二部、名曰延喜格式、但格十二卷、筆削早成、往年奏御、式五十卷、撰集纔畢、今日上聞、臣等識非老彭、勤在祖述、聊窺其腠理、事達彼膏肓、伏願洪慈、曲降照鑒、特垂允容、謹詣闕拜表以聞、臣忠平等、誠惶誠恐、頓首頓首、謹言、

延長五年十二月廿六日

左大臣正二位兼行左近衞大將皇太子傅臣藤原朝臣忠平

大納言正三位兼行民部卿臣藤原朝臣清貫

從四位上行神祇伯臣大中臣朝臣安則

從五位上行勘解由次官兼大外記紀伊權介臣伴宿禰久永

外從五位下行左大史臣阿刀宿禰忠行等上表

〔日本後紀 嵯峨 二十一〕弘仁二年十一月甲辰、賜書存問玄賓法師、又施綿百屯、布卅端、法師卽上表謝恩、

〔性靈集 四〕爲大德如實奉謝恩賜招提寺封戶表一首

沙門如實言、伏蒙恩施招提寺封戶伍十烟、如實隨師遠投聖朝、六十年于今矣、雖云德行無取、才能不聞、賴先師餘慶、聖朝恭澤、積恩累疊、積有年歲、伏惟皇帝陛下、仁過兩儀、道隆貫三、顧彼福田、捨此封戶、四衆万民、無不感悅、況於如實、不知手足、謹詣闕奉表、陳謝以聞、沙門如實、誠懽誠喜、謹言、

奏

奏トハ、諸司事ヲ錄シテ、天皇ニ奏聞スルノ謂ナリ、而シテ奏ハ、邦語ニマヲス、又ハマウスト

調ズ、マウストハ、凡テ下ヨリ上ニ告グルノ義ナリ、文武天皇ノ令ヲ定ムルニ至テ、始テ奏文ノ式ヲ制定ス、而シテ太政官事ヲ奏スルニ三等ノ別アリ、大事ハ太政大臣以下、大納言以上、議定シ畢テ、具サニ事狀ヲ錄シテ、大納言ヲシテ之ヲ奏セシム、卽チ年月日ノ次ニ、聞ノ字ヲ宸署シ給フ、之ヲ御畫聞ト云フ、乃チ之ヲ留メテ案トシ、御畫ソ後ニ奏官ノ位姓ヲ注ス、之ヲ論奏ト云フ、中事ハ奏聞畢テ、大納言奉勅依奏ノ四字ヲ注シ、又其位姓ヲ注ス、之ヲ奏事ト云フ、小事ハ少納言之ヲ奏シ畢テ、亦奏事ト同ジク勅許ノ由ヲ注シテ、下ニ其位姓名ヲ注記ス、之ヲ便奏ト云フ、延喜天曆以降、論奏ニ可ノ字ヲ畫シ、又年月ノ下ニ日ヲ宸署シ給ヒ、或ハ御畫ナクシテ、勅答ヲ賜ヒシ例アルハ、並ニ論奏ノ正式ニアラザルナリ、

官奏ノ儀タルヤ、大臣及ビ大納言、必ズ宣旨ヲ被リテ伺候ス、時剋天皇淸涼殿ノ晝御座ニ出御ス、所司ヲシテ奏者ヲ召サシム、奏者卽チ奏文ヲ文杖ニ插ミ、參入シテ跪ク、天皇之ヲ目シ給ヒテ後、御前ニ進ミテ奏文ヲ獻ジ、退テ座ニ著ク、叡覽畢テ後、奏者進ミテ之ヲ給リ、文杖ニ加ヘテ退出ス、明日史奏報ヲ藏人ニ付シテ奏セシメ、畢テ之ヲ所司ニ下ス、中古以降ハ、官奏ノ儀ヲ行フニ先チテ、執柄ノ臣必ズ之ヲ內覽シ、又天皇幼冲ナレバ、攝政代リテ官奏ヲ覽ル、而シテ里第ニ於テ其儀ヲ行フ例ナリ、

奏彈ハ彈正臺ノ糺彈ヲ謂フ、卽チ臺ヨリ官人ノ非違ヲ糺彈シ、事大ナレバ、具サニ其犯狀ヲ錄シ、尹以下判官以上之ヲ奏ス、其奏文ニハ、年月日ノ次ニ、聞字ヲ畫シ給ヒ、乃チ之ヲ留メテ案トスルナリ、尙ホ官位部彈正臺篇及ビ法律部糺彈篇等ヲ參看スベシ、

衞府擬舍人ノ奏文ハ、太政官ヲ經ズシテ、本府ヨリ直ニ內侍、及ビ藏人ニ付シテ之ヲ奏セシム、中古以降又御畫ヲ加ヘラルヽコトヽナレリ、

寮司ノ事ヲ奏スルニハ、必ズ之ヲ總省ニ申ス、省ノ事ヲ奏スルニハ、太政官ヲ經テ之ヲ奏ス、

而シテ朝儀ニハ、省司直ニ事ヲ奏シ、或ハ又省各、其職掌ニ由リテ奉ル所ノ奏文ヲバ、内侍若シクハ藏人ニ付シテ奏セシムルコトアリ、之ヲ直奏ト云フ、又諸司事ニ隨ヒテ、奏文ヲ奉リテ上請スルヲ請奏ト云フ、又神祇官、陰陽寮等ヨリ官人ノ闕替ヲ申請スル奏文ニ、數人ノ事ヲ連載スルヲ連奏ト云フ、

外官急速ヲ要スル奏事アレバ、必ズ飛驛ヲ以テ上奏ス、太政官之ヲ檢シ、少納言ヲシテ奏進セシム、事ハ驛傳篇ニ詳ナリ、又諸司密事ヲ奏スルニハ、必ズ封緘シテ之ヲ奏ス、之ヲ密奏ト云フ、諸司意見ノ奏、天文ノ奏等是ナリ、

奏文誤失シ、或ハ奏スベキ事ヲ奏セズ、又奏スベカラザル事ヲ奏シテ、不實ナレバ罪ヲ科スル差アリ、又奏文ノ用紙ハ、總テ熟紙ヲ備ハシメ、其案ハ所司ヲシテ永存セシムルナリ、

〔伊呂波字類抄 末辭字〕奏ソウス

〔文心雕龍 五〕奏啓第二十三

昔唐虞之臣、敷奏以言、秦漢之輔、上書稱奏、陳政事、獻典儀、上急變、劾愆謬、總謂之奏、奏者進也、言敷于下、情進于上也、秦始立奏、而法家少文、觀王官之奏、勳德辭質而義近、李斯之奏驪山事、略而意逕、政無膏潤、形於篇章矣、自漢以來、奏事或稱上疏、儒雅繼踵、殊采可觀、若夫賈誼之務農、晁錯之兵事、匡衡之定郊、王吉之觀禮、溫舒之緩獄、谷永之諫仙、理既切至、辭亦通暢、可謂識大體矣、

〔獨斷 上〕凡群臣上書于天子者有四名、一曰章、二曰奏、三曰表、四曰駁議、〇中略奏者亦需頭、其京師官但言稽首、下言稽首以聞、其中者所請若罪法劾案、公府送御史臺、公卿校尉送謁者臺也、

〔唐六典 八門下省〕凡下之通于上、其制有六、一曰奏抄、謂祭祀支度國用、授六品以下官、斷流已下罪、及除免官當者、並爲奏抄、

二曰、奏彈、謂御史糺劾百司不法之事、三曰、露布、謂諸軍破賊、申尙書兵部而聞奏焉、四曰、議、謂朝之疑事下公卿議、理有異同、奏而裁之、五曰、表、六曰狀、○中略 漢承秦法、群臣上書、皆言昧死言、王莽盜古、改昧死曰稽首、光武因而不改、朝表制度、自漢以後、多相因循、隋令有奏抄、奏彈、露布等、皇朝因之、其駁議表狀等、至今常行、其奏抄露布、侍中審、自餘不審、皆審署申覆而施行焉、 復奏畫可訖、留門下省爲案、更寫一通、侍中注制可、印縫署、送尙書省施行、

奏文

〔令義解一職員〕太政官

大納言、○中略 四人、掌○中略 敷奏、謂敷陳奏進也、○中略 少納言三人、掌奏宣小事、謂公式令、所謂奏請鈴印、及賜衣服、如此小事之類是也、○中略

大外記二人、掌勘詔奏、謂勘正詔書、及勘署奏文也、○中略 少外記二人、掌同大外記、

〔令義解一後宮職員〕內侍司

尙侍二人、掌供奉常侍奏請、謂奏請其類、凡此婦女同、不謂明官、若須奏請者、自依諸官式也、

〔類聚符宣抄六〕左大辨參議平時望朝臣、從去三月廿五日、依身病、次々進假文不仕、右大辨參議紀淑光朝臣、從五月十五日、同依身病不仕、爰官中之政、頗以擁滯、依先例、候官奏、幷可有申文之由、右少辨源朝臣相職、奉左丞相仰、以六月五日傳仰官中已了、仍從同月八日、始候官奏、

承平六年六月八日

論奏式

〔伊呂波字類抄呂疊字〕論奏

〔令義解七公式〕論奏式

太政官謹奏、其事、謂假令注云、太政官謹奏、用正稅事之類也、

太政大臣位臣姓名

左大臣位臣姓名

右大臣位臣姓名

大納言位臣姓名等言云々、(謂、假令注云、爲充軍糧、用其國正稅之類也、)謹以申聞、謹奏、

年月日

　聞御畫

　大納言位姓

右大祭祀、(謂、神祇令所言大祀、及臨時大祀之類也、)支度國用、(謂、太政官准年豐儉、增減用度、假令年事不入、冢宰留用、年事皆入、乃復其初之類是也、即與主計寮支度國用、國文異義也、)增減官員、(謂、增減省職寮司、及主典以上之員數也、)斷流罪以上及除名、(謂、此所司不得專斷、事必須議定者、假令獄令犯罪應入議請者、於官議定、雖非六議、但本罪應奏、處斷有疑、及經斷不伏者、亦衆議定之類是、但刑部及諸國斷流以上及除免官當者、連寫案申太政官、雖是流以上、而非可議者、故入奏事也、問、免官以下、處斷有疑者、依獄令合議定、且得入此條歟、答、文云除名、不稱免官、輕重已異也、即須入奏事、)廢置國郡、(謂、廢停置建也、)差發兵馬一百匹以上、(謂、差發騎兵也、文唯舉馬、不言人者、其馬不可獨用、必有人須知故、若差發步兵百人、亦准此式也、)用藏物五百端以上、錢二百貫以上、倉粮五百石以上、(謂、其自餘貨物、准價相當者、亦准此式、朔節所用、威儀兵仗、及位祿季祿等、雖物多數、事是尋常、故入下條也、)奴婢廿人以上、馬五十匹以上、牛五十頭以上、若勅授外應授五位以上、(謂、除勅授外、官議合叙者、其選叙令計考應至五位以上奏聞者、入奏事式也、)及律令外議應奏者、(謂、假令依年凶荒、議奏給復之類、此以其無正文、即爲律令之外也、)並爲論奏、畫聞訖、留爲案、御畫後注奏官位姓、

〔令集解三十一公式〕釋云、律令內應奏諸事大者爲論奏、中者爲奏事、小者爲便奏、是合唐律令、

〔延喜式十一太政官〕凡刑部省所申斷罪文書者、造二通、十月四日進辨官、即日史讀申、外記覆勘造論奏、廿日以前奏聞、(謂流罪以上、及除免官當、)若有依奏及恩降、並具狀錄刑部解、後印之、訖附辨官、(一通留辨官、一通下刑部、)

〔西宮記臨時一〕論奏

　廢置山陵、公卿依病、隨事繁多也、大略顯一端、

太政官修論奏、公卿連署了(大臣加名一字、)奏聞、主上書可字、內侍奏諸衞擬近奏、賜聞字云々、(近衞府作奏付之、)公卿

依病論奏、上卿就御所奏聞、被仰云、病止可令從事、

〔西宮記臨時一裏書〕延喜十六年十月三日、右大臣奏太政官奏、大納言源朝臣、藤朝臣等依不上狀文、〇中略

仰殊令待病愈、須解任、上□仰令加殊字、

〔北山抄六備忘略記〕論奏事（諸陵・山陵・省減官職、公卿依病不上、公卿辭職、流罪以上等類也、）

太政官修之、外記插文杖奉上卿、披見返給、又插文杖立小庭、上卿參上、付藏人令奏聞、（御畫聞字、加詔書、覆奏可字）

畢返給、上卿還著本座、外記奉之、見畢返給、（或置不見、令退出云々、非也、）

〔禁秘御抄下〕論奏

太政官修論奏、公卿連署、（大臣加名字、）上卿就御所奏之、主上書給可字、其樣同詔書覆奏、

應和三年七月、公卿請停止行舊錢、用新錢論奏、及康保二年三月、同書聞字返給、

延喜四年正月廿六日、立太子論奏書可、凡可字聞字兩說歟、多聞字也、可尋勘、

〇按ズルニ、禁秘御抄楷梯ノ目錄ニハ、論奏ヲロンゾウト訓メリ、

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年十二月八日己酉、太政官論奏、請省除太皇太后宮九月廿八日東寺國忌、勅許之、

〔西宮記臨時二〕論奏事

延喜元年十月十六日、穀倉論奏事、其日不詳、〇又見政事要略、

〔貞信公記〕天慶十年（〇天曆元年）三月廿三日、可令作論奏事、示大臣、　廿九日、奏減臣下封祿論奏、其儀右大臣令持外記、到御所、付藏人令奏者、

〔日本紀略三村上〕天曆元年四月六日辛酉、是日依詔書論奏、賜官符、

〔西宮記臨時一裏書〕應和三年七月廿八日、民部卿令延光奏公卿請停舊錢用新錢論奏、（狀中云、以來十月、爲禁止之始者、）奏聞下給、

康保五年三月十一日、左大臣令延光朝臣奏太政官奏請省國忌文、三月十日□□□大后興福寺□□□即書聞、訖返給之、

〔殿暦〕嘉承三年七月七日乙卯、今日有論奏、仍戌剋許參內、直衣冠を著、如余○藤原忠實有宿所、左府上卿參陣、以爲房被示云、御畫事如何、余答云、可依先例、但舊例可字、近例聞字、而外記師遠大外記申云、寬德、承保例、主上令入日給云々、而承保度、故殿御記云、主上○當時法皇白河令入聞字給由見御記、仍以五位藏人顯隆、奏此旨於院、○白河仰云、外記申旨極不便也、承保度聞字也、仍余可書聞字之由、仰頭藏頭爲房了、即向陣頭了、暫之後、插論奏於文刺持來、余取之開見了、書聞字返給、上卿參弓場殿、

論奏無御畫

〔西宮記臨時二〕天暦十年九月、論奏勅答無御畫、此日內記晤書日、被問案內、上卿被申延長例云々、

〔北山抄六備忘略記〕論奏事

公卿依病不上論奏返給時、仰云、待病罷天令從事與云々、不書聞、

論奏例

〔類聚三代格十五〕太政官謹奏

應給職田坊令事

右謹案令條、左右京毎條置坊令一人、督察所部、惟人是憑、而任居要籍、秩無微俸、至于除補、競事辭遁、伏望特給職田二町、優恤其身、令勤職掌、臣等商量如前、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

延暦十七年四月五日

聞

〔本朝文粋四論奏〕太政官謹奏

停多褹島隷大隅國事　都良香

右參議太宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解偁、謹撿案內、太政官去二月十一日符偁、件島南居海中、人兵乏弱、在於國家、良非扞城、夫島司一年給物、准稻三萬六十餘束、其島貢調、鹿皮一百餘領、更無

別物、可謂有名無實、多損少益、右大臣宣、奉勅、宜商量利害言上者、南溟蕞々、無國無敵、有損無益、一如符實、須停島隷大隅國、計其課口、不足一郷、量其土地、有餘一郡、能滿合於馭謨、益救合於熊毛、四郷爲二、於事得便者、皇帝登極、事期濟世、明王布政、理貴適時、臣等商量、昔漢元帝納賈誼之言、罷珠崖郡、前史以爲美談、後世稱其英烈、雖建國量疆、非無分野、而郵民救急、猶棄州郡、況溟海之外、費損如此、加以往還之吏、漂亡者多、運送之民、溺沒不少、守無益之地、損有用之物、求之政典、深迂物議、伏望依件停隷、以省遙弊、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

天長元年九月三日○又見二類聚三代格、朝野群載一、

〔西宮記 臨時 二〕論奏事

太政官謹奏

參議從四位上藤原朝臣元輔

右謹案、選叙令云、職事官患經百廿日、解官者、今件人依病不上、滿百廿日、仍准令條、具狀奏聞、謹以申聞謹奏、參上公卿依病不上論、被仰可、依公事由云々、

天德元年九月廿七日

正二位太政大臣臣藤原

左大臣從二位兼皇太子傅臣源

正三位守右大臣兼行左近衞大將臣藤原

大納言正三位兼行陸奥出羽按察使臣源朝臣雅信

大納言正三位兼行右近衞大將臣藤原朝臣兼家

權中納言從三位臣源朝臣重信

中納言從三位兼行中宮大夫臣藤原朝臣朝成

權中納言從三位臣藤原朝臣兼通
中納言從三位兼行左衞門督春宮大夫臣源朝臣延光
中納言從三位兼行民部卿臣藤原朝臣久範
參議從三位行大藏卿兼右兵衞督臣源朝臣重光
參議從三位行左兵衞督兼讃岐守臣藤原朝臣濟時
參議正四位下行右衞門督臣藤原朝臣
參議左大辨正四位下兼行式部大輔備前權守臣源朝臣保光
參議從四位上行左近衞中將兼備中守臣藤原朝臣爲光

今案件頗相違令文、此若舊例歟、○又見政事要略、

〔政事要略三十年中行事〕公卿依病不仕論奏、今案、申於攝政歟、無大臣名之故也、

論奏有勅

〔西宮記臨時一〕論奏

延喜四年正月廿八日、上立太子論奏、二月一日内侍臨東檻、賜勅答、大臣就東階賜之、入勅書於懷中、可拜云々、而不拜云々、二日又上、五日、賜勅答、七日又上、十日立太子、

〔北山抄六備忘略記〕天暦十年八月八日、上請減臣下封祿論奏、十九日有勅答、廿七日重上論奏、九月廿八日、勅書權減十二分之二、

〔北山抄六備忘略記〕論奏事

天暦十年、上請減臣下封祿論奏、内侍給勅答時、卿相列立小庭、西面重行、大臣起座、出自一間、納言以下出自二間云々、而儀立軒廊、第一人進昇東階半、取勅答、復本列、入懷拜舞、延喜請立太子時、時平大臣爲第一、可拜之由見御記云々、後日給中務、是不可然、依先例歟、

論奏違失

〔律疏職制〕凡被詔書有所施行、而違者徒二年、失錯者杖八十、失錯、謂失其旨、其勅及論奏得罪亦同、依上條、稽緩詔書、注云、謄詔勅符移之類皆是、即明詔勅之義、輕重不殊、其論奏御親畫聞、勅則承旨宜用、御畫不輕、承旨、理與勅旨義同、

論奏違法

〔律疏 職制〕凡稱律令式不便於事者、皆須申太政官議定奏聞、若不申議輒奏改行者徒二年、謂律令及式條內、有事不便於時者、皆須辨明不便之狀、具申太政官、議定以聞、改之、謂奏聞不申太政官、直遂所見、但奏改者徒二年、

奏事式

〔令義解 七 公式〕奏事式

太政官謹奏

其司位姓名等解狀云々、謹以申聞、謹奏、

年　月　日

太政大臣位臣姓

左大臣位臣姓

右大臣位臣姓

大納言位臣姓名

奉勅依奏、若更有勅語須附者、各隨狀附云々、謂此大納言自注之辭、若少納言代奏者亦准此、凡少納言奏事之官、唯於其所奏之事、即得自奉勅語、除此之外、不得復奉勅、

大納言位姓

右論奏外、諸應奏事者、並爲奏事、皆據案成乃奏、奉勅後、注奏官位姓、若少納言奏者、加名、

奏事例

〔類聚三代格 四〕太政官謹奏

應令度者闇誦法華最勝兩經事

佛教流傳必在僧尼、度人材行實簡所司、比來出家不審學業、多由囑請、甚乖法意、自今以後不論道俗、所舉度人唯取身才、闇誦法華經一部、或最勝王經一部、兼解任禮佛、淨行三年以上者、令得度者、學問彌長、囑請自休、其取僧尼兒詐作男女、令得出家者准法科罪、所司知而不正者與同罪、得度者還俗、朝議商量、具如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

天平六年十一月廿日

奉勅依奏

〔享祿本類聚三代格六〕乾政官謹奏

陸奥國鎭守府給公廨事力事

將軍准守　將監准掾　將曹准目　若帶國者、不須兼給、

右件府官人、離家遠任、理須矜恤、伏請自今以後、准件並給、臣等商量如前、伏聽勅裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

天平寶字三年七月廿三日

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官謹奏

應行勅旨幷內侍移文事

右大內記正六位上山名王等解狀云、謹撿神龜以降案內、內侍司送中務省牒、年月日下、或署內記位姓名、或署女史姓名、然則牒送中務、既乖令意、內記署名、未見何據、望請勅旨以外、准公式令內外諸司因事管隷式、令女史作移文、卽年月日下、署女史位姓名、各免僣違、從守職務者、臣等商量、所請合宜、伏望依令改行、兼特聽女史署、但案職員令、掌侍不得奏請宣傳、准此論之、不聽掌侍署名移文、其內侍司印、行之已久、只請移文便令印之、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

大同元年八月二日

便奏式

〔令義解公式七〕便奏式

太政官奏

其司所申、其事云々、謹奏、

年　月　日

奏彈式

事勅依奏、若不依奏者、(謂依奏之內、亦有不依者、若全不依者、則不可注也、)即云、勅處分云々、

少納言位姓名

右請進鈴印、及賜衣服鹽酒菓食、幷給醫藥、如此小事之類、並爲便奏、其口奏者並准此例、(謂口奏之事、准式立案也、)事勅後、注奏官位姓名、

〔令義解七公式〕奏彈式

彈正臺謹奏、其司位姓名罪狀事、

具官位姓名(謂上文云其司位、此云具官位者、假令一人兼帶數官、在上唯注其一官、於此皆盡其兼官之類、只此爲別、故立文不同也、)貫屬

右一人犯狀云々

勘上件甲乙事狀、如右、謹以上聞、謹奏、

年月日彈正尹位臣姓名(謂若无尹者、判官以上亦得奏也、)

聞御畫

右親王及五位以上、(謂一位以下也、)太政大臣不在此限、有犯應須糺勘而未審實者、並據狀勘問、不須推拷、(謂依律、應議請減者、雖不合拷訊、皆據衆證定罪、其得減之色、尙不須推拷、何況議請之人、不待罪知、凡彈正是糺勘之職、非科斷之官、即不限有位無位、皆不須推拷也、)委知事由、事大者奏彈、(謂解官以上也、何者、獄令云、雜犯死罪、獄成會赦者、解見任職事、此謂當解官也、若於無品親王者、徒罪以上、即爲事大也、)訖留臺爲案、

〔延喜式四十一彈正〕凡臺奏彈事者、不經太政官、而直奏聞、(行奏事者、忠詣閤門、告大舍人、令奏事狀、有可召者、尹以下忠以上共入上聞、若御大極殿者、忠就大舍人處、令奏事狀、舍人召之、忠准上聞、但臨時奏事者、忠以上一人、詣內侍所、令內侍奏聞之、)

〔延喜式十一太政官〕凡應差使遣諸國者、太政官先以狀奏聞、

〔新儀式五臨時〕官奏事

天皇御南殿之儀、具見旬日、但御中殿、大臣或大納言有奏者內已其則大臣奏請、若有被聽口狀、直下、

官奏式

外記、令仰事由、其人幷大辨等、先令殿上辨召藏人奏聞候奏文之由、聞食訖、立御基帳於母屋、敷圓座於孫廂御座間、令喚奏者、奏者插奏文於書杖、（插笏於手）從侍方參上、暫居南廊小板敷、候氣色、天皇目之、隨喚昇簀子敷、著圓座、獻書、覽訖返給、一々結申訖、以書取加於書杖而退下、明日官史書奏封、付藏人奏之、

〔西宮記 臨時 六〕官奏

雖大臣宣旨後可候、大納言候時、書下宣旨、大臣候時、以詞宣下、大納言參上事、依大臣申請也、於結政若陣腋、史申直辨大辨等之後有奏、

〔北山抄 三 拾遺雜抄〕官奏事（奏申之人參御所、奏其人候奏之由、御裝束畢、出御後、被召仰可召奏者之由、傳召後、即出揖告史、官人人可令告歟、或說、先令女房候案內、御裝束畢出御時、奏候由云々、或又以女房先令候氣色、必於晝御座奏之、承可奉仕御裝束之由、仰藏人令奉仕之云々、近例如之、）大臣著南所者、申文史退出間、可候奏史相替進立巽角、申候奏由、（候奏大納言著時、不申之）大臣著陣座、大辨申云奏、大臣揖之、大辨（稱唯云々）顧面史執奏文、（插於文杖、寄立史後柱下、大史及左右少史上臈候、）進候小庭、大臣目之、史稱唯、進膝著、奉奏文、大臣置笏於左、（寄人或置右）取文持之、史著定而揖矣、大臣解結緒、置文右、以左右手開文、（或只以左手開）攬寄於表卷紙右邊、一々取之、隨見置左邊、（先見本解、次見續文、從端見之、或從奥見、若有疑事、即問大辨、隨狀進止、）見畢、卷結置板敷端給之、史取披一枚申云、可候文若干枚、若有難書結文之間下給、史披文候氣色、隨狀仰之、（或返給令改申、或結申、御前例云々、或說如之、奏文、頗卷出給之云々、非也、有小難文、不必返却、參御前、結申、次奏案內、隨仰進止、贈太政大臣說云々、）史即退出、若有勘解由奏之由退出、主典執奏文、相替參入、候小庭、大臣目之、進奉奏文、大臣小許見之、（只見內案）結而推出、主典取之退出、（此間大辨起座之由、見九條記、云々、非參議大辨尤可然歟、）召殿上辨、令奏候奏之由、（若殿上辨不參、令藏人奏、不令大辨奏之、）奏者傳召、大臣起座、經軒廊東第二間西邊、（納言者、經同間東邊、一位大臣者、可經三間東邊歟、）度階下、進射場殿、立軒廊西二間壁下、（南面、或北面、）史幷主典跪射場南邊、主典以勘奏授史、史插加官奏文杖、進奉大臣、（大臣北面時、從右邊奉之、）大臣插笏執奏、入自右青瑣門、經年中行事御障子南、（進自御障子東柱東、或經御障子與柱之間云々、）跪同御障子北邊、宸儀目之、大臣稱唯、進自孫庇、當御前間、跪長押下、膝行而昇、（自御座頗北進、但老宿人、跪長押上、納言或於長押下進之、師尹大臣例也、）敬屈進奏文、左廻著孫庇圓座、（經圓座南邊著）

之、納言著不正座、云々、此事未爲可、持文杖而候、天覽畢、卷結置御座前、大臣置文杖於座右、進給奏文、復座、披文結中、押合而候、紙端閉之、隨勤餘稱唯、此次或給宣旨、畢卷結、取副文杖、自御障子西退下、立本所、給史、還著陣座、史幷主典、各插文杖相從、大辨著座後、史先跪膝著奏文、大臣取而置前、主典進候小庭、大臣目令退出、次大臣開文、給表卷紙、史開置前、大臣取文披見、一々結之、史開本解合覽、卽仰奏報、成許文者、仰云、申乃任、可勘申文者、其事勘申、可改申文者、仰云、令改申、畢、訖史開文一枚申云、成文若干枚、若有勘申幷返給文、各申其由、但上臈於御前給文下也、卷文畢開、取結緒結之、或以筥者、卽把筥、驗明、此書類、副付藏人、覽大臣、又申大辨幷座辨云々、慣不堪文雖多枚數、猶先給表卷紙、後作結給解文、史開目錄、候氣色也、件文取不給史、加文末介天覽時、史給之、〇中略

承平六年六月、左右大辨共以不參、依先例有奏幷申文、天慶七年、又有此例、

天慶四年七月廿五日、主上初聞食官奏、所候文三枚、而一枚於殿被止、仍候二枚、康保五年二月五日、給御覽官奏一枚、或云、被止之、依承平例、令候二枚、〇中略

安和元年八月廿五日、左少辨陳忠朝臣奏文持來、其數十五枚、年來無此例、廿六日、召安國宿禰、被仰奏文數多之由、前例或四五枚、或六七枚、不見十餘枚例云々、申云、恒例所撰上十餘枚、候奏之辨撰留、至大辨前又撰留之、而昨日陳忠朝臣及大辨無撰留文、右大辨重病後、不具見歟云々、仰後々不可然之由、可示大辨、〇註略

或人云、故大納言延光卿記云、邑上御時被仰云、左右大臣候奏之時、左大臣、〇藤原實賴跪長押上、右大臣、〇藤原師輔跪長押下、兄弟之間、其儀不同、一家之說、何相異乎云々、以此仰旨、申左大臣、命云、跪長押下、是正說也、然而年齒漸老、進退非例、仍下官隨堪、跪長押上也者、以此趣奏聞、有歎感云々、

〔江家次第 九 九月〕官奏

大臣著陣、入自敷政門、先著奥座、大辨同著橫切座、次依大臣氣色、大辨以下著床子座、次奏史渡北著床子之後、大臣移著外座、次大辨見文、畢著外橫切座、端筥中云奏、大臣揖許、大辨稱唯、訖左顧、史進奏文、先候小庭、依大

(臣目、稱唯著軾、大臣置笏於左、御鍋人或置右、取文持之、史著定而揖、)大臣開結緒、置文右、以左右手開文、挑遣於表卷紙右邊、一々取之、隨見置左邊、(先見本解、次見續文、從端見之、或從奥見、)見畢返給之、史披一枚申云、可伊(○伊恐衍字)候文若干枚、畢退出、次大臣問直辨於大辨、令殿上辨(若無者令藏人申之)奏申、辨進御所申云、左(乃)大(伊)末布知支美奏候(布)、次主上被仰可令裝束由、御裝束畢、次主上出御晝御座、召人、直辨候年中行事障子下、依御氣色到杖座著軾、召云(女志)(○志恐須誤)大臣稱唯後、辨退告成由於史、大臣參上、大辨起經軒廊東第二間西邊、(納言經同間東邊、一位大臣經第三間東邊并階下、)史捧奏文相從、到弓場殿廊西第二間、北面而立、史趍跪進文杖、(小野宮流有異儀、)大臣插笏取書杖、(文當左番(恐當)程、其杖一揖、爲令文不動也、或令文在杖上、有事危、仍令在杖下方、)令入無明門、(於此所刷衣裳、或改襪、有隨身之人有便、不然以官人、令持之、又有隨身、有闌致、或長入居神仙門西、或不入、)畢自青瑣門、經年中行事障子與小柱之間、跪於障子北頭程揖、主上目許、大臣稱、(此間恐脫唯字)高長起昇廣廂、(自程檻鍋東行)到第三間、漸屈行、到御座間、跪膝行、(三度)恭敬而進之、若不及者膝行、昇長押進之、主上取文置御前、御、大臣膝行退下、於長押下起、(左廻)副長押南行、到第三間中央、(以下重不懸圓座之程爲定)更廻著圓座、(作持杖揖、但先居蹲、漸居進一度、不正座、)次主上先開文御、(結在懸紙下、)挑遣文於懸紙之右方、一々覽文、置於左方、御覽畢結之、(一結整文上方、不顧下方、參進、)訖置於御前、御(顧揖出)大臣置杖、(不置)又手進給文復座、(無揖)置文於前、刷衫袖、(左右袖次第刷之、不一度刷兩袖、)次開結緒之後、推書於左右、次開文結申、先於左腋開文押合、更當前開之、結申訖推合、但顧開之、是有同仰時更開無便也、於腋方綟帖如葉子、到本解押合結申、最前枚顧長可綟之、於事有便、(有續文之文也)主上領許、大臣稱唯訖、卷文置、(置懸紙左方上、)結訖後如本結之、左手取文、右方取杖、以杖加文上、(有揖)起座副長押、(到第四間、文杖取之、直之、)自年中行事障子西退下、出自青瑣并無名等門、引沓爲令在孔雀間、史知也、有隨身之人非此限、史趍來跪給文、大臣歷本道、(階下)著仗座、大辨著座、直辨著官人座、史著軾進文、(先之於南殿階下卷整之、)大臣開文、(或以緒置文口、不可懸、)以懸紙給史、史置杖、開懸紙於其上、大臣一々下文、(取文下方給之)史給之、先當右腋開之、押合更當前開之、大臣仰奏報、(裁許文者、仰云申末々仁、可勘文流、其事勘申、可改文返給、令改申與、)史稱唯、下畢後給緒、(以挑遣之、史作法不如法、暫不給之、)史更開一枚申云、成文若干枚、可勘申文若干枚、可返給文若干枚、訖退、大辨著床子、大臣退出、

後朝史進奏報、行事藏人於殿上口取之、改插殿上文刺奏之、必於晝御座覽之、其後仰御覽之由於史、

凡奏報進所々（參議、侍從、納大臣、攝大臣、兩大辨、左辨、大夫史、文殿、）

〔江家次第九九月〕官奏（附海藻減省）

海藻減省

長門（自宣旨任、不申）

秩滿替

死去替　死闕

講讀師

某乃寺乃申賜留大法師某乎以天、某國乃講讀師爾ツカサミツ替遠能給止申賜申賜留、

後不堪（關白殿、御覽）

某乃國乃司乃申賜留去ル某乃年乃不堪佃田乃坪付乃文申上久ト申賜留事

申鈎匙事（請之、吉書）

某乃國乃申賜留鈎匙給天、不動乃倉開天撿と、申賜留旨、

吉書不堪、減省、（雖々）講讀師、（論有）

往古一切奏書、莫非官奏、近例覽所入奏文如此、

代始官奏

自内裏、勅日時、給奏上、（上卿給之、留之、不覽下、辨云々、）

初候奏事

藏人頭奉仰、其上又仰左大辨云々、（大臣者、不論左右内、皆聞、）大納言候奏時、奏下宣旨、（一上奉之、亦依大臣與、於納言所候奏也、○中略）

陣權奏儀（常事也、閑之左一、）

奏史（左少史上臈以上、除座頭奉仕之、）

奏報奉入所（近代奉諸大臣家、○中略）

無大辨時奏儀（希代、村上御時歟、）

○按ズルニ、中古以降官奏ノ儀、漸ク衰廢シ、吉書奏、不堪佃田奏、諸國司減省奏、及ビ講讀師交替奏等ノ外ハ、太政官ヨリ奏セザルニ至ル、而シテ公事根源正月吉書奏條ニ、諸國の鎰給て、不動の倉ひらかんと申ふみなり、政始にあひたる文也、ト見エタルヲ以テ、後世ニ至ルマデ、諸國司正月ノ政始ニ、不動倉ノ鎰ヲ奏請スルヲ、吉書奏ト云ヒシヲ知ルベシ、往古ハ輙ク不動倉ヲ開キテ、貯穀ヲ出スヲ得ザリシコトハ、延喜中務式ニ、凡諸國所進不動倉鎰者、官副國解下省、省即勘收庫、若應出下者、待官符下、然後出充、トアルヲ覩テ知ルベシ、

〔侍中群要 六〕官奏事

家大臣於陣座召藏人、藏人參著膝突、大臣命云、奏候（不）、藏人承了退還、參御所奏云、其上（乃）奏候（不、左乃大キ万）（不智支美乃奏左不良不、他准之、但奏申是殿上辨所職也、若不候之時、以藏人被申也、）即被仰可勤仕御裝束之由、其儀取御硯、置御座上、（本置之所西方疊上移置也）御硯人水可磨墨、（是故實也）取在晝御帳之御几帳二基、（取南北、不取東西、）立母屋南第二三間東端之、（西向立常儀也、又說、向東立之、）東廂北御障子戸可引立也、孫廂南第四間、敷圓座一枚、爲大臣座、（中央少倚西敷之、廂長押東板三枚許、）去同廂燈樓綱返之、自南次第（實）五箇間也、（以文刻差返之）第五間以北綱不返之、年中行事障子押寄殿上東戸前、（不全塞云々、頗有小道、）若青瑣門閉バ可開也、臨昏供燈、御座南北立灯臺二本、（相並御臺東端立之、有打敷、）大臣座北立切燈臺一本、（順退西立之、打敷同上、）御裝束畢、著御御座、召大臣、即藏人出陣召之、（其詞云、女爪、）畢退出大臣參上、自青瑣門著座、奏事云々、

家上卿令藏人奏奏候之由、藏人稱唯、（又說云、不稱云々、）奏聞之後、隨仰先供奉御裝束、以御几帳三基、立母屋南二三五間、（不立御帳間、）召所圓座一枚、孫廂第四間中央小退東敷之、（從長押四枚許敷之、）若以次卿者、承退南敷之

云々、撤御文案、但御硯猶候、(謂御硯并書、小退東置之、御劍當御前間置之、以柄向內云々、)主上出御、召人、藏人奉仰、召上卿、上卿參入、直以參上、又說云、上卿令殿上辨奏奏候之由、辨奏其上奏候之由、藏人被仰可奉仕御裝束之由、御裝束訖出御、召人、辨參御前、仰云、召矣、辨召上卿、辨退出之後、示史於召成之由、上卿隨參上、奏報史持來贖陣、授藏人、藏人取之、必於晝御座奏之、當日若明日奏之、(但成說云、藏人一人且束帶、持史來云々、)奏申之間、不申雜事於上卿、(案、若大臣■參御云、奏申之後、止他事、早闕食、若御中宮、非女御之御書同等、異中之人於狹所、不可奏矣、仍以女房令申、女房其所女也、○中略)

奏報事

官奏了、當日或明日、(近代凡明日、)史參贖陣、付藏人、(昨日奏之御裝束之藏人早日束帶、相待官史之參來、)藏人披取奏報、(不取官文刺云々、)更插殿上文刺奏之、(但於晝御座奏、而近代不必爾、)若有仰者、隨氣色讀之、(近代不見讀例、亦无御事、)奏了返給、退還入自鬼間、置置物御厨子、了退下、告奏覽之由於史、史退出、但取奏報之時、披見開案內云々、又不必開、又從史手、乍文刺傳取、了披替、插殿上文刺奏之、折中爲佳云々、

〔禁祕御抄下〕改元

主上著御引直衣、(或常)出御晝御座、有吉書、官方辨藏人方頭、自南方奏之、主上取之、置御前、復座後披見之、置御座前、(文下向御方、置大臣、)給之、如例吉書、一切奏書時、出御清涼殿、而近代略儀皆於朝餉有之、於改元吉書、必可有出御也、延久元年、依人夜於朝餉奏之、希代例也、承保元年、出御中殿、

〔吉部祕訓抄四〕一藏人左京權大夫(光綱)習禮條々諷諫事

一文治五六八、岡記(○師記)云、藏人左京權大夫(光綱)來臨、明日可申慶從事、披仁安五記、准當時之儀、注與畢、(○中略)

文書已下次第

神宮奏狀、自官付之、史持參之、自官不付之時、不可取之、若無祭主解者、可返之、但祭主障之時、以官司解狀付之、諸社諸寺隨便付之、

〔壬生官務家所藏文書〕太政官奏

太政官

乾政官（本唐太政官）

總持綱紀、掌治邦國、如天施德生育萬物、故改爲乾政官、

紫微內相從二位兼行中衞大將臣藤原押勝、正三位行中納言兼式部卿神祇伯臣石川朝臣年足、參議從三位行出雲國守臣文室眞人智努、參議從三位行紫微大弼兼兵部卿侍從下總守臣巨勢朝臣麻呂、參議正四位下守中務卿臣藤原朝臣眞楯等言、伏奉今月一日勅偁、宜改百官之名者、臣等商量、改換如右、謹以申聞、謹奏、

天平寶字二年八月廿五日（格中不見事也）

〔日本紀略　圓融六〕天祿元年六月八日丁丑、攝政右大臣（○藤原伊尹）於淑景舍有官奏、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年二月廿六日丁巳、著右仗座、奉仕官奏、是初度、

〔水左記〕治曆五年正月廿一日己丑、今日參宇治殿之次、先參關白亭、語曰、明日可有官奏、而正月有官奏之例、不見之由、孝信所申也、仍明日官奏未定也、參宇治殿語申此旨之處、正月有官奏之例、常事也、但元三之間、不行官奏之由、所被傳也者、

〔中右記〕寬治六年正月十七日庚子、今日初覽文書、其儀先御出晝御座（御直衣、御冠、）先權左中辨基綱朝臣覽官吉書（近江國年料米解文）結申如例、次藏人頭左中辨季仲朝臣、進覽藏人方文書一通、（來四月平野祭幣料請奏）御覽了返給、結申如前、兩人出右仗座、下左大臣、左大臣依件事被參仕仗座、書杖共用官奏文杖、藏人方有書杖、來十九日依吉日、被初候云々、件吉書、後一條院治安例、初於御前被行除目時、同日覽吉書、而來廿三日除目可被行御前儀也、依當丙午有憚奏吉書、廿三日日次宜、雖然大內御物忌也、如何、假除目以前、初覽吉書例、被尋人々家記之間、右近少將顯實朝臣申云、故小野宮右府曆記云、前朱雀院前一條

院正曆四年、初被行除目前、竟日御覽官奏者、仍付件儀、假今日所御覽文書也、抑顯實朝臣辭不揖文
簿、家風之所屬、自傳舊事歟、

〔中右記〕永久六年○元永元年二月十七日己巳、今日内大臣殿初令候官奏給、○中略安藝參河鈎文、自然叶、
康平四年大殿御時例云々、大夫史盛仲兼申云、持奏杖史、大臣起座、欲參御前時、史或立宜仁門内、或
出小庭跪候之後、大臣令起座給、今日可依何儀哉、殿下被仰云、度々日記、史出居小庭之由不見、然者
只立宜仁門内、見大臣起座、相從常事歟、今度被用此儀也、

〔玉海〕安元二年三月廿五日庚午、此日始候官奏、○中略奏文三通、美濃鈎、能登鈎、

美濃國司解　申請官裁事

請被給鈎匙開檢不動倉狀

右謹檢案内、不動之物、理須算計、非加開檢、何知積高、望請官裁、被給鈎匙、將備交替、仍勤事狀謹解、

安元二年二月六日

守從五位上藤原朝臣定經

〔園太曆〕貞和二年閏九月廿二日、今日官奏吉書也、先顯左中辨宗光朝臣、内々先以書狀相觸之、可存知
之旨返答了、納言候間、一度候此奏、曆應五丞相以後者、今度可爲初度、可候奏之旨、又可被宜下歟、雖大臣已
次之時、御參之後、一上之時又可候奏候有、被宜下之例、況納言與大臣候間乎、聞、仍可候奏之旨可被來仰候也、將又可被下日時勘文歟之
由、顯宗光朝臣了、兼日有故障事、當日可來云々、

〔江家次第九九月〕官奏

御物忌時官奏儀

關白殿令頒中、故二條相府、有不請之氣、可用五位藏人云々、藏人奏申儀、召成後告大臣、歸著時於敷政門内、頒令見袖鱗、於上官
座、召陣官令侍史云々、

〔上卿故實〕御物忌事

可奏文（日時勘文、定文以下、其類不可勝計、）皆用宿紙、若被書白紙者、先奏聞、（上卿作座奏文、雖為殿上辨外宮者、以藏人奏聞云、但近代御物忌、無堅固儀之間、外宮辨直奏聞、）後內覽、

官奏停止

〔北山抄　三拾遺雜抄〕官奏事

天慶九年十月廿日、諸陵寮淡路國等怪異文、依御衰日不候、

天曆五年三月二日、奏文四枚、其二枚者、國々言上怪異解文也、依重日止之、所遺二枚、雖有前例、依無近例不奏、（朔日御衰日被止不宜文、度々例、更不注、○中略）

同八年六月一日、觸軍賦文止之、依朔日也、

官奏延引

〔玉海〕治承三年正月廿九日戊戌、午剋參院、○中略　次參內、參御前、申官奏之間次第、仰云、其間事通親沙汰也、而不觸大臣、仰史歟云々、又關白被向宇治之間、去夜所延引也云々、　二月一日己丑、未剋大夫史隆職來、召問去廿八日官奏延引并次第違亂之間事、申狀大略親宗朝臣未練之所致歟、

官奏內覽

〔西宮記　臨時六〕官奏

有關白之時、上卿於陣座見奏之後、令辨內覽關白之後、上卿進御所、奏儀如常、或說令史內覽之後、辨以上見文云々、

〔左經記〕長元元年正月廿五日辛酉、參結政所、○中略　有官奏、○註略　先內覽、（關白殿御座里第、仍辨持參奏文云々、）云々、次奏、（其儀如常、）

〔江家次第　九九月〕官奏內覽（殿上直廬里亭）

於里亭覽時、以杖申之、其杖垂簡方之說不可然、為文可落也、（自餘如奏書、）於直廬覽時、副笏申之、先可尋文刺歟、於倚子傍覽時、先以藏人可令申、執柄於倚子西召之、辨置笏於弓場殿上、（或立於名門外、）無入跪於時簡下、從目進居小板敷、膝行進文、（攝政時、於小板敷結之、只關白時、於長押上結之、近代無別、只於此小板敷結之云々、）不堪荒奏之度不結內結緒、

只抽出目錄而結之、某々乃國乃司乃申世留當レ留年作留不堪ル田乃坪付乃文申上ト申世留事、
坪付字、或不加之、
和奏之度結詞
國々乃申世留當留年不堪作留田乃坪付乃文、上達部加久定申世利、
上達部字、或不加之、
修減省時、最初度挾帖之、次順長帖之、〔可留之、以左留所謂、可當定歟、〕謂本解、押帖結之、
奏時乍重奏之、於最初所帖奏之、於事有便、
減省詞
某乃國乃司乃申世留前乃例留准天、任中四年加間乃公廨稻乃久佐久佐稻被減省ト申世留事、
重減省〔留二ハ字不加〕
後不堪留二
入三度奏之文
入一度奏之文
不堪國々
減省國々
作略還可讀之
副諸文結詞
某國乃司乃申世留去年乃作ルニ不堪ル田坪付乃文申上ルト申世留事
諸國講讀師文結詞
〔某寺某〕某僧綱乃申世留其國乃講師以某天、定行シ女ムト申世留事、

〔侍中群要 二〕奏書事

式抄 撰吉書(絹解文、若美濃國絹解文等類、)吉月ニ先申執政、刺解文於文刺、跪候便所、殿下目給、揖テ立テ寄、去御座七八許尺ニテ、膝行兩三度之テ奉之、御覽間取文刺テ候、覽了テ返給、置文刺テ取文(若其文違)相去膝行テ寄テ取テ、歸居本所、先展懸紙、次文結申、隨仰詞テ微音稱唯、稱唯之中卷書、次卷懸紙テ、取副文刺テ、小揖罷出、但左手文ヲ取、右手ニ文刺ヲ取テ、小揖退出時、取加右手罷出、攝政御時、內覽之儀如此、(大經奏聞)

略

〔岡屋關白記〕建長三年八月十七日乙巳、參內、依多可有官奏也、〇中略 官奏事注裏、

裏書 是日當年吉書奏也、且新所之後初奏也、入夜著朝衣相待奏者、則出座安福殿後(卯酉廊也)、家司左衛門權佐資定(五位藏人)來、申時繼朝臣候奏之由、即令儲圓座切燈臺、時繼朝臣持文杖昇自子午廊南沓脫、經簀子東行、於弘庇長押下伺氣色稱唯了、昇長押、經弘廂東行、就余前奉文、了持空杖著圓座(北面)、予見文了置座前、時繼朝臣進寄取之、復座結申、了退下、著辨座(卯酉廊西方三ヶ間)給史、紫端疊一帖、兼敷辨座後如例、參上深更退出、

〔宗建卿記〕享保十七年九月廿三日、吉書御覽也、〇中略 殿下昨夜有仰、官奏吉書等之時、執柄在几帳內、是常例也、而九條兼實出庇之由、見玉葉記、今度如件可出庇給、於今日者用便之由、是又同在三長記、〇中略 今夜上卿右大臣(兼香)官方吉書於里亭前覽、且雖非一上、兼依有仰、被著座了、關白內覽、亦於里亭令覽之給、於日時勘文ハ、關白不令覽之、近代如此、今度可被覽、內々雖有御沙汰、當時有難澁、仍無其儀、

〔西宮記 臨時六〕官奏

有攝政之時、於攝政亭辨等申之、准御前儀、

〔江家次第 九九月〕攝政時官奏

大辨幷奏者辨、於結政所若床子座、見文如恒、奏者辨與史、參攝政宿所、(辨持奏文、史持杖相從、)至可登之時、留立砌下、令辨侍令啓家司、家司來、(束帶、)辨申奏文候之由、家司進執柄在所、申云、某朝臣若某奏候、執柄被仰可裝束之由、奉仕出居方高麗緣三枚、一枚中敷、(南面、)其前敷圓座、(中敷南面、)其南簀子敷(許)圓座一枚、爲奏者座、執柄出給、(直衣、幷不堪奏、束帶、白綾相樣、)召家司、家司參入候簀子、奉仰稱唯退下、仰辨云、召須、訖還入、史捧奏文於杖授辨、辨北面取之、(史自右膝下、)○下略

關白覽官奏

○按ズルニ、攝政官奏ヲ覽ルハ、必ズ里第ニ於テス、而シテ其儀尋常ノ官奏ニ異ナルナシ、故ニ一一ニハ其式ノ全體ヲ揭載セズ、

〔夕拜備急至要抄 下〕准攝政宣下仰詞(除目官奏雜事等、令關白准攝政儀、令行事、上卿召大辨仰之、)

大治關白仰云、中略、從一位藤原朝臣可關白万機之由、令作詔書、准攝政事、除目官奏雜事、令關白准攝政儀行之、延寬治御例云々、

衞府擬舍人奏

〔延喜式 四十七 左右兵衞〕凡擬兵衞者、預擇定便習弓馬者入色廿人已下、白丁五人已上、修奏進内侍、

〔政事要略 三十 年中行事〕諸衞擬舍人修奏進内侍、雖存舊符之式、未見奏聞之由、但年中行事亦注御畫、未知其說由、可尋檢、

○按ズルニ、衞府擬舍人ノ奏文ニ、御畫ヲ加フルコトハ、恐ラクハ年中行事ノ文ニ依レルモノナラン、

〔西宮記 臨時一〕論奏

諸衞擬近奏、賜闈司云々、(近衞府作付之、)

〔北山抄 六〕論奏事

諸衞舍人擬補之奏、本府付内侍若藏人令奏之、御畫畢返給、(復任者無御畫、)

〔政事要略 三十 年中行事〕論奏事○中略

諸衞舍人擬補之奏文、本府附内侍及藏人、御畫訖各返給本府、子細未詳、

奏者

○按ズルニ、衞府ノ奏文ハ、太政官ヲ經ズシテ、衞府直ニ内侍若シクハ藏人ニ附シテ、奏スルナリ、

〔令義解 六儀制〕凡祥瑞應見、若麟鳳龜龍之類、依圖書合大瑞者、隨卽表奏、（謂祥瑞所出之官司、勘驗圖書、合大瑞者、不待元日、卽時表奏也、）其表唯顯瑞物色目及出處所、不得苟陳虛飾、徒事浮詞、上瑞以下、並申所司、（謂申治部、○凡上瑞以下、皆先申官、官付治部、而此所司者、謂申其常驗之所也、）元日以聞、

〔令集解 二十八儀制〕釋云、案大瑞以下、皆先申官、官付治部、依圖書合大瑞者、隨卽治部表奏、上瑞以下、元日以聞、

〔令集解 二十八儀制〕治部例云、養老四年正月一日、辨官口宣、依改常例、太政官申符瑞者、大瑞已下皆悉省加勘當、申送辨官、但上瑞已下更造奏文、十二月終進太政官、

〔内裏式 上〕元正受群臣朝賀式

奏瑞者、（若無瑞者、無奏詞、）前就位奏曰、治部卿位姓名等申（久）、某官位姓名等（我）所申某物、顧野王（我）符瑞圖曰云々、孫氏（我）瑞應圖曰云々（止）云（利）、此瑞（乎）瑞書（爾）勘（爾）、某物（波）上瑞（爾）合（利）、某物（波）中瑞（爾）合（利止）申（世）（給）事（乎）、恐（美）恐（美毛）奏給（久止）奏、退復位、（○中略）

會

中○務○率陰陽寮、昇置曆之机、入自逢春門、（他皆效此）立庭中退出、輔已上一人、留奏進、其詞曰、中務省奏（久）、陰陽寮（乃）供奉（禮留）、其年七曜御曆進（禮業久乎）、恐（美毛）申賜（止）奏、（無勅答、若親王任卿者、以進禮業久乎恐美毛詞、替進業久乎、他皆效此、○中略）闡司就版位奏云、氷樣進（奉止）、宮內省官姓名叫門故（爾）申、（○中略）輔一人留、就位奏曰、宮內省申（久）、主水司（乃）今年收氷合若干室、厚若干寸已下若干寸已上、益自去年若干室、減自去年若干室供奉（禮留）事、又太宰府（乃）進（禮留）、腹赤（乃）御贄、長若干尺進（禮業久乎）申賜（等）申、（無勅答、○中略）

七日會式

内舍人入﹅自逢春門﹅經左近陣南﹅就版奏云﹅御弓進止牟。兵部省官姓名等以上謂二大輔一候門止申﹅○中略卿若大輔一人留就二立版中央一奏云﹅兵部省奏久﹅造兵司乃供奉禮留正月七日乃御弓﹅又種々矢獻須乎久奏給波久奏﹅無二勅答一

〔内裏式中〕五月五日觀馬射式

中。務輔就版奏曰﹅中務省申久﹅内藥司乃供奉禮流五月五日乃菖蒲草進良久乎申賜止久申﹅訖退出﹅次宮。内。輔奏曰﹅宮内省奏久﹅典藥寮乃奉禮留五月五日乃人給乃菖蒲草﹅進良久乎申賜止久申﹅○中略無二勅答一兵。部。卿大少輔﹅騎馬列進﹅○中略並各就行立位﹅卿進就奏事位﹅執牘奏云﹅兵部省申久﹅五月乃五日爾五位與利以上若干人等乃進禮流走馬若干匹﹅進良久乎申給止波久申﹅無二勅答一訖還本位﹅次大輔進就位﹅丞一人騎馬﹅牽走馬﹅而進﹅大輔執牘奏親王巳下及五位諸王四位諸臣以上姓名﹅并馬毛色等﹅其詞云﹅其姓名我其毛馬﹅訖還本位﹅少輔進就位﹅奏五位﹅諸臣姓名并馬毛色等﹅○中略

十一月進御曆式

中。務。輔留奏進﹅其詞云﹅中務省申久﹅陰陽寮乃供奉禮留﹅其年乃御曆﹅又人給曆進良久乎申給止久申﹅○中略無二勅答一

十一月奏御宅田稻數式

宮。内。省舁机安庭中﹅輔以上一人留奏云﹅内國乃仕奉禮留﹅御宅田合若干町刈得稻若干束﹅去年以往古稻若干束﹅合若干束﹅仕奉禮留事乎﹅申賜波久止申﹅無二勅答一

十二月進御藥式

中。務先進就版奏云﹅中務省申久﹅内藥司乃供奉禮留元日乃御藥﹅人賜御藥進良久乎申給止久申﹅次宮。内。奏云﹅宮内省申久﹅典藥寮乃仕奉禮留人給白散﹅又植藥樣進良久乎申給止久申﹅無二勅答一

〔儀式五〕奏御卜儀

宮。内。輔就版奏云﹅宮内省申久﹅御體御卜供奉禮留事申給止牟﹅神祇官姓名候止申﹅

○按ズルニ、寮司ノ奏文ハ、之ヲ其總省ニ申ス、省更ニ太政官ヲ經テ奏聞ス、而シテ朝儀ニハ、省官直ニ事ヲ奏スルコトアリシハ、右ニ掲載スル諸書ニ依テ知ラルヽナリ、尙ホ委シクハ歳時部、方技部等ニ就テ見ルベシ、

〔延喜式中務十二〕凡正月七日兵部供御弓者、預前内舍人令奏、

〔延喜式式部十九〕正月講最勝王經

其齋會之間、省錄五位已上及闕怠之由、每日附内侍奏之、

〔延喜式式部十九〕釋奠

省錄五位已上見參簿、附内侍奏之、

〔延喜式式部十九〕國忌齋會

省依諸司見參、造奏文、五位以上具注歷名、六位以下但載人數、付内侍令奏、

〔延喜式兵部二十八〕同〇五月五日節、〇中略馬毛色、各令諸家申訖、造奏文、〇註略前一日、輔賚奏文付内侍令進、若輔不在者、錄得之、

〔延喜式中務十二〕凡年終行儺者、前晦二日、少輔已上、〇中略應預事者、造奏文、當日平旦、令内侍進奏、

〔延喜式民部二十二〕凡任官叙位及薨卒、應收給封田者、官下符、省造奏文、付内侍令直奏、訖卽施行、稱直奏者皆准此、

○按ズルニ、省、太政官ヲ經ズシテ、奏スルヲ直奏ト云ヘルナリ、

〔侍中群要六〕官奏事

封戶奏事

省丞付内侍、内侍不候者、付藏人、奏聞之後返給、

位田奏事土用之間、亦不奏之、

如封戸奏云々、但封戸位田等事、御體御卜之間、不得執奏云々、

○按ズルニ、省各、其職掌ニ依テ奉ル奏文ハ、内侍若シクハ藏人ニ付シテ、奏聞スルコト、知ラルルナリ、

〔令義解 公式七〕凡諸司奏事、皆不經長官、不得輒奏、

○按ズルニ、寮司事ヲ其所管ノ省ニ申スニハ、式ニ依テ解文ヲ作リテ之ヲ上ル、省事ニ隨テ、太政官ヲ經テ奏聞シ、或ハ内侍及ビ藏人ニ付シテ奏スルナリ、猶ホ解ノ條ヲモ參看スベシ、

〔續日本後紀 仁明七〕承和五年十二月甲午、彈正臺奏、朝服之色、明在法條、而今會集之時、有緣無緣、僭上之弊、逐失致敬、稍之朝儀、理不可然、紫緋之品、其灼然易辨、而正緑縹之次、其類頗多、難得而糺、若非早糺正、恐流遁忘返、望請仰式兵兩省、俾文武諸司移八位以下人位姓名於臺、仍遣巡察等、對勘位色、若猶不改、年五六月爲例、令移奏、許之、

〔儀式 六〕上卯日進御杖儀

大舍人寮先入奏進、其詞曰、大舍人寮申久、正月乃上卯日乃御杖仕奉氐進良久申給止波久申、〈若親王以下進奏、〉〈喚讀聞、代藏人久乎讀、又其下知恐美恐美毛讀、〉

○按ズルニ、朝儀ニハ諸司直ニ事ヲ奏セシコト、知ラルヽナリ、委シクハ歲時部ニ就テ看ルベシ、

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡諸內外諸司所進不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、檢交替使帳等者、〇中略書奏文并內案及解文等、〈在京諸司、不錄內案并解文、〉次官已下相共校讀、覺則加署、〇註略大臣奏聞之後、錄奏了狀、副解文進官、〈解文使印、〉錄其奏文踏印訖、〈下外官踏內印、下內官踏外印、〉副之官符更下使局、〈符直注奏文解文下其局及所司之狀、〉使局受取頒行、〈下諸國者、與文并解文副官符召朝集使付之、下諸司者召史生付之、〉

〔交替式〕勘解由使謹奏

撰定諸國司交替式事〇中略

以前從政之方、法令爲本、守職之道、格式爲先、是以行違故實、向途而迷、事乖舊章、面墻而礙也、方今或人、私抄古來勅書官符省例問答等、名曰交替式者、見有數卷、未審誰撰、而見聞平〇平恐互誤異、趣捨不同、事或既停、率爾難悟、以此爲政、所失寔多、國吏之迷、莫不由〇此間恐有脫字矣、伏惟聖朝、仁逾解網、思跨泣辜、明勳陟於群僚、顯貶於庶類、殊置勘解由使、令諸寃屈之徒、閑憤滿於此庭、辨是非於正理也、然使臣等、聽訟之聰、遙謝往烈、決爭之智、寔闇當年、奉綸旨以屛營、荷重任而戰越、雖盡忠誠於悃管、還懼與奪之有違焉、故今撰集法令格式、應預交替之事者、以類相隨、令易披閱、但其中承前之格、與法柢梧指歸未明、幷官省處分未經奏畫、相承爲例、如此之類、實難擢依、是以至有所論、殊附今案、以決古今之疑滯矣、勒成一軸、名曰撰定交替式、伏望仰畿內七道朝集使、各寫一本、藏之府庫、庶令諸國遵奉以不失、使司勘據而無疑、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延暦廿二年二月廿五日

使正四位下行左大辨兼左衞士督皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道

次官大學頭從五位上兼行式部少輔和氣朝臣廣世

次官從五位下守大判事兼行造宮大進越前大掾讚岐公千繼

撿校

中納言從三位兼行民部卿攝津守藤原朝臣雄友

中納言兼近衞大將從三位行造宮大夫藤原朝臣內麻呂

右大臣宣、奉勅依奏、

〔延喜式四十四勘解由〕奏式

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事檢交替使幷實錄等帳、准之准之、

前官位姓名年月日任、幷爲來年月日解、

合若干條

一某物若干

右寺司國官位姓名等年月日解寺司國代解俷云々、交替帳注云、檢交替政使位姓名等年月日解俷云々、

實錄帳注云、國官位姓名年月日解俷、被太政官月日符俷云々、

以前事條所勘如件、謹以申聞、謹奏、

年月日

長官位姓名

次官位姓名

次官位姓名

檢校

官位姓名

〔續々修東大寺正倉院文書十帙二十五〕東大寺寫經所謹奏

瑜伽論六卷第一二三四五六卷、以天平勝寶使山口人成二年七月十六日、使良弁進已訖、

右、依葛井根道今日宣、貢進如前、但表紙色未仰給、不得裝潢、謹奏、

天平勝寶元年九月八日

玄蕃頭從五位上

官位姓名宣、奉勅依奏、

年月日

〔康富記〕享德四年〇康正元年正月七日癸丑、白馬節會也、

請奏

右馬寮謹奏
　合白馬壹拾壹疋
一七
　頭安倍朝臣有淳貢葦毛
　權頭源朝臣氏尙貢葦毛
　權助藤原朝臣永賢貢葦毛
二七
　權頭源朝臣氏尙貢葦毛
　權助藤原朝臣永賢貢葦毛
　頭安倍朝臣有淳貢葦毛
三七
　權助藤原朝臣永賢貢葦毛
　頭安倍朝臣有淳貢葦毛
　權頭源朝臣氏尙貢葦毛
　　享德四年正月七日　　　　從五位下行權助藤原朝臣
　　　　　　　　　　　　　　正五位下行權頭源朝臣
　　　　　　　　　　　　　　從五位上行頭安倍朝臣
　御監正二位行權大納言兼右近衞大將藤原朝臣

〔北山抄六備忘略記〕臨時御讀經事
御辨官令成料物請奏、奏下、

〔江家次第 七八月〕御盆事

請奏

内藏寮

請白米伍斛

右來十四日御盆供料、以諸國所進年料内、依例所請如件、

年月日　正六位上

正六位上

〔新任辨官抄〕新年穀請奏之類、正六位下行事史、如然之外、臨時事、必下大夫史也、

〔辨官年中行事 二月〕四日、新年祭也、諸社幣料請奏、長官以下官人等加署、

〔魚魯愚抄 一〕所々奏内豎所、作物所、御書所等類、及諸行事所、諸院別當預、幷諸社、諸寺、國等請、件請奏、大略同、諸司奏、内豎所者、別當頭執事已下連署、其外或預或寄人等申請之、諸行事所者、行事辨史各署之、其外可准知之、此請奏皆編注某所、被被官加署也、

〔類聚符宣抄 九〕請殊蒙　宣旨、令奉方略試、近江權大掾正六位上大江朝臣重光狀、

右重光從四位下行式部大輔兼東宮學士維時朝臣之男也、從文章生、被拜當官、爲遂射鵠之功、不赴司馬之任、方今編抄勤成、照松學進、筆硯底績、應一二陸之才、弓裘當仁、堪四三代之業、望請天慈、殊降宣旨、將參於旁求之選、令奉件方略之試、仍錄事狀、謹請處分、

天慶九年二月廿一日　左少辨正五位下兼行文章博士備後權守菅原朝臣在躬

正五位下行式部少輔兼文章博士伊豫權介紀朝臣在昌

右大臣宣、奉勅、宜令件重光奉方略試者、

天慶九年四月十九日　少外記三國千桂奉

○按ズルニ、請奏ノ文ヲ奏シ畢テ、其奏文ニ勅許ノ宣旨ヲ副ヘテ、之ヲ下シヽナリ、

〔朝野群載 六太政官〕外記史生請奏

太政官

請殊蒙天恩、因准先例、以刑部史生上毛野貞正、被補任件史生紀經元不仕替狀、

右謹檢故實、當局史生、有闕之時、諸司史生之中、撰堪其職之者擧補、古今之例也、就中貞正頗携文筆、尤足採擇、望請天恩、因准先例、以件貞正、被補任彼不仕替者、將令致記錄之功、仍勒事狀、謹請處分、

治曆四年十二月十六日

正六位上行權少外記文室朝臣

正六位上行少外記佐伯朝臣

正六位上行少外記

從五位下行大外記大江朝臣

從五位下行大外記兼主稅權助算博士備前介三善朝臣

從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣

從五位上行少納言中宮權大進讃岐介源朝臣

正五位下行少納言兼侍從藤原朝臣

〔魚魯愚抄 一〕請特蒙天恩、因准傍例、以正六位上藤原朝臣盛季、被拜任加賀國介、募其任料、令修造社頭破損舍屋築垣等狀、

副進損色一通

右謹檢案內、當社破損之狀略、仍注右狀、謹請處分、

應德二年正月廿七日

權祝從七位上文室眞人長元

祝從七位上高橋朝臣則武

權禰宜從七位上藤井宿禰
禰宜正六位上卜部宿禰宜季
權預從五位下行神祇權大祐卜部宿禰兼宗
預從五位上行神祇大副卜部宿禰兼國

(中右記)天仁元年十月十日、子刻被仰下事、木工寮申、因准前例、賜榮爵二人、以其叙料、造進大嘗會御禊河原蔀屋五字事、仰任寛治例、一人依請、則下左中辨了、

大嘗會御禊行事御前次第司
請被定補供奉主典所勞替事
主典正六位上行式部少錄紀朝臣國康申所勞
右以修理右宮城主典正六位上行式部少錄中原朝臣眞行、爲被定補彼主典替、謹所請如件、
天仁元年十月九日　主典正六位上行中務少錄清原眞人成行
長官正二位行權中納言兼左衞門督源朝臣雅俊、判官正六位上行中務丞藤原朝臣安頼、次官從五位上行式部少輔大江朝臣有元、判官正六位上行式部大丞藤原朝臣知仲、
仰依請

(壬生家文書一)造酒司　請預神今食用途事
木綿捌斤　小刀貳柄　八足肆前　太子良加肆口　小壺捌口　大坏伍拾口　小坏佰口
右依例所請預如件、
天養二年六月廿日　代吉末

(朝野群載十七佛事)謹請　歲末御修法事

右依綸旨、從今日率廿口伴侶、可奉修不動法者、謹請如件、

十二月廿二日　　權僧正增譽

〔三長記〕建久七年十一月廿九日甲辰、今日被發遣字佐使、〇(中略)請奏事、奉行藏人奏下、於祿綿請奏者、便可進歟、然而任近例、以舊案仰官令作官符、

〔薩戒記〕應永卅三年三月十九日癸丑、右衛門督(敦豐)來臨、除目督請申文事被示合、予草之、調樣等又同示之了、件申文云、

請特蒙天恩、因准先例、以正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣友重、被任當府少尉闕狀、

右謹檢案內、爲左右衛門督之靈、請任少尉者例也、爰件友重、性稟謹慎、志在警巡、望請天恩、因准先例、早被任當少尉者、將令勵夙夜之節矣、仍勒事狀、謹請處分、

應永卅三年三月廿七日　　從三位行右衛門督藤原朝臣

連奏

〇按ズルニ、諸司事ニ隨ヒテ、奏文ヲ奉リテ、上請スルヲ請奏ト云フ、今コヽニハ、其故事ノ一端ヲ掲載ス、

〔伊呂波字類抄〕(禮疊字)連奏(神祇陰陽二寮官人奏)

〔魚魯愚抄〕三連奏(此奏近來常付藏人方)

神祇官、陰陽寮、典藥寮、(近來加陰陽道)主計、主稅(二寮常不見之)等申之云々、已上三分已下、各上官有其闕之時、下官次第轉任、本司舉申之、以之謂連奏、(本儀三分已下、本司被署申之、而近來四分、猶加連奏之云々、)

〔朝野群載〕(十五陰陽道)連奏

陰陽寮

請特蒙天裁、因准先例、停止他人非巡望、被拜任官人品官等狀、

一正六位上行少屬清科朝臣良衆

右良憲爲屬上臈、仍以良憲申請少允闕、

一正六位上行少屬伴朝臣正信

右正信夙夜之勤、未致懈怠、仍以正信申請少允闕、

一正六位上行陰陽師三善朝臣憲任

右憲任爲陰陽師上臈、仍以憲任申請少屬良憲轉任少允之替、

一正六位上行陰陽師菅野朝臣貞義

右貞義任當職之後、勤節不懈、仍以貞義申請少屬正信轉任少允之替、

一前陰陽得業生正六位上伴朝臣友仲

右從得業生拜任陰陽師者例也、件友仲成業之後、寮底之勤、頗超傍輩、仍以友仲請陰陽師憲任轉任少屬之替、

一前天文得業生正六位上惟宗朝臣忠盛

右忠盛成業之後、勤勞久積、仍以忠盛申請陰陽師貞義轉任少屬之替、

以前官人等任道理次第所申請也、望請天裁、停止他人非道之望、如申請被拜任者、將致奉公之節矣、謹請處分、

康和二年正月廿一日

從五位上行助兼權曆博士丹波介賀茂朝臣家榮

從五位上行大炊頭兼權助曆博士阿波介賀茂朝臣光平

從五位上行頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平

〔朝野群載六 神祇官〕請特蒙天恩、因准先例、依年勞恪勤次第、轉任官人等狀、

一請被以正六位上行少史伊岐宿禰致政拜任少祐闕事

右件致政、爲中宮宮主、已及多年、恪勤之勞、尤勝傍輩、就中諸宮宮主、超上臈、應其撰、古今之例也、

飛驛上奏

一請依親父儀時讓以正六位口卜部宿禰定景被拜任大史事

右得定景款狀偁、以父之職讓子之官者先例也者、今加覆審、所申有謂、仍以擧奏、

一請被以龜卜長上正六位上卜部宿禰兼繼拜任少史致政申祐替事

右得兼繼款狀偁、爲龜卜長上、御體御卜役、未曾懈怠、次第恩任之處、宜應其撰者、所申有謂矣、以前轉任之旨、覆錄如件、抑月次新嘗會、并臨時神事等、官人不足、殆可闕怠、望請天恩、依年勞次第、被轉任者、將竭奉公之節、仍勤在狀、謹請處分、

長治二年四月五日

從五位下行權少副卜部宿禰

從五位上行少副大中臣朝臣

從五位上行權大副卜部宿禰

正四位下行大副大中臣朝臣

從四位上行伯敎輔王

〔令義解七公式〕飛驛式〇中略

上式

其國司謹奏

其事云々、謹以申聞謹奏、

年月日　守位姓名上（謂不言長者略也）

鈴剋

右飛驛上下式、若長官不在者、次官以下依式署、（謂次官以下唯一人署、故云依式也、）其非國司、別從軍所上者、副將軍以上並署、（謂其注上字者、猶准上例、於年月日姓名下注之、）太宰府准此、（謂少貳以上並署）

〔令義解七公式〕凡國有大瑞及運機、災異、疫疾、境外消息者、（謂機者、事之萌動也、災者、天火水旱之類也、異者、怪變咎徵之類也、境外消息者、告饑請救之

驛也、以上諸事、皆謂非常、故須馳驛申上也、各遣使馳驛申上、

凡驛使至京、奏機密事(謂軍機及密事也)者、不令共人語、其蕃人歸化者、置館供給、不得任來往、

〔令義解二戶〕凡沒落外蕃(謂沒者、沒沙塞也、落者、墮風波而流落也、)得還、及化外人歸化者、所在國郡、給衣粮、具狀發飛驛申奏、

〔侍中群要七〕飛驛解文

飛驛奏(使獻奏、中務省奏之、若無省官者、付外記令奏上、於陣頭撿之、)

〔令義解七公式〕凡諸司奏事、皆不經長官、不得輒奏、若有機密(謂應以機密事申奏者、不必經長官、得直申奏、)及論長官事者(謂此亦機密事)不在此例、

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、少納言奏、數多調長、久煩天覽、於事無便、凡厥奏文、過五十張已上、密奏請印者、

承和六年閏正月廿日　少外記菅野朝臣襧門奉

〔延喜式十一太政官〕凡少納言所奏請印文、過五十張密奏、

〔延喜式十六陰陽〕凡天文博士常守觀候、儻有變異、日記進寮、寮頭即共勘知、密封奏聞、

〔延喜式十六陰陽〕凡密奏料紙筆墨等、臨時申省、

〔新儀式四臨時〕天文密奏事

若有天文變異、其道博士并寮官、獻密奏者、具勘錄其變異、先觸第一大臣、加封返與博士、博士以之參藏人所、付藏人奏之、(若其與天文有可議事、或依其言數、而令祈請佛天、或仰陰陽道、而令祭星辰、)

〔禁秘御抄下〕天文密奏

天文正權博士并密奏者、儻有天變、奉奏賷司天、先參內覽人許、執柄覽之、加封返、則司天給之、持參內裏、於殿上口申事之由、藏人取之、付內侍、天子覽之、執柄加封者、深恐外見之故也、封上執柄書片名、假令家實書家字、良經書良字也、日月蝕翌日奏又同、殊大事變出現之時不能進奏、倒衣馳參、夏始著冬

奏文案

裝束、冬始著夏東帶有例、

〔年中行事歌合〕四十六番　左(持)　天文奏(○中略)

天もんそうと申は、してんの人、みつそうのせんじをかうむりて、けいうんじゆしやうのたぐひ、おるひは御例にたがふ風雲のたゞずまひをうかゞひて、そうし侍るなり、すべてみ。つ。そ。う。をば、外聞なき事にてあれば、かたく封じて、執柄のないらんあるよりほかは、左右なくひろうなければ、みつそうとは申侍るにや、

〔玉海〕治承五年八月十日甲寅、酉刻、大膳權大夫泰親朝臣來、示天變事、(○中略)披見奏案之處、占文之體、凡可謂指掌、實嚴重不可說事也、仍爲後鑒注付之、

謹奏

今月三日丁未、曉寅時、太白與辰星同度相犯、(相去二尺所)同九日癸丑、曉寅時、殊迫犯、(相去九寸所)

謹撿天文要錄云、太白與辰星鬪、大臣爲變、誅天子、又曰、太白與辰星合、天下爲變謀、有外兵內太亂、(中略)

右變異、謹申聞、謹奏、

養和元年八月九日

從四位下行大舍人頭兼天文博士安倍朝臣業俊

從四位下行掃部頭兼陰陽博士安倍朝臣季弘

正四位下行大膳權大夫安倍朝臣泰親

〔令義解(七公式)〕凡文案、詔勅奏案、(謂其便奏小事、不必常留也、○中略)如此之類常留、以外年別撿簡、三年一除之、具錄事目、爲記、

〔類聚符宣抄(六)〕右大臣宣、奉勅、參議已上注載奏文時、就廳幷侍內裏之由、宜分注之者、

延喜廿二年二月二日

大外記伴宿禰久永(奉)

奏文用紙

〔類聚符宣抄 六〕應勤內案事

內侍宣、有勅、進奏之紙、麁惡者多、自今以後、簡淸好者、應宛奏紙、若不改正、執奏之少納言必罪之者、當番案主宜知意勤之、不可違怠、

延曆九年五月十四日

奏文誤失

〔律疏 職制〕凡上書若奏事而誤笞五十、口誤減二等、〈口誤不失事者勿論、上書謂書奏特達、奏事謂面陳、有誤者笞五十、若口誤減二等、合符式、若口奏誤、事意無失者不坐、〉上太政官而誤笞卅、〈中略、誤謂脫剩文字及錯失者、上太政官而誤、謂內外百司應上中太政官、而有文字脫剩及錯失、各合笞卅、〔〕中略、〉卽誤有害者各加二等、〈有害、謂當言勿原而言原之、當言千疋而言十疋之類、謂上書奏事、誤有害者、合杖七十、上太政官、誤有害者、合笞五十、中略、是名各加二等、注云、有害、謂當言勿原而言原之、當言原而言勿原、當言千疋而言十疋之類、錯失之類、例既多、事非一端、例有犯罪、當言原之、而言勿原、當言勿原而言原之、承誤已行決、及以放免者、此卽當條雖有罪名、例從失出入論、不可依此、各加二等、〉若誤可行、非上書奏事勿論、〈可行、謂案當可知、不須上太政官以下、誤案驗可行者、皆不坐、可行者、謂案驗其狀、當有闕誤、當言甲申之日、而言申甲之日、如此之類、是〉

〔政事要略 三十年中行事〕物云、奏事者、公式令云、論奏便奏事等皆是、朱云、上東宮誤減一等、未奏者依詐偽律減一等、〈未奏、謂詐偽律云、奏事上書、詐不以實者徒二年、未奏者減一等、依此未奏者可減一等、〉

奏文違法

〔律疏 職制〕凡事應奏而不奏、不應奏而奏者杖七十、〈中略、應奏而不奏者、謂依律令及式、事合奏而不奏、或格令式無合奏之文、及事理不須聞奏、是不應奏而奏者、並合杖七十、〉

奏文不實

〔法曹至要抄 上〕一奏事不實事

詐偽律云、奏事上書詐不以實者徒二年、

忌日

〔拾芥抄 下末 諸事吉凶日〕內奏書忌日

六壬　五酉　六丙　五寅　不利凶　壬不奏書　主凶　又壬不奏、後必訴有凶、殊巳日不破奏書二人但亡、

〔延喜式十一太政官〕凡奏事諸司、及入内供奉之輩、並不得觸入喪座等事并弔喪、所忌日限、見神祇官、

〔大槐秘抄〕官奏のときは、うちおんぞをたてまつらぬ事にて候也、是は故實に候、文書をくりまきせさせおはしますあひだ、やすからんための御用意にこそ候めれ、

〔貫首秘抄〕直衣事

故民部卿顯頼卿頭時、院中文書常直衣奏之、

〔大鏡二左大臣時平〕此左大臣○藤原時平ものゝおかしさぞ、えねむせさせたまはざりける、わらひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事もみだれけるが、北野○菅原道真と、よそまつりごたせ給ふあひだ、ひだうなることをおほせられければ、さすがにやむごとなくて、せちにし給ふことをばいかゞはおぼして、このおとゞのし給ふことなれば、ふびんなりとなげき給ひけるを、なにがしの史が、ことにも侍らず、おのれがかまへにて、かの御事をとゞめ侍らんと申ければ、いとあるまじき事、いかにしてかはなんどの給はさせけるを、たゞ御らんせよとて、ざにつきて、ことききびしくさだめのゝしり給ふに、この史ふむばさみに、ふみはさみて、いらなくふるまひて、このおとゞに、たてまつるとて、いとたかやかにならして侍りけるに、おとゞふみもえとらずして、わなゝきてやがてわらひて、けふはすぢなし、右のおとゞにまかせ申とだに、いひやり給はざりければ、それにこそすがはらのおとゞの心のまゝに、まつりごち給ひけれ、

〔北山抄四拾遺雜抄〕承平元年七月廿七日、伊勢國奏、不注使名、美濃國捺印奏文、共是違例、仍責使等、

〔貫首秘抄〕傳聞、爲隆職事之時、奏文書於白河上皇、無勅答、三度結申之云々、左府被命云、職事奏聞、雖無勅許、至三度奏之云々、予○藤原俊憲答申云、若是人臣三諫之意歟、天下巨細辨官頭所執奏也、

〔續古事談一王道后宮〕白川院ノ御前ニテ、爲隆事ヲ奏シケルニ、題目事ノ外ニ重リテ、ウルサゲニ思食タリケルヲ、此次ニ申文ノアルカギリ奏シハテムト思テ、シラズガホニテ、申キタリケルニ、申

文今五六通バカリニナリテ、院タヽセオハシマサムトシケルヲ、爲隆ミズガホニテ、祭主大中臣某謹申請天裁事ト、ヨミキカセマヰラセタリケレバ、太神宮ノ訴ロナトテ、カヘリヰサセ給ニケリ、ソレヲチカラニテ、殘ヲモ申ハテヽ、ゾイデニケル、スベテカヤウニオシガラアリテ、ユヽシカリケル人ナリ、

〔續古事談王道后宮一〕堀川院ハ、末代ノ賢王也、ナカニモ天下ノ雜務ヲ、殊ニ御意ニ入レサセ給タリケリ、職事ノ奏シタル申文ヲ皆メシトリテ、御夜居ニ、又コマカニ御覽ジテ、所々ニハサミガミヲシテ、コノコトタブスベシ、コノコトカサネテ問ベシナド、御手ヅカラカキツケテ、次日職事ノ參リタルニ、タマハセケリ、一返コマカニキコシメス事ダニ有ガタキニ、重テ御覽ジテ、サマデノ御沙汰アリケム、イトヤム事ナキ事也、

堀川院在位ノ御時、坊門左大辨爲隆職事ニテ、太神宮ノウタヘヲ申入ケルニ、御笛ヲフカセ給テ、御返事モナカリケレバ、爲隆、白川院ニ參テ、内裏ニハ、御物氣オコラセオハシマシタリ、御祈ハジマルベシト申ケリ、院オドロカセ給テ、内侍ニ問セ給ケレバ、サル事夢ニモ侍ラズト申ケリ、アヤシミテ、爲隆ニ御尋アリケレバ、ソノ事ニ侍リ、一日太神宮ノ訴ヲ奏聞シ侍シニ、御笛ヲアソバシテ、勅答ナカリキ、是御物ノケナドニアラズバ、アルベキ事ニアラズト思テ、申侍リシ也ト、申ケレバ、院ヨリ内ヘ其ヨシ申サセ給ケリ、御返事ニハ、サル事侍リキ、タヾノ事ニハアラズ、笛ニ秘曲ヲ傳ヘテ、其曲ヲ千遍フキシ時、爲隆參テ事ヲ奏シキ、今二三反ニナリタレバ、フキハテヽ、イハムト思シホドニ、尋シカバ、マカリ出ニキ、ソレヲサ申ケル、イトハヅカシキ事也トゾ申サセ給ケル、

古事類苑

政治部八

上編

啓

名稱

啓トハ、諸司事ヲ錄シテ、皇太子、及ビ皇后、皇太后、太皇太后ニ上啓スル書ヲ云フ、諸司事ヲ皇太子ニ啓セントニハ、先ヅ事狀ヲ春宮坊ニ申送ス、坊更ニ其事ヲ錄シ、始ニ春宮坊啓ノ四字ヲ記シ、年月日ノ次ニ、大夫及ビ亮ノ位姓名ヲ注シ、卽チ亮ヲシテ之ヲ啓セシム、畢テ啓官事、令依啓ノ四字ヲ注シ、又其位姓ヲ注ス、三宮ノ啓式亦之ニ準ズ、而シテ皇后、皇太子、事ヲ太皇太后、皇太后ニ啓シ、又百官、皇太子、三宮ニ上啓スルニハ、必ズ殿下ト稱シ、自ヲハ臣妾ト稱スル制ナリ、

〔類聚名義抄 二〕啓 マウス、[illegible]

〔唐六典 一 尚書都省〕凡下之所以達上、其制亦有六、曰、表、狀、牋、啓、辭、牒、○中略

近臣亦爲狀牋啓於皇太子、然於其長亦爲之、非公文所施、

奉啓

〔令義解 一 職員〕中宮 謂皇后宮、其太皇太后、皇太后宮、亦自中宮也、職

大夫一人 掌吐納啓令、謂納啓於上、吐令於下也、

〔令義解 一 東宮職員〕春宮坊

大夫一人 掌吐納啓令、

啓式

〔令義解 七 公式〕啓式 三后亦准此式、

春宮坊啓

其事云々、謹啓、

年　月　日

大夫位姓名

亮　位　姓　名

奉令依啓、若不依啓者、即云令處分云々、

亮　位　姓

右春宮坊啓式、奉令後、注啓官位姓、

〔令義解六儀制〕凡○中皇后、皇太子、於太皇太后、皇太后、率土之內、於三后、皇太子、上啓稱殿下、自稱皆臣妾、對揚稱名、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十月丙申、先是去九月七日、右大臣從二位兼中衞大將勳二等吉備朝臣眞備、上啓乞骸骨曰、側聞、力不任而強者則廢、心不逮而極者必惛、眞備自觀信足爲驗、去天平寶字八年、眞備生年數滿七十、其年正月、進致事表於太宰府訖、未奏之間、即有官符、補造東大寺長官、因此入京、以病歸家、息仕進之心、忽有兵動、急召入內、參謀軍務、事畢校功、因此微勞、累登貴職、不聽辭讓、已過數年、即今老病纏身、療治難損、天官劇務、不可暫空、何可抱疾殘體、久辱端揆、兼帶數職、闕佐萬機、自顧微躬、靦顏已甚、慚天愧地、無處容身、伏乞致事以避賢路、上希聖朝養老之德、下遂庸愚知足之心、特望殊恩、所於矜濟、不任懇款之至、謹詣春宮路左、奉啓陳乞以聞、

〔〕按ズルニ、延喜式等ノ政書、及ビ物語、日記等ニ據レバ、所司ミヅカラ事ヲ皇太子、三宮、女院ニ、申達スルヲモ、亦ケイト稱シタルナリ、又中古以降、尺牘ニ、謹啓等ノ字ヲ用ヰシコトアリ、マタ開發ノ義ナリ、

〔日本後紀　十三〕大同元年四月丙午、右大臣神王等、上啓曰、惟天爲大、運四序以授時、惟辟奉天、抚三才而育物、故能纂鴻圖而朝萬國、握鳳紀而馭八荒、鼎業於是永隆、鳳曆所以自遠、大行天皇齊通三之嘉命、稟得一之昌期、體軒昊而功成、躡殷周而治定、奄棄率土、遽及登仙、徒仰弓劍、痛踰過火、伏惟皇太子（平城〇）殿下、稟惟叡之神姿、承元嗣之洪緒、誠孝過禮、哀慕傷過、神等還觀往冊、稱歷前脩、莫不俯就弘規、式纂洪業、伏乞殿下、可斷荼毒而存至公、率典章而昇寶位、銓成四海、字濟萬方、无任懇性之至、謹奉啓以聞、辛亥、百官重復上啓曰、夫令者隨代垂制、臨時定議、依事改張、備於權宜、謹案禮家、先君崩、嗣子位定於初喪、即位既明、无疑遵行、臣等今月十三日奉啓、奉遵舊章、欲申禮典、荼毒之始、不許所請、伏惟殿下、叡情天縱、孝心自然、哀痛攀慕、抑禮不從、綸旨尙稱令、斷奏每曰啓、稽之禮家、當爲違失、求於人事、亦有不穩、（字闕〇中略）臣（中略）等愚情、竊懷不穩、伏望改令稱勅、使易施行、

〔文德實錄　一〕嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、竊以、萬物不能自化、資大匠以陶鈞、億兆不能自治、賴元首之司牧、一時曠位、則九服所以傾仰、一日無政、則萬機由其擁塞、是以姬王纘統、載冕宅憂之初、漢帝纂乾、正位殯葬之夕、遂行不滯、爲萬代之舟車、觀望相依、爲百王之戶牖者也、大行聖帝、明齊日月、道括乾坤、崇德叶於奎鑪、體政存於璿豆、七十二帝、彼復何人、三五六經、本無繫數、逐攬乃昔以來禮典舊章、察其利病之端、參於方今之代、遺制云、皇太子、可於柩前即皇帝位、一依周漢故事、伏惟殿下、深仁植性、純孝因心、寢門問豎、竭愛敬之誠、馳道中敬、盡溫恭之禮、臣子之道克宜、天人之望允集、宜遵奉聖旨、膺玆時來、居南面之尊高、應北辰之大寶、而偏纏罔極之至哀、不忍割情以就禮、涉旬踰月、以至今日、臣等顒々、深所未達、況乎先帝已有遺勅、孝善述父志、何得拘匹夫之情孝、缺萬乘之典章、謹案春秋制、人君即位有四、初喪即位一也、既葬即位二也、踰年即位三也、三年諒闇終即位四也、殿下已在初喪而忘制、宜追既葬而示儀、上承七廟之靈、下定萬民之望、臣等自負舊恩於丘山、思致新主於堯舜、不任悃款之至、謹奉啓以勸進、

口啓

〔日本書紀九神功〕九年（○仲哀）十二月辛亥、於是從軍神、表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓（マウシテ）于皇后曰、神欲居之地必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之主、仍祠立於穴門山田邑、

〔日本書紀十一仁德〕六十二年、是歲、額田大中彥皇子獵于闘鶏、時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬、仍遣使者令視、還來之曰、窟也、因喚闘鶏稻置大山主、問之曰、有其野中者何窟矣、啓之曰、氷室也、

〔權記〕長保二年正月廿八日丙午、早旦參內、（○藤原行成）此日藏人頭正光朝臣、奉勅詣女御御曹司、傳之左大臣、立后（○藤原彰子）宣命日可令擇申之由、先日內々以此氣色可告大臣之由奉勅命、（○中略）奉勅命之後、以女裝束一襲被勅使、大臣參進御所、令奏慶由拜舞、（大藏卿正光朝臣傳之）亦參院、（○一條母后藤原詮子）上御廬啓慶再拜、（事部啓之）予以立后舊記奉之、依先日命也、

〔枕草子一〕こと〴〵なるもの

門の事をこそ申つれ、さうじあけ給へとやはいふ、なを其こと申侍らん、そこにさむらはんはいかにいかにといへば、いと見ぐるしき事、さらにえおはせじとてわらふめれば、わかき人々おはしけりとて、ひきたてゝいぬるのちに、わらふこといみじ、あけぬとならば、たゞまづいりねかし、せうそこをするに、よかなりとは、たれかはいはんと、げにおかしきに、つとめておまへ（○中宮定子）にまいりてけいすれば、さることもきこえざりつるを、よべのことにめでゝいりにたりけるなめり、あはれあれ（○平生昌）をはしたなくいひけんこそ、いとおしけれとわらはせたまふ、

〔源氏物語二十八野分〕御まいりのほどなど、わらはにていりたちなれきこえ給へれば、女房などもいとけうとくはあらず、御せうそこけいせさせ給て、宰相の君、ないしなどのけはひすれば、（○下略）

〔源氏物語湖月抄二十八野分〕御せうそこけいせさせ（細）源の御ことづて也、（師）春宮中宮へ物申を啓すると云なり、

（續修東大寺正倉院文書四十五）北大家經寫所啓

請奉經四帙大般若經者

右綠、到牒數、請奉已訖、但到牒先後幷六十帙者、斯額亡、前日請奉經五十六帙之中、第四十帙之第八九十幷三卷欠、亦返抄如何申送訖、今具狀付還使申送、以啓、

天平十一年五月十八日　　　賓人石村布勢麻呂

（按ズルニ、北大家ハ藤原房前ノ家ナリ、房前天平九年四月薨ズ、薨後經ヲ寫シテ以テ其冥福ヲ祈リシナラン、）

（續修東大寺正倉院文書四十六）坤宮下任安宿弟見謹啓

欲奉寫大般若經一卷（卷次第五十五）

右、依勅、奉人可寫奉經如件、乞察者察、大仁慈、若有彼所假人之、而件願欲奉寫、仍隨准料錢三百文、敢犯德邊、誠惶謹啓、

天平寶字二年八月卅日

謹上　　東寺（前繪所邊）

（小杉本東大寺正倉院文書寫經外二）三尾子牛廿謹啓　請假事

合三箇日

右者依親母病、請假如件、謹啓、

天平寶字五年正月廿四日

（別筆）判許　　史生縣麻呂

（續修東大寺正倉院文書四十六）謹啓

仰遣事四條　　（別筆）不用了、

從田中大溝令通、欲開虛實者、茲去三月、掾大夫當田地曰、侍床足廣人等、即掾廣人召誂宜、今見佐官田中在經三四年許、都非是、故自上今開溝與此都非相通、如此行者、彼此共應在利益、仍廣人吐云、佐官口宣、止此溝而從北方畔令通、是以比畔溝開者、即掾宣今云、北方者地勢高不使水流、又好田九段餘與惡田所相准、好田九段益、然今此人云々如何、即床足申、好田九段益、仍廣人與掾大夫共和酒三坏許進、共皆散去、加以今人遺謗見爲宅無損、

一稻事、上下產業所事者、息島床足等共議、不荒將佃、但其地下、故滂水恐耳、

一今春定米不得春裹、所以然者、床足自京未到前十餘日、進國列當人別春料充了、更不令米料稻下、是以不得春之、

寶字三年五月十日　　足羽郡下任道守德太理

解

解トハ、諸司上官ニ向ヒテ、發送スル書ヲ云フ、文武天皇ノ令ヲ制スルニ至リテ、始テ解ノ式ヲ定ム、而シテ八省以下、內外ノ諸司、太政官及ビ其所管ニ上申スルニハ、並ニ解ヲ爲ラシム、其省ノ事ヲ太政官ニ申スニハ、先ヅ某省解申云々事ト記シ、次ニ其事ヲ錄シ、年月日ノ下ニ、大錄ノ位姓名ヲ注シ、次行ノ上頭ニ、卿以下少輔以上ノ位姓名ヲ注シ、其下ニ大丞以下少錄以上ノ位姓名ヲ注シ、其省印ヲ捺ス、自餘ノ解式一ニ之ニ準ズ、但シ上官ニ向フヲ文尾ニ謹解ト云ヒ、其餘ヲ以解ト云フ、桓武天皇ノ延曆二十四年、此ヨリ先、諸司諸國ノ進ル所ノ解文ニ、其官人等式ノ如ク署名セザルヲ以テ、更ニ令シテ、盡ク署名セシメ、其疾病及ビ假使ノ官人ハ、各、其名ノ下ニ、事故ヲ顯注セシムルコトヽナリ、醍醐天皇ノ延喜ノ制ニハ、諸司ノ解ハ、

史生以上ヲシテ、狀ニ隨ヒテ之ヲ送ラシメ、又官使ノ報書ハ、悉ク解ヲ作リテ、申送セシメタリ、

諸國司ヨリ上進スル解ヲ國解ト云ヒ、又社寺ノ解ヲバ、社解寺解ト云フ、其國司ノ使人、解ヲ送リテ京ニ至ラバ、其條目ニ隨ヒテ、日數ヲ定テ之ヲ申サシメ、若シ事急速ヲ要スベキ國解ハ、飛驛シテ送進セシム、又伊勢大神宮ノ解ニハ、必ズ祭主ノ解ヲ副ヘテ送進セシムルナリ、

〔類聚名義抄三佛〕解解解上俗、中下正、古買反、マリス

〔令義解公式七〕解式

式部省解申其事

其事云々謹解

年　月　日　大錄位姓名

卿位姓名　大丞位姓名

大輔位姓名　少丞位姓名

少輔位姓名　少錄位姓名

右八省以下、內外諸司、上太政官及所管、並爲解、謂監物上中務之類也、其非向太政官者、以以代謹、

〔令抄公式〕解式　自下奏上之狀也

○按ズルニ、公式令ニ、諸司印、方二寸二分、上官公文及案則印、諸國印、方二寸、上京公文及案則印、トアレバ、內外ノ諸司ノ解ニハ、各其印ヲ捺セシナリ、

〔日本後紀十三桓武〕延曆廿四年十一月丙寅、制、頃年之間、諸司諸國所進解文、官人等名下或多不署、若情懷不穩、忍而默爾、爲當執見各殊、上下不愜歟、縱使託事廳、被勘問、則稱某甲不署解文、既備員品、豈合得然、自今以後、宜令盡署、其緣病及假使等類、隨即顯注、不得令名下空有所疑滯、

〔延喜式 十八 式部〕凡解移者、進太政官及辨官解文、令錄申送、

〔延喜式 五十 雜〕凡解移者、史生以上隨狀送、

〔延喜式 十一 太政官〕凡出使申報書者、皆作解、

〔延喜式 十二 中務〕恒例解文進省式

右正月廿日春夏祿文、五月廿一日夏衣服文、六月神今食兆人一人文、同月廿日夏馬料文、七月廿日秋冬祿文、八月十日內記并史生考日行事文、十一月新嘗會兆人內記一人文、同月廿日冬馬料文、又依上日、請要劇文、每月申送、

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡諸國寺文返却帳、不改案解、押署進官、卽副官符下國、

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡勘內外諸司所進不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、檢交替使帳等者、辨官外題下於使局、卽率解文紙數、令本司本國進料紙、（中略）○先書其草案、而隨解文所載事條、召錄事所司、令勘申之、（略）○（註）主典已上、次官已下、次第勘判、其後長官閱彼此之所執、定勘判之得失、卽書黏紙、長官已下共署進、檢校覆勘既訖、捺使印、爲長案、更書奏文并內案及解文等、（在京諸司不修內案并解文）次官已下相共校讀竟、則加署、（略）○（註）大臣奏聞之後、錄奏了狀、副解文進官、（解文捺使印）其奏文踏印訖、（略）○（註）副之官符、更下使局、（略）○（註）使局受取頒行、（下諸司奏文并解文、副官符、召總官付之、下諸國、召雜掌付之、）

〔延喜式 十二 中務〕凡諸氏貢氏女、皆備年冊已下冊已上無夫者、造解文、載脊共署申省、

〔令義解 七 公式〕凡國司使人、送解至京、（謂其齎國司所差遣者、郡司及雜任皆是、）十條以上、限一日申了、（謂十條者、十通也、申了者、猶云進了、唐令云付了、此異文同義、若有所勘問者、隨狀進退、不可必限一日、）廿條以上、二日了、卅條以上、三日了、一百條以上、四日了、

〔侍中群要 七〕飛驛解文

付中務省、若無省官者、付外記、外記獻上卿、上卿持參御前、同奏云々、

〔延喜式 十二 中務〕凡諸國所進不動倉鑰者、官副國解下省、省卽勘收庫、

〔新任辨官抄〕於諸國解者、守介掾目連署、稱之國解、仍注某國言上也、在京守一人、進解狀之時、注云、美濃守藤原朝臣某言上、

神宮解狀事

太神宮禰宜等言上(内宮也)

豐受宮禰宜等言上(外宮也)

已上皆副祭主解申上之、無祭主解者不申上之、又有大宮司解、祭主以奏狀付官、官付職事也、

〔童筆要集〕解狀書樣

官位姓名解　申進申文事

請被特蒙鴻恩任解狀旨裁定ム申愁狀

右謹撿案内、ム申事極愁也、望請鴻恩、早任道理、將被裁許、仍勒事狀、以解、

年號ム月ム日

官位姓名

又樣

某御庄官百姓等解　申請本家政所裁事

言上三ケ條

一請被殊裁斷ム申子細事

右謹撿案内、ム申事極訴也、早任道理、欲被裁免耳、

一請被同裁定ム申愁事

右倩〻〻故事、彼條諸非例也者、任先例、早欲被裁免矣、

一請被同裁許ム申事

右伏惟、舊記於彼事者、至愁也、且進遣達、將被優免而已、以前三ケ條、一々爲蒙裁定、言上如件、以解、

解例
謹解

年號其月ム日　　　　　　　御莊公文姓名判
々々々
々々々
下司姓某判

又樣

某御莊住人姓ム解　申請本家政所裁事
請被殊因準先例裁許ム申子細事
副進　證文等
右ム謹考舊貫、ム申愁中大愁也、望請早垂慈恩被裁免者、將仰憲法之不空、彌念宮仕之有勇矣、以解、
年號ム月ム日　　　　々々々

〔續修東大寺正倉院文書十六〕皇后職解　申書生上日事
无位長江忌寸金弓、上日壹佰壹拾、（二月九　三月廿二　閏月廿二　四月十九　五月廿五　六月廿六　七月七）
寫紙伍佰陸拾玖張
右起二月廿日盡七月廿日、上日幷寫紙等如件、錄具狀謹解、
天平五年七月廿日　大屬正八位下勳十二等內藏忌寸

〔續修東大寺正倉院文書別集四十七〕造東大寺司解　申訴闕姓字雜工人事
合肆人
佛工无位秦祖父（年廿九　右京人）
鑄工无位秦船人（年卅三　河內國高安郡人）
鑄工无位秦常大吉（年廿八　山背國葛野郡人）

銅工无位秦物集廣立年卌六山背國葛野郡人

過者「上件二人依顧不正」

右冊件祖父等訴云、天平勝寶四年頃、授秦伊美吉姓已訖、今補雜工、所授公驗、無伊美吉字、望請改正公驗、欲授伊美吉字者、司計其訴、理不可默、仍具狀、便付祖父等申送、謹請官裁、謹解、

天平勝寶七歲三月廿七日　主典正七位上美努連奥万呂

長官正五位上兼下總員外介佐伯宿禰今毛人

判官正六位上河内畫師使

次官外從五位下勳十二等大藏伊美吉萬里　判官正六位上兼下野員外掾上毛野君眞人

〔續修東大寺正倉院文書二十九〕大安寺造佛所解　申請丹事

白青七兩

右既未給

綠青一斤十四兩

右依寛不用

白綠八兩

右依色惡不用

以前、奉造廬舍那佛像料、今應請、丹員如前、謹解、

天平感寶元年閏五月十一日　中務少錄從七位下中臣丸連諸磨

玄蕃頭從五位上市原王

外從五位下行圖書助守部連牛養

〔續修東大寺正倉院文書三十五〕作物帳工散役及官人上日解文○中略

採楉拾荷　功五人
掃淨院内幷汲磨水　功廿人
雜工等所　功九十人〔○中略〕
官人上日
長官正四位上坂上忌寸犬養　上日拾伍
正六位上志斐連麻呂　上日貳拾捌夕漆〔○中略〕
以前三月中作物、幷雜工等散役、及官人上日、具件如前、謹解、
天平寶字六年四月一日　主典從六位上阿刀連酒主
長官正四位上兼左勇士督坂上忌寸犬養　判官外從五位下上毛野公眞人
次官正五位下國中連〔假〕　判官正六位上葛井連根道
主典正六位上彌努連〔假〕
主典正六位上志斐連麻
主典正八位上安都宿禰雄足

〔中臣氏系圖〕延喜本系解狀
大中臣氏人等解、申進新撰氏族本系帳事、〔○中略〕
以前撿案内、去貞觀五年十一月三日、勘造件帳、進官已畢、而先帳歷年、彼生未載、爰被上宣、具所撰錄、加以此氏供奉神事、良有以矣、苟非其人、恐致咎祟、望請准例、被踏官印、依件分納、將爲後察、仍錄事狀、申上如件、謹解、〔件本系、去延喜三年、縛作既畢、而以今年夏、勘署進官、〕
延喜六年六月八日　散位正六位上大中臣朝臣氏彝
從五位上神祇大副大中臣朝臣安則　正六位上行大祐大中臣朝臣本扶

少副正六位上大中臣朝臣良臣

從七位上守少祐大中臣朝臣奥生

少典鎰正七位上大中臣朝臣有總

右衞門權少尉正六位上大中臣朝臣三江

散位從六位上大中臣朝臣勝來

學生正七位上大中臣朝臣利世

〔類聚符宣抄 六〕圖書寮解 申請 官裁事

請以寮中不仕料宛用度打太政官長案料紙三百帳之狀

白米一斗五升 酒五升 鹽一合五勺

和布一連半 魚三升

右被太政官今年十月廿六日符偁、右大臣宣、書太政官長案料、宜便留年料內、毎年令打進之者、其數雖不幾何、無用度物、望請官裁、以件不仕料、准左右辨官例、宛用打進、謹請官裁、謹解、

延喜十八年十二月四日 正六位上行大屬縣犬養宿禰秋人

從五位下守頭兼丹波權介島田朝臣仲方 正六位上行大允紀朝臣

正六位上行助宗岳朝臣 從六位上行少允藤原朝臣

〔梅園奇賞〕伊勢太神宮司解 申進櫃莊在飯野郡寺田幷神民口分田坪付勘文事

合貳卷

一卷神民口分田坪付勘文

一卷本寺田坪付勘文

右得齋宮寮今月六日牒狀偁、被宇多院去四月廿五日宣旨、今日到來偁、東大寺莊在飯野郡、今爲令勘件莊、下遣御厩侍大原並高、須仰神宮司等令入勘之由、宜仰遣者、仍牒送如件、乞也察之狀、依宣旨、

入部件使、欲令勘濟彼莊事者、依來牒、雖無官符、爲長院宣、下符郡司、令勘申彼莊事、爰郡司等勘申云、東大寺莊、往古今來、無有郡中、但在布施内親王施入東寺墾田荒熟總百八十四町、其由太政官去昌泰元年八月十六日符、分明也、仍勘申彼由、既畢者、依郡司勘申、寺田神民口分田、彼此爲別卷、注二卷、令勘申之間、日暮入夜、止廳事也、於是件使入來司館、以無道惡言爲宗、不請取彼勘文、還去也、爰注其行事、謹副勘文若使者、言上如件、仍注事狀謹解、

延長七年七月廿一日

大司正六位上大中臣朝臣恒瀧

從八位上守少司大中臣朝臣

〔類聚符宣抄三〕太宰府解　申請　官裁事

言上八幡宇佐宮恠異狀

西門外腋御幣殿東方柞木俄枯事

件木茂盛大樹也、而俄以枯了、一葉無靑、今月十三日申時所見及也者、

同月十七日辰時、鴨一雙、集南樓上者、

右得豐前國去三月廿日解狀偁、得彼宮今月十七日移文今日到來偁、御宮物佐注其日時、移送如件、早欲被言上於大府者、今隨移文到來、不移時剋、言上如件、望請府裁、早被言上於官者、言上如件、仍注事狀謹解、

萬壽三年三月廿三日　正六位上行大典豐岡宿禰公職

帥闕　從五位下行權大監藤原朝臣貞淸

正三位行大貳藤原朝臣　從五位下行大監平朝臣季基

正五位下行少貳兼筑前守高階朝臣　從五位下行權大監藤原朝臣賴業

正五位下行少貳兼肥後守藤原朝臣
從五位下行大監平朝臣
從五位下行權少監菅野朝臣
從五位下行少監大藏朝臣
從五位下行少監豐島眞人時道
正六位上行少監安倍朝臣
正六位上行少監財部宿禰
正六位上行權大典建部宿禰
正六位上行權大典大藏朝臣
正六位上行大典上毛乃朝臣弘
正六位上行大典財部宿禰
正六位上行權少典大中臣朝臣

〔類聚符宣抄 一〕式部省解　申補任事（書所不除之由見裏、件裏書忍寫竟了、）
補任造伊勢太神宮使散位從五位下大中臣朝臣爲信事
右被太政官去九月九日符偁、從二位行權中納言兼治部卿右衞門督藤原朝臣經通宣、奉勅、件人宜補任造伊勢太神宮使者、省宜承知依宣行之者、今日補任申送如件、謹解、
長元八年十月四日　正六位上行少錄惟宗朝臣
二品行卿親王　正六位上行大丞藤原朝臣 未到
正四位下行大輔藤原朝臣　正六位上行少丞兼中宮少進橘朝臣
正四位下行權大輔兼文章博士木工頭伊與介大江朝臣　正六位上行少丞藤原朝臣 未到

以解

少輔從五位下藤原朝臣　正六位上行少丞橘朝臣未到

正六位上行少錄伴朝臣

正六位上行少錄中原朝臣

正六位上行少錄小野朝臣

〔續修東大寺正倉院文書三十一〕南藤原夫人家解　申請經師事

神門臣諸上

右、有私可寫書、要切件人、須請被給卅箇日許、欲令少書寫、今具錄事狀以解、

天平十九年二月廿三日　正七位下行主船佑兼書吏大友村主廣名

〔東大寺小櫃文書下〕栢植鄉長解　申常地賣買墾田立券事

神田柒段　上（限東紀寺田、限南京戶敢朝臣稷万呂田、限西石部大万呂田、限北物部廣万呂田、）部下

栢植鄉戶主敢臣安万呂之賣墾田者

付價錢捌貫（天平勝寶三年歲次辛卯年始常地作料一年直米四斛）

右墾田買得處元興寺三論衆、

以前墾田賣買人依法式立券者如件、仍具牒狀申送、以解、

天平勝寶元年十一月廿一日　鄉長桃尾臣井麻呂

田主敢臣安万呂

證人壬生少梗同姓

石部石村

印代万呂

筆取壬生淨足

税長石部果安麻呂（○又見古雜帖）

〔續修東大寺正倉院文書 別集十三〕奉寫一切經所解　申九月朔告事

合奉寫一切經六千卷

三千七百廿三卷先奉寫一切經司寫所

二千二百七十七卷奉寫司家（自去二月二十五日、迄今月廿九日、）

新錢伍貫捌拾參文（一貫五百八十三文去月殘、三貫五百文月中請、）

用四貫七百五十三文

一貫八十五文、兎毛筆卅一管直、（管別卅五文）

三貫六百卅文、綺一百廿一丈五尺直、（尺別三文）

卅八文、小水麻笥三口直、（二口別十三文、一口十二文）

殘三百卅文（○中略）

以前起今月一日、盡廿九日、請用雜物并殘等及食口如件、以解、

寶龜三年九月廿九日　　案主上

主典葛井連

〔吾妻鏡 七〕文治三年四月廿三日甲午、周防國者、去年四月五日、爲東大寺造營被寄附之間、材木事、於彼國有杣取等、而御家人少々耀武威、依有成妨事、勸進聖人重源、取在廳等状、訴申公家之間、被下其解状於關東、所被尋仰子細也、（○中略）

周防國在廳官人等

言上二箇條（○中略）

副進證文等

詐爲解

右件所々者、非指庄號之地、有限國保、勿論之公領也、而天下騷動以後、云領主者、地頭依令牢籠、落居之程、所被改補也、而寄事於左右、恣施地頭威之間、既爲造寺之妨、何況僅國庫納米者、是非指運上料、非私相料令勸進當國他國之上、適當國狹小所當米也、而僅割置米、或以國中斗代高徵、或以浮言之愚案、背法所令押領也、而官庫納米之習、以納所使書生令撿納、又令撿封之事、諸國一同之流例也、而任自由、恣不觸國衙、令押取之條、未曾有事也、只以一察萬、尤可仰推察也、被尋子細於本所、爲傍輩向後、且被停止狼藉、且欲被糺返件納米等矣、以前二箇條、言上如件、以解、

文治三年二月日

散位賀陽宿禰弘方
散位土師宿禰安利
散位土師宿禰弘安
散位菅乃朝臣成房
散位土師宿禰助遠
散位土師宿禰國方
散位賀陽宿禰重俊
散位土師宿禰弘正
散位大原宿禰清廉
散位中原朝臣在京
散位日置宿禰高元
權介大江朝臣
權介多々良宿禰在京

〔法曹至要抄上〕一作官文書事

詐僞律云、詐爲官文書者、杖一百、注云、符、移、解、牒之類、

〔延喜式 雜五十〕凡内外諸司解文、不得用薄惡紙、其字必令分明、不得一行過十三四箇字、

〔續日本後紀 仁明十〕承和八年八月戊午、勅曰、聞、下太宰府驛傳官符、幷彼府言上解文、路次諸國長門關司等各閲見、縱國裏機急、境外消息、不可必令萬民咸知、而解文委曲、未下京華、下府辭狀、無遂宰府、載記之旨、宣諱民間、途說之費、滿溢内外、寔是專輙閲見所致之漸也、而宜告山陽道諸國司、更莫令然、又〇見家□本條三代格十七、

〔三代實録 清和十二〕貞觀八年五月八日辛亥、常陸國久慈郡人椿戸門主、嘉祥三年出家、度補國分寺僧、今自修解文、偁、親父宮成、任久慈郡權主政、貞觀六年死、弟妹多數、無人育養、望請返附本貫、以繼家業、詔許之、

〔三代實録 清和二十一〕貞觀十四年五月七日丙子、掌渤海客使少内記都言道、自修解文、請官裁、偁、姓名相配、其義乃美、若非佳令、何示遠人、望請改名良香、以遂穩便、依請許之、

〔貞信公記〕延長五年四月廿八日、有奏有嶋帳進、〇嶋道二字恐衍、國不奉官符、申返國々解文、不可裁許之狀、仰左大辨、是勅語也、

〔左經記〕長元七年十一月十九日乙巳、太宰解文等、下義賢朝臣仰云、各令撿納者、但廿萬廉解文二枚通、送頭辨許、是依可納藏人所也、

〔古事談 六亭宅諸道〕間比〇近衞院御宇東北院領池田庄解ヲ朝隆卿執事之時、執申狀中云、非曾經殿下之御戚、蒙又戚梁上之竊盜ト書タリケルヲ御覽ジテ、此解狀者、非田舍者之草、可然之學生儒者ナドノ書タルニコソ、尋ロト被仰ケレバ、召尋庄官等之處、暫ハ秘藏不令申、殿下御定也トテ問ケレバ、江外記康貞ト申者ニ、關緣誂候ト申ケリ、仍被召康貞於文殿云々、

名解

辭

辭トハ、雜任ノ初位以上、及ビ庶人、事ヲ錄シテ諸司ニ申達スルヲ云フ、文武天皇ノ大寶令ヲ定ムルニ至テ、始テ辭ノ式ヲ制ス、先ヅ年月日ノ下ニ、位姓名辭ノ四字ヲ注シ、次ニ其事ヲ錄シ、文ノ終ニ、謹辭ノ二字ヲ加フ、又後世ニ至リテハ、特ニ文尾ニ以解ノ字ヲ加フルモノモアリ、而シテ若シ庶人ナレバ、必ズ其本屬ヲ記スルハ古來ヨリノ例ナリ、

〔類聚名義抄　二〕辭亦辞、辤、辭、似茲反、コトバ、マウス

〔唐六典　一　尚書都省〕凡下之所以達上、其制亦有六、曰表、狀、牋、啓、辭、牒、〇中略庶人曰辭、

〔朝野群載　二十一　雜文〕田地賣買券

攝津國島上郡兒屋鄉長解申、立賣買常地券文事

　合地參町伍段　在五條一里十七十八兩坪內〇中略

右得內豎從七位下紀朝臣氏秀辭狀偁、件地故親父岑高、以去延長八年六月十三日、從大藏利常之手所買得也、其後親父存生之日、所處分給也、而今宛價直稻肆伯貳拾束、限永年沽與主計史生從七位上御船宿禰興元既畢、望者欲被立券文者、長依辭狀、加覆審、所陳有實、仍勒賣買兩人幷保證署、右立券文如件、以解、

　天曆四年六月十七日　長〇以下署名略

〔類聚三代格　一〕太政官符

　應減筑紫防人十二人便充在京及府卜部厮丁事

右得太宰府解偁、對馬島去年四月廿九日解偁、撿案內、太宰府天安元年五月八日解偁、得對馬島解偁、筑紫防人百二人之內十二人、便充在京及府卜部等厮丁、其代以當土人永相補者、而得天安

辭式

元年税帳使竿師從六位下日根造勝雄去十一月廿九日解偁、被官宣偁、件厮丁、自今以後本島人充之、仍返却者、島宜承知依舊充行者、須依符旨充行、而撿案內、島去齊衡四年二月廿一日解偁、謹撿案內、太政官去承和八年八月十七日符偁、得彼府解偁、對馬島解偁、去延曆年中、以東國人配防人、後以筑紫人配之、而並停廢也、當土百姓、去弘仁年中、疫癘滋發、戶口減少、忽有寇賊何堪防禦、望請準舊例、以陸地人爲防人者、右大臣宣、奉勅、准弘仁年中例、以筑紫人依件差遣、令緣邊勤斥候者、自爾以來陸地防人百二人、每年來島、且守非常、而風波路嶮、動致闕怠、或漂沒不來、或中途逃亡、仍以當土人、擬補彼闕、而彼太宰府去嘉祥三年十二月一日符偁、太政官去承和十一年七月十九日符偁、得神祇官解偁、卜部等解偁、承前之例、件厮丁、以當島人、限三箇年、闕○中略綱丁差送、而太政官去弘仁十四年三月廿七日下太宰府符偁、彼府解偁、對馬島解偁、神祇官卜部等厮丁、依例差點進上、而頃年疫死、倦丁減少、仍請處分者、府加覆勘、所申有實、望請件厮丁、咸令陸國差送、謹請官裁者、右大臣宣、依請者、自爾以後、曾無差送、加以件島遠居海中、往還希人、因茲本鄉親戚、未由訪育、望請復舊被給本島者、府官覆辭狀、所陳有實、○中略

天安三年三月十三日

○按ズルニ、右ニ據レバ、解狀ヲ擂シテ辭狀ト云ヒシモノヽ如シ、

〔令義解公式七〕辭式

年月日位姓名謂、雖文不載、辭爲雜任初位以上、謂、死位雖者庶人稱本屬、官、注本司也、任亦準此、辭、

其事云々、謹辭、

右內外雜任以下、申牒諸司式、若有人物名數者、件人物於云々前、

〔雜筆要集〕辭文樣

謹辭　賣渡進私領田地事

辭例

合壹所者

在國郡莊圖里坪字某田

四至

右件田者、先祖相傳之私領也、依爲後沙汰、新立劵文之狀如件、以解、

年月日　　　　賣人姓判

雜物請文

謹辭　請申

ム物申

右物以後日、慥可辨進之狀、如件、

年月日　　　　姓判

〔豐後柞原八幡社文書〕檢之由原宮宮師季供田一町有給例、又仙照時被判給扣坪、他人前別當宮還、

八幡由原宮師僧仙照謹辭　請國裁事　司宮代口井

請被任先々國判符判給季供田壹町狀　檢校前足羲友氏花押

南七條臺田里卅三坪

應和三四淸原淸忠請、但天德五年件仙照季供田、

謹案先例、宮師之職、請件季供田、爲衣供之勤修、望請國裁、任先例被判給件供田、仍注事狀辭。、

康保二年三月三日　　　　宮師僧仙照

判任先例宛行季供

守橘朝臣花押　權掾藤原

介藤原　掾上毛野

大日生部

少目大原

〔東寺文書〕讓辭　注進去永保三年川合莊田町別來未進結解事

合拾四町當米八石四斗　但町別二反代六斗

一見納壹斛貳斗七升

三斗七升僧勝源上　三斗季貞上　六斗莊司中上略〇

右任御下文之旨、所注進如件、以解、

應徳元年八月廿日　莊司検非違使花押

〔東寺百合古文書〕讓辭　賣渡進私領田新劵文事

合壹段者　在山城國石井郷鳥羽平里貳拾柒坪、東縄本参段内、中壹段右馬寮也、

右件私領田、元者磯部秋延先祖相傳私領也、年來領掌之間、全無相違、而今依有要用、直錢卅貫文、限永年平忠家所沽却進實也、敢不可有他妨、但本劵文一通、幷讓狀一通、相副進、仍爲後代證文、立新劵文以解、

寛喜元年七月廿六日　磯部秋延花押　字藥師女花押

〔豐後國都甲文書〕右衛門尉大神惟家讓辭

讓與　豐後國都甲莊地頭職並田所職田畠山野等事

在四至　東限久乃坂、南限大河、西限原田下三畔、北限今狩鋤御尾、

右件所職者、惟家代々相傳之所職也、而嫡子於四郎左衛門尉惟氏仁、先年之比、讓與手繼之狀、器量不足之間、悔還其狀、今五郎右衛門尉惟親仁、手本證文、代々關東御下知、相副手繼之狀、限永代所讓

與實也、今以不可有他妨、仍爲後日券契之狀如件、

弘長二年四月十九日　左衞門尉大神花押

〔東大寺文書〕謹辭幷奉私領田地事

合壹段者在伊賀國阿閉郡、但內保莊內字井與谷北谷也、

右件田地者、坂上貞宗、先祖相傳私領也、雖然貞宗子息藥師丸ヲ、又次郎殿御出擧米代ニ成ス事、げんせん也、但藥師少身、又次郎殿ニ、いとまを申げによて、藥師丸身代ニ件田地ヲ又次郎殿ニ限永代辨候所、實正具也、但貞宗死去時、件田地ニ藥師丸請料上へまいらせ候事、御在地明白也、然間藥師母神子、同藥師があね字觀音女、總テ子々そん〳〵、向後違亂不可有者也、但藥師內保莊內ニ不記候間、母神子、同觀音女、判形ヲ加所事實也、仍後日爲沙汰旨、就鏡證狀如件、

弘安八年十月十日　母神子在判

同うち女觀音在判

字藥師丸

牒

牒トハ、官人事ヲ諸司ニ申シ、及ビ官省諸司、互ニ事ヲ申スノ書ヲ云フ、文武天皇ノ大寶令ヲ制スルニ至テ、始テ牒ノ式ヲ定ム、而シテ內外ノ官人主典以上、諸司ニ申牒スルニハ、先ヅ事ヲ錄シ、其文ノ首ニ牒ト記シ、尾ニ謹牒ト記シ、年月日ノ下ニ、其官位姓名牒ト注ス、但シ三位以上ハ、名ヲ注サズ、桓武天皇ノ延曆二十三年ニ至テ、親王及ビ三位以上ノ官人ハ、各〻其家司ノ牒ヲ以テ、諸司ニ申牒スル式ヲ制定セラレタリ、而シテ其文尾ハ、其向フ所、發スル所ニ從

名例

ヲ、謹牒、故牒、以牒ノ別アリ、

諸司等ヲ牒送シ、又僧綱諸司ト報答スル牒ハ、一ニ移式ニ準ズ、宜シク移ノ條ヲ參看スベシ、

諸國ニ送達スル牒ハ、事急速ヲ要スレバ、之ヲ驛傳ニ附シ、自餘ハ在京ノ使人ノ歸國ノ便ニ附シ、或ハ雜掌等ヲ差遣シテ送達セシムルナリ、

太政官及ビ大宰府、或ハ僧綱ヨリ蕃國ニ送ル書ヲ牒ト云ヒ、又在唐ノ僧等ニ遣ス書ヲモ亦牒ト稱セリ、宜シク宗教部遊外僧篇ヲ參看スベシ、

〔類聚名義抄 九〕牒フダ　サウス

〔唐六典 一尚書都省〕凡下之所以達上、其制亦有六、曰表、狀、牋、啓、辭、牒、○中略　九品已上公文皆曰牒

〔秉燭譚 五〕牃字ノコト

符牒ノ牒、本朝ノ文書ニ必牃ニ作、字書ヲ考ルニ、只云俗牒字ト、ソノ故ヲ詳ニセズ、遊宦紀聞ヲ考ルニ云、唐太宗諱世民、碟ノ字、葉ノ字、棄ノ字、皆世ヲ去テ云ニ從、泄ノ字、紲ノ字、皆世ヲ去テ曳ニ從、世ト云トハ形相似タリ、世ト曳トハ聲相近シ、モシ皆云ニ從フトキハ、泄ノ字沄ノ字タリ、故ニ又曳ニ從ソ、民ノ字ハ則氏ノ字ニカユ、㟯、愍、泯ノ字、今或ハ昏、忞、汦ニ作ルト、シカレバ牃ノ字ノ牃ニ作ルモコノ故ナルベシ、年代久遠ニシテ、後世ニテハ中國ノ人モソノイハレヲ明ニセザルトミエタリ、畢竟書中ノ字ヲ改ルハ甚シキコトナリ、

職制

〔令義解 七公式〕諸司印、謂、省、寮、司等、各得行印也、方二寸二分、上官公文及案、移、牒、則印、謂、太政官及諸司、與諸國、三綱相牒之類是也、

〔侍中群要 六〕所文書加署名事

初仰下御牒等之類ハ、承行藏人先加名、然後從上加之、

○按ズルニ、御牒トハ、藏人所ノ牒ヲ云フナリ、

〔山槐記〕永暦元年七月八日甲申、一昨日自官僚文殊會東寺捧物、○中略　當府○近衞　廳頭光堅來、請牒、判政生

牒式

會井北野祭相撲人等、可上洛牒也、近國七八箇國也、(中略)恒例之由、光堅執申、非強大事、仍所加判也、是何事之有哉、此牒等可加請印、仍同申請封、爲付官[illegible]也書名片字下給畢、光堅云、舊封等皆押檟蓋、先々或名字片字、或書判云々、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

凡送諸國官符幷牒、事急者附驛傳、自餘附在京幷雜掌、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡蕃客往還、若有水陸二路者、領客使與郡國司、相知逐便、預更一路、明注所須船駄人夫等數、及客到時日、遞牒前所、應須供客之物、令預備擬、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年九月甲午、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、曾無以家司牒及解向官司之文、而案去延曆廿一年九月廿三日格云、親王內親王、並年滿四歲、始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司、若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人、同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類、可有別式者、未審所從者、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上、亦無可署、準據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自今以後、宜親王四品已上及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品、其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾、家令已下兩人署之、無品親王內親王者、並別當官人、署名申牒、牒式准上定、別當人依勅處分、其散事三位、元無家司、至牒諸司、宜令自署、立爲恒式、

〔令義解七公式〕牒式

牒云々、謹牒、

年　月　日　某　官　位　姓　名　牒

右內外官人主典以上謂內舍人、才伎長上又同也、緣事申牒諸司式、三位以上去名、若有人物名數者、件人物於前、謂條物數爲件也、言以人物件於牒云々之前、

〔延喜式 雜五十〕撿調物使□牒上國衙頭
某事
牒云々、具錄事狀、謹請、處分、謹牒、
年月日　　主典位姓名牒
介姓名
右介入部内、牒在治部守、或掾以下署如今、
〔續修東大寺正倉院文書 十六〕皇后宮職牒　書生上日事
檜前馬長　上日參拾壹 五月廿七、六月四、
寫紙一百七十六張
右一人、起五月一日、至于六月四日、上日幷寫紙等如件、
五年 天平〇 七月卅日　　大隅
〔東南院文書 五櫃十一〕但馬國司牒上　造東大寺司
合進上奴貳人
奴池麻呂
奴積麻呂
右件奴、依民部省去天平勝寶元年九月廿日符、以去正月八日進上已訖、此無故以二月廿六日逃來、
仍捉奴正身、付本主大生部直山方等進上如前、今具事狀、謹牒、
天平勝寶二年三月六日　　史生正七位上巨勢朝臣古万呂
守從五位下勳十二等楊胡史眞身　　掾正六位上縣犬養宿禰吉男
〔續修東大寺正倉院文書 別集九〕藥師寺三綱幷勘經所牒上

故牒

奉請一切經事

合二百廿三卷之中十八卷奉請寶積經正所、名如別紙、見二百五卷

帙廿三枚之中无一枚占、

右依僧綱今日牒旨、奉請一切經如件、仍錄事狀、付左大舍人村山首麻呂、謹以牒上、

天平勝寶七歲八月十六日

都維那僧脩智

上坐法師理鏡

勸經所僧善耀

〔延喜式十一太政官〕辨官牒少納言式

左辨官右辨官准此

某國司申送、調庸及中男作物等帳若干通、

式部省申、爲應給諸司春夏祿事一通、

兵部省申、爲同前事一通、

右若干通請奏

某國正稅帳使官位姓名、所進若干剋驛鈴一口、

某國守位姓名、赴任日所給若干剋傳符一枚、

右驛鈴一口、傳符一枚請進、

下某國、爲正稅帳使官位姓名事畢還任事一通、若干剋驛鈴一口、

下某國、爲位姓名任守事一通、若干剋傳符一枚、

民部省下某國、爲給官位姓名食封事一通、

右三通請內印、幷驛鈴一口、傳符一枚、

下民部宮内等省、爲給諸司某月公粮事一通、
下民部省、爲應徵免某年課役事一通、
　右二通請外印、
牒、件入奏文書、幷請進驛鈴傳符、及請印文書、具件如前、故牒、
　年月日　左史位姓名牒
　右辨位姓名

少納言牒辨官式
某圖司中送調庸及中男作物等帳若干通、
式部省中、爲應給諸司春夏祿事一通、
兵部省中、爲聞前事一通、
　右若干通、某日少納言某奏訖、〇中略
牒、具件如前、至請檢領、故牒、
　年月日　外記位姓名牒
少納言位姓名古式少納言署於下、今改署於上、

〔延喜式十一太政官〕太政官牒僧綱
某位某、今擬僧正位、
　右一人擬官如右
勅、依前件、省僧正某、今以狀牒、牒到準狀、故牒、
　年月日　外記位姓名牒
大納言位姓

〔延喜式 雜五十〕國司上下相牒式

某事

牒云々、今以狀牒、牒至准狀、故牒、

年月日　主典位姓名牒

守姓名

右守在治部牒入部內、介以下、或若守入部內、牒在治部介以下云、檢調物所牒、國衙頭、介以下、報云、

國衙頭、牒上檢調物所案典等、若長官不在者、以介準守、餘官不在、節級相準亦同、年月日下、典者史生進之、

〔朝野群載 二十二 諸國雜事〕過所牒

某國牒 某國路次關々可勘過某 隨身雜物事

右差某國發向、仍可勘過之狀、牒送如件、故牒、

年　月　日　目

掾

介

守

〔東大寺小櫃文書 下〕造東大寺司　牒越前國史生阿刀宿禰所 別筆 不注

進上產業帳肆卷 一卷天平勝寶七歲 一卷八歲 二卷九歲之中、一卷名云天平寶字元年、

右在彼國產業所帳、依數領納如件、然編事今追遣使令檢校、但在曾根乙万呂身米者、塗不待使、國可勘取、又阿刀法師待使至、共使可令勘受彼所物、今以狀付還使未還舍人粟田人麻呂、故牒、

天平寶字元年十二月八日　主典美努連奧万呂

判官河內惠師

〔續修東大寺正倉院文書三十八〕造石山寺所牒　坂田庄司

合請米貳拾斛（大書雌料者）

右作寺料米欠、仍差舍人物部根万呂充使、請如件、今具事狀、故牒、

天平寶字六年三月十七日　案主下道主

主典安都宿禰雄足

〔續修東大寺正倉院文書別集二〕奉寫一切經司牒造東大寺司

合請大乘經疏一百三部（四百廿卷）　卌九卷

牒、上件疏、爲證本用、差內竪六人部嶋繼充使、請如件、故牒、

神護景雲二年二月十九日　別當圖書少屬正八位下大隅忌寸公足

次官從五位下若江王

〔東寶記法寶五〕四月八日、下太政官牒於僧綱所偁、

應令東寺安居講守護國界主經事

牒、太政官今月七日下治部省符偁、右大臣宣、奉勅、件經宜令眞言宗僧毎年夏中永講彼寺、消禍修福、降雨止風、饒登年穀、擁護邦家者、省宜承知依宣行之者、綱所察此狀、依例令行、故牒、

天長二年四月八日　左大史美努宿禰清庭牒

〔朝野群載十六佛事〕補天台座主官牒

太政官牒　延暦寺

傳燈大法師圓仁（臈年）

右右大臣宣、奉勅、件法師宜定彼寺座主者、寺宜承知之、牒到準狀、故牒、

仁壽四年四月三日　從六位上守左大史秦宿禰永岑

參議左大辨從四位上兼行右近衛中將近江守藤原朝臣氏宗

〔朝野群載二十大宰府〕可遞送宇佐使牒

藏人所牒　太宰府

應供給遞送使等事

正五位下行左衛門權佐藤原朝臣泰憲

卜部正六位上直宿禰行盛　小舍人二人

牒、件等人、爲介奉御幣幷神寶於宇佐宮、發遣如件、府宜知狀供給遞送、路牒到準狀、故牒、

長曆四年十月　日　出納木工少屬中原貢任

別當右大臣兼右近衛大將藤原朝臣　藏人左少辨源朝臣經成

頭右京大夫兼左近衛中將近江介藤原朝臣實房　式部丞藤原公基

左近衛權中將兼備中介藤原朝臣信長

〔朝野群載四朝儀〕當前齋宮〇白河皇女善子內親王廳牒　若狹國衙

欲被使早進濟當年御封貳拾伍烟代佰斛事

牒、件御封、任例早速可被進濟之狀、牒送如件、乞衙察狀、不得延怠、故牒、

元永元年八月　日　右文殿

別當位從五位下藤原朝臣

〔勸修寺文書〕太政官牒　東大寺

應補任別當職事

權僧正法印大和尙位尊信

右正二位行權大納言源朝臣具通宣、奉勅、件人宜爲彼寺別當者、寺宜承知依宜行之、牒到準狀、故牒、

以牒

康安六年九月七日　　右大史正六位上兼行少內記三善朝臣花押牒。

修理右宮城使從四位上行右中辨藤原朝臣

〔北山抄〕四拾遺雜抄請暇事

請暇三箇日

牒、爲治身病、所請如件、以牒、

年　月　日　　某牒

〔台記〕久安三年正月廿一日乙酉、昨日家中犬死、今朝聞之、因之使下家司遣衣送暇文於藏人所及外記局。○中略

請暇四箇日

牒、依犬死穢、所請如件、以牒、

久安三年正月廿一日　　內大臣正二位藤原朝臣賴長牒。

〔雜筆要集〕府牒書樣

左近衞府牒　攝津國衙

應令早引募相撲人最手縣爲免田八十町浪人八十人事

牒、件免田浪人、以縣爲儲可令引募之、先例縣閑同等皆所令引募也、自餘之例不違毛擧、仍牒送如件、乞也衙察狀、牒到奉行、以牒、

年號ム月ム日　　々々

左大將々々

〔神祇官年中行事神事〕一吉書成事

神祇官牒　大和國衙

欲被早進濟神稅稻佰束事

牒、件神稅稻爲宛官家用途料、任先例可被進濟之狀、牒送如件、

乞也衙察狀、牒到準狀、以牒、

安元二年十二月十四日

伯在判

祭主權大副大中臣朝臣

大副大中臣朝臣

權大副卜部宿禰

權少副大中臣朝臣

權少副大中臣朝臣

權少史齋部宿禰在判

權大祐卜部宿禰

大祐齋部宿禰在判

權大祐大中臣朝臣

少祐齋部宿禰

權少祐大中臣朝臣

權少祐大中臣朝臣

權少祐卜部宿禰在判

權少祐大中臣朝臣

少史齋部宿禰在判

權少史伊岐宿禰

權少史伊岐宿禰在判

〔建武年間記〕雜訴決斷所牒　安藝國衙

松田平內左衞門入道性秀申志道村事

右近隣惡黨幷土民等、令押領云々、早可沙汰居性秀代官者、以牒、

建武元年四月七日

明法博士中原朝臣判

左少辨藤原朝臣判

〔集古文書 官牒 二十二〕建武元年雜訴決斷所牒 大隅國噌唹郡臺明寺藏

雜訴決斷所牒　大隅國臺明寺

可令早任先例停止寺内甲乙人亂入猥藉及狩獵莊嚴笛竹抽御祈禱精誠事

牒、任久安六年藏人所外題、建仁二年同所下文、久安天福以來、武家度々下知狀等、停止寺内甲乙人亂入猥藉及狩獵、莊嚴笛竹、可抽御祈禱之精誠之狀、牒送如件、以牒、

建武元年九月十日

左少史主左衞門權少尉高橋朝臣 花押

中納言兼侍從藤原朝臣 花押

前筑後守藤原朝臣 花押

從二位藤原朝臣

左衞門權少尉中原朝臣 花押

正三位藤原朝臣 花押

左衞門權佐兼少納言侍從□□守藤原朝臣

左少辨藤原朝臣

興國元年武者所牒 河内國錦部郡觀心寺藏

武者所牒　河内國

可令爲兵粮料所、令持大和權守廣榮知行當國坂田福正名 二分□□□入道跡 事

右牒送如件、土民宜承知、敢勿違失、以牒、

興國元年八月廿一日　隼人正三善朝臣 花押

權中納言兼右衞門督藤原朝臣 花押　左衞門少尉藤原朝臣 花押

權中納言兼左衞門督藤原朝臣 花押　大判事兼明法博士左衞門少尉坂上大宿禰 花押

私牒

〔藥師院文書〕謹牒上　國師務所

東大寺進納家地五段在於大和國添上郡春日鄉

在物檜皮葺板敷屋壹間　草葺東屋壹間
　　檜皮葺倉壹間　草葺倉壹間

牒、得下身病、幾致死門、加以當□□□出□不便、因茲進納已畢、仍注狀、以謹牒上、

寶龜三年八月十一日　出雲國員外掾正七位上行大宅朝臣船人

〔大橋本東大寺正倉院文書一〕左大臣家〇橘諸兄　牒造東大寺司務所

南海傳壹部四卷

右爲寫、曁間所請如件、今以狀牒、

天平勝寶三年十一月十一日　使檜川內

正六位上守家令勳十二等海犬養宿禰五百依　從七位下守大從平群首國方

別筆判了　墅注今還

判官上毛野君

主典阿刀連酒主

〔本朝文粹十二牒〕勸學會所牒贈日州刺史館下　慶保胤

被分月俸、建立佛堂一字狀

牒、赴任之後、西望不休、筆硯壹觴之遊、思召父而少樂、山花江月之詠、聽杜母而多歎、抑此會草創以降、十一年矣、期有常期、三月九月十五日、處無定處、觀林月林一兩寺、件寺有觸穢故障者、及會日以營求他處、是佛事之耻、緇素之所歎也、去年前甲州司馬刑部良秀、夢中有所示、施入地一處、爰白黑之衆相議、欲結構堂舍、其志有餘、其力不足、方今會之故舊、人數不幾、或是散位、或亦無官、何況黨結之徒、貧而樂道之人而已、彼專一城者、是使君也、而可起小堂者、亦使君哉、仍牒送如件、乞也察之、分以俸祿之餘、

増此土木之資、並報知、顧其輕忽、以牒、

天延二年八月十日　　　黨結故人加署也

勸學會所

來牒一紙〈被殿、欲、分、月俸、學立佛堂一宇、狀、〉

牒、去年衙牒、今日到來、會所堂宇建立之事、宿昔之素懷也、方今盃出、一結之中、適居、分憂之列、官雖、卑小、境雖、凋殘、徴俸薄藏、隨分受之、而政務非、一、土地且荒、左右經營、歲月遷次、今遇、善誘、以慙愧、就中甲州者員外之吏也、猶覺、驚地於夢、下官者舊故之人也、未、割、月俸於秋薹、愚拙之甚也、慚愧之至也、今須、聊分、潤塵之資、誠期、滯岳之報、仍牒送如件、乞也察狀、且勤、勸進、以牒、

天延三年五月十一日　　　　日向守橘朝臣倚平

〔朝野群載七攝關家〕攝政家牒　興福寺

欲、被、納、置黃金十兩出、送光明朱砂十兩、狀

牒、件光明朱砂、合、練紅雪、爲、令、救、療百病、也、○中略是故數代三代良醫之家、經、此一朝、欲、絕之藥、而已、仍牒送如件、乞也察之、欲、被、相替事爲、舊風、非、敢新儀、今勒、事狀、以牒、

正曆三年七月廿八日

令　大　中　臣　朝　臣

別當前紀伊守藤原朝臣

散　位　橘　朝　臣

左　大　史　多　米　朝　臣

〔兵範記〕保元二年八月九日、諸國召物同成牒、加、判令、付、畢、

權大納言家〈○藤原基實、八月十九日任右大臣、〉牒　石見國衙

欲、被、勞送燕鮑、片貝、干鳥、干鯛、朱塗鉢、拾五口狀牒、件貢爲、宛、來十九日大饗用途料、也、九日以前、可

被送之歟、乞衙察狀、任式數、欲被勞送之狀、牒送如件、以牒、

保元二年八月九日　　　　知家事主計允安倍

別當散位高階朝臣

右中辨兼阿波介藤原朝臣

少納言兼侍從平朝臣

僧牒

〔令義解公式七〕移式

刑部省移式部省

某事云々、故移、

年　月　日　錄位姓名

卿位姓

右八省相移式、○中略其僧綱與諸司相報答、亦準此式、以移代牒、署名準省、謂律師以上一人署綱處、佐官署日下也、

三綱亦同、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡諸國講讀師者、寮與僧綱倶孟冬一日簡定牒送省、其牒僧綱壹署、便捺綱所印、但其牒不留寮家、

副寮解送省、省亦加解文、共進官、即經奏聞、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡諸定額寺別當、元來依官符任者、有闕則檀越氏人等、擇定能治可稱之僧、連署陳牒

郡司、郡司牒送講讀師、講讀師修狀、牒送國司、國司申官補任、

〔東寺文書禮〕弘福寺　牒上僧綱所務所

注言上大倭國廣湍郡庄家用口无山等事

合

水田參拾伍町貳段玖拾參步○中略

旡山登廬〇表ミ同郡、中略

牒、依去天平十八年十月十四日僧綱所牒旨、縁起資財等、子細勘錄牒上、同十九年二月十一日畢、而
被同年八月三日重牒偁、田畠條里可注言者、今淡海大津宮御宇天皇水主内親王、以去天平六年歲
次甲戌四月三日、買納賜廣瀨郡水陸田并庄家旡山等是也、因被郡料勘錄言上如前、今具狀謹牒上、

天平貳拾年歲次戊子二月十一日

都維那僧良肇

上座僧林慶

寺主僧神照

〔東大寺小櫃文書上〕香山藥師寺鎭三綱牒　攝津職東生郡務所

賣買庄地立劵事

合地參町貳段肆拾漆步（東限ミ御坐殿西道、南限ミ路、西限ミ谷、北限ミ堀江、）

在彼郡酒人鄕御坐殿村、　價錢漆伯貫文

右、依勅旨省并職牒、充上件錢價直、永爲公地、奉賣既畢、今依式、立劵如前、仍注事狀、以牒、

神護景雲三年九月十一日

都維那傳燈住位僧春幸

上座傳燈滿位僧信忠

寺主脩行進守法師善慧

大鎭兼東大寺寺主脩學進守大法師性泰

少鎭習學入位僧花柏

郡依寺家牒、勘察知實、

擬大領正七位下難破忌寸

擬少領无位日下部忌寸人綱

副擬少領无位日下部忌寸諸前

主帳无位高向毗登眞立

正六位上行少進高志連和万呂

正六位上行少進刑部大山

正七位上行大属大島連高國

攝津職判、依三綱牒、

大夫正五位上百濟王理伯

神護景雲四年四月三日

在職印六所郡印六所

〔東大寺要錄〕六僧綱牒　東大新藥二寺鎭

應割修理東大寺塔寺料封一百戸宛修理新藥師寺封事

牒、玄蕃寮今月九日牒云、省今日符偁、被太政官去二月廿七日符偁、得新藥師寺鎭三綱等牒偁、去天平寶字六年閏十二月十七日有恩勅、使割於東大寺料封一百戸、施入此寺、永供養修造靈塔佛殿僧坊等類料、而造作未畢之間、件封被收公、○中略仍檢案内、太政官寶龜十一年十二月十日下造東大寺司符、被内大臣宣偁、奉勅、去天平寶字四年七月廿三日勅内○内恐誤偁、平城宮御宇後太上天皇皇太后、以去天平勝寶二年二月廿三日入東大寺封五千戸、造寺畢後、種々用米宜分明、今追議定以一千戸爲營修理塔寺、二千戸供養三寶幷常住分、二千戸官家修行諸佛事分者、今被大臣宣偁、奉勅、宜割取營修理塔寺分封一千戸内一百戸、宛修理新藥師寺分、其物實者爲置本倉、臨時下宛、修造之日、令東大寺三綱共知其用度者、宜承知依宣施行者、寮宜承知依宣施行者、今以状牒者、二寺三綱宜承知、牒到准状、故牒、

延暦十二年三月十一日　従儀師

〔朝野群載十七佛事〕諸寺僧牒

東光寺善法三昧院牒　丹波國衙

欲被下行米伍拾貳斛事

牒、當院被國御願定額寺佛聖燈分供養料施入稅帳、使分院油四箇年料、年別十三斛、任済例可被下行之、但至于返料者、見納之日可奉放之狀、牒〇此間恐脱遂字如件、乞也衙察狀、以牒、

承暦四年十一月日　小寺主法師

都維那大法師

檢校大法師

上座大法師

檀越氏人

正四位下行主稅頭兼侍醫丹波權守丹波朝臣雅忠

從四位下主稅權助兼算博士播磨權介三善朝臣

散位從五位上三善朝臣

〔朝野群載十六佛事〕興福寺大衆牒　八幡宮寺衙

欲大安寺本宮神輿令入洛給御共被令供奉神民神寳等狀

牒、當寺大衆爲豪天鐵以來廿二日參洛、總依爲南京之訴、七大諸寺、各奉昇鎭守神輿、可被供奉也、其中大安寺本宮、與石清水宮寺者、雖其處異、同是大菩薩靈廟之地也、其故者、行教和尙爲御影於三衣、先奉崇大安寺中、後奉遷石清水上、崇其神化、同行教和尙之門流、思其玄宗、共法相大乘之學徒、是以本宮懇者宮寺懇也、而今本宮神輿令入洛給之日、宮寺衙豈虛然哉者、乞也衙察狀、早欲神民等相具神寳、被令供奉之狀如件、以牒、

天永四年四月日

石淸水八幡宮護國寺牒　興福寺衙

來牒一紙　載欲大安寺本宮神輿令入洛給御共令供奉神民神寶等狀

牒、今月日牒、同十七日到來、就牒狀考舊貫、天安二年亥冬之頃、水尾天皇有勅、而被差定行侶於宇佐宮之處、大僧都眞雅、以行敎和尙、專奏公家、隨則蒙勅命、參向於彼宮、一夏九旬之勤修、晝夜定時之廻向、殊應神慮、立誓明堅、同七年七月十五日、示現曰、吾深感應汝之修善、不敢忘忽、移座近都、鎭護國家、汝可祈請者、因玆勤上件子細、經奏聞之日、陛下施隨喜之恩詔、降鴻慈之綸言、宜勅木工寮造立六宇御殿、同二年行敎和尙、奉安置三所御體於當山之後、和尙爲佛敎鎭守、移奉崇大安寺、次藥師寺別當榮照大法師、同以奉勸請寺家焉、乍存被殺跡、何被稱本宮哉、若依建立人定本末者、以延曆寺可爲大安寺之末寺、彼傳敎大師、爲大安寺大僧都行敎之弟子故也、兼又宮寺、本自不屬何宗、是以所住學徒、受學法文天台法相二宗、然則當和尙之遠忌、遂本業之龍、所立義科、二宗交雜、抑當宮者、鎭護百王之靈社、彌陀三尊之垂應也、託宣無敬、神慮有恐、今依此寺他社之訴訟、輙動公家奉備之神寶哉、仍勒事狀、以牒、

天永四年四月十八日

〔源平盛衰記十四〕南都山門牒狀等事

法輪院ニハ、警固ノ大衆、主從ノ武士、樣々軍ノ談議評定シケル中ニ、三位入道申ケルハ、合戰ノ習、勢ニハ依ラズ、謀ヲムネトスト申傳タレ共、南都山門ヘ牒狀ヲ遣テ、大衆ヲ召ルベキカト宣フ、中略抑北嶺ハ、圓宗一味ノ學地、南都ハ出家得度ノ戒場也、爲佛法、爲王法、被牒送處ニ、爭カ與力ナカランヤト云ケレバ、尤々ト一同シテ、兩寺ヘ牒狀アリ、先南都ヘ牒送ノ狀ニ云、

園城寺牒　興福寺衙　マラウドキカマド

請殊蒙合力被助當寺佛法破滅狀

右佛法之殊勝、爲護王法也、王法之長久、則依佛法也、而自頃年以來、入道前太政大臣平淸盛、恣竊國威、亂朝政、付內付外、成恨成歎之間、今月十四日夜、一院第二皇子、〇以仁王忽爲免不慮之難、俄所令入寺給也、而重號院宣有可奉出之責、衆徒不能欲惜、而奉惜之處、彼禪門欲入武士於當寺云々、〇中略內助佛法之破滅、外退惡逆之伴類、同心之至、本懷可足、衆徒僉議如此、仍牒送如件、

治承四年五月廿日

小寺主法師成賀
都維那大法師定算
勾當法師忍慶
上座法橋大法師忠成

トゾ書タリケル、興福寺大衆會合僉議シテ、尤同心シテ佛法之助、專令王法惡吟ヲ休メ奉ルベシトテ、道士藏人入道信救ニ仰テ、返牒アルベシト議定畢、又山門ヘモ牒狀ヲ送ケリ、其狀ニ云、

園城寺牒　延暦寺衙マラウドキカマド、

欲殊致合力被助當寺佛法破滅狀

右入道淨海、恣失皇法、又滅佛法、愁歎無極之間、去十四日夜、一院第二皇子、不慮之外、所令入寺給也、〇中略早忘年來之遺恨、必復住山之往昔、衆徒之僉議如斯、仍牒送如件、

治承四年五月廿一日

小寺主法師成賀
都維那大法師定算
寺主大法師忍慶
上座法橋上人位忠成

トゾ書タリケル、山門ノ衆徒、不及返牒ケレ共、先同心參加之由激シク申タリ、

興福寺返牒事

興福寺牒　園城寺衙

被載可相與爲清盛入道欲破滅貴寺佛法由事

來牒一紙

牒、今月廿日牒狀、今日到來、披閲之處、悲喜相交、〇中略況和國南北兩門之衆徒、豈擁謀臣之群類、能固梁園左右之陣、宜待我等進發之告、勤衆議、牒送如件、察狀勿疑殆、故牒、

治承四年五月廿三日　權都維那法師善勝

都維那大法師有實

權寺主大法師俊範

權寺主大法師象清

權上座大法師禪慶

上座法橋上人位俊慶

ト書テ、三井寺ヘ送、又興福寺ヨリ諸寺ヘ牒送ス、

〔雜筆要集〕牒狀樣

紀伊國御莊牒　大和國葛上郡衙

可被早搦送殺害人某身事

牒、去何日貴莊住人某、令殺害當莊散位男ム畢、苟彼ム者、八幡宮神人也、於正八幡宮、伊勢太神宮兩社神人殺害輩者、獄定徒七年、而不出天下大赦、配流則四海外、遠流無期之罪也、速以可被搦送、若及遲引者、經奏聞、付使廳、可令召進也、依牒送如件、乞也衙察狀、敢勿被拘惜、以牒、

年號其月ム日　八幡宮寺領國御莊牒

〔延喜式十二主鈴〕凡〇中略 遣渤海國勅書、太政官牒者、主鈴封之、

〔延喜式十一太政官〕凡蕃客入朝、〇中略 賜太政官牒使各二人、〈史一人、史生一人、臨官使對客館、〉

〔三代實錄二十一清和〕貞觀十四年五月廿五日甲午、勅遣參議右大辨從四位上兼行讃岐守藤原朝臣家宗、從四位上行右近衛中將兼行阿波守源朝臣舒、從六位下守大内記大江朝臣公幹於鴻臚館、賜勅書、從五位上行少納言兼侍從和氣朝臣彝範、正五位下守右中辨藤原朝臣良近、左大史正六位上大春日朝臣安守、付太政官牒、大使已下再拜舞踏、大使〇中略 楊成規膝行而進、北向跪、受勅書太政官牒函、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年五月十二日丁丑、渤海客徒歸蕃、是日〇中略 正五位下行太皇太后宮權亮平朝臣惟範、從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸房、從六位上守右少史秦宿禰安兄、付太政官牒、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜八年五月十五日、蕃客朝集堂、〇中略 使右中辨清貫少納言玄上、給官牒、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿三年九月己丑、遣兵部少丞正六位上大伴宿禰岑萬里於新羅國、太政官牒曰、遣使唐國、脩聘之状、去年令太宰府送消息訖、時無風信、遂變炎涼、去七月初、四船入海、而兩船遭風漂迴、二船未審到處、即量風勢、定著新羅、仍遣兵部省少丞正六位上大伴宿禰岑萬里等尋訪、若有漂著、宜隨事資給令得還鄕、不到彼堺、冝遣使入唐、訪覓具報、

〔本朝文粹十二牒〕贈渤海國中臺省牒　紀納言〈長谷雄〉

入覲使文籍院少監王龜謀等一百五人

牒、得彼省牒偁、奉處分來、若不往則乖禮、猶大方不孤、只雖闕講約、豈乃不以守其盛風、而呈此敦誠、肆月盡推年足行遍漢、已近循制之限、將投滿紀之期、遣書一封、常企踵於下國、思緒萬戀、久馳心於中朝、思仰舊規、聯奉貴德、沉海而不思遙闊、梯航而爭勤經過、空望雲霄、無因展謁、謹差文籍院少監王龜謀等人覲貴國、令者前蹤、者國之典故、理宜率由、來非其期、待以何事、既無地于送貢、豈不時而備儀、所司

議成、從境放却、但龜謀等、業依風濤、身苦浪花、雖秋鴈蕊知候之賓、而寒松全守貞之節、仍命州吏、造船給粮、相善之數、以此可量、事須起推算於當年、申尋好於後紀、不是新制、亦有舊章、專顧異時之蹤、勿違舊制之限、過而重過、奈禮云何、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

年月日

〔本朝續文粹十一牒〕日本國太宰府牒　高麗國禮賓省

却廻方物等事

牒、得彼省牒偁、當省伏奉聖旨、訪聞貴國有能理療風疾醫人、今因商客王則貞廻歸次、仰因便通牒、及於王則貞處、說示風疾緣由、請彼處擇上等醫人、於來年早春、發送到來、理療風疾、若見功効、定不輕酬者、今先送華錦及大綾、中綾各一十段、麝香一十臍、分附王則貞、賫持將去、知太宰府官員處、且充信義、到可收領者、牒具如前、當省所奉、聖旨、備錄在前、請貴府有端的能療風疾好醫人、許容發送到來、仍收領匹段麝香、如牒者、貴國惟盟之後、數逾千祀、和親之義、長垂百王、方今犯霧露於燕寢之中、求醫療於鯨波之外、望風懷想、能不依々、抑牒狀之詞、頗睽故事、改處分而曰聖旨、非蕃王可稱、宅遐陬而踰上邦、誠非倫攸斁、況亦託商人之旅艇、寄殊俗之單書、執圭之使不到、封函之禮既虧、雙魚猶難達鳳池之月、扁鵲何得入鷄林之雲、凡厥方物、皆從却廻、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

承曆四年月日野○又見朝野群載

○按ズルニ、此返牒ノ事ハ、外交部後高麗篇通交條ニ詳ナリ、

〔本朝文粹十二牒〕牒大宋國抗州奉先寺傳天台智者敎講經論和尙　江匡衡

大宋至道元年四月日牒封、故座主權僧正暹賀領掌、未及報陳、遽以即世矣、覺慶偏以年臈猥得領衆、繼彼前好、寫我短懷、雖無傾蓋之昵語、自諳動履之德音、梵志之求道十二年、師及二十年、智者之閱經十五遍、師及五十遍、靜言思之、匪直也人、見贈法華宗珠指二卷、龍女成佛義一卷、十六觀經記二卷、佛

圓莊嚴論一卷、心印銘一章、見斯文之彰外、知其才之張中、文章六七、聊有注出、不敢加雌黃、唯是展情緒、爰見求仁王般若經疏、彌勒成佛經疏、小彌陀經疏、幷決疑、金光明經玄義、荊溪然禪師所撰華嚴骨目、其有則繕寫、無則闕如、目錄在別、不更委注、便附題信、到宜撿領、僧龍之淵、法水更挹東流、義虎之發、智風盡振上葉、投玉簡而增日域之光曜、開石函而補天台之闕文、中國之遠求有感哉、臨白首而始知、惟隔面於鯨波萬里之外、仰玄趾而遙矣、願促膝於龍華三會之朝、援筆潸然、珍重再拜、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

月日　日本國天台座主阿闍梨僧正法印大和尚位覺慶

報在唐僧牒

〔菅家文章 十牒狀〕牒、勅爲太政官報在唐僧中瓘牒

太政官牒在唐僧中瓘報上表狀

牒、奉勅、省中瓘表悉之、久阻兵亂、今稍安和、一書數行、先憂後喜、臘源茶等、准狀領受、誠之爲深、溟海如淺、來狀云、溫州刺史朱褒、特發人信、遠投東國、波浪渺焉、雖感宿懷、稽之舊典、奈容納何、不敢固疑、中瓘消息、事理所至、欲罷不能、如聞商人說大唐事之次、多云、賊寇以來十有餘年、朱褒獨全所部、天子特愛忠勤、事之髣髴也、雖得由緒於風聞、苟爲人君者、孰不傾耳以悅之、儀制有限、言申志屈、迎送之中、披陳旨趣、又頃年頻災、資具難備、而朝儀已定、欲發使者、辨整之間、或延年月、大官有問、得意敍之者、准勅牒送、宜知此意、沙金一百五十小兩、以賜中瓘、雖庵衣鉢、適支分銖、故牒、

寬平六年七月廿二日左大史云々

〔扶桑略記 二十三裏書〕延喜九年二月十七日癸丑、於辨官結政、令請印遣在唐僧中瓘牒狀、外記印受入函書封、

詐爲官牒

〔法曹至要抄 上〕一作官文書事

詐僞律云、詐爲官文書者、杖一百注云、符、移、解、牒之類、

雜載

〔春記〕長暦三年十二月五日辛酉、早旦參御前奏云、使平朝臣來七日參齋宮、往還間、可給藏人所牒之由所申也、仰云、雖地下人、或向溫泉之輩、給所牒是例也、何況參齋宮之人、是如公事也、早觸關白可左右者、

移

移トハ、諸司事ヲ錄シテ、互ニ往復スル書ヲ云フ、文武天皇ノ令ヲ制スルニ至リテ、始テ其書式ヲ定ム、而シテ內外ノ諸司、管隷スルニ非レバ、悉ク移ヲ爲ラシム、其省ノ事ヲ移送スルニハ、先ヅ移スベキ省名ヲ注シ、次ニ其事ヲ記シ、文尾ニ故移ト云フ、又年月日ノ下ニ、錄ノ位姓名ヲ注シ、次行ノ上頭ニ、卿ノ位姓ヲ注シ、省印ヲ踏ス、自餘ノ移式、總テ之ニ準ズ、而シテ文官ノ式部ニ於ケル、武官ノ兵部ニ於ケルガ如キ、事ニ因テ管隷スルモノハ、文尾ニ、故移ニ代フルニ以移ヲ以テス、其被官ノ寮司ニ送ル移文ハ、主計主稅ノ二寮ヲ除クノ外ハ、必ズ總省ヲ經テ之ヲ送ラシメタリ、

名稱

〔類聚名義抄 七禾〕移（弋支反　ウツス　ハカル）

〔唐六典 一尚書都省〕諸司自相質問、其義有三、曰（中略）移、（中略）移謂移其事於他司、移則通判之官皆連署、

〔文選 四十三書〕北山移文一首

孔徳璋（善曰、仕至詹事、餘同向注、向曰、蕭子顯齊書云、孔稚珪、字徳璋、會稽人也、少渉學有美譽、仕至太子詹事、鍾山在都北、其先周彦倫隱於此山、後應詔出爲海鹽縣令、欲却過此山、孔生乃假山靈之意、移之使不許再至、故云北山移文、）

移式

〔令義解 七公式〕移式

刑部省移式部省、

某事云々、故移、

年月日　　録位姓名

卿位姓

右八省相移式、内外諸司非相管隷者、皆爲移、謂此如彈府、京職、兵庫等之類、既无所管、是爲非相管隷、其太宰向省、及管内向太宰、皆爲解、以外皆爲移、凡被管者、不得以移直向他司、皆先申所管、所管更移、向他司、其出符亦准此、但進國司人者、不由所管、直向他司、使准據官符因得對問者、雖職不相管、皆聽直牒通移、故也、若因事管隷者、謂八省及内外諸司、因事相管隷者、假令文官於式部、武官於兵部之類也、是爲因事管隷也、以以代故、其長官署準此、謂此長官名、是五位以上長官、若判官主典署五位名、亦須略名、但不得署於行上、既云長官署準、則六位之長官、亦得署行上、但不須略名、何者、准令、五位以上、有略名之式、判官以下、无署上之法、故也、

長官無、則次官判官署、國亦準此、

〔令抄公式〕移式　同前之體也

〔延喜式二十八兵部〕凡補武官番上以上者、移送本司、其式如左、

兵部省移某司、

位姓名年若干某國某郡人　元某司某官

右人、某月日、任若番上者稱補、某司某官訖、仍移送如件、移到任用、故移、

年月日　　録位姓名

輔位姓

右署印訖、即送本司、

〔延喜式十八式部〕凡解移者、進太政官及辨官、令錄申送、諸司移文、令史生送、

〔延喜式五十雜〕凡解移者、史生以上、隨狀送之、

〔延喜式二十三民部〕凡諸司觸事、移主計主稅寮者、不經省直送、

移様印

移例故移

〔令義解公式七〕諸司印（謂、省、臺、寮、司等、各皆有印也、）方二寸二分、上官公文及案移牒則印、

〔續修東大寺正倉院文書十六〕皇后宮職移　兵部省

史生大初位上將軍陽生　上日肆拾壹

寫紙壹伯玖拾張

右起去年八月十日盡九月廿一日、上日并寫紙如件、今錄狀故移、

天平七年八月九日　少屬從八位下大藏忌寸

正六位上行大進勳十二等安宿首

〔續修東大寺正倉院文書十六〕圖書寮移　造東大寺司

藥師經玖拾卷（卌卷、白紙、縹表紫檀軸、綺緒、五十卷、黃紙及表朱頂軸、綺緒、）綵帙玖拾枚、（緋裹錦緑袋帶）納明櫃一合、

右件經、依板野命婦宣奉請如件、故移、

天平勝寶六年十二月十三日　從七位上行少屬土師宿禰國勝

〔續修東大寺正倉院文書三十六〕造東大寺司移左京職

左大舍人大初位下土師宿禰志太流

中宮舍人少初位上葛井連荒海

右比來事繁、屢請過所、然此司作物太忙、不堪移書、仍今以件人、永爲請過所使、乞職察狀、自今已後、使至處分、故移、

天平寶字二年五月廿四日　主典從七位上葛井連

判官正六位下上毛野君

〔續々修東大寺正倉院文書十八帙六裏書〕造東大寺司移義部省

中解部從六位上韓國毛人

以移

史生大初位上韓國千村

右人、預事寫勅旨經、身在寺家、緣促期限、考唱之庭、不得參向、今具事狀、故移、

天平寶字二年十月十日　主典正八位上安都宿禰

次官從五位下高麗

〔朝野群載廿一〕撿非違使移　山陽南海兩道國衙

欲被令備前守平忠盛朝臣搦進海賊事

右院宣偁、如聞者、頃日海路之間、凶賊滋蔓、乘數十艘之船、浮百萬里之波、或殺略往返之旅客、或劫奪公私之財物、積惡彌長、宿暴日成、寔惟諸國司等、各憚驍勇、無心捉搦之所致也、宜令忠盛朝臣搦進件黨者、早欲被任院宣、令搦進賊徒之狀、依別當宣、移送如件、乞也衙察狀、故移、

大治四年三月日　正六位上行右衛門尉明法博士中原朝臣明兼

從五位下行右衛門少尉源朝臣輔遠

〔續修東大寺正倉院文書十五〕右馬寮移　民部省

合米拾漆斛玖斗捌升　別二升

鹽壹斗漆升捌合　別二勺

布參拾段　別一段

右直丁二人、驅使丁卅九人、厩卅人、合六十一人料、

以前、來五月卅九箇日料粮、所請如件、以移、

天平十七年四月廿一日　從八位上行少屬縣犬養宿禰時足

〔續修東大寺正倉院文書十五〕右兵庫移　民部省

所請米壹斛貳斗　鹽壹升貳合　綿肆屯

右直丁立丁貳人、厮丁貳人、合肆人、（立丁人別米二升、鹽二勺、厮丁人別綿七屯、）
以前直丁等、來十一月卅日料粮、具顯如件、以移、
天平十七年十月廿一日　正八位下行少屬阿刀造濱主
大允正七位下勳十二等民伊美吉古麿

〔續修東大寺正倉院文書三十六〕造東寺司移式部省
合參人
无位道守臣君麻呂（上日廿五、寫紙一百七十五張）
无位秦姿子（上日廿五、寫紙一百七十六張）
右二人書生
大初位下佐太忌寸橘（上日廿五、寫紙一百七十五張）
右一人留省
以前人等、起去七月五日、盡廿九日、上日幷行事如件、以移、
天平寶字二年八月十八日　主典正八位上安都宿禰雄足
次官從五位下高麗朝臣

〔朝野群載二十二諸國雜事〕上野國移　武藏國衙
來牒壹紙
被載可糺定穀倉院藤崎庄所領田畠四至子細事
右去二月十九日移、今月二日到來偁云々者、依來移旨、撿舊例、件田畠爲管邑樂郡所領、經數代矣、而今幷彼庄所領內、可糺定之由、其理難決、仍移送如件、因乞察狀、移到准狀、以移、
長和四年三月四日

〔朝野群載 二十二 諸國公文〕主計寮移　主稅寮

勘送相摸國年々正稅交易雜物事

治暦三年料

交易調布仟伍佰端

商布陸仟伍佰端　糸緂拾具

紅花拾漆斤　鹿皮貳拾張

鹿革貳拾枚　鹿角拾枚

御履牛皮拾伍枚　鳩子肆合

紫草参仟漆佰斤　筆佰管

豉参斗伍升　繋飼馬肆疋

間牛櫛頭

右被寮送移偁、被彼國稅帳、顧有物疑者、被件國年々調帳、所注如件、以移、

永保　年　月日　正六位上行膳

正六位上行允

〔朝野群載 六 神祇官〕神祇官移　遠江國

應令以清原則房、補任小國神社主、執行社務事、

右人任相傳理、充補彼社神主職、依例移送如件、國察此狀、以件則房、令執行社務、以移、

永保二年十月十七日　正六位上行權少史伊岐宿禰

正六位上行權大祐卜部宿禰

從四位上行伯　判王

詐僞移

〔朝野群載八別奏〕式部省移　民部省

和泉國權任國司以下等事

天永元年　同二年　同三年　永久元年

右權任國司以下等、依例移送如件、以移、

永久元年十二月日

正六位上行少錄中原朝臣章永

正六位上行大丞源朝臣雅光

〔法曹至要抄上〕一作官文書事

詐僞律云、詐爲官文書者、杖一百、注云、符、移、解、牒之類、

古事類苑

政治部九

上編

封事

封事トハ、意見ヲ書シ、之ヲ密封シテ上ルヲ云フ、其起原ハ詳ナラザレドモ、大寶令ニ、既ニ其制ヲ舉ゲタリ、是ヨリ後ニ封事定起リテ、朝廷臨時ノ儀式ト爲ル、

封事定ノ大略ハ、凡ソ邦家ニ大事アルトキハ、或ハ先ヅ求言ノ詔書ヲ降シ、公卿、諸道博士、諸司長官等ヲシテ封事ヲ獻ゼシム、獻ジ畢レバ、獻者ノ名ヲ截リ棄テ、之ヲ朝議ニ付ス、是ニ於テ諸卿遞傳ニ讀キテ其可否ヲ議定シ、採用スベキ者ニハ其旨ヲ注記シ、更ニ封ヲ加ヘテ奏上ス、延喜ノ朝ニ於ケル三善淸行ノ意見十二箇條、天曆ノ朝ニ於ケル菅原文時ノ封事三箇條ノ如キ、以テ我國封事ノ體裁ヲ觀ルベシ、

名稱

〔類聚名物考政事一〕封事　朝廷へ國のためよかるべきことを申上るを意見封事と云、本朝文粹にその文あり、

〔漢書五十一路溫舒傳〕路溫舒字長君、鉅鹿東里人也、○中略溫舒從祖父受曆數天文、以爲漢厄三七之間、上封事以豫戒、

〔文體明辨二十六奏疏〕按奏疏者、群臣論諫之總名也、○中略又曰八儀、密奏陰陽皂囊封板、以防宣泄、謂之封事、而朝臣補外、天子使人受所欲言、及有事下議者、並以書對、則漢之制、

〔年中行事歌合〕四十七番　右　封事

女房

封事定

木にをるし鼓をならすいにしへも猶あやまりや有世なりけん○（中略）

右はさせる事なきもろこしの事を申出したるにも、いと詮なく侍、堯は誹謗木とて、あやまりあれば、萬の物木に書付たる也、其を御覽じて、御政をなをされけるとかや、又諫鼓をきて、あしき政あれば、是をうちて諫め申けることも侍けるにや、封事と申は、天子の政のたがへるに、諫言を奉るにてあれば、難題に付て、か樣の事共取出しける、彌かたはらいたくこそ侍れ、

〔令義解公式七〕凡有事陳意見（謂意者、心所意也、見者、目所見也、皆是志在忠正、披陳國家之利害者也、凡意見書者、其製稍異、不可爲奏、而直上太政官、不由中務省、故云少納言受）欲封進者、卽任封上、少納言受得奏聞、不須開看、若告言官人害政、及有抑屈者、彈正受推（謂於意見書有得奏聞也、所告言者、其意見書皆先奏聞、然後聞事各下所司也、）當理奏聞、（謂案奏彈式、非應奏、及六位以下、並糺移所司推糺、但於此條者、元非重所彈奏、又既先經奏聞、故雖五位以上、不至解官、及六位以下而其所告言、）不當理者彈之、（謂所告言无理、及事不實者、並皆彈正准狀推決、但徒以上者、可送刑部、理者、並皆奏聞也、）

凡諸司奏事、皆不經長官不得輒奏、若有機密、（謂應以機密事申奏者、不必經長官得直申奏、）及論長官事者、（謂此亦機密事）不在此例、

〔新儀式五臨時〕封事事

先降詔書令獻封事、（或令王卿大夫、內外官長、諸道博士、秀才、明經課試及第者進之、）獻畢、切棄其名下給、諸卿定之、若不進獻、立科責之、注貳「□」

〔西宮記臨時六〕一定封事

詔書出後、封事進外記、上卿令辨奏聞、定日告諸卿、設座宜陽殿、上卿以下著陣、諸卿著宜陽殿、仰外記令進封事、置大中納言座間、（入筥、件封事於御所切除年月日官姓名、以同事續寄一所下給也、）大臣仰大辨令讀之、（大辨立本座、進居封事之筥下、別不設座、）令進硯紙、每一條讀畢、諸卿議定可否、其可採用者註記其旨、數條定畢、年月日幷見參公卿等同記了、加封可奏歟、

御前定

公卿座如除目時、無大臣圓座、只以圓座一枚置大臣座前簾下、大臣以下被召參上著座、召封事筥、

令讀圓座前、大臣召堪事參議一人、參議著御前圓座、披文把笏一々讀申、每一條議舉、諸卿定其旨、

大辨執筆記了、參議取宮退下、其宮不封、以木釘打上下、表書云、其官其人進云々、

〔北山抄〕四拾遺雜抄 定封事事

公卿、諸道博士、諸司長官、諸國受領等、依詔上之、(入函以木釘打上下、凡表書云、其官其人進云々、)議定之時、御座不改尋常、公卿座如除目時、但無大臣圓座、只以圓座一枚置大臣座前簾下、大臣奉勅、仰外記令進封事函、(置笥進之、)令藏人若殿上辨奏、公卿依召參上、先召封事、(於御前切斧年月人名、)即召堪事參議一人令讀之、參議披文隨讀申、諸卿從上定其可不、參議一人記否所申舉、參議取封事宮退下、大臣以下又退、(吏部王記云、其書不封、納以朴木函、以中封之、兩頭加木釘、紙封、凡封下題云、品官臣某親王上、封事以前之狀上以一昇、覽後上封事由并題辭、文、讀時朝臣所奏云、先例如此、)於宜陽殿議定時、仰外記令進封事宮、即置大中納言座間、參議進下宮讀之、別不設其座、

〔三代實錄〕十一清和 貞觀七年六月五日甲寅、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗上疏言、氏宗忝以暗昧、偏列槐棘、負荷之憂、寤寐無息、日者降詔、令進意見、公卿宰相、儒官賢士、每各盡忠、盡誠陳上、深謀遠慮、受下公卿、更相評議、日月荏苒、遂爲矛盾、知恐評議之上、更有後(○後字類聚國史作復、)議之勞、氏宗無計慮情之不及、謬許一兩人奏狀、(○奏狀二字、依類聚國史改、)再三懷愧、遂無所裨、今望、諸臣所進意見奏狀中、先擇要切、且以施行、皆是抄出古典、無言非道、稍隨時宜、遂盡其志、議勒管見、俯待取捨、

〔北山抄〕四拾遺雜抄 定封事事

首註 闕記(○吏部王記)云、天慶七年八月三日、上封事、令兵庫頭源朝臣忠幹付之外記、

〔貞信公記〕天慶八年二月十九日、去年所進諸大夫封事、諸卿定申、付中將返奉、

〔九暦〕天德元年四月五日、封事定事、(儀)

〔日本紀略〕四村上 天德元年十月十四日丁卯、於宜陽殿被定封事、

應和二年二月十九日丁未、定封事、　三月五日壬戌、定封事、

求意見

康保二年二月廿九日庚午、諸卿於宜陽殿定封事、　三年六月廿三日丙辰、定封事、

〔日本書紀孝徳二十五〕大化元年七月己卯、詔阿部倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等以悅使民之路、　二年二月甲午朔、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等臣連國造、伴造、及諸百姓、朕聞、明哲之御民者、懸鍾於門、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻蕘之說、親問爲師、由是、朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道、而來諫者也、皆所以廣詢于下也、管子曰、黃帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌、而主不蔽也、禹立建鼓於朝、而備訊望也、湯有總術之廷、以觀民非也、武王有靈臺之囿、而賢者進也、此故聖帝明王、所以有而勿失、得而勿亡也、所以懸鍾設匱、拜收表人、使憂諫人納表于匱、詔收表人、每旦奏請、朕得奏請、仍又示群卿、便使勘當、庶無留滯、如群卿等、或懈怠不懃、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、當可撞鍾、詔已如此、既而有民明直心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表偁、緣奉國政、致於京民、官官留使於雜役云々、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使、而强役之、每念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷處々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題不諫朕廢忘、

〔日本書紀天武二十九〕九年十一月戊寅、詔百官曰、若有利國家寬百姓之術者、詣闕親申、則詞合於理、立爲法則、　十年十月庚寅、詔曰、大山位以下、小建以上人等、各述意見、

〔續日本紀元正八〕養老五年正月甲戌、詔曰、至公無私、國士之常風、以忠事君、臣子之恆道焉、當須各勤所職、退食自公、康哉之歌不遠、隆平之基斯在、災異消上、休徵叶下、宜文武庶僚、自今以去、若有風雨雷震之異、各存極言忠正之志、　二月癸巳、日暈、如白虹貫暈、南北有珥、因召見左右大辨及八省卿等於殿前、詔曰、朕德菲薄、導民不明、夙興以求、夜寐以思、身居紫宮、心在黔首、無委卿等、何化天下、國家之事、有益萬機、必可奏聞、如有不納、重爲極諫、汝無面從退有後言、

〔續日本紀八元正〕養老五年二月甲午，詔曰，世諺曰，歲在申年，常有事故，此如所言，去庚申年，咎徵屢見，水旱並臻，平民流沒，秋稼不登，國家騷然，萬姓苦勞，遂則朝庭儀表，藤原大臣不比等，奄焉薨逝，朕心哀慟，今亦去年災異之餘，延及今歲，亦猶風雲氣色，有違于常，朕心恐懼，日夜不休，然聞之舊典，王者政令，不便事，天地譴責，以示咎徵，或有不善，則致之異乎，今汝臣等位高任大，豈得不罄忠情乎，故有政令不便事，悉陳无諱，直言盡意，无有所隱，朕將親覽，於是公卿等奉勅詔，退各仰屬司，令言意見，

〔續日本紀十聖武〕神龜四年二月甲子，天皇御內安殿，詔召入文武百寮主典已上，左大臣正二位長屋王宣勅曰，比者咎徵荐臻，災氣不止，如聞時政違乖，民情愁怨，天地告譴，鬼神見異，朕施德不明，仍有懈缺，耶，將百寮官人不勤奉公耶，身隔九重，多未詳委，宜令其諸司長官，精擇當司主典已上，勞心公務，淸勤著聞者，心挾姧僞，不供其職者，如此二色，具名奏聞，其善者量與昇進，其惡者隨狀貶黜，宜莫隱諱，副朕意焉，

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年五月甲戌，勅曰，朕以寡昧，欽承聖烈，君臨六合，子育兆民，見一物之或違，傷愛心之未洽，聞萬方之有罪，想湯責而多愧，而今大亂已平，逆臣遠竄，然猶天災屢見，水異頻臻，竊恐聽昜隔於黎元，人含冤枉，譽聲罔於宇宙，家懷怨憂，庶欲博採嘉言，傍詢妙略，澂衆智而益國，擄群明以利人，宜令百官五位已上，緇徒師位以上，悉書意見，密封奏表，直言正對，勿有隱諱，朕與宰相審簡可否，不須詐稱病，苟竊取容，面弗背陳，退還後毀，普告遐邇，知朕意焉，

〔三代實錄六淸和〕貞觀四年四月十五日癸丑，是日下詔曰，朕聞，自古聖明之君，以堯舜爲稱首，然猶諫鼓謗木，設之於朝，又俾大禹皐陶，盡其誠欵，蓋以萬機之盛，非廣詢難以興功，四海之尊，非下問無以成化也，朕以虛薄，嗣守鴻基，恐謝徇齊，業慙迪哲，實賴賢輔之保化，將以扶己而仰成，然運接百代之叔末，時遇萬邦之凋殘，即位以還，五年于茲，徒聞府帑空竭，經用不支，貢賦逋懸，吏人嗟歎，未得所以救之要術，昔神農氏世衰，天下倒懸，黃帝代以修德，陛垂衣之化，殷暴辛政亂，百姓塗炭，周興成康之時，至刑措而

不用、是以古不常淳、今不常薄、唯在君臣善惡、政教得失而已、若能群臣大小、戮力傾心、務求政美、匡拂朝家、訓導黎庶、則國富刑清、時和歲阜、醨變爲樸、僞反爲眞、即東戸季子之代、遂何遠之有矣、宜參議已上各論時政之是非、詳世俗之得失、傷化害人、不便於時者、節用謹度、當利於國者、並盡昌言、以沃朕心、勿爲華飾、勿有隱諱、

〔貞信公記〕延喜十四年二月十五日、可奉封事詔書出、其儀陣頭內記書之上奏、御畫□了、給中務少輔朝見、詔書入內記所草、朝見捧宮迎、　十九日、詔書覆奏、其儀、外記以中務所入詔書奉覽上、上覽返給、即判書狀候上立軒廊轉執付內侍奏、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶五年三月十四日戊辰、詔令公卿大夫及京官外國五位已上、職居官長、秀才明經、課試及第、名爲儒士、各上封事、指陳得失、　七年正月廿八日辛丑、詔令進意見、

〔類聚符宣抄 六〕可奉封事事　太政官符五畿內七道諸國司

應下詔書事

右今月廿日詔偁、自古之論明王聖世者、莫不稱戴日之后引叢風之朝矣、然置鼓傾耳、求聞諫諍之聲、建木虛心、思見謗議之色、朕以眇身、謬膺鴻慶、雖受照華之寶、未改昧非之懷、故馭俗九年、猶迷衡軛之內、涉道半日、唯濟舟楫之間、遂無德之動天、亦非仁之被物、爰陰陽難和、貢賦易闕、帑藏自乏、榮辱之主、康衢久絕治安之謠、況乎新羅供養、彌勞撲賜、昔漢章之長者、先想巖穴之說、今殷憂之寡人、宜佇藥石之言、宜令公卿大夫、及京官外國五位已上、職居官長、秀才明經課試及第、名爲儒士、各上封事、遞陳得失、凡厥法令之不便於時、勿有所諱、政教之有助於化、皆復不遺、深存有犯無隱之義、抱效益國利民之謀、詞拂浮華、理拾簡實、永忘面從之意、不吐膚受之談、庶得忠讜、以補要術、主者施行者、諸國承知、符到奉行、

從五位上守權右中辨兼大學頭藤原朝臣國光

左大史正六位上兼行春宮大屬惟宗宿禰維宗

天曆八年七月廿八日

〔日本紀略 六圓融〕天延三年八月十日、詔令公卿以下各上封事、

〔日本紀略 八花山〕永觀二年十二月廿八日癸卯、詔令公卿大夫及京官外國五位以上、職居官長、秀才明經、課試及第、名爲儒士者、各上封事、依水旱之災也、

〔本朝文粹 二詔〕令上封事詔　慶保胤

詔、一人之耳、不能盡聽天下、一人之目、不得廣視域中、是以古之王者、或問謗譽於途、有邪必正、或採嚬言於市、有善則行、朕任東闈十餘年、猶當少日、臨北闕四五月、懃親萬機、朕粗聞前事、彌欲後治、頃年蒼蒼、屢降水旱之災、元元勤勞土木之役、倉廩已竭、田園自荒、遊手浮食者多、好儉處約者少、書曰、木從繩則正、后從諫則聖、夫人主者以納諫爲先、人臣者以進言爲任、彼廣德之戒樓船、終就其安、朱雲之折殿檻、永令無瑕、且夫國之將興也、上下發昏、國之將廢也、道路以目、至如破家爲國、而折尸諫者、是朕之願也、於戲莫高澆季之俗、試忘身而扶之、莫言疲極之民、强勠力而濟之、人和天且和、民足君可足、昔少平公問叔向曰、國之患孰爲大、對曰大臣重祿不諫、小臣畏罪不言、下情不上通、此患之大者也、竊而思之、誠哉斯言、宜令公卿大夫及京官外國五位以上、職居官長、秀才明經、課試及第、名爲儒士者、各上封事、匡朕不逮、卿等自盡中心、廣詢衆庶、不失芻蕘忘諱之說、莫遺匹夫炙背之誠、凡厥國之利害、政之得失、盡露其膽、以扶朕心、旣容不諱之詞、欲聞無隱之議、主者施行、

永觀二年十二月二十八日

〔日本紀略 一九一條〕永延元年七月廿八日己丑、今日詔、公卿等令上封事、依天變旱災也、〇又見扶桑略記、

〔百練抄 七近衞〕久安元年四月廿五日、依彗星變召勘政意見於公卿八人、〇下略

〔平戶記〕寬元三年四月廿五日己丑、今日被下封事詔書云々、左大臣〇藤原實經著仗座、召大内記在宗被

奏論政要

仰云々、藤宰相、左大弁、新宰相同著云々、詔、朕聞、人欲自照、必須明鏡、主欲知過、必藉忠臣、雖堯舜禹湯文武之君、諮稷契皐陶伊呂之臣、其君隨諫而聖也、其臣無諂而直也、社稷因茲安全、寰海因茲静謐、朕以眇身、謬備元首、親万機之政、迄四廻之年、德不合天、天頻有變、化不合地、地屢有震、咎徴雖間至、祥瑞更不聞、況亦帑藏猶空、乏万國之貢珍、邦家未治、愍百姓之凋弊、倩思治績、猶勞叡襟、輔朕之不逮、寓臣之極諫、宜令參議已上各上封事、凡厥法令之不便於事、勿有所諱、政教之爲助於化、勿有所除、有犯無隱之儀、唯盡益國利民之謀、詞嫌浮花、理納要實、益得忠實、早沃朕之意、主者施行、

寛元三年四月廿五日

〔吉續記〕文永十年四月廿三日、今夕有封事宣下事、一上（〇藤原家經）、令參陣給、右宰相中將、新宰相等同候仗座云々、頭内藏頭奉行也、大内記在守草詔書、隨傳聞記之、

詔、我朝之言聖代者、莫不謂延喜之治、稱天暦之事、然猶屈明問化、焦思於淳素之風、虚心求規、側耳於守文之日、朕以不敏、謬受洪緒、德義疎兮十四年、唯任萬機於諮詢、信默過兮一兩月、悉親二柄於眇末、譬猶欲涉淵水、未知所濟、爰彗客春見示奇合之徴、坤儀夏震、催厚德之應、是朕政之有闕歟、若民心之未嚥歟、況頃者陰陽失節、水旱不時、雖有帑藏之名、更無貢賦之實、庶官常乏榮辱之主、兆民併爲游惰之輩、但行帝道則帝、行王道則王、莫謂澆訛之時、聚脣議之、莫謂疲弊之國、勠力救之、古不曰乎、天時不如地利、地利不如人和、宜令公卿大夫、京官外國五位已上、職居官長、秀才明經、課試及第、名爲儒士、各上封事、極諫得失、凡號令之不便於時、言而無諱、政化之有益於國、犯而莫隱、庶得忠讜、以匡政術、主者施行、

文永十年四月廿三日　御畫

作者大内記菅在守

〔日本書紀二十五孝徳〕大化元年七月戊寅、天皇詔阿倍倉梯萬侶大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、當遵上古聖王之跡、而治天下、復當有信、可治天下、己卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問

大夫與百伴造等、以悦使民之路、庚辰、蘇我石川麻呂大臣奏曰、先以祭鎭神祇、然後應議政事、

(續日本紀二十二淳仁)天平寶字三年六月丙辰、是日百官及師位僧等、奉去五月九日勅、各上封事、以陳得失、正三位中納言兼文部卿神祇伯勳十二等石川朝臣年足奏曰、臣聞、治官之本、要據律令、爲政之宗、則須格式、方今科條之禁、雖著篇簡、別式之文、未有制作、伏乞作別式、與律令並行、參議從三位出雲守文室眞人智努、及少僧都慈訓奏、伏見天下諸寺、毎年正月悔過、稍乖聖願、終非功德、何者修行護國、僧尼之道、而今或曾不入寺、計官供於七日、或貪規兼得、著空名於兩處、由斯讖及三寶、無益施主、伏願自今以後、停官布施、令彼貪僧無所希望、參議從三位氷上眞人鹽燒奏、臣伏見、三世王已下、給春秋祿者、是矜王親、而今計上日、不與臣姓、伏乞、依令優給、勿求上日、播磨大掾正六位上山田連古麻呂奏、臣竊見、正丁百姓生五男已上、其年並登廿已上、乃輸庸調、父子倶從課役、臣謂、合有優矜、伏乞、庶民生丁男五口已上者、免其課役、並付所司施行、其緇侶意見、略據漢風、施於我俗、事多不穩、雖下官符、不行於世、故不具載、

(續日本紀二十四淳仁)天平寶字六年九月乙巳、御史大夫正三位兼文部卿神祇伯勳十二等石河朝臣年足薨、〇中略寶字二年授正三位、轉御史大夫、時勅公卿各言意見、仍上便宜、作別式二十卷、各以其政繫於本司、雖未施行、頗有據用焉、

(類聚國史百四十七文)延曆十九年二月戊寅、右中弁從四位下橘朝臣入居卒云々、屢上書言便宜、事多稗益、徵爲右中弁、所言政務、甚被省納、奏撰刪定令、

(類聚三代格七)太政官符

一擇良吏事

右撿右大臣(冬嗣)奏狀偁、臣聞、登賢委任、爲化之大方、審官授才、經國之要務、今諸國牧宰、或欲崇修治化、樹之風聲、則拘於法律、不得馳騁、郡國殄瘁、職此之由、伏望妙簡淸公美才、以任諸國守介、其

新除守介、則特賜引見、勸喩治方、因加賞物、既而政績有著、加增寵爵、公卿有闕、隨即擢用、又反經制宜、勤不爲己者、將從寬恕、無拘文法者、依奏、

一遣巡察使事

右同前奏狀偁、古者分遣八使、巡行風俗、考牧宰之治否、問人民之疾苦、所以宣風展義、擧善彈違也、伏望、量遣件使、考其治否者、依奏、

一順時令事

右同前奏狀偁、人主發號施令、必奉天時、十二月得其時、則陰陽和而終始成也、伏望、政化所施、不違時令、則風雨應候、災害不生者、依奏、

一擧賢避邪事

右撿從二位行大納言兼皇太子傅民部卿藤原朝臣緒嗣奏狀偁、尙書曰、野無遺賢、万邦咸寧、又曰、任賢勿貳、去邪勿疑、伏望擧用賢德、去斷邪枉者、依奏、

一擇國守事

右撿正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫陸奥出羽按察使良岑朝臣安世奏狀偁、國守者古之刺史也、當仁之人不可多得、伏望、令一良守兼帶諸國、小大之政從其所請、一兩僚屬亦依請任之、又祿不厚則人不勸、人不勸則治不立、伏望、其公廨者攝國之中、擇其殷阜、以二守分給者、宜試於一國、明知治否、然後令兼之、

一令諸子子孫咸讀經史事

右撿參議從三位多治比眞人今麻呂奏狀偁、緬尋古典、歷覽前王、勞於求賢、逸於經國、伏望、諸氏子孫咸下大學寮、令習讀經史、學業足用、量才授職者、宜五位已上子孫年廿已下者、咸下大學寮、

以前意見奏狀、依今月八日詔書頒下如件、

天長元年八月廿日

〔續日本後紀 仁明六〕承和四年十二月丁酉、是日、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣年老病重、出入絶望、疾床引日、既過一紀、臣竊見、天下官庫空虛、國用闕乏、況今年不稔、衣食共損、倉廩不實、何知禮節、臣前以此義、去天長之初、上意見之日、奏言、省不要之官、斷文華之費、而臣久沈病疾、空積星霜、曠官之責可謝、其首、其文章歷代不朽也、豈口奏其言、久居其職哉、加以陰陽不調、責在臣子、伏望停不當之職、開賢德之進、然則天道無咎、自作中興、非敢逃天譴之累、名節之利、

〔寛平御遺誡〕右大將菅原朝臣、是鴻儒也、又深知政事、朕選爲博士、多受諫正、仍不次登用、以答(○答原作昔、今據一本大鏡改、)其功、(○中略)朕有讓位之意、朕以此意密々語菅原朝臣、而菅原朝臣申云、如是大事、自有天時、不可忽云々、仍或上封事、或吐直言、不順朕言、又正論也、

〔大槐秘抄〕君はよの事をきこしめさむとおぼしめすべきなり、きこしめさでは、いかでかは、うるはしき事をば、さらにはおこなはせおはしますべき、格と申文には、おほくあしき事をこそ、なをされて候へ、さかれば世の事をきこしめして、人にいかなるべきぞと、おほせられあはせておこなはせ給なり、きみはまゐる人に、いかにも御目をみかけて、心よき御氣色をして、あへさらはせおはしますべきなり、心あるうるせき人は、よの事など奏申事かたく候なり、たゞ思ひたる所もなきもの、よしなし物がたりつかうまつるが、おのづから世の事は申出さふらふなり、(○中略)御あはせ、御くだ物は、人のまゐらせたる物を、きこしめせども、御飯は、いかにも内膳の御飯をめす事にてさふらふ也、さからざるは、またくきこしめさぬ事候、女御后にまゐる程の人は、いづれかおとりまさりの候べきとは申候へども、やむごとなき后の御かたにては、御くだもの、御酒などまゐらせらるれば、きこしめす事にて候也、御てばこのふたに入て、后のみづから陪膳して、まゐらする事にて候なり、(○中略)七條朱雀東西に、鴻臚館と申所候、異國の人の參れる時、ゐる所にてな

候ける、物がたりにしつたへて候、こまうどなど申人も、この屋にて候ける、くに〳〵にたがひて、べち〳〵の屋に候、村上の御日記に、蜜瓜のたねを鴻臚館のあづかりに給ひて、鴻臚にうゑさせられたりとこそ候めれ、おほやけは、よきうりうゑさせて、きこしめしけるにこそ候めれ、今は人の領となりて候めり、いつよりまかり成たるにや候らん、○中略上達部は、封戸たしかにえて節會、旬、もしは臨時の御宴の祿を給はりて、はふ〳〵候ばかり也、祿法はめのれうなどに候也、それは多々にて候、おほよそみなたえ候にけり、○中略君は五節のまゐりの夜ならぬかぎりは、おほんさしぬきたてまつる事候はず、むかしはめしけるに候めり、今はおほかたさる事候はず、○中略おほろげの事候はぬかぎりは、日の御膳にはつかせおはしますべき事となん申つたへて候、陪膳も、をのこのかならずつとむる事とこそ申つたへて候へ、殿上人の見參のはしにて候なり、おほよそ代のはじめの藏人は、御卽位のさきに、臨時に叙爵する事候はず、御卽位の叙位にさだまりてすることに候、しかるを今度はじめて、御卽位以前にかうぶりを給はりて候なり、おほよそ藏人の、臨時に叙爵仕る事はありがたかるべき事なり、世會の諸大夫の、なを年少にて藏人に補て候などが、臨時の叙爵はし候を、近代は一日まかり成ぬれば、みな叙爵せむと思ひあひて候也、藏人の受領に任せし事は、六年侍中の勞に候、しかるを近代一日をへて巡にあづかり候し條、本意にはたがひ候にたり、一代に年號の多つもり候と、當代の藏人五位とのおほくつもるはよしなき事に候、御用心候べき事也、○中略長谷雄、善宰相淸行などが、外記をへて上達部にいたり候は、君につかうまつらんと、學問をしてこそ、なりのぼりてえもいはず候へ、是はあまりに、匡房民部大輔が子にて、三事をかねて、正二位中納言までなりのぼりて候も、みな身をもてのぼり候へば、人もえもいはぬ事にこそ、申思ひて候へ、一文しらぬ者なども、人のあしのしたに、よくはひくゞりえ候ぬれば、なりあがり候ぬ、左大辨爲隆が、大辨の宰相にて、中納言所、望し候事を、待賢門院の、白

河院に申させ給けるには、爲隆は大辨宰相なり、尤中納言になるべきものなれども、臣家のうしろみしたるものは、さすがに中納言にはかたき事なりとこそ、申させおはしましけれ、○中略才學たかきもの、、嗚呼の歎になり候ぬれば、いかなるつみとがもゆり候ぬ、嗚呼になりぬるは、才學もきゆる事に候、大江の匡衡は、人にゆびさゝれたるものとこそきこえ候へ、しかればさばかり程のものが、辨などにぞえなり候はねども、儒官は、きはめてもちひられてぞ候ける、才學など人にすぎぬる程の者は、かれも大納言それがしが子、これも大納言かれがしが子などおぼしめして、たゞおなじやうにつかはれ、もしは昇進もつかうまつるが、人のため、きはめたるうれへにて候なり、官同じやうに候へども、ふるまひありさまなどわろき者をば、人あなづりて候、○中略よき諸大夫と、あやしのきむだちとは、はるかに絶席したるものにてなん候ける、然るを白河院のおはむ世に、御めのとに、顯季卿が子孫をひきあげさせおはしましあひだに、なまきんだちは申にもおよばず、つみゆりたる人ども、くびかきつめられて候し故に、いづれも〳〵、たゞおなじ事のいま少しなりよきにて、へしふせられて候なり、しかればひとつにかゝるべき事とは、しろしめすまじと、おぼゆる事にてなむ候、○中略帥大貳に武勇の人なりぬれば、かならず異國おこると申候けり、小野好古が大貳のとき、隆家が帥の時、とり分と、異國の人おこりて候なり、かれらはたゞわが心どもの武をこのみけるに候、今平清盛、大貳にまかりなりて候、いかゞと思ひ給ふるに、高麗に事ありと聞候、高麗は、神功皇后のみづから行むかひて、うちとらせ給たるくにゝ候、千よ年にや成候ぬらむ、東國は、むかし日本武尊と申人の、うちたひらげ給ひて候也、それは日本の内事に候、高麗は大國をうちとらせ給ひて候を、いかに會稽をきよめまほしく候らん、然れども日本をば神國と申て、高麗のみにあらず、隣國のみなおぢて思ひよらず候也、鎮西は、敵國の人けふいまにあつまる國なり、日本の人は對馬の國人、高麗にこそ渡候なれ、其も宋人の日本に渡體に

はにぬかたにて、希有の商人の、たゞわづかに物もちて、わたるにこそ候めれ、いかにあなづらはしく候らん、しかれば制は候事なり、○中略又御持僧には、當時にとりて、德行やむごとなき僧をし候、なににもより候はず、めすことにてなむ候を、今の世となり候ては、たゞ人がらやむごとなき上臈、もしは僧正など申程の人、みなまゐり候、なをこれぞはからひたづねきこしめして、たのみおぼしめしつべからむ僧一人、殿上にちかくあけくれ候べき也、東寺の僧は、正月後七日の御修法、そのほどしり候べきなり、月のつごもりごとの御念呪しり候べし、仁壽殿の觀音供しり候べき也、弘法大師のおほやけのおほむ祈りあるべきことゝぞ、眞言院申たてゝしおかれたる事どもに候、○中略世はことの外にひさしくなりては、非常のこゝろある者いでまうでき候ぬれば、さはめたるよしなき事にて候也、むかし物がたりには、嵯峨天皇をば、人思ひかけまいらせたるに、田村丸を近衛將監になしたび候ければ、冠たまはらんをまち候あいだに、少將になしたびてけり、四位してのにんをまつに、中將になり、大將になりて、はなれたてまつらざりければ、えなんおもひよらざりけるとこそ申つたへ候へ、さも候はむ武者一人は、たのみてもたせおはしますべきなり、おほよそ臣下にも、たのもしからむ人をば、もたせおはしますべき事にて候也、おそろしきものは人にさふらふ、やう〳〵何となくたのみまゐらせたる人を、まうせさせおはしますべきに候、白河院のよをむしろのごとくにまきてもたせおはしましたりしが、なを武者をたてゝ、おぼよそたゆませおはしまさゞりしに候、仰候けるは、一條院はよのをこの人にて有けるときくに、頼義を御身をはなたでもたれたりけるが、きはめてうるせくおぼゆるなり、我まもれとこそ忠盛にはおほせごとさふらひけれ、禁中はよるはひし〳〵としてこそ候けれ、○中略御學問のさふらはまほしき故、このおもむきのことを、唐にも日本にもしけるやう、委旨をしろしめさむがためなり、たゞ詩賦つくらせおはしまさむが爲にはさふらはず、臣下をつかはせおはしまさむ

も、この事をすこしもまなびしりて、そのまゝをふるまふものを、つかはせおはしますべく候なり、學文すとて、詩このみてつくり、もしは我まなびたれどたゞ詩賦つくりばかりをしりて、よの事しらぬものは、よしなしものに候、よおさまるやうをまなびて、心にすこしもかけたらむ人の候べきなり、臣をば君のしろしめす事にて候也、えもいはぬ人にさふらふとも、我身のことはりを思ひて、よの事をしらざらむものは、君の御かたきにて候、○中略人の寒温をしろしめしてだに、人をつかはせおはしましさば、よく候なんかし、○中略としごろ君につかふまつりさふらひて、かたのごとく、かくのごときの學文をつかうまつりて候を、その心ざしのあらはれたるにや候らむ、なにゝもさふらはぬ、けうのものゝ相傳のゐひに、か樣にさだめられ候が、たのむかたも候ぬものゝ、大臣一のかみまでまかりなりて候は、この心ざしのつかうまつるなめりとは思たまへながら、此つかうまつりたる學文の、さりとも〳〵と思給候つるあいだに、これをすこしも君にしられまゐらせ候て、すでに七十に成候ひなむず、旦暮けふあすにまかり成て候にたゞ、執とまりておぼえ候て、ことのありやうをうけたまはり候ばやとて、十七條の憲法を、おそれながら書進じてさふらふに、御興の候とうけ給よろこびて、すこしのことのはし〳〵を、きとおぼえさふらふ程を、やはらげかき出られて候なり、さらば、さらんよにも、しか〳〵のものは、是を思ひて學問はしけれど、おぼしめしいでられんためにかきて候也、この心をもて、まなにうるはしくかきて、叡覽にそなへて、すなはちやがて火にやきたまふべし、又この遺紙は、自筆いよ〳〵見ぐるし、かきうつされなば、とく〳〵かへしたまふべし、

おもふことかきあつめたることのはぞくたしをはてよ風にちらすな

帝王のおこり、臣下あがめたてまつる事、

帝王の、人民をあはれびさせ給ふべき事、

帝王の、おほんつゝしみのありやう、

帝王の、おほむまつりごとの、うるはしかるべき事、

帝王の、臣下をおもくせさせ給ふべき事、

帝王の、おほむ心つかはせ給ふべき事、

帝王の、人の善惡をしろしめして、つかさをなさせ給ふべき事、

帝王の、ふるきあとをたづねさせ給ふべき事、

帝王の、人をつみせさせ給ふべき事、

帝王の、人を賞せさせ給ふべき事、

帝王の、御所のやう、

帝王の、諸國をおさめさせ給ふべきやう、

帝王、人の能を賞せさせ給ふべき事、

帝王、無才の人をとくなしあげさせ給はぬ事、

帝王、人の寒温をしろしめさるべき事、

帝王、神事をあがめさせ給ふべき事、

帝王、佛事をもはらにせさせ給ふべき事、

上達部、國を給はれる、あながちにひだうにあらざる事、

賢才にいたては沙汰におよばず、しからざるともがら、品秩にしたがひて、官をなさるべき事、

上下の官をなしたまふやう

此本すこぶる世にまれなるにや、またとえざらむが御ふしむ也、ゆめ〳〵披露すべからず、

九條太相國伊通公意見進二條院云々、

〔古事談 二 臣節〕不作詩之人昇亞相事、始自顯雅卿云々、不書消息之人昇亞相事、始自俊忠卿云々、此事伊通卿、並二條殿注紙之中有之云々、

〔玉海〕壽永二年十月四日乙未、陰晴不定、及晩大夫史隆職來、密々持來賴朝所進合戰注文并折紙等、院御使廳官所持參云々、件折紙不異先日所聞、然而爲後代注置了、

一可被行勸賞於神社佛寺事

右日本國者、神國也、而頃年之間、謀臣之輩、不立神社之領、不顧佛寺之領、押領之間、遂依其咎、七月廿五日、忽出洛城、散之處、所守諸王法之佛神、所加冥顯之罰給也、全非賴朝微力之所及、然者可被行勸賞於神社佛寺候、近年佛事燈油之用途已闕、如無先跡、寺領如元可付本所之由、早可被宣下候、

一諸院宮博陸以下領、如元可被返付本所事、

右王侯卿相御領、平家一門押領數所、然間領家忘其沙汰、不能堪忍、早降慧日之明詔、可拂愁雲之餘氣、攘災招福之計、何事如之哉、但賴朝賞領被預等者、人之欲相同平家候歟、宜任道理有御沙汰者、

一雖訐謀者可被寛宥斬罪事

右平家郎從落參之輩、縱雖有科怠、可被助身命、所以者何、賴朝當勤勘氣、雖坐事、更全露命、今討朝敵、後代又無此事哉、忽不可被行斬罪、但隨罪之輕重、可有御沙汰歟、

以前三箇條事、一心所存如此、早以此趣、可令許達給、仍注大概、上啓如件、合戰記不遑具注、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年元曆元年〇元曆元年二月廿五日甲申、朝務事、武衞注御所存條々、被遣泰經朝臣之許云云、其詞云、

言上　條々

一朝務等事

參論時政

右守先規、殊可被施德政候、但諸國受領等、尤可有計御沙汰候歟、東國北國兩道國々、追討謀叛之間、如無土民、自今春浪人等歸住舊里、可令安堵候、然者來秋之比、被任國司、被行吏務可宜候、

一平家追討事

右畿内近國號源氏平氏、携弓箭之輩、并住人等、任義經之下知、可引率之由、可被仰下候、海路雖不輒、殊可急追討之由、所仰義經也、於勳功賞者、其後賴朝可計申上候、

一諸社事

我朝者神國也、往古神領無相違、其外今度始又各被新加歟、就中去比鹿島大明神御上洛之由、風聞出來之後、賊徒追討、神驗不空者歟、兼又若有諸社破壞顚倒事者、隨功程、可被召付處、功作之後可被御裁許候、恒例神事守式目、無懈怠可令勤行由、殊可有尋御沙汰候、

一佛寺間事

諸寺諸山御領、如舊例之勤、不可退轉、如近年者、僧家皆好武勇、忘佛法之間、行德不聞、無用枢候、尤可被禁制候、兼又於濫行不信僧者、不可被用公請候、於自今以後者、爲賴朝之沙汰、至僧家武具者、任法奪取、可與給於追討朝敵官兵之由、所存思給也、以前條々事、言上如件、

壽永三年二月日　　　源賴朝（○又見源平盛衰記）

（續日本紀十二聖武）天平九年二月己未、遣新羅使奏新羅國失常禮不受使旨、於是召五位已上、并六位已下官人總四十五人于內裏、令陳意見、　丙寅、諸司奏意見表、或言遣使問其由、或言發兵加征伐、

（續日本紀十三聖武）天平十二年八月癸未、太宰少貳從五位下藤原朝臣廣嗣上表、指時政之得失、陳天地之災異、因以除僧正玄昉法師、右衞士督從五位上下道朝臣眞備爲言、

（續日本紀十五聖武）天平十六年閏正月乙丑朔、詔喚會百官於朝堂、問曰、恭仁難波二京何定爲都、各言其志、於是陳恭仁京便宜者、五位已上二十三人、六位已上百五十七人、陳難波京便宜者、五位已上二十

三人、六位已下一百三十人、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年五月己未、是日太政官召諸司官人等、問以何處爲京、皆言可都平城、辛酉、地震、遣大膳大夫正四位下栗栖王於平城藥師寺、請集四大寺衆僧、問以何處爲京、僉曰、可以平城爲都、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年三月庚寅、太宰府言、府官所見、方有不安者四、據警固式、於博多大津、及壹岐對馬等要害之所、可置船一百隻以上、以備不虞、而今無船可用、交關機要、不安一也、太宰府者、三面帶海、諸蕃是待、而自罷東國防人、邊戍日以荒散、如不慮之表、萬一有變、何以應卒、何以示威、不安二也、管內防人、一停作城、勤赴武藝、習其戰陣、而大貳吉備朝臣眞備論曰、且耕且戰、古人稱善、乞五十日教習、而十日役于築城、所請雖可行、府僚或不同、不安三也、天平四年八月廿二日有勅、所有兵士全免調庸、其白丁者免調輸庸、當時民息兵强、可謂邊鎭、今管內百姓乏絶者衆、不有優復、無以自贍、不安四也、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月丙子、太宰大貳從四位上藤原朝臣衞上奏四條起請、一曰、新羅朝貢、其來尙矣、而起自聖武皇帝之代、迄于聖朝、不用舊例、常懷姧心、苞苴不貢、寄事商賈、窺國消息、方今民窮食乏、若有不虞、何以防之、望請新羅國人、一切禁斷、不入境內、報曰、德澤洎遠、外蕃歸化、專禁入境、事似不仁、宜比于流來、充糧放還、○中略、二曰、交替務了、未得解由、五位之徒、寄事格旨、留住管內、常好農商、侵漁百姓、巧爲姧利之謀、未視塡納之物、望請交替了、吏早從入京、報曰、依請許之、○中略、三曰、府多官舍、破損不少、例用浪人、常勤修理、而比年多依官符、被宛他用、望請一切不寄他所、將役府國修理、依請許之、四曰、邊要之地、爲有警虞、延暦年中特立制文、不許開田、而比年頗有墾開之事、望請依延暦三年四月廿六日符、一從停止、許之、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、○中略、承和十二

年、陳便宜十四事、事多不載、議亦不行、嘉祥二年春兼尾張守、于時太宰府吏不良、衰弊日甚、貞主上表曰、夫太宰府者、西極之大壤、中國之領袖也、東以長門爲關、西以新羅爲拒、加以九國二島、郡縣闊遠、自古于今、以爲重鎭、夫謀事必就祖、發政占古語、因撿舊記、大唐、高麗、新羅、百濟、任那等、悉託此境、乃得入朝、或緣貢獻之事、或懷歸化之心、可謂諸蕃之輻湊、中外之關門者也、因茲有德爲帥貳、才良爲監典、若無其人、還取辨官式部、頃年以來、絶而不行、近得飛語云、彼吏或擊目閉口、似避時之人、或忘恥貪財、爲聚斂之吏、府司國宰、莫不悲傷、若如此不變、恐噬臍不及、臣聞此語、心神罔措、雖此之飛語、有何信據、而臣子之理、何不預憂、又聞、少貳從五位下小野朝臣恒柯、筑前守從五位下紀朝臣今守、有意執論、無力矯枉、未審虛實、唯得耳剽、臣不勝血誠、伏觸逆鱗、言詞切直、默止不省、

〔文德實錄四〕仁壽二年十二月癸未、參議左大辨從三位小野朝臣篁薨、○中略承和十二年春正月、授從四位下、于時法隆寺僧善愷、告少納言登美朝臣直名爲寺檀越枉法狀、訴之太政官、加訊鞫、漸將讞斷、而世論嗷々、爲善愷成私曲、由此朝廷更論此事、延至分爭、名例律、私曲相須之二義、或以爲一、或以爲二、辨官上下、還羅其網、遂令明法博士讃岐朝臣永直考之、考曰、私曲兩犯、混處一科、是相須之義也、當今之事、唯有一犯、不足結罪、事未斷畢、十三年五月爲權右中辨、新關其事、即據律文、以爲私與曲明是二也、若私若曲、有一於此、未免其罪、而連涉日月、不肯決斷、仍上請議定私曲律義之表、並所執狀、以糺法處之不熟、明辨官之可處私罪、篁初恨此論之不平、作傷時詩卅韻、寄參議滋野朝臣貞主、後重令諸儒倣議、其文曰、被右大臣宣偁、奉勅、據參議小野朝臣篁上表、及所執律文義、定可考申、謹依宣旨、覆案律文、公罪謂緣公事致罪、而無私曲者、疏云、私曲相須、公事與奪情無私曲、雖違法式、是爲公坐云々、私罪條疏云、私罪謂不緣公事私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪者、由此案之、私者不緣公事自犯之名、曲者雖緣公事、意涉阿曲之謂也、相須則私與曲、二事相待之理、然則無私無曲、可爲公罪、一私一曲、不免私罪、而永直等說云、私曲者謂私之曲相須者、合私曲兩字爲一義、以連讀之意云々者、文義相

錯、公私不分、此說之迂、雖可據信、蓋朝臣所執、誠爲允愜、

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年十二月廿七日辛酉、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相上表曰、伏奉今年四月十二日（〇十二日、上文作十五日）詔書曰、參議已上、各論時政之是非、詳世俗之得失、傷化害人、不便於時者、節用護度、富利於國者、並盡昌言、以沃朕心、勿爲華飾、勿有隱諱、伏惟皇帝陛下、德高雲霓、明並日月、猶闢廣詢之路、遂降不諱之綸、臣身非岳神、位忝台衮、獻替之誠徒積、塵髮之効叵申、仍以中外之國、小大之政、所以治而不亂者、唯以任得其人也、脫非其人、則雖有峻法嚴令、然是爲亂之階、終非爲治之偏矣、故詩曰、人之云亡、邦國殄瘁、書曰、衹在知人、知人則哲、能官人、臣之不敏、深信斯言、從政以來、猶自留意、而猶職藤銓之任、易遂棘侯齒夫之才、雖辨即知人、心險於山川、惟帝其難、將如之何、抑其明經秀才、得試及第者、尤是國家之才望、宜明古今王事之體、又一切智々、法敎無量、凡諸僧綱、及曾經八省維摩講師者、應通熟世論之利病、又右大辨南淵朝臣年名、身爲進士、職經內外、稍通治體、既居樞要、山城守紀朝臣今守、所歷之州、風聲必暢、論之良吏、自爲先鳴、伊豫守豐前王、才學早彰、資歷淹久、無他異跡、足謂老成、太宰大貳藤原朝臣冬緒、辨名粗達、器識漸優、吏幹之稱、仍有可愛、大和守弘宗王、頗有治名、多宰州縣、遍自賢之費、成碍法網、而該諸經綸、非無其才、然則令件等人同上意見、既云諸及芻蕘、何況於彼有識、臣謹荷重責、無他息、肩徒獻管窺、耻塵旒聰、

〔三代實錄 十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、豐前王者、贈一品舍人親王四世木工頭從五位上榮井王之子也、〇中略貞觀四年四月十二日、下詔令參議已上各論時政之是非、詳世俗之得失、右大臣藤原朝臣良相上表言、〇中略伊豫守豐前王、才學早彰、資歷淹久、無他異跡、足謂老成、〇中略然則令件等人同上意見、詔曰可、先是諸王自二世至四世、賜夏冬衣服、不限人數、隨年數符出多少賜之、或至五六百人、是時敍簿進官者四百餘人、豐前上疏曰、諸王給服人數不定、徒費帑藏、何無紀極、望請以當時所在爲定數、隨闕補之、不聽輒過、從之、

〔本朝文粹二 意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

臣某言、伏讀去二月十五日詔、遍令公卿大夫方伯牧宰進讜議盡讜謀、改百王之澆醨、極萬民之塗炭、雖陶唐之置諫鼓、隆周之制官箴、德政之美、不能過之、臣某誠惶誠恐、頓首死罪、臣伏案舊記、我朝家神明傳統、天險開疆、土壤膏腴、人民庶富、故東平肅愼、北降高麗、西虜新羅、南臣吳會、三韓入朝、百濟內屬、大唐使驛、於焉納貽、天竺沙門、爲之歸化、其所以賢者何也、國俗敦厖、民風忠厚、輕賦稅之科、疎徵發之役、上垂仁而牧下、下盡誠以戴上、一國之政、猶如一身之治、故范史謂之君子之國、唐帝推其倭皇之章、自後風化漸薄、法令滋彰、賦斂年增、徭役代倍、戶口月減、田畝日荒、既而欽明天皇之代、佛法初傳本朝、推古天皇以後、此教盛行、上自群公卿士、下至諸國黎民、無建寺塔者、不列人數、故傾盡資產、興造浮圖、競捨田園、以爲佛地、多買良人、以爲寺奴、降及天平、彌以尊重、遂傾田園、多建大寺、其堂宇之崇、佛像之大、工巧之妙、莊嚴之奇、有如鬼神之製、似非人力之爲、又令七道諸國建國分二寺、造作之費、各用其國正稅、於是天下之費、十分而五、至于桓武天皇、遷都長岡、製作既畢、更營上都、再造大極殿、新構豐樂院、又其宮殿樓閣、百官曹廳、親王公主之第宅、后妃嬪御之宮館、皆究土木之巧、盡賦調庸之用、於是天下之費、五分而三、仁明天皇即位、尤好奢靡、雕文刻鏤、錦繡綺組、傷農事害女功者朝製夕改、日變月俀、後房內寢之飾、飫宴謌樂之儲、麗靡煥爛、冠絕古今、府帑由是空虛、賦斂爲之滋起、於是天下之費、二分而一、貞觀年中、應天門及大極殿頻有災火、僅依太政大臣昭宣公匪躬之誠、具瞻之力、庶民子來、萬邦麇至、修復此宇、朞年而成、然而天下費亦失一分之半、然則當今之時、曾非往世十分之一也、臣去寬平五年、任備中介、彼國下道郡、有邇磨鄉、爰見彼國風土記、皇極天皇六年、大唐將軍蘇定方率新羅軍伐百濟、百濟遣使乞救、天皇行幸筑紫、將出救兵、時天智天皇爲皇太子攝政從行、路宿下道郡、見一鄉戶邑甚盛、天皇下詔、試徵此鄉軍士、即得勝兵二萬人、天皇大悅、名此邑曰二萬鄉、後改曰邇磨鄉、其後天皇崩於筑紫行宮、終不遣此軍、然則二萬兵士、彌可蕃息、而

天平神護年中、右大臣吉備朝臣、以大臣兼本郡大領、試計此鄕戶口、纔有課丁千九百餘人、貞觀初、故民部卿藤原保則朝臣、爲彼國介時、見舊紀、此鄕有二萬兵士之文、計大帳之次、閱其課丁、有七十餘人、某到任、又閱此鄕戶口、有老丁二人、正丁四人、中男三人、去延喜十一年、彼國介藤原公利、任滿歸都、淸行問邇磨鄕戶口當今幾行、公利答曰、無有一人、謹計年紀、自皇極天皇六年庚申、至延喜十一年末、纔二百五十年、衰弊之速、亦既如此、以一鄕而推之、天下虛耗、指掌可知、方今陛下鍾千年之期運、服萬古之興衰、降惻隱於黎庶、施惠愛於四方、宵起旰食、夜念朝行、遍頒綸綍、賓訪芻蕘、昔者虞舜之居、三年成都、仲尼之政、非月自理、然則氏之繁華、不得五代之後、國之興復、應期浹日之間、不任抃躍、敢陳狂愚、猶如管中見豹、纔知一斑、井底望天、不過數尺、謹錄如左、伏待天裁、

一應消水旱求豐穰事○中略

一請禁奢侈事○中略

一請勅諸國隨見口數授口分田事○中略

一請加給大學生徒食料事○中略

一請減五節妓員事○中略

一請依舊增置判事員事○中略

一請平均充給百官季祿事○中略

一請停止依諸國少吏幷百姓告言訴訟差遣朝使事○中略

一請置諸國勘籍人定數事○中略

一請停以贖勞人補任諸國檢非違使及弩師事○中略

一請禁諸國僧徒濫惡及宿衞舍人凶暴事○中略

一重請修復播磨國魚住泊事○中略

延喜十四年四月廿八日從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

一封事三箇條

一請禁奢侈事　菅原文時

右俗之凋衰、源自奢侈、不塞其源、何救其俗、方今高堂連閣、貴賤共壯其居、麗服美衣、貧富同寬其製、官途稀交之儻、窮陸海而畫珍、私門求媚之傾、剪綾羅而敷器、富者傾産業、貧者失家資、然而且愁且好、所以不息者、一思容身、一難免俗耳、是故雖明詔頻降、嚴禁無緩、而積習生常、流通忘還、令天下愚夫愚婦、謂風教而爲不宜、謂霜科而爲無用、伏望重勅有司、更張舊法、若致容隱、殊加譴責、抑朝庭所行者、從制猶遲、人君所好者、承指盡速、故書曰、違上所命、從厥攸好、傳曰、上之所爲、人之所歸、昔呉王好劍客、百姓多瘢瘡、楚王好細腰、宮中多餓死、夫餓與瘢者、是人之所厭、然尙不嗜味、不避危者、唯欲從上之好也、況於救弊之謀、何有違命之輩乎、伏惟、采椽土階、淸風扇于古、損膳減服、紫泥新於今、猶願內彌親儉、外抱遏奢、見其僭侈者則惡之、聞其節儉者則喜之、天下將知其去奢而好儉、誰敢費己財逆君心者哉、斯實所以不禁而止、不令而行也、然則浮僞之俗自改、敦庬之化可成、

一請停賣官事

右量能授官、官乃理、擇材任職、職乃修、若不量而授、不擇而任、則人謂之謬妄、俗爲之衰亡、方今授任之道非不正、黜陟之規非不明、然時有以財官人矣、公家以爲助國用、衆庶以爲輕天工、於是功勞之臣自退、聚斂之輩爭進、至於令彼暴客猾民、殉不義之富、彌深慮於貪殘、良吏冑子、企無厭之求、更薄情於宦學、望其化盛治平、不亦難哉、昔館陶公主爲子求郞、明帝不許、賜錢千萬、所以輕厚賜重薄位者、爲其官人失才、害及百姓也、降逮桓靈之後、初開占賣之官、皇綱遂紊、王業已衰、歷訪漢家之典、略考皇朝之記、未有賣官而敎俗、鬻職而安民者矣、伏望早改彼澆時之政、令返於淳世之風、若憂國用、則每事必行儉約、若行儉約、則何因可乏貨財、欲利之源、從此晴滅、廉正之路、自然將開、

一請不廢失鴻臚館懷遠人勵文士事

右鴻臚館者、爲外賓所設也、星律多積、雲構頻頽、頃年以來、堂宇欲盡、所司不能修造、公家空以廢忘、禮曰、以舊防爲無所用而壞、必有水敗、以舊禮爲無所用而去之、必有亂患、恐彼歸化之國、慕德之鄕、得風聞於萬里、成狐疑於兩端、一以爲君恩薄而無懷柔之情、一以爲國用乏而無含弘之力、加之國家故事、蕃客朝時、擇通賢之倫、任行人之職、禮遇之中、賓主闘筆、又擇諸生能文者、令預餞別之席、因玆翰苑銳思之士、無不以對蕃客爲其心期、方今詞人才子、願相誡曰、人命有限、世途難拋、何徒勤苦於風月之間乎、請見鴻臚館之不可復爲文場矣、昔子貢欲去告朔之餼羊、仲尼不許、以爲羊在猶所以識其禮也、今陳不廢此館者、蓋亦爲文章道焉、夫文章者王者所以觀風俗厚人倫感鬼神成敎化也、無翼而飛、無脛而至、敵國見之、而知有智者、故憚而不侵、殊俗聞之、而覺有賢人、故投而自服、魏文帝所謂、文章經國之大業、不朽之盛事者也、伏望、深圖遠慮、勿廢失此賓館、然則遐方不離心、文士無倦業、是則示海外以仁澤之廣、觀天下以敎風之高也、

以前封事、依去天暦八年七月廿七日綸旨、上奏如右、臣素不達政道之要、唯空竊儒士之名、詔是難逃、義苟無隱、遂忘罪責、敢獻狂言、臣文時誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪謹言、

天暦十一年十二月二十七日　　從五位上行右少辨臣菅原朝臣文時上

(本朝續文粹二勘文)變異疾疫飢饉盜賊等勘文　　敦光朝臣

勘申　變異疾疫飢饉盜賊等事

一天地變異人民疾疫事〇中略

右天變地祅者、所以驚戒人主也、凡厥休咎之象、司天奏之、抑古人有言曰、夫日月之有食、風雨之不時、怪星之傷見、是無世而不嘗有之也、上明而政平、則雖並世而起無傷也、但後漢永平年中、有日蝕之異、公卿大夫、皆上封事、詔選郎官寬博有謀才任典城者三十人、悉以所選郎補長相、我朝弘仁聖代、憲章

稽古、登用賢才、抽爲侍中、還爲郎官、當其新叙之日、授彼專城之任、其後歷代二十四代、計年三百餘年、車書同軌、無有異路、而近年以來、其風漸衰、其思斑駁、若不墜往代聖猷、自可助明時之皇化歟、且夫疾疫之起、政違時令之所致也、天平十三年二月十四日勅曰、頃者年穀不豐、疾癘頻至、是以普令天下造釋迦牟尼佛高一丈六尺各一鋪、并寫大般若經各一部、風雨順節、五穀豐穰者、宜遵格制重令普告、又弘仁四年六月一日格偁、應禁斷京畿百姓出弃病人事、天下之人、各有僕隷、平生之日、既役其力、病患之時、即出路邊、無人省養、遂致餓死、因修此格、自叶周文掩骼之義歟、伏惟倭漢之間、每有災異、或擧賢良、優老人、賑貧民、或免租穀、減調庸、省徭役、依彼等例、可被量行歟、

一去年風水有難、今年春夏飢饉事、○中略

右王者八政、食爲其先、古人有言曰、寒者不貪尺玉而思短褐、飢者不願千金而羨一食、自非兼年之食、何免荒飢之愁、夫衰弊之漸、其來區分、一。者依廟社之不祀也、二月祈年祭、六月十二月月次祭、神今食、九月神嘗祭、十一月新嘗祭者、朝之重事也、其祀纔存、其禮漸薄、就中天皇神今食幸中和院、神嘗祭幸大極殿、威儀棣々、自感神心、昔告朔餼羊、仲尼愛禮、以小喩大、何失恒規、事々任式、可被行之、諸國所在大小神社、雖有破壞、難加修理、雖有顛倒、無復基趾、國宰不參祭祀之場、社司無致修理之事、況非家謹之齋、知社務之人、誰能竭謹愼之誠乎、誰能盡齋肅之禮乎、二。者依佛事不信也、招福之謀、以救法爲本、歸佛之志、以淸淨爲先矣、是以寶龜三年十一月丙戌、詔曰、○中略始自明堂、至于諸國、先每年之祈願、久遺我朝之勝躅、而廟堂之中、雖備威儀、州國之間、恐致疎略、其故者、國分寺有其無實之聞、講讀師無其有智之侶、相待感應、宛如求芙蓉於木末者歟、如此恒例齋會、臨時佛事、叡念雖深、施與如疎、是則諸司懈怠、諸國難澀之故也、又往古寺塔、遍滿國土、三綱等唯貪田園之地利、如忘土木之堂構、官府所載諸國之塔、公家催不尋勤惰、牧宰各所預勸賞也、論之物議、奈冥鑒何、三。者依奪民農時也、中古以來、高大堂廈、造營寔繁、築山鑿池、課役未絶、人不旋踵、民無息肩、昔衞靈公依宛春之諫、罷嚴寒之役、矧乎非時

使民必傷農事、須休土功、勿奪農時、四者依重賦歛也、田畑無加、賦歛有增者、古傷之、今傷之、魏文侯時、租税歳倍、有人致賀、文侯曰、今戸口不加、而租税歳倍、此由課歛多也、不可賀焉、由是魏國大理、如聞近來無檢田數之增減、不尋農民之貧富、推稱剩田、徵納租税、地廣民富者、自叶其心、地狹民貧者、暗奪其心、富者寡、貧者衆、勞逸論之、可謂苛酷、又雖檢田數、準法過差、興亡之間、世自知之、早隨國之治否、可有度之復賦歛、五者依不禁奢侈也、彼染器畫漆、猶傷其奢、萬衣非食、長傳其儉、漢文帝之罷露臺、齊桓公之却紫衣、治世之盛、後世美談也、方今天下諸人、屋宅衣服、既踰制度、軒騎僮僕、多過規模、頻加禁遏、猶不悛改、鄙語曰、城中好大袖、四方用匹帛、城中好廣眉、四方且半額、世之所好、唯從時俗、況復金銀之珍彫鏤匠一、紅紫之色着用甚多、宜任度々之綸言、以停色々之華麗、六者依學校之廢也、天下之所貴唯賢、所實惟穀、仍我朝宮城之南、左則置大學寮、以崇儒師、右則置穀倉院、以蓄米穀、而黌舍頽弊、鞠爲茂草、廟堂蘊藏之費、有傾于偏、其供擢紳青襟之徒、無處于容其身、伏案貞觀政要、太宗即位之初、京師飢饉、孜々求士、務在擇才、政革舊弊、頻致豐稔、宜依盛代之舊風、早施明時之新化歟、七者依府庫空虛也、大府之倉廩、久以空虛、諸國之租税、已少塡納、況納官封家、有名無實、列位之臣、不預月俸、擧公之士、雖[illegible]窮寒、所謂衣食闕於家業、父母不能鬻其子、凍餒切於身、雖巣由不能固其節、又諸國大概、充行惟希、臺隸之輩、衣服難支、如此七事、無一不可、仰諸國土民、爲逃課役、或稱神人、或爲惡僧、横行部内、對捍國務、加以京中所住浮食大賈之人、或於近都借一物、向遠國貪三倍、或當春時與少分、及秋節取大利、若逆數道之憲憤、殆傾修身之貯、貧窮民不堪其力、擧家逃亡、又永賣妻子、爲彼奴婢、天下凋殘、職而之由、伏惟延喜年中、式部大輔三善清行朝臣封事之中、天下費非往世十分之一者、以彼一分比之今時、復非延喜十分之一、國之衰耗、指掌可知、戸令云、凡遭水旱災蝗、不熟之處、少粮應須賑給、賦役令云、凡田有水旱虫霜、不熟之處、國司檢實、具錄申官、免租調課役者、早任令條、可被施德政、安人民歟、

一隘地海路盜賊旁起事○中略

右姧邪之心、仰寒而起、所謂渇馬守水、餓犬護肉、則須用刑罰、雖致粛清、戸口饒、衣食足、則邊境安寧、寇賊消散、宜任延暦五年四月十九日格文、簡擇良吏、擯除姦盗、但國有典刑、誰免懲誡、定爲一面之綱羅、早致四海之静謐歟、但馭俗之道、寛猛相濟、去承平六年、南海賊徒首藤原純友、結黨屯聚、彼時以紀朝臣淑人任伊豫守、令兼行追捕之事、賊徒聞其寛仁、二千五百餘人悔過就刑、魁帥三十餘人束手歸降、即給衣食田地、令勤農業、然則循良之吏、各赴任國、搜求黨類、若有歸降之輩者、班田給物、依前行之、國富刑清、籌策之其一也、抑太宰府者、蕃客往反之地也、鎭守府者、遠夷交接之境也、若無霜威之振外土、恐有風聞之及殊方、縦雖思無爲之代、何可拋不虞之備、安不忘危、古之炯誡也、

以前參箇條、據吏籍、課愚管、勘申如件、

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

（中右記）保延元年八月廿四日、一日下給諸道勘文八通返上之、記傳四通、（儒者大貳顯實光、式部大輔敦光、兩文章博士顯業、時登、）明經一通、明法一通、筭道一通、陰陽道一通、

此文申云、太神宮訴、并恒例神事、隨尋道理、可被沙汰也、

諸社之條、如法可被行也、近日供神物、不法之由、旁有聞、早可被尋也、

叙位除目之時、彌可被行道理歟、就中近代新叙之輩、不被成受領、是長經之吏、其數多之故歟、成功之輩多積、各抱其憂、

神社佛寺之封、全不弁備、國之本社本寺、已及太破、

諸國宰吏、停往古之神社佛寺之領、新立權門勢家之庄、甚以非常也、

神社之司、以異姓他人補事、可被停止、猶尋氏人可補歟、

大極殿、并諸司破損、早可被修理、

二季神今食、九月例幣、新嘗會行幸、尤可被行也、

還都

御齋會、二季御讀經、仁王會間、受領行事官、皆以不法、可被尋沙汰、
禁中六箇、無勤直人、是無障食之故也、諸國依申異損、被免色代之故、神事佛寺、幷諸司陵遲、唯在此事、
凡近代七道諸國之吏、不濟公事、天下之大私也、
天下美服過差、金銀錦繡之類、重可被禁制也、
以前條々事等、依有其尋、大略注進、更以此趣可被奏達之狀如件、

八月　　　　　　　　　　　　　　　　　内大臣〇藤原宗忠

謹上　藏人弁殿

〔續日本紀十聖武〕神龜四年三月乙亥、百官率朝、上官人善惡之狀、

〔續古事談二臣節〕六波羅ノ太政入道、〇平淸盛福原ノ京タテヽ、ミナワタリキテ後、コトノ外ニホドヘテ、古京ト新京トイヅレカマサレルト云サダメヲセントテ、古京ニノコリ居タルサモアル人々ミナヨビタダシケルニ、人ミナ入道ノ心ヲオソレテ、思バカリモイヒヒラカザリケリ、長方卿ヒトリスコシモ所ヲオカズ、コノ京ヲソシリテ、コトバモヲシマズ散々ニ云ケリ、サテモトノ京ノヨキヤウヲ云テ、ツイニソノ日ノ事、彼人ノサダメニヨリテ、古京ヘカヘルベキ儀ニナリニケリ、後ニ其座ニアリケル上達部ノ、長方卿ニアヒテ、サテモアサマシカリシ事カナ、サバカリノ惡人ノ、イミジト思テタテタル京ヲ、サホドニハイカニイハレシゾ、イヒオモムケテ歸京ノ儀アレバコソアレ、イフカヒナタハラダチナバ、イカヾシ給ハント云ケレバ、此事我思ニハサル儀アリ、入道ノ心ニカナハムトテコソサハ云シカ、ソノ故ハ、ヒロク漢家本朝ヲ考フルニ、ヨカラヌ新儀オコナヒタルモノ、ハジメニ思立ヲリハ、ナカ〳〵人ニ云アハスルコトナシ、ソノシワザスコシクヤシムコヽロアルトキ、人ニハトフナリ、コレモカノ京コトノホカニキツキテノチ、兩京ノサダメヲオコナヒシカバ、ハヤコノ事クヤシウナリニケリトイフ事ヲシリニキ、サレバナジカハコト

バヲヲシムベキトゾイハレケル、マコトニ其後ニ人ニコエラレムトシケル時モ、コノ入道ヨキヤウニ申テ、長方卿ハ事ノ外ニ物オボエタル人也、タヤスク人ニ超越セシムベカラズトテ、後々デモ方人ヲセ　レケル也、梅小路中納言ノ兩京ノサダメトテ、其時ノ人ノ口ニアリケリ、

名稱

古事類苑

政治部十

上編

印 花押附

印ニハ内印アリ、外印アリ、諸司印アリ、國印アリ、又私印アリ、社寺印アリ、内印ハ天皇御璽ヲ云ヒ、外印ハ太政官印ヲ云フ、因テ又官印トモ云ヘリ、諸司印ハ在京諸司ノ印ヲ云ヒ、國印ハ國司ノ印ヲ云フ、凡ソ官司ノ印ハ、長官ノ還ニ執ル所ニシテ、長官事アレバ次官之ヲ執ル、太政官ヨリ諸司諸國ニ符ヲ下スニハ、事ニ隨テ内外印ヲ捺ス、而シテ少納言先ヅ奏上シテ捺印ヲ請フ、之ヲ請印ト云フ、既ニシテ勅許ヲ得テ後、内印ハ主鈴ヲシテ捺セシメ、外印ハ史生ヲシテ捺セシム、並ニ少納言之ヲ監臨ス、私印及ビ社寺印ハ、皆之ヲ公事ニ用キルコトヲ得ルモノニテ、濫ニ之ヲ造ルコトヲ得ズ、書ヲ解セザル者ハ、人ヲシテ其名ヲ代書セシメ、其傍ニ食指ノ頭節ヲ記シ、以テ證ト爲ス、手印ハ手掌ニ朱ヲ塗リ、之ヲ文書ニ印スルモノニテ、之ヲ神佛ニ誓フニ用キル、又紙縫ニ印スル事アリ、其詐欺ヲ防グナリ、或ハ書寫誤アリ、塗抹シテ其傍ニ記シ、更ニ其字ノ裏面ニ印スルコトアリ、印ノ事ハ、尙ホ下編ノ印篆、及ビ文學部印章篇ヲ參照スベシ、

〔伊呂波字類抄〕伊雜物 印 イン 符印也

〔段注說文解字〕九上印部 印、執政所持信也、凡有官守者皆曰執政、其所持之卪信曰印、古上下通曰璽、周禮璽節注曰、今之印章、按周禮守邦國者用玉節、守都鄙者用角節、謂諸侯於其國中、公卿大夫於其采邑用之、是卽用印之始也、季武子於周禮爲守都鄙者、而以璽書追於魯君、是古有印明矣、必以印封書之而寔書於遠、必用布帛、檢之以璽、況印之王用縑素爲

書、而印之用更廣、漢官儀、諸侯王黄金璽駝鈕、文曰璽、列侯黄金印龜紐、文曰章、御史大夫金印紫綬、文曰章、中二千石銀印龜紐、文曰章、千石至四百石皆銅印、文曰印、从瓜卪會意、手所持之卪也、左傳司馬握節以死、於刃切、十三部、

〔運歩色葉集伊〕印イン

〔清輔朝臣集〕月三十首の中に

久方のおめのをしてや是ならん秋のしるし。と見ゆる月かげ

〔倭訓栞前編四十五〕おして　日本紀に符をよめり、押手の義成べし、朱墨を手掌に塗て、押て印とするの名也、よて續日本紀に印をよめり、西土にも玉押などいへり、

〔居龍工隨筆〕印判と一ツの様にいへど、各別のものなり、印は太政官舎の印、中務省の印にて、京中へ、諸國へ、もろ〳〵の事を言渡し、或はその事を承知し、又は物を請取おさむると云ふに用る、引からめては太政官の印なり、又その職その職に付て、私の印の寸方あり、判は役所々々に官人のならび居て、諸事を判讀するに、その判に定りぬれば、連署とて人々官姓名をかくなれば、かろき事には名許を書く、夫よりかろき事には、二合といふものを書、至て輕き事にて、名の文字を略して書たるものが今の書判なり、されば公家にて名を書時は判をかゝず、判をかく時は名をかゝざる、今もつて流例なり、しかるをいつの比よりか、韻學者といふ者ありて、名の二字をかへして一字にして用ひ、しかのみならず、性にあふの合ざるのとて、穴のいくつ明たるが、能きのあしきのといふ事まで出來たり、名を書たるに書判を居へ、又印判を押なり、

〔松の落葉四〕印

印は日本書紀のふるき訓に、おして、又はしるしとも見え、符をおしてふみとくにつけたるをおもへば、むかしより印はおしてといひしなりけり、此印といふものおほやけのやう、延喜式に、内印一面料熟銅大一斤八兩と見え、外印そのほかの印、みな料の熟銅いくらといふことをしるさ

れたり、公式令には、內印方三寸、外印方二寸半、諸司印方二寸二分、諸國印方二寸とあるを見れば、銅にてつくりて、內印のおもきはいと大に、つぎ〳〵はことのさまのかろきにしたがひて、やうやうちひさくつくらせたまへり、さて今昔物語に、守殿をとりよせて文をかく、かきをはりてふうじて、うへに印をさして、それを文箱にいれて、その文ばこのうへにも又印をさゝせてとあるを見れば、わたくしにもちひさき印をばもちひしことゝおもはる、又文をふうじて印をさすも、今の世に同じ、わたくしの印も、人の身のほどにしたがひて、ちひさきが中にも、大小のけぢめはありしにこそ、さてその印にゑりたるは、その人の名の文字なるべし、さおもふは、源氏物語橋姫の巻に、此袋を見たまへば、からのふせんれうをぬひて、上といふもじをうへにかきたり、ほそきくみして口のかたをゆひたるに、かの御名のふうつきたりといへり、御名のふうといへるは、ふうに名の印をさしたるをいへることゝなるべければなり、又日本書紀持統天皇の巻に、神祇官より木印ひとつをたてまつりしこと見えぬれば、さてのちはたよりよきまゝに、わたくしのは木にてもつくりけんかし、

〔令義解公式七〕天子神璽、謂踐祚之日壽璽、寶而不用、○解略內印、方三寸、五位以上位記、及下諸國公文則印、外印、方二寸半、六位以下位記、及太政官文案則印、諸司印、謂省、臺、職、寮、司等、各皆有印也、方二寸二分、上官公文、及案移牒則印、謂太政官及諸司、與諸國相報之類是也、諸國印、方二寸、上京公文、及案調物則印、

〔令集解三十四公式〕古記云、內印下諸國公文、則官事狀物數及年月日、亦印、鈴剋傳符署處、朱云、下諸國公文則印者、未知下諸國公文何、亦有何處可印、答依此文、下諸國公文則印者、然則送在京諸司公文者、各可捺本司印也、但捺內印者、御所可印者、凡攝津職爲京官、故下攝津職公文、可捺本司印也、不可捺內印也、又下攝津諸郡公文、可捺職印也、凡不同諸國之例也、職印則約諸司印耳者、或云、依攝津職事下公文者、捺諸司印也、依津國事下公文者、可捺內印者、貞不同爲一同、故不然可者、額云、

同也、額云、過所文不捺内印也、此私事書耳、不可云公文故者、穴云、下諸國謂凡在京諸司、出符移牒之類、皆經官額下者印之也、但過所是一者、无可經官、故印職印耳、(師同之)自餘公文者、攝津京職下諸國者、皆請内印耳、或云、諸司下攝津職符移牒等、若自餘事者捺内印、若因職事者外印也、師因此云可捺是非、或云、不用内印、一事已上如諸司、何者、政所在京之故也、此説合私思也、問、此職下符管郡者、請内印哉、答、師云、可捺職印、一端如諸國下符諸郡之時、未審、(中略)○朱云、外印者、太政官之印也、未知誰人可掌、答、長官可掌耳、下條讀了、太政官文案則印者、未知於諸司送來案何、答、可捺本司印者、但或云、捺外印可還者不收、額亦不收出符之案、捺官印還見符或義、穴云、私案太政官文案、謂下在京諸司文及雜案、是時行事正詔勅下國時、副官符捺外印下也、古記云、問、外印、太政官及諸司案文則印之、未知施行文者用之不、答、於案印二、故施行文皆可用之、又問、於案文印之、未知其限、答、在諸司案一无不印也、(中略)○朱云、諸司印、謂省臺寮司皆約也、或云、被管八省等寮司、更下給印也、上司之印可用者非也、依此文不見別者、但用印字不見耳、假用本司名等耳歟、額同、問、諸司印者、未知坊官及家司何、額云、坊官可給也、但家司不可給、穴云、寮司皆有印、(師依此説)、或云、寮司无印、此文諸司、謂省臺庫等是、故文云、進官公文者、謂寮司公文者、皆經省故也、此説爲不也、(中略)○穴云、依令條不合有郡印也、(師同之)朱云、郡可無印也、諸國印之故者、凡印皆官作給耳、如下條、案調物、謂三事也、非調廣可有他物之故、古記云、注過所符者、隨便用竹木、謂和銅八年五月一日格云、自今以後、諸國過所宜用國印也、

〔制度通五〕印章ノ事

本朝之制、有内印、有外印、有諸司印、有諸國印、

本朝印章ノ制、公式令ニ詳ナリ、令ニ天子神璽ト上ゲ、註曰、謂踐祚之日壽璽、寶而不用ト、ソノ下内印、外印、諸司印、諸國印、イヅレモ詳ニ其制度ヲシルス、内印トハ御印ナリ、今俗ニ御證印ト云、

ソノ文ハ天皇之璽ト云、四字ナリ、五位以上ノ位記、幷ニ諸國ニ下ス公文ニ之ヲ印ス、外印ハ官ノ印ナリ、ソノ文太政官印ト云、方二寸半、六位以下ノ位記、幷ニ太政官ノ文案ニ之ヲ印ス、諸司ノ印アリ、此ハ省、臺、寮、司等官人ヨリ上ル公文、幷ニ案、移、牒ニ之ヲ印ス、案、移、牒ト云ハ、文書ノ名ナリ、諸國印アリ、此ハ京ヘ上ル公文、幷ニ案、調物ニ之ヲ印ス、イヅレモ令ヲ考フベシ、

〔好古小錄上〕大寶元年勅書所用内印及大學寮印

試ニ晉前尺ヲ以度ルニ、内印方三寸、大學寮印二寸二分、大寶ノ制、晉前尺ヲ用ルコト知ベシ、養老以後ノ印製、公式令ニ見テ、其寸法曲尺ヲ以テ度ル者也、養老制令ノ日、晉前尺ヲ廢シテ、李唐ノ大小尺ヲ用ルコト知ベシ、余〇中略幷髫年、一友人ノ家ニシテ古印一ヲ摸寫ス、古度牒ニ所用ノ外印ナリ、又或人ノ家ニシテ、惺窩先生自ラウツス所ノ古印摸本一卷ヲ得、其後古文書印ヲ用ル者アレバ、輙タ摸シテ百餘ニ及ブ、就中大寶勅書所用ノ内印、天平ノ比ノ内印、及乾政官印、遣新羅使印、造平安宮職印、建武御璽文曰建武之寶篆體精好、製作絕佳、皆唐人ノ氣アリ、其餘ハ篆體古拙ミルニタラザル者モアレドモ、古昔ノ制度ヲ考フベシ、

〔令義解一職員〕中務省

大主鈴二人、掌出納鈴印傳符、飛驛函鈴、少主鈴二人、掌同大主鈴、

〔延喜式十二主鈴〕凡行幸從駕内印、幷驛鈴傳符等、皆納漆簏子、主鈴與少納言共預供奉、其駄者左右馬寮充之、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶八年二月四日乙未、是日天皇出自綾綺殿、遷幸二條院、〇中略神璽寶劍、鏡依例相從、驛鈴符、内印、管鑰等、留置承明門内東廊、

〔扶桑略記二十九後三條〕治暦四年十二月十一日己酉、宸居關白第燒亡、〇中略累代内印燒闕了、　五年〇延久元年四月七日癸卯、仰中務省令鑄内印、去年十二月十一日燒損也、

〔百練抄七六條〕仁安二年九月廿七日、子剋皇居燒亡、○中略內印雖在烟中不燒、樻燒失了、後新造納之、

〔儀式十〕奏年終斷罪儀

刑部省預修解文、進太政官、外記勘定作奏、訖大臣持奏文、率參議以上升殿奏、刑部省乃年終政書進止申、大臣奉勅語引退、即奏文幷解文二通尾書勅語云々、一通給刑部、一通留辨官、其奏文收太政官、並捺外印、

〔續日本紀八元正〕養老四年五月癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、望請、自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、差逃走衞士仕丁替、及催年料廻殘物、幷兵衞釆女養物等類事、便以太政官印印之、奏可之、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年七月丁酉、筑紫諸國、庚午籍七百七十卷、以官印印之、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年十二月己丑、始運平城器仗、收置於恭仁宮、　十六年二月乙未、遣少納言從五位上茨田王于恭仁宮、取驛鈴內外印、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字八年九月丙午、高野天皇○孝謙勅、今聞、逆臣惠美仲麻呂、盜取官印已逃去者、○中略北陸道諸國、不須承用太政官印、　壬子、軍士石村村主石楯、斬押勝、傳首京師、押勝者、近江朝內大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂之第二子也、○中略諷高野天皇○孝謙爲都督使、掌兵自衞、准據諸國試兵之法、管內兵士每國二十人、五日爲番、集都督衙、簡閱武藝、奏聞畢後、私益其數、用太政官印而行下之、大外記高丘比良麻呂、懼禍及己、密奏其事、乃收中宮院鈴印、遂起兵、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年五月己巳、自寶字八年亂以來、太政官印收於內裏、每日請進、至是復置太政官、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁四年二月丙戌、治部省言、承前之例、僧尼出家之時、授之度緣、受戒之日、重給公驗、據勘灼然、眞僞易辨、勝寶以來、受戒之日、毀度緣、停公驗、只授十師戒牒、此爲驗、於事有疑、如不改張、恐致奸僞、伏望、不毀度緣、永爲公驗者、許之、但其度緣、自今以後、僧者請太政官印、尼者用所司之印、至

于受戒之時、省並於度緣末、注受戒年月幷官人署名、即以省印印之、○下略

○按ズルニ、諸司印、諸國印ハ、官位部ノ各篇ニ載セタレバ、今省略ニ從フ、

〔續日本紀〕二十一淳仁 天平寶字二年八月甲子、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂任大保、勅曰、○中略宜姓中加惠美二字、○中略名曰押勝、○中略別聽鑄錢擧稻及用惠美家印、

〔續日本紀〕三十稱德 神護景雲三年七月乙亥、始用法王宮職印、

〔續日本紀〕三十一光仁 寶龜二年正月壬戌、自天平神護元年以來、僧尼度緣、一切用道鏡印印之、至是復用治部省印、

〔享祿本類聚三代格〕十七 太政官符

應令封家用印事

右撿格所起請偁、印之爲用、實在取信、公私據此□決嫌疑、而案公式令、唯有諸司之印、未見臣家□□愛有勢諸家、皆私鑄作、違官文外、皆僣印之、慣習成常、無復疑慮、夫事不獲已、人所必行、於公□□理宜容許、加之太政官去齊衡三年六月五日、封家調庸雜物、可放捺印日收之狀、下知已訖、然而□用之制未詳、至今猶放白紙、家司雜掌、爭論□絕、伏望令諸封家皆得用印、但一寸五分以爲其限、外於公家、備於私用者、中納言左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔權記〕長保四年十月三日甲子、早朝叙光朝臣持來成字印文、卽差茂方、遣內匠屬殿時方許、家印未鑄、九條殿例、任宰相給之後有此事、

〔錦所談〕二 印用名下字事

長保四年十月三日權記云、○中略持來成字印文、○中略コレ行成ノ成ナラム、按ズルニ酒人內親王ノ印ニ酒、賴長公ノ印ニ賴、或ハ除目大間書等ノ封書ニモ、皆名ノ上ノ字ヲ用ユトミエタリ、而

テ此印ハ名ノ下ノ字ヲ用ユル故コヽニノス、又日野薬師ニ藏スル所ノ眞夏卿ノ夏ノ字ノ印ハ、コレ僞物、證トスルニタラズ、

〔後二條關白記〕康德元年正月十九日、參殿、○藤原師實通父師 家中印字摸事、爲之如何、取御氣色、　廿五日、大臣之後、○師通昨年正月爲內大臣 印初所被行也、於東三條殿行使事、家司時範朝臣也、予著冠直衣、

〔百練抄七近衞〕久安六年九月廿六日、入道大相國○藤原忠實 取藤氏長者印、朱器大盤、渡左大臣○藤原賴長 此間喧嘩多端、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、有私請印并上表事、丑剋與隆長同車、向東三條、右衞門督公能、直衣、過路頭、相從告向、須臾右大將兼長、直衣、來、家司知經於對南廂申吉書、了入內寢、日向守有成朝臣、束帶、依親昵也、覽日時勘文、鑄印日時一通、鑄印時上日時一通、取副筭、雅樂頭泰親朝臣於侍所勘之、余○藤原賴長 見了留置、巳刻鑄印、昨日仰文章博士茂明朝臣、勘印字樣、是賴字古文也、用名上字例也、召宮內權少輔伊行書之、先召散位公基、大江公基、而依重服用伊行、於鑄師宅鑄之云々、先例無所見、 吉時勘申午申、而遲鑄成之間、午刻已過、仍用申刻、○中略

勘申御印字樣事

賴

右勘申如件、

久壽二年四月廿六日文章博士藤原朝臣茂明

擇申可被鑄御印日時

今月廿七日癸卯　時己午

久壽二年四月廿七日權陰陽博士安倍泰親

〔埋麝發香印一〕生江息島印○印影略、下同、　天平寶字三年四月八日、越前國人生江臣息島、東稻算計解文、

鳥豊名印　五月廿一日、足羽郡書生鳥部連豊名解文、

畫師池守印　天平寶字四年三月廿日、越前國人倭畫師池守、東稻算計解文、

足萬印　年月未審、小塔料木請下事知牂領調足萬呂解文、

桃尾印　元年〇天平寶字十一月廿一日、事娶同前券、〇田地沽券事柘殖鄉長〇伊賀國阿拜郡桃尾臣井麻呂解文所捺、

内家私印　天平十二年月日、法華經題跋字上所捺者十八町、此經京師壬生寺寶静律師恒持也、

〇按ズルニ、三體詩ニ、拜龍ガ吳姬ノ詩ヲ載セテ、自是三千第一名、内家叢裏獨分明トアリ、而シテ崔令欽敎坊記ニ、妓女入宜春院、謂之内人、亦曰前頭人、其家在敎坊、謂之内家人トアレドモ、薛能ノ詩ノ内家ハ、恐クハ後宮ヲ指セルモノニテ、此ニ云フ内家私印ハ、聖武天皇ノ皇后藤原安宿媛ノ用キ給ヒシ所ナランカ、後考ヲ埃ツ、

〔集古十種印章二〕弘仁九年三月廿七日　施東大寺物目錄所印內親王酒人印〇印影略

〔集古十種印章二〕延喜廿年九月廿一日　家牒所印藤原忠平公印〇印影略

〔大神宮諸雜事記一〕天平十一年十二月廿三日、太神宮政印一面被始鑄已畢、寸方二依神祇官解所被鑄下也、自爾以來太神宮司印傳來也、而太神宮印者、彼宮禰宜從五位下神主石門執行之時、依本宮解狀賜宣旨所被鑄下也、仰宮司家出之以前、代々宮司以神宮印公文雜務之時、禰宜共執捺之例也、寶龜三年正月四日夜、宮司比登宿館燒亡也、次太神宮司印、幷代々公文燒亡了、〇中略齊衡三年丙戌二月廿七日、太神宮司印一面被下畢了、卽神祇官下太神宮司符云、太政官去齊衡二年八月十日下中務省符云、得太神宮司從八位下大中臣朝臣伊度人去仁壽二年十一月三日解偁、太神宮司印依無分付司中公文田圖名籍符返抄等捺太神宮之印也、今以商量於事情不當、望請停宮印被下公印者、官加覆審所申有實、謹請官裁者、右大臣宣奉勅依請者、省宜承知依宣行之者、鑄作件印已了、宜付下被宮司者、送遣如件、宮司宜承知依件順用、符到奉行者、從五位上行大副兼內藏頭

大中臣逸志、正六位上行大史奈男代海山者、抑按舊記云、寶龜三年正月四日夜、宮司比登館燒亡、次司印公文共燒亡了、其後代々宮司以太神宮印捺公文來也、然間宮司伊度人與神主有訴、所申下印也、但爲氏人等依有辱耻、所不申燒亡之由也云々、

〔神宮雜例集二〕政印事

一內宮政印事

承曆三年二月十八日、外院燒亡之次燒失、同七月廿三日、如本鑄改、但以來月八日可始行吉書請印者、奉幣使神祇大祐大中臣惟經等、禰宜內人等獻事 宮司公義、少司宗道等供奉、○中略

延久三年五月二日六ヶ條　宣旨云

一應令停止印并文書等置私館兼儲尋進造印者事

右得元範去四月廿一日解狀偁、謹尋根元者、神領管多氣郡有爾鄉池上村深田之中、掘立木佛三體之由有其聞、遣使者令尋糺之間、彼村住人大荒木恒正聞此由、俄逃隱而運隱雜物之中、取口文櫃一合也、其內件彫造木印出來、卽不知何印、仍二所太神宮、幷太神宮司、及神三郡之間、令尋其本印之處、構寫太神宮司印幷多氣郡印、因之雖令相糺成文幷構寫之年限等、從父故僧仁増法印之時、依陳申相傳隨身之由、前後沙汰不知爲方、抑黨訴之間、所出來之訴、漸經數十餘年也、如此之間、不知誰理之一定、方今撿案內、太神宮司印、是自上古時、奉納於離宮廳調御庫、公文請印之時、先宮司著衣冠把笏、次鎰取一人著座、對於印櫃御封申、而令鎰取請印之後、更御封申畢、奉納御庫之例也、敢不奉納他所、而近代宮司等忘彼例、自著任之初、一任六年之間、奉納於私館、如此牢籠之程、寫取件木印歟、加之神領七箇郡、及當鄰國諸神戶文圖田籍等、同運移於私館、所申行神郡之雜務也、仍前々大司義任朝臣在任之時、運移件文圖田籍、勤行雜務之間、義任私館燒亡之次、彼文圖田籍既以燒失了、其後神郡之務、如迷暗夜、以之謂之、神事違例、何事過於斯乎、望請官裁、隨公定將絕神郡之狠藉矣者、權大納言藤

原朝臣俊家宣、奉勅、宜仰祭主元範朝臣、令停止印并文書等置私館、兼早尋進造印之者也、○中略

仰被下件宣旨之後、不經幾程、同年八月四日祭主元範卒去、仍件條々不被遂行、其中司印條、任宣旨、如舊奉納於離宮院也、

一外宮政印事

貞觀五年九月十三日被始置也、依禰宜外從五位下神主眞水解狀、神祇官上奏、被鑄下件印一面也、件印筒朽損之由、祭主頼宣朝臣、度々雖經奏聞、無其沙汰、祭主親定職重依經上奏、承德二年十一月十八日、并十二月十七日宣旨、同廿六日辰時到來、偁、應早令造改豐受太神宮政印、納銅筒壹口事、使左史生息長吉眞、使部二人、内匠寮長上清原國成、官人代紀武行、衞士等也者、爰權神主季生依兼大司目代、相儀明友、先下忌鍛冶内人是重并長上等、於一殿當日午時許始、事畢、官使等寄宿下馬所北邊元時宅内、廿八日奉鑄筒了、廿九日磨調、承德三年正月一日塗滅金了、爰宮司宣孝等參宮、番文之後、神主共議定、件季生神主令書銘矣、其時一禰宜頼元神主也、同正月十二日所用也、

(續日本紀三十一光仁)寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱、及大安、藥師、東大、興福、新藥師、元興、法隆、弘福、四天王、崇福、法華、西隆等寺印、各頒本寺、

(集古十種印章三)弘福寺印 印影○略 天平廿年二月十一日、弘福寺牒所印、

東寺司政印 印影○略 延暦廿三年六月廿日、文書所印、

大覺寺印 印影○略 寛平九年六月廿三日、近江國金勝寺廳官符所印、

(集古十種印章道如)元興寺印 河内國金剛輪寺藏、天平勝寶四年、藥師寺僧仙釋所書寫、修多論所印、

(埋麝發香印一)東大寺印 肥字印影○略

天平勝寶八歳六月九日、當寺境界撿使等連署之大幅圖、及年月未審造東大寺司送西隆寺三綱

執印

牒、又正倉中白毛氈之端等、

東寺大殿印影○印略　天平寶字三年六月廿八日、□工所梶米鹽算計書、

東寺綱印　六年七月廿九日、東大寺三綱送造東大寺司牒、

〔桂林漫錄上〕古印

西寺目代ノ印ハ、(京師九條ニ在リ、前少僧都慶俊開基、)姫路ノ醫官山田安貞秘藏ナリ、伏水ノ一古家ヨリ得タル物ナリト云フ、百濟寺印ハ、(和州十市郡ニ在リ、皇極天皇始メテ建ラセ玉フ、今大安寺ト云フ、)予(○中略桂川眞)友北條鉉ガ所藏ナリ、何レモ希世ノ珍玩ナリ、

〔律疏職制〕凡在外長官、及使人、於使處有犯者、所部屬官等、不得即推、皆須申上聽裁、(謂太宰國郡等長官、及諸使人、於使處有犯者、所部次官以下、及使人所部之司官屬、並不得輙即推鞫、若無長官、次官執印者、亦同長官、皆須先申上司聽裁、)若犯當死罪、留身待報、(謂録犯告之狀、合死罪者、散留其身、待上報下、若官封印及管鑰等、付知事次官、)違者各減所犯罪四等、

〔令義解一職員〕太政官

少納言三人(掌奏宣小事、○中略兼監官印、謂唯得監請印、其印者、依律長官執掌也、)

〔令集解二職員〕讃云、兼監官印者、掌捺官印、但印實者長官掌、若無者次官掌耳、何者、職制律云、在外長官犯當死罪者、留身待報、注云、若留身印及管鑰等、付知事次官者、是知長官掌之、又倉庫令云、置公文庫鑰鎰者、長官自掌、若無長官者、次官掌之者、令釋云、鑰鎰是輕、尙長官掌之、鈴印是重、亦長官掌故也、

〔類聚三代格三〕太政官謹奏

佐渡國今置掾一員、

隱岐國今置掾一員、

右件兩國、僻在邊遠、官員乏少、居上之人、若有事故者、則與代之掌印、求之道理、良不穩便、伏乞更置件

請印

員、以備職務、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

大同四年二月十九日(○又見二日本後紀一)

(類聚三代格五)太政官謹奏

加置諸國介掾事

甲斐國　周防國

右上國今置介

能登國　丹後國　石見國　長門國　土左國　日向國

右中國今置介

飛驒國

右下國今置掾

以前謹案令條、上國有介、中國無介、下國無掾、今件等國、或前爲上國、未備介職、或國務稍繁、官員猶少、或長官有故、主典執印、論之政途、事非穩便、伏請甲斐周防新備介職、自餘中國同置介、下國又置掾、以適變通、(○中略)臣等商量、具件如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

貞觀七年三月十九日

(朝野群載二十二諸國雜事)國務條々事(○中略)

一受領印鎰事

擇定吉日、可領印鎰、但領印鎰之日、卽令前司奉行任符、乃後領之、又著館日儀式、前司差官人、分付印鎰、其儀前司差次官以下目以上一兩人、令賚官鎰、令參新司館、卽官人就座之後、鎰取書生、以御鎰置新司前、(其詞云、御鎰進、)新司無答、(或云、答云、與之、)

(伊呂波字類抄志疊字)請印

〔令義解一職員〕太政官

少納言三人掌奏宣小事、○中略請進鈴印傳符、進付飛驛函鈴、兼監官印、謂唯得監視諸印、其印者依律長官執掌也、

〔延喜式十一太政官〕凡左右辨官各錄入奏幷請印文書、及請進驛鈴傳符等色目、牒送少納言、少納言外記錄入奏請印及請進驛鈴傳符訖之狀、牒辨官、

凡太政官下諸司諸國符、隨事請內外印、其下須詔書、及預官社神、得度還俗、增減官員、遣驛傳使、幷下驛鈴、新任國司、幷諸司在外國者赴任、五位以上出畿外、出納兵庫器仗、用正稅、徵免課役、輸調庸物色、及賜人官物、給諸國者內印、給京庫者外印、公地封戶雜田、還收穀、百姓附籍移貫改姓、蕃人還國、御馬、廢置郡驛、斷罪禁制、放賤從良等類、並請內印、餘皆外印、諸省請印下諸國符、亦各准此、民部省符、治部國分僧文、宮內采女符、皆請內印類也、

凡少納言所奏請印文、過五十張密奏、

凡請內印文、作二通、一通奏進、一通施行、

凡請印文書初入之日、外記細加撿察、明日捺印、

凡內印公文、若脫錯應改者、少納言先申上、然後奏請印、

凡式兵二省、請印准蔭成選等位記、先令印廿張已下、後更定日、參議於辨官結政所捺了、所須丹膠等物、預先請受、

〔延喜式十二內記〕凡在外官飛驛奏事者、大臣奏畢、卽令內記作勅符、大臣自持昇殿上奏覽畢、少納言、中務輔、內記、主鈴等請印、封函發遣、事見儀式、

凡封驛傳勅符式、少納言、中務輔、主鈴等請印、准飛驛式、內記主鈴封函、官吏發遣、事見儀式、

〔延喜式十二主鈴〕凡下諸國公文、少納言奏請印狀、訖主鈴印之、但勅符幷位記、少納言印之、

〔延喜式十八式部〕凡考選目及位記請外印、補任文學家令、銓擬郡司者、並直申太政官、

凡准蔭成選、幷臨時位記等、一度以廿枚已下爲請印之限、

〔延喜式二十三民部〕凡用正稅者、十束以上、皆請內印、但用畿內官田稻者請外印、

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月丙申、太政官處分、凡位記印者、請於太政官、下諸國符印者、申於辨官、
閏十二月丁巳、有司奏、自今以後、公文錯誤、內印著了、事須改正者、少納言宜申官長然後更奏印之、
〔續日本紀八元正〕養老四年八月丁亥、詔、諸請內印、自今以後、應作兩本、一本進內、一本施行、
〔類聚符宣抄六〕請印官符事
右官符、少納言外記加覆勘、後日捺印、而即日捺、頗不能勘、自今以後、宜入日細勘、後日捺印、當番案主亦宜知之、

延曆十三年六月十五日

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月乙亥、勅、用印之事、應據令格、宜諸國觀察使印、一從停止、若事可行下、准諸司請印、
〔類聚符宣抄六〕大納言清原眞人宣、請印位記、若七十張已上、自今以後、須三四張捺印、而後令參議踏印者、

天長九年九月十九日　少外記韓室諸成奉

右大臣宣、少納言奏、歎多詞長、久煩天覽、於事無便、凡厥奏文、過五十張已上、密奏請印者、

承和六年閏正月廿日　少外記菅野朝臣繼門奉

少納言代
比日少納言、事員依病不上、因茲請印之事、既致擁滯、右大臣宣、少納言等病痾之間、宜權以辨大夫令請內外之印者、

貞觀六年六月四日　少外記滋野恒蔭奉

左大臣宣、頃年所行、內印文書、滿五六十通、乃令捺印、若不及此、更無請印、其間公務稽擁、乖違舊例、今須內印官符之類、一枚以上、多少隨有、依式撿察、每日捺印者、

延喜八年五月廿六日　大外記阿刀宿禰春正奉。

中納言藤原卿宣、丹波國定額願興寺氏人等申請、可停講讀師補任之由、依理不盡所不判行也、而其官符在昨日廳覽之中、仍從返却、不令捺印、今如聞、官文殿使部大友安則、紆作件符、號先入文、入於外記、受案主史生、偏思有例、輙以受取者、凡辨官請印外記報牒、式條已存、何致違失、而載牒之外、別有受取、是則案主積習成例、外記少納言不加監察之所致也、自今以後、宜從停止、若有忽書無止可入者、加署之史、慥示外記、知實觸少納言、仰案主、乃聽加入踏印之、復待請印牒、乃載報牒、立爲恒例者、

天慶四年五月八日　大外記伊福部安近奉

左大臣宣、但馬國申請治安二、三、萬壽元、二、並四箇年、無直交易、年別絹佰玖拾捌匹、糸捌佰參拾肆絢、可免除之官符、今日請印捺漏已了、宜仰民部省、以白紙□□且令勘會公文者、

萬壽二年十二月廿九日　大外記象主税權助助敎伊豫權介清原眞人頼隆奉

〔内裏儀式〕少納言尋常奏式第五

皇帝御紫宸殿時、左近衞府將監一人、引近衞一人、開左掖門、(他時敎之)大舍人詣延政門叩門、少納言付奏案於闈司、闈司就位奏云、少納言姓名(我)、申給(牟止)(須流)政(乃)案文奉(止)申、勅曰、將來、升自南階進、差退待御覽訖、勅曰、令申、闈司傳宣云、姓名等(乎)令申、掃部寮立漆案於版下、少納言就位奏曰、太政官奏(久)、某國某使等(乃)進(禮留)若干剋(乃)鈴若干口、若干剋傳符若干枚進(止)申、勅曰、收之、稱唯、又云、某事(爾)緣(氏)、某國某人(爾)給、若干剋鈴若干口、若干剋傳符若干枚、官符若干枚、令賜(流)鈴若干口、傳符若干枚、官符若干枚(爾)印賜(止)奏、勅曰、取之、稱唯、喚主鈴名、主鈴稱唯、少納言退立廊前、主鈴就櫃取印、少納言引復就位、主鈴捺之、少納言監之、訖奏云、印捺(都)、勅曰、給(部)、少納言稱唯、引主鈴收印退出、掃部寮撤案、若有可毀文者不捺印、勅曰訖、稱唯、即奏云、緣其事賜(止)文若干枚、依事改毀(留)、勅曰、毀(禮)、稱唯、又奏季祿位祿馬料事者捺印、勅曰、訖、奏云、可賜其祿人等總若干人、(位祿稱五位已上若干人、季祿馬料稱司々人等、)就中中務省申(世)(留)人

散若干人、式部省中(位曾)若干人、兵部省中(位淩)若干人、可給其色物若干、於大藏可給若干、於國々可
給若干、可賜事(乎)申賜(止)奏、

七日宴會式第六

所司供張、及宴會之儀、一同元日、群臣未入前、大舍人叫南閤叩門、闈司奏云、位記○(記下恐脫置字)印賜(乎止)
少納言姓名叩門故(爾)申、勅曰、令奏、闈司傳宣云、姓名乎令申、少納言持位記筥、率中務輔一人就版位、
奏云、位記若干枚(爾)請印(止)申、勅曰、取之、少納言稱唯、持位記筥授中務、輔喚主鈴名、稱唯、少納言退跪
庭前、主○(主下恐脫鈴字)就□櫃取印、少納言引復本座、印位記、中務輔執位記一端印訖、主鈴少退、奏云、捺印
畢、勅曰、賜之、少納言稱唯、引就櫃邊印、主鈴便退出、少納言更就版位、取位記筥、輔即退出、少納言捧位
記筥、升殿授大臣、(頃年所行、於殿上、不必用此儀、)大臣執以奏覽、訖大臣喚内豎、内豎稱唯進跪、大臣宣喚式部兵部、
内豎稱唯出喚、二省輔入自東閤、跪殿庭、大臣喚式部、稱唯升殿賜位記、復跪本所、次喚兵部、如前、訖相
對捧位記筥出、

〔西宮記 臨時六〕内印 上卿著陣、先見内文、(儀在政事中、有諸文者、上卿著陣、仰外記覽、)
上卿著陣、(著外座、納言參議一人可相具、)少納言覽内案、(有儀制文、少納言就膝突、申事由之後覽之、擬書杖、候小庭、上卿目少納言、少納言稱唯、就膝突、進文、上卿取之見了返代不
擬返賜、少納言取文加杖退出、或少納言有不膝突者、凡人不可爲例、)少内侍出、(出南殿、具階上、)少納言持内案、(付内侍、)内侍進御所奏之、(地下内侍付女藏人、)内侍
出、(出南殿、賜階上、)上卿進倚、(敷小庭、臨日經宣陽、西廂上、開内侍宣陽、)著座、(有臨時位記者、上卿令持位記於内記、付内侍、内侍奏聞、返給、上卿還倚、取宣命持内記、著座召近衞府、少納言等
立廊下之時、少納言覽官符、召中務輔、賜位記、置少納言印位記之後、輔還官之後、印官符、)上卿召近衞府、(大將召藏人、)召將監、候小庭、(臨日候立、隔日壇上、)上卿云、印
文、將監稱唯、將監少納言主鈴召印、(將監出自敷政門、少納言等入自日華門、立具敷政門擬門、日立壇中、)掃部寮立案、(立軒廊中間、)少納言就
案、(主鈴置印案上、將監在南、)少納言覽官符、(有官符者、不覽案、)上卿見了返授、少納言持官符歸案下、主鈴取官符捺之、畢少
納言以下共納印、掃部撤案、少納言退出自日華門、無内侍奏聞以命婦女藏人爲代、無中務輔者、可奏
聞用近衞將、無主鈴者、又用中務錄主殿屬爲代官、□□陣覽官符、(隨奏開)上卿著陣、外記覽官符、(入筥、)上卿

就御所奏聞、返賜著陣、外記取官符退出、上卿召將監之儀如常、少納言覽官符、同例陣覽請印、次請印位記有恒例、

〔西宮記臨時六〕二省請印位記事（在年中行事）

上卿著廳、式部丞錄就版、上卿召（す、）共唯著床子、丞錄立申云々、次錄披文讀申了、上卿云、給（疊、）共唯退出、外記請印之間、重參入著床子、錄持宮授史生、史生開文、（目時進授）史生申云、某文（署）印捺、先印位記了、史生申云、上卿云給（へ、）史生唯錄受文、次印官符、（兵部同之）治部請印度緣等、准上儀可知、（枚數多時、於結政請印、參議著行、）

近代外印文、（近代所見也、此外極多、好可尋知、）倅料差米官符、下八省官符、（或牛紙文、叙府勅任符、）計歷文、諸國司申請條々文、諸國申充符、（充符成後、有不輸者、可申開用之、）大粮文、諸國非違國掌任符、朝集移返抄、（式部申）諸寺別當三綱任牒、諸國申承知文、不給傳符文、割公廨充國儲文、諸國減省文、（給民部）不堪文、（下所司、中紙）下陸奧交易沙金文、申不動鉤匕官符、諸宮月料文、度緣、六位以下位記、下讃岐國造石文、齋王入京文、下諸國舂米文、採銅文、給不動鉤匕官符、（雜止官符、官寫一通爲長案、請印後、外記又寫一通爲長案、須七道官符、自官下京職、京職各須行下一通、一國官符尋例遣別使、）

〔西宮記四月〕請印位記事

十一日式部、十三日兵部、十五日式部、請印樣位記、

上卿著廳、（外記）式部丞錄立版、上卿召（爪、）丞錄稱唯著床子、丞立申云々復座、錄立讀申、上卿云、給（倍、）共稱唯畢、（二省共申時、兵部錄讀申了、上卿與奪、）次辨官申文、（或無）少納言外記丞錄入著、外記覽文儀如常、（外記覽文了、錄以宮授史生、）史生展位記申云々、上卿云、捺（倍、）史生稱唯、先踏位記、史生申云々、上卿云、給（倍、）少納言稱唯、史生就案目錄、錄進受宮退出、丞退、次史生捺官符、

〔北山抄七都省雜事〕二省位記請印事（不被引辨官、）

治部度緣請印事（同二省請印儀、）

延長之間、唐僧二人度緣、於結政所請印、承平元年八月廿六日申、延長千（○千本作十）一人度者度緣、於同所

請印、天慶之間、東大延暦、法性寺法師等度緣、於同所請印、安和元年、又有此例歟、

結政所請印事

上卿於陣座見官符、卽示參議、（其人可著之由、可示外記歟、）參議起座、出自敷政門、率少納言外記、著結政所、令請印、（更不加諸事、）

參議座南面、（北一間中央、）少納言（西面、）著右少辨座程、外記著史座中間、史生辨座與史座之間於土間捺之、如度緣多枚數之文、史生等相替捺之、

內印之事

上卿著陣中文之後、未覽外文之前、外記覽內印文、其儀如覽外文、（上卿密計枚數、或以指觸座上撥丁數云々、）但外記退立南廂西第三柱下、（東面、或例云、第三間北面云々、若有置言此文可歟、但有議事入內後可問定、）上卿入內之後、內侍、近衞將監、主鈴等具畢、少納言插內案於書杖、居小庭、上卿揖之、少納言稱唯、就膝突進之、上卿開見返給、（近代或不奏返、）少納言取副文杖退出、內侍出南殿艮角、少納言付內案、內侍進奏覽、出南殿巽角、上卿起座、度小庭至階下、（堂上面歟、）四拜、內侍宣、（或記云兵、部或舉久、）上卿還（可右陣歟、）著本座、召近衞府、（大將若召政人、）將監在陣座稱唯、參進候小庭、仰云、印、稱唯退出、掃部寮立案於軒廊東二間、少納言主鈴（持印板、監事、）將監等入自日華門、出印、（此間少納言立長樂門前西頭、將監立東頭、並北面、）少納言就案下、將監留立軒廊南三許丈、主鈴置印板於案上、取官符授少納言、（有官符者、經入、內案不覽上卿、）退立將監之西、少納言著膝突進上卿、上卿見畢返給、少納言還就案下、令主鈴捺印、畢如初納印退出、掃部撤案、若豫書濕覽者、少納言就膝著申云、濕覽（太留）其文云々、橫刺（留）候（牟）、上卿許諾、橫插內案書杖覽之、（若多枚數者、入官先覽云々、猶可申橫刺覽歟、）若內侍不候、令藏人申代、（承平五年二月五日、代又有障、上卿持參云々、若令藏人奏歟、有疑、）無主鈴者、以中務錄主殿屬等爲代官、（中務錄依有永宣旨、更不申代官云々、）若上臈候陣者、先開案內行之、一上在南座者、申案內後、以官人令引下膝著、（結政之時、內侍奏案內、如常儀、頭藏人奉仰、持參議政直廳、）若無內印之日、急書可請印者、（鹿島使官符、受領任符等類也、）上卿令奏事由、令持官符於外記、就御所奏覽、還著本座、外記持來官符、目令退出、次召將監、請印如常、或請印

畢、少納言返奉官符、上卿召外記給之、若無少納言、以少將爲代、

請內印雜事

凡太政官下諸國符、隨事請內外印、其須下詔書、及預官舍〇舍恐社神舍、〇舍恐衍字得度還俗、增減官員、遣驛傳使、并下驛鈴、新任國司赴任、五位已上出畿外、出納兵庫器仗、用正稅、徵免課役、輸調庸物色、及賜人官物公地封戶雜田、還收數、百姓附籍、移貫改姓、蕃人還國、御馬、廢置郡驛、斷罪禁制、放賤從良等類、並請內印、（給諸國者內印、給京庫者外印、）餘皆外印、諸省請印、下諸國符、亦各准此、〇中略

下諸國符、五位以上位祿事、

下諸國符、男女王祿事、

下諸國符、又任掾目史生任符事、（讓任符注依例任用文）

下諸國大少領、并主政主帳等任符事、

下諸國符、交易進上修理諸司料藁事、

下諸國符、復任守以下史生以上任符事、（復任符不注依例任用文）

下齋宮寮符、主神司任符事、

下諸國符、損田使某姓某丸等事、

下諸國符、勘判報符事、

下諸國符、科祓神社預等事、

民部省下諸國符、收給封戶事、

下諸國醫師、并弩師任符事、

下諸國符、充民部省主計主稅寮等官人以下食料白米事、

下太宰府符、并管內統領任符事、

下諸國符、撿風水損田使等事、

下太宰府符、充八幡彌勒寺造佛料穀事、

下諸國符、給諸司官人季祿事、

民部省下諸國符、任中四箇年間減省、年々交替無實公廨稻事、

下伊勢國符、奉太神宮月次幣帛使事、

民部省下諸國符、新委不動穀事、

同省下諸國符、用不動穀事、國用符可委載之色例文也、非官符、

同省下諸國符、運納全倉不動穀事、

同省下左右京職符、改姓某姓某丸事、

治部省下諸國符、度補國分寺僧尼等事、

民部省下諸國符、減省任中四箇年間出舉正稅公廨雜稻事、

下遠江國符、以不動穀、改充造伊勢豐受神宮料穀事、

下諸國講讀師任符事

下諸國符、充內供十禪師供養米事、

下諸國符、充以不動穀、左右坊城修理料事、

下諸國以符○符缺字◎正稅符、女孺某姓某丸事、

下諸國符、給諸司直丁歸鄉粮事、三百束

民部省下京職、其國符改居某姓某丸事、

下其國符、入京故守介後家事、

民部省下諸國符、收給品位田事、

同省下ム國符開用賑給高年鰥寡孤獨料不動穀事、
民部省下某國符除帳度者ム姓ム丸事、
下其國符某丸向溫泉料正稅稻事、
下諸國符充隼人司申女嬬大角隼人ム丸歸鄕料事、
民部省下某國符開用位祿料不動穀事、
下其國以正稅符充諸司大粮米事、
五位已上就事出畿內幷諸國事、
民部省下ム國符補采女ム姓ム丸事、
下諸國符奉幣使某姓ム丸事、
下其國符給ム國押領使借物事、
民部省下其國符班田事
同省下ム國符給復其年百姓調庸等事、
下京職幷其國改居符事
下某國符採進法性寺御願堂料材木事、
下山城國符充修理宇治御網代料正稅稻事、
下某國符充修理女官廚家雜舍料錢事、
下某國符給御匣殿藏人ム姓ム丸拜氏神料正稅稻事、
民部省下某國符開用齋宮寮年料米代不動穀事、
請外印雜事
下諸國朝集調庸大帳稅帳等返抄事、

下諸國符、禁制殺生事、

下諸國符、早採進年料銅事、

下治部省符、度補諸國國分寺僧事、

下民部省符、承知諸國充行位祿季祿女王祿等事、

下治部省符、得度諸寺年分度者事、

下諸寺符、補寺司等任賤事、

下諸國國司計帳事

下諸國承知不給傳符事

下諸國符、免田租例損之外一分大半事、損不堪符地子田、不在免除之色、官所定也、不在事勘上宣之謂云々

下神祇、宮內、藏解由官省使符、充諸司要劇事、

下諸司符、充大歌所月料事、

下左右京職符、東西悲田院隱獨體幷養病孤子料事、

下諸司符、充中宮職御月料米事、

下諸國符、減省任中四箇年出舉雜稻事、

下神祇官符、補坐諸國神社神主等事、

下民部省符、除帳ム姓ム丸事、

下諸國任中四箇年間、割公廨利稻十分之二充國儲事、

下大藏省、充釋奠座主問者祿事、

下式部省符、補木工長上某姓某丸事、

下諸國符、充內竪所糙米事、年料之內

下民部省符、充源氏幷諸司月料米事、

下信濃國符、以牧田地子稻、充行年貢御馬冬芻直事、

下諸司符、充作物所預進物所膳部等衣服幷雜工雜用事、

下神祇官符、科祓伊勢齋宮大宮司某姓某丸等事、

民部省下諸國符、充左馬寮中國飼御馬秣事、

下宮內省符、充齋院正月元日節儲料雜物事、

下民部省符、改居某姓ム丸事、

下諸國符、每年耕作不堪佃田事

民部省下諸國符、免除前司任終調庸率分事、

下式部省符、勘籍木工寮工部等事、

下諸司符、補大學諸堂得業生陰陽得業生事、

下民部省、開用諸國不動倉事、

下大藏省符、給親王幷乳母秋冬衣服事、

下諸國符、早充行位祿事、貴符

民部下伯耆國符、任中四箇年間、庸綿兩數准調綿進納事、

同省下諸國、准見舉正稅數、任中四ヶ年間舂進白米事、

下諸司符、充掃部寮申供御帖張席用物事、

下式部省符、承知五位已上上日事、

下中務省符、充諸司月料紙墨事、

下民部省符、開用諸國賑給高年幷鰥寡孤獨料事、

民部省下諸國符、免除前司以往年々交易欠幷勘出數類事、

下式部省符、補諸司長上等任符事、

下諸國、檢非違使任符事

下加賀國符、充賀茂齋院醸酒酢料米事、

下諸國符、令辨行雜事若干箇條事、

下宮内省符、諸司所々三年一請鋪設事、

下大藏省符、充嘉祥寺地藏悔過料事、

下讃岐國符、國掌ム姓ム丸事、諸國亦同

下諸國符、給諸司月料米事、

下諸國符、充春宮寮米、十一月新嘗會料物事、

下太宰府符、會赦十郡司ム姓ム丸事、

下尾張國符、百鵜食行料物、諸國貢御馬使食料事、

下民部省符、免石見國言上疫死百姓事、

下同省符、返上前春宮坊仕丁事、

下諸國符、令立春宮坊御厨事、

下其國延期符、責進年貢御馬事、

下諸國符、承知損田損戸事、

下陸奥國符、交易進沙金事、

下周防國符、減行錢鑄料雜稻事、

民部省下諸國符、充御幷中宮年料薪事、

民部省下諸國遠進納舂米事
下式部省符、課試針生ム姓ム丸事、
下民部省符、附帳其國言上、新委不動穀頴、幷塡納官物舍事、
民部省下ム國符、免除澇蕩年料進官庸米事、
下讃岐國符、造進內裏八省豐樂院宮城幷壇石事、
下諸國符、殊致精誠進物勤修安居事、
民部省下ム國符、免除一任四ヶ年間無直交易事、
下諸國符、追捕群盜幷海賊事、
下諸國符、充諸司所々年大粮米事、
下諸國、營作無身百姓口分田、可辨進濟調庸未進事、
下式部省符、補筑摩御厨長ム姓ム丸事、
下民部省符、免除ム國年々稅、長不受領穀頴事、
下治部省得度臨時度者某姓某丸事、
下神祇官符、令行御體御卜筮事、
下其等國符、齋內親王入京儲料雜物等事、
下ム國符、停止諸封家以當任所進物寄前司未進代事、
下某等寺符、別當右少史某姓ム丸事、
下民部省符、充新嘗會供御幷粟事、
下同省符、其國勸出修理去年風水流損堰溝河防料稻事、
有奉勅作上宣、上宣作奉勅之符、又如鹿島使符者、依无右状、不見奉勅上宣、

異損過分不堪符事、地子田不在乗歟之色官所定也、不在率勘上宣之調也、或有率勘作上宣之符、或有上宣作率勘之符、如異島使符名依无右状不見率勘上宣、

〔扶桑略記二十三裏書〕延喜九年二月十七日癸丑、於辨官結政、令請印遣在唐僧中瓘牒状、

〔日本紀略三村上〕天暦元年八月十七日戊戌、請内印、是可停除皰瘡、諸社奉幣讀經官符、給五畿七道諸國也、天皇上皇(朱雀)共備皰瘡給、

〔日本紀略三村上〕天暦三年二月七日辛巳、請外記印、是太政大臣七十賀料、大辨已下奉地子稲官符請印也、

〔日本紀略五冷泉〕安和元年正月十七日辛丑、今日諸卿著結政座、請印延喜式五十卷、

〔小右記〕長和五年三月七日辛亥、今日依請印京畿内七道諸國神社奉幣之官符、(是告御即位於天神地祇之使)八日壬子、參内、巳一剋請印、所司參否問外記頼隆、申云、少納言庶政、主鈴爲象參入、左近將監武吉申參入由、未參仰可催遣之由、○中略外記頼隆申云、山陽道使神祇大副大中臣守孝、有所煩不能罷向、請以大中臣惟兼可遣由、依未請印官符可改惟兼之由、仰右少辨資業、余○實資藤原著南座、召外記、外記頼隆參入、仰可奉官符之由、以外記文任奉之、(畿内七道使官符八枚、七道幣料以正税可充之官符七枚等也、合十五枚、)以右少辨資業奉覽辨政、卽返給云々、可令請印者、其次傳命之旨、而參行所悦申也、召外記、外記文任參入、給官符退出、余召將監(其副政人)扶宣、稱唯參入、居廊西砌上、[illegible]宜仰之、稱唯退出、少納言庶政、主鈴爲象、將監扶宣等經廊南入座下、(先是掃部寮立案於座中)主鈴先進置官符於案上、左大辨指示、仍更取官符(少納言可仰歟)就納印櫃下出印置案、次少納言進立案東頭、少納言執官符著膝突進之、余取見訖返給少納言、少納言就案、主鈴捺印、余戒云、不可捺漏、其程太近、仍所仰也、左大辨同仰、主鈴落官符於案下、官ノ助更少納言相共退出、次撤案、余起座、而障腋外記文任申、有捺漏官符之由、又更不可捺、可有忌憚、仍示左大辨、左大辨丹薄侍歟、問左少辨資業云、二枚捺漏、告主鈴、並捺漏枚數太少也、是白晝也、少納言庶政極愚頑也、召仰不可、

披露由云、○太宰官符云下略

〔日本紀略後一條十三〕寛仁四年四月十一日壬辰、請印太宰府遣高麗國返牒官符、

〔中右記〕寛治八年十月十日、有政、依可請印伊勢外宮役夫工等官符也、(中略)○上卿先被著奥座、今日外宮判官主典被補官符内印也、(中略)○今日下遣造宮使許官符宣旨等、一々見了後、以行事史廣親相具書杖、給造宮使之、使者從明旦下向、　十四日、彼造宮使依吉日、具件官符等可參宮由所申請也、仍今日外印内印、一日之中所急行也、(官符目六在別紙)

大治五年三月四日丙午、今日中宮廳(○崇徳后藤原聖子)有請印事、巳時許、屬右大史惟宗孝忠引率史生一人、(○註略)藏人一人、(藏人等依故障、用史生紀爲成)職掌一人、(國久)召使三人、(着布衣冠)行向外記局請之、當少納言座前立案其上、置印唐櫃、(内匠寮、當日早旦進於外記局云々、印櫃尺一箱、并器鋼入赤、小唐ニモ、鋼居印盤上、)屬以下著座、(屬著外記座末、史生藏人著一分客座、職掌已下在結政壁下、已上外記局之儀、依北邊舊例也、兼仰金事忠、)權少外記惟宗俊弘加封、出印唐櫃、(件櫃無緒、仍以紙也、然爲緒加封云々、孝忠語之、院訪之時、印唐櫃、右局以苧爲緒、紙可付、彼例依可有違々、只以紙爲緒者、)外記使申、冠取印唐櫃、(居印盤)授宮召使、(於假粧間授之)屬已下起座參宮廳、(召使二人前行、以一人持印櫃、次屬東帶、次史生藏人職掌已上、騎馬布衣、)案廳東第一間、(居二階案、件案白木據日、召木工寮、)皆撤印案、敷弘筵、被放垂布等、東第一間副東壁南北行敷高麗端疊一枚、(北上西面)居机肴物前、(毎机二前、脚)爲亮座、副南遣戸東西行敷紫端二帖、居肴物五前、爲進座、(東上北面)副西遣戸敷同疊一帖、(南上東面)居同机肴物二前、爲屬座、北庭主殿寮引幔門、(東第一間與柱南北行引二一帖、西折引二帖、置幔門五尺、又引一帖、)當東第一門幔中庭立案、置印唐櫃、(居印盤)秉燭以後、亮顯輔朝臣、有業、權大進泰兼等著座、職掌兩三擧松明、亮座上、屬座前立燈臺擧燈、盃酌一獻、(屬宗重爲亮手長、史生爲成爲進手長、)次屬孝忠覽吉書、(入覽筥、播磨近江等國封各百斛、延久六年、藤始有請印、加賀播磨近江等御封各百斛也、而今度始日、始日、成加賀國御封百斛返抄、今日依成加今二ヶ國各百斛所成也、)亮成外題、(下賜可成返抄、亮加判、)返給、即成上返抄、予(○藤原宗忠)令持覽筥於史生爲成參殿下御方、申事由於女房、(依行幸殿下有御出)仍予衆中案内之處、只可申女房之由有仰、先例先覽大夫、次殿下、今日大夫不被參、仍不覽歸、著座之後、亮以加判、此間少進光房參著、進加吉書之判、次返抄

三枚（加賀腰結日成之、近江今日成之、）行請印、史生成則、取返抄之覽筥立案北、置覽筥於案下階、披笏屈膝申云、御封開久、亮令自稱唯、次開唐櫃、取出鐵尺丹器等、置唐櫃於案下階、文置□盤上、又申云、文三枚（眞）印（天）指寸、亮自稱唯、請印畢、又申云、印（天）指（章、宗重云、印天指□中後又可擧唯也、於結政請印少納言稱唯、仍史生不擧、至于此請印者、尤可擧者、）次取入物具於唐櫃、如本置印盤上、加亮封、御印盤上於宮廳敷絹、（茵等、）（布）又疊紙土器入水（天）漬丹（天）、他史生臨期居寬、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、有初請印幷上表事、○中略　巳剋鑄印、○略　吉時剋申午申、而遲鑄成之間、午剋已過、仍用申剋、皇后宮權大進憲親（執事、東帶）取印盤、（置在其上、結白布覆之、）上入中廊北簀子脇戶、自簀子西進自對東簀子北邊、次進入自南第三間、（余座間也、）置余（○藤原賴長）座前北方、（南北）余出自北障（東第一間、）着座、（東面）親隆朝臣（束帶）候中廊北簀子西第三間、（此間作合、無座）大從大江久兼（年預、束帶）、銜封返抄五枚（加賀、美濃、美作、伊豫、播磨、）於覽筥、自南出馬道參入、跪北砌下（立外、）置親隆朝臣前、親隆見了、如本盛筥、插笏取覽筥西進、自對東簀子北進、膝行昇、自余座間、取覽筥置座前（不披筥、所進文書、被覽之由、取□□持更結云々、面前擧覽有掃、不可披之由、先是親隆所申也、）退下、候同間簀子、（西面）余引寄筥見了、押出、親隆膝行進取筥、取出退下、置筥於同間簀子、更進取印櫃、（加蓋）退下、置簀子筥北方、取櫃置印盤北方、開櫃出印、置印盤上、（件印置盤之、）開文、又置印盤上、以鐵尺（置在印盤、）置鎭捺印、（每枚三所、）了盛筥、經本路出東脇戶下、給久兼、久兼銜封紙筆刀等於覽筥、授親隆、親隆取筥自本路參上、候捺印所、余仰可書封之由、親隆書了、如本納印付封、置印櫃於印盤上、取之參上、置余座前（本所、）退下、取覽筥自本路退出、余入北障內、憲親撤印櫃（加蓋、）請印、其間公能、資長等卿在北障內、顧開障見其儀、印盤太短、（一尺七寸許、）後日改作印、遲鑄出間、持來表草、覽後行上表之後可請印之儀、上表之後、未返給之、先行請印、可有思慮、仍請印了上表也、此請印事、不必執政後行之、大殿（○藤原師實）康平元年十二月八日被行之、（大納言）治曆元年十月廿九日又被行之、（右大臣）二條殿、（○藤原教通）應德元年三月四日被行之、（內大臣）入道殿、（○藤原忠實）天永三年十一月十六日被行之、（攝政右大臣）以之思之、無定期、次大殿兩度被行之不得心、備案此事、納言時雖請印、大

請印

臣後重行之歟、但其印不新鑄、用納言時印歟、一人不可有二印故也、天永三年爲隆記云、治安元年八月廿一日、小野宮右府〇藤原實資被行請印、于時右大臣庭中立案、有開封申捺印之儀、應德元年三月四日、故二條殿下被行請印之儀、大略相同、康平元年十二月八日、大殿爲大納言被行之儀、偏如今日儀、案之納言與大臣有差別歟、然而無指例文之上、只可令依大殿例給之由、民部卿俊明新藤中納言宗忠所被申行也云々、治曆元年御曆云、辰剋請印、著衣冠出對南廂、尾張守朝臣定家進南簀子、本自有印、自中門知家事重頼、案主頼重舁立案、卽重頼奉宮、納封返抄三枚依氣色家司召重頼、稱唯參入給印、次給宮、大略如外記云々、余案、治安、治曆、應德儀相同、皆於南庭行之、然則大臣預於南庭行之歟、然而今日儀偏用天永例也、

〔好古日錄末〕踏印

踏印、古書ノ訓點、ヲシテサス、印刺世、印刺川ノ類、諸書ニ散見ス、和歌ニモ、庭ダチニヲシテサステフナドヨメリ、今印ヲスト云ハ俗語ナリ、

〔東大寺正倉院文書三十五〕備中國天平二年大税負死人帳紙高九寸二分、横一尺八寸、界略高八寸廣五分強、界上空處六分、界下亦六分、

國印五十一

〔東大寺正倉院文書四十二〕豐後國天平九年正税帳紙高八寸九分、横一尺九寸二分、國印百二十五、

〇按ズルニ、當時ノ詔勅官符以下公文帳簿等ノ紙面ニハ、滿面皆印ヲ捺スルモノ多シ、

〔延喜式四十四勘解由〕凡勘内外諸司所進不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、撿交替使帳等者、〇中略大臣奏聞之後、錄奏了狀、副解文進官、解文使印捺其奏文踏印訖、下外官踏内印、下内官踏外印、副之官符、更下使局、

〔類聚國史百九十四殊俗〕天長元年五月癸亥、印遣渤海勅書、日月上一踏、

〔今昔物語二十八〕伊豆守小野五友目代語第廿七

今昔、小野ノ五友ト云フ者有ケリ、外記ノ巡ニテ伊豆守ニ成タリケリ、〇中略是ノ目代守ノ前ニ居

紙背騎印

鈐白

テ、文書共多ク取散シテ、亦下文共ヲ書セ、其レニ印指スル程ニ、傀儡子ノ者共多ク館ニ來テ、守ノ前ニ並居テ、歌ヲ詠ヒ笛ヲ吹キ遊ク遊ブニ、守モ此レヲ聞クニ、我ガ心地ニモ極クスヾロハシク謹ク思エケルニ、此ノ目代メ印ヲ指スヲ見レバ、前ニハ糸吉ク指シツル者ノ、此ノ傀儡子共ノ吹キ詠フ拍子ニ隨テ、三度拍子ニ印ヲ指ス、守此レヲ見ルニ恠シト思テ護ル程ニ、目代𦾔宿德氣ナル者ヲ亦三度拍子ニ指ス、傀儡子共其ノ氣色ヲ見テ、詠ヒ吹キ叩キ増テ急ニ詠ヒ早ス、○下略

〔槐記〕享保十四年九月廿日、唐ニテモ日本ニテモ、朱印ノアルモノニ朱印ヲ押シテ、文字ヲカキタルモアリ、文字ヲ書テ朱印ヲ揺タルモアルモノナリ、面白キコトナリ、タトヘバ太政官ヨリ天下ヘフレナガシセラルヽ文書ノ類ハ、朱印ヲ押シテ後、年號ニテモ文言ニテモ書ス、コレヲ外印ト云、印モ太政官ノ印トアルナリ、又太政官ヨリ上ヘ奏シタル文書ニ、天子ノ上覽ヲ經テ、イカニモ此通リニ下スベシトテ、ヲサルヽヲ内印ト云、コレハ文字ノ上ヘ朱印ヲ押サル、コレハ天皇ノ璽トアリ、

〔東大寺正倉院文書三十七〕接縫裏二所ニ

淡路國天平十年（騎印）十二月廿七日史生正八位下榎本直虫麻呂

○按ズルニ、當時ノ文書ニハ、紙縫ノ背面ニ捺印スルヲ以テ例トセリ、續修東大寺文書卷三十七ニ載セタル、神護景雲二年奉寫一切經司ノ牒文ノ接縫ノ背面ニ、藤原馬養ノ養ノ字ヲ書セリ、

〔儀式十〕飛驛儀

大臣喚少納言授勅符及官符、（或時授中務輔及少輔）少納言受之踏印、中務輔相執勅符一端、（若勅符二枚已上者、○中略請印○中略符者、少納言相執令主鈴踏印、○中略錯背、但官符印、儀卸留之、不進覆奏）請乾覆奏如常、

〔令義解九關市〕凡行人賫過所、及乘驛傳馬出入關者、○註略關司勘過、錄白案記、（謂凡行人、及乘驛傳度關者、關司皆寫其過所若官

畫指爲記

符、以立案記、直於白紙錄之、不點朱印、故云錄白也、

〔延喜式 民部 二十二〕凡應造籍者、預前一年、省錄申官、待報施行、毎國官司依例勘造、其諸國附貢調使、太宰付貢綿使申送、撿領訖即錄白返抄、

〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國天平六年計會帳

隱岐國送到移壹拾貳條 中略○

天平六年 中略○ 三月 中略○ 同日 三日○ 白書壹通 神税寺稲不合状

〔續日本後紀 仁明 十四〕承和十一年六月戊寅、主水司言、司家之政、觸類繁多、而本自無印、只用白紙、事渉輕疎、未免嫌疑、望請准內膳釆女等司、被給件印者、勅宜充之、

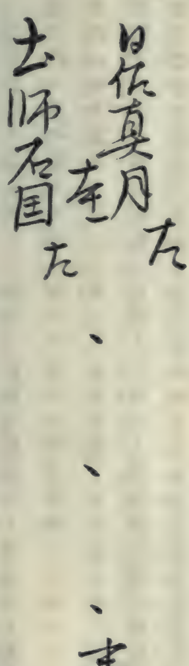
〔陸奧話記〕貞任 安倍○ 等、益横行諸郡、劫略人民、經清 藤原○ 率數百甲士、出衣川關、放使諸郡、徵納官物、命曰、可用白符、不可用赤符、白符者、經清私徵符也、不捺印、故曰白符、赤符者國符也、有國印、故曰赤符也、將軍 源賴義○ 不能制之、

〔令義解 戶 二〕凡棄妻須有七出之狀、中略○ 皆夫手書棄之、與尊屬近親同署、註略○ 若不解書、畫指爲記、

〔令集解 戶 十〕古記云、謂夫不解寫書、賃他人合作牒狀、年月日下夫姓名注付、食指點署、但食指爲記法、用此間、與本令異耳、其記文送里長也、

〔東大寺正倉院文書 六〕日佐眞月、大師石國等解申請、榑漕雜材事、中略○

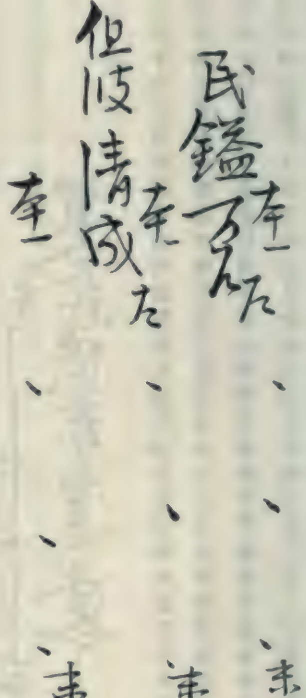
天平寶字六年八月九日



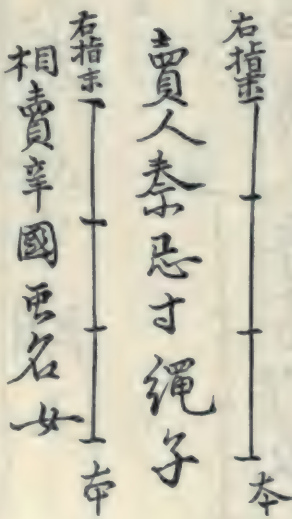
〔好古日錄 本〕手印

古昔文券上ニ手掌ヲ印シテ證トセシヨリ、世俗文券ヲ手形ト云、其文券今稀ニ存ス、又婦女ノ押字スルコトアタハザル者ハ、指節ヲ姓名ノ右傍ニ寫ス、手形ノ一變ナリ、

嘉祥二年七月廿九日賣買佰姓家地券文



同十一月廿日賣買地券文



同四年二月廿七日賣買家地劵文

專沽人秦忌寸鯛女　右方食指末一本

嘉祥四年二月廿七日賣人專葛野飯刀女　右末一本

相賣女子葛野真咋女

買人大初位上秦忌寸永岑　右末一本

手印

〔道の幸 中〕一乘院宮にまうで、橘逸勢朝臣の眞跡をみる、○中略天長十年九月廿一日従五位下藤原朝臣平子の願文なり、奥に伊都内親王の署も侍り、はじめはちいさき行字、中はすこしおほきやかなる草書、奥はいとおほきなる眞字にて、すゑに面受遺言無品内親王とあるまでは逸勢朝臣の手にて、伊都の二字は正筆にて、はじめよりをはりまで手印しげくをして、奥に印章もあれ

どかすかにてよみときがたし、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年七月二日戊子、成就院僧正房使者、去夜戌刻參著、是寂樂寺僧徒、令亂入高野山領紀伊國阿氐河庄、致非法狼藉之由依訴申也、則進覽當山結界繪圖、并大師御手印案文等、筑後權守俊兼於御前釋申之、凡吾朝弘法者、偏爲大師聖跡之由、武衞〇源賴朝有御信仰之間、不日被經沙汰、可止狼藉之旨、被下御書、其狀云、

下　紀伊國阿氐河庄

可早停止旁狼藉、如舊爲高野金剛峯寺領事

右件庄者、大師御手印官府內庄也、而今自寂樂寺致濫妨云云、事實者不穩便事歟、御手印內誰可成異論哉、早停止彼妨、如舊可爲金剛峯寺領之狀如件、

元暦元年七月二日

〔史徵墨寶一〕後白河天皇宸翰御手印緣起文京都神護寺藏

神護寺　定置四十五箇條起請文事

夫神護寺者、八幡大菩薩之御願、弘法大師之舊跡也、密教始興隆此砌、眞言遍案昌此寺、大師御入定之後、眞濟僧正等御門跡之僧徒相繼居住、〇中略

記置如右、

元暦二年正月十九日以上本文、[illegible]

一神護寺勸進僧文覺四十五箇條起請、偏是佛法興隆之願莫大也、隨喜之心忽催、結緣之思尤深、仍爲後代、聊加手印也、〇手印略、

〔寶簡集十八〕僧鑁阿天野宮八講米寄進狀

僧鑁阿謹

蓋印

寄進〇此下有同手印、今略、

金剛峯寺鎭守天野宮八講理趣三昧幷神事等用途米事〇中略

和勝元年六月廿五日〇此下有同手印、今略、

僧鑁阿

〔日本書紀三十持統〕六年九月丙午、神祇官奏上神寶書四卷、鑰九箇、木印一箇、

〔好古小錄下〕編年詩鈔、贈呉門周孚尹詩ニ、我欲黃楊追舊製、象犀不稱野人名、自註ニ、元末諸賢、倶用老黃楊木根、按國朝古昔多李唐ノ制ヲ用ユ、黃楊木ヲ印材トスルコト、貞觀ノ比既ニアリ、疑クハ亦李唐ノ制ナラム、日本紀ニ、木印アリ、其材考フベカラズ、元末始テ黃楊木根ヲ用ルニハ非ルベシ、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

奏聞可兩所用印之狀、仰大學寮令進字樣、召內匠寮以木彫作、其文曰、悠紀所印、主基所印、用小篆字、卽用印之狀、下知五畿內七道諸國、

〔小右記〕寬弘八年八月廿三日甲子、參內、於陣頭左右辨進悠紀主基所請申印文、各印文一面、木印一面、用途料正稅稻一萬束文、於官東廳始行事所日時文、今日申刻定主典代、文各四枚、　廿四日乙丑、右中辨來申、大嘗會雜事之內、欲令書印字樣、書博士城外之由寮申者、件字樣大博士爲忠朝臣知之云々、仍以爲忠朝臣令書也、更有何事乎、　九月七日丁丑、右中辨來言、主基事之次、持來元慶大嘗會記文、以采女正時原春風令書古文字樣給、內匠寮令彫木印者、彼時若書博士他行歟、今般書博士等城外、仍小臣思慮、以明經博士爲忠朝臣令書字樣、頗合先賢之高慮耳、

〔山槐記〕元曆元年八月廿二日戊寅、巳剋許、權右中辨光長朝臣以左大史能光示送曰、只今參院幷殿下之間、印字樣且所覽也者、勘文二通籠懸紙一枚入覽筥、

勘申主基所文印事

主基

所印

右依宣旨勘申如件

元暦元年八月十三日　　書博士中原季重

勘申主基所木印文事

（中略）

右依宣旨勘申如件

元暦元年八月十三日　　書博士中原季重〇中略

辨曰、此印字以吉時、於東廳行事所、今日可令彫也、而隆職宿禰内々申云、近代内匠寮皆爲銅細工、彫木事不得其骨、仍愛令佛師彫也者、又曰、文印者印行事所文書等也、木印者、如件之材木點定之時印彼木也、近代無點材木事、仍此印不中用歟、然而猶同彫之、文印者小、木印者大也者、件印共黄楊木彫之云々

〔續日本紀 三 文武〕慶雲元年四月甲子、令鍛冶司鑄諸國印、

〔日本紀略 四 村上〕天德二年十二月四日庚辰、内匠寮令冶鑄新中宮御印、

〔日本紀略 五 冷泉〕康保四年十月十一日丙寅、此日内匠寮鑄進中宮御印、

〔壬生家文書 一〕太政官符　中務省

應鑄充印壹面事

右得正二位行太宰權帥藤原朝臣光隆今月十九日奏狀偁、得在廳官使去十月十三日解狀偁、謹撿案内、印者奉安置府院内、鎰者一府官所受領也、而去壽永二年亂逆之時、軍兵等最先依亂入府院、於印者奉取、至于鎰者、受領府官逃入山林之間、奉懸頸、希有所不奉失也、國府其後、謂奏書謂府符、不能捺印、宰府陵遲、尤在斯事、就中八幡宇佐宮遷御之日、令貢進著耕六通之例也、不捺者、定以可謂違例歟、請府抜速奏聞公家、率鑄下府印、被遂行希代神事勤、依言上如件者、任在廳官人等申狀、欲被鑄下

件印者、正三位行權中納言平朝臣親宗宣、奉勅任先例令鑄下者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

右少辨正五位下藤原朝臣　修理東大寺大佛長官正五位上行左大史小槻宿禰

建久四年十一月廿八日

熟銅貳斤下大藏近例二斤也　白鑞參兩直　荒炭貳斛直

油貳合直　陽陸兩直　細布伍尺

伊豫砥牢顆下大藏

右太宰府印一面料、內匠寮所請如件、

建久四年十一月廿八日

權中納言平朝臣親宗宣、宜充之

右少辨藤原朝臣奉

應令大藏書博士勘申太宰府印字樣事

右右少辨藤原朝臣資實傳宣、權中納言平朝臣親宗宣、奉勅、件字樣宜令彼書博士勘申者、

建久四年十一月廿八日　左少史三善奉

右少辨藤原朝臣資實傳宣、權中納言平朝臣親宗宣、奉勅、太宰府申請印壹面、宜仰內匠寮令鑄進者、

同日　左少史三善奉

新印樣

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元元年正月十一日、中宮印字樣、助教師爲持參宮侍所、依大夫相○公計、權大進高經請取之、先啓御所、次下大膳資高、內匠寮可鑄進之由下知、件用途、先例以諸司納功下寮鑄進、而近代不合期之間、內々本宮沙汰之、今度猶請取官廳可沙汰之由、前右府被下知、仍廳令申領狀畢、印字樣永治久安付職事奏下之云々、

〔續日本紀二文武〕大寶元年六月己酉、遣使七道、宣告依新令爲政、及給大租之狀、并頒付新印樣、

改造

〔延喜式十一太政官〕凡內外諸司印、剋畫應改造者、下符中務省仰內匠寮令、請料度、官仰式部省召書博士、

鑄造

就中務省、令書印字樣、即少納言、中務輔、寮助以上、臨監鑄造、畢進奏、付辨官令給、

〔延喜式中務十二〕凡應改鑄諸司國印者、隨太政官符到、即下符内匠寮、寮錄用度申省、省申官、其字樣者、官仰式部令書博士就省書之、即少納言、輔及寮助以上、共撿按令鑄造、少納言輔不在者、寮頭監鑄、訖即造奏文、少納言執進内侍、

〔律疏名例〕八虐

六曰、大不敬、謂、(中略)盜及僞造神璽内印、神璽者、謂踐祚之日、中臣奏天神之壽詞、忌部上神璽之鏡劍、

〇按ズルニ、内外印ヲ僞造スル事ハ、法律部上編詐僞篇ニ詳ナリ、

用度

〔延喜式内匠十七〕内印一面、料熟銅大一斤八兩、白鑞大三兩、臈大三兩、調布二尺、炭三斗、和炭二斗、長功七人、(鑄工二人、取土二人、雜三人、)中功八人小半、短功九人大半、

外印一面、料熟銅大一斤、白鑞大二兩、臈大二兩、調布二尺、炭二斗、和炭二斗、長功七人、(鑄工二人、鍛二人、雜三人、)中功八人小半、短功九人大半、

諸司印一面、料熟銅大十四兩、白鑞大一兩二分、臈大一兩二分、調布二尺、炭二斗、和炭二斗、長功六人、(鑄工二人、鍛二人、雜二人、)中功七人小半、短功八人大半、

諸國印一面、料熟銅大十二兩、白鑞大一兩一分、臈大一兩一分、調布二尺、炭二斗、和炭二斗、長功五人、(鑄工一人、鍛二人、雜二人、)中功六人大半、短功七人小半、

〇按ズルニ、臈ハ臘ノ俗字ナリ、蠟ト同音ニテ通用シタルモノナリ、東大寺獻物帳ニ、蠟燭ヲ臈燭ニ作レルヲ觀テ知ルベシ、

〔洞天清祿集〕古鐘鼎彝器辨、(中略)古者鑄器、必先用蠟爲模、(下略)

印具

〔延喜式主計十二〕年料所須、朱沙十二兩、膠八兩、(位記料)練絲三兩、苧二斤、貲布一丈、(敷印板料、)柳筥二合、(納印板料、)赤土一斗、年終申省請受、但銅盤二口、印板漆案二脚、緋氈二枚、並隨損請換、

〔儀式十〕飛驛儀

當日大臣以下在爲政殿、仰左右馬寮令設人馬、又召内記令作勅符、〇中略仰掃部寮立路印案、〇中略少納言率中務輔一人、（若無輔者丞參、直用近衞少將）内記二人、主鈴二人、（内記持筥及封緘調度、主鈴持完具）參入就前敷座、〇中略大臣宣取印、少納言率主鈴取印、進立於案前、〇下略

〇按ズルニ、本書固關使儀ノ條ニ完具宮アリ、完具ハアテグト讀ミテ印矩ナラン、完ハ充ノ譌字ナリ、

〔江家次第十二〕宇佐使事

此間行内印事

上卿自御所歸著陣之時、外記持來官符、目令退出、次上卿宣近衞司、（大將若召政人）將監（帶弓箭）在陣方、稱唯參入候小庭、上宣印、將監稱唯退出、掃部寮立案於軒廊東二間、少納言、主鈴、（持印板等）將監等、入自日華門出印、少納言就案下、將監留立軒廊南、主鈴置印板於案上、取官符授少納言、退立將監之傍、少納言著膝突進上卿、上卿見了返給、少納言還就案下、主鈴捺印、了如初納印退出、掃部撤案、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月庚寅、内印盤褥、爲鼠喫亂、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年十一月廿日甲申、先是少主鈴從八位上美和眞人清江言、鼠囓内印盤褥、至是神祇官卜云、觸穢之人供神事、仍成祟、由是大祓於建禮門前、以攘妖祥焉、

〔扶桑略記二十五朱雀裏書〕承平二年五月廿五日、辰剋印盤丹綿、鼠咋散、

〔日本紀略二朱雀〕天慶三年九月十二日甲戌、夜、狐嗥内印韓櫃鏁、赴而指承明門走出、

〔西宮記臨時五〕諸社行幸

御記曰、天德四年十一月一日、奉幣、〇中略辰四剋乘輦、（掌侍置御劒璽事、皆如常）持候内侍司印櫃、及鈴韓櫃等如常、舊例以内侍印、稱契印櫃、行幸之時必令持候、仍新儲燒亡之代之印、令内匠寮造赤漆小韓櫃、納之令持、

〔神宮雜例集二〕政印事

一內宮政印事〇中略

事發

御印一面　銅筒一口　銅尺一隻　納朱漆筥一合

右事發如件

承曆三年七月廿三日　左大史小槻宿禰祐俊〇中略

長德四年五月廿日、大宮司正六位上大中臣朝臣公忠、印筒以銅改鑄、元雕木也、

仁安年中、大宮司從五位上大中臣朝臣有長、造替件櫃、納小刀一柄、封紙料、

建仁二年、大宮司從五位下大中臣康定、件印櫃內納小提一口、入水料、

〔中右記〕永久二年七月六日、頭辨送書狀云、內印之印盤、近日爲盜被取失了、而何樣可被行哉、可量申、是院宣者、予宗忠〇原申云、先例慥不覺、但被改作何難之有哉者、

情儀、此事、後三條院初、治曆四年十二月、皇居二條燒亡之時、使內印燒了、依又被改作歟、依件例被改作歟、可宜歟、內印猶被作、何況於盤哉、

十八日、今日頭中納言參仗座、內印唐櫃可被修理日時、幷印盤可被作日時等被勘申云々、今日皆被作云々、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、有私請印幷上表事、〇中略

請印裝束〇中略

印櫃朱漆鏁、長一尺一寸三分、深五寸八分、短八寸六分、板厚二分、　蓋長一尺二寸、深九分、短九寸三分、板上圍三二分、分身、　印盤白木板、長二尺四寸六分、此外足外厚五分、口二寸五分、　短一尺七分、足在左右端打付板、其下鐵足、　高二寸九分、長一尺二分、厚六分、　印鑰以銅之、方一寸九分、高一寸八分、　壺以銅鑄之、其形如身、口徑三寸七分、小桶納、外入水、檜牙下置之、　深一寸七分　蓋口徑圓、深三分、　鐵尺刻寸分、長一

尺、短四分、厚一分、

〔兵範記〕保元三年二月三日甲午、有立后事、○中略 上卿召中務輔、權大輔賴盛出宣仁門、於陣突給位記、來軒廊置宮、取位記展印盤上下官信範○平 進寄指笏、請印儀如常、

〔愚昧記〕仁安二年十月廿日、今日爲令勘八十島祭日時可參之由、一日頭辨參合殿、依面示可參內也、○中略 申終參大內、於陣腋召外記師澄、問內文諸司具否、皆參云々、即參殿上方、大盤始間也、依無便宜歸陣邊、外記來云、火事之時、內印壹燒損不能用云々、予實房○藤原 示云、何無其沙汰、可被行內文儀出來哉、外記云、火事之後、師澄撿納了、即申其由於兩大外記、依爲官方沙汰、申大夫史之處、未致其沙汰、非此一事、如辛櫃未調具候也、予云、若有先例哉、如何、答云、如此印壹許損事不覺悟候、

〔兵範記〕仁安三年七月四日癸巳、參行事所、大嘗會、○中略 有請印事、先史生國直持來印盤、印納辛櫃、副丹器在封之、

〔好古日錄 未〕印櫃

或記ニ據ニ古印櫃ハ定リタル寸法アリ、長一尺三寸、濶七寸二分ニシテ、高七寸二分、蓋一寸三分、其中ニ在杉ノ木ヲ以造ル、東寺所藏印櫃寸尺大略同之 釘鋑皆鐵ヲ用ユ、台記別記ニ見タル印櫃ナド、ハ、貫テ論ズベカラズ、

〔日本書紀 崇神五〕十年九月甲午、以大彥命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彥遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受敎者、乃擧兵伐之、既而共授印綬爲將軍、

〔洞天清祿集〕古鐘鼎彝器辨、古之居官者、必佩印以帶穿之、故印鼻上有穴、○中略 五代以前尙如此、今則否、○下略

〔古文零聚附錄〕四分律藏卷第五 弘法大師眞筆 栂尾高山寺所藏

承平六年七月十五日



四方平均曲尺八分弱

此印白文ニテ巻物ノ題目ゴトニ捺タリ、字分明ナラズ、其中イサヽカミユル處ヲ寫ス、陰文也、今黒字ニ寫セル處、紙ノ地ニテ、其外ヲ白文トミルベキ也、陰主、古文ニハ、白○陽○ナリ〳〵見ルコトアリト云ナル、

○按ズルニ、文學部印章篇篆刻法條ニ、白文印ノコトアリ、參看スベシ、

〔日本紀略村上四〕天德四年九月廿三日庚申、今夜亥三剋、内裏燒亡、　十月八日甲戌、外記史等見宮中灰燼之上、有木印一面、其文有天下太平四字、參議好古云、此蕃客來時所用也、

〔好古日錄本〕漢委奴國王印

委奴國王印、黃金印、蛇鈕、曲尺ヲ以度ニ、方八分弱、厚二分五厘、重二十九錢、天明四年甲辰二月廿三日、筑前國那珂郡滋賀島土中巨石ノ下ヨリ堀出ス、幹按ニ、說文曰、倭从人委聲、於爲切、委从女从禾、於僞切、（玉篇始テ倭、烏禾切、國名ト註ス、）倭平聲、委去聲ナレドモ、古書倭委通ジ用ユ、（第四十三條委倭通井セ考フベシ）委奴國ハ、後漢書倭傳ニ所謂倭奴國ナルコト知ベシ、後漢書倭傳曰、光武中元二年、（光武本紀、中元二年正月辛未、）倭奴國奉獻朝賀、使人自稱大夫、倭國極南界也、光武賜以印綬、ト、倭國ハ此邦ノ總名、倭奴國ハ極南界ニアル國也、（倭ニ倭奴アリ、此倭ノ古名トスルハ非ナリ、）然レバ倭奴國ハ、魏志倭傳ニ、至末盧國、（末盧國、日本紀以下ノ書、松浦ニ作ル、肥前國松浦郡ナリ、）東南陸行五百里、到伊覩國、ト云者ニシテ、此即筑前國怡土郡也、日本書紀（仲哀）ニ、筑前國伊都縣主祖五十迹手アリ、此印疑クハ伊都縣主、使譯ヲ通ジテ、漢授ル所ノ印ニシテ、後漢書倭傳ニ所謂、使譯通漢者三十許國皆稱王ト云者也、委奴、倭奴、伊覩、怡土、皆通音也、

〔好古日錄本〕親魏倭王印

此印宣和集古印史ニ載ス、鈕製ヲ脫ス、惜ムベシ、按魏志曰、景初二年六月、倭女王、遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝獻、太守劉夏遣吏將送詣京都、其年十二月、詔書報倭女王曰、（中略）今以汝爲親魏倭王、假金印紫綬、（中略）又曰、正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等、奉詔書印綬詣倭國、

〔集古十種印章凡例〕凡官私古印章、平安藤貞幹者、前既摸寫成集、今一本之、以余搜討所獲補之、納之、貞幹功十居七八、凡鈕欵亦多古製、今皆摸寫而收入、凡物雖涉僞贋、有可疑而無的證之可指摘者、今且收入以資博覽、

〔埋麝發香一印〕序例

中務省已下至薩麻國印、總是東大寺正倉古文書中所寫得也、近江已下國郡十餘印、正倉中不見之、故採之於新造舍藏書、以附焉、蓋延曆遷都已前一類之故耳、民部省印採藥師院、內家私印採壬生寺、亦同、然御璽者至尊、不可私摹也、太政官印者未決新古、姑措之、法隆元興大安已下諸寺印類、有諸家摹印譜、雖各不能無傳寫之微失、流布于世、而足概見、則今略之、唯正倉秘匣所收光明皇后御書樂毅論一卷、接縫捺印積善藤家四字不能寫得、以爲憾焉、今此所載總計七十印、每印有說、別具附錄、

天保十一年十月廿九日　穗井田忠友謹撰

圖華押

押トハ署名ノ事ニシテ、其形ノ花ノ如クナルヲ以テ華押ト云フ、草書ヲ以テスルガ故ニ草名トモ云フ、判ハ公事ヲ判決スルノ義ヨリ出デ、古ハ官衙及ビ姓ハ、書手ノ書スル所ニシテ、唯名ヲ自署スルヲ以テ例トセリ、而シテ賜假ノ者、奉使ノ者等ハ、署名スベキ處ニ、書手其由ヲ注スルナリ、華押ハ雙名ヲ合セタルアリ、其字ノ偏傍ヲ合セタルアリ、雙名ノ一字ヲ用キルアリ、或ハ別ニ好字ヲ選ミタルモアレドモ、大抵草書ヨリ轉ジタル體ナリ、尙ホ華押ノ事ハ、下編印篇ニモ附載セリ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔書言字考節用集八言辭〕花押（アツハン）（一名草名、今云書判、事見紀原、文後集、）

〔古今要覽稿姓氏〕すゑ判　釋名

花押（東觀餘論、輟耕錄、七修類藁、）　押署（七修類藁、格古要論、歷代名畫記、）　押字（東觀餘論、桯史、七修類藁、押は署也と訓ずる故、名書と云ほどのことなり、伊勢貞丈說に、字の

正體を書略し、草書の法を以て、字を異體に作りたるもの故、書字と云ずして、押字と云よしいひたれど、體ならざる説なり、花書晁書、韓略、刊謬正俗、高似孫、花字刊謬正俗、花といへるは、その形狀花文をなすによりて名づくるなり、草字韓非論議草名吉氏隆國抄、晉人草書、殿劉稷之皇朝義朝之、定家等之の類は、皆一家の文字にて、能に篇すべからず、常々書なれたる上には、覺えず文字書閣に至りて、自ら各々の體をなし、他人もそを目じるしとせる知に重あゝこれ花押の起る所にて、四土にても草書又名以爲私記、詠讀花書と云、雲貝草書名爲押字とし、又云、凡以草名爲花押など云たるゆゑなり、判簡體集、官職知要、纂成記に、判者草名字也と云是なり、判といふ義は國文通考に有司の判署する所なれば、かく名づけしにやあらんとみえたり、ましあるべきにや、華判貞修集、これ唐の五花判より轉訛せるにや、此邦にて判といふことも是に本づけるならん、判形禮儀類典、書判家百職錄、武在地判今昔物語在地署判源貞文所國判弘法大師請會、眞然大德等狀、二合息抄

〔倭訓栞前編六〕かきはん　押字とも花押ともいへり、或は花字花書と稱す、歐陽氏も俗以草書名爲押字といへり、堂上にて、判ばかりにて名乘を書ざるあり、是花押なれば也、よて名乘を草名といへり、又名乘を書べき所に二合と書は、父より子にあたへ、家僕につかはす文ばかりにある事也といへり、一說に、草名は上一字を文字にし、下一字を花押にする也、二合は二字を合せ、一字の樣に花押にするなりともいへり、判は奉行役などの裁判書也、其判に花押したるを五花判などいふ故事あり、よて轉て押を判といふなるべしといへり、○中略判行とも判印ともみえたりとぞ、

花押は皆自名を破る、よて古代官人簽署の文字に、官姓を題して名を書ず、今自名を書て、また花押を下すは誤也、群談採餘に、國朝押字之製、上下多用一畫、蓋取地平天成之意とみえたり、

〔南留別志〕一花押を判といふは、判署といふ事のあるを、取ちがへたるなり、判といふは日をあけ置て、後に書加ふるをいふ、署は今の名はんなり、

一花押は名を草にかきたるなり、花押の上には姓をかく事なるを、今の世にあやまりて名乘をかくなり、庭訓など見るべし、今の世は官人面々に私印を用ゆ、官印なき故なり、古は官印あり、

一官府に一つならではなし、是を月日の所におして、面々は花押なり、官の文書は、皆物かき役

のかく事にて、名乘ばかりを面々に草にて後にかくを花押といふなり、

〔同文通考 三〕押字

異朝ニテ押字花押ナドイフモノ、吾朝ニシテハ判トゾイヒケル、我國ニテコレヲ用ヒラレシ始、未ダ詳ナラズ、異朝ノ押字ハ、天子ノ詔ノ畫諾トイフ事ヨリハジマレリトイフ也、此説通雅ニ見ユ、オヨソ諸侯ヨリ奉ル所ノ請奏ニ、天子ミヅカラ諾ノ字ヲ草字ニテシルシ賜ルヲ、畫諾トハイフコトナリ、吾朝ニモ、イニシヘヨリ天子ノ詔勅ニ、御畫トイフコトアリシナレバ、其由來ルコトハ久シキ事ニヤ、天子ノ御押、今ハタヾ後深草帝コノカタノ物ノミ世ニハ傳ハレリ、人臣ノ押字ノ今ノ世ニノコレル中ニ、參議藤原佐理卿ノ押字ヲ以テ其首トナスベシ、此人村上、冷泉、圓融、花山、一條、五代ノ朝廷ニ歴仕セシ人ナレバ、其比ホヒヨリ、此事既ニアリシナルベシ、コレヲ判ト名ヅケシ事モ、ソノ義詳ナラズ、タヾシ有司ノ判署スル所ナレバ、カク名ヅケシニヤアラン、異朝ノイハユル押字ハ、ヲノガ名ヲモ字ヲモ用ヒ、又別ニ文字撰用ヒシ人モアリケリ、彼佐理卿ノ押字ハ理ノ字ニテ、藤原行成ハ成ノ字ヲ用ヒ、大江匡房卿ハ匡ノ字ヲ用ヒラレタリ、源頼朝卿ノ用ヒラレシ所モ頼ノ字トゾミエタル、室町殿ノ時ニ及テ、世ヲシリタマヒシハジメ、御判始トイフ事ヲ行ハル、コレ政ヲ親シタマフコトノ始ナルベシ、御名ノ字ヲ草ニ書成サルヽ事也、或ハ又別ノ字ヲモ撰バル、紀傳ノ儒家ヨリ撰進セラルヽ所ニヤ、鹿苑院殿〇足利義滿普廣院殿〇足利義教ノ兩代ニハ、其ニ義ノ字ヲ用ヒラレシ、コレ名ノ字用ヒラレシ所ナルベシ、勝定院殿〇足利義持ハ慈ノ字ヲ用ヒラレタリ、コレ別ノ字ヲ撰バレシ所ナルベシ、康富記ニ見ユイニシヘノ人ハ判ヲシルサルヽ時ニ、又名ノ字署セラルヽ事ハナカリキ、コレ判ニハ名ノ字ヲ用ヒラレシトイフ事ノ一ツノ證トヤスベキ、花押藪ヲ按ズルニ、源義仲朝臣、平義時朝臣ノミ、判ノ上ニ名ヲ署セラル、其餘ニハ見ル所ナシ、チカキ代ニ至リテハ、判ニ其名ノ字用フルトイフ事モナク、又判ノ上ニ其名ヲ署スル事ニナリタリ、世ノ末ザマニナレルニシタガヒテ、カヽル事モ、其故實ヲシルル人マレニナリシニヨレルナルベシ、

謹按ズルニ、本朝ノイハユル判、ソノ名ノ字用ユル事、今ハ世ニマレナリトイヘドモ、其始名ノ字用ヒシ所ナレバ、モトコレ文字ノ一體ナルヲ以ナ、其事ノヨシヲコヽニシルシヌ、

〔通雅三十一器用〕宗贇任范傳歌曰、南陽宗贇主畫諾、張緒曰、一生不解作諾、○中略江左詔畫諾、唐時畫問、卽今之知道也、

〔刊誤正俗〕簽押類

簽、字彙簽書文字也、押、韻會署也、檢、訓蒙字會、簽押防範也、事物紀原、古者書名、破眞從草、取其便於書記、難於模倣、唐書曰、韋陟公每書陟字、自號五雲體、俗浸相緣、率以爲常、後有不取其名、出於機巧心法者、此押字之初也、紀原止此韻會、文字指歸、押字才能也、唐人初未有押字、但草書其名、以爲私記、故號花書、韋陟五雲體是也、夢得石林燕語謂、見唐誥書名、未有一楷字、今人押字、或多押名、猶是此意、歐陽氏曰、俗以草書名、爲押字、韻會止此或稱花押、或稱花字花書、皆一也、王荊公押石字、性急、作圈多不圓、公加意作圈、談藪是二名者、押下一字也、祖擇之押字、直作一口字、人問之、答云、口無擇言、江鄰幾雜誌是取義爲押者、其上下必加一字者、群談採餘云、國朝押字之製、上下多用一畫、蓋取地平天成之意、予嘗觀前代官人簽署文字、必題某官某姓、而下書花押、不書名、蓋花押皆破自名、故不復贅也、中國舉士考卷亦書考官劉批知縣李批亦同、今人已書自名、亦下花押、其押亦不必破己名、復古者須用心焉、或認判爲押者尤誤矣、詳見下

〔刊誤正俗〕判詁類

有判失本義、而別正字者、○中略判韻會斷也、唐選擧志試身言書判、明辨云、古者折獄以五聲聽訟、致之於刑而已、其後乃有判詞、輿篇便覽云、剖斷罪訓曰判、李元紱山判是也、俗稱押字曰判尤非矣、當稱押字或花押、

〔貞丈雜記九書札〕一判と書記にあるは今の書判也、今は印の事をも判と云ゆへ、書判印判と云詞あ

り、書判は本名をば花押とも押字とも云也、本式は實名の二字を一つにして、草にやつして形を作る物也、依之判の事を二合とも草名とも云也、二合と云は、實名の二字を一ッに合て作る故也、草名と云は、實名を草にやつして作る故也、されば判の上には實名をかゝざる事本式也、又實名の下の字ばかりをやつして判にする事有、其時は判の上に名乘の上の字ばかり書也、又實名の二字を以て作らず、別に形を作りたる判は、判の上に實名を二字ともに書く也、本式は實名の二字を判に作りて、判の上に實名をばかゝぬ物也、然れども今の世にては、とかく判の上に實名不書しては叶はざる事也、世の風俗なれば、是非なく世に隨ふべき歟、判といふ物の本意は、我作り出して、我手にてかつかうよく書き覺へて、筆勢も形も墨色も、他人の手にて似せる事かなはざる故、しるしとなる也、今は木にほりて墨を付ておす人あり、判の本意をうしなへる也、○中略一花押の事を判と云は、判の字は、わくるとも、わかつともよむ字なり、花押を以て我書たる物、人の書たる物を、明にわかつ爲なる故、判と云也、我と人とをわかつしるし也、今印の事をも判と云、是も右同意也、判斷の意也、

〔道照愚草〕一公家門跡には、御判をば草名と被仰之なり、親王法親王御草名の事、御書に被遊事は、被遣之官位によりて被遊事也、御書之上卷の表に御判ある儀も、御草名と可申也、

〔隨意錄五〕方俗書札尾、姓名下書花押、俗稱書判、此唐以來舊矣、然古人花押、草書其名耳、今人書姓名、而更押他字、非與、至其點畫五行之俗法、則無論焉、宋張淏雲谷雜記云、方勺泊宅編云、東坡就逮下御史獄、張安道上書、力陳其可貸之狀、劉莘老、孫子容、同輔政、子容曰、昨得張安道書、不稱名、但著押字、莘老曰、某亦得書、尙未啓封、令取視之、亦押字也、其事人罕知、故記之、予按東觀餘論云、唐文皇、令群臣上奏任用眞草、惟名不得草、遂以草名爲花押、韋陟五朶雲是也、魏晉以來法書、至梁御府藏之、皆是朱异姚懷珍等題名於首尾紙縫間、故謂之押縫、或謂之押尾、祇是書名耳、後人花押、乃以草記其自書、故謂

押字、蓋沿襲此耳、唐人及國初前輩、與人書牘、或只用押字、與名用之無異、上表章亦或爾、近世遂施押字於移檄、或不書己名、而別作形模、非也、又孫公談圃云、先朝人書狀簡尺、多用押字、非自尊也、從簡省以代名耳、今人不復識、見押字便怒、則當用押字、其來亦久矣、劉蕃二公與方勺、偶不知之也、

〔好古日錄 東〕花押

東寺ノ一子院ニシテ、古文書數通ヲ展觀ス、天祿二年ノ田券ニ、花押一通ヲ副畢ルノ語アリ、按ニ、唐國史補ニ、宰相判四方之事、有堂案、處分百司、有堂帖、不次押名曰花押、略下此ニ據バ、花押ハ文書ノ名ナルコト知ベシ、

〔唐國史補 下〕宰相判四方之事、有堂案、處分百司、有堂帖、不次押名曰花押、黃勅既行下、有小異同曰帖黃、一作押黃、

〔貞丈雜記 九書札〕一押字、花押、草名、二合、二別の事、前に記したれども、委しく分らざる故記之、左の如し、

押字と云は、名乘の字を草に略して、自分々々のしるしに用ひて書く事也、右の押字に二合二別の品あり、二合と云は、名乘の二字を一ッに合せて作りたるを云也、たとへば名乘通方ならば如此の類也、二別と云は、名乘の上の字をば常の字體に書て、下の字ばかりを草にやつして作る也、たとへば名乘通方ならば通如此類也、花押と云は、名字の字を不用して、別に人々の好によりて、草木の花葉、鳥獸器物、其外何なりとも、其形を押字の如く作りて用るを云、花と云ふは、はなやかといふ儀にて、俗にいはゞだてなる心也、たとへば木鳥也梅也此類、人々の巧に寄て、品々の形あるべし、當世地下人の書判、名乘の字を不用して、色々の形を書くも花押の類也、たとへば是等の類、花押の類也、押字にはあらず、草名と云は、名乘の字を甚略して、草に書たる也、我はよめども、人はよめぬ程にやつして書る也、押字花押とは又別なり、されど

も押字花押の如く、我がまゐるしに用る物也、古筆の文書の中に  如此書たるあり、是は季綱といふ名乘を如此に書たる也、是我ばかりよめて、人はよまれぬ程にやつしたる也、

〔古今要覽稿（姓氏）〕草名結構

西土にては、草名を以て花押とすと（東觀餘論）見えたれば、たゞ名の字を草書せるよりこと起りて、遂には奇異の字形を結構せるやうになれるなるべし、皇朝にても、古は名の字を行草の筆意にて、二字を合て點畫をかねやつし、擬捺の末をまとひつくるやうにかきなせしものなるを、或は一字を用ひ、或は別字を用ひ、或禽虫の形にかたどるなど云ること出來れり、花押藪、同續編、古押譜等を見て、古今の巧拙を知べし、其結構連綿として粲然たると、支離にして茸々たると、大に工拙あるものなり、西土にても、王晉齋が古貴人押字跋に說あり、

〔古今要覽稿（姓氏）〕草名撰字

西土にては、名をも字をも草書もて花押と云、名にも字にもあらざる字を用ゆるは、あやまりなるよし諸書に論じおけり、韋陟は陟の字を用ひしよし、續書斷に見え、智果は果の字を用ひしよし、來禽雜集に見え、王安石は石の字を用ひしよし、石林燕語に見え、柳應辰は應辰の二字を用ひしよし、七修類藁に見え、別字を用ゆるはあやまりなるよしは、東觀餘論にみえたり、皇朝にては、名を草書することにて、別字を用るは常の例にあらず、今も堂上にては、名の二字を交へ書し、たまたまは下の一字を用らるゝもあるなり、されども武家には多く別字のみを用ゆるやうになれり、

〔好古小錄（上）〕花押

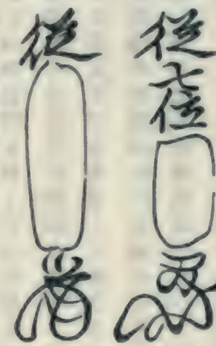
國朝花押ヲ用ル、其始ヲシラズ、和銅二年田券合縫ニ花押ヲ用ユル者、東寺所傳ノ文書（漢本）ニミエタリ、此ヨリ古キ者ヲミズ、中古左文ノ押字アリ、康平二年十二月田券紙尾連署七人、其中二人ノ

押字左文ナリ、又東大寺温室田施入帳永久五年七月十五日大法師、押字左文ヲ用ユ、古代ノ花押ニ飛白ノ體ヲ用ル者アリ、其筆力飛動ノ勢アリ、

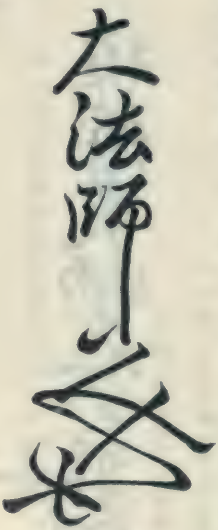
〔古今要覽稿 姓氏〕左文草名

用る所何のゆゑと云ことをしらず、東大寺温室施入帳、及東寺所藏の古文書に、左文の花押あり、

東寺寶泉院所藏文書 康平二年己巳十二月日 田券連署七人中二人左書



東大寺温室施入帳 永久五年七月十五日 連署中一人左書

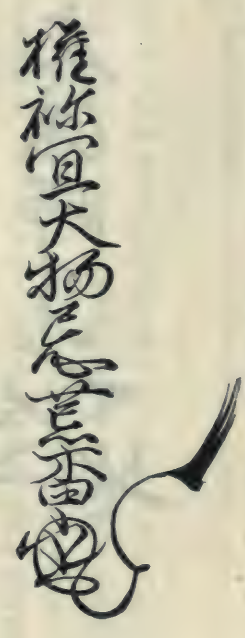


〔好古日錄 東〕飛白花押

古人花押ニ、間飛白書ノ者アリ、近日古解文ヲミルニ、花押飛白ヲ用ユ、

例

應德貳年四月廿日



梵字花押

延喜中ノ田券連署ノ中、梵字ノ花押ヲ用ルアリ、疑クハ僧ナラム、年月日及名魚食、惜ムベシ、

〔倭訓栞中編二十〕はん　俗に印章花押を判といふは誤なり、吳籍便覽に、斷罪罰曰判とみえたり、さればその判に印章を用うるをもて、いひ出せるなるべし、その意今昔物語に惡行の部に見えたり、北史に連判とあるも同じ、又子を勘當して、鄕人の判をとりたるを在地判といへり、〇中略又かきはんの下に見ゆ、室町家の時、袖判といふ事もみゆ、

〔東大寺正倉院文書十六〕遠江國濱名郡租帳夾名帳〇中略

天平十二年十一月廿日　正六位下行大目吳原忌寸廣根

從五位下守勳八等百濟王大朝集使　正六位上行大掾勳十二等揚守宿禰朝集使

正六位上行介勳十二等大伴宿禰名刀具　從七位下行少目我孫君嶋道

〔東大寺正倉院文書二〕刑部省移民部省〇中略

天平十七年二月廿日　從七位上行少錄韓國造大村

從四位下守卿王

〔東大寺正倉院文書二〕兵部省移民部省○中略

天平十七年四月廿一日　　正六位下行大錄馬史[illegible]

大輔正五位下勳十二等紀朝臣

〔東大寺獻物帳〕天平勝寶八歲六月廿一日

從二位行大納言兼紫微令中衞大將近江守藤原朝臣仲麿

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手

從四位上行紫微少弼兼中衞少將山背守巨萬朝臣福信

紫微大忠正五位下兼行左兵衞率左右馬監賀茂朝臣角足

從五位上行紫微少忠葛木連戶主

〔續修東大寺正倉院文書三十五〕作物雜工散役及官人上日解文○中略

天平寶字六年四月一日　　主典從六位上阿刀連酒主

長官正四位上兼左勇士督忌寸犬養　　判官下從五位下上毛野公眞人

次官正五位下國中連假　　判官正六位上葛井連根道

主典正六位上彌努連假

主典正六位上志斐連麻呂

主典正八位上安都宿禰雄足

〔古文書類纂中解〕淳和天皇天長六年、日根秋友申請常荒地解、山城大覺寺所藏、本文書一通請二郡印一

日根秋友解　申請常荒地事○中略

天長六年二月十日　　日根秋友

在地刀禰異判　　紀花押

伴 花押
藤井 花押
長 花押
物部 花押

郡判
依有在地刀禰等證署明白與判

總郡攝使散位中原朝臣 花押
攝使大判官代紀 花押
高志 花押

廳判
依有在地幷郡判明白與判

總大判官代散位中原朝臣 花押
中原朝臣 花押
大判官代田所散位橘朝臣 花押
大判官代介散位池邊朝臣 花押

〔今昔物語二十九〕幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一
今昔、□ノ□ト云フ者有ケリ、夏比吉キ瓜ヲ得タリケレバ、此レハ難有キ物ナレバ、夕サリ方返來テ、人許ヘ遣ラムト云テ、十菓計ヲ厨子ニ入レテ納メ置テ、出ヅトテ云ク、努々此ノ瓜不可取ズト云置テ出ヌル後ニ、七八歲計ナル男子ノ、厨子ヲ開テ瓜一菓ヲ取テ食テケリ、〇中略祖此レヲ聞テ、此モ彼モ不云テ、其ノ町ニ住ケル長シキ人々ヲ數呼集メケリ、家ノ內ノ上下ノ男女此レヲ見テ、

此ハ何ノ故ニ此ハ呼給フニカ有ラムト思ヒ合タル程ニ、郷ノ人共被呼テ皆來ヌ、其ノ時ニ父其ノ瓜取タル兒ヲ永ク不孝シテ、此ノ人々ノ判ヲ取ル也ケリ、然レバ判スル人共、此ハ何ナルコトゾト問ヘバ、只然思フ様ノ侍ル也ト云テ、皆判ヲ取ツ、〈○中略〉而ル間ダ、其冠者可然キ所ニ宮仕ヘシケル程ニ盗ミシタケリ、然レバ被捕テ被問ケルニ、然々ノ者ノ子也ト云ケレバ、撿非違使ノ別當ニ其ノ由ヲ申スニ、別當備ニ祖有ル者也、祖ニ付テ沙汰ヲ可致キ也ト有ケレバ、廳ノ下部共、此ノ冠者ヲ前ニ立テ、祖ノ家ニ行テ、此ノ由ヲ云テ追捕セムト爲ルニ、祖ノ云ク、此レ更ニ己ガ子ニ非ズ、其ノ故ハ此レヲ不孝シテ、敢テ不相見シテ、既ニ數十年ニ成ヌト云ヘドモ、廳ノ下部共不用シテ、恐喝喤ケレバ、祖若シ其達此ノ事ヲ虚言ト思バ、速ニ此レヲ可見シト云テ、彼ノ在地判取タル文ヲ取出テ、下部共ニ見ス、赤彼ノ判シタル人共ヲ呼テ此ノ旨ヲ云ヘバ、判シタル人共、正シク先年ニ然ル事有キト云ヘバ、下部一人返テ撿非違使ヲ以テ此ノ由ヲ申セバ、別當尤モ祖不知マジカナリト有ケレバ、下部共可云キ方无クテ、其ノ冠者ヲ具シテ返ヌ、犯シ隱レ无カリケレバ、獄ニ被禁ニケリ、但シ祖ハ更ニ事无クテ止ニケリ、然レバ其時ニナム、然マデ不有マジト思ケル者共モ極ク賢カリケル人カナト、祖ヲ讃メ喤ケル、

〔江家次第十七〕御元服後宴
天皇御南殿北廂、遣賀表、攝政召外記給表草、仰令能書者書之、諸卿候陣、時外記取判、〈○外記二人、持表筥并硯筥、取判、〉其後入宮置高案、召中務省令昇件案、

〔小右記〕治安三年閏九月廿九日庚申、府生爲行重奉文加二字朝臣返給、〈○藤原實資、時正二位右大臣、〉

〔台記〕仁平三年七月十五日壬寅、入夜院判官代右近將監源雅亮〈東帶〉持來廳下文二通、〈一通可ㇾ給二注熊野新三昧堂領一事、一通可ㇾ補熊野先達神人等職事、〉勾當源有忠〈衣冠〉傳取持來、欲加判之處、朝臣歟、草名歟、不知先例、〈○藤原頼長、時從一位左大臣、〉仍今夜不加判、仰後日可持來之由返給了、

〔殿暦〕嘉承二年九月七日庚寅、今日御願文ニ、余〈○藤原忠實〉不加判、故ハ任攝政之後、未加名於文書、而爲不吉事也、人々不可加判由被示、仍不加也、不修諷誦、是又憚判故也、御願文判民部卿俊明卿加署、准院司所加也、當座有議被加署、

〔源平盛衰記　五〕成親已下被召捕事

西光法師ヲ召取テ大庭ニ引居タリ、〈○中略〉西光有ノ儘ニゾ云ケル、執事別當新大納言殿〈○藤原成親〉院宣トテ催レシカバ、院中ニ被召仕身トシテ、不叶ト申ベキニアラネバ、平家一門打失ヒテ、西光モ世ニアラント思テ與シテ侍キ、院宣ノ趣キ誰カ可奉背トテ、始ヨリ終マデ白狀四五枚ニ記シテ、判形セサセテ後、高俊、西光法師ガ頭ヲ蹈テ口ヲ割、重テ誡置テケリ、

草名

〔道の幸　中〕東大寺へ行、〈○中略〉當寺四至の文書曰、〈○中略〉右圖堺勅定如件、天平勝寶八歳六月九日大僧都良辨、〈○中略〉かくて紙のつぎめのうらに、良辨が草名あり、わが朝にて草名のつたはりしが中にも、いと古きなり、

〔古今要覽稿　姓氏〕東大寺所藏定山堺四至文書



〈天平勝寶八歳六月九日、眞辨及辨官等ノ連署文書ノ裏ニ此草名アリ、卽眞辨ノ眞字、〉

〔吉記〕壽永元年八月廿九日丁卯、有請印事、〈○中略〉景家覽御封文、〈近江、美作、播磨、〉於亮、亮書下返給、次覽御封目錄并返抄、加封紙并筆、亮已下次第見下之、各加署、〈○草名〉

二合

〔消息耳底秘抄〕一二合字事

我ヨリ下様下人程ノ者ナンドニ仰書スレバ、恐申ニヨリテ二合ト草ニ書也、何名ニモ續成故ナリ、奈良朝小野篁等始テ作出給也、此事普通ニハ知及ヌ事也、常ニハ此ヲ不可用也、秘事也、

〔官職難儀〕二合とは

名字又は判を書所に二合と書事也、是には故實あり、たゞ常の名字判などの様に、二合と計は書

ぬ也、官を書てその下には書也、縦令左大臣二合、權大納言二合、如此也、又父より子に遣し、又は家僕に遣る書狀には、官をかゝで、たゞ二合と計書也、他人にはかゝず、總別判をば草名と申也、名乘の二字をくづして草にしたる物也、仍草名と申が本也、又二合の事を二合と書にはあらず、草名をする事を、名乘の二字、一にしたる故に、二ッ合たるといふ心に、二合と云は判する事也と申說有、さも有ぬべく聞得侍れど、弘安式目に、草名すべき所に、或二合と載侍るうへは、判と別とは慥に聞えたり、其上先達のいかほども書たる多のこり侍り、不審なき事にや、是は一段と異だつ儀にて、判をするぞと申たるほどの事也、二合と書事更に相違侍らず、又除目に二合と申は、各別の事也、それは大臣大中納言每年の給に、諸國目一人、史生一人を申任るを、大臣は隔年、大納言、中納言は中三年を(或中四年の說あり)へだてゝ、掾を申任する、掾をば三分と云、目をば二分、史生をば一分と云、目と史生との二ッを合て、三分の掾に任ずるを二合申文と申也、名は同ながら各別したる事也、

〔好古小錄 上〕花押

婦人ノ文書ニ花押ヲ用ル、余嘗ヲ見ル所ノ一二ヲ記ス、天曆□年、田劵、□□氏女、(花押)正中三年三月八日、讓狀、大中臣氏女、(花押)嘉曆二年十一月四日、田畠劵、在原氏女、(花押)建武五年七月八日、九條大豆田讓狀、藤原氏女(花押)建久元年七月十四日、家地沽却劵、女官三條加判、(花押)建長三年十月八日、修明門院御讓狀、(御花押)文永十二年四月廿日、田劵、藤井氏女、(花押)此餘見ル所十餘通、年號ヲ遺忘ス、

〔古今要覽稿 姓氏〕女子草名

漢土には如何あるべき、未みる所あらず、皇國には花押叢載る所尼如大、或人所藏經筒銘しるす所宗岡重房女、京都藤貞幹所載女官三條、水戶吉田藥王院所藏比丘尼淨音、予(○屋代弘賢)所藏常子內親王、或人所藏信濃善光寺住持妙譽の花押あり、是等親しく目擊せるものなり、

古事類苑

政治部十一

上編

奉使 國使附

詔書ヲ以テ使人ヲ定メ、之ヲ朝廷ヨリ差遣スルヲ詔使ト云ヒ、太政官ヨリスルヲ官使ト云フ、之ヲ總稱シテ朝使ト云ヒ、亦汎ク勅使トモ云ヘリ、蓋シ詔使ト云ヒ、勅使ト云フモ、同ジク綸言ヲ奉ジテ出デヽ中外ニ使スルモノヽ稱ナレドモ、其奉ズル所ノ事ニ就キテ、大小廣狹ノ別アルガ如シ、故ニ詔使ト云ヘバ、專ラ政治上ノ事ニノミ關スル使ナレドモ、勅使ハ必ズシモ然ラズ、宮中日常ノ瑣事、主上御一身ノ內事ニ至ルマデ、凡ソ上旨ヲ奉ジテ使スルモノ、皆之ヲ勅使ト稱シタリ、又詔使ト官使トノ別ハ、元ト確然タル區畫之レアリシニハアラジ、然ルニ淳和天皇ノ天長二年、使色ヲ定メテ、巡察、覆囚、檢稅、交替、畿內校班田、問民苦、問民訴等ノ使ヲ詔使ノ例ニ準ジ、賑給、檢損田、檢池溝、檢疫死等ノ使ヲ官使ト爲シタリ、詔使官使ヲ諸國ニ差遣スルニハ、太政官先ヅ其狀ヲ奏聞シ、大事ハ勅ヲ奉ジテ名ヲ定メ、中事ハ大臣簡奏シ、小事ハ辨官ヲシテ式部ニ令シテ簡點セシメ、省名ヲ錄シテ直ニ大臣ニ上申ス、卽チ其文ヲバ官ニ留メ、更ニ一通ヲ寫シテ辨官ニ送リテ發遣セシム、其使、國ニ到レバ、境上ノ郡司之ヲ迎送シ、國司ハ國府ニ候待ス、而シテ使人事了リテ歸京ノ日、返抄ヲ太政官ニ進ム、

詔使官使ヲ朝使ト云フニ對シテ、國司ヨリ發遣スルヲ國使ト稱シ、此等ヲ總稱シテ公使ト云フ、公使トハ公事ヲ以テ使命ヲ奉ズルモノヲ謂フナリ、公使ノ出デヽ使スルヤ、皆驛馬傳

馬ニ乘ルコトヲ聽シ、到ル處悉ク官物ヲ以テ供給ス、其食料ハ、各、其經ル所ノ國ニ於テ、正税ノ息利ヲ以テ之ニ充テタリ

名稱

〔類聚名義抄一人〕使（所里反、ツカヒ）

〔伊呂波字類抄人部〕使（ツカヒ）信（同）

〔節用集人門〕使

〔書言字考節用集人倫四〕使（句會、將命者、又遣人聘問曰使、）

〔古事記傳二十四〕物へ遣る人を使と云も、都加布を體言にいひたるなり、されば使ふ、仕へ、遣す、使など、皆本は同言なるが活けるなり、

〔倭訓栞前編十六〕つかひ　使をよめり、神代紀に使者とも見ゆ、つかふを體にいふ也、靈異記に信もよめり、神代紀に行人をよめり、論語に出たり、行李をよむは、左傳注に使人也と見えたり、

〔古事記上〕此八千矛神、將婚高志國之沼河比賣、幸行之時、到其沼河比賣之家、歌曰、夜知富許能、迦微能美許登波、○中略　爾波都登理、迦祁波那久、宇禮多久母、那久那留登理加、許能登理母、宇知夜米許世泥、伊斯多布夜、阿麻波勢豆加比、許登能、加多理其登母、許遠婆、

〔日本書紀神代二〕二神、（○武甕槌、經津主、）於是降到出雲國五十田狹之小汀、則拔十握劍、倒植於地、踞其鋒端、而問大己貴神曰、高皇產靈尊、欲降皇孫、君臨此地、故先遣我二神、驅除平定、汝意何如、當須避不、時大己貴神對曰、當問我子、然後將報、是時其子事代主神、遊行在於出雲國三穗（三穗此云美保）之碕、以釣魚爲樂、○中略　故以熊野諸手船（亦名天鴿船）載使者稻背脛遣之、而致高皇產靈尊勅於事代主神、

〔古事記上〕爾高御產巢日神、天照大御神之命以、於天安河之河原、神集八百万神集而、思金神令思而詔、此葦原中國者、我御子之所知國、言依所賜之國也、故以爲於此國、道速振荒振國神等之多在、是使何神而將言趣、爾思金神及八百万神議白之、天菩比神、是可遣、故遣天菩比神者、乃媚附大國主神、至

于三年不復奏、是以高御產巢日神、天照大御神、亦問諸神等、所遣葦原中國之天菩比神、久不復奏、亦使何神之吉、爾思金神答白、可遣天津國玉神之子天若日子、故爾以天之麻迦古弓、(自麻下三字以音)天之波波(此二字以音)矢賜天若日子而遣、於是天若日子降到其國、卽娶大國主神之女下照比賣、亦慮獲其國、至于八年不復奏、故爾天照大御神、高御產巢日神、亦問諸神等、天若日子久不復奏、又遣曷神以問天若日子之淹留所由、於是諸神及思金神答白、可遣雉名鳴女、時詔之、汝行問天若日子狀者、汝所以使葦原中國者、言趣和其國之荒振神等之者也、何至于八年不復奏、故爾鳴女自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命、爾天佐具賣(此三字以音)聞此鳥言而、語天若日子言、此鳥者其鳴音甚惡、故可射殺云進、卽天若日子、持天神所賜天之波士弓、天之加久矢、射殺其雉、○中略 於是天照大御神詔之、亦遣曷神者吉、爾思金神及諸神白之、坐天安河河上之天石屋、名伊都之尾羽張神、是可遣、(伊都二字以音)若亦非此神者、其神之子建御雷之男神、此應遣、且其天尾羽張神者、逆塞上天安河之水而、塞道居故、他神不得行、故別遣天迦久神可問、故爾使天迦久神、問天尾羽張神之時、答白、恐之仕奉、然於此道者、僕子建御雷神可遣、乃貢進、爾天鳥船神副建御雷神而遣、

〔源氏物語總角〕御胸のみ塞がりて、つゆまどろまれず、あかしかねさせ給ふ、御使の行きかふ程もなきに、猶いぶせきを限なくの給はせつるを、夜中うち過ぐる程になん、絶えはて給ひぬるとて泣き騷げば、御使もいとあへなくて歸りまゐりぬ、

〔十訓抄十一〕河内重如をば、山次郎判官代と號す、其品いやしきものなり、我より高き女を思かけて、けさう文を書て、手づからもていきたり、

人づてはちりもやすると思ふまゝに我が使に我がきつるぞ、女めでゝ、またがひにけり、

〔令義解十一獄〕凡奉使、有所掩攝、(謂依律、時定受使、追捕罪人是也、)皆告本部本司、不得徑卽收捕、若急速密者、且捕獲、取本司公文發遣、(謂凡掩攝罪人、皆先經罪人本部本司、若急速密者、不經本部本司、徑卽追捕、然後始告、取使人之本司公文、相知執遣發云、取本司公文發遣、其略本部者、准上文須知也、)

專使

〔日本書紀 十應神〕十三年三月、天皇遣專使、以徵髮長媛、

〔令義解 五宮衞〕凡宿衞及近侍之人、略○註 二等以上親、犯死罪被推勘者、推斷之司、速遣專使、（謂、若罪人在外、量狀輕重者、雖緩應稱也、）齎牒報宿衞及近侍之人本司本府、勿聽人內、

〔令義解 十獄〕凡犯罪、略○中 刑部省及諸國、斷流以上若除免官當者、皆連寫案、略○註 申太政官、按覆理盡申奏、即按覆事有不盡、在外者遣使就覆、（謂、依國所斷、情理不盡、別遣專使、就所在按覆、與下條覆囚使其義不同、）在京者更就省覆、

便使

〔令義解 七公式〕凡京官、以公事出使、皆由太政官發遣、略○中 還日以返抄送太政官、若使人更不向京者、其返抄付所在司、略○註 附便使送、即事速者、差專使送、

正使副使

〔饅頭屋本節用集 人倫 不〕副使（フクシ）正使（シヤウシ）唐船使　〔同 人倫 之〕正使（シヤウシ）副使（フクシ）

〔古事記 上〕於是天照大御神詔之、亦遣曷神者吉、爾思金神及諸神白之、坐天安河河上之天石屋、名伊都之尾羽張神、是可遣、（伊都二字以音）若亦非此神者、其神之子建御雷之男神、此應遣、略○中 故爾使天迦久神、問天尾羽張神之時、答白、恐之仕奉、然於此道者、僕子建御雷神可遣、乃貢進、爾天。鳥。船。神。副。建。御。雷。神。而遣、

〔古事記傳 十四〕天鳥船神は、略○中 彼神賀詞には、夷鳥命爾布都怒志命乎副天とあるに依らば、此も其如くにも訓まるれども、さに非ず、（彼は出雲國造が、己が先祖を旨といふ故に、夷鳥命を主とせり、）此は建御雷を主とすれば、鳥船神乎建御雷神爾副氐と訓べきなり、

〔伊勢物語 下〕昔男有けり、その男、伊勢の國にかりのつかひにいきけるを、かの伊勢の齋宮なりける人のおや、つねの使よりは此人よくいたはれといひやりけり、略○中 つ。か。ひ。ざ。ね。とある人なれば、とほくもやどさず、ねやもちかくなん有ける、

〔倭訓栞 前編 十六〕つかひざね　使主の義、使の中に宗とする人をいふ、日本紀に、主神をかみざねとよめり、眞名伊勢物語には使眞と書り、

〔雅言集覽二十四〕つかひざね　使の中に、宗とおもき人をいふ、

〔日本書紀 十九 欽明〕十五年十二月、百濟遣下部杆率汶斯干奴上表曰、略○中有至臣所將來民、筑紫物部莫奇委沙奇、能射火箭、蒙天皇威靈、以月九日酉時、焚城拔之、故遣單使、馳船奏聞、

〔古事記 上〕故爾鳴女自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲如天神之詔命、略○中爾天若日子、持天神所賜天之波士弓、天之加久矢、射殺其雉、略○中亦其雉不還、故於今諺、曰雉之頓使本是也、

〔古事記傳 十三〕頓使、書紀一書に、此雉降來、因見粟田豆田、則留而不返、此世所謂雉頓使之緣也とあり、頓を比多と訓ことは、書紀に、頓丘、此云毘陀烏とある、此正き據なり、又垂仁卷に、不期死生、頓得爭力、又履中卷に、自是後頓絕以不錄飼部などもあり、抑比多てふ言は、此餘も比多須良、比多毛能など、今世にも云て、純一むきに片よりて、他を雜へぬ意なれば、本は一より出づる言なるべし、萬葉に直土、直佐麻などあるも、土のみ、麻のみにて、他物をまじへぬなり、されば頓使は、副使も從者も無くて、單獨なるを云なるべし、書紀欽明卷に、單使ともあり、これもヒタブカヒと訓てよろしかるべし、さて此を諺に云ならはせる意は、此雉使の射殺されて還らざりしに因て、人世になりて、凡て大事の使を遣るに、副使從者なども無て獨なるをば、雉の頓使と云て忌ことにせしなり、さるは上に其雉不還と云て、此諺を擧たれば、不還例を忌なりけり、書紀にも、同く不返と云語より係て云るをおもへ、口訣に、頓使者急使也といひ、纂疏に、本然差使之頓由と云るなどは、たゞに頓字の義をのみ思ひたるものにて、比多てふ言にあたらず、非なり、もし又此註どもに依らば、比多と訓るは誤なり、波夜細とか、雷波加使とか訓べし、されど其意にては、諺になれる所由もおぼつかなく、又上件の事どもを見るに、然云べき所由もなければ、とにかくに非なり、

〔承久軍物語 二〕さてもかやうゐん殿には、くぎやうせんぎありて、くに〳〵へゐんせんつかはさるべきよしにて、あせちの中納言みつちか卿うけ給はつて、これをかく、そのおもむきは、うきやうのごん大夫よし時、てうてきとなれり、はやくついたうせしむべし、けんしやうはこうによる

べしとぞきこえし、以上七つうなり、とうごくへは、たけだ、をがさはら、ちば、をやま、うつのみや、みうら、かさいにぞ下さるゝ、御つかひには、なれまつと申て、きはめて、あしはやきものあり、かれをえらばれてぞくだし給ふ、平九郎はうぐわん〇義經がわたくしのつかひをも、あひそへたり、承久三年五月十五日のとりのこくに、都を出て、おとらじまけじと、くだりけるほどに、同十九日のむまのこくに、かまくらちかきかたせといふ所につきけり、はうぐわんのつかひは、あんないじやにて、先にかまくらへ入て、するがのかみに、文をまゐらせければ、やがてひけんして、返事を申べけれども、道のほどはゞかりあれば、わざと申さぬと申せとて、おひ出しけり、そのゝち、この文をくるくるとかいまきて、うきやうの大夫のもとへ、もちむかひ、すでに世中こそみだれて候へ、去ぬる十五日、いがのはんぐわんみつすゑうたれぬると、たねよしがわたくしの文、御らんせよとて、よし時のまへにさしおきけり、〇中略さてゐんせんの御つかひなれまつは、さだめてかまくら中にぞあるらんに、めしよせよとて尋られけり、なれ松は、なにとやらん人のきしよくかはりてさわがしかりければ、かさ井がやつのあるもの〻いへに、かくれゐたりけるを、引出し、引はりてぞ參りける、さてゐんせんをば、うばふがごとくおしとつて、大かたはよませつゝ、やきすて、なれ松はいましめおかれけり、

〔太平記十八〕瓜生擧旗事

去程ニ、先帝〇後醍醐ハ、吉野ニ御座有テ、近國ノ兵馳參ル由、聞エケレバ、京都ノ周章ハ申ニ及バズ、諸國ノ武士モ、又天下穩ナラズト、安キ心モナカリケリ、此事既ニ一兩月ニ及ビケレ共、金崎城ニハ、出入絶タルニ依テ、知ル人モナカリケル所ニ、十一月〇延元元年二日ノ朝ナギニ、櫛川ノ島崎ヨリ、金崎ヲサシテ、オヨグモノアリ、海松和布ヲカヅク海人カ、浪ニタヾヨフ水鳥カト、目ヲ付テ是ヲ見レバ、ソレニハアラズシテ、亘理新左衛門〇忠景ト云ヒケルモノ、吉野ノ帝ヨリナサレタル綸旨ヲ

髻ニ結付テ、オログニテゾアリケル、城中ノ人々驚テ、急ギ開テ見ルニ、先帝密ニ吉野ヘ臨幸成ナ、近國ノ士卒悉ク馳參ル間、不日ニ京都ヲ責ラルベキ由、觸セラレタリ、

（道家祖看記）御禁中御靡壞、無正體之間、立入左京進〔○宗繼〕萬里小路大納言惟房ヘ申上次第、禁中之御領所山科岩倉ナドモ、近年ハシタガヒ不申、御當番ノ御公家衆モ、京都之御住居成難故ニ、國々ヘ御下向被成候、アマリ三好、松永ナド、ホシイマヽノ有樣也、コヽニ尾張國ニテ、織田彈正忠信長ト申仁、父ニ少年ニテヲクタレ候ヘ共、少モ跡ヲハタラカサズ、〔○中略〕右ニヨリ内々申上通、信長ヘ御奉書リンシヲ被遣、天下被仰付、可然通萬里小路殿ヘ立入申上、惟房サテモ大事申出シモノ哉、三好、松永ナド聞候ハヾ、君ノ御タメ、ソレガシナンデモ、ウキメニアワン事、拔ノウチ也、立入承、御意ノゴトクニ、兩人ノ者少ノ事ヲサヘ、大事ニサハギ候、然共イカニモイカニモ、ツンミツナサレ、上ラウサマ〔○正親町紀〕御里ヘ御出之剋、ソウモン有、ゲニモト仰事候ハヾ、御奉書ヲバ、上ラウアンバシ、綸旨ヲバ、御手前アンバシ、尾州ヘノ案内者ニハ、山中之イソガイ可仕通、切々我等ニ申也、我等一所ノ者ナレバ、身ノ大事ヲ仕出シ候ハジ、惟房シバシ物モ申ナク、大事々々ト計也、オタヨリ御用有、シバシ御タチナシ、又上ラウノ御參、幸ノ事、コレニマチ候ヘトテ、御タチ有、立入心ノウチニハ、神佛ノ御メグミト存、前後ノ事ヲシアン也、サテキドクニ御イラサレバ、上樣ヨリダンカウノ事仰アリテ參也、上樣御ユメノツゲ有、尾州アツ田ヘハ、日カズナニ程ニ參宮仕候ハン、君ヨリハ、近年レイナシ、上ラウタメトテ、イソギキヅカヒナキ者下候ヘト御意也、幸イ而立入キ申也、タヅチ可申トテ、右之通御物語有、扨天ノアタフル事ト存、四日ニハ、可參由申上、右之ヲモムキソフモン可然通也、イソギ人ヲ遣上リ候ヘト御申也、然處ニ、イソガイ程ナク參、萬里小路殿如此通、上ラウキコシメシ、サテハ二人ノ口ヨクカタメサセタマヒテ、上樣ヘ申上、ソノ上ノ事トテ、辨殿ノヘヤニテ、上ラウ御タイメン、右之次第ヒトツガキニ仕、二人ノ宿ヘ歸、近年シアン仕タル事ナレバ、早

早書タテ、惟房ヘ進上、ウケ取ナサレ、大事々々計ニテ、オクヘ御入候也、上ラウ一ツ書御ランジ、又フシンナル所ヲ、直ニ御尋被成候テ、御參内之事ハ、ワキヘナリ、コノ事大事ニ思召候、然處ニクレガタニ、上ラウメシ有、イソギ參内、アツ田路次御タヅネ、アリノマヽニ御申上、扨ヨキツイデトヲボシメシ、右之次第ソウモン有處ニ、二人ノ者ノ存次第、一ツ書御ランジ、御キゲンヨク、トカクニ内司〇司侍假借所ニテ、御クジ御取アツテ、チヨクゴンアルベキヨシ被仰、明日ノアカツキ、御ハライニテ、二ツ一ツアガリ候ヲアゲ、御前ヘモチテ被參候ヤウニ仰也、夜半過ニ、御里ヘ御申シコシ、二人ノ者モ、明日ハ早朝ニコレヘ參候ヤウニ、惟房御申也、二人門ヘ出申時、ヨビ返シ、イソガイ、尾州ニテノチインノ者ノ名字ヲ、今夜ニテモ、明日ニテモ、御尋之刻、分明ニ候テハ如何、書立ヲキ候ヘ、道家尾張守トテ、光明峯寺殿御名乘ヲ名字ニ成被下、ミノ、ヲハリ、三川、三箇國ノ御調物、又ハ御自分ノ御知行ヲモヲサメ上申者ノ子孫ニテ、代々尾張守ト申候ヘ共、イマハ尾州守ト名乘可申フゼイモナシ、近年織田備後守ニシタガヒ、其後信長ヲサナキ時ヨリモ、奉公仕、國々ノ目付ヲイタシ候テ、多分多ヘナリ候テハ、國ニヰ申候、ナニタル事ヲモ、心ヤスク申トヽノヘ申者也、道家留主ニテ、女房信長ニ申度申候、信長モツチニヤスイト計被申候ト申上候、三人ノ人々ハ、ソノ夜一目モマドロミ候ハデ、アクルマチカケ候、アンノゴトク、早朝ニ惟房ヲメシアゲ、フダミセ被成候、此上ハヨキニ分別シテ、イカニモヲンミツ事一也、チンハ内司所ノハカラヒ、ナンヂモ、心ヅヨクヲモフベシ、二人ノ者シメシ合、インシンノ物ヲモ、用意仕候ヘ、

一退轉之公家相續之事

一御領所之事

一御修理之事　如此アマリトキ事ハ無用、御タキ物御調合之事也、二人ノ者申分ニハ、御ドウブク、御タキ物可然由申上也、今月廿七八日比ニハ、尾州清須ヘ參候ヤウニト申合、イソガイモ山中

へ歸、立入ヲマチ可申由也、爲事相調、立入十月廿四日ニ京都ヲ立、山中ヘ參候、同廿五日、二人罷立、
同廿八日ニ清須道家處ヘ、磯貝新右衛門參候、折節馬ニユアラヒサセキ申所ヘ參、サテ大儀ニテ
御下リ、門ニツレトヲボシキ人コナタヘ申也、サテ内ヘ入引合、右之次第申也、マヅフルマヒナド
申付、信長今朝未明ニ鷹野ニ被出候、歸ニハイツモコヽニテ休、是其刻具ニ申キカセ、取次禮ノ事、
信長次第ニ可仕トテ、其樣子具ニタヅチ、マヅユヘ御入トテ、コシラヘ候ヘト申、御奉書リンシ、道
家ツヽミナガライタヾキ、手ヲウツテ、コレハサテモ信長カギリナク、マンゾクイタシ候ハント
テ、ヤガテ女房ニカタル、御歸ノ事、程有間敷候、カミユイコシラヘ御マチ候ヘト申、悦事カギリナ
シ、アンノゴトク、七ツ時ノ事ナルニ、信長歸リ、馬ヲエンマデノリカケ、イツモノゴトクフル舞出
シ、ユヘイランドシタマヒシ時ニ、右ノ次第申上、即ユヘ御入ナガラ、クワシクタヅチタマフ、使ハ
山中ノイソガイ案内者ニテ、御處ノ立入左京進ト申者參候由申上、大内樣ヨリ日本國ヲ殿ヘ被
參候ヨシ、御リンシツキ申、勅使參候、御キゲン大カタナラズ、ヤスイラメシ、アタラシキ小袖ユカ
タマデ用意アルカト御タヅチ、ナニモソロイ申由、使ニヤガテ對面ト御申候、道家申上候ハ、取次
ハタレト申、シノビノ事ナレバ、タヾコヽニテ對面ナンヂ仕候ヘ、重而申上樣、リンシ奉書ノ取ア
ツカイ、如何ト申、サラバ村井ヲヨビ候ヘ、ヒルヨリコレニアリト申、御リンシ奉書ヨミ申事村井、
サテハ又取次ハ道家仕候ヘ、九右衛門久太郎計ヲキ候ヘ、キウジハナンヂ子共二人仕候ヘ、六人
ノ者共ナガバカマ、我々ノ長バカマチイサ刀是ニ候ヤ、村井道家日比心カゲシシツケカタ、今日
御用ニタツ事、家ノ面目、イニシヘニカヘルカト、心中ニ存、御小姓二人四人御供申、ヲクヘイラセ
給ヒ、御コシラヘアツテ、サテイツガイヲメシ、勅使ノアヒシヲイハ、タガヒニムヅカシキ事、我ニ
ハクルシカラズ候ヘ共、上ノ御タメ、又ハ二人ノタメ、イカニモ〳〵ヲンミツニテ、人ノシラザル
ヤウニ申付候ハントテ、御悦無申計候、御奉書御リンシ三ケ條ノ書立ヲバ、立入持參、此外進物披

女使

盡八、道家可仕通、被申付也、

〔禁秘御抄中〕御使事

依人依事有差別、〇中略中品事、殿上將佐也、又女使有之時、皆式定事也、

〔令義解一職員〕式部省

卿一人、掌内外文官名帳、〇中略假使、〇謂假者、除六假外皆是也、本司判訖、即申式部也、使者如巡察覆囚使之類是也、〇中略事、

制度

〔令集解三職員〕釋云、依私事而罷退爲假、依公事以差遣爲使、穴云、〇中略使、謂凡諸使皆告官、仰式部兵部、令權而已、問、内舍人大舍人等使亦知哉、答、彼當司所行也、此使者官仰簡是也、

〔令義解一職員〕兵部省

卿一人、掌内外武官名帳、〇中略假、使、〇中略事、

〔令義解七公式〕凡京官以公事出使、皆由太政官發遣、所經歷處符移、〇註略辨官皆令便送、〇註略還日、以返抄送太政官、若使人更不向京者、其返抄付所在司、謂使人所至當之國、假令陸奧國司赴任、便付路次文書者、取路次返抄、付陸奧國之類、附便使送、即事速者、差專使送、

凡諸使還日、皆責返抄、

〔延喜式十一太政官〕凡應差使遣諸國者、太政官先以狀奏聞、大事臨時奉勅定名、中事大臣簡奏、小事令辨官仰式部簡點、省即錄名、直申大臣、訖即其文入太政官、史寫一通、入辨官發遣、其使廻日、應申務太政官者、先以狀申辨官、即辨史等率引就座、先申使政、訖即退出、然後辨史申政如常、

凡遣賑給使、奏國解訖、即仰式部、二日之內進擬使文、同日官修符、請印訖、五日內使者發去、若致闕怠者、尋情勘當、臨時緩急之使亦同、

〔延喜式十八式部〕凡擬使者、丞申大臣之後、其名簿、令錄進太政官史生進辨官、

凡遣諸國使、諸司官人、申官之後、不上本司、

辭見

凡諸使所請主典等師者、使人簡諸司主典已下應堪事者、錄名申省、省申太政官、

凡諸司官人及雜色等擬使、直申太政官、其使若稱病者、省勘虛實、相換更申、若有欺詐者、依法科罪、

〔令義解七公式〕凡官人父母病患危篤者、不得差充遠使、（謂化內遠使也）

〔延喜式二十一民部〕凡參議及左右大辨、八省卿、彈正尹、遙授國司者、不得差使、

〔令義解六儀制〕凡文武官三位以上假使者、○義解略去皆奉辭、還皆奉見、其五位以上、奉勅差使（謂奉勅定名、及令所司差）者、辭見亦如之、（遣差是也、）○中略

〔令義解七公式〕凡受勅出使、辭訖、無故不得宿於家、（謂文牒假敕、宜有敕得宿也、異於大時出征、辭訖不得反宿於家之意也、）

遇

〔令義解六儀制〕凡六位以下公使、於所使之國、遇四位以上國司者、不合下馬、若國司遇詔使者、同位以下合下、何者下位云、官人就本國見同位卽下、何況詔使豈得輕於國司、其百姓在路遇六位詔使、不下、若於所使國遇之者、皆下也、

〔令集解二十八儀制〕師說云、詔使六位以下、遇四位以上、不下、凡人遇詔使、亦不下、其驛使相遇者准拜禮、唯急速驛使者不下、八十一例云、驛使遇應致敬者、下馬、若急速者不下也、○中略穴云、私記云、詔使六位以下、遇四位以上者合下、凡人遇詔使者不下者、但在路相遇者、詔使驛使一同致敬之法、但至前所部內國司五位使七位以下、任隨私禮耳、何者官人就本國見者、同位卽下者、此爲非使時生文、然假使六位、國司亦六位、合隨私禮也、其部內諸人下馬灼然也、錄國司隨私禮故耳、

〔徒然草上〕常盤井相國出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に北面何がしは勅書を持ながら下馬之侍りし者なり、か程の者いかでか君につかふまつり候べきと申されければ、北面をはなたれにけり、勅書を馬の上ながらさゝげて見せ奉るべし、おるべからずとぞ、

乘驛傳馬

〔令義解八廐牧〕凡公使須乘驛及傳馬、若不足者、卽以私馬充、其私馬因公使致死者、官爲酬替、（謂無以理及非理）

死、皆官酬替、但非理死者、官先爲酬、後更依下條徵備、案下條非理死失、卽知非理致失者、亦令酬替、其有傷損不任乗用者、亦須酬替、

〔令義解 公式七〕凡給驛傳馬、皆依鈴傳符剋數、○下略

〔令集解 三十四 公式〕穴云、給驛傳馬者、未知何人乘傳馬、答、厩牧令云、公使須乘驛及傳馬、又云、官人乘傳馬出使者、卽知公使所乘也、但事急者乘驛、事緩者乘傳馬、宜應云耳、

〔令義解 公式七〕凡驛使在路遇患、不堪乘馬者、謂遭重喪者亦同、依律、驛使無故以書寄人、注云、非身患及父母喪故也、案軍防令、征行大將以下、有遭父母喪者、皆待征還、然後告喪、又假寧令云、公使父母喪應解官、無人告者、聽家人經所在官司陳牒告追、若奉勅出使者、申官處分、卽知公事出使、遭父母喪者、自非征行及奉勅使、皆給鈴及文書、寄同行人送於前所也、所有文書、令同行人送前所、謂同行人者、從人、其餘者非也、前所者、指詣之所也、若無同行人、令驛長送前所、謂前所者、是前路之國、非指詣之所、何者下文、更云國司差使遞送、故其逐察覆囚推事等使、不可送書者、申官聽裁也、及國司差使遞送、

凡國有大瑞及運機、災異、疫疾、境外消息者、謂機者、事之萌動也、災者、天火水旱之類也、異者、怪變告徵之類也、境外消息者、告飢請救之類也、以上諸事、變動非常、故別馳驛申上也、各遣使馳驛申上、

凡驛使至京、奏機密事者、謂軍機密事也、及不得令共人語、其蕃人歸化者、置館供給、亦不得任來往、

〔令義解 公式十〕凡死罪雖已奏、報訴冤枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛撿挍、

〔東海道名所記 一〕一日路すぎて、暮がたには、はたごやの宿、泊々これあり、これをむかしは驛館(うまやど)と名づけ、みかどより五畿七道に御つかひをくださるゝ時、出しける傳馬(てんま)をば驛馬(はいま)と申す、驛馬(はいま)とだにいへば、人おそれてたちのきけり、今の世までも、驛馬々々といへば、道行人もかたはらへ立のくは、此事よりもいゝつたへたること葉とかや、

遭喪

〔令義解 假寧九〕凡官人、遠任及公使、父母喪應解官、無人告者、聽家人經所在官司陳牒告追、謂官司得喪家牒、更附便使移告、若無便使者、亦差專使報告、其告追之間、已經周朞、而聞喪之禮、以聞爲始、卽解官終服、並皆如法也、若奉勅出使、謂奉勅定名、及令所司差遣等也、及任居邊要、謂居邊爲要、壹岐對馬之類、卽史生亦同也、者、申官處分、謂官吏奏聞、

凡外官及使人、謂勅使官使、皆是也、聞喪者、聽所在館舍安置、謂假日之內、仍得居館舍、但使事遠者、不必滿假限、再三舉哀訖、卽發往、不得於國郡廳

程限

內考眞、

〔延喜式二十六主稅〕凡檢損幷不堪佃田、賑給、疫死等使程限、山城、河内、攝津、伊勢、遠江、駿河、甲斐、相摸、信濃、加賀、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、阿波、讃岐、筑前、筑後、肥前、豐前、豐後等國、損田百日、不堪佃田八十日、大和、武藏、上總、下總、近江、美濃、上野、下野、出羽、越前、越中、播磨、土佐等國、損田百廿日、不堪佃田百日、和泉、尾張、參河、安房、能登、丹後、石見、日向、大隅、薩摩等國、損田八十日、不堪佃田六十日、伊賀國、損田五十日、不堪佃田卅日、志摩國、損田卅日、不堪佃田廿日、伊豆、飛驒、若狹、佐渡、隱岐等國、損田六十日、不堪佃田卅日、常陸、越後、伊豫、肥後等國、損田百卅日、不堪佃田百廿日、陸奧國、損田二百日、不堪佃田百六十日、淡路國、壹岐、對馬嶋等、損田卅日、不堪佃田卅日、其賑給疫死、並准不堪佃田、

考功

〔令義解四考課〕凡内外初位以上長上官、計考前釐事、不滿二百卌日、分番不滿一百卌日、若帳内資人不滿二百日、並不考、分番者、若日有斷絕、欲於考前倍上者、皆聽通計、〇義解、謂即先從公使、後改官者、謂散位先從公使、後任官者亦同也、起補任日、及任訖未上、使差充使者、起差使日、並聞在司釐事法、若舊人被使、後得替者、謂官人宛使、被使得替、解任者也、特從使日、亦聽通計、

〔類聚符宣抄十〕使。上日。

史生鴨部良直

右中納言藤原山蔭卿宣、件良直號事遣使、宜始自今月五日追給上日者、

仁和二年九月廿三日

上召使異斐部常雄去年十月一日遣使今月十五日歸京

右大納言藤原卿宣、件人宜給以往當番上日者、

延喜十三年二月廿六日

少外記伴久永奉

史生秦興亮

右大臣宣、件人就事遣播磨國、宜准見仕給其上日者、

延喜六年十一月廿五日　少外記紀延年奉

史生道島滋蔭

右大臣宣、件滋蔭就事役其身、宜准見仕給彼役間上日百十六日者、

延喜十六年正月七日　大外記大藏眞明奉

上召使長背遠滿

右中納言兼左衞門督藤原定方卿宣偁、件人就事遣使、還向之間、宜給本番上日者、

延喜十六年十月九日　少外記小野美實奉

史生巨勢有野

右被大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣云、件人遣後院使、經使之間、給上日者、

寛平六年六月廿二日　少外記多治宗範奉

史生石上邦雄

被大納言源卿宣云、件人遣後院使、宜給上日者、

寛平七年九月七日　少外記多治宗範奉

召使粟田太永

右被右大臣宣偁、件人就事遣使、宜准見仕給上日者、

寛平八年二月廿五日　大外記多治宗範奉

上召使能原恒興

使給

右被中納言藤原扶幹卿宣偁、件恒典、預少事、發向太宰府、宜遣向之間、准見仕給上日者、

承平六年八月廿七日　　少外記三統公忠奉

史生大私望玄

右中納言藤原師尹卿宣、件人就事遣使、宜給八十四箇日上日者、

天曆十年十二月五日　　大外記安倍兼良奉

史生美努興晉

右大納言藤原卿宣、件人就事令役、其身宜准見仕給上日者、

天德三年五月七日　　大外記大江澄景奉

〔令義解廐牧八〕凡官人乘傳馬出使者、所至之處、皆用官物、准位供給、（謂官稱其（稱其二字當衍）物者、謂人多少、故云准位供給、但其驛使者、用驛稻也、隨位高下、有供給多少、式處分也、）其驛使者、毎三驛給、若山險闇遠之處、毎驛供之、

〔延喜式大藏三十〕諸使給法

畿內挍田使

長官、絁六疋、綿十四屯、布八端、次官、絁五疋、綿十屯、布五端、判官、絁三疋、綿六屯、布三端、主典、絁二疋、綿四屯、布二端、

班田使

長官、絁十疋、綿廿屯、布廿端、次官、絁五疋、綿十屯、布十端、判官、絁三疋、綿六屯、布六端、主典、絁二疋、綿四屯、布四端、

征夷使

大將軍、絁五十疋、綿一百五十屯、細布十端、布卅端、副將軍、絁廿疋、綿六十屯、布廿端、軍監、絁八疋、綿卅屯、布十五端、軍曹、絁四疋、綿十二屯、布六端、明法師、醫師、陰陽師、中臣、忌部、各絁三疋、綿八屯、布四端、大

將軍已下、忌部已上、傔從、各絁二疋、綿四屯、布四端、

入諸蕃使

入唐大使、絁六十疋、綿一百五十屯、布一百五十端、副使絁卌疋、綿一百屯、布一百端、判官、各絁十疋、綿六十屯、布卌端、錄事、各絁六疋、綿卌屯、布廿端、知乘船事、譯語、請益生、主神、醫師、陰陽師、畫師、各絁五疋、綿卌屯、布十六端、史生、射手、船師、音聲長、新羅奄美等譯語、卜部、留學生、學問僧、傔從、各絁四疋、綿廿屯、布十三端、雜使、音聲生、玉生、鍛生、鑄生、細工生、船匠、柂師、各絁三疋、綿十五屯、布八端、傔人、挾杪、各絁二疋、綿十二屯、布四端、留學生、學問僧、各絁卌疋、綿一百屯、布八十端、還學僧、絁廿疋、綿六十屯、布卌端、已上布各三分之一給上總布、水手長、絁一疋、綿四屯、布二端、水手、各綿四屯、布二端、柂師、挾杪、水手長及水手、各給帷、頭巾、巾子、腰帶、貲布、黃衫、著綿帛襖子袴及汗衫、褌、貲布半臂、其渤海新羅水手等、時當熱序者、停綿襖子袴、宜給細布袴、並使收掌、臨入京給、其別賜、大使、彩帛一百十七疋、貲布廿端、副使、彩帛七十八疋、貲布十端、判官、各彩帛十五疋、貲布六端、錄事、各彩帛十疋、貲布四端、知乘船事、譯語、各彩帛五疋、貲布二端、學問僧、還學僧、各彩帛十疋、

入渤海使、絁廿疋、綿六十屯、布卌端、判官、絁十疋、綿五十屯、布卌端、錄事、絁六疋、綿卌屯、布廿端、譯語、主神、醫師、陰陽師、各絁五疋、綿卌屯、布十六端、史生、船師、射手、卜部、各絁四疋、綿廿屯、布十三端、雜使、船工、柂師、各絁三疋、綿廿屯、布十端、傔人、挾杪、各絁二疋、綿十屯、布六端、水手、各絁一疋、綿四屯、布二端、

入新羅使、絁六疋、綿十八屯、布十八端、判官、絁四疋、綿八屯、布八端、錄事、大通事、各絁三疋、綿六屯、布六端、史生、知乘船事、船師、醫師、少通事、雜使、各絁二疋、綿四屯、布四端、傔人、鍛工、卜部、柂師、水手長、挾杪、各絁一疋、綿二屯、布二端、水手、各綿二屯、布二端、

右、賜入蕃使例、宜依前件、

〔北山抄七都省雜事〕申大中納言雜事〇中略

擬使主典申請事（環銘例使官符）

同使季祿幷借物事（同上中略）○

已上上宜

〔類聚符宣抄〕八堂塔損色事

左辨官下美濃國

使右大史坂本忠國　從肆人

左史生川原文岑　從貳人

右史生大島爲範　從貳人

使部　從各壹人

木工少屬凡河內助遠　從貳人

筭師雀部爲利　從貳人

長上畢部重安　從壹人

工長上山有直　從壹人

將領秦吉風

杖取伴安光

右左大臣宣、奉勅、爲令撿録彼國國分寺堂塔雜舍等損色、差件等人、發遣如件、國宜承知、依宜行之、使者經彼之間、依例供給、路次之國、亦宜給食馬、官符追下、

寛弘元年閏九月十三日　史

右少辨藤原朝臣

〔壬生家文書〕一官使可給別糧米雜事等事

責罰

一日分

糙米壹斗陸升（官斗）　御菜三種

味曾二合　鹽三升

箸十前　木五束

松二把　草十連

酒鹽一升

今一人同前（日〇年缺月不詳）

〔律疏職制〕凡受詔出使、不返詔命、輙干他事者、徒一年、以故有所廢闕者、徒二年、餘使妄干他事者、杖七十、以故有所廢闕者、杖一百、越司侵職者、笞五十、（謂受詔勅出使、事訖皆須返命奏聞、若不返命、更干預他事者、徒一年、以故有所廢闕者、徒二年、餘使、謂非詔使、妄干他事者杖七十、以故有所廢闕者杖一百、越司侵職者、謂設官分職各有司存、越其本局、侵人職掌、笞五十、其受三后及皇太子令出使、不返命、得罪依詔勅減一等、）

凡驛使稽程者、一日笞卅、二日加一等、罪止徒一年、（謂依令、量事緩急、日有行程者、）若軍機要速者加三等、（謂是征討掩襲、報告外境消息、及告賊之類、）有所廢闕者、違一日徒三年、一日加一等、（謂由稽遲廢闕經略掩襲告報之類、）以故陷敗戶口軍人城戍者加役流、（謂由驛使稽遲、違闕致敗戶口軍人等一人以上、及臨城破者、）

凡驛使無故以書寄人行之、及受寄者杖一百、（謂有軍機要速、或追徵報告、如此之類、遣專使乘驛齎送文書、無故、謂非身患及父母喪者、以所齎文書、別寄他人送之、及受寄文書者、各杖一百、）若致稽程以行者爲首、驛使爲從、（謂行不充驛數、計程重於杖一百者、即以受書行者爲首、驛使爲從、此爲常行驛使而立罪名、）即爲軍事警急而稽留者、以驛使爲首、行者爲從、（軍機警急、謂報告征討、掩襲、救援、及境外消息之類、而稽留者、罪在驛使、故以驛使爲首、行者爲從、有所廢闕者、從前條、謂違一日徒三年、以故陷敗戶口軍人城戍者加役流、）其非專使之書、而便寄者勿論、（謂非故遣專使所齎之書、因而附之、其使人及受寄人、並勿論、）

凡驛使受書、不依題署、誤詣他所者、隨所稽留、以行書稽程論、減二等、（謂文書行下、各有所詣、應封題署者、具注所詣州、使人乃不依題署、誤詣他所、因此稽程者、謂所稽留、准上條行書稽留之程、減二等、謂違一日笞十、二日加一等、罪止杖九十、若軍機要速加三等、有所廢闕者、從徒三年上減二等、徒二年、以故陷敗戶口、亦從加役流上減二等、徒二年半、）若由題署者誤、坐其題署者、（謂元題署若錯誤、即罪其題署之人、驛使不坐、）

對捍詔使

凡在外長官、及使人、於使處有犯者、所部屬官等不得卽推、皆須申上聽裁、(謂大寧國郡等長官、及諸使人、於使處有犯者、所部次官以下、及使人所詣之司官屬、並不得輒卽推鞫、若無長官、次官執印者亦同、長官、次官執印者須先申上司聽裁、)若犯當死罪、留身待報、(謂據亂告之狀、合死者、散留其身、待上報下、若留身、印及官鑰等付次官知事、)違者各減所犯罪四等、

凡公事應行而稽留、及事有期會而違者、一日笞卅、五日加一等、罪止徒一年、(公事應行者、謂有所部送、不限有位無位、而輒稽留、及事有期會、謂若朝集使、及計帳使之類、依令各有期限、而違不到者、但事有期限者、以違限日爲坐、無期限者、以付文書及部領物使、計行程爲罪、)卽公事有限、主司符下乖期者、罪亦如之、(謂公事有限、與上文事有期會義同、上文謂在下有違、此文謂主司符下違期會之罪、)若誤不依題署、及題署誤、以致稽程者、各減罪二等、(使人不依題署、錯詣他所、及由所司題署有誤、而致稽程者、減二等、謂一日者笞卅、減二等笞十、罪止徒一年、減二等、合杖九十、)

凡奉使有所部送、而雇人寄人者杖八十、闕事者杖一百、受雇寄者減一等、(奉使有所部送、謂差爲綱典、部送官物及囚徒畜產之屬、)卽綱典自相放代者笞五十、(謂綱使者不行、乃雇人寄人、所部送者、使人合杖八十、闕事者、謂於所部事有所闕、其受寄及受雇者、不闕事者杖七十、闕事者杖九十、故云減一等、綱典部送、放典不行、或典自領行、而綱不去者、)取財者坐贓論、闕事者依寄雇闕事法、仍以綱爲首、典爲從、(謂其闕事及不闕事、幷受財輸財者、皆以綱爲首、典爲從、其受雇者巳減使者罪一等、不合計贓料罰、其贓不備、若監臨官司將所部典行放取物者、坐同監臨受財之法、不同綱典之罪、)

凡官人因使、於使所受送遺、及乞取者、與監臨同、(謂官人因使、於所使之處、受送遺財物、或自乞取者、計贓准罪、與監臨官同、)經過處取者減一等、(謂非所部之處、因使經歷之所、依律職制條、所一字取財者、)(所乩罪之官不減、謂乩罪之官、人所長官、雖經過之處、而受送遺、乞取及強乞取者、各與監臨之罪同、)

〔政事要略八十一糺彈雜事〕詐僞律有詐病條云、若實病死及傷、不以實驗、以故入人罪論、

〔唐律疏議二十五詐僞〕諸有詐病及死傷、受使檢驗、不實者、各依所欺減一等、若實病死及傷、不以實驗者、以故入人罪論、

〔律疏名例〕八虐

六曰大不敬、(謂略)○中 對捍詔使、而無人臣之禮、(謂奉詔出使、宣布四方、有人對捍、不恭詔命、而無人臣之禮者、詔使者、奉詔定名、及令所司差遣者是、)

〔律疏職制〕凡略○中 對捍詔使、而無人臣之禮者絞、(謂奉詔勅使人、有所宣告、對使拒捍、不依人臣之禮、既不承詔命、又出拒捍之言者、)因私事鬭競者非、(謂不涉詔勅、別因他事、私自鬭競、或雖公事論競、不干預詔勅者、並從毆詈本法、)

〔日本書紀 天武二十九〕四年四月丁亥、小錦下久努臣麻呂、坐對捍詔使、官位盡追、

〔類聚國史 八十七刑法〕大同二年九月戊子、律師傳燈大法師位修哲免、以綱政不修、及對詔使無禮也、

〔三代實錄 四十八光孝〕仁和元年十二月廿二日壬申、下從四位下行信濃守橘朝臣良基於刑部省、令推斷其罪、先是彼國百姓辛犬甘秋子、向官愁訴、爲人被行火、燒亡居宅、幷燒殺家人男女八人、詔遣少監物正六位上布勢朝臣敏行推問其事、敏行還奏、守良基對捍、不聽勘事、故縱詔使所禁之罪人焉、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月九日丙寅、及晚右武衞使者、到著于陣岡、所持參去七月十九日口宣也、〇中略

文治五年七月十九日　宣旨

陸奧國住人泰衡等、梟心稟性、雄張邊境、或容隱賊徒、而猥同野心、或對捍詔使、而如忘朝威、結構之至、既涉逆節者歟、〇中略姧謀非一、嚴科難遁、宜仰正二位源朝臣、征伐其身、永斷後濫、　藏人宮內大輔藤原家實奉

〔法曹至要抄 上罪科〕一拒國郡以上使事

鬪訟律云、拒國郡以上使者杖六十、疏云、稱以上者、在京諸司並是、

案之、雖非宜下之事、或依公事、有所追捕、而對捍使、皆得此罪、若非是決、使廳例散禁、可令候便所、又對捍詔使之科、八虐之絞刑也、依注載八虐、別不抽注矣、

〔扶桑略記 三十白河〕永保元年四月廿八日、辰剋叡山大衆引率數千軍兵、來向於三井寺、爰三井寺大衆且率數千隨兵、各張其陣、防征欲戰、漸及晚景、山上大衆引摘逃去、其後六月五日庚申、殊有宣旨、恒例神事不可闕怠、官使相具比叡祭使等、如例重被催之處、三井寺大衆中不得心者、年少下臈不學之輩、背宣旨追却官使、打止祭使等了、因玆有違勅罪、大衆長發等各注其名、共蒙追捕宣旨已了、　八月六日、差遣官使、奉幣於日吉社、被告天台兩門徒鬪諍之狀、先是山僧等爲防護、社頭近邊塞路堀地、于時奉幣使臨夜不知案內、竊以行向、爰警固僧等誤欲寺兵來向、妄以征襲、射矢如雨、奉勅侍臣僅得免害、恐

劇歸參、時人咲之、

○按ズルニ、官使ニ對捍スル事ハ、尙ホ官使條引ク所ノ、類聚三代格天長二年五月十日ノ太政官符ニ在リ、參看スベシ、

謀殺朝使

〔律疏賊盜〕凡謀殺詔使、若本主本國守、〈○中略〉者徒三年、〈○中略〉已傷者遠流、殺者皆斬、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月乙巳、太師藤原惠美朝臣押勝、逆謀頗泄、〈○中略〉天皇遣授刀少尉坂上苅田麻呂、將曹牡鹿嶋足等、射而殺之、押勝又遣中衞將監矢田部老、被甲騎馬、且劫詔使、授刀紀船守亦射殺之、

〔文德實錄七〕齊衡二年閏四月丙午、太宰府馳驛言、日向守從五位下興峯王發兵、將殺推訴使正五位下田口朝臣房富、有司奏議、詔免官爵、

〔文德實錄八〕天安元年正月乙卯、前日向守從五位下興岑王散禁右京職、〈○中略〉興岑王先被告將殺詔使、而竊輒入京、故亦禁固、

〔三代實錄淸和三〕貞觀元年十二月廿七日戊申、太政官論奏言、〈○中略〉前日向守從五位下興岑王、謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆案者也、帝特降優詔曰、〈○中略〉興岑王依先斷官當免爵、

〔百鍊抄五白河〕永保三年五月二日、前下野守師季追位記、去年正月、射殺官使、被勘罪名、

詔使

〔律疏名例〕八虐

六曰、大不敬、〈謂○中略對捍詔使、而無人臣之禮、〈中略〉詔使者、奉詔定名、及令所司差遣是、〉

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

詔使、一大臣奉勅仰大辨、大辨選兩人申上、大臣一定仰下、主典大辨選定、〈任例官符〉遣彈正官人者奏聞、召官人於左衞門陣仰下、就官外記申返事、〈中二代官名、下宣旨、〉

〔宣傳草下〕一下辨官宣旨　臨時事〈○中略〉

詔使事

〔西宮記臨時二〕諸國詔使事

撿交替損不堪等之類、閒使在此中、馬寮允當爲使下返事爲申返事、請代官者、申一上卿、隨處分、著座上卿下宣旨、

大辨已下定所三人、申第一上卿、上卿擇定仰之、以官宣旨下式部、式部以召名進官、次作官符、但至于差定彈正官人、奏聞勅許之後、上卿召仰疏、臺官者不奉宣、内侍宣等也、

〔北山抄六備忘略記〕諸國詔使事

大弁書二人、覽一上、返給結申、隨定仰、以爪記之、起座更書一人覽之、若有兩國已上國々結申畢、上卿揖之、後日大弁定主典、以官宣下式部、式部以召名進官、次作官符、有彈正官人者、先令奏事由、召疏於左衞門陣仰之、爲申送返事、請代官者、隨一上處分、下著座上卿、損不堪使如之、

〔北山抄九吏途指南〕異損事

諸國申異損者、遣使令勘定、○中略而詔使到來之處、違損百姓、彌可致煩、

勘出事

放還前司之國、前司任中官物、不可申置勘出、由有天曆起請、○中略凡不遣詔使之國、不可有交替欠就中例交易、年料舂米等、依天德起請、不可置勘出、可塡料稻也、

實錄帳事

不與狀者、勘發無實之狀也、實錄帳者、有實無實、相並勘錄之帳也、仍立制置條、若有勘顯之物、爲詔使功者也、而近代帳如不與狀、無有差別、或人云、今任用分付之帳、不同詔使實錄帳云々、

〔類聚三代格七〕太政官符

定詔使官使事

右頃年之間、爲推民訴、遣使四方、或國司等、對捍使者、不承勘問、捍偁之辭、厥類多端、遂乃使旨不展、徒然引歸、寃屈之民、累年憤懣、路次之輩、空疲迎送、稍尋其由、緣無使威、詔使臨界、豈如此乎、左大臣宣、奉勅、度時立制、古今攸貴、宜定使色、以爲將來、其遍察獲囚、檢稅、交替、畿內校班田、問民苦幷訴等使、並准詔使之例、賑給、損田、池溝、疫死等使、爲官使、但遣使之旨、出於勅語、卽是等所謂詔使而已、不可更限事之輕重、

天長二年五月十日 奉○略、又見政事部

〔日本後紀 嵯峨二十四〕弘仁五年閏七月壬午、散位正四位上吉備朝臣泉卒、○中略 延曆初、出爲伊豫守、被傔下告、遣詔使、推問、辭涉不敬、

〔文德實錄 八〕天安元年正月乙卯、前讚岐守正五位下弘宗王卒、○中略 散禁右京職、先此讚岐國百姓等訴弘宗王、仍遣詔使、推問虛實、伏辨已了、

〔三代實錄 清和十三〕貞觀八年七月九日辛亥、先是尾張國言、奉太政官處分、掘開廣野河口、令趣舊流、而美濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、率兵衆步騎七百餘人、襲來河口、歐傷郡司、射殺役夫、河水流血、野草焉赤、成功將畢、有此相妨、至是太政官下符美濃國司、稱河流利害兩國爭論、彼此相持、歷代無決、於是重遣詔使、與兩國司相共勘定、更復朝議、審其得失、下知兩國、令其掘開、○下略

〔朝野群載 諸國公文二十六〕申交替使

某國司解　申請官裁事

　請殊蒙官裁被下遣檢交替使實錄官物狀

右謹檢案內、前司從五位下守某朝臣姓名卒去已畢、因玆新司著任之後、任式條、欲始行交替務之處、無人分附、不能受領、望請官裁、被下遣朝。使。、令檢交替之務、將致受領之勤、依勒事狀、謹請官裁、謹解、

年月日

勅使

申交替使文（申一上奏　無續文）

天暦七年六月十三日宣旨云、前司卒去之間、待後司之申請、有遣撿交替使、而申請之間、早晩任意所請、只在前司間任、空送年月、如忘朝憲、官物依其晤減、公損爲之自成、論之政途、理不可然、宜准申不動倉鉤匙之例、拜除之後、在京之日、早令言上、定遣詔使、自今以後、立爲恒例者、○中略

任先例申交替使

某國司解　申請官裁事

請殊蒙官裁、因准先例、給撿交替使、行交替政狀

右新司守正四位下行某姓名、去某月日拜任、同年月日著任、欲行交替、無人分付、謹撿案内、前吏卒去之國、申請詔使之例、古今已存、不追毛擧、望請官裁、被給撿交替使、將行交替政、仍録事狀謹解、

年月日　正六位上行目

參議正三位左兵衞督兼守藤原朝臣　正六位上行掾

正四位下行權守源朝臣正六位上行介姓

〔釋日本紀（秘訓二十二）〕勅使（ミカト　ツカヒ）

〔伊呂波字類抄（知人倫）〕勅使（チヨクシ）

〔節用集（知人倫）〕勅使（チヨクシ）

〔書言字考節用集（三官位）〕勅使（チヨクシ）

〔竹取物語〕此十五日司々に仰て勅使せうしやう髙野のおほくにといふ人をさして、六衞のつかさ合て二千人の人を、竹とりが家につかはす、

〔伊勢物語（下）〕昔、男伊勢の齋宮に、内の御使にてまゐれりければ、かの宮にすきごといひける女、わたくしごとにて、

千早振神のいがきもこえぬべし大宮人の見まくほしさに

〔源氏物語一桐壺〕その年の夏、御息所はかなきこゝちにわづらひて、○中略夜中うちすぐるほどになんたえはて給ひぬる、○中略うちより御つかひあり、三位のくらゐおくり給ふよし、勅使きて、その宣命よむなんかなしきことなりける、

〔日本靈異記中〕彌勒菩薩銅像盗人所捕示靈表顯盗人緣第廿三

聖武天皇御世、勅信巡夜行於京中、其半夜時、其諾樂京葛木尼寺前南墓原有哭叫音、言痛哉々々、勅信聞之馳臨見之、盗人捕彌勒菩薩銅像以石破之、○中略

勅信勅使

〔禁秘御抄中〕御使事

依人依事有差別、藏人頭、近衛將、五位藏人、六位藏人等也、又所衆瀧口等無難事也、細々事藏人無難、依事定勅使、不可勝計、在江記、中品事、殿上將佐也、又女使有之時、皆式定事也、又臨時事、在叡慮、

〔二中歷八勅使〕伊勢　仁和三年、參議源是忠、　天慶三年、參議保平、　長保三年、參議懷賢、　寛平九年八月十二日、散位和氣貞興若狹守六位勅使例、

宇佐　昌泰元年八月、右衞門權佐藤原道明、　長保元年十一月廿七日、右衞門權佐宣孝、

遣唐使　寛平六年八月、菅紀兩人任之、不遂前途、其後無沙汰、

御馬使　貞元二、左近番長尾張兼時、以上右馬允播磨貞遣之、院(白河)御時、承保二年、陸奥交易御馬一任一度、

〔萬葉集六雜〕天平二年庚午、勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

奥山之、磐爾蘿生、恐毛、問賜鴨、念不堪國、

右勅使大伴道足宿禰饗于帥家、此日會集衆諸、相誘驛使葛井連廣成、言須作歌詞、登時廣成應聲、即吟此歌、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十月壬戌、大將軍東人言、逆賊藤原廣嗣率衆一万許騎、到板櫃河、○中略常人等呼廣嗣十度、而猶不答、良久廣嗣乘馬出來云、承勅使到來、其勅使者爲誰、常人等答云、勅使右衞門督佐伯大夫、式部少輔安倍大夫、今在此者、廣嗣云、而今知勅使、卽下馬兩段再拜、申云、廣嗣不敢捍朝命、但請朝廷亂人二人耳、

〔續日本紀 二十淳仁〕天平寶字元年七月庚戌、詔更遣中納言藤原朝臣永手等、窮問東人等、○中略勅使又問奈良麻呂云、逆謀緣何而起、○中略乙卯、遣中納言藤原朝臣永手、左衞士督坂上忌寸犬養等、就右大臣藤原朝臣豐成第、宣勅曰、汝男乙繩關兇逆之事、宜禁進者、卽加脫禁寄勅使進、

〔二所大神宮例文〕伊勢公卿勅使

聖武天平十年五月辛卯 勅使右大臣正三位橘宿禰諸兄、中臣神祇伯名代、

孝謙天平勝寶三年四月 勅使參議使足

淡路廢帝天平寶字三年十月 民部卿闕○下略

〔類聚符宣抄 六〕應外辨外記諸節會幷臨時節會日於諸大夫行列所定人召仰賜酒勅使事

右右大臣宣、舊例諸大夫等諸節會日、參入內裏、着宴座、欲仰定賜酒勅使之間、堪事大夫等、先皆逃去、無由召仰、宜始從今日節會、諸節會幷臨時節會之日、外辨外記、且先於行列所、定堪事大夫等、召仰爲賜酒勅使之由、卽轉告內辨、外記令申上、上卿隨將召仰、自今以後立爲恒例、

元慶八年九月九日　大外記巨勢朝臣文宗奉

〔源平盛衰記 四〕師高流罪宣事

廿日、○治承元年四月加賀守師高解官、尾張國流罪由被宣下、上卿ハ權中納言忠親卿也、此宣旨ヲ以、急登山シテ、山門騷動ヲ可鎭之由仰ケレ共、衆徒ノ蜂起ニ恐、登山セントト云人ナシ、平大納言時忠卿、其時ハ中納言ニテ御坐ケルガ、本ヨリ心猛勇ル人ニテ、亂ノ中ノ面目トヤ被思ケン、侍十人花ヲ折

ヲ裝束シ、雜色共人ニ至マデ、當色キセテ出立給ヘリ、山上ニハ、時忠登山アラバ違ニモトヾリヲ切、湖水ニハメヨナンド、僉議ストヽ聞リ、時忠卿既ニ有登山、實ニ衆徒ノ嗔レル氣色、面ヲ向ベキ樣ニ非、只今可會稽也ケレバ、供ニ有ツル侍モ雜色モ、大床ノ下、御堂ノ陰ニ忍居タリ、時忠卿ハ少モ騷給ハズ、大講堂ノ庭ニ進出テ、懷中ヨリ矢立疊紙取出シテ、所司ヲ招、硯ニ水入、疊紙ニ一筆書テゾ給タリケル、所司狀ヲ捧テ大衆ノ前ゴトニ披露ス、其詞ニ云、衆徒致濫惡者、魔緣之所行、明王加制止者、善逝之加護也トゾ書タリケル、大衆各見之、理ナレバ不及引張、還テ優ニ書レタル一筆カナト稱美讚嘆ニ及、落涙スル衆徒モ多カリケリ、

○按ズルニ、長門本平家物語ニハ、時忠ヲ勅使ト書セリ、

〔源平盛衰記二十八〕宗盛補大臣幷拜賀事

凡ヲ東國北國ニ限ラズ、南京北京ノ大衆、四國九國ノ住人、熊野金峯ノ僧徒、伊勢石清水ノ神官マデモ、悉ク平家ヲ背キ、源氏ニ心ヲ通ジケレバ、四方ニ宣旨ヲ下シ、諸國ニ勅使ヲ遣セ共、更ニ不用之、宣旨モ勅使モ、平家ノ下知トノミ知テ、公家ノ御計ト不思ケレバ、不隨モ理也、

〔源平盛衰記三十三〕太神宮勅使附緒方三郞責平家事

壽永二年九月二日、平家追討ノ御祈ノ爲ニ、院〈〇後白河〉ヨリ、公卿ノ勅使ヲ伊勢太神宮ヘ立ラル、參議修範卿ト聞エキ、太上天皇ノ太神宮ヘ公卿ノ勅使ヲ被立事者、朱雀、白河、鳥羽、三代ノ蹤跡アリトイヘ共、是皆出家以前ノ事也キ、太上法皇ノ勅使ノ例、今度始トゾ承ル、

〔吾妻鏡五〕文治元年九月一日辛巳、廷尉公朝、爲勅使參着中、二品〈〇源賴朝〉對面給、被勸盃酒、辞不及再三、令退出、于時賜沙金十兩、馬〈置鞍〉一疋、　四日甲申、勅使江判官公朝歸洛、二品御餞物尤慇懃也、此程依風氣、逗留沙汰云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年七月廿日庚寅、大理飛脚參着、去十二日任征夷大將軍給、其除書差勅使欲被

進之由被申送云云、　廿五日丙申、勅使廳官肥後介中原景良、同康定等參著、所持參征夷大將軍除書也、兩人各著衣冠任例列立于鶴岳廟庭、以使者可進除書之由申之、

〔太平記　一〕資朝俊基關東下向事附御告文事

夜イタク更テ、誰カ候ト召レケレバ、吉田中納言冬房候トテ、御前ニ候ス、主上〇後醍醐席ヲ近付テ、仰有ケルハ、資朝俊基ガ囚シ後、東風猶未ダ靜ナラズ、〇中略如何シテ、先東夷ヲ定ベキ謀有ント、勅問有ケレバ、冬房謹テ申ケルハ、資朝俊基ガ白狀有共、承候ネバ、武臣此上ノ沙汰ニハ及バジト存候ヘ共、近日東夷ノ行跡、楚忽ノ儀多ク候ヘバ、御油斷有マジキニテ候、先告文一紙ヲ下サレテ、相摸入道〇北條高時ガ怒ヲ靜メ候バヤト、申サレケレバ、主上實ニモトヤ思召レケン、サラバヤガテ冬房書ト仰有ケレバ、則御前ニシテ、草案ヲシテ、之ヲ奏覽ス、〇中略ヤガテ万里小路大納言宣房卿ヲ勅使トシテ、此告文ヲ關東ヘ下サル、

〔太平記　三〕主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上笠置ヘ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル、〇中略藤房卿勅ヲ承リテ、急ギ楠正成ヲゾ召レケル、勅使宣旨ヲ帶シテ、楠ガ館ヘ行向フテ、事ノ子細ヲノベラレケレバ、正成弓矢トル身ノ面目、何事カ是ニ過ギント思ヒケレバ、是非ノ思案ニモ及バズ、先忍ビテ笠置ヘゾ參ケル、主上万里小路中納言藤房卿ヲ以テ、仰ラレケルハ、東夷征罰ノ事、正成ヲタノミ思召ル丶子細有テ、勅使ヲ立ラル丶所ニ、時刻ウツサズ馳セ參ル條、叡感淺カラザル所也、

〔太平記　二十〕宸筆勅書賜義貞事

日ヲ經テ、越後勢已ニ越前河合ニ著ケレバ、義貞ノ勢彌強大ニ成テ、足羽城ヲ拉ガン事、隻手ノ中ニアリト、人皆掌ヲ指思ヒヲナセリ、〇中略既ニ來二十一日〇延元三年二月ニハ、黑丸城ヲ攻ラルベシトテ、〇中略樣々ノ攻支度ヲセラレケル處ニ、芳野殿ヨリ勅使ヲ立ラレテ、仰ラレケルハ、義興顯信敗

軍ノ勞兵ヲ率シテ、八幡山ニ楯籠ル處ニ、洛中ノ逆徒、數ヲ盡シテ是ヲ圍ム、城中已ニ食乏シテ、兵皆疲ル、然リトイヘドモ、北國ノ上洛近ニアルベシト聞テ、士卒梅酸ノ渴ヲ忍ブ者ナリ、進發若延引セシメバ、官軍ノ沒落疑有ベカラズ、天下ノ安危只一擧ニアリ、早ク其境ノ合戰ヲ閣テ、京都ノ征伐ヲ專ニスベシト仰ラレテ、御宸筆ノ勅書ヲゾ下サレケル、

〔寶鏡院殿將軍宣下記〕延文三戊戌年十二月十八日之午剋、以日野時光、爲勅使、征夷大將軍○足利義詮宣旨也、

〔將軍宣下記〕慶安四年八月十八日癸亥、今日將軍宣下○德川家綱ノ勅使、幷院使、新院使、女院使以下登城ス、○中略勅使菊亭前大納言藤原經季卿、束帶シテ御前ノ下壇ニ入テ著坐、院使、新院使、女院使ハ御次ノ間ニ有リ、

○按ズルニ、勅使、江戸ニ下リテ將軍宣下ノ禮ヲ行ヒシ事ハ、此ヲ以テ始トス、

〔官中秘策三十二〕每年勅使參府之事　是は有德院樣○德川吉宗御代之式也

一每年三月上旬、勅使參府、有御對顏、御返答、其外御饗應之次第、

一勅使、法皇使、東宮使、到著日、爲上使御老中、別段高家衆壹人、○中略

一御對顏、御白書院、公方樣絲之御裝束、御太刀御劍、御先立老中、出御、○中略

一禁裏ゟ被遣候御太刀目錄、御前へ勅使持參、爲年始之御祝儀、被遣之旨演之、畢而勅使は御次へ退出、○中略

一東宮使御進物、爲前式、御頂戴有之、御床へ納之、

一大納言樣へ勅使、法皇使、東宮使、御進物演說前におなじ、

〔大猷院殿御實紀六十二〕正保二年十一月九日、勅使菊亭前右大將經季卿引見あり、これ東照大權現に宮號を賜ふの詔、幷御位記の宣旨、持參あるにより、御直垂にて、白木書院に出たまひ、御みづ

から拜受し給ふ、十一日、勅使登山により、酒井讃岐守忠勝、松平右衞門大夫正綱、高家今川刑部大輔直房、大澤右京亮基重も、山につかはさる、

〔德川禁令考 三十一〕享保七寅年三月十五日

御法事改正之儀ニ付御書付

戸田山城守殿御渡

覺

一御代々御年忌御法事之節、毎度勅使被仰付候得共、衆々思召之品有之付而、當四月之御法事より御辭退被仰上候、○下略

〔德川禁令考 三十 公家衆參向〕寛政五丑年八月

勅使院使參向ニ付、御取締之儀御書付、

御勘定奉行江

此度勅使院使參向有之ニ付而ハ、御馳走御賄向之儀、當春公家衆參向之積ニ而、去子十二月相達候通相心得、不作法等無之、萬端御取締之儀嚴重ニ取計、ゆるがせ之儀無之、先方より不法之儀不相成樣、專心掛可取計旨、支配向之者江も猶又得と可被申含候、

八月

〔政談秘書 四〕勅使幷自分參向之堂上方江於御府內行逢候節心得

一享和元辛酉年三月四日、高家肝煎戸田土佐守御用人迄、戸田大炊頭留守居ゟ問答左之通、勅使其外參向之堂上方江、御府內ニ於ゐて主人行逢被申候はゞ、可成丈脇道江御除可被申候得共、若無據節者、駕籠立扣罷在、總供之者下ニ居、御會釋も不被仕心得ニ而可然哉、

一御自分御參向ニ而、御馳走附無之御方樣者、其儀ニ及間敷哉、

鈴木景慮樣

中村九郎兵衛
吉田太仲
澤田準助

同七日、右答紙面左之通、

以手紙致啓上候、愈御安全被成御勤、珍重奉存候、然者勅使其外御參向之堂上方樣江、御主人樣御府内ニ而御行逢被成候節之儀ニ付、御心得ニ御承知被成置度旨、依之御向合被仰聞候趣、承知仕候、於御府内勅使其外御使之御方樣方江御行逢被申候節、片寄不相障樣御行逢被申候、

一御自分御參向ニ而、御馳走附無之御方樣も、右ニ準シ相心得被申候、

右之趣ニ相心得被申候、此間之御答申上度、如斯御座候、以上、

三月七日

〔玉海〕承安二年二月十日己酉、此日有冊命皇后〈○高倉〉事、〈○中略〉後聞、内辨左大臣經宗〈○藤原〉宣命草并清書、乍在陣座被奏之、〈如例〉云々、宣命使別當成親卿、〈永久別當忠教勤仕之例云々〉

〔晉廣院殿任大臣節會次第〕諸卿參著仗座、〈依節有支、不付魚袋、具靴、〉

職事仰内辨、上卿承仰移外座、令置軾、　次召外記、問諸司具不、　次職事仰宣命趣、　次上卿召内記、仰宣命、　次内記進宣命草、　次上卿被見、　次内覽、〈内記〉内記持歸置筥於前、即返給、内記取之立小庭、　次上卿奏聞復仗座、内記置筥於前、即返給令清書、

此間定宣命使、〈早晩不定、○中略〉次内辨召宣命使、〈以屬鳴警〉宣命使參上立南簀子、〈有二階下揖〉　次給宣命、立軒廊、　次内辨下殿、就庭中標、　次宣命使就版、　宣制兩段、群臣再拜、〈新任人不拜立〉　次宣命使復列、　次諸卿退出

宣旨使

〔武德編年集成九十三〕元和三年四月十四日、台德公〇德川秀忠御出座、勅使廣橋權大納言兼勝、西三條權大納言實條、幷ニ奉行烏丸右中辨光廣、宣命使阿野參議實顯、奉幣使淸閑寺參議共房、仙洞使日野權大納言弘資等群參シテ、東照大權現ト崇メ奉ル、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十九日壬寅、十五日午剋遣官軍被誅伊賀廷尉、則按察使光親卿被下右京兆追討宣旨於五畿七道之由云云、關東分宣旨御使、今日同到著云云、

院使

〔有職拾葉上〕院使　院ノ御使

〔徵古文書甲集山城〕吉田默所藏文書

院廳下　但馬國在廳官人等

可早庄官幷國使相共如本打定温泉庄辰巳方牓示事

副下國司廳宣壹通

右去二月十四日庄解偁、謹撿案內、當御庄者、□寄進蓮華王院御領之後、去年十月、院使行向、地頭打定牓示畢、而彼辰巳方牓示、爲當國住人磯生丹三郎眞近、以同十一月廿日被拔弃已畢、卽言上子細之處、件眞近被禁固畢、爰考傍例、爲國衙被拔弃牓示之時、重雖不下遣院使、爲國司沙汰、領家使共如本打定牓示者例也、近則成勝寺御領、出雲國揖屋社、去天養二年被立券畢、其後爲國衙依拔弃一方之牓示、領家勘解由次官資憲入道、以庄官如元被打定畢、隨當御庄者、最亡卿也、去年院使下向之時、勤彼祗候雜事之間、已□御年貢畢、重被下遣院使者、爲御庄民何致其勤哉、隨又傍例多存、望請、任解狀旨、依例早仰國司、領家使相共如本被打定辰巳方牓示者、任庄解幷國司廳宣等□庄官幷國使共、如本可打定彼庄辰巳方牓示之狀、所仰如件、在廳官人等、宜承知、敢不可違失、故下、

永萬二年□月八日　主典代大藏權少輔中原朝臣在判

別當參議左兵衛督藤原朝臣在判　判官代下野守藤原朝臣在判

從三位藤原朝臣(在判)　丹波守藤原朝臣(在判)

右馬頭藤原朝臣(在判)

〔東大寺正倉院文書十四〕和泉監收納正税帳天平九年

朝使單伍人、(官人二人、從人三人、)食稻壹束漆把、(二人別四把、三人別三把、)酒貳升、(二人別一升、)料稻參把伍分、

〔類聚三代格七〕太政官符

應遣青苗簿帳事(副儀式一卷上)

右撿案内、(○中略)今被右大臣宣偁、凡厭苗簿之起、所以激揚國郡之清濁、沙汰田畝之損得者也、如聞、或詐寫田籍、或損而不存、是以朝使撿校之日、既多乖實之訴、官物收納之時、還少充倉之實、此祇國宰怠慢之所致也、宜下知諸道據儀式備附大帳使必令進官者、若不進者、不聽申田損、但太宰内諸國、便進彼府、府使撿校不得疎略、

承和九年六月九日(○又見政事略五十三)

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年六月廿三日壬子、遣式部大丞正六位上坂上大宿禰茂樹、勘解由主典從七位下凡直康躬等於石見國、推訴訟事、下知彼國司偁、介外從五位下忍海山下連氏則等、去六月六日解偁、管邇摩郡大領外從八位上伊福部直人安道、率郡內百姓、來圍權守從五位下上毛野朝臣氏永之宅、爲致乖法、仍奪取印匙、以授僞吏、守氏永以鐧擊傷氏則妻下毛野屎子者、又守氏永同月十五日奏狀偁、僞吏發賊兵、擬殺氏永、卽令凶賊奪取印匙鈴等、以杖擊氏永、打杭地上、張著手足、鏁籠倉裏者、今如奏解狀、申緒各異、實情不同、非遣朝使、何決涇渭、仍爲推問其由、差遣茂樹等、國宜承知聽使處分、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公(諸行○中略)

一請停止依諸國小吏幷百姓告言訴訟差遣朝使事

右臣伏以、牧宰者、分萬乘之憂、受一方之寄、守六條之紀綱、爲兆民之領袖、故漢宣帝云、與朕共理者、其唯良二千石乎、必須擇用其才、尊崇其職、重官威而厭民心、捨小瑕而責大成、而比年任用之吏、或結私怨以誣告官長所部之民、或矯公事以怨訴國宰、或陳犯用官物之狀、或訴致理違法之由、此等條類、千緒萬端、於是朝家收其告狀、發遣使人、使人到國、未問事之虛實、不辨理之是非、偏依使、或每事准擬、領其印鎰、嚴其禁錮、卽以官長之貴、與小吏賤民、比肩連口、受其推鞠、若辭對之間、纖芥有違、則立加縲紲、便塡牢檻、若亦雖告訴之旨事皆不實、而威權已廢、政令不行、爰隣境百姓、轉相見聞、卽各輕侮其官長、不肯服從其政、致僞化之源、無甚於此、況亦理劇之任、庶務多端、曉夕僶俛、猶有不遑、而今朝使推問之間、被停釐務、多歷旬月、空廢治政、縱雖免贓吏之名、而猶成任中之愆、秩滿之日、遂拘解由、如此則多致公損、徒滅良吏、助此訴人、報彼私怨也、前年阿波守橘秘樹、肅淸所部、底愼貢勤王之誠、當時第一、必須殊加獎擢以勵俊良、而依小民之誣告、降朝使之廉問、雖事皆虛詐、告人逃亡、已而秘樹之身、亦爲廢人、如此則知恥之士、誰冀爲吏乎、方今時代澆季、公事難濟、故國宰之治、不能事々拘牽正法、故或有枉尺而直尋者、或有失始而全終者、昔者龔遂爲渤海守、奏曰、請勅丞相御史、且勿拘臣以文法、令得便宜從事、又本朝格云、國宰反經制宜、勤不爲已者、將從寬恕、無拘文法者、伏望、此等告言訴訟、除謀反大逆之外、一切停止朝使、專附新司、若實有犯過者、具載不與解由狀、勘判之後、卽下刑官、論其罪科、或雖云、凡厥貪吏之盜官物、宜速加糺察也、若待其任終、恐倉庫無餘、答云、假令有人告申吏盜贓、爰太政官卽馳輕騎、晝夜兼行、禁遏其姧者、事若可爾、而今訴人告狀、歷三審之程、得奏下之比、擇定使人之間、裝束行程之限、事自彌留、度歷年紀、其間若有心盜犯者、豈遑遺一粒乎、然則與彼附後司、有何分別、況此牧宰等、身出帝簡、志報朝恩、非唯求立績於明時、亦皆念垂名於後代者也、故比年陷此罪者、皆爲公謀功、未成之間、俄被告言而已、未嘗有自犯入己之人焉、靜尋其意、誠是公罪也、伏望、蹔褰天旒、照其可否、〇中略

延喜十四年四月廿八日　　從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔令義解 九 儀制〕凡外官及官人(謂勅使、官使皆是也、)聞奏者、聽所在館舍安置、○下略

〔新猿樂記〕三君夫、出羽權介田中豐益、偏耕農爲業、更無他計、○中略 常使五穀成熟稼穡豐贍之悅、未會旱魃洪水蝗虫不熟之損、檢田收納之厨、官使迎送之饗、更無所遁避、

〔類聚三代格 七〕太政官符

定詔使官使事

右頃年之間、爲推民訴、遣使四方、或國司等、對捍使者、不承勅問、捍傷之辭、無頗多端、○中略 左大臣宣、奉勅、度時立制、古今攸貴、宜定使色以盡將來、○中略 賑給檢損田池溝疫死等使、猶爲官使、○中略

天長二年五月十日 ○又見政事要略

〔類聚三代格 七〕太政官符

應依實言上損并不堪佃田疫死百姓賑給飢民及破損官舍堤防等事

右案、弘仁十年五月廿一日格偁、國司申政、詐不以實、事其公廨、兼處法律、又科還郡司、一同國吏者、頃年諸國司等不顧實數、浪致增加、格後漸慎、既忘科責、被右大臣宣偁、奉勅、朝家篤論、旣在官長、還當清望、寄重分憂、如今旣擇良牧、更加官使、○○屋下架屋、寔爲煩費、宜自今以後、官長親自巡省、子細檢定、依實申送、若所申過多、稍渉疑殆者、事不獲已、乃遣朝使、○○使者覆驗、或有乖違、准其所詐、論如前格、但奪俸科罪、事以重斷、須宥其俸、唯如其罪、凡厥犯解之後、一切不復叙用、俾彼貪濁之徒、永絕榮進之望、其科決郡司、亦復准此者、但損田荒田言上之期、承前程限事爲促近、宜不堪佃者八月之内申、損田者預申損狀、十月内申、其遠國九月、風水之損、通計行程、一依前格、庶幾專城之宰、宜嚴難犯、論道之官、提綱爲舉、

仁壽四年十月一日

〔大神宮諸雜事記 上〕貞觀四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、與彼國書生據判官代酒見文正、伊雜神戸檢田程爲狩(志天)、伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、爰宮人等、兼加制止、專不承諾、仍內人等、訴

申於本宮、隨則太神宮申上宮司、依宮司解、神祇官奏聞於公家、即被下官使、召對伴良雄等離宮院、各科大祓、又國司科中祓清已了、

弘仁五年甲午六月御祭仁、齋宮寮依例參宮、而太神宮御祭夜、直會三獻之間、寮頭藤原朝臣尙世、與禰宜公成假成口論、爰御遊之後、不賜禰宜之祿物、齋王令還向給已了、仍任禰宜解狀、宮司上奏又了、以同七月廿三日、被下官使、被對問寮頭尙世與禰宜公成之處、寮頭陳申之旨不分明也、禰宜辨申之旨、無過怠、

〔吾妻鏡二〕養和二年四月十一日辛亥、貞能爲平家使者、此間在鎭西、而申下官使、相副數輩私使、稱兵糧、廻國郡、成水火之責、庶民悉以爲之費、

〔吾妻鏡九〕文治五年二月廿六日戊戌、去年所被下奧州之官使守康已上洛、今日逗留于鎌倉、仰八田右衞門尉知家、有饗祿、　七月十二日庚午、被進飛脚於京都、御消息云、可追討奧州泰衡之由、言上先訖、定被成下宣旨候歟之由、存案之間、催集軍士、已送數日候畢、亦宣旨者、被下官使候者、可遲留候、仰左兵衞督、以彼飛脚可給者、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年七月十三日癸巳、今日申剋、高野傳法院幷僧房等、爲奧院惡徒被燒拂云々、仍武士等馳向、是去年七月、傳法院法華三昧之間、爲奧院惡徒被破損道場、件下手三人、或遣配所、或禁獄舍、去正月奧院遣軍兵、亂入大塔、供僧百四十口內、傳法院衆廿口、自由令除名帳畢、依此事、兩方構城墎、遣官使雖被制止、還及此災、

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺御封事

右以官使、可令催濟之由、可被宣下候也、未濟注文、幷寺家使等、早可令差下給、縱件事依先日仰、不爲使部、偏可令催沙汰候之由、所存知候也、子細分明之間、可參啓候、盛信恐惶謹言、

七月四日　　右官掌盛信上

進上　權上庄御房

〔令義解 十獄〕凡流移人、至配所、付領訖、仍勘本所發遣日月及到日、准計行程、若領送使人、在路稽留、(謂无故稽留也)不依程限、領處官司、隨事推斷、(謂凡依律、使人於使處有犯者、所部屬官等、不得輒推、但部送囚徒、不依程限者、則於此令、雖所部推斷、自餘皆須依律、不可准此)仍以狀申太政官、

〔令義解 十獄〕凡流移人、太政官量配、(義解○略)符至季別一遣、(義解○略 若符在季末至者、聽與後季人同遣)具錄應隨家口、及發遣日月、便下配所、(謂對部及國司、依太政官符、錄下於移流之國、又對部流人者、太政官差專使領送也)遞差防援、專使部領、送達配所、付領訖、

〔古事談 二臣節〕權帥伊周○藤原、隆家等、依綸旨赴各配所之由、領送使申之頭弁行成朝臣勘ヲ奉ジ、權帥病之間、安置播磨國使所、出雲權守隆家安置但馬國使所、各領國司所、其請文可歸參者、

〔西宮記 臨時十〕與奪事(附臨時著鈦例幷放免殺害囚人事)

臨時著鈦例

宗金記云、永承二年十二月廿四日、今日渡唐犯人之首清原守武、配流佐渡國、領送使左衞門府生秦成信、府掌日下部信近等也、

〔清獬眼抄 凶事〕一流人事

或記云、康平七年十月十六日、前下野守源賴資配流佐渡國已畢、○中略 至于七條朱雀人宅仁留、領送使持向官符、定成取之讀聞流人、云々

〔源平盛衰記 十八〕文覺清水狀天神金事

角テ、文覺云ケルハ、如何ニ殿原、自今以後ハ知ベシ、勤行精進ノ在俗ヨリハ、無智無行ノ比丘ハ勝タリトテ、懶惰懈怠ナレドモ、僧ヲバ敬フ習ゾ、法師此舟ニ乘ズバ、誰カ一人モ助ルベキトテ、氣色シテ千手陀羅尼ヲ誦シケレバ、其後ハ梶取巳下ノ雜下水ヲ捧ゲ履ヲ取、主從ノ禮ヨリモ猶深シ

部領使

テ、事外ニゾ敬屈シケル、領送使國澄モ、今コソ始テ貴キ人トモ思知ケレ、

〔法然上人行狀畫圖三十三〕罪惡生死のたぐひ、愚癡暗鈍のともがら、まかしながら上人の化導によりて、ひとへに彌陀の本願をたのむところに、天魔やきをひけん、安樂死刑にをよびてのちも、逆鱗なをやまずして、かさねて弟子のとがを師匠にをよぼされ、度縁をめし、俗名をくだされて、遠流の科にさだめらる、藤井の元彥云々、かの宣下狀云、

太政官符　土佐國司

流人藤井の元彥

使左衞門の府生淸原武次 従二人

門部二人　従各一人

右流人元彥を領送のために、くだんらの人をさして發遣くだんのごとし、國よろしく承知して、例によりてこれをおこなへ、路次の國、またよろしく食濟具馬參疋をたまふべし、符到奉行、

建永二年二月廿八日　右大史中原朝臣 判

左少辨藤原朝臣

追捕の撿非違使は、宗府生久經、領送使は左衞門の府生武次なり、

〔令義解五軍防〕凡衞士向　京、防人至　津之間、皆令　國司親自部領、〇中略自　津發日、專〇使〇部〇領、付　太宰府、〔謂、國衞具及其身、西專使發遣、部領人者、領戰士遞船也、〕 兵部先

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國正稅帳

駿河國正稅帳、天平十年、○正八位川原田宿禰忍國、

部領使、左辨史生少初位下文忌寸奈保麻呂、従一口、上一口、六郡別一日食爲　單壹拾貳日、上六口、〇中略従六

従陸奥國　進上御〇馬〇部〇領〇使、國畫工大初位下奈氣私造石島、従一口、上二口、六郡別一日、食爲　單壹拾捌日、上六

二口、從十二口、

從甲斐國進上御馬部領使、山梨郡散事小長谷部麻佐、〈上一口、從一口、〉六郡別一日食爲單壹拾貳日、〈上六口、從六口、〉

〇中略

舊防人部領使、遠江國少掾正六位下高橋朝臣國足、〈上一口、從二口、〉三郡別一日食爲單玖日、〈上三口、從六口、〉

防人部領使、史生從八位上日置造石足、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

當國防人部領使、史生從八位上岸田朝臣繼手、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

防人部領、安倍團少毅從八位上有度部黑背、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

從陸奧國還攝津職俘囚部領使、相模國餘綾團大毅大初位下丈部小山、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

俘囚部領、大住團少毅大初位下當麻部國勝、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

當國俘囚部領使、史生從八位上岸田朝臣繼手、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

俘囚部領、安倍團少毅從八位上有度部黑背、〈上一口、從一口、〉三郡別一日食爲單陸日、〈上三口、從三口、〉

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平十年正稅帳、史生大初位上秦連圖麻呂、

五月四日、下流人、〈周防國佐波郡人牟々禮君大町、三日食稻六把、鹽六勺、〉

部領傳使、〈刑部少解部從六位下[illegible]連篤鐫、將從二人、合三人、往來六日、食稻六束、酒六升、鹽三合六勺、〇中略〉

十五日、〇六月下船傳防人部領使、〈大宰史生從八位上中臣東連益人、將從一人、合二人、四日食稻二束八把、酒三升二合、鹽一合六勺、〇中略〉

同日、〇十七日下船傳防人部領使、〈大宰少判事從七位下錦部連定麻呂、將從二人、合三人、四日食稻四束、酒四升、鹽二合四勺、〇中略〉

閏七月五日、向京從大宰府進上鷂部領使、〈筑前國掾從六位上建部君豐足、將從三人、合四人、往來八日、食稻十束四把、酒八升、鹽六合四勺、〉

十六日、向京從大宰府進上法華經部領使、〈大典從六位上錦原造東人、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒四升、鹽三合二勺、〇中略〉

四日、〇十月向京從大宰進上御鷹部領使、〈筑後國介從六位上日下部宿禰古麻呂、將從三人、將鷹廿人、合廿四人、往來八日、食稻七十四束四把、酒一斛三斗六升、鹽

撿使

三升八合四勺、御犬壹拾頭食稻捌束、〇中略

廿一日、向京、耽羅島人廿一人、四日食稻卅三束六把、酒六斗七升二合、鹽一升六合八勺、部領使、長門國豐浦郡擬大領正八位下額田部直廣麻呂、將從一人、合二人、往來八日、食稻五束六把、酒八升、鹽三合二勺、〇中略

十九日、向京、太宰故大貳正四位下紀朝臣骨送使、音博士大初位上山背連靺鞨、將從十九人、合廿人、四日食稻廿四束四把、酒四升、鹽一升六合、〇中略

廿日、〇十二月向京、從大宰府、捉進上逃防人二人、四日食稻一束六把、鹽一合六勺、部領使、長門國豐浦團五十長凡海部我妹、往來八日、食稻三束二把、酒六升四合、鹽一合六勺、

〔令義解十獄〕凡死罪雖已奏、報訴冤枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛撿挍、

〔日本書紀六垂仁〕二十六年八月戊寅朔庚辰、天皇勅物部十千根大連曰、屢遣使者於出雲國、雖撿挍其國之神寶、無分明申言者、汝親行于出雲、宜撿挍定、則十千根大連挍定神寶、而分明奏言之、仍令掌神寶也、

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國郡稻帳、天平五年閏三月六日、史生大初位下阿刀造佐美麻呂、〇中略

撿舶使從六位上弟國若麻呂、肆剋傳符壹枚、食料稻陸束肆把、鹽叁合貳勺、酒肆升、一人別、稻四把、鹽二勺、酒一升、

敦賀丹生貳箇郡、各經貳箇日、食料、稻叁束貳把、鹽壹合陸勺、酒貳升、三人別、稻四把、鹽二勺、

略

〔續々修東大寺正倉院文書四十三〕撿米使解　申欠公解米事

合殘一千五百五十四斛八斗三升八合

長官二百卌斛七升

員外介一百七十四斛四斗八升

介一百卌五斛七斗七升一合

掾一百卌一斛二斗四升四合

大目一百卌八斛六斗二升六合
史生大田連益人卌一斛七斗四升八合
鴨朝臣須太例卌斛五斗四升九合
安都宿禰男足卌斛八斗四升八合
醫師六人部東人卅三斛五斗九升
傔仗土師宿禰鷹廿廿九斛八斗一升
楊胡史楓足六十一斛一斗八升八合
國分寺四百六十七斛一升四合

天平勝寶六年潤

〔東大寺正倉院文書東南院參櫃十二〕造東大寺司　牒越前國史生阿刀宿禰所
進上產業帳肆卷一卷天平勝寶七歲一卷八歲二卷九歲之中一卷名云天平寶字元年
右在彼國產業所帳、依數頭納如件、然細事今追遣使令撿挍、但在曾禰乙万呂身米者、雖不待使、國可勘取、又阿刀法師待使至、共使可令勘受、彼所物、今以狀付還使、未還舍人粟田人麻呂、故牒、

天平寶字元年十二月八日　　主典美努連奧万呂
判官河內惠師

〔東大寺正倉院文書四十四〕撿仲麻呂田村家物使
合肆三百五十八卷大尼謹宣
右依大臣禪師今月六日宣、附散位正八位上上村主馬養令奉、請於東大寺、如件、

天平神護元年五月九日　　內豎從八位上勳七等葦屋倉人島麻呂

〔東大寺正倉院御物目錄〕雙倉北雜物出用帳東寺旧　寶龜三年八月廿八日返上屏風參牒一牒散樂二牒治壘

馬形

右以去神護景雲四年五月九日、爲樣下造寺司、今返納如件、

撿。使。正四位下行左大弁衆造西大寺司長官播磨守佐伯宿禰今毛人

從五位下行右衞士佐紀朝臣家守○以下署名略

天應元年八月十二日出

大小王眞跡書一卷黃紙中破表裏兩端黏青褐紙、納白葛筥一合、

八月十八日且返納十二卷

書法廿卷納平脫箱一合其裝具及紙行數、詳於獻入帳、

八月十八日返納了

又時々御製書四卷其裝具及紙行數、詳於獻入帳、納白葛箱一合、

右進於內裏

撿。按。使。藤原朝臣家依

健部朝臣人上○以下署名略

〔三代實錄四十光孝〕仁和元年四月十七日辛未、勅、遠江國蓁原郡百姓口分田三百六十七町六段三十八步之代、授不堪佃田、先是遭水災流損崩埋、元慶四年、遣使撿按訖、其後國宰頻々申請、至是詔許之、

〔西宮記九月〕諸國言上損不堪佃田事

八月三十日以前、進坪付帳、○略註 九月一日申大辨、五日申一大臣、同例申文、七日奏、○略註 損田者預言上、十月三十日以前進坪付帳、十一月一日申大辨、五日申上、七日上奏、如上儀、不堪文、舊例三度上奏、近年二度奏、奏聞令諸卿定申、奏聞之後、定日大臣已下著陣、必具經辨諸卿、召解文議定、入筥、副勘文相副、史置大臣前、以硯置大辨座、大臣已下見下、經大辨納言見勘文、大辨書了見上、大臣召史給筥文、大辨在本座書之、或停遣使、免三分之二、或遣使令實檢、或進坪付帳、申可被免二分并一

分大宰之狀、或又任申請被裁許、或從停止、即其奏報云、有損國可進坪付帳而不進者可返却云々、又言上損由之後、退而進可令得塡進之解文、近代大辨可書樣書於葉子置硯宮傍書寫無敢其定、

〔類聚符宣抄八〕損亡事

太政官　近江國

撿近江國神埼依智犬上等郡河損使、主典正六位上家原朝臣恒門、

延喜六年六月廿二日

太上官　近江國

撿神埼愛智犬上三箇郡河損使、從七位上春道宿禰敏助、

延喜六年六月八日

太政官符近江國司

使播部允從七位上春道宿禰敏助

主典正八位上家原朝臣恒門

右爲令實撿彼國神埼愛智犬上三箇郡河損、差件等人充使、發向如件、國宜承知、聽使處分、符到奉行、

左中辨　口大史

延喜六年六月廿二日　驛鈴二口各三刻

〔類聚符宣抄八〕撿收使事

太政官符信濃上野兩國司

左馬權少允正六位上安倍朝臣以重

右馬大屬從七位上石城村主保象

右中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣文範宣、奉勅、爲令撿按彼國諸牧御馬、并牧内雜事、差件等人、
發遣者、諸國承知、一事以上、聽使撿按、符到奉行、

正五位下守右中辨藤原朝臣永保　　從五位下行左大史大春日朝臣良辰

天延三年二月一日

太政官符甲斐武藏兩國司

左馬權少允正六位上安倍朝臣以重

右馬大屬從七位上石城村主保兼

右中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣文範宣、奉勅、爲令撿按彼國諸牧御馬、并牧内雜事、差件等人、
發遣者、諸國承知、一事已上、聽使撿按、符到奉行、

正五位下守右中辨藤原朝臣永保　　從五位下行左大史大春日朝臣良辰

天延三年二月一日

〔百練抄 四後一條〕長元四年十月十七日、出雲國言上、去八月十六日子剋、杵築社無故顚倒之由、
或記云、閏十月三日有御卜、兵革疫疾者、實殿中奉納御正體宮出、顚自實殿御坐、顚倒大殿上云々、
五年九月廿日、出雲守橘俊孝勘解名、配流佐渡國、是杵築社顚倒、并有神託由奏聞、仍遣實撿使之處、
皆無實之故也、

〔東大寺小櫃文書 上〕撿注

言上東大寺領美濃國管厚見郡茜部庄西堺子細事

西堺内相論田畠桑在家等〇中略

右去六月廿日宣旨偁、東大寺領美濃國管厚見郡茜部庄西堺、宜遣官使、任延久三年官符令糺定〇中略
仍任宣旨狀、國使并寺家使、相共加實撿、如舊令糺定畢、仍言上如件、

天治元年八月廿日　　　　　　　　庄司散位中原成季

國使口判官代藤原盛通

官使左史生安倍重貞

〔台記〕仁平元年三月廿一日壬辰、藏人資能來云、臨時祭舞人公光、陪從邦綱申疾甚由、仰可遣實撿使之由、〈藏人撿公光、出納撿邦綱、〉

〔神宮雜例集二〕左辨官下伊勢太神宮司

應遣官使、且令實撿四至內穢物有無、且注申不信不淨等事、

使右史生豐政光　從參人

使部貳人　從各壹人

右陰陽寮勘文云、日者霖雨、震兌巽乾艮方神社四至內、依有不淨物所致之上、神事違例、穢氣不淨之祟、相加歟者、權大納言藤原朝臣公通宣、奉勅、宜遣官使於方々神社、且令實撿穢物有無、且注申不信不淨等者、若件等人發遣如件、司宜承知者、經彼之間、依例供給、路次之國、亦宜准此、官符追下、

長寬元年八月十五日　　大史小槻宿禰

右少辨藤原朝臣〈長方〉

〔帝王編年記二十五後深草〕建長六年七月六日、被實撿勅封倉、大監物幷史生官掌等向之、撿知之勅使、權右中弁藤原資定朝臣、左少史中原國氏等也、

〔古事談二臣節〕權帥〈伊周、○藤原、〉候中宮之間、不從使催之由、允亮雖再三奏聞、被仰猶儀可追下之由、二條大路見物車如堵、〈○中略〉中宮乘權大夫扶義之車出給、其後使官人等參上御所、搜撿夜大殿及疑所々、放但〈○但恐組誤〉板敷等皆實撿云々、奉爲后宮無限之恥也、

〔古事談一王道后宮〕宇治殿〈○藤原賴通〉建立平等院、宇縣邊多寺領ニ被打入云々、後三條院聞此事、爭恣ニ

ナル事有故トテ、進官使可檢注之由、被仰下ケリ、宇治殿聞食其由、平等院大門前ニ、錦平張ナド打テ、種々儲ドモ用意シテ、雖待官使、官使成恐、不參向止畢云々、

〔今昔物語三十一〕常陸國□□郡寄大死人語第十七

今昔、藤原ノ信通ノ朝臣ト云ケル人、常陸ノ守ニ成テ、其ノ國ニ有ケルニ、任畢ノ年、四月許ノ比、風糸オドロ〳〵シク吹テ、極ク荒ケル夜、□□ノ郡ノ東西ノ濱ト云フ所ニ、死人被打寄タリケリ、其死人ノ長ケ五丈餘也ケリ、中略〇然テ國ノ司、此ル希有ノ事ナレバ、何デカ國解不申デハ、有ラムトテ、申上ムト、既ニシケルヲ、國ノ者共申シ、被上ナバ、必ズ官使下テ見ムトス、其ノ官使ノ下ラムニ、織大事也ナム、唯隱シテ此ノ事ハ可有キ也ト云ケレバ、守不申上デ、隱シテ止ニケリ、

〔深江文書〕實檢

言上肥前國高木東郷深江村小地頭安□□□三郎入道心空□□□爲□□□□中□左衞門□□□□今月十一日□□□村内大□□□□□□□□之等被打擲□□由事

被疵人

一人　大窪太郎吉行

所在疵

一所烏帽子結緒左寄 長九分打目 口三分喰寄定

一人四郎太郎近信

所在疵

一所項 長九分打目 口二分喰寄定　一所左耳□ 長八分打目 口二分喰寄定

一所烏帽子結緒 長八分打目 口一分開

一人彌太郎貞兆

所在疵
一所左耳上長五分打目　口一分喩寄宜　一所同膞長八分打目　口四分同
一人　平七頼母
所在疵
一所額左寄長六分打損日　口三分喩寄宜
右件所在疵、任見在實檢言上如件、
永文二年七月廿九日

道使小典上野爲末
貫首源花押
貫首源
貫首丹治
貫首源花押
執行代權少監惟宗朝臣花押
御使
左兵衞尉藤原
右兵衞尉藤原花押
沙彌花押

公使

〔令義解　九儀制〕凡官人、遠任及公使、父母喪應解、○下略、
〔延暦交替式〕太政官符○中略
一調庸未進事
右去延暦八年五月十五日、下諸國符偁、得備中國朝集使介從五位下下毛野朝臣年繼狀偁、去年

十月奉使入京、而當年調物便附年紀、依有未進、雖數遣催在國之官、曾不存心、謹撿太政官去寶龜十年八月廿三日符偁、入京公使、無返抄者、不預釐務、奪料申送者、

〔更科日記〕公より使くだりて追ふに、勢多の橋のこぼれて得ゆきやらず、三月といふに武藏の國にいきつきて、此男をたづぬるに、此みこ公使を召して、〇下略

〔後撰和歌集十戀一〕おほやけづかひにて東の方へまかりける程に、はじめてあひしりて侍る女に、かくやむごとなき道なれば、心にもあらずまかりぬるなど申して下り侍りけるを、後に改め定めらるゝ事ありてめしかへされければ、此女聞きて喜びながら、とひにつかはしたりければ、道にて人の心ざし送りではべりける、くれはとりといふ綾を二むら包みて遣しける、　清原諸實

吳服あやに戀しく有りしかば二村山も越えずなりにき

〔侍中群要八〕諸使事

家唐物使右弁以下近代藏人以下所小舎人御服官符　宇佐使殿上五位神祇卜部官符御願、御即位時和氣氏五位、　同御祈使法師　交易金綿、朱砂、雑丹、雑器、遣菜、三月一日　地黄煎氷魚使藏人所上隠進口　大神寶使藏人所御願官符　訪斎王病使納言已下殿上人　遣斎王位記使藏人所　蒼宴使殿上兵衛佐　女御位記使兵衛侍候内侍、或遣童　更衣以上初參後朝使殿上六位以上　賜瓜侍従所使殿上五位六位高戸者　摘大歌所辛夷使藏人所高戸　度者使近衛將　諷誦使近衛將藏人頭　臨時賑給使殿上人　平野五位藏人勅　祭使殿上五位　大嘗會御禊點地使少將　八十島使典侍藏人宮内宮主　勅答使近衛將或納言、内親王攝政、　遣内侍所神使　平野見參使近衛將監春冬遣藏人御　開東大寺勅封御倉使弁監物宣旨　開藥御倉使藏人侍醫侍從　勅計使殿上六位以上　祈雨使六位藏人　季分使近衛將藏人御東宮主馬主或宮進　東西宣旨飼使藏人　召大臣在亭使内藏人所外記　召親王在亭使藏人所　召公卿在里亭使内豎、外記召使、　召諸司人使内小舎人、外記使部、　召法師使僧綱高下各別、藏人并所人以下、藏人

宣旨、納宣陽殿御物使(從藏人、將)御狩使(所下文、御厩別當)諸寺送使(除官時、御監外、所司以大舍人、永宣旨、)諸寺藥使(內豎)同諸寺粥使(永宣旨)訪天台座主被凌辱監人使(藏人所民部輔)訪天台座主之喪使(殿上人)女御更衣養產使(藏人)撿諸寺破損使(殿上人)出內侍所節刀使(外記、將監、內侍、內侍女史、天德四年例、)御節刀使(藏人、將監、右近衛將、左)出安福春興戎具使(左右近衛將、監)給御題使(式部大輔、臨時近衛舍人口)四界例祭使(藏人所人)四角御祭使(藏人口)臨時祭使(殿上四位侍從)返信表使(兵衛佐)蘇甘栗使事

〔倭訓栞前編六〕からもの、つかひ　古今集新千載集などの詞書に見えたり、新千載集に、つくしへ行とも見えたり、唐貨は、異國記に見ゆ、文德實錄に、承和五年、藤原岳守出爲太宰少貳、因撿挍大唐人貨物、適得元白詩草奏上、帝甚耽悅と見えたり、

〔古今和歌集離別入〕藤原の後蔭が、から物の使に、長月のつごもり方にまかりけるに、うへのをのこども、酒たうびけるついでによめる、　藤原かねもち

諸共になきてとゞめよ蟋の別れはをしくやはあらぬ

〔新千載和歌集離別七〕朱雀院の御時、藤原親盛が、から物の使にまかりけるに、金の火うちに、沈のほくそを、ゑのぶすりの袋に入て、つかはすとて讀侍ける、　權中納言敦忠

うちつけに思ひやいづと故鄕のゑのぶ草してすれるなりけり

多つ方、麗景殿に人々物などいふ程に、藏人これすけ、唐物の使に筑紫へ行まかり申さむとて、御物忌に籠れるを、明けむ年必かうぶり給はるべければ、頓て內にさぶらふまじき事など云ひて、　前大納言公任

西へ行く月の常より惜しきかな雲の上をも別ると思へば

〔類聚三代格十九〕太政官符

應禁遏諸使越關私買唐物事

右左大臣宣、頃年如聞、唐人商船來著之時、諸院諸宮諸王臣家等、官使未ㇾ到之前、遣ㇾ使爭買、又墎內富豪之輩、心愛二遠物一、踊二直貿易一、因ㇾ茲貨物價直、定准不平、是則關司不ㇾ慥二勘過一、府吏簡二略撿察一之所ㇾ致也、〇中略府司須ㇾ因二准法條一、愼二其撿按一、而寬縱不ㇾ行、令二人狎侮一、宜ㇾ更下二知公家未二交易一之間、嚴加二禁遏一、勿ㇾ復乖違一、若猶犯ㇾ制者、沒ㇾ物科ㇾ罪、曾不二寬宥一、

延喜三年八月一日

〔附〕國使

國使トハ、國政ヲ朝廷ニ奏センガ爲ニ發スル使人ヲ云ヘレド、亦其國內ノ政務ヲ檢セシムル爲ニ、國司ヨリ特ニ官人ヲ差遣シテ、一區畫ノ地ニ臨マシムルヲモ云ヘリ、卽チ前者ヲバ國使入京ト云ヒ、後者ヲバ國使入部ト稱セリ、國司郡司ヲシテ、時ニ隨テ朝集セシメシコトハ、古ク雄略天皇紀ニ見エタレドモ、每年一度、朝集使ヲ定メテ入京セシメタルコトハ、孝德天皇ノ大化改新以來ノ制ナルベシ、後ニハ朝集使ノ外ニ、稅帳、大帳、貢調ノ三使ヲ加ヘ、之ヲ四度使ト稱シタリ、

朝集使ハ、國吏ノ考選文ヲ齎シ、功過ヲ報ズルヲ主トシ、計會帳、正倉、官舍、池溝、桑漆ノ帳、神社帳、定額寺ノ資財帳、國郡器仗帳、官私ノ船舶、及ビ馬牛帳等ヲ上ル、稅帳使ハ、正稅帳ヲ齎シ、前年中ノ正稅ノ決算ヲ報ジ、義倉及ビ官田ノ地子帳、諸國ノ品位田帳、修理池溝、及ビ救急料稻帳、畿內ノ營田ノ收納帳等ヲ上ル、大帳使ハ一ニ計帳使トモ云ヒ、大帳卽チ計帳ヲ齎シ、豫メ其年ノ調庸ノ收入額ヲ報ジ、出擧帳、鄕戶課丁帳、調庸專當ノ歷名帳、青苗簿帳等ヲ上ル、貢調使ハ、調庸ヲ上ルヲ主トシ、租帳、運調脚帳、匠丁帳、浮浪帳等ヲ上ル、共ニ目以上ヲ以テ使ニ充ツル例ナレドモ、時ニハ史生ヲ差遣セシコトモアリ、但シ歸化人ノ國司ニ任ゼラレタルモノハ、四度使ニ差スコトヲ聽サズ、

名稱

嵯峨天皇ノ弘仁六年、諸國ノ正稅帳、計帳ヲバ、朝集使ニ便附シ、正稅帳、計帳ノ兩使ヲ停止シテ、以テ郵驛送迎ノ煩勞ヲ省カシメラレシカド、爾後頗ル其弊アリシヲ以テ、漸ク舊例ニ復セリ、但シ畿內及ビ志摩等ハ、四度使ヲ總テ一使ニ付シ、其他ハ國ニ依リ、一人兩使ヲ兼帶スルノ制アリ、

國使入京ノ期ハ、稅帳使ハ每年二月三十日以前、大帳使ハ八月三十日以前、朝集使ハ十月三十日以前、貢調使ハ國ニ依リ、十月ヨリ十二月ニ至ル迄ニ入京シ、各事ヲ其省ニ上申シ、稽勘ノ間ハ、在京シテ下問ニ隨ヒ、庶事ヲ辨答ス、而シテ四度使事了リテ國ニ還ルニハ、必ズ官ヨリ返抄ヲ請ク、若シ諸使ノ入京期ニ違ヒ、或ハ在京ノ間、故ナクシテ官司ニ上ヘズ、或ハ返抄ナクシテ歸國シ、或ハ歸程ヲ延緩スル如キコトアレバ、其公廨ヲ奪ヒ、考ヲ貶シ、若シクハ解官セシム、

〔令義解七公式〕凡國司使人、送解至京、謂又集二國司一所二差遣一者、郡司及雜任皆是、十條以上、限二一日一申了、〇下略

〔令集解三十四公式〕釋云、國司使人、國司之使人、古記云、問、國司使人、答、國司之使人也、穴云、使人者國史生以上、或差百姓進上一同也、師云、差史生以上使、是差凡人者非也、朱云、凡國司使人者、國司卽差使情耳、此史生以上差使耳、

〔貞觀交替式下〕右大臣宣、〇中略　租帳者國使所進也、事須被帳被下所司、則早自催勘、以絕後累、而今聞、或國使等弃之不以爲意、勘損益了、則爭自歸國、至勘稅帳、送成人妨、爲使之道、理豈合然、自今以後、有如此輩者、宜仰主稅寮拘其使料以懲將來、

貞觀二年九月十七日〇又見政事要略五十一

〔延喜式十一太政官〕凡諸國使公文下民部省、彼省非理拘留致使愁者、尋其所由科處、

〔壬生家文書一〕注進

言上日吉社領讃岐國柞田庄堺四至打牓示事〇中略

右依去三月十四日宣旨、引率國使堺四至打牓示畢、仍注進言上如件、

建長八年八月廿九日

國使散位布師

散位藤原朝臣資員花押

散位藤原朝臣長知花押

官使右史生中原久景花押

〔壬生家文書四〕廳宣　留守所

可早停止國衙使入部、任寛喜元年宣旨狀、永爲東寺末寺、前大僧正親嚴門跡、相傳善通、曼荼羅兩寺事、

右彼兩寺、爲東寺末寺、前大僧正親嚴可門跡相傳之由、寛喜元年宣旨分明也、早可停止國使入部之狀、所宣如件者、留守所宜承知、依件用之、以宣、

建長四年九月日

左近衞權少將兼大介藤原朝臣〇下略

制度上日

〔延喜交替式〕凡貢調使公文進官之後、身不直寮者、外題下時、計不上日、若無故滿卅五、依病經百廿、所司具錄申省、

凡税帳貢調使等、爲公文閒、無故不上、計上日不滿三分之二、即奪公廨、兼不預考、仍毎年上日、移送式部、審加貶降、又所奪公廨、令與税帳共申、

〔延喜式二十二民部〕凡貢調使公文下省、即直主計寮、若不直者、始自外題日、責其不上、

〔延喜式十八式部〕凡朝集使事了還國者、皆待神祇、治部、民部、兵部等移、而後錄上日申官請印、

返抄

〔延喜交替式〕凡諸國調使、雖有未進、爲損益畢、便遣歸國、與長官共催督未進、兼以公廨辨備、速令納訖、

其使致總成之日、勘會抄帳、并受返抄、

〔延喜式二十二民部〕凡畿內國營田稻、除營料外、舂米、每年運送內藏寮、其收納帳附稅帳使進官、使至彼寮、勘之、即取返抄、就主計寮、勘會抄帳、

〔朝野群載六太政官〕官中政申詞

總中文四枚　返抄二枚〇中略

民部省申久、主計寮乃申セル、讃岐國乃去シ某年乃計帳進ツル使少目伴乃連世、此ノ文勘畢ヌル仁依天、返文可給旨申給ヘト申津、

〔壬生家文書三〕政廳申文

一枚〈去年二〉、民部省申久、主計寮乃申留美濃國乃去〈當年位〉建長六年乃御調進留使少目伴連世、此調物〈枚八去去年〉

收畢留仁依天、返文可給旨申給止申、〈例一下略〉〇

〔朝野群載二十七諸國公文〕主計寮解　申返抄事

備前國應德元年貢調使正六位上行

上日拾肆

右人所附調庸雜物、依數進納既畢、從今年十二月九日、迄于同十二月廿九日、計上日、足三分之二、仍

應給返抄、申送如件、以解、

應德三年十二月二十九日

主計寮解　申返抄事

備前國應德元年大帳使正六位上行

上日拾肆

大帳返抄

徵調庸丁參拾陸

徵調絹玖疋

庸米拾斛捌斗

右人進應德元年大帳勘其帳畢從今年十二月九日迄于同十二月二十九日計上日足三分之二仍錄徵物應給返抄申送如件以解

應德三年十二月二十九日

〔延喜式二十大學〕凡〇中略應任用諸國博士被任之後所給公廨十分之一每年割留隨國所出交易輕物付貢調使送寮令充本受業師若有未進拘使返抄

凡常陸國稱稻五万四千束近江越中備前伊豫等國各一万束預國司出擧以其息利春米幷交易輕物每年附貢調使送納充於寮家雜用若有未進者移主計寮拘使返抄

〔延喜式三十七典藥寮〕凡諸國醫師公廨人別所給十分之一每年割留隨國所出交易輕物附貢調使送之若有未進移主計寮令拘使返抄

〔延喜式二十二民部〕凡陸奧出羽兩國朝集使雖濟朝集政無調返抄者不移式部省

〔類聚三代格十二〕太政官符

應移式部省抑未輸贓銅諸國朝集使返抄移大藏省折留祿位季祿事

右得刑部省解偁〇中略今犯罪之輩相續不絕贓贖未納逐年彌多迫徵之吏徒疲催勸負贖之人无心進納既押前斷不畏後科望請左京官人抑留位祿季祿雜色人等令檢非違使催徵在外諸人抑留朝集使返抄令濟其事謹請官裁者大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣依請〇中略

弘仁十一年十一月廿五日

乘驛　　雜料

〔令義解公式七〕凡朝集使、東海道坂東、謂駿河與相摸界坂也、東山道山東、謂信濃與上野界山也、北陸道神濟以北、謂越中與越後界河也、山陰道出雲以北、山陽道安藝以西、南海道土佐等國、及西海道皆乘驛馬、自餘各乘當國馬、謂買民間乘准也、折轄傳、卽以一日馬力、折一日人傳也、

〔續日本紀九元正〕養老六年八月丁卯、伊勢、志摩、尾張、參河、遠江、美濃、飛驒、若狹、越前、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、備中、淡路、阿波、讚岐等國司、先是奉使入京、不得乘驛、至是始聽之、但伊賀、近江、丹波、紀伊四國、不在茲限、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應三度使乘驛馬事

右得紀伊國解偁、此國去奈良京三日行程、今平安京更去一日半、總四日半程、而正。稅。帳。大。帳。朝。集。帳。等。使。乘用私馬、辛苦不少、望請准伊勢國、乘。用。驛。馬。謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

大同二年九月十六日

〔延喜式雜五十〕凡國司不乘驛傳馬、但正稅、大帳、朝集等使、乘驛馬、國司新向國乘傳馬、其太宰管內諸國向府准此、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年三月甲申、令七道諸國依國大小、割取稅稻四万已上、二十万已下、每年出擧、取其息利、以充朝集使在京及非時差使、除運調庸外、向京擔夫等粮料、語在格中、

〔延曆交替式〕太政官符

一定割公廨置國儲數事〇中略

右檢案內、去神龜元年三月廿日格偁、割正稅稻、出擧取利、名爲國儲、以充朝集使還國之間、及非時差使、幷繕寫籍帳書生、幷除運調庸外、向京擔夫等粮食、其出擧法、大國四万束、上國三万束、中國二万束、下國一万束者、至天平十七年、始置公廨、卽停國儲、天平寶字元年十月十一日式、唯稱割公廨

內、置國儲物、未立制置之數、充用之色、因玆諸國所置、多少無限、或有貪吏、不免贓汚、自今以後、宜依件爲定、以充公用、其充給粮食之色、准神龜元年格、但稅帳、大帳、貢調等使、亦充粮料、其長官佐職、各遞奉使、品秩雖異、使務是同、如聞或國一使之料、上下別數、事實不穩、宜一使粮料、高卑同法、但四度使料、多少之數、量事閑繁、增減定之、若違此制、輙私犯用者、計贓科罪、一同官物、○中略

以前被右大臣宣偁、奉勅如右者、諸國承知、依件行之、

延曆廿二年二月廿日

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國正稅目錄帳、天平九年、史生大初位下秦達布連廣島、

當國使有度郡散事他田舍人廣庭上、三郡別四度各一日食、爲單壹拾貳日、○中略

去年朝集雜掌半布臣島守廬原君足礒合貳人、始正月一日、迄四月廿九日、合百十八日、

爲單貳佰參拾陸日食稻、漆拾束捌把、人別單三把

當年朝集雜掌半布臣島守日下部今子合貳人、始十月一日、迄十二月卅日、合五十九日、

爲單壹佰壹拾捌日食稻、參拾伍束肆把、人別單三把

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一聽運九箇使料米事

貢綿使料四百六十斛

使料六十斛　史生料卅斛　書生二人料卅斛人別十斛　郡司十人料三百斛人別卅斛　郡司子弟十人料五十斛人別五斛

朝集使料百卅斛

使料八十斛　史生料卅斛　雜掌二人料廿斛人別十斛

正稅帳使料八十斛

使料六十斛　雜掌二人料廿斛人別十斛

大帳使料五十斛

使料卅○恐卅誤斛　雜掌二人料十斛人別五斛

調帳使雜掌二人料廿斛人別十斛

御贄使料卅斛

使料卅斛　厮造一人　書生二人料十斛人別五斛

別貢使料卅五斛

使料卅斛○恐卅誤　書生三人料十五斛人別五斛

相撲人使料廿斛

紫草使料十斛

右得太宰府解偁、撿府例、件使等料米、前帥參議從三位石川朝臣豐成、去天平神護三年五月三日、處分所定、毎使有差、或給正稅、或給府儲、永立以爲例、行來久矣、而撿太政官去延曆十二年八月十四日符偁、右大臣宣、奉勅、太宰部內出米、先有禁制、而今同官人任意運米、郡司百姓寄言他物、詐受過所、往來商買、相續不絕、宜嚴禁斷、自今以後、不得更然者、謹依符旨、一從禁斷、奉使之輩、因之爲憂、府司商量、不可不申、仍前例不便、更加准定、謹請裁者、依請、

以前右大臣宣、奉勅如件、

大同四年正月廿六日○中略

太政官符

應給食儲丁事

四度使雜掌廚丁朝集使四人、自餘三使各二人、○中略

右諸國言上、參差不同、仍折中所定如件、〇中略

國司交替并貢調使、國郡司送丁、〇中略又〇又當作不進官、國不在此限、

右可役之丁、或本自有格、或臨事可處、仍不載人數、宜商量行之、以前得伊賀近江等諸國解偁、案太政官去七月廿九日下五畿內七道諸國符偁、案今月廿八日詔旨、免天下百姓徭、事不得止、可從公役者給食者、仍可給糧法、人別日米一升、其料宛用正稅者、謹依符旨、可役色目、勘定言上者、撿其解文、或不可役而濫言、或可役而漏不言、彼此參差、多言人數、事乖公平、理不可然、被右大臣宣偁、宜諸國一同依件下知、若有除此之外、不得止必可役者、宜言上聽裁、

弘仁十三年閏九月廿日

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年二月廿三日辛丑、備後國司言、此國依格割公廨十分之一、爲國儲料、充四度使雜掌等糧、常苦不足、遞用他色、故還成煩、望請四箇年之間、割十分之二、以爲國儲、

〔政事要略五十六交替雜事〕延式格云、應令主計主稅兩寮助以下筭師以上兼任太宰筭師事

右得彼府解偁、謹撿太政官去弘仁五年正月廿三日格偁、得府解偁、管內公文、觸類繁多、筭師一人、專勞勘會、入都之使、遂差他官、至被勘出、不堪辨申、望請被加件官員、每年相換、將令向京者、左大臣宣、奉勅依請者、府須全守格旨令辨申管內九國二島公文、而代々府吏、無心勘濟、管內國文簿、積年未勘、元置一員、勘申無怠、今加一人、猶致懈緩、徒費公俸、空無所濟、望請、停彼一員、令兼任主計主稅屬等、勘濟管國四度公文、然則辨申無滯、用殘易知、況路次省煩、遞送脫苦、但停留使糧、運送俸料、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣、奉勅依請、唯二寮官人、轉任有例、假令或屬兼之、至于遷宛、改任他屬、事類移變、政且擁滯、宜助以下筭師以上之中、簡選其人、永令兼任、

昌泰元年十二月廿一日

〔延喜交替式〕凡國郡司受使入京、或無返抄獨歸任所、或稱身病、叄日京下、不遂所附之政、若有此類、了

請暇

上京違期

政之間、莫預臺務、國司奪料、附帳申送、郡司解任、聽許之司亦同、

(延喜交替式)凡貢調使并勘畢調庸損益、而不勘租帳、輙歸國、省仰主稅寮、拘其使料、

(延喜式主稅二十六)凡諸國四度使、依宣旨預他事、及不覺使事、還國之輩者、其料混合正稅、

(延喜式民部二十二)凡諸國使請暇文、輔已下共判署下寮、

(延喜式太政官十一)凡諸國稅帳朝集等使、向京在路事故延緩過期者、非有當國牒、即依法科處、其所檢牒物收刑部省、但貢調使者、不得追附在京諸使、若有違越、論當如法、

(延喜式民部二十三)凡諸國大帳朝集稅帳公文、從官下之後、依無使并雜掌、不得勘會、及遲怠違期、具錄其由、載結解帳中官、

(九條年中行事)申一上事

調使違期事　○又見北山抄

(類聚三代格七)太政官符

應四度公文使違期不上道者不待所司勘申解却見任事

右得駿河國解偁、謹檢式條、四度公文進官之期、各立定限、牧宰之勤、不敢懈緩、而件使等、左右姧避、動致違期、太政官寬平六年九月廿九日符偁、件帳一任之内、或過時不進、或雖進不勘之輩、遷替之日、雖進解由、返却不收者、雖新制彌重、責任長官、而奉使之人、不慮科罪、望請使人無故不上道者、須依實勘定、具狀言上、不待所司勘申、將被解却見任、然則人心願慎、公文無擁者、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、奉勅依請、諸國准此、

寬平八年十一月廿日　○原本闕年月日、今依政事要略五十六補、

太政官符

應四度公文合期進上事

過期不還科責

右件公文進官之期、各立章程、違闕之科、自有恒典、或國經年不進、或國過期僅進、仍毎有觸事、勘會文簿、所司常稱未進公文、不得勘申其事、政之擁滯、莫不由此、今撿案內、去寶龜十年八月廿一日、立國司受使無返抄歸任所、停釐務奪料之格、又寛平八年十一月廿日、下四度公文使違期不上道者、解却見任之符、然則件公文違期及無返抄者、科責之法、先格後符、重疊嚴峻、而頃年國宰懈緩、專忘遵行、若非加懲誡、何以肅怠慢、左大臣宣、宜早仰下四度公文一切合期、若有慣常猶致違闕、特科處不曾寛宥、又國司申請之事、相觸公文之色、自非勘據、何輙辨定、仍須未進公文之間、更不理其所申、

延喜五年十二月廿九日

〔延喜式雜五十〕凡國司等、就使及請暇入京、過限未還者、錄名申送、若隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜十年八月庚申、勅、牧宰之輩、就使入京、或無返抄、獨歸任所、或稱身病、延日京下、而求預考例、兼得公廨、又託民規避、拙吏忘催、公用之日、還費正稅、於理商量、甚乖治道、若有此類、莫預釐務、國司奪料、附帳申送、郡司解任、更用幹了、阿容之司亦同此例、〇又見政事要略

〔續日本紀桓武三十九〕延暦六年七月丙子、先是去寶龜十年立制、牧宰之輩、奉使入京、或無返鈔而歸任、或稱病而滯京下、求預考例、兼得公廨、如此之類、莫預釐務、國司奪料、郡司解任、容許之司、亦同此例、而自其時後、希有遵行、至是重下知諸國、不悛前過、猶致緩怠、卽科違勅罪矣、

〔續日本紀桓武四十〕延暦八年五月丙辰、先是諸國司等、奉使入京、無返抄歸任者、不預釐務、奪其公廨、而在國之司、偏執此格、曾不催領、專煩使人、於是始制、如此之類、不問入京與在國、共奪目已上之料、但遙附便使、不在奪限、

〔延暦交替式〕太政官符〇中略

一調庸未進事

右去延暦八年五月十五日、下諸國符偁、得備中國朝集使介從五位下下毛野朝臣年繼狀偁、去年

十月奉使入京、而當年調物、便附年終、仍有未進、雖數遣催、在國之官、曾不存心、謹檢太政官去寶龜十年八月廿三日符偁、入京公使、無返抄者、不預釐務、奪料申送者、今國司等、偏存此符、專累使人、無心催領、奉使之徒、勞苦京下、遷任之日、卽奪公廨、在國之宰、曾無相催、班料之日、競望優給、未進不絕、則由於此、望請、如此之類、不論彼此、同奪其料、者官判目已上公廨、共奪申上、但遙附便附者、不在奪例者、○中略

延暦十四年七月廿七日

〔類聚三代格八〕太政官符

應禁調庸危惡并便附在京司等事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國調庸、專當歷名、附大帳使、依例申送、而使人預知物危惡、規求逋去、遂稱病故、便附在京國司等、調物濫惡、從此而生、卽法令雖有科條、所司罕能遵奉、今須如是之類、及在京司幷他使等、輙相代奉使者、同奪公廨、務令懲革、

延暦廿一年八月廿七日

〔日本後紀十四平城〕大同元年五月己丑、勅、公使之政、旣立程限、私暇之期、必有日數、如聞、諸國牧宰之輩、或就使入京、公務已畢、或緣事歸舍、暇日方滿、而經過宮闕、留連閭里、量彼景迹、不可不懲、又上下殊等、所掌各別、若長官出行、須佐職留守、而或有掾已上官、共離任所、付印主典、泰甚之至、一復如此、其奉使過限者、勸由申之暇滿未來者、錄名聞言、隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、不得阿容、

〔貞觀交替式下〕應調庸危惡及違期未進依律科罪各令塡納事

右○中略被右大臣宣偁、奉勅、貢調違期、輸物濫惡、法有恒科、理令遵行、而國郡怠慢、不憚憲章、仍承前立格、數施嚴制、主典已上、差宛專當、如有違闕、解任決罰、使無返抄、不預釐務、相代奉使、同奪公廨、而國郡官司曾不改使、空設條章、何能懲肅、加以使未了事、偏不預務、傍官有故、誰可從政、夫罰不在重、法貴必

行、准據法律、實足懲革、自今以後、宜改前格、一依律條、更莫寛宥、但使差主典以上公勤幹了者充之、若有未進者、宜依延暦十四年七月廿七日符、上下作差、割公廨料、辨備令進、

大同二年十二月廿九日（又見類聚三代格八、政事要略五十一、）

〔類聚三代格七〕太政官符

應貶諸國貢調税帳大帳等使考事

右得民部省解偁、檢案内、延暦九年十二月十日、左大辨紀朝臣古佐美宣、諸國税帳大帳貢調等使上日、頃年之間、民部漏落、不爲充行、自今以後、宜依舊給之者、而今奉使之輩、多非其人、或稱病避事、或肆情徇私、曾不參省、徒煩雜掌、衆務闕怠、從此而生、望請、齎公文間、無故不上計、其上日、不滿三分之二、即奪公廨、兼不預考、仍每年上日、移送式部省、審加貶降、又所奪公廨數令與税帳申、然則吏自公勤勸帳無怠、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

大同五年三月廿八日（又見類聚國史、貞觀交替式、政事要略五十六、）

太政官符

應停止諸使便附遙授人事

右檢案内、去延暦廿一年八月廿七日格偁、右大臣宣、奉勅、諸國調庸專當歴名、附大帳使、依例申送、而使人豫知物麁惡、規求遁去、遂稱病故、便附在京國司等、調物濫惡、從此而生、即此法令、雖有科條、所司罕能遵奉、今須如是之類、及在京司并他使等、輒相代奉使者、同奪公廨、務令懲革者、今被右大臣宣偁、奉勅、内官之吏、無祿之人、夙夜服事、身乏衣食、因茲或兼牧宰、猶宜本任、或拜外吏、富身京華、皆將潤以俸料、令得代耕、而諸國皆忘舊貫、便附使政、公文惑於失錯、貢物傾於麁惡、諸使擁塞、職此之由、宜下符諸使、勿令更然、

承和七年五月二日（又見續日本後紀、政事要略五十六、）

太政官符

應貢調國司依病相替病愈之日卽令進上事

右案寶龜六年六月廿七日格偁，貢調庸使者，必進專當國司目已上，縱不入京，巨坐專當，又天應元年八月廿八日格偁，調庸專當國司，附計帳使申上，必令進上，不獲遁留相替者，斯則所以匡貢物之違濫，絕致納之稽違者也，比者諸國所行，使人有病，差替言上事，須病愈之日，隨卽催上，而不存格意，曾無進上，遂令相替之人累違濫之責，遁留之吏逭嚴科之法，今被右大臣宣偁，自今以後，病愈之日，必令進上，如除行程之外滿百廿日，猶有不參者，依法解官，仍須待滿日數，補任中官，

承和九年正月廿七日 ○又見續日本後紀、政事要略五十六、

〔貞觀交替式 下〕應准未進調庸數沒國司公廨幷調使歸國事

右撿案內，太政官去仁壽二年四月二日符偁，右大臣宣，奉勅，調庸之物，輸貢有期，而今諸國違者數十年，近者五六年，皆作未進，無返抄，因玆深法嚴科，前後重疊，加以一差調使之人，永無歸國之期，若有不上，隨亦解官，諸使之中，罪責殊深，雖違式不備，責在專使之小吏，刑法不勤，罪歸執事之官長，今須諸國調使，雖有未進，勘損益畢，便遣歸國，與官長共催督未進，爰以公廨辨備，速令納訖，其使政總成之日，勘會抄帳，幷受返抄，並如常式，若今年未進，來年不究納者，所司則錄過期不納之國，申送省，卽沒使及長官一年公廨，夫罪依一重，不可再科，先有計日奪俸之格，今則從停止，但貢調限月之後，損益未了之前，若有依病及無故不上之輩，卽依法條，處之解官者，○中略 頃年貢調使公文下寮，始責著到，雖公文遲下，所司而不上之責無加其身，因玆延引年月，不勞催下，須公文進官之後，一向直寮，縱令稽留不下者，使等錄狀申官，省無故拘留者，各尋所由，將處科條，其公文進官，身不直寮者，外題下時，計不上日，若無故滿卅五，依病經百廿，所司具錄申省，其勘損益之間，上日不滿三分之二，責如先格，勘畢歸國，催未進，幷勘會抄帳，請返抄，並如仁壽二年四月二日符，被同宣偁，奉勅依件行之者，

四度使

齊衡二年五月十日〇原本有誤脱、據政事要略補正、

〔類聚三代格七〕太政官符

應大帳税帳使無故不上奪公廨并解官事

右得民部省解偁、案去大同五年三月廿八日格云、〇中略案件格旨、未見使等可至解官之義、而承和十三年、淡路國貢調使掾淸山總世、越後國大帳使博士佐伯廣宗等、依無故不上之罪、初被解却、是據職制律所行也、謹案太政官去仁壽二年四月二日符、諸國調使、若有依病及無故不上之輩、卽依法條處之解官者、卽據此格、調使獨有解官之文、餘使等未見所坐、而今責件等使不上同共處之解官、既有先例、難以抑留、但出於格外、本守律條、罪生所忽、終至解官、是以被坐之者、或未甘心、守格之徒、恨其峻法、借之議者、實非穩便、謹請處分者、右大臣宣、奉勅、疑罪從輕、國之茂範、解官惟重、人之深憂、宜自今以後依格行之、但專寬不上之罪、還成奸吏之計、今須無故不上滿百廿日、准依病不上行之、

齊衡二年九月廿三日〇又見政事要略五十六、

〔政事要略五十七交替雜事〕雜公文事

公文

四度使者、正税帳使、大帳使、貢調吏、朝集使也、案之、件帳可稱四度公文歟、民部式云、義倉及官田地子等帳、並附税帳使、義倉帳付主計、官田帳付主税、出擧帳、鄕戶課丁帳、並附大帳使、鄕戶課丁帳留倉、大帳主計、出擧帳付主税之、田租帳附貢調使、明年貢調、國者付税帳使、正倉官舍池溝桑漆等帳、並附朝集使云々、以總帳稱四度公文、頗似得其意、或云、主計四度公文、大帳、調帳、朝集帳、義倉帳、主税四度公文、税帳、租帳、出擧帳、朝集帳云々、先說以帳稱四度公文、後說相交枝帳、相分二寮、稱四度公文、未得其意、故兩存之、

〔二中歷七公文〕四度公文大帳、調度帳、或庸帳、別奏、已上主計、税帳、租帳、出擧帳、已上主税、

今案、四度帳者、大帳、調庸帳、税帳、朝集帳、其大帳者、出擧及計帳、六季一除調庸、死亡、俘囚、隱首、季帳及諸司返上帳、三季一除即任終年目錄也、調帳者、依目錄帳知調庸色目、税帳者、倉付同損益帳、三季一除官舍、并池溝帳、十季一除朝集

帳者、歸ニ知桑漆犬鶏飾設ニ是也、手云、四度使、出舉、撿田、計帳、收納、

〔口遊 田舍〕大帳　調帳　税帳　朝集帳謂ニ之四度公文　出舉　撿田　計帳　收納使謂ニ之四度使

〔與州新居系圖〕爲世——季成——爲成季成三——成重爲成二男 拜志、四度使、

｜季成四男 吉成——助房號之四度使

○按ズルニ、成重、助房等ノ年代、未ダ詳ナラザルモ、伊豫國觀念寺文書、貞和三年九月契約狀ニ、右當寺、則是新居大夫盛氏、文永年中、初建立之寺也云々トアリ、而シテ盛氏ハ、爲成八代ノ孫ナリ、

〔諸家系圖纂二十五 三善〕玄理四度使一、改ニ姓於椋橋、始住ニ尾張國丹羽郡、爲ニ當郡司、四度使者、國總社一二三只上四社、祭使四度、依令勤ニ仕之也、——恒則四度使二、椋橋

——美並四度使二、自延長四年至天曆九年、郡司二十年、椋橋、——賴利四度使四、下總介、自天曆九年至安和二、郡司十五年、椋橋、○下略

〔東大寺小櫃文書 下〕越中國撿定東大寺墾田地漆處

總地伍佰捌拾漆町漆段壹拾捌歩

開田壹佰伍拾肆町陸段肆拾陸歩

未開肆佰參拾參町參佰參拾貳歩○中略

以前去天平勝寳元年、占定野地、且墾開如件、

天平寳字三年十一月十四日　竿師散位正八位下小橋公石正

佐官法師平榮　知開田地道僧承天

都維那僧仙主

造寺判官外從五位下上毛野公眞人

國司

從五位上行守　王朝集使　正六位下行掾三島縣主宗麻呂

正六位上行介粟田朝臣男玉　正八位上行目小野朝臣大帳使

從五位上行員外介日下部宿禰在京

○按ズルニ、守王ノ下ニ朝集使ト註シ、目小野朝臣ノ下ニ大帳使ト註セルハ、共ニ使ト爲リテ、京ニ在リ、國ニ在ラザルヲ以テ、其名ヲ署スルコト能ハズ、因テ姓ノ下ニ使名ヲ註記シ、其使タルコトヲ示セルナリ、次ノ文書ナル調使、朝集使等ノ註モ亦同ジ、是九經字樣ノ尾ニアル、開成二年、中書門下ノ牒ニ、撿校司徒平章事劉使、司徒兼中書令使、ナドアルト同ジ、

〔東大寺小櫃文書下〕越中國司解　申撿校東大寺墾田并野地圖事

合玖佰參拾肆町捌段壹佰壹拾捌步

見開田肆佰肆拾陸町壹段貳佰貳拾柒步○中略

以前撿校東大寺墾田野地并圖、具件如前、仍具錄狀、附利波臣淨貞進上、謹解、

神護景雲元年十一月十六日　正七位上行目阿倍小殿朝臣調○使○

從五位上行守佐伯宿禰朝○集○使○　正六位上行掾若櫻部朝臣梗麻呂

從五位下行介國見眞人安曇　正六位上行員外掾秦忌寸里○里一本作、鳥人

從五位上行員外介利波臣志留志　正八位上行員外目阿刀連在京

〔東大寺小櫃文書下〕阿波國司解　申返抄事

使東大寺別當內竪正六位上石川朝臣眞主

右被太政官去承和五年九月五日符偁、爲實錄東大寺地、件人充使發遣、國宜承知、國司與使者共令勘申者、謹依符旨、奉行既訖、仍即附眞主、謹解、

承和七年六月廿五日　大初位上守少目神服宿禰去年貢調使

守闕　正六位下行掾文室朝臣雄道

從五位下守右近衞少將兼行介藤原朝臣在京　正七位上行大目宮原宿禰承和四年貢調使

〔類聚三代格 七〕太政官符

應差志摩飛驒兩國朝集使事

右太政官去六月十七日下五畿内七道諸國符偁、(中略)諸國承知依宜行之、其志摩飛驒兩國、守目二員、政多人少、不足差使、宜朝集已下諸使聽差目以下、立爲恒例、

弘仁九年十一月三日

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年十月七日辛卯、太政官處分、大和和泉攝津等國四度使、付目已上一人、

〔延喜式 二十二民部〕凡畿内諸國、差目已上一人、令申四度使政、

〔延喜式 十八式部〕凡太宰及國司並依番朝集、其史生者、不在朝集之限、自餘雜事並聽附申、若目已上不足者、聽申官差充、

〔延喜式 二十二民部〕凡志摩國四度使、總付一使、

凡諸蕃人任國司者、不得差四度使、

凡諸國四度使、可執事還國者、待事訖宣旨乃許、

〔延喜式 五十雜〕凡對馬島朝集計帳、並附一使、

〔延喜式 二十三民部〕凡義倉及官田地子等帳、並附正税帳使、(義倉帳付主計、官田帳付主税、)出舉帳、鄉戶課丁帳、並附大帳使、(鄉戶課丁帳付主計、出舉帳付主税、)田租帳附貢調使、(但明年貢調國者、付正税帳使、)正倉官舍溝池桑漆等帳、並附朝集使、

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁六年十一月甲午、令諸國正税帳計帳兩使便附朝集使、不聽別差使、以省郵驛迎送也、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應收養在路飢病無由達鄉幷不能自存百姓等事

右存恤之事、載在令條、國郡官司、理須遵行、而收養醫療、未聞其事、大納言正三位兼行左近衛大將陸

奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、煦育之道、理不可然、違法之吏、深令科責、宜更下知、勤使督養、勿令被黎民徒致非命、其料量用正税者、〇中略 卽國郡官司、親加訪察、若乖符旨、存濟失所、爲他見告、依法科罪、夫專當國郡司名、及所存濟之人數、附朝集使、所用正税、附税帳使、並作別卷、毎年言上、但不能自存之輩、一依令條行之、不得違法輙用正税、

弘仁十一年五月四日

太政官符

應計帳公文便附朝集使事

右得陸奥國解偁、頃年朝集使例附税帳公文、因玆朝集之政雖畢、稽滯之煩無息、遂超年月、復渉秋冬、今計帳使九月上道、進發同時、累路多苦、望請、件等公文、附朝集使、爲例言上、然則路次省疲、驛子息肩、唯正税帳使別差專使進上、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

承和十一年四月一日〇又見政事要略

太政官符

應附朝集使進大帳事

右得出羽國解偁、件公文、依太政官去弘仁十年五月廿八日符旨、差使、九月進官、朝集使且依例、十月上道、兩使絡繹、路次多弊、望請、准陸奥國、大帳永附朝集使進上、但税帳別差專使將進、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

嘉祥二年閏十二月廿六日〇又見政事要略

〔類聚三代格 一〕太政官符

應奉新年月次新嘗等祭幣事

右得神祇官解偁、撿案內、武藏、下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部

受取供祭、而頃年綏怠、曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠、往還難澀之所致也、望請、差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、宜附貢調大帳等使送之、仍須官長齋敬躬奉、不得疎略、

齊衡二年五月廿一日

太政官符

應附送稅帳大帳朝集等使諸社不受新年月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解偁、件等祭幣帛、依祝部不參、納置官庫、謹案齊衡二年五月廿日格偁、〇中略而貢調使不齎此官、但稅帳大帳朝集使等、爲例來著、今加格條、外國諸社不受幣帛、可附大帳使、畿內祝部不受幣帛、同附件三箇使班送、但頒幣帛之日、不參祝部者、須依格先科祓、令償罪來、若猶不參、將從解却、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

貞觀十七年三月廿八日

〔萬葉集十九〕正稅帳使掾久米朝臣廣縄事畢退任、適遇於越前國掾大伴宿禰池主之館、仍共飲樂也、于時久米朝臣廣縄矚芽子花作歌一首、〇歌略

〔萬葉集十九〕君之往、若久爾有婆、梅柳、誰與共可、吾蘰可牟、

右判官久米朝臣廣縄、以正稅帳應入京師、仍守大伴宿禰家持作此歌也、

〔類聚三代格七〕太政官符

應差筭師充稅帳使便附計帳公文事

右太政官去弘仁九年六月十七日下太宰府符偁、〇中略自爾以降、彼府稅帳、便以付朝集使、今撿式例、諸國進稅帳期、同限二月、其府稅帳、別限五月、又撿太政官去弘仁五年五月十三日下式部省符偁、得府解偁、管內公文、觸類繁多、筭師一人專勞勘會、入部〇部一作之使、遂差他官、至被勘出、不堪辨申、望請、

大帳使

勞加一人、毎年相換、將令向京者、右大臣宣、奉勅依請者、今被右大臣宣偁、勘拼之事、尤在税帳、五月八月相待不久、自今以後、税帳之使、宜差竿師、計帳公文、便付同使、

弘仁十三年四月十五日

〔類聚三代格七〕太政官符

應停毎年進上青苗簿帳事

右得相摸國解偁、撿案内、依太政官去承和九年六月九日符、勘造件帳、附大帳使、毎年進上、今商量有損之年、有用勘會、無損之歳、未見其用、望請、當有損年、勘造進上、自此之外、將從停止、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣、奉勅依請、自餘諸國亦宜准此、

承和十二年九月十日

〔延喜式二十二民部〕凡諸國調庸專當者、差目以上幷郡司少領已上強幹于事者、毎年相換、但小郡者二年差領、一年差主帳、其歷名附大帳使、申送官、

凡點仕丁者、毎五十戸二人、○中略不點廝丁、其大替前年四月、省預勘錄、應點人數申官、下符國司、計帳之日點定、十二月下旬以前、附綱送省、月内相替、令得給糧、其名簿先附大帳使進省、

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國計會帳、天平六年八月廿日、正八位下目小野臣淑奈麻呂、

開、辨官解文肆拾壹條、

天平五年

八月○中略

一九日夏調過期限遲進事

一同月十九日進上水精玉壹佰伍拾顆事

一同日進上主當調庸國郡司歷名事

一同日進上無國司等營造家事

一同日進上主當地子交易國司目正八位下小野臣淑奈麻呂事

一同日進上公文壹拾捌卷參紙大帳二卷、鄉戸課丁帳一卷、括出帳一卷、走還帳一卷、政紙陸帳一卷、逃亡帳六年帳一卷、神龜五年以來逃亡帳一卷、制付紙帳一卷、伊戸帳一卷、遺服人帳一卷、高年及疾以上帳一卷、計會帳一卷、大稅出擧帳一卷、郡稻出擧帳一卷、公用稻出擧(擧下恐脱帳字)一卷、九等戸帳一卷、參帳一卷、主當國司歷名帳一紙、郡司帳一紙、主當地子交易國司歷名帳一紙、井無國司遺家帳一紙

一同日進上驛起稻出擧帳壹卷

一同日進上眞珠參拾顆上一十顆、中五顆、下一十五顆

一同日進上水精玉壹佰顆事

右捌件、附大帳使史生大初位上依網連意美麻呂進上、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應差計帳使事

右案太政官去弘仁六年十一月廿七日下諸國符偁、四度使外臨時諸使、往還繁多、民疲迎送、宜正稅計帳二使公文、便附朝集使、以省民弊者、今以九年計帳、便附八年朝集使、即彼八年朝集稅帳之政、九年四月以前、並是勘畢、起自五月、至于八月、爲待計帳、徒居京下、因玆在國之吏、乏人行事、奉使之輩、猶苦無粮者、被大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、偁奉勅計帳公文、宜差專使、自餘之事、一同前符、

弘仁九年六月十七日〇又見政事要略

〇按ズルニ、計帳使ハ大帳使ニ同ジ、

〔延喜交替式〕凡貢調使者、差主典已上公勤幹了者、充之、

〔東大寺正倉院文書 小杉本搶佛外三〕下總國司解　申貢上逃官賤事

朝集使

合婢貳口（當國一口、他國一口）

婢稻主　買年貳拾壹歲（○註略）

右依民部省去天平勝寶元年九月廿日符、買取、付運調使史生從七位下土師宿禰稻守、貢上者、

（○中略）

以前得部下香取郡司解狀、件婢等、以今年五月六日逃來、即捉正身申送者、國勸問、申云、以今年四月一日、從法華寺逃放來者、仍禁正身、付國傳、貢上如件、具狀謹解、

天平勝寶三年五月廿一日　從七位下少目守山眞人知万侶

守從五位下多治比眞人（朝集使）　正六位上行掾文伊美吉伯麻呂

正六位上行介當麻眞人佐賀武　從六位上行大目安宿造大虫

○按ズルニ、運調使ハ即チ貢調使ナリ、

〔日本書紀（二十五孝德）〕大化二年三月辛巳、詔東國朝集使等曰、集侍群卿大夫、及國造伴造、幷諸百姓等、咸可聽、（○中略）今問朝集使及諸國造等、國司至任、奉所誨不、於是朝集使等、具陳其狀、

〔日本書紀通證（三十孝德）〕朝集（マウウコナハル）（○中略）朝集使（マウウコナハル）（唐制、諸州奉貢物入京者、謂之朝集使、見貞觀政要註、）

〔貞觀政要（入貢賦）〕貞觀二年、太宗謂朝集使曰、（唐制、諸州奉貢物入京者、謂之朝集使、）任土作貢、布在前典、

〔日本書紀（十四雄略）〕二十三年八月庚午朔丙子、天皇疾彌甚、與百寮辭訣、握手歔欷、崩于大殿、遺詔於大伴室屋大連、與東漢掬直曰、方今區宇一家、烟火萬里、百姓艾安、四夷賓服、此又天意、欲寧區夏、所以小心勵己、日愼一日、蓋爲百姓故也、臣連伴造、每日朝參、國司郡司、隨時朝集、何不罄竭心府、誡勅慇懃、（○下略）

〔日本書紀通證（十九雄略）〕朝集（マウヅウコナハル）（字古奈波流、事纂紀、祕訓同、通證唐紀註、自外入朝、與朝來者曰朝集使、）

〔唐六典（三戶部）〕凡天下朝集使、皆令都督刺史及上佐更爲之、若邊要州都督刺史、及諸州水旱成分、（○分）

異說則他官代焉、皆以十月二十五日至于京都、十一月一日、戸部引見訖、於尚書省與群官禮見、然後集於考堂、應考績之事、元日陳其貢篚於殿庭、凡京都諸縣令每季一朝、

〔萬葉集十八〕閏〇天平感寶元年五月二十六日大伴宿禰家持作

國掾久米朝臣廣繩、以天平二十年附朝集使入京、其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日、還到本任、仍長官之館、設詩酒宴樂飲、於時主人守大伴宿禰家持作歌一首井短歌

於保伎見能、末伎能末爾末爾等里毛知底、都可布流久爾能、年內能、許登可多禰母知、多末保許能、美知爾伊天多知、伊波禰布美、也末古衣野由伎、彌夜故敝爾、末爲之和我世乎、安良多末乃、等之由吉我敝理、月可佐禰、美奴日佐末禰美、故敷流曾良、夜須久之安良禰波、保止々支須、支奈久五月能、安夜女具佐、余母疑可豆良伎、左加美都伎、安蘇比奈具禮止、射水河、雪消溢而、逝水能、伊夜末思爾乃未、多豆我奈久、奈呉江能須氣能、根毛己呂爾、於母比牟須保禮、奈介伎都々、安我末川君我、許登乎波里、可敝利末可利天、夏野能、佐由利能波奈能、花咲爾、爾布夫爾惠美天、阿波之多流、今日乎波自米氐、鏡奈須、可久之都禰見牟、於毛我波利世須、

反歌二首

許序能秋、安比見之末末爾、今日見波、於毛夜目都良之、美夜古可多比等、

可久之天母、安比見流毛能乎、須久奈久母、年月經禮婆、古非之家禮夜母、

〔萬葉集十九〕足日木之山黃葉爾、四頭久相而、將落山道乎、公之越麻久、

右一首同月〇天平勝寶二年十月十六日、餞之朝集使少目秦伊美吉石竹時、守大伴宿禰家持作之、

以七月〇天平勝寶三年十七日、遷任少納言、仍作悲別之歌、贈貽朝集使掾久米朝臣廣繩之館二首、〇中略

荒玉乃、年緒長久、相見氐之、彼心引、將忘也毛、〇中略

右八月四日贈之

〔萬葉集 二十〕上總國朝集使大掾大原眞人今城向京之時、郡司妻女等餞之歌二首、（〇一首略）

安之我良乃、夜敝也麻故要氐、伊麻之奈婆、多禮乎可伎美等、彌都都志努波牟、

〔北山抄 三拾遺雜抄〕讀奏事

朝集使（朝集乃使）

朝集使、幷今擬者讀、位闕所者不讀之、（或說、朝集使六位以下、不讀位署、〇中略）凡諸第相錯、文字脫誤、及事乖舊範者、不給定善、見合立郡譜第祖別、朝集使及國擬大少領姓氏骨等之後、可書定少等字、

〔令義解 一職員〕太政官 左大辨一人（掌〇中略諸國朝集、）

〔令集解 二職員〕新令私記云、諸國朝集、式部省、散位寮、兵部省、皆掌朝集、未知其掌如何、答、辨官、式部、兵部、並爲申雜政並考選等掌耳、唯散位寮、爲點上日掌耳、然其上日者、式部點撿申官、請外印下國耳、（內相定）朱云、諸國朝集、謂朝集使來、雜政申、辨官聽裁者、新令問答見也、讚云、諸國朝集者、爲物考選並雜務等掌之、式兵部亦爲考選事掌之、但散位寮者爲點上日掌耳、但其上日者送式部、式部點撿申官、捺印下國耳、

〔令義解 一職員〕式部省 卿一人（掌〇中略朝集、謂諸國朝集使、依考選及補任郡司之事、集於此省也、〇中略事、）

散位寮 頭一人（掌〇中略朝集、謂諸國朝集使、皆於此寮列其上日也、於事、）

兵部省 卿一人（掌〇中略朝集、祿賜、假使、〇中略事、）

〔令義解 二僧尼〕凡僧尼等身死、三綱月別經國司、國司每年附朝集使申官、

〔令義解 三賦役〕凡諸國貢獻物者、（謂前令云、朝集使貢獻物、今此令無朝集使三字、即知不必附朝集使、亦當寄付便使也、）皆盡當土所出、

〇按ズルニ、前令トハ、大寶令ヲ云ヘルナリ、

〔令義解 四考課〕凡內外文武官（〇義解略）初位以上（〇義解略）每年當司長官（〇義解略）考其屬官、（〇義解略）應考者、皆具錄一

年功過行能、〇義解略並集對讀、〇義解略議其優劣、定九等第、〇義解略八月卅日以前校定、〇中略外國十一月一日、附朝集使申送、〇中略

凡官人景迹功過應附考者、〇註略皆須實録、〇註略其前任有犯私罪、斷在今任者、亦同見任法、〇中略以致昇降者、各准所失輕重、降所由官人考、即朝集使褒降進退失實者、亦如之、謂長官人考合理、而朝集使不能勘審、仍降朝集使考、若長官所考錯謬、而朝集使亦不能勘審、唯降長官考、爲降所由官人考故也、〇中略

凡大貳以下及國司、謂目以上、每年分番、謂假云、每年分番、郡知以二一年爲番限也、朝集、所部之內、見任及解代皆須知、其在任以來年別狀迹、〇註略隨問辨答、謂國守以下、在任一歲之內、年別狀迹、隨問辨答也、

〔令義解五軍防〕凡兵士以上、皆造歷名簿、〇義解略二通、並顯征防遠使處所、〇義解略仍注貧富上中下三等、〇義解略一通留國、一通每年附朝集使送兵部、〇中略

凡〇中略其國器仗、每年錄帳、附朝集使申兵部、〇中略

凡防人在防、守固之外、各量防人多少、〇義解略於當處側近、〇義解略給官閑地、逐水陸所宜、斟酌營種、並雜菜、以供防人食、〇義解略所須牛力、〇義解略官給、所收苗子、每年錄數、附朝集使申太政官、

〔令義解六營繕〕凡官私船、每年具顯色目勝受斛斗破除見在任不、〇義解略附朝集使申省、

〔令義解七公式〕諸司應官會式

其省臺及餘司皆准此、〇中略

合官符若干、准前注、〇中略

以前應會之事、以七月三十日以前爲斷、〇義解略十二月上旬勘了、被管諸司、皆於所管勘授、〇義解略自餘諸司、各本司勘會、並無失錯、長官押署、〇義解略封送太政官、國司亦准此、〇義解略附朝集使、送太政官、分遣少辨及史等、檢集諸司主典及朝集使對勘、〇中略

凡國有急速大事、謂急速者、警賊動略、應入比界之類也、大事者、指斥候與、情理切害、究其徒衆、亦分入他界之類也、遣使馳驛、向諸處相報告者、每年朝

集使、具錄使人位姓名、並注發時日月、給馬疋數、告事由狀、送太政官、承告之處、亦准此、

〔令義解八廐牧〕凡在牧駒犢、至二歲者、毎年九月、國司共牧長對、以官字印印左髀上、(中略)並印訖、具錄毛色齒歲、爲簿兩通、一通留國爲案、一通附朝集使、申太政官、(中略)

凡官私馬牛(謂、文云、附朝集使、即知京內馬牛不在此限也、)帳、毎年附朝集使、送太政官、

〔令義解十獄〕凡(中略)囚在獄死者、年別具狀、附朝集使、申太政官按覆、

〔延喜式十一太政官〕凡諸國考選文、及雜公文、附朝集使、十一月一日、進辨官、如諸司儀、(事見儀式)

〔延喜式十八式部〕凡國司五位已上、就朝集使入京者、皆聽預節會、但五畿內、及近江、丹波等國司者、雖非奉使亦聽、(若元日不朝者、並不聽也、)預參、

凡鑄錢司考文、附周防國朝集使、(中略)

凡諸國擬任郡司名簿、毎年附朝集使令進、若不進者、拘朝集返抄、

凡諸國雜色人死亡帳、毎年附朝集使送省、

凡朝集使事了還國者、皆待神祇、治部、民部、兵部等移、而後錄上日、申官請印、

凡賀正者、預擇諸國朝集使、及散位容儀所可取者、四十人已上五十人已下、以擬威儀權官、

〔延喜式二十二民部〕凡朝集使終事還國者、令二寮勘合官舍、溝池、桑漆、種麥、陸田鷄鋪設等帳、然後移送式部省、

〔延喜式二十三民部〕凡(中略)正倉、官舍、溝池、桑漆等帳、並附朝集使、

〔延喜式二十六主税〕凡近江國修理勢多橋用途帳、附朝集使、毎年進上、備之勘會、

〔延喜式二十八兵部〕凡太宰府管內諸國射田、毎郡置二町、(中略)斟量能不、隨狀給之、其能射人、及所給物數附朝集使送省、

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月甲申、太政官奏偁、郡司有能繁殖戶口、增益調庸、勸課農桑、人少遺乏、禁

簡違逆、貪濁盈賊、籍帳皆實、戸口無遺、割斷合理、獄訟無冤、在職匪懈、立身清愼、其一居官貪濁、處事不平、職用既闕、公務不擧、侵沒百姓、請託公施、肆行奸猾、以求名官、田疇不開、減闕租調、籍帳多虛、口丁無實、逋逃在境、畋遊無度、其二又百姓精務農桑、產業日長、助養窮乏、存活獨惇、孝悌聞閭、材識堪幹、其三若有郡司及百姓、准上三條、有合三句以上者、國司具狀、附朝集使擧聞、奏可之、　乙酉、詔諸司主典以上、并諸國朝集使等曰、制法以來、年月淹久、未熟律令、多有過失、自今以後、若有違令者、卽准其犯、依律科斷、其彈正者、月別三度、巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀、移送式部省、日勸問、又國司因公事入京者、宜差遣、知其事者、充使、使人亦宜問知事狀、幷總知在任以來年別狀迹、隨問辨答、不得礙滯、若有不盡者、所由官人及使人、並准上科斷、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年二月辛酉、簡點伊勢、近江、美濃、越前等四國郡司子弟、及百姓年四十已下、二十已上、練習弓馬者、爲健兒、其有死闕及老病者、卽以與替、仍准天平六年四月二十一日勅、除其身田租及雜徭之半、其歷名等簿、每年附朝集使、送式部省、

〔續日本後紀仁明十〕承和八年五月己丑、勅、修福滅罪、佛道是先、傳法興教、人倫爲本、如聞諸國定額寺、堂舍破壞、佛經曝露、三綱檀越、無心修理、頃年水旱不調、疫癘間發、靜言其由、恐緣彼咎、宜重下知五畿內七道諸國、修理莊嚴定額寺堂舍幷佛像經論、今須每寺可修理之程、付朝集使言上、習常不革、並處重科、

〔三代實錄淸和二〕貞觀元年二月廿七日癸丑、下知五畿七道諸國、令修理諸神社、宜自今以後、官長專當、年中修理色目、付朝集使言上、

〔延暦交替式〕諸國朝集使起請

一欠負一駄二駄、又欠負與欠損一駄二駄、

答、欠負一、欠負與欠損二、

今案、令、欠負者欠之與負二也、今此條所謂、欠負一者、是公廨式新意耳、非法令通例、

一水旱不熟之年、出擧雜物者、未知雜物色、

答、稻粟麥等類、

一假令、天平勝寶六年、交替之人、闕正稅事者、以當年公廨塡之者、前人闕出擧、後人闕收納、未知後人闕以不、

答、前後之人俱闕、

一公廨有餘者、依例處分者、未知誰處分、又前後人、共有分以不、

答、今人爲處分、又俱有分、

一雜欠物巨多、公廨物數少、猶不得塡納者、具狀申官者、未知未納巨多、又申官以不、

答、當水旱不熟之年、聽申官、

今案、延曆十六年符偁、前時未納、既經申官者、隨國大小、立徵納法、然則前人解由、不可拘留、

一〔欠〕損物者、一准動物推徵者、不緣濕腐、別有欠損、未知猶准動物徵以不、

答、非緣濕腐、無可有別欠、

以前事條、處分如件、

天平勝寶七年七月九日

〔類聚三代格七〕太政官符

應聽管內諸國次官已下主典已上官人入京事

右得太宰府解偁、豐前國解偁、撿太政官天長五年四月八日下太宰府符偁、得豐前守從五位下伴宿禰枝嗣解狀偁、撿太政官去大同元年六月一日符偁、〇中略而太政官去天長元年八月廿日下七道諸國符偁、撿參議左近衞中將從四位上兼行近江權守淸原眞人夏野奏狀偁、國中之政、朝集使可申、而

或附史生、至于問政、譬如面墻、伏望差官長副史生一人、其國滯政、於玉階之前、令面陳言、然後罷却、便留史生、令或遣政者、依奏、但有可奏於玉階前者、雖非朝集使、聽入京、無可奏之事者、雖朝集使、而不聽者、受六道諸國、既依符旨、披陳經遠之圖、省廢承前之煩、而西海道獨守前格、未遵後符、四度之政、轉太宰府、雖年涉月、乃裁下、以有限之秩、得無期之假、諸務雍事、積年擁滯、由斯前司空經年序、被拘解由、後任怨、爲疑端、不肯受領、望請、同准諸道、被聽入京者、左近衞大將從三位兼守權大納言行民部卿清原眞人夏野宣、奉勅依請者、府宜承知、先勘定可申之事實、所請有理、任中一二度聽入京、依此不得輙用、公乘、自餘諸國宜亦准此者、謹案件等符、大國之格能省路次之勞、天長之符還輕公乘之弊、而今此國從大同四年以來、迄承和十一年、勘出色目、惣二百万束、誠雖前司之怠慢、抑非後任之煩乎、頃年依符、遣國雜掌一人、未必其人、況懷土之民、有心早歸、無勤覆申、多受勘出、不得細辨、國宰覆申、往還之程、殆三千里、報下之間、稍過任秩、遷代之人、由此多怠、勘出之物、以之猥積、又諸道國吏、或使或假、便申雜政、兼省國煩、而管內國吏、不得上都、凡未得解由之輩、多積管內者、職此之由也、望請、長官若次官一人、任中一二度、取海路被聽入京、辨濟雜務者、府司覆審、所陳有理、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但任用之官、爲辨濟者入京、自餘諸國亦宜准此、

嘉祥二年三月八日○又見續日本後紀

〔東大寺小綴文書上〕

朝。集。雜。生。秦石前

婢椋女十五 美濃國賀茂郡逃亡今ニ捉進者

右付朝集雜生秦石前進上如件

天平勝寶二年五月廿六日來到

〔延喜式十八式部〕凡叙正之日、○中略諸國四度使雜掌、及入京郡司、皆聽朝拜、節季冬下旬、大月廿八日、小月廿七日、總集、

諸司預令習讀、

〔延喜式 民部二十二〕凡諸國朝集税帳雜掌各一人、上日百廿已上、免其調庸、

〔三代實録 清和十六〕貞觀十一年三月七日乙丑、勅停越中國朝集雜掌一人、免税帳雜掌調庸、

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

應給食徭丁事

四度使雜掌厮丁 朝集使四人、自餘三使各二人、○中略

弘仁十三年閏九月廿日

〔類聚三代格 七〕太政官符

應先勘當任公文、次勘前司時帳幷科責不勘四度公文府司及管內國島司事

一用度帳調帳條

右參議從四位下守右大辨兼行侍從播磨守源朝臣希奏狀偁、太宰府用度帳者、所以總計管內之調庸勘注用度之多少也、進官留府之色、以之分明、見納未納未進之數、由其易辨、○中略重望、特令所司長官專當其事、不待使雜掌、直令勘申、每至勘畢、即令當時之使加其署名、至于未到之帳、不更差使雜掌、別附單使、急速令進官、管國調帳、同亦准此者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、○中略但諸國之帳、依例進府、而府司稽延不事進官、尋其情狀、偏罪府司、自餘一依來奏、

一税帳大帳朝集帳條

右同前奏狀偁、伏撿案內、太宰府納管內公文之後、更差使雜掌進官、即令府雜掌辨申、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬等三國二島公文、亦令國雜掌辨申六國公文、但朝集公文者總令府雜掌辨申、○中略者、同宣奉勅、○中略但不勘朝集公文者、奪公廨四分之一、

以前條事如右、宜依件行之、

寛平九年六月十九日

〔類聚三代格 十七〕太政官符

應陸奥出羽兩國貢上雜物使等以初位已下子弟差充進上事

右得美濃國解偁、凡上下之使、隨其位階乘用人馬、詳立條章、而件兩國貢雜物使等、或以遷替之國司、便差充綱領、或差遊蕩之輩、令僅得公乘、因此偏假使威、不憚憲法、縣子苦於重擔、傳馬疲於過程、積習爲例、經代不停、人馬費亡、不可更論、望請下符彼兩國、除貢御鷹幷四度使之外諸使、以初位已下子弟令差充、然則貢御之事無怠、路次之費永絕、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣、〇此間恐脫奉勅二字依請、

承和十二年正月廿五日〇又見政事要略

〔三代實錄 三十二陽成〕元慶元年十二月廿七日癸巳、太宰府言、以主工、主城、主船等、只管差年貢雜物使、太政官處分、依請焉、

〔朝野群載 六太政官〕官宣 勘問申詞記

應德二年四月十四日、問注太宰府貢物使田口爲友、幷藤井國方等申詞記、

右問爲友等云、權左中辨藤原朝臣公定傳宣、左大臣宣、奉勅、件貢物等、去永保二年料也、而綱丁等請預調三年解文之後、空經二箇年、今年適以參上、懈緩之甚、責而有餘、宜仰件等使、令辨申遲參子細者、依實辨申如件、

爲友

爲友申云、被召問之實、理以可然、但件納物等、綱丁留被差定之日、即欲請預之處留、唯今府庫仁、依無納物天、管內諸國乃、未濟物乎相募天、解文進所成給也、早催徵天可進上之由、前都督毛偏仁貢物所

仁被仰置天、入京已了、其後爲友等、爲施使節仁、早催徵天可下預給之由、雖觸申毛、諸國早依不辨濟天、空送年月、因之遲參乃勸發遠爲遁仁、申交遠貢物所仁進上之日、外題遠所被成給也、子細之旨、見件申文利、仍相副天進上、但至于物實波、去年十月之比、所請預催也、敢使乃非懈怠、是府庫仁無納物之故也、唯遣官使被尋問之日、實否其隱不候止申、

圖方

圖方申云、遲參之子細、爲友申狀仁相同志、但件納物解文遠被成置之日、以權竿師藤井則國、網所仁差定天、解文仁所被注載也、而前都督遷替之貢物所留件國天、餞仁圖方遠被差替也、仍改彼解文天、圖方遠可被注載之由、雖申請毛、前都督加署判天、被請仰太留解文也、仍輒難書改志、唯以本解文、早可參上之由、貢物所乃依仰天、進徵仕候者也、又遲參乃勸發遠爲遁仁、與爲友連署天、申文遠貢物所仁進上之處仁、外題を所成給也、子細之旨、詳見件申文利、更圖方加懈怠仁不候止申、

申

田口爲友

藤井圖方

問注

右史生上野則元

〔延喜式民部二十二〕凡應造籍者、預前一年、省錄申官、待報施行、職國官司、依例勸造、（中略）太宰附貢綿使申送、撿領訖、卽錄白返抄、

〔延喜式民部二十三〕凡太宰府每年調絹三千疋、附貢綿使進之、又隼人調布、除府家三箇年雜用料之外、付使進上、

凡太宰所收調絲、除儲料五百絇之外、每年附貢綿使進之、

〔延喜交替式〕凡太宰府貢物倉庫絹及百屯綿滿一万屯、國司勾當監典幷使等、解却見任、

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年五月二日丁未、制、筑前國所輸攝津國住吉神封戶調庸綿、便付太宰貢綿使進納神社、永以爲例、

〔類聚符宣抄八〕薩摩守正六位上藤原朝臣作則元大監

右中納言藤原朝臣扶幹宣、奉勅、件人奉去承平三年貢綿使入京、今依府解、遷任薩摩守、宜不待本任放還任符入請印者、

承平五年六月十三日　少外記內藏惟直奉

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應禁制貢御馬使隨外乘用人馬事

右太政官去天平寶字二年七月十九日、延曆元年十一月三日、承和五年十一月十七日、同二年六月廿三日、幷四箇度下諸國符、具載禁制科責之旨、今被右大臣宣偁、奉勅、如聞上下諸使、皆有違犯、就中貢御馬使放濫尤多、國司知之、曾不拘制、路次郡驛、煩擾無息、縱使人愚昧妄犯格制、而牧宰其人事背容忍、宜重下知嚴令禁斷、若違法犯制、及法制之外、行事濫濊、爲民所愁者、國司阿容、無心督察、有致民患者、幷必解却見任、以懲方來、自餘之事、咸如先格、

貞觀四年六月廿九日

太政官符

應禁止諸國貢上御馬使雜色人等輙用公乘事

右得美濃國解偁、撿案內、太政官去年十一月五日下甲斐武藏兩國符偁、得參河國解偁、諸郡司驛長等申狀云、牧監主當等、依彼位階乘用人馬、自有恆條、而件御馬長、幷馬醫、書生、占部、足工、騎士等、身是白丁、無官符輙乘用、祇尋其由、曾無明文、是則郡司驛長、畏彼威勢、所行來也、積習成常、言而爲例、加以、

雜使

天長三年二月十一日格云、信濃上野兩國、各牧監一人、甲斐武藏兩國、各主當一人、馬醫每國一人、但騎士率馬六疋、以宛一人者、然則依格陪從、而多率雜色、濫用公乘者、國司雖欲據件格以糺行、而寄事貫御、强稱舊跡、嗷論之間、不得輙改、望請、殊下知永絶濫用、謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、件使等可用公乘、具在先格、而不辨格旨、輙恣乘用、於事商量、責在使人、宜殊仰下早令禁遏、若不欽符旨、猶致濫用、使人錄名言上、雜色人不問位蔭、驛頭決杖六十、依承和十二年符行之、路次之國亦宜准之者、甲斐武藏兩國、依此新制無憚改行、而信濃上野牧監等、不遵朝章、多用公乘、暴惡方盛、違犯難遏、望請、准彼兩國、明被科懲、謹請官裁者、右大臣宣、宜嚴譴責勿令更然、若輕忽個旨、强致違犯、罪如先符、曾不寬宥、路次之國、亦宜准此、

貞觀十三年六月十三日

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應太宰府無鈴雜。使。依舊往還事

右得府解偁、被太政官去七月八日符偁、無鈴雜使、還鄉之日、自今以後、一取海路、其路粮者、令攝津國給之者、謹依符旨、奉行已畢、而進上木蓮子御贄使府使部大伴直石國等、到來告款云、求船之間、官粮已盡、更就陸路、飢寒共至、或取海路、風波危嶮、海中絶粮、辛苦無極者、今量所患、事實不穩、其太宰府年中進上、無鈴之使、不過十度、還鄉之日、各乘一馬、諸驛之弊、何必由焉、望請、依舊令得往還者、大納言正三位壹志濃王宣、奉勅、除進上相撲人使之外、宜依府請、

延曆十九年正月十六日

〔類聚三代格七〕太政官符

禁制太宰府少貳已上及所管五位已上就使入京事

右得山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人解偁、西海道年中上都雜。使。、其數繁多、而此道疲弊殊於

他堺、檢察其由、率緣迎送無息、不得顧私、望請、西海道五位已上、自今以後、自非秩滿解任者、不聽輙入京者、右大臣宣、奉勅依請、

大同元年六月一日（○又見日本後紀、政事要略、）

古事類苑

政治部十二

上編

除目上

除目ハ除書トモ云ヒテ、卽チ召名ナリ、召名ハ任ゼラルベキ人ノ名ヲ列記シタルモノニテ、之ヲ讀ミテ其人ヲ任ズルナリ、而シテ除目ノ除ハ拜官ノ義ニテ、故官ヲ去リ新官ニ就クヲ謂フ、除目ニハ縣召(アガタメシ)除目アリ、京官除目アリ、又臨時除目、女官除目、一分召除目等アリ、縣召除目トハ、外官ヲ拜スル除目ノ義ニテ、召トハ卽チ拜官ノ謂ナリ、縣召ニモ京官ヲ拜シ、京官除目ニモ外官ヲ除スレドモ、其主トスル所ヲ以テ、名トスルナリ、又京官除目ヲ秋除目ト云フニ對シテ春除目トモ云フ、其儀ハ、正月十一日ニ始マリテ十三日ニ訖ルヲ恒トス、初ニ召仰アリテ、其事ニ預ルベキ人ヲ命ズ、第一夜、納言以下筥文ヲ執リ清涼殿ニ昇リ御前ニ進ミ、(攝政ノ時ハ其直廬ニ於テ之ヲ行フ)膝行シテ筥ヲ置キ、簀子敷ヲ經テ著座ス、筥ハ任人ノ數ニ依リテ多少均シカラズ、第一ノ筥ニハ大間書、三局奏、筆墨硯、續飯、擾板、水瓶、小刀ヲ納レ、第二ノ筥ニハ五位以上ノ歷名帳、諸司諸國、武官、令外官ノ主典以上ノ補任帳、大舍人内豎及ビ文章生ノ散位ノ勞帳、諸道課試及第ノ勘文、闕官帳ヲ納レ、第三ノ筥ヨリ以下ハ諸人ノ申文ヲ納レタリ、(大間トハ闕官ノ名ノミヲ錄シ、其闕ヲ空クシ、以テ任人ノ姓名ヲ補錄セシガタメニシタル名ニテ、續紙ヲ用キル、三局奏トハ、辨少納言外記史ノ申文、外記官史生幷ニ上召使等ノ奏ナル云フ、闕チテ之ヲ言フトキハ、辨少納言外記史ノ申文ハ、所謂上官ノ申文ニテ、自ラ解文ヲ修ムルナリ、外記官史生ノ奏ハ、實ニ三局奏ニテ、上召使奏ト共ニ太政官ニヨリ舉奏スルナリ、三局トハ左右辨官局、外記局ヲ云フ、續飯板ハ大間ヲ粘連センガタメニテ、續飯ハ白紙ニテ包ムテ進テ添ヘタリ、水瓶ハ水滴ナリ、小刀ハ誤寫ノ字ヲ削ル等ニ用キル、歷名トハ姓名ヲテ)

（連書スルヲ云ヒテ、補任ハ其官ニ在ル人ノ歴名、勞帳ハ年勞ヲ積ミタル人ノ歴名ナリ、勘文トハ虚實等ヲ覈實スルノ文ナリ、闕官帳ハ見在缺ケタル所ノ官名ヲ正權ヲ分チテ記セルナキ、申文ハ任官ヲ請フ所ノ文ナリ、）サテ公卿等著座シ畢リテ、執筆ノ大臣闕官帳ヲ筥ニ納レ、自ラ御簾ヲ褰ゲテ御覽ニ供ス、御覽畢リテ返シ賜フ、次ニ大臣大間ヲ座右ニ置キ、勅許ヲ蒙リテ後ニ、先ヅ内豎ノ勞帳ヲ執リ寄物ヲ見テ、灼ニ闕官ナルコトヲ知リ、其姓名ヲ大間ニ錄シ、一讀シテ勞帳ヲ勾館シ寄物ニ加點ス、寄物ハ闕官ヲ官省ノ次序ニ循ヒテ集錄セル者ナリ、而シテ姓名ヲ錄スルヲ以テ、既ニ之ヲ某官ニ任ズト云フ、次ニ校書殿進物所大舍人ノ三所ノ籍ノ人ヲ錄ス、次ニ先ヅ内給ノ申文ヲ執リ其人ヲ錄ス、内給ノ申文ノ袖書ニハ、皆内給申文ト記セリ、（袖書ハ總テ其文首ニ在ル者ニテ、卽チ標目ナリ、）次ニ院宮ノ申文ヲ執リテ次第ニ其人ヲ錄ス、院宮ノ申文ノ中ニハ、東宮准后ノ申文モアリ、次ニ公卿給ノ人ヲ錄ス、親王給ハ此中ニ在リ、次ニ尙侍女御ノ申文ノ人ヲ錄ス、蓋シ内給以下ハ、謂ユル年官ト稱スルモノニシテ、當年給、未給、名替、國替、名國替、秩滿更任、任符返上等ノ別アリ、委シクハ封祿部年官年爵篇ニ就キテ看ルベシ、サテ第二夜ハ、文章生、内舍人ノ勞帳ヲ執テ其人ヲ錄シ、次ニ上召使、諸道擧、諸院擧ヲ錄ス、（諸院トハ勸學、奬學、學館ノ三院ヲ云フ、）次ニ親王以下參議以上ノ兼國ヲ錄ス、（兼國トハ國守ヲ兼官トスルコトニテ、或ハ國ニ兼字ナドモ云ヘリ、）次ニ宿官ヲ任ズ、（宿官トハ本司ノ勞ニ由リテ、當年ノ敍位ニ敍爵セラレタル者ノ國守ト爲ルベキヲ、闕ナキ間、權守若シハ介等ニ任ズルヲ云フ、宿官ハヤドリノツカサト訓ジテ、暫ク侍リテ待ツヲ以テ名トセリ、）是ハ執筆奏聞セズシテ、口ヲ以テ奏任スルナリ、次ニ顯官擧ノ遷任轉任ヲ錄ス、（顯官トハ外記史、式部丞、民部丞、左右衞門尉ヲ云フ、）是ハ公卿ノ擧ル所ナリ、第三夜ニハ、院宮ノ内官未給ヲ錄ス、（内官ハ卽チ京官ナリ、）次ニ受領ヲ錄ス、（受領トハ卽チ國守ナリ、）若シ守遙任ナレバ、權守卽チ受領タリ、而シテ受領ニハ新敍アリ、別功アリ、（新敍トハ新ニ敍爵シタルヲ云ヒ、別功トハ財ヲ朝廷ニ納レタル等ヲ云フ、）並ニ尻付ナシ、（尻付トハ、姓名ノ下ニ其由ヲ錄スルヲ云フ、）次ニ公卿ヲ錄ス、而シテ大臣ハ別ニ宣命ヲ以テ任ズルコトニテ、除目ノ日ニ任ゼズ、次ニ大間ヲ奏覽シ、次ニ紙捻ヲ以テ成文ヲ結ビ、大臣殿上ニ出デヽ、淸書ノ上卿ニ付ス、（成文ハ、申文中ニ、其官ニ

任ロ得タルヲ云ヒ、其官ニ任ロ得ザルヲ不成文ト云フナリ、次ニ清書ノ上卿、議所若シハ陣座ニ就キ、外記ヲシテ黃紙、折堺、及ビ硯ヲ進メシメ、大間ノ縫ヲ放チ、參議二人ヲシテ各、召名ヲ清書セシム、而シテ折堺ハ紙屋紙ヲ用キル、召名ニハ黃紙白紙ノ別アリテ、勅任ハ黃紙、奏任ハ白紙ナリ、上卿又參議ヲシテ下名ヲ書セシム、下名トハ式部兵部ノ二省ニ下シテ、四位以下ノ任人ヲ召スノ用ニ供スル故ニ此名アリ、次ニ上卿外記ヲシテ放ツ所ノ大間ヲ結合セシメ、清書ヲ宮ニ納レテ、外記ヲシテ關白ニ內覽セシメ、內覽訖リテ返付ス、外記乃チ宮ヲ執リテ御所ニ就キ、藏人ヲシテ奏覽セシム、奏覽訖リテ、上卿外記ヲシテ大間ヲ卷キ、紙撚ヲ以テ結バシメ、其上ニ封ノ字ヲ書シ、成文ト共ニ宮ニ納ル、次ニ下名ノ事アリ、上卿藏人ヲシテ下名ヲ行フベキ由ヲ奏セシメ、次ニ議所ニ就キ、外記ニ命ジテ二省ヲ召サシメ、式部兵部ノ丞、日華門ノ東庭ニ列スルヲ待テ、上卿下名ヲ付ス、二省ノ丞之ヲ執リテ、陣外ニ出テ任人ヲ召ス、次ニ上卿召名ノ宮ヲ外記ニ付シ、參議以下ヲ率キテ廳座ニ就ク、外記乃チ召名ヲ案上ニ置ク、是ニ於テ上卿辨ヲシテ任人ヲ召サシム、辨因テ少納言以下ヲ率キテ版位ニ立ツ、上卿呼デ曰ク、召スト、五位先ヅ齊ク應ジ、六位從テ齊ク應ジテ、各、進テ著座ス、上卿召名ヲ式部兵部ノ輔ニ付ス、輔乃チ丞ヲシテ標ヲ樹テシメ、任人ヲシテ次ニ順テ其下ニ立タシメ、黃紙ノ召名ヲ丞ニ付シ、白紙ノ召名ヲ錄ニ付ス、丞錄乃チ召名ヲ唱ヘテ任人ヲ任ロ、任人拜舞シテ出ヅ、是縣召除目ノ梗概ナリ、

京官除目ハ、又司召(ツカサメシ)除目トモ云フ、司トハ諸司ノ事ニテ、卽チ京官ヲ云フナリ、是ハ秋ニ行ヘルヲ以テ又秋除目ノ名アリ、或ハ一夜、或ハ二夜之ヲ行フ、其儀略、縣召除目ニ同ジ、纔ニ上官、宿官申文、上召使擧、三局史生奏ナキヲ以テ異トスルノミ、

臨時除目ハ、又小除目トモ云フ、縣召除目、京官除目等ノ外ニ、臨時ニ小除目ヲ行フヲ云フ、此ニ復任除目、兼官除目、坊官除目、大嘗會國司除目、祭除目、追儺除目等ノ別アリ、

女官除目ハ、女官ヲ任ズルヲ謂フ、其儀、中務卿補任宮ヲ執リ、殿上ニ昇リ奏覽ス、天皇御筆ヲ以テ任ズベキ者ヲ點定シテ卿ニ賜フ、卿更ニ本座ニ就キ、除目ヲ書シ奏覽シ、輔ニ授ク、輔名簿ヲ執リ、内侍ニ授ケテ點檢セシム、少時内侍任人ヲ率キ南廂ニ列坐ス、中務輔賛子敷ノ上ニ在リテ、名ヲ唱ヘテ之ヲ任ズ、次ニ任人下官ヨリ序ニ循ヒテ退出ス、而シテ典侍以上ハ別ニ留リテ書拜シテ退ク、但シ夫人以上ハ唱任ノ列ニ在ラズ、

一分召除目トハ、一分ノ職ヲ補スルノ義ナリ、一分トハ、公廨ヲ差分スル法ヨリ出デタル名ニテ、國史生、國博士、國醫師等ヲ謂ヒテ、卽チ式部判補ノ職ナリ、因テ式部卿、省或ハ里亭ニ於テ之ヲ行フ、内給アリ、人給アリ、（人給トハ、三宮御給、公卿給、内侍給等ヲ云フ、）諸司ハ司ニ因リテ毎年給、隔年給ノ別アリ、而シテ藏人所小舍人、御書所小舍人等ハ、内給ヲ以テ國史生等ニ補スルナリ、因ニ國史生諸司史生ノ事ヲ言ンニ、國史生ノ人數ハ、國ノ大上中下ニ因テ差アリ、主計主税等ノ諸司ノ史生、及ビ大舍人近衛ノ長上番上等ハ、年勞ヲ以テ國史生ニ補セラル、又畿外ニ住セル諸司史生ハ、國史生ニ準ジテ補任ヲ請フコトナリ、又諸司ノ史生ニシテ、國史生ヲ兼ヌルトキハ、修理職等ノ史生ハ、上卿勅ヲ奉ジテ、式部丞ニ下シテ後ニ式部ニテ補シ、民部兵部ノ史生ハ、其省ニテ直ニ補シ、其餘ノ諸司ノ史生ハ、式部ニテ直ニ補スルナリ、諸司史生モ、其人數ハ司ニ因リテ多少ノ差アリ、而シテ畳達ヲ試練シテ採用スルアリ、宣旨ヲ待テ補スルアリ、太政官ヨリ名簿ヲ下スヲ待テ、試ミズシテ直ニ補スルアリ、本司ノ移ヲ待テ補スルアリ、並ニ式部ニテ補スルナリ、

直物ハ、ナホシモノト訓ジテ、改正スルノ義ナリ、除目ノ時、式兵二省ニ付スル所ノ召名ノ中ニ、姓名ノ相違、文字ノ失錯、官次ノ錯亂等アルトキハ、其月ヲ出デズシテ直物ノ事アリテ、之ヲ改正ス、因テ舊年ノ召名ノ失錯ヲモ、折堺ノ次序ニ順テ改ムルナリ、是日前ニ除目ニ從事

セシ執筆大臣著陣シ、外記ヲシテ勘文ヲ進メシメ、御所ニ進ミ奏聞ヲ經テ復坐シ、勘文ヲ參議ニ付ス、參議因テ勘文ニ照シテ、小刀ヲ把リテ當年ノ召名等ヲ削正ス、此時御所ヨリ公卿給ノ申文等ヲ下サル、大臣之ヲ賜ハリテ參議ニ給シ、外記ヲシテ其召名ヲ進メシメ、又其未給國替等ノ申文ノ合否ヲ辨ゼシメ、次ニ當年及ビ舊年ノ名替等ノ申文ニ據リテ、召名ヲ改正シテ申文ニ勾シ、申文ニ誤アル者ハ任官セシメズシテ、不成文ノ束ニ加ヘ、其餘ヲ成文ノ束ニ加フ、若シ其日小除目アレバ、御所ヨリ申文ヲ下サル、若シ申文ヲ進メズシテ任官スル者アレバ、上卿藏人ヲシテ鳳記ニ書セシム、(鳳記ハ小折紙ナリ)次ニ參議次ヲ遂ヒテ折堺紙ニ書シ、勘文成文除目等ヲ筥ニ納レ大臣ニ進ム、不成文等ヲ一束トシテ硯筥ニ納ル、大臣勘文成文等ヲ留メ、召名并ニ今度ノ除目等ヲ御所ニ進ム、返シ給ヒテ障座ニ囘リ、參議ニ命ジテ舊年ノ召名ヲ放タシム、大臣式兵二省ノ丞ヲ召シ、先ヅ召名ヲ付シ、次ニ直物ヲ付ス、

〔伊呂波字類抄〕(知人事)除目(本朝事始云、天武天皇四年三月、諸王四位栗隈王爲兵政官長、少錦上大伴連御行爲大輔、)

〔運歩色葉集〕(地)除目(任官之事)

〔江次第抄〕(四正月)除目

外官除目、正月九日始儀、見于清凉抄北山等、杜詩批點第六云、秦州見勅目、(勅一作除)又三體詩云、毎日除書萬紙云云、

除目　此二字出於唐書、或曰勅目、或除書、其義一也、除任之義、除舊官而就新官故也、目目錄也、一說縣召任諸國目、故名除目者非也、縣召縣郡縣也、釋名曰、縣懸也、懸於郡也、古作寰、楚莊王滅陳爲縣、縣名目自此始也、今按召召名之義也、任外國官召其人也、

〔史記〕(三十平準書)議令民得買爵及贖禁錮免減罪、請置賞官、命曰武功爵、〇中略諸買武功爵官首者試補吏先除、(集解曰、官首、武功爵第五也、位稍高、故得試爲吏先除用也、)

縣召除目

〔漢書田蚡傳五十二〕丞相蚡〇田入奏事、語移日、所言皆聽、薦人或起家至二千石、權移主上、上迺曰、君除吏盡未、吾亦欲除吏、〈師古曰、凡言除者、除故官就新官、〉

〔五代史劉延朗傳二十七〕帝〇唐廢帝由是發怒、罷高祖〇晉總管徙鎭鄆州、延朗等多言不可、〇中略文遇曰、〇中略不如先事圖之、帝大喜曰、術者言、朕今年當得一賢佐以定天下、卿其是邪、乃令文遇手書除目夜半下學士院草制、明日宣制、文武兩班皆失色、

〔運步色葉集同〕縣召〈召諸國之輩、被任官之事、〉

〔下學集下態藝〕縣召アガタメシ〈召諸國之輩、被任諸官也、〉

〔羽倉考一〕縣召除目　召ハ除メスノ借訓ニテ、官ニ拜スルヲ云、諸國ノ官ヲ除スルガ故ニ、郡縣ノ官ヲ除スルト云意ニテ、縣召除目ト云、春行ハルヽ故ニ春除目トモ云、

〔類聚名物考政事十一〕縣召　あがためし

京官にあらざる遠國郡縣の官人を召て、叙位叙官あるをいふ、正月に恒例に行はるゝ事也、

〔倭訓栞前編二阿〕あがためし　縣召は外官の除目をいふ、京官に對したる名也、正月十一日より十三日まで行はるゝ也、

〔蟬冕翼抄〕春除目〈又云縣召除目〉

〔百寮訓要抄〕京中のもろ〳〵の官をば内官とも京官とも申也、諸國の司をば外官ともあがたとも申也、〇中略縣召には諸國の官を任る也、

〔公事根源正月〕縣召除目　十一日

縣召には外官をむねと任せらるゝ也、外官とは諸國のつかさにて侍る、此中をあがたとは申也、外國の人を召て任官をさづけらるれば、か樣に名つくるにや、其作法、執筆の大臣參りて御殿の弘庇にて事を行、申文など色々に多侍りて、大間にかくに、尻付とて、いとむつかしく、執筆の難儀

にて、家々の口傳、流々の故實共、さま〴〵に侍事にこそ、大かたせちゑ、官奏、敍位、除目をば、四ケの大事とて、有職の家には殊にさたするなるべし、名替、國替、名國替、秩滿更任、任符返上などいふ申文、色々數を不知、おほよそ此除目につけて可知事どもは、十年の學にもきはめがたく、百丈の紙にも書のべがたし、されば先達に不習しては輒つとむべき事ならんや、然ばとて、後見いるかせにして、みづから捨事なかれ、式日は十一日より始りて、十三日まで三ケ日なり、

〔年中行事歌合〕七番　右　除目縣召　　新中納言〇冷泉爲秀

八隅しる君がおさむるあがためしめぐみにあへる名こそ聞ゆれ

右縣召除目と申は、外官を皆と任せらるゝ也、外官とは諸國の司にて侍り、田舍を縣とは申也、外國の人を召て任官を授けらるれば、ケ樣に名付侍にや、京の除目と申は、京にある諸司を任せらるゝ也、是は田舍人の官を皆とし給なるべし、

〔西宮記正月下〕除目

有議政者、著議所行、參議執筆、有所勞者、以陣座爲議所云、有所勞不著議所、此方仁、諸卿向宮所、攝政在廬中、陣執筆文、內覽、除目後、攝政下公卿給、天德四年正月除目當夜、衞府公卿帶弓箭候議、

大臣奉勅、仰外記及辨、一人、大臣於陣仰、外記自圖書寮、人所請大間料紙、當日大臣已下自陣著議所、以內覽闕、立大臣、藏人召、藏人頭於御前、定中文等、外記取筥文、大臣到射庭參御前、下納言執筥、同敍位儀、諸卿座定、大臣依召著圓座、天慶五三廿九除目、左大臣著御前座、大將著座候執筆、大臣依御氣色、給筥以闕官入筥、敍筥文入大間、奉御簾中、復座、覽了返給、復座、正笏候氣色、勅云、早久、開大間、給筥任四所、內豎、十人之中頭伊勢、內豎召、春宮召、任目、大舍人、三人許、延長三年任五人、文殿、校書殿五六人之中、延長五年四人、七年二人、進物所、許六人、已上頭執事外、有本所大少屬、及官人代、所々渡人敍位窮者、依姓任掾目、緣以內舍人、內舍人、三人、散位中、延喜十五年藤原宗任內匠允、內舍人勞者、文章生、三人、北陸、山陰道、太宰、散位二度掾、三度介、京官召、及候二所者、任內官、彈正、勘解由、八省丞、藤原有述任縣部助、文章生勞、以上勞帳勘入筥、任兩三人、後大臣奏、置筆執筥、可取遣院宮御申文、由勅許、大臣召

參議、參議參進、居大臣後簀子、大臣仰事旨、(召當年給、內奏)參議稱唯、出殿上侍召將監、仰(於議所可仰)將監歸參進御申文、(宮司加封字)取集進大臣、大臣進御簾中返給、隨闕依仰任、院宮已下王卿給、當年給、一々任之、(不奏名替)餘申文隨趣注端書、以參議下外記、參議著孔雀間、召外記給文、外記取目錄、下史生令勘合否、誤文不上、有事問者追可上、

〔北山抄一正月〕九日始議外官除目事。。。。(或節會後擇日行之、召仰後無政、不奏東宮所云々、子細在別)

先一日、大臣奉勅召仰外記、(其詞云、自明日可始除目議、仰宜所司云々、)藏人頭仰內藏寮、令設饗饌、(大炊寮從官仰之云々)又催取所所勞帳奏聞之、當日著議所、參御前等儀、同敍位儀、(執筆大臣、抄出每年給、四所籍、并道道擧、所々年官及被闕例等、又撰闕官寄物等、隨身之、欲參上時、仰外記令入硯筥、臨時欲退下時、以侍臣令給僕從者、入宮返給時、依爲外記拔置也云々、)大臣依召著御前圓座、仰云、依例行之、大臣稱唯、揖笏取闕官帳入宮奏之、(九條大臣加奏秋議帳者、抄及年々私記無其事、)覽畢返給、復座端笏、先奏可給所所勞帳者之由、隨氣色開大間任兩三人、(始自四所籍、九條記云、始自內豎所、或記云、始自三局史生云々、非也、京官除目、先三省史生也、)自奏請後召參議、仰可取遣院宮御給名簿之由、(居簀子可奉歟、)參議著議所、召左右近將監奉遣之、(近例、於孔雀間仰之、侍從參取集名簿、一度奉大臣、大臣不開封奏之、返給、隨仰書入、)院宮舊年御給、并親王以下遙給、年給申文、端書可勘之由、(遙給書注○中略一本可勘當不、未給可勘給不、名替等可勘合不、納言二合者、可勘二合年、)召參議給之、參議令著孔雀間座、計枚數下、外記隨其袖書、勘注國次、卷重返上、大臣見定、取其一類文總奏之、書載大間、若二人已上申一國、有難自由事者、別奏隨仰、親王大臣二合、(大臣隔年)不勘給之、納言者隔四年給之、以子息申京官者、隨狀給之、參議及故者不許、議畢大臣卷大間、次卷收雜書畢、以編紙結大間、著墨入宮、(成文皆入此筥、所所勞帳者撰勾、返給外記、)進御簾中、起座退出、(大納言爲執筆者、即執硯筥、從簀子敢可退出歟、近例參議撤之、)竟日有種々擧、(外記史、三省丞錄、衛門尉、以自餘下給申文擧申、每國書兩三人、加申文返上、一司有二人以上闕者、有其用意、加出納者不載之、近例不下給錄申文、國不擧申、大臣取擧奏之、然後定任、大丞大錄之闕、先有轉任、每有遷官之者、注付本官於大間也、)至于受領、不下給申文、納言以下就議所、外記每人奉大間、(盡取解由、舊吏新敍、第一者等同奉)之、一國書一兩、署名之下書上字、加表帋紙封、封書名上字、參上一々進奉大臣、大臣不開封奏聞、事畢奏聞、大間(入宮)加入成文、取之退出、(大臣若有故障、於殿上傳授納言、令行清書事、近例預定其人、召御前給之、或記云、大間入硯筥、大臣者直退出、納言以下撤之云々、非也、)

此日仰外記、令誡候二省、〈式部、兵部、〉給看物於内記所、〈請書等儀在側、不參、他上卿行之時、大臣初日以後有障、大間書奉勅人也、〉或於議所行之、參議執筆、〈兼大辨、若爲之、〉議畢、大間成文等入筥、進御所、付藏人退出、後日從議所參上、給大間、還着、攝政大臣、或於直廬行之、弁奉筥文、奏大間、并清書如恒、

〔北山抄〕〈三拾遺雜抄〉除目〈請書及官外記儀在側、或記、執筆所闕、并續闕作法、議所除目儀等、大略又見年中要抄、〉

大臣着左仗座、議所装束辨備畢、〈弁申之、〉大臣以下起座、出自日華門、着議所、〈第一人入自南面、右大臣以下入自東面、大納言爲上卿、〉〈之日、職可入自東面、臨欤、〉少納言弁相逝獻盃、〈依年例一巡行、〉藏人來召、〈看例立召、近代起召、〉大臣召外記、仰可取筥文之由、外記退還、相率參入、取筥文等、列立南庭、大臣以下經階下、到射場、大臣立軒廊西二間、納言立射殿東砌、參議立南砌、〈東上、〉外記相從立東廳、畢大臣參上、着御前座之後、第一納言入自東間、立軒廊戸間、外記進跪納言前、納言插笏取筥、入自右青璅門、進自御簾下、置大臣圓座西邊、左廻退、自本道着座、次々如之、〈公卿經南殿北廊、納言以下立射殿下、立殿東、内外記經南殿下、立射殿下、〉不取筥文之人、直進着座、〈弁上殿、公卿入自左青璅門、〉大臣奉召、微音稱唯、進自簀子敷、着御前圓座、〈執筆大臣、抄出每年給四所籍、并道々擧、所々年官、及諸國例等、又闕官帳、〉奉仰稱唯、置笏先取一筥文、書加入次筥、入闕官帳、〈在硯筥、〉插笏引硯筥於右、推去次々筥於左、取闕官寄膝行、入御簾中、少卿把笏候、〈不出座本座、〉返給候座、插笏候天氣、隨仰置笏開大間、移置座右、〈廣置膝前、〉插笏奏請、先任四所籍、〈自内豎所、外所、一所五人以上、七八人以下、多任伊豫掾云々、此外三所二三人以上、五六人以下分任、諸々一分者、其臨執事人任掾、自餘任缺、大舍人寮爲又依例、近代多任掾云々、〉兩三人者數畢、令召院宮御給名簿、〈一院不御坐之時、只可申宮々、宮不御坐之時、可申其宮、〉次下給内給、院宮當年御給、公卿給等請文、卽除納言二合文、撰留當年給、〈遙上任者、又可下給、〉其外請文、各端書付可任之趣、下給、〈親王給可勘當否、納官二合可勘二合年名、〉〈皆國皆可給、可勘二合、不勘不給云々、〉四所任畢、内舍人、〈三人、多任東云々、〉文章生、〈三人、多任北陸、山陰、西海道云々、任京官者、雖外國、其除京官、猶任三人、或無任京官、任二國、〉〈人給内舍人文章生等、近例次日、公〉院宮御給、并内給、親王公卿、尚侍女御等當年給、〈近例下給之後、依次第卷重請文、〉任之、一日議訖、封大間、納筥、〈成文本自入大間筥、不開之、每日則結引、次々日更〉大間入筥、加人成文、〈自御前所下給申文、〉〈等、不必依次、未定間、〉進之、

納本宮下給、至于諸道擧、留面加成文、藏人所進口勞一帳、又副成文返上、議間成文、不可成文可定文等、能分置、不令混雜、院宮當年御給、據目一人任擧、一人未任之間、請文之表付點爲驗云々、次日隨勘上、近例國次卷重奉之、任二合名替等者、納言二合隔四年給之、大臣隔年不必下勘、親王并尙侍女御无年限參議、奉五節後年給之、納言雖非二合年、奉五節者又給之者、次諸道擧、北堂儒據、後明經據例、多勸學院非學院等據年官、算明法依姓隔年云々、并所々御廚子所、御書所、畫所、大歌所、三局史生、上召使、殿上、藏人所、[illegible]以上年官所、所上預、侍從所、大舍人等、其例在別、次近衞將監去年敍位者、任分外衞可勘年限、但擬藏人擬非達使者擧任云々、式部民部丞、外記史、當年敍位者、式部、民部、任權守、外記史任介、但非本官勞敍者、不必任之、弁少納言敍四位、及諸王又任國々權守、凡從顯官敍位補替者任官也、弁官任京官云々、次親王次第并參議以下兼國、國外記勘申給之、次京官、外記史、式部、民部、敍貢尉等、下給申文、先令奉公卿擧、其外記史次第轉任、如大丞大錄、又先以少轉大、其所補議人、不依補任轉次第、只依日之先後、勘注次第、國司爲善、但式部民部依起請奉轉任奏、不依年勞、依恪勤、可敍外位者、不任入書丞云々、次受領先書別紙、公卿擧奉擧、一定後移付大間、等也、覺日事畢、大間入日奏之、入筥返給、加入成文、取之退出、據政之時、大間筥入成文奉之、覽了退出、

〔江家次第四正月〕除目雖雜事見他家記、仍不記之、

除目、杜詩批點第六云、秦州見勘目、注一、又三體詩云、每日除書懸滿紙云々、縣召、錄、郡縣也、釋名曰、錄、懸也、懸於郡也、召召名之義、外官除目、九日始議之由、見淸涼抄、北山抄等、

大臣參上著座　納言以下執筥文〇中略

執筥文之人、到於御前間南邊、膝行三度置筥、故經任歸未膝行前兩三步頗屈行、宇治殿不請云云、膝行還拔笏左廻云云、故顯基房

拔笏後一揖云云、他人不然、件退時傾笑方退、致下臈用意也、經簀子敷著座、

公卿等著座畢、參議雖一人著座者有召、不必待參議等著畢、主上引寄御簾覽公卿座定否、次被仰云、此方上臈大臣微音稱唯起、揖經簀子敷著圓座揖、次大臣又仰云、若右乃於保伊萬不堪君、或加等字、大臣經簀子敷著圓座畢、主上被仰云、早久、執筆大臣微音稱唯、小揖置笏於左、關白候時、大人奉仕執筆、取移第一筥文於第二筥、只留闕官帳、取第一筥、推下硯筥置於其跡、更開見件闕官帳、推遣硯筥并二三筥於座左方、筥二合程許推下也、硯筥跡相加二合程也、關白不候時、推硯筥於右方、推去次々筥於左方、其間爲跡、關白雖不候、敎其座時、猶推於左方云云、搢笏取闕官帳筥膝行、以左手褰御簾獻筥、了退拔笏候、寬弘抄曰、不正座云云、猶不到本座歟、主上覽畢返給、以令推攝御簾爲膝、大臣搢笏故實忠插之給之、退候本座拔笏、引硯匣於本所、以闕官筥置本所、不返入初取移之文、次々筥者、以笏可挽寄、端笏候、主上被仰云、早久、大臣置笏、取大間取懸紙紐卷之、置硯筥硯下方、開之、條置座右、長二尺五六寸許、條置、奧二三枚許、不搖擧、堅卷爲軸代、於事有便、

云云、四條大納言說、可貼笏長云云、是院人是治等御役近參時、以申文懸紙一枚引建、仍不覆、有圖云云、然而宇治殿、并源相府說、猶所此様云云、

繼笏候氣色、縫入圓時、自袖內取巳上、向右方持之、又左手不離右、右手不離左、任人亦同、四條大納言笏長、式部卿官記云、笏長一尺二寸、上廣二寸七分、下廣二寸四分、厚二分、長二尺五六寸、家說二尺五六寸、或二尺三寸、或一尺七八寸、皆所用也、此外有二說、

主上被仰云、早久、大臣置笏、先取內豎勞帳任之、先取勞帳、內豎頭某姓某丸由例氣色、可許後、開寄物見之、中可任官、執筆書於大間、畢置筆於筆臺、若不遇匱時、儲外題矣、次讀申文、更取勞帳名上懸勾、次寄物書點、所任官也、任之　以下作法皆同

先內豎頭。。。多任伊勢者美濃掾、

伊勢 正六位上日下部宿禰偉安 內豎所頭云云

次執事 作掾云云

權掾正六位上某姓某尸某丸 內豎所執事勞

次同大膳喚

和泉 權目正六位上近江朝臣元吉 內豎大膳喚

以上三人許任畢 讀申等作法同上、下亦同、

次大臣取笏奏云、院宮乃御給乃名簿取留遣、左年、若院不御坐時、可申宮、者一宮坐時、可申其宮云云、勅許之後、大臣召參議一人、對馬曾召之、若有近中將爲取、補臣、若左大將爲以補臣事賢也、被召者微音稱唯參進、若有路座、經簀子數候大臣後、上古居長押下、近代居長押上、大臣仰云、院宮乃御申文取留遣也、參議微音稱唯、起出於殿上、尋件申文等、可遣近衛將監云云、近代隨大夫判官等隨身、隨件物被付、承件御之參議、不持參件申文、以前不參御前云云、或參院宮御申文遞給之、次下給、次自御所下給申文等、各有封署、內給、當年給、并未給、名替、國替等也、以上皆猶書注內給、藏人所書也、

院宮未給 猶書可貼給不

院宮名替 可貼合不　國宮記可貼任符出不云云

院宮國替 可貼合不

院宮內官未給（可勘給不）

院宮更任（可勘合不）

院宮任符返上（不下勘）

以上院宮給也、東宮准后在此中、（女御尚侍二合、非准后入也、留書國目、面北山抄拾遺抄、每年二合過親王、不可然歟、可勘之由載之、禱書云、近來二合、每年依別宣旨云云、）

公卿當年給（不下勘、可勘巡當不、家說可勘巡年、親王巡給、別巡給等下勘之、別給不下勘之、）　親王當年給在此中、袖書可勘巡當不、

公卿未給（袖書可勘給不）

公卿名替（可勘合不）

公卿國替（可勘合不）

公卿更任（可勘合不）

公卿任符返上（不下勘）

公卿二合（可勘二合年、大臣二合、不必勘、參議不二合、只勘納言以上公卿給也、男女親王并女御尚侍等在此中、）

大臣又推下硯筥、（關白被候座時、乍入御硯筥進給關白、仍無執筆推硯之儀、關白不候時、不入置給執筆云云、）即置於硯筥下方、撰出可袖書申文、置硯筥左方、（見上）　次當年給等、依人次第卷重其請文、（或不卷重、只置云云、猶可卷重歟、置硯前、）

次任內豎大籍奏時

大和少目正六位上小治田宿禰廣彙（內豎大籍奏時）

次任內豎別籍、（上古院宮崩後、以本宮人被寄、）四所巡籍是也、（若前坊東宮院一條院等之類）

相摸少目正六位上私宿禰信元（內豎天曆籍、或不注內豎字、可尋、）

以上五人許任畢（內豎若無顯執事者、加任別籍二人許云云、）

次任校書殿頭（多任河內周防紀伊等掾）

權掾正六位上多治宿禰延行（校書殿）

次任校書殿執事

（常陸）大目正六位上太秦宿禰正忠（校書殿執事労）

次任校書殿本籍

（越中）權大目正六位上物部宿禰有富（校書殿本籍）

以上三人許任擧

次任進物所執事（多任攝津少目甲斐權掾）

（甲斐）權少掾正六位上多治比眞人興重（進物所執事労）

次任進物所數位籍

（丹波）權目正六位上高向宿禰行利（進物所數位労）

次任進物所別籍

（但馬）權大目正六位上文室眞人重光（進物所一臈院籍）

以上三人許任擧（減四人）

次任大舍人番長籍（依姓、闕、延代多任、兼、治安二年實資執筆任目、）

（參河）權大掾正六位上伴宿禰延雅（大舍人番長籍）

次任大舍人本籍

（伊豆）權目正六位上大宅眞人武恒（大舍人本籍）

次任大舍人別籍（四所籍者、西宮云、以上顯執事外有本所大小籍及官人代所所識人數位籍者、依姓任掾目、）

（武藏）權少目正六位上紀朝臣安成（大舍人前朱雀院籍）

以上四所籍者任擧（件籍等、雖勾、闕巡入、於本寬、是入第三寬也、）

若有三局史生申文者、此間任之、近例秋任之、播磨、備前、美作、讃岐等目云云、

次任内給○○○○(掾二人、目三人也、)

近江 權大掾正六位上貞朝臣時晴(當年内給)

越前 權大目從七位上藤井宿禰春武(當年内給)　等類是也

任内給二人許之後、諸未給、國替、名替等袖書畢、次召參議一人、(如初儀)參進之後下給可勘文等、(不解書)參議退下向孔雀間、令外記勘之、次任内給畢、若此間參議持參諸宮御申文、(取副於筥、來置筥進申文於大臣、畢取筥揖、左廻退去、不進院宮自此被申、)大臣取申文等、亦推下硯筥等進奏、(不入筥蓋、筋奏之、端筋候、或卷重或疊置云云、)次主上覽之返給、(引懸紙留御所、不引懸紙、)大臣給之退本座、依人次第卷重請文、(並於硯筥右方、)次次第任之、(每所舉申文申之、其後任之、任畢後引裏紙入筥、)

大掾正六位上錦宿禰信高(昭明門院當年御給)

大掾正六位上源朝臣助光(皇后宮當年御給)

大目從七位上紀朝臣今延(東宮當年御給、前例東宮無御字、近例有之、)

目從七位上民宿禰末光(祐子内親王當年給)

掾正六位上紀朝臣重吉(女御藤原道子朝臣當年給、前女御源朝臣基子當年給、)　等之類也

院○宮○給○、掾一人、目一人也、(若有雖書者、折上方、家說折下方、入第二筥、或入硯筥板上、院宮御給一人任了、一人未任、假令院宮御申文中一人被舉二分代之時也、家說申文上突點入同官筥、或加成殘中文也、)

任院宮給畢、但院宮給中、若一人任畢、殘一人未任時、今夜除目畢者、折請文下方爲驗、以紙捻結之入筥、若有懸書者、折上方、(入外記筥下之)　次任公○卿○當○年○給○、(親王當年給在其中、袖書可勘返當不、)　所任之束短冊等、入硯筥下方、

美濃 權大掾正六位上伴朝臣貞正(式部卿親王當年巡給二合所任、或無二合以下二字、)

但馬 權大掾正六位上紀朝臣貞枝(無品䄂子内親王當年給、二合所任、)

駿河少掾正六位上石作宿禰藤並左大臣當年給、二合所任、

參河少目正六位上玉作宿禰安國太政大臣當年給

讃岐大掾正六位上伴朝臣爲重民部卿藤原朝臣、依去年獻五節舞姫、二合所任、

伊豫大掾正六位上內藏朝臣茂忠權中納言藤原朝臣當年給、二合所任、

土佐目從七位上倉橋宿禰久延右衞門督藤原朝臣當年給

目從七位上雀部朝臣豐正參議俊明朝臣當年給

備中大掾正六位上紀朝臣今名參議公勝朝臣、依去年獻五節舞姫、二合所任、等類也

親王目一人、一分一人、式部卿加一分二人、毎當巡年、二合不任目、

第一親王、並后腹親王預別巡給、其別巡給、毎一代各有別巡給、關白殿并尹朝臣說歟代代相並預別巡給、定儀說也、親王目一人、一分一人、寬平元年宣旨、二分一人、一分一人、或說云、式部卿加一分二人云云、第一親王給主第一親王別給、毎年中二合云云、其別給、巡給、別巡給、皆象宣旨、依中二二合、后腹親王有歟者、不論男女、作巡二合、謂之別巡給、若有二人者、第一中別給、第二預巡給、一人隨任巡、故不預別巡給、其別巡給、毎一代、是謂巡給也、一說毎一親作巡、儀令有四代親王名、隔三年當巡、近代用之代相並預別巡給、是亦巡給一說也、毎親王作巡、但令有男女親王十人者、隔九年當巡、三合、合目一人、史生一人爲二合、中三分掾也、亦合目一人、史生二人爲三合、中四分介、永觀二年三條關白賴忠出三合中文云云、

太政大臣目一人、一分三人、或云親王毎年二合、大臣隔年二合、

左右大臣目一人、一分二人、大臣或三合任介云云、但未見其例、

以上隔年二合依候座不必下勸

二合三分、主典式云、凡國司總分公廨准法者、大上國長官六分、次官四分、判官三分、主員二分、史生一分、中國無介、則長官五分、下國無掾、則長官四分、員外國者、各准當員、

納言二分一人、一分一人、四年一度二二合、獻五節明年不待巡二合、

參議二分一人、一分一人、獻五節明年外、不二合、大臣以下參議已上獻五節明年必二合、參議五節二介、自安和二年給之、並以二合公廨、爲當五節之用途也、又納言已上獻五節翌年、自然當巡年二合名、不可中五節二合、其故者、安和宣旨云、自今以後、大臣已下參議以上、今年獻五節舞姫、其明年給餘、許二合、但納言以上、若當二合年巡者、立爲恒例云云、或以五節二合爲未給、追中請之、更無謂事也、其故者、納言毎年給二分一人、一分一人、也、以此爲二合、中巡年給了、此外無餘分故也、

以上毎任人、置笏擧申文奏聞、一書載、二置筆、三讀申、四懸申文勾入筥、五著寄物點、六

奏聞申文之儀、先當左腋開見、後申推帖、如辨官奏書儀、尚侍女御二合、年限無之、依宣旨預二合也、寛平九年六月十九日宣旨云、尚侍藤原朝臣、朕爲重臣毎勞、仍毎年別給掾一人、以爲永例、

尚。侍。　女。御。並目一人、一分一人、二合、年限無之、

成文懸勾事申闕官者、點其成官、若申正任權者、注權字、任他官者、又書付其官、付點懸勾、納本筥下給、

所所勞帳謂外記所進之勞帳也

諸道擧自所加成文、諸道擧加成文、中家不立籤、故任擧加成京、將家立籤、故返入本筥、

藏人所瀧口勞帳又副成文返上

國替并遷官者以其闕官注加大間、又注寄物、

京官等又如之　僉數官者若去一官、大間取闕、

初夜議擧

主上被仰云、今夜者加波加利、近例不被仰此詞、　大臣笔大間、加懸紙、加封、　次結固成文、結之上引量、引結目上并成文等也、堅筆細書之、横筆結時不快云云、　已上入一筥進之插笏進之、如初議、　所下給申文等返上之

寄物文取之、插著懷中、出殿上、令侍臣給僕從云云、近例不然、　件寄物近例如本入硯筥、寄物入硯筥、或加成殘返上御所、一說也、

第二夜

大臣參上著座　納言以下執筥文籠有四合、今夜自御前下給夜前筥一合、仍有五合、　公卿等著座畢　主上覽公卿著畢由

次被仰云、臣那多仁、　次上臈大臣參進　次件大臣仰云、某乃大臣、　次大臣著畢

主上令下夜前筥給入大間成文等、　大臣置笏推下筥等、　次膝行指笏給之以左手賜之、　復座　次取直

硯筥於本所、搢笏候、　次主上被仰云、早久、　大臣披大間引表紙、並作法等同夜前、　搢笏候大間上所結之紙縒以刀切之、入硯筥之

力、職下　主上被仰云、早久、　大臣置筥、次第任之、如夜前、若有夜前所下給院宮公卿給等勘上文者、先任件文、參議公卿座定後、更不待召直參進、件文、未進之前、參議不著座、　大臣取之置硯筥邊、未給置硯筥之、　國替、名替、置同筥裏、　國替人次第卷重、名替道次第卷重、先任、未給、

播磨國

大掾正六位上紀朝臣長盛院去年御給

美作國

少目從七位上石作宿禰、、攝政(藤原師實)去寛治元年給

次任國替、

未給任畢後、以國替、亦置硯筥北方、件申文、外記又次第卷重之、亦一一放之申上、可許後任也、置筆讀申之後、懸勾申文、入成文筥、　爾三度以上國替者、亦書最後人歟、

伊豆國

掾正六位上金刺宿禰爲頼停二前侍藤原朝臣眞子承曆元年給二合所任、其前掾上毛野高平所任、

權掾正六位上伴朝臣爲重停左兵衞督藤原朝臣承曆二年給、依獻二五節舞姫一二合所任上總大掾大岳眞晴所任、

是名國共替之書樣也

尾張國

掾正六位上大江朝臣滿長還二上前常陸大守昭平親王正曆五年進給二合、伊豫掾讃岐爲恒任符所任、

是任符返上國替書樣也、不下勘、仍或去夜任之、

大隅國

掾正六位上藤原朝臣篤孝前太皇太后宮永祚二年御給、伊豫掾藤原智隆依不給任符秩滿代、

是年限多過書樣也

權掾正六位上小野朝臣信重（停齋院承暦三年臨時給、豐前掾伴輔長所任、）

是臨時給國替書樣也

伊豫國

大掾正六位上民宿禰友武（停内大臣延久二年給二合所任近江少掾同友武改任、）

是不替人而替國之書樣也

少掾正六位上清原眞人今富（返上左大辨藤原朝臣延久二年給、依獻五節舞姬、二合所任備前大掾同今富任符改任、是國替也、）

次任改少掾任大掾申文（入件束）

周防國

大掾正六位上金集宿禰磯安（權中納言源朝臣（經信）永保元年給、二合所任改權轉正、）

伊豫國

大目從七位上越智宿禰時任（民部卿源朝臣（經信）永保二年給、改少轉大、）

是改少掾轉大掾之書樣也、或書云、停少字轉大、

次任更任。

土佐國

大掾正六位上日置宿禰忠友（權大納言藤原朝臣永保元年給、二合所任刑部吉安、不給任符、秩滿仍更任、）

是得替更任、他人申任同官之書樣也、

次任名替。（先可任未給云云）

件申文、外記依道次第卷重之、乃執筆一一放之任之、不奏事由、不讀申、書付之後、勾申文入宮、

故源右府〇（師房）被示云、延喜御時、時平大臣奉仕除目、名替申文任之、主上〇（醍醐）被尋仰云、何文哉不

奏任之云云、大臣申云、名替申傳料、顯有口惜之氣、主上令驚給云云、

相摸國

椽掾正六位上秦宿禰連正〈停承暦三年內給佐伯網雄改任〉

上總國

大掾正六位上藤原朝臣致亮〈停二條院承暦三年御給清原正任改任〉

近江國

大掾正六位上紀朝臣有松〈停東宮去年御給菅氏光改任〉

少掾正六位上苅田宿禰信正〈給子內親王延久三年給、山背正忠不給任符轉代〉

是名替年限久過之書樣也

常陸國

大目正六位上葛井宿禰宗時〈停上右衛門督源朝臣承暦二年給三田吉綱任符改任〉

是任符返上書樣也、任符返上不下國、仍夜前多任之、

陸奧國

介正六位上身人部宿禰如光〈停左大臣承暦三年臨時給紀久達改任〉

是臨時給名替書樣也

權少掾正六位上雀部朝臣員遠〈停故大納言藤原朝臣能長康元年給二合所任、廉讀光親改任、所任二字或不書、然而小野宮大閤有之、〉

播磨國

權大掾正六位上大友宿禰友成〈停故式部卿敦康親王寬仁三年給源具友改任〉

是堯辛公卿名替書樣也、但大臣者、雖薨後猶不可書名、

次取文章生勞帳任之　三人〈或二人、是有例也、或任京官者、國司・外國云云、〉　多任北陸道、若北陸道無闕者、任山陰道、或又

任西海道、

故源相府被仰云、件三道、唐人幷渤海等異國來著之方也、仍其國國置習文法之輩歟、

越前國

權掾正六位上大江朝臣貞良（文章生勞）

肥後國

權大掾正六位上中原朝臣某（文章生勞、或二人云々）等類也

次取內舍人勞帳任之　三人（任坂東掾、件東海東山道多識馬之者、仍以練弓馬之者用之歟、）

上總國

權大掾正六位上藤原朝臣忠信（內舍人勞、或不書之、）等類也

次任上召使（件申文在硯筥硯下、）

官式曰、太政官幷左右辨官史生召使等、每年一人除諸國主典、召使拜五畿內、志摩、伊豆、飛驒、佐渡、隱岐、淡路等十一ヶ國、

又云、式部、民部、兵部等史生、每年一人任諸國目、

又云、內記史生勞滿十年者、准太政官史生任諸國目、

次任諸道擧（件擧以道年爲先）

紀傳　明經　以上每年任

明法　竿　以上隔年任之

件擧等雖在外記筥、留加成文、

次任諸院擧（諸院擧、勸學院儒者、閑院左大臣（冬嗣）申立之、以藤氏學生請任諸國掾、奬學院儒者、延和二年閏十二月、源氏公卿大納言高明以下、申請當院學生、准勸學院例可預官班之狀、以源氏學生請任之、或雖非源氏、以藤橘之外儒士被擧之、此外加學館院、爲三院、學館院者、橘氏諸兄（諸兄二字恐衍字）公右大臣申立之、以橘氏學生任之、爾來氏長者擧達之、）

勸學院　奬學院　以上毎年

若依前所任之者被改者、大間注其、并所載勾之申文撰出、而勾傍可注生字、

宇治殿御說、除目者、以注其若勾引等爲證、頗可有之事歟、

次親王參議以下兼國。

令殿上辨召外記進諸文、辨取勸文進之、(不入筥、執筆或之、他文亦同、)大臣執之奏覽、返給之後、一一任之、(臨任勾勸文、近代或不點勾、只責小點、不待御注載字、)　參議(任權守、)　裝束司辨(多任美作介若權守、)　少納言(多兼紀伊權守、)

自餘例等皆具見勸文、五位已上兼國、皆無尻付、(皆書位署載字、)諸道得業生入件勸文、(有尻付、又不任西海道云云、但不可盡其員也、)

能登國

掾正六位上惟宗朝臣茂經(明法得業生)

越中國(文章得業生、多任北陸道山陰道云云、)

權掾正六位上高階朝臣忠副(文章得業生)等類也、件勸文任畢後、加大束申文返上之、(不請成文、)

次又令殿上辨仰外記進轉任宿官勸文、(宿官勸文、載北、轉任勸文載南、)辨持參、執筆不奏聞、但以闕奏任之、

先宿官。(今年叙位、依本所勞給爵之者也、件勸文等不載勾、或有請加成文之人云云、)

藏人　式部　民部(以上任諸國權守、)

外記　史　撿非違使(以上任諸國介、)

外記史多任西海道、使者任坂東、此只如内舍人文章生等外國之心、

近衞將監、去年叙爵者可任介、近代不必然也、

御厨子所膳部(同前)

出納兼國　自御所以申文被下、(多任近江掾、)

次令公卿擧顯官。
外記　史　式部丞　民部丞　左右衛門尉　以上申文等作付短冊下給、執筆見之畢如元結之、
目第一大納言、納言進取之、次第見下至參議座、還定一闕三四人申文返上、至大納言座更返下、令
參議書一紙、副還定申文返上、（有短冊所還之外申文、還參議書之插書儀中、）
書様（不注戸）
外記（有一院主典代申文、不入擧、副上本官可擧進者可入之、）
惟宗某　津守某　佐伯某
史（當擧史者、書外記名、下注外記字、他傚之、）
酒人某　坂合部某　家原某
式部
藤原某　橘某　大江某　源某
民部
平某　高階某　藤原某　橘某
左衛門尉（志中轉任入擧、或副上之、帶刀長不入擧、只副上申文、）
平某　藤原某　三善某
年月日
入件擧狀之人、依本官次第書之、
其次第
省丞　寮助　司正　臺忠　職進　寮允　司佑　省錄　臺疏　職屬　寮屬　司令史　判事
准之

被擧者

外記　諸道成業者居諸司者　諸司三分　二分者任例希有民部錄任例一兩有之　藏人所出

納學成郡時闕學儀定　高學　經坊官出納之者多任

史文章生任史、往古以文章生一人、爲置外記史中、若有其闕則任之也、但無本官者不可擧之由見春玉抄、無本官時、以外國散位之文章生任之、

式部錄　民部錄　勸解由主典　撿非違使道志　歷文章生居諸司者依例　諸道成業者　一

上擧闕時　一院主典代不入擧闕上　出納不入擧

若有文章生闕時、無本官外任散位者、文章生初夜、外國終夜、任史有其例、外記又同

式部丞

兵部丞一﨟　公卿子孫二合爲諸司助者　候殿上諸司助者三分　大業者居諸司者成自諸國掾任雅材、

實範、實政、業平例、又文章生居諸司者依例、

民部丞史子不任云云、園仲後被任知例、

八省丞　諸司助　彈正忠一　勸解由判官一　歷文章生居諸司者依例

左右衞門尉

諸司助允以上歷紀傳成業者、有文章生、　兵衞尉有年勞者　前坊帶刀長不入擧闕上之　同騎射第一手坊官除目

時任之　本府道志撿非違使　馬允成功者、他諸司又同、　本府督請奏

天曆間、此外入擧者、

兵部丞諸司四分三分、塙儀式者、　大藏丞自諸官不任　式部錄　民部錄以上諸司二分中、堪力者多依本司奏、　近代不擧

次任轉任。

以少任大　以權任正也　件顯官外記史式部民部等也　不讀申、撚尻付、　件轉任成第三夜任之

次主上被仰云此夜只且　次大臣奏、大間加封、如夜前　成表紙以端爲奧封之、爲不令混夜前封

墨也、次結今夜成文等（有說々）一者不解昨日結緒、只以今夜成文入同筥、事畢解昨日成文、加今日成文、更以他結之、引墨如昨日、但今夜成文、更頗加驗云云、（此說爲勝）一者不解昨日成文、以別緒總上結合、引墨、一者以紙撚續延昨日紙撚、彼結隨任指加、（實資公說）

次獻大間成文、如昨　次退下　故隆俊卿曰、第二夜、漸被任諸司二分等云云、凡除目者自下及上歟、

衆國勸文（外記自外進之、懸勾於端文、不注闕）

　辭退者替　某姓某丸辭退替　不仕者替　某姓某丸不仕替

第三夜

　大臣以下參上作法已下、除大間作法已上、並同前夜、今夜被任者無定、唯隨當任之也、

諸宮內官未給

　雅樂寮

　　助正六位上ミミ名（院去年御給）

　掃部寮

　　權少允正六位上ミミミ（某內親王其年給）

院宮給不任司佑、亦無任彈正忠例、又不任式部、民部、兵部、大藏等丞、（但大藏有其例）同左近將監、（不任、往年任大臣子、外、他人無一度任例、左近將監、花園抄云、將監自無官不任、但大臣子弟此限、）

　監物

　　少監物正六位上ミミミ（父讓）

京官五位以上等漸任之

　政官

　以出納無官之者、被任之時無尻付、依爲顯官也、

諸道得業生課試者

文章生散位

凡除目以諸道者多被任爲吉云云、及任受領、諸卿起座、向陣書奉有作法、此間不待挙被任受領、先下書（或每國名許書之、或任中文書使、）以大間上懸紙書之、先次第出闕國（不廣見寄物、）

大和國　守正五位下〻〻〻

尾張國　守正五位下〻〻〻〻　缺

上總國　介從五位下〻〻

常陸上野等國上任介、依親王爲大守也、

備前國　權守從四位下〻〻〻

多權守受領云々

任受領。。（傳云、前司守多受領云云、凡國司有遙授者、任受領等、守爲遙授、則權守必受領也、主税式云、凡諸國一分已上、遙授遙任之輩、遙任國幷京官者、未得受用公廨、若停任官得求之前、處分已畢、有勘出者、依加國雜之民部式云、凡諸國司、不給公廨田幷事力、又云、凡非遷國及左右大臣八省卿彈正尹、遙授國司者、不得遷使四度使也、）

舊吏任中每年必任之

得替合格、鎭西一任（以上必不待年、隔任、隔人闕年、）亡國數代不濟公文之間、有勘濟人者、不待年被任、六位受領者、先以六位舊吏勘濟公文者被任、雖有別功者無勘濟舊吏時任之、近代多用賄賂者可怪、

志摩國（依任歷年）

陸奧國（有不濟公文國司拜任之例）　經重　基家（依賞人也）

辭退國司者、四年間不任、過一任後被任、　辭遷年受領之人、追被任例、（正度、知房、）

新叙

藏人（或有五位藏人任國守例、師實、）

院(或及三四所、依本所擧被任之、)

式部丞

民部丞(或以輔被任之)

撿非違使(或以佐大夫尉被任之)

外記

史(以上或以五位外記史被任、或有越本道任之例、)

別功

並無尻付

書終之後、寫著於大間、或不被下申文之時、以下書加成文、多被下申文之時、以下書插著於懷中、源

左府云、受領毎人被表書、(被插政殿、被仰不知件説由、)

公卿。

大納言以下隨闕被任○中略

近衛大將

除目被任時、不設饗云云、

凡勅任者

納言以下　參議以上　左右大辨　八省卿　東宮傅　彈正尹　太宰帥　六衛府督

至大間者、無差別皆書入、(清書時用黄紙、)太宰陸奥一分以上、雖被大間久不被任、

出羽城介(先任介、後給官符於秋田城、)

鎭守府將軍

公卿自陣參入進擧、(先着本座、起座經實子敷、自御前同入、右大臣取之、先進置於座左、見書入渡執筆、)執筆取集之被奏、(押笏同上)但副笏進、插笏進

之、任畢後、卷大間被奏、（入筥）押宮、同上、叙覽畢返給、

次結固成文、（結目引懸、時加署成文、）

除目成文之外無他文、關白被候里亭時、內覽、（加封）大臣自取副大間於笏出殿上給清書上卿、（近例於殿上披見之、侍臣等在會、無使見之、）宿老大臣召清書上卿於御前給之、大納言執筆、自取宮出殿上、

大臣退出　參議撤筥文、　故實仲卿副御座進取之如納言、他人不然、自御前間撤之、　參議退出時辨撤之、

清書上卿召外記、令入筥、著陣行清書、　若有追任官者、書入於清書、（令外記筆大間之時申其由、）　或有書入大間之人、不可然、

今夜年月下注日、　但遲事未畢退出之時書入之、依恐忽忘也、

〔建武年中行事〕十一日（○正月）よりあがためしの除目おこなはる、その日に成ぬれば、頭巳下五位藏人、その〳〵申文そうす、まづ內覽、そのゝち朝がれゐにて奏聞、叙位にかはらず、石ばいのだんにてこれをえらふ、なんなき文どもえらびと、のへてたんまやくつけ、袖がきして硯のはこのふたにつむ、當年給、二合、名がへ、國がへ、任ふ返上、所々のそうなど短冊をつく、親王遙行といふは、四五代にても、代々を一代づゝ、一年にあてゝ、めぐりてつかさをたまふ也、是又短冊をつく、外記、史、ゆげいのせうを申、又たんまやく也、この外內給、臨時給、二合して京官を申ふせいみな袖がき也、六府のかみのうけふみおなじ、六位の藏人目錄をかきて硯のふたにくはふる也、御殿の御裝束叙位におなじ、圓座三枚を敷て左右內大臣の座をもうく、時剋に大臣巳下、陣の座に候よしをきこしめしてこれを召、はこ文は四合也、ゆみばにすゝむ程、みな叙位におなじければ、かさねてまるさず、上達部御前の座につきぬれば、こなたにと仰らるゝ、につきて、大臣圓座につく、次の大臣二人おなじく圓座につく、とくと仰らるゝ、時、闕官帳（官の闕どもなふるしたり）を奏す、十年勞を奏するがご

とし、これは正權官二くわんある也、仰によりて墨をすり、筆をそめ、大間をくる、硯のはこの下の方によこさまにあるを、かけがみを引てまきて、大間の跡にをきて、大間を硯の北にをきて、左のあしをにがしてこれをくる、うしとらひつじさるざまにくるなり、くり樣筆にあらはしがたけれど、大まのはしを二尺ばかりひろげて、文見る樣＝上下のはしをひきて、おくをうつぶしにないて、とりかへしてかへす所折めつくべきを、ゆびゑてとらへて、まきたる方をひきとりつれば、又おりめつくべき所にあてがひて、あをのけてまきたる所をうへにをく、さておくをばおりつけて、はしをばふとまきたるを返樣にすれば、右のおりめをさるゝなり、加樣にくりをきて、おくをばいさゝかのこして、むまづかさなどのほどにまきて、下へをし入てちく代とす、はし二三枚は、かねておりめをつくることもあり、そも〳〵一の大臣なくて、次の人執筆に候へば、先圓座につきて、仰によりて執筆のざにつく、下がさねのしりみかへりなをさず、笏をもちながらかた手にて能々くりをく、大かたさほうことに用意あるべし、硯の水にかねてよき酒入たり、こはらせじのためなり、仰によりてすみをする、左の手して硯の下をさへて、しばらくこれをする、此間一會の儀を思ひつゞくといへり、筆二ながらそめて、よきをひち臺の上にし、さし出てをく、さて內竪所の勞帳をとりて、次第にこれを任す、院宮の御申文とりにつかはさんとそうす、御氣色ありて、參議一人をめして、これを仰す、此あひだ硯のはこの申文をくださる、關白給て前にをく、關白候はぬおりは、くら人に紙ひねりめして、大束にゆひてこれをいだす、（はこのふたいださず）大臣硯巳下を南へをしやりて、すゝみてたまはる、闕官帳のごとし、參議御申文ども持て參て大臣につく、おほければ二三通の外ふところにもつ、大臣これを奏す、その〳〵かけがみひきて返し給、もしわろき事などあればうちにとゞむ、大臣給て座につく、このあひだ宮どもなをさぬほどに申文をくだす、關白候はぬおりは、このほどよき也、內竪ののこり奏し、枝籍こと〳〵くはて、校書殿、大舍

人、進物所みなこえをはりぬ、或は大とねり、校書でん、進物所どもなす、內給、院宮、御給など次第になるべきを、硯の右にをきてこれをなす、當年給もおなじ、二合は二合の年をかんがうべしと端にかく、未給、名がへ、國替、合不をかんがうべしと書て、參議をめして外記に下す、なるべき物ども成はてゝ、大間をまきて、かけがみまきて、紙ひねりしてゆひてすみをつく、大間封じてはこのふたに入、なりからは三人ばかりになりて、院宮の御申文のかけがみ二のはこに入つるを取て、四におりて二三やりて、かみひねりしてこれをゆふ、まことにはうるはしきかみひねりを、ふところに用意す、ゆる〳〵とゆひてこえだいにさして、はてゝ、のちつよくゆひて、はしを切てすみをつく、大間にいれぐして內へまいらす、はこ文は參議弁などいだすべしといへども、大臣たちたるあとに、藏人などとりて外記にこふ、はじめつかた五位殿上人火びつををきて、勸盃のことあり、藏人頭つとむ、れいのごとし、

第二日、その儀昨日におなじ、大臣御前のえんざにつきて、笏をたゞしくして候へば、大間の宮を出さる、宮して御すををしはる樣にするなり、大かたはこをたぶことかくのごとし、大臣これを給、闕官帳たまはるがごとし、前にをく、今夜はこ五合になる、大間くり、すみすりつれば、やがて申文を下さる、下かんがふべき文どもは、みな袖がきくはふ、參議よべの申文ども、外記かんがへあげたるをもちてまいる、大臣これをとりて前にをく、又こよひの申文くだしかんがへこむ、大かた二日三日に出たる申文は、奏聞までもなく、又えらびとゝなふるまでもなくて、短冊つけ袖書して、奉行の藏人硯のはこにつましむ、わづらはしきことは、小板敷にて職事どもあひきす、火びつけんはい昨日のごとし、こよひ顯官の擧あり、左右衛門の尉を申、外記史を申申文をとりとゝのへて、上首の公卿をめして大臣これを給、參議まで見くだして、その〳〵難なきを擧申なさるべき申文を奏聞す、內にとゞめて明夜出すべし、大間のつゐでにもまいらすなるべき物どもを

のをのなしはて丶、大間の筥奏する事昨日のごとし、

第三日、去夜の儀のごとし、かんがへあげたるふみあれば、猶これを任ず、轉任、宿官、兼國勘文などめす、かんがへ申にまかせてこれを任ず、受領の擧あり、公卿に仰すれば、をの〳〵殿上に出て擧を書て、ふうじて執筆につく、大臣奏聞す、御覽じてその中になるべきを返し給、受領は大間のかけがみをとりいで丶案をかく也、瀧口所の衆の勞帳めす、すべて京官はこよひなす也、うち〳〵折紙をたまふ、轉任はぢきにも仰たまふ、すべて一人を任ずるに七のさ法あり、申文をよみ申、よせ物を見る、大間のそのところをひらく、筆をそめて大間にかきつく、申文にくをかく、（うすゞみにかくるなり）よせ物にてんをつく、かならず筆をひちだいにをく也、よせ物と云は闕官を抄して、見よきやうにかみや紙の料紙に書て、硯の筥の下の方に入たり、後さま七のさ法、びんぎに去たがふ、みな任じはて丶、大間の奧の年號月の下に日を入、（あながちにてれども、思ひいだすに去たがひてかく、わすれじとなり、）大間をそうもむす、任じはて丶、勞を正しくして候へば、いまはさばかりと仰あり、其後大間をまきてはこに入て奏す、御覽じて歸し給、なりからを去たゞむることさきのごとし、二夜いち〳〵にゆひたるままにて、こよひのぐして一にゆひて墨をつく、臨時に叙位あれば、これをかくことつねのごとし、藏人頭ふせらるれば、左大臣殿上の別當にてこれをかく、大臣大間を持て殿上に出て、淸書の上卿にさづく、上卿陣座に出てこれをかゝしむ、勅任は黃なる紙にかく、公卿の兼官は奏任の別紙にかく、式兵のつかさをの〳〵べちに奏任にかく、上卿ゆばにすゝみて、くら人に付て、鬼間にて奏す、內侍これをとりて奏す、下名やがてつけをこなはるれば、上卿かたなしにむかひてをこなふなり、

〔北山抄三 拾遺雜抄〕除目

裏書

四所籍者　內竪、校書殿、大舍人、進物所歟、

三局史

〔羽倉考一〕四所籍者　四所トハ、内豎、校書殿、進物所、大舍人ヲ云、校書殿ノ頭、執事、進物所ノ執事、散位并内豎、大舍人ノ中、諸國ノ掾目ニ任ズ、其差當リタル小口ノ者ヲ云、

〔西宮記正月下〕除目
大臣依召著圍座、(中略)○中開大間(給)任四所、内豎(十人之中顛伊勢、内豎召京官時任日、)大舍人(三人許、延長三年任五人、)文殿(校書殿五六人之中、)進物所(六人許、延長五年四人、七年二人、)已上頭、執事、外有本所大少屬、及官人代、所々滲人、散位籍者、依姓任掾目、(顛掾、)

〔江家次第正月四〕除目
任大舍人別籍
　權少目正六位上紀朝臣安成(大舍人、前未養院籍、)
以上四所籍(本作籍)一者任擧(於本寮、件籍寄所、勘籍、入三寮、是入三寮也、)

〔江次第鈔正月四〕以上四所籍者任擧　正曆六年除目結官云　四所籍者、二月給也、　西宮云、已上頭、執事外、有本所大小屬、及官人代、所々滲人、散位籍者、依姓任掾目、寬平二年正月九日、仰藏人所、校書殿、進物所、内豎所、擧事之者、擧四五人云々、若是獻四所籍之始歟、

〔蝉冕翼抄〕春除目
任四所籍事
可任國々皆存先例、今案初度執筆爲出、今度可用之家例、兼内々示合外記、可有用意也、其國々暗誦可書大間也、但縱雖暗誦、臨期可有忽忘之恐、潛注付可任之人(可及見付、)於一紙(白紙立紙、)可懷中之、臨期潛披見非無先例、(下略)○

〔蝉冕翼抄〕三局史生
三局ト謂ハ、外記史生、左右弁官史生、内記史生也、

年給

春玉抄云、左右弁官史生、并外記史生等也、又内記史生、共勞滿十年也者、准太政官史生任諸國目也、同抄云、春秋任之、師遠書云、本所奏任內官二分、非每年事、以前任外國目、或先年任目者也、近代未必然也、多申內官、師安云、秋無擧之條僻事也、申文之由口未知此事、師安云、近代三局史生不被任、但召使任之、

〔江家次第〕正月四除目

以上四所窮者任畢、略〇注若有三局史生申文者、此間任之、近例秋任之、播磨、備前、美作、讚岐等目云云、

〔江次第抄〕正月四三局奏、略〇中件官等可任二分也、今按、江次第三局奏、注中出三箇條也、弁、少納言、外記史申文者、所謂上官申文也、外記、官史生奏者、三局奏也、上官申文是自解也、三局并上召使奏者、太政官擧奏也、三局謂左右弁官、外記局也、三局奏京官除目任之、

〔除目抄〕內給以下外國年給事

於年給者、縣召除目之時不被下勘、是不可有相違之故也、雖春除目、名替國替、任符返上等之類申文者、勿論可被下勘、又雖當年給、及京官除目之時被下勘之、院宮已下公卿給同前、於內給并直廬儀時攝政給者、不下勘之由有舊說、然而被下勘之、

〔除目大成抄〕一當年給

內給〇三分掾二人　二分目三人
〇一分史生廿人　不載除目一分召別奏也、〇中略

內給
正六位上藤原朝臣經遠
　望參河掾大
正六位上佐伯朝臣安里
　望諸國掾下野少掾

正六位上秦忌寸重國

望諸國掾（周防掾）

從七位上藤井宿禰里安

望諸國目（讃岐少）

右當年內給、以件等人可任之、

永久四年正月十八日

〔玉海〕安元二年正月廿八日癸酉、此日春除目初日也、余（○藤原兼實）奉仕執筆、（爲於春日御社）自今日三箇日奉幣於春日御社（付幣物、六、正預也）又修諷誦於十箇寺、（入鐘、賀茂上下、稻荷、春日、大原野、吉田、法成寺、廣隆寺、清水寺、六角堂、○中略）次任諸當年給、先取內○給（○在殿上、宮）開見之處、書樣不似例、（書二人ヲ已上、爲諸國掾、書三人ヲ已上、爲諸國目、ト注之、先例人則注其國之由也、雖然不載內給、是故實也、仍無左右任之、但此官中關白、）然而依爲內給、乍五人任畢、每任一人、懸勾注任所、但不讀申內給先例也、申文入第一覽筥、

美濃掾正六位上惟宗朝臣眞康（當年內給）

安藝大掾正六位上紀朝臣有眞（當年內給）

相模大目從七位上車持宿禰牛眞（當年內給）

加賀大目從七位□藤井宿禰通松（當年內給）

播磨大目從七位上紀朝臣信安（當年內給）

（可尋之）

卅日乙亥、此日入眼也、（○中略）任諸內外官等了、（天文得業生以自解任諸國介、此事未知先例、頗以非據歟、然而依載注文令任了、於尻付者、猶可注臨時內給歟、）

大和權介正六位上藤原朝臣利貞（臨時內給）

伊勢介正六位上惟宗朝臣成俊（臨時內給）

信濃介正六位上平朝臣康清（臨時內給）

伊勢權介正六位上藤原朝臣範俊上西門院臨時被申

駿河權介正六位上惟宗朝臣俊政中宮臨時被申了

下野介正六位上中原朝臣盛季天文得業生

尾張權守從五位下藤原朝臣範經

駿河介從五位下惟宗朝臣顯基

相摸權守從五位下源朝臣正綱

能登權守從五位下惟宗朝臣光盛

紀伊權介從五位下淸原眞人廣親

肥前權守從五位下藤原朝臣季弘

次任二內舍人等一

內舍人正六位上中原朝臣親俊內臨時給

內舍人正六位上藤原朝臣重國內臨時給

內舍人正六位上藤原朝臣助季內臨時給

內舍人正六位上藤原朝臣以實內臨時給

內舍人正六位上藤原朝臣兼資內臨時給

內舍人正六位上菅原朝臣爲元內臨時給

內舍人正六位上源朝臣則宗內臨時給

內舍人正六位上源朝臣口經皇太后宮承安四年御給二分代

內舍人正六位上藤原朝臣盛親關白當年給二分代

內舍人正六位上平朝臣盛員行下造二豐受宮一事上所申

治承二年正月廿六日辛酉、此日春除目初日也、○中略尤能持來內給御申文、余任之、題任一人、懸勾注、任所指成來、如常、

武藏目從七位上秦忌寸經重當年內給

美濃大掾從七位上清原眞人包末當年內給

但馬大掾從七位上多治宿禰常春當年內給

周防目從七位□豐原宿禰甲生當年內給

阿波目從七位上韓忌寸尹久當年內給

豐原者朝臣也、而執請文、書宿禰、小失也、

〔除目大成抄〕一上當年給

○諸院○三分一人○中略 二分一人 一分三人

長保四 丹波掾正六位上清原眞人重方冷泉院當年御給

院御給請一人例
冷泉院

正六位上清原眞人重方

望丹波掾

右當年御給、以件重方、可被任之狀如件、

長保四年二月廿八日○中略

○諸宮○三分一人○中略 二分一人 一分三人

永久四 土左大掾從七位上多治宿禰末國太皇太后宮當年御給

阿波大目從七位上毛野宿禰久友太皇太后當年御給

太皇太后宮職

從七位上多治宿禰末國

　　望諸國掾土左大
　　從七位上毛野宿禰久友
　　望諸國目阿波大
右當年御給所ㇾ請如ㇾ件、
　永久四年正月廿八日

〔除目大成抄一〕當年給
　親○王○二分一人一分一人巡給年二合任三分○中略
三品佳子内親王家
　從七位上紀朝臣武末
　　望諸國目土左
右當年給、以ㇾ件武末可ㇾ被ㇾ任之狀、所ㇾ請如ㇾ件、
　承德二年正月廿五日　　　　　當散位從五位下藤原朝臣類綱

〔玉海〕安元二年十一月十二日癸丑、又語○清原頼業云、匡房卿除目抄之中、注二親王巡給事一、其中有二大僻事一、彼抄云、假令有二數代御後一、今年任二一代御後一、或月數日年又任二一代御後一、如ㇾ此依ㇾ巡任之、謂二之巡給一云々、而撿二古記及往昔公卿給等一、假令一代御後、親王各有二數人一、一度除目書二其代一不ㇾ書二其人一、假令今年ハ毎代、第一親王皆悉任之、明年ハ、又各第二親王任之、如ㇾ此作ㇾ巡、謂二之巡給一者也、匡房記說失誤也云々、數剋之後退出了、

〔羽倉考一〕公○卿○給○　關白大臣以下參議以上、當官ノ公卿ヨリ申文ヲ出サシメテ、每年卑小ノ官ヲ給フヲ云、

〔除目抄〕一公卿給事作様故實、見二除秘抄幷叙位略秘抄中一、仍除之、
執筆大臣、除目月若次月之間、作二公卿給一下二給大外記一、大外記召二具式部丞一參二里第一、以二上臈家司一給之、或

召簾下自給之、六位外記參之時、以家司(或女)給之、公卿給中ニ二合停任卷籠(天)給之、式部丞ニハ二合中ニ停任卷籠(天)給之、不給公卿給、件文無禮紙裏紙、二合停任、各二通也、一通ヲバ給外記、一通ヲバ可給式部丞、直廬儀之時、攝政作之、召外記下之、攝政不帶大臣者、傳一上給外記云々、但曆仁二正、攝政殿雖不帶大臣給、召大外記師兼下之、又仁治三三五、縣召除目始、(御前初度、去五日、叙位攝政、直廬儀、)關白殿(兼經公)被下之、關白殿執筆、左大臣(良實公)可令下給之由、關白殿兼令申給、左府令申子細給、關白殿令下給、先例不詳、猶左府不可令下給歟、

〔北山抄(三拾遺雜抄)〕除目

一公卿請文

位姓尸名(某宜、某國人、)

望其目闕

右當年給所請如件(或如二分字、或又以件某云々、)

年　月　日　署所

當年給如之、若申內舍人者、二分代云々、〇中略

位々々

望其掾闕

右當年給二合可被任之狀、所請如件、

年　月　日　署所

二合請文如之、親王大臣不勘先給、(或親王每年、大臣隔年云々、)納言隔四年給之、申名替之時、右狀必加二合之字、但親王還給云々、其可當之年申之后腹有別巡給、或有別給、(有別給者、不預別巡給、)

位々々、

望〻〻

右依去年獻五節舞姫、當年給二合可被任之狀、所請如件、

年　月　日　署所

去年獻五節之者、參議以上皆給二合、改名之時、必有獻五節之文、(安和二年初有此事)

一分請文准上可知、但右狀加一分字、若申太宰幷諸國掾非違使郡司等者、又有代字、謂之他色、

郡司加擬申文之、或有越次例云々、雖當年給一分召後、有未補字、給二合之年不申之、但大臣給

有一分二人、

請被下宣旨其掾位姓尸名從當年計歷狀

右件某丸以去其年給、其年月所被任也、而不給籤符之間、二年空暮、仍准前例、從當年可被計歷之狀、

所請如件、

年　月　日　署所

未給任符之前、若有申計歷之者、給主申之、即計歷由作載官符、或云、正員不載、只不取闕也、又云、

共不載之、以官符副任符云々、可尋、雖不給任符、及三年者申之云々、不名替可秩滿之時可申歟、

任符出後、非國解不申之、

給數

內給三分二人　二分三人　一分廿人

院宮男女爵各一人(東宮无女爵)　三分一人　二分一人　一分三人

大臣二分一人　一分二人(太政大臣三人)

親王及納言以下二分一人　一分一人(親王巡給也、后腹有別巡給、或又年給外有別給、皆依宣旨所預、)

女御(依宣旨預之)尙侍二分一人　一分一人(每年二合、過親王不可然云々、可尋、)

典侍以下有一分一人、

〔類聚符宣抄 七〕諸國一分事 付公卿給

中納言橘朝臣

當年給一分補他色、

天祿元年十二月廿二日

正三位行中納言源朝臣雅信宣、奉勅、中納言橘好古卿、當年給一分宜補他色、

天祿元年十二月廿二日　　少丞清原佐時

〔園太曆〕貞和三年三月廿七日庚午、自今日被始行縣召除目、　廿九日

可勘合不 件國、去康永三年給、去年二月以志賀花盛任常陸目、同年給同月以山邊高松任伊豫少目、而任符未出、

從六位上藤原朝臣祐忠

望諸國掾 尾張

右去康永三年給、同九月以池邊慶風請任阿波少目之處、稱非本望不能著任、仍去年二月除目、以志賀花盛改任常陸目、而雙本望不赴任符、爰去年給伊豫少目山邊高松、依有不意事不赴任國、然者早被止花盛并高松、以件祐忠可被任三分之狀、所請如件、

貞和三年三月廿七日　　正二位行大納言藤原朝臣公重

〔除目抄〕一內給以下外國年給事 〇中略

女御

目一人　一分一人

尙侍

任意 天 二合、或說別給依宣旨預之、

國替

一分一人近代二合、天暦比任目、其已後被任掾、又臨時給被申任分、寛元二年三年共任掾、改被下闕、外記不加□所、賴寛元二正廿三安木少掾中原康弘、當年給二合、同三正十三、甲斐

典。侍。椎大掾藤井則次、當年給二合

一分一人

掌。侍。

一分一人

齋。宮。齋。院。

不准后之外、叙位并京官外國等給無之、

〈蟬冕翼抄〉國替

國替ト謂ハ、內給已下ノ年給ニ申任ズル者ノ、稱非本望不賜任符ヲ、件人ヲ更ニ他國ニ申任ズル也、

〈羽倉考一〉國替ヘ　先年ノ年給ニ、諸國ノ掾目等ヲ給ハリテ任ゼシ人ヲ、當年他ノ國ノ掾目等ニ改メ任ジ、又ハ同國ニテモ、目ヨリ掾ニ轉ジ、少ヨリ大ニ轉ジ、權ヨリ正ニ轉ゼンナド、申替ルヲ云、

〈除目抄〉國替

新書除目也、寛仁年中、攝政直廬被行除目之時、爲執筆右大辨朝經卿、新不書除目、摩改本除目、仍相違、時人傾難之、後日書直、密々取替畢之云々、入道殿被仰、彼卿無罪陳云々、甚爲奇事歟、傳聞之、

〈北山抄三拾遺雜抄〉除目

一公卿請文

位姓尸名

望某目闕、

右去某年給、某年月以姓名任某國目、而不給貢符、任秩空春、仍以某丸可被改任件國之狀、所請如件、

年　月　日　署所

謂之國替、若本國未秩滿者、依身病不給貢符云々、如件、

〔朝野群載諸國雜事〕申國替

某院若宮

正六位上姓名

望某國介若掾目

右〇右字下恐有脱字年御給、年月以某丸任國職、而稱非本望、不給任符、仍以件某丸可被改任之狀、所請如件、

年　月　日　官位

〔羽倉考一〕秩滿更任　先年ノ年給ニ、諸國ノ掾目等ヲ給ハリテ任ゼシ人、國司ノ任限年滿タル故ニ、別人ヲ以同官ニ申任ズルヲ云、

〔江家次第正四月〕除目

第二夜略〇中

任更任

土佐國

大掾正六位上日置宿禰忠友權大納言藤原朝臣、永保元年給二合所任、刑部吉実、不給任符、秩滿仍更任、

是得替更任、他人申任同官之書樣也、

〔園太曆〕貞和三年三月廿七日庚午、自今日被始行縣召除目、　廿九日

可勘合不件内給、藤井重國去曆應五年三月任播磨大目、而任符未出、

名替

従七位下藤井宿禰重國
秩滿自大遷小
望播磨少目
右去曆應五年內給、同三月以件重國請任同國大目之處、依煩病不赴任國、秩限空過了、仍去年十二月除目可被更任之由、雖出微望、秩滿之後、已以人給被任件闕之間、不達本望、而猶於當國有執心之由申也、然者早可被任少目之狀如件、
貞和三年三月廿七日

〔蟬冕翼抄〕轉任
本諸國ノ權掾ニ任タル者ノ正ニ任ゼムト申シ、少目ニ任タル者ノ大ニ任ゼムト申スヲ轉任ト謂也、是ハ外記ノ勘申ス轉任ニ非須、外任也、在國替內、或在更任內、

〔蟬冕翼抄〕名替　名替ト謂ハ、內給以下年給ニ申任ズル者ノ、稱非本望不賜任符ニ、同國ニ他人ヲ申任ズル也、

〔羽倉考一〕名替ヘ　先年ノ年給ニ、諸國ノ掾目等ヲ給ハリテ任ゼシ人ヲ止テ、他人ヲ以同官ニ申替ルヲ云、

〔除目抄〕名替
摩改本除目也

〔北山抄三拾遺雜抄〕除目
一公卿請文
位姓尸名
望某目闕〈不書闕字、或又不置此行、右狀書國名、〉
右去某年給、某年月、以姓名任件國某目、而依身病不給任符、仍以件某丸可被改任之狀、所請如件、

或不注不給任符之由、只停某以某可被改任云々、

年　月　日　署所

謂之名替、正權大少姓名年月等、一字若有誤不任之、度々名替之時、以最後者載之、若直物改名之者、載本除目、年月死去之者、不給簽符之間、其身死去云々、

〔朝野群載四朝儀〕申名替

某院（若某宮坊）

正六位上姓名

望某國介（若掾）

右去年（若去年）御給、同年月以某姓某丸任件國某職、而煩身病不給簽符（若任符）、仍以件某丸可被改任之狀、所請如件、

年　月　日　官位

〔除目大成抄一〕名替

内給（略）〇中

可勘合不（件長保元年内給、同年正月以大秦有賴任大和少目、而任符未出、）

正六位上宮原宿禰忠信

望大和大目

右長保元年内給、同正月以大秦有賴任大和大目、而不給任符、仍以件忠信可改任之、

長保三年正月廿二日

〔園太曆〕貞和三年三月廿七日庚午、自今日被始行縣召除目、廿九日

可勘合不（件内給彌清道也、去年十二月任但馬大掾、而任符未出、）

五重國替
從七位下海宿禰浦道
望安房掾補大

右去曆應二年內給、同正月以中原職泰任件國大掾之處、依有身病不能著任之間、康永元年十二月以藤井清友雖改任、稱不本望不受簽符、仍同二年正月以春正繁改任之處、有不意事不赴任之間、去年十二月以工理材改任同國掾、而又變本望不賜任符、爰去年內給、同二月以件浦道任但馬大掾之處、稱東海國有事緣申可被改任之由、然者早停理材以浦道可被任安房掾之狀如件、

貞和三年三月廿七日

名國替

〔蟬冕翼抄〕國替○中略

申任シタル人ヲモ改テ、更ニ他人ヲ以テ申任ナリ、國ヲ改テ更ニ他國ヲ申任ス、是謂名國替、

又二合ノ國替モ有之

又臨時ノ名國替モ有之

又秩滿名國替モ有之

又三重國替モ有リ、四重國替モ有リ、

〔羽倉考一〕名國替ハ、先年ノ年給ニ、諸國ノ掾目等ヲ給ハリテ任ゼシ人ヲ止テ、當年別人ヲ以、他ノ國ノ掾目等ニ任ゼント申替ルヲ云、

任符返上

〔蟬冕翼抄〕任符返上

任符返上ト謂ハ、內給巳下ノ年給ニ申任スル者ノ、任符ヲ給テ後ニ各有申テ返上スル也、任タル國非本望トテ、件國ノ符返上シタルヲ、給主ノ請文ヲ書テ、其奧ニ任符ヲ卷籠メ上也、是ヲ任符返上ノ國替ト謂、

任符ヲ給テ、不赴任國シテ、空四ケ年ヲ過テ、秩滿シタル第五年ル（五ケ年ヲ爲一任國ハ、第六年春）、猶本國ニ任ゼム

文章生　内舍人

ト申ヲバ、是ヲ任符返上ノ更任ト謂、

任タル國非本望トテ、件國ノ任符ヲ返上シタルヲ、給主ノ同國ニ他人ヲ任ゼムト申ヲバ、是ヲ任符返上ノ名替ト謂、

凡任符返上ト謂ハ總名也、此中ニ有國替、更任、名替也、心ヲ留テ闕ニ見テ可任也、

〔西宮記 正月下〕除目

内舍人、【三人、叙爵、延喜十五年藤原宮宗、任内匠允、内舍人労者、】文章生、【三人、北陸、山陰道、太宰、】散位二。度。掾、三。度。介、【京官召、及候二所者任内官、弾正、勘ケ由、入書丞、藏】

【原有濫任、諸部勤、文章生労、】已上労帳勘勾入、宮任、兩三人、

〔除目抄〕一 鈔秘

二度ノ掾三、度ノ介事

京官ハ叙爵有恐、仍度々任外國云々、介事度々成之時ハ、優恕シ天被任介、無極秘事云々、

〔蟬冕翼抄〕文章生散位

文章生散位ト謂ハ、文章生ノ労ニテ諸國ノ掾ニ任ジタル者ノ、件國ノ秩滿ノ後ヲ文章生散位ト謂也、其人ヲ次第ニ京官ニ被任也、

凡文章生ノ任官ハ、春除目ニハ、當職ノ文章生ハ、中夜任諸國掾、文章生散位ハ、入眼夜第一ノ人任京官、秋除目ニハ當職ノ文章主任京官也、

得業生ノ有ル年モ、文章生散位相並テ任之、諸司助允隨人任之、【多任弾正忠、勘ケ由判官、八省丞、少内記等、】

件勘文ハ橘簒也、兩面ニ開ク文章生散位勘文ト書タリ、紙捻ヲモテ閉付也、

春玉抄云、文章生ノ外國秩滿畢【四年】者、以上腐只一人載之、大治六年三人也、可尋、

【裏書】文章生外國三人、京官一人有例事、

寛治四年通俊卿云、去夜外國三人、今夜京官一人也、仍申事由□外國二人、歷名句上書生字、但外

國三人、京官一人、皆有例、然而又如此、除目口傳也、

文章生蒙方略宣旨、未課試者、不可任内官事、春玉抄云、或人云、文章生蒙方略宣旨、未課試之者(外記云、件者不可入勘文事歟、)得入勘文、不可任内官歟、内官後不課試及第也、蒙件宣旨事、或自當職文章生蒙之、或外國間、或散位後也、(已上)

〔玉海〕承安三年二月七日庚午、申刻許源中納言雅頼來、(〇中略)除目事等多以令談、其次云、西宮文章生外國之所有云、二〇〇〇〇〇度擧三度介事、依不審尋師元朝臣之處、答云、文章生ハ外國シテ秩滿之後、依散位之次第、任京官敍爵也、而解退敍爵之輩、自散位又是外國、謂之二度擧云々、於三度介者、師元之答旨不分明云々、

上召使

〔蟬冤翼抄〕上召使

太政官ノ擧狀アリ、外記、幷少納言等連署シテ召使一人ヲ擧ス、任諸國目也、

〔除目抄〕上召使擧(公卿召任之、故有上字歟、)

以太政官奏、(少納言外記加署)申外國目、(近代申擧)任五畿内(仁治四二二執筆右大臣)任攝津目、是夙夜奉公者、不可趣遠國之故歟、可尋知之、

〔延喜式十一太政官〕凡太政官幷左右辨官史生召使等、毎年一人除諸國主典、(召使拜五畿内、志摩、伊豆、飛驒、佐渡、隱岐、淡路等十一國、)其勞成任官者、並不依年勞、只計上日、

〔玉海〕安元二年正月廿八日癸酉、此日春除目初日也、(〇中略)召頼業、(〇中略)問除目雜事等、頼業申曰、上召使、近代依望擧不被任之、雖被任目强不可敢申事也云々、余云、然者須上望目之申文也、頼業申云、可然、即退下侍所、進除目文書等、

四道三院擧

〔蟬冤翼抄〕諸道年擧

年擧ト謂ハ

紀傳　明經　明法編年　下闕

勸學院　奬學院編年　學館院

已上七ヶ所、以本道擧狀擧中學生任掾也、件擧狀任第一寫、中家爲大外記之時者、皆卷重無籤、清家爲大外記之時者立籤、

首書四道三院ノ年擧ト謂ヘ是也

兼國

〔除目抄〕中夜兼國人入眼、遷他官時削兼國所識否事

假令、參議兼國人任中納言類是也、大間或削之、或不削之、於召名者、書手寧相必可直之、不可書、又侍從兼國人任少將之時、兼國不止之、召名ニ可書也、又以兵部大輔勞藤師俊、大治三正廿八、兼信乃權守、今度遷任民部權大輔之間、下名被止兼國了、

〔中右記〕天永二年正月廿七日庚寅、外記師淸進除目、入筥被見之處甚狼藉也、一夜淸書之間、大略不被沙汰歟、先以太宰大貳正三位顯季入黃紙、可在白紙也、至歸者可入黃紙於大貳者別紙也、又新中納言能俊、忠教、有兼國、大略俊ニ兼讚岐國、有此事歟、入眼夜任中納言、仍可被止也、又以侍從實能、被任美作守、而又有兼國、伊豫介、是俊ニ侍從兼國也、而入眼夜任美作守、仍可被止也、又以候任左衞門尉者被入右近府、又以藏人省業被成左衞門尉、已落淸書也、如此事甚多、但人々多姓朝臣字被書誤、於件事者、追直物之時可被直也、只不下給二省前、尤可被直事等、以藏人雅經申攝政殿、只今上臈職事皆不參、仍以六位申也、頃而藏人歸來云、遙授三人可止、又左衞門尉等可直、又大貳顯季除黃紙可入別紙者、件事等令左大弁書直了、

宿官

〔伊呂波字類抄志疊字〕宿官

〔職原抄私抄〕宿官とは官外記などの五位たるが、頓て顯職に任じがたきを、外國等にまはし任す、これは官を宿す儀也、

〔枕草子八〕やどりのつかさのごんのかみは

下野　甲斐　越後　筑後　阿波

〔江家次第 正月 四〕除目

第二夜 ○中略

次又令殿上辨仰外記進轉任宿官勘文、宿官勘文置硯北、轉任勘文置硯前、辨持參、執筆不奏聞、但以詞奏任之、

先宿官 今年叙位依本所勞給爵之者也、件勘文等不懸勾、或有書加成文之人云々、

藏人

式部

民部 以上任諸國掾守、

外記

史

撿非違使 以上任諸國介、

外記史多任西海道、使者任坂東、此只如內舍人文章生等外國之心、

近衛將監、去年叙爵者可任介、近代不必然、

頭書 宿官、今年新叙爵、外記、史、式部、民部、撿非違使等、依巡可受領之輩、待其巡之間、所宿任權守若介等也、

顯官擧

〔蟬冕翼抄〕顯官擧

顯官ノ擧ト云ハ、申外記、申文、申史、申式部丞、申民部丞、申左右衞門尉、已上五給ノ申文ヲ公卿擧上也、

往昔兵部、大藏、式部、民部、錄入擧云々、

諸卿定申、參議書之、執筆不書之

御前儀、納言傳執筆、

院宮内官未給

受領擧

直廬儀、直進執柄、不傳執筆、

〔螢蠅鈔〕顯官轉任

顯官ト云ハ、外記、史、式部、民部也、是等ヲ隨勘文天以少轉大、以右轉左、以權轉正テ、其闕ニ新任ノ者ハ待仰天任ズル也、

件轉任勘文、外記注進之、清中兩家其說不同、

一清家勘文ハ、第一人、其次ニ叙爵シタル所ハ、人名ヲ不書シテ、只官許ヲ書テ、其次ニ如見任ニ書連也、此事有其理歟、然而執筆ノ爲ニハ、勘文ニ、右ニ注タル人ヲ、今左ニ注レバ、頗有煩者也、

一中家勘文ハ、第一人ノ叙爵シタル所ニ、今可任キ樣ニ、右ノ人ヲ以テ右ニ書テ、最末ノ所ニ人名ヲ不書シテ、只官許ヲ書タル也、仍執筆如勘文ニ書寫スルハ無煩也、

〔螢蠅鈔〕院宮內官未給

院若宮等、去年以往ノ內官ノ未被任ヲ、此春追テ被申也、

春玉抄云、多是秋例、

件申文有無、隨時又雖被申、勅許不定、

〔螢蠅鈔〕受領擧

御前儀、納言以下奉仰、起直向議所謂向陣座、近代偉儀弓場殿、略儀猶居小板敷、外記獻擧狀料紙、解由文等、歸參御前、

一々直傳執筆大臣、不傳已次大臣、

直廬儀起座出休所也、有此事也略儀、歸參奉攝政、若大臣猶在座者、傳下攝大臣、大臣次第傳上攝政、執筆宰相不擧、

○小書出

小書出ト謂ハ、任受領トスル時ニ、先取大間禮紙天、寄物ニ任テ書受領闕國テ次書入任人之後寫村大間也、

公卿

京官除目

或ハ小書出ヲ受領ノ土代ト謂、又ハ受領ノ下書トモ謂也、

〔江家次第 四正月〕除目

公卿

大納言以下隨闕被任

參議

藏人頭毎度闕被任非參議大弁、近衞中將有年勞者、（以下久絶）式部大輔爲侍讀者、五箇國舊吏致逵叶格式、散位三位經年勞者、

納言

大弁（左右大弁、一度、被任例五箇度、）

宰相中將（一度除目二人以上被任、近有其例、）

撿非違使別當

無兼官人一度二人任例（經季 資綱）

無兼官人早任例（公賢 能實 雅俊）

大納言

依公卿勞（期年限久者）　近代依次被任、又依恩有無、

至大臣者、以宣命任之、仍不入除目、

〔倭訓栞 前編十六〕つかさめし　官召の義、縣召に對して、京官を除せらるゝをいふ也、秋外記廳にて行はるゝ除目也、

〔續修東大寺正倉院文書 十四〕天平十八年具注曆

三月　五日丁巳土滿　歲前、小歲後、祭祀、加冠、拜官、移徙、修宅、治井竈吉、（官召十二人）

〔江次第抄 四正月〕秋除目　謂京官除目、一夜儀也、

〔九條年中行事 二月〕三日以前京官除目事

〔建武年中行事〕京官の除目、本儀これも春なれど、今は秋の除目とぞいふめる、冬にも及ぶなり、執筆の作法、春の除目に同じ、三省の奏などぞかはりめにてあめる、二夜行なはる、一夜も常の事なり、

〔公事根源 三月〕京官除目

是は三月三日より先におこなはるべき事なれど、今は秋の除目とぞいふめる、冬にもおよぶなり、京にある諸司を任らるゝ、故に京官とは申なり、執筆のさ法進退、大かたは春の除目におなじ、三省の奏などぞかわりめにてあめる、一夜行はる、二夜もつねのことなり、つかさめしとは、この秋の除目を申也、あがためしは春のなるべし、

〔百寮訓要抄〕京中のもろ〳〵の官をば、内官とも京官とも申也、〇中略京官除目には京中の官を任じ、〇下略

〔北山抄 六備忘略記〕京官除目、於外記召之、其儀同上、(上編以下著秋、異事等備、)

〔除目抄〕一京官除目(可任京官諸司、故有此儀、)

御硯筥納(知春、但秋ハ上官宿官申文、上召使勝、三局史生各無之、清家說、以三省奏入硯筥、)

一筥納(立議文七巻文外、秋ハ議ニ不付議、)

七巻文(知春、但秋ハ銘ニ七月一日ト書之、)

課試及第勘文(知春、但秋ハ被任内官、立紙片紙、副當國事書之、)

文章生歴名(知春、但春ハ三人任外國、秋ハ一人任内官、調様同課試及第勘文、)

闕官帳二巻(正備、知春、)

式部省奏(立榻片敷、兩面同書之、)
民部省奏(同上)
兵部省奏(同上)
已上三省奏、史生各任外國二分、多任五畿內北陸南海道目、往古任京官二分、近代不然、清家說、
三省奏入硯筥進之、
二筥納
諸司奏(同春)
諸衛奏(同上)
諸道內官舉(同上)
四位已下諸申文(同縣召除目三箇文)
此外隨時進文
轉任勘文(同春)

〔名目抄(臨時)〕小除目(コヂモク)(或者臨時除目)

〔親長卿記〕文明六年六月十八日、依召參內、明日宜下可有小折紙歟、如何被遊之樣有御尋、(○中略)予申云、臨時之儀、小除目ヲバ號小除目、敘位ヲバ不申歟、今度人々可有小除位之由令申之間、古抄物等雖引見、號小敘位事不見出、只號臨時敘位、此子細先度令不審、新大納言(敏秀)誠不及是非、人々令申候間申之、不審勿論候由命之趣同申入了、誠イヒツケアルベキ事也、有申輩之間、御不審之由有仰、

〔北山抄(六備忘略記)〕臨時除目、召上卿一人行之、不垂御簾、如女敘位、任受領者、先下給申文、令諸卿擧申、上卿退下陣頭、書一紙參上奏之、(或以頭藏人下給、相定奏聞後召上卿、)被任畢退下、召折堺、令參議清書、令持外記參上、付藏人奏聞、(宿德大臣若有所勞、或乍在座令奏之、)即下給二省、其二省候由、外記三度申之、(欲召先問候否、隨申候由、即仰可召之由、其後二度申也、)

是紙內記所一分參進邊、而中云々、皆无所據、已爲故實、或中候由之後、猶三度中云々非也、其第三度仰可召由之後、取召名北面居直、二省丞著靴

參人、列立小庭、南儀立、軒廊、給召名如常、各還立本所之後、仰云、末計給へ、若直物之次、有召物者、預示外記、

先給召名、仰可召由之次、示云、召物云々、後給直物、召丞二人、各給之、一人參名、給召名、封直物、令持外記、使日召、給直例歟、一人參、相違給之、一省不參者、先給一省、不必相具、如給

宣旨之儀、如給他宣旨、先時、凡給宣旨儀、丞不著靴、直進膝突、給之退出、其宣旨給殿上輔丞名、或於殿上名障簾給之、直物无此例、唯給直物者、二省候由、不可三

度申歟、而猶度々申由、外記等所申也、可尋、

〔江家次第四月正月〕臨時除目

晝御座如官奏時、

以晝御帳南北几帳立第二三間母屋際、樹云、在東、故隆方朝臣云、四季御屏風東面、仍御几帳猶在西云、然而先例如此、事若然者、帽額又可懸四歟、可怪之、第

五間御几帳三尺押直之、南北又閉夜御所南戸東扉、承香殿人被候時、有壺禰間庇御簾之說云云、然而

不可然、御硯筥引上於御座上、令在茵際、御硯入水摺墨、圓座二枚敷廣庇、一枚執筆座、當御前、一枚執政座、在北柱程頗西寄、返

晝御座燈樓綱

申文撰定、積御硯蓋仰置之、

出御御直衣

執柄著大臣參上著座、其路入自殿上戶、康平二年中行事障子北并簀子敷等、入御座間、背圓座、今案此次第昇自第五間南云云、頗第四間歟、第五間南頗南方長押、

以頭藏人召大臣、職事詞曰、關白御消息此方令參給、大臣參上著座、昇自第五間南、著御前圓座、先居下

方漸進、次依御氣色召男共五位藏人參入候簀子、大臣云硯續紙、五位藏人持參柳筥入之、

大臣下給申文、其外以詞被仰、有勅任者時被行也、傳關白給之、

大臣開見申文置前

仰云、早久、大臣寄紙摺墨擢久又紙在下內、不乘初方、每任一人讀申勾申文、無兄付

中爾官注墨於其官任所望官者注其由、

及三通以紙撚結之（或申文奥用之）

最初有書太政官謹奏之説（入道殿(藤原兼家)例也）　訖書年月日、一遍見撤宮中雑具、入大間膝行奏之、（持宮）天覧畢返給、結固成文、（引畳）訖召清書上卿給也、或自執宮出殿上給外記、（太政官謹奏、大入道殿令書給、仍一流人皆書之、他家不書之、）（謂道理者不可書事也、以失錯為家説者也、土御門右府、或時書之、或不書云云、其書様如清書、但有尻付也、結固成文、京極殿(藤原師実)命云、於成文者不可結、是上卿不可取故也、持宮撤硯宮中雑具等入件筥奏之、天覧了返給、如元盛硯筆等、取副除目於笏出殿上、）

臨時除目（臨時除目、於陣清書之儀也、）

召上卿一人行之、（不参御前）如女叙位、任受領、先下給申文、令諸卿挙申、上卿退下陣頭、書一紙参上奏之、（或以頭蔵人下給、相定奏聞後召上卿、）被任畢退下、召折堺、令参議清書、令持外記参上、付蔵人奏聞、（宿徳大臣若有所労、即或作在陣座令奏之、）

下給二省、（式部兵部）○其儀二省候由外記三度申之、（欲召先問候否、聞申候由、即仰可召之由、其後二度申也、是候内記所、及参近辺所申云云、雖無所據、已為故實、或申候由之後、猶三度申云云、非、）

其第三度仰召由之後、取召名北面居直、二省丞著靴参入、列立小庭、（南殿軒廊立）給召名、如常、各還立本所之後、仰云、末計給、若直物之次有召物者、豫示外記、先給召名、（仰可召由者、示召物云云、）後給直物、（召丞二人、各給之、一人参者、給二召名、封直物、令候外記、後日召給、近例雖一人参、相重給之、一省不参、先給一省、不必相具也、）如給宣旨之儀、（如給他宣旨、無妨、其儀丞不著靴、直進孫突、給之退出、其宣旨給殿上、輔丞者、或殿上、若陣被給之、直物無此例云云、）唯給直物者、二省候由不可三度申歟、而猶度度申、外記等所申也、可尋、

〔世俗浅深秘抄上〕一臨時除目、於御前被行例有之、或公卿昇進、或不然時モ被行、大事時必於御前有之、

〔除目抄〕臨時除目間事（付造寺宮城、宮次第使、装束使、）

臨時除目於御前被行、外記不進続紙御硯等、（殿上沙汰也、）上卿給之後、於陣清書之時、硯紙進之、二省不参者、上卿召外記、召名ニ加封（天）給外記、後日上卿召二省於仗下給之有例、又令外記傳給二省、流例也、臨時除目之時モ、依召闕官（諸国分已上）進之、又轉任勘文同依召進之、於陣書召名之時、轉任勘文

有其仁者、外記必進之、有其仁哉否、上卿又可被尋仰外記歟、是式部、民部、外記、史等之間被新任之時、轉任勘文可有也、縱又雖無新任之輩、有闕之時、先被行轉任常例也、

造寺宮城使等除目官行之、外記不口入、又伊勢齋宮除目次第使、裝束使、相副例文、注交名入宮進之、頭助已下ハ、本官注交名、直付職事云々、〇中略

被任征夷大將軍事(除目次任例、宣下例、見除目抄、)

勅

征夷使

大將軍正五位下藤原朝臣頼經

嘉祿二年正月廿七日

吾妻

除目下名次也、今日先任少將叙正五位下、元六位

太政官謹奏

右近衞府

權少將正五位下藤原朝臣頼經

將監

嘉祿二年正月廿七日

勅

征夷使

大將軍從五位上藤原朝臣頼嗣

寬元二年四月廿八日

吾妻

頼嗣去廿一日元服、從五位下藤光保被加叙之、已上三人、任官叙位、頼嗣今日卽叙從五位上、

太政官謹奏

右近衛府

權少將從五位上藤原朝臣頼嗣

將監正六位上藤原朝臣忠康

寛元二年四月廿八日

補將軍事、忠文、頼家、頼朝、實朝、頼經、(次下名)頼嗣、以上小除目次被任之、宗盛公、義仲朝臣等者、被宣下之、折紙幷聞書ニハ、征夷大將軍ヲバ、嘉祿、諸國ト近衛ノ上ニ書之、寛元、近衛ノ上ニ書之、

一補。侍。從。事

五畿内、吏之外、近江、丹波守候殿上者入之、此外國吏不兼京官、又未放還者不入勘文、先仰中務省令進侍從補任、而近代外記書之、入宮進上之、上卿召硯之時、六位外記持參之、九條殿說以宰相介書之、小野宮說自書之、被書侍從之時事也、

一被。任。秋。田。城。介。間事

出羽國

介從五位下藤原朝臣義景

外國召名、名所書加如此、即日被宣下之詞云、以出羽介藤原義景可行秋田城務、聞書奧所載又如此、嘉禎三年、義景拜任之時如此、件義景父、建保比被任了、其前後此事頗中絕、

復任除目

〔名目抄(諸公事言說)〕復任(フクニン)

〔延喜式(十八式部)〕凡諸國司及史生博士醫師、秩限未滿任他國、及遭喪之徒、服闋復任者、並通計前歷、若任於京官、更遷外官、及從番上轉職事、如此之類、不計前歷、

〔北山抄(六備忘略記)〕復任事(避御本命日、御衰日、朔日、重復日等行之、當日上(上卿)若有忌、讓他上令奏行ヘ)

上卿以外記勸文（文武官各別紙）奏之、即下二省、（〇二省長部）女官給中務、（近例成制可字、下之云々、非也、）外任者奏國解、（无國解者、又有別勸文、）書召名奏下如除目、（任符外印、）受領吏、或以詞奏聞、一人兼文武官者、各給宣旨、重服之人有卌九日內行例、（諸衛府生、太政官史生、圖主典以上例、左右弁官史生依官奏復任、三局史生或別奏云々、）

三局史生緣官奏復任別奏云々、太政官別奏外記申一上奏之云々、

〔夕拜備急至要抄下〕一復任除目（近代復任人、內々大弁職事爲不及沙汰、）

日次（外記相尋申之、以本會日、御覽日、膽之、日內會日、執柄奉行、上卿宣目、膽之、）

上卿參議（外國今者料、京官者以勸文、撰可字、或不擧之、闕說也、）

官外記

上卿招職事、被奏復任之由、付行例除目之時、外國勸文者、書連除目召名、或又別紙書不同云々、

〔除目抄〕臨時除目間事（中略）〇

〇復〇任〇除〇目（重服之間、復任已前、國之官人、今更不載勸文、觸物忌之時、宿紙書之、）

外記尋問日次於陰陽頭申行之、五十日以後、一紙之中必可申行之、又五十日內多有例、帶外國（守權守介）人可復任之時、外記催申書手宰相、是於外國者別シ天載召名、仍催之、於京官更不載召名、仍書手不入之、至于外國載召名之故、於國重可施行之心歟、京官者洛陽依顯然重不載召名歟、於復任已前者不書位所也、又春秋除目之時、非御前之儀、幷攝關初度除目者、復任者、外記兼書載大間、已先例也、公卿三通、京官外國□□通、（闕上）已上六通、但無其仁之時者又勿論、

勸文書樣

可復任（公卿不書名字、）

太政官

內大臣正二位藤原朝臣（家忠公復任時、不書名字、而仁治四二十二、復任勸文、內大臣正二位藤原朝臣兼平載名字了、）

權大納言正二位藤原朝臣某

皇后宮職

權大夫從三位源朝臣某

年月日

可復任

左近衞府

大將正二位藤原朝臣某

權中將從三位□□朝臣某

左兵衞府

督從三位藤原朝臣某

年月日

可復任者（非公卿者書者字）

神祇官

權少副從五位下大中臣朝臣某

中務省

侍從正五位下平朝臣某

可復任者

左近衞府

權中將正四位下藤原朝臣某

右馬寮

助從五位下橘朝臣某

可復任

備前國

權守從三位藤原朝臣

可復任者

尾張國

權介正四位下藤原朝臣

美作國

介正五位下平朝臣

年月日

公卿ヲバ載一紙、如書通召名、又內覽奏聞之時、可復任ノ可字ヲバ被摺之、上卿令宰相摺之、但以不摺爲佳歟、可尋知、可字不摺之時、京官勘文上卿不下宰相、或又雖不摺之、京官外國望所被下之、雖宰相可伺上宜、依上卿仰進退之、近代二省不參之時、此勘文下給外記、不加封、御物忌之時、宿紙書之、大臣復任不載加他官一枚載之、書名字如自餘、自餘以之可知、

〔本朝世紀〕正曆四年十二月廿四日丁未、中納言藤原顯光卿著左仗座、召大外記中原朝臣致時仰云、可引勘春除被行復任者、引勘承平四年天曆元四年例有者、參中此由、依件例被行五人也、內舍人藤原重仲、采女正賀茂信行、主稅權少屬角興保、左兵衞權少尉上毛野奉時、兵庫權允珍連、二省依不參下給局退出、

仁平三年八月九日丙寅、酉剋權中納言忠雅卿、參議經宗卿著仗座、被行復任除目儀事、(權中納言季成、太宰帥淸隆、兵部大輔高階忠能、少丞高階業卿、)太宰帥別載勘文、又書除目、依改次第、稅書（○稅書二字恐誤字）太政官謹奏、載折堺、不用黃

紙、勸召式部丞定宗、給除目幷勸文、

〔山槐記〕仁安二年五月廿七日、今夜有復任事、

〔吉記〕承安二年四月二日、今日有復任除目、上卿新中納言藏人次官奉行之云々、

權大納言藤成親、左少史大江盛景、修理少進中原賴基、近江守菅原在經、左近權少將藤盛賴、兼右馬允中原賴弘、

〔山槐記〕壽永二年二月十一日、今日復任除目、左少將時實朝臣、左衛門權佐公淸、菅博士房廣等也、皇后宮大夫、實通左大辨、經房參陣摺可字、爲隆卿摺之由左大辨申、上卿有兩說、可依家例之由被示、外任爲隆付復字、上卿不甘心、仍不付之云々、

〔吉續記〕文永四年十二月卅日、有除目、○中略今夜有復任除目、藏人皇后宮權大進奉行、除目催事以前先行之、六年九月廿七日庚午、今日除目、次西園寺中納言○藤原實兼復任事、外記申沙汰、予○藤原經長可奉行之由相觸、復任內覽事同有御免、今日雖爲上皇御衰日、依有其例被行之、以外記勸例先日奏聞畢、次參內、於鬼間出仕人、上卿藤中納言、宰相右大辨○藤原經任著仗座、上卿著端座、予下小折紙、以仰詞任人一人之後、自懷中取出小折紙下之、此後之儀如常、除目未畢、上卿召予奏復任候之由、予歸出仰所食之由、次上卿召予被奏復任勸文筥、勸文二通籠一懸紙、予付內侍奏聞返下、仰詞御覽シツ、

勸文書樣

復任

權中納言正二位藤原朝臣實兼

復任[illegible]

中務權少輔從五位上藤原爲行

西園寺中納言復任事、人以不審、著服之例雖爲常事、復任無例之由申之、大炊御門右府之例云々、若

不ㇾ似二彼例一歟、

〔園太暦〕康永四年三月廿日、於二本陣一有二復任除目一事、

可二復任一者

太政官　右大史正六位上安倍朝臣盛宣

中務省　少丞正六位上安倍朝臣盛宣

內記局　少內記正六位上安倍朝臣盛宣

圖書寮　頭正六位上安倍朝臣盛宣

大學寮　助敎正六位上中原朝臣師茂　直講正五位下中原朝臣師守

主計寮　權助正五位下中原朝臣師守

大炊寮　頭正五位上中原朝臣師茂

造興福寺　判官正六位上安倍朝臣盛宣

康永四年三月廿日

可二復任一者

參河國　介正五位上中原朝臣師茂

讃岐國　守從五位下藤原朝臣資定

土佐國　權介正五位下中原朝臣師守

康永四年三月廿日

〔宣胤卿記〕永正十七年十二月十七日、秀房朝臣狀、和氣明孝朝臣復任除服出仕事、

正四位下和氣明孝朝臣　宜ㇾ令二復任一

和氣明孝朝臣　宜ㇾ令二除服出仕一

右状返答云、無当官者、不可有復任宣下、当官可有御尋候、復任ノ二字をば何と御心得候哉、十九日、秀房朝臣状、一昨日明孝朝臣復任事、爲施薬院使云々、又令見案、

正四位下施薬院使和氣明孝朝臣

宜令復任

返答云、施薬院使無相当位歟、何様位有上不可然、略位不書之條、可然歟之由返答了、

○按ズルニ、此ニ掲ゲシ復任除目ノ外、ソノ喪解、起復等ノ事ハ、禮式部服紀篇ニ詳ナリ、参看スベシ、

兼官除目

〔百錬抄後深草十七〕正嘉二年十一月一日、任大臣節會也、(基平任内大臣)頭左大弁經俊朝臣奉行之、内弁春宮大夫通成卿勤仕之、經俊朝臣仰宣命趣於内弁、退下直廬著改装束、(下襲用有文帯、延五寸、)兼官除目以後申拜賀、向經所、出自直廬、立弓場第二間、以藏人申慶、(中略)○經俊朝臣任参議兼大丞、兄弟爲大弁宰相例、希代也、故大納言經房、光長卿、定長卿等許也、朝隆卿者、雖爲末子爲八座大丞、一門此外無先例歟、

〔吉續記〕文永六年十二月二日癸酉、参殿下、(基忠○藤原)兼官除目目六、上卿已下散状内覽、次参院、付右大弁(經任○藤原)除目目六散状等奏聞、

延治元年十二月廿六日、参院、今日兼官除目、予(經長○藤原)奉行也、

坊官除目

〔有職問答五〕一坊官除目事

春宮方除目之由、以前被仰出候き、(勿論候)然者於当坊御執行候哉、時節いつごろ大間など御座候哉、上卿(立坊トテ、皇子ノ春宮ニ御立之日於内裏被行之、執筆ハ大弁若ハ他ノ宰相也、清書ノ儀上卿トハ不可称、執筆ト可称候、仁安元年除目書之、)等ハ同ニ賞之除目、はいか成人御沙汰候哉、具に請上意度候、

〔江家次第十四〕坊官除目

公卿在陣

頭藏人著軾召、攝政御消息有所勞、(近代不如此字、)不能著陣、人々此方、

殿下横座　公卿著大臣一人必可候

攝政召大辨、諷四位可召名、觸書、大辨微音稱唯著座、依殿下御氣色、召五位藏人名、其人參入、仰云、硯續紙入柳筥持參、硯、筆、墨、小刀、硯水瓶、續飯、并續紙二卷、各六許枚大辨取之置前、殿下給申文、大辨押筥於下、插笏進給之、復座、殿下仰云、早久、大辨開申文見之、次取紙先書太政官謹奏字、後申案內任之、皆利闕也、仍不召闕官、任人及三人以燃紙結之、破申文與用之、任畢注年月日、一遍見之、撤筥內物入大間、如先奏之、此間持筥而居、殿下見畢置給、大辨持筥復座、結固成文、引封更進之、取筥歸入雜具、

每任人、懸申文勾、申舉官者注任官、轉任他官者注其由、長木鳥衞門廐兵衞自餘馬允許二人文官等、

裏書、延久四大府記、帶刀一年二人任衞門尉、連八人各任申請任院司允、右衞門尉親元渡左、是男甚愛依任右也、

殿下召淸書上卿給之、即於御直廬令參議淸書、畢更覽後歸陣、行淸書并下名如常、

〔本朝世紀〕治暦四年十一月九日戊寅、有大嘗會國司除目事、近江備中內大臣以下參入、

康治元年十一月九日丁酉、此日、內大臣參仗座、被行大嘗會國司除目、參議藤原公行卿書之、又有賑給、并位祿等定、○中略

近江大掾賀茂憲榮兼

少掾藤原俊永　安倍盛實　同親良　紀成俊　藤原宗敎　中原元貞　平村安　大中臣季近

紀行信　大中臣友正

丹波大掾丹波重長兼侍醫

少掾同　良康　藤原道能　賀茂憲仲　同憲定　和氣爲相　大江俊時　三善宗親　淸原友親　大江重盛　平員仲　惟宗廣吉

康治元年十一月九日

十四日壬寅、今夜大宮會叙位儀也、於攝政直廬被行、（桂芳坊也）參議藤原公行卿從執筆、右少辨藤原光頼、藏人勘解由次官同光房、藏人治部權少輔平範家等取筥文、權中納言藤原重通卿行入眼事、參議敎長朝臣書之、次有請印事、少納言藤原成隆勤之、以右近少將藤原行通朝臣爲輔代、

正三位藤原重通（權中納言）　同公能（權中納言、右大將、土御門內裏賞讓、）

從三位藤原公隆（丹波權守）　大中臣清親（祭主）

正四位上源顯重（神祇伯）　丹波重基（丹波典藥權守勞）　藤原忠頼（近江守勞右近中將）　源雅通（近江權守勞左近少將）

從四位上藤原光忠（丹波守勞左近少將）　藤原公信（丹波守）　藤原朝隆（高陽院御給權右中將）

正五位上藤原憲方（近江守賞左衛門權佐）

正五位下賀茂守憲（陰陽頭）　高階清泰（皇太神宮）　賀茂憲榮（近江大掾陰陽權助權曆博士）

從五位上橘重忠（從下一）　丹波知康（權醫博士有基男）　藤原宗親　同信經（歸一）

藤原家房（新院）　丹波重成（醫博士）　藤原數顯（左馬助）　丹波重長（丹波大掾侍醫）

藤原俊盛（皇后宮丹後守）　同重家（近江權守顯輔讃、周防守、）

從五位下實廣王　高階是泰（藏人）　藤原清種（民部）　源光俊

大江政賢（外記）　三善惟康（史）　源範基（式部）　藤原重能（使左衛門尉）

藤原俊永（近江掾）　安倍盛言（同）　同親良（同）　紀成俊（同）

藤原宗政（同○政上文作敎）　中原元貞（同）　平時安（○時上文作村同）　中原季近（○中原上文作大中臣同）

紀行信（同）　大中臣友正（同）　丹波良康（丹波少掾）　藤原道能（同）

賀茂憲仲（同）　三善宗親（同）　賀茂憲定（同）　和氣兼相（同）

大江俊時（同）　清原友親（同典藥屬）　大江重盛（同）　平貞仲（同）

惟宗廣吉（同）　藤原實宗　大江重遠（東市佑）

康治元年十一月十四日

〔吉記〕元暦元年十一月七日壬辰、今日被行大嘗會國司除目、上卿皇后宮大夫實房參議右兵衞督隆房卿、事仕執筆、頭弁光雅朝臣奉行也、先有大嘗會三社奉幣之定云々、

近江權守藤原泰通兼　權介源兼忠兼

大掾安倍有親　掾源盛久

藤原貞久　同時通

中原盛宗　同為清

清科盛實　同重義

同季永　同盛行

依智秦盛清

丹波權守藤原忠良兼　大掾安倍貴元兼

少掾安倍業行　中原盛房

勝部泰頼　藤原頼遠

惟宗盛季　藤原能遠

大江宗弘　中原宗行

源義盛　惟宗守信

於少掾者、卜食國司所擧申也、

〔明月記〕建暦元年十月十四日、午時許參院、除目之次申入少將〇藤原爲家悠紀主基國司事、付宰相、天氣〇順徳頗快然之由、昨日有其告、便國司除目來月云々、

〔百錬抄十五後嵯峨〕仁治三年十一月四日壬午、國司除目也、〇此月十三日辛卯大嘗會

祭除目

寛元四年十一月九日甲子、被ㇾ行二大嘗會國司除目一、權大納言公相卿參入

〔夕拜備急至要抄上〕一賀茂祭〈○中略〉

供奉官除目〈兼日申沙汰之〉

〔仲資王記〕文治五年四月十三日癸酉、祭除目也、按察卿〈○藤原朝方〉幷侍從朝經、右兵衞尉政綱等解官云云、

○按ズルニ、祭除目トハ、卽チ賀茂祭除目ヲ云ヘルナリ、

〔仲資王記〕建久五年三月廿九日庚寅、今夜直物云々、祭除目相兼歟、

元久元年四月十二日乙巳、祭除目以外大除目也、

〔平戸記〕仁治三年四月九日辛酉、昨今殿下〈○藤原良實〉御參内、今夜可ㇾ被ㇾ行二祭除目一、仍其沙汰之間御早參云々、〈○中略〉乘燭之間、被ㇾ行二除目一、是祭供奉官等也、

寛元三年四月八日壬申、今夜被ㇾ行二祭除目一云々、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元三年四月十五日己卯、小除目也、侍從公寛任二右少將一、依ㇾ可ㇾ勤二仕祭使一也、

〔吉續記〕文永六年四月十日、今日被ㇾ行二祭除目一、頭右中辨〈○藤原經任〉奉行也、

追儺除目

〔歌林四季物語十二冬〕つゐなめしの除目といふは、二度の除目にさはりありて申しさせしを、そのこゝろざしなぐさめ給ふて、おこなはせたまふこととなるべし、

〔中右記〕嘉承二年十二月卅日、入ㇾ夜參内、依ㇾ可ㇾ勤二追儺上卿一也、〈○中略〉藏人弁下二宣旨一、諸國丙三重任計歷事也、皆下二同弁一了、

〔台記〕久壽二年十二月廿九日壬寅、余〈○藤原賴長〉廬不二追儺一、依二中陰一也、今夜小除目云々、

〔三長記〕建久六年十二月卅日庚辰、參二殿下一、〈○藤原兼實〉仰曰、追儺之次可ㇾ有二除目一、有ㇾ可ㇾ任之輩一、先日可二注申一、兼注二折紙一、相具仍經二御覽一、有二御合點一、可二奏聞一之由有ㇾ仰、仰云、追儺之次、必不ㇾ可ㇾ被ㇾ行二除書一、前關白〈近衞殿○藤原〉

〈基通〉子息侍從事有勅許、其次急速之用途等進納覽、少々可被任候歟、勅定聞食了、支終許、上卿源中納言被參、於殿上邊招予〇原缺 被尋□追儺之次、無被付行事歟、答云、有除目、然者先可行、即被著陣座、奥座、予持宣下文等、〈申文五通、□解六通、加之闕國闕解文三通、受領舉正、辭書一通等、加闕紙、一通內辭、龝三通、以上文書皆引裏紙、〉就座下、仰由可被行除目、〇下略

〔園太曆〕貞和四年十二月卅日、今日追儺之次、被行小除目云々、所望畢少注進了、上卿大宮大納言、參議春宮權大夫ト云々、

〔內裏式〕丁任女官式

侍臣於殿上喚中務宣、補任將參來、卿先侍殿上、大輔執補任宮、少輔執硯宮、升殿、卿傳執補任宮、大輔執硯宮、少輔退降、勅曰、將參來、卿稱唯進奉覽、少退侍、御筆點定可任者、賜卿、就本座書除目、訖納宮蓋候、勅曰、將參來、卿稱唯進奉覽、勅曰、令唱、卿稱唯復本座、授大輔、少輔升執硯宮、訖以次退降候陣側、輔執計名簿、〈寫書除目、闕大輔書之、若無大輔少輔寫書之、〉授於內侍預令點撿、少時內侍率可任者、〈初出之間、在先率之、列坐之時、居同位上、〉列坐南廂西第一間、東面北上、異位重行、闈司坐最下、訖內侍〈闕引之外〉導臨檻召中務侍陣、輔稱唯升當御座侍立、於簀子敷上唱之、〈若有不參者、闕同代喚呼也、〉被唱之人稱唯進簀子敷上、當南廂西第三間、北面東上侍、列坐之事、一同初儀、其夫人以上者、不任唱任之例、訖輔退降、次被任人自下退出、唯典侍已上別留、再拜而退、

〔儀式〕八任女官儀

侍臣於殿上喚中務宣、持補任參來、卿先侍殿上、大輔執補任宮、少輔執硯宮、升殿、卿傳執補任宮、大輔執硯宮、少輔退降、勅旨將參來、卿稱唯進奉覽、少退而侍、御筆點定可任者、賜卿、卿就本座書除目、訖納宮蓋候、勅曰、將參來、卿稱唯進奉覽、勅曰、令唱、卿稱唯復本座、授大輔、少輔升執硯宮、訖以次退降候陣側、輔執計名簿、〈寫書除目、闕大輔書之、若無大輔少輔寫書之、〉授於內侍預令撿、少時內侍率可任者、〈初出之間、在先率之、列座之時、居同位上、〉列坐南廂西第一間、東面北上、異位重行、闈司坐最下、訖內侍〈闕遣之外〉人臨檻召中務侍陣、輔稱唯升當御座侍於

資子敍上、當南廂西第三間北面東上侍、列坐之事、一同初儀、其夫人以上者、不在唱任之限、訖輔退降、次被任人自下退出、唯典侍已上別留、當拜而退、

〔延喜式十二中務〕凡任女官者、隨內裏喚、丞以上入候、事見儀式、

〔新儀式五臨時〕任女官事付補女職事

召大臣於御前、定任女官、具見任例、大臣退下、淸書除目、奏覽畢返給、卽下所司女官、或南殿之儀、近代不行之、

〔西宮記正月下〕女官除目停任、復任、仰中務省、或令外記傳仰、

上卿奉勅著陣、或於御前行之令參議書除目、外記置硯筥、書畢奏聞、就御所下給之後、召中務丞下給、丞著淺履、中務省寓、

案文上外記、或進正文、天慶元年十一月十五日、中納言實頼宣、以正勅旨進外記者、延喜六年十二月十三日、左大臣宣、自今以後、於官書留案文、正書卽進外記者、

除目體

勅旨白折紙帋

內侍司　尙侍從三位藤原朝臣某子

縫司　典縫從五位下藤原朝臣某子　掌縫正六位上某姓某子

年月日

天安元年十一月廿七日、有女官除目、以從三位廣井女王、浦虫子二人任尙侍、別紙、自餘任數司、元慶八年四月二日、尙侍從三位藤原淸子、膳司五位宗岡瀧子載一紙、康保四年九月廿七日、從三位藤原灌子、典侍五位江皎子載一紙、

〔北山抄六備忘略記〕女官除目事五位以上、四位以下、往古別紙云々、近例不然、案之、唱人不殊、別紙无所據歟、召上卿行之、如臨時除目、但書勅旨、男官勅任、只書勅、事雖不同、然而往年或書勅任、又書白紙、隨時不同耳、不用黃紙、召中務輔若丞給之、上古輔着職云々、近例如給宣旨、

〔傳宣草上〕女官

口宣一紙藤原懐子任典侍事獻之、早可被下知之狀如件、

正月廿五日　　　權大納言判

大外記局

〔百寮訓要抄〕式部省

昔は一分めしの除目とて、此省にて諸國の史生などを任せられし也、

〔職原抄上〕式部省

凡當職、其寄異他、毎年於本省行諸國一分召也、一分召者、任諸國史生之名也、史生即之一分、内給、院宮、大臣已下參議已上、皆有年給、式部卿行之也、近代其禮久絶畢、件日者、式部卿乘庇差絲毛車、殿上丞一人乘結唐尾馬、前驅云々、

〔小野宮年中行事二月〕式部省行一分除目事或正月行之

前一日下給諸司奏内給、并人々給文於上卿、上卿喚省輔給之、

主上曰、諸司奏給式部省之數不過十枚、是故實也者、故左大臣藤原時平所奏、

〔西宮記二月〕一分召卿參省行之、丞一人乘結唐尾馬、卿乘絲毛車、或於里第行之、

省卿以殿上丞令奏可行一分召由、頭奉勅仰諸司所所、令進申文撰定奏聞、以内給案文下内給所、當日召上卿給宣旨、上卿召省輔於陣下之、續目錄内給廿人、先國、次書品官、次闕、次書一分、不滿廿人者、注未補員、人給在此中者無尻付、乳母女房中正員品官、不入内給、以諸道舉補之、所所小舍人、御書所小舍人、穀倉院雜色、内御書所小舍人、作物所小舍人、御厨子所小舍人、内豎寮小舍人、御院○御院恐院御讀厩舍人、近江國日次所預、交野長、御鷹飼官人、樣手等、以内給給之、舊名替別紙、三宮御給一束、三人公卿給一束、太政大臣三人、大臣二人、納言參議一人、女御一人、内侍給一束、上下一人曾省官給一束、輔二人、輔丞一人、録并遣省二人、嘗家二人、諸司當國一束、諸司年料一束、大舍人一人、近衛一人、兵衛一人、右衛門一人、隔年、撰宣旨一束、中文數二一國由、緣國字撰以墨點、撰二之撰宣旨、諸道儒後舉一束、不入撰宣旨也、諸司勞奏一束、不入撰宣旨、在式仍不入、巳上毎

東作短尺也、正員申文、皆出省權任奏、内給正權通補（除目擧、一通進藏人所、）太宰品官、經博士、明經擧、陸奧博士、記傳擧、（已上二所品官入大除目、不入一分召、）

内給書様（以紙屋紙書之）

内給廿人

山城權博士從七位上秦宿禰氏兼（御厨子所舍人労）

大和權醫師從七位上多宿禰某（御鷹飼正右近府生）

備前權博士正六位上五百木首利生（藏人所小舍人）

山城史生從八位上國宿禰貞永（内御書所小舍人）

播磨史生從七位上伴宿禰正行（穀倉院雜色）

因幡權弩師從八位上犬飼造今成（作物所人）

人給

近江權博士從七位上曰佐宿禰吉文

美濃權史生各務村連秀長

乳母女房申、注人給無尻付、

十二人未補

某年月日

名替

内給

某國史生某姓某丸（停去年内給秦氏兼之替、二三人闕有、）

某年月日

〔西宮記臨時三〕一分召時宣旨事

式部省定日、奏聞可行一分召由、先一日、諸司所々奏、公卿請文等、從御所下給、傳仰云、擇定可下者、上卿選定之間、所用之文書、一分之闕國、補任帳幷年々宣旨抄等也、卽撰定訖、(者有遣失之文、相加奏聞、)返奏、勅許之後、(上卿謄寫留其目錄、)召式部省輔於陣膝突給之、或於御前被一定之後、各點定申請之傍、而下給矣、(公卿之給者、以墨點其上、)仍上卿謄寫、留目錄、卽召輔下給、更无何煩、但件事觸色有其例、公卿之給者、以品官之權任一分等申請、至于品官正員、道々受業練道之者所給也、省任道理補定之、(一分正員又任、)又諸司之間、或有每事年給之司、或有隔年給之司、(諸道又有給隔年、)如此之事、甚以繁多、善々可尋先例、故堀河左大臣(○藤原顯光)所奏、先例諸司奏者、不過十枚、但近年所下之宣旨、總數七八十枚許、殆可及百、(○又見北山抄、)

補國史生

〔延喜式十八式部〕凡主計、主稅、勘解由等寮使史生、勞十年爲限、以外諸司史生、廿年爲限、並補諸國史生、

凡大舍人勞廿年爲限、每年一人任諸國史生、

凡左右近衞長上十五年、番上廿年爲限、每年各二人、左右兵衞各一人、左右衞門隔年各一人、任諸國史生、

兼國史生

〔延喜式十八式部〕凡任外國諸司史生、准諸國史生中補任、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

抄符史生兼諸國一分事(入官奏、奏報云、一分召時給之、○中略)

補諸司史生

諸司史生(修理職、木工、主殿、内藏、内匠、上補奉勅下式部、等、自餘式部補之、民部本省補之、兵部同之、)

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、神祇官四人、(○中略)其式部、民部、兵部三省史生者、試練景迹、然後取用、亦不得輒補畿外人、但太政官左右弁官、内記、中宮、内藏、縫部、木工、主殿、掃部、修理、春宮等官職、坊寮司史生、待宣旨補任、勘解由、齋院、施藥院等使司史生、侍從、官下名簿、不試直補之、兵部省、春宮坊監署等史生、

待本司移補之、大學寮權史生、待寮進名簿不試直補、

凡雜色輩、頗有耐書算者、省課試補任諸司史生、

古事類苑

政治部十三

上編

除目中

〔西宮記 正月下〕除目

大臣奉勅仰外記及辨、〔一大臣異事、仰〕於外記、外記自圖書若藏人所請大間料紙、當日大臣已下自陣着議所、〔以内豎〕立大臣〔後豎〕、藏人召、〔藏人頭於御前撰定申文等〕外記取筥文、〔大臣仰〕大臣到射庭、參御前、〔納言已上執筥〕同敍位儀、○下略

〔撰集秘抄〕春除目〔又云縣召除目〕

大體○中略

執筆仁事

御前儀左大臣候之、〔關白餘大臣勤仕有例〕若有障之時、次大臣幷納言又得、○中略

初度御前儀事〔攝政御前可准之歟〕

不進故者申文

服者退出

不任死闕〔中山内府抄如此、永久鹽記、直被補死闕、大治等其例多、〕

初日不定功過〔中山内府抄如此、但三ケ夜不定云々〕○中略

召諸卿事

御前儀代始初夜藏人頭、中夜五位藏人、竟夜六位藏人、常儀頭若五位藏人兼奉行之、每夜與奪六

位藏人、○中略

取宮文人事

御前儀、大中納言、（近代一大納言不取之、或猶取之有例、候執筆之時、雖第一必取之、）無人數之時及參議、無公卿之時及侍臣有例、○中略

召院宮御申文事

御前儀、大臣問在座之參議於傍人召之、或召中納言、○中略

勸盃事○中略

御前儀、執筆預巡盃、○中略

下勘申文○中略

御前儀、召參議下之、

於直廬行除目

〔年中行事秘抄正月〕十一日除目事○中略

攝政之時、於直廬行之、

〔西宮記正月下〕除目

有攝政者、著議所行、參議執筆、有所勞者、以弁示諸卿云、有所勞不能著議所、此方仁、諸卿向宿所、攝政在簾中、弁執宮文、內藏儲饗、除目後、攝政下公卿給、

〔江家次第四正月〕秋除目（攝政時儀）

藏人（五位帶弁者爲先）來陣（著陣突）傳攝政命、（其詞曰、有障不著陣、人人此方著、）大臣召外記仰云、宮文候、外記三人取硯宮一合

宮文二合、列立小庭、公卿著直廬、

攝政（橫座）　大臣（奧座）　納言以下（對座）

辨取宮文（雖昇殿人、尚搢笏、）

入自攝政座次間、於長押上膝行三度置之、於攝政座與執筆圓座之間、(以奥上)方膝行退於長押上、披

笏、不揖而退、

攝政召大辨、(其詞、左大辨參來、)

大辨微音稱唯、揖起座、經落板敷進入自攝政座次間、於圓座邊膝行、著圓座揖、(欲居圓座間、懸手置座、)

攝政仰云、早久、

大辨微音稱唯、小揖置笏於左、開見第一筥文書、移之於第二筥、(唯留闕官帳二卷、)取擧第一筥、推下硯筥於

其跡、以筥文置硯跡、更開見闕官帳、如本置之、推下硯筥以下於左方、(爲路料也、)搢笏取闕官筥、膝行置於

攝政前、頗退(猶未到本座、)拔笏候、

攝政見畢返給、

大辨搢笏、(欲實覽之、今案、還擧給闕可歟、)給之退候本座、拔笏置之引硯匣於本所、以闕官匣置本所、(不返入初所移文等、)

擬笏候、

攝政仰云、早久、

大辨置笏、取大間(在硯匣、)取懸紙、編卷置硯筥中硯下方、次開之、(大間也、)徐置座奧方、長一尺五六寸許、徐

帖之、奧三枚許不徐擧、堅卷爲軸代、於事有便、其軸代便插於大間帖目之中、件大間以奧爲表置之、

(待大間之間、自向攝政方、置已上向奧方、待之、)擧取笏候、(顧氣色、候、)

攝政仰云、早久、

大辨置笏、或說微音申、可給三省奏由、(近代不然、)先取式部省奏(在硯筥、或在二筥、)於左膝披見之申、式乃省乃史

生某姓某丸(登)申天、隨御氣色置奏、取寄物置前、開見之、(見大間日闕、)畢卷寄物置前、開大間書載之、(最初一兩

人者、猶可取大間書之歟、)書畢置筆於筆臺、(若有誤不返置筆、有給失疑、)次取擧大間讀申之、不讀尻付、次省奏懸勾、如本入之、

次寄物著點(所任之官也、)

件三局史生、九抄任播磨備前美作讃岐等目、掠用者不可然、

次大辨端笏申云、院宮乃御給乃名簿取（胃）遣（左）奉、可許之後、大辨稱唯、召曰、某（辨名也）被召者參進、經簀子敷、候大辨後緣、大辨仰云、院宮乃御申文取（胃）遣（世）、辨稱唯退出、次攝政下給申文等、（各有短冊）大辨置笏於左方、及給之、置硯前、選出可袖書申文、置硯筥左方、（此間可任民部兵部史生等）

次袖書於公卿給等

院宮未給（可勘給不）　公卿未給同之

院宮名替國替（可勘給不）　公卿同之

院宮內官未給（可勘給不）

院宮任符返上（不下勘）　公卿同之

納言二合（可勘二合年）

次又召辨名、下給件申文等、（不解短冊）

次院宮御申文若持參者、大辨取集之、（自此登被申之所所、可案取之、此間總十三所內）不被奉申文之所、自此登被申、

次又推下硯以下於左方、取副申文於笏、膝行置笏奉之、頗退取笏候、（大臣儀插笏奉之、至大辨者、可置笏云云、以此爲別歟）攝政開見之、留懸紙所置前、（裏紙若不被留者、臨時可任京官時上下給之）若有任官申文者、書載之、（置筆於本筆臺、讀申大間）勾申文入一筥、寄物著點、一如上儀、若及三通時、以紙撚結之、其儀取在二筥申文、以手破取其奧、（可撚之、仍可取二通奧歟）撚之、結申文入一筥、有後加申文之時可剌加之、此間公卿給等勘上、亦可卷重、未給、（置硯北）國替、（以上二束者、人次第卷重之、）名替、（道次第卷重之、以上各置硯尻付）亦置於座右、（次第任之、作法同上）又可剌於成文、

臨時內給、當年內給、院當年御給、

陽明門院去年御給

二條院寬治元年御給

停皇太后宮應德三年御給茨田成元改任

停皇后宮去年御給丹波掾石作長武所任

無品内親王當年給

一品聰子内親王去年給

女御道子朝臣臨時申

女御源基子當年給

攝政（〇藤原師實、應德三年十一月二十日攝政トナル、）當年給

權大納言源朝臣（顯〇雅實、應德三年十一月二十日權大納言ニ任ズ、）當年給

左大辨大江朝臣（〇匡房、應德元年六月二十三日、左大辨ニ轉ジ、寛治二年八月二十九日參議ニ任ズ、左大辨故ノ如シ、）依獻去年五節舞姬二合

所任

返上公定朝臣去年給丹波掾金武任符所任

若有顯官擧者、攝政傳大臣令下之、仍大辨不預其事、若有僉議者、隨位階大辨定申之、

文章生（天德四年御記、藤原斯生任ニ橘正忠、偏ニ編入所名簿次）

諸道得業生（文章得業生、明法本ノ作ル一得業生、）

（或如前字、諸道内官學、民付不可有前字、疑是可爲諸道得業生之下注歟、可考他本、）

依課試及第勘文任之、件勞帳勘文等依任縣勾、（但不注任國）

問者生（明經問者生）依勞帳任之

諸道擧（明經擧、算道擧）（或加前字）

三省

治暦四（式能登、民因幡、兵若狹、）治安二（民河内、兵紀伊、）長元七（式大和、民參川、兵伯耆、）萬壽元（式大和、民伯耆、）長元八（式大和、民備後、兵山城、）

任畢若有二夜者、卷大間加懸紙、以紙撚加成文、結中加封、加入於一筥、插笏進之、亦推下硯筥、如前、未定申文等同加入之一筥、有兩三申文、其中成者入成文束、不成者入外記筥下之、誤文亦入外記筥、其外殘文若有之者可返上也、不入於成文筥也、闕官寄物如元入硯筥、次起座退下、竟夜置笏卷大間、懸紙結成文共入筥、不任申文共入外記筥、次押下硯筥以下、次插笏取大間筥、膝行奉之、拔笏退候、攝政見畢後留前給、次退下、

〔蟬冕翼抄〕春除目（又云縣召除目）

大體○中略

執筆仁事○中略

直廬儀、參議大弁候之、若有障之時、他參議亦得、或抄云、大弁宰相用左大臣之作法、他參議可用納言執筆之作法云々、此事未必然歟、猶可勘決、○中略

召諸卿事○中略

直廬儀、每夜五位藏人傳攝政命、以弁示諸卿之由、見于西抄云々、○中略

取筥文入事○中略

直廬儀弁官無人數之時、五位藏人無件輩之時及侍臣有例、○中略

召院宮御申文事○中略

直廬儀、執筆以弁召之、可申定其人、○中略

勸盃事○中略

直廬儀、執筆不預巡盃、○中略

下勘申文事○中略

直廬儀、召弁下之、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年十月七日壬戌、於左大臣〈○藤原實賴〉職曹司被行除目、
〔日本紀略圓融六〕天祿元年八月五日、於淑景舍除目、
〔日本紀略後一條十三〕長和四年十月廿七日甲辰、自今日左大臣〈○藤原道長〉直廬飛香舍、〈○左上恐脫於字〉始行京官除目、其儀如攝政之時、大納言公任參仗座、召大外記文義仰云、除目雜事、宜令左大臣准攝政儀行之者、
廿八日乙巳、除目、
〔百鍊抄四三條〕長和四年十月廿七日、左大臣〈○藤原道長〉准攝政、可行敍位除目事之由宣下、依御藥也、仍今日除目、於直廬行之、諸卿參被所、
〔猪隈關白記〕建仁二年正月十九日乙丑、此日春除目始也、〈直廬也〉執筆左大弁資實云々、殿下御宿侍也、今朝外記持來闕官帳、〈入筥、有懸紙、〉留文返賜筥、當年給申文幷申御監馬允申文等付頭弁了、當年給申文書樣如例、〈書紙有懸裹紙等如例〉

從七位上藤井宿禰行永

望請國掾

右當年給二合所請如件

建仁二年正月十九日　　右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣家實

御監馬允申文書樣如此〈書樣紙、有懸紙裹紙等、〉

請特蒙天裁、因准傍例、以正六位上藤原朝臣貞實、被任馬允闕狀

右謹撿故實、御監請任寮允、古今之間、縱跡多存、今件貞實、素慣忠勤、頗堪其職、望請天裁、因准傍例、以貞實、被拜任允闕、將令致奉公之節矣、仍勒狀謹請處分、

建仁二年正月十九日　　右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣家實

廿一日丁卯、除目入眼也、後聞、御監馬允任了、又當年給任但馬掾也、　廿二日戊辰、早旦殿下自內出、

於仙洞行除目

執筆

給除目之間、令候内給也、　廿三日己巳、此日有除目、下名云々、上卿新中納言宗隆卿云々、三位中將叙正三位也、

〔百練抄十六後深草〕建長三年十二月廿二日丁丑、於攝政直廬被行京官除目、

〔神皇正統記白河〕おり位にて世をしらせたまふこと、むかしはなかりしなり、○中略圓融の御時はやう〳〵しらせたまふこともありしにや、院の御前にて攝政兼家の大臣承つて、源時仲の朝臣を參議になされたるとて、小野宮の實資の大臣などは傾け申されけるとぞ、

〔愚管抄下〕於仙洞行除目、

壽永二年癸卯八月十日、法皇○後白河御于口殿御所被行之、三條大納言實房卿、參議左大辨經房卿口仕、

〔羽倉考一〕執筆　闕官ヲ書立テ置テ、當日官ニ任ゼル人ノ名ヲ、其官名ノ下ニ、書加フル當日ノ役ノ名ナリ、

〔江家次第四正月〕除目

執筆事

装束不必靴、但下重不用舊、纔足之歟、

插笏肥大之人、伸左足而插之、

以上二條關白仰

大間或先請外記、付折目而返之、於御前帖之、有便宜後帖也、如葉子重帖之、一長不足紙三枚、故師成朝臣曰、四條大納言說懸紙一枚許也、不書紀代奥爲軸代而插於大間、

硯不用唐硯、　筆不用丹管斑竹等、

以上外記持來闕官之時與之令入

紙牋被分在第三宮中文之奥、若懸紙、不用刀、成本自插著懷中、或有損職之說、侯不可有結目也、往年率仕除目時用此說、二條關白後日被仰云、書成文之中有此例、於誰人乎、是幽遠之說也、

尻付事（依前例、是皆記也、以鳴爲先、執筆之人書白名、當院當宮、不載王孫）

讀申事（不讀轉任名帶等、又不讀尻付）

撤硯筥以下事（撤執政座時、引硯筥於右、以其間爲隙、撤不被候時、在座者撤硯筥以下、可置於左方）

最初夜（奏闕官）　（奏院宮御申文）　（進大間）

次夜（下給大間）　（闕官事）　（進大間）

次夜（下給大間）　（受領事）　（奏大間）

毎任一官有數事

取申文當左膝開見之　次當御前申之　（叡許可置申文）　開寄物見可任官（巡畫）　又奏可任某官之仰　執筆取寄大間書載　置筆於筆臺（不置者失錯）　取寄大間讀申畫之　勾申文（合點於所任官、任不遷官注其官、）　加成文（及三畫時加之、以硯中文則加）　次點於寄物（巡畫）　若爲可取闕之官、取闕於大間、又注寄物闕、　毎任畢、常執筆候、常知有所思所任之失錯有無也、不知案内之人早速奉仕也云云、

付大間封事（中夜懸紙以爲續、通去夜懸也、）

竟夜執柄不被候者、大閤可加封遣彼第、仍以非懸紙之紙、可書受領下書、（受領下書用件懸紙）

磨墨事（除目講墨、依位階墨云云、一度磨之、不再磨、凡爲令水皆爲墨久磨之、）

著座事（不謂不一度正座、先跪於圓座外、依氣色著正座、一度著座時、先申請執政云云、除日以前預申請、）著圓座時、故二條大閤白頗懸手於圓座、若依無心居時圓座動去歟、

二條大閤白、參奉大閤、當板敷被突、宇治大臣被稱不知之由、

受領申文上、近代被記某人、（二條關白被稱不知之由）

親王巡給（一品親王、若兩親王）　別巡給　別給（皆有例）

巡給者以一代後爲一巡、　或男女親王有十人者、十年爲一巡、此說非也、

召使兼國（見式、近代無知人、或執筆被任伊豫、不可然歟、）

公卿給（不皆悉任之、往年召任年次第勘文被直任、）

凡院宮公卿申文（必下勘畢後任之）

大臣二合不必下勘之（近代被勘）

內給（又准之）

除目者、以諸道者多被任爲良、（故藤俊綱傳宇治殿仰）

除目者、先任下官、漸及高官、（同上）

非准后之親王、遙給年任三分、（無任二分之例、而近代兩度有此例、可怪之、）

改小任大　改權任正

父某讓　某不任替（件等尻付、希有之事也、）

大辨於執柄前奉仕除目時、禮略目、大臣於御前奉仕之時、依共爲臣下歟、（但儀儀可尋之）

齊光奉仕除目、成文留家、近代留攝政家、

初入除目之者、皆有尻付、

但諸國掾目（人給）　遷任時（猶有尻付）

諸道得業生（先兼外國）

文章生（外國後入除目、猶有尻付）

五位已上雖初入除目無尻付

無官出納任上官、無尻付、

實資大臣老後除目、有受領尻付、宇治大臣被付爪注、執筆爲耻、

名替不奏任之

除目間臨時所召勘文(諸國不注國、藏人所等勞帳不注官、)等、皆留御所、所々勞帳、歷名勾不注國、
寄物別返上由、見故源右府抄、然而猶可加成文、
除目以塗墨書物、並無可書所之時、書他所釣之、以此等爲證、

〔北山抄〕(三拾遺雜抄)除目

裏書(略)○中

大臣候御前、納言執筆例、(天慶五年三月廿九日、左大臣候御前、大納言執筆、)

納言執筆、他納言近候例、(同年十二月七日)

大臣執筆、納言近候例、(同八年三月廿七日、任大臣後初候、爲日候氣色召之、)

同十年正月廿七日、依例右(○右字恐左字誤)大將相並候御前、貞元之初、關白(兼通○藤原)左大臣(兼明○源)始行之後、稱有所勞、讓右大臣(賴忠○藤原)令奉仕、

〔蟬冕翼抄〕春除目(又云縣召除目)

執筆仁事

御前儀左大臣候之、(關白兼大臣、勤仕有例、)若有障之時、次大臣、幷納言又得、

初夜左大臣候執筆、中夜次大臣若大納言候執筆之時、大間猶左大臣亭、

直廬儀、參議大弁候之、若有障之時、他參議亦得、或抄云、大弁宰相用左大臣之作法、他參議可用納言執筆之作法云々、此事未必然歟、猶可斟決、(略)○中

執筆當日用意雜事

初候人致祈禱事(當日修諷誦、其外修法幷供等、人々所爲不同也、)

大間不載復任(兼卿大外記)

闕官勸文不注死闕二字、

已上兩事、大臣時事歟、參議未必然歟、廣可勘決、嘉承二年正月廿六日、中宮權大進實房任（復）見爲
隆卿記、

官次第暗誦事

補任歷名諷樣事

人姓名諷樣事

御諱字暗誦事

夜々任人次第書令懷中事

硯墨筆賜外記令入筥事

大臣者召外記於里第賜之

參議者不賜硯、或以石如瓦硯作之、參陣之後潛取替之、於墨筆者必賜之、

寒夜硯瓶入酒事

裝束事

於袍者强物不可著之、於下襲者、頗可爲新物歟、九抄云、下襲可著一兩度著用之衣裳、是進退之
間、於事有由云々、

此外觸事類可有用意事、不能悉記、〇中略

凡任一人間作法事

一　取請文讀申置之

二　見寄物返入硯筥

三　引出大間之可任之所

四　染筆書付大間

五　置筆

六　取揚大間讀上任人

七　披請文染筆懸勾

八　置筆

九　卷成柄推成束

十　若遷本官者、染筆大間取闕、

十一　置筆

十二　取寄物染筆突點

十三　置筆

十四　寄物返入硯筥

凡讀上事二ケ度、取大間事四ケ度、取請文事二ケ度、取筆事四ケ度、取寄物事二ケ度、此作法ヲ每度ニ盡バ可天曙也、依事天吉樣ニ省略シテ可構也、

〔古事談一王道后宮〕一條院御時、經六位史叙爵之者、其名相尹、春除目望申播磨國、但沙汰之外也、除目始テ執筆人可任播磨國之人ヲ雖書付、其字一切不被書付、其時奇怪之由有議定、件國所望ノ人ノ申文ヲ皆取集テ、次第雖被書其名、尙不被書、件相尹之時、纔被書其名字了云々、是以觀修僧正、爲成就所望令修榮天供之靈驗云々、或說云、長德四年八月廿五日、以外記進佐伯公行任播磨守云々、件公行元播州國之生云々、

〔揖竟貿抄〕春除目召又云縣除目

御修法事

奉行藏人仰御持僧、執柄家同有修法事、執筆仁祈禱人々所爲不同、於初度者必可有沙汰、

奉行

(古事談一王道后宮)後一條院御宇、小野宮右府（〇藤原實資）奉仕除目執筆之時、被申於攝籙云、天暦舊臣實資申攝津國闕候、被優七代奉公而可給云々、關白被伺天氣、即勅許、國司ニハ猶子資頼ヲナシ候也トテ、ヤガテ被書入ケリト云々、

大宮右府（〇藤原俊家）於後三條院御前、初被奉仕除目執筆之時、忘却シテ被存前帝御前之由御氣色ニテ御座ケリ、然間被仰出任人事之時、初思出新帝之由、深被恐懼云々、後日希有之事也ト被語云々、

(中右記)嘉承二年正月廿三日、晩頭行向民部卿（〇源俊明）御許、是執筆初被奉之間、且爲慶、且爲不審也、被談云、西宮殿（〇源高明）以後、我家此事久絶了、但如形被書置秘記一卷相傳此家、以件書今日奏關白殿（〇藤原忠實）大略習申了、定秘事不知歟、偏以書通說勤仕許也、凡至此職條、希有之重事也、近代大納言執筆、後冷泉院御時（大宮民部卿）後三條院幷上皇（〇白河）御時（大宮右大臣殿、大納言時、）當今（故大納言殿）思此人々、皆以無止、我以不肖身奉重事、可恐可喜者、如此言談之間、及深更歸家畢、

(玉海)承安四年十二月一日甲寅、此日京官除目也、（第一夜）下官（〇藤原兼實）始奉仕執筆、（去月廿九日、頭中將實宗朝臣奉勅來、仰下可參勤執筆之由、余着直衣相逢、申承了之由、仰大外記頼業、明後日可來由仰遣了、）抑大二條關白（〇藤原教通）京極大殿（〇藤原師實）後二條殿（〇藤原師通）知足院殿（〇藤原忠實）法性寺殿（〇藤原忠通）當時關白（〇藤原基房）初度執筆皆春除目也、微臣苟雖可逐彼例、偏存家之吉例、遁避公事之條、可有不忠之恐、加之祖檢代々例、清愼公（〇藤原實頼）廉義公（〇藤原賴忠）大入道殿（〇藤原兼家）御堂（〇藤原道長）皆始被候京官除目、（但御堂爲中納言先奉仕春除目、是攝政之時儀也、不可爲例、大臣之後、御前之儀、長徳元年京官除目始令候給、仍以之爲始矣、）此等例豈不據用哉、是以所奉仕也、

(蟬冕翼抄)春除目

奉行人事

藏人方事、執權之藏人頭必申行之、有故障之時、與奪傍官、若五位藏人、其人與奪六位藏人、六位藏人下知出納小舍人、

外記方事、局務大外記必行之、

官方事、官務仁行之、

〔𣏐毫聞抄〕宮文

春ハ硯宮一合、文書宮三合、已上四合也、

秋ハ硯宮一合、文書宮二合、已上三合也、

稱一宮スル事、人々說不一同ナリ、或以硯宮ヲ號一宮、或以文書宮ヲ號一宮、常說ハ以文書宮第一

號一宮歟、

往昔諸人申文、加納補任宮而可納別宮之由、見弘仁四年二月四日格、其後二三宮出來歟、

〔江家次第 四正月〕除目

大臣參上著座 納言以下執宮文、

隨公卿參入數執之、或時納言參議等不足之時、辨官執之、若又殿上侍臣執之、間有其例、（故宇治殿御記也、見小一條記、伊尹頭中將等例也、永觀元年正月十七日、右記曰、使三御物是公卿不足、頭中將拜定取之如恒、退歸青璅門、退出之、可出仕殿上上戸乎、先例不知者、）

第一硯宮（人々中文多、付外記時、各加宮數、令置硯蓋、人頭及殿上四位取宮文、無錯、不置硯蓋、）

大間書一卷 三局奏（少納言外記史中文、外記官史生並上官召使等奏、）

硯 筆毫 墨一廷 筆二管 續飯 揺板 水瓶 小刀等云云

執筆大臣以私硯鼎筆（故實、件筆可用白管、）小刀給外記、令人替云云、又入寄物文、（執筆抄、出守介掾目等也、闕官等段狀、參上御外記令入也、近代先入之、）近代外記持來闕官於執筆里第之次、給件雜具等、

第二宮 五位以上歷名一卷 諸司主典已上補任二卷（上下） 武官主典已上補任一卷 諸國主典

已上補任二卷（上下） 所所勞帳（大舍人 內豎 進物所 校書殿 文章生勞帳 內舍人勞帳） 諸道課試及第勘文一卷

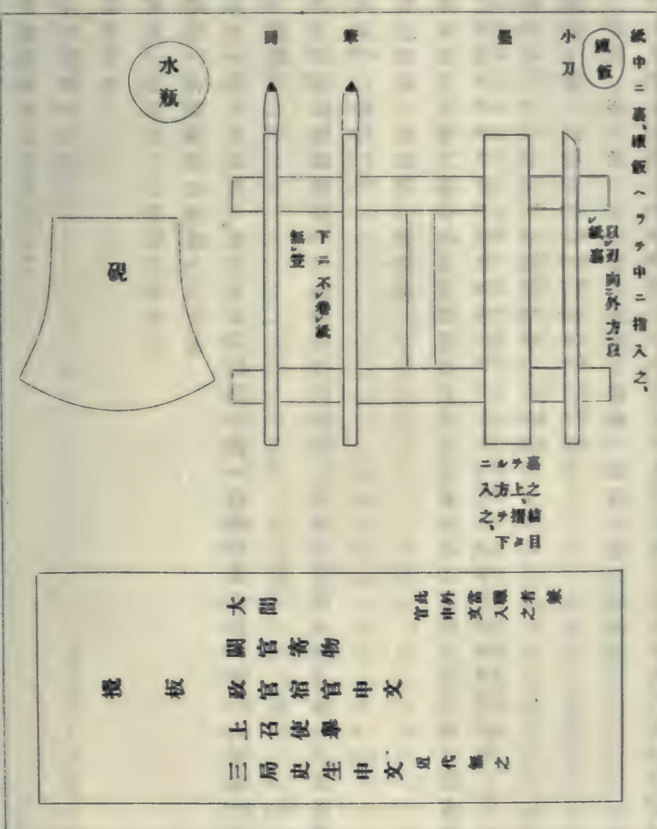
闕官帳二卷（除正） 文章生散位勞帳一卷 令外官一卷

第三宮　諸人之申文　第四宮

第五宮　同前（依申文多少有宮數云云、秋減一合、）

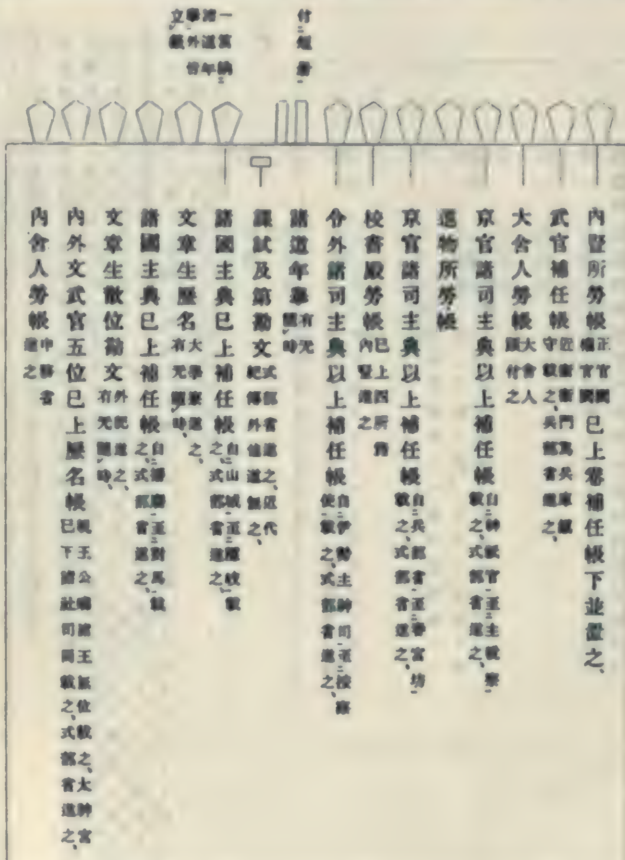
〔江次第抄四正月〕第五宮　近代加硯宮、有四合、京官除目有三合、上古隨申文多少有宮數云々、

〔除目抄〕硯宮（文書外納具如常、）



文書以硯方爲首、古抄云、上官三局史生召使等、大間前硯下置之、〈上官〉各不付短册、凡除目入硯筥文書、不付短册、京官除目、上官寄官申文、三局史生、史生奏、上召使等無之、此外納物春秋無相違、一物夜大間ヲハ被留御前、〈中ニ納テ入御覽、二筥一ノ中ニ入之〉入、仍中夜終夜ハ、寄物ト召使等ト許入之、又寄物ヲ抜加大間、召使等ヲ被加、成柄ナル終夜無之、

一筥



此積樣以左爲上、以右可積上者、以之可爲的、
京官除目時者、諸道年擧ハ無三省奏在之、此外春秋文書共不相違、七卷文銘、春ノ除目ニハ正
月一日ト書之、叙位同前、秋ノ除目ノテハ七月一日ト書之、
怠名帳、當時被積右方、左方ニ武官補任帳並之、共不可有理、
以硯筥蓋爲一筥之時、諸之二筥、[illegible]二省所遣補任歴名帳、[illegible]叢テ筥ノハタニ懸テ並テ
積之、七卷文上ニ四所籍次第ニ並置之、諸道年擧ナハ諸文書上ニ中程ニ並之、件年擧往古第二
筥ニ入之、[illegible]年擧ハ初若中夜被任テ、成柄ニテ執筆取亂ラレヌレハ、中終夜ハ不積之、初夜二
筥ニ納文書、一筥ニ取渡テ、被筥ニ大間ヲ入テ被留御前、入眼翌日被下之、仍入眼ニハ筥文三合、
闕官并大間ノ筥、都合五合被下之、往古
五位六位敍位勞帳入此筥、祖業叢人說、

二筥

諸司　奏　付短册銘如此、不可過兩三通、短册ノ紙寛ニ、奏ノ字ヲハスコシ引サゲテ書之、

諸衞　奏　同上付短册様事、只一通モ又四通アルモ、一通ニ片懸ニ結テ引方ヲ少長ク切也、藏人方ノ短册ハ、二返マテ一結テヒチルナリ、

諸道内官擧　京官除目ノ時ハ、此諸道内官擧ノ左ニ、四位已下ノ中文ヲ積加也、四位已下中文積樣見三筥、

諸司諸衞諸道所々ノ擧狀等撰定シテ各付短册、諸道内官擧ハ、諸司奏ト諸衞奏トノ中ニ積樣アリ、近代不然、又諸司諸衞ノ奏ハ、外記相計テ書テ入之、又付人アラハ勿論、古抄云、諸道内官擧ニハ、陰陽道、醫道、音道、書道、天文道ノ擧在之云々、近代件ノ無擧、非學、學館、勸學院等、皆入諸道年擧、東在一筥、諸行事所奏入此筥、短册ニ云、行事所奏、

三宮

一中　八省輔 昔猶如ㇾ此
一中　諸司長官
一中　外記
一中　官史
一中　式部丞
一中　民部丞
一中　兵部丞
二中　左右近將監
二中　左右衞門尉
三中　受領
二中　諸國權守 雖ㇾ所ㇾ望ㇾ且有召例
三中　受領

自餘以ㇾ之可ㇾ知、依ㇾ官次第ㇾ續ㇾ之佳也云々、

但令以ㇾ此樣ㇾ可ㇾ斟酌ㇾ歟、受領申文相三通可ㇾ有ㇾ之、加階申文ハ、四位二通、五位三通、合五六通書樣也、無ㇾ付ㇾ中人ㇾ者、外記相計テ入ㇾ之、三宮申文多時ハ、六位自解等入ㇾ同宮ㇾ、仍往古宮有ㇾ四歟、近代不然、小右記云、長元四年二月十六日、昨日除目、內大臣已下、着ㇾ座新、未ㇾ及ㇾ勘歟ㇾ之前有ㇾ召參上、宮文三合、前例有ㇾ四歟、秋除目之時有ㇾ三歟、但可ㇾ依ㇾ中文多少ㇾ歟、上卿不ㇾ能ㇾ其由ㇾ知何云々、

〔延喜式〕十八 式部上 凡除目。。。簿案、通除目後五日內、加勘合進ㇾ辨官、

〔除目抄〕一宮納 以ㇾ紙ㇾ卷ㇾ一宮ㇾ之時、是可ㇾ用ㇾ二宮ㇾ、

武官補任帳一卷（近衛、靭負、兵衛、馬、兵庫、鎮守府取之、兵部省進之、）
京官諸司主典已上補任帳二卷（一卷自神祇官至主税寮取之、式部省進之、一卷自兵部省至春宮坊取之、式部省進之、）
令外諸司主典已上補任帳一卷（自伊勢主神司至按察使取之、式部省進之、）
諸國主典已上補任帳二卷（一卷自山城至隱岐取之、式部省進之、一卷自播磨至對馬取之、同上、）
內外文武官五位以上歷名帳一卷（親王公卿每位取之、太神宮已下諸社司同取之、式部省進之、）
已上謂之七卷文、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司主典已上、及諸國史生、博士、醫師、陰陽師、弩師補任帳、每年正月一日、七月一日、進太政官、（但藏人所料、六月、十二月廿日進、）若有改官及歷名錯謬者、以朱側注、其解闕帳者、正月一日進、（兼已上不注解闕、）

〔蟬冕翼抄〕文章生外國歷名帳
件勞帳ハ、大學頭注進之、相簽也、兩面ニ、文章生歷名帳ト書タリ、以紙捻テ、閉付也、文章生ノ省試ノ年次第ニ注セリ、候御書所、藏人所、院文殿、幷藏人所者、輙不任外國也、但院藏人所祗候者、秋任京官、件奏歷名帳ニ祗候ノ所々ヲ注セル也、

〔除目抄〕文章生歷名（春者三人任外國掾、不亂次第可任、外國之任ヲ三人塲ニ書之、秋ハ一人任內官、轉下國、今度可給官之仁ヲ第一番ニ載之、兼令致沙汰天載之、）
大學寮進之、（頭已下加署、）式部省行省試補之、（文章生是也、）此內三人被任外國掾、（養和二年、紀傳博士中ニ加二人、建久元年如元爲三人、此已後每度三人任之、）多被任宰府、北陸、山陰等道國掾、是渤海之客入朝之時、問答可有文章之心也、

〔延喜式十二中務〕凡女官補任帳、每年正月、七月一日、進太政官、若有遷任卒死之類、以朱點側、更寫一通、六月、十二月廿日、進藏人所、

〔小野宮年中行事正月〕元正中務省女官補任帳進太政官事

大納言藤原朝臣基經宣、女官補任、歷名帳等各一通、進藏人所者、（貞觀十三年八月八日）

秩滿帳

〔除目抄〕除目三ケ日間可存知事

一賦闕官事（代始以下執筆初時、不注死闕由、寬和五二、內大臣始執筆時例也、）

五位外記成草、仰闕官所史生（往古史生一向書上之）一介書上之、（云、自紙、外紙寫國替物云々、近代不及沙汰歟、）始自神祇官至鎮守府、不漏書出悉載之、（兼當時宮、兼官當時闕不載之、大闕ニハ闕見在載之、）有替付、至諸國掾目註替付幷秩滿之由、仍稱之秩滿帳也、近代只可然之官少々有替付、諸國權守已下強無替付、又御前并直廬初度除目、出家卒去替付不注之、（闕官書樣見雜文書、）

〔延喜式十一太政官〕凡國司秩滿者、式部造簿、正月一日進大政官、外記覆勘訖進大臣、奏聞拜除、（事見儀式、）自餘解闕臨時奏補、

〔延喜式十八式部〕凡○中略諸國秩滿帳者、正月一日進藏人所料亦十二月廿日進、

勞帳

〔羽倉考一〕勞帳 何官何職ニテモ、其人數ヲ書立タル物ニテ、則歷名帳ナリ、但何年以前ニ任ゼルト云事ヲ書加ヘ置テ、奉公ノ勞ノ年數ヲ知ル料ニセル物歟、

〔除目抄〕四所勞帳（內豎所、大舍人、造物所、校書殿、）

凡四所籍、紙捻ニテ裏結ニ繳ニ結（天）切之、

古抄云、可尋宛其人之由、定有宣旨歟、可尋注之云々、今案被定下歟、可尋決之、○中略

內舍人勞帳（立紙片書銘）

中務省進之、（輔以下加署）有請印、拾人載之、此內上臈三人ヲ任外國掾、被任坂東國、甲斐、相模、上野等之類也、是東夷入洛之時、可相禦之心歟、

〔除目抄〕十年勞事（近代除目無之）

長元四二十四、頭弁經任來間、明日除目事之中、御硯右方儲納闕官并十年勞之覽筥、是三條大相府

闕官帳

御說也、經任云、十年勞者、敍位之時置之、同書歟、余答云、大略同書也、但敍位十年勞、是諸司判官已上有年勞可敍爵之者、爲御覽其年限也、除目時、十年勞諸司主典、或經十廿年可遷官轉任之者、爲御覽尤可備者也、件事見故殿御記、敍位除目必可候者也云々、

権大夫記長久三十廿七云々、不置十年勞、仍爲見可遷官轉任之人々年限、雖召執筆、撰求筥文之處、遂不撰出、問經長申云、敍位時可置之、除目時不必候之者、此事如何、汝爲頭之時置之者、令奏者、敍位者、置諸司判官以上年勞也、爲見給爵之年限也、除目者、主典以上十年勞也、爲覽轉任遷任勞也、是皆依右衞門督藤原朝臣、幷右大臣申、每度令候之由、仰云、今日仰經長令置者、小選之後退殿上、經長同此事奏可置之由、不尋知古跡之人、不聞如此事也云々、

長久五十二十三記云、除目也、十年勞、依天氣賁通仰大外記令進之、則進之、藏人長家奏之、令入闕官帳筥、依筥多不並置也、

〔蜂藂翼抄〕所衆瀧口勞帳

所衆瀧口勞帳ト謂ハ、各ノ上臈三人ノ上日ヲ、藏人所出納嘲テ書紙屋紙、二通書奎也、無出納署所衆ニハ日夜ヲ注須、瀧口ニハ夜許ヲ注ス、各加懸紙加署、樻筥一枝、

〔羽倉考一〕闕官帳　其時ノ闕官ヲ、外記ノ方ニテ書立テタル帳ナリ、闕官抄トモ云、

〔蜂藂翼抄〕闕官帳

此闕官帳ハ、當日早旦、六位外記持參シテ付行事藏人、乍入外記筥置御硯筥北也、執筆ノ奏タル闕官帳ニハ非ズ、件帳ハ外記筥ノ內有之、

〔江次第抄四正月〕除目

闕官帳　有二卷、正官權官也、取當時內外官之闕也、最先奏此帳者、爲主上令知其闕給而被任人、長二尺五六寸、家說用此式、二尺三寸、一尺七八寸、此外有說々、

〔除目抄〕一縣召略○中一寫納以硯筥一蓋之時、是可納二箇一○中略

闕官帳二卷正嘵、以大守入嘵守者年月日、無署并續紙

〔延喜式十八式部〕凡内外諸司主典以上、及諸國史生、博士醫師、陰陽師、弩師補任帳、毎年正月一日、七月一日、進太政官、○中略其解闕帳者、正月一日進、參議以上不注解闕

〔除目抄〕闕官抄事近代只召闕官寄物、而寬元元三廿直物、右大臣殿實經參行、執筆參議左大弁、今度召闕官抄、一紙被書之、此事久絶、不令召之、今度一通被書之、

太政官少納言　大外記　左大史

中務省少輔　侍從

宮内省輔　大輔

大膳職少進　屬

掃部寮頭　助

造酒司令史

攝津國守　介

近江國權守　介

美濃國介

上野國守　介

下野國介

土佐國介

今案、闕官抄二通書之、一通諸國介已上、一通諸國掾目、而寬元元三廿直物、右大臣公實經參給、參議左大弁經光卿執筆、今度被召闕官抄、大外記師兼一通ニ書天被進之、是又非無存知、所謂永久四閏四廿、藏人頭左中將宗能問大外記師遠云、直物間事有問答之中云、召闕官抄之時、外記一通書、介已上、一通掾

目歟、近代可書一通之由先達被申之、被見之間有煩之故也云々、就之思之、本二通也、近代有召者、以寬元例一通可書歟、且羽州〔師元〕草案一通被書之、件草在三條、

〔羽林書之〕山城國少掾　少目

伊賀國掾　目

伊勢國掾　目　少目

尾張國掾　目

因幡國掾　目

伯耆國掾　目

伊豫國大掾　大目　少目

直物時、所被召外記之闕官抄書樣是也、京官、并諸國介以上一通、諸國掾已下一通、都合二通也、別紙書之云々、

此書法住寺相公〔雅具〕被勤執筆之時、被尋清外史、返事狀云、闕官抄候中御門大納言御許云々、又候新中納言御許歟、可下給哉、五十年以來只用闕官進候事歟、若令尋出御者、暫可下給候、顯業恐々謹言、被尋申中御門大納言許之處、所被借進、書樣如此、〔見右書樣是也〕本表紙狀云、此闕官抄本二通〔此事文治六三直物之時、顯文沙汰之間、大外史所示給也、〕之由見舊記、而爲不令紛失、後日被續合歟、中御門大納言被借奉之故、中御門右府之御自筆也、近代直物作法令受被流之說云々、

今案、闕官抄奥書年月日之由有口傳歟、但此書樣不然、又二分ト天三分ト天、京官外國ヲ寄天書メル事有之歟、

闕官寄物

〔羽倉考〕寄物文　諸國ノ守介掾目ノ闕官ヲ、執筆ノ人ノ書ニ寄セタル書附ナリ、

〔江家次第四正月〕除目、

大間書

第一硯筥（中略○）

又寄物文（執筆抄出守介掾目等也、闕官等數、獻上卿、外記令入也、近代先入之、）

〔除目抄〕一縣召（中略○）　闕官寄物（無年月體紙）

諸官隨闕載之、外國掾目闕不可遂大間、委加校、是隨任執筆合點之故也、太政大臣不取闕、又式部輔之中、大少輔之間、一官必令闕之、然而同不取闕、是祕斯（○菅原道眞）令任給之故、一闕必置之、又諸國大守ヲバ權守ノ闕ニ入之、是爲親王之兼國太守ハ爲權守之故也、置太守（常陸、上總、上野、）之國、以介字擬守、

古抄云、往年執筆注出之、給外記被入硯筥、中古以後外記儲之云々、

任剩闕之時、執筆闕官ノ上ニ墨ヲ引、秘事云々、又墨ヲバ打說アリ引ノ說アリト云々、

寬元二正廿一、除目始、執筆右大臣、（實經公）今度寄物被差加大間云々、仍中終夜寄物不入硯筥

〔朝野群載（四朝儀）〕闕官寄物

闕官

太政官（權大納言、權左中辨、大外記、左右史、）中務（權、內舍人三、）監物（大監物、主典、大主鈴、少典、）皇太后宮（大夫、權大夫、大屬、）大舍人（權助、少屬二、）內藏（權助）縫殿（少屬）陰陽（少允、天文博士、權天文博士、）式部（輔、權大輔、少輔、大丞、）大學（助、直講）雅樂（少屬）諸陵（少允）民部（大丞）兵部（權輔、少錄、）判事（大判事、少屬、）囚獄（正、大令史、少令史、）大藏（少錄二）宮內（權、少丞、）木工（算師三、少二、）主殿（少允）典藥（少允二、女醫博士、）掃部（少屬）正親（正）內膳（典膳）鑄錢（長官、判官、主典、）鎭守（軍監、軍曹、）陸奧（陰陽師、醫師、）太宰（帥、大貳、少貳、大監、權大監、少監、大典、少典、博士、醫師、主船、主廚、大唐通事、）左近（權中將、將曹二、）右近（將監二、將曹二、）左衞門（少尉二）右衞門（少尉、少志二、）左兵衞（少志二）右兵衞（佐、少志二、）左馬（屬）右馬（助二、少屬、）

受領　伊豆　參河　能登　長門　紀伊　大隅

康和三年正月

〔羽倉考〕大間書　闕官ヲ書立タル書附ナリ、闕セザル官モ任ズレバ、書入ルヽガ故ニ、闕官ヲバ間廣ニ書、故ニ大間ト云、

〔除目抄〕一縣召　大間

春多置外國行、秋多置諸司、是隨時故可被任之心也、官篇目計官員數可置行之廣狹、往古闕官所史生書儲之、五位外記加撿察、加禮紙書年月日、不入何日、執筆入之、月日奥殘紙一枚、（謂之輪紙、）師直流幷清家不殘輪紙、文治六九廿四、故入道殿記云、今日參六條殿、（今案、故中山太政大臣殿、）見參之次申云、師綱云、大間ノ奥ニハ、必紙一枚ヲ可殘也、師直云、必不然、師綱云、或物ニ輪紙ニ可用之由注之云々、師直云、其ハ執筆ノ次第ニ折、大間事也、非外記之所知云々、此條如何、仰云、紙一枚可殘之條不被甘心、輪紙ト云ハ執筆之事也、大間ノ奥ニ殘紙之條、爲執筆全無其用歟云々、自神祇官至鎭守府、不漏官篇目載之、但諸宮（后宮以下齋宮齋院、）隨見在載之、又齋宮寮十二司、除目以後載之、雖卜定後十二司除目以前不載之、齋宮齋院被官之篇目不載之、只齋宮寮齋院司ト許載之、十二司官不載之、又東宮春宮坊兩篇目之外、主膳主馬署等之類不載之、但往古大間載之、近代一切不載之、

大間書（置端、廣如常三寸餘、書宿紙、）

神祇官

大祐

少祐

少史

權少史

太政官

権少外記

中務省

卿

封大間事

〔除目抄〕一執筆間事〇中略

一說

初夜封天引墨、中夜奥ヲ端ニ成天引墨、入眼夜裏ニ返シ天引墨、

一說

初夜引タル墨ノ跡ヲ不違シテ、中終ノ夜紙繼ノ上許ニ墨ヲ付加云々、通俊卿用此說、

綠大間寸法事

綠大間、如葉子置重之、不參差、此說先請外記見之時、付折目綠帖之時違例之、第二三夜作右折目、自易位云々、

一說

長二尺六寸、一人御一家宇治殿并土御門右大臣殿用此說云々、大間者先綠置之、後帖之、殿下御說云々、又或人曰、綠帖大間事メトリ羽ニ可帖、是披見ニ有便也、然而殿下并土御門右大臣御說不然、不參差シ天可帖云々、或說ニ請外記天見大間之時、置天付折目、此說次說也云々、

寛元二十二十七、京官除目、當日執筆左大臣殿、實經大間可進入云々、仍大外記隨身參上、依召御參上之

申文

歟、大臣進覽之退出、折目ヲ付天被返下之、先々無此儀、抑兼天被付折目事、次説之由見而今如此、是執筆令及度々之間、説々爲御作法、今度有此儀歟、

建久四正廿七、大外記師尙參左府、（三條入道左府）云、縿大間事、其廣有説々、以何爲佳哉、左府仰曰、自昔有樣々説、雖一定、師尙又申云、紙一紙之廣佳説歟、差指燭之輩參上、以禮紙令隱之故也、若永ク縿レバ所覆紙一枚ニテ不可隱之故也、又仰云、其儀可然、但以禮紙大間ニモ有覆所云々、春宮大夫執筆之時、不可覆之所ニモ、以禮紙覆之、法性寺令雖給云々、

一説

四條大納言説、笏ノ長サニ可帖也、藏人差油雜役參進之時、以申文懸紙一枚引掩、不廣シ天有便云々、

一説

或人曰、淸凉殿板ノ廣サニ帖之云々、

一説

建久四正廿七、師尙朝臣參左大臣家、（三條入道左大臣實房公）申云、縿大間事有説々、以何爲佳哉、紙一枚ノ廣サ佳歟、是六位差指燭參仕之時、以禮紙天令隱之故也、永ク縿タレバ、所覆之紙一枚ニ天不可隱、又以禮紙大間ニハ有覆所云々、春宮大夫執筆時、不可覆之所ニ以禮紙覆之、法性寺殿令雖給云云、

〔羽倉考〕一申文（シブミ）　何ノ官ニ任ゼン、何ノ官ヲ給ハラント願ヒ申ス書附ナリ、

請文（ウケブミ）　申文ニ同ジ、但年給ノ申文ノミヲ云歟、

大束申文（オホツカノ）　字ノ如ク、申文ヲ大分束ネ置タルヲ云、

選定申文（センヂウノ）　申文ノ中ニテ、其申スマヽニ任ズベキ申文ヲ選ミ出シタルヲ云、

〔朝野群載四朝儀〕除目中文目錄

中神祇官

中外記

中史

中內記

中民部丞

中八省輔

中諸司長官

中勘解由

所々奏

　中大歌所預

諸司奏

中左右衞門尉

諸道得業生

問者生

諸道擧

中受領

中諸國權守

中加階

中撿非違使

袖書

諸社成功

藏人所

先朝藏人

〔西宮記 正月下〕除目

申文端書

二合（可勘二合年、大臣二年二合、納言五年二合、納言參議獻五節後年二合申擬、近代例、）

親王巡給（可勘巡當否、后腹巡、大巡二合、御給、給例女御重親王申文、家司加名、）

未給（可勘給否、）

國替名替（可勘任符出否、任中名替副任符、不勘、）

尻付

院宮御給（某所某年御給、東宮無御字、有者非也、）

人給（某人某年給二合、申文載數國者、任國字傍且墨突點、申請外任他國者注其由、執柄人給注自官、或有書名、）

名替（某人某年給某姓丸停某人改任、國替任了、注本任、）

返上任符者（返上某人某年給、年月任某丸、任符所任任中若名替者、可注改任、舊例不注停任者年、）

不預年給人申（一人除給）

〔除目抄〕一縣召

上官申文（外記史）

見任者申兼官、新叙者（去五日叙爵者、申外國介、）申宿官、但臨時叙爵人、幷帶本官者不宿官、仍無申文、於弁少納言申文者、近代不付外記、

〔蟬冕翼抄〕春除目（又云縣召除目）

申文加袖書事

是ハ御硯蓋ノ袖書シタル申文ノ事ニハアラズ、執筆當座ニ披見申文天、端ノ内ノ方ニ書也、其

樣區分、

（近代爲有）親王巡給袖書　可勸當不

闕別巡給袖書　可勸當不

二合袖書　可勸二合年

未給袖書　可勸合不

國替袖書　可勸合不

更任袖書　可勸合不

名替袖書　可勸合不

（首書）京官未給袖書、（可勸合不、）此事夜若覺、加袖書下勸之、

下勸申文事

加袖書了、下外記令勸之、或仰當夜可勸上之由、或仰明夜可勸上之由、所說也、追申文初來之時、每

夜追加袖書下勸之、　御前儀、召參議下之、　直廬儀、召弁下之、〇中略

大束申文

件大束ノ申文ハ、今朝職事ノ撰定テ、每一官ニ付小短冊テ、其上ヲ以大紙捻テ結タル也、此中ニ

有袖書申文、（袖書ト云ハ、申文上ニ加外題書タル也、非執筆袖書也、）職事ハ件袖書ヲバ、紙捻ニ不結籠シテ、大束ノ申文ノ

下ニ横置也、〇中略

院宮御申文

年官年爵ヲ給タル院宮ノ年給ノ御申文ナリ、御申文ノ封ノ目ノ上ニ、后宮ハ大夫、院幷准后ハ、別當ノ名ノ上ノ字ヲ書也、但鷹司殿御申文、御堂御出家後、宇治殿署、

〔朝野群載四朝儀〕除目申文

內給申文

正六位上某朝臣某

望某國大掾

正六位　某朝臣名

望某國目

右當年內給、以件等人可任之、

長和二年　月　日　官位

正六位上某朝臣名

望某國介若內舍人

右當年臨時內給、以件某可任之、

康平　年　月　日　官位

正六位上姓朝臣名

望某國介若掾目

右前坊長和年御給若臨時御給同年某月以某姓某任件國某職、而煩身病不給任符、仍以件某可改任之、

長和　年　月　日　官位

院宮御申文

正六位上姓朝臣名

望某國介若掾目

右去年若去々年御給、同年某月以某姓名任件國介若掾目而須身病不給籤符、若任符仍以件某可被改任之狀、所請如件、

長和　年　月　日　　大夫一人加署

一品某子內親王家

正六位上某姓朝臣名

望某國掾

右當年給巡給二人、若別巡給合、未補代、二以件某可被改任之狀、所請如件、

年　月　日　　別當某官姓名

〔吉續記〕文永八年正月廿九日癸巳、自今日被始行縣召除目、二月一日乙未、除目申文、治部卿請宮內卿有二通、共爲袖書申文、藏人左衛門權佐經業治部卿菅原在匡朝臣請申書之、藏人右衛門權佐定藤基長朝臣申書之、左權佐書様不可然之由、黃門有仰、

〔中右記〕長承二年正月廿二日戊寅、今日春除目始也、中略○左宰相中將家持來院。宮。御。申。文。九通、院、女院、皇后宮、中宮、准后、四人之外、仁和寺、鳥羽宮、申文事也、予執云、置座前、申關白殿云、仁和寺法親王申文可奏歟如何、關白命給云、院宮准后之御申文許也、於親王申文不封可付職事也、此申文不可被奏、可留也、予申云、已被封爲之如何、然者可尋勸別當也、定片名文字封上書、以同人々、慥不覺者、此申文之上書名二字申文候也、不知案內之人所爲歟、暗知彼仁和寺申文歟、可留件申文由申之處、尤可然者、早可留、予揷笏、以申文進寄殿前指入、拔笏候、昔天覽之後、本申文八通推卷、一通下給、於懸紙者留御所、予給之、復本座、並置硯筥右、院宮次第之置此間內。。。給申文、未給更任、名替、國替等申文、殿下所給也、置座前、先解緖一一見之未。給。申。文。二八可

奏狀

勸給否、二合申文ニハ可勸二合年、名替國替申文ニハ可勸合否之由、注付申文端了、又申文二分代申文、ハ返上殿下、今夜依不可□□也、又去年□□獻□人々申文、中納言中將二合申文不可勸、是去年任中納言給之故也、其後予召云、成通朝臣(依爲四位也)來座之後、下勸申文十一通之由示了、先任內給、且公卿給暫置座前、給從一院及基子女御、次第任之、但中宮御申文ニ諸國掾內舍人被申也、任掾了奏上、突點指申文上、引裹紙投入四宮、每任懸勾入二宮、次又以公卿給、又並置宮右、一々任之、大殿申文出來也、案之外也、予申公卿任何國哉、只可任何國ニモ也、予任播磨目、御申文ニハ望諸國目ト被書也、仍只以大國目所成也、尻付從一位藤原朝臣當年給ト申了、此外關白殿以下上達部當年給申文七八通任了、被見不審申文之處、如案彼仁和寺宮申文也、年號之奧書、勅別當公卿不書名、凡大奇怪難書也、可留之由申也、關白殿命給云、入宮文被下條、外記所見甚見苦也者、仰尤可然、至件申文者、殿下令取給了、殿下示給云、今夜加久許(仁天)早可奏大間也、下勸文等、多ハ二合也、明夜可任之故也、依仰奏大間之間、右宰相中將持來也、乍十一通勸□□但此中任符返上申文不可被下之由、外記所申也、但[　　]暗之間、樣不見之所致也、件勸上申文欲返上殿下之處、示給云、副入大間宮可返上御前也、卷大間了置硯宮、取懸紙卷大間上、以紙捻結其上、以刀切餘、取筆其上引墨、又結成束(及三通程以紙捻結也)固結切其紙捻餘、又引墨、入大間成束、勸上申文等於宮、搢笏膝行奏覽了、拔笏復本座、宮文三合顛並置文書等、揖退出、于時子二點也、

〔羽倉考一〕三局ノ奏　三局トハ、少納言局、左辨官局、右辨官局ヲ云、則辨、少納言、外記、史、史生、召使等ノ申文ナリ、

〔江家次第四正月〕除目

第一硯宮(略)○註　大間書一卷　三局奏(辨少納言外記史申文、外記官史生、並上官召使等奏、)

〔除目抄〕一縣召

擧狀

三局史生奏（外記史生、左右弁官史生、近年無之、）

已上史生以本所奏中内官二分非毎年事、往古任外國目、頼業眞人說、以此奏入一宮、

首書

諸國掾目并兼國、中夜被任之、公卿給初夜被下之、中夜勘上之、

〔羽倉考〕一三省奏　式部、民部、兵部ノ三省ヨリ、各其省ノ史生ヲ、諸國ノ目ニ任ゼント請フ申文ナリ、

〔延喜式〕十一太政官　凡式部、民部、兵部等省史生、毎年一人任諸國目、

〔蟬冕翼抄〕諸司奏

官、省、臺、職、寮、司、府等也、（今案、進奏外、付諸司奏也、）擧任二三分也、

春玉抄云、付奏狀之職、錄其所ト書、具有處分字、貫首人加名、

同抄又云、師安云、神祇、陰陽、典藥等寮、皆連奏也、至余司者或稱本司請、（長官一人署申文也、）或稱本司奏、（是長官以）

（下臘申文、重神祇官、以此事不見、）

連奏、

神祇官、陰陽寮、典藥寮（加曾道、）等也、或加主計、主稅兩寮云々、

〔蟬冕翼抄〕所々奏

御厨子所　御書所　畫所　作物所　侍從所　内侍所　大歌所　内贄殿　内酒殿　女官預

神泉預　御鷹飼　宇陀禁野別當　交野禁野別當　已上九抄所注也、（今案、多說所々也、追可勘入之、）

望申内外官之條、且依先例、且依請文、事甚繁多、不具注載、（大略可見說付篇目也、）

〔除目抄〕諸道年擧（被任之後ハ被加成柄、仍入職夜當文、不續之、）

北堂（文章博士擧之、非藤氏博士者不可加署之由有說、舊例學生擧之、）

明經（五位擧之）

明法兩儒擧之、仁治四二二、執筆右大臣、實經任駿河少掾、

筭同上、仁治四二二、執筆右大臣、實經任伊勢少掾、

勸學院氏院別當一人加署、仁治四二二、執筆右大臣、實經任相模掾、

學館院橘氏擧之、今是定歟、

奨學院江家博士擧之、或學生擧之、

已上年擧、各一・二取集、天付短冊、中古以來依執筆仰、外記入第一筥、是始夜無左右被任之故歟、往古入二筥、清家信俊、保延三正廿八除目、說、依入一筥、每文立籤入之、一筥納文書、皆立籤、中家說、付短冊、諸道年擧、各擧狀中外國二三分、

古抄云、奨學學館院、明法已下隔年任之云々、然而近年每年各被任之、抑所々院々道々、其擧可爲各別歟、而近代所々擧不見、往古五位、六位、散位勞帳入此筥、人頗謬說、諸道年擧事始學者自諸國入洛、隨器量任所々、而不遂業、棄學道空歸本國之時、蒙哀憐、各被任其國掾之心歟、

〔除目抄〕題官擧事春秋共擧之、江談云、春除目書之、秋不書之、下臈參木書之、一行可書二人、上一人下一人云々、今案、春ハ公卿書之如此、秋ハ不書之、只以闕被申之、然而召硯、又立切燈臺云々、

書樣

外記

大宅義資　中原成宗　淸原定俊

史

伴廣經　惟宗業輔副上中原惟則一上擧

式部

民部

左右衞門尉九條大相國自筆次第云、不加右字、有兩說、只左衞門尉ト書之云々、九條相國記、又見江次第、或人云、題官擧ニハ公卿不加署云々、可尋注之、

年　月　日、正二位行權大納言藤原朝臣某上、參議書進之、中夜、或入眼進之、寬治六正廿四、江記云、頭官擧、公定卿書、紙屋紙、戶部等云、有先例哉、公定卿云、殿上硯也、仍用此紙、〈檀二枚〉江帥共議定書之云々、受領功過之時、官進御硯、不進之時、進殿上御硯者、同用紙屋紙、中夜進之云々、但入眼夜存例、所謂保安五正廿二入眼、承久二正廿二入眼、寬喜三正廿九入眼、同四正卅入眼、天福二正廿一入眼、曆仁二正廿四入眼夜任之、㝡此擧之交名等、近代指計被載之歟、可尋之、又有所望之者、時勿論、仁治二十十三京官除目、執筆、左大弁經光卿之外、參議不參、仍無頭官擧、末座公卿〈中納言公親卿〉可擧由、攝政殿下被仰、而固辭不擧、

〔䈥冕叢抄〕可。下。勸。文。

親王巡給　別巡給　二合　諸未給　名替　國替

不。下。勸。文。

內給國替　親王別給　公卿當年給　大臣當年二合　當座大臣二合　子息二合　去年獻五節二合　任符返上

轉。任。勸。文。

轉任ノ勸文ト云ハ、外記、史、式部、民部丞ノ第一ノ人、今年ノ敍位ニ敍爵シタル、若臨時ノ闕ノ替ヘ次第ニ轉任スル人ヲ注セル也、隨此勸文被任之、

宿。官。勸。文。

宿官ノ勸文ト云ハ、藏人、外記、史、式部、民部丞、撿非違使ノ第一人、今年ノ敍位ニ敍爵シタル隨巡年〈天〉、受領ニ可任キ闕、權守介等ニ宿任也、件靈ヲ外記ガ注セル也、

藏人不入勸文、ハ中家習也、是敍爵之條、外記不知之故也云々、淸家習人之、撿非違使依勞敍爵之時、擧二三人、可入勸文、依外衞勞敍爵之者、幷留大夫尉之者不入勸文、有兼官之者不入勸文、定使

兼直講、而入宿官勘文失錯也、

兼國勘文

兼國ノ勘文ト云ハ、參議以下、權守介ニ可任キ人ヲ先例勘注タル也、加懸紙封之、近代親王不載之、從參議載之、從親王至諸道得業生、年限至テ可兼キ人ヲ端ニ注テ、其次ニ例用ル人ヲ注セル也、

〔除目抄〕第二夜大間初夜儲御所、其外文書調樣如初夜、

兼國勘文者、未公文人不入之、但公卿、幷藏人頭弁五位外記等、雖未公文入之、重服人不入之、輕服人不憚之、不加封、或加之、近代不加、加禮紙不入筥、或入筥、康平四年入筥、違例之由被仰之、近代不入筥、無內覽、

康平四年■二月肥州記云、兼國勘文依召內覽之、件勘文、先例參御內裏之時無內覽、而今度有召、仍進之、去年二月同記云、關白里第之時、可內覽也云々、公卿未著仗座、召外記筥文等、昇殿如昨日儀式、召兼國勘文、執筆大臣被奏之云々、此勘文除兩大弁、裝束使弁之外、他弁不兼國例ヲバ、當時之闕官ニ同國ノ例ヲ宛天載之、爲執筆大切也、

仁平三三四、宰相爲通示師元朝臣云、去正月除目兼國勘文、大納言殿今案成道卿歟入筥天返給外記、人々難之云々、申云、執筆不取不返外記、置御前之文也、御所儀、執筆大臣以職事召之、不入筥、大臣取勘文披見之、次第任之故也、攝政之時者、依攝政命、弁爲職事取之、入筥進之、弁不給執筆、進攝政、攝政給執筆、

首書　直廬儀時入筥事、近代不給、若可入歟、

永保三正廿九、頭弁通俊示大外記定俊云、可入兼國勘文者、裝束司弁此重兼國例也云々、而定俊依無例不入勘文、去除目間被尋問定俊云々、道方民部卿、爲裝束司弁之時、臨時除目七月云々依爲宮內卿兼國、彼專非裝束司重兼國者、是大外記定俊內々所相語也、

寬元三正十三、除目藏人頭左中弁平時高、依裝束使入兼國勘文、兼權守了、件人備中未公文也、

仍外記除之、而藤重資等、未公文、依闕勞、兼國云々、頗怨望之間入之畢、非藏人頭之外以此例不可爲詮、

入眼夜（兼書調、儲闕請）

轉任勘文（外記、史、式部、民部、中務、請召之、執筆入眼夜讀、行轉任歟）

或中夜召之、多入眼夜召之、重服者未復任、以前不入之、或返給之、或不下給之、隨闕時入眼夜召之、

書樣

中家說（以闕行轉任、讀之）

可轉任者

少外記正六位上中原朝臣某

權少外記

左大史正六位上中原朝臣某

右大史正六位上大江朝臣某

左少史正六位上中原朝臣某

右少史

式部大丞正六位上藤原朝臣某

少丞

民部大丞正六位上中原朝臣某

少丞

年月日　書畫

清家說定後賢人說、未行轉任載之、

少外記

權少外記正六位上中原朝臣某

左大史

右大史正六位上紀朝臣某

左少史正六位上中原朝臣某

右少史正六位上中原朝臣某

式部大丞

少丞正六位上中原朝臣某

民部大丞

少丞正六位上源朝臣某

年月日

首書 臨時除目ニモ有轉任勸文、此定也

轉任宿官兼國勸文等、中夜一度召之時、轉任勸文ニ加禮紙、其禮紙ノ中ニ宿官勸文ヲ卷也、宿官勸文ニハ不加禮紙、或中夜召轉任勸文、終夜召宿官勸文、近代多中夜一度ニ召之時、宿官勸文加禮紙天、轉任勸文不加禮紙シテ、宿官禮紙ニ卷籠テ進之、轉任勸文ヲバ依官次第書之、外記、史、式部、民部ト書也、宿官勸文ヲバ式部、民部、外記、史ト載之、又轉任勸文ニ、重服者未復任以前ハ不入之、仁平二正十八、進轉任勸文、可轉左大史者、右大史宗景服解以下、屬次良康可入左大史所之由、左大臣殿被仰之、奉小弁於敍爵者可依上日、尤可然歟云々、又曆仁元十二廿、京官右少史中原景直、可轉左之處、依未復任、今度不轉任載、復任了下名轉左少史、諒闇時、此勸文ヲバ

入眼夜召之、而天福二正、執筆左大弁平範輔、中夜召之、仍進之、外記猶可申子細歟、付披於叙位終夜被行之、仍叙爵者彙不可知之故也、

宿官勘文（外記、史、任介掾守、有例云々、近代任介、式部、民部、検非違使任掾守、藏人不入外記勘文、）

書様

可宿官者

従五位下藤原朝臣某　式部

従五位下源朝臣某　民部

従五位下平朝臣某　検非違使

従五位下中原朝臣某　外記

従五位下紀朝臣某　史

年月日　名署

已上去五日叙位者載之、轉任宿官等勘文、多者一度召之時、轉任勘文之禮紙、宿官勘文（不加禮紙）巻籠進之、或又謂上宮文之時、轉任宿官等勘文、各書別紙、入御硯筥云々、近代不然、轉任宿官等勘文、執筆獲奏事由云々、勘文ヲハ不被奏歟、

宿官申文ニハ、外記、史、式部、民部獨書官也、假令從五位下行少外記云々、從五位下行民部大丞、近代不書之、自然之失錯歟、

康平三二十八、肥州記云、宿官者可注申者、仍注進之、但先例入眼日註宿官入御硯也、而今可注申之旨有仰、仍注進之、

諒闇年被付御披於叙位之時、外記不進宿官勘文、而保元師業進之、治承執筆（大納言隆季）召此勘文、頼業申無例之由、保元例被仰之、頼業又申云、彼度進者失也、終不進之、又天福二、執筆（左大弁範輔）直廬儀

成文

大外記師象進之、依召也、但失錯之由忽後悔、猶可申子細、

〔除目抄〕文章生散位勘文（立楊片紙書銘）

外記進之、式部省行省試補之、（進士是也）任外國秩滿之後、號散位、式部省注送交名、可載一人、或載二人、可任內官、件書有卷重之事、有口傳云々、

〔羽倉考一〕成文（ナリブミ）　申文ノマヽニ官ヲ任ジタルヲバ、其申文ヲ名ヅケテ成文ト云、

成殘申文　申文ノマヽニ段々任ジモテユク間、其既ニ任ジタルヲバ、成文ト云ヒ、イマダ任ゼザルヲバ、成殘申文ト云、

〔西宮記正月下〕除目

置文　成文（懸勾、院宮巳下年給也、）　未定文　不成文（折上、京官成文不下外記云々、皆結中列座右、毎日預外記、入宮文、筆墨備物、各守符余一本、別目所所人人例、任奉國、根數等、）

居突重、（五位以上居、內藏寮設饗、大炊進飯、）內藏頭若助五位以上獻盃、（不取盞、納言受大臣盃、往還自貫子歟、）居汁物、立箸、入夜立燈臺、（執筆傍一本、納言座一本、定傾功過名、又立參議前、）受事畢、（欲事又候氣色、）卷大間、（加紙）以縒紙結中、結目著墨、（舊例書封字、）加成文入宮、指笏奉御簾中、（大臣退）納言已下撤宮文、給外記、

〔除目抄〕一直物

成文事

三通已上之時結之、經輔卿記云、雖二通可結之、

〔中右記〕長承二年正月廿二日戊寅、今日春除目始也、〇中略卷大間了、置硯筥、〇中略又結成束、（及三通程、以紙捻結也、）固結切其紙端餘、又引墨、

〔建武年中行事〕十一日〇正月よりあがためしの除目おこなはる、〇中略大間封じて、はこのふたに入、（成柄）なりからは三人ばかりになりて、院宮の御申文のかけがみ、二のはこに入つるを取て、四におり

成束

入眼

て二三やりて、かみひねりして、これをゆふ、まことにはうるはしきかみひねりを、ふところに用意す、ゆる〳〵とゆひてまだいにさして、はて、のちつよくゆひて、はしを切てすみをつく、大間にいれぐして内へまいらす、

〔安齋隨筆前編十四〕一成柄　建武年中行事、春ノ除目ノ章に、なりがらと云事あり、傍註ニ成柄とあり、谷村光信が首書ニ、一ニ成成束とあり、按に柄ノ字をカラとよむべきを、誤てツカとよみて、束ノ字に書替たる也、なりは成にて、官を任じたる事を云、からは殼ノ字にて、貝のカラ、卵のカラなどのカラに同じ、諸人申文は、モハヤ官を任じ成したれば、其申文はカラになりたる意也、今も書簡の用事調たる後にフミガラ(文)といふに同じ、

〔除目抄〕執筆調成柄間事

成人云、嵯峨入道左府曰、申文等ノ上ヲ調テ結之、故實也、板ニ申文等ノ上ヲ寃テ打テ調ハ次說也云々、而當時左府(實經公)紙捻ヲ結天、成柄ヲ板ニ當天打天被調之云々、如何、關官寄物ハ、同加成柄、而執筆數度之後ハ、執筆懷中寄物退出云々、入道左府(實房公)執筆及度々之後ハ懷中之云々、

〔除目抄〕一直物

成柄申文

若申諸國掾目者、成國上奕點、若申諸國掾目者、申文端書成國名、不可書國字者、可直除目、

〔羽倉考〕一成束、(ナリツカ)成文ヲ束テ置タルヲ云

〔中右記〕天仁二年正月十七日、今日殿下(忠實○藤原)被談云、敍位之時、左大弁執筆之間、成束之中文ヲ、以紙襧利結集ナシタヽムル事、甚以奇怪也、是除目之時作法也、敍位申文ハ、只不沙汰取猥藉入筥不沙汰事也者、尤可然、敍位成束、全不備後鑒之文也、

〔下學集下態藝〕入眼(ジュガン)(日本世俗、成就之義也、)

〔運歩色葉集〕入眼

〔羽倉考一〕入眼(ジユゲン)　除目ノ時ニ書記セシ文書ノ中ニ失錯有ン歟トテ、後日ニ諸卿心ヲ著テ一覽スル儀式ナリ、

〔羽倉考二〕除目入眼之事

除目ニ入眼ト云事イマダ見及バズ、蓋叙位ノ入眼(ジユゲン)ニ准ジテ知ベシ、叙位ノ入眼ハ、後成恩寺關白江次第抄ニ、無名位記書二入姓尸名一謂二之入眼一也トアリ、江次第ノ文ニモ、上卿給二叙位簿一、内記一兩、一一入眼、入ν宮進之、入眼之後、合二點於叙位簿二通一ナドヽ見エタリ、叙位簿ニハ數人列ネ記シタルヲ、一々ニ其名ヲ位記ニ書入ルヽ事ト見エタレバ、後成恩寺ノ說是ナルベシ、然レバ除目ニ入眼ト云モ、此ニ准ジテ、官バカリ書タル文ニ名ヲ加フル事ナルベシ、但除目ハ叙位ト替リテ、位記ノ如キ物アリトモ見エザレバ、除目ニ入眼ノ名目アル事少シキ疑アリ、

〔除目抄〕一除目三ケ日間可二存知一事

入眼

宮文(知ν初)　公卿事　解由取事(故實見ν奥)　新叙事(同上)　公卿擧事(同)　清書上卿事　折堺事　黄紙事　下名事(委見ν奥)　大間并成柄御硯以下、進二上執筆一事、(攝政時、大間成柄進二攝政家一、其間儀見ν奥、)

〔除目抄〕一宮文積様(中略)

入眼夜(文書調様同前○知二初夜一)

轉任勘文(外記史式部民部、中夜雖ν被ν召之、執筆入眼夜被ν行二轉任一歟、)

或中夜召之、多入眼夜召之、重服者未二復任一以前不ν入之、或返給之、或不返給之、諒闇時、入眼夜召之、

〔中右記〕康和四年正月十七日、今夕大僧正仁覺始二除目御修法一、　廿一日、晩頭參内、除目初也、戌剋事

始、 廿二日、今明共、內御物忌也、仍人々伺候、戌剋許事始、 廿三日、酉剋許、人々參上、除目入眼被始、
廿六日壬午、今夕可有除目下名、而許可不具延引、仍大外記師遠勸事、 廿七日、今夕除目有下名、
云々、大宮權大夫、左大弁勤之、京官一兩被直、越後守敦兼遷昇、民部大輔忠長、侍從信通昇殿、
長承二年正月廿四日、院今朝御幸鳥羽、大略除目之事、依御愼年、不知食、由被仰云々、入夜關白御消
息云、上皇依渡御鳥羽殿、萬事不切之間、入眼延引、明日國忌也、明後日、女院日吉行幸也、過御幸可被
行歟者、 廿七日、頭辨來云、明後日、除目入眼可被行者、 廿九日乙酉、今日除目入眼也、入夜參內、直
著端座、召官人令置軾、源大納言、左宰相中將之外、未被參之間、新藏人來云、召ス、予以下小揖、人々遲
參、暫以相待、右衞門督、藤大納言、中宮權大夫、右宰相中將參著、予召官人、召外記、少外記義經候小庭、
予仰云、筥文候へ、 外記稱唯歸入、了外記等取筥文、〈合四〉入自日華門、列立□□□□赴□□□□廊東
□□□□殿□軒廊西二間人々列立如恒、外記取筥文列立、其後予揖登小板敷、著殿上麁座上、關白
褰御簾奧座、言談之後、關白先著給御前座、予遣又著其座、權大納言實行、右衞門督實能、中宮權大夫
忠宗、右宰相中將成通、取筥文、次第置之、御座動、關白著圓座給、次關白有召予氣色、直著第一圓座、次
第如中夜儀、正笏候、有御氣色、〈殿下令會給、仰々如此、〉予推硯筥等於南、膝行還膝前、下給大間筥、指笏左手褰御
簾給大間筥、左右手持筥、復本座置前、置笏於左方、持上硯筥、大間筥〈予〉置其跡、如本引上本所、正笏候、
又有天氣、取大間置座北邊、取小刀切結緒、入硯筥、引取縣紙、圓卷、入硯筥下方、〈横〉推大間、正笏候、有天
氣、關白命云、文章生散位可給官、在二筥、取文章生散位勞帳見之處、第一菅原清隆讀上之間、殿下令
命給云、件人近日還俗聞云々、次第二者惟宗信孝可給官者、依仰給官、次諸道課試及第勸文讀上之
處、示給云、明經得業生、算得業生可成京官者、如命仰成了、於大間者、去年秋除目被成了、仍今度不可
成者、如仰成了、又內舍人成了、一人ハ、中宮當年給、〈○此間有缺文〉久者成了、次少々京官下給申文□成了、以
紙捻又結成束上、申文等懸勾著成束、了下給轉任勸文、以成束返上關白、成上官式部民部丞等、依關

清書

白命、予召云、師俊朝臣、頭辨來、予仰云、瀧口所楽勞帳可進、頭辨則持來、入柳筥取勘文、頭辨持柳筥歸了、二通卷禮紙一枚中、任勞帳成了、又六位官任了、五位以上官少々成了、大納言實行任按察使、中納言長實任太宰權帥、皆付兼字、頭辨頭中將任參議、付兼字、次受領擧可有者、予示人人受領擧、源大納言以下起座向議所、後予取大間禮紙書闕國、(本闕國八ヶ國、今夜出羽伊勢依辭退、仍十箇國也、)隨仰闕國之下、書任人名二字、撿非違使巡一人不被成也、或下給申文、或以詞被仰也、申文不進歟、此間源大納言以下進受領擧、予取之暫置座前硯筥東、大納言三人、中納言四人、宰相二人、皆進了、欲奏、關白命云、早可奏、予推遣硯筥、指笏持擧、進簾前指入簾中、拔笏復本座、(件文留御所、)依仰受領人々移付大間、有申文、ヘ懸勾指成束了、書了草案入懷中、寄物指成束了、依仰卷大間取成束、暫入硯筥、入大間、(不封、不加懸紙、)推硯筥於南方、指笏取筥、膝行進簾前、取廻左手、褰御簾、右手ニ取筥、□□□中拔笏候、(○此間有缺文、)笏大間筥復本座、入加成束、取刀切、先二ヶ夜紙捻引拔、入硯筥、今夜紙捻固結、切其餘、入硯筥、次々筥文書如本入直、指笏取大間筥出殿上、上達部濟々被坐、尋清書上卿皇后宮權大夫師時卿者、取入筥授彼人、亦退出、予時丑剋也、萬人見大間、内外任人合百卅三人、

清書皇后宮權大夫師時卿、左右宰相中將二人、宗能、成通、勤清書、三ヶ夜間無功過定、近代受領無公文之故歟、

五位藏人經親仰下云、右中將實衡、重通、可為藏人頭、又兵部大輔資信可為藏人、(五位藏人自宰闕也、)左衛門尉藤長光可為撿非違使、(是秀才也、)

〔江家次第 四 正月〕除目清書事

執筆上卿取大間退出、(若宿老大臣、於御前相尊清書上卿、召於御前給之、)納言插笏取筥、(成文等入大間、)出殿上、(或公卿以下於此行披見、)召外記於小板敷下、令持件筥、次著議所若陣座、(春時參議二人共著、)召陣官人令置軾、仰外記令進折界(用紙屋紙、)硯等、(有勅任者又加黄紙、)令參議相分清書、(參議進寄上卿許書之、)或上卿讀令書之、別紙者先指夾竿、大納言以下參議已上、左右大辨、

八省卿、近衞大將、諸衞督、彈正尹、東宮傅、太宰帥、以上勅任、用黃紙、但近衞大將諸衞督佐、爲武官、書別黃紙、書勅、

親王公卿各可別紙、而近例不然、若有南殿儀、必可別之、依唱人異也、親王兼國又黃紙、書勅、親王兼國黃紙、常陸上野上總大守爲勅任、事見天長官符、

參議以上兼官兼國白紙、別紙、書太政官謹奏、

按察使只書陸奧國、不書出羽、但任符給兩國、

出羽城介唯出羽介、後給官符於秋田城、

齋宮寮頭以六位中請、書從五位下、其後給位記、四位任中納言者、書從三位、後給位記、

文官勅任一紙　親王兼國一紙以上黃紙

公卿兼官兼國一紙文官勅任一紙、武官一紙、

以上任、今夜任人書之、又令書下名、以美野之紙書之、各不過四五人、參議以上不入云云、文官四位四人許、五位五人許、六位二人、武官各二人許、闕、但人者、無闕隨人、猶可載也、上卿召外記給大間、大間下名等留座、清書入筥、若有遣任者、書入於清書、但返

大間之次、外記令中執筆、成白書入於大間爲善、先令外記內覽之、或先中請不可有內覽由、觸人中之、給外記、外記取筥立、晴所時立日花門東、陣時立小庭、

付御所、令藏人奏、上卿此間候小板敷、返給後著本座、大間令外記結之、其上書封字、近代引墨、不加墨紙、成文同入

筥、令外記取筥、執筆大臣卿、若當日不行下名事者、召名中各袋籤別紙下名等、同引墨給外記退出、

〔除目抄〕勅任奏任黃紙白紙等事

親王任官　大臣　大中納言　參議　八省卿　東宮傅　左右近大將　左右衞門督　左右兵衞督　左右大弁　觀察使

已上勅任等、天平已後、大同已前、多用白紙、用青紙、或希用黃紙、弘仁以後、嘉祥以前、多用黃紙、或用白紙、仁壽以後至于今、皆用黃紙、但先年偏記勅、或重記勅任、今既省記勅、又天平寶字之間、或大納言、八省卿、記太政官謹奏、神祇伯記勅任、征夷大將軍勅任也、

〔除目抄〕直物事自江記之中書出之、于時寬元四三廿五、

召名（所謂除目也）

〔羽倉考一〕召名（メシナ）　召ハ除ノ義ニテ、喚ノ義ニ非ズ、除目ニ官ニ除セシ人々ノ名ヲ書立テ、、太政官ヨリ奏聞スル書附ヲ云、

〔除目抄〕清書事（黄紙、白紙、白紙ト云ハ紙屋紙也、外記奉行人方、）

除目了、上卿參議二人、或弁加之、春二人、一人有例、久安五三十八、縣召除目入眼、參議救長卿一人書召名、秋一人、攝政儀時、執筆淸書有例、仁治二十十三、京官除目、執筆參議左大弁經光卿淸書之時（淸書）、（手筆相）淸書了、上卿淸書除目、（謂召名）下給外記、關白坐里亭之時、先大閤以外記内覽之後淸書了、太閤成柄等外記持參、執筆大臣家、仁安二八一、權中納言宗家卿之又被行小除目、參議雅賴朝臣執筆、依無宿紙、以白紙書召名、江談中云、口傳云、除目淸書宰相墨様不黑可書、有誤書直之時、薄墨ニ書也云々、淸書上卿置笏事、帶劒ノ人ハ置右、不帶劒人ハ置左、但宇治殿只可置座下方之由被仰畢、

〔除目抄〕勅任○召○名○書○様○（黄紙）

勅

　太政官

　　大納言從二位源朝臣

　　　年月日（自餘准之）

參議兼國　參議任式部大輔、彈正大弼等、　春宮中宮大夫、陸奥出羽按察使、（承和已後、或畳注陸奥出羽、嘉祥已後、）

（只注陸奥、依任符時加出羽、）　參議任大宰大貳、　非參議三位任官

已上太政官謹奏之別紙也、皆用白紙、

奏任別紙召名書様（紙屋紙）

太政官謹奏

下名

遠江國

權守從三位藤原朝臣

年月日自餘讀之

〔江次第抄四正月〕除目略○中

丞給下名　下名者、書四位以下任人名也、先以下名給二省丞、爲令丞引任人也、

〔羽倉考一〕下名(シモナ)　四位以下ノ今度官ニ任ズル人々ノ名ヲ書立テ、二省ノ丞ニ下シ給フヲ云、早速ニ其人ヲ引出サシメンガ爲ナリ、

〔羽倉考二〕下名之事

江次第ヲ考フルニ、敍位除目ニ下名(シモナ)ト云ハ、四位五位六位ト云字ハ高ク書テ、姓名ヲ一字下(サゲ)テ書事ト見エタリ、是其日敍位任官シタル分ヲ列記スナリ、江次第ニ下名ノ書樣トテ見エタルハ、

四位　五位　六位

藤原朝臣丶丶　橘朝臣丶丶　紀丶丶

源朝臣丶丶　高階朝臣丶丶　中原丶丶

大江朝臣丶丶　平朝臣丶丶　藤原丶丶

右ノ如シ、蓋名ヲ下テ書ガ故ニ下名ト云ナルベシ、而シテ西宮記、江次第等ノ文ヲ案ズルニ、是敍位ノ日敍位シ、除目ノ時任官セル人ヲ書記シテ、其文ヲ以テ其人々ヲ召出シテ任敍セル由ヲ告ル儀ト見エタリ、後成恩寺關白江次第抄除目條ニモ、南殿下名儀、見西宮抄、式部卿唱、親王大輔唱、公卿トアリ、又除目下名、往代天皇出御南殿、有召唱之儀、中古以來於官廳若外記廳行之、ナドトモ見エタリ、

〔西宮記正月下〕除目　下名

上卿著議所、出自日華門、召二省丞給下名、先召式部給之、次給兵部、各退出、臨時給下名者、二省退立、上卿仰云、末介〃へ、二省稱唯出、二度下名不仰、二省退上卿率參議已下、出左衛門陣、向官廳、外記持召名筥、相從上卿傍、召名上卿入自東門、著靴、京官召者著外記、著廳、外記置召名、入自西北戸、取筥退、上卿召召使、二聲出南門加列、召使稱唯、立西廳壇下、入夜者間之、上卿仰云、大舍人乃官寮、式乃省兵乃省仁名付給天、令候人等將參來與宣天、召使稱唯、出南門召辨少納言、引列少納言便立加、延喜十六年正月、以少納言兼爲辨代、外記史、二省輔已下就版、上卿召寸、各稱唯著座、五位以上昇自南西階、六位以上昇自西北階、省掌取版立後、上卿召式輔、輔稱唯進倚、上卿以召名輔昇階之間、上卿取召名副笏持之、給輔、別紙貢紙同卷加也、輔復座、召兵輔給如前、上卿云、令召ヨ、兩輔起テ稱唯復座、式輔召丞名、丞立唯、輔云、驗乃木令置ヨ、稱唯復座、召省掌名、一音省掌唯、丞云、驗乃木置介、省掌稱唯、置驗木立本所、輔召錄名、立稱唯、輔以召名給之、有貢紙者、先召丞給、丞讀了、兵輔召給如前、式輔云、召セ、錄立唯、兵輔又如此、錄披文讀、給官者在此座、召其名、被召者立唯、兵錄又如此、畢上卿立出召名、二省以正文上外記、寫一通上任符所、又寫一通進藏人所、式官准之

南殿儀、寬平九、延喜九、天曆六例、兩儀、南殿御裝束同旬、大臣座前立机案、大臣清書除目進御在所、以下名給外記、天皇御南殿、大臣已下著議所、某年左大臣參議二人、著議所、給下名、餘公卿在陣座、召二省給下名如例、二省立標、歸著陣、天皇出御、內侍以除目置案上入筥、諸卿著靴、內侍出、大臣已下昇殿著座、兵衛陣立階下、依內裏式、此間立不替陣、寬平稱之、開南門等、闈司著、不開諸門、大臣召舍人、二音唯、少納言參、大臣召詞如例、少納言稱唯、出召少納言辨、二省相分率任人參入、列立庭中、丞持版、錄稱容止、天曆依兩立東西廊、[illegible]大臣召寸、兩省輔共稱唯、立東軒廊中間、天曆兩儀、西面北上、兵部渡壇上、式部共經春興宜陽殿上、依兩儀也、晴兵部渡雜道、大臣取召名召式部輔、輔稱唯、昇自東階、經簀子、立大臣後、大臣給召名、輔立本所、給兵部如前、任官式任親王者、召歸給、可准叙位儀也、輔等歸本列、大臣云、召セ、兩輔稱唯、各仰丞令置版、丞等置版、依兩儀、置承明門壇上東西二柱下、晴立尋常版南三丈許、唱者二丈、蔭位貴者就之、餘直列立、式部輔唱之、有別貢紙者先唱之、王卿已下、唱人各異、有不參者錄稱唯、下任人進立標、召畢輔退、兵部同之、少納言已下出、左右任人拜舞、丞取版退出、入御、諸卿下、無此儀者、寬賢殿上人奏清書、於射場付藏人奏覽、地下人下名後、參議陣付近衞次將奏、二度除目三人已上共奏、三日外不奏、衞府待兵部移著陣、移文不來且申賞、公卿不必待移著、○中略

下名様（給二書下名一事不レ具、武官准レ之、叙爵以上不レ入、以レ載二大間一人人抄出也、）

四位

姓朝臣

五位

姓朝臣名

初位以上

姓名　已上不レ過二四五人一

年月日　已上料紙外記請二自蔵人所一

〔江家次第正月四〕除目清書事

下名書様（書二補任人一、無二官階人一可レ載）

四位

藤原朝臣、、

源朝臣、、

大江朝臣、、

五位

橘朝臣、、

高階朝臣、、

平朝臣、、

六位

紀、、

中原、、

藤原、、

年月日　式兵共如此

勅（黄紙并二折堺一）

太政官

大納言正三位藤原朝臣、、兼（一人一度除目任二兩官一、末官付二兼字一、）

權中納言從三位源朝臣、、

參議正四位下藤原朝臣、、

左大辨從四位上藤原朝臣、、

民部省（入省輔雖レ任二四位一猶入二黄紙一）

卿正三位藤原朝臣、、兼

彈正臺

尹四品、、親王（親王唱人異、可レ注二別紙一、兼國同之、或載二一紙一、）

東宮坊

傅正二位藤原朝臣兼

上總國

太守四品、、親王（常陸上野又任二太守一）

太宰府

權帥從三位藤原朝臣

年月日

勅

左近衛府

大將正三位藤原朝臣丶丶兼

右衛門府

督從三位藤原朝臣丶丶兼

左兵衛府

督從三位源朝臣丶丶

年月日

奏任清書

太政官謹奏（公卿兼官除目用之、料紙、白紙折紙、）

中宮職

大夫從三位藤原朝臣丶丶兼

近江國

權守從三位藤原朝臣丶丶兼

陸奧國

按察使從三位源朝臣丶丶兼

出羽書位署時自加之

太宰府

大貳從三位藤原朝臣（有ニ帥一時不レ任ニ大貳一）

年月日

太政官謹奏（武官折堺、別紙白紙、若可ㇾ加ㇾ武歟、可ㇾ尋二先例一）
左近衞府
權中將從三位藤原朝臣
年月日
太政官謹奏
神祇官
伯正四位下、、王
太政官
少納言從五位下源朝臣（至二侍從一者、書二位署一時自加之）
大外記正六位上大江朝臣、、
左中辨從四位上藤原朝臣、、兼
左大史正六位上船宿禰、、
中務省
少丞正六位上源朝臣、、
少內記正六位上橘朝臣、、
木工寮
權助正六位上藤原朝臣、、
東宮
學士正五位下大江朝臣、、
東宮坊

權亮從四位下源朝臣、、兼

山城國

守從四位下平朝臣、、兼

太宰府

少貳從五位下平朝臣、、

權大監正六位上橘朝臣

筑前國

守從五位上藤原朝臣、、

年月日

太政官謹奏

左近衛府

權中將從四位下源朝臣、、

將監正六位上平朝臣、、

左衛門府

佐正五位下藤原朝臣、、

兵庫寮

權助正六位上橘朝臣、、

鎭守府

軍監正六位上淸原眞人

年月日

〔江家次第正月四〕除目下名(除目下名、往代天皇出御南殿、有下名之儀、中古以來、於官廳若外記廳行之、)

上卿令藏人奏可行下名由、

次著議所、　仰外記令進下名、(清書上卿不行下名退出、値上卿參入行時例也、)　若有追任者、令參議書別紙可奏之、

仰外記令召二省、(外記令召使召之、到内記所南召之、二省列立延政門東云云、内記所在延政門外北掖、)

式部兵部丞參進、列立於日花門東庭、(去門長柱入許尺、以西爲上、)

上卿北面宣云、式(乃)省、丞稱唯進著膝突、上卿右手取文上三寸許、(引立右臂、)徵徵給之、丞給下名立本所、

次上卿召兵部省給下名如前、丞退歸間、式部丞立前退出、(以上雖入夜不問云云)

二省出陣外、畢後、上卿召外記給召名筥、次率參議以下、出自左衞門陣南行、(外記路間取筥、立上卿右邊一許丈、)

入官東門著靴、次第著廳座如例、　外記捧筥入自西北戸、參進取召名置案上、取空筥退出、

此間少納言辨以下、經東廳後到南門下、

上卿召召使、(二音)稱唯參入就版、(西宮抄、立西廳南下、入夜者同之、)　仰云、大粫火(万)官(爾)、式(乃)省兵(乃)省(爾)名簿給(天)令候(多 留)人(登 毛)將參來(登)宣、(或說、式乃省兵乃省召、召使稱唯、退出召之、)

辨率二省輔以下參入南門間、少納言加上、或有辨少納言間一人不具之例、(外記史加丞上立後列、)　立版畢上卿召(須)、五位先同音稱唯、(六位次同音稱唯)

次各參上、著座如例、(五位已上昇自南面階、六位昇自西面階、)省掌取版立後、

上卿以召名取副笏召式部省、輔稱唯、進給召名、復座、(別紙黄紙同卷加之)

次召兵部給召名、復座畢上宣、令召(與)、兩輔共起座稱唯而居、式部輔召丞名、丞立稱唯、輔云、驗(乃)木令置(與)、稱唯復座、召省掌名一音、省掌稱唯、丞云、驗(乃)木置、省掌稱唯、置驗木立本所、

次召錄名給召名、(若有黄紙者、召丞名給之、又先召之、)

次兵部輔召錄名給召名、各復座後、式部輔仰曰、召、次兵部輔又仰之、

次式部録起座、召之、式部録起座召之、兩毀儀、二省率任人參入、官掌儀、不必引任人、只二省録披召名而唱之耳、　著聽上卿以下、若被除者、召時起座稱唯退出、

次兵部又同之　近例式部召、兩三人之間、上卿起座退出、

京官除目、於外記給之、大略同之、但上卿以下著靴、與常政儀、又辨先立外記門北邊、東上南面、　召使召使準二省而入同門、少納言立加、

清書時、令參議書下名時、有追任者有二說、一者上卿令參議書入於清書、令外記返上大間之次、令申某官被加任之由、爲勝、一者上卿自書入於大間、亦令參議書後返大間、次申其由、

〔除目抄〕下名事春秋司、外記下名日、隨一見召名參議、不可忘却、或置文殿預、許令持參之、江談中云、除目下名、各三人許可書之、叙位下名、無遺官、許可書歟之、

除目三ケ日中、或入眼次日、催具二省輔丞、若代丞許云々、等、被行下名、春秋太政官廳、外記局、　期日二省渡外記局、此次有加任、任人折紙職事下上卿、上卿下參議、天召名書入之、除目任人ヨリハ、加任輩ヲバ細々、墨黑ニ本任人ノ間々ニ書入之、加任者多天、間々ニ可書餘者、別ニ書テ切續之、又間々ニ書入ヲバ、加任ノ人數ヲ計天奧ニ書ツムル也、加任スクナクテ、端ヨリ書テ奧ヲ書ツメヌレバ、無畏防事歟、

首書除目一通進藏人所、御簡被直改料也、先是比來

下名書樣四位已下入之歟、顯官可然之官載之、六位之中、兵衞尉馬允不入之歟、外記史、式部、民部、兵部、叙眞等顯官入之、僅任者猶不入歟、民部少丞輔大丞之類、又猶不入歟、寧相書之、不書二年月日、口傳云、次第ハ官丞寮助屬忠云々、寧相所立次第也、任叙之、叙位下名書樣、假令不可違之歟、叙位下名ニハ不可書之、或説不書云々、

式此一字鈴書之、内匠ニハ不書、兵叙之、

四位

大中臣朝臣爲定

五位

藤原朝臣家信
藤原朝臣基良
六位
中原國貞
卜部兼任
兵
五位
藤原朝臣隆淸
藤原朝臣資家
六位
惟宗忠久
中原有親
或次第云、下名書首書、年月日云々、

〔中右記〕長承二年正月卅日、辰時許、外記義經持來大間成東硯筆等、留文書等、返給筥了、明日下名可有之由、關白殿被仰也、心閑披見之處、任人百卅餘人之中、備前大掾闕二人而成三人也、下名之次、一人被成河內掾之由申了、　二月朔日丁亥、今夜雖可被行除目下名、依上卿故障延引、　二日戊子、今夕有下名、上卿左衞門督雅定、宰相右兵衞督顯賴、右少辨俊雅參仕、少納言知信、高階爲忠加階木工權頭、此外事不見也、但備前掾闕二人而成三人也、仍申移校書頭正宗於河內掾也、

除目奏

〔延喜式式部十八〕凡除目奏者、莫過當日、若日暮不堪書者、明日早朝奏之、

直物

古事類苑

政治部十四

上編

除目下

〔名目抄臨時〕直物〈ナヲシモノ〉

〔倭訓栞中編十七〕なほしもの　源氏にみゆ、北山抄に直物とあり、細流に除目の後、執筆申行て大に任官ある事也と見えたり、除目参著の事等をなほす義なるべし、除目の後、兩三月經てもある事なりとぞ、直物抄といふものもあり、

〔源氏物語四十九寄生〕二月のついたちごろに、なをし物とかいふことに、權大納言薰〇になりて、右大將かけ給つ、右のおほい殿紅〇左にておはしけるが、辭し給へるところなりけり、

〔河海抄十八寄生〕なをしものとかいふことに　直物

縣召、或京官除目以後、執筆直物を申行也、或除目以後兩三月經てもある也、先度除目參著事等をなをすゆへに直物といふ也、其次に書入らるゝ事ある也、

〔北山抄一正月〕十一日除目事

直物事

大臣作公卿給、副二合停任給外記、〈二合停任、又給式部、〉二省以召名簿返上外記、外記勘其失錯儲候、大臣〈除目行上卿〉定日著陣、令進勘文、能見、案畢就御所、令奏之、〈或加入々中文、外記先申事由、加奉云々、不過三四枚、承平四年、令十枚云々、舊例副召名奉之、而近代只奏勘文云々、〉返給之後、召硯召名、〈依年召名、入勘文名替本、〉令參議改正、〈若無大弁、用他參議、下給中文、若先被見之、當年名替依闕次第、舊年名替依除目年月次第書載、一度除〉

目有二人以上者、又國次第卷重之、其年々注紙給外記、令進召名、此間京官改正畢、外記先見合名替請文改之、若任勘文改畢後、又名替者有再應煩、若有國替未給等、先可令勘合否歟、近例參議座召外記、下給請文令申合否、更不書注、隨上卿命先草書、一定後召折境清書、加直物奉之、舊例先奏草、近代不然、至于剩闕、上卿令奏事由任之、其剩闕者、闕官之上引點也、隨直勾勘文幷申文、申文一字相誤者不改、其成文折上置別、夾筆召名摩一行、有空所者、又指夾筆云々、畢、年々召名、勘文成文等、入筥奉之、上卿見畢、留勘文成文等、令持召名參上奏聞、返給復本座、目參議、令放舊年召名有夾筆枚々於上卿前放之、卷加當年召名奉之、取殘卷々歸座云々、召二省給之、其儀如給宣旨、多枚數者、結中給由、見天慶三年三月廿五日私記、

承平二年二月六日、保忠卿行直物、依左大臣忠平○藤原命也、大臣依爲攝政、讓他上卿令行歟、此日令撤筥硯筥後給直物云々、式部候由、三反不申云々、

〔江家次第四正月〕直物直物者、除目之時、所給於二省之召名中有失錯者、大臣著陣令參議改直件召名也、往古每年除目訖一月中行之、中古以來每年不必行之、其時召出年年召名而改之、其失錯者、外記作直物勘文奏上之、此次或付行小除目叙位女官除目叙位等、臨時不定也、

執筆大臣令作公卿給二合停任等給於外記、外記作儲直物勘文、大臣令藏人奏、以其日直物可候由、仰外記令催諸卿、告陣定由、當日大臣著陣、令藏人若殿上辨奏直物候由、次仰外記令進勘文、入筥大臣見勘文、能案見之後、進御所奏之、宿老大臣乍居陣令藏人奏之、返給後復座、仰外記令進硯幷召名等、外記進之於參議座、大臣目參議、大辨若無者、他參議亦得、參議進候、大臣給直物勘文、入筥參議給之復座、次見勘文、改正當年召名等、此間自御所以藏人被下公卿給申文等、大臣給之、又目參議、參議進給申文等復座、次置比申文等於座右、

當年名替依國次第

舊年名替依除目年月次第卷重之

次件年付注出一紙、召外記令進件召名、又下給未給國替等申文於外記、令申合否、任符返上不下給次依名替申文等者、先改正當年召名、懸勾申文次以外記所返上之未給國替等申文、比置如初、次座右設紙撚二所綴結之、

成文一束　不成文一束〈已上隨任否、各別加之、〉

件申文、一字有誤不任之、

外記進年年召名等、又令進闕官抄、次任未給國替等申文、隨亦勾申文加於束、次若有小除目者、自御所被下申文等、若有不進申文任官之者、上卿令藏人書風記、大臣目參議、參議進給申文復座、次參議令外記進折堺紙、次第書之、書畢入文等於筥、勘文成文除目等也、參議進奉大臣復座、不成文等爲一束入硯筥、大臣見畢留勘文成文等、令持召名幷今度除目等、進御所令奏之、返給復陣座、大臣目參議、〈進居大臣前、〉大臣仰參議令放舊年召名、參議乍候大臣前放之、有夾下枚枚所放出也、卽展當年召名、以所放出之枚枚置其上、合卷入筥、取所放還之召名等復座、

次大臣召外記問曰、二省候哉、外記申候之由、大臣宣召、次外記又申二省候由、〈二度〉最後度大臣仰可召之由、後二省著輕立小庭、大臣先召式省給召名、次兵省給之、次二省復列後、大臣仰曰、萬計給〈戸、〉二省退出、次又召式部兵部〈召之〉一一給直物、〈此度丞著淺黃、自朝還、〉次召外記撤筥、

直物

大臣〈奉仕當年除目之上卿也、〉令作公卿給二合停任等、給外記、〈件二合停任勘文、大臣家司中知故實者所作也、攝政時、大辨奉仕除目、攝政家司作公卿給、被奉一大臣、大臣召外記給件公卿給二合、令作勘文、行之、件二合停任、又給式部、云云、〉二省以召名返上外記、外記勘失錯等、作儲勘文、大臣令藏人奏、以來其日直物可候由、〈除目以後、一月之內可行之云、或說、不可奏件由、但直令奏勘文爲吉云云、淸愼公曰、傳曰、外記勘申錯失、上卿奏聞改之、必不待殿上仰云云、而九條大臣天慶四年四月十一日記曰、右大將先不奏事由、只蒙殿下仰被行之後奏聞、頗違先例云云、〉

仰外記令催公卿、〈告可有陣定由、大辨參可參由仰云云、〉

當日大臣著陣、令藏人若殿上辨奏直物候由、次仰外記令進勘文、外記成此次申諸家申文等候由、大臣仰云、幾何、外記申云、若干枚、大臣仰云、三四枚許進之云云、近代無此事、諸家申文、皆付藏人之故也、

外記進勘文、入筥、或外記加入當年召名、諸家申文等云云、近代不然、及大臣見畢進御所奏、四條記曰、能見案畢後奏之云云、或記曰、宿老大臣在陣座、令奏云云、延喜四年左大臣令參議菅根奏云云、近代不見此例、返給復座、大臣目參議、大辨若無者、他參議亦得、三條殿抄云、非參議大辨奉仕直物云云、可尋之、參議進候、雖下臈參議、奉仕此役之人著南一座、上臈參議等起座、同階者、不論上下臈、着大辨下云云、近例雖同階皆起、大臣給直物勘文、入筥、參議插笏給之、復本座、拔笏依氣色先見直物、於筥中見之、不取出其懸紙、不卷返也、次見申文、是被加下申文之時事歟、近代不然、依氣色參議令官人召外記、外記進跪參議座後、下臈參議仰入直物年年召名幷硯可進由、雖當年召名入勘文者、可令進、又陣定時、上卿先召官硯之次、有直物者、便用其硯、更不召外記硯、只仰可進次筆由、外記置硯筥、件筥入硯、板、硯板、小刀、次筆、以綵結之、等、幷召名等於參議座、式部兵部召名各一通也、不可讀合由、內內可示外記歟、不讀當年舊年、各可有二進、若外記讀合進之者、返給爲二卷、可進之由可仰之、若讀合者、兩方召名共被直故、別時頗有事煩云云、參議取召名入筥、外記入筥進時、件筥可返給、依不可有二筥也、上卿所被下之筥、本自在前之故也、先一通見召名歟、或不必見、次依勘文改正當年召名等、先取刀削之、若厚穿所有以紙壓之、下亦同、次置刀執筆書之、次刺夾下置之、次懸勾於勘文、王公卿給者、暫不改直、依可有再摩之煩、被待公卿請文云云、此間自御所以藏人被下申文、不結無短册、或人自御所下付短册給之、於小板數捻之持來也、大臣給之目參議、參議進給之、復座如前、近例名替者當年也、若直往年者、任限之後非歟、仍以往名替除書時被進也、若又有任符返上申文者、其任符所卷籠於申文奧也、國替未給、以上院給公卿以上無短册、參議先置名替申文於座左、以文首向南、始自當年申文、置比五年以上申文、是陸奧出羽太宰諸國等以五年爲任限、仍至于當年、縱任限內也、依申請可替也、除件國國之外、可比量四年歟、除目時雖經數十年、本官有闕者、雖依申請替也、恩之廣也、西宮抄直物時經五年由、仍不許以往、可替、或說、四條記、當年名替、依國次第、舊年名替、依除目年月次、卷重之、又一度除目有二人以上者、國次第卷重之云云、依有改正時、便宜歟、次若有國替未給等申文者、亦皆暫置於座前、或說只有當年名替、舊年未給無國替時、不可令進、古年召名、只令勘未給給不、若相叶者、今夜可任也云云、次件年年注出於一紙、可改正年也、多時可注出、若少者不然、次召外記給書出、仰件年年召名可進由、若可改正年年員少者、不必書之歟、又下給件未給國替等申文於外記、令勘申合否、但任符返上申文者、更不可下給、若國替申文望諸國掾若目者、此間可召召名、若有所望國者、召直官抄、後見被國闕否、後可召召名、除目時、大臣端書下也、名替國替可勘合否、未給可勘給否云云、物之時、參議不端書歟、可尋、外記持歸見合、更持來也、近例只參議座下召外記、下給申文令申合否、更不令續書云云、見四條記、次先依名替申文等改正當年召名、懸勾申文、次發紙捻二、搓結之、以小刀割在硯紙、或人曰、文及三通時可結云云、經信卿說、雖二通可結、成文、成文一束、不成文一束、

以上國任否、各對之、件名替中文等、除一字、有誤不可任、折文上方、對於不成文束云云、下注之、次依直物勘文、改正當年公卿給等、若國替中有當年中文者、雖其後可改正公卿給歟、此間外記進年年召名等於參議座、當年召名等每枚裹注某年月、次仰外記令進闕官抄、國替并未給等相叶由、外記申上、其後召件抄、若替不相叶之時、更不召、有小除目者、臨期召之云云、次置比未給國替申文於座左、國替未給、以上人次第書重之、依上臈申國下臈不可任歟、并有誤申文、又對於不成文束、次改正召名、削除對夾等、國准上、名替之外、替中請上啣可任云云、若除一行、有空行者、猶削夾等、國替等可載於今夜除目、然而猶削舊年召名、隨又勾申文、若任二所第一國并又注第二國除目申文等、可注付今夜拝任官於申文袖、其上合點、若申二國者、今夜所任官可合點、申文勾畢後、更不依人次第、依國次第卷重置、或比在南頭、次召折堺紙、次第寫書、四條記、依上卿命先書草云云、近代不然、若有小除目者、一座可書之、此間若有小除目者、以藏人被下申文等、又藏人頭注風記奉之、是除上人公卿不違申文之類歟、大臣給參議、參議給之復座、次召折堺紙於外記、次第書之、件折堺紙、仰外記四五枚許、可令儲設、任畢後放棄、有損、依不足被續時、有事煩云云、

其書樣不注民付云云、二國宣除目大國外無民付歟、若有可轉任之官者、仰外記令書遂之後、可書於除目歟、勅任者於御前不行、若被任時、召上卿於御前令書之、持歸陣時、給公卿給等之後、令書加實紙也、

勅任（參議已上）大宰帥　左右大將　兼親王任太守等也（以上）　入省輔　彈正尹
東宮傅　六衞府督（以上）

勅

太政官

權大納言正三位藤原朝臣――

參議正四位下源朝臣――

左大辨正四位下源朝臣――

民部省

卿正三位藤原朝臣――

東宮

傳正二位藤原朝臣——

年月日

公卿兼官兼國（依唱人異、別紙書之也、用折堺、又武官有三位以上任中少將者、又可書兵部召別紙、）

太政官謹奏

中宮職

大夫從三位藤原朝臣——兼

近江國

權守從三位藤原朝臣——兼

陸奥國

按察使從三位橘朝臣——兼

奏任

太政官謹奏（式部召也　除武官之外、皆入此召名、）

神祇官

伯正四位下——王

太政官

大外記正六位上大江朝臣——

左中辨正四位下源朝臣——

春宮坊

權亮從四位下源朝臣——

山城國

守從四位下平朝臣――

年月日

太政官謹奏兵部召也、六衞府、左右馬寮、兵庫寮、鎭守府、皆入此召名、

左近衞府

權中將從四位下源朝臣――

年月日

式部兵部召名各一通可書之、未給闕替等、皆依申文書入之、四條記云、舊例先奏草、近代不然、至于剩闕者、上卿令奏事由任之、其剩闕者闕官抄之上引墨云云、拾遺雜抄云、直物之次、於陣頭行時先奏草如常有民付近例卽清書奏之、不成草、外記以成文備後鑒云云、注曰、召上卿於御前、奏官任畢後、公卿給清文等、被下陣時、清書可然、更不可然事、但依參議儀歟、事如民付、先可覽上卿歟、事畢入文等於筥、直物勘文如本書墨紙、年年召名不放云云、不取枚面放歟、無所據由見清愼公口傳、成文給中引墨云云、可尋、件引墨之説、直記云、留參議許、後奉大臣云云、不可然歟、今夜除目事也、奉大臣、復座、不成文等爲一束、入硯筥、臨時闕外記令書出之文書等、參議可插之者中歟、西宮本抄云、留件文於陣座云云、大臣見畢留擲文成文等、令持召名并除目等、入筥外記、參上奏聞返給、復本座、目參議、逢居大臣前、令放舊年召名等、參議乍候大臣前放之、當年召名不可放之、有夾算枚所放也、卽闕當年召名、其上更置所放出之舊年除目枚枚等、卷合入筥、置大臣前、當年除目不放其裏、古年除目若當奧枚者可放歟、其裏卷、猶於除枚可持歸、取所放遣召名等、取副於笏復座、就當年一方召名、各有古年件方召名時、不可放歟、可尋之、外記三度申、兩儀二省立於軒廊東二闕云云、初度大臣聞外記、中儀由、次度外記中大臣無答、次度外記中、大臣仰可召由、次大臣一一召二省、先給除目、丞參小庭、如例歟、次給直物、丞自陣進、淺履、四條記云、其儀如給宣旨、多枚數者、結中給由、見天慶三年三月二十五日私記、

次參議返給硯筥等於外記、成文勘文等同給外記、外記備後鑒之後、後日返上大臣、

依陣定次召官硯時、給文書於外記、可給硯於史歟、不成文放餘召名、闕官抄等入件筥、四條記云、承平二年二月六日、保忠卿給直物、依大臣命也、此日令獻宣硯筥、後給直物云云、式部候由三度不申云云、依無除目歟、

〔權記〕長德元年九月廿八日、此日有直物小除目之事、先右大臣(○藤原道長)參御所、召紙筆有除目之事、子四剋事了大臣退下、淸書之後、相副直物奏之、(今日事、右大臣一人候御前、其儀如官奏、)

〔本朝世紀〕長保元年閏三月四日丁亥、中納言藤原時光、同齊信朝臣、著廳座、聽政無申文、畢移著南庭座、事畢著左仗座、依可被行今日直物事、夜部參候右大臣(○藤原顯光)內裏、午後內大臣(○藤原公季)大納言藤原懷忠卿、中納言實資卿、參議同公任卿、同忠輔卿、源俊賢朝臣參入、被行直物、事畢亥剋退出、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年七月廿八日丙戌、直物、正月除目也、有事障于今延引、

〔榮花物語十二玉村菊〕三月(○寬仁元年)には、れいのなをしものなどいふ事あればにや、三月四日つかさめしあり、

〔左經記〕寬仁元年十一月十一日乙巳、參內、攝政殿(○藤原道長)於御直廬、召大外記文義、下給公卿給文、(一枚公緖給、一枚興福寺申任主稅屬文、一枚侍任文、)件文或下給行直物上卿、或直召外記下給行直物上卿云々、(今案攝政被坐之時、直召外記下給、不被之時、可下給奉行上卿也云々、)頃之源大納言(○俊賢)被參、依召也、令下給典侍藤原灑子辭職狀、仰云、件灑子辭退替、以藤原美子可任典侍職者、卽於右仗座召紙筆書下名、(左大弁執筆、)令余(○源經賴)奏之、(入筥、)奏聞之後下奉大納言、卽大納言加封下給外記、是後召中務可下給也云々、上召外記於膝突、下給下名文、(作入筥、)外記卽封之入筥奉上卿、上卿墨點封目上、作入筥給外記、外記給之退、暫置本座云々、次可有官奏、而大弁遲見文之間、已可及昏黑、仍攝政殿被仰云、今日奏、弁等懈怠也、及晚景就中可參大殿、以後日可行之、卽令退出給、余參右府、(○藤原公季)申、十五日許可被行直物之由、奉之被申、次參大殿、事畢退出、十二日丙午、攝政殿令退出之間、伊勢國百姓等群居路頭、申守孝忠朝臣可被重任之由、卽召余被仰云、仰上卿可令取申文者、今日上卿不被參之中、已及昏黑、仍不召件申文、十五日己酉、參內、左府於右仗座被申行直物事、此次有除目、(但馬守則經、自餘在別、)伊勢國百姓等申文、仰左府召其奏狀、仰史令官掌取之覽左府、次奏之、想被留御所、二年十二月七日乙未、被行直物之由云々、長門守業敏朝臣、依民之愁

被任替云々、〈皆文高朝臣、別功名也〉作業敏被對問三度、有召遂不參、仍被成替云々、

長元元年十一月廿九日己未、參內、右府〈○藤原實資〉被申行直物、其次有除目、關白殿〈○藤原賴通〉仰云、以中宮權大進參河守保相可令兼任之由、從宮有仰、而保相其身在任國、爲之如何、在任國之輩、博士受領兼官例、密々可問右府者云々、被申云、諸國受領須在任國濟調物也、而在京之旨、理不可然、而受領兼官、往代多有其例、以之知之、必以在京之人、不可給兼官、唯隨宜可被行歟、就中諸宮司依本宮被申所任也、於從宮被奏者、被任何事有哉者云々、宮大夫被申云々、諸宮進以下宮舉奏被任者、以此旨申殿、仰云、六位進以下官奏狀被任之、減恆例也、於五位以上者、必不尋奏狀、唯以口奏多被任者、

〔春記〕長曆三年閏十二月十三日己亥、早旦參右府〈○藤原實資〉命云、今日直物欲參入處、此兩三日膝腫、進退不調、衰老之人、猶以可無便、仍不能參仕之由、可申關白〈○藤原賴通〉也者、卽參關白殿、不應外以章信令申、命云、直物、此春無此事、太以不便事也、今日不參入給者、後日可令申行給也者、予〈○藤原資房〉又參右府申此由、命云、今朝宣者可令申事由也者、又參關白殿、申此由、命云、以此旨可奏聞者、卽參內奏聞、

〔台記別記〕仁平元年二月廿一日壬戌、今日直物、日來左宰相中將〈○藤原經宗〉申可奉仕執筆之由、去夜俄申依疾不能參入之由、今朝使頭右大辨朝隆朝臣奏此由於法皇、〈○鳥羽〉朝隆朝臣承法皇仰、可催之申可參之由了、申剋朝隆朝臣持來書所召人之折紙、任所存奏理非、次朝隆持參折紙於禪閤御所、次持參院、戌四剋、東帶參院、〈待御休之、行遲引云々〉間、先之被始御修法時、〈孔雀經〉藏人勘解由次官顯遠持來折紙、法皇手書曰、參議藤師長〈藤原〉侍從藤隆長、刑部卿平忠盛、〈平〉仰云、刑部卿當任否宜計奏者、對曰、若論其稱、可謂凡劣、然而位叙正四位上、官帶藏人頭、殿上之侍臣、經播磨守、所帶所經、坐以貴重、拜任之處、誰謂非據乎、法皇然之、亥剋參內、陪皇后宮御廳、諸卿未參、外記師尙申云、只今執筆相公〈信宗〉□□所煩猶增、不能參入之由、卽使顯遠奏此由於法皇、余〈藤原賴長〉送書於左宰相中將〈公能〉日來遣妻父公信朝臣喪、雖非服親、不堪□歟所然諾也、外記師尙申云、有忌日、大辨〈朝隆〉不仕直物執筆例□又送書於左大辨資信朝臣、〈忌日〉

子剋秋長卿參入、余授次第令見之、相續資信朝臣參入、余曰、顯遠遠友、相公已以參入、執筆者大辨所役也、而當忌日、兩人之間可用何哉、依有先例、猶大辨可奉仕、次顯遠答云、忌日出仕之例希有、不知宰相中將矣、率宰相中將著陣外座、(左大辨退出)左兵衛督公能、權中納言忠基著座、(信頼不參)仰外記師直、進勘文、入筥、(大外記師業、依重服不參、)見了、使外記內覽關白、(里第、內爲近衛)歸來後、進弓場使次第奏之、返給復座、外記亂筥退去、召執筆參議、給勘文、(乍言)執筆復座、仰外記、進硯召名等、削直如常、此間次第下公卿給、請文四通、(此中名替一通)見了、(不結)給執筆、頭之頭辨下辭書、(公保辭皇后宮權亮、)及京官申文、(任人書折紙加之、)顯遠給任人折紙、(師長、隆長、忠盛、)余先召外記、下辭書後、申文折紙等給執筆、依可有敍位、可召內記之由仰外記、依可任參議、仰外記師直勘申於仗頭任勅□□之例、執筆削直召名、(名替削召名注之、不載新除目、)了召續紙草除目、(近代之例、除目不成草、而據北山文草之、余命也、)尻付如大間、依爲御□末流、書太政官謹奏文、(勅任幷文武官皆載紙、但今夜不任武官、)一外記雖未勘申先例、諸卿之勅任官於陣被任、近例多存者、仍且任之、送任了、書年月日、召名一通、(當年春、但兵部召無失、仍不進之、)成文一結、(勘目引墨、)勘文一通、新除目草一通、敍位一通、入筥持來、召名交算、取敍位新除目草見了、新除目草返參議、仰可清書之由、參議歸座、召黃紙及折堺清書、(草文參議儲之、可爲先例、)了持來、(此間、外記勘進於仗座、任勅任官之例、余儲之、)召外記封除目、(黃紙幷敍位籠折堺中、須加禮紙、外記不加之、大失也、)余引墨、(外記奉筆、)加舊召名、(不封、)盛筥、(勘文成文補偶之、)使外記內覽關白、(先之鷄鳴、)還來開封、(余取外記所持之刀切之、不可然、須令外記開之、)撤禮紙、(今夜自本無之、)進弓場使藏人皇后宮權少進藤憲頼奏之、(親隆朝臣、顯遠早以退出、)返給復座、恒例此間令執筆參議放舊年召名、而唯直當年、不及舊年、(余先朝執筆之中、有未直除目、而今上於御前被行除目、後初行直物、直先朝除目、非無事疑、仰外記勘先例、申不詳之由、仍唯直當年耳、)又無舊年名替、(勘文雖不及舊年、召舊年名替時、猶改舊年召名、仍放所改之狀也、)仍不放之、召外記師尚問曰、式省候哉、申云、式省候、(此座不可申式省、)仰曰、召〻、外記稱唯退出、更來申之、式省候、仰曰、召〻、外記稱唯退出更來申之、式省候、仰曰、召〻、召物、(直物之次有敍目、付不仰召物由、)外記稱唯退後、余取新除目副笏南面、(向奧也、)式部丞藤懷經著靴進立小庭、余召曰、參來、丞依軾、余以右手給除目、(加黃紙、)丞取之直出、(須進立本所、丞還給仰退也、直出大失也、)余西面(下座)使外記召式省、懷經著淺沓、(乍靴進出、余追却令替沓、)進自砌著軾、賜召名退出、了召少內記藤孝佐給敍位、召隨身右

近府生佐伯重文給成文、（左近府生、今度不叙也、）召外記師直給筥、（路文在此筥、）外記取之重跪退出、（于時卯刻、）及至射場奏
參議殿、（藏人頭右大辨俊）大參院奏同殿、（同列官代藏人皆以退出、仍使近臣重成申入由、不待復命拝舞□□）歸來三條、（○中略）
今月七日、召大外記師業賜公卿給、式部丞昔有障、仍可賜式部二合、傳任賜師業傳省、同十八日、使朝
隆朝臣奏廿一日可行直物之由、良久歸來云、直物事有可許者、召外記仰之、來廿一日有障、定可催右
大臣以下、

〔玉海〕安元二年三月九日甲寅、頭弁長方來依相招也、官奏直物等、今月可候之間事等示付之、内々示
關白（○藤原基房）畢、（○中略）又直物三月吉例也、仍同今月可申行之、而法皇遠所（有馬）御幸、還御遲々者可不便、
仍兼可取御氣色、（近代必有任人之故也）但十日比可有還御之由有其聞、然者其後可奏之由同相含了、廿三
日戊辰、大外記頼業參來依遣召也、來廿九日可有直物之由、兼内々所告仰也、廿九日甲戌、余卽送
書於長方許曰、今日刻見之條、不可及先例、然而爲人々大無心歟、仍直物可有明日之由可被奏者、承
了由有報、卅日乙亥、此日直物也、下官始申行之、（去年冬、去々年冬、今年春、三ヶ度除目所改直也、）

〔三長記〕元久三年（○建永元年）二月十五日丙寅、參左府、（○藤原家實、中略、）以事宗申曰、來廿二日、可被行直物、可令
參給、被仰曰、此兩三日聊有所勞、扶得者可參、隨今兩三日有樣可被申左右、廿二日癸酉、自左府有
御札、今日直物欲令參給之處、猶有風氣、今日御出仕難叶、仍申事由於殿下、（○藤原良經）卽令申給於直物
者延引、只可被行臨時除目、存其旨可致沙汰、直物延引之由申左府了、除目可被奉行之由、相觸中宮
大夫（○藤原公房）了、（直物可參之由雖被申也、仍於直物先延引、可被奉行除目之由相觸也、）

〔明月記〕建暦元年七月廿五日、來廿八日直物、天下又競望云々、廿八日、依番入夜參上、今日直物事、
及深更有議定云々、予時許、博陸大相國各退出、藏人弁同退出、左府（○藤原隆忠）自戌時許參陣云々、兼日
之巷說種々、大納言可任（前大納言信清卿、任大臣還者、）之由雖謳歌、今夜殊無聞事、

〔年中行事秘抄正月〕十一日除目事

輕召除目例

日本紀云、天武天皇四年三月、諸王四位栗隈王爲兵政官長、小錦上大伴御行爲大輔、始任官略之、

〔一代要記天武〕白鳳三年乙亥、除目始、

〔日本紀略二朱雀〕天慶八年三月廿日丙辰、天皇不豫、不能召諸卿於御前、仍於議所令行除目、　廿六日壬戌、於御前有除目議、去廿三日依關白大相國〇藤原忠平病止件議、

〔日本紀略三村上〕天暦元年正月廿五日辛亥、此日召仰除目事、　廿六日壬子、除目議始、　廿七日癸丑、除目議、　二月一日丁巳、此日於辨官曹司廳、召二省下除目、　十六日壬申、右大臣〇藤原實賴行直物、

二年正月廿六日丙子、除目議始、定受領過功、　廿七日丁丑、除目、　廿八日戊寅、除目、　卅日庚辰、除目、召右大臣〇藤原師輔於御前、不召諸卿、　二月一日辛巳、於議所清書除目、又權〇權恐於誤辨官廳下召名於二省、

〔日本紀略七圓融〕永觀二年正月廿七日戊寅、除目始、自去夜左大臣〇源雅信參宿、他公卿不參宿、仍藏人頭源正清朝臣以下侍臣等取宮文、前代不見之儀也、　廿八日己卯、除目、左大臣諸卿參上、　廿九日庚辰、除目、　卅日辛巳、同、　二月一日壬午、除目如上、曉更事畢、　二日癸未、召名、

〔小右記〕天元五年正月廿二日乙卯、依召參内、被仰云、除目議可始日可定申由、被仰大相府、〇藤原賴忠又除目例可奉者、被申云、來廿五日宜日也、而御物忌、彼日若被行者、須可被破御物忌、廿六日不惡、彼日被行宜歟、廿八日吉日、然而已及晦、可無便者、〇中略今日於仁壽殿、寛朝僧正行御修法、　廿五日戊午、早朝參左府、〇源雅信從明日可始除目之由、依仰事也、今日召諸卿、今夜可籠候御物忌之由、可廻仰之旨同申之、還參内、以藏人恒昌令奏此由、依御物忌令傳奏也、内藏大炊等、令仰饗飯等事、大間紙可渡外記之由仰之了、入夜參内、　廿六日己未、今日除目議始、申時左大臣右大臣〇藤原兼家等參上、大相國依御物忌不被參也、雖然猶敷御座、亥時退下、　廿七日庚申、申時公卿參上、今日不宜、仍大相府不被參、明日可參入之由被奏、其詞云、有所勞、夜間相扶、明日可參入者、　廿八日辛酉、早朝參殿、次參内、大相府被參入、申時召公

卿、慶喚參上、大相府被候、今日不數右大臣圓座、今朝院女御頓滅云々、塡壹今夜退出、服親王卿達依不數右大臣座退下、子二點公卿退下、蒙仰納大間、大相國今日被奉除目例、廿九日壬戌、未二點公卿參上、子一點退下、納大間於御硯子、卅日癸亥、飛雪、仍仰掃部寮、令奉仕張筵、人々云、似有穩便者、申剋公卿參上、昨今公卿不著議所、被妨風雪歟、今日雪積五寸許、從去廿八日、大相國被候議場、二月一日甲子、辰二點、除目議了、諸卿退下、

正曆六年正月十一日戊午、除目始、未終參內、秉燭始議、左(○源重信)右(○藤原道兼)內(○藤原伊周)三相候御前、關白(○藤原道隆)著直衣候御簾內也、左府召參議誠信、給公卿給、令下勘外記、其後以右中辨俊賢又下外記、非先例、尙以參議可被下者也、可謂大失、亥時諸卿退下、

長和五年正月九日甲寅、召使云、大外記文義朝臣令申云、從明日可始除目議、十日乙卯、依除目破物忌參內、(未時)仗座有饗、(藏人所饗)立內豎所簡、置筥事、右大臣(○藤原顯光)及諸卿著仗座、藏人資業朝臣以左府(○藤原道長)御消息申右府、其詞云、有所勞不參、其所右府被向可參入之由、次召外記、令擬筥書硯等、次起座向左府御宿所、先是右相府出居、右大臣以下次第著座、其後內大臣(○藤原公季)被參、宮々御給文事、相府仰右中辨定賴、依相府命定申受領功課、(相撲義)亥剋諸卿退出、(右大臣、內大臣、大納言道綱、齊信、賴通、公任、中納言俊賢、懷平、教通、賴宗、經房、實成、參議兼隆、道方、通任、公信、賴定、朝經、)十一日丙辰、早朝資平來、談除目事、參內、(午剋)二陣有饗、獨身不可著、仍詣左相府御宿所、卿相四五輩在參、相府出會、今日儀可早始、而兩府未被參、日已欲暮、雨亦降計也、不被參歟、至今可始行者、仍余(○藤原實資)參陣、兩大納言(齊信公任)及已下卿相相從、但大納言道綱稱腰病不著陣、留相府宿所、卿相著陣、卽右大臣參入、其後右少弁資業陣申右大臣云、左大臣御消息云、此方者卿相云、昨日依多御消息趣、從其後申右大臣有便、今日居膝突可申也、大臣召外記、外記元規參來、仰可取筥書之由、外記元規退出、外記孝親卽進居陣前、申云、可候筥書之外記一人不足、令候史生、諸卿云、於庭中所不申、外記不候、史生持候之例也、不申事由、直可令候、若就參議座邊可候氣色歟、孝親歸出、率外記幷

史生參入、給宮列立陣前、左大臣起座、已次相從、此間內大臣參入、已下向左大臣宿廬、作法如昨日、藏寮饗饌、又如昨、依左大臣命、定申受領功過、下野光衡、越中實□、淡路定佐、亥始諸卿退出、右大臣、內大臣、大納言道綱、齊信、公任、中納言俊賢、行成、敎通、經房、實成、參議道方、公信、朝經參入、孝義功過定、相府被發事、替國分寺砂金事也、雖非當任事、作差可辨歟、大納言公任云、件事源大納言俊賢申相府歟、至今可爲大定、昨定諸卿合眼不云出也、　十二日丁巳、參內、未剋先參上殿上、○中略即向陣、右大臣著陣座、諸卿同著、內大臣徘徊壁後、余又不著座、此間右少辨資業居膝突、傳申左大臣消息於右大臣、□□諸卿□左大臣宿廬如昨、弁等執宮書、又如兩日、左大辨執筆如昨　一昨、依相府被示、余召受領功過文書相定、相摸守孝義有事、亦常陸介維信愁帳塡交替欠事不明、仍令輔政召稅帳、又神社條不修一社、又相摸事召前々司狀帳、使局申云、臨夜不能出取者、件兩國事不定了、下總守貴重辭狀被下定、大納言齊信、公任、申不可被許之由、下官已下申可被收之由、其後有受領擧、於御宿所注擧册、下總依請被任替人、長門正輔狀未讀了之間事了、留相摸孝義、常陸維信等定文、自餘定文轉內府座、左大臣治國同加階三人、淸書上中納言俊賢、亥終議了、參入公卿、右大臣、內大臣、大納言齊信、公任、中納言俊賢、行成、懷平、敎通、賴宗、經房、實成、通任、朝經、○中略右近中將兼隆宰相也辭退、以左少將能信任右中將、左大將賴通者兄也、仍初遷右、有傍親忌也、兼綱任左中將、藏人頭兼隆讓、中將兄

〔左經記〕長元四年二月七日甲申、及午後參殿申云、一日依御消息詣內府、○藤原敎通命云、除目日可執筆、可著議所、而或記云、一大臣入自南幔著座、以次大臣以下、入自東幔、但納言執筆者、猶可入自東幔云云、案此文、以次大臣執筆日、可入自南幔、次爲當猶可入自東面歟、如何、又右府○藤原實資雖不參入、定數圓座於御前歟、余○源經賴應召進著之時、可著右府座歟、爲當執先著自座之後、隨御氣色可著上座歟、如此之事雖自推、有次之時申殿、以被仰之旨可傳示者、則參殿申此旨、被仰云、著議所執、可被用東面道歟、其故者、以次大臣奉行公事之時、先著奧座、奉仰之後著外座、行雜事、以之准彼、執東道爲勝歟、右大

辨、時々著議所云々、尋先例可被左右歟、又御前座事、日來中心所疑思也、執先著自座之後、隨氣色可移上座歟云々、中奉自餘雜事、入夜歸私、　十三日庚寅、參殿申云、故殿初執筆給年大間并公卿給等、暫可申從之由、有內府御消息者、仰云、大間撰出可參、自內退出之次、直可來者、但公卿給本自無者也、參內獻讃岐土左等不與狀、是依前日仰也、歟對於御前奏奉雜事、及晚歸、參殿給大間、入夜持參內府、奉之、不可他見之由有御消息、內府言談次被仰云、前日所相示御前圓座事、入道大納言云、猶先著本座、隨御氣色可著上座者、又著議所、繼以次大臣執筆之時、執入自南幔、但納言、三〇但以下字疑誤

〔百練抄五 堀河〕寬治六年正月廿三日、於御前始有除目儀、

〔中右記〕嘉保三年〇永長元年正月廿二日癸丑、除目初也、晚頭參內、入夜除目初、藏人雅職出仗座召公卿、左大臣〇源俊房以下參著御前座、新大納言家 左衛門督公 左大將忠 右衛門督俊 取宮文、此外中宮大夫、右大將、民部卿、左兵衛督、江中納言、二位宰相中將、右兵衛督、新宰相中將、左大弁參仕、無功過定、依無文書也、

予爲左大將殿御使、除目之間參大納言殿、并一條殿、歸參、子剋許事了、人々退出之後、暫候御前、丑寅時許退出、

廿三日、入夜與頭中將同車參內、戌時除目初、民部卿、左衛門督、左大將、前大貳、取宮文、此外中宮大夫、右衛門督、江中納言、二位宰相中將、前大貳、左兵衛督、新宰相中將、皇太后宮大夫、右宰相中將、右大弁、於御前書定文、任中齋公文輩、去應德元二三年間、依無官奏不取返却帳、仍申下宣旨了、而後年濟任中、人々有訴申事、可被問主稅寮之由、僉議已了、無諸國帳、亥時許事了、

裏書云、今年除目闕國七箇國中、不被成文章生并式部民部外記別功者、是依無國歟、　權中納言藤經實　參議藤原能實兼　權少外記三善信貞東市佐　右少史紀有任民部錄　中務少輔源實明　侍從源顯重　內舍人平定宗　藤賴安　中原貞季　大江永宗　少內記藤泰俊　少監物

藤貞光藏人一　大舍人允藤基時當院　縫殿權助藤實光文章得業生　內匠允藤親政延曆寺申　式部丞
藤宗仲藏人　大學少屬紀重頼　雅樂允平忠季　權少屬豐原時忠　諸陵權助藤資懷　少允
紀盛言明法學　民部丞菅原忠時元大炊助　紀宗象修理進　主計少允中原季忠　主稅筭師高橋頼象　主殿
大藏大輔大江通國　宮內丞平昌隆　木工助藤敦隆　允賀茂定順文章生散位一　藤資實　主殿
允中原行忠　權少屬安陪忠清　內膳典膳藤宗資　修理少進源行季　河內守藤公經兼　伊
豆守源國房任中務第三　安房守源親元使巡　下野守源有家藏人二　陸奥出羽按察使藤宗兼　若狹
守藤顯隆兼、院分　淡路守藤家光兼、郁芳門院分、　大隅守伴國忠史　左近權中將藤忠教兼元少　權少將
藤家政元侍從　將監上村主經遠內舍人　安陪信貞內舍人　右近將監小野行長內舍人　左衞門尉源
明國元木工權助藏人　左兵衞少尉源仲正藏人　藤通季　左馬允大江則俊瀧口　右馬允平扶範武者所
廿四日、終日候御前、晩頭白地參大納言殿、歸參內、戌剋除目初、權大納言、左衞門督、左大將、右衞門督、取宮文、美作功課定清長朝臣舊圖　左大辨讀帳、右宰相中將仲實書定文、皇太后宮權大夫公定見合、中宮大夫輿奪、但有種々難、年限不同事等、頻被問諸司、遂定了、丑時許事了、清書上卿右衞門督俊實卿、皇太后宮權大史公定、右宰相中將仲實清書、
廿八日己未、今夜有除目下名、江中納言、左大弁、左少弁勤之、下名之次被仰下事、
右近中將藤原朝臣宗通件宰相中將、元左也、依次將員數多、被遣也、
木工允賀茂定順元大藏丞者、依文章生一、除目之次被成也、而先例大藏丞不被成、仍改定者、
藏人左衞門尉源明國、可為檢非違使宣旨被下也、
〔本朝世紀〕康和五年二月廿八日丁丑、政、是日除目始也、內大臣○源雅實始令候執筆給、仍大間不載復任者、又進內大臣闕官、不載薨卒出家字、依內々仰也、又內大臣以下不被著議所、依日華門顚倒也、
〔中右記〕天永三年四月十一日、晩頭從內有召、臨秉燭參內之次、先參御直廬、見參殿下之次、有申承事

等、次參仗座、略○中予召外記仰云、可有除目、硯紙可持參、外記入紙於硯筥、依御物忌不置硯也、置右大辨座前、予目右大辨下給中文、令書二通、山城介一通、但馬介一通、右大辨書了授予、召外記筥入除目二通、付藏人辨令内覽殿下、御禁中、仍付職事内覽也、御覽了予召外記、可加封者、加封以外記可内覽也、返給云、又可奏者、是進弓場殿、雖可奏、幼主御時、内覽許常事也、披見除目之處、山城介正六位上□被書也、大僻事也、予先不披見之失也、件男元主計屬也、請文云、叙從五位下可拜任山城介者、仰云、依請、仍先書叙位、又書除目、相加可奏也、思忘之條至愚之咎也、但右大辨并藏人辨皆不咎此事、又各失歟、

〔百練抄〕五鳥羽 永久二年正月、於御齋始行除目、主上御歳十二、治安寬治例、

〔中右記〕元永三年○保安元年 正月廿五日丙寅、御物忌也、人々參轉輪院云々、午時許參殿下、雖御物忌參御出居、除目間事、内覽事、可申院○鳥羽者、則參院御所三條殿、付經忠朝臣申事由、暫可候者、數剋候殿上間、盛道來云、今間無御暇、猶可候者、及申剋以盛道有召、參北面奏事由、仰云、除目之間事、尋道理可沙汰也、又秘事有仰旨、不能記、直參殿下申仰旨、件事書付進殿下了、人夜歸、入夜新頭弁來、被習除目間中文撰事也、　廿六日丁卯、今日春除目始也、略○中晩頭參内、略○中内大臣、○藤原忠通右大臣、○源雅實藤大納言、民部卿、新大納言、右衞門督、予、○藤原宗忠治部卿、別當新中納言、左宰相中將、信左大弁著仗座、頭弁伊通除目召仰、内大臣召大外記被仰下、又召右中弁被仰、議所裝束事被問左大弁、人々起座被著議所、予不著、是依座無所也、勸盃右中弁一人也、只今依弁少納言不參故也藏人爲直召大、仰筥文之後、内大臣、藤大納言、民部卿、新大納言、右衞門督、治部卿、左大弁、列立射庭、藤大納言、民部卿、新大納言、右衞門督、被取筥文、治部卿強不可被立射庭歟、納言任筥文可列於宰相者、無指員之由、先年所聞置也、仍予今夜不立列也、殿下著閑座給後、内大臣著御前座給、被奏正權聞官帳後、依仰披大間、被任四所一兩人、歟、召宰相中將被進院宮御中文、奏覽之後返給、殿下被仰人々云、院宮御中文中加公卿給一通、右兵衞督中文也如何、予申云、行事藏人待集之間、大略取加公卿中文歟、藏人失也、殿下被仰云、件公卿給加封也、

彈以奇怪也、大略依加封藏人取加歟、公卿給尤不可加封、甚奇怪也、火櫃衙重（五位居之）召受領文書、藏人弁持參文書置參議座前、召切燈臺立座前、（件燈臺打金物、如何、殊不見事也、）前上總守盛雅功過之文也、右大將與奪、參議二人也、仍納言下臈別當忠教卿見合、左大弁讀帳、左宰相中將書定文、宰相中將給申文、令下勘之間、依無他參議又有召、復本座書定文、又持參申文、左大弁被讀帳間、於事不得心、先每一條讀了、可待上卿與奪也、而早々欲讀、或又當任帳并證帳中請益上卿、此事不可然、當任帳并證帳共讀了、可受上卿與奪事也、大略不知作法歟、度々竊見之所、只以如此、凡末代功過之定、嗚呼之事也、上卿モ不被答、大弁モ又不申上、甚以不便也、功過之定、朝家之大事也、全不被沙汰何爲哉、如形事了、定文見上、右大將取之被奉內大臣、子二剋事了、人々退出、

右大將依仰於仗座被下上總守盛雅、安藝守尹通解由也、山城解書被下外記、

廿七日、丙辰、酉時許參內、人々未被參間、參殿下御宿所、申人々所望事、入夜內大臣殿令參給、右衞門督、予、別當、新中納言、左大辨、參仗座、內大臣召大外記有被仰事、（不聞何事、若除目文書歟、）藏人憲隆來召、內府召大外記被仰宮文事、六位外記等取宮文、入從日花門代列立軒廊南、（西面北上、）內府以下列立射庭、新中納言不被立如何、右金吾、予、禮部、左大丞、取宮文、置御前、殿下依召著御前座給、內府又著給圓座、（直著給圓座也、）一給大間宮、依仰移大間、居火櫃衙重、此間藤大納言、治部卿、左宰相中將、（信）參加、被尋受領文、被下顯官申文、又受領文藏人弁實光持參、尹通、（安藝）左大弁先書顯官擧、（先讀上後、從一大納言前又返下令書之、一度書之如何、）一々見上、（副申文、）大納言被奉內大臣、次召左大弁被下勸申文、（通）一則勸上之後有功過定、左大弁讀帳、宰相中將書定文、依無參議別當見合、（大納言、無人歟、由被申上、納言下臈可見合者、）別當被申云、合否申文并二寮勘文中無封租抄如何、大納言被申云、件尹通、從院可定申由內々承也、強不可難也、然者只無申文面者、以無定可被書者、此事如何、一旦可被問主稅寮歟、如形定了、定事見上、大納言被奉執筆、亥時許事了退歸、後朝外記史生重宗來、問封租抄事、答件事強不被尋也、近代主稅寮存此旨、不入勸文、仍功過定文モ不可被書入者、爲

後日所記置也、重宗能知諸國事者也、　廿八日、申時以後雨脚殊甚、除目入眼也、院晩頭有御幸上御所是入眼之間、依皇居近々也、秉燭以前參內、此間雨脚已止、參殿下御宿所、內大臣殿令參給、暫以言談、戌剋內府著仗座給、令敷膝突召大外記師遠、被尋文書事歟、藏人成俊召內大臣、召外記仰宮文、列立前庭之後、內府以下經南殿後列立射庭、右衞門督治部卿別當、左大弁、（立南庭邊也）依儀、已上四人取宮文、右大將、予、新中納言不立列也、殿下、內府、著御前座、右大將、予、追加座、居火櫃衝重、召所衆瀧口勞帳、頭弁入御宮持參、予對人々依仰書處所、書受領舉、參御前奉執筆、殿下被仰云、今年除目、新叙中無文章生、而外記遷第三者大江通景文章生也、件通景可被成受領歟、但無文章生之年之間有其例、然者猶可被成外記第一者清實歟、可定申、左大弁發語云、猶通景可被成也、文章生先々超上臈被抽賞已恒例也、人々多同之、夜及丑半事畢、內大臣取大間宮、出殿上給予、人々披見之所、少外記宗長、右少史伴爲信、新中納言實隆兼侍從、式部丞藤有数、民部丞爲能、宮內大輔源基俊、（有事除名、元少輔、去年被輔人也、今還官之時、被成闕也、依有闕也、）山城守源雅範、（右中弁子功、）大和守藤經宗、（民部）伊勢守大江通景、（外記三文章生）信濃守源重時、（大夫尉使四）因幡守藤時通、（院分、民部藏重子、）備後守藤實信、（任中）豐後守中原成俊、（史）肥後守藤資兼、（藏人）按察使正二位藤經實、（叙）此外內官八十餘人、依無大事強不記、召外記給大間宮、著仗座、左大弁、左宰相中將、相共令清書、頭中將來仰云、藏人臺行任右兵衞尉可渡左尉也、無黃紙人、文武二通、別紙一通、下名二通令書、先入除目三通於宮、（御下名大間筆、行清書中渡左、）令持外記進弓場殿、付藏人爲直令奏、（內覽被免也）返給、以外記封大間、予引墨、又文武召名中、卷籠下名別紙、（各一卷）同以外記令封、予引墨入宮、成束又加入下給外記云、大間成束持參執筆御許之次、藏人臺行任右兵衞尉清書之間、可渡左之由有仰、件由慥可申也、予雖可直大間中、左右渡之間、強不直大間也、任人加時必所書入也、就中神妙御手跡之中加愚筆甚有憚、仍以詞申送之、外記稱唯、取宮退出之次、取重硯退歸、于時天漸明、

左右衞門佐不被成如何、就中行幸在近、不被成衞府如何、式部丞一宗兼不被成受領、依國數不足

也、

廿九日、曉淸書了、從內退出、　卅日辛未、今夕下名、治部卿、左大弁著行云々、式部錄一人、被加任忌部孝重云々、使宜旨猶不被下如何、

長承二年正月廿日、今日召大外記信俊給去年秋除目、給并停任等勘文、於二合依不任不給也、　廿一日、今日可參執筆之由、頭辨告之、左右府（藤原家忠、源有仁、）被申所勞也、仍入宮文書、召大外記、心閑見之、爲用心也、　廿二日戊寅、今日春除目始也、予（內大臣藤原宗忠）勤仕執筆、行諷誦於所々、觸妙香院僧都、橫川律師□□新等、晚頭文書大間返給外記、了外記進正權闕官之次、硯（裏紙）筆二管（白東）平墨一挺（裏紙）皆裹紙給於外記了、人夜相具宰相中將并權弁參內、先著奥座、治部卿以下上達部五六人參集、頃而頭弁（師俊）來云、自今日可被行除目、諸司（仁）召仰（與）、予微音稱唯、移著端座、以扇直沓、召官人令置軾、又召官人召外記、（大外記只今依召參殿下）六位外記師長候宜陽殿壇上、（只今雨雪相交頻下、仍兩儀也、）予目外記、稱唯來膝突、仰云、自今日可被行除目、文書令候（與）、外記稱唯退、次召弁裝束使權左中弁宗成來、仰云、今日可被行除目、召仰諸司（與）、弁歸了、左大弁（實光）在座、予問云、議所裝束具歟、左大弁申具了由、予示人々云、只今雨雪頻下、不可著議所歟、人々答云、依雨不著議所常事也、則藏人重憲來、仰云、召（爪、持笏人々奇怪之由被沙汰也、三ヶ夜任官次第、并尻付要事等如申文書出）入（入懷中、時又出入中置之也、）□□以下揖召官人、外記師長候宜陽殿壇上、予仰云、宮文候へ、（於議所仰時八、宮文ニト仰之也、）外記稱唯、歸入取宮文、入自日華門、列立宜陽殿壇上、藤大納言師賴卿被申云、有所勞、不能指笏、仍不可取宮文者、予起座經南殿後立□殿軒廊西一間揖、（南面）治部卿以下立軒廊柱內、（依雨也、）外記列立砌下、（依雨儀也、）予一揖登自小板敷、著小大盤下程、關白兼候奧座、暫申入人々所望趣、關白起座、著御前座後、予追又著座、（關白）（南邊）以治部卿能俊取宮文、（殿下密々示給云、大納言殊不取宮文事也、但朱雀院時、故民部卿時々一大納言俊被取宮文、□□家々習□□之歟、）藤大納言、（實行）新大納言、（顯雅）中宮權大夫忠宗、次第取宮文、次右宰相中將成通著御前座後、御簾動、關白著圓座給後召予、予揖起座、先著我座揖、（第三圓座也、）關白重有氣色、又揖起座、著第一圓座（左大臣座也、）正笏候、有御氣色、（關白令示告給）

予置笏於左右方、在一筥文書等皆取渡、次筥取正權闕官帳二卷、一々見端少許、留本筥、以左手持上件筥、以右手硯筥（手）推遣其跡、以一筥置硯筥跡、指笏左右手（仁）取筥、膝突進簾前、取遣筥、以左手持上御簾、以右手指入筥、拔笏頗退敬屈、進則返給、指笏進寄、給筥復本座、置筥拔笏置左、如本並置筥、正笏候、又依御氣色（關白給）取大間、皆置座右、引取懸紙、固卷（天）入硯筥之下方、欲終大間之處、切燈臺立此座程、仍予召男共、新藏人憲隆來、寄燈臺於丑寅方、其後披大間、於其所緣重、（一尺四寸許也、廣緣有煩之故也、）正笏候、又有御氣色、入二筥文書之中、取內豎大舍人校書殿進物所內舍人文章生年舉等歸返、入一筥、寄懸筥上、取內豎歸、先讀上國姓名、移付大間、任伊勢掾、又讀上、懸勾於勢帳、（不注任國、）又以任國喚內豎奏時、了正笏奏云、院宮御申文（强不候以下闕）勅許之後申殿下、可召譯宰相哉、殿下仰云、可召上﨟者、予問人々云、宰相譯々候座、此間頭中將勸盃五位藏人經親取瓶子、是燈臺之間不能委見也、源大納言師賴云、左右宰相中將候、予召云、左近中將藤原朝臣（依三位宰相也）來座、後予仰云、院宮御申文（不及返渡）此間且任內豎散位者、天暦歸次第如初、　廿三日己卯、除目中夜也、入夜奉人人參之處、上達部三四人參入、仍相具宰相中將權弁參內、直著端座、（先中合殿下之處、去夜如一座可著端座之由有仰也、）次之召官人令置軾、源大納言以下人々五六人參進、不叶義所、是次々夜强不著也、又申合殿下也、藏人泰重來召予、召官人召外記、外記參小庭、仰云、筥文候哉、外記稱唯歸入之後、取筥文人自日華門列立南庭、後予起座出自軒廊東二間、經階前列射場殿、軒廊西二間向南立、（南面）藤大納言以下寫立如常、外記取筥文列立之後、予登自小板敷著殿上小大盤上、拜關白著給奧座、皆中承之後、關白著給御前座之後、予追著其座、藤大納言實行、右衞門督宗能、左兵衞督宗輔、中宮權大夫忠宗、□□筥文次第［　］置之、［　］成通著座之後、御簾動、關白著圓座給之後、有召氣色、予直著一圓座、（先中合殿下也、次夜作法如此、）次有御氣色、（關白給）進寄簾前、下給大間筥、指笏給筥復本座、拔笏置左硯筥（手）推北、其南置大間筥、正笏候、又有御氣色、取出大間、並座左方、取小刀切紙捻、入硯筥引取懸紙、固卷ヶ入硯筥下方、緣疊大間、如夜前正笏候、又有天氣、入大間筥、夜前成

殘申文等、早可任之由、關白示給、此間居火爐衝重、頭中將公敎勸盃、五位藏人經親取瓶子相從、取出並置硯筥、一々讀上、移付大間、又讀上懸勾於申文了、置成束傍、成束在大間筥也、申文十餘通、次第如此、申文及三通、以紙捻結、加本成束上、不切木結緒、次關白給申文十餘通、是任符返上之類也、則一々任了、次任文章生外國并內舍人外國、各任歷名并舉成諸國掾也、引點於歷名、不注國爲返下外記也、任諸道年舉、北堂、明經、明法、算道、勸學、獎學院、皆依勸文、殿下示給云、可召轉任宿官兼國勸文等、予召云、師俊朝臣頭辨也、來座後、可召件勸文等之由仰了、頭辨持來、召外記披見之後奉關白、關白奏給也、次給顯官申文、外記、官史、式部、民部、左右衞門尉、名付短冊、予見一兩後、皆悉可見、及數刻有煩之故也、自源大納言來座後、□□申文□□舉由示□□□□本座一々見下、召切燈臺、末座宰相中將成道撰上、又自大納言前返下、令書也、宿官兼國勸文下給、早可成勸文任之、於兼國勸文共注付例任之、於宿官勸文者不載例也、仍每度申合殿下、任前々宿官國々所成也、是非習傳事、依當座之辨所沙汰之也、顯官申文相具舉源大納言持來、取之置筥前、披見舉之後、相具申文奉殿下、殿下令奏給、於今者可奏大間之由、殿下示給、依令奏大間、取懸紙打返卷之、依有本引墨打返封之、是秘說也、引墨又結成束、固結テ以紙捻結之、切其餘入硯筥、引墨共入筥、取上テ推硯筥於右、其跡ニ置大間筥、指笏左右手取大間筥、膝行進簾前取直、左手褰御簾、右手推入筥、拔笏復本座、筥文少々直之、自成頭辨之故也、揖起座退出、于時子四點也、明夜可早參之由、殿下有御氣色、內舍人文章生之外國、故大納言殿初夜ニ被成也、然而隨關白御命中夜所任也、前々多中夜云々、

〔台記〕康治元年正月廿三日丁巳、晚景師能來云、除書閒、有可被定事可參、故深更參內、任中一國敎也、而師行朝臣依功可爲任中一之宜旨下了、兩人之理如何、可任師行之由、一同定了、即下官退出、今夜除書、信俊、肥後外記大政重、攝津大夫史大師行、任中長門光守、和泉藏人甲斐顯遠、本攝津守又凡今度非理無一、雖建武、永平、延喜、天曆之聖代、是有如之哉、

〔百練抄八高倉〕承安四年正月十九日、除目、於御前始被行之、

〔玉海〕安元二年正月十八日癸酉、此日春除目初日也、余〇藤原兼實奉仕執筆、卅日乙亥、此日入眼也、〇中略任諸内外官等了、〇中略次任内舍人等、〇中略次任諸京官等、〇中略次任諸武官、不分五六位一列任之、此中右兵衞少尉定俊、依爲遷官無尻付、自内舍人任也、永久四年、自内舍人遷任者、無尻付也、自左兵衞少尉知家、左馬允定澄等以功任之、而其狀巨細不能注付、仍唯可注臨時内給歟、有先例、將又只可付功歟、此又有例、去年秋有如此事之時、申關白之處、命云、臨時内給已虚言也、可付功云々、仍隨此命、今日又如此、此次參大閤、奥入日畢、廿日、御覽畢、書入之如常、

〔百鍊抄 八高倉〕治承四年正月廿七日、除目中夜、明經道申春秋除目可擧内官之由事、令諸卿定申、或云、可有裁許、或云、新儀也、可有勘定云々、

〔吉記〕治承五年〇養和元年三月廿四日庚子、今日春除目始也、去正月可被行之處、依高倉院御事空延引、其後閏月之例不詳、又依入道相國事自然及今日、諸公休日、今月之中無僅日次之後也、且是先例也、辰剋參殿下、覽申文、官旨除目、無懸紙、申文頗多間、進退有煩、殿下御直衣出御覽之、予〇藤原經房結申申文三通、次選出他職事、不覽申文、或不出仕、或稱無申文之由、尤違例也、

〔源平盛衰記 三十六〕福原除目附將門稱平親王事

元暦元年二月四日、平家ハ福原ニテ、故入道〇平清盛ノ忌日トテ、佛事如形被行ナ、都ヘ可歸上之由聞エケレバ、舊里ニ殘留テ、サビシサヲ嘆ケル者共、多ク國下ケレバ、福原ニハイトヾ勢コソ付増ケレ、三種神器ヲ帶シテ、君カクテ渡ラセ給ヘバ、愛コソ都ナレトテ、叙位除目僧事ナド被行ケレバ、僧モ俗モ官ヲ給ル、大外記中原師直ガ子、周防守師澄ハ大外記ニ成、兵部少輔尹明ハ五位藏人ニ成テ、藏人少輔ト云、門脇中納言教盛卿ハ、正二位大納言ニアガリ給ヘト聞書ヲ送進タリケレバ、ヤ、打見給テ御返事ニ、

今日迄モアレバアルトヤ思フラン夢ノ中ニモ夢ヲ見ル哉、ト誠ニト覺エテ哀ナリ、

〔百鍊抄 十後鳥羽〕文治元年正月廿日甲辰、除目入眼也、雖坎日、不被憚也、

〔玉海〕建久二年正月廿九日戊寅、此夜春除目也、執筆左大弁定長卿、余〇藤原兼實依疾坐簾中、有功過定、權大納言實家卿與奪、平中納言親定卿見合、藤宰相中將公時卿讀定文、右宰相中將公經卿書定文、辰剋內覽申文、先宗頼朝臣光綱等覽申文之後且撰之、於休所撰之數剋之後、他職事等參入、重以內覽、實明朝臣、親國、長房等也、未剋宗頼朝臣參院、未撰終申文、仍仰付光綱親國等云々、長房依有奏事參院、及晚歸參、日沒新大納言頼實、藤中納言定能等參入之由相觸、答早參神妙之由、相觸執筆定長卿參入、而未撰終申文、驚而尋子細處、光綱早以退出、親國候內御方、撰申文之所、只六位兩三未及付短冊云々、召寄諸國仰子細、光綱致沙汰之由、白地爲尋陣頭事參內、御方也云々、此間長房歸參取申文目錄、藏人範秀雖成草未曾有云々、仍更取之歟、光綱雖遣召、猶以不參、奇怪之條無物取喩、秉燭之後、猶以不終篇、仍且仰親國、仰召仰事、赴陣仰之、上卿頼實卿、其後如形雖付短冊、目錄淸書無期云々、仍只以草案紙屋紙假加置之、　二月一日庚辰、此日除目入眼也、執筆同人、左大弁定長也奉行職事頭亮宗頼朝臣、巳剋參院、爲申定任人事也、〇中略余在簾中、如夜前、〇中略凡執筆狼藉不可勝計、失禮散々、偏不受口傳、只以書付爲事歟、其中猶有失、重任延任等乍載大間不書尻付、是先代未聞之失也、翌日辰一點事了也、　二日辛巳、未終、外記持參大間成文等、定長依申請給時遣之、其次仰重延任無尻付事、即返上、件尻付了加注了、

〔猪隈關白記〕承元二年正月十八日戊子、今日春除目始也、初於御前被行之也、執筆左大臣、隆忠　十九日己丑、執筆云、於名替國替者、御前儀初度除目、先例或任、或不被任、何樣可候乎、先例不同、被尋外記、可宜之由答之、以頭弁被問外記、外記申云、寬治建久、關白名替許被任、大治久安被任、諸名替國替等、今度不被任可宜者、仍不被任之、

〔平戸記〕仁治三年三月五日丁亥、自今夜被〇被下恐脫行字縣召除目、去正月天下事出來不被行、當代〇後嵯峨今始而所被行也、於冷泉皇居被行之、左大臣御執筆、頭左中弁定嗣朝臣奉行、　六日戊子、除目中夜也、傳聞任人事、自內裏爲御使前內府參申一條入道殿云々、　七日己丑、今朝任人事、猶前內府爲御

使參中一條入道殿云々、　今夜除目入眼也、〇下略

〔吉續記〕文永八年正月廿九日癸巳、自今日被始行縣召除目、頭弁奉行也、職事皆參、於朝餉奏聞如例、

二月一日乙未、今日除目入眼也、朝間著衣冠先參内、次參禪門御亭、除目清書間事等爲被談也、〇中略

予〇藤原經長歸本座、披小折紙書臨時造東大寺、修理東大寺大佛、防鴨河使事等、已上各別紙也、折堺不足、召外記書之、書了進上卿、上卿一々披見、除目名字少々相違事、隨上卿命書直之、六位外記申上卿云、叙負尉之中雖有字相違、令犯冷泉院御諱、可被直之由申之、雖有僻事、不直之、任大間書來定例也、然而御諱難默止歟、然者披露間書ニハ可改他字之由被返答、召名同書改之、〇中略　下名同時被行、

〔園太暦〕貞和二年二月廿二日、今日縣召除目始也、執筆右大將被相觸、去永仁三四五、此三ヶ年不被行除目被停止年也、件年々可除院宮以下公卿給請文年限内、由有沙汰、殊治定了、可存知云々、

〔康富記〕應永廿六年三月八日癸丑、今夜縣召除目被行之、書程自大炊御門殿有御書、御申文例式可書進之由被仰之間頓作之、恐難存之、既今夜爲事之間、即時調進了、案文見左、去應永廿二年二合御申文也、文五角也、仍當年二合御給相當之間如此、雖檀原書之、有裏懸紙并禮紙、委細別注之、

正六位上民宿禰邦本

望請國撰

右當年給二合所請如件

應永廿六年三月八日　　　　正二位行權大納言藤原朝臣宗氏

如此書進了、但署御名二字御自筆被加、仍可闕之、

九日甲寅、今夜縣召除目中夜也、　十日乙卯、縣召除目竟夜也、〇下略

〔薩戒記〕應永卅三年二月十六日辛巳、左頭中將〇藤原盛夏被請除目御敎書案、先日次事催、除闕顯之狀書遣之、

來月可被行縣召除目日次、可被擇申由、被仰下之狀如件、

二月十六日　　左中將判

陰陽頭殿

追申

上中下旬良辰、悉可被注進候也、

廿二日丁亥、左頭中將來臨、談曰、除目日次事、相尋陰陽頭在重朝臣之處、來月上旬可然之日不候、但九日宜歟、而相當國忌如何之由申、中旬更無日次云々、下旬又廿七日始行之外無日、但廿九日可爲入眼之處、爲凶會日、然而先例間存之云々、此旨奏聞之處、可尋兩局之由被仰下、仍先內々相尋常宗、少納言眞賢申云、九日非國忌、寮頭申狀如何、又凶會日之例不能左右、則此趣奏聞、仰云、以九日可申沙汰者、執筆事可仰右大臣者、卽向彼亭仰旨、再三固辭、然而依重仰可講試云々者、又曰、可相觸之御敎書案可注給者、予（○藤原定親）與之、

自來月九日可被始行縣召除目、任例可被申沙汰之狀如件、

二月　　左中將判

藏人中務丞殿

自來月九日可被始行縣召除目、任例可被致沙汰之狀如件、

四位大外記殿　四位史殿

自來月九日可被始行縣召除目、夜々御參事可奉存候、外記散狀遲々之間、且言上如件、

二月　　左中將奉

進上　權大納言殿

追啓上

中夜御點候、兼又御申文之事、任例可令存知給候也、

弁少納言

自來月九日可被始行縣召除目、可令參陣給者、依天氣執達如件、

所役殿上人
自來月九日、可被始行縣召除目、爲所役、可令參仕給者、依天氣執達如件、

職事
自來月九日、可被始行縣召除目、可令早參給、仍執達如件、

謹上　頭中將殿　藏人辨殿　藏人左少辨殿　藏人右少辨殿

暫之、中將又示送曰、師勝朝臣請文如此、如何可候哉、可計賜者、彼請文曰、

自來月九日、可被始行縣召除目、任例可致沙汰之由奉候之、但當局申沙汰事、自彖日、與奪師世朝臣之間、領狀申候、且殊更直可被仰哉、仍言上如件、

二月廿二日　大外記中原師勝請文

此事太不得其意、病中與奪事、並職事不可知之、仍於職事者、猶相觸局務、局務可與奪已次也、師勝朝臣申狀尤不審、但如此之儀、爲他人不能述所存、先隨彼命、可遣師世朝臣之消息案注進之、

自來月九日、可被始行縣召除目、當局事相觸師勝朝臣之處、申令與奪之由、然者早任例可被致沙汰之狀如件、

二月廿二日　左中將判

四位新大外記殿

三月四日戊戌、晩頭中將示送曰、除目延引之由、可相觸之消息案注給候哉者、則付遞遣之、但明後日可遣之由指南了、

縣召除目延引、自來廿七日可被始行候、可被存知之狀如件、

三月六日　左中將判

藏人中務丞殿　四位新大外記殿　四位史殿

縣召除目延引、自來廿七日、可被始行、可令存知給、仍執達如件、

三月六日

謹上　頭中將殿　藏人辨殿　藏人左少辨殿　藏人右少辨殿

廿一日乙卯、頭中將隆夏朝臣送消息云、（用紙屋紙、毎度被書上啓、被存別儀歟、）

自來廿七日可被始行縣召除目、夜々御參事可奉存候、外記散狀遲々之間、且上啓如件、

追上啓

御中文事、任例可令存知給、兼又竟夜御點候、同可給令存知之也、

予則獻請文（白麻也、但立紙、用被嘱事立紙、）

自來廿七日可被始行縣召除目、竟夜可參陣之狀、謹所請如件、

三月廿一日　參議定―

廿七日辛酉、傳門、自今日被始行除目、奉行藏人頭左近中將隆夏朝臣也、被示合予事等多之、彼家文書悉紛失云々、予又居彼職之時、不奉行件事、凡以無故實、但任舊記之所見、又廻今案少々諷諫之、於除目者、强無進退之習、只大事者申文分別并袖書短冊目六等書樣等也、彼等皆往古六位役也、近代凡未練之間、五位職事書之、又五位職事中知故實之者漸希也、

正長二年（○永享元年）二月十五日壬辰、頭左大弁房長朝臣送御敎書云、

自來月九日可被始行縣召除目、可令候執筆給者、依攝政殿（○藤原持基）御消息執達如件、

二月十五日　左大弁房長

中山宰相中將殿（○藤原定親）

答從是可申返答之由了、此後書消息付女房、內々申送其狀趣、未練難叶候上、近日窮困、出頭不可事行之、日限不幾、早可被他人之由也、女房返事（勅書也）云、窮困事有叡察、然而早廻秘計猶可參仕、定親不參者、大略可及闕如歟之由有御氣色者、重又有申入之旨、勅答趣甚忝者也、　十六日癸巳、頭弁房長朝臣送書狀尋除目執筆參否、答未練無故實之間、難叶之上、計會過法、出仕不可事行、可然之樣得其意可披露之由了、　廿二日己亥、除目執筆事、出頭不可叶之由申切了、　三月七日癸丑、頭左大弁房

長朝臣送使者云、除目執筆事、猶可存知、遂否併可在予之參否者、明後日事猶難事行、凡不存疎略之由答申了、秉燭程向中御門宰相〈宗綱〉許、有示合事、又取出除目抄被見予、堀河左府〈○源俊房〉口傳、通俊卿抄也、有中御門右府〈宗忠公〉奧書、尤爲重寶、

〔親長卿記〕文明七年正月廿五日、今日被始行縣召除目、〈去應仁元年之後、依擾亂停止、雖然室町殿中將殿〈義尚〉就可有兼國、有再興、去應永十八年時室町殿〈足利義持〉御元服、翌年除目有兼國、〈御昇進〉其例云々、總用自武家被付之、傳奏廣橋大納言也、參仕公卿職事外記史請公人等有御訪、元長參百疋拜領之、〉奉行頭左中弁量光朝臣、

京官除目例

〔續修東大寺正倉院文書十四〕天平十八年具注曆
三月　五日丁巳土滿　歲前小歲後、祭祀、加冠、拜官、移徙、修宅、治井竈吉、〈官召十二人○中略〉　十日壬戌水破
歲後九坎療病吉〈官召十三人○中略〉　十六日戊辰木建　單陰〈官召十八人○下略〉

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年三月丁巳、以正四位上藤原朝臣仲麻呂爲式部卿、從四位下紀朝臣麻呂爲民部卿、外從五位上秦忌寸朝元爲主計頭、　壬戌、以正五位上平群朝臣廣成爲式部大輔、正五位上橘宿禰奈良麻呂爲民部大輔、正五位下石川朝臣麻呂爲宮內大輔、從五位下大伴宿禰家持爲少輔、　戊辰、以從四位上三原王爲大藏卿、

〔日本紀略三村上〕天曆二年五月廿七日乙亥、京官除目議始、左大辨〈○源庶明〉於御前行之、　廿八日丙子、除目議如昨、　廿九日丁丑、除目議畢、召左大辨令書之、

〔小右記〕永觀二年十月廿六日壬寅、傳聞、今日除目召仰云々、從來廿八日可被行云々、大納言爲光卿仰之、　廿八日甲辰、今日除目議始也、申時左大臣〈○源雅信〉先依召參上、次召諸卿參上、〈有筥書〉內豎發如例、余〈○藤原實資〉仰云、此度可有御給否、以大外記忠輔令勘先例者、有天慶安和例、〈天慶例、京官外官、并安和唯京官而已、〉戌終公卿退下、　卅日丙午、參內、午時諸卿參上、亥四刻儀了退下、朱雀院東宮有當年給、受領兼官悉被停止、或被任他人、或爲停任、子細在除目、

〔本朝世紀〕正暦元年八月廿九日辛未、辰時左大臣〇源雅信第召大外記中原朝臣致時仰云、自今旦可被行京官除目之事、早令進上省奏、并召仰諸司者、參局召仰此由、已剋參、攝政〇藤原兼家并左大臣以下參議已上皆參、被行除目之事、　九月一日癸酉、午後中納言源伊陟卿參著左仗座、召外記小槻善言仰云、式兵二省可給除目、仍且以召使令催申諸卿、且可召仰二省者、善言承此由還著本局、以召使令催申上卿、兼又召仰二省之間、參議藤原實資卿爲令申慶賀之由參入、而程伊陟召仰善言云、今日〇以下缺

二日甲戌、午後權中納言源伊陟卿、參議源時中卿、藤原安親卿、藤原實資卿、參著左仗座、召外記善言仰云、可勘申無辨給二省除目之例、又不著擬所移著於廳之例、年々日記引勘件等例之間、巳酉剋也、然而擬所裝束等已了、仍伊陟卿、時中卿、著擬所、給件除目於二省、爰二省輔丞錄史生官掌等任例局西門北、（式部東面南上、兵部西面南上、）次上卿著廳座、其後任兩之例、從結政東之道、少納言、外記善言、及史生小槻、二省丞錄等於西廊列立、各著床子、其後上卿召式部輔代、縫殿頭平朝臣清忠給除目、輔退還著床子、次又召兵部輔給除目、輔退還著後床子、其後輔呼丞名給除目、次兵部輔呼丞名、又給除目、丞等各給籤、於除目先令讀式部、上卿立〇以下缺

〔小右記〕長保元年九月廿二日辛丑、早朝自宮〇中宮藤原定子大盤所告送云、〇中略又御給京官事有仰事、左右可隨仰之由令啓了、侍所長藤原忠邦、侍藤原奉順等可給者、（當年御給忠邦、去長德三年御給奉順、）又仰云、可書奉御請文者、令書二通奉之、但當年給者加封、明日隨召可被奉之由令啓了、又仰云、和泉守橘道貞可請權大進、即令奏其由者、可被奏由令啓、〇中略明日除目始之由、召使來申、　廿三日壬寅、京官除目儀始、華山院御給御請文、判官代爲元朝臣將來、加封返給、　廿五日甲辰、拂曉藤相公〇平惟仲告送云、除目議丑剋了、淡路守平文佐、（扶範依州民愁被召替、）自餘京官不記、

〔法成寺攝政記〕寛弘三年十一月廿六日乙丑、右頭中將來仰云、從廿八日可有除目事、明々雨日御物忌也、可籠候者、奏云、此度以他人可被行由奏聞、　廿七日丙寅、頭中將來仰云、明日除書尙可奉仕、他

人可無便者奏云、奉仕除目後十二箇年未申障、而此度上表後卽奉仕有憚、卽被仰云、尙奉仕者、中可參由欲參間、歸忌日也、上表後參內可無便、可忌由人々云、問光榮朝臣處、可重忌由、仍以三位少將奏此由被免了、召右府（○藤原顯光）云、依深便不參云々、十二月十五日癸未、除書召仰、（○中略）參內被初除目儀、入夜如常、陣座饗幷設宮文、事了退出、十六日甲申、參內著陣座、除目儀如常事了、

〔百練抄五堀河〕康和元年十二月十三日、京官除目、左大臣（○源俊房）執筆、左大將（○藤原忠實大納言）著關白座、希代例也、延喜御宇右大臣（○源光）執筆、貞信公（○藤原忠平大納言）候關白座之例也、

〔長秋記〕大治二年十二月廿日、秋除目、左兵衞督（○藤原實能）參仕、不請益著座、示下官（○源師時）云、忘失不請益、爲之如何、答云、大納言不必請益事也、先公（○源俊房）命云、大納言不請益大臣、中納言不請益大納言、但別於致家禮非此限云々、

〔中右記〕大治四年十月八日辛未、今夕秋除目也、九日、史俊重送聞書、披見之處、（○中略）實康（○丹波）年纔十三歲、被成主稅頭、古今未有此例云々、此七ケ年不被成公卿、如何、又不被成右衞門督、如何、就中行幸左近衞府、尤可被成事歟、

長承元年十二月廿五日辛巳、今朝參大殿（○藤原忠實）不審之事等尋申、就中大間綠事、縱不習之間、相具舊大間、習中大殿令繼疊給作法、誠是秘藏、如此事等、心閑尋申也、關白殿（○藤原忠通）此間令渡給也、院（○鳥羽）今度除目御愼重、全不可知食者、仍任官大略省略歟、午時許歸家、招大外記信俊、問除目事、今度明經得業生問者生課試之外、他三道無課試者、但明經得業生問者生者、除目時相並成、常事也、秋除目、二人相並不被成也、然者二人之中、有道理者如何、問者生課試之後、久不被成者也、必可被成、問者生者、又召宮文之文書、見之執筆給硯筆等於外記歟、答云、所給也、硯（ハ）裏紙二枚、以細紙綠、四倍加良計結也、白筆二管、平大墨一挺、（以紙裹東也）筆墨以紙一枚裹之、上下（乎）推結也、如此事尤有興、仍記置也、

〔中右記〕保延元年十月十八日、消息中殿下（○藤原忠通）秋除目早被行、頭辨可被成參議也、歲末之比、政常

可被行處、依無參議大辨、政可遲々之故也、尤可然由有御返事、就中著座宰相只大貳實光一人也、常不出仕間、政常難被行也、但院〇鳥羽從宇治還御之後定被行歟、

〔玉海〕承安四年十二月一日甲寅、此日京官除目也、一夜儀、下官始奉仕執筆、〇中略今日任人事、猥藉之間、未練之者失度、彌移時剋者也、　今日闕官、寄物、三省之外、諸國權守介、又公卿未給等、少々突點、京官又一兩歟、今日修諷誦於十五ヶ所、又日來始祈雨三壇、今夕關白被借送硯、是自故殿被賜硯、代々執筆之時被用云々、未見之物也、昨日申請之、而無返報、今朝雖相待尙無音、仍以他硯給外記了、而之間被送之、仍竊相具之參陣、密々示顯業取替之後、閑件硯假借召、華山相國遣之云々、余不被借、不可存遺恨、今所爲之旨、如忘廉耻、可彈指々々々、今日余失禮、件失錯等、偏今年重厄之令然也、以不有居重職天譴也、今有此失、

治承元年十一月十五日庚戌、此日京官除目也、一夜儀、皇居閑院、〇中略今度除書一向可爲內〇高倉御沙汰、院〇後白河不可知食之由被申云々、仍萬事不可有沙汰、只自院被獻注文事可有沙汰云々、〇中略源季明任甲斐權守、尋問位之處、六位云々、余〇藤原兼實申關白〇藤原基房云、六位任甲斐權守有例哉、關白云、只可書五位之由也、但可問外記云々、仍余書從五位下了、又以光能問外記之處、近例六位任權守之時、卽被載五位之旨定例也云々、關白又云、然者敍位ニモ可載也云々、余申關白、又六位任大和權守、但有例如何、關白云、其ハ只六位ニテ可有云、　三年十月九日癸巳、此日京官除目也、〇中略小時長方持參下勘申文等、余取之、次第任也、此中皇太后宮未給二分代內舍人在注文、而稱有誤、外記留申文不上之、仍余申關白云、今夜不被任之、下名之次可有沙汰歟、將又以女御臨時內給可任歟、答云、只可任、仍任畢、尻付云、臨時內給者、凡名替國替等申文、其數太多、悉令任之間、諸國介一度除目、殆欲及廿卅人、少々可被略歟之由觸關白、關白被諾、仍所望國無闕之申文等不任之、其外一兩申文略之、皆悉任了、〇中略于時丑終寅始程歟、關白息師家去夜敍從三位、今夜任中納言、當時執政之息、雖無左右事、年齡八歲、古今無例、經今一兩年、雖被任有何怨哉、但今年可勤春日使、而爲不勤其事、又爲勤明年上卿、所被忩任云々、兼

房基通、隆忠、良通、皆被超越了、各更不可爲愁緒之嫡子、先代無相爭之人之故也、

建久四年十二月八日辛丑、此日京官除目初日也、〇中略 余仰任當年給之由、大臣順不被存者、近代京官除目二ヶ夜被行之由、初日被任院宮當年給事、曾無例、是奏任人、於上皇之間、入眼日被定任人、仍不被任也、今度任正祿仰之、大臣有不被存之由遺恨也、皆悉任了、猶可任京官之由、大臣被申、余云、有例哉、大臣云、諸司二三分多以被任云々、仍余給諸司奏諸道擧等少々任之、其中內膳司擧典膳申文、依余命任之、擧三分之條、近蔭有例、件可依無所望人、如秦關、仍隨宜被任也、而大臣任之後、被申文奧云、只有本勝署、此長官署具如何、余云、早可被消也、無長官之署之文不上奏故實也者、即塗墨了、其外諸司二分等任之、　九日壬寅、京官除目入眼也、戌刻左大臣參入、諸卿未參、任人間事、聊有被尋問、〇中略 先任內舍人、是花園〇源有仁說也、去春如此、凡大臣作法、今度併欲改去春作法、而最前任內舍人事、春秋惟同、此條不被知有異說之由者、次々隨宜被任之、全無大節、又此中文沙汰、只如舊消息任也、一度申文懸勾、早遂之條、爲人第一也、然而不正作法之條、於公事似存略儀、爲之如何、任人之中、有六位權守被尋別注、逆近例等、仍不敘五位、又陰陽大允晴光辭職讓子息、而被任少屬、〇屬恐誤 仍可有違奏之由、大臣被示、余云、尤可然、但不然辭書者、本寮爭賭知新違奏哉、以自外任之間、任人於外記被行轉任之例粗有之者如何、大臣稱善、即以自外被任之、〇下略

〔明月記〕建曆元年十月廿六日、除目勤仕事、尤可遂思、本爾之間、已不能習禮、爲之如何、　廿八日、未時許參左大將殿、〇中略 除目事等申承、秉燭之程、親輔朝臣參入、明日可被行除目、可令候執筆給由申之、直衣御冠令出逢給、即退出、次於寢殿南面、有除目習禮、大納言殿、酉時許渡御、長兼卿公官等候、其所、申文袖書了、令下勘之後、大納言殿令還御、予〇藤原定家同退出、　廿九日、散位閑居之身、當除目之日、重摧肝膽、不異趙王之還房陵、〇中略 除目沙汰不記、及夜半、關白殿〇藤原家實退出給云々、更無漏聞事、　卅日、自大臣殿有御消息、給任人折紙、一見即返上之、寅二

點召仰、同四點召、辰二點退出、其間無失禮由存之、但任間作法、爲先省悟、申文撰疎、言語道斷者、任人之體、成功之疎、折紙之面、頗以驚目、但五位以上官一切無之、叙位濟々、大嘗會叙位、五位在額輩叙位如何云々、

從三位基良（止中將）　從四上範基　從四下親房（前弁）　範時　經高

從五位上有敎　業實

時儀猶々驚目、申文撰事、天下已無其沙汰歟、急雖有論議、公事還似磨滅之期、悲而有餘、

〔玉蘂〕建暦元年十月廿九日、此日京官除目也、左府（〇藤原良輔）候執筆、取除目ハ初度也、去春女叙位、立后、宮司除目等執筆了、家例必自春秋除目候執筆、此人已不然如何、凡人多如此歟、不便也、（〇中略）晝御宰相中將實氏來著橫座、次範朝、顯俊、以官人尋遣之、而奉行職事逐電之間不尋得云々、甚奇怪也、數度雖尋遣一切不見云々、以外緩事也、奉行職事逐電術盡歟、良久尋出之、可有召仰申只今可參之由、在關白（〇藤原家實）直廬、何故給任人折紙之後、如此令遲々哉、職事不覺也、若雖有任人遲々事、於召仰ハ先必可仰也、著議所之間經程故也、關白不被下知之條、又恐不覺也、此間左府、雖及深更、依爲初度可著議所云々、中宮大夫答、尤可然之由、新大納言依所勞退出了、此間曉鐘兩三聲也、欲曙也、非廿九日除目、於今ハ卅日儀歟、未曾有事也、　卅日、巳剋事了云々、甚爲遲々、任人多歟、　十一月一日己酉、宰相中將來、一日除目持參、院宮御申文之時、不撤結緒之由被語、大失禮歟之由答了、傳聞奉行藏人敦實未練、違亂多端云々、件申文可取加阿闍梨解文云々、希代珍事也、執筆撤結緒、於解文奉關白云々、尤可然事也、　二日庚戌、中宮大進兼隆申條々事、此次談云、除目夜、五位藏人逐電之間、勸盃瓶子取闕如、雖被召遣稱所勞各不參、依仰兼隆取之云々、此事聞院御所、五位藏人等被召籠云々、

〔平戸記〕仁治三年十二月廿四日壬申、今夜被行京官除目、右大臣殿（〇藤原實經）令勤執筆給、頭辨奉行、

廿五日癸酉、今夜除目入眼也、頭辨去夜俄退出之間、藏人奉行云々、　廿六日甲戌、今夜被行下名、

〔百練抄〕(十五後嵯峨)寛元二年十二月十七日癸未、京官除目也、有功過定、業數筮後勘済云々、

〔平戸記〕寛元三年十月廿九日庚寅、今夜被行京官除目、左府(○藤原實經)依一條殿御渡事(日來被修理、今夜有御移徙之儀云々、)云、令辭給之間、右大臣(○藤原實平)初令候執筆給云々、後朝及巳剋事訖云々、

〔園太暦〕貞和二年十二月五日、今日京官除目云々、奉行頭辨宗光朝臣也、執筆竹林院大納言、(○藤原公重)花山院大納言、(○藤原長定)春宮大夫、(○藤原實夏)大宮宰相、右大辨宰相(○藤原長)等參仕、面々早出、公卿無人之間、顯官擧被略之云々、尤不便歟、清書實夏卿奉行云々、

朝間大納言送狀返報等續之

久不啓案内、恐鬱候、今夕京官除目右筆事、去月廿九日、頭辨相觸候之間、悉雖申領狀候、卒爾之至、短慮彌迷惑仕候、可有賢察候、抑轉任顯官事、京官強不及沙汰候由、師利令申、頗不審存候、毎度見及事候、何樣候や、執筆召勘文之條、常義候歟之間、存其旨候、如然事等、仍參申候之處、文書披見不得寸暇之樣候、夜前適出京仕候之間、故令啓候也、誠恐謹言、

十二月五日　公重　狀

積鬱之處、悦承候、京官除目執筆事御參、承悦目出度候、催促遲々候旨承候き、無餘日之御領狀感悦申候、

抑轉任顯官間事、不依縣召京官、召勘文被任之條勿論候、臨時除目之時、猶召之候、況哉除目爭可闕候乎、師利申狀不審候、但不依任人無顯官有無、召宿官兼國勘文之次、必召之、京官之時有任人者、強不可被召候之由存申候歟、如何、心事猶期後剋、恐々、

十二月五日

延文元年十月大、春日神木遷座、可被行京官除目例、

永仁二年十月五日、神木遷座木津、　今年京官除目、依神木事停止、(同三年五月四日御歸座)

臨時除目例

曆應二年十一月九日、神木遷座移殿、　今年京官除目、依神木事停止、（同三年六月廿日自金堂歸座）

貞和三年七月三日、神木遷座移殿、　今年京官除目、依神木事停止、（同四年正月十六日御歸座）

此外依神木入洛幷遷座、不被行縣召除目之時、京官除目停止例不能注進者也、

〔大鏡　五太政大臣兼通〕ほり川殿（〇兼通）の御やまひ、をもくならせ給ひて今はかぎりにておはしましほどに、ひんがしのかたにさきをふをとのすれば、御まへに候人たち、たれぞなどいふ程に、東三條の大將殿（〇藤原兼家）まいらせ給ふと人の申ければ、殿きかせ給ひて、としごろなからひよからずしてすぎつるに、今はかぎりになりたると聞て、とぶらひにおはするにこそはとて、おまへなるくるしきものとりやり、おとのごもりたる所ひきつくろひなどして、いれたてまつらんとてまち給ふに、はやくすぎてうちへまいらせ給ひぬと人の申に、いとあさましく心うくて、おまへに候人々もおこがましくおもふらん、おはしたらば關白などゆづることなど申さんとこそ思ひつるに、かゝればこそとしごろなからひよからですぎつれ、あさましくやすからぬ事なりとて、かぎりのさまにて、ふし給へる人の、かきおこせとのたまへば、人々あやしとおもふほどに、車にさうぞくせよ、御前もよほせとおほせらるれば、物のつかせ給へるか、うつし心のなくておほせらるゝかと、あやしく見たてまつるほどに、御かふりめしよせてさうぞくなどせさせ給ひて、うちへまいらせ給ひて、陣のうちはきんだちにかゝりて、たきぐちのぢんのかたより御前へまいらせ給ひて、こうめいしのざうしのもとにさしいでさせ給へるに、ひの御ざに東三條大將御前にさぶらひたまふほどなりけり、この大將殿は、堀川殿すでにうせさせ給ひぬときかせ給ひて、うちに關白の事申さんと思ひ給ひて、この殿の門をとをりてまいりて申たてまつる程に、ほり川殿のめをつゝらかにさしいで給へるに、みかど（〇圓融）も大將もいとあさましくおぼしめす、大將はうち見るまゝに、たちておにのまのかたにおはしぬ、關白殿御まへにつゝゐ給ひて、御け

しきいとあしくて、さいごの除目をこなひにまいり給へるなりとて、藏人頭めして、關白には賴忠のおとゞ東三條殿おとゞをとりて、小一條のなりときの中納言を、大將になしきこゆる宣旨くだして、東三條殿をば治部卿になし聞えて、いでさせ給ひて、ほどなくうせ給ひしぞかし、

〔公卿補任圓融〕貞元二年丁丑

關白太政大臣從一位藤兼通(中略)十月十一日、依病辭關白并大臣、○中略

關白　正二位同賴忠(中略)十月十一日、詔令關白万機、同日爲氏長者、○中略

大納言　正三位藤兼家(中略)十一月十一日、止事停右大將、爲治部卿、○中略

權中納言　從三位同濟時(中略)十月十一日、兼右大將、

〔權記〕長保六年寬弘元年○二月廿六日庚辰、有小除目、大藏卿○藤原正光任參議、藏人頭勞九年、年卅八、左相撲人阿倍長島任陸奧少掾、希有例也、仍記之、總所任卅一人、御物忌也、除目間、左大臣○藤原道長內大臣○藤原公季被候、右近中將補藏人頭、年卅、實平朝任等昇殿、左府除目等被奏後、召二省給之事、讓右金吾出給、有內印事障覽也、

〔小右記〕寬弘二年六月十九日乙未、今日公卿召云々、不參入、申剋許、自一兩許注送除目、權中納言忠輔、參議源經房、中將如元左大辨行成、侍從如元左中辨源道方、宮內卿如元權左中辨朝經、右中辨經通、民部大輔源方理、內藏頭賴親、中將如元左少將忠經、右兵衞權佐賴宗、攝津守方正、藏人頭源賴定、藏人頭示送、忽無召小舍人祿物者、送絹一匹信濃布三端、是任人料也、舊例二端、依不知近例、增送今一端、而示送云、近代五端者、仍又送今二端、又云、加他布一端給四端了、是舊例也、不據近代例、但返送後送布二端、

長和三年六月十七日辛未、參內、左大臣○藤原道長、內大臣○藤原公季、大納言道綱、齊信、中納言俊賢、敎通、參議經房、兼隆、實成、賴定、公信等參入、定申國國司申請條々事、賴定執筆、頭辨朝經下給越後守爲時辭退狀、定申許不事、件狀注前司信經任終當任三箇年事之究濟由、諸卿申云、誠雖任終年、未及收納、被

任替人有何事乎者、齊信卿及下官（實資○藤原）申云、辭狀中申究濟四箇年事之由、先被下勘彼濟不如何、左大臣被奏各定申旨、卽下給舊吏別功者、申文等（申文太多）可撰定者、但越後事、且令問濟不、可被任替人者、仍越後備後等可被任也、撰申舊吏申文、別功一人、（合七枚）所謂舊吏景齊、師長、賴親、輔公、泰通、信經、別功伊賴、左府云、惟能專一可撰入、而不入撰定、如何、若入惟能、拔棄他人申文、依可有人愁、只示事旨也者、撰定申文在公信、次々人々依人之大節不論左右而已、予申云、信行申文不下給、如何、相府云、太不便也、見進申文五月事也、不知彼申文在何、又不付他人歟、只今何爲年老濟難治事者也、予申云、如此之者、不知國之善惡、可有朝恩歟、左府諸奕件撰定申文等被奏聞、朝經傳給言云、以師長可任備後、信經（信經者、前司之經也、又筆也、內々相傳所任也、似任意、師長信經兩人殿上人也、）可任越後者、下給兩人申文、以經房令書除目、（申文授經房）被任木工修理大小工、左府奏左京大夫事、（大夫長經上辭退狀了、）以左近中將能信（三位）可任者、令書別紙、兼字事無左右、仍被奏事由、被仰可付兼字之由、除目乍座以朝經被奏聞、御覽畢返給、先是仰大外記敦賴令戒式部丞、左大臣召外記爲國問式部事、申候由、卽仰云、召、次又申同事、又申畢式部丞雅康著靴立陣前庭、大臣宣、万字古、稱唯著膝突、給除目、復本所、上宣云、万介タヘ、稱唯退出、先是大臣問云、先可問歟、依入夜、予答云、不問只可召也、又云、万宇古止可云歟、答云、然也、又云、外記申候由、第二度仰云、召物止、此事可仰乎、不仰乎如何、予答云、召物詞必不仰侍、今必不可仰之事也、依可給除目可戒式部由、先被仰外記、何更申式部候由之、次重又仰召物由乎、又可給宣旨之時、依可給宣旨、可候式部之由、兼所仰外記、相府之氣色給除目之時、式部著靴、爲令知其事也、兼仰外記、更又不可仰歟、件事不聞古傳、若今案歟、不可然也、諸國司申請事定畢（戌二刻）退出、

〔爲房卿記〕寛治五年八月六日、今日有臨時除目、於左仗被行之、殿下（師實○藤原）不豫御坐、仍渡御東三條、被宣下之、祭主大中臣親定、（有定不敍除目）齋宮寮頭知家、（敦憲遣幾替）中宮權大進源行實、少進同俊兼、甲斐守藤實、（相傳）淡路守同爲隆、左近權少將忠敎、（兼任正尾張守）左馬助藤敦仲、

（中右記）寛治七年十二月十八日、左大臣、（○源俊房）左大弁、（○大江匡房）被參仗座、（○中略）有小除目、美作守泰仲、讃岐守行家、件二人相傳也、泰仲朝臣讃州八年、明春得替之時也、而年之中有此事、不次之朝恩歟、

嘉保元年七月十三日壬子、及夜陰於陣座有臨時除目、（○中略）

（裏書）諸卿定申云、隆宗朝臣爲民部大輔、勞積已久、此春不被任民部丞者、於受領雖新任有何難哉、高實朝臣巳爲被國吏任中濟事、不浴朝恩八年于茲、今有恩容、豈以非據哉、兩人之間、可隨勅定也、家通朝臣爲賀州宰任中辭職、申文之中、年限不詳、恐有恩許、何事有難者、件定以詞被奏、遂被任隆宗朝臣也、

二年四月五日、晩頭參殿下、（○藤原師通）令參內給、（先令參一二被給云々）有小除目、（宰相中將書之）常陸守知房辭退、仍常陸國可被成之人有僉議、大學頭是綱朝臣、武藏國濟數十年公文、仍被任了、

嘉承二年十一月廿五日丙子、今夕有小除目、下官（○藤原宗忠）先著仗座、（依殿下御氣色、予行之）藏人頭爲房朝臣來、仰任人二人、奉仰之後、移著端座、令敷膝突之後、召外記仰云、除目可被行、硯紙等可奉也、外記稱唯、膝突相顯實敷座、外記持來硯筥、置參議座前、（入紙）日予令參議書之、書了持來、披見之處、

太政官謹奏

右近衞府

權少將正五位下藤原朝臣忠通（令任給也）

（藏也）人　將監正六位上高階朝臣泰業

嘉承二年十一月廿五日

召外記宣入除目、付爲房內覽、則持來、召外記令持除目進御所、付藏人有實令奏、返給、還著仗座、召外記、尋兵部省、外記三度申如常、其後兵部丞著靴立南庭、仰云、末宇古、（一書參時召聞如此）著膝突、下除目、立庭中、予仰云、末計給へ、稱唯退出、　十二月八日己丑、有小除目、（內(堀河)御衰日也）

（裏書云）八日、晩頭參內、俄有小除目、下官并左大弁（○源重資）著仗座、藏人弁顯隆仰云、忠通轉任權中納言、藤成

通可任侍從、是右衞門督四郎子云々、移著端座、召外記、令進紙硯等、仰左大弁令書之、入宮（二通）付藏人弁令内覽、進西中門、又付藏人弁令奏、歸著仗座、尋二省、依事俄不參者、仍令外記封、其上引墨、入宮下給外記之次、後日可給二省之由仰下了、（今日主上御衰日也、除目不被忌歟、）

天永二年十月廿五日、予（○藤原宗忠）依仰著陣座、左大弁（○源重資）修理權大夫（○藤原爲房）門直座、及深更有小除目、（○中略）左大弁起座持來除目幷申文、予取之、左大弁復本座後披見、（二通）木工頭雅兼、（兼）加賀守顯輔、越後守敦兼、（已上相博、）丹波守忠隆、太宰少貳秦兼（已上一枚兼）左近將監近來、左衞門志忠明、（兼、已上一枚、○中略）

抑忠隆者、伊與守基隆朝臣二男、院判官代也、但年十歲、幼少無極、加之無受領本官、又無成功、只依殊寵偏浴大恩也、十歲之人、初任丹波、古來未有此例、人々以目、敢不出口也、

大治四年八月廿八日、申時許參内、（○中略）頭辨下解狀二通、結申、仰給否幷例勘申、（一通ハ無品禧子内親王被申、永久三年京官未給、一通ハ前女御道子申合爵、以藏人式部丞知通叙爵事、）召外記、大外記所勞之間、少外記範兼候小庭、予目來膝突、下給件申文、仰可勘申例幷給否之由、則勘上持來、付頭辨奏覽、關白殿（○藤原忠通）御座近衞亭、頭辨内覽、則下給通子女御申文也、此次以頭辨下申人々申文、予結申式藏人二人給官事、以口宣仰下、俄有小除目叙位也、予召外記仰云、除目可被行、硯紙可持來、又可催二省、外記歸了、左大辨相公爲隆、依催只今參仕、外記置硯、召寄左大辨下申文等、令書除目叙位、（任人且又頭辨書折紙具申文、左大辨持來、披見之處書々下也、近代賢說也、）

太政官謹奏

大學寮

（寮奏）少屬從七位上藤井宿禰清重

典藥寮

（藏人）助正六位上藤原朝臣爲範

石見國

（御祈功、爲人驚、）守從五位下卜部宿禰兼仲

大治四年八月廿八日

太政官謹奏

左兵衛府

（藏人）少尉正六位上高階朝臣爲基

兵庫寮

（前齋院未給）少允正六位上藤原朝臣兼遠

大治四年八月廿八日

從五位下

（內藏人二臈）藤原朝臣知通

大治四年八月廿八日

已上三通、召外記、入筥下給、令封、外記引墨進上、大奇怪也、予取筆引墨、給外記、令內覽、殿下御座所里亭、仍加封令內覽也、頭辨來仰云、藏人左衛門尉源季兼可爲撿非違使者、召右少辨下知此旨、追成官符也、

故院（○白河）一臈藏人式部丞藤有盛、只今被補內（○崇德）藏人之由、頭辨所談也、尤善政也、外記持來除目、了又被封、予皆披封、又召外記問云、式ノ省兵ノ省サヘ候哉、外記申云、式省候、兵ノ省政人不候、替僚候陣外、仰云、式ノ省サ召セ、外記三度申、了式部丞一人立小庭、予北面仰云、末宇古、（一省參時知此）來、藤實以右手微々給除目、云本所仰云、末介給ヘ、式部丞稱唯退出、次召外記於藤實、取入筥給武官除目、仰云、傳給ヘ、外記稱唯、取筥退出之次、召外記問內記參否、申參由、仰云、召セ、少內記（某）來、藤實叙位幷道子女御合爵申文乍入筥給了、次召外記給硯筥、及深更退出、

○中略

裏書云　兼仲ハ女院侍也、所司先年被レ成二民部丞一、世間大驚也、不レ經二程給一爵了、後一兩年後拜二任石見一、萬人驚見、可レ謂二大幸人一歟、

〔長秋記〕大治五年四月三日、中宮立后後入內、

除目

刑部卿敦兼　　權大輔藤原忠定

但馬守源有賢　　阿波守季行

左中將公教兼　　右少將忠賴兼左尤

左衞門佐藤原經隆兼　　左馬權頭藤原範隆

從四位下藤原家長去正月府勞

頭辨書除目、刑部卿書二別紙一云々、

〔中右記〕大治五年八月廿三日癸巳、今夕假有二小除目一、上卿左衞門督實行卿、宰相右兵衞督伊通參仕云々、戌剋除目了、聞書被見處、右少史中原俊成、元式部錄第二者、去月以二式部錄一被レ成レ史了、相次又被レ成レ錄、希代例也、右京亮安倍泰親、右近衞權少將藤原賴長、今加二十五人一給也、左馬允平雅綱、右馬允源貞宗、皇后宮去年未給云々、

〔兵範記〕仁平三年九月十四日庚子、於二仗座一小除目、上卿左衞門督重通卿、右少弁資長執筆云々、

參議正二位藤原兼長右近中將皇后宮權大夫等如レ元

造酒正□□宗家

敍位

從二位藤原師長左近中將參議

宣旨

穀倉院別當中原師安

公卿除目任陣座之例、往代希有也、近來大納言伊通卿於仗座任中納言了、

又勅任執筆弁官勤仕之例、未曾有云々、

〔保元物語二〕白川殿義朝夜討被寄事

白河殿ニハ角トモ知召サヾリシカバ、左大臣殿、武者所ノ親久ヲ被召テ、内裏ノ様見テ參レト仰ケレバ、親久卽馳歸、官軍既寄候ト申モ果テバ、先陣既馳來、其時鎭西八郎申ケルハ、爲朝ガザタイ申ツルハ、爰候々々ト怒リケレ共力不及、爲朝ヲ勇センタメニヤ、俄ニ除目被行テ、安弘藏人タルベキ由仰ケリ、八郎是ハ何ト云事ゾ、敵既ニ寄來ルニ、方々ノ手分ヲコソセラレズレ、只今ノ除目物忩也、人々ハ何ニモ成給ヘ、爲朝ハ今日ノ藏人トヨバレテモ何カセン、只本ノ鎭西八郎ニテ候ハントゾ申ケル、

〔平治物語一〕信西子息闕官事附除目事幷惡源太上洛事

去程ニ少納言入道信西ガ子息五人闕官セラル、○中略軈被行除目、信頼卿ハ本ヨリ望ヲ懸タリシカバ、大臣大將ヲ兼タリキ、左馬頭義朝ハ、播磨國ヲ給テ播磨守ニナル、佐渡式部大輔ハ、信濃守ニナル、多田藏人大夫源賴範攝津守ニナル、源兼經ハ左衞門尉ニナル、康忠ハ右衞門尉ニナル、足立四郎遠基ハ右馬允ニナル、鎌田次郎正清ハ兵衞尉ニ成テ、政家ト改名ス、今度ノ合戰ニ打勝ナバ、上總國ヲ可給由宣ヒケリ、爰ニ義朝ガ嫡子鎌倉惡源太義平、母方ノ祖父三浦介ガ許ニ有ケルガ、都ニ騷事有ト聞テ、鞭ヲ打テ馳上リケルガ、今度ノ除目ニ參合、信頼大ニ悦テ、義平此除目ニ參合コソ幸ナレ、大國カ小國カ官加階モ思ノ如ク進ムベシ、合戰モ亦能仕レト宣ヘバ、義平申ケルハ、保元ニ伯父鎭西八郎爲朝ヲ、宇治殿ノ御前ニテ、藏人ニナサレケレバ、怱々ナル除目哉ト辭シ申ケルハ理哉、義平ニ勢ヲ給候ヘ、安部野ニ馳向、淸盛ガ下向ヲ待タン程ニ、淨衣計ニテ上ラン處ヲ、

眞中ニ取籠テ、一度ニ討ベシ、若命ヲ助カラント思ハヾ、山林ヘゾ逃籠リ候ハンズラン、然ラバ追詰追詰捕ヘテ、頸ヲ刎、獄門ニ懸テ、其後信西ヲ滅シ、世モ靜テコソ、大國モ小國モ官加階モ進ミ侍ラメ、見ヘタル事モナキニ、急テナリテ何カセン、只義平ハ東國ニテ兵共ニ喚ツケラレテ候ヘバ、本ノ惡源太ニテ候ハントゾ申ケル、

〔顯廣王記〕仁安二年十月廿日甲寅、臨時小除目、

〔玉海〕嘉應三年（○承安元年）四月廿二日丙寅、昨日有小除目、上卿源中納言雅頼、宰相左大辨實綱云々、

權中納言平時忠（剩闕十人例始歟、宗盛始九人之例、今又如此、未曾有也、）

土佐守藤資頼　備中守源雅賢（兼）

敍位

正二位藤實房（建春門院去年御給）　同邦綱（坊官賞）

以院宮御給敍上階、未曾有事也、

〔仲資王記〕安元三年（○治承元年）九月六日壬寅、除目、左少弁兼光朝臣賜上野國了、

〔山槐記〕治承三年十一月十九日癸酉、今夜有小除目、

主殿頭高階爲清（信成任大膳大夫之時、爲召替歟、爲清主殿頭被任、清綱子、今如元還任、非參議也、）

右京大夫藤基家

右衞門尉源光長（郎被下使宣旨、元前右衞門尉、先年光保申外官也、）

右兵衞尉藤基能（叙爵者也、今召返位記還任、）

藤友實（前檢非違使也、今還着、即被下使宣旨、）

伊勢守藤清綱　若狹守平經俊

能登守平敎經　但馬守平經正（兼）

備中守平師盛　阿波守平宗親

解官

左衞門志中原清重使　右衞門志同重成使

右衞門尉府生佐伯久忠使

停任

伊勢守大中臣忠清

止位記

右兵衞尉藤基能

辭退

主殿頭藤家綱

廿日甲戌、有除目、三位中將良通任權中納言、卽兼右近大將、大宮大納言隆季任太宰帥、去夜被任甚、云々、源大納言闕行之云々、

〔吾妻鏡三〕元曆元年六月廿日丁丑、去五日被行小除目、其除書今日到來、武衞〇源賴朝令申給任人事無相違、所謂權大納言賴盛、侍從同光盛、河内守同保業、讃岐守藤能保、參河守源範賴、駿河守同廣綱、武藏守同義信云云、

〔吾妻鏡四〕文治元年八月廿九日己卯、去十六日有小除目、其聞書今日到來、源氏多以承朝恩、所謂義範伊豆守 惟義相模守 義兼上總介 遠光信濃守 義資越後守 義經伊豫守 等也、義經朝臣官職事、於以前者、二品〇源賴朝頻雖被傾申、至今度豫州事者、去四月之比、內々被付泰經朝臣畢、而彼不義等露顯、今更不能被申止之、偏被任勅定云云、其外五箇國事者、任人面々直懇望申之間、且募勳功之賞、且爲添二品眉目、殊所及嚴密御沙汰也云云、各可令知行國務之由云云、皆是當時關東御分國也、

〔吉記〕文治元年十二月廿六日、〇廿六日、恐廿九日誤、今夜有任官事、上卿別當家通、參議雅長卿書之、藏人宮内權少輔親經宣下之、先仰解官事云々、

參議源雅賢元藏人頭　右大辨□□

權右中辨平基親元左少　左少辨□□

右少辨同親經藏人　左大史小槻廣房元日向守□□

大藏卿藤宗頼　和泉守同長房兼

近江守藤雅經　陸奥守同盛實

越前守同公守兼　越中守同家隆

因幡守源通具　石見守藤業盛

美作守藤公明　伊與守源季長

右馬頭藤公佐

被補藏人頭

左中辨藤光長　右中辨源兼忠

解官

參議平親宗　右大辨藤光雅

刑部卿藤頼經　左馬權頭平業忠

左大史小槻隆職　兵庫頭藤章綱

左衞門尉平知康　藤信盛

同信定　同時成

配流

高階泰經伊豆　藤頼經

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午刻右中辨光長朝臣持來頼朝卿書札幷折紙等、○中略

頼朝書狀

言上　事由

右言上日來之次第候者、定子細事長候歟、○中略　愛又當時可被仰下候事、愚意之所及、乍恐注折紙、謹以進上之、○中略　以此旨可令洩申右大臣殿兼實○藤原給之狀、謹言上如件、

文治元

十二月六日　頼朝在判

謹上　右中辨殿

續紙狀云　謹言上

同意謀叛人行家義經之輩、先可被解官追却、交名注折紙、謹以進覽之、○中略

折紙狀云○中略

一國々事

伊豫　右大臣兼實○藤原　御沙汰

越前　內大臣實定○藤原　御沙汰

石見　宗家卿可給之

越中　光隆卿可給之

美作　實家卿可給之

因幡　通親卿可給之

近江　雅長卿可給之

和泉　光長朝臣可給之

陸奥　　兼忠朝臣可給之

豐後

頼朝欲申給、其故者、云國司云國人、同意行家義經謀叛、仍爲令尋沙汰其黨類、欲令知行國務

也、〇中略

解官事

參議親宗　　大藏卿泰雅

右大弁光雅　　刑部卿頼經

右馬頭經仲　　左馬權頭業忠

左大史隆職

左衞門尉知康　　信盛

信實　　時成

兵庫頭章綱

同意行家義經、欲亂天下之凶臣也、早解官見任、可被追却之、兼又此外、行家義經家人追從勸誘之、各相尋淺深、於官位輩者、一々可被解官停廢之、僧陰陽師之類相交有其聞、同可有追却之、

十二月六日　　頼朝在判〇又見吾妻鏡

〔仲資王記〕文治五年閏四月八日丁酉、小除目、出雲守藤朝經、還任

〔三長記〕建久六年十一月十二日癸巳、今夜有臨時除目、上卿平中納言〇親宗　參議別當光〇藤原雅　執筆云云、

中宮大夫藤家房兼　　權大夫同公繼兼

亮藤定經
右中弁藤宗隆　　權右少弁平親國
建久六年十一月十二日
從三位藤公房左中將如元
藏人頭藤定經
五位藏人藤朝經　　同長兼

〔明月記〕建久十年正月廿日、未時許除目、○中略春除目以前、臨時除目頗珍事歟、後見及仁安二年正月七日宗盛任右近中將、權中納言公房卿云々、

〔猪隈關白記〕正治三年○建仁元年八月十九日丙申、此日於陣被行臨時除目、上卿權中納言通親、本第八中納言、左中將正三位、當時大納言六人也、今一人被加任也、次第任官多之、依不慥覺不記置、

〔三長記〕元久元年四月十二日乙巳、今日爲被任賀茂祭供奉人、可被行臨時除目、其次公卿昇進等可有沙汰云々、○中略參內、藏人弁光親轉任左中弁、被補藏人頭之由示之、于時除目未了、上卿三條大納言、執筆宰相中將賈平、令勤仕給也、任人大略聞了、

〔仲資王記〕建永二年○承元元年十二月九日庚戌、小除目、飛驒國被賜親兼卿云々、

〔玉蘂〕建曆元年九月八日己未、今夜被行小除目、翌日被見聞書之處、權中納言仲經辭退替、任別當之由勿論也、參議顯俊、左大弁親輔、非其仁、右大弁宣房、無才無藝、非其仁、左中弁宗行、右中弁定高、任中弁中、有先例歟、權右中弁範時、左少弁經高、賤光入道家人、可咲之、右少弁家宣、賈實子、無才人也、細尾龍之者也、內藏頭隆仲、理運也、木工頭親長、何故被可咲之、內藏頭定家、叙從三位、任侍從、依勤功奏云々、仲隆卿叙正三位、是依被召中納言歟、又賴資辭木工頭、叙正五位下、右中將通方、補藏人頭、五位藏人勘解由次官宗宣、同棟基云々、是等非許之中奇異也、爲官求人之政可然哉、藏人方於今者失了歟、兩頭皆頭中將也、不及取文書、五位藏人皆以無才無智之人也、不能左右之世也、中宮大進兼隆自本所被擧之、而不許勿論事也、無過之者也、凡近代之政、不請口智不論、

英華、只以內奏之者所被許任也、兼隆於今者失先途歟、可敍四品之由所申也、爲君爲國爲世爲寺宮、第一遺恨也、爲身非遺恨歟、又忠信卿任左衞門督、昨日蒙勅勘、今日蒙朝恩、政之變云々、以之可察歟、宰相中將實宣任右兵衞督、爲撿非違使別當云々、此外雜任等不記、見除目歟、

〔明月記〕建曆元年九月五日、大嘗會弁闕如、今日可有除目云々、入夜聞之延引、明後日可被行云々、

〔平戶記〕仁治三年六月十五日壬寅、今日被行小除目云々、

權少外記磯部信俊　左大史中原範俊
右大史中原宗繼　左少史中原有景
安倍親貞　右少史中原兼淸
木工允藤原成村內藏寮功　美作守藤原實兼
左近將監藤仲信藏人　左衞門督藤顯親兼
右衞門督藤公光兼
從五位下藤說實臨時
撿非違使別當
右衞門督藤原公光
辭退
左衞門督藤原良敎

〔葉黃記〕寶治元年五月十七日己巳、今日有小除目、熊野遷宮功人等被任之、〇中略雅樂頭在淸敍正四位下、無超越之者之上、月蝕事申狀符合之故也、然而尻付所被注其由、又俊宗任大藏少輔、四品之後、任八省少輔、希代事也、依遷宮可參熊野、愁申無官事、仍被任之、雖非无先例希事也、　二年七月十七日壬戌、有小除目、北野三年一請功人等被任、予〇藤原定嗣吹擧之、予又敍正三位云々、一切不出詞、遮有

此恩、面目也、通行卿同叙之位、次遂超,長朝卿、

〔勘仲記〕弘安五年十一月廿五日辛巳、今夕被行小除目僧事、七年七月廿六日壬寅、今夕被行小除目、仲資奉行、北野祭三年一請功人所被任也、上卿左衛門督公[illegible]、清書參議右兵衛督爲世、并權右少弁俊定朝臣、除書可然事等注之、

〔園太暦〕康永四年八月卅日、去夜小除目聞書事、略之、後日大外記師利語曰、今夜除目事、及深更被仰下、歸參任官、今日中可有沙汰之由、武家頻申之、不可有延引之由被仰、而六位外記不合期之間、自身參仕、但其例可爲何樣哉之由申入候處、硯續紙公卿著座以前也、置之、奏聞之時、職事來陣、是新儀、自叙處可沙汰云々、

〔宣胤卿記〕永正五年六月廿八日、頭中將康親來、小除目條々問之、小叙位前後事、御教書書樣事、右大丞狀到來、小除目總用切符書樣問之、杉原ヲ三ニ切テ竪ニ書之、禮節年號不書之、

總用三百疋、爲上卿御訪下行候也、

六月

松田丹後守殿

〔後奈良院宸記〕天文四年十二月四日辛卯、小除目、執筆宰相中將〇藤原實世也、小折紙脫染筆、權中納言藤原實世、參議藤原公叙、兼權少外記紀盛徳、兼助教清原敎賢、兼下總守清原業賢、兼此分也、同ヲクニ造東大寺長官左大辨藤原尹豐、造興福寺長官右少辨藤原宣治、修理左宮城使左中辨藤原光康、修理右宮城使右中辨藤原晴光、各終而宰相中將中納言奏慶、於常御所對面賜盃、其後頭中將參議之拜賀、於三間對面賜天盃、珍重々々、實類也、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月十四日丁巳、今日有補任女官之事、正四位下藤原朝臣貴子爲御侍、太政大臣息女、正五位下藤原朝臣明子爲典侍、元掌侍、從五位下橘朝臣平子爲掌侍、元權掌侍、從五位下良岑朝臣養

父子爲掌侍、正六位上橘朝臣本子爲權掌侍、從五位上橘朝臣光子、從五位上橘朝臣貞子爲典藏、從五位下壹志篤子爲典書、從五位下紀朝臣榮子爲典殿、從五位下藤原朝臣典子爲典膳、從五位下路眞人淸子爲典酒、中納言藤原實賴卿自殿上給件召名案、著宜陽殿西廂座、召大外記三統公忠令進御硯折界紙等、令參議源是茂朝臣書召名、其後上卿令持外記、參御所綾綺殿、付藏人右少辨源相職朝臣復奏、即返給、令持外記、還著宜陽殿座、了外記公忠召中務大輔源國淵朝臣、(在前召儀)令自日華門參入(用二兩儀)給召名、退出如入儀、先是上卿召大外記公忠問云、召中務給女官召名儀式先例如何、公忠申云、去寬平九年八月十四日、有任女官之儀、注云、中務少丞平有中著靴參入、給召名退出者、昌泰二年四月十七日、有女官補任事、注云、召中務大丞滋野春仁給召名、其儀如二省給直物之例者、延喜七年二月七日、以藤原朝臣滿子爲尙侍、注云、中務大輔源朝臣治給召名、其後任女官之時、召彼省丞雖給召名不著靴、只猶如給宣旨之儀云々、上卿仍今夜召國淵朝臣給件召名耳、其後太政大臣(〇藤原忠平)中納言實賴卿、參議顯忠朝臣、幷藤原大夫已上入自日華門、立宜陽殿西廂壇上、令藏人頭藤原敦忠朝臣奏悅由、再拜舞踏、即退出、依兩儀今夜於此處拜舞、

〔類聚符宣抄　四〕太政官符式部民部大藏宮內等省(外)

何侍正四位下藤原朝臣貴子(〇藤原忠平女)

右今月十四日補任如件、省宜承知、符到奉行、

左少弁　　　　　右少史

天慶元年十一月廿七日

〔春記〕長曆三年閏十二月十三日己亥、掌侍隆子辭申之替、以藤原保子可補任之由、以辭書下給四條中納言、是皆關白(〇藤原賴通)被聽申之事也、中納言云、今日參議不候、以後日可申行除目也者、即奏之、依請者、

〔中右記〕嘉承二年十月廿六日戊寅、今夕可有女官除目也、暫可候仗座、由頭爲房依殿下（忠實○藤原）御氣色所来告也、雖無儀日、案依仰候仗座奥座、藤宰相顯實同以候之、及深更頭爲房来仰云、典侍二人掌侍三人可任（名内々書之）、移着端座、召外記令進硯紙、令宰相書（勅旨也と書也）、但此中典侍二人（一人ハ本從五位下也、一人ハ今夜叙位）（初叙從五位下、典侍参五位以上所任也、内々先問□□□之處、中云、或云、叙位相具、或云、典侍從五位下と被書也、但廳□三年十二月被行女官除目之時、無叙從五位下、不被副叙位、是御卽位叙位以前、雖無叙位之故者、仍今夜付廳□例不書叙位也、）掌侍三人（皆六位）入外記筥、以外記師安令内覽、則返給、同令持件外記、進西中門（廳二乃殿下御直廬也）、令藏人説定奏聞（參殿下御覽也）、返給之後、召外記、問中務參否、外記師安申云、悉皆有障不參、錄候障頭者、給除目於□□記令封印、其上引墨、乍入筥給外記、可下中務之由仰下、外記稱唯退出之次、取重硯筥退、其後退出、

（裏書）勅旨

内侍司

典侍從五位下藤原朝臣悦子

典侍從五位下藤原朝臣實子

掌侍正六位上源朝臣長子

掌侍正六位上高階朝臣爲子

掌侍正六位上藤原朝臣方子

嘉承二年十月廿六日

典侍二人御乳母也、悦子故季綱朝臣女、本五［　］實子公實卿女也、今夜叙五位也、長子故長季女、爲子故爲章女、方子故家實女云々、

〔殿暦〕嘉承二年十月廿六日戊寅、今日被行内侍除目、上卿宗忠卿、宰相顯實、以爲房（頭）宣下、典侍從五位下藤悦子、從五位下實子（今夜叙爵）、掌侍源長子、高階爲子、藤方子（以上六位）、内覽（外記）、次上卿進弓場付藏

人、持來宿所、下中務、今日侍從渡西、

（中右記）嘉承二年十一月廿五日丙子、今夕有小除目、〇中略又女官除目、頭仰云、（典侍掌侍可任者）重仰宰相令書勅旨、

内侍司

典侍從五位下源朝臣仁子（件人元六位也、今夜叙從五位下、然而不書別叙位、是例也、）

掌侍正五位下高階朝臣業子（先朝掌侍也、雖辭申、又被還著也、）

嘉承二年十一月廿五日

入宮付頭內覽、還來云、重不可奏、只今令忩出御之間也、仍召外記問中務參否、殿上之大輔資信候云云、早可召之由仰下、中務大輔資信來、乍入宮給女官除目、次召外記、令撤硯宮起座、

（顯廣王記）治承二年十月廿七日丁巳、今夕有除目、以姬君被補典侍了、是一家之風也、夕方藏人左少辨兼光奉天命、尋名字、從五位下信子女王之由註進了、

（平戶記）延應二年〇仁治元年二月廿一日丙辰、今夜被補尙侍、依寬弘例、左大臣〇藤原實經參陣之行除目給、左大弁（忠高）執筆、除目事頭弁奉行、又不審等示合計答了、

尙侍藤原佺子

典侍

除目了、左大臣殿就弓場、已奏慶給、依寬弘例也、

寬元三年二月十八日癸未、後聞、被行女官除目云々、

典侍藤原爲子（前藤大納言息女云々）

同平棟子（元掌侍也、有轉任之例、兼被尋云々、若宮母儀也、）

故藏人木工頭棟基息女也、今上〇後嵯峨寵愛、逐日日新、仍被轉任云々、

(枕草子一)除目のほどなど、うちわたりはいとおかし、雪ふりこほりなどしたるに、まうしぶみもてありく四位五位、わかやかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり、老てかしらしろきなどが、人にとかくあんないいひ、女房のつぼねによりて、おのが身のかしこきよしなど心をやりてとき聞するを、わかき人々は、まねをしわらへど、いかでかしらん、よきにそうし給へ、けいし給へなどいひても、えたるはよし、えず成ぬるこそいとあはれなれ、

(枕草子二)すさまじきもの

○○。ぢもくにつかさえぬ人の家、ことしはかならずときゝて、はやうありしものどものほかぐ〵なりつる、かたゐなかにすむものどもなど、みなあつまりきて、出入車のながえもひまなく見え、物まうでする供にも、我も〵とまゐりつかふまつり、物くひ酒のみのゝしりあへるに、はつるあかつきまで、かどたゝくをともせず、あやしなどみゝたてゝきけば、さきおふ聲々して、上達部などみな出給ふ、ものきゝに宵よりさむがりわなゝきをりつるげすをのこなど、いとものうげにあゆみくるを、をるものどもはとひだにもえとはず、外よりきたるものどもなどぞ、殿は何にかならせ給へるなどとふ、いらへには、なにのせんじにこそはと、かならずいらふる、まことにたのみけるものは、いみじうなげかじとおもひたり、つとめてになりて、ひまなくをりつるものも、やうやうひとりふたりづゝすべり出ぬ、ふるきものゝ、さもえゆきはなるまじきは、來年のくにぐにを手ををりてかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり、

(拾遺和歌集十六雜春)除目のころ、子日にあたりて侍けるに、按察更衣のつぼねより、松をはしにてたへ物を出して侍けるに、　元輔

ひく人もなくてやみぬるみよし野の松はねのひをよそにこそきけ

(中右記)大治五年七月十三日、依徒然除目小皮籠、幷黑手筥文書等、重取目錄了、依有家秘書、常加實

驗也、

〔中右記〕嘉承二年十二月廿二日、除目任人、皆以道理也、但以道言朝臣、被任陰陽博士條如何、本陰陽頭光平、道言子也、子爲本寮頭、父爲陰陽博士事、頗不被甘心、陰陽博士依爲陰陽寮所攝之官也、以紀盛言被任皇后宮屬事、又不得心、貞義本彼宮屬也、盛言外祖父也、祖父與外孫被任同官條、頗可有用心歟、

〔玉葉〕建曆元年十一月七日乙卯、詣著提院、略○中禪門出逢給、兼實不審事等粗問答了、

一今度除目議所、大藏省饗之外、又副砌引饗、先例無所見、何樣可候乎、

仰云、未聞及、不見先例、甚無詮、我執筆之時、度々著議所、一切不可然、尤違例也云々、

一大間入日之事、隨思出且入之故實也、今度不然云々如何、

•仰云、舊次第ニもさコソ候へ、書ノ入日條一定懈怠歟、尤失也云々、

一院藏人基仲無官任廷尉、府無尻付如何、

仰云、爲無官者、尤可尻付也、但其樣慥不覺悟、若有子細者、付其可書付也、

又令申云、有御申文者、院臨時被申ト書タラン如何、又院藏人如何、

仰云、其不然ハ無御申文ハ、臨時被申尻付又無詮云々、追可被勘也、

〔除目大成抄一〕正平十九年四月六日、於燈下靜一見之、依前關白經通所進也、此書除目之要樞、公務之管轄者也、朕以受彼一流之正說、殊執之進覽、尤爲報國之忠矣、

古事類苑

政治部十五

上編

補任上

補任ニハ勅任、奏任、判任、判補ノ別アリ、勅任トハ勅旨ヲ以テ任ズルヲ謂ヒ、奏任トハ太政官ノ奏聞ヲ經テ任ズルヲ謂ヒ、判任トハ式部省ニテ銓擬シテ、太政官ニ申シ、太政官ニテ任ズルヲ謂ヒ、判補トハ式部兵部ノ二省ニテ銓擬シ、太政官ニ申シ、而シテ後ニ補スルヲ謂フ、而シテ任ト補トノ別ハ、任ハ相當ノ位階アル官ニ謂ヒ、補ハ相當ノ位階ナキ職ニ謂フ、又轉任トハ、其官衙ノ內ニテ升進スルヲ謂ヒ、遷任トハ他ノ官衙ノ官ニ移ルヲ謂フ、初任トハ無緣ヨリ有緣ニ入ルヲ謂フ、

任官ノ時ハ、大臣預メ式部兵部ノ丞ヲ太政官ニ召シテ、任ズベキ人ノ歷名ヲ付シ、其後建禮門以南ニ於テ唱計ス、但シ參議以上ニ任ズベキ者ハ、唱計ノ限ニ在ラズ、既ニシテ參議以上昇リテ殿上ニ侍シ所司承明建禮二門ヲ開キ、大臣總テ除目ヲ以テ式兵二卿ニ付シ、卿之ヲ受ケテ更ニ輔ノ唱フベキ除目ヲ以テ轉ジテ輔ニ付シ、卿ハ親王ノ任官スベキ者ヲ唱ヘ、輔ハ其餘ノ勅奏任官ヲ唱ヘテ之ヲ任ズ、唱ヘラルヽ者乃チ拜舞シテ出ヅ、若シ式部省ニ於テ唱フル者ハ、大臣除目ノ簿ヲ省ノ輔丞ニ付シ、丞受ケテ本局ニ還リテ後、省掌任人ヲ引キテ入リ、錄其簿ヲ開キ唱ヘテ之ヲ任ズルナリ、尙ホ除目篇ヲ參看スベシ、

大臣ヲ任ズルニハ、初ニ兼宣旨アリテ預メ其旨ヲ諭シ、且ツ任ズベキ日ヲ詢ル、而シテ後ニ

名稱

南殿ニ於テ任大臣ノ節會アリテ、宣命ヲ以テ之ヲ任ズ、大中納言參議ハ除目ニテ任ズベキ官ナレド、任大臣ノ日ニ任ズルトキハ、同ジク之ヲ宣命ニ載スルナリ、其日新任ノ大臣及ビ其親族慶ヲ奏シ、且ツ藏人頭ヲシテ慶筵ヲ開カンコトヲ請ハシメ、大饗ノ事アリテ親王公卿其第ニ造ル、若シ新任ノ人藤原氏ナルトキハ、勸學院ノ學生、興福寺ノ僧徒來リテ之ヲ賀ス、又大臣ニ任ズル者ハ、再三固辭スルヲ以テ例トセリ、宜シク辭官篇ヲ參看スベシ、

又任大將アリ、而シテ任大將ニモ必ズ饗宴アリ、

〔伊呂波字類抄 不疊字〕補任

〔貞丈雜記 四官位〕一官を被仰付を任ずると云、兵庫頭に任ずる、伊勢守に任ずるなど丶云類也、職を被仰付をば補すると云、侍所別當に補する、藏人頭に補する 藏人所の役所は、御殿の内にあり、 など丶云類也、

〔朝野群載 六太政官〕外記史生請奏

太政官

請殊蒙天恩因准先例以刑部史生上毛野貞正被補任件史生紀經元不仕替狀

右謹檢故實、當局史生有闕之時、諸司史生之中、撰堪其職之者擧補、古今之例也、就中貞正頗携文筆、尤足採擇、望請天恩、因准先例、以件貞正被補任彼不仕替者、將令致記錄之功、仍勒事狀、謹請處分、

治暦四年十二月十六日　正六位上行權少外記文室朝臣 ○以下八人署名略

〔太平記 三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

或時相摸守 ○北條時賴 鶴岡ノ八幡宮ニ通夜シ給ケル曉、夢ニ衣冠正シクシタル老翁一人枕ニ立テ、政道ヲ直クシテ、世ヲ久ク保タント思ハヾ、心私ナク理ニ不暗青砥左衛門ヲ賞翫スベシト、諚ニ被示ト覺ヘテ、夢忽覺テケリ、相摸守夙ニ歸、近國ノ大庄八箇所、自筆ニ補任ヲ書テ、青砥左衛門ニゾ給ヒタリケル、青砥左衛門補任ヲ啓キ見テ、大ニ驚テ、是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大

庄給リ候ヤラント問奉リケレバ、夢想ニ依テ先且充行也ト答給フ、青砥左衞門頽ヲ振テ、〇中略則補任ヲゾ返シ進ゼケル、

〔伊呂波字類抄 ハ疊字〕拜任 〔同 ニ疊字〕任官

〔名目抄 諸公事言說〕拜任 ハイニン 拜官 ハイクワンル官ニ任ズヲ云也 任官 ニンクワン

〔名目抄詳注 諸公事言說〕拜官

五車韻瑞曰、說文曰、拜官曰除、去舊官就新官也、吏學指南曰、遷除、注改任曰遷、拜官曰除、

〔日本書紀 十九欽明〕天皇幼時、夢有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大、必有天下、寤驚遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、〇中略及至踐祚、拜大藏省、

〔日本書紀 二十七天智〕十年正月癸卯、是日以大友皇子拜太政大臣、

〔日本後紀 五桓武〕延暦十五年七月乙巳、右大臣正二位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩薨、〇中略天平神護初、叙從五位上、尋授從四位下、拜參議、

〔朝野群載 六神祇官〕神祇官 請特蒙天恩因准先例依年勞格勤次第轉任官人等狀

一請被以正六位上行少史伊伎宿禰致政拜任少祐闕事、〇中略

一請依親父儀時讓以正六位ロト部宿禰定景被拜任大史事、〇中略

長治二年閏月五日

〔古事記 上〕故是以其速須佐之男命、宮可造作之地、求出雲國、爾到坐須賀(此二字以音、下效此、)地而、詔之、吾來此地、我御心須賀須賀斯而、其地作宮坐、〇中略於是喚其足名椎神告言、汝者任我宮之首、且負名號稻田宮主須賀之八耳神、

〔古事記傳 九〕任を多麻と訓べき由は、〇中略まづ此字は、拜某官の拜と同く、與佐須と麻氣賜と米須と三の訓ある中に、與佐須は此に叶はず、又麻氣賜とも訓べからず、(麻氣は、京より他國の官に令罷意にて、即まから)

せを約めて、麻氣とは云なり、万葉に此言多し、みな部の官になりてゆくことにのみ云り、心を付て見べし、又史記南越傳に、天子微參也とあり、此訓にてマケはマカラセなることをさとるべし、然るを京官の任をも麻氣と訓は、みだりごとなり、米須と訓ぞ此は叶へる、米須は其人を召來て、其官を授くる意にて、司召と云是なり、顯宗紀に拜二山官一、推古紀に任二僧正僧都一、天武紀に拜レ造二高市大寺司一などあり、凡て上代には、本居に在る人を京に召て、官には任たまへりし故に、召と云し、其名目は後までものこれり、古今集雜部の詞書に、もろこしの判官にめされて云々とあるは、異國に遣すなれば、まけられてとあるべきを、めされてと有は違へるに似たれども、彼時代は既く麻氣と云名目は絶て、凡て米須といへりしなり、縣召と云も此に同じ、又いはゆる任大臣を、後撰集、榮花物語などに、大臣召とあるは、古意によくかなへる名目なりかし、かゝれば同任字も、其官によりて、皇國の言は異なるぞかし、さて此は、上に喚とあるが、此意に當る故に、此任字は、多禮と訓べきぞかし、

〔倭訓栞前與編三十六〕よさす　續紀宣命に見ゆ、日本紀に任ノ字命ノ字をよめり、さすノ反すなれば、寄に同じ、古事記に依もよめり、

〔古事記傳四十一〕與佐須とは、任字をも書て、事を其人に依任(ヨサマカセ)て、執行はしむる意なり、光仁天皇の藤原永手大臣の薨れしを悼坐る大命に、太政官之政乎波、誰任(ヨサシ)之加母罷伊麻須と詔へるも、誰に任せ置て身罷坐ぞとなり、又封字を訓も、其國の政を其人に依任(ヨサマカ)す意なり、言依(コトヨサス)てふ語は、此卷の下にも、續日本紀宣命式祝詞などにもあまた見えて、皆同じ意なり、書紀には勅任ともあり、又應神御卷に、任二大山守命一令レ掌二山川林野一などもあり、

〔類聚名義抄七文〕官(ミヤツカヘ／ツカマツル)　仕官(ミヤツカヘス)

〔下學集〕假官上俗下正

〔伊呂波字類抄見人事〕官(ミヤツカヘ)　官仕同

〔運歩色葉集見〕宮仕

〔易林本節用集美言辭〕宮仕(ミヤツカヒ)

〔倭訓栞中美編二十五〕みやづかへ　宦をよめり、宮仕の義なり、日本紀に出身をもよめり、

任官制

〔易林本節用集〕出仕（シユツシ）

〔令義解四選敍〕凡任官、大納言以上、左右大辨、八省卿、五衞府督、彈正尹、太宰帥勅任。（謂皇太子傅、官位高二於七省卿一、故准爲二勅任一也、）餘官奏任。（謂內外諸司主典以上、其軍團大毅亦爲二奏任一也、）主政、主帳、及家令等判任。（謂依二軍防令一、內舍人亦爲二判任一、其文學才伎長上亦同、）舍人、史生、使部、伴部、帳內、資人等、式部判補、

〔延喜式十一太政官〕凡天皇即位、講二仁王般若經一、（一代一講）設二百高座一、一日朝暮講畢、預任二行事司一、中納言一人、參議及辨各一人、五位二人、六位以下臨時定之、（五位以上奏任、六位以下申二大臣一任、）

〔江家次第四正月〕除目

凡勅任者

納言以下　參議以上　左右大辨　八省卿　東宮傅　彈正尹　太宰帥　六衞府督（○中略）

出羽城介（免任、介使、給二官符於秋田城一、）

鎭守府將軍

〔類聚三代格五〕太政官符

應三親王任二國守一事

上總國　常陸國　上野國

右撿二中納言從三位兼行左兵衞督淸原眞人夏野奏狀一偁、（○中略）伏聽二天裁一者、正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉レ勅依レ奏、但件等國守官位卑下、宜下改定二正四位下官一、以爲二勅任一、號稱中太守上、限以二一代一、不レ可二永例一、

天長三年九月六日

〔江家次第四正月〕除目淸書事

親王兼國又黃紙書二勅（親王兼國黃紙、常陸、上野、上總太守爲二勅任一、事見二天長官符一、）

〔職原抄下〕施藥院使司儀令

使（醫道四位已下任之、爲儒道重職也、○中略）

件職往古藤氏長者宣也、近代勅補歟、但不載除目、

〔令義解四選敍〕凡散位、身才劣弱、不堪理務者、式部判補諸司使部、（謂其出仕之道、進漸爲異、若先任職事者、不可復更補使部、伴部也、）

〔延喜式十八式部〕凡飛驒陸奧出羽及太宰府所管諸國人、皆不得補帳內職分位分資人、亦陸奧人不聽補雜色、

凡太宰帥大貳、并陸奧出羽按察使及守等傔仗者、申太政官補之、不得輙取白丁、若情願以子補之者、聽取一人、但身不赴任者不給之、

凡補諸宮舍人者、中宮入色一百五十人、外位一百人、白丁一百五十人、東宮入色四百人、外位一百人、白丁一百人、齋宮入色白丁各十人、其外位者隨解闕補之、但白丁舍人未敍之前、无故不上之替、聽補白丁、其敍位之後、依病不上并遷他色之替、以雜色人補之、

〔延喜式十八式部〕凡內外諸司、官掌、省掌、臺掌、職掌、坊掌、寮掌、使掌、司掌各二人、但中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正、中宮、修理等、並待本司移補之、自餘者判補之、

凡內外諸司、史生、官掌、省掌、臺掌、職掌、坊掌、寮掌、使掌、司掌、伊勢大神宮司、同度會神宮禰宜、賀茂二社禰宜祝、住吉神主、宇佐宮司祝、氣比神宮司、筑摩長等、以雜色人補之、並把笏、

〔延喜式二十八兵部〕凡隼人司史生五人、（權三人、但二人以扶省掌補之、）左右近衞府府生各六人、左右衞門府、左右兵衞府各四人、左右馬寮馬醫各二人、史生各四人、但六衞府府生、并馬寮馬醫史生待宣旨補任、自餘省補之、

凡左右馬兵庫等寮掌使部馬部、並省補之、

凡中宮職舍人待職許文、然後補、被管及兵庫寮史生使部、春宮坊舍人准此、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、（○中略）凡選任之人、奏任以上者、以名籍送太政官、判任

者、式部銓擬而送之、〈中略〉又畫工及主計主税筭師、雅樂諸師、如此之類、准官判任、

〔續日本紀 八元正〕養老三年四月乙酉、制、諸大小毅以上、其任與主政同、自今以後、爲判官任、

〔續日本紀考證 四元正〕爲判官任、〈續紀常作爲官判任、讀令主政主帳及家令等判任是也、〉

〔令義解 四選敍〕凡同司主典以上、不得用三等以上親、〈謂其非三等親者、縱得相隔、預任用也、〉

〔延喜式 十八式部〕凡諸衞府官人已下、并舍人、兼任諸國史生已上者、具注任日及計歷由、移兵部省、

〔延喜式 十八式部〕凡諸國郡司補任之後、皆移民部省、

〔令義解 四選敍〕凡初任官者、雖不滿日、皆給初任之祿、〈謂初任者、無祿人入有祿也、不滿日者、計任後日、不足給限、其兵衞者、雖是有祿、既非職事、若初任官者、亦入給例、即畫與解官、雖情狀殊職者、通計前日給之、不同初任之例、〉

〔延喜式 十八式部〕凡令稱初任者、是无祿任有祿、其有祿遷有祿者、不入初任之例、但別勅才伎長上諸司者任職事官、與初任同、〈貢人亦准此〉其在外之官人、遷任京官、會給祿者、聽入給例、〈謂正月七日會日以前上日闕身者〉

〔續日本紀 八元正〕養老三年八月己丑、有司處分、別勅才伎長上者任職事、貢〈○貢一本作員〉與初任同、

〔續日本紀考證 四元正〕貢與初任同、〈貢續紀常作員、不知有誤文、〉

〔令義解 七公式〕凡任授官位者、〈謂太政官任主典以上、及中務授五位以上、式部授六位以下之類也、〉所任授之司、皆具錄官位姓名、任授時年月、貫屬、年紀、造簿、〈其任官簿、除貫屬年紀、〉官人連署印記、若有轉任身死、及事故以理去任者、即於簿下朱書注之、

〔延喜式 十八式部〕凡諸王諸臣任太政大臣者、不得以親王爲左右大臣、但得任八省卿、諸臣任太政大臣者、不得以諸王爲左右大臣、親王任左大臣者、得以諸王爲右大臣、但親王諸臣不得爲左右、

〔江家次第 四正月〕除目

公卿

大納言以下、隨闕敍任、

參議

藏人頭每度闕被任、非參議大辨、近衞中將有年勞者、(以下久絕) 式部大輔爲侍讀者、五箇國舊吏政迹叶

格式散位三位經年勞者、

納言

大辨(左右大辨一度被任例五箇度)

宰相中將(丁度除目二人以上被任、近有其例、)

撿非違使別當

無兼官人一度二人任例、(藤季資綱)

無兼官人早任例(家賢能實雅俊)

大納言

依公卿勞(謂年限久者)

近代依位次被任、又依恩有無、

至大臣者以宣命任之、仍不入除目、

近衞大將

除目被任時、不設犧云云、

〔中右記〕天永三年十一月十八日辛未、攝政殿(○藤原忠實)今日有御上表事、(○中略)凡執柄人、近代未任太政大臣以前、先被辭大臣也、但忠仁公(○藤原良房)以後至廉義公(○藤原賴忠)不被辭、大入道(○藤原兼家)以後至大殿(○藤原師實)御時、必被辭本職之後、從前大臣被任太政大臣也、兼日被仰合、人々被申旨各々不同也、予(○藤原宗忠)密中云、昔例近代必不用也、大入道殿(○藤原兼家)御堂(○藤原道長)宇治殿(○藤原賴通)大殿(○藤原師實)御時例、尤可令用給也、被仰云、尤可然、唯付近代人々吉例、早可辭申右大臣也、是來月可任太政大臣之故、可忩

辭本職也者、仍今日有此御上表事也、

大入道殿（寛和二年七月十四日辭攝政、第二度表被辭中右大臣、作者兵部權大輔成忠、同十五日勅答被辭中右大臣、作者）

御堂（長和五年十二月七日辭攝政、第三度表被辭中左大臣、作者式部大輔廣業、同日勅答大內記義忠、）

宇治殿（康平三年六月廿三日令辭中左大臣、作者少弁實仲、同廿八日勅答、大內記正家、）

前二條〔賴通弟教通〕（延久元年八月十三日被辭左大臣、作者大內記成季、無勅答、被收了、）

大殿（永保三年正月十九日令辭中左大臣、作者右大弁正家、同日勅答大內記敦基、）

〔內裏式〕下任官式

辨官式部兵部率應任者候承明門外、（承明門宣陽門隨時便用、唯入自宣陽門、退仗不服儀服、）參議已上升侍殿上、少時近仗服中儀服陣階下、所司開承明建禮兩門、闈司分居承明門左右、大臣（若無大臣者、中納言已上亦得之、）喚舍人、舍人共稱唯、少納言（若用長樂門亦如此、）卽少納言進就版位、大臣宣、辨官（言）式部兵部（言）給歷名（氏）、令候人等率（氏）參來（止）宣（布）、少納言稱唯、退出傳宣、辨官稱唯、親王東西相分先入立、（應任文官者東、應任武官者西、又參議以上不在唱計之限、）少納言辨官二省卿輔率五位已上、丞錄率六位已下、左右相分參入、鎭行且正容儀、二省丞各持版位一枚、幷立南廊下、（若用長樂門、兵部卿可任者、序鍾進列立、）五位已上異位重行、大臣喚式部兵部二省、（式部稱唯、次喚兵部、）卿若輔稱唯、俱趨立東廊、式部先升自東階、大臣遣以除目付卿、受下自同階、以輔可唱之除目付輔、次兵部同前、俱復本所、訖大臣宣唱之、執除目者俱稱唯、式部卿唱丞名、稱唯、卿云、版位置之、丞稱唯、兵部復然、二省丞各一人持版位、供進、夾尋常版位南去二丈置之、（左右相去各二丈、就中間、先喚者就之、餘者逐量列立、）訖把笏復本所、式部卿就尋常版、唱之、親王稱唯就版位、（親王有不參者、代稱唯、）卿復本列而退出、親王拜舞退、輔復就版唱之、（若有參議以上者先唱之、不讓國次、）被唱者進就位列北面、以東西爲上、唱訖辨官兩輔等引出如入儀、（兵部亦同、）訖左右被任者俱拜舞退出、二省丞進取版出、若同日叙位任官者、叙位訖俱退出、所司更率應任者參入、行事如常、其大臣者以宣命任、不更用此式、（參議已上、就宣命任之、）

〔儀式 八〕內裏任官儀

其日中務置宣命版於尋常版以北一許丈、太政官差召使喚式兵兩省、丞錄率史生省掌等參入內裏、（史生持硏筥爲大等）經近衞陣入自日華門立版、訖共退出候同門外、于時大臣召二省丞、共入受應任者名簿退出、先是式兵兩省丞以下列立建禮門以南、（式部監物以北相去六許丈、以西爲上、兵部中務以北與式部相當而立、以東爲上、）式部丞到就列、兵部丞度馳道就列、訖丞目於錄、錄進受簿復列、喚省掌名、省掌稱唯、進受簿復列、錄命唱計、省掌稱唯唱計、（參議以上不在唱限）任人隨唱稱唯、趨進列立、（西面）唱訖五位以上先入、次丞已下率六位已下參入、（並用春花門）列立承明門下、（北面西上）兵部亦准此、（入自脩明門、北面東上、）于時參議已上升侍殿上、近仗服中儀服陣階下、（若入自宣陽門、不服儀服、）所司開承明建禮兩門、闈司二人分居承明門內左右、大臣喚舍人、（舍人在前、候承明門外屛幔東頭、其數七八人、）共稱唯、少納言代之、入自承明門東戶就版、（少納言預候屛幔東頭、）大臣宣、辨官（乎）、式部兵部（尙）給歷名（氏）參來（止）宣（倍）、少納言稱唯退出、立屛幔東頭北面宣如前、辨大夫稱唯、文武官應任參議已上先入而立、少納言辨二省卿輔率五位已上參入、錄一人立屛幔東端稱容止、丞錄率六位已下參入、（丞一人持版位、一人行且正容止、）各就行立標、二省丞持版者立南廊下、（若用長樂門、兵部率可被任者度馳道列立、）五位已上異位重行、大臣喚式兵二省、（式部稱唯、而後喚兵部、）卿親王任輔者代之、下付簿、及命置版、唱任親王等皆同、（親王任輔者代之、下付簿、及命置版、唱任親王等皆同、）若輔稱唯、俱趨立東廊、式部先昇自東階、大臣總以除目簿付卿、受下自階、以輔可唱之簿付輔、次兵部同前、俱復本所、訖大臣宣唱之、執簿者俱稱唯、式部卿喚丞名、稱唯、卿云、版置之、丞稱唯、兵部復然、二省丞各一人持版插尋常版位南去三許丈置之、（左右相去各二丈、就中爵尤貴者就之、）訖把笏復本所、式部卿尋常版唱之、親王稱唯就版、（其有不參者、錄代稱唯、）卿復本列而退出、親王拜舞退、輔復就版唱之、（若有參議已上兼國者先唱之、不據國次、）被唱者進就列、北面東西上、唱訖辨官兩輔等列出如入儀、訖左右被任者俱拜舞退出、二省丞進取版出、若同日敍位任官者、敍位訖俱退出、所司更率應任者參入、行事如常、

〔延喜式 十九式部〕任官

其日太政官預仰省令候、于時丞一人依召參入、（兵部共參、）大臣賜可任人歷名、其後於建禮門以南唱計任

人、〈參議已上不在唱限〉輔已下令持版位、相率入候承明門外、或於太政官廳及外記候廳唱之、〈事見儀式〉若於省唱者、大臣召省付除目簿、輔若丞受還本局、令史生授錄、丞命錄曰、令召省掌、錄稱唯、命史生喚省掌、史生稱唯、召省掌一聲、省掌稱唯、進就版位、丞命曰、率候人參來、省掌稱唯退出、卽引入、輔若丞命曰、唱之、錄起稱唯、開簿唱、被唱者稱唯、〈若不在者、省掌代稱唯、〉畢引退出、

〔延喜式 十一太政官〕凡內裏任官者、少納言弁各一人、率式部兵部行事、若於朝堂、卽外記史共預、〈事見儀式〉

〔延喜式 三十八掃部〕內裏任官裝束紫宸殿、如常、但案一脚立大臣座前、〈置除目料〉

〔侍中群要 八〕諸召

左仗座召〈與率下宣之儀同歟〉

除目召〈左近陣座〉

出宣仁門、著膝突、小揖、翩令有見廻之氣色、訖〈天〉召〈聞云、女房〉了、退還、若召一人〈ハ〉、唯伺其人召、更不見廻云々、

〔侍中群要 一〕初補闕事

被補藏人事、〈正月七日敍位以後除目以前、擇宜日被補也、或又御覽會次、女敍位次、〉出御晝御座、〈着御冠御直衣〉有仰、所別當大臣〈大納言有其例〉依召候御前、〈御座間〉孫廂座、〈先是藏人承仰、所管圖座一枚敷御座間長押下、又侍閒反疊摺綱、〉敷次召紙硯等、藏人經簀子敷、從上鄉右方置之、〈置紙色紙、仰出納令儲之、加紙屋紙三枚、御覽一合、置紙筆硯刀等、〉書了御覽返給、還退出於殿上、給頭若藏人、〈藏人仰、籤束〉賜之留於所庭、書宣旨、〈閣書於所〉其文云、姓名〈若藤姓名、若文章生得業生、〉宜爲藏人、年月日、近代無晝御座儀、頭奉口宣仰之、

官位姓名〈若蔭〉

右被別當左大臣〈近代或內侍宣〉偁、宣件人宜爲藏人者、

年月日　頭〈若藏人官位姓名奉〉

出納書宣旨、給左近陣、〈近代不給陣之〉

差御藏小舍人(部一人、下一人、)召遣、卽向其家令申只今參入之由、

酒肴　藤(匠錦)　(近代不定)

或當日參入、或撰吉日三箇日之內參入、卽宿侍昇殿人亦如此、但大臣昇殿可遣出納若所衆歟、近代不遣使、

補頭以下事(近代頭承勅語直以仰下)

孫廂南第四間敷圓座一枚、(燈樓反)所別當大臣參、著座了召紙筆、藏人經簀子敷持參、置大臣右方、(紙屋紙三枚、筆硯小刀等入御筥、)大臣定下藏人、藏人云々、仰出納宣旨書加署、(書例下宣旨於左近陣、)或頭以下於御前定之、以內侍宣書之、殿上人同之、童以名簿下給、其身參上日、藏人付簡不奏慶、或父祖候殿上者、相替令奏慶云々、

任官喚辭

〔令義解七公式〕凡授位任官之日喚辭、(謂在御所而授任之辭、其在官舍亦准此例也、)三位以上先名後姓、(謂假令喚云秦宿禰萬呂之類、)四位以下(謂五位以上也、)先姓後名、以外三位以上直稱姓、(謂直稱秦宿禰之類也、若右大臣以上稱官名、)四位先名後姓、五位先姓後名、(謂喚云秦宿禰萬呂之類也、)六位以下去姓稱名、(謂直言秦萬呂不稱宿禰也、卽授任之日、及以外皆通稱也、)唯於太政官三位以上稱大夫、四位稱姓、五位先名後姓、其於寮以上、(謂辨官以下也、)四位稱大夫、五位稱姓、六位以下稱姓名、司及中國以下五位稱大夫、(謂一位以下、通用此稱、)

〔延喜式十八式部〕凡拜官之日、其人見在、乍聞唱喚、不肯赴集、莫預參例、經百廿日錄名申之、若有故者、不在此限、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年十一月癸未、是日被任官者、多不會庭、省掌代之稱唯、於是詔式部兵部省掌始賜把笏、

補任狀

〔侍中群要一〕補頭以下事〇中略

〇〇〇宣旨書體

官位姓名

右被別當左大臣宣偁、件人宜爲藏人者、

年月日　　　　　　　　　　　　頭官位姓名奉（或五位六位藏人奉之）

官位姓名

右被別當左大臣宣偁、件人宜聽昇殿者、

年月日　　　　　　　　　　　　頭官位姓名奉

〔類聚符宣抄七〕右大臣宣、以民部少輔從五位上藤原朝臣菅雄、爲施藥院別當者、

貞觀二年五月廿九日　　　　　　少外記廣宗安人奉

〔菅家文章十狀〕文章生從八位下紀朝臣長谷雄

歲、件人希顏不休、點瓜須診、秀才之選、誠在斯人、仍充補如件、謹牒、

元慶三年十一月二十日　　　　　從五位上行式部少輔兼文章博士菅原朝臣

〔類聚符宣抄七〕十生陰孫正七位下多朝臣安邑

右被右大臣宣偁、奉勅、件人依大歌所申請、補別當多安邑任河內大掾之替已了、宜仰彼所者、（伊二十生近江門）

〔朝野群載十一〕補撿非違使別當二枚

仁和元年二月廿五日　　　　　　大外記高丘五常奉

大納言從三位左近衞大將春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、以參議正四位下行右衞門督源朝臣貞恆、爲撿非違使別當者、

寬平五年六月十五日　　　　　　右衞門權佐藤原朝臣弘道

〔類聚符宣抄七〕左史生礒部爲松

參議左大弁藤原大夫宣、左抄符預史生勝有統遷任大舍人少屬之替、以件爲松宜補之者、

長保元年二月五日　左大史多米朝臣國平奉

〔類聚符宣抄七〕右官掌笇部保理

右轉補左官掌尾張利茂死闕替

右官掌伴友成

右轉補左官掌紀貞清死闕替

宗我部秋時

右補右官掌笇部保理轉左替

太秦吉理

右補右官掌伴友成轉左替

參議左大弁源朝臣道方傳宣、左大臣宣、官掌等宜依件補任之者、

長和四年十一月十三日　左大史但波朝臣奉

〔朝野群載二十一雜文〕補保刀禰

右〇右一本作左京職符　九條二坊二保

常澄重方

右人補任刀禰職已畢、保內宜承知令執行之狀如件、故符

康和五年二月十三日　少進紀

大夫源朝臣

〔源平盛衰記三十三〕賴朝征夷將軍宣旨附康定關東下向事

去程ニ兵衞佐賴朝上洛不輒トテ、鎌倉ニ居ナガラ征夷大將軍ノ宣旨ヲ被下、其狀ニ云、

左辨官下　五畿內　東海　東山　北陸　山陰　山陽　南海　西海　已上諸國

早頼朝朝臣可令爲征夷大將軍事

使　左史生中原康定　右史生中原景家

右、左大臣藤原朝臣兼實宣、奉勅、從四位下行前右兵衞權佐源頼朝朝臣、可令爲征夷大將軍者、宜令承知依宣行之、

壽永二年八月日　　左大史小槻宿禰奉

左大辨藤原朝臣　在判トゾ被書下ケル

左史生康定、此院宣ヲ賜テ、九月四日關東ニ下著、兵衞佐ニ奉院宣、對面シテ勅定之趣ヲ申含、頼朝ノ返事承テ、同廿五日ニ康定上洛ス、

〔和簡禮經 九〕一補任狀事

下　常陸國吉田河原等郷定補預所職事

大舍人友恒

右人所定補如件、有限年貢以下色々所役等、任先例無懈怠可致其沙汰也、年々未進分、同令守沙汰、早速可令辨濟者、住人等宜承知、依件用之、不可違失、故下、

正應二年八月日　　左大史小槻宿禰在判

〔傳宣草 上〕延慶三年五月廿一日　宣旨

左兵衞少尉藤原家秀

宜任左衞門少尉

左兵衞少尉藤原家親

宜任右衞門少尉

奉宗弘

宜任右兵衛尉

權中納言藤原判奉

口。宣一紙（左兵衛尉家秀以下任官事）奉入之、早任仰詞可被下知之狀如件、

五月廿二日　　權中納言判

大外記局

文保元年三月四日　宣旨

正五位下清原眞人仲方

宜任助敎

正五位下清原眞人賴光

宜任直講

藏人頭左近衛權中將藤原實文奉

（追啓）助敎中原師世辭退替候也

口宣一紙

清原仲方同賴光等任官事

右職事仰詞、內々奉入如件、

三月四日　　左衛門督判

大外記局

〔康富記〕應永廿六年二月五日庚辰、大外記宗業眞人被聽內昇殿同被任少納言、被口。宣并局。宣。等取出、被見予之間、珍重之由、種々奉賀之、○中略

口宣案

上卿三條大納言
應永廿六年二月三日

大外記清原宗業眞人

宜令任少納言者、

藏人左衞門權佐藤原朝臣　宣光奉

局宣案

從四位下行大外記清原宗業眞人

正二位行權大納言藤原朝臣公光　宣奉

勅、件人宜令任少納言者、

應永廿六年二月三日　正四位下行大外記兼肥後守中原朝臣師胤奉

〔親長卿記〕文明三年十月四日、新大納言以書狀示送云、〇中略

正四位下安倍泰淸朝臣、宜任陰陽頭、可令宣下給之由、被仰下候也、謹言、

十月三日　敦秀

頭中將殿

陰陽頭安倍泰淸朝臣宜兼任天文博士、令宣下給之由、被仰下候也、謹言、

十月四日　敦秀

頭中將殿

彼兩官宜下事、可下知頭中將之由、嚴申候、書樣可爲此分候哉、兩官同日宣下書樣屑書ノ事は、先例不審候之間、如此可用他日由存候、

應奏勅許之後、依不具未能奏事始候而如此候、宣下事可仰職事之條、不可然歟之由存候、但今時節

充文

之儀候、内々唯可下知候哉、如何可勘給候、恐惶謹言、

十月四日　敬秀

〔延喜式（兵部二十八）〕凡補任武官番上以上者、移送本司、其式如左、

兵部省移某司

位姓名（年若干、某京人）元某司某官

右人某月日任（若番上把笏稱補）某司某官訖、仍移送如件、移到任用、故移、

年月日　錄位姓名

輔位姓

右署印訖即送本司、

〔北山抄（九羽林要抄）〕初任事

初任中少將者、下名之後、待兵部充文帶劍、其前不帶之、令奏慶賀之由、（至次之日、充文之有無、諸人不可必知、仍皆帶之、）

〔兵範記〕久壽三年二月五日丁丑、今日黃門殿（基實）○藤原可令拜賀給、（中納言、左衞門督、兩事重疊御慶也、○中略）午剋許、著束帶、具馬參入、于時殿下（忠通）○藤原相伴御座、勘解由小路烏丸殿、此間前駈等參會、（先例公卿被參入、今日不被召也、）本府一員、并步隨身等參入、下官仰待所司、令差文令取見參、（件差文、議昨日府年預持參之、）一員尉以下令候中門邊、步隨身五人召著元御隨身所座、差机饗、（政所勤之、出納役送、）尉以下部九人下給胡籙、（壹三腰、尉志府生等料、狩胡籙六腰、志長以步隨身五人料、）此間召使十人捧見參文來參、下官（信範）○平於中門廊取之、（召政所入之）先覽中納言殿、次覽殿下、即返給、文留之、次賜祿、各匹絹、著衣冠下家司於中門邊分給之、又兵部省持參移文、省官敍正、下官取之入省筥、先覽中納言殿、次殿下、文留御所、筥返給、省官以賜祿、省掌三人各匹絹、下部二人各布一段、（召使省掌祿等、用武藏御庄年貢六丈絹、布同前、）下家司等於中門邊分給之、省官等同退出、

充文書樣

公驗

兵部省移　左衛門府

正三位藤原朝臣基實

右人今月廿八日補任督訖、仍移送如件、

移到任用、故移、

久壽三年正月卅日　　正六位上錄伴朝臣季直

正六位上大丞源朝臣章盛

大輔正五位下藤原朝臣顯長

作文書白紙無裏紙等、本省印三所捺之、人宮持參之、

(山槐記)仁安二年二月十四日癸未、今日藏人右衛門權佐經房拜申也、藏人右衛門佐長申事〇中略今日不申、藏人方吉書、又不被向府、督許云々、兵部省移右衛門府、

正五位下藤原朝臣經房

右人去月卅日任權佐、仍移送如件、移到任用、故移、

仁安二年二月七日　　正六位上行少錄大江朝臣範重

正六位上行少丞卜部宿禰基忠

正三位行藤原朝臣在判　　從五位上行大輔藤原朝臣　　從五位上行權大輔藤原朝臣　　從五位上

行少輔兼伯耆守平朝臣　　從五位上行權少輔藤原朝臣

(延喜式十八式部)凡諸司番上把笏者、不與公驗、其舍人使部伴部之類、皆與公驗、其式如左、

式部省

位姓名年若干、某國某郡人、

右人元某色、今補某司某色、任爲公驗、

補籍

兼任

年月日　　　錄位姓名

補位姓名

右印署訖、告知本司、令附考帳、仍卽給與隨身爲驗、

〔續日本後紀 七 仁明〕承和五年二月癸卯、勅、齋院雜使四人、宜准二宮幷淳和院舍人等、與之公驗、嵯峨院勘籍廿人亦宜准此、

〔延喜式 十一 太政官〕凡出身之徒、勘籍有不合者、自非異能、不得輒改勘、

〔延喜式 十八 式部〕凡藥生十人之中、五人取白丁、勘籍補之、五人用入色、

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年四月壬戌、式部省言、承前之例、以諸勘籍人、補諸司番上諸衞府舍人、請言事由、尤爲出身、夫出身之難、自古而久、當今之世、勵易脫略、望請、先立限之外、悉經一選、補他色、奏可之、但外考補坊舍人、同舍人遷他色、及依理解却之類、每年卅〇一本作卅、人特聽出入、中宮后宮亦同此例、自今以後、立爲恒例、〇又見類聚三代格、本

〔伊呂波字類抄 疊字 計〕兼帶ケンタイ　兼任

〔名目抄 諸公事音〕兼任ケンニン　兼帶ケンタイ

〔名目抄詳注 諸公事音〕兼任

吏學指南曰、兼權、注、併管別職曰兼、時暫攝行曰權、

〔令義解 四 選敍〕凡任兩官以上者、一爲正、謂官位相當者爲正、若皆不相當者、以一高者爲正、餘皆爲兼、

〔延喜式 十八 式部〕凡大學諸博士、六位已下兼任諸國權博士、但先奏後補、典藥醫針博士准之、兼任權醫師、

〔續日本後紀 十二 仁明〕承和九年八月乙酉、大納言正二位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房抗表言、臣稟性愚蒙、聲華寂莫、陛下陳席不棄、故劒無遺、遂先時髦、頻登淸顯、未堪一職、兼帶四官、〇中略陸奧國新任守從五位下藤原朝臣大津、此良房之叔父也、雖皇家舊儀無有明制、而遙撿行

事、不異同官、嫌疑之門、實所可避、又三官以上有司執聞、蓋忌榮聚一門、寵歸一己、伏願停兼外秩、守拙内官、○中略 謹奉表以聞、不許之、

〔小右記〕治安元年七月廿八日辛丑、大外記文義云、今日可被下大將如舊之宣旨、可候内之由、關白殿被召仰、仍參內、爲令聞食案內者所令申也、晩景藏人弁章信來云、唯今被兼官如先宣旨了者、大將如先宣旨下、而不奏慶之由、見故殿御記、依貞信公命所被尋也、天慶□年初任右大臣之時事也 將曹正方參來云、大外記文義仰云、大將如先者、仰可差遣府生近衞一人之由了、章信云、件宣旨中納言道方奉下之、

〔山槐記〕仁安二年二月十一日庚辰、今日有任大臣○平清盛事、○中略 今日宣下事、尋取大外記類聚記之、○中略

正二位行大納言源朝臣雅通宣、奉勅、件人、宜如舊兼任右近大將者、

仁安二年二月十一日　　大率

〔有職問答二〕一兼官事

兼官あまた候人ハ、位署にハ當職を本に書て、兼官をバ次に書可申事候哉、又すゝむをさきに稱可申事候哉、

〔空穗物語田鶴の村鳥〕十三君をば、右大辨するふさと、大納言正三位兼行左近衞大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣眞賜、同宮參議從三位行右衞門督兼中宮大夫伊豫權守藤原朝臣朝盛、八月廿八日にあはせつ、○中略 右大辨かけづかさを右近少將式部省文章博士春宮のがくし、うちとうぐう院の殿上ゆるされたり、

〔伊勢物語下〕國のかみ、いつきの宮のかみかけたる、かりのつかひ有と聞て、○下略

〔源氏物語二十一乙女〕殿の舞姬は、惟光朝臣のつのかみにて左京大夫かけたる娘、かたちなどいとおかしげなる聞えあるをめす、

〔源氏物語五十一浮舟〕丈るべの内記は、丈きぶの少輔をなんかけたりける、いづ方もいづかたもこと

ごとしかるべきつかさながら、いとつきぐ〱しくひきあげなどしたるすがたもおかしかりけり、

〔平治物語三〕長田義朝討六波羅驗參事附大路渡被掛獄門事

尾張國住人長田四郎忠宗、子息先生景宗上洛シ、前左馬頭義朝幷鎌田兵衛政家ガ頸ヲ持參シテ、不次ノ賞ヲ可蒙由望申ケリ、○中略平大夫判官兼行、二條京極ノ千手堂ニ行向テ、二ノ頸ヲ請取テ、○中略左ノ獄門ノ樗ノ木ニゾ掛タリケル、何ナル者カシタリケン、左馬頭元ハ下野守タリシカバ、一首ノ歌ヲ書付タリ、

下野ハ紀伊守ニコソ成ニケレヨシトモ見ヘヌカケヅカサ哉

〔延喜式十八式部〕凡遷○遷當作選任者、奏任以上者、省注可用人名申送太政官、但官判任者、銓擬而申太政官、

〔延喜式十一太政官〕凡諸國一分已上、遙授兼任之輩、遷任他國幷京官者、早下官符停止本任、

〔延喜式十一太政官〕凡自京官遷任畿內之輩、雖未進本任解由、且聽向國、近江丹波准此、

〔延喜式十八式部〕凡勘解由使勘籍、書生及雅樂寮雜色生、自非次官以上許文、不得輒遷他色、

凡中宮春宮舍人、非有本司許文、不得遷他職、

〔延喜式二十八兵部〕凡武官帶次侍從遷任他官者、解由與不、移送中務省、

凡武官史生已上遷任文官者、解由到來之日、移送式部省、

〔續日本後紀十八仁明〕嘉祥元年三月辛巳、制、自外國官遷任京官、未預參前、更任外職、通計前歷、

〔類聚符宣抄八〕大藏少丞清原常松謹□

請被免本任放還之宣旨下式部省狀

右常松、去二月十四日任掃部允、而沈重病、未向任官之間、去四月廿八日遷任大藏少丞、望請、宣旨下式部省、被免件責、今注事狀謹言、

延喜十一年五月十五日　　大藏少丞清原常松

大藏少丞正六位上清原眞人常松

右被右大臣宣偁、件人去二月十四日任掃部允、而詔使依身病未到被寮之間、去四月廿八日遷任大藏丞、宜仰式部省、莫令責本任放還者、

同年六月十三日　　大外記菅原利蔭奉

仰式部少錄安野逸群了

〔朝野群載六太政官〕外記局擧

外記

請被特蒙天恩因准先例、依年勞倍勤幷成業勞、以正六位上行內藏少屬紀朝臣國元遷任式部民部錄中他官替狀

右得國元款狀偁、厥間者生居諸司之輩、不送幾年遷任式部民部錄、古今之例也、○中略望請天恩、因准先例、依件勞、以國元被遷任、將令知奉公之貴、仍勤事狀、謹請處分、

延久四年正月廿六日　　正六位上行權少外記紀朝臣季俊

〔官職秘抄上〕八省丞大少

民部

彈正忠、勘解由判官、少內記等爲重代輩、勸學院有官別當任之、自諸司助遷任例、菅原忠時、藤原宗廣、自兵部丞遷任例、藤原能貫、橘廣平、

〔故實拾要十〕轉任

是大臣以上ノ任官ノコトヲ云也、或內大臣ヨリ右大臣ニ轉リ、右大臣ヨリ左大臣ニ轉ルヲ轉任ト云也、尤自餘ノ任官ヲモ轉任ト云ヘドモ、凡ハ大臣以上ノ任官ニ用ル辭也、

〔貞丈雜記官位四〕一遷任とも轉任とも云ハ、別の官になる事也、役替也、

〔延喜式十一太政官〕凡少掾轉大掾、少目轉大目之類、鈔符連修一紙、太宰監典、諸國郡領亦准此、

〔延喜式十八式部〕凡大領闕處、以少領轉任、以今擬者爲少領、其大少領並闕、先擬少領、

〔官職秘抄上〕諸寮頭

內藏頭有二種

華族四位殿上人任之、〇中略自權頭轉任例、賴直、隆輔、自助轉任例、安方、孫世、

〔傳宣草上〕轉任

宣旨

右近少將藤原朝臣公敏

宜爲右

右宣旨、早可被下知之狀如件、

延慶三年十二月廿九日　右兵衞督判奉

〔本朝世紀〕久安五年三月廿八日庚戌、今日季成卿著仗座、久不出仕故也、

宣旨

撿非違使左衞門少志坂上兼成

右可爲大志

撿非違使右衞門少志佐伯義仲

右可爲左衞門少志

撿非違使左衞門府生佐伯國忠

右可爲右衞門少志

正二位行權大納言兼左近衞大將皇后宮大夫源朝臣雅定宣、奉勅、件人等、如右宜轉補者、

久安五年三月廿八日　大炊頭兼大外記主税權助助教加賀介中原朝臣師長奉

仁平二年二月廿五日庚寅、今日左少將行通可爲右少將之由、被下宣旨、

正四位下行左近衞權少將兼越前權介藤原朝臣行通

正二位行權中納言藤原朝臣季成宣、奉勅、件人宜爲右近衞權少將者、

仁平二年二月廿五日　少外記中原師尙〇尙一本作高奉

〔長興宿禰記〕文明八年五月十六日、大臣宣下也、日野前内府勝光公被轉任左大臣九條殿今日上表御辭退替也上卿勸修寺大納言敎秀卿、職事□□少外記實親等參陣也、彼公自去月比違例、所勞以外之間、轉任之儀准后御執奏云々、彼一流丞相初任美目之處、轉任重々面目哉、

〔宣胤卿記〕文明十二年三月十九日己亥、今日右大將殿〇藤原冬良令轉任左、給、德大寺大納言〇藤原實淳任右大將云々、

停任

〔官職知要中〕停任ヂヤウニン

停任とは、あやまりたる事ある人の官を停給ふ、輕罪之時は、或兼官ばかり停給ふもあるなり、

〔類聚符宣抄六〕左大臣宣、奉勅、權少外記大江遠兼　拜除之後其日漸久、而依有氏懃、不從萬務者、准之先例、理不容然、宜仰事由、令從事者、

天暦十一年四月廿五日　大外記御船宿禰傳說奉

復任

〔伊呂波字類抄不字〕復任

〔名目抄諸公事言說〕復任フクニン

〔名目抄詳注諸公事言說〕復任

除服出仕復任ナド、ツカフコト也、解官セラレテ又モトノ官ニ任ズルヲモ復任ト云フ、

〔延喜式式部十八〕凡郡司遭父母喪者、服闋之後、申官復任、若三年以上、不申復任、便補其替、權任之輩、亦得復任、

凡畿內郡司患解服解侍解等、聽復任本職、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月戊申、以太宰員外帥正二位藤原朝臣豐成、復爲右大臣、賜帶刀四十八人、

癸亥、勅曰、逆臣仲麻呂奏、右大臣藤原朝臣豐成不忠、故卽左降、今既知讒詐、復其官位、宜先日所下勅書官符等類、悉皆燒却、

〔本朝世紀〕久安三年十二月十六日丙午、被行復任事、權少外記惟宗長基覽勘文、式部省不參、兵部丞藤顯方參仕、賜宣旨、

可復任、

大炊寮　少允正六位上磯部宿禰貞康

主殿寮　少允正六位上淸原眞人定能

防鴨河使　主典正六位上坂上大宿禰兼成

久安三年十二月十六日

可復任、

左衞門府　少志正六位上坂上大宿禰兼成

兵庫寮　少允正六位上坂上大宿禰兼俊

久安三年十二月十六日

〔名目抄諸公事言說〕還任ゲンニン

〔官職知要中〕再任　還任　還補

再任とは、或は納言たりし人一度官を辭退して、又元の官をふたゝび任じ給ふ事あり、是を再任

還任

といふ、還任、これも上と同じ事なり、かへり任ずるの儀なり、還補とは、攝政關白たりし人、一度辭退し給ひてのち、又補攝關給ふをいふ也、或は是も再任ともみえたり、

〔北山抄 六 備忘略記〕左右大將還任事

仰兵部幷外記、自餘准之可知、

〔傳宣草 上〕還任

文保二年二月廿日　宣旨

前隼人正清原繁隆

宜還任

藏人少納言藤原資明

口宣一枚、清原繁隆隼人正還任事仰詞内々事入如件、

二月廿日

左衞門督判

大外記局

〔朝野群載 十一 廷尉〕檢非違使左衞門權少尉平恒任　平維盛　少尉源定宗

内大臣宣、奉勅、件人々、去八月十四日停任、宜如舊還任者、

長久四年十一月廿七日

大外記兼主税權助備後權介中原

〔本朝世紀〕仁平元年九月四日辛丑、今夜藏人左衞門尉源清季敍爵、前左衞門佐忠親如舊還任、又如元還補藏人云々、

左衞門佐藤原朝臣忠親

右、大臣宣、奉勅、件人、今年四月十八日解却所帶職、宜如舊令還任者、

仁平元年九月四日

大炊頭兼大外記主税權助助教中原朝臣師業奉

〔吾妻鏡 六〕文治二年二月二日庚戌、二位家〈○源賴朝〉就諸國宰史事、條々有令申京都給事、
一前對馬守親光可被還任由事〈○中略〉
以上被付經房卿云云

〔園太曆〕貞和四年二月廿八日、今朝三條前內府〈○實忠〉弁內府〈○藤原公清〉被送狀續左了、〈○中略〉抑又任大臣節會之日、其人參內還宣旨同日時者、節會之間府生番長改著裝束候歟、其間に府生奏聞事更無所見候乎、然者自專補之條、近代之例も不惡候歟、任大臣之人、節會日不參內者、臨時事候歟、參內之人則具府生例、推天、今度雖籠居候、同日蒙大將還宣旨之上者、不奏聞之條若可宜候哉、任大臣後日蒙還宣旨者、心閑奏聞可宜候乎、今案比興候、此治安以後例、還宣旨大略後日候歟、但階上ニハ、節會以前被奏府生事候けり、還宣旨同日也、是ハ若內々被仰職事候ける歟、任槐及還宣旨以前被奏之條ハ、不叶理候歟、兼又所別當事、朝中にて候しか、四品之後ハ無沙汰候、懈怠之至候、自今も可改補歟之由存候、但壽永承元簡不載別當候、唯隨身所と書て、載府生以下候、若日來別當不候之子細候て不載歟と存候へば、大納言大將之時ニ、別當政所當內にて加縣簡候、任大臣以後は必可有にて候歟、雖無其人、隨身所別當とばかりにても可書候歟、其も不然候、以之案候へば、任槐以後無沙汰候歟と存候如何、又如騎射當府事、職事年預等仰御狀、大臣以後ハ雖爲府中事、大將とハ不書候乎、若方將などには、猶大將とや書候らん、尫弱之不審恐入候、千万又々可啓候、誠恐謹言、
四月廿八日　公清

〔後愚昧記〕永德元年七月廿三日、今日任大臣節會也、〈○中略〉大將〈○足利義滿〉還宣旨今夜有之、內弁仰大外記〈師香〉大外記持參花亭云々、

〔公卿補任 中御門〕寶永七年
權大納言　〈位第一〉正二位源豐忠〈四十五〉〈後八月九日還任、十二月廿四日拜賀著陣〉

推任

前權大納言　正二位源豐忠 四十五 後八月九日還任權大納言、

推任とは、こなたより申上ざるに、上として賞してなされしをいふ、

〔官職知要 中〕推任

〔諸家傳 中山〕孝親公

天正六年正月十三日　六十七歲 敍從一位准大臣宣旨

依所勞危急、可被推任內大臣由被仰之、然而固辭、仍准大臣可令朝參之由宣下、

〔資勝卿記〕寬永三年九月十三日壬午、今日大御所樣、〇德川家康 相國將軍樣〇家康子秀忠 左大臣御推任、陣儀、上卿兩傳奏也、御裝束ニテ兩頭辨幷大外記ナド宣旨持參、砂金拜領、土御門中務御身固、大御所樣御輪御簾中宮亮永慶御沓中宮大進經廣、將軍樣御簾飛鳥井雅胤朝臣、御沓有純、如例長橋局ヨリ御參內、御還女院樣へ御成、次施藥院へ還御、

〔公卿補任 中御門〕享保四年

內大臣　正二位藤公全 四十二 十一月晦日任、(推任)同日辭、

享保八年

內大臣　正二位藤隆賀 七十二 二月一日任、(推任)同月四日辭、

〔公卿補任 桃園〕寶曆元年

前參議　正三位藤重豐 四十九 十二月十六日任權中納言(推任)

〔公卿補任 光格〕寬政九年

非參議　正三位安泰榮 四十 陰陽頭、十二月廿六日任修理大夫、(推任)

〔大江俊矩記〕文化十一年二月一日癸亥、宮司回覽之切紙一通、於中宮御所三室戶少進而上被傳之、即日令返却今城家了、如左、

文化十一年正月廿八日宣
大江俊矩
兼中宮權少進(推任)
藏事定成

〔諸家傳今城〕定國
元治元年九月廿八日　任參議(中將如元)推任
去四月東照宮奉幣使下向之砌、有彼是紛擾之儀、焦慮不少、有其勞之間、以格別之思召、參議(中將如元)推任被宣下、

直任

〔官職知要中〕直任(ヂキニン)
直任とは、超官次第任ずる也、准大臣直任太政大臣、左右大臣、二三位中將直に中納言に任給ひ、僧官にては、先可任律師を直に僧都に任ずるをいふなり、

兼宣旨

〔貞丈雜記四官位〕一兼宣旨の事、大臣に任ずべき人に、兼日に何ノ日大臣に任じ玉ふべき由の宣旨を賜るを云也、平家物語卷一に、おなじき十一月九日の日兼宣旨をかうぶらせ給ひて、同十四日太政大臣にあがらせ給ふ云々是なり、さて當日に至て任大臣の節會を行れ、宣命をよみて大臣に任せらるゝ也、

〔公卿補任後一條〕寛仁五年(○治安元年)
右大臣　正二位藤實資(六十五)　七月廿五日任、去九日蒙兼宣旨、廿八日右大將如元、八月廿九日兼皇太子傅、

〔水左記〕承暦四年八月一日辛卯、早旦博陸(○藤原師實)以御書狀被示給云、唯今可參者、卽參入、依御物忌、以人令申案内、被示云、今日可有大臣宣旨也、内府(○藤原信長)蒙太政大臣宣旨、民部卿(○源俊家)春宮大夫(○藤原能長)共可蒙大臣宣旨云々、於大將者、追可被下宣旨、皇后宮大夫(○源顯房)蒙天氣歟、是依大事、爲申此旨、

所逢宴内也、又可蒙大臣宣旨之人被召之時、前々何樣哉、内竪歟如何者、予答申云、故右大臣殿(〇源師房)被蒙大臣宣旨之時、内竪爲使所被召也者、頃之歸、申時許、民部卿春宮大夫參内、被蒙大臣宣旨了云云、又内府可轉任太政大臣之由、頭弁爲勅使被仰云々、

(殿曆)康和二年七月一日丙寅、著陣、其次蒙大臣宣旨、(〇藤原忠實)今日次第先著裝束、次參内、路次第自東洞院至中御門、折西至大宮、折北至陽明門、相伴公卿二位中納言、左兵衞督、右大辨、左大辨、殿上人頭中將有家基隆是也、是等人自車下後予(〇忠實)又下、入自南一間、行路中自匣小路西者行、北小路經左衞門幷左兵衞陣等、南折至床子座前、下沓入敷政門、後以隨身令問剋限、即入自宣仁門、著宜陽殿奧座、(大納言座第二也)其座以南爲上、頃之立座著陣、又奧座云々、頃之頭中將仰云、可任右大臣日時簡申者、仰承予揖、中將還則立座退出間、辨以下著床子座、予經敷政門前橋至橋東下、北向、當上臈辨揖、退出道如本、有出立儀、如常、路如元還後、不脫裝束、即行大饗之定、以御堂、宇治殿幷大殿之御例、於爲房朝臣令書件定文、又令擇申日時、陰陽師道言泰長等是也、定間有酒饌事、件間著座公卿、民部卿、權大納言、二位中納言、左兵衞督、宰相源中將、右大辨、左大辨、大藏卿、著座末殿上人、左近中將家政、少納言實明也、

(中右記)天永三年十二月八日辛卯、今日殿下(〇藤原忠實)太政大臣宣旨可下也、(中略)殿下被談仰云、太政大臣宣旨下之日、相逢勅使之時、御堂(〇藤原道長)幷宇治殿(〇藤原頼通)令著布袴給、是依高年御歟、故大殿(〇藤原師實)令著束帶給也、仍今日我所著束帶也、尤可然之由申也、

又此勅使、多竹子姪公卿被仰下也、御堂御時ハ攝政内大臣(宇治〇道長子頼通)爲御使、(兼出物御馬、是依ニ大臣也、)宇治御時ハ、大宮右大臣殿、(左衞門督時〇藤原俊家、)(〇藤原)大殿御時ハ此右大將(〇中納言時、家忠、師實二子、)前二條殿御時ハ、中納言忠家卿、皆子也、祿女裝束也、今度中納言中將依當其仁令參也者、幼主御時、或母儀上東門院、或太上皇被下此宣旨也、

〔玉海〕長寛二年閏十月十七日戊戌、此日權大納言經宗卿并下官〈○藤原兼實〉奉可任大臣之兼宣旨、〈權大納言任右大臣、余任内大臣、〉下官自昨日候殿下〈○藤原基實〉御所、〈高倉殿〉今日有御上表事、〈辭、令補余也、〉〈○中略〉申刻計、向六角東洞院亭、戌刻内豎來、召文章博士長光朝臣申之、答承畢之由、權大納言退出之後參内、〈先例或同時承之、或前後承之、申殿下之處、前後可承之、仍尋問後退出參内也、〉前駈八人、〈五位六人、六位二人、〉扈從公卿宗家雅賴等卿也、殿上人左少將定能、少納言顯信、侍從俊定等也、下自中門廊、〈定能獻沓〉於門外乘車、依公卿來也、卽參内、入自右衛門陣、〈押小路内裏西面、杖座在西也、〉著右仗奧座、則藏人頭左中辨親範朝臣來、仰云、可成給内大臣、日時可擇申者、余目之、頭辨退歸、次余經本道退出歸家、

〔平家物語 一〕しゝの谷の事

同じき廿五日、〈○嘉應二年十月〉院の殿上にてぞ御げんぷく〈○高倉〉の御定は有ける、攝政殿〈○藤原基房〉さてもわたらせたまふべきならねば、同じき十一月〈○公卿補任作十二月、一恐二誤、〉十九日の日、かねてせんじをかうふらせ給ひて、同じき十四日、太政大臣にあがらせ給ふ、

〔玉海〕安元元年十一月十日丁巳、左大將師長卿可蒙可任内大臣之兼宣旨云々、十一日戊午、信季語曰、昨日參内、見兼宣旨之間事、戌刻左將軍參陣、前駈六人、〈先例八人、今度六人、〉扈從殿上人、右少將成經、侍從成宗〈並成親卿息也〉等云々、先例〈一家例也〉公卿扈從、今度不然、隨身如恒、將軍先著奧座、于時頭弁長方朝臣、仰可任大臣之日可擇申之由、卽將軍退出、於家被定大饗雜事、

〔任太政大臣記〕建仁四年〈○元久元年〉十二月十日戊戌、今日太政大臣兼宣旨也、勅使中納言中將也、院主典代來召云々、申刻參院、先例相親本家之納言爲勅使也、以寢殿東庇三ヶ間爲其座、卷廂簾、不懸母屋簾、立亘四尺屏風、南間東西妻敷高麗帖一枚、其上敷東京茵、爲勅使座、北間敷同帖爲予〈○藤原兼經〉座、〈不敷茵〉中間不敷疊、廣筵如例、南間供燈、公卿座如例、戌刻、勅使中納言中將歸來云々、余著束帶排座北屏風出居其座、以長兼朝臣召勅使、勅使昇中門内方、經簀子透渡殿等跪寢殿東妻戸前簀子、余目

之、入件間經我座就予前傳勅語、（其詞、可任太政大臣日時勘申上也、）余仰勅報、（其詞、畏奏不有事候、殊歡止慇中奉由也、）勅使退居我座後、余目之、勅使著座、（當座）次宰相中將取祿持來、（女裝束也、裳唐衣濃袴等、）余置笏取之、目中納言、中納言進來、予授祿、中納言取之、經本路進前庭再拜退出、歸參院、爲奏勅報旨也、次撤勅使座、次予出居實簀、權大納言兼良、權中納言資實、左大弁親經、宰相中將良平出座、先召長兼朝臣、仰大饗日時可勘申之由、即插日時（陰陽頭在）一人（宣旨）日於杖、持來覽之、予見了留文、長兼取空杖退下、次又召長兼朝臣、仰硯懷紙可持參之由、長兼退去、即參上著座實子也、不數間座、藏人頭成數之歟、職事康宗持來硯懷紙、置長兼前、（藏人頭執筆時、近例如此、）予自懷中取出例文、（大饗文治二通也、）披之、與長兼書之、畢置折敷覽之、予取文返給折敷、見定文了、卷加日時禮紙中、授權大納言、公卿等次第取傳各見之、又取傳返上也、此間中納言中將自院歸來著座、予授日時定文於長兼、了取之副笏退下、康宗參上撤硯、次居饗、（高坏主人六本、他公卿三本、）陪膳仲基朝臣、次一獻、（長俊朝臣持參盃、）次居汁、（余外他公卿鋪鍛居之、）次中上下著、次二獻、（如初、）次居汁、（中上下著、）次三獻、（如初、）次居菓子、（六本、內也、）次居署預粥、不待居了食之、次諸卿饗退去、余入簾中事了、今夜始料理所以隨身所爲其座、行事家司著之、（長兼依爲職事不著之云々、）今夜賜御教書於諸國、而依卒爾自兼日催之、是近代之例也、

〔明月記〕承元二年七月二日、任大臣兼宣旨日也、（晴、）○中略 酉時許、以兩隨參八條殿、（女院御所、○大納言殿自今朝御坐、藤原良輔）於二棟南面簾中見參、被待公卿之間也、內豎早參云々、俄而左大弁六角三位（成家）參入、即御裝束、乘燭之程、令出二棟南面西妻戶給、公卿自下立列屏前、（西上、）次令下中門內沓脫給、（予御沓、○藤原定家）伊時朝臣基定等扈從、攝公卿上腐、令過給、予（○藤原定家）褰御車簾、基定取御下襲、此間兩隨也、經東洞院五條、高倉四條、東洞院三條坊門町、自二條陣入左衛門陣、入宣仁門代著奧座、大弁同著、頭弁來仰如例、大弁起、次大納言殿起令退出給、自路六角中納言（親經）參會、令入八條殿給了、次又出客亭、先是公卿座裝束了、御座、（橫座、元公卿座、中門公卿座北也、弘廂南遣戶殿內也、）兩卿端、三位奧、予基定著中門廊座、（副壁入中門廊、車寄妻戶著之、）次右衛門權佐經高引卒陰陽師二人、（宣平、晴光、）參、諸大夫立切燈臺、置硯進日時勘文、經高取之進御前、御覽了置之、次諸大夫二

人、置掌燈、次經高持硯參御前、依仰書定文、(主人云々、持例文給、)書了進之、御覽了卽返、公卿次第見下、次又返上之、此間殿上人起座了、此後居前物等、不見其事退出、

〔園太曆〕(任相國宣旨事)貞和四年十月廿日、兼宣旨、○(藤原公賢)頗洒掃客亭、(端座上東京茵)設相待人々、戌剋許、右宰相中將來、其後良久勅使可來之由內々示之、祗候仙洞云々、今暫經可來歟之旨內々令示之、右衛門督遲來也、亥斜人來、此間藏人勘解由次官時經來、予著裝束、(高階業重奉仕云々)

奉行家司記(按察入道相代書之)

貞和四年十月廿日癸未、今日任太政大臣兼宣旨日也、仍自早旦庭上敷砂、堂上令掃除、上達部座障子以下少々有修補事、寢殿五箇間幷東西妻戸垂翠簾、南面及西面出几帳帷、(東西妻戸不出之、爲主人出座御途故也、)公卿座三箇間、(如例)南面三箇間卷翠簾、御座上西方懸複翠簾、如例、奧座西第一間、高麗緣疊一枚敷之、爲主人御座、端座二三間敷連同疊、第二間之疊上(西頰邊)設東府茵、爲勅使座、座上下立高燈臺各一本、舉常燈歟、今度不敷弘筵、不立屛風、正安御例也、中門廊侍屋各舉燈臺、侍屋簡辛櫃以下如例、(但近來不儲之、無沙汰人故也、)及亥斜右衛門督殿(忠季)右宰相中將殿、(實村)幷陰陽助安倍親宣朝臣等參入、春宮大夫殿被召御裝束、勅使藏人勘解由次官平時經、(正安故山本殿任太政大臣之時、勅使頭左大弁經守朝臣也、)祗候仙洞、剋限內々可承存之由令申候間、卽令著御裝束、○註略　左馬助高階業重奉仕、先之內々令相待給之由、被仰遣時經許、卽參上、此間春宮大夫殿、右衛門督殿、右宰相中將殿等著公卿座給、○註略　勅使參上、暫相待御出座、歸立便宜所、主人出座給、其儀春宮大夫殿先起御座、進寢殿東南角簾下、跪指笏褰東面妻戸御簾、主人令出給、大夫殿不起座、聊退引直御裾、主人入上達部座西第一間、自御座前令著給、(御揖如例、)此間相公羽林平伏、金吾可令蹲居給也、無沙汰、忘却歟、平懷御體也、春宮大夫殿可有御復座也、而於御前御蹲居令過東方給、是爲御催促懈怠事歟、其後家司前宮內權大輔藤原光熙入廊北妻戸參御前、是申勅使參候由歟、此條不可然、聞勅使參候由有御出座者也、此上直出逢參上可蒙御

命也、今先參上、相違御所案之由有仰、光凞出侍廊屛戸、謁勅使、(早參、內々、堂上出座以前、地下、立中門下、待申也、次出也、)下勅使氣色、光凞升中門外沓脫、入車寄戸、經簀子弘廂西行、蹲居御前間南廂、伺御目、主人仰云、此方へ、光凞承仰、喚平公卿座前南廂來行廊西面簀子、降切妻(戸階)、降沓脫、仰此趣、退出中門外、勅使引裙持笏入中門、升切妻沓脫、西簀子北行、公卿座前西行、入主人御著座當間、跪御前申云、可任賜太政大臣日時令勘申(由)、主人正笏微唯、仰令示可著座之由給、勅使出南面廂、更入西第二間、著茵、東方(西面押上之軾也)座、此間路頭可起座也、然大夫殿者自御應役時先退座給、於中門子妻戸內、跪搢笏令取祿給、光凞人作妻戸傳獻之、(御衣二、白張之上衣、兼置內々、置之間、爲下部也、)大夫殿取之、同南廊西行、入主人御著座間、(西方一間、座無、參)置祿於主人御前、歸退、拔笏、右廻經本路退、子妻戸邊給、次右衞門督殿同退給、右宰相中將殿無御退之儀、如何、(公卿各起座、爲勅使拜也、)次主人自取祿、目勅使云々、起座自座前直參進主人御前、主人頗下座授祿給、勅使賜祿、(不搢笏、御前獻)出主人御著座當間、降公卿座幷南面階、(此間光凞參上、東面出御妻戸、御座之、主人起座入、件妻戸給、爲避勅使拜也、)於中門西砌外、(北面、以祿挿)二拜退出、次光凞撤勅使座、(主人入御之時、置御座、退出之次、可撤之、不然)次又光凞參上、褰御簾、主人於著座間前、光凞跪御前退去、次召奉行家司光凞參上、主人仰陰陽師可召之由、陰陽師安倍親宜、(束帶、持笏、)入中門廊東面北妻戸、西行著主人御座前、(北面、此所敷疊子、仍著座、公卿座前南面廂也、不用座也、)次光凞持參切燈臺、(取燈、如打敷、)參上、置親宜前退、次前出羽守藤原永季持參油(坏、居打敷、)居燈臺退去、次光凞持參硯、(筆一管、墨一丁、筆二管、水入等如常、硯蓋左方置紙二三枚押折置之、)次親宜摺墨染筆、主人仰云、任太政大臣日時勘申々、親宜密々自懷中取出日時勘文、光凞參進取件勘文、副笏參上、主人御前獻之、主人披見之、有懸紙、(立紙、持懸紙、披見也、人々同之、)

擇申　任太政大臣日時

今月廿二日乙酉　時亥

貞和四年十月廿日　陰陽助安倍親宜

主人御覽了、目大夫殿給、大夫殿揖起座、自我座進前、參進主人御前、賜件勘文、取副笏復座、置笏取

上、披懸紙見勘文、見了傳右衞門督殿、次第見了、至宰相中將殿見了、次第傳上、大夫殿取之取副笏、參主人御前令返上給、了御復座、此間主人目親宣令退、次主人召光照令下日時勘文給、後日仰云、先下勘文、次可令退陰陽助也、而今日此儀相違、

永季光照等參上、撤燈臺硯等、主人令起座給、此間大夫殿參進寢東面妻戶御簾、其儀如初、右宰相中將平伏如例、其後次第起座退出、

〔後深心院關白記〕永德元年六月廿六日庚辰、今日右大將(義滿○足利)兼任大臣兼宣旨、酉剋參內、於一條邊伺見之、前駈四人、隨身如例、衞府六七人、此內五位一人、扈從公卿洞院大納言(略○中)等連軒、大將著陣、諸卿同著陣云々、召仰之後、退出之處、可室上之由有召、於泉殿盃酌數獻云々、入夜退出、於里第定大饗雜事、

〔定家朝臣記〕康平五年四月十一日戊子、左府(藤原○教通)獻辭左大將狀給、兼被奏按內、仍依請由以左中將信宗朝臣被仰之云々、申剋頭弁參內府殿、(藤原○師實)申有召由、卽令參內、蒙大將軍宣旨、晚頭令退出給、

廿二日己亥、今日有任大將(師實)事、

〔中右記〕長承四年(○保延元年)二月二日丙午、入夜依召參東三條、大殿(藤原○忠實)關白殿(藤原○忠通)令渡給、今日大納言(藤原○賴長)依可蒙大將宣旨給也、去除目之比、左大臣(藤原○家忠)被辭申左大將也、(中略○)自內內豎來、大納言召之由來申、藏人弁資信奉之、申承之由出立給、(時大殿仰云、大臣之後任大將之時、以內豎不召、職事來召也、)前駈六人、殿上人二人相從(藤原親隆朝臣、雅國、)參內給、於陣座藏人弁資信來仰云、可成給大將、日次可撰申者、卽令退出給、

〔玉海〕壽永二年四月二日丙午、行向大將亭、(藤原○實定)其間隆職宿禰來云々、來五日任大臣一定云々、依不可儲饗祿、不可有兼宣旨云々、

〔公卿補任安德〕壽永二年

大納言　正二位藤實定(左大將、四月五日任內大臣、并兼大將宣旨、)

兼將宣旨

召仰

〔公卿補任 後陽成〕文保三年〇元應元年
大臣於陣宣下例　從一位　源有房 六十九 六月廿八日任、元前權大納言、無兼宣旨、無節會、無宣命、以口宣於陣宣下、是依急病也、元暦元、實定公還任之例也、

〔續史愚抄 後小松〕嘉慶二年五月廿六日己亥、此日被行任大臣節會、○中略 左大臣實時、元內大臣 右大臣源具通、元權大納言、右大將如元、內大臣藤原經嗣、元權大納言、左大將 新任兩大臣無兼宣旨饗祿等、

〔名目抄〕臨時諸公事 召仰 ヘシノオホセ 此事臣下諸事有之、行事之時召仰、謂、大臣初任兼宣旨之召仰、

〔小右記〕治安元年七月廿四日丁酉、兩宰相終日行事、按察大納言被過右大弁、相從藏人弁章信以謂白御消息、傳按察云、明日大臣召事可行、今日可有召仰者、令申今日參入可仰由了、　廿五日戊戌、今日任大臣、太政大臣公季、左大臣賴通、關白右大臣實資、內大臣教通、大納言賴宗、能信、

〔玉蘂〕建暦元年九月廿五日、今日坊門大納言信清卿申拜賀、則著陣奏任大臣召仰、退出、定大饗雜事云々、

〔公卿補任 花園〕文保二年
有大饗息任右大臣　右大臣　正二位藤家定 六曾 八月十五日召仰、同廿四日任、

〔公卿補任 花園〕正和四年
服暇人任大臣例　內大臣　正二位藤實泰 四十七 三月十三日任、無召仰、
正和五年
內大臣　從一位藤公顯 四十四 十月廿二日任、元前權大納言、前右大將、無饗祿、無日又不及召仰云々、

任大臣儀

〔內裏式 下〕任官式
大臣者以宣命任之、○中略 其儀開門、即大臣 若無大臣者、中納言以上行事、 於殿上喚舍人、稱唯、少納言入立、大臣宣、召刀禰、少納言稱唯出傳宣、式部率刀禰入、五位以上入自承明門、列殿庭、六位以下入自建禮門、列承明門外、次應任者參入、先是大臣以宣命文奉覽訖、至此喚堪宣命參議已上一人、在座上 稱唯升自東階受宣命文就位、若有大臣還轉者、行事畢下自東階、

就列、宣命大夫立東廊、待大臣就列、而後進就版、宣制云、天皇我詔旨良麻止勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、刀禰共稱唯再拜、更宣云、食國之法止定賜部留國法隨、先立先立止其姓名乎某官任賜久止勅布天皇大御命乎衆聞食止宣、臨時變改、無定詞、刀禰等共稱唯再拜退出、訖被任者拜舞退出、有其親族者、於日華門以東拜舞、

〔儀式 八〕內裏任官儀

其大臣者以宣命任之、中略○其儀也、所司開門、大臣若無大臣者、參議已上行事、了、於殿上喚舍人、舍人稱唯、少納言入立、大臣宣、召刀禰、少納言稱唯出傳宣、式部率刀禰入、五位以上入承明門、列立殿庭、六位以下自建禮門列立承明門外、次應任者參入、先是大臣以宣命文奏覽、訖至此喚堪宣命參議已上人、在庭之列、上昇自東階、受宣命文就位、若有大臣遷轉者、行事訖、降自東階、就列立、宣命大夫立東廊、待大臣就列、而後進就、宣制云、天皇我詔旨良麻止勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、刀禰稱唯再拜、更宣云、食國之法止定賜部留國法隨、先立先立毛其姓名乎其官任賜久止勅布天皇大御命乎衆聞食止宣、臨時變改、無定用、刀禰等共稱唯再拜退出、訖被任者拜舞退出、

〔江家次第 四正月〕除目

至大臣者、以宣命任之、仍不入除目、

〔江家次第 二十〕任太政大臣事

前一日、大臣奉仰、仰外記可催諸司由、仰弁裝束事、當日裝束司奉仕上下裝束、式部立標、中務置宣命版、大臣以下著陣、隨文帶、螺鈿劍、仰內弁、一上若不仰之、隨一上、頗季仲卿、宣命總云々、仰宣命旨奏草、又奏清書、返給、預內記令候、內弁於仗座豫定宣命使、參議右兵衛督俊明、○本作明說、內弁著靴、不下式筥、召外記問所司具否、大舍人候哉、刀禰候哉、仰云、令候、諸卿著外弁引陣、諸衛將佐、丸鞆帶、壺胡籙、檢非違使佐、平胡籙、蒔繪劍、靴、內弁立軒廊、內侍出、內弁取副宣命於笏、著殿上兀子、廊、就兀子、路經于敷、開門、舍人掲、闈司著、二人、內弁召舍人、二、大舍人稱唯、少納言就版、內弁宣召刀禰、少納言退召之、群臣列立、異位重行、東上北面、內弁召參議一人、賜宣命、宣命使下立軒廊、第一間立、內弁下殿、先歸向階、次與使揖、揖、加列、內弁自大臣列後下、而復之、他准此、經宣命使自列前著

版位前二段、每段群臣再拜、宣命使〈左副〉復列、〈被上方列二本列〉群臣退閉門、

任大臣裝束

前一日敷砂

左衛門入自長樂門、右衛門入自永安門、敷砂訖閉門、

當日早朝撤去東西炬屋、〈此文脱撤去東、云々、然而東西共可撤去歟、〉東置日華門南腋、西置殿西壇下、次上南殿御格子、次撤布障子、〈件御障子近代無之〉酒掃殿上等類如常、

額東次間東柱南北行及南庇打廻臺、懸御簾於母屋東面并東切妻南庇六間、

南廂以北傍御簾北行、立大宋御屏風、〈西面〉

今案、母屋北端、不及御簾障子七尺許不立御屏風、自北枚南妻内侍可出入之故也、

母屋南柱南面四間東西引立同御屏風、〈南面〉

今案、額西間開御路、

四箇間御屏風西南北引立同御屏風、〈東面〉其内額間裝飾大床子御座、〈敷繧繝帖、四角置鎮子、其上立大床子二脚東西置、其上敷菅圓〉

〈置一枚、〉御帳乾角附北障子立遶大宋御屏風、其中敷小疊立朱漆倚子、爲御粧物所、

今案、大床子御座南設平敷御座繧繝端疊等、

東屏風西敷兩〈○兩一本作繧〉面端帖一枚、爲執柄座、〈南北妻〉

東第三間東柱西北角各去二許尺、立兀子一脚、爲内弁座、

今案、承德二年〈○按、此年無任大臣、翌三年亦無任大臣、然承德二年恐康和二年誤歟、〉任大臣之日、大納言俊明爲内弁、裝束司依記文立兀子於第三間、而故攝政於簾中被示内弁云、可下兀子、仍内弁自引下兀子、立第二間、〈北向〉

左近陣前小庭立班幔二行、〈一行起自紫宸殿東面北階南蓋竟中、一行其東幔柱南去三許尺小西進立柱、引竟宜陽殿西廂、〉宜陽殿西廂南面引同幔、移鈴印辛櫃置其内、

承明建禮兩門前、差南去東西行張斑幔各二條、長樂永安兩門前、差北進各張同幔一條、

承明門東西內兩腋、各鋪蘆蓆（近代用小筵）其上各置草墪、爲闈司座（北向）

中務置宣命版於尋常版北一丈（入自日華門置之）

式部入自永安門立行立標

尋常版南七尺東折二丈五尺立親王標、南立大臣標、次大納言標、次中納言標（以七尺爲間）東去八尺南折二尺、立三位參議標、次非參議三位標、次王四位參議標、次四位參議標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標（以八尺爲間）

尋常版西二丈五尺南折三丈五尺、立王四位五位標、次臣四位標、次五位標（其丈尺准東）

尋常版東去三丈五尺立任人標、親王標南去七尺立太政大臣標、其南大臣標、次大納言標、次中納言標、次三位參議標、次四位參議標（並以七尺爲間）

長樂門外東廊壇上設外弁公卿座、壇下設弁少納言以下座、如恒、

雨儀

弁少納言以下座設壇上、命日不立宣陽殿西廂內弁兀子、宣陽殿南一二三間（北上西面）立四位以下標立

承明門左右廊、左自西第二間立（西上北面）右自東第二間立（東上北面）

雨儀丈尺、宣陽殿西廂宣命版位東去二尺親王標、東去三尺五寸大臣標、東去三尺五寸大納言標、東去一尺五寸、更南去三尺中納言標、其南去四尺、更東去二尺三位參議標、其南去五尺散三位標、南去三尺、東折一尺四位參議標、承明門東西壇上東西第二間立王四位五位臣四位標、第三間立臣五位標、右亦准此、

任大臣事

撰吉日召擬任人令申可任日（前一月許歟）前一日上卿奉勅、仰外記令誡所司、仰弁令裝束、預置宣命版、當

日仰宣命旨、大臣奏宣命、(以次上卿仰内弁、奏内弁仰可行、)奏草及清書如常、(返給、)參議以上皆着此宣命、(錄官不給、以別除目被行、)其後給内記令候於仗座、豫定宣命使參議、(或參議一人、或大弁、)天皇御南殿、(出御儀如例、)内弁著靴、王卿著外弁、近仗陣階下、(立陣時以下、帶弓箭、著靴、)諸衞各立、中務式部彈正入自春華修明門、立承明門東西、内弁取副宣命於笏、進立軒廊西一間、(不必著宣命版、兀子、)内侍臨檻、大臣參上著南廂第二間(西柱下)兀子、(面北、)開門、(開承明建禮兩門、不開長樂永安兩門、)闈司著承明門左右座、大臣喚舍人、(二聲、)少納言就版、大臣宣、喚刀禰、少納言稱唯退出召之、公卿參上立標、(入自承明門東扉、其儀行、)侍從相分列立東西、内弁召參議一人、(或宣召之、不開之時、或以笏示之、於陣頭仰其人、召宰相中將之時、若左乃近衞乃司於保以寸介云々、召大弁之時、右乃大以於保止毛弁乃司、)參議微音稱唯出列、經軒廊東二間、自貫子敷西進立内弁後、(長押下、)内弁授宣命、參議受之、下殿立軒廊西第一間北邊、(或立三間云々、)内弁退下、於東階下還向揖、(南例無此還揖、而延久元年立后、内弁源内府依九條殿說有此揖、其後有上閤之時、自列後歟、無上閤之時、加之、左府又閤此儀、同二年太政大臣召日有此揖、見重明記、)向參議小揖、參議答揖、内弁出軒廊東一間加庭中列、(自大臣列後加之、以次上卿亦自其列後加之、)宣命使出同間就宣命版位、(若日華門北廊南向揖、西揖、經列前就宣命使版、)宣制一段、(群臣再拜、以上任人不拜、)又宣制一段、(群臣拜如初、或經列東云々、)宣命使經列西幷南復本位、王卿以下左廻退出自承明門、更自宣陽門入著陣座、新任人立列、逢新任標拜舞退出、新任人豫參入候使所、不立列、闈司還閉門、近仗退也、

新任大臣參弓場殿令奏慶賀、(多付頭中將令申拜舞、被源左相府付頭弁藏人被申之、職事可被奏、)其次令奏上達部等仁御酒給、(四條記曰、上達部等仁一盃給牟云々、可用上說歟、)仰勅許由、(仰聞食、)又向陣可懸新任大臣饗祿由、仰上卿、上卿仰外記令傳仰彈正撿非違使等、大臣參宮宮奏慶、次大臣退出、(師尹大臣出自敷政門云々、)

御前儀

召使當外記局北職曹司、召使夾道分立、外記史少納言弁(弁史在右、)下臈為先、分立左衞門陣屏邊幷外記西方、大臣以下出建春門暫留立、(門外北面、)諸卿經前列立、(西上、)參議以上下臈為先、自路中庭、(垂經、)外記史弁少納言同前行、召使立前道、謝垂陽明門、史外記弁少納言等留立、(北方人留立左近衞府門東、南方人留立左兵衞府門東、)參議以上經其中行過、當左兵衞府小門、少倚道北留立、(東上南面、)大臣行過之後、弁少納言等列立、(在北弁少納言、自史外記前進、)

(東方、在南、弁少納言趁度北方同行進、顧北佇立參議次、去參議西四許丈、東上南面、)史外記一列立西方、(東面南上、)大臣不至陽明門當四五尺、右廻西面拱、納言以下左廻而出、納言以下次第如之、(召使等留門内、列立如常、或公卿東面厭行、大臣出後南面、又弁少納言先立、外記史前、東面南上、大臣出後改立、南面東上云々、)

承暦四年八月十四日、新任人皆依召參入、

實季卿　師忠卿　伊房卿等也

宣命使俊明卿兩段再拜之後、任人暫留拜舞退出云云、不解劒(依夜歟)入、前例解劒留庭、退出之後、陣官取劒云云、

〔夕拜備急至要抄下〕一任大臣節會

召仰(日次本所定之)　官外記　大納言著陣　仰詞(可成賜大臣、日時可擇申、)

當日　日次(可問本所)　參議　上卿(一上不參者、上首可仰之、其間内弁)　近衛將(左右)　弁　少納言　闈司

内記(宣命料)　官外記　内侍扶持(出御時)　次將　召内侍(五位藏人扶持之)　南殿御裝束(裝束司奉仕之)

召仰(其日可有任大臣事之由、召仰所司等、)　仰宣命趣(任先例可定申、書折紙獻中、)

〔柱史抄(下臨時)〕任大臣事

當日上卿著陣、召内記仰云、以左大臣爲太政大臣、以右大臣爲左大臣、以某爲大納言、以某爲中納言、以某爲參議、宣命可草進者、大中納言轉正員事、若不被仰者、可尋申上卿也、(若多人之時、上卿書別紙賜内記者例也、)即成草參進内覽、奏下如恒、清書覆奏之後有節會、其儀同立后、若三位大納言任大臣宣命爾ハ、官ニ高久位卑クヤ可在トテ授從二位等例也、

〔朝野群載(十二内記)〕任大臣

天皇我詔旨良万止宣大命乎、親王諸王諸臣百官等天下公民衆聞食止宣、食國乃法止定賜比行賜倍留國法隨仁、先立々々止右大臣正二位藤原忠平朝臣乎左大臣官爾任賜布、又宣久、大納言正三位藤

原定方朝臣波、於朕天近親毛爾在、又可仕奉支次毛爾在爾依天奈牟右大臣官爾治賜久止勅布天皇大命乎
衆聞食止宣、
〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月庚寅、詔曰、今勅久、太政官能大臣方奉仕倍伎人乃侍坐時仁
方、必其官乎授賜物仁在、是以朕師大臣禪師能道鏡○中略朕乎守多比助賜乎見禮方、○中略是能太政大臣乃
官乎授末都流仁方敢多比奈牟可止奈毛念、故是以太政大臣禪師能位乎授末都流止勅御命乎諸聞食止宣、○中略詔文
武百官、令拜賀太政大臣禪師、
〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年正月甲子、詔曰、今勅久、掛畏岐近淡海乃大津宮仁天下所知行之天
皇天智我○御世爾奉侍流之藤原大臣鎌足○復後乃藤原大臣不比等爾○不賜天在留志乃比己止乃書爾勅天
在久、子孫乃淨久明伎心乎以天朝廷爾奉侍波牟乎波必治賜牟、其繼方絕不賜止勅天在我故爾、今藤原
永手朝臣爾右大臣之官授賜止勅天皇御命乎諸聞食止宣、以大納言從二位藤原朝臣永手爲右大
臣、
〔文德實錄九〕天安元年二月丁亥、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、大納言從二位源朝臣信
爲左大臣、大納言正三位藤原朝臣良相爲右大臣、宣制曰、天皇我詔旨良万止勅御命乎親王諸王諸臣
百官人等天下公民衆聞食止宣不、右大臣正二位藤原良房朝臣波、朕之外舅那利、又稚親王止大坐時
與利、助導支供奉禮留所毛安利、今毛又忠貞留心乎持天、食國乃天下乃政乎相安奈比申賜比、助奉留事毛漸
久那利、古人有言利、德止之無不酬止毛奈聞食須、而今所在乃官波、掛畏支先帝乃治賜留所那利、朕未有
所酬、是以殊爾太政大臣乃官爾上賜比治賜、又大納言從二位源信朝臣毛朕之伯父那利、亦舊故毛有
爾依天毛奈、殊爾左大臣乃官爾任賜不、大納言正三位藤原良相朝臣乎波右大臣乃官爾任賜止久勅布天
皇御命乎衆聞食止宣、
〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年正月十三日丙寅、於紫宸殿前拜大臣以下參議以上、天皇御簾中聽事、策。

命。曰、天皇我詔旨良麻止勅命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、比年乃間、國家毛弊衰太禮波、公費在倍岐政波行給波之止所念止毛、食國之法止定行給部留法隨仁先立先立止正三位藤原氏宗朝臣波、御代御代爾公務乎日夜止不云勤勞奉仕爾依天奈毛右大臣官爾上賜任賜布、又宣久、繼々奉仕倍岐第止之天奈毛正三位源融朝臣、從三位藤原基經朝臣乎大納言官爾、從三位源多朝臣、從三位藤原常行朝臣乎中納言官爾、正四位下源朝臣勤、正四位下在原朝臣行平、正四位下藤原朝臣良世乎參議爾任賜久止勅布天皇我大命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、天皇御紫宸殿、喚公卿及百官於殿庭、策拜右大臣正二位藤原朝臣基經爲太政大臣、公卿百僚拜舞而罷、策命曰、天皇我詔旨良麻止勅御命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、右大臣正二位藤原基經朝臣波、朕之親舅奈利、忠貞心乎持以御世御世興利天下政乎相安奈奈比助奉事母久奈利奴、又朕未及初載之時興利、輔導崇護供奉禮留所母安利、因茲掛畏太上天皇乃〇清和詔命乎持天、攝政乃職爾事與佐之治賜倍利、朕我食國乎平久安久天照之治聞食須故波、此大臣之力奈利、而所帶官波攝政乃職爾波不相當止、頃年參加利大坐都、今掛畏太上天皇乃詔旨爾毛、職波貴天宮波賤天波也、久年乎歷倍岐太政官乃其人止波、最此卿乎可謂止勅御命母安利支、掛畏岐御命乃任仁上給治給幸止、去春夏間興利仰給大坐而、大臣乃懇爾加志許末利辭讓申仁依天、今末天仁延來禮利、今畏岐本御意早果行倍岐物奈利止仰給不御命母安利、故是以太政大臣官爾上給比治賜久止勅、但攝政之職波、今母彌登登爾勤奉仕禮止勅御命乎衆聞食止宣、

〔法住寺相國記〕正暦二年九月七日癸卯、申一剋參入、暫在淑景舍、同二剋中納言藤顯光卿令奏宣命草、清書之間、尤良久也、宣命已訖、以予〇藤原爲光爲太政大臣、以大納言源重信卿爲右大臣、以權大納言藤道兼卿爲內大臣、以中納言重光、權中納言藤道長等卿爲權大納言、以參議藤道賴伊周爲權中納言、以從三位藤道綱爲參議、中納言顯光卿內辨、參入上卿、任人外、中納言源保光、藤公季、伊陟等卿、參

遠源時中、藤安親、同時光、同惟忠、實賢等朝臣等也、顯光卿內辨之后早退出、是先年□□□依

臨乘燭、無留御前、到一條□頭之大臣以下來集、予降自南階、予先昇著南廂西第三間、（賓、是垣下親王座也、）次右

大臣昇著東第二間、（西面）次內大臣同昇入、右府後著、（西面）次納言以下昇同階、自南簀子進入、自西一間著

南廂第三間半以西、（取上南面一行、先是家大夫十二人參進、撩列、立南庭上官後、各著座之後、近衞官人代舉、）右大辨平惟仲、左中辨源扶義、權左

中辨藤忠輔等朝臣、少納言源能遠、同道方、藤時方、右中辨源俊賢、右少辨藤爲任、（左少辨信順依觸穢不參）昇自西

渡殿、著西廂、（東面南上）大外記中原朝臣致時、大春日仲明、少外記小槻善言、多米國定、左大史多米宿禰國

平、穴太愛親、右大史肥田惟近、小槻奉親、左少史丹波奉定、坂上是光、右少史安部茂忠、阿蘇有隣等、昇

西對巽階、著東座、（北上對座如常）前山城守敦忠朝臣、以右大臣前簀薦陪膳、次越後權守元忠朝臣以內大臣

前簀薦同陪膳、各赤木机二脚、菓子干物生物窪坏物等各四種、次納言以下料、諸大夫各執簀薦机等

立、（各赤木一脚二種物、已上白絹面、）次辨少納言黑柿机赤絹面、（無簀薦）次史外記（檀木机赤絹面）共羞了、予執盃進勸右大臣、了

著東第二間、（北面）前近江守親信朝臣以机立予前、當一大納言机巽合角、（前日內大臣消息云、先例主人座、納言座上南面著之、此事如何、可隨家定、右經事云、主人先例北面外方著、然間垣下親王勸盃之後著座、當大納言座北面、主人已停親王上也、于時移北座南面著歟、而此間垣下錯座、可無勸盃親王、然則何憂大納言著上座、）仍可

著北面者、後聞右大臣內大臣主人座皆從之云云、二獻之后羞飯汁物等、四五獻後召祿事、春宮亮藤

棟政朝臣、右近少將源理、（兼少納言）散位藤原朝臣伊相、齋院長官紀朝臣忠道、（史外記）各自南簀子敷進候階

間、仰各可奉仕祿事之由、奉仰退出、敷巡之後、降簀子敷、諸大夫以圓座敷之、次羞穩座物、

一兩巡後給史生祿、（如例）

次史外記（大夫外記史紅綺衾一領、六位各白疋絹、）

次辨少納言祿如常、

　中辨以下、給祿之後列立庭中、

次納言以下祿如常、

次尊者祿(加二紫苑色細長各一領一)、
先日内大臣消息云、康保四年清愼公任太政大臣之日加平口
次赤出物(一疋各匹)
次近衛官人卅五人被匹絹
尊者兩人降自南階
事訖引率到右府、次内大臣第、供饗已及明旦云云、

〔權記〕正暦二年九月七日、任大臣事、○中略宣命使立標下宣制、次第不見之、
天皇我詔旨良万止勅御命乎、親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、太政大臣乃官爾波、攝政正二位藤原道隆朝臣乎可任奈利、而謙讓心深之天内大臣乃官をも辭申天、此般猶令昇進天彼心爾違ぬべし、右大臣從一位藤原爲光朝臣波、數代爾歷仕天朝乃重臣利とあ、仍殊爾太政大臣乃官仁上給比詔賜布、正二位行大納言源朝臣波、可供奉支次爾有爾依天、右大臣乃官爾任賜布、正二位行權大納言藤原道兼朝臣波、朕之親舅なり、朝恩を可蒙支人仁那留爾依天那、殊爾内大臣乃官爾任賜布、又正二位行權大納言藤原濟信朝臣乎大納言乃官爾、正三位行權中納言藤原公季朝臣乎中納言乃官爾、參議從三位藤原朝臣乎權中納言乃官爾、參議從三位藤原伊周朝臣乎權中納言乃官爾、從三位藤原道綱朝臣乎參議乃官爾任賜と久勅布天皇我御命乎衆聞食と宣、
正暦二年九月七日

〔左經記〕寛仁元年十一月廿七日辛酉、攝政殿(○藤原賴通)親自令參大殿(○藤原道長父)給、令下申太政大臣仁可奉成宣旨給、卽有奉出物云々、(馬一匹)　十二月四日戊辰、大殿令任太政大臣給、以午刻被行事者、是日南殿藏司懸御簾、(内匠寮打之)掃部司立大床子御屏風等、並敷筵疊等、皆如先例、又主殿寮斑幔立度右近陣等庭幷宜陽殿代前東對南面庭幷左近陣前等、(東對皇太后宮御座、仍不立西面)外弁裝束如常、中務置宣命版

位式部立標、又掃部司南殿第三間立兀子一脚、（内弁料、並南立之、）宜陽殿不立兀子、（内弁必不着、仍不立歟、）承明門内東西腋、掃部司敷草墪各一脚、（料欵司）巳剋左大臣（○藤原顯光）被參、令奏宣命草、下給之後、又被奏清書、（書紙入筥、）同下給、著靴履、被徘徊軒廊邊之間、中宮大夫以下、引弁少納言史外記等、被著外弁、左右近陣南階東西、中少將等著靴履、負壺胡籙、（立陣、）內侍臨檻、內弁著殿上兀子、（經實子、）開門、闈司進著承明門東西草墪、內弁召舍人、（二音、）內豎稱唯、少納言廣政參入立版、內弁宣、刀禰召、（せ）廣政唯退出、立南門砌（北面、）召群卿、（此間右大臣進參入加立、右衛門督同進加立、）群卿次第入立標下、侍從同入立、（標下、未立、須立定後召之、而召之間立之失也、）右兵衛督列昇自西階、經實子立內弁後、內弁以左手授宣命使、挾笏取之廻下、暫立軒廊、內弁起兀子、經實子下、加立庭列、（源大納言上、右大臣下、與剌入、更經右大臣後加立、而右大臣前立加、大失也、）次使□宣命版、（途作法如例、）宣制一段、群臣再拜、又一段再拜、（須再拜前參議開聞之、又一拜之、是大失也、）舉使經列上、加立本標、次群臣次第退出、（如例入）歸著陣座、此間太政大臣經南階前、參殿南戶前、令頭右中弁奏慶、頭右中弁歸出、先中被慶、昇殿之由、次立御前、申聞食之由、退出畢、（須仰聞食之由、拜舞之後、更可申昇殿事、而聞食之由、已可有事、仍有定、御前之、）殿下稱唯、舞踏畢、令參御前給、（殿上、太政官昇殿、并清、御前宣命之間、引被參大殿、大宮御方、宣御前在所、被候御共、仍□殿□是爲被仰昇殿之由歟、）頃之令退出給、（令頭右中弁奏□以被免之由、次右中弁可免宣旨、之由□□□□臣々々召外記、仰此由、又召左衛門督佐實、隨身御之、）令參大宮御方給、令啓慶由給、（拜舞、）次令參東宮給、同令啓慶給、（拜舞、有）即令退出、頃之攝政殿率左大臣以下諸卿少納言弁外記史等、自敷政門并右衛門陣出給、（依無御前所、）到直御門、左大臣東面南上（仁）立、大納言以下史以上逆西面南上（仁）立、次第揖退出、前駈雜色等從主進出引率令參小二條殿給、列立東中門外、（大□所立中□中、大納言以下一列、南面西上、外記史一列、南面西上、但顯史等鴈横云々、）一各出後、大殿下立南階西邊、次一々入立南庭、（西上北面、）諸卿一列、次少納言弁、次外記史立定、主人一度再拜、畢大殿無揖讓禮、直昇著外座、（大殿令昇給之間、攝政殿不經揖程起立給、）次攝政殿令昇給間著外座、（與大殿御所二間許相隔、令着給、）次左大臣昇、令著奥座給、右大臣以下次第昇著座、（座西上南面、參議座南北相分著之、）次弁少納言次第昇、從南面腋階著東廂座、（西面南上、）次外記史昇自南渡殿階、著同渡殿座、（西上南北對座、但外記北史南、）次大殿顧進上后定給、次去東五尺許敷菅圓座一枚、攝政殿同

進上令著給、（並北面、親王座、）程次々第敷贊薦、立赤木机等、居物皆如先例、二獻粉熟、三獻飯汁、（汁燒炷）四獻又汁、（鵄燒物盛合一）五六巡、召錄事、（少納言弁座實經朝臣、經親、外記史座頼任、爲盛、各近居南簀子敷、）蒙仰各著座、行戸第、（兼敷弁少納言座前菅圓座二枚、爲錄事座、四位座當權弁座敷之、五位座當廳政敷之、）次又爲盛等著史外記上、巡行戸第、兩三盃之後、醫頭之史外記祿、次弁少納言祿、次召伶歌人於階下、有御遊、次下立砌下、祿懸頸一々歸昇、此間盃酌屢巡、次有牽出物、（攝政殿馬一匹、鷹一聯、左右大臣各馬匹、）一次上達部祿、次第退出、

今夜御裝束、寢殿南廂一遂設座、（客四上南面、下臈中納言、弁宰相相分南北著之、）東廂設弁少納言座、（南上西面）東對南庭立酒部幄、又東西廊前庭引葺幔、如常、今日公卿上官列立東中門外、大殿下立南階西邊之後、攝政殿入自幔門、立庭中、次左大臣諸卿同以入立、上官同入、立定再拜、大臣令揖讓間、攝政殿居庭上、不經幾程與立給、時人云、上古未聞事也者、

〔永昌記〕保安三年十二月十七日壬寅、今日任大臣節會也、依召參院、（依爲節會用途方、）被仰節會間事、又申云、內辨誰人可奉仕哉、新任大臣不可然、按察大納言被申障、左衞門督能實可宜歟、早可令催者、又關白（○藤原忠通）爲左大將下臈、寛仁永長可列上之由被下宣旨、康和可列官次第者、各勞淺極位之時事歟、於今度者、關白之位、任天延口年康平八年之例等、可被加上階級歟、院宣又早可載宣命、又有由緒、清和御宇融大臣於朕爲近親之由見宣命、彼朕丞相爲四等親、今度相准、又院宣左右相計可仰、次向左右大將（○藤原家忠、源有仁、）亭、各爲訪申也、次參內、令催諸卿、左衞門督能實、右衞門督忠敎等以下兩三參陣、左衞門督移著端座、予宜下云、內辨仕ヘ、左金吾被唯、其次右大臣雅實ヲ太政大臣冒上給、關白內大臣ヲ左大臣冒、依位次從一位ニ增給、大納言家忠ヲ右大臣冒上給、各依官次、權大納言有仁朝臣ヘ依爲近親內大臣冒、又中納言能實朝臣ヘ大納言ニ、宗忠朝臣（○元權中納言）能俊朝臣、忠敎朝臣等ヘ權大納言冒、權中納言顯雅朝臣、實隆朝臣ハ中納言冒、參議俊忠朝臣、實行朝臣、顯隆朝臣、長忠朝臣等ハ權中納言冒、左近中將實能朝臣モ權中納言冒、師時朝臣、爲隆朝臣等ハ參議官ニ任給由令草宣命、內辨召

大內記宗光仰之、又召大外記師遠、被問諸司具否、良久宗光覽宣命草、卽被內覽、予於旅障示、次進參弓場殿、招予被奏覽宣命、予於鬼間覽之、還申人數巨多、無先例歟、次返給被仰淸書、(略)○中內匠寮令立障子、內藏寮令懸御簾東母屋幷廂南西戶間、同懸□掃部寮南廂敷滿長筵、額間敷綾毯代、立大床子二脚(南面西上)件廂立渡大宋御屛風、(南面)東南折寄御簾立之、件廂御簾前立內辨兀子、件兀子裝束司所知行也、(戌亥角)立遶御屛風二帖、其內敷筵一枚、立御倚子御所、(略)○中掃部女醫令懸御帳帷、秉燭內辨著兀子、(軒廊西一間建著宣陽殿兀子)之、內侍臨檻、內辨著堂上兀子、(南庭第二間)次開門、(承明門、建禮門)闈司著草墩、次內辨召舍人、(二音)少納言俊隆參、內辨宣、刀禰召、諸卿率參、內辨召參議右近中將宗輔、給宣命、(賁子敷、立內辨後、內辨授宣命、自座下給)之、又宣制一段、公卿再拜、宣命使加本列、公卿歸出、闈司起座、近仗分退、閉門會了、程參弓場殿、(著內侍下臈衣)(例舞、有文書聲、)師時卿先拜舞、予又舞踏、藏人高基奏之、次參御宿所、申慶賀、於立部下再拜、先是新任大臣等被申慶賀、藏人辨顯頼奏之、舞踏如例、可給近□祿之由宣下云云、次右府以下退出、可有出立儀、近□多依入夜陰、無其儀、隨無存知、先予前行、然而人々稱及夜陰、無其儀、諸卿行向右府亭、至中門外、並列立、諸卿一列、辨少納言一列、政官一列、(予爲大納言儀、宗忠經大將、至大納言、予時有物也、不具、仍中納新右府、可謂近之由、令謙讓、仍藏人列官寮先出書□事)(方明朝臣騎馬前驅、大辨可騎歟旨、□先騎任參議、後騎大辨、其例歟、)入自中門、入幔門、(花山院北面)列立前庭、主人下立、壹行取履、一獻主人勸盃、盛家朝臣持參之、瓶子藏人少將公教、主人著圓座、二獻勸盃有賢朝臣、瓶子諸大夫、三獻頭中將師時朝臣、瓶子右少將忠基、五獻權中納言長忠卿、瓶子右少將公隆朝臣、政官座又有兩三獻、史生祿事、信仲盛親、辨少納言祿事、忠長基政、官祿事、仲光顯行、總自院兼日被定役送、然而滿闕、每事未練之間違失多端、不能勞記、總座勸盃中納言顯雅、瓶子左少將忠隆、(隆一本作澄)○次有御遊、拍子有賢朝臣、笙忠基、笛行宗朝臣、篳篥敦兼朝臣、琵琶實能朝臣、箏和琴彈之無人、公卿等固辭、未辨可否、地下召人雖在座不可從絲竹之具、頭中將忠宗朝臣取箏者內府祿、自餘殿上四位今日取之、引出物龍蹄一匹、淸房奉時取口、仲季通友松明、先例多有二匹、而依爲院御馬、獻一匹之由示給、又口取多經撿非違使五位歟、

今度院宣云々、事了相率參內府亭、今夜又被設大饗也、

〔百練抄 高倉〕治承三年十一月十五日、今日關白前太政大臣〇藤原基房幷權中納言師家解官、以二位中將基通卿可爲關白內大臣氏長者之由宣下、不被行節會被任大臣例、今度始之、未曾有之珍事也、

〔山槐記〕治承三年十一月十六日庚午、早旦或者來曰、關白〇藤原基房幷中納言中將師家年八停任者、乍驚相尋源中納言雅賴返報曰、寅初剋稱左衞門尉者失名相具牛來曰、勅定也、不移時剋可參陣者、失東西馳參云々、頭中將通親朝臣仰云、關白藤氏長者中納言中將等停任、又仰下云、內大臣從二位藤原朝臣基通關白、同人氏長者、忽內記不候、權右中弁兼光朝臣草宣命詔書等、次外記令清書奏聞、無內覽下外記了、凡心神迷惑、東西不覺者、被答旨如此、堀川關白自中納言任內大臣、自非參議任大臣、幷無攝籙事、今度始之、

〔公卿補任 高倉〕治承三年

內大臣　正二位　藤基通 二十 十一月十七日、任大臣、詔關白、叙正二位、聽勅授牛車、幷可列左大臣上、又賜隨身、任大臣時公卿不參、無饗祿之事、宣命許也、位記左中弁經房

〔任太政大臣記〕建仁四年十二月十四日壬寅、今日任大臣節會、〇藤原良經早旦率仕家裝束、其儀、寢殿四ケ間幷東廂等東南兩面卷簾、垂母屋簾、副件簾立亘四尺倭繪屛風、西一間副奥敷青地錦緣龍鬢地鋪、其上敷東京錦茵一枚爲尊者座、其東敷高麗端地鋪四枚爲納言參議座、納言參議對座、紫端疊座三枚爲大納言座、高麗疊繧繝座五枚爲繧繝座、皆地鋪上敷之、南庇西二間敷青地錦緣龍鬢疊一枚爲親王座、透渡殿中門廊寢殿簀子等敷廣筵如恒、東廂北一二間敷南面端疊爲弁少納言座、廣筵差筵鑷子等如恒、兩棟廊西一間爲祿所、二間爲公卿休所、已上二間垂簾其所三ケ間卷廂簾垂母屋簾引廻高松軟障、奥端二行敷緣端疊爲外記史座、藏人所爲尊者陪從座、中門廊副東壁儲諸大夫座、屛中門內廊三ケ間爲細殿座、其北一間北對東一間也爲所雜色座、本隨身所爲史生座、中門南廊爲上客料理所、艮角屋爲撿非違使幷本家隨身所座、其西儲史

部類、尊者雜色車副牛飼等座近邊小屋南庭副、中門廊西砌、至南廊引二色幔、當中門有幔門、(非幔幔、十ケ九ヘ)(幔門也、)西廊東砌同引之、藏人所前車宿本隨身所前等同引之、巳上裝束大略記之、委旨見指圖、寢殿南面西二ヶ間并東面北妻戶等、有打出、白衣、濃打紅梅表著、蒲萄染唐衣、白腰裳、大治文治例也、申剋著束帶、(蒔繪螺鈿劍、紺地平緒、有文帶、不付魚袋、)權大納言四位巳下十餘人、殿上人兩三、連車屋從、依日暮遲參輩不待具也、余降中門內方、於門外乘車、(中納言中將騎馬前車、)入右衞門陣、候直廬、(當々於南殿中見物、)權大納言兼良以下公卿等著仗座、頃頗候仰、內弁仰權大納言、其次仰宣命趣、太政大臣、余、左大臣、(家實)右大臣(隆忠)也者、無新任大臣、凡無新任被行轉任之事、曾無先例、其仁不尊一之間、于今無沙汰也、須任先例、太政大臣一人可任也、而承平大治右大臣理變、其例依不吉、强以新儀被行轉任也、凡御元服料任太政大臣之次、被任他大臣之例、天祿許也、被左右大臣共新任也、粗准彼例歟、若轉右大臣於左、於內大臣者不可轉任歟之由、兼日有議定、無新任之時、內大臣轉任無其理之上、左大臣是理變役人也、加冠次被加理變、是別儀也之由、有其沙汰、而本相違之人、更引分右大臣、被置闕、又未曾聞之上、內大臣令外官、可置闕者、可在侍官之由有儀、如此之間事未決、衆口嗷々、遂兩人可轉任之由、去夕被仰也、(略)○(中略)頃之奉行職事顯俊持來宣命草、(左右大臣事、摺紙之、無刊子、)見了返給、仰可淸書之由、次持來淸書、見了返給、次近衞引陣、(不立胡床、鋪席持弓、)內弁取副宣命於笏、進立軒廊東間、內侍出居御歸入、(宣陽扶持也、)次內弁昇東階、經南簀子著兀子、(長押上、)催開門闈司召舍人、大舍人稱唯、少納言(家行)相替就版、內弁宣刀禰召、少納言唯出、外弁參列、內弁召宣命使、(先召之、次以鳴笏、)別當通具離列參上、昇東階進、內弁後揖搢笏、(如法揖之如何、)內弁給宣命、通具取之副笏揖、左廻(外廻、)(也)階階(○階階恐階軒誤)立軒廊西間北邊、(南面、)內弁揖、經本路降東階、向揖、(後聞昇時不揖降時揖不練云云如何、)右廻與宣命使相揖、出軒廊東間、經兩樹間練行、經中納言列前、大納言後立加、(今日依官重行歟、中納言可列大納言後、西大納言東頭引入立之、如已異位重行、如何、)次宣命使南進、(不練、)當中門有曲折揖、西折就宣命版、宣命制兩段拜、臣無再拜、宣命使左廻經我列西并後、(無曲折揖、)復列、次內弁以下退出中門外、(內弁不練、)余向直廬方、可相伴公卿少々來會、予降西透廊、經南庭

向弓場殿、殿上人十餘人秉松明前行、前駈等留西透廊外、不向弓場殿、予出東中門、立弓場殿代、以藏人頭左中弁長兼朝臣奏事由、歸來仰聞食之由、卽告召由、次拜舞了昇小板敷、於此所召長兼、仰上達部可給祿之由、奏事由、可仰上卿之由、了（於弓場殿可奏也、然而闇夜）入上戶、參候晝御座西簀子、（敷圓座一枚、次其傍）主上（御）引直衣出御也、少時起座、經本路、於小板敷下著沓、經南庭、（殿上人秉松明前行如初）出西中門右衛門陣等、於三條坊門油小路乘車退出、其儀如參內時、殿上人不騎、門先例太政大臣退出之儀不用晴門、又無留御前事、是先例也、

〔園太曆〕貞和二年二月十五日、抑任槐事可有沙汰、自十八日縣召除目也、除目中有例候哉、將又前後例可注進旨有勅答、仍引見之處、除目中無例、除目以前一兩日節會例有之、仍注進候、任此儀被延引除目、十八日可被行節會哉之旨、又以大夫申入畢、

任大臣除目近日例

永保三年正月廿六日任大臣　同廿九日縣召除目始　二月一日入眼
天永三年十二月十四日任大臣　同十八日京官除目
保安三年十二月十七日任大臣　同廿一日京官除目始　同廿二日入眼
大治三年十二月十七日任大臣　同廿四日京官除目
天承元年十二月廿二日任大臣　同廿四日京官除目
永曆元年八月十一日任大臣　同十四日京官除目
建仁二年閏十月廿日任大臣　同廿四日京官除目
元久二年十一月廿一日任大臣
建保三年十二月日任大臣　同十五日京官除目
同六年十二月二日任大臣　同九日京官除目

弘長元年十二月十五日任大臣　同廿一日京官除目

延慶二年三月十九日任大臣　同廿日縣召除目始　同廿三日入眼

嘉暦元年十一月一日任大臣　同四日京官除目

此外同月例猶存歟、然而數日相隔及十一日許例、并除目以後節會例等除之了

縣召京官等除目中、被行任大臣節會例、雖引勘候、所見只今不詳候、可令得其御意給候乎、師茂誠恐謹言、

二月十五日　師茂請文

京官除目同日任大臣召仰例

建久六年十二月十七日、京官除目也、除目以前右大將參陣著仗座、頭治部卿顯雅朝臣仰事之由、

文永五年十一月九日、京官除目也、除目以前任大臣召仰也、左大將著仗座、頭弁忠方朝臣仰事之由、

除目中節會例

建治元年正月十五日、除目也、　十六日、節會如例、　十七日、除目中日也、　十八日、入眼、

〔園太暦〕觀應二年六月廿六日、任大臣節會也、仍參陣、先是松殿中納言、大炊御門中納言著仗座、頭中將伊俊朝臣則仰召仰事於松殿中納言、次中御門中納言長顯著座、松殿中納言移著外座、令敷軾、召外記弁、後冬朝臣任大臣節會爲可仰諸司事歟、又召外記問諸司具否歟、次伊俊朝臣仰宣命趣、次召內記少內記盛宣仰可草進宣命由、次內記進宣命草、入筥次內弁披見了進弓場奏聞之、內覽被免歟次內弁歸著陣、仰清書、次內記持參宣命清書、內弁奏聞之歸著、次問宣命使事於長顯、次內弁氣色大炊御門中納言云云、已下起座著外弁座、少納言長綱朝臣著之、弁後冬朝臣、伊俊相論不著座、近衞左宗雅朝臣、右實家朝臣、引陣、內弁入中門、次大炊御門中納言問諸司召、後少納言參進、次外弁次第起座、入日華門代立標、次內弁顧長顯聊氣色揖、殆北行入軒廊、至西階揖、傍南欄外自同階經簀子東行至內弁座下長押下、向良揖、揖笏進寄、膝右足以右手給宣命、

退、左足拔笏取副宣命揖、右廻經本路傍北欄降階、左廻向階揖、右廻立軒廊、與北柱平頭、頗退北、南向立之、內弁起兀子、傍北欄降西階右廻揖、左廻向長顯揖、長顯答揖、內弁就庭中標、前庭次長顯出軒廊南行、當公卿列末揖、更東ニ折テ經公卿列前幷尋常版西就宣命版位、宣制兩段再拜、內弁大炊御門中納言不拜、轄正之故歟、宣制之後、揖右廻經尋常版東幷公卿列上南行、更西ニ折テ經列後、自我列後復本路、援中宣命、次中御門中納言幷長顯退入、此間松殿中納言、大炊御門中納言經各宗立也、本標拜舞、長顯依所勞早出、可被付行小除目云々、上卿松殿中納言、弁俊冬朝臣候之、

任大臣宣命

天皇我詔旨度勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公衆民聞食度宣、食國乃法度定賜比行賜偕倍國法乃隨爾、先立先立度正二位行大納言藤原長定朝臣乎內大臣乃官爾上賜比治賜布、又宣久、正二位行權大納言藤原公名朝臣乎大納言乃官爾、正三位行權中納言藤原忠嗣朝臣、藤原家信朝臣等乎中納言乃官爾、從三位藤原家賢朝臣乎參議乃官爾任賜布度勅御命乎衆聞食度宣、

觀應二年六月廿六日

〔薩戒記〕應永卅三年七月廿四日丙辰、傳聞、今夜有任大臣事、以權大納言兼左近大將藤原房嗣卿被任內大臣、不被任大納言替、不知其由、去々年被任前內府之時、先可被任此人之處、不慮之儀出來之由、入道內相府殿有密言云々、此事達叡聞歟、又前內府被聞及歟、去比忽辭退云々、參入公卿大炊御門大納言信宗內弁卿度也三條中納言公保、師中納言藤光、中御門宰相宗繼、右大弁宰相宣光四位等也、後日中御門相公語云、右大弁爲宣命使就版、諸卿再拜兩度畢悉立直之儀、卷宣命甚遲々非失念之體云々、若一說歟、但不甘心事也、又退歸之時左廻、此內裏四禮也、常儀右廻也、如何、後日大丞、左廻事有所存之由所缺也、予引見舊記之處、文治二年十月廿九日任大臣宣命使、左大弁兼光也、而東禮御前之儀、退之時左廻云云、宣光朝臣者被後鑒也、背所爲之案、如何、是又珍事也、又曰外弁列異官重行也、此事翌日右大弁談云、於任大臣節會者、異官重行叶理之由、中園相國公賢被執之由注故贈左府記者、仁安二年二月御記、

以異宮爲善歟、後日又右大弁云、今日先大炊御門大納言有著陣事、(大納言後也、)權弁候申文、此事如何、我卒所參陣也、何不被觸歟、又中少弁候申文之時、先申大弁不參之由、依上卿命可見文也、而今度權弁申饗不審、今夜已大弁參入、若申道參之由歟、不得其意云々、所命有理歟、

〔康富記〕寶德二年五月十三日丙辰、自廣橋權弁有使、候內裏可參由也、予父子(康富、康顯、)出行、入夜歸宅之間、遣康顯了、對面被示云、任大臣宣下、今日中可申沙汰之由、雖被仰出、卒爾不可事行、明日可申沙汰之由申入了、就其文安二年十二月廿日、萬里小路內府爲宣下、彼時柳原資綱卿爲職事、被申沙汰、了、宣命康顯書進之由、彼卿行被語之間、不堪不審間申也云々、追儺之次宣下被行之間、不及宣命沙汰、只爲外記宣旨歟之由存之由、令申了、權弁被許諾、猶可期見參云々、　十四日丁巳、自局務有消息、云、今日可有任大臣宣下、三局分配也、可參由也、康純病氣未本腹之間、出仕難叶之由申之、重又被示云、筆人可參陣云々、可申付之由返答了、官務延狀云、高大史違例、新大史物語也、指次史今日任大臣宣下可令參陣之由也、康純違例之間難參之、內々可得其意候、返答了、自廣橋藏人口文安二年十二月廿九日任大臣宣下、宣命有之由有申仁、不審也、可任給之由被示之、件度宣命不及沙汰之由注申了、寶定公自前內大臣還任內大臣時、宣下也、無宣命、普賢寺殿(基通、)○藤原攝籙御拜任之日、先令任內大臣給、件度難爲宣下、有宣命、近例定房公、有房公、任槐宣下、共無宣命、應永元年又無宣命、然間文安二年十二月、又不及宣命沙汰、今日可爲此分歟、傳承分自三條中納言(公綱、)殿、今日被尋清少納言方々時、此分有返答、不被借進次第、宣下之樣如恆之由被申之云々、今夜任大臣宣下也、都護卿(公保、前權大納言正二位、)本(康富)令任內大臣給、(洞院實熙公、去月上表替也、于時右大將實量卿、左大將教房卿不任云々、來月有大將可被任之間、先之有此沙汰云々、)上卿三條中納言(公綱、)著仗座、(奧)職事權右中弁經光進仰勅語、退、次上卿移端、令敷軾、召大外記(宗賢、)仰云、陸奧出羽按察使藤原朝臣宜任內大臣者、局務稱唯退出、次上卿令撤軾退出、六位外記康顯參陣之、六位史不參、仰局務外史成宣旨持參本所、(納言、此宣旨爲早速、使被令予清書之、强試也、有二體紙、)康顯同道參之、珍重之由賀申之、細々參入之間歟、

御目云々、帥殿幷中納言殿御方同申入、皆入見參退出云々、外記宣旨以周防守永種(束帶)被召之、卽被返宮不及對面云々、(時服無用意、被憚之故也、)宣旨案見左、宣命事依度々例不及沙汰者也、此宣旨名字可被載歟否事、給事中有思案、至大臣者不載名乘之條勿論、於納言以下者可有名字也、雖然今令昇大臣、少納言殿爲見物密々有參內、予爲見物內々參陣、徘徊便宜所令談合、此間事語者也、

陸奥出羽按察使藤原朝臣

正三位行權中納言藤原朝臣公綱宣奉勅件人宜任內大臣者、

寶德二年五月十四日　大外記兼主水正助教淸原眞人(宗賢)奉

〔康富記〕任大臣節會事

寶德二年六月廿七日己亥、是夜任大臣節會也、權大納言右大將(實量卿、權大一、正二、)任內大臣給、權中納言敎季卿(權中第四、正三、聽從二位隆遠同、持季任權大納言、正三、同實任等、三度)、前權中納言明豐卿還任權中納言、(正三位之在、實任數季上、)以上三人也、上卿久我大納言通尙卿爲內弁、(初度)權中納言公綱卿爲外弁、上首坊城新中納言俊秀卿、左大弁宰相冬房朝臣勤宣命使、少納言淸原業忠眞人、官方右中弁敎秀朝臣、職事頭右中弁勝光朝臣、奉行藏人權右中弁綱光、六位藏人□□四位史長興宿禰、大外記宗賢、奉行少外記康顯(少內記)右大史通音、召使秀國等參陣、每事如例、亥剋內弁經床子給有直揖、右中弁官務在床子、答揖如常、先有著陣、輕服除服以後頭弁覽藏人方吉書、召右中弁被下之、弁歸床子下官務、次節會被行之、奉行頭弁就軾仰任大臣節會事、次召外記、次召右中弁仰同事、次頭弁就軾仰任人、(不被示小折紙、只三人之故也、)次內弁召少內記康顯仰任人幷宣命事、先之俄雨下、內弁召右中弁仰雨儀事、(不及奏聞、)宣命奏聞如常、依雨下於中門北腋簷下被奏之、頭弁出逢奏之、草了彼淸書宣命於此所取替奏之、卽被返下、內弁歸著陣、內記進宣命、內弁不及披見返賜之、可近候之由被仰之、次公卿出給弁、此間雨脚休、庭砂不濕、仍召右中弁、御裝束可被用改晴由被仰之、弁仰史、(已上是ヽ二度也、)外弁儀如恒、但康顯從內記役宣命進內弁之後著外弁者也、其間經程召仰

如例、次内弁於中門下著靴、進立軒廊下(西第二間)取宣命、(内記持空進)先内侍出西階召内弁、(其儀如早速也、内弁被進之、)次内弁堂上、(階下揖、如常、)次開門、次闈司著座、召舍人、少納言進版、上卿參列、異官重行、左大弁多房朝臣勤宣命使、宣命使經公卿列前著宣命版、兩段再拜、了宣命使經尋常版東南、廻公卿列東立、中納言列後、次内弁趁進退出、(少納言弁如例、大内)歸著陣、召大外記仰大將還宣旨、外史稱唯退出、次上卿退散、局務束帶、參正親町室町第、被進入大將如元宣旨、(納言)諸大夫有朝(束帶)請取宣旨、其後大臣殿有御出座、清少納言官務局務康顯(束帶)等入見參云々、時晩鐘以後也、

天皇(我)詔旨(良萬)勅大命(乎)、親王諸王諸臣百官人等天下(乃)公民衆聞食(止)宣、正二位權大納言右近衛大將藤原朝臣(者)、累代實佐(乃)家(爾)、亦朝拜(乎)可(支)人(爾奈母)依(氐)、内大臣(乃)官(爾)上賜(比)治賜(布)、又宣(久)、正三位行權中納言藤原朝臣(乎)權大納言(乃)官(爾)、正三位藤原朝臣(乎)權中納言(乃)官(爾)任賜(者久)(止)勅御命(乎)衆聞食(止)宣、

寶德二年六月廿七日

一任大臣小折紙今夜不被下、只以詞被仰者也、

一今夜次將兩人共左也、假可被載右之條如何候由有沙汰、遂以下﨟實久被載右了、

一前官人還任之時、宣命書様不審、雖然先例無殊文章、新任ト同シ書様歟、

〔後竹林院左相府記〕享德四年(○康正元年)六月六日、任家君(○藤原公名)相國給依爲宣下、予(○藤原實遠)參陣、(無文帶、蒔繪劍、餝騎一人、雜色二人、)先著奧座、左少辨登光來仰、仰詞徵々、予聊向居微唯、移著端座、召官人令敷軾、又予召官人仰可外記召由、六位外記參進跪小庭、予目之稱唯(高長)來軾、予仰云、前内大臣藤原公名可任太政大臣令成宣旨(ヲ)、外記退去、召官人令撤軾退出、

〔宣胤卿記〕文明十三年六月八日、今日德大寺大納言實淳卿任内大臣、於陣被宣下、奉行藏人左少辨元長、上卿海住山大納言也、自德大寺物語之故參云々、諸司下行等本人沙汰云々、近年式也、

〔和簡禮經六〕

權大納言平朝臣信雄

權大納言藤原朝臣晴豐

宣奉、勅、件人宜令任内大臣者、

天正十五年十一月十九日　掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉奉

右入道前内大臣常眞公昇進之剗、如此候也、

〔續史愚抄明正〕寛永八年十二月十五日甲申、此日有任大臣宣下、○口宣○内大臣藤原公益、元權大納言

〔續史愚抄後西院〕寛文元年五月廿三日辛未、内大臣輔房辭職、此日有任大臣宣下、口宣上卿新大納言、通茂

奉行左少弁貞光、内大臣藤原共房、元前權大納言從一位

古事類苑

政治部十六

上編

補任下

〔有職問答四〕一大饗をこなはるゝと申事如何（任大臣ノ節會トテ、大臣ヲ任セラルヽ節會ヲ被行之時、新任ノ大臣、其日ノ節會ノ上首ヲ勤者トテ相請アリ、其外ノ官、外記ニイタルマデ、皆亭ヘ招テ饗應スル事也、種々ノ儀式ドモアル事也、）

〔貞丈雜記一下祝儀〕一大饗と云事は、公家にあり、大臣の大饗と云は、大臣に任せられたる人、其祝に數多の客人を招きて、饗應せらるゝ事ヲ云也、大饗の二字を、今世地下の俗語にていはゞ、大ぶるまひ也、

〔江次第抄二正月〕大臣家大饗　又初任大饗可於庭行之、

〔北山抄三拾遺雜抄〕大饗事（此日給身暇使者、奉書昏昼、就庭前床子、例也、不行大饗大臣、不向饗所、○中略）

初任饗設庭、着座後立机、尊者横座、（主人先着南座、勤盃、後人着納言座上、）弁少納言座南上、垣下親王座對公卿、史生饗於便所給之、給祿時召庭前、（天慶七年、史生饗設庭、所々使部饗設之、云々、）不盡喩鈍、無立作饌、并史座錄事如常、六位外記史給疋絹、自餘如例、其太政大臣饗猶用樣器、（故實、新任饗、臨時客等時、設湯漬、水飯等、不必得給事云々、而承平六年、被仰給事、其後如之、）

裏書

新任饗（主人饗着、親王座、）

雖非太政大臣、猶用樣器、

一獻（主人執之、經座後、）　敷主人圓座、立主人机、（地下四位下、勤之、盃於外記史座、）　二獻（非參議三位、若殿上四位執之、）　撿非違使着庭中

三獻（殿上四位執之）　居飯居汁物（汁鱠）　鳥足著下（撿非違使退去）　四獻（以下公卿取之、鳩別足、）　茎立　生鮑　五獻　淵

猴桃　枝柹　仰錄事、先辨座料、殿上四位五位各一人、敷圓座、次政官料、諸大夫二人無史生錄事、

勸盃非參議大弁　敷穩座圓座、公卿以下移、（以後事、如常大饗、）　或曰、非攝關之家設饗時、大納言以下猶設

菌云々、（此說可尋之）

暑日羞膳次第

三獻（汁膾　燒物鳥小　或水飯等交居）　四獻（宇留賀膾）　五獻（鳩以下、或六獻後、鱗鱗物鳥頭草、）

穩座（勸盃、削氷云々）

〔北山抄四拾遺雜抄〕立后事（前一日、大臣奉勅、仰外記令誡諸司、○中略）

任大臣儀亦如之、宣命後新任大臣參入、奏慶賀後、令奏可給上達部一盃之由、卽仰勅許由、又仰他上卿、上卿仰外記、令仰彈正撿非違使、可聽大臣饗祿之由、任人爲上卿者、如叙位日大臣叙例、（○例或作列）但至宣命、被仰他上卿歟、（承平七年、恒佐大臣時、太政大臣令奏宣命、皆丞相例可尋、）

御前儀（大饗儀見上卷）

奏慶賀退出（師尹大臣出自敷政門云々、但例不然、未着陣人不用件門歟、）間、召使當外記局北、職御曹司南夾道分立、外記史弁少納言下臈爲先、分立左衞門陣屏邊、幷外記門西方、大臣以下出建春門、暫留立、下臈參議爲先、自路中進待、（壺邊）外記史弁少納言左右相分立、前同行、召使等立其前、呵叱前途、至陽明門、史外記弁少納言、北方之人留立左近府之東、南方之人留立左兵衞府門之東方、參議以上行過、當左兵衞府小門、少倚道北留立、（南面東上）大臣行道過之後、在北弁少納言自史外記前進東方、在南弁少納言越度北方同行進、頗北倚列立參議之次、（去參議四許丈）史外記一行列立西方、（東面南上）大臣不至陽明門四五許尺、右廻西向揖、納言以下左廻而出、納言以下次第如之、召使等留門内列立如常、或公卿東面雁行、大臣出後南面、又弁少納言先立外記史前、東面南上、大臣出後、改立南面東上云々、

〔北山抄 六備忘略記〕大臣大將初任饗祿事

仰彈正檢非違使、外記奉宣

〔江家次第 二正月〕大臣家大饗、依四門儀、東門名准可知之、正月四日左大臣饗、五日右大臣饗、是式日也、而近代任大臣明年正月行之、不行大饗大臣、不向饗所、〇中略

〔江家次第 二十〕任太政大臣事

新任大臣奏慶、南殿弓場殿、令藏人頭奏饗祿事、仰倉由、仰上卿、封陣、又新任大臣退出、太政大臣用儀門歟、可大臣以下出、南殿之出立、左大臣內大臣以下步行立軒下、外記史二人進自左右南行、大臣擬笏示可留之由、外記史並跪、召召使、如恒、若新任大臣自陣出時、又有別儀、新任大臣先到本家、公卿以下列於中門外、公卿一列、弁少納言一列、外記史一列、上官一列、主人當南階東柱立、尊者已下入自中門外立、公卿一列、外記史一列、弁少納言一列、再拜畢、次先與尊者三讓、列丈許、主人到階下、亦揖、尊者亦進、主人到階下、亦揖、尊者到階下、主人登階著親王座、尊者以下著、登自西階、入自西庇、著內、納言以下或相分著外座、弁少納言著、自西階、南上東面、外記史著、對南殿西北面、昇西階、鋪尊者以下饗、幽立机、弁少納言料或先立机、先居飯、不次居饌、一獻、主人一獻盃、弁官源氏座取之、敷主人圓座、二獻、三位中將、居實、居主人机、三獻、殿上人、竹實、居汁物、汁鱠、鳥足、居主人飯汁物、著下、四獻、公卿家司、居汁物、中納言鱠脯、五獻、家中納言、召錄事、先二人、次大夫、弁政官座料、次二錄事著座、居菓子、枝柿、甘栗、椎、棗、敷穩座、公卿以下下居、藥器預物、給史生祿、家司召之、召祿竹具、召人著座、先敷、給外記史祿、五位外記史赤絹一疋、授弁少納言祿、地下四位取之、亦絹二帖、給盃於公卿座、又納言取之、或有例、弁以下被祿下立、當召二人座末立、二列、授公卿祿、殿上四位取之、自下五位授之、四位參議紅大褂、三位參議獅子重、大中納言白大褂一重、此間或給召人祿、次尊者祿、白大褂一重、加織物褂、尊者二人、左大臣源大納言師忠取之、內大臣別當敍、明取之、有引出馬、左大臣二疋、內大臣一疋、公卿以下退、左大臣下自西階、云々

新任大臣大饗 庇

群卿於中門外徘徊、主人降南階當座下方立、尊者為大臣時例也、主人為太政大臣者亦如之、座上方南立、若為大納言者為尊者、尊者以下入自中門列立階前、參議以上一列、弁少納言一列、外記史一列、再拜訖、主人與尊者三讓、主人於座下方、立上方、是例也、相並昇自南階東西端著座、主人家司五位先取之、太政大臣攝政自名、尊者離座相揖時、卿先昇耳、若納言為尊者左右大臣准之、太政大臣大饗、右大臣揖座末著之、自餘亦致家禮時如之、尊者著横座、致家禮人著南

（面座）主人著親王座、納言以下著、（大臣座定後、昇従同階著、又納言以下上臈昇階後、次人離列、第一納言以下皆可著奥座也、但至中納言末、依無座相分著南、著北座人、自此一間経弁少納言座前進著之、著南人自二間入、若著客殿三間者、可入自一間也、）次弁少納言著、（従抜階昇、南上西面、若東面、依所譲、）次外記史著、次敷主人座著円座、次召使取公卿沓、（弁侍取弁以下沓）次敷饗膳、其上立机、（尊者料二脚云々、太政大臣家用様器云々、弁少納言供箸居之、又不敷饗膳、）次一献、（主人勧盃）次立主人机、二献三献、次羞飯汁物、四献、（公卿勧盃、勧主人）五六献、（政勧主客）仰禄事、先弁少納言録事（殿上四位一人、五位一人、地下五位二人也、先令敷円座、）先二人参候、主人仰云、大夫達（爾）御酒給へ、四條記曰、弁少納言（爾）御酒給云々、称唯著座、次地下五位二人、主人仰云、佐官等（爾）御酒給云々、四條記曰、外記史（爾）云々、七八献主人勧盃、非参議大弁、（主人取盃、進自簀子敷、弁少納言座列平伏、摂政関白時下座平伏云々、）敷穏座、王卿著穏座、（敷曾円座於第三間簀子敷）羞肴物、（暑月削氷甘瓜等云云）二三巡賜史生禄、（史生信濃布三段、官掌召使二段云云、家司唱名、中取二脚積之云々、）随給一拝退、（或於便所給之）次給外記史禄、（四條記曰、匹絹云々、近代頼好云々、或給紅衾一帖云々、夫大史外記離也、）次給弁少納言禄、（紅衾二帖、若有弁参議大弁者、給紅大褂一領、是四位参議禄也、家司為四位者取之給、）弁以下史以上列立砌前、（各額被物）一揖而退、（弁少納言一列、外記史一列、非参議大弁不下立、外記史出者、弁少納言遅留、外記史五位如弁、六位插笏持絹、）次参議禄、（四位参議紅大褂一領、三位参議綾褂重口也、）次中納言弁大納言禄、（白大褂一領）次尊者禄、（女装束一領、加褂、馬二匹、）

弁少納言禄者、諸大夫四位取之、　公卿禄者、殿上四位取之、　尊者禄、本家親昵公卿取之、

尊者退（下自南階、尊者為上臈者主人下、）無史生幄、　無立作幄、　不羞餛飩、　廳飼不度、　不仰史生録事、　不召史生、

〔大饗略次第〕節會訖、於弓場奏事由拝舞、依召参御前、次立弓場、奉饗禄事、次退出帰第、（入開門）著親王座、次諸卿已下列中門外、（東上南面）尊者来臨、次主人下南階、次尊者以下列南庭、（東上北面、客對主）次客主再拝、次揖譲、（三度、立明官人居地、）次客主昇階、（客東、主西、）尊者著東一間横座、（西面）主人著親王座、次諸卿昇階著座、（東上南面）次弁少納言昇、對代前、外記史昇中門妻著、次召使等取人々沓、次酒部所人著座、次立尊者机、（二脚、四位一人取饗、（饗一本作菓、）下臈二枚、五位二人昇机、）次居肴物、次一献主人勧盃、（簀子殿上五位）上官座勧盃、（地下五位）此間主人退帰、（家司敷円座於親王座上）主人著円座、次立主人机、（一脚饗膳）（無）次居肴物、次二献、殿上四位勧盃、上官座勧盃、此間撿非違使著座、（則起座）次

三獻勸盃同前、五位所獻盃也、次居飯、次居汁、次中著、次四獻料理所獻盃也、參議獻盃、次居雉羹、次居燒、次中著、次召錄事、弁少納言殿上四五位、各一人、上官座端下五位二人、一錄事著座、則起座、次撤圓座、次五獻勸盃納言、次居菓子、次六獻、居佳之略、次主人勸盃於非參議大弁、此間昇立床案於庭中、次給史生官掌祿、次敷圓座於南簀子、次尊者已下、弁少納言、外記史退候、次居肴物、尊者三本、納言已下二本、此間數召人座、次召人著座、次穩座勸盃中納言、召人勸盃、次置樂器、次堪事侍臣著□□不敷圓座、次取下笛、次御遊、呂律、此間給外記史祿、次弁少納言祿、各列之庭中一揖退、次公卿祿、尊者先家、相自上臈□、此間給召人祿、次召人退、次尊者祿、自座中出、次引出物、馬、次尊者降階、主人□□、次□□□次公卿退下、

〔新任辨官抄〕權左中弁俊憲朝臣

任大臣大饗、主人爲勸盃、被起座之時、主人若爲執柄者、弁少納言勸座下、長押、膝居簀子若廣庇、復座給之後復座、非執柄之時者不然、平伏許也、雖一人嫡子、未爲執柄者、又如此、不似他時之家禮也、

〔書札禮〕任大臣

催請大夫受領狀

來某日任大臣大饗祿料赤衾二帖、長七尺三幅、期日以前可令調獻給者、依左大將殿御消息、執達如件、

月　日　前伊賀守某奉

謹上丹波守殿

催侍受領狀

來某日任大臣大饗祿料六丈絹三疋、期日以前可被調獻者、依左大將殿仰、執達如件、

月　日　前伊賀守某奉

筑前守殿

催二穀倉院一狀

來某日任大臣大饗召人衝重十前、期日以前可レ調二獻之一由、可レ令下レ知二穀倉院一給上者、依二左大將殿御消息一、執達如レ件、

月　日　　前伊賀守某奉

謹上助敎殿

〔徒然草〕下　大臣の大饗は、さるべき所を申うけておこなふ、常の事也、宇治左大臣殿〇藤原賴長は、東三條殿にておこなはる、內裏にて有けるを申されけるによりて、他所へ行幸ありけり、させることのよせなけれども、女院の御所などかり申、故實なりとぞ、

〔殘夜抄〕大臣大饗、これも御遊の儀式打任、これらにはかはらず、それにとりて、母屋の大饗には、席山といふ歌をうたふべきとかや、それは源家にはあり、藤家にはなき歌にて、うちまかせは、一どうらけ給りしも、安名尊にてぞ侍し、又律にも席子あるべきにや、

〔權記〕正暦二年九月十日、詣二桃園一、命云、去七日太政大臣家〇藤原爲光饗事、給祿如レ常、但尊者二人、右大臣六條(源重信)內大臣(藤原道兼)二、第一人祿如レ例、主人取之、次左近權中將齊信取之、春宮大夫拾遺相公、或爲二舍弟一、或爲二息男一、此兩人中可レ取之、而齊信朝臣取之、未レ知二其所以一云々、主人勸盃、於二非參議大弁事一、雖レ非二初度事一、是先例也、非參議大弁座用二圓座一、但放レ面、

〔小右記〕治安元年七月廿五日戊戌、今日任大臣(藤原實資)太政大臣公季、左大臣賴通關白、右大臣僕、內大臣敎通、大納言賴宗、能信、大饗於二小野宮一行之、皆是故殿〇藤原實賴舊儀、於二此宮一被レ行、初任大饗一以無、共時人感賞云、木切ノ比今有二昇晉之饗事一之相應、天之令レ然歟、〇中略晴雨儀間如何者、余云、可レ任二主人御心一歟、又殊不レ濕雨儀無レ便歟、又以二緣人々一被二案內一、被レ命云、左右只可レ被レ行者、氣色在レ可レ被二拜禮一、又次々初任所雨儀無レ便歟、於二大府一行二雨儀一、他所行二晴儀一、太可レ無レ便歟云々、

〔定家朝臣記〕康平三年七月十七日癸卯、大饗料理次第、○是日藤原師實任内大臣、

納言以下

菓子二種薯蕷栗　干物二種干鳥蚫　生物二種鯉鱠燒代

窪坏物海月鮎兒鮨保夜代　一獻立主人執之　二獻　三獻飯次　小鳥燒物　四獻鶉鳥羹　次鷄頭草

室立代　次鮎燒物燒鳥代　五獻汁漬已上鮒若菜甘葛代漬物　次水飯湯漬代立府大饗召之　穩座削氷暑預粥代

祿

大納言一人白大掛一重　中納言三人白大掛各一重　宰相四人鳥子重褂各一重大　三位左大弁同掛一重　非參議

右大辨未給一領、四位參議無祿也、　弁少納言七人紅染打絹十四結、各二結、件絹尺寸體無二所見、仍隨宜長七尺五寸也、　五位外記史三人紅染打絹三結、各一結、

〔永左記〕承曆四年八月十四日、今日右大臣、○藤原俊家　內大臣、○藤原能長　大饗也、未剋許、人々參內云々、予有所勞、不參、節會儀如常、○中略　入夜節會了、人々退出、被向右大臣饗所云々、尊者內大臣云々、前々初任大臣二人之時、互爲尊者云々、鷄鳴之間事了、又被向內大臣饗所、尊者右大臣云々、天明之後事了、人人歸云々、太政大臣不被儲饗、是非恐望之故云々、

〔中右記〕天永三年十二月十四日丁酉、殿下○藤原忠實、此日有太政大臣兼宣旨、　庇大饗也、仍巳時許著束帶有文參東三條、人々多被參、御裝如例、南庇西六ケ間爲公卿座、尊者座、納言座一行南面、但臨末宰相座二行對座、西庇三間爲弁少納言座、西廊爲上官座、此座外皆如先々、

〔平治物語〕三經宗惟方被處遠流事同被召返事

新大納言經宗モ阿波國ヨリ被召返テ右大臣ニナル、○中略　大饗行ハルベカリケルニ、尊者ニ此左大臣○藤原伊通　請ジ奉リケレバ、使者聞ヲモ不憚、粟ノ大臣上テ、旅籠振舞セラルヽナ、伊通ハ得參ラジトゾ被申ケル、

〔任太政大臣記〕建仁四年十二月十四日、壬寅、今日任大臣節會、○中略、太政大臣饗、納言尊者無先例、而今度兩大臣轉任之人也、中古以來轉任大臣不儲饗、閉門稱物忌、而有別勅、可出仕之由有沙汰也、於內辨者、大納言可勤仕之、新任大臣二人之時、兩人相互雖爲尊者、納言內辨可准彼儀也、不儲饗出仕儀、別勅上不可有咎之故也、右府猶申所勞、內府被申可出仕之由云々、○中略

到饗所、於北門下車、（不入四足、是故實也、）召奉行人問事具否、皆具了、公卿大略參集、待尊者許也云々、以人仰座中事可行之由於賓實卿、是大饗之儀居物之事、太有煩、奉行家司在透渡殿邊、不見座中事、仍先々多有違亂之故也、禪閤御時、經房卿承此事也、

頭之（亥刻、秉燭、）尊者右大臣已來臨云々、予出寢殿西簀著親王座、此間諸卿降立處人所前、（西上南面、）尊者於門下降自車、入門進立中門、

次予（○藤原良經）降南階於下級著沓、皇后宮權大進兼隆進沓、當南階西柱、去窗一許丈而立

次尊者入幔門練進、當南階東柱北面而立、諸卿次第列立、其東一行也、

大納言、（兼良、公經、）中納言、（良輔、定輔、實宣、）參議、（親經、兼具、隆衡、公定、具平、）辨少納言列立公卿後、（左中辨長兼、右中辨光親、權右中辨淸長、少納言宗行、信定、左少辨兼定、右少辨盛經、）外記史列其後、（良業、野宣、國宗、以下、）次主客相共再拜、

次揖讓、其儀予三讓、客再拜、第三度頗步進、（無揖、）予左廻至階下、右廻向又再讓、客一許、次度又步進、（如初無揖、）（寬治記、今度步寄簀下云々、今度不然、猶庭中也、沓、今夜不被寄簀下、仍先取也、）予相揖昇階（西頭、）著親王座、予昇簀子之後、兼隆來取沓、（尊者寄簀下揖讓之時、尊者昇階之後、取主人沓、）

次尊者昇南階（東頭、）經南簀子幷座末（東一間也、）與座後等著大納言圓座、（予相對程也、）第一大納言欲昇階之間、右少將資家朝臣來、自西方敷菅圓座一枚於西一間端長押上、予示氣色於右大臣、著件圓座、（南揖、如常、）目尊者、尊者移著茵座、自餘公卿一々昇南階著座、（大饗之時、諸卿皆悉昇南階、例也、）良輔良平兩卿、昇簀子跪伺氣色、隨目著座、

次辨少納言昇中門内、經簀子透渡殿等、著東座、（四位辨、少納言、五位辨、）

次上官昇同所、著二棟廊座、（對座、外記、史端、）

次召使五人入東幔門、參進、取尊者以下公卿沓退去、（先例十人云々、今夜五人、近代如此云々、）

次立尊者以下机、其儀尊者陪膳仲基朝臣、持參簀薦二枚、敷尊者前退去、（以竹簀面以絹縁薦、自簀子參進、）次大納言手長（五位）持簀薦二枚、敷兩大納言前、各一枚也、（尊者机二脚、仍敷二枚、納言以上机皆一脚、仍人別敷一枚也、）敷了退去、中納言手長（五位）持參簀薦三枚、敷中納言三人前、次宰相手長（五位二人）持參簀薦五枚、敷參議五人前、（依對座相對敷之、奥三枚、端二枚、）辨少納言座不敷簀薦、次尊者陪膳參候、役送五位四人昇机、（机別二人昇之、）參上、陪膳取之立簀薦上、（東西一行、）退出、

次大納言以下役送各脚別二人昇之、直立簀薦上、納言以下不傳手長直立之也、（已上机赤木、白絹面、）辨少納言座、机上豫居物、（不居飯、）昇立之、（黑柿机、白絹面、）外記史座立机居物、（不居飯、漆面、）

次居尊者以下肴物、先陪膳參候、役送四人持參四折敷、陪膳次第取居机上、役送取空折敷退出、（少々有寄、）（置簀子之巡、不可然、）陪膳退去、大納言以下人別二折敷、手長先參、取居之如初、

先是酒部取行事、（下家司中原師尊、下家司諸司召各一人、）入東幔門、著幄座、（居肴物之間敷、）

次一獻、（自一獻至三獻、酒部所獻之様器、有異居等、）家司仲賢朝臣居盃於繪折敷持參、瓶子右少將國通朝臣、予取盃不起座、直擬尊者、國通取右府酌、了退下、大納言以下諸大夫續杓、參議座奧端有續杓、其盃傳辨座、

次立主人机、（赤木机一脚、無簀薦、）件机豫居物、（不居飯、）陪膳長俊朝臣、役送國基、兩人昇之立余前、（向奥、）

次二獻、右中將經通朝臣、（取予盃、大夫、）經奧座勸尊者、不傳主人、直下參議端座、別有續酌、

次居粉熟、陪膳長俊朝臣先參上、役送持參件折敷、（粉熟汁別居一折敷、）取居机上、退下、次居尊者前、陪膳仲基、其儀同前、公卿皆別汁居同折敷、居了右大辨公定申上之、予以下各下箸食也、辨少納言以下皆懸汁、

此間撿非違使等入東幔門、著庭中座、（看督長先立床子等、酒部所經南頭、東不出廊中、）三獻之間起座退歸、

史生著饗座云々、（雜舟所也、）

次三獻、右中將實宣朝臣勸盃尊者、其儀一同二獻、

次居飯、陪膳役送同前、撤粉熟取替居之、納言以下手長役送如粉熟、

次居汁、加燒物、同折敷居加之、陪膳手長等取居之如初、次居汁、辨申上之、下箸食之如恒、

次四獻、自此獻料理所獻之、用土器、勸盃右大辨公定卿、瓶子侍從基定、經簀子著余上勸之、予取盃擬尊者、基定取瓶酌、次第巡流、

次居菓子、薢、甘栗、枝柿、居折敷、取居机上、陪膳役送同前、不待居了食之、

次五獻、權中納言定輔、瓶子右兵衛佐知家、自端勸予、同四獻、

次仰錄事、其儀予拔箸取笏示氣色、資實卿傳召之、右少將資家朝臣、左少將時通、參候南簀子、階同、西上北面、予仰云、辨少納言御酒給、各承仰退去、經辨少納言座末各居其前、上臈辨前一人少納言前一人先是諸大夫二人敷錄事圓座、圓基、有長、兩人居件圓座、少時起也、次上官錄事參上如初、治部大輔知長、前宮內少輔能充、共五位家司也、無別面之儀、只相續參也、余仰云、外記史御酒給、兩人退下、居上臈外記史前、退下件圓座、次五位撤之、各退下之後撤圓座、

雖有六獻、依及深更令止之、天永大治例也、

此間舁立祿案於庭中、二脚、當東二間立之、

次諸大夫二人參進、撤一世源氏座、

次敷菅圓座於簀子、予座階西頭、圓基敷之、尊者座南階間、諸大夫次第其東頭敷諸卿圓座、

次移著穩座、其儀先予以下拔箸匕、公卿自下臈起座、暫退透渡殿邊、尊者起座降簀子之間、予移著圓座、西面、尊者同著、北面著了後居直如何、座中有主人之時、北面者座、今無其儀、自本南面者也、諸卿次第著圓座、皆南面、

次居肴物、大臣三本、納言以下二本、折敷高坏據、大納言被調之、相親納言勸之、先例也、

陪膳役送如初、各居座後長押上、先例也、末々少々略之云々

次一獻、別當通具卿、瓶子左衛門權佐親房、予取盃擬尊者、次第巡流、

次二獻、權大納言兼長卿、瓶子藏人宮内大輔宣房、予讓尊者、雖固辭、猶令取之、大治例也、予受盃擬公經卿、（經ニ座被取盃、）次第巡流、

此間敷召人座於南階東砌上、（敷疊二枚、掃部官人敷之、）召人六人入東中門著座、（西上北面、）次居衝重、（衞門等役之、）勸盃、次五位瓶子諸司官人、

次撤御遊具、先留筥籠、笛笙篳篥不入、拍子、次琵琶箏和琴等、五位諸大夫取之、（本置緣所、）置座後長押上、

次召殿上人所作人、各依召參候透渡殿邊、役送大夫重參上、取管絃具置所作人等前、

拍子　春宮權大夫公繼　　笛　右中將國通朝臣（本點ニ經通、而入筆、仍改之、）

笙　藤宰相隆衡　　篳篥　忠行朝臣

琵琶　權中納言定輔　　箏　左中將經通朝臣（本點ニ宗頼、而頼觸穢、仍改定、）

和琴　阿波守隆宗　　付歌　左少將時賢（本點ニ有雅朝臣、而院中有ニ指合事ニ、仍改定、）

呂　安名尊　鳥破　席田　鳥急　賀殿急　律　更衣　萬歲樂　三臺

曲了、各殿上召人退去、役人撤其具等、

御遊間給外記史祿、（五位諸大夫取之、）

五位赤衾一帖　六位外記白走絹　史黃走絹

次給辨少納言祿、（五位諸大夫取之、各衾各一帖、）各懸祿於頸、經本路列立南階東腋砌外、（西上北面、）辨少納言一列、外記史一列、列了自上臈拜、一々經列前退入、（無拜、）

次賜參議祿、（烏下襲各一襲、但無四位、不給之、本拱、殿上五位取之、自上臈給之、）

次賜中納言祿、（白綾大褂各二領、殿上四位、五位等取之、自上臈給之、）

次賜大納言祿、（闕腋、殿上四位取之、）

次尊者祿、（白綾大褂、上重、織物細長、浮線綾細長、）中納言中將起座、經座後到庇西屏風南妻挑之、女房出祿、中納言搢笏取

之、置尊者傍退去、右府息中將基忠朝臣來取件祿退去、

此間召人等給祿退去、五位白褂各一領、六位疋絹、次五位取之、

次引出物二疋、一疋鹿毛、一疋鼠毛、駮、予先仰隨身令立明、木只立明官人候立明、今依引馬隨身等令立加也、自西幔門引出之、諸司勞五位二人乘松明前行、同五位一人、衞府一人張口、今一疋又同引廻南庭、於東中門尊者前駈受取也、

次諸卿退出

次尊者退去、降中門內方、先例多出東寄戶歟、

次給立明官人祿、凡絹各一疋、下家司取之、

次給使部祿、各布一段、下家司取之、

今夜上官座同有五獻、諸大夫勸盃、次五位瓶子、一獻基部、二獻圓時、三獻有長、四獻爲說、五獻信仲

〔猪熊關白記〕正治元年六月廿二日、此日有任大臣事、○此日右大臣藤原頼實任太政大臣、內大臣良經任左大臣、權大納言家實任右大臣、同源通親任內大臣、○中略入夜余○藤原家實參內、○中略奏慶賀、○中略余出自左衞門陣、○中略於二條町辻乘車、車副二人召加經町大炊御門、東洞院、中御門、高倉、正親町、東洞院等路、於東洞院西北門下自車、立北中門、令六條三位經家卿申慶賀於殿下、○藤原基通聞食了後再拜、了昇自階、　次公卿來集　次尊者內府○源通親來云々　余降自南階、兵部權大輔重邦取沓、自東參入、武守取松明祗候、○下略

〔後深心院關白記〕永德元年六月廿六日庚辰、今日右大將○足利義滿任大臣兼宣旨、酉刻參內、於一條邊伺見之、前駈四人、隨身如例、衞府六七人、此內五位一人屬從、公卿洞院大納言、侍從中納言、萬里小路中納言、按察帥中納言、別當中山宰相中將、殿上人頭弁經重朝臣、頭中將公仲朝臣、山科中將敎冬朝臣等連軒、大將著陣、諸卿同著陣云々、召仰之後、退出之所、可堂上之由有召、於泉殿盃酌數獻云々、入夜退出、於里第定大饗雜事、權弁賴房書定文之後、羞饌如恒、三獻云々、二獻常例歟、准后○藤原良基每事被口入云々、　七月廿三日丙午、是日任大臣節會也、　太政大臣藤原良基、元關白准三后　內大臣源義滿、

右大將知先之由、今日御宣下云々、〇中略 中劔、右大將參內、諸卿連軒扈從云々、及曉、准后被參、被駕唐庇車、隨身官人左右番長左右近衞六人云々、關白〇藤原師嗣以下扈從云々、有暫被始行節會、內弁左大將實時卿云々、事了太相國自先被向內府第云々、其後內府退出里第云々、于時丑剋許也、右府今夜爲尊者可行向內府第也、仍著裝束色目如恒、〇中略 今夜五獻云々、移穩座之時、相國傳陸等著座〇自實于云々、是奇異事也、翌日午剋事了、右府歸宅、

〔永享四年大饗定〕四月九日、可被行大饗之由令治定、廿五日、就大饗事、萬里小路大納言、新藤中納言局務官務等參會攝政第評定、總用三千五百貫許云々、廿六日、被出家司御點、廿七日、被補家司、以康任朝臣爲職事、〇中略 一惣奉行 松田丹後守〇中略 十九日〇六月 大饗方條々、一加補家司四人、御定 大外記清原業忠、正五位下高階經康、攝政家候人 正五位下源友長、九條前關白候人 正五位下平知定、已上、永德加補家司、亦四人也、一尊者事 可爲左大臣殿〇藤原持基云々 永德度右大臣殿也、今度右府〇源義教不快之間、可被申左府云々、廿三日、於室町殿御著陣、兼宣旨御習禮也、攝政萬里小路大納言、廣橋中納言、左大辨宰相清房、頭右大辨忠長朝臣、右中辨幸房、官務周枝宿禰、羽林頭中將殿、山科少將繁宗、飛鳥井少將雅親、已下濟々祗候之、各直垂大口、〇中略 廿四日、室町殿〇足利義教任大臣兼宣旨并御著陣、次於室町殿有大饗定事、〇御次第殿下御作歟、

〔室町殿元服并進拜賀等記〕一永享四年七月二十五日〇足利義教此日任內大臣、

一今日大饗被行之、于時攝政家頭辨甘露寺家先早旦ヨリ被參訖、攝政家二條殿ヨリ御差圖遲ク依被遣之、御用意少々臨時有其沙汰歟、

一大饗以前御參內、扈從公卿、〇人數六人名字注錄之 殿上人諸役人各參候、御出已前內々御一獻在之歟、不分明

御對客攝政御出以前、霖雨一行灌庭前、〇中略

一御參內、〇中略 還御、戌亥兩剋之間歟、

不行任大臣大饗

一尊者御入、（亥子剋歟）覽被立御車於四足御門、主人（上様）御出庭上、（ハシカクシノ間ヨリ御下）其後尊者練入、諸卿皆御佇立、諸事同拜賀之儀式、不及注之、其後御勸盃、饗膳以下儀式様々、終夜被行之、及曉亦管絃、堂上堂下コレアリ、又郢曲役人拍子ヲ合ス、其後被下祿畢、下臈ヨリ給之、零布ヲ案ニ置キ、主水司著赤衣令奉行、於庭上分賜之、

〔在盛卿記〕一任大臣大饗年々

永保三正廿六日　　康和二庚申七十七日壬午
永久三乙未四廿八日丁卯　　保元二丁丑八十九日戊子
永暦元庚辰八十一日丙辰　　建久六乙卯十一十日辛卯
正治元己未六廿二日壬午　　建暦二壬申六廿九日甲辰
嘉祿三丁亥四七日乙卯　　嘉禎元己未十二日辛卯
寬元二甲辰六十三日壬午　　仁治元庚子十廿日庚戌
仁治二辛丑四十七日乙亥　　正嘉二戊午十一一日丙午
弘長二壬戌正廿六日癸未　　文永四丁卯二廿六日辛巳
文永六己巳十一廿八日己巳　　建治元乙亥十二廿二日戊午
正應元戊子十一七日　　同四辛卯七廿九日甲子
永德元七廿三日丙午　　永享四壬子七廿五日壬午

〔資長朝臣記〕久安五年十月廿五日癸酉、今日任太政大臣（忠通〇藤原）云々、節會如例、（〇中略）今日須有大饗、而依御重服無其儀、

〔愚昧記〕安元三年二月十日庚辰、今日任大臣有無不定、是左大將（〇平重盛、三月五日任内大臣、）未入洛之故也、入夜之後、適入洛云々、亥剋許召使來云、早可參内、關白（〇藤原基房）被參云々、兼此告、申此由於向殿、示給云、只

今自大將許有示遣事、還不可參内也、若延引歟之由覺也、仍相待之間、中將自内裏示送云、延引了云云、仍前駈以下返遣了、延引事、入道(清盛○平)依我例、不可設饗之由云々、而重盛卿云、近衞大將任大臣之時、爭不儲饗哉云々、且此旨申合左府(經宗○藤原)之處、有大饗可宜之由示給之、故大將申院申延了也、可然歟、自本不可有饗之由勿論歟、入道例雖可然、如大將示、大將任大臣爭不饗哉、彼ハ別儀也、

〔玉海〕壽永二年三月廿九日甲午、今日定長密々語云、來月五日可有任丞相(實定○藤原)事、不可有大饗云云、是平家例耳、此事未曾有也、下官(兼實○藤原)依重喪不儲饗祿、敢不可爲例、平家一族、他人可爲規模哉、始起於希代之例、不重職之條、奈天意何、　五日己亥、此日任大臣(實定○藤原)也、無饗祿、希代之例也、

〔公卿補任〕(花園)正和二年

内大臣(前大納言大將任大臣例)　從一位源具守(六十五)　(十二月廿六日任、元前大納言、前左大將、無[illegible]、同日聽兵仗、)

〔小右記〕正曆六年(○長德元年)六月廿一日、内中、昨日兩大將宣旨被仰、中納言時中而無音退出、今日有被召仰事、仍今日行除目、下給兵部云々、(件事尋先例可識)被任大將之事、先預兼日被仰其人、然後被任者也、依有其儲而當日被任未知之事也、

〔中右記〕寬治七年十一月廿日甲午、依可任大將事、有除目、今日禁中御物忌也、乃殿下内府令參籠給也、未時許、大納言參内、(隨身褐衣、有文帶、紫淡縉、前駈八人、右兵衞督以下、右府子息五人件騎馬、)暫徘徊障壁外、内大臣此間著仗座、諸卿同被候、則供御前御裝束、其儀如宮奏、(東面)但依御物忌、北第一間(只一間也)垂御簾、御物忌付廂御簾、又大臣圓座外加敷殿下御料圓座、須臾出御、(御直衣)執柄殿下令候給、召藏人頭宗通朝臣、被仰可召大臣由、宗通朝臣出仗座召之、内大臣參上著御前座、即召人藏人兵部大輔通輔參候、依仰持參紙筆等、除目、右近衞大將正二位源朝臣雅實、(兼)將曹良定、件良貞中文、頭中將依仰持參御前也、事了大臣取除目退歸、於殿上召清書上卿(權中納言基忠卿)給之、上卿著陣、行清書并下名事等云々、此間大將參弓場殿、付頭中將奏慶賀、次拜舞、(先再拜之時、圓座等追前、後聞右府命云、彼拜ト申ハ、先一拜、次之拜時隨身可追前也、而其于左右左、賀讀後二拜、追前、是隨身等失也者、左少弁重資遲誠云々、)拜間

官人發歌笛聲、次府生等ニ御酒給ト被奏、（件詞前ニ、次將以下賜饗祿ト奏云々、）勅許之後、渡南庭參中宮御方、令權亮國信朝臣啓慶賀由、拜了還本路、出敷政門代、引率公卿幷次將以下歸還饗所、

元永二年二月六日壬午、今日可有任大將事、早旦先著直衣參東三條殿、此曉內大臣殿（○藤原忠通）相具女房渡給東對也、（○中略）

大臣後任左右大將人々、（大同二年置左近衞府、）右大臣源光任右大將、內大臣藤通隆任左大將、右大臣藤師實任左大將、內大臣藤信長任右大將、左大臣源俊房任左大將、內大臣藤忠通任左大將、

已上六人、此外多大納言口間被成大將也、

任大將事、兼日奉仰之時、撰日次儲饗饌於家、參內任大將後、引次將以下還家給饗祿也、春秋除目之次被成大將之時、不儲饗祿、後日申慶許也、而長和四年十月廿八日御堂左大臣間、准攝政秋除目初於直廬被行之時、內大臣公季辭申大將、其替宇治殿（○藤原賴通）大納言間、令成左大將給也、秋除目之次雖令成給、儲饗祿於家給次將以下之由、見御堂御記旨、今日殿下所被仰也、

〔百練抄 六崇德〕保延六年十一月廿六日、權大納言雅定蒙任大將宣旨、件事主上有御抑留、仍上皇（○鳥羽）幸近衞烏丸陣口、令申請給、仍被仰下、

〔續世繼 二鳥羽の御賀〕此院（○鳥羽）世をしらせ給ひて久しくおはしましゝに、萬の御まつりごと御心のまゝなるに、中院のおとゞ（○源雅定）の大將に成給ひしたび、人々あらそひて、さぬきの院（○崇德）位におはしましゝかば、ゑぶらせ給ひしにこそ、近衞のみかど、東宮にてまなめしける夜、にはかに內へ御幸とて、殿上人せう〳〵かぶりして、夜にいりて北の陣に御車立させたまひて、權大納言大將にまかりならん事、わざと申うけに參りたると、申入させ給へりしかば、さてこそやがて其夜なり給けれ、さねよしの大將下臈なれども、本よりなりゐ給へれば、かみには加へじとをさへ申給ひ、實ゆきの大納言、我こそ上らうなれば成らめと云て、下らうふたりに越られむ事と、內（○崇德）

任大將饗

をふたりして、かた〴〵申たまへば、御おぢの事さりがたくておさへさせ給ふなり、院にはさきに下らうを越てなさせ給ひしかども、なをいとおしみ出きて、なさむとおぼしめしかためけるに、うちのおさへさせ給へば、年比はかゝることもなきに、いと心よからず思召てみゆき有なりけり、

〔康富記〕應永廿六年二月七日壬午、二條大納言持基卿、可被任大將也云々、雖爲一人、小除目可被行哉由、先例被尋於淨居庵之間、雖爲一人、小除目被行之例、令注進之由被語仰了、　九日甲申、今夜大將宣下也、依爲分配予參陣、高倉〇少納言永季觸穢之間、於陣外內々著用裝束訖、戌刻參陣、自東門參內、內々儀也、上卿權中納言實秋卿著仗座、奧、頭右中弁藤光朝臣進奧座、仰某人可兼任左大將之旨、上卿移端座、令召官人、敷軾召外記、予正笏入宜仁門、平伏小庭、上卿目予、予搢笏就軾揖、上卿仰詞云、權大納言藤原朝臣持基宜兼任左近衛大將事傳仰、奧、此次上卿兵部省參哉由被問了、予申不參之由、予外記稱唯退、左廻、諸家之說也、次上卿令撤軾起座、人々退出了、時雨下、亥刻許也、仍歸宅、今夜二條殿持基卿左大將御兼任事、被超越上首大炊御門大納言宗氏卿、凡攝家被超凡家之條、先例繁多也、殊更二條殿來月縣召除目執筆御領掌之間、別如此御沙汰也、於大炊御門殿者、今度必可被咸申之由、兼日被望申之時、坠仙洞室町殿共御約束云々、今度左大將闕者、德大寺右大臣辭退之故也、仰詞之時、名字上一字被仰、是限攝家人歟、又何人ヲモ一字被仰之歟、大將宣下、予始從之間、不知分別者也、可尋之、

〔西宮記臨時十〕左右大將事

初任事、以右大將轉左大將之時、或饗、或不饗云々、越上臈任者饗辭表、次第任不然歟、除目以前、兼日事勸賂、用意饗、除目大臣以下著議所座、大將暫留於射場殿令奏慶、拜舞畢、此間可令奏饗事歟、渡南階前退出之間、近衛等候庭間發物聲、撫箏絃歌、于時率公卿及次將以下出從敷政門向里亭、少將以上垣下公卿各著座、公卿著外座、次將在內座、大將上臈、

(有親王大將者、中將上、)先近衞以上六位官人於庭前歌舞、訖著庭中座、(將曹以下近衞以上著此座、至將監者、其上在簀子敷、)次公卿及中少將等座立机、相次立机食床於庭中、給六位以下肴物盃酒、舞後被物匹絹等各有差、(讀但有管絃事、)但新任大將若在里亭者、引可到其所、(賭弓時方讎、准是可知、此日以親王爲垣下、蓋故實耳、)

饗飮之儀、如相撲還口、但令奏慶賀之次令奏畢、官人等給御酒、蒙可許退出、(上卿奉之、仰外記、)

〔北山抄 八大將饗抄〕初任事

〔江家次第 二十〕大將饗

寢殿南廂四間西廂三間放出、垂母屋簾、副立四尺屏風、(南若西庇南庇四第五間東邊、西庇南第三間北邊同立之、)上庇簾、南幷西庇敷差筵、(壁鋪子、)簀子同敷筵、(返壁橡鋪、)南庇西第四間以西、南北二行相對鋪高麗端帖、(南到第一間、北留第二間、)其上敷錦緣龍鬢土敷、北座敷茵三枚(爲公卿將座、)圓座四枚(爲中少將座、與公卿將絕座、)南座敷茵八枚、爲垣下公卿座、每間二枚歟、於播政關白第設此饗時、至參議中將并垣下參議座敷圓座、自餘不然、其前各鋪簀薦、其上立朱木机、設饌、(飯兼居之、有白絹面、)西庇南第二三間東西對座鋪紫端帖、爲殿上人座、其前立黑木机、設饌、(東西各七前、有白絹面、)渡殿南庇(若廊)鋪筵、其上鋪緣端帖、爲將監將曹座、其前立朴木机、設饌、(七前、有黃絹面、)渡殿前去砌三丈許、東西行鋪長筵三行、各敷黃端帖、爲府生以下座、其前各立黑漆臺盤三脚、居饌、(北第一行府生、第二行番長、第三行舍人、每一脚居饗飯一具、脚別高坏十坏、仍一行皆坏也、)其西南設酒部所幄一宇、(東西行、有錦幔、黑漆骨、以那波綰之、)其中東邊立酒樽一脚、(有臺、有朱漆杓、)其西立火爐臺一脚、(居火爐、)其西立二階白木棚一脚、(上層居白瓶子四口、中層置皆瓷瓶子一口井輪折敷等、)中門廊戸以北敷紫端帖二枚、立机六脚、爲家司座、

時剋大將參內、除目畢、未奏清書之間、參於弓場殿申慶、(付近衞次將若藏人頭申之、)拜舞之後、又付藏人頭令申官人可給御酒由、勅許訖後、藏人到陣仰上卿、上卿令外記傳仰彈正撿非違使、又被仰可爲左右馬寮御監由、仰上卿同仰外記、必非當日事、大將渡階下申慶於后宮之後、又渡階下經陣座前、人自敷政門退出、(將監以下一員番長等在前駈之前、隨身舍人五人在車後、官人束帶、番長以下褐衣白袴壺胡籙壺脛巾、舍人長接狩衣、)次將以下官人陪從等相從、發物聲歌遊、

公卿一兩(殿上人)、次將等乘車相從、陪從等迄閑同歌遊、大將於門外下車、入自中門、經車寄廊幷對屋外、留居殿上人座(一列)、次將以下入自中門、進南庭再拜、當階以西立、中少將一列、舉各經列前退出、大將以家司(四位)告次將等可着座由、次將等登自渡殿前階着座、大將着南庇公卿座、(留居之第二間、爲主人座、本位異之、直居第一間、)陪從等於酒部幄下賜物祿參進、(六位將監以下近衛、以上、求子、右近衛如常、)大臣任大將者、少將率府生以上各卅員舍人等也、

次敷大將座(當間座、諸大夫敷之、五位職事置之、大將上臈不敷云々、仍敷短下、)公卿座上(若大將上臈者、可敷大將座於公卿座上、近例件座不自晴方持來、以西爲禮時、自東方持來、)次大將經簀子敷到寢殿坤角簀子、插笏取坏(五位藏人執瓶子、大將往反間、次將平伏、殿上人本座執之、或於本座下取之、)到次將座上勸之如常、大將着圓座、(此間將監勸盃、府生勸盃等、後々如斯、)一獻畢後、垣下公卿着座、次居大將饌、(五位二人昇之、赤木机、无實盤、)次二獻、(公卿勸之如前、但次將座上勸之、殿上五位執瓶子、後々准此、此獻居汁物、晴時例、)三獻、居汁物、(冷)着下、四獻、(同上)此獻次將與公卿相揖、居汁物、(近衛、或勸之、大將一獻、公卿殿上人執之、)五獻、(同上)此獻或勸大將、擬次將、與公卿相揖、(同上)居菓子薯蕷粥、

次給次將祿、殿上人取之、中將織物褂一領、袴一腰、少將白褂一重、袴一腰、次將退、大將同退、(或不退)次給官人以下祿、將監(絹二匹)、將曹(絹一匹、一屯)、府生(絹一匹)、番長(布四段)、近衛(布二段)、

次給公卿祿、(殿上四位以下取之)先參議(織物褂一領、袴一腰)、次中納言(女裝束一襲)、次大納言(女裝束、加細長)、

事了公卿退出、若臨暗者、以府官人立明、

給立明官人祿、(匹絹、以府官人給之、)

寬治七年十二月廿七日、民部卿中納言中將、(以上有引出物)

承保四年四月九日、大將幷次將等退座後、關白出着座給、更坏酌二獻、(初獻殿下、二獻民部卿勸殿下、)其後給公卿祿、引出物馬二匹、民部卿、藤大納言、(忠家)

〔江家次第(四正月)〕除目

近衛大將　除日被任時、不設饗云々、

〔源氏物語(四十九寄生)〕二月のついたちごろに、なをしものとかいふことに、權大納言になりて、右大將

かけ給つ、〇兼任撰宮右のおほい殿左にておはしけるが、志し給へるところなりけり、よろこびに所々ありき給て、此宮〇宮旬にもまいり給へり、〇中略やがてこよひつかさの人にろく給、あるじの所にと、さうじ奉り給を、なやみ給人によりてぞ、おぼしたゆたひ給める、左のおほい殿の志たまひけるまゝにとて、六條院にてなん有ける、ゑむがのみこたち上達部、大饗におとらず、あまりさはがしきまでなんつどひ給ける、この宮もわたり給て、志づ心なければ、まだことはてぬにいそぎかへり給へるを、おほい殿の御かたにはいとあかずめざましうとの給、

〔西宮記臨時十〕左右大將事

天慶元年六月廿三日吏部王記云、是日除目云々、以實頼卿爲右近大將、是夕設彼饗所、寢殿南廂鋪席、母屋施簾、簾前南面施屏風、南面西上設中少將座、(土舗、公卿時加茵、少將圓座云々、)北面設垣下王公座、亥刻大將奏慶畢、來近衛等歌吹、大將即就垣下座、請次將就座、次王公著座、即以机各一前設膳、□□□樂舞駿河舞求子等、畢將曹以上座南欄、府生以下座庭中、(北面西上、數重座、)垣下四位以下座鋪東廂西面南上、五六巡比、給近衛祿之□□□月日以大臣任大將之日、大將奏賀、退出之間、於敷政門外初發物聲、次將到里第、拜禮歌舞、了將曹已上著軒廊、府生以下座庭中、中將掛袴、少將掛、將監以下例祿、

〔小右記〕長和四年十月廿九日丙午、資平來云、去夜左相府(〇藤原道長)被奏大將慶、次大將(〇藤原頼通)奏慶、又奏官人已下饗祿事、(此事有奏聞、不殊聞云々、)資平仰中納言行成將等到大將家、次將已下拜禮、依左相府命云々、更不聞之事也、主人著座之後、次將有可著座之命、即著座、次公卿著座、五獻有次將祿、(從下給了、)起座後有公卿祿、(女裝束、)此間左相府出居客亭、有盃酒事、大納言公任爲上首、仍有引出物(馬一疋、)贈物(細、)等、獻琵琶和琴於相府、令召官人等脫衣給之、卿相同脫、除目清書、卿相上參云々、又云、主上左寮御馬一疋差左馬頭保昌、遣左大將頼通所、可充隨身料者、大將勸盃酒、一獻右兵衛督、二獻源宰相、三獻資平、此事往古不聞、就中此度可無賞翫、

〔定家朝臣記〕康平五年四月廿二日己亥、今日有任大將(師實)事、午刻内府殿下參内給、頃之參進御前、有除目事、(内府令執筆給、)畢後拜除目於右兵衛督、於弓場以左中將信宗朝臣、被奏慶賀、舞踏之後、府官人已下率參於弓場前庭、發歌笛聲、此間令以少納言奉經、祿事給、其後卿相殿上人引率被參而后御方、令申慶悅由給、

府差進假御隨身於弓場、即以相從、將監武行、將曹安武、府生下毛野近行、番長秦近重、已上束帶、壺胡籙、番長已下褐衣、狩胡籙、壺脛巾、府官人已下發歌笛、在御車後、

申剋此間少雨、仍用雨儀、新將軍引率朝相等、令退出給、御座東三條(殿下儀以御座皇太后宮大夫二位中將家以被參、)將軍暫御座西廂殿上人座、爰府中將已下府生以上、於西廊有拜禮、(二位中將不列立、)次將一列(東面北上、中將信宗朝臣、宗俊朝臣、少將政長、實季、俊明、)將監已下一列、(北面東上、)拜了後、將軍御座南庇座、以左中辨泰憲朝臣被仰、次將可著座由、(次將立西透渡殿西馬道邊、)承仰外自渡口著座二位中將(家)同以著座、次公卿以下著座、皇太后宮大夫、權大納言、左衛門督、宮内卿、右兵衛督、六條中納言、左兵衛督、新宰相中將、左大辨、右京大夫、右大弁、左衛門督、暫不被著座、中將宗俊朝臣依對座也、中將避座、著殿上人座、後被著座、次府將監已下六人於西廊舞求子、了著座、將監武行、將曹安武、府生光重、重邦、番長二人先一獻、(新將軍令執盃給、兩國守義通朝臣勸二將、勸盃濟於此後五位勸之、五位一人勸二府生座、)(此後又如此、□□□□□□□□)二獻、(皇太后宮大夫)三獻、(權大納言)著汁物、(汁物、鯉膾、鮎燒等、)次四獻、(左衛門督、鳥喰、生鮑、小魚等、)次五獻、(右衛門督、肴物、)(鯉膾、鮎原作、)此間、升立府生已下祿、案一脚於西廊馬道間、家司孝言朝臣相副知家事大膳屬重倫唱名給之、如大褂、府生(疋絹)番長(布四段)案主(三端)府掌(三段)近衛(二段)次供菓子、(椿餅、栗、枝柿、柑子、)次給將曹祿、(諸大夫四位已下取之、將監二疋、將曹一疋、綿一屯、)次中少將祿、(殿上四位取之、)各纏頭退下、

二位中將女裝束一具、中將薄物細長一領、袴一腰、少將白掛一領、袴一腰、

次公卿祿、(殿上人取之、)大納言女裝束、(加給綿細長、)中納言女裝束、宰相薄物細長、袴一腰、

爰日景已暗、供燈、召武行、安武、光重等、各賜給衣、次公卿已下各以退出、此後將軍下自西渡殿、於西廊

令中慶賀於殿下給、○中略豫居饗饌兼居飯二種物也、

中少將上達部、赤木机、(有實)

將監將曹、朴机、　府生已下、黑漆食床、

依用御隨身所大盤幷諸陣大盤、每一行居垸飯卅盃、其前居飯箸等、

殿上人、黑柹机、　諸大夫饗如恒

〔中右記〕寬治八年(○嘉保元年)三月廿八日己亥、任大將(○藤原忠實)有除目事、未時許大殿(○藤原師實)幷關白殿(○藤原師通)令參內給、相次左大臣已下諸卿等參集陣座、卽依仰藏人等供奉御裝束、一如官奏儀、但關白御料圓座一枚加敷之、少時宸儀出御晝御座、(御直衣)關白參候御前圓座、(大殿密々御候後云々)藏人頭左中辨季仲朝臣含勅命召左大臣(在仗座)左府參上殿上、卽被參御前了、頃之左大臣召人藏人勘解由次官時範參候、左大臣仰可進紙筆之由、時範退歸、取續紙硯筆等(入御筥)持參、除目右近衛大將從二位藤原朝臣忠實(兼)將監下毛野厚季、(元將曹)權少將正五位下源顯通、右近衛權中將從四位上藤顯實、(元少將)權少將正五位下源有賢(元左今度)侍從從五位上藤家政、從五位下源師重、除目了奏覽反給、左大臣取之退下、於殿上召左兵衛督俊實卿給之、彼卿著陣座行淸書事、此間大殿幷殿下於弓場殿被奏慶賀、(頭辨傳奏之)拜舞畢歸昇殿上、次左大將被參弓場殿、(先是御殿下御宿也、蒔繪劍無文石、改有文幷螺鈿劍、自南庭方令進弓場殿給也、)左近官人幷御隨身等出本陣追參、(番長下毛野厚時爲隨身、元關白御隨身也、)大將被奏慶由(左中將國信朝臣奏之)拜舞、(後拜間隨身等追前、官人等發歡笛音、府生道守重廉取拍子歌御笠山曲、)以藏人頭季仲朝臣被奏饗祿事、了大將令退出給、(自右衞門陣退出給之)次將已下官人等相從、此外左馬頭道良朝臣、右少將能俊朝臣、宗輔、侍從家政扈從、此間兩殿下先御東三條了、卽大將引次將以下還東三條給、入自西門、(頃而諸卿參入)大將先著給殿上人座上方、(件座在寢殿西廂)次將已下列立南庭拜、(中將國信朝臣、少將有家朝臣、俊忠朝臣、忠教、官人在後、)畢退歸、次大將移居上達部座、(在南廂端、與次將座對座也、)次大將召家司讚岐守行家朝臣、被仰次將等可著座由、行家朝臣仰此由、次將等一々著座、(南廂奧座也)此間諸卿假著殿上人座、次又將監已下官人

六人、於南庭歌舞求子、(藏人將監高階仲敍在此中、著靑摺、座也、鳫方縫腋袍等、)此間本府宰相中將保實卿參入加著次將座上、官人歌舞了退歸、各以著座、(將監將曹座在西邊廊板敷上、府生以下座在庭中、三行敷之、但藏人將監不著座、追又著殿上人座末、)次一獻、(將監座初獻藤仲朝臣、府生座初獻行綱、大將陪膳淸實、)大將勸盃、次將瓶子、藏人兵部大輔通輔、(先例多五位藏人勸此事云々、)大將放盞間、家司左衞門佐盛長取圓座、出自東方、敷次將座上方、大將移著之、次諸卿著座、(南座端也、)次二獻、(大納言經信卿、瓶子左少將顯實、)次三獻口(大納言、瓶子家俊歟、)次府汁物、次四獻、(大納言師忠卿、瓶子轉盞上達部座、)此次居汁物、次五獻、(大納言家忠卿瓶子、)此間給祿於將監以下、午時關白殿出東簀子、著御上達部座上、(右中將宗輔取圓座敷之、)權左中辨基綱朝臣居關白御前物、(高坏三本、居肴物、)次大納言宗俊執盃、勸關白、關白擬民部卿、卿擬大將、其已下次第轉盞巡流、次大殿下出自東簀子敷、□高加納筵之上、(著御座、[illegible])月卿雲客皆悉起座、關白殿下敬屈退座、大殿著御、(四疊、俵切座也、左馬頭道頁朝臣先敷圓座、)御座定後關白移著奧方、(御圓座并御前物、以移居奧方也、)依殿命、諸卿次將皆復本座、大殿取盃、(前美濃守行朝臣傳取獻之、)右大將[illegible]大殿不居肴物、)勸給于卿相座、民部卿爲上首遞巡賜盃、卽奉關白、關白又賜藤大納言、大納言轉大將、自其以下相互轉盃、次民部卿起座執盃奉大殿、大殿擬中宮大夫、中宮大夫給之奉關白、關白擬藤大納言、大納言擬大將、次第巡流、抑此兩度盃爵之巡、避父之儀也、越次第自叶蠶尾廻流之儀者歟、酣醉優遊、興味未盡、凡事之華麗冠絕古今、此間龍蹄二疋、御鎺一腰、被進大殿、和琴琵琶、被獻關白殿、(大將殿獻也、)次給次將祿、次給上達部祿、(殿上人四位五位役之、)但此中戶部祿有新儀、右衞門督取之給之、殊有叡慮歟、御馬一疋給戶部、今日珍事也、事了上下起座、大殿下召左近將監厚季、脫御衣給之、藤大納言、中宮大夫、新大納言同賜厚季、今日依爲大將權隨身也、又大殿下召關白隨身府生下毛野武忠、復賜御衣、關白又召大殿御隨身番長秦公種、給御單衣、中宮大夫、新大納言相從各以纏頭、了人々退歸、今日左次將不參二人也、顯中將宗通朝臣所勞、少將顯通今日新任、仍不參也、

大將殿於此處、令中大殿於慶賀給、則拜賀云々、北政所并太后宮々渡御東三條西面、今朝右大臣引率子姪、右大將以下被參東三條也、人々扈從、凡今日大將饗事、自叶去寬仁元年四月故二條關

白之大將饗儀、太政大臣入道殿〇藤原道長攝政內大臣故宇治殿〇頼通出自簾中加於座上、今日之儀、文以如此、
不圖今日復見先公舊儀、誠是千載之一遇、後代之美談也、

(長秋記)保延元年二月八日壬子、雨下、皇后宮大夫頼長任右大將除目云々、〇中略大將著垣下公卿座第一、以知信朝臣被仰、次將等可著座之由、知信承仰下、自透渡殿仰之、中將忠基朝臣、經定朝臣、少將公能朝臣、忠頼朝臣、經家朝臣著座、次宰相中將重通朝臣追著加、大將起座、於簀子敷西一間、取盃勸次將、五位藏人資信取瓶子、皇宮少進顯憲取圓座敷次將座上、大將著之、次公卿殿上人著座、大納言忠教卿、師頼卿、顯雅卿、中納言實能卿、伊通卿、宗能卿、顯頼卿、參議成通卿、師俊卿、公教卿、無座退歸云々次大夫將監多忠方朝臣、中原貞清、府生重元、助忠、已上四人束帶、帶劍指笏、番長海正友、秦正清、已上二人褐襖袴拍子、將監近方和琴、將曹遠兼箏、行永笛、貞成進南殿、舞求子、事了各著座、其座可尋次二獻、民部卿、忠教卿瓶子、左少辨俊雅經公卿座上頭弁將軍座西、更就次將座上之、三獻、大宮權大夫師頼、瓶子若狹守公信、其儀如前、四獻、源大納言顯雅、瓶子中務少輔師能、此度擬大將、大將擬戶部、戶部擬重通、重通擬大宮大夫、大夫擬忠基、以下如此、五獻右衞門督實能、瓶子有教、金吾擬民部卿、民部卿擬大將、大將擬大夫、大夫擬重通、以下如此、左大辨盃傳殿上人座、次居菓物、此間少納言雅國取菅圓座敷公卿座上、次關白出居給、次居肴物、陪膳右京權大夫顯親朝臣役諸大夫、六獻、大宮大夫依大殿命起座取之、進座上、獻關白、次關白起座退本方、次取圓座敷將軍座上、小退將軍座歟、同移居肴物、次皇后宮亮雅信朝臣取圓座敷東屏風下、前大相國〇藤原忠實出自西面著之給、此間諸卿以下皆起座者、相國居給後、關白大將經次將座北著座、諸卿次將又著之、次知信朝臣持參盃、左大辨取瓶子、相國取盃擬戶部、戶部獻關白、關白擬大夫、大夫擬將軍、將軍擬源大納言、以下如前、次民部卿獻盃大殿、大殿擬大夫、大夫獻關白、關白擬源大納言、大納言擬將軍、將軍如先、民部卿大宮大夫共取次杓、其理可然哉、次舁立祿案、前駿河守伴廣親召府生以下給祿、次將監將曹、次次將祿、次公卿祿、此間大宮大夫退出、左宰相中將公教雖不居座賜祿、入

任女官儀

夜雨止、座以下座在廊中、酒部輾在泉西頭廊中、宰相中將成通後晉云、民部卿源大納言各給龍蹄一疋、將軍關白獻箏和琴、中納言宗能、宰相中將公敎取之、關白殿又獻大將子銀劍、宰相中將重通取之、左大辨取之、持參西面云々、後聞民部卿一人御馬一員、

〔兵範記〕久壽三年(保元元年)三月四日乙巳、任大將事云々、(中略)左大將(公敎)於同所(弓場)又被奏慶賀、(中略)次退出里亭(三條高倉殿、大相國〈實行〉御亭)、有大饗事、(中略)鋪設裝束、其儀如常、中門廊設將監座、將軍暫在殿上人座、此間按察使中納言(重通)右衞門督(公能)春宮權大夫(經宗)左大弁(實光)右兵衞督(雅定)會合、方中將行通朝臣、少將俊通朝臣、實定朝臣列庭中、家司散位有光朝臣依將軍命、令勸昇、次將公卿對座、次片舞、次盃酌、五獻、初獻、將軍敍人右少弁資長取杓、家司式部權少輔維光敷將軍圓座、四位家司勸將監盃、五位勸府生等、五獻了、內府出著公卿座、殿上五位敷圓座、次居肴物、(四位家司邦明、維光、五位三人役送之、)次內府勸盃於一納言、殿上五位取杓、次太政大臣出座、殿上五位定隆敷圓座、次居肴物、內藏頭光隆朝臣爲陪膳、諸大夫三人役送、次大閤勸盃、四位傳盃、春宮權大夫取杓、次將監次將公卿等與祿、大將被獻馬於內府、(二疋)太閤被牽之、(二疋)事了分散、于時夜半云々、被定隨身所別當散位爲範、厩別當散位宗實、

〔內裏式下〕任女官式

侍臣於殿上、喚中務宣補任將參來、卿先侍殿上、大輔執補任宮、少輔執硯宮、昇殿、卿傳執補任宮、大輔執硯宮、少輔退降、勅曰、將參來、卿稱唯進奉覽、少退侍御筆、點定可任者賜卿、就本座書除目、訖納宮擎候、勅曰、將參來、卿稱唯進奉覽、勅曰令唱、卿稱唯復本座、授大輔、少輔昇執硯宮、訖以次退降、候陣側、輔執計名簿、(爾雲除目闕大輔書之、若無大輔、輔書之、)授於內侍預令點撿、少時內侍率可任者、(初出之間在先率之、列座之時居同位上、)列座南廂西第一間、東面北上、異位重行、闈司坐版下、訖內侍(闈引之外、)臨檻召中務、侍陣輔稱唯昇當御座侍立於簀子敷上唱之、(若有不參者、闕留代稱唯也、)被唱之人稱唯進、簀子敷上當南廂西第三間、北面東上侍列坐之事一同初儀、其夫人以上者、不在唱任之例、訖輔退降、次被任人自下退出、唯典侍已上別留、肅拜而退、

任女官儀

〔儀式　八〕任女官儀

侍臣於殿上喚中務宣、持補任參來、卿先侍殿上、大輔執補任筥、少輔執硯筥、昇殿、卿傳執補任筥、大輔執硯筥、少輔退降、勅旨將參來、卿稱唯進奉覽、少退而侍御筆、點定可任者、賜卿、卿就本座書除目、訖納筥奉候、勅曰、將參、卿稱唯進奉覽、勅曰、令唱、卿稱唯復本座、授大輔、少輔昇執硯筥、訖以次退降候陣側、輔執計名簿、(卿書除目、闕大輔書之、若無大輔、輔代書之、)授於內侍預令撿、少時內侍率可任者、(初出之間在先率之、初座之時居同位上、)列坐南廂西第一間、東面北上、異位重行、闈司坐最下、訖內侍(闕道人之外)臨檻召中務侍陣、輔稱唯昇當御座、侍於簀子敷上、當南廂西第三間北面東上侍列坐之事一同口(○空格上文、內裏式作初字、)儀、其夫人以上者、不在唱任之限、訖輔退降、次被任人自下退出、唯典侍已上列留、當拜而退、

〔西宮記　臨時八〕典侍饗女官事

新任之後、詣縫殿陣令奏慶賀由、(諸司陣邊立、縫殿陪從下仕候所、)爲內侍一人出來傳奏、(書司一人相列、女官乘燭、)給祿、(女裝一襲、入散緒筥、)中宮御內者、付內侍令啓慶賀、(有贈物、)典侍又以祿授內侍、(承平)中宮職縫殿寮立幄設前駈酒肴、後日典侍參內、於禁中便所設掌侍以上饗祿、於縫殿高殿給女官饗祿、(立幄)

新任拜賀

〔伊呂波字類抄　波疊字〕拜賀

〔名目抄　私儀〕拜賀(ハイガ)　奏慶(當世ソウケイト云、名目出來ル、更不知故實、可尋事也、)

〔名目抄詳注　私儀〕拜賀

當時ハ藏人ニ補セラルヽニ拜賀、頭ニ補セラルヽトキ拜賀、參議以上勿論拜賀、延享年中ノ比ヨリ、少納言又辨官等、補任ゴトニ拜賀アルナリ、當時權官ヨリ正官ニ轉ズル時モ拜賀アルナリ、

〔貞丈雜記　四官位〕一拜賀、奏慶、慶賀の事、此三色ともに官位之御禮を禁裏へ參內して申上る事を云なり、

〔故實拾要 十〕奏慶　拜賀

是ハ任官ノ拜禮ノコトヲ云也、官ニ任ゼラルヽ人、其官ノ慶賀ヲ天子ヘ奏スルノ義也、是ヲ拜賀トモ奏賀トモ云也、諸官何レモ此義アリ、是ヲ被行トキハ、殿上ノ小庭ヨリ入テ階ノ前ニテ此式ヲ被行也、奏慶ヲ不被行ハ、其當官ノ職ヲ勤ルコト依不叶、任官以後早速拜賀ヲ被行事也、

〔雲州消息 下本〕謹言上、依靈臺之勤、登龍作之官、年齡雖老、何恨之、有明日可申慶賀、前駈之人無家僕之可然、諸宮恪勤者可招一兩、侍帶刀之中得意之者、試可相語也、細馬壹疋可被借及、不要沛艾、可足騎用也、爲完無馬之人也、悍戰謹言、

二月日　中納言

右衞門督殿

〔西宮記 臨時五〕新任官敍位人

除目下名給二省之後、三日之中、先參敍陣、令近衞次將(地下將付藏人傳奏)令奏候由、(上達部殿上人等奏ニ清書之後、以頭藏人令奏、公卿參射場殿、地下公卿經階下參入、二度除目、三人以上參之、)近衞將參上、奏其人々候由、(數多者、注取可奏之、)勅許之後、著劍笏立慶賀人前、(以南後之、)仰云、聞食(止)、宣(不、)慶賀人稱唯拜舞、(中將還國)次參院、(內國)院宮可然所々令申事由、(拜二)衞府官三日之間、有假隨身、(威裝并六位元ニ隨身、大將官人一員、弁參議番長已下、中將近衞四人、少將二人、佐四人、)歸日給祿、非參議侍兵部移著劍、(侍從中將隨身著之)擇吉日、著本陣本官、(衞府陣官上藤ニ見參、同給祿、藏官人已下給祿、)受國人、除目之外不外申慶賀、補所々別當者、陣外所不申、

〔侍中群要 十〕慶賀奏

(家)近衞司奏之、若殿上不候者、地下次將付藏人令奏、藏人奏聞後、仰同人聞食之由、

若上卿付藏人令奏、藏人隨其官取笏著劍令奏、上卿殿上人於射場、又上卿於仁壽殿東小庭令奏、

賜御馬、慶等著劍通南殿、

(式)令中慶賀并懸中事

地下人參腋陣、近衛將令奏、次將不候、藏人奏之、上達部殿上人參射場令奏、藏人奏之、〈近衛將奏之、雖殿上人、又於腋陣令奏、有何難哉云々、常事也、〉僧侶參朔平門外令奏、〈近衛次將之時、藏人傳奏云々、藏人奏聞之後仰次將、俗慶如此云々、〉上卿ハ奏詞如見參、四位五位六位又同前、〈地下六位可奏官姓名歟、還例只奏名、〉除目之時、地下下﨟之者、及三人之時奏聞云々、

〔夕拜備急至要抄下〕一任大臣節會

新任大臣慶賀申次、〈職事可勤之、於弓場奏之、〉可經階前之由被奏、被奏發祿、〈勅答聞食、於陣仰上卿、〉

〔北山抄九羽林要抄裏書〕任大臣、新任大臣、參無名門外令申慶賀、亦用近衛次將、但入道殿〈道長〉〇藤原御子孫者、以藏人頭被申云々、非參議大弁藏人頭於無名門申之、自餘於掖陣申之、〈地下人者、立溝橋西、〉往年非殿上公卿於左近陣邊申之、〈立壇邊、〉近例不然、參議以上入自和德門、經左青瑣宣仁階下等、

〔侍中群要九〕大將慶賀

近衛大將新任之時、令奏慶賀之後、又召藏人令奏、聊可給酒肴於士卒之狀、奏聞之後、藏人召撿非違使下宣旨云々、〈刑部書事也、〉

〔北山抄九羽林要抄〕除目奏慶事〈王公於弓場令奏、非參議掖陣、但殿上人或於射場奏之、〉

次將參上奏曰、某々〈親王參、某官某親王、无官者名、大臣如令說、但太政大臣異之、三位以上、官姓朝臣、有兼官者申其官、四位不別參議非參議、名朝臣、五位名、六位姓名、但殿上六位同五位、〉候〈布、待三人以上奏之、〉王卿不待、若多人數注、取次第、二分以下不奏、但上官奏云々、〈諒闇同、不拜舞、仍相對仰聞食由、重畏人想不奏、〉奉勅稱唯退下、著劍把笏、向御前方、〈任人在後、〉仰曰、聞食止宣布、稱唯拜舞、不待後拜退去、若殿上次將不候者、非殿上次將、令藏人傳奏、〈王卿及殿上人、令藏人奏、〉殿上侍臣清書之後、不待下名令奏、〈近例、侍臣不待清書、自餘不待下名奏之、〉奏僧綱內供慶者、帶劍把笏、先向陣外相逢、〈於脩明門外令奏、〉然後參上奏聞、〈皆奏名、但僧綱加職、〉奉仰退下、又帶劍、令持祿物於小舍人、〈僧綱褂、內供衾、〉進搢笏取祿、對立、仰聞食由給之、

初任事

兼諸國巡授者、殿上次將令奏慶由、不申他所、被補所々別當之時、陣中者、令藏人奏慶賀由、陣外之所不奏、

〔北山抄九 羽林要抄裏書〕近代兼殿上次將、不奏巡授慶賀、

〔書札禮〕大將拜賀

仰兵部省年預状

來某日可有御拜賀、兵部省移文事、任例可被沙汰者、依左大將殿御氣色、執達如件、

月　日　　左衛門尉某奉

左京進殿

仰廳頭状

來某日可有御拜賀、一員任例可被差進者、依左大將殿御氣色、執達如件、

月　日　　左衛門尉某奉

左近廳頭殿

參議中將拜賀三位又同

仰廳頭状

來某月日可有御拜賀、一員府生番長任例可被差進者、依新宰相中將殿御氣色、執達如件、

月　日　　左衛門尉某奉

左近廳頭殿

還仰　如法午剋可被催進候

次將拜賀

請兵部省年預狀

來月日右新少將殿可有御拜賀兵部省移文事任例可被沙汰進者依權中納言殿御氣色執達如件

月　日　　左衞門尉某奉

左京進殿

追仰　如法午剋可被催進候也

藏人所出納院主典代爲年預者書謹上逐申字又止被字可令沙汰給ト書也

仰廳頭狀

來某日新少將殿可有御拜賀御隨身三人任例可令差進給者依權中納言殿御氣色執達如件

月　日　　左衞門尉某奉

右近廳頭殿

追申　如法午剋可被差進候

事長親之儀也不然者右新少將殿御氣色之由載也

〔侍中群要一〕補頭以下事

申慶賀所々

母后　當時后宮一所　執政人　別當大臣云々此外隨其意之請後日兩貫首御許

〔參議要抄下〕一初任事

申慶賀事

藏人頭者先除目入眼事可有朝恩由仍申表衣於執柄又借有文帶已上宿所畫又申檳榔毛於執柄若可然公卿入眼日除目未畢前立陣除目清書了後於宿所改裝束冬時必用打衣於明義門廊板橋東申慶

賀、〈藏人頭作法隨〉拜舞了退出、又申於御禁中後宮幷春宮等退出、其宿所留新疊等附屬鐘頭、近代末奏清書前退出、後日自里亭申之、出門三町之程、每社置人、制法師女犬等、參內之儀、入自和德門、往年地下公卿於陣座後立蔀之外申云々、近代者經宜仁門軒廊階下申之、所々推上、其前駈六人以下、而佐理參議抄云、前駈二人也、多時不可過四人云々、是延光納言所教小野宮大臣也

〔新任辨官抄〕拜賀事

自右轉左中賀、自權轉正不申慶賀云々、

〔西宮記臨時五〕女依慶賀參內例

延長二三十一日、李中六條、從三位藤原褒子叙從二位、十六日、褒子參北陣令申慶由、〈自中宮被仰中〉掌侍部子傳奏、給白褂二重、御衣筥二合、〈納宮人御装束各二重、以綾羅之蒔螺鈿云々〉

〔親信朝臣記〕天延二年二月廿八日、任太政大臣、〈○中略〉太政大臣〈○藤原兼通〉自直廬參射場、令左近衞中將正清朝臣奏慶退出、

〔小右記〕正曆六年〈○長德元年〉六月廿一日丙申、右大臣〈○藤原道兼〉參弓場殿令奏慶賀云々、新任大將奏慶賀、未有舊人之奏賀歟、故殿天慶七年四月十六日御記云、今日兼任大將之宣旨了、奏慶賀否之由、依殿仰令聞、外記幷殿之日記無所見云々、同十七日御記云、兼任大將之時奏慶之由、外記殿之日記無所見之狀執申了、依無所見不令奏者、

〔定家朝臣記〕康平三年七月十七日癸卯、申剋納言殿下〈○藤原師實〉令參內給、〈○中略〉頃之大內記正家持參宣命草、〈以右大臣〈藤原教通〉爲左大臣、以內大臣〈藤原賴宗〉爲右大臣、以大納言〈藤原師實〉爲內大臣、件宣命以職事可內覽歟、〉酉剋節會、藤大納言〈信家〉爲內辨、右兵衞督經成卿爲宣命使、事畢參御所令奏慶賀、次中宮御方、〈有贈物、空一管、〉次皇后宮御方、〈贈物御手本云々〉十九日、參所々令申慶賀給、前駈四十餘人、〈此中殿上人十九人〉院、〈有贈物、和琴一張、河霧、〉春宮、〈被聽昇殿、開設有御拜、〉皇太后宮、〈空一管〉

高藏殿、(頭中將先被申北政所、師於中門有御拜、次被申一宮御方、於左府、左大弁被迎、有拜禮、捧中、有御拜、次參進廉中、給有御賜物、手本二卷、納宮藏物、讓令出給、被龍蹄二匹、)

前駈殿上人十九人

信宗朝臣　長房朝臣　師基朝臣　能季朝臣　公房朝臣　忠俊朝臣　基家朝臣　實綱朝臣　憲輔朝臣　高房朝臣　隆方　師實　政長　師信　定家(已上四位、五位)　資家　清綱(已上藏人)

地下公達一人(右衛門佐師仲)

諸大夫廿四人

範永朝臣　良任朝臣　資良朝臣　長季朝臣　俊經　爲仲　義綱　經章　資成　行房

定俊　惟綱　伊綱　良綱　實淸　季綱　賴綱　公成　藤原長明　源賴仲　藤原行綱

藤原知綱　平經方　高階經遠

〔古事談臣節二〕宇治殿(○藤原賴通)任太政大臣、申慶給之日、及拜舞之時、內弁左大臣(○藤原教通、大二條殿)跪地云々、春宮大夫(能信)聞之難云、未聞大臣跪地之例云々、大二條殿又聞之云、宇治殿可存親之由、入道殿(○藤原道長)所被仰也、跪父者常禮也、如春宮大夫爭聞入道殿仰事哉云々、

〔扶桑略記後三條二十九〕延久二年二月廿三日、關白(○藤原敎通)任太政大臣、(○公卿補任作三月廿三日)廿五日、關白太政大臣參入宇治別業、被申慶賀於前太政大臣(○藤原賴通)有拜謝之禮、人以嘆美、未聞有人臣乍居堂上受關白太政大臣拜之例矣、

〔殿暦〕康和二年七月十七日壬午、參內、前駈廿人、共公卿、右大弁午剋參內、於東對東庇南面有反閉事、(陰陽師道言)經中門廊出自東門、前駈廿人、(自二條北、自中御門至西洞院、折至大宮、)下陽明門、經建春宣陽等門暫候直廬、(淑景舍)頃之覽宣命草、次淸書、此間有敕剋節會了、(○此日藤原忠實任右大臣、)酉時許先解劍、隨身改布衣、經和德左青瑣宜仁等門、宜陽殿西壇上、幷軒廊東二間南殿階下、參射場殿、(西面)以右近中將顯實奏慶賀拜舞、次付五位藏人爲隆、令奏可給遷祿於公卿以下之由、歸來仰聞食了由之次、被聽昇殿、又拜舞、昇自小板敷居

具座小臺盤下、卽立參進御座、次經本路幷承香殿北路、參中宮御方、(飛香舍)亮高實啓事由、次拜了依召參御前、退出之次給御贈物、有家來取之、(和琴件物)經本路幷和德門前溫明殿北東路出、雖可有出立儀、依人々無此儀、雖然外記史有崩於左衛門陣屛二間程立留、以凰鳴笏、外記留召使、(召使二人)稱唯出、自外記門進行、外記史留路如例、出自陽明門、經本路、入自東門、向中門、立松樹邊、以道良卿申慶賀於殿、拜了昇自東對南階、頃之公卿來著後下立南階、(西腋)重仲取沓、昇者以下列立、(參議已上一列、辨少納言一列、外記史一列、)再拜畢立定、予渡立階東腋搢、昇者此間如常昇自南階、(先右足)昇著親王座、次昇者又著座、次公卿昇自同階著座、次々儀如常、

〔古事談二臣節〕師遠任攝津守、參知足院入道殿、(○藤原忠實)申慶賀之時、不持笏三度奉拜、入道殿自中門連子令御覽被仰云、嘗師遠也云々、(師遠之心也)入簾室之時不把笏云々、此謂歟、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十二月廿日戊午、去二日將軍家(○源實朝)令任右大臣給、　廿一日己未、將軍家、爲大臣拜賀、明年正月依可有御參鶴岳宮、御裝束御車已下調度等、又自仙洞被下之、今日到著、又屬從上達部坊門亞相已下可被參向云云、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年正月廿七日戊子、今日將軍家右大臣爲拜賀御參鶴岳八幡宮、御社參酉剋、御出行列、

先居飼四人(二行)　次舍人四人(二行)　次一員(二行)　將曹菅野景盛　府生狛盛光　將軍中原成能(以下束帶)

次殿上人(二行)

一條侍從能氏(○中略)

次前駈笠持、次前駈、(二行)

藤勾當頼隆(○中略)

次官人

秦兼峯　番長下毛野敦秀

次御車　車副四人　牛童一人

次隨兵二行

小笠原次郎長清（甲、小櫻威、）　武田五郎信光（甲、黑糸威、）　伊豆左衛門尉頼定（甲、萌黄威、）

隱岐左衛門尉基行（甲、紅威、）　大須賀太郎道信（甲、藤威、）　式部大夫泰時（甲、小櫻、）

秋田城介景盛（甲、黑糸、）　三浦小太郎時村（甲、萌黄、）　河越次郎重時（甲、紅、）

荻野次郎景員（甲、藤威、）　各冑持一人、張替持一人、傍頭所ㇾ行、但糸威今不ㇾ令ㇾ持₂張替₁、

次雜色廿人（皆平禮）　次検非違使

大夫判官景廉（束帶、平塵蒔太刀、舎人一人、郎等四人、調度懸、小舎童各一人、看督長二人、火長二人、雜色六人、放免五人、）

次御調度懸

佐々木五郎左衛門尉義清

次下﨟御隨身

秦公氏　同兼村　播磨貞文　中臣近任　下毛野敦光　同敦氏

次公卿

新大納言忠信（前駈五人）　左衛門督實氏（子、隨身四人、）　宰相中將國道（子、隨身四人、）

八條三位光盛　刑部卿三位宗長（各乘車）

次

左衛門大夫光員（〇中略）

路次隨兵一千騎也

令入宮寺樓門御之時、右京兆、(○北條義時)俄有心神御違例事、讓御劍於仲章朝臣退去給、於神宮寺御拜殿之後、令歸小野御亭給、及夜陰神拜事終、漸令退出御之處、當宮別當阿闍梨公曉、窺來于石階之際、取御劍奉侵丞相、(○下略)

(後愚昧記)貞治二年正月一日壬寅、左大將(○藤原實夏)拜賀、自陣家(中納言宅一條東洞院西頃、禁裏咫尺也)出立、幕下息前中納言公定卿嫁藤黃門息女、依彼由緒也、抑彼拜賀料已全分不足、大略難遂之間、以當時居住亭(行明)(諸國人請)沽却成觀僧(若門云々)万五千疋、遂此節了云々、

應安二年正月十五日、右大將(○藤原公直)明日拜賀幷節會事條々、以折紙尋送之、示遣了、　十六日、(右大將拜賀)本所儀、寢殿設公卿座、(兼日撤御簾、其上立四尺屏風、對座敷之、但主人座不敷之也)元公卿座設殿上人座、隨身所不設之、於此亭拜賀之人、先々以車宿爲隨身所云々、而今度無其儀、仍隨身不著之、又不及酒肴沙汰云々、大將拜賀路、隨身所之例不打任事歟、可謂違例也、主人(○公直)出座之時、出自公卿座、(今所設之公卿座殿上座也)東妻戸簾中女房儀、(設近衞府、右幕下儀也云々)寢殿、先是隨身(元在中門內)皆悉參向妻戸門前庭、(取松明、實御前)主人著座之後、列居件所云々、次中納言(實直)幷藤中納言列立侍屋屏前、主人下自中門切妻、相揖藤黃門乘車參內云々、路次、歸亭之後、立中門二間、(拜舞之儀、中門下、中納言行家同勤仕之云々)其後覽吉書、(直衡同覽之云々)抑前右府(冬直)來本所、見立之體也云々、出門以前有盃酌獻云々、仍及深更云々、頗無心之至歟、景大夫人道(法名、土岐大膳大夫入道家人也、修理亮)侍屋毎事奥道金(號尾張左衞門、大夫人、右大將家侍所頭者)、(號丹州山國庄、以右大將立于、以土岐賴康去年武家進預勤厥了)、祇候右大將亭云々、也、相共奉行體也云々、幽職嚴重拜賀、法體放埒(以元內々爲土岐家人、不度人、仍知此)之者祇候侍屋、頗可謂不相應歟、

永德元年七月廿三日、今日任大臣節會也、(○中略)今夜相國(○藤原義滿)(太政大臣)又拜賀也、節會了渡南庭、於無名門前拜舞、內府(○足利義滿)拜賀以前云々、彼扈從人々可尋記之、相國拜賀了退出、(向花亭歟、是爲著座也云々)其後內府下自東小御所休所南所、(此間公卿等列立云々)渡南庭出中門、於無名門前奏慶云々、委儀皆悉大納言

記之、仍不能違記耳、

〔康富記〕寶德二年六月十九日辛卯、今夜內大臣殿（公保公）御拜賀也、入左衞門陣、經床子座幷陣立蔀內、於東妻、於無名門有拜舞、申次藏人權右中弁綱光也、拜舞畢入无名門、著殿上給、令參御前給、御退出同門出、如先經陣內床子前、（出床子座立蔀西妻給）無御簡書、司不被相觸兩局之間、外記史等不及參陣、主殿寮不儲立明、不被催之故歟、床子座暗然、雖然大臣殿一人令經給、前駈廻立蔀外、出逢陣東妻奉迎之、衞府長隨被具、爲狩衣之間不入立蔀內者也、諸司依無所促不參陣、官人同不能相催矣、扈從上卿帥大納言、（實雅卿）三條中納言、（公綱卿）殿上人阿野中將季遠朝臣、甘露寺左中弁親長朝臣、勸修寺右中弁敎秀朝臣、滋野井少將殿、敎國朝臣、（已上公卿毛車、殿上人騎馬）四辻少將實仲、（但路次不扈從、參會下車所之）以上五人、地下前駈前宮內大輔藤原淸光朝臣、前右京大夫有統、周防守永種、左近將監淸春、（已上騎馬）治部少輔政統、（自轉法輪殿被進之、不供奉、路次參會也）以上五人、衞府長一人、（秦久布騎馬）此外布衣侍安藝守（保久）所司侍式部丞藤原景氏、（衣冠騎馬）參會之、下家司（□倉云々）帥大納言之前駈民部大輔永尙（騎馬）也、布衣侍一人參會之、中納言被具布衣一騎、（敎賢朝臣伊東將監）景基、次令參仙洞（○後崇光）給、申次左中弁親長朝臣也、參御前被拜天顏云々、（總相雲客列可尋注之）

〔親長卿記〕文明二年九月廿四日、今夜頭右中弁種光朝臣奏慶云々、院御方（○後花園）依無便宜申免、（予奏聞）不申奏慶、准后御方（○後土御門御母藤原信子）於屛中門下（御懸簾）申之歟、不見物殿上如形藏人將監菅原在數參勤、申次太刀相應之物依無之、假用黑太刀、不可爲例、　廿七日、頭右大弁春房朝臣今夜奏慶、（障角迷方）先及晚新大納言、（雅光）予、勸修寺前中納言、（敎秀）源中納言、（雅行）勸解由小路前中納言、（高淸）滋野井前宰相中將、藤宰相、（永繼、令着敍束）衆顯、政顯、菅原在數等在此席、三獻之後出仕、（於一獻之儀者、於春房朝臣陣座有之儀、出門之儀）借用隣且出仕、（依有門形墻也）先參室町殿、於中門下（西面御懸屛中門也）舞踏、次參內立弓場、藏人將監菅原在數出逢春房朝臣、揖之後退入歸出一揖、春房揖、次舞踏、次昇殿（入無名門之時、給笏於僮僕）著奧座、藏人依目許參著橫座、次依目許藏人著前、召主殿司召硯直、次主殿司居湯漬、著下卽直著、次召藏人申吉書云々由、內侍被出、（南面妻戶號鬼間也）藏人

菅原在數取脂燭前行、春房朝臣起座奏聞、奏聞畢歸本座、引裹紙令懷中、(出納不參、下家司沙汰歟、)頭右中弁拜賀之時如此云々、退出更昇殿上、參御前、院御方拜事、依無其所申免了、予今朝令奏聞了、　四年四月四日、入夜元長(藏人頭)○藤原長子中拜賀、(元長職事拜賀)　先著束帶、次勸修寺大納言(教秀)中御門中納言(宣胤)三條少將(實隆)座列三獻之後起座、元長下殿著沓二拜、次二拜、母堂拜也、次參內、(先可參室町殿之由雖存、入四足門之後、有所勞、仍先可參內之由仰含了、)立殿上、藏人中務丞橘通任下殿、元長拱之後、藏人參入、暫歸出拱、次元長舞踏昇殿、著殿上末座、(殿上日此次著座末所、)(疊立綠子、此日中參役、職事了、殿上執事無之、用意仍微僧作法上立之、非分之事也、)藏人橘通任著橫座、元長目之、藏人起座著奧座、召主殿司召硯直机歸座、次又目之、催湯漬、(近日職事拜賀略之、今度如形儀歟、其沙汰也、)主殿司居湯漬、居上座上、食湯漬、藏人目之、直著之後歸本座、次示藏人申吉書歟之由歸出、以內侍可奏聞云々、仍於臺盤所妻戶(臺盤所)(也、撤之、然而所對戶、)奏聞之、被返下之後歸本座、著下書如例、出納(職事一紙覽畢)於座上(可與讀也、不)持來返抄、元長加判返給云々、次起座被召御前、被下天盃、予同參御前、予被下天盃祝著了、　六年十二月廿三日、自中御門中納言(宣胤)許、就拜賀條々尋之返答、　就御拜賀、當日先可有用意條々、

一中次可與奪之由、可被仰頭辨事、(內々狀)　若被仰五位職事者、直內々可被語仰、(內々狀)

一官方吉書事(有無可依御所存)

　一藏人方吉書事

一勸授事

　一石帶可為有文巡方、(御拜賀之後出仕者、可為無文玉丸鞆、)

一平緒可為紺地、(依年齡可被用紫緂、)

(宣胤卿記)現任公卿(文明十二)

(未拜賀)關白左大臣政家公(近衞殿)

(未拜賀九州在國)右大臣藤公敦公(三條)

(未拜賀)內大臣藤信量公(大炊御門)

(未拜賀還任也)中院大納言(通秀)(中略)○

(未拜賀及數年)源大納言(雅行)(中略)○

(未拜賀)右大將(冬頁)(中略)○

(未拜賀及數年)兵部卿(宗綱)

(未拜賀)飛鳥井中納言(雅康)(中略)○

(未拜賀)新中納言(綠光)

(未拜賀及數年)今出川中納言(公興)(當時依所勞辭)

(未拜賀及數年)久我中納言(豐通)(中略)○

(未拜賀)藤宰相(永顯)

宰相中將殿義一（同代々不被申拜賀云々）　侍從宰相政爲（未拜賀及數年）

〔宣胤卿記〕文明十二年二月廿九日庚辰、自禪閤有御書、幕下（○足利義尙）御拜賀、來月中下旬之間、日次事尋在通卿可申云々、則遣使者尋之、十四日廿日廿二日、此三ヶ日撰申、以狀付女房進入了、（○中略）

御拜賀日

三月十四日甲午　時酉　廿日庚子　時戌　廿二日壬寅　時亥

二月廿九日從三位在通

三月廿日庚子、朝間雨下屬晴、今日左幕下御奏慶延引、雖屬晴可爲深泥之間、可爲廿二日之由、有禪閤御書、各相觸了、　廿二日壬寅、左幕下御拜賀事、就風雨又可被延引歟之由尋申之處、只可爲今夜之由有御返事、仍秉燭程宣秀（○宣胤子）令著束帶（十五歲以前之間、單ハフシ金ソメ、冠ハ透額也、其外無殊事、色目注別）、余著衣冠（見訪公卿一向無人、必著衣冠可被參之由、兼日有仰）、參日野亭（侍從政資朝臣亂後新造家也、禪閤御所大亂最初燒失、未被作、室町殿燒跡東邊、不可說小家、此兩三年令渡給者也）、及昏各參集令著裝束給程也、禪閤同秉燭以前令渡給云々、御裝束藤宰相遲參之間、兵部卿（定綱）候之、又日時勘文事、可被覽歟之由尋申處、不可有其儀之由有仰、被勘文秦清卿渡宣秀之間、留余方了、次有一獻（三サカヅキ、禪閤、幕下、亭主三人許也、其後各參御前、更有三獻）、前藤大納言資世、勸修寺中納言（經茂、非家禮）、余、日野中納言（廣光）、侍從宰相（政爲）等也、余外皆直垂體也、亭主直衣有座、其外殿上人有次間之間不見、二獻之時有召出、三獻幕下爲御杓、公卿殿上人至諸大夫被召出、次殿上人取杓亭主被官（侍）召出、別依子細也、次幕下令著公卿座給（南面）、秦清卿自南簀子參進勸御身固事、次幕下出公卿座南妻戶、降中門廊南切妻給、忠顯朝臣獻沓（隨身傳之）、禪閤御方御拜事、臨期被略之、依深泥歟、次御出門、先殿上前驅、（下﨟爲先）、次地下前驅（不足十人、之時一行）、下﨟爲先、次番頭取松明、次番長（白狩袴狩胡籙、童雁巾、取松明）、次主人、次下﨟隨身（今度一人也、持御裾、大將拜賀隨身人事、今度初例歟、亂中淸華人、或大臣無大將、拜賀臨期辭大將、依隨身之大儀也、尤無念事歟、末代無力次第也）、次笠持以下雜人在御後、參內入西面四足門、經床子座前給、（番長一人經立蔀內）向政官上首揖而過給（左少弁元長一人有床子座答揖）、自立蔀北掖殿上人取松明（宣秀不取之、准階下也）、令立弓場代、頭

中將宣親朝臣申次之、御舞踏等如例、入無名門出神仙門、令著殿上給、次宣親朝臣來申召由、御起座經上戶御參、但無御前召、內々於議定所御對面、自高遣戶御退出、不經床子座出四足門給、不歸日野亭給、直令歸本亭給、〈內々八葉車用意之〉仍各申禮退散了、

御拜賀　殿上前駈　宣親朝臣　資氏朝臣

忠顯朝臣　顯基

宣秀　卜部兼致

藤原長胤

地下前駈　久任　親秀

行長　俊兼

御隨身　番長秦延兼　近衞秦兼周

御身固　西洞院三位

此散狀後日書進了、但宣秀申沙汰之間、長胤下ニ書載了、宣秀書進分之、

公卿不參事、每度之佳例也、攝家禮不參殿上人事、

爲親朝臣　所勞

基富朝臣　在國

新任拜賀

〔年中行事歌合〕四十九番　右〈勝〉　奏慶　入道大納言〈○忠顯〉

わすれめや二代にこえし位山君のめぐみに立まひし世を

〔西宮記〈臨時五〉〕新任官敍位人

凡給官爵无觀者取吉日拜慶事、〈三拜〉

賀新任

〔西宮記〈臨時入〉〕親王大臣補大學別當饗事

延喜四以式部卿爲別當、四堂參賀、設北堂饗於西對并廊、他三堂饗在御廐、南堂竿堂有慾退去、明法一堂不退、

承平七十一十四、以右大臣爲別當、進士一兩、所衆十人、明法竿堂共參賀、令家司申事由、再拜著侍所、他道共混著北堂、頗難識、而依主人仰然著之、

〔貞信公記〕延長二年正月廿二日辛酉、有任大臣、（○此日右大臣藤原忠平轉左大臣、大納言藤原定方任右大臣、）依病不參、大臣以下來賀、不得相謁、

〔小右記〕治安元年八月七日庚戌、晚頭匠作來云、依昨日關白（○藤原賴通）命、束帶參入、今日勸學院步、依可有其儲者、近代上達部勸盃云々、上古專不然、入夜匠作來云、勸學院衆秉燭後參關白殿、兄弟納言及彼是卿相參入勸盃、先進見參拜禮、後著饗座、三獻、後居復飯、朗詠、各給絹二疋、先日寄對時、學生步依有所勞不給祿、仍賜二疋者、　廿二日乙丑、今日勸學院步、仍任近代例、西對東庇設座席、座後立屏風机廿前、禮部匠作來、秉燭後學生來、令進見參、永信朝臣執進、（見參二枚、經歷寮、）仰可參入之由、入自中門進庭中、（有官別當、無官別當、次學生等、）拜禮、此間隨身等執燎立、拜禮畢、有官別當民部丞數舒已上十一人著座、一獻、治部卿經通、（參議、）右大弁定賴、（參議、）二獻、修理大夫資平、（參議、）民部大輔顯定、次居汁、次三獻、美濃守賴任、四位侍從經任以下著、四獻、經任、（依可然入、隔度役、）右少將良賴、其後左頭中將朝任、右中弁章信來、諸大夫等多來、四獻了居復飯、次撤饗、然而只飯少々令撤、令賜從者、是例也、先是朗詠、万歲千秋、各給疋絹、大夫執之、知院事三人給疋絹、知院事案主等政所給饗、又案主雜色仕丁賜布八十端、

〔台記〕保延二年十二月廿五日戊午、今日興福寺參賀也、（○藤原賴長、是月九日任內大臣、）予（○賴長）未剋渡東三條、長物見車以牛童令遣之、前駈女房雖可渡、依所勞不渡、余渡之後、大殿（○藤原忠實）令渡給、（烏帽直衣也、）頭之北政所令渡給、大殿被仰云、僧正無車云々、可遣內府車之由被仰、頭憲頭之自僧正許被申云、求得民部卿車候也、仍予車不遣、僧正許、於關白殿（○藤原忠通）者不令渡給也、申剋許、余著束帶、參大殿御前、被仰云、可取僧正祿、參議未來、可相待、秉燭程、宰相中將實衡參入、先是新大納言被來、（直衣、）宗輔來、（束帶、）實衡參入之由申大殿、被仰云、事の闕ぬべかり鶴ニ極悅思ところナリ、仍予此由示宰相中將、暫相待僧參會、居臺南廣庇、此間帥卿被來、（束帶、）知信來申僧已參由、予著對南庇圓座、僧皆下車列立之後、知信來予座下、小揖、告僧參會由、心歟、予答云、此方（西、）先是大殿反渡殿邊令坐給、知信歸去之間、予起座出自南、更西行

天對廣庇西階中級立、（其階有三級、仍中級ニ立、東面、）僧正漸昇中門内給間、予同昇、立對南西向妻戸南腋、僧正欲著座之時、予更南行、又東行（天）自南面著圓座、次僧綱巳講僧著、次五師得業著障子上座、著了宰相中將實衡取祿給僧正僧綱、加僧正有六人、四位家司四人、合一人不足、仍先ニ取、權別當祿三人又取之、巳講巳下五位取之、皆置了後、自西透廊引僧正引出物、馬鞍對南橋をひきとほさんとす、大殿被仰云、ひきとほすべからず、仍橋南ヲ一隔廻ひきまはして、漸欲引出中門之時、僧正從僧取之、次僧正巳下立座了、此間予起座、自南出參大殿御前、僧侶皆退出、大殿並北政所還御近衛殿、頃之予著直衣、歸大炊御門亭、僧參會之間ハ、隨身皆著褐冠帶弓箭、

裝束

東對南庇四ヶ間敷蓙疊、副北並東障子立四尺屏風、（不用臺、）其南敷高麗端疊三帖、其上敷茵圓座等、爲僧正以下座、

別當僧正座（東京錦茵）　權別當大僧都（紫端圓座）　少僧都（青端圓座）

律師法橋（高麗端圓座）

其東敷紫端疊二帖、爲巳講座、（西上南面）西一間頰寄南敷圓座、爲主人座、南弘庇敷弘筵、（中門廊不敷）東廊人町（○町一本作所）障子上之間北端布、上懸御簾、（東南障子上不懸、）東西二行敷紫端疊六枚、爲五師得業所司等座、（西上對座）

祿法

別當僧正（白大掛一重、白色織物細長、參議取之、）　權別當大僧都（白大掛一重、四位家司取之、）

自餘僧綱（白掛一領、四位家司取之）　巳講（單重、五位諸大夫取之）

五師得業（以疋絹六丈絹、紙裹之、）　所司（絹不裹、）

巳上五位諸大夫取之

僧正引出物（所司以上祿了引之）

馬一匹諸卿炬、諸司皆五位衛府等叙之、

〔西宮記臨時五〕新任官叙位人

公卿取吉日著宜陽殿及陣座、東西面、公卿初參者、或入自敷政門云々、尋常尚可入自和德門、大將著官掌辨侍給本陣者不著本座、公卿初爲日上行辨事之時、召使官掌等給祿、辨官祿、○中略補頭藏人者、初參內者如給官人、但傍職事、付簡之後退出、昇殿職事者雖過三日、參內有拜禮、

〔參議要抄下臨時〕一初任事

著陣事

先仰史令鋪宜陽殿座、參議以上皆入自敷政門、經宜仁門、昇自宜陽殿北第一間北邊、脫履於壇上、著東座、西面、上古著西座、然依大入道御說也、不向壁之意歟、不煖座三息云々而起、著左仗座如例、但近代雖參議、猶著大納言座、南面又不煖座而起、退出自敷政門、今日不向他所、是不可付人下之故云々、

〔北山抄八大將要抄〕近代大將申慶賀後、以吉日參、

初任事

初著陣者、署月奏若官人解由、右陣又不著本座、次將座例也、

〔北山抄九羽林要抄〕初任事

初任中少將者、下名之後、待兵部充文帶劍、其前不帶之、令奏慶賀之由、主次々日、先文之有无、諸人不可必知、仍皆帶之、其後撰日就陣、左陣先著納言南座、次將本座也、次移著硯中座、文書加署、行日給事、臨官人申、擇許而已、

〔書札禮〕納言著陣大中納言無差別

仰官外記狀

明日某日可著陣、任例可被下知之狀如件、

月　日　權中納言判

大外記殿

頭辨狀

來某日可著陣、假令參議給乎、每事期見參、謹言、

月　日　　　　權中納言判

右大辨殿

直辨中少辨又同

頭職事狀

來某日可著陣候、吉書令奏下給乎、每事期見參、謹言、

月　日　　　　權中納言判

藏人佐殿

〔小右記〕治安元年八月一日甲辰、今日差遣府生近衞一人、府生吉貞、近衞□□、呼吉平朝臣、令勘初參等日、其勘文等注裏、可造倚子事、仰右中弁章信、官外記倚子侍從所前机等也、關白倚子若後日可被立歟、吉平云、昨只被勘初參給之日、廿一日不被仰可立倚子之日事、廿一日外又無吉日者、彼十一日可參入、承令參給之時剋可參入、又下官倚子不可借立、被立彼倚子之後可令立也、縱雖同日、立彼御倚子之後可立之由、密々可候氣色事相示之間、有彼殿命、仍參入計之候氣色歟、

擇申可著御直廬陣座日時

今月廿一日甲子、時未申、

擇申可造御倚子日時

今月十三日丙辰、時午申、　十六日己未、時巳未申、

擇申可立官外記倚子日時侍從所前机同時可立

今月廿一日甲子○時未申、中略、

擇申可著御本陣日時
九月廿八日庚子、時午申、　十月二日甲子、時未申、
擇申可被行請諸官日時
八月十六日己未、時午未、　廿一日甲子、時巳、
十月二日甲辰、時巳未、　廿二日甲午、時巳未、

七日庚戌、傳聞、今日內大臣(實資○藤原)初參、披察示送云、公卿初著陣日及拜賀、先例如何侍乎、又大臣參著時、兩儀自溫明殿砌可退出歟、報云、公卿初參時反閉不聞事也、但大臣初參時有反閉歟、又未知事也、下官大納言參議時、初參日不令反閉、大臣初參異他歟、關白被初參之例尤可佳、被申案內可被從彼例吉也、又內府爲大納言初參時、反閉有無如何、又初參兩儀未知事也、初參日自敷政門可用出入歟、然者猶可用溫明殿壇歟如何、　廿九日壬申、今朝陣儲粥、而思慮未著陣之間、用府物可有憚之上、今日申日也、仍不可用之由、仰將曹、　九月十九日辛卯、月奏進不見返給、依未著陣不署也、

〔小右記〕正曆六年(○長德元年)六月十九日甲午、今日大臣召、午剋許參內、先是權大納言顯光卿在陣承宣命事、(以大納言道長爲右大臣、以中納言公季爲大納言、但權大納言顯光、權中納言時中、懷忠等轉正、○中略)余(實資○藤原)退出、次惟仲公任出、自餘留立拜舞出歸參陣、懷忠著陣、諸卿云、轉正之人、又擇吉日著宜陽殿陣等也、已似忘、

〔定家朝臣記〕康平五年六月五日庚辰、申剋內府殿下(○藤原師實)初著本陣給、先入西門、經階下御坐宮御方、次著本陣、(件陣三間也、一間敷大將御座西端敷等、東二間敷次將座、緣端疊、御前方敷次將南座也、)中將信宗、――少將政長、俊明著座、將曹安武持參日奏、(入筥)次獻硯筥、少將俊明各以傳獻之、(此間上臈將二人曹立座)令加署給返給、次有請印、了(大權納云々)將監武行奉仕之、(於中門西廂小板數爲之)了同經階下著右仗座、有申文云々、頭弁下奉吉書云々、其後直出御了、

今日被尋先例、皇太后宮大夫被申云、清愼公任左大將時、申九條殿、從宰相中將任中納言、解由任左將、申日奏者、殿下著御之時、申日奏由、所被仰也、

〔中右記〕嘉承元年十二月廿九日丙戌、今日必可有和奏、先可著陣也、仍先令陰陽助家榮勘申日時、今日申剋者、剋限參內、入從西陣幷敷政門代、先著陣奧座納言座上程、須臾移著端座、(中文史不見、渡南儀也、)以官人令敷軾、頃而右大弁時範著參議座上程、史捧文杖候東小庭、予目之、稱唯趍進献奉文、置笏於左、予左右手ニ持文、史座定後、置文於前披之、推文於右一々披見天置左、次引延端紙天先置端、史取之推延、予一々見文、左手ニ取文給史、(是學依座之傳用左手也、)傳文令見之、仰詞仰了、史每度稱唯、取副杖退歸、了大弁歸座、次藏人弁爲隆下吉書、予結申文下間弁、結申仰了、弁稱唯起座、於床子座下史獻、此後從敷政門代退出、但入藏人少將宗能直廬以休息、依可有官奏、只今內府被參內云々、仍又可參內、故候藏人町也、(五墓日著陣例、貞信公五月著座、五墓日云々、仍用今日也、)

今日右大弁已下弁官五人初參結政、新中納言左大弁被著陣云々、

〔台記〕保延二年十二月十六日己酉、秉燭程、著烏帽直衣、乘副車、參近衞殿、及深更渡東三條、先是內房乘予(○藤原頼長)長物見車、渡東三條也、爲明日著陣也、　十七日庚戌、今日大臣從始著陣日(○頼長十二月九日任內大臣)也、未剋許、予欲著束帶、撥髮之間、知信(知信ヘ、衣冠、遣賀信貞、件日時、家重勘之、件勘文云、剋限申剋、)持來日時勘文、予云、著陣束帶可見歟、知信云、不可然、仍予見日時勘文、返給知信、知信持來大殿(○藤原忠實)云々、未終著裝束、著裝束之間、新大納言實能著直衣、被來、著裝束了後、師卿來、爲尋剋限、尋宗憲之處、宗憲已退出、仍不能尋剋限、召知信問云、宗憲退出之條如何、又剋限已成歟如何、知信云、宗憲所申置之日景まだし、又問隨身參否、番長公治未參、頃之、公治參、次予出居于對南廂主人座、師卿來著、新大納言云、剋限已上、早可參內、仍予下、自中門中於門前乘車、此間、實光卿下立中門東面南方、予同下立相揖、出門乘車町北行、(○中略)入洞院西南四足參內、經床子前之間、下下簾尻、床子座前ニ暫立留テ、仰官人兼弘云、可問剋限、兼弘、肩さまにはしりいりて、相具右近官人一人歸來、兼弘不返答之、須申申剋成由、而不返答、兼弘不知案內歟、予問師卿云、申剋成歟、師卿云、申剋也、仍予著右仗奧座第一間西際立、(大臣著二間一也、然而著陣日著一間、是說

之故也、但非指作法歟、昔見未及者也、次帥卿來著、予問帥卿云、大弁參タリヤ、帥云未參、遣使催候ナリ、又帥卿召官人、
問大弁參否、官人申云、經遣史幷弁侍等、未參、且令參之由所候也、此間頻遣人、實親敢不參、此間憲俊
陣座ノ小庭ノ東土遣戸ヲアケテ謂予云、參議不參之間、暫可參御前之由有其召、予欲參、帥云、申文
ヲハリテこそ令參給はめ、予答憲俊云、申文未了、仍不能參、申文了後可參、頃之、左大弁實親參入、著
床子座、予謂帥卿云、非參議大弁こそ、先於床子座文ハ見レ、參議大弁は、先著陣座、申文時ニこそ、又
著床子座テ文ハ見レ、帥卿召官人雖仰此旨、實親不聽、猶於床子座見申文、見了後著陣座、予仰云、今
は申文、雖非作法、只うちいふなり、實親立座、此時予移著端座、居奥座タリツルホドニ居なり、向奥揖、○註略次召
官人令置軾、次官人來置軾、其次デニ令直沓、○註略官人シリゾキサル、次左大弁實親著座、申云、申文、
予正笏目之、實親微音稱唯、左顧、史持文杖候小庭、予目之、史稱唯、出自二間東、於際進出、著軾進文、予
笏ヲ置右テ、以左右手取文置前、史座定之後、予先押折表衣襴妻テ開表卷紙、以右手紙ノ右端ノ上
下ノ妻ヲ引展、此間ハ以左手文ヲヲサヘタリ、以右手文ヲ三通ナガラ、右端ニヲシヤリテ、以左手
紙ノ左端ノ上下妻ヲ展事如初、此間以右手、又文ヲヲサヘタリ、先見馬料、見了置左方、次見鈎文、披
見之間、表紙右端乍具、今一通文奥さまへ被卷、予見了、文左方ニ置、次ニ更ニ展紙テ、取今一通鈎文、
見了置左テ如本文三通ヲ懸紙ニ卷籠テ置端座、文上南、文下北、上懸疊、文下在板、史取之、先開表紙、先結鈎文二通、
予再ナガラ仰云、申給へ、微音仰ナリ次給馬料、予小揖、史乍三度高稱唯、卷文取副杖揖、退出之間、予取笏、
頭弁遲下吉書、予謂帥卿云、申文了之由、可告頭弁、帥以官人傳告、雖然頭弁蹔不見、此間實親揖著沓
立座、居參議座下方、頃之、頭弁公行、陣座小庭東土遣戸ヲアケテ來、著軾下吉書、予笏ヲ置右テ取文、
史ノ進文之時、史座定見之、職事下文時ハ、取マヽニ見也、如初ニ先押折表衣襴妻テ、先開表紙、以右
手紙ノ右端ノ上下ノ妻ヲ引展、此間以左手文ヲ抑タリ、以右手文ヲ右端ニヲシヤリテ、以左手紙
ノ左端ノ上下妻ヲ展事如初、此間以右手又抑文タリ、次取文少き座奥方ニ向テ開テ、端ニシテマ

著座

ハシテ押合ヲ、合眼頸弁、頸弁仰曰、宜旨ヘ、ノ〆予微音稱唯、巻文、此間頸弁退下、次巻懸紙、丁文ヲ置前ヲ取笏、次召官人、二音可召、雖然一音召之時、官人稱唯、仍不召、召二官人一時、實光卿召次之、官人参上、予仰云、弁召セ、左少弁俊雅参著膝、予笏ヲ口置テ、右手ニ取文下弁、俊雅給書ヲ、先開懸紙、次開書結申押合、合眼予之時、予仰云、宜旨ヘ、ノ〆俊雅微音稱唯退下、此間予取笏、次實光、實親起座、予向奥ヲ揖、下居右廻ヲ著沓、左廻ヲ南向ヲ揖天、歴柱中、ヲ退下、歴床子座前之間、予相向實親小揖、小揖了、予語實光云、上達部上官等爲出立、暫不可退出、予依召参入御前也、次参御前、取出籍進句等、予ニ令見御、次予退出、出自西面四足門之間、外記史左右前行、外記右、史左、隨身欲前行、予留之、北行過陣屋之間、予以扇叩笏、史外記相向留居、同音稱唯、此間予下下重尻立留、外記召召使、二音、召使稱唯、此間予乍垂下重尻過外記史前、此間召使左右相分前行、左二人、右一人、警前音、使有二召使、隨身不具、過史外記前了、以下重尻懸笏、至二條更西折行、召使至幔下、左右平伏警前音、予過此中ヲ、幔ヲ東去コト六七尺許ニシテ左廻、東向ヲ立垂尻、實光已下西面立、六位外記史ハ平伏セリ、此間予前駆雜色等、自幔南北遶出、次予深揖、實光已下答揖、次予右廻、出北幔門、乗車、参内之時モ、自北幔門入也、退出之路如本、今日下臈隨身借一人、正員四人、可有六人、五人非也、参内退出之時、皆歩行、

〔後愚昧記〕應安二年正月十六日、節會及翌日十七日午剋事終云々、右大將公直、○藤原遲参之故云々、彼卿節會以前雖可遂著陣、以外遲参之間、節會儀了後著陣、本陣右儀許行之、無陣申文并吉書云々、是大弁直弁等退出之故云々、

〔公卿補任孝明〕慶應二年

權大納言　正二位　藤原實良三十二　正月十八日兼左大將爲二左馬寮御監一、任二月八日拜賀著陣、同日申二行本陣著陣一、

〔参議要抄下〕一　初任事

著座事今日請二著座日時并雜事一、近代多用二二月丙午一、貞信公之例也、或用二十月庚子一、仰二装束司史一令レ造二兀子一、有レ所レ申二請御物等一、造二備宿所於

八省東廊、(常宮西門)付廊柱懸簾、其内儲座、東砌樹幔、又借内裏近邊人家爲出立所、剋限參内、裝束并前駈、路頭作法准上、(但具靴)人自待賢門下車之時、可令立陽明門之由示之、著八省廊宿所、遣問剋限、(問陰陽寮辨)次入自官西門、若入夜之時者、前駈取火前行、經兩幔中到官正廳、後昇自西階、於壇上著靴、(今按、於屏後可著歟)入自西戸著座、又不煖座退出、次向外記、(有兩說、或作著靴向、或改淺履、於外記小屋著靴、)次入自外記廳北面西戸著座、又不煖座而起、於小屋改履、出自陽明門、此間上臈同日著座之時、相逢途中不相揖云々、各爲不知過遑宿所、官掌以下給養祿如常、三箇日間毎日儲美饌、與來客勸之、及第四日著烏帽子直衣、乘檳榔還家、

行成抄云、參議誤雖入中戸、不可改、有四誡、著座之間以有異相爲吉、蹈死人頭、或遣車於其上、爲第一吉相、只以犬渡前爲凶相、

小野宮大臣著座之時、有孝子著重服入宿所、吉例也、

隆國卿著座之時、兀子上有死兒子手、競問小野宮大臣、返事云、取弃件手可改敷物、不可語人、此又吉相也云々、

經信卿著座之時、參議之度無車棟、納言之度於宿所失枕、並吉相云々、無上心歟、

通俊卿著座之時、於宿所詠郭公和歌、遂不歌哭之義、

泰憲卿著座之時、犬渡其前、爲沈淪相、

凡欲著座人、請外記圖於先達、

過三日之後早著政、未著政之前不參内、

〔貞信公記〕延長二年四月十日戊寅、午二點著座、官外記同用西門、

〔公卿補任(醍醐)〕延長二年

左大臣　正二位　藤忠平(四十五)　(正月廿二日轉、左大將如元、四月十日著座、)

〔定家朝臣記〕康平元年二月一日、參東三條、召孝秀被勘著座日時、(來五日二點者、)幷造倚子日時、(同日卯二點)三日、爲殿(○藤原賴通)御使參右府、(○藤原敎通)令聞云、明日中納言(○藤原師實)可著座、而來八日始參政如何、彼日當厭日、厭日俗所忌也、但貞信公、延喜八年二月五日丙午著座、同八日己酉始被參政、偏可隨彼例歟如何者、令聞給云、貞信公彼時爲參議著座、公卿與參議其儀相異、左右難進退者、　四日、依召參右府、令聞云、開見舊記云、著座已後過三箇日參政、但近代擇吉日、□□然則彼時貞信公不避厭日給歟、五日、中納言殿御著座也、未剋渡御尾張守宅、(冷泉院小路北、室町西、檳榔御車、御直衣、前駈三人、衣冠布衣相交、)酉一點出御、主殿頭孝秀奉仕反閇、賜祿、(大褂、爲仲朝臣取之、)入自待賢門、此間日落、山西受經官北面、自西門入給、(先御入書□中時剋成由、仍不經、)(頃入御也、)入經廊北屏東頭、入自中戶、(□四二點鐘鳴)著御倚子、(召使置之於簾門頭、著殿、前駈五位取之、)頃之出御於前路、經陰陽寮東、(此間二點鐘鳴、)渡御外記廳、(不設座、依仰設之、下(一字缺)寬弘年中有御著座、依前例不設、仍置此例歟、)小選退出給、此間乘燭、自陽明門出給、(召使候松明、出門後、前駈燭火、)賜祿召使等、十(餘)

前駈卅人　四位四人　邦恒朝臣、範永朝臣、憲輔朝臣、資良朝臣、　五位十二人　六位五人

殿上人十五人　四位九人　兼房朝臣、定親朝臣、實綱朝臣、泰憲朝臣、顯家朝臣、長房朝臣、師基朝臣、俊綱朝臣、能季朝臣、　五位四人　師賢朝臣、政長朝臣、隆綱朝臣、定家、　六位二人　季綱、淸家、

經章朝臣爲行事、與所司相共令作倚子云々、今日左大弁已下上卿被參、雖然有議不差膳、各退出、

四年十二月廿日己亥、有太政大臣(○藤原賴通)召事、　廿二日、依召參殿、召大外記(師平)大夫史、(孝信)仰云、太政大臣御倚子間事、(新可作歟、可用左大臣時御倚子歟、)孝信申云、去年令辭左大臣給後、有次第昇晉、立右大臣倚子之時、欲令申事由、而未被立其倚子、仍不申左右、如舊所立者、　廿四日、晚頭召道平有行於御前、被勘立御倚子日時、(來廿七日丙午、時午若申、)召大外記師平下給之、(入道殿(藤原道長)御時、寬仁元年十二月廿五日、召文義給之也、)次召左中弁資仲朝臣、(陰東、使)於御前被仰可造御倚子并物可召事、(今日成左大臣宣旨所同云々、)今朝爲御使參左府、(○藤原敎通)令聞云、忠仁、(○藤原良房)昭宣、(○藤原基經)貞信、(○藤原忠平)淸愼公、(○藤原實賴)先以上表、而後令立倚子、而故人道殿先立倚子、次

被上表、可隨何例哉、返報云、上代例理雖可然、寛仁例尙可爲規模、況當年首不可空御座者、廿七日丙午、寅剋造殿下御倚子、主計頭師經、四位家司 知院事大藏錄理成爲行事、政所儲給酒肴於工云々、申剋云々、官外記

〔本朝世紀〕仁平三年五月十一日己亥、今日申二點、左大臣〇藤原賴長 著太政官廳、同三點著外記廳、未斜先著八省東廊休幄、被出東三條西門 二位中將左大弁扈從、公達諸大夫等參以扈從、歸著東三條之後、大外記師業師經以下著侍所座、一行著 南座諸大夫取祿、〇中略 無酒饌云々、官掌召使著隨身所座、祿如常云云、

〔兵範記〕仁平三年五月十一日己亥、今日於東三條殿有左大臣〇藤原賴長 御著座、其儀東對御裝束如去保延四年內大臣著座例、家司尾張守親隆朝臣奉行今度事、陰陽頭賀茂憲榮朝臣勘申日時、官廳申二點、外記廳同三點、 家司皇后宮大進爲親行造倚子事、未剋令出立給、於對南面階召沓、新中將隆長朝臣被獻之、憲榮朝臣奉仕反閉、於東門外乘車、前駈卅餘人、〇中略 二位中將兼長 新宰相中將師長 左大弁資信等扈從、著座了、令歸東三條殿給、公卿殿上人以下有盃饌事、上官以下賜祿、尾張日向勤仕饗、

左大臣著座例

貞信公〇藤原忠平 延長二年正月廿二日辛丑、任左大臣、同四月十日戊寅、午剋著座、就彼例有此儀了、

御堂〇藤原道長 以後無大臣著座、而保延二年十二月九日、任內大臣、同四年十一月廿三日、被著座了、蓋是九條殿〇藤原師輔 天曆元年四月廿六日辛巳、任右大臣、同二年七月廿七日庚戌、丑時著座、大入道殿〇藤原兼家 貞元二年十月二日甲寅、任右大臣、天元二年四月十九日丁卯、未剋著座、追彼

兩度例、被行大臣著座了、

今又準延長例、有左大臣著座云々、都執政一族御堂以下七代中納言時著座、其後昇進無著座習、而今左府保延二年納言著座、同四年内大臣著座、今相并三度被行了、希代例、

○按ズルニ、藤原頼長、久安五年七月ヲ以テ左大臣ニ轉ズ、是ニ至テ五年ナリ、

〔百練抄 十六 後深草〕建長四年十一月廿四日甲辰、於攝政直廬松所先被勘、可被立太政大臣○藤原兼平倚子於官外記廳日時、 廿五日乙巳、太政大臣倚子被立外記官廳等、

〔令義解 七 公式〕凡任授官位者、謂太政官任主典以上、及中務授五位以上、式部授六位以下之類也、 所任授之司、皆具録官位姓名、任授時年月、貫屬年紀、造簿、其任官簿、除貫屬年紀、官人連署印記、若有轉任身死、及事故以理去任者、即於簿下朱書注之、其有考解及犯罪除免者、解免之司、謂解司者、式部、兵司者、刑部、假如准考應解者、式部錄狀申官、待符、乃還解狀、又犯罪應除免者、刑部斷定錄中官、奏聞畢、即還報之類、但五位以上、式部不待定、其事狀、若應奏聞者、亦太政官錄解同也、 亦錄解免之狀、准前造簿、仍錄報元任授、謂式部錄報太政官、及中務、刑部錄報中務及式部也、 除注簿案、若除解人得敍用者、敍用之司、錄報解處所司、謂用司者、太政官、敍司者、式部、假如考解之人、更復任用、及除免之人、限滿應敍者、官錄報式部、式部錄報刑部之類也、 除簿、即未敍之間、在本貫身死者、申刑部注除、謂若未用之間、在本貫身死者、亦申太政官及式部注除也、 其除色依職掌應造簿謂式部造作部及官人帳之類也、者、並准此、

〔延喜式 十一 太政官〕凡諸國史生博士醫師算等、外記勘會補任帳、明知其補由、然後請印、

〔延喜式 十八 式部〕凡內外諸司主典已上、及諸國史生博士醫師弩師補任帳、每年正月一日七月一日進太政官、但藏人所料、六月十二月廿日進、 若有改官及歷名錯謬者、以朱側注、其解闕帳者、正月一日進、參議已上不注解闕、

又諸國秩滿帳者、正月一日進、藏人所料亦十二月廿日進、

〔延喜式 十八 式部〕凡諸國郡司補任帳、每年正月一日、與諸司諸國史生已上補任帳共進太政官、

〔延喜式 二十八 兵部〕凡武官補任帳准式部省、每年正月七月一日進太政官、若有遷官卒死之類、以朱注側、其內裏料、更寫二通、六月十二月進藏人所、

鼇頭

〔本朝書籍目錄〕官位

〔萬葉集〕(六雜歌)四年(○天平)壬申

藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麻呂作歌一首幷短歌(○歌略)

右撿補任文、八月十七日任東山山陰西海節度使、

〔類聚符宣抄〕(六)當時聽者

權大納言淸原卿(○夏野)　左大辨王(○直世)

式部大輔南淵朝臣　皇后宮大夫藤原朝臣

大納言良岑卿宣、比來補任之誤、屬頗有數、此則外記等不務校勘之所致也、自今以後、宜少外記都宿禰廣田麻呂專當校之、

天長六年三月十三日　大外記御船連湊守(奉)

〔江吏部集〕(中)寛弘三年三月四日、聖上(○一條)於左相府東三條第被行花宴、余爲序者、兼講詩、講詩之間、左丞相傳勅語曰、以式部丞擧周補藏人者、風月以來、未嘗聞此例、時人榮之、不堪感躍、書懷題于相府書閣壁上、

今年兩度慰心緒、愚息過恩之至哉、正月除書爲李部、暮春花宴上蓬萊、誠雖漢主明鳳數、多是周公貢賞才、相國侍中榮不是、江家用日有時閑、

〔江談抄四〕右兵衛督島田忠臣爲五位藏人之時、以此詩入天覽、有哀憐、蒙登省宣旨、

醉望西山仙駕遠　微臣淚落舊恩衣内宴昭宣公

〔吾妻鏡四〕元暦二年（文治元年）四月十五日戊辰、關東御家人不蒙內擧、無功兮多以拜任衛府所司等官、各殊奇怪之由、被遣御下文於彼輩之中、件名字載一紙、面々被注加其不可云云、

下　東國侍內任官輩中、

可令停止下向本國各在京勤仕陣直公役事

副下　交名注文一通

右任官之習、或以上日之勞賜御給、或以私物償朝家之御大事、各浴朝恩事也、而東國輩徒抑留庄園年貢、掠取國衙進官、不事成功、自由拜任、官途之陵遲已在斯、偏令停止任官者、無成功之便者歟、不云先官當職、於任官輩者、永停城外之思、在京可令勤仕陣役、已厠朝列、何令籠居哉、若違令下向墨俣以東者、且各改召本領、且又可令申行斬罪之狀如件、

元暦二年四月十五日

東國任人任官輩事

兵衛尉義廉鎌倉殿ハ惡主也、木曾ハ吉主也ト申シテ、始父相具シ親昵等令參木曾殿ト申テ、讒介殿誡候ヘ、縣ニハ讒人ト被處ナントテ候シハ、何ニ令忘却歟、若有惡兵衛尉

兵衛尉忠信秀衡之郎等、令拜任衛府事、自往昔未有、計ニ過分被鼠ロカシ、其鼠ニテヤラン、是ハイタチニテゾル、

兵衛尉重經御勘當ハ被免ニキ、然者可令歸府本領之處、今ハ本領ニハ不被付中之、

澁谷馬允父在國也、而付平家令下向之所、木曾以大勢攻入之時、付木曾留、又判官殿御入京之時又落參、度々合戰ニ、心ハ可ニサ有バ、免ニ角々御勘當可被召仕之處、衛府シテ

被斬頸ズルハイカニ、能用意頸ニ　勝加治テ頸玉ニ厚ク可塗金也、二

小河馬允 少々御勘當免テ、可有御用意之由、慕　食之處、色欄不吉、何樣任官ヤラン、

兵衛尉基清 目ハ鼠ノ眼ニテ、只可　候之處、任官希有也、

馬允有經 少々賤、木曾殿有御勘當之處、今免給タラ　ハ只可候ニ、五位ノ補ニ馬允ニ、未曾有事也、

刑部丞友景 音樣シアガレテ、後鬘　サマテ刑部ガラナシ、

同男兵衛尉景貞 合眼之時、心甲ニテ有由聞食、仍可有　御未情之由慕食之處、任官希有也、

兵衛尉高景 惡氣色シテ、木自白者ト御　覽セシニ、任官誠ニ見苦シ、

馬允時經 大虛言計ナ能トシテ、エシラメ官好シテ、松聲庄、　云不知、アハレ木曾ノ人候、惡馬細工シテ有カシ、

兵衛尉季綱 御勘當スコシ免レテ　有ベキ處、無由任官歟、

馬允能忠 同

豐田兵衛尉 色ハ白ラカニシテ、顏ハ不覺氣ナルモノヽ、只可候ニ、任官希有也、父　ハ於下總度々有召ニ不參シテ、東國平ラガラレテ後參、不覺歟、

兵衛尉政綱

兵衛尉忠綱 本領少々可返給之處、任官　シテ今ハ不相叶鳴呼人歟、

馬允有長

右衛門尉季重 久目源三郎、顏ハフワ　トシテ、希有之任官歟、

縫殿助

宮內丞舒國 於大井渡、堅樣違例氣　ニテ、任官見苦事歟、

刑部丞經俊 官好無其要用事歟、　アアレ無益事歟、

此外輩其數雖令拜任、文武官之間、何官何職分明不知食及之故、委不被載注文、雖此外、永可令停止城外之思歟矣、

右衛門尉友家

兵衛尉朝政

件兩人下向鎭西之時、於京令拜任事、如駘馬之道草喰、同以不可下向之狀如件

古事類苑

政治部十七

上編

薦擧

薦擧ニハ、朝廷ヨリ詔シテ薦擧セシムルアリ、其官衙ヨリ薦擧スルアリ、官人ノ薦擧スルアリ、薦擧シテ我缺ニ代ラシムルノアリ、而シテ薦擧ノ文ヲ申文ト云フ、除目篇ヲ參考スベシ、

詔擧人

〔續日本紀三文武〕大寶三年七月甲午、以災異頻見、年穀不登、詔減京畿及太宰府管內諸國調半、並免天下之庸、又詔五位已上、擧賢良方正之士、

〔續日本紀十二聖武〕天平三年八月辛巳、引入諸司主典已上於內裏、一品舍人親王宣勅云、執事卿等、或薨逝、或老病、不堪理務、宜各擧所知可堪濟務者、癸未、主典已上三百九十六人、詣闕上表、擧名以聞、

官司薦人

〔朝野群載六太政官〕太政官

請殊蒙天恩因准先例以刑部史生上毛野貞正被補任史生紀緣元不仕替狀

右謹撿故實、當局史生有闕之時、諸司史生之中、撰堪其職之者擧補、古今之例也、就中貞正、頗携文筆、尤足採擇、望請天恩因准先例、以件貞正被補任彼不仕替者、將令致記錄之功、仍勒事狀、謹請處分、

治曆四年十二月十六日

正六位上行權少外記文宣朝臣

正六位上行少外記佐伯朝臣

正六位上行少外記

從五位下行大外記大江朝臣

正五位下〇下一本作上行大外記兼主稅權助筭博士備前介三善朝臣

從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣

從五位上行少納言中宮權大進讃岐介源朝臣

正五位下行少納言兼侍從藤原朝臣

〔愚昧記〕撿非違使

請特蒙天恩因准先例依請第擧道勞以正六位上行備前大掾惟宗朝臣成直被拜任左右衛門志

卽令豪使宣旨狀

右得成直款狀偁、謹撿案內、成直親父故左衛門志成□久仕廷尉、夙夜在公之時、長昏守庭訓、坐臥傳門業、勘判記錄之草、糺斷推鞫之詞、雖爲親父之提耳、遞代大匠兮執斧者也、而使廳者是依爲刊斷之處、多登用法曹之士、尉志之間、同時四五人補來尙矣、就中道志三人、並任例也、近則長德四年、右志伴忠信、□本忠國、縣犬養爲政、長保四年、左志惟宗傳愛、豐原爲時、右志縣犬養爲政等是也、抑自明法得業生幷諸國掾直補廷尉、非無蹤跡、明法得業生讃岐時人任左志、同宍人永繼任右志、又大和掾藤原好行任右尉等也、成直明法擬得業生兼居司馬職、准彼等例、欲補志闕、惟〇惟上恐脫性字、雖愚款累業之欲絕、學又雖拙、嗜□章而飴闕、今仰無偏之化、誰謂非據之任、擧奏之處、何無哀憐者、今加覆審、所申有實、方今使廳之政、法家爲基、當時所在道志二人也、已少糺勘之人、自爲撿忠之本、望請天恩因准先例、依請第擧道勞、以件成直被拜任左右衛門志、卽令豪使宣旨者、將俾致奉公之節矣、仍注事狀、謹請處分、

永治二年正月廿一日　正五位下行右衛門權佐兼近江守皇后宮大進藤原朝臣

正五位下行左衛門權佐藤原朝臣

正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公敎

〔菅家文草九奏状〕請特授従五位上大内記正六位上藤原朝臣菅根状

右臣某謹奏、事意、去寛平五年四月二日東宮〇醍醐之始、太上天皇〇宇多勅臣曰、此般東宮每事省略、仍二員學士闕而不補、汝已任亮、兼供執經云云、臣須伏奉綸旨、一身兩役而所守忩劇、逐達勅命、爰至于十月、以臣不逮執經之状、奏聞太上皇、即擧件菅根令聽昇殿、菅根晝夜恪勤、上日明日每當顧問、應對無私、綴容之文、宿侍之間、引經傳以發睿情、抽章句以催文思、其所奉授者、曲禮論語後漢書等、秩卷有餘、以口奉習之類不可勝計、加以菅根對策及第之後七箇年于今也、准之前例、謂爲晩成、況年四十三多後等輩、伏願特蒙天恩、叙之上階、一褒成業之舊功、一明侍讀之新賞、臣某頓首頓首、誠惶誠恐謹言、

寛平九年七月　日　正三位權大納言兼行右近衛大將菅原〇道眞

〔古事談二臣節〕行成卿不遂沈淪、將出家、俊賢爲頭之時、至其家制止曰、有相傳之寶物哉、行成曰、有寶劍云々、俊賢早沽却可修所願、我將擧達、仍爲下臈無官〇前備後介、叙四位、被補頭、任納言之後、皆雖爲俊賢上臈、依思恩遂不著其上云々、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕この侍從の大納言殿〇藤原行成こそ、びご〇備後のすけとて、まだ地下におはせし時、藏人頭になり給ふなれ、いとめづらしきことよな、其比は源民部卿殿〇俊賢は、〇略註職事〇藏人頭にておはしますに、かんだちめになり給ひければ、一條院此つぎには、又たれかなるべきとゝはせ給ひければ、ゆきなりなんまかりなるべき人に候とさうせさせ給ひけるを、地下のものはいかがあるべからんとの給はせければ、いとやん事なきものに候、地下などおぼしはゞからせ給ふまじ、ゆくすゑにも、おほやけになに事にもつかまつらんにたへたるものになん、かくやうなる人を御らんじわかぬは、よのためあくじに侍り、せんあくをわきまへおはしませばこそ、人も心づかひはつかうまつれ、このきはになさせ給はざらんは、いと口をしき事にこそさぶらはめと申させたまひければ、だうりの事といひながら、なり給ひにしぞかし、おほかたむかしは、さきの

薦己子

頭の事によりて、後の頭はなることにて侍りしなり、されば殿上にわれなるべしなど、さだのぶの民部卿中將にておはせしおりおもひ給へりける、此人はこよひときゝてまいり給へるに、いづこもとゝかにさしあひ給へりけるを、たれぞととひ給へるに、御なのり給へば、おもひがけずおぼして、なに事に參り給へるぞとあれば、頭になしたびたれば、まいりて侍るなりとあるに、あさましとあきれてこそ、おごきもせでたち給ひたりけれ、げにおもひがけずだうりなりや、この源民部卿かく申なし給へる事をおぼし忘りて、從二位のおりかとよ、こえ申給ひしかど、さらにかみにゐ給はざりき、かの殿いで給ふ日は、われやまひ申し、又ともにいで給ふ日は、むかへ座などにぞゐ給ひし、さて民部卿正二位のおりこそは、本のやうにげらうになり給ひし、

〔台記〕久壽元年七月十六日丁卯、大內記遠明持來宣命草、上書奏法皇、(○鳥羽)曰、民部卿藤原朝臣宗輔、年及八旬、(七十八)爲一大納言、奉公之忠、無比肩者、既得大臣闕、必可被登用、就中彼卿、於臣(○藤原賴長)殊有芳意、當此時將報之、若有可超任之下臈、宜辭臣職、登用二人、於公有益、於私滿願、必許所請矣、法皇手書曰、尋古今例、大臣闕後、經年月任其替、因玆近日不可任大臣、但民部卿尤得其理、下臈超越所不存也、(子時到來)

〔玉海〕文治二年七月三日戊寅、今日於院(○後白河)有種々評定云々、去頃撿非違使公朝(院近臣北面下臈)爲御使下向關東、此兩三日歸參、奏賴朝卿申狀云、萬事可爲君御定之由云々、其次有攝錄事等、其狀云、此事全非彼懸望、又非有引級之思、爲身無其益、唯衆口之所歌、其仁在彼人、(指余也)前攝政(○藤原基通)一切不被知萬機之由、世上謳歌、仍偏思天下事、及君御事之故、所申出此事也、隨又有天許、而今被仰下旨(其趣不知也)不能左右、是非只在叡念云々、

〔古事談二臣節〕賴光(○源氏)於殿上、息男可補藏人之由蒙天氣云々、知章云、我子既爲進士雜色、乍置、アシク被申哉云々、仍賴光忽歸參御前申返之云々、

薦敍

○按ズルニ、己ガ子弟ヲ薦メテ、官爵ノ敍任ヲ請フコト、讓官位篇ニアリ、宜シク參看スベシ、

〔日本後紀 十七 平城〕大同四年閏二月甲辰、從四位下安部朝臣鷹野卒、鷹野者、從五位下猪名麻呂之子也、有仁慈之性、多所汲引、

〔朝野群載 一 文筆〕寄薦擧議 鑒化由得人爲鈞、百五十字以上成篇、

都在高

赫矣明王、康哉上聖、拔賢擇士、篤敍數政、鑒杖鶴板、九徵三聘、□□□□□□□□名垂万年、仁被百姓、無爲而治、不言而化、□跡□□□□□□□騁、唐虞德傳、周夏上古之君、用而無休、後世之主、捨不率由、白駒之逵、皆以淹留、蒼龍之價、豈不極遊、官之得士、如檝隨舟、士之任職、似毛理裘、衛稱寶材、求而相得、詩云多士、此生王國、寔王之客、已斷海側、傲帝之賓、不聞山北、登用之數、顯於忠臣、利用之道、播於衆人、不依不失、爰奮爰遑、瑞移丹甑、祥叶白麟、

貢擧法

貢擧

貢擧トハ、諸國及ビ大學ヨリ人ヲ朝廷ニ推薦スルコトニテ、每年諸國ニテハ國學生ヨリ選ビ、大學ニテハ大學生ヨリ選ビテ、秀才、進士、明經、明法ヲ貢スルナリ、又京國ニテハ蔭子孫、位子ヲ薦メテ内舍人、大舍人等トス、又臨時ニ武藝ノ人ヲ貢擧セシメシ事モアリ、而ルニ其人ニ非ルヲ貢擧シ、及ビ貢擧スベキ人ヲ貢擧セザルトキハ、推擧シタル人罪アリ、尙ホ貢蔭篇及ビ文學部試驗篇ヲ參看スベシ、

〔律 疏殘 職制〕凡貢擧非其人、及應貢擧而不貢擧者、一人杖六十、二人加一等、罪止徒一年、非其人、謂德行乖僻、不如擧狀者、若試不及第、減二等、率五分得三及第者、不坐、謂貢者、依令諸國貢人、擧者、若別勅令擧、及大學送官、爲擧人、皆取方正清謹、名行相副者、若德行無聞、妄相推薦、或才堪利用、蔽而不擧者、一人杖六十、二人加一等、罪止徒一年、注云、非其人、謂德行乖僻、不如擧狀者、若使名實乖違、即是不如擧狀、縱試得及第、亦退而獨罪、如其德

武人貢舉

行無斷、唯只做不及第、減乘罰之罪二等、率五分得三及第者不坐、謂試五得三、試十得六之類、所貢官人皆得免罪、若貢五得二、科三人之罪、貢十得三、科七人之罪、但有一人藩行乘罰、不知舉狀、卽以乘罰科之、縱有得第者多、並不令共相准折、若考校課試而不以實、及選官乖於舉狀、以故不稱職者減一等、貢殿應附而不附、及不應附而附、致考有昇降者、罪亦同、考校、謂內外文武官寮年終應考校功過者、課試、謂貢舉之人、藝業伎能、依令課試有數者、其官司考試不以實、及選官乖於所舉本狀、以故不稱職者、謂不習典憲、任以法官、明練經史、授之武職之類、各減貢舉非其人罪一等、其貢殿應附不附者、依令私坐每一斤爲一負、公坐二斤爲一負、各十負爲一殿、校考之日、負殿皆悉附狀、若故違不附、及不應附而附者、謂蒙別勅免、或經恩降、公私負殿、並不在附限、若犯免官以上、及贓賄入己、恩前獄成、仍附景迹、除此等罪、並不合附、而故附、致使考校有昇降者、得罪亦同、謂與考校課試不實罪同、失者各減三等、謂意在堪貢、心不涉私、不審德行有虧、得減故罪三等、自貢舉以下、失者各減三等、餘條失者准此、謂一部律內、公事錯失、本條無失減之文者、並准此減三等、承告不覺、又減一等、謂承校試人言、不覺差失、從失減三等上、更減一等、知而聽行與同罪、謂從貢舉以下、知非其人、或試不及第、考校課試、知其不實、或選官乖狀者、各與初試者同罪、

〔續日本紀 文武三〕慶雲三年二月庚寅、制七條事、○中略 准令、藉蔭入選、雖有出身之條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身、非因貢舉及別勅處分、並不在常選之限、

〔續日本紀 元明四〕和銅元年四月癸酉、制、貢人位子、无考之日、浪入常選、白丁冒名、預貢人例、此色且多、是由式部不察之過焉、今宜按覆撿實申知、其式部史生已上、若能知罪自首者免其罪、終隱執不首者准律科罪、亦其位子、准令嫡子唯得貢用、庶子不合、今卽兼用、此亦式部違令、若其庶子雖授位記、皆追還本色、但其才堪時務、欲從貢人例者聽之、又諸國博士醫師等、自朝遣補者、考選一准史生例、考第各從本色、若取土人及傍國者、並依令條、又諸位子貢人、堪貢名籍、皆令本部案記、臨用式部乃下本部追召之、

〔令義解 四選敍〕凡帳內資人等、才堪文武貢人者、謂武人貢舉試條、并敍法不載令條、待式處分也、亦聽貢舉、得第者於內位敍、謂若本位先高者、改爲內位、卽位記多者、改其最高、其及留者之第者、考滿之日、乃敍內位也、不第者各還本主、

〔類聚國史 選舉七十九〕桓武天皇延曆十五年三月庚戌、令諸國舉武藝秀衆者、

〔延喜式 左右近衛四十五〕凡擬近衛者、預擇定便習弓馬者、入色卌人已下、白丁十人已下、修奏進內侍、奏訖卽

遣勅使試其才藝、騎射一尺五寸的、皆中者爲及第、步射卅六步、十箭中的四已上者爲及第、若一箭不中度者、以二的准折、

〔延喜式 四十七 左右兵衞〕凡擬兵衞者、預擇定便習弓馬者、入色廿人已下、白丁五人已下、修奏進內侍、奏訖卽遣勅使試其才藝、騎射一尺五寸的、皆中者爲及第、步射卅六步、十箭中的四已上者爲及第、若一箭不中度者、以二的准折、

自薦

凡ソ官位ヲ求ムルニハ、自ラ薦ムルヲ以テ常トス、其文ヲ申文ト稱シテ、或ハ其勞ヲ擧ゲ、或ハ其功ヲ陳シ、或ハ轉任ノ例ヲ稱シタリ、而シテ缺官ニ補セラレント請ヒ、兼任セント請フ等ノ數種アリ、又其溫職タルヲ以テ外補ヲ求ムル者多シ、蓋シ當昔ハ別ニ申文ヲ進ル時ノミナラズ、禁裏ノ詩歌ノ會ニ列シテ之ガ序ヲ爲リ、或ハ勅撰歌集ノ撰者ト爲リテ己ガ歌ヲ編シ、以テ沈淪ヲ歎ジ、拔擢ヲ求ムルノ語ヲ插メル者アリキ、上下以テ怪シトモセザリシナリ、事ハ文學部歌篇、詩篇等ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

求外任

〔本朝文粹 六 奏狀〕正六位上行民部大丞大江朝臣朝綱 誠惶誠恐謹言

請殊蒙鴻慈拜任溫職狀

右謹撿先例、自此省丞闕、敍爵者、皆無賢愚、併任受領、朝綱虎門聚雪、鳳闕戴星、方寸之勤、歲月多積、然而天性素頑、吏幹亦疎、分憂之寄、非敢所望、方今慈母在堂、春秋八九、老病晦朔、湯藥不靜、朝綱盡忠於天朝之年長、致孝於私門之日短、所謂家貧親老、不擇官而任者也、望請、鴻慈特任溫職、且競祿養於風樹、且爭貞心於霜松、朝綱誠惶誠恐謹言、

延長二年二月十五日

請特蒙天恩諸國受領吏秩滿幷臨時闕舊吏新叙相半被拜任狀　藤原倫寧

右倫寧等謹撿舊史、比聖明於日月、以無所不照也、喩皇恩於雨露、以無所不潤也、上能施均一之德、下必盡無貳之節、而七八年來、正月叙位之外、頻有踐祚大嘗會等臨時之叙位、新叙已積、舊吏自滯、其舊吏之中、昇沈不一、或殊功不聞、早有蒙抽賞者、或愚忠徒疲、久有被棄置者、車前盡熊而悅者少、釜中生魚而愁者多、若明恩之無偏、何以遣此愁乎、謹撿故實、叙位之年、即任分憂者、藏人、式部、民部丞、外記、官史等也、此五人者、非唯劇務要職、其本或諸道成業、或諸司積勞、雖叙位停止之年、而殊被叙用、其來尙矣、至于大藏丞、織部正、撿非違使者、其賜爵各有年限、又新叙之後、未必早拜國、而年來暫居其職、一二年間、或依佗勞、或依氏擧、不得年限、早被叙者、偏假名於本官本職、與彼五人同被拜除、或均一職、累拜兩國、比肩繼踵、荷恩戴德、爰新叙之輩、望此職者八人、去任之吏、彌被抑遏、若每年先盡新叙、其餘纔及舊吏、則雖叶格濟事、有功無過之輩、而逢年可入積薪之底、何春再期散木之榮、當于斯時、朝野皆以爲、受領者、一生一度之官榮也、與國案民之治迹、不用晝葵轢蒲之政聲、何益、豈如不慮編戶之苦、長遏潤屋之謀矣、如此則恐朝少廉耻之臣、國多貪婪之吏、國弊民散、與復難期、非敢塞賢路、爭吏途、只令天下之耳目知聖德之平均也、望請天恩殊垂矜照、諸國受領之吏、秩滿臨時之闕、若可補十人者、舊吏新叙相半、各補五人、將均勞逸、抑國有大小、亦有興亡、功有優劣、亦有先後、隨國論功、依次加賞、則苟成其功者、待次第而不愁不歎、適趣其任者、襄循良以盡節盡忠、外彌勵襲黃之風、內何憂閑素之日乎、伏鍊事狀、倫寧等誠惶誠恐謹言、

天延二年十二月十七日

散位源朝臣順　藤原朝臣爲雅

橘朝臣伊輔　散位藤原朝臣倫寧

〔今昔物語二十四〕藤原爲時作詩任越前守語第三十

今昔、藤原爲時ト云人有キ、一條院ノ御時ニ、式部丞ノ勞ニ依テ受領ニ成ラムト申ケルニ、除目ノ時、闕國无キニ依テ不被成リケリ、其後此ノ事ヲ歎テ、年ヲ隔テ直物被行ケル日、爲時博士ニハ非ドモ、極テ文花有ル者ニテ、申文ヲ内侍ニ付テ奉リ上テケリ、其ノ申文ニ此ノ句有リ、苦學寒夜、紅涙霑襟、除目後朝、蒼天在眼ト、内侍此レヲ奉リ上ゲムト爲ルニ、天皇ノ其ノ時ニ御寢ナリテ不御覽成ニケリ、而ル間、御堂〇藤原道長關白ニテ御座ケレバ、直シ物行ハセ給ハムトテ、内ニ參ラセ給タリケルニ、此ノ爲時ガ事ヲ奏セサセ給ケルニ、天皇申文ヲ不御覽ルニ依テ、其御返答无カリケリ、然レバ關白殿女房ニ令問給ケルニ、女房申ス樣、爲時ガ申文ヲ令御覽ムトセシ時、御前御寢ナリテ不御覽成ニキ、然レバ其申文ヲ尋ネ出テ、關白殿天皇ニ令御覽メ給ケルニ此ノ句有リ、然レバ關白殿此句微妙ニ感ゼサセ給テ、殿ノ御乳母子ニテ有ケル、藤原國盛ト云人ノ可成カリケル、越前守ヲ止テ、俄ニ此ノ爲時ヲナム被成ニケル、此レ偏ニ申文句ヲ被感ル故也トナム、世ニ爲時ヲ讃メケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、〇又見十訓抄、古事談、續古事談、

〔本朝文粹六奏狀〕請被殊蒙天恩拜大内記紀伊幡木工頭源方光申他官所幷淡路國守闕狀

藤原篤茂

右篤茂任〇闕之後、十箇年矣、忠貞不怠、勞績已深、昔槐市共螢雪、齊肩價者、或昇青雲之路、或爲朱輪之軍、夙鳥而朝天、則雙鳧晩飛葉縣之月、露冕而莅境、則五馬春入荊州之雲、又有出自一司之長、以爲百城之宰者、妻孥僮僕歎嫉、彼何人哉、獨愧運命、謹尋案内、成業之輩、必被優異矣、篤茂早成進士之名、今忝官長之職、蒼衫年舊、蓬鬢霜新、貧而讀書、顏子豈無一瓢之飲、老而無宅、蔣生猶有三逕之居、秘書者關官之至極也、只供香火之法筵、丹州者兼任之虚名也、未潤涓塵之公俸、性是頑魯、雖甘貧於衞門之蓬、節非夷齊、難忍餓於首陽之薇、宜尼有言曰、耕則餒在其中、學則祿在其中、初信斯言、今知

其妄、方今代屬休明、人霑仁澤、昔顏駟之白首、而三代不遇也、漢武召見、而卽爲會稽之守矣、今篤茂之丹心、而十年沈淪也、明時哀憐、而不賜隨分之官哉、篤茂編柳、久執其勤、飲冰未辭其苦、若幸恤勤苦、拔滯淹者、世稱文之不墜、人知學之無庶、然則琢玉之器、多出自孔門、命世之才、彌滿於朝庭、所謂燕王之市骨、而駿馬自來、魏物之重晩、而賢士早至者歟、抑非儒士任大內記者、延喜聖代〇中略藤原諸蔭是也、以往之例、不可勝計、又木工頭者五位官也、試欲勵愚節、淡路守者一小國也、何必擇循良、望請特蒙天恩、任件等闕、戴撫偏之化、仰有道之風、篤茂誠惶誠恐謹言、

天祿四年正月十五日　從五位上行圖書頭兼丹波介藤原朝臣篤茂誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准前例依和泉國功補淡路守闕狀　　源順

所濟功十二箇條

以前徵功等、謹顯錄如右、抑件淡路國、名雖一國、實纔二郡、外位從下之輩、古今所任來也、順苟治小國、適成大功、又忝上階、須期後賞、然而籠鳥思出、登擇遠近之林、轍魚悲枯、只求斗升之水、望請殊蒙天恩、被補件闕、展翅於仁風、話鰓於惠澤、將令天下彌知明時之不棄前功舊勞矣、順誠恐謹言、

天延四年正月廿八日　散位從五位上源朝臣順誠惶誠恐謹言

請被特蒙恩恤因准先例擧達辨官右衞門權佐闕狀　　三善道統

右道統、謹披史漢、倩見昇沈、韓信昌亭之餘隷、遇蕭相國而知名、長卿臨邛之食客、依楊得意而有逢伯里奚牛羊之賤、主以進顯位、東方朔虎鼠之論、人以爲美談、蓋是知與不知、用與不用也、道統再登龍門、再折紅桂、天曆七年進士及第、應和二年秀才及科、二省勞六年之內、色々公務、一一匪懈、敘用之後憂待例、而安和二年、故左相府薨卒之月、卽任大學頭、本望不遂、落淚不留、天延二年、更棄當職、識出不圖例在非常、愁吟之處、蒲柳七秋、荷裳非業、何遁名於東海東、蘿徑愿深、誰晦跡於北山之北、雖生堯舜之代、未遇比屋之封、雖非夷齊之廉、已及採薇之飢、心拙焦慮、難學北門長鋏之歌、身苦孤貧、唯有南山短

衣之曲、殿下黄陂潤色、許月朗光、情拳之纖顆露衛、不讓細壤、智水之深如江海、事纖纖流、不珍尺璧、周公吐飡之勞、只重寸陰、荀氏累葉之座、拔擢起滯、秋毫、誘賞能、明照晩月、仍以布鼓之性、忝蒙雷門之聽、如枯鱗之臥轍、投心恩波、似窮鳥之入懷、懸思於惠露、望請特蒙恩恤、專逢件闕、加一願於賢憂、使傳絶塵之譽、及餘慶於子孫、須期高門之嵐、然則病雀銜花、生羽翼於畯雨、寒鶯出谷、戴恩惠於春風、道統誠惶誠恐謹言、

天元二年正月日　　從五位上行勘解由次官三善朝臣道統誠惶誠恐謹言

〔本朝文粹六 奏狀〕請被特蒙天恩、以有勞恪勤諸司、遷任遠江駿河等國守闕狀　平兼盛

右去康保四年二月、村上先帝聽政之日、有勞諸司、逹奏申請事狀偁、謹検案内、有勞諸司、遷任受領之例、其來尚矣、而頃年之間、拜除如忘、蹤跡已絶、徒積日月之光陰、久隔雨露之渥澤、藏人外記、官史、式部、民部、大藏丞、織部正、検非違使等、皆有年限、拜任受領、爰諸司積歳、採用無期、身逐年而老、家隨日而貧、偏勵奉公之節、空忘顧私之慮、妻子漸傳飢餒之苦、僮僕長厭奔走之役、方今或弱冠承恩、或壯年蒙賞、父子同並專城之任、兄弟俱居分憂之職、拜一國者、其業有餘、金帛滿藏、酒肉堆案、況轉任數國乎、老諸司者、竈無儲、荊棘生庭、烟火絶爐、況竊苦多年乎、見樂以增怨、對榮以歎悴、若以功勞蒙賞、則諸司皆成其功、若依職役承恩、則誰人亦超其勤、功勞是一、採擇何殊、今對[illegible]拋之人、各嗟鵠退之身、太陽之耀、不照何處、厚載之德、不及何物、幸遂堯年、當受比屋之封、久迷舜日、獨抱積薪之歎、臣等聞鶏參闕、行步鎭蹄春冰之薄、待月歸家、鬢髮皆侵秋霜之嚴、老者少道日、弱者有餘年、懸車不幾、看形骸而揮涙、携杖在近、計年暦以銷魂、望請特蒙天恩、以有勞諸司、被遷任每年臨時之闕國、各盡奉公之節者、依彼舉狀、繼殿顯橘朝臣忠信任加賀守、掃部頭橘朝臣高臣任阿波守、已畢、其後時代推移、恩賞無定、就中年來新叙之者、拜任牧宰之選、暫歷顯要之官、一二年之間、或依佗勞、或依氏舉、不待年限、早被叙者、偏假名於當職、同成其望、亦當其選、或自一官一職、須有被拜除者、何況諸國受領、稱其功者、馬鞍未解、早鞭重山

之雲、舟檝未乾、急棹疊浪之岸、以如此之輩、被拜毎度之闕、有勞諸司、爭得抽其身、既而富財者、成造作之功、少年早飛隼旟之翼、治國者立功課之理、舊吏頻受竹符之任、何世無造作之人、何時無功課之吏、陸沈之歎、諸司未休、衆盛等、全節奉公、曉夕無懈、或疲稽古多年之苦、或老勤王累日之功、暴風雷雨之朝、遠近從事、寒雪嚴霜之節、夙夜在公、無家無財、所仰者則明王慈惠之德、不田不桑、所憑者則愚忠苦節之勤、而採擇無期、一生將盡、望請特蒙天恩、以有勞恪勤諸司、被遷任件國闕、彌勵勤王之節矣、衆盛等誠惶誠恐謹言、

天元二年七月廿二日　　從五位上行大監物平朝臣衆盛等〈在連署〉

請殊蒙天恩、依和泉國所濟幷別功散位勞次第、被拜任伊賀伊勢等國守闕狀　　源順

任國勸文等

件功勘雜公文、請惣返抄、此二箇條之外、皆是別功也、條々具見申加階之時所司勘文等、

散位勞十一箇年

件勞、天祿二年以後所積、舊吏中既爲第一、彼國吏濟例事、皆以加階拜官、未有成別功、如此沈滯者、

右順謹案、延喜〈〇醍醐〉天曆〈〇村上〉二朝之故事、抽賞舊吏、必依功勞次第、若功勞共均時、論成業非成業、亞風相傳、今復如彼、而順荷衆三事、徒過九年、家富則不可愁、就農桑而可養餘命、年少亦不可歎、忍飢寒而可期後榮、至于年老家貧愁深歎切、恐不知宿世之罪報、泣猶仰明時之哀憐而已、望請天恩、任功勞次第、被拜除件國闕、外禦蝸松栢之節、內將拂桒葉之塵、順誠惶誠恐謹言、

天元三年正月廿三日　　散位從五位上源朝臣順誠惶誠恐謹言

〔古事談 二 臣節〕俊賢爲五位藏人之時、中關白〈〇藤原道隆〉被問云、誰人補頭爲公家可有忠節哉、俊賢答云、無過於俊賢者、仍爲五位頭、今度齊信得理自必存可補之由、參內於明義門下會俊賢畢、可被補頭云々、誰人哉云々、答云、俊賢也云々、齊信赭面退歸畢、

〔本朝文粹六奏狀〕請被特蒙天恩依殿上勞拜任諸司助闕狀　紀齊名

右成基者、中納言贈從二位維時卿孫、參議正三位左大辨齊光卿男也、家門久傳累葉之儒風、父祖共為三代之侍讀、是以成基自幼日至丁年、入藝丹墀、出遊黌舍、以非藏人期侍中、以學問料待茂才、而去年正月、不慮之外被拜當職、兩儒所望、一不相諧、愛惡成基之不幸者、故不稱司馬、為增其愁也、嘲成基之數奇者、皆呼曰鷄鳥、為示其賤也、進欲近星榆、則名字已削于仙籍之上、退欲思月桂、亦變迹長乖于孔門之中、登龍門塵忽絶、五代之家、螢雪空過、三秋之役、老母堂前、且泣靡拂紫筝之售、亡父墓側、何顏更拜白楊之風、學術之道縱不遂、事君之職爾欲遂、望請蒙天恩、被拜件官闕、然則一寸如焦之心、可中火滅、二年不乾之涙、秋上雨收、不堪懇款之至、成基誠惶誠恐謹言、

正曆五年月日　正六位上行近江掾大江朝臣成基誠惶誠恐謹言

請被特蒙天恩因准先例拜任安房能登淡路等國守闕狀　江以言

右義行、天延元年依藏人所、貞元元年任木工允、當時遊宮、日夕奔營、天元三年遷大藏丞、永觀二年適預榮爵、諸司之間經十一年、榮爵之後超十三年、兩年來相當輔佐之居攝、頻漏理運之推薦、尊堆望遙、殿穿貴河之日、劇官病追、身勤上地之淡、因之為加、渦燥、晉向西海之溫泉、然間鎮府都督、政多邪佞、忽發吹毛之論、遂張陷身之機謗、其虐是乳虎猶仁心之獸也、校其狂欲、貪鳥則廉讓之禽也、義行邊土受冤、上天隔聽、不可以訟陳其是非、不可以使訴其存亡、張儀之囚、免猶遺春螢之舌、蘇武之役、胡自託秋雁之書、古來遭冤罪之者、未有如義行者、愛去正曆五年十月、事及叡聽、議遍群卿、都督有過、義行無愆之狀、僉議已成、當于斯時、偶過西海潤波、鏡歸東洛之舊土、枯魚更游江湖之中、籠鳥再翥雲霄之上、方今除目新升、淳風忽返、設官分職、先後之次守法、春雨秋霜、賞罰之科克諧、而去冬除目、議定下野守之缺、稱有西府之事、以數年下臈守忠、超被拜任、今檢案內、諸卿僉議、先年一定、都督之任、仍以解替、然則犯法之者、已伏罪過、遭冤之身、何有逮及、加之至于守忠者、義行敘爵之替所拜任者也、計其勤勞、先後

縣所、而朝選之間、越預勸賞、無偏之化、雖及兆民、不次之恩、蓋加一人、復自大藏丞叙爵之者、隔年給官、是則近年之流跡、專非聖代之流例、望請殊蒙天恩、被拜任件國等闕、適戴就日之恩光、將慰多年之沈困、義行誠惶誠恐謹言、

長德三年正月廿一日　散位從五位下宮道朝臣義行誠惶誠恐謹言

〔本朝文粹六奏狀〕請特蒙天恩依尾張國所濟功幷侍讀勞被拜美濃守闕狀　大江匡衡

右匡衡爲尾張守之時、撫民治國、致合期之勤、有功無過之由、諸卿僉議早畢、又依官符宣旨、修造國分尼寺、神社、諸定額寺十二箇處、不中請官物、別進造伊勢豐受宮之料米五百斛、造宣耀殿料准穎十餘萬束、依官符宣旨藏人所召、所交易進絹二百餘匹等、不立用公帳、皆是諸國吏之誇功稱雄之事也、匡衡非唯此而已、侍讀之勞十二年、侍讀之書三百卷、春卿專五吏之問、萬乘臨幸其門、子房爲一卷之師、萬戶豈大其賞、承和〇仁明之侍讀文章博士菅原清公卿者、乘車馬出入禁中、應和〇村上之侍讀中納言大江維時卿者、陪帷幄昵近天顏、皆是倭漢之聖主明王之崇文嚴師之異賞殊私也、況乎匡衡、以文章奉公之功、於當時異佗人矣、御元服賀表、染私筆而新千年、大宋國報書、戴竹牒而傳萬里、望請殊蒙天恩、依尾張國所濟功幷侍讀勞、被拜任件國守闕、將知稽古之力、匡衡誠惶誠恐謹言、

寬弘六年正月十五日

正四位下行式部權大輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

〔本朝續文粹七書狀〕上啓　兩箇所望事

一式部大輔闕事

右件官、不盡之外、忽有其闕、以愚庸質、自然爲位階第一儒士、但當知此之道理、且是天運之令然也、雖不可盡其理、下臈儒士等、旁致濫望云々、仍所披歎望也、式部大輔、偏被用儒士之後、不論才學之淺深、不謂本官之優劣、唯抽上臈所任來也、今當其運、其理一也、敦光六位之時、任式部丞、五位之後、拜式部

少輔、省底故實、皆所知案內也、此外大學頭、文章博士、大內記、皆是儒官之規模也、各歷其官、久竭忠勤、至于大輔之任、何被弃置哉、其理二也、皇子皇女御名、御願寺御願文呪願文、皆是儒宗之所勤仕也、敦光未至大輔以前、年來頻致其勤、何被用其藝、不被任其官哉、其理三也、諸道之人、以蒙院仰爲先、而敦光五品授職之時、草尊法勝寺百座呪願文之後、連々蒙仰、所作獻御願文呪願文、祭文、告文、勸文、其數不可勝計、當時所在紀傳博士十七人也、敦光之外、殘十六人、雖當其才、未蒙一度之仰、作一紙之文、全無敵對事、請以可察、其理四也、立后之後、八社奉幣并鹿島奉幣告文者、先例大內記所作也、而上東門院御時、式部大輔匡衡朝臣作之、准據彼例、中宮立后之時、敦光所作獻也、其後皇子御誕生之告文、可有感悅之由、染拙筆、所載嗣、皇女御降誕之時、百座仁王會呪願文、同載其由、靈驗燭焉、豈非文之感乎、中宮今度御塔供養御願文、又致其勤了、自餘之儒、誰有此功哉、其理五也、儒者之最、以讀書爲先、而敦光所讀者周易、左傳、毛詩、禮記、論語、孝經、史記、後漢書、文選等、儲受說、是以天下貴賤受其訓之者濟濟焉、其理六也、儒者之業、文章爲宗、敦光家風相傳、箕裘嗜業、上始國王仙院、下至緇素男女、每日每時、所製作之文筆、積棟盈身、須臾不休、他人之功不及十分之一、其理七也、省官之選、專勤考課、而敦光殊奉綸言、所問秀才六人也、（行盛、時登、有業、實光、觀業、通能）被留之輩、無聞一人、又評定文章生試詩七箇度也、他人未及其數、其理八也、然聞知此之道理、不可有相違之由、深存懸意之處、或云、敦光才學既淺、文章惟疎之者、不可當其仁、或云、不經顯官、不備殿上之者、不可任、其撰者情過懸案、淺才拙文之條、尤可然之也、古來任件官者、皆是高才之鴻儒也、敢不可及、只以位階上臈、成望許耳、至于閑官地下者、古今之間、其例誰人乎、甚多不遑毛擧、抑五位儒士、超上臈之例誰人乎、竹帛所載、敢無所見云々、說者橘廣相、仁和中、以五位儒拜任云々、彼時全無一人之上臈、全不叶超越之例、敦光縱雖非恩、有光朝臣者、耆老之儒、雖順朝臣者、重代之人也、超彼兩人、猶以非據、况於敦光策勞上臈、隔二階之先達也、非同日之論歟、○中略以前兩箇（條○式部大輔官）所望、皆抱道理、一々令洩奏者、所羨可是、敦光殘涯已暮、餘喘不幾、今度除書必可

被拜任之由、可令達天聽給也、今生之望、在此兩官、慮外霑其恩者、何面目一日經過世間哉、用與不用在此一擧而已、且可令垂賢察給也、敦光恐々謹言、

保安三年十二月九日　大學頭藤原敦光狀

謹謹上　頭中將殿（御直廬）

兼官求官

〔本朝文粹六奏狀〕請殊蒙鴻恩被拜勘解由次官幷圖書頭等闕狀　菅三品

右兼盛、少日入學、多年編蒲、適奉寮試、已以及第、於是龍門浪嶮、鱗飛年遙、假變本望、纔關氏爵、天曆四年拜任越前權守、秩滿解任、進放還擧、任中之間、所成功課、具錄事狀、上奏先畢、爾來散位之勞、七年于茲、同時拜官之人、後年預爵之輩、或踏青雲之色、或振玉佩之聲、兼盛獨漏明時之恩、徒老白屋之壁、寔雖知天運之有限、何不仰王道之無偏、以職試臣者、君恩也、依恩致功者、臣職也、拔良將於卒伍、擇賢佐於民黎、謀略應機而存、績行當事而見、其志合者、風雲之感忽至、其節立者、虎鼠之用自分、兼盛備非文吏、守乖武官、鳳闕曉星、長失秉燭之志、龍庭夜月、空忘鳴鼓之勤、忠依何而顯、恩依何以加、徒抱勁草之節、多逢疾風之秋、爰暗室燈滅、漏屋風寒、欲卜頭陀於山林、則人臣未見任意之禮、擬思遊蕩於江湖、則王法重存出關之禁、只有籠鳥戀雲之思、未免轍魚近肆之悲、方今聖日雲暖、鳥雀高翼飛揚之翅、恩波涯遙、鱗甲皆逞踊躍之情、兼盛同遇一聖之化、何抱多年之愁、望請殊蒙鴻恩、被拜件闕、將盡奉公之節、兼盛誠惶誠恐謹言、

天德四年七月廿六日　從五位上平朝臣兼盛

求兼任

〔本朝文粹六奏狀〕請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀　橘直幹

右直幹、謹撿案內、去天曆三年、自大學頭大內記拜當職之日、所帶兩官皆被停止、朝家自被始置文章博士之後、未聞其例、又至同四年三統元夏從式部少輔除儒職之日、不能少輔被賜兼字、拜除之恩惟一、榮枯之分不同、依人而異事、雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命、獨守一職、爰歷七年、今撿前例、職經博

士、見在當朝者、大江維時朝臣、博士上兼任式部少輔、大學頭同朝綱朝臣、先兼左少辨、後兼民部大輔、紀在昌朝臣、先兼式部少輔、後兼民部大輔大內記、菅原在躬朝臣、兼右少辨等是也、往古之例、不可勝計、又儒官之例、不越次第、而三善文明、及三統元夏等者、皆是直幹之下臈末座也、藤原國光者、直幹榮爵之後、所問之秀才也、式部少輔每有其闕、三人超越、遞被拜任、又至于弁明法等博士、皆帶顯職溫官、或兼二寮之頭助、爲一朝之要樞、或兼警衛判斷之職、掌國典朝威之嚴、而直幹不量涯分、謬竊大業之名、既非器用、自遇明時之棄、年齡漸傾、鬢髮霜雪一半、進退惟谷、每步山川千里、望後進之歡華、眼拔雲路、對倖人之榮貴、顏低泥沙、偶仕有道之邦、獨抱貧賤之耻、久悶不遇之質、多積淪落之悲、抑近代成業之輩、悉是儒門之胤也、文籍隨身、提撕在耳、少者二十有餘、老者僅過三十、皆紹箕裘、咸列昇進、直幹生於累葉刺史之家、素無一卷文書之蓄、況乎未及成人、早喪慈父、弱冠之初、入虎闈而問風教、壯年之際、依螢燈而嘗盡華、道之艱難、俗之寒苦、其所經歷、莫不究習、適遇漢主好文之時、周公重士之日、出自黌門白屋之庭、獨立孤微之中、獻策於春官、纔及上第、筭年於夏暦、早盈強仕、始念縦臨衰邁之期、當越風塵之客、今儵徒餔衆人之糟粕、永陷窮苦之淵泉、竊見頃年之例、雖微人所出納、太政官史生等、皆是緣袍之時、纔上官諸司之溫飽、朱紱之後、獨遂城數國之脂膏、堂上如華、門前成市、方今計學海之喩難、知涉百萬里之波濤、歷吏途之榮耀、不及五六輩之倍從、瓢簞屢空、草滋顏淵之巷、藜藿深鎖、雨濕原憲之樞者也、昔者不改其樂、今則難堪其憂、固知儒業之拙、總是數奇之源也、若深其道者、必受其飢焉、彌及末代之澆、須爲後見之誡、直幹比年不遂中文、唯恃天道、亦懸聖明、然而蒼々之玄遠難答、頑々之素懷未遂、伏惟、昇殿是象外之選也、俗骨不可以躡蓬萊之雲、尚書亦天下之望也、庸才不可以攀臺閣之月、至民部之大輔者、專非溫潤之地、即是恒例之兼官也、誰爲過分之榮職乎、徒銷日月、不若趁馳、望請殊蒙天恩、被兼任件闕、將慰陸沈淹屈之愁、直幹誠惶誠恐謹言、

天暦八年八月九日　正五位下行文章博士橘朝臣直幹誠惶誠恐謹言

〔江談抄長句事六〕升殿者、是象外之選也、俗骨不可以踏蓬萊之雲、尙書者、亦天下之望也、庸才不可以攀臺閣之月、

直幹請任民部大輔申文、件申文、天曆帝〈○村上〉令置御書机給云々、

〔古今著聞集文學四〕天曆御時、橘直幹が民部大輔を望申ける申文の草をば自ら書て、小野道風に淸書せさせけり、御門叡覽ありければ、依人而異事、雖似偏頗、代天而授官、誠懸運命など、述懷の詞を書すぐせるによりて御氣色惡かりけり、人是を恐思ふ所に、其後內裏燒亡有て、俄に中院へ御幸せさせ給けるに、代々の御わたりもの、御倚子、時簡、玄象鈴鹿以下もて參たるを御覽じて、直幹が申文は取出たりやと御尋有ける、時の人々いみじき事にぞ申ける、〈○又見十訓抄〉

〔本朝文粹奏狀六〕請殊蒙天恩被遷山城守兼任近江權介狀　小野道風〈菅三品作〉

右道風、謹撿近代拜除之例、自當寮頭登四品之榮爵者、不改年曆預一國之烹鮮焉、藤原朝臣兼三任奧州、橘朝臣惟風任伊州等是也、道風從加爵級數移星灰、每見除書、類漏渙渥、輸忠貞於奉國、積夙夜之勤公、春秋一十二歲之時、初奉龍顏之聖主、勞績五十四年之日、已爲鶴髮之衰翁、少藝少能、非神非妙、然而紫宸殿之皇居、七廻書賢聖之障子、大嘗會之寶祚、兩度續畫圖之屛風、臨時奉勅不可勝計、方今徽功之下、日月彌深、薄功之中、恩慈未至、觀三朝之德化、身猶雖沈本朝、隔萬里之波濤、名是得播唐國、望雲謝遠聞於吳會、就日仰洪施於堯天、伏乞乾臨殊降雨露、非與山城分憂之秩、將浴江府兼任之恩、道風誠惶誠恐謹言、

天德二年正月十一日　木工頭正五位下小野朝臣道風

請特蒙鴻慈因准先例兼任辨官左右衞門權佐大學頭等申佗官替狀　大江匡衡

右匡衡歷文章生文章得業生對策及第、歷撿非違使彈正少弼拜除當職、敍位勞十箇年、博士勞五箇年、以儒學爲業、以風月爲資、貧而樂道、未兼溫官、賤而嗜文、難耐寒苦、家徒四壁、耻文籍之漸散、母已八

旬、悲歎養之猶遲、伏檢故實、文章博士兼辨官例、大江朝綱卿、菅原文時卿也、兼衛府例、藤原菅根兼左近衛少將也、兼大學頭例、祖父維時卿、菅原文時卿也、諸道博士兼衛府佐例、明法博士惟宗公方兼左衛門權佐也、方今當今莅民之後、冢宰之輔政以來、近訪延喜天暦之故事、遠問周室漢家之遺風、去秋遇重陽之宴、詩文道之已興、今春見朝拜之儀、感舊代之復舊、蘇是詩書仁義之路、照然就日、禮樂儒雅之林、靡然向風、典雅繼絶、不亦悦乎、加以伶人左衛門尉大友兼時、右衛門府秦身高等、猶遇臨時之恩、各預不次之賞、重賞其藝能也、夫王道無偏、孰親孰疎、臣節有漸、自微至著、燕王求賢、郭隗爲師、而四方競至、漢帝明賞、寵當爲侯、而諸將自安、匡衡不知運命、不量涯分、强企微望、匡身之故、唯欲令天下海外、知學校不廢文章見重矣、雖呼龍之爲龍、則以有文章也、鳳之爲鳳、亦以有文章也、事若不許、道猶埋滅、謳歌堯舜之風、謹明君臣之美、望請特蒙天恩、因准先例、兼任件等官、將知文學之重、不堪懇款之至、匡衡誠惶誠恐謹言、

正暦四年正月十一日

從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩、依捻非違使勞、兼任越前尾張等國守闕狀　大江匡衡

文章博士任受領例

橘公材任近江守、　巨勢文雄任越前守、
菅原清公任播磨守、　春澄善繩任伊豫守、
菅原在躬任大和守、　安倍興行任肥後守、
三善清行任備中守、　藤原佐世任陸奥守、
平篤行任加賀守、

策家居内官兼受領例

文章博士菅原是善兼伊豫守　　式部少輔大江音人兼丹波守

東宮學士高階成忠兼大和守　　大學頭大江齊光兼近江守

式部權大輔菅原輔正兼太宰大貳

左近衞權少將大藏權大輔常陸權介藤原朝臣佐世兼陸奥守

右匡衡歷文章生文章得業生、對策及第、歷撿非違使彈正少弼、拜任當職、叙位勞十三年、博士勞八箇年、其間辛勤、沈滯歎深、歷文章博士之前蹤、七年不賜兼官、計撿非違使之後輩、八人超爲受領、匡衡不稱一項之田、積學稼爲口中之食、不採一枝之桑、織文章爲身上之衣、進望尙書之闕、則鶴眼疲而不可階、退求刺史之車、亦羊腸嶮而無推轂、然聞當今之時、政返淳素、三五之化漸彰、二八之臣如舊、去年之秋除目、文道成業之人多進、今年之春叙位、亂階不次之賞不見、如此則雖澤畔之蕭艾、久泥五代三餘之學、而澗底之松老來、幸期千歲一遇之榮、王澤溫潤、此時不浴何時浴、儒林光華、此時不開何時開、抑申撿非違使之分受領者、藤原實範同安隆等也、或稱追捕之功、或募造作之賞、各所申非無謂、然猶匡衡射鵠、與實範射鵰、文武之藝、決其雌雄如何、匡衡閲百家、與安隆造一屋、國家之用、論其殿最如何、彼呂尙者屠釣之賤老也、說文韜而遭遇無雙、蕭何者翰墨之柔臣也、超武將而爵祿第一、明王擢文士、不憚衆議者也、方今黄河雖清身猶沈、玄渙雖洽渴有恥、累祖相傳之書、家荒而風雨難避、老母慭遺之命、官冷而水菽未酬、爲上文、爲重道、必垂矜逐之惠、望請殊蒙天恩、依撿非違使勞、幷儒學之功、被兼任越前尾張等國守、將勵天下之學徒、不耐情願之至、匡衡誠惶誠恐謹言、

長德二年正月十五日

正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例兼任備中介闕狀　　大江匡衡

右匡衡、伏見當時之政化、莫不延喜之舊風、文道漸興、賞罰分明、天下幸甚、祝堯者多、爰匡衡業書籍而

貧、携風月而老、其所經歷之、秀才、廷尉憲臺、皆是可應州牧之擧之塗也、而不知舊貫、愚淺之人、或以爲、獻策之者、經歷式部民部丞、藏人、檢非違使、是儒者也、不可任受領、因之今歲彼與文道、曾無偏儒骨師徑、香戟學之徒、纔約成業之名、多爲出身之計、然間三史文選師說漸絕、詞華翰藻、人以不重、道之陵遲、莫不由茲、夫儒者任受領者、往古重道之時例也、儒者不任受領者、近代輕文之時例也、若謂老而嗜詩之儒、不可乘簡賦、則白樂天豈非蘇州刺史哉、若謂貧而好書之士、不可引隼旟、亦朱買臣豈非會稽大守哉、匡衡家途窮急、老母衰危也、每見後輩庸才之榮耀、未曾不慨然廢書而歎、非敢羨日之照臨、何乾沈身之愁、誠望請天恩、兼任伴國闕、將仰帝德之光右、知文學之爲先、匡衡誠惶誠恐謹言、

長德二年四月二日　　正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例依儒學勞被兼任辨官闕左右衛門權佐中他官替狀　大江以言

右以言、長保三年被任當職、不給兼官、已及七年、古今之間、未有此例、以言昔在丁年、早登甲科、蓬宮芸閣、賜宴之筵、必蒙其徵辟、王公卿相、言詩之座、必列其鳳凰、囊螢才望之愚賤、未免風月之荷擔、嘗彼時、非蒼姓而奉公之家、銜才名而立身之徒、誡其子孫、以以言之欲到青雲之上、甚其聲譽、以以言之已和白雪之中、及至其見獻策之後、不給宮職、空預爵級、當職之中、不給兼官、空經多年、莫不誡子孫之人、嗤誚而嘲辱、甚譽學之者、返悔而叱呵、謹撿故實、文章博士兼辨官、儒士居左右衛門權佐、職籍無絕、不可逸計、方今聖主好文、賢相擇士、不遇好文之代者、則何爲愁、而今遇漢帝好文之代、不得擇士之時者、則何爲慨、而今得周公擇士之時、望請天恩、被兼任件等官、聊費榮花於翰林之三春、將傳故實於學稼之萬代、以言誠惶誠恐謹言、

寛弘四年二月廿二日　　正五位下行文章博士大江朝臣以言誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例兼任式部大輔闕狀　文室如正

求進位階

經文章生者兼任件官例

源保光　安和二年任大輔本官右大辨

藤原諸蔭　延喜五年任少輔本官大内記

藤原興範　延喜九年任大輔

南淵年名　嘉祥三年任少輔、天安元年任大輔、

藤原諸成　承和七年任少輔、嘉祥二年任大輔、

右如正當職之後、十二箇年、于茲勤行寮試、簡擇學生、謂其所掌與儒相並、無何優劣、行來尙矣、加之出自文章生居此職之者、古今之間、已有其數、其例略注于右、亦雖非成業之輩、有被加任之例、嘗于昔時碩儒滿朝、才名聒世、古猶如此、今亦摸古、然則何必强求群儒之中、何必可弃非儒之輩、亦依時之斟酌、自有人之用捨者也、如正年來之間、修治寮中、功積尤高、論之道理、可蒙勸賞、況乎至有蹤跡、何無優賞乎、方今堯日高照、剧傷翅於恩光之中、舜海廣潤、濯枯鱗於德水之末、望請特蒙天恩、被兼任件官、將仰明時知人之鑒、彌勵老後奉公之誠、如正誠惶誠恐謹言、

寬弘九年十月廿日　從四位下行大學頭兼周防權守文室眞人如正誠惶誠恐謹言

〔本朝文粹奏狀六〕請殊蒙天裁依勤績及儒勞叙從三位狀　菅三品

右文時、延長之初、召候內御書所、承平之末、爲文章得業生、天慶五年、對策及第、歷內記十餘年、仕辨官九箇年、應和二年叙四位、康保元年任當職、自爾已來十箇年、當時儒者獻策之勞、莫先於文時者矣、太宰大貳藤原國光朝臣等、皆後年之登科也、伏撿故實、儒者之式部大輔、以十年已下勞、必拜八座之例、近則三善淸行朝臣以八年勞、藤原元方卿以十年勞、大江維時卿以六年勞、皆任參議、如曾祖父是善朝臣者、勞僅三年被拜除也、自餘之例、不遑具陳、去夏略引此例、潛訴蒼穹、卑聽不達、抱愁而止、厥後數月、抑淚懷舊、初拜內史之時、卽奉仕五畿七道諸神位記事、名號之訛、階級之誤、獨自所考正、總六千餘

墨、其三千六百餘者、是文時手書、凡內史局藤原國均去職之後、小野奉時未仕之間、詔勅宣命位記等、文時作書、相當數年勤仕、至天曆二年、始直撰式所、同三年三月、爲試經勤使、是皆從蒙宣旨、專竭愚忠、歷仕辨官之日、例務之外、劇務匪一、臨時奉勅作進數紙文筆、其役猶如在柱史時、又別蒙詔命、撰進叙位略例一帙、目錄合十一卷、求文時於公私、盡心情於叢脞、誠雖非驚目之文、猶可爲指掌之備之、儒者之忠、何勤過此、又撰國史所事、及本堂講書事等、其勤未終、曾無所闕、文時策試之次、當時第一也、吏部之勞、往古無比、況復色々勤績、先後重疊、又依有公卿之定、所作進之文、是度々論奏、及朔旦賀表等也、事卽在公、誠心如一、就中敎表推尋前例、作者之儒、無不公卿、元慶則亡祖右大臣卿、〇菅原道眞 昌泰則中納言紀長谷雄卿、延喜則三善淸行朝臣、天曆則大江朝綱朝臣也、貞觀以往曾公卿、須見前蹤、彌慕中臘、然而更披家譜、詳案物情、高祖父淸公朝臣、以儒學勞、叙從三位、是以文時纔八座難登之情、仰三品有例之恩、方今筋力盡於五代之朝、年齡及於八旬之暮、若不蒙拔擢、忽塡墳塋、則恐天下文士、海內學徒、不知公家用實捨虛之意、偏見文時之沈淪、相誡曾以爲、勿以風月之情事君、勿以儒雅之事報國矣、詩書禮樂之道、從此而可永廢、國家故實、朔旦多至有恩詔、篤學者蒙賞賚、高年者預給爵、文時學雖淺、而業傳於家、年雖衰而誠在於公、受知此嘉瑞之多至、文時遭逢之秋也、望請天裁、垂以曲照、殊被授從三位之階、縱使人且嘲且咲、爲三位博士、而文時雖生雖死、得爲一家之幸甚、抑是天下款服之一端、國家經緯之太本也、不勝懇款、文時誠惶誠恐謹言、

天延二年十一月十一日

正四位下行式部大輔兼文章博士菅原朝臣文時誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩依當省并儒學勞被叙從三位狀　菅三品

奉公勞五代　封策勞三十九年　文章博士勞二十五年　當階勞七年　當省勞十八年（十五年權大輔、三年大輔、）

當省大輔任參議之例

大江維時卿勞七年　　藤原元方卿勞十年（三年權大輔 七年大輔）

三善清行朝臣勞八年（四年權大輔 四年大輔）　　平伊望卿勞五年（巳上權大輔）

藤原興範朝臣勞四年　　曾祖父是善朝臣勞三年（二年權大輔 一年大輔）

依可任參議勞被叙三位之例

藤原國章朝臣（治國勞五箇年 正下勞四箇年）

依儒學勞叙三位之例

高祖父清公朝臣勞二十一年

右文時、延喜之末、召候芸閣、天慶之初、對策及第、歷內記十二年、仕辨官九箇年、康保元年任當省、天延二年叙當階、非參議之四位中、文時已爲第一也、又當時儒者獻策之勞、莫先於文時者矣、右大辨靑光朝臣者、隔十六年之下臈也、左中辨輔正朝臣者、歷十三年之後進也、謹撿故實、爲式部大輔者、數年之間、必拜參議、縱至晚者、不過十年、近古之例、略載于右、文時當省之勞殆廿年、古來曾無如此淹沈者、頃年略引先例、頻訴蒼穹、卑聽不達、抱愁而止、須猶一心、請拜參議、而衰老而旦暮彌迫、疲勞而風霧繁侵、縱雖暫生、定可無益、何者、辨官及近衞中將藏人頭等、每有參議之闕、必先拜除、如是之人、繼踵不斷故也、仍一撿太宰大貳國章朝臣之近例、一尋高祖父清公朝臣之往跡、遂登八座無期之思、偏仰三品有例之恩、是則以公卿者依有員數而難拜、階級者爲無定數可易昇也、文時筋力久盡於五代之朝、年齡差踰於八旬之列、餘喘難耐、非久可辭朝儀、殘命無程、亦豈永費公府、其暫加三品之末、纔可在一瞬之間者也、唯將欲荷紫紱生前之賜、以貢黃壤夢後之行也、若不蒙渙澤、遂塡溝壑、則恐天下文士、海內學徒、不知公家用賢捨愚之意、偏見文時之沈淪、皆相誡謂、勿以風月之情奉君、勿以儒雅之事報國矣、詩書禮樂之道、從此而可永廢、望請鴻恩曲垂矜恤、殊施雨露之餘光、以賜銀青之榮耀、何啻一老翁之慶

幸、即爲衆庶人之歡娯、並是朝野歌樂之道可遍及國家福祚之顯彌新矣、文時誠惶誠恐謹言、

天元三年正月五日　正四位下行式部大輔兼文章博士尾張權守菅原朝臣文時上

〔神宮祠官位階款狀寫〕皇太神宮權禰宜正六位上荒木田神主盛保誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例預五品榮爵狀

右謹撿舊貫、太神宮祠官等、預榮爵致御祈禱者、古今之通規也、爰盛保祖考者、父權禰宜荒木田盛合、祖父權禰宜荒木田盛倫、曾祖父權禰宜荒木田盛理、高祖父權禰宜荒木田盛奧等也、預榮爵之狀、謹頌、非據乎、望請天恩早預榮爵、致天下泰平國家安全之御祈禱矣、盛保誠惶誠恐謹言、

天和三年二月日　權禰宜正六位上荒木田神主盛保上

〔朝野群載四朝儀〕女官申文

典侍正四位下藤原朝臣師子誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例被叙一階狀

右承暦四年任典侍、承德二年叙當階、典侍勞廿一年、當階後三箇年、竊閲傍例、正四位下歷二三年、叙三品例也、望請天恩、因准先例、被叙一階、師子誠惶誠恐謹言、

康和二年正月十一日　典侍正四位下藤原朝臣師子

今案乳母御申文也、非乳母者、不叙三位之故也、

〔朝野群載四朝儀〕切杭申爵

主殿女孺正六位上山宿禰清子誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例依年勞被叙爵狀

右清子謹撿案内、身勞已及五十餘年、親母勤仕女孺之後、已經十三箇年、相繼補任當職之後、卅餘年于茲、已仕四代之朝廷、及七旬之暮齡、適沿玄渙、誰謂非據、望請天恩、依年勞恪勤被叙爵、彌仰奉公之

蔭敍

貢、清子誠惶誠恐謹言、

應德三年十二月廿二日　主殿女孺正六位上山宿禰清子

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕比來之(コノゴロノ)吾戀力(ワガコヒヂカラ)、記集(シルシアツメ)、功(クウ)爾申者(ニマヲサバ)、五位(ゴヰ)乃冠(ノカウブリ)、

貢蔭

貢蔭トハ、父祖ノ庇蔭ニ藉ルヲ云ヒテ、皇親ノ蔭ト、諸臣ノ蔭トノ別アリ、令制ニテハ初テ出身シテ敍位ズルニハ、皇親ノ蔭ハ、親王ノ子(卽二世王)ハ從四位下、二世王ヨリ四世王マデノ子ハ從五位下ニシテ、五世王ノ嫡子ハ正六位上、庶子ハ正六位下ナリ、諸臣ハ五位以上ニ止マリテ、一位ノ人ノ嫡子ノ從五位下ヨリ始マリテ、從五位ノ人ノ庶子ノ從八位下ニ訖ル、而シテ三位以上ニ非レバ、蔭ヲ其孫ニ及ボスコトヲ得ザリシガ、桓武天皇ノ延曆十九年ニ、四位ノ人モ其蔭ヲ孫ニ及ボスコトヲ得ルニ至レリ、又延喜式ニハ、大臣ノ曾孫ハ從八位下ニ敍スルコトヲ得シム、凡テ位ヲ授クルハ、年二十五以上ヲ限レルヲ、蔭ヲ以テ出身スル者ハ、年二十一以上ヲ限ル、而シテ入色ハ並ニ十七歲ヨリ始マル、入色トハ出身スルコトヲ得ルヲ云フナリ、十七歲ハ中男、二十一歲ハ正丁ナルニ因リテ此法ヲ立テタルナリ、而ルニ令ニハ、蔭子蔭孫ノ出身ノ條ハアレドモ、如何ナル才德ニシテ、其選ニ預ルト云フ式ヲ載セザリシヲ、文武天皇ノ慶雲三年ニ、文武ノ貢擧ニ預ル者ト、別勅ニ由リテ處分セラルヽ者トノ外ハ、選ニ預ルコトヲ得ズトセリ、而後三位以上ノ子孫、及ビ四位五位ノ子モ、出身ノ後ニ、六考ニ足ルヲ待チテ、乃チ選例ニ預リテ敍位セシヲ、桓武天皇ノ延曆十四年ニ、慶雲ノ格ヲ以テ、四位五位ノ孫ノ爲メニ立テタル法ニシテ、三位以上ノ子孫四位五位ノ子ニ及ベル者ニ非ズト

シテ、式部省ノ慣例ヲ棄テヽ用ヰザルコトヽナレリ、サテ出身トハ、初テ職ニ就クヲ云ヒ、或ハ初テ敍位スルヲモ云ヘリ、而シテ又蔭位ノ人、考滿チテ敍スベキニ、其蔭位ノ考ニテ敍セラルベキ位ヨリ高キトキハ、高キニ從テ蔭位ニ敍スルナリ、養子ハ兄弟ノ子ノ外ハ出身スルコトヲ得ズ、嫡孫承祖ノ者ハ、祖ノ蔭ヲ受リテ敍位スルヲ得ズ、又其養子既ニ嫡子ノ位ニ敍スレバ、養父後ニ子ヲ生ミタリトモ、其子ハ庶子ノ位ニ敍スルナリ、蔭子蔭孫年二十一以上ニシテ、見ニ役任ナキ者アレバ、京國ノ官司ニテ勘檢シ、毎年十二月ニ式部ニ貢擧シ、太政官ニテ更ニ檢簡シテ、性識聰敏、儀容取ルベキヲ内舍人ニ充テ、其餘ハ式部ニテ狀ニ隨テ、大舍人、中宮舍人、春宮舍人ニ充ツ、但シ三位以上ノ子孫ハ檢簡セザルナリ、又蔭子蔭孫ハ、勘籍シテ敍位スル例ナリシヲ、平城天皇ノ大同元年ニ之ヲ停メ、仁明天皇ノ承和五年ニ更ニ復セシガ、後ニ又停メタリ、勘籍トハ式部兵部治部ヨリ民部ニ往キテ、戸籍ヲ勘檢スルヲ云フ、即チ孫ヲ以テ子トシ、庶ヲ以テ嫡トシ、生年ヲ加フル等ノ詐冒ヲ防ガンガ爲ナリ、而ルニ其後ハ既ニ親生ノ嫡子ヲ立テ、更ニ孫ヲ養テ子トシ蔭位ヲ求メタル者アリ、十一二歳ニシテ敍位スル者アリ、而シテ攝關及ビ有勢大臣ノ男ハ、嫡子庶子ヲ擇バズ、多ク正五位下ニ敍セリ、皆別勅ニ出タルナラン、嫡子トハ家ヲ承クベキ子ヲ云ヒ、其餘ヲ皆庶子ト稱ス、嫡妻ノ子ヲ嫡子ト云ヒ、妾妻ノ子ヲ庶子ト云フトハ異ナリ、外位ノ蔭ハ内位ニ準ジ、外正五位ノ嫡子ハ、外正八位下ニ敍スベキ法ナリシヲ、聖武天皇ノ神龜五年ニ、外從八位上ニ敍スルコトヽナレリ、勳位モ蔭ヲ及ボスコトアリ、即チ四位五位ノ人、其文位ヨリ勳位ノ高キヲ帶タルトキハ、四位ハ一等ヲ降シ、五位ハ二等ヲ降シテ文位ノ蔭ニ敍ス、即チ四位ノ人、勳一等ヲ帶ビタルトキハ、勳二等相當ナル三位ノ蔭ヲ以テ、嫡子ハ從六位上ニ敍シ、五位ノ人勳一等ヲ帶ビタル時ハ、勳三等相當ナル正四位ノ蔭ヲ取テ、嫡子ハ正七位下ニ敍スルナリ、贈位ハ生前

ノ位ニ一等ヲ降シテ敍ス、假ヘバ正五位ノ嫡子ハ、正八位下ニ敍スベキヲ、贈正五位ノ嫡子ハ、從八位上ニ敍スルナリ、但シ王事ニ死シテ贈位セラレタル者ノ子孫ノ蔭位ハ、生前有位ノ人ノ子孫ト全ク同ジ、又父祖ノ位蔭ニ因リテ、出身シテ位ヲ得タル者、父祖除名ノ罪ヲ犯セルトキハ、其子孫ノ位ヲ奪ハズ、若シ子孫復タ除名セラルヽトキハ、後ニ敍位セラルヽ日ニ、無蔭ノ法ヲ以テ敍スルナリ、

又位子ト云フコトアリ、内六位以下、八位以上ノ嫡子、年二十一以上ニシテ、見ニ役任ナキ者ヲ、京國ノ官司勘檢簡試シ、分チテ三等トシ、上等下等ヲ式部ニ送リ、中等ヲ兵部ニ送リ、上等ヲ大舍人トシ、下等ヲ使部トシ、中等ヲ兵衞トス、是レ即チ位子ニシテ、位子ハ庶子ニ及バズ、故ニ嫡子既ニ他色ニ出身スルトモ、更ニ庶子ヲ以テ、位子タラシムルコトヲ得ズ、又其位子ハ式部ニテ戸籍ニ勘會シ、鐫符ヲ其國ニ下シテ徭役ヲ除キ、而シテ後ニ考ニ預ルコトヲ聽スナリ、

又假蔭ト云フコトアリ、冒蔭トモ、僞蔭トモ云フ、他ノ蔭ヲ冒シテ出身スルナリ、人ノ蔭ヲ冒シ、外家ノ蔭ヲ冒シ、孫ニシテ子ナリト云ヒ、僧ノ子ニシテ人ノ蔭ヲ冒スガ如キハ、皆假蔭ニシテ、法令ノ禁ズル所ナリ、又蔭ニ因リテ所犯ノ刑ヲ降除スルコトハ、法律部ニアリ、

皇親蔭位

〔令義解四選敍〕凡蔭皇親者、親王子從四位下、（謂親王者、不限有品無品皆是、凡一部令内、稱親王不注品階者、皆依此例、）諸王子從五位下、其五世王者、從五位下、（案既不在諸王之限、故同諸臣蔭、）子降一階、庶子又降一階、唯別勅處分、不拘此令、

五位以上蔭位

〔令義解四選敍〕凡五位以上子出身者、一位嫡子從五位下、庶子正六位上、二位嫡子正六位下、庶子及三位嫡子從六位上、庶子從六位下、正四位嫡子正七位下、庶子及從四位嫡子從七位上、庶子從七位下、正五位嫡子正八位下、庶子及從五位嫡子從八位上、庶子從八位下、三位以上蔭及孫、降子一等、（謂嫡孫降嫡子、庶孫降庶子也、）外位蔭准内位、其五位以上帶勳位高者、即依當勳階同官位蔭、四位降一等、五位降二等、（謂亦

時賞子蔭位也

〔江家次第 正月二〕叙位

蔭子蔭孫次第

一位嫡子 從五位下　庶子嫡孫 巳上正六位上　二位嫡子 正六下

一位庶孫 巳上正六位下　二位庶子 從六上　三位嫡子 從六上

二位嫡孫 巳上從六位上　三位庶子 從六下　二位庶孫

三位嫡孫 巳上從六位下　三位庶孫 正七位上　正四位嫡子 正七位下

正四位庶子及從四位嫡子 巳上從七位上　從四位庶子 從七位下

正五位嫡子　正四位嫡孫 巳上正八位下　正五位庶子

從五位嫡子　正四位庶孫　從四位嫡孫 巳上從八位上

從五位庶子　從四位庶孫 巳上從八位下

〔官職難儀〕蔭子蔭孫事

六位人蔭をする時の事也、同日同階人上下を定る時、父祖の官位を引て子孫の上下を定むるをいふ、同年ならぬは、年次第に用る事も侍る、同年の時は、必曾祖父とて、四代先までたゞす事侍り、いまも叙位の小折紙などあそばし候時、今日從五位下に成候者あまたあらば、何をさきに書のせらるべきやの時、此道理にて落居する也、又蔭を不立と申事のある、先祖以來普代高位の輩の子など、如法に位階を經歷の仁には、其さたに及ずと云事なり、

〔續日本紀 七元正〕靈龜元年九月庚辰、受禪卽位于大極殿、詔曰、○中略五位巳上子孫、年二十巳上者、宜授蔭位、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年二月甲午、受禪卽位於大極殿、大赦天下、詔曰、○中略內外文武職事、及五位巳

外位勳位蔭位

上爲父後者、授勳一級、

〔令集解 十七 選敍〕延暦十九年四月十日、官奏云、應蔭四位孫事、右謹按令條、三位以上蔭及孫、降子一等者、然四位蔭孫一同五位、今四位者爵號既尊、封秩是厚、而及孫之蔭、尚未有殊、斟酌其理、實乖矜恕、伏請降子四等、以及孫蔭、庶使冠蓋異等、尊卑別次、臣等商量所定如件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

〔續日本後紀 一 仁明〕天長十年三月癸巳、天皇卽位於大極殿、詔曰、〇中略 五位已上子孫乃年廿已上奈留爾、賜當蔭之階布、

〔續日本後紀 十八 仁明〕嘉祥元年六月庚子、改承和十五年爲嘉祥元年、下詔曰、〇中略 五位已上子孫年廿已上者、亦敍當蔭之階、

〔三代實錄 四十一 陽成〕元慶六年正月七日庚戌、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、〇中略 宣制曰、〇中略 五位已上子孫年二十已上、敍當蔭階、

〔令義解 四 選敍〕凡五位以上子出身者、一位嫡子從五位下、庶子正六位上、〇中略 外位蔭准內位、其五位以上、帶勳位高者、卽依當勳階、同官位蔭、四位降一等、五位降二等、謂、勳位亦降其子蔭位也、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事〇中略

蔭其子事

右外正五位嫡子從八位上、庶子大初位上、外從五位嫡子從八位下、庶子大初位下、並嫡子補大舍人幷大學生、不得任內舍人、其庶子補二宮東宮、中宮、舍人及諸司史生帳內職分資人等之色、卽有犯罪者准犯配決、不須蔭贖、

父妻

右其父從免課役之例、妻者得外命婦之號、不入朝參之例、

以前事條、刪定内外五位貴賤差別、臣等商量具件如前、謹以申聞謹奏、奉勅、宜依前件、永爲恆式、

神龜五年三月廿八日

○按ズルニ、令本注ニ、外位蔭准内位トアリ、是ニ至リテ其制ヲ改メタルナリ、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年三月丙戌朔、乾政官奏曰、外六位已下、不在蔭親之限、由此諸國郡司承家者、已無官路、潜抱憂嗟、朝議平章、別許少領已上嫡子出身、遂使堂構無墜、永世繼宗、但貢兵衞者、更不得重、奏可、

贈位蔭

〔令義解四選敍〕凡贈官、死王事者、與生官同、餘降一等、謂非死事者也、降一等者、降其子孫之蔭位也、

○按ズルニ、贈官ハ卽チ贈位、生官ハ卽チ生前ノ位ナリ、

〔延喜式十八式部〕凡奉使絶域、遭賊及沒海、以致死亡贈位者、子孫蔭法、一同生官、

大臣曾孫蔭位

〔延喜式十八式部〕凡大臣曾孫者、敍從八位下、

出身年齡

〔令義解四選敍〕凡授位者、皆限年廿五以上、謂入色年限、自十七也、唯以蔭出身、皆限年廿一以上、

〔令義解五軍防〕凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、謂於他色使也、任亦使、其得考以上、不須申送、但帳内資人、是敍外位、被須申送、卽既已敍位、身於敍位者、亦須申送也、每年京國官司、勘撿知實、限十二月一日、幷身送式部、申太政官、撿簡性識聰敏、儀容可取、充内舍人、謂二事相須、乃充内舍人也、三位以上子、不在簡限、以外式部、隨狀充大舍人、及東宮舍人、謂中宮舍人、亦准此也、

〔延喜式四十二左右京〕凡三位已上子孫、幷四位五位子、年滿廿一已上者、貢擧式部省、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月甲子、始皇親五世王、五位已上子、年滿二十一已上者、錄其歷名、申送式部省、

出身分限

〔令義解四選敍〕凡爲人後者、非兄弟之子、不得出身、謂若取兄弟之子者、須敍嫡子位、卽養父於後生子者、敍庶子位、其六位以下者、養子既得敍嫡子位、其子亦不可出身也、

〔延喜式 十八式部〕凡陸奧出羽太宰管內諸國蔭子孫位子、雖不向省、聽預出身、

〔續日本紀 二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、○中略 五位以上子、依蔭出身、以兄弟子爲養子、聽叙位、其以嫡孫爲繼不得也、

〔台記〕久安四年四月廿七日甲寅、今日菖蒲麻呂○藤原賴長子兼長 於大閤下○賴長父忠實 第加元服、左大將爲賓、叙從五位上、聽昇殿禁色、既爲大閤下養子、叙從上、如何、今日事在別記、

○按ズルニ、兼長時ニ年十一ナリ、翌年八月ニ至リテ從三位ニ進メリ、文ニ叙從上ト如何トハ、當時攝關ノ子ハ、多ク正五位下ニ叙スルヲ、兼長ノ祖父前關白太政大臣從一位忠實ノ養子ニシテ從五位上ニ叙スルヲ以テ快トセザルナリ、是ヨリ先ニ忠實落髮シタレドモ、蔭ヲ蒙ルニ妨ナカリシナリ、

預選法

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年二月庚寅、制七條事、○中略 准令藉蔭入選、雖有出身之條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身、非因貢擧及別勅處分、並不在常選之限、

〔令集解 十七選敍〕延曆十四年十月八日官符云、應三位已上子孫、及四位五位子、年滿廿一者、叙當蔭階事、

右得式部省解偁、按選敍令、凡授位者、皆限年廿五以上、唯以蔭出身者、限年廿一以上者、又慶雲三年二月十六日格云、准令藉蔭入選、雖有出身之條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身者、非因貢擧及別勅處分、並不在常選之限者、今按彼格意、準據四位五位之孫立例、非爲自餘生文、而省所行三位以上子孫、及四位五位子出身之後、待足六考、乃預選例、既乖令條、不易因循、但施行歷代、不得輙改、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、所請有理、宜依請、

○按ズルニ、待足六考乃預選例トハ、十七歲ニシテ入色ト爲リ出身シ、十八歲ヨリ計ヘ、二十三歲ニ至リテ合セテ六考ナレバ、始テ考選ニ預リテ叙位スルヲ云フ、

考滿叙位法

〔令義解 四選敍〕凡考滿應叙、若有蔭高者、聽從高、

除名者蔭

〔令集解 十七 選敍〕延暦十三年十月十一日官符云、應出身得第、本位上加本第叙事、右被右大臣宣偁、奉勅、選叙令云、秀才明經得上中以上、有蔭及孝悌被表顯者、加本位本第一階叙者、除此之外、至有位人、本位本第有相當者、更不加叙、據理論之、事乖勸誘、自今以後、出身得第之徒、先明有本位者、於本位上、計本第階、更加叙之、使後進益有所希求、自餘依令、以爲恒例、

〔令義解 選敍 十〕凡因父祖官蔭出身得位、父祖犯除名罪者、子孫不在追限、若子孫復除名者、後叙之日、即從無蔭法、（謂、文云後叙之日、即從無蔭法、是謂已經蔭叙、後遇除名之罪、即須從無蔭之法也、若未經蔭叙者、仍聽蔭也、）有其父祖因犯降叙者、亦從降蔭叙、（謂、凡除名子孫、於法應蔭、若父祖降叙之後、其三位以上、除名臨時勅授五位以上者、是爲降叙、其蔭依入色、准本色文叙也、）

○按ズルニ、官蔭ハ即チ位階ノ蔭ナリ、

絶蔭

〔續日本後紀 十二 仁明〕承和九年七月戊午、集春宮坊諸人等於右衛門陣庭、詔曰、〇中略 春宮乃帶刀舍人伴健岑伊、與橘逸勢、合力天、國家乎傾亡止謀利、彼求事理爾、於皇太子天無所避之、因茲皇太子乎其位廢退給不止己畢、〇中略 〇坊司幷品官乃佐官以上、及侍人藏人諸近仕者等、又司乃長以上波乎、皆流罪爾當給不、〇中略 又官無文人等波乎、絶蔭除位天、流罪爾當給之、然而殊慈給奈毛止、天其身三乎乃流太万布、

蔭子孫學廕次

〔本朝世紀〕仁平三年六月三日辛酉、給料學生光範登宣、其辭申文稱、父孫〇父誤 蔭位相同之故也云云、而以光範可爲上臈之由被宣下云々、

●

位子

〔令義解 五 軍防〕凡內六位以下、八位以上嫡子、年廿一以上見無役任者、每年京國官司、勘撿知實、實狀簡試、分爲三等、儀容端正、工於書筭、（謂、二事不相須、即以下身材强幹等亦准此、其充使部者、令無申遣之文也、）爲上等、身材强幹、（謂、材力也、實也、）便於弓馬爲中等、身材劣弱、不識文筭爲下等、十二月卅日以前、上等下等送式部簡試、上等爲大舍人、下等爲使部、中等送兵部、試練爲兵衛、如不足者、通取庶子、（謂、止爲兵衛、不爲舍人也、）

〔新唐書 四十五 選擧〕凡納課品子、歲取文武六品以下勳官三品以下五品以上子年十八以上、每州爲解上兵部、納課十三歲而試、第一等送吏部、第二等留太司、第三等納資二歲、第四等納資三歲、納已復

試、量文武授散官、若考滿不試、免當年貢、遭喪免貢、無故不輸貢、及有犯者放還之、凡捉錢品子無違負滿二百日、本屬以簿附朝集使、上于考功兵部、滿十歲、量文武授散官、其視品國官府佐應停者、依品子、納課十歲而試、

〔延喜式五齋宮〕凡齋內親王三年齋終、四月上旬任裝束司、○中略雜使十人、散位六人、位子四人、

〔延喜式十八式部〕凡外位任內職事者、即改入內位、若內位任外職事者亦改外位、若內番上附外考帳者、雖帶八位以上、不聽貢位子、

凡京國每年所貢位子者、勘會籍帳、下其國符、乃聽預考、雜色出身亦准此、但蔭子孫不在此限、

〔延喜式二十二民部〕凡八位已上嫡子、他色出身者、雖有庶子、不在貢位子例、

凡勘籍者、位子并雜色三比、諸衞五比、若有不合、隨即還却、

〔續日本紀四元明〕和銅元年四月癸酉、制、貢人位子、无考之日、浪入常選、白丁冒名、預貢人例、此色且多、是由式部不察之過焉、○中略亦其位子、准令嫡子唯得貢用、庶子不合、今即兼用、此亦式部違令、若其庶子雖授位記、皆追還本色、但其才堪時務、欲從貢人例者聽之、○中略又諸位子貢人堪貢名籍、皆令本部案記、臨用式部乃下本部追召之、

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、○中略望請、陸奧按察使管內百姓、庸調浸免、○中略位子、帳內、資人、○中略皆悉放還、各從本色、若有得考者、以六年爲叙、一叙以後、自依外考、○中略奏可之、

〔東大寺正倉院文書續修別集四十四〕經師上日帳

天平勝寶元年八月以來上日○中略

式部省○中略

位子

從八位下矢集宿禰小道

八月不 九月不 遥上 十一月日七夕六 十二月日十二夕十 二月日廿三夕廿二 三月日廿一夕廿 四月日廿七夕廿五 五月日廿七夕十 六月日三夕二

大初位上古能善

八月日廿三夕廿二 九月日十三夕十一 十月日廿八夕十 十一月日十一夕十 十二月日十三夕十一 正月日六夕四 二月日廿六夕廿四 三月日廿一夕十九 四月日廿四夕廿 五月日廿一夕十八 六月七四 七月日廿九夕廿八

少初位下大市首大山

八月不 九月日十三夕十一 十月不 十一月不

〔東大寺正倉院文書續修別集四十〕經師上日帳〔○天平勝寶二年〕

兵部位子

二少初位下委忌寸麻呂

八月日廿八夕十 九月日十六夕十二 十月日一夕一 十一月不 十二月日三夕二 正月日八 二月日廿二夕廿一 三月日十三夕十二 四月日十二夕十一 五月不 六月不 七月不

〔類聚國史百七職官〕桓武天皇延曆十四年六月己酉、勅、自今以後、左右大舍人、以蔭子孫補之、其位子者、依令以容止端正工於書筭者補之、不得妄以雜色及畿外人補之、

平城天皇大同元年十二月癸亥、勅、左右大舍人、自今而後、以蔭子孫補之、以外一切停補、〇停補下、類聚三代格有其位子者依令六字、恐可從簡試以容止端正工於書筭者補之、但曰〇曰恐旨非有別勅以外、不得妄以雜色及畿外人補之、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月甲戌、勅、河内國、〇中略課丁少數、無人差役、其散位位子、留省之徒、不直本司、常在鄕里者、宜限三年、補國中雜任、計其上日行事、與考言上、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年八月廿三日癸未、太政官處分、左右京五畿七道諸國貢擧位子、自今以後、宜

假蔭

勅三比籍、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應糺正僧子假蔭出身事

右右大臣宣偁、奉勅、僧或有子、多事假蔭、違敕犯法、理合改正、但爲有所思、特從寛宥、以往假冒、更莫追論、自今以後、息子之僧、一切還俗、以懲將來、親姻隣保、藏而不告、科違勅罪、不聽蔭贖、

延暦十七年九月十七日

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年正月戊午、勅冒蔭之徒、若能自首、宜從改正、把笏之色、先經擢策、宜特寛恕、官位如舊、　二月癸巳、主菓餅從七位下宍人朝臣宮人、假蔭入色、改正還本、特免其罪、復本職、　八月丁酉、勅擇才擢用、不必資蔭、今衞府舍人及衞門門部、僞蔭之侶、其數寔多、而緣許還本、事乖弘恕、宜特寛宥、任用如舊、至于昭穆、據實改正、其詐蔭未經叙位、任後依選得叙者、矜彼勞効、勿追位記、但先後資蔭得叙、或更歷選加階者、宜計蔭叙之階、追後加之階、

〔日本後紀十三桓武〕延暦廿四年十一月甲申、左京人正七位下淨村宿禰源言、父賜綠袁常照、以去天平寶字四年奉使入朝、幸沐恩渥、遂爲皇民、其後不幸、永背聖世、源等早爲孤露、无復所恃、外祖父故從五位上淨村宿禰晉卿養而爲子、依去延暦十八年三月廿二日格、首露已訖、儻有天恩、无追位記、自天祐之、欣幸何言、但賜姓正物、國之徽章、伏請改姓名、爲春科宿禰道直、許之、

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年二月廿八日丙子、越前國坂井郡人從八位上物部恒繼男貞守、詐冒丹生郡人物部富主位蔭、貢舉位子、蠲除課役、國司申請、依律科罪、還著本色、太政官處分、依請焉、

〔三代實錄四十一陽成〕元慶六年四月八日庚辰、丹波國人右近衞從八位下丹波直有數、兄從七位下丹波直有貞、正八位下丹波直數宗、從八位上丹波直核穎、弟從八位上丹波直有道等、故外從五位下丹波直人足孫、淸雄之子也、而僞稱蔭孫、奸著圖籍、貢舉蔭孫、還叙位階、有數男、秀助、惟影、惟恒三人、入貢位

子、共免徭役、國司申請、依實改正、勅從之、

勘籍

〔延喜式民部二十二上〕凡蔭子孫者、本貫貫送、勿更勘籍、若有冒名被蔭、登採爲子之類、所貫官人依法科處、

〔日本後紀平城十四〕大同元年七月庚戌、制蔭子孫、先勘籍後叙位、夫五位以上、冠蓋惟貴、子孫勘籍、事涉細碎、自今以後、宜停勘籍、但冒名被蔭、登採爲子之類、所司不存檢察、若有此類、所貫官人依法科罪、

〔續日本後紀仁明七〕承和五年六月乙未、勅、諸所貫蔭子孫位子等、須式部民部丞勘籍之日、於其戸籍姓名之上、具注合否之狀、兩省之丞署名其下、治部兵部省亦宜同之、自今以後、立爲恒例、

蔭位子除課

〔令義解戸二〕凡戸主皆以家長爲之、戸内有課口者、爲課戸、無課口者、爲不課戸、不課、謂皇親、謂四位以上、其五世王者、本蔭五位、即身帶職、理宜不課、六世王者、雖准本蔭比五位子、身是不課、七世王者、雖云蔭比五位孫、被輸調見任、可得出仕、八世以下者、實既巳絶、還科賦役、一准白丁也、○中略 并蔭子、謂五位以上之子、其三位以上父祖兄弟子孫是不課、雖以子爲文者、總其多者也、

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、皆據去年帳勘其出入、○中略 其依符所免爲符損、八位蔭子(中略)爲不課、六位初位位子(中略)爲半輸、

○按ズルニ、不課トハ課役ヲ免スコトニテ、調庸雜徭ヲ調クヲ云フ、半輸トハ徭役ヲ免スコトニテ、庸雜徭ヲ除クヲ云フ、

雜載

〔續日本紀八元正〕養老五年六月乙酉、太政官奏言、○中略 除定額外、内外文武散位六位以下及勳位、并五位以上子孫、並令納貲便成番考、此則雖積考年、還乏衣食、宜始今年不須輸貲、人々歸田、家々貯穀、若有豐稔稱納貲成考者、恣聽之、其五位以上子孫、年二十一以上、取蔭出身、並依常例、因結告字、○結告二字恐誤 庶體公驗、一同分番之法、奏可之、

〔續日本紀聖武十三〕天平十一年八月丙子、太政官處分、式部省蔭子孫并位子等、不限年之高下、皆下大學、一向學問焉、

〔中右記〕大治五年正月三日丙午、今日大殿○藤原忠實 安也、若君○忠實子頼長 被昇殿也、○中略 依關白殿兄○忠通

御子儀被書名簿、

（裏書）大殿仰云、前太政大臣父子共相並、今日書様如何、予申云、殿下當時之關白ニ御座也、前太政大臣と被書者、猶大殿也、仰云、尤可然、此書已成關白子了、前太政大臣孫と可被書也、是我孫之儀也者、仍以此定被書了、倩思此事、父子相並爲前太政大臣事、古今未有如此例、希有之事歟、

〔法曹類林　二百二十六〕故殿從一位太政大臣准三宮、〇藤原道長當時父從一位左大臣、〇藤原頼通今件若君〇頼通子可申蔭子哉、爲當可申蔭孫歟、

繼嗣令云、皇兄弟皇子皆爲親王、以外並爲諸王、選叙令云、蔭皇親者、親王子從四位下、諸王子從五位下、又條云、五位以上子出身者、一位嫡子從五位下、庶子正六位上、嫡孫正六位上、庶孫正六位下者、

案此等、父上階、祖下階之人、已稱蔭子、父下位、祖上位之者、更號蔭孫、是則偏求身蔭位之高、不依父祖官職之貴者也、而今於此若君者、殿下已一位也、祖蔭不可過、斯强猶申蔭孫、本位還可御輕、抑亦准三宮宣旨者、只爲年爵年官也、已不御坐親王、其蔭難及彼孫歟、

長元六年七月廿八日　　道成

關白殿若君、七月廿七日昇殿、書御名簿之間、有蔭子蔭孫論、而蔭孫と書了、爲決疑所問也、

出家人子孫不可稱蔭事

令問答云、問父若出家之後、子孫可稱其蔭乎、

答案名例律、有蔭犯罪、無蔭事發、無蔭犯罪、有蔭事發、並從官蔭之法者、所謂出家以後已無官蔭之時也、更就何文可稱其蔭乎、

今如此問答者、大殿若君猶可申蔭子也、御堂御言上如件、

年月　　道成

讓官位

官位ヲ讓ルニハ、親戚ニ讓ルアリ、他人ニ讓ルアリ、受ケテ卽チ讓ルアリ、讓ルトハ遷シ授ケンコトヲ請ヘルニテ、竟ニハ父子其職ヲ世襲スルニ至レリ、

〔延喜式 四伊勢大神宮〕凡二所大神宮大小内人、物忌、及御厨雜色人等者、不得輙讓所帶之職、別宮内人、物忌、琴師、笛生、歌長、織服神部、酒作、

〔延喜式 十一太政官〕凡諸國權史生博士醫師遷任、幷依讓相代之輩、其置符注所遺歷、

〔延喜式 十八式部〕凡諸道博士得業生等當國之輩、若讓他人者、雖學生醫生、不得任當國之人、

凡諸國司及史生博士醫師等、若特被許相讓者、令覺前人遺歷、

〔類聚三代格 七〕太政官符

一應停郡司讓職事

右職無尊卑、理須上命、何以公官私得相讓、頃年之例、往々有讓件職者、父子之間有宜旨、以裁許、自餘親疎待國解以處分、至貞觀七年符、雖父子之間、非國司言上不聽相讓、自爾以來、諸國依託此符、多相讓之詮、本欲遏巧僞之萌、還爲申請之媒、遂使國衙役民頓昇八位之級、外散位輩多滿諸國之中、歷年稍多、不曾致課丁之欠、一宗傳讓、或已憑代遞格、穡於政途甚非公益、自今而後、宜依件停止、

以前被右大臣〇源多宣偁、奉勅、宜令依件遵行、

元慶七年十二月廿五日 〇又見三代實錄、

〔續日本後紀 十八仁明〕承和十五年〇嘉祥元年 十月丁亥、讚岐國言、三野郡人從四位上丸部臣明麻呂、年卌、戸主外從八位上己西成男也、齡十八歲、入郡從官、逐郊務積、被任當郡大領、卽讓己職於父、自守子道、孝。

養二親、己酉成老致仕任、親母亦耄、各別宅相去十里、明麻呂朝夕往還、定省年久、眷其孝行、在昔曾參不可獨貴、望請准據法式、以被貢擧者、勅宜叙爵三階、終身免戶內田租、

〔三代實錄〕三十七　元慶四年五月十三日丙寅、散位從五位下藤原朝臣安主爲豐後介、秩年已滿、不得放歸、落魄在彼、男從五位下統行任武藏介、奏言被罷統行官、拜父安主於本官、詔許之、

〔三代實錄〕五十光孝　仁和三年八月七日戊申、散位從四位上文室朝臣卷雄卒、卷雄者右京人、中納言從三位綿麻呂之第九子也、○中略　六年○貞觀　二月爲因幡權守、後月遷相模守、之後不之任、卷雄奏請被罷相模守任、男一人外吏、詔依請、以男房典爲近江少掾、

〔江吏部集〕人倫　再除吏部員外侍郞○大江匡衡　懷舊有感

忝傳祖父貽孫跡、爲子辭官任本官、天曆餘風今在此、少年莫歎雪窻寒、祖父(匡衡祖維時)納言爲天曆侍讀之時、辭所帶式部大輔、以男藏人齊光任式部丞、齊光叙爵之後、納言還任式部大輔、江家再有此例、故云、

〔榮花物語〕二花山　ほり河どの○藤原兼通　御心ちいとゞをもりて、たのもしげなきよしを世にまうす、さいつころ、うちに參らせ給て、東三條の大將○藤原兼家をばなくなし奉り給てき、いまひとたびとて內にまいらせ給ひて、よろづをそうしかためていでさせ給にけり、なに事ならんとゆかしけれどまたをとなし、かくて十一月○貞元二年四日、准三宮の位にならせ給ぬ、同月八日うせ給ぬ、御年五十三なり、忠義公と御いみなをきこゆ、あはれにいみじ、かくいくばくもおはしまさゞりけるに、東三條の大納言をあさましうなげかせたてまつりたまひけるも心うし、小野宮の頼忠のおとどに、世はゆづるべきよし、一日そうし給しかば、そのまゝにとみかど覺しめして、おなじ月の十一日、關白の宣旨かうぶり給て、世の中みなうつりぬ、

〔權記〕正曆三年八月廿八日己丑、大納言正二位源重光七十年辭所帶大納言職、讓卿納言伊周、任權大納言、十九年

〔榮花物語十二 玉村菊〕同じ月〇寛仁元年三月の十七日、大殿〇藤原道長攝政を内大臣どの〇道長子頼通に讓聞えさせ給ふ、内大臣殿御年、ことし廿六におはしましけり、

〔古事談六 亭宅諸道〕洞昭參入道殿御堂〇藤原道長御前、乍臥令謁給、于時宇治殿内大臣〇藤原頼通、道長子令參給、暫アリテ入、母上御方給之後、洞昭申云、此君本自无止御座、而ニ重可貴之御相已顯給云々、入道殿忽驚起給、被仰云、可讓執柄之由、只今心中所案也云々、

〔除目大成抄 入〕讓〇中略

請殊蒙天恩以所帶職讓男正六位上盛實之狀

正六位上行左馬允源盛行誠惶誠恐謹言

左馬少允正六位上源朝臣盛實　父盛行讓

右謹檢案内、依父讓申任所帶、古今間非無優許、近則少監小野政貫讓男忠時是也、採擇之間、只仰冥慮、望請天恩、以所帶職被任男盛實者、將竭奉公之節、盛行誠惶誠恐謹言、

永久四年正月廿八日　　正六位上行左馬允源朝臣盛行〇中略

俊房

神祇大祐正六位上大中臣朝臣家成　父頼宜辭大副讓

祭主神祇大副從五位下大中臣朝臣頼宜誠惶誠恐謹言

請被殊蒙天恩因准先例辭退所帶神祇大副以男文章生正六位上大中臣朝臣家成拜任大祐特任替狀

右―――――

應徳三年正月廿六日　　祭主神祇大副從五位下大中臣朝臣頼宜

俊房

大膳少進正六位上惟宗朝臣清實　兄季隆讓

正六位上行大膳少進惟宗朝臣季隆誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例以所帶大膳進讓與舍弟正六位上淸實狀

正六位上行大膳少進惟宗朝臣季隆

右―――

永保三年正月廿九日

〔扶桑略記三十堀河〕寛治七年十一月廿日甲午、權大納言源雅實補右近大將、依親父右大臣顯房朝臣讓也、母故中納言源隆俊女、帝王親舅也、

〔中右記〕嘉保二年十月九日辛未、午時許參殿下、〇六條殿藤原師通〇付說長令申事文二枚、造宮使親仲受領功讓舍弟親能事、昨日申院〇白河幷大殿〇藤原師實之處、無止神事之上、成功莫大也、尤可有裁許由、

〔朝野群載六神祇官〕神祇官

請特蒙天恩因准先例依年勞恪勤次第轉任官人等狀〇中略

一請依親父儀時讓以正六位口卜部宿禰定景被拜任大史事、

右得定景款狀偁、以父之職讓子之官者、先例也者、今加覆審所申有謂、仍以擧奏、〇中略以前轉任之旨、頭錄如件、抑月次新嘗會、幷臨時神事等、官人不足、殆可闕怠、望請天恩、依年勞次第被轉任者、仍將竭奉公之節、仍勒在狀、謹請所分、

長治二年四月五日

從五位下行權少副卜部宿禰

從五位上行小副大中臣朝臣

從五位上行權大副卜部宿禰

正四位下行大副大中臣朝臣

從四位上行伯敎輔王

〔中右記〕元永二年正月十九日丙寅、重康朝臣依重病、以施藥院使讓息男重基之由、夜前所被仰下也、件

重康、醫道之賞、長之人也、今沈重病、爲世間誠惜哉、件事藤氏長者上宣、仍今度内大臣殿〈〇藤原忠通〉奉長者宣、被仰下勸學院別當左中辨爲隆朝臣、爲隆下知大夫史、以書宣旨仰下也、但内々以頭辨被申院〈〇白河〉云々、是近代諸事被申議也、只本長者宣也、

大治二年正月五日乙未、今朝大納言辭書相具消息、送按察中納言許了、是大内記宗光所草案也、消息狀云、上啓、右去年中付之趣、定令奏達給歟、宗忠承暦二年十七、初侍從勤仕鮮人、其後至今年已及六十六、奉公之勞、滿五十年、一身之上、未及恐懼之事、儀僕之中、更無濫晷之聞、是恐朝威、勞勤公事、誠盡身力、殊致忠節之故也、凡從拾遺之昔、至納言之今、倩思次第之昇進、皆是本院〈〇白河〉御時也、宿緣殊深、朝恩無極、猶不顧餘命、欲盡忠節之處、從去年秋比、頗有飮水之病、老耄日衰、病痾相侵、常有恐騎馬、難不參御幸朝夕之歡也、抑長男左中將宗能朝臣、三代殿上勞廿七年、近衞次將勞廿二年、今年卅三、已半老之齡也、仍辭中所帶權大納言職、讓與宗能、不遷本官、欲任參議、是宗忠懸生之間、欲繼公卿之家、今生所望、只在此一事、從臣之君恩也、思子之父志也、仍辭書一通進覽之、松容之次、早可令奏□給也、於此度事者、偏欲蒙本院御□縱讓其職、欲參本院殿上也、中心所思、乍憚言上如件、正月日、權大納言宗忠謹言、

按察中納言殿返事云、令申給旨奏聞之後、被仰之趣、自斯可執申者、　七日丁酉、今朝按察中納言送書云、被事具以奏聞了、仰云、公卿之中、全無其人、只企新籠、猶可令致奉公之節給者、於具旨者、奉謁之次可令言上者、進返事云、任仰旨可致忠節、但病痾相侵無術之由、重申了、

〔台記〕久壽元年九月十二日壬戌、今夜有除目、被任筑前駿河兩國守、此次依師安朝臣讓、大外記師業補勸學院別當云々、與朝顯重基朝臣當其仁、而寄事於父讓、忽補師業、非理之甚也、師安依重病、去九日出家、師業秘其事、今日補件別當之後發顯云々、

〔吾妻鏡五〕文治元年十月廿一日庚午、今日源藏人大夫頼兼、自京都參着、去五月、家人久實搦進犯人、

讓官他人

（壹御盧御綱盛人）依件賞、去十一日敍從五位上、久實又賜兵衛尉、而讓息男久長之由申之、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年五月癸丑、參議從四位上民部卿朝野宿禰鹿取上表曰、臣屈計年筭、頽仄已臻、當襲朝章、實有期矣、而今嚴旨忽降、以臣拜民部卿、恩貸不訾、懼慙惣萃、臣華顏朽瘦、苦羸頓至、於劇官不堪自審、加以臣見中納言從三位藤原朝臣愛發抗表、以茲顯職讓于愚臣、其文曰、鹿取知涉古今、此詞尤桃、臣器所乖、揣己多慚、豎毛何息、古之人士、不處空名、況臣之庸虛、豈須不避、再三推付、無或可安、伏望還收恩詔、免臣憂負、不許、

〔權記〕寬弘四年五月三日戊戌、參內、有內侍除目、左金吾奉行、予執筆、典侍藤原朝臣芳子、（高階業子朝臣讓、元掌侍、）

十一日丙午、參內、右頭中將下典侍明子朝臣以所帶典侍讓前掌侍橘朝臣隆子文、

〔台記〕久安六年四月十二日戊午、請辭大臣讓右大將藤原朝臣（實能）之狀、上書奏法皇、（鳥羽○）手詔曰、藤原朝臣大將勞及數年、第一大納言昇進大臣、尤當其任、但辭大臣出仕朝廷、有先路乎、若有不仕之意、爲公爲私、事甚不便焉、

讓位親族

〔日本書紀天武二十九〕十四年五月甲子、直大肆粟田朝臣眞人、讓位于父、然勅不聽矣、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆四年十二月辛未、近江國人從七位下勝首麻呂、起去二月迄十月、所進役夫總三万六千餘人、以私粮給之、以勞授外從五位下、而讓其父眞公、有勅許之、

〔日本後紀桓武十三〕大同元年四月丁未、无位和氣朝臣嗣子授從五位下、正五位下和氣朝臣廣世之母也、廣世請以位讓母、上嘉其志、故有此授、

〔類聚國史敍位九十九〕弘仁五年正月丙辰、正六位上住吉朝臣豐繼麻呂授從五位下、豐繼麻呂者左近衛將監豐繼父也、豐繼請讓於父、故可、

〔本朝文粹奏狀六〕請殊蒙天恩以所帶榮爵讓親父正六位上忠行狀　大江朝綱

右先父兄而帶爵、古人耻之、今亦耻之、推榮班而讓親、賢者思之、愚亦思之、親父忠行、心尋古今、學兼倭

廣訪七略而叩門戶、涉九流而酌淺深、嗜學之情、老而彌篤、保憲過庭日淺、纔窺惟步於一隅、奉公勞成、已忝榮爵於三朝、而老父齡傾、青衫不改、紫扉之裏、愍子年少、朱衣漫曳、周行之間、晚夕溫凊、進退失步、爰霜鬢經秋而彌皎、水菽并日而屢空、盡忠誠於天闕之年長、致孝養於私門之日短、方今聖上○村上已以孝治天下、臣下何忘孝留心中、望請、天慈曲降哀矜、以此朝請之名、令讓老年之父、然則父登榮班、得預五品之號、子返初服、猶辭萬戶之侯、不辭思親之志、保憲誠惶誠恐謹言、

天暦六年四月廿七日　從五位下行暦博士賀茂朝臣保憲誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准前例被停所帶爵令男右少辨佐時朝臣加一階狀　源順

右明子、天慶以來、久奉先朝、自避青闈、至賓紫宸、三十餘箇年、幸得忝御匣殿別當之號矣、好讓恭、而衣無貳采、雖見剪花製衣、守繪法、以服隨四時、雖弃染人工女、叡智所照、不虛其勤、洪私所加、漸高此爵、內流槐門之餘慶、外戴梧岫之遺恩、可以終老、亦何思哉、然而妾所生男有三人、長子佐時、次子佐理、少子延暦寺僧明照是也、明照少登台嶺、早爲比丘、佐理復辭右兵衛佐、厭解龍泉、心入鷲窟、報恩雖說、眞實之理、至孝皆忘、白花之奠、愛戀妻寡過、因妻寒溫者、二三子之中、偏佐時而已、雖老後延積之心、不別道俗、而公庭讓爵之恩、豈顧微情、加以春秋已及七旬、晨昏亦携一子、凍梨膚冷之夜、席更依佐時鋪、而取溫、水菽當寒之朝、食常待佐時勸、而覺味、堅呼浮生將盡、日前、若隔悅目之恩涯、宿念不忘、身後恐妨轉身之覺路、每思此事、淚盈襟、方今謹訪故實、或官或爵、父子遞相讓之例、古今不可勝數、望請、殊蒙天恩、因准彼例、早停明子之四品、被加佐時之一階、然則子悅而見母、不異西巴放林之鳳、弟來而禮兄、猶同南翔去塞之鴈、不堪悲愛懇篤之情、明子誠惶誠恐謹言、

天延四年二月一日　從四位上藤原朝臣明子誠惶誠恐謹言

〔本朝世紀〕康和元年七月一日壬寅、此日參議從三位行皇太后宮權大夫兼美作權守藤原朝臣公定薨、○中略 九月○延久元年 廿三日、敍從四位下、二條關白左相府、○師實○藤原 以前坊傳勞讓與也、

古事類苑

政治部十八

上編

賣官位

官ヲ賣ルコトハ、原ト續勞ヨリ起レリ、續勞ハ微官ヲ優恤スルニ始マリシヲ、後ニハ續勞ヲ贖勞ト改メテ、國司モ贖勞ヲ以テ任ズルコトヲ得ルニ至レリ、因テ村上天皇ノ天曆十一年ニ、菅原文時封事ヲ上リテ、賣官ヲ禁ゼンコトヲ請ヒシガ、用キラレザリシコト見エテ、此後ノ書籍ニ載セタルヲ觀ルニ、其人ヲ受領ノ功ヲ成ス輩トモ、成ハ成功ノ人トモ云ヒ、其事ヲ別功ト云ヒ、其價ヲ任料ト云ヘリ、

又重任ノ功ト云フコトアリ、又單ニ重任トモ云フ、重任トハ、假ヘバ國守タル人、任限已ニ滿チテ解任スベキヲ、財ヲ納レテ更ニ其國ニ任ゼラル丶ヲ云フ、因テ重任ヲ又ハ更任トモ云フ、後三條天皇ノ世ニ、國司ノ重任ノ功ヲ禁絕セントシタマヒシカド、藤原氏專權ノ時ニ當ルヲ以テ、敕旨ノ如クナルコト能ハザリキ、其後高倉天皇ノ安元元年ニ、絹十萬匹ヲ以テ越中守ノ重任ヲ聽シヽコトアリ、又遷任ノ功ト云フコトアリ、財ヲ納レテ他官ニ遷ルヲ云フ、

續勞ハ文武天皇ノ朝ヨリ始マリテ、慶雲元年ニ、無位無官ナル勳七等以下ノ人ヲシテ、軍團ニ直シテ勞ヲ續グコトヲ得シム、而シテ三年ヲ二年ニ準折シ、考滿ノ年國司ヨリ式部ニ送リテ選敍ス、軍團ノ考ハ、令ニ據ルトキハ、十考ヲ限トスルヲ、是ハ外散位ノ例ニ依リテ、十二考ヲ以テ選ヲ成スナリ、而シテ勞ヲ續グトハ、財ヲ納レテ前勞ヲ繼續スルコトナリ、元正天

皇ノ養老二年ニ、主政主帳ノ理ヲ以テ解任シタル者ヲシテ、貲ヲ納レテ仍ホ國府ニ上リ、其勞ヲ續ガシメシガ、五年ニ至リ、散位勳位等ノ人ノ貲ヲ納レテ、番考（番考トハ、分番ノ人ノ考選ナリ、）ヲ成スコトヲ停メ、田ニ歸リ穀ヲ蓄ヘシム、然レドモ稼穡ニ豐ニシテ、貲ヲ納レテ考ヲ成サントスル者アレバ之ヲ聽シ、聖武天皇ノ天平七年ニ、外散位及ビ勳位ノ額ヲ定メ、其餘ハ貲ヲ納レテ續勞セシメ、九年ニ至リテ、額外散位ノ續勞錢ヲ輸スコトヲ停メタリシガ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニ再ビ其法ヲ復シ、八年ニ又停メシガ、更ニ復タ起ルコト、爲レリ、後ニハ功勞ヲ繼續スルノ意ハナクシテ、官ヲ賣買スルニ止マルコト、爲リシカバ、續勞ヲ改メテ贖勞ドセリ、醍醐天皇ノ延喜十四年、三善清行封事ヲ上リテ、贖勞ノ人ヲ以テ諸國ノ檢非違使、及ビ弩師ニ補任スルコトヲ停メンコトヲ請ヒタリシガ、竟ニ行ハレズシテ、正月ノ除目ニモ、贖勞ノ人ヲ國守トスルコト多ク、又一度ノ除目ニ衞門兵衞ノ兩尉四十人ヲ任ズルコトモアルニ至ル、

位ヲ賣ルコトハ、元正天皇ノ朝ニ始マリテ、養老六年ニ、民ニ募リ穀ヲ出シテ陸奧ノ鎭所ニ運輸セシメ、路ノ遠近、穀ノ多少ニ隨ヒテ位ヲ授ケタリ、淳仁天皇ノ天平寶字八年ニ、飢民ヲ救濟センガ爲メニ、私穀ヲ施ス人多寡ヲ計ヘテ位ヲ授ケシコトアリ、當時又錢穀ヲ官ニ納レ、寺ニ施シテ敍位スル者、比々トシテ相繼ゲリ、孝謙稱德ノ間ハ、錢千貫ヲ以テ外從五位下ヲ獲タル者多シ、桓武天皇ノ延曆十九年ニ至リテ、錢ヲ輸シテ爵位ヲ求ムルコトヲ禁ゼシカド、其禁復タ弛ビテ、之ガ爲メニ故ラニ位記ノ式ヲ設クルニ至リ、其價ヲ敍料、爵料ト稱セリ、而シテ爵ト云ヒ榮爵ト云フハ、皆五位ノ事ナリ、當時國用倍、不足ナルヲ以テ、大儀ヲ行フニモ、祈禳ヲ作スニモ、神社ヲ修スルニモ、堂塔ヲ造ルニモ、官位ヲ賣リテ其事ヲ辨ゼシコト多シ、而シテ其費用ヲ若干ト預定シテ負擔セシメシコトモアリ、又僧ノ官位ヲ賣リシ事ハ、

宗教部僧官僧位篇ニ見エタリ、

〔續日本紀 三文武〕慶雲元年六月己未、令諸國勳七等以下、身無官位者、聽直軍團、續勞、上經三年、折當所考、滿(○滿上恐脫二字)之年遞式部、還同散位之例、其身材强幹、須堪時務者、國司商量充使之(○使之二字疑衍)年限考第、一准所任之例、

〔續日本紀 八元正〕養老二年四月癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任、更從白丁、前勞徒廢、後苦實多、於義商量、甚違道理、宜依出身之法、雖解見任、猶上國府、令續其勞、內外散位、仍免課役、　五年六月乙酉、太政官奏言、(○中略)除定額外、內外文武散位六位以下、及勳位、幷五位以上子孫、並令納資便成番考、此則雖積考年、還乏衣食、宜始今年不須徵資、人々歸田、家々貯穀、若有畏祿聽納資成考者、亦聽之、其五位以上子孫、年二十一以上、取蔭出身、並依常例、因給告(○給告二字恐誤)、麻績公賜、一同分番之法、奏可之、

〔續日本紀 十二聖武〕天平七年五月乙亥、畿內及七道諸國、外散位及勳位、始作定額、國別有差、自餘聽准格納資續勞、　九年十月丁未、停額外散位輸續勞錢、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年十二月丙寅、以式部散位四百人、蔭子位子留省資人共二百人、兵部散位二百人、爲定額、與考、自餘額外情願輸錢續勞者、一依前格處分、

〔續日本紀 二十五稱德〕天平寶字八年十月癸巳、勅曰、定額及額外散位等、輸續勞錢、宜停、自今以後、一依令文、

〔伊呂波字類抄 所疊字〕贖勞

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應禁斷諸國綱領紆犯所領官物事

右左大臣宣、奉勅、監臨犯物、罪科非輕、事明法條、人亦忌憚、如聞比年諸國綱領、各爲紆犯、或贖勞出身、

空歸國郡、或買宅定居、便留京都、其所充用、皆是官物、國用之乏、職此之由、宜下知諸國、嚴加檢察、若有斯類、捉身言上、處之重科、斷彼奸徒、

寬平三年九月十一日○又見政事要略

〔類聚三代格 八〕太政官符

應令先進門文檢納調庸并例進雜官物事

右得讚岐國解偁、檢案內、調庸并例進雜物、依倉庫令、國明注載進物色數、附綱丁等、各送所司、此號門文、須任門文全進納、而頃年綱丁等不出門文、私作自解、折留物數、進納所司、所司不知其奸、隨進偏放日收、其所折留、皆充私用、或自望官職、充贖勞之料、○中略

寬平八年閏正月一日

〔本朝文粹 二意見封事〕意見十二箇條　善相公 清行 ○中略

一請停以贖勞人補任諸國檢非違使及弩師事

右諸國檢非違使、掌糺境內之奸濫、禁民間之凶邪、然則國宰之爪牙、兆庶之銜策也、必須明習法律、兼詳決斷、而今任此職者、皆是當國百姓納贖勞料者也、徒費公俸、不堪差役、空帶其名、曾非其器、亦猶如畫餅不可食、木吏不能言也、伏望、監試明法學生宛任職、其試法一如明經國學之試、國中追補及斷罪、一向委此檢非違使、猶如京下有判事及檢非違使也、

〔叡岳要記 下〕西塔造立事

延最爲檢校、捨自所得之小資、催有道心之大衆、勵微躯之誠、始寶幢願、其中安峯貞厚相加小機、靜觀僧正相承師跡、欲成寶幢願、於是太上法皇宇多○御幸山頂、賜拜諸堂之次、拜件塔基、即仰僧正云、先師付屬、既未及半作之、須早期畢功、與公將合力、僧正戴勅命、拜喜畢般爾復賜砂金生相贖勞官等、

〔類聚大補任〕昌泰三年庚申

少司〇大神宮少宮司本貞不ㇾ補贖勞四年、解任、貞本依贖勞未ㇾ進之貢馬、三年十一月解退所職云々、

〔本朝文粹十二落書〕櫻島忠信落書依此落書拝任大隅守云々

今春詔勅多哀歎、半簪開眉半叩頭、官爵專非功課賞、公私寄致贖勞求、除書久待貢書致、直物遲期獻物收、右大閤買歸衆望、左丞相優損皇猷、初逢魚水暴波濁、共見駿河盈涙流、不勤和風櫻獨冷、被話蹊露橘先抽、内臣貪欲世間歎、外吏沈淪天下愁、招集金銀千萬兩、沽亡山海十二州、

〔小右記〕萬壽四年十二月十一日丁丑、將軍賴行朝臣貢馬二疋、鹿毛貢毛是軍監賴贖勞料、

〔江家次第四正月〕除目

任受領〇註略

舊吏任中、每年必任之、

得替合格、鎮西一以上爲不ㇾ經ㇾ年任ㇾ國人歟、亡國數代不ㇾ濟公文之間、有ㇾ輸ㇾ濟人者、不ㇾ待ㇾ巡被ㇾ任、六位受領者、先以六位舊吏濟公文者被ㇾ任、雖ㇾ有ㇾ別功者、無ㇾ輸ㇾ濟舊吏時任之、近代多用贖勞者可ㇾ任、

〔源氏物語五十東屋〕このごろの御とくなどの、心もとなからんことはなの給そ、なにがし〇常陸介いのちはべらん程は、いたゞきにもさゝげ奉りてん、こゝろもとなく、なにをあかぬとかおぼすべき、たとひあへずして、つかうまつりさしつとも、殘りのたから物りやうじ侍る所々、ひとつにてもまたとりあらそふべき人なし、子共おほく侍れど、是〇浮舟は、さまことに思そめたる物に侍り、たゞまごゝろにおぼしかへりみさせ給はゞ、大臣のくらゐをもとめんとおぼしねがひて、世になきたから物をもつくさんとし給はんに、なきもの侍るまじ、當時のみかどしもかめぐみ申給なれば、御うしろみは心もとなかるまじ、これかの御ためにも、なにがしがめのわらはのためにも、さいはひとあるべきことにや共志らずと、よろしげにいふ時に、いとうれしくなりて、いもうとにもかかることありともかたらず、あなたにもよりつかで、かみのいひつることを、いとも〳〵よげに

めでたしと思てきこゆれば、君〇叢欠時すこしひなびてぞあるとはきゝ給へど、にくからずうちゑみてき、ゐ給へり、大臣にならん、ぞくらうをとらんなどぞ、あまりおどろ／＼しきことゝ、みゝとゞまりける、

〔愚管抄七〕治れる世には官、人を求む、亂れたる世には人、官を求むと、この比は十人大納言、三位五六十人、故院の御時までも十人が内外にてこそ侍りしか、ゆげいのせう撿非違使は數もさだまらず、一度の除目をみれば、靫負尉兵衛尉四十人におとる度なし、千人にもなりぬらん、人、官を求めて贖勞わきざしを尋ねてねがふ者は、近臣格勤の男女にてあらんには、左右におよばぬことぞかし、

〔豐受大神宮禰宜補任次第〕四禰宜從四位上度會神主宗房在任十九年

右神主一禰宜重房一男也、〇中略承安元年、高倉院代始賞不敍用、于頼同彦章同二年、弁贖銅之後、賜從上位記、

〔除目大成抄八〕功。自勤其事謂功勲

〔菅家文草一詩〕奉和王大夫賀對策及第之作、文頼

明時對策有名聞、負擔笈來不外分、幸免空歸爲白首、無期上列在青雲、含情若讀新章句、拭眼猶看舊判文、莫道成功能管領、一枝蠹桂謝家君、諸儒評判訖、言甚深故云

〔本朝文粹十二落書〕秋夜書懷呈諸文友兼南隣源處士、　藤原衆海貫居老生

見說北堂高買隆、東西交易甚忽忽、〇中略登高只是銅山動、在下猶因金穴空、不信宜尼貧樂道、祇看後輩富成功、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年十一月己卯、詔曰、〇中略遍詔天下諸國、國別令造金光明寺法華寺、〇中略又任郡司勇幹堪濟諸事、專令主當、限來三年以前、造塔金堂僧房、悉皆令了、若能契勅、如理修造之、子孫

無絶、任部領司、

〔類聚符宣抄 一〕左辨官下 伊勢國幷大神宮司

應任祭主神祇權大副大中臣朝臣輔親檢修損色令繕殿助大中臣宣茂修造大神宮内外兩殿幷月讀伊佐奈岐等別宮雜舍御垣等事

右得宣茂今月五日奏狀偁、謹撿案內、以私物勤仕造作之者、或蒙不次之賞、或任所望之官、先蹤多存、不遑毛擧、亦諸司之助、有年勞之輩、雖無別功、遷任顯要、卽是延喜天曆之勝躅、復當時之聖化也、宣茂去正曆五年任當職、計其勞効、十年于今、遷貴之望已當其仁、抑去八月廿八日、大風俄起、仆大神宮內外院、皆悉顚倒破損、祭主神祇權大副大中臣朝臣輔親、依宣旨注損色言上、又申請造宮使者、望請天恩、來十二月祭以前、任損色勤修、依其成功、拜任民部丞最前闕、將竭奉公之節者、左大臣 道長○藤原 宣、奉勅、相加月讀伊佐奈岐兩別宮、令修造、民部丞在前闕依請者、

長保五年十月十四日　　大史惟宗朝臣元政

右中弁藤原朝臣朝經

〔本朝文粹 六奏狀〕請特蒙天恩依尾張國所濟功幷侍讀勞被拜美濃守闕狀　　大江匡衡

右匡衡爲尾張守之時、撫民治國、致合期之勤、有功無過之由、諸卿僉議早畢、又依官符宣旨、修造國分尼寺幷神社諸定額寺十二箇處、不申請官物、別進造伊勢豐受宮之料米五百斛、造宣耀殿料准穎十餘萬束、依官符宣旨處人所召、所交易進絹二百餘匹等、不立用公帳、皆是諸國吏之誇功稱雄之事也、○中略 望請殊蒙天恩、依尾張國所濟功幷侍讀勞、被拜任件國守闕、將知稽古之力、匡衡誠惶誠恐謹言、

寬弘六年正月十五日

正四位下行式部權大輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

〔左大史小槻季繼記〕後三條院之圓宗寺ヲ被立テ、殆被鏤金銀ヲ、後□院被御覽テ、減美麗ヲバ被好

テ、不知世費事也、末代可賣官之人也ト被仰タリケル、果自後三條院御宇始成功ト云事ハアル也、

〔柱史抄 上〕地下公達受領功輩勤奉幣使例

延久五年九月十八日、今度使、依關白殿(〇藤原教通)仰、地下君達相交勤之、可然也、成受領功之輩、幷舊吏等稱蔭子、徒不務公役、自今以後、如此之輩、相交可令勤仕者、諸大夫等各感悦云々、

〇按ズルニ、受領トハ、國守ヲ云ヒ、受領ノ功ヲ成ストハ、財ヲ納レテ國守ト爲ルヲ云フナリ、

〔中右記〕嘉保三年(〇永長元年)正月五日丙申、先參殿下(〇藤原師通)御直廬、付親長令申事、造宮使親仲加階事、〇中略内宮造宮使大中臣親仲申加階、去年五月依被補造宮使、以私物募受領功、造畢、成功依莫大、又申加受領功、今一人宣下了、而重申停如何、但去承保度、造宮使親定、申受領功幷加階、皆被免了、親定不遂之替、被補公輔云々、又申受領功幷大神宮司功、先例二人中有四功、然者被免何事在哉、就中今度前造宮使親長及當年五月所立之纔三宇也、其後親仲補造宮使、以來數十宇殿舍、以私物終不日功、是可謂大功者也、仍叙正五位下、

〔殿曆〕承德元年十月廿日甲午、爲國家御祈、於祇薗有御塔供養事、異言供養也、導師天台座主仁覺大僧正、讃衆三十人、此中僧綱八人云々、依北政所(〇藤原師實室)不例、御不參、件事所傳聞也、件御塔者、近江守藤原朝臣隆宗男良兼受領之功所造進也、

〔中右記〕元永二年十一月二日甲辰、別當被申云、本社(〇賀茂下社、昨一日燒亡、)造作事可被忿也、但先被問本社司、爲若不堪者、以成功人可被作歟、事已爲大厦、雖終不日功也、　八日、今夕頭弁依院(〇白河)御氣色送消息云、鴨御祖社、早可造之事、社司辭申也、當社無成功例、何樣可被行哉、可量申者、進返狀云、件御社造營事、先正殿幣殿下知社司、可被造進也、正月元三之間、御假殿由頗不穩便、年月內可造畢之旨、可被仰社司也、若力不可堪之由猶以言上、申請事可被裁許也、如榮爵被下宣旨如何、

中門廻廊舞殿等已及廿年了、早尋成功者、明年四月祭以前、可造進由可被仰下也、當社未有如此大事、仍可被忩作事也、春日、平野、大原野、吉田等社、有大破時、皆募受領功所被造營也、仍彼社等例被修造、有何難哉、○中略 早以此趣可被奏達之狀如件、

(長秋記)元永二年十一月十五日、賀茂御祖社燒亡事、左府○源俊房被仰云、於正殿二字者、本社司可令造進也、而治部卿申、嘉承例不吉由、若其條傳思食者、可被行御卜、是神慮難測故也、於廻廊中門等、如人人定申、尋付成功輩、可被造營、但募成功輩漸多其數、待次第之間、自然送年月、不遂其望有乘去者、尤可直儀事也、又募事遷任當任受領成功之時、皆專於左右神社、仍守封家納寶物、全以不濟、只亡庄園、費土民、爲一身之勤功、爲朝有何益哉、然者支配諸國、減少其功者、不日之功易成歟、　十九日、頭弁御消息申左大臣殿云、鴨社造營事、本社司與成功者吉凶被問官○神祇官寮○陰陽寮處、寮申本社司吉由、官申成功吉由、就何可被造營哉、可令重申給者、相副卜形 御返事云、官寮御卜相違時、於伊勢事者、付官卜所被行也、但如今度卜狀者、只申成功吉由、不申社司不吉書、於寮者社司吉也、成功不吉由所卜申也者、重言上、吉凶委被尋問、随申旨可被行也、吉事外書、吉凶相違者、付官申可被行歟、此旨可被奏者、此趣省略清書、相副卜形返遣了、

(中右記)大治四年四月一日己酉、從今日渡他亭、是依爲祓祭初齋院○恂子 上卿致精進也、○中略 尾張、因幡、件兩國祓祭本國絹也、而代々成以色代濟來、成時又濟見色、國弁行事所口達證文也、相論不濟、上卿難進止、仍一昨日以行事弁付頭弁、奏本院○白河 新院○鳥羽 之處、慥以見色國絹可令濟由、昨日所被仰下也、

阿波丹後兩國祓祭物渡功所事

件國成功人有賢朝臣兩國物、依爲我父子國、未進濟間、雇子著十四人、女孺四人裝束料、被有賢依可被縫染色、爲渡料物、所渡彼兩國物也、而有賢朝臣依爲我國、不受取、一昨日同奏聞之處、慥以件

兩國物、可用履子著女房等裝束之由被仰下了、爲行事所尤神妙歟、

〔玉海〕治承四年三月十五日丁卯、此日召右近廳頭清景於大將(○右大將藤原良通)方、問御即位(○安德)之間本府雜事、申云、職事未被下知、仍不致沙汰云々、仰云、先例被尋付成功之輩者也、而明後日院(○高倉)可有御物詣、還御之後有沙汰者、恐致懈怠歟、早向年預將許、可相觸此由、隨彼命可相示職事者也者、　十六日戊辰、申刻右近廳頭清景來云、以昨日仰觸年預將之處、以府解可付職事之由依有其命、且付頭辨之處、被召仰云、院御物詣以前難申沙汰、且可致用意、于今不申沙汰、本府懈怠也云々者、清景申云、其日可有御即位之由、自官令下知之時、成請奏所付也、而于今無相觸、仍進不及申沙汰之由陳申了云云、卽以年預隆房朝臣消息(遣基之許)輔所來也、件消息相副頭辨返事、余仰云、且注功程、尋成功之輩、示合年預將、早可觸職事、自官不相觸之由陳申、一旦雖可然、于今不申沙汰、昨日被召仰之時始驚申、尤懈怠之由仰含了、又申云、可致沙汰之事等繁多、不可叶將監二人之功、仍可被相副兵衞尉功一人之由所申也云々、仰云、兵衞尉事、不可及本府之沙汰歟、早只勘功程、可觸年預將者、　廿二日甲戌、右近廳頭清景來申云、御即位雜事、以將監二人功可致沙汰之由、頭辨所被下知也、兵衞尉功無先例云々、

五年(○養和元年)九月十八日辛卯、戌刻頭弁經房爲院御使來、問兩條事、

一伊勢太神宮伊雜宮、爲熊野賊徒被追捕之間、寶殿破損、仰宮司可被造替之處、依申功程莫大、其力難及之由、可被付成功也、而所望之輩六人、(各雖有子細、不遑悉注、)此中以何可爲專一哉、宜令計奏者、下官(○藤原兼實)申云、或前宮司募還任之功、或先補神祇副之後、可申造進之由、或權宮司募申所分前之間、皆以難被許、大中臣基親(祭主親基二男)申募神祇副功可造營之由、尤穩便也、更不可及異議者、

〔定長卿記〕元暦元年六月廿四日、奏雜事、頭辨參上申曰、御即位(○後鳥羽)成功之輩、各可被先任之由所申請也、然者望期可被行除目歟、　廿八日、仰曰、成功之輩、終功之後、早可被任者、

〔吾妻鏡(四)〕元暦二年四月十五日戊辰、關東御家人不蒙內擧、無功兮多以拜任衞府所司等官、各殊奇

任之由、被遣御下文於彼輩之中、件名字載一紙、面々被注加其不可云云、

下　東國侍內任官輩中

可令停止下向本國、各在京、勤仕陣直公役事

副下　交名注文一通

右任官之習、或以上日之勞、賜御給、或以私物、償朝家之御大事、各浴朝恩事也、而東國輩、徒抑留庄園年貢、掠取國衙進官、不募成功、自由拜任、官途之陵遲已在斯、還令停止任官者、無成功之便者歟、不云先官當職、於任官輩者、永停城外之思、在京可令勤仕陣役、已賜朝列、何令籠居哉、若遂令下向墨俣以東者、且各改召本領、且又可令申行斬罪之狀如件、

元曆二年四月十五日

〔玉海〕文治二年五月十日丁亥、余〈〇藤原兼實〉仰親雅云、近日天變頻呈、司天之所奏、其徵惟重、加之世上說言、是又爐緣之所爲也、旁可有御祈、兼又炎旱渉旬、窮民愁深云、彼云、是尤可被修祈法也、而諸國對捍、用途闕乏、爲之如何、近例萬事被用成功、至此一事、何限嫌成功事、爲急用、不可默止、且被定功國歟、若又可被下任官功歟、此外賞例御祈三壇供、自七年任始行、大略去多以後、一切無其沙汰云々、彼用途闕可能入、件等用途事、早可被定仰下者、

〔三長記〕建久六年十二月卅日庚辰、參殿下、〈〇藤原兼實〉仰曰、追儺之次可有除目、〈〇中略〉用途諸國之所濟、其上內舍人三人越越功三千疋給出納、近代諸國不合期之間、及成功、尤非據也、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〈〇曆仁元年〉六月九日壬子、紀伊國日前宮營作事、付成功而可造畢之旨、依被宜下、將軍家〈〇藤原賴經〉所令擧申給之任人等、于今不進其功之間、有社司之訴、仍無未濟、可致沙汰之由被仰下云云、　九月廿七日己亥、御家人任官事、所望之輩、可令減納成功之由、相議之旨、就有其聞、今日被經沙汰、可停止云云、凡成功之官職之外、不可有御擧之趣、被定云云、御在洛之次、望申官位族多之、

又有御吹擧、仍爲固向後之法、及此評定、詮句勸者、相摸三郎入道眞昭也、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年七月廿六日壬子、入夜珍譽法印修大屬星供、又文元朝臣始行屬星祭、所被募上總國皆吉鄉知行之功也、各將軍家(○藤原賴經)御息災御祈禱云云、

〔百練抄 十五 後嵯峨〕仁治三年三月七日己丑、除目入眼也、今夜成功輩一切停止、被略雜任、

〔葉黃記〕寬元四年十一月十四日己巳、今日有小除目、大嘗會成功輩也、丹波忠方任丹波權大掾、先度除目依大外記申狀、稱无闕不被任、(室町院御給、去正月何(何恐任)也、)今改任歟、

〔吉續記〕文永四年四月八日、今日被行小除目、賀茂祭用途、諸國難濟之間被成任官、予依失火之穢不申沙汰、光朝奉行、功人濟々、　九月廿四日、今日季御讀經結願也、被行僧事、其次被行小除目、光朝奉行也、御調度功人萬疋擧申、此內有加階之輩、　五年二月廿八日、參院、(○後深草)內山(○龜山)今明可有小除目、可尋日次之由被仰下、臨時祭(○賀茂)功人爲被任也、

〔勘仲記〕弘安七年六月十九日乙丑、自今日被始行七壇水天供、(○中略)註支度用途、可募申任官功之由被仰下了、　七月九日乙酉、早旦參院(○龜山殿禪林寺御所)以前藤中納言奏聞神仙門院被申合爵已下事、被仰下云、荒祭宮御裝束功人、靫負尉一人、兵衞尉一人、法橋一人可宜下之由被仰下、　十日丙戌、內宮別宮荒祭宮御裝束功人靫負尉一人、兵衞尉一人、法橋三人、所宜下上卿左衞門督也、書樣在目六、　十一日丁亥、六角堂功人兵衞二人宜下左衞門督了、

〔永仁御卽位用途記〕藏人所

註進　御卽位調進物用途事

合

一御裝束(○中略)

已上參萬肆仟五百疋(用途被付定分、關東御訪內貳萬疋、天台座主御訪萬疋、長講堂御領巨勢庄分二千疋、和泉國受領功內二千五百疋、)

別功

一用途准絹捌萬伍百漆拾疋見用定

一定額定數貳千疋、可ㇾ喰內於ㇾ內千疋、者減、
被ㇾ留ㇾ額裏大具分ㇾ事、歸還無足可ㇾ爲ㇾ任官功ㇾ歟、

〔朝野群載六神祇官〕申ㇾ神社損色ㇾ

闕幷韓神社

請ㇾ特蒙ㇾ天裁ㇾ被ㇾ下ㇾ宣旨ㇾ差ㇾ賜官使ㇾ勘ㇾ注神殿舞舍廻垣等損色ㇾ令ㇾ別功輩致ㇾ修造ㇾ狀

右謹撿ㇾ案內ㇾ御社去治曆二年修造以後漸及ㇾ廿箇年ㇾ神殿舍垣等多以傾損、雖ㇾ避ㇾ風雨ㇾ二季祿莫、諸官供奉、凞敬之間蓋旨有ㇾ煩ㇾ望請天裁、被ㇾ下ㇾ宣旨ㇾ差ㇾ賜官使ㇾ勘ㇾ注損色ㇾ將ㇾ令ㇾ別功輩早致ㇾ修造ㇾ仍勒ㇾ在狀ㇾ謹解、

永保二年正月十三日　　　　　　　　　　　　　　預宮主從五位下行神祇大祐卜部宿禰重宗

重任功

〔日本紀略一十一條〕寬弘元年閏九月五日丙辰、今日丹波守業遠重任、依ㇾ造ㇾ羅城門ㇾ也、

〔小右記〕寬弘二年十二月廿一日乙未、播磨重任宣旨下畢、

〔續古事談一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和漢ノオ智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク〳〵キヽヲカセ給テ、御卽位ノ後、サマザマノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事、長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿○藤原敎通マゲテ申サセ給ケルニ、事カタクシタ、タビ〳〵ニナリケレバ、主上逆鱗ニヲヨビテ仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ、事ノ外ニ御ムツガリアリケレバ、殿座ヲタチテ、イデサセ給トテ、大聲ヲハナチテノ給ハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハ、ケフウセハテヌルゾトイヒカケテ出給ケレバ、氏ノ公卿マコトニモ一人モノコラズ皆座ヲタチテ、殿ノ御トモニ出ケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリ

ケル、主上是ヲキコシ食テ、關白殿幷ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニケリ、殿ノ御威モ君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテイミジキ事ニテナンアリケル、

〔神皇正統記　白河〕白河に法勝寺をたて、九重の塔婆なども、むかしの御願の寺々にも超え、ためしなきほどにぞつくりとゝのへさせ給ひける、此後代ごとに打つゞき御願寺をたてられしを、造寺熾盛のそしりありき、造作のために、諸國の重任などいふことおほくなりて、受領の功課もただしからず、封戸庄園あまたよせをかれて、まことに國の費とこそなりはべりにし、

〔中右記〕天仁元年十二月卅日、陸奧守基頼蒙重任宣旨也、殊近代不見、但橘爲仲延任云々、此外不見歟、就中基頼去年秋上道了、今有此恩、可謂不次之賞歟、

〔百錬抄　五鳥羽〕永久五年十一月十日、天皇遷幸新造之土御門皇居、殿舍大略摸大内、但無承明門代、件地本是師時朝臣領也、讃岐守顯能募重任功造進之云々、

〔長秋記〕大治四年十月廿九日甲辰、午時參院、（○中略）東對幷中門廊、（○鳥羽殿）立百體大威德、是安藝守資盛重任功云々、佛體如群蝸、非御產、非御惱、平生無爲人、無故依一日新募一任功、誠是國弊世損也、

〔中右記〕長承三年二月十二日、伊賀守光房重任功、可造大膳職、是來四月齋院御所料、

〔本朝世紀〕康治元年四月七日庚午、權大納言藤伊通卿定一本御書所幷侍從所桂芳坊等修造日時、大嘗會間、主上（○近衞）可入御故矣、能登守藤通重募重任之功、可修造之由奉仰云、

〔古事談　五神社佛寺〕六波羅太政入道（○平清盛）安藝國司之時、重任之功ニ被造高野大塔之間、材木ヲ手自被持ケリ、

○按ズルニ、公卿補任ニ、清盛ハ保延三年ニ中務大輔タリシガ、熊野本宮ヲ造進スル功ニ由リテ兼肥後守ト爲リ、久安二年ニ安藝守ト爲レリ、保延三年ヨリ此ニ至リテ十年ナリ、國司ノ任限ハ陸奧出羽及ビ西海道ハ五年、其餘ハ四年ナレバ、肥後守タリシ時モ、重任セシナラン、而シ

タ保元三年ニ大宰大貳ト爲レリ、安藝守タリシヨリ十三年ナリ、其間ニ再ビ重任セシニヤ、或ハ解由ヲ進ル等ノ事ニ由リタ、年月ヲ遷引セシニヤ、詳ナラズ、

〔本朝世紀〕久安三年八月十日辛丑、戊剋天皇(○近衛)行幸鳥羽殿、依明日法皇(○鳥羽)新御堂供養事也、

十二日癸卯、召左少弁藤光頼、被仰周防守藤原成頼可重任之由、

〔山槐記〕永暦元年九月八日癸未、今日齋宮(後白河第二女好子、號高倉殿、)群行也、○中略群行雜事爲成功、中宮亮季行卿沙汰進云々、讃岐重任功歟、

安元元年八月十六日、御賀(○後白河)用途料、准絹十萬匹、越中守盛俊募重任功、可進納云々、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿六日甲午、可令遠江守義定修造稻荷社之由、爲權黃門(經房)奉被仰下、所被募重任之功也、稻荷祇園兩社破壞之間、皆付成功、可被修治之功、　十月廿五日壬辰、閑院修造事、其功漸成、來月上旬、可有遷幸之旨承之、定被仰御勸賞歟之由、廣元言上間、勸賞事及御沙汰者、早可辭之趣仰盛時、被遣御書於廣元許也、其詞云、

閑院殿依造營事、御勸賞などの事、若其沙汰出來者、可令辭申也、勸功賞、度々可給申請御之旨雖被仰下、造作賞などよりは、勸功賞をば可給事なれば、御居住田舍之上者、旁無便宜之間、乍恐悅再三令辭退申給畢、如此可言上也、又云閑院殿作事、云新造宮用途、如此之勸可募申成功之由被仰下者、御知行國々、相模、武藏、駿河、伊豆、信濃、越後、已上六箇國重任之功、可令申成給候也者、仰旨如此、仍執啓如件、

十月廿五日　盛時奉

因幡前司殿

十一月二十八日乙丑、閑院修造勸賞事、可辭申之旨、兼以被仰遣廣元之許畢、廣元得其趣、進依辭申、無其沙汰者、來十三日、以遷幸之次、相模武藏兩國、可爲重任之由、被仰之許也

遷任功

〔仲資王記〕元久元年五月十四日丙子、豐州重任事、有院〇後鳥羽御氣色之由、女房內々所被示也、去々年拜頒、忽重任事不及申上歟、然而修造大內所課之間、諸國有此旨云々、況當國本功大營也、功程之所及可遷任歟之由、最前蒙內々之仰、仍申上其趣之處、無相違可有御氣色云々、國是雖最少、恩已莫大者歟、　六月一日壬辰、豐州重任事、猶仰下云々、頭弁長兼朝臣雖被於□□以大內修營、早募重任功、可宣下之由、今朝有院宣云々、女房內々所被告也、尋長兼朝臣之處承伏了、　十六日丁未、豐州重任宣旨今日到來、爲奉行弁長兼朝臣、日來被抑留、然而院宣度々無相違之旨被下知歟、不可說々々々、

遷任功

〔長秋記〕大治四年三月廿四日壬寅、於法勝寺阿彌陀堂有御念佛事、〇中略件御堂幷御佛等、越中遷任功可造之由、左武衞蒙仰云々、

〔台記〕久安二年三月十九日戊子、傳聞、今夜皇后遷御新造高松第云々、依造宮賞、長門守源師行朝臣敍正四位上、又遷任、先是重任

〔山槐記〕安元元年八月廿一日己巳、日向國遷任功申請、宮城大垣三町修造宣旨今日到來、隆職宿禰內々所送也、

〔後愚昧記〕同日〇應安四年四月宣旨云

造八幡宮國司等

越前守藤原顯保朝臣　美作守平忠盛朝臣

已上可爲遷任功者〇下略

〔中右記〕寬治七年十月十八日、除目之終也、〇中略

阿波守從五位下高階爲遠〇中略

件阿波守爲遠、去七月任彼國、而不經幾程、依父緣坐解官已了、而今年之中還著頗奇怪歟、何道理歟、

〔吾妻鏡 六〕文治二年二月二日庚戌、二位家〇頼朝源 就諸國雜事、條々有令申京都給事、

一前對馬守親光可被還任由事

是匪啻於關東有忠、又朝家功臣也、其故者、任中之間、帶嚴重神事成功宣旨之上、爲御祈禱、或令修造八幡宮以下鎭守諸大明神六十餘社之御寶殿、或奉餝同宮放生會御輿裝束幷御帳、及神殿御戶帳錦裝束等、已三萬餘疋經營、小國乃貢滿足、殆不顧餘剩者歟、皆存院進御物之由、欲令運上京都之處、平家下向之間、路次不通之故、依爲有限御物、爲御祈禱、令餝神寶訖云云、

五月二日己卯、前對馬守親光可被還任之由、重所被申京都也、此親光在任之間平氏下向鎭西、可參向屋島之由、雖相觸不從、仍以少貳種直郞從等、欲追討之間、遁渡高麗國訖、彼氏族滅亡後、依二品仰、無爲上洛、其功已大功也、加之任中之間、爲御祈禱、或令修造八幡宮以下鎭守諸大明神六十餘社之御寶殿、或奉餝同宮放生會御輿裝束幷錦御帳、及神殿御戶帳錦裝束等、其准頗爲三萬餘疋云々、數目六、先日持參關東、凡任國之時、修造此等神殿之者、募其賞被仰重任遷任之例也、可蒙賞之旨言上、其上依賀茂齋院成功、賜重遷任宣旨、以此次可拜任尋常國之趣、內々望二品御擧達、而無闕國、如元可拜任彼島之由、被奏聞之、以除目之次、可被任之旨勅答畢、而去春除目之時、他人拜任云云、是依廷尉公朝 訴、被閣之、公朝就鎌倉內儀支申之趣奏言、然而不帶證文、親光擬嚴密御消息者也、爭有御改變乎、除目朝、周章所失度也、早重可有御內擧之由、頻令歎申之間、及此沙汰云云、

〔東寶記 三〕一當寺代々修造事

一、應給榮爵壹人、以其敍料令修理灌頂院幷寳藏幷經藏食堂阿闍梨房中門等事

右得東寺去五月十一日奏狀偁、件條座者、延久三年十二月五日、先朝三〇後三條御字之時、以官使被注損色、同四年五月三日、以六位受領一人之顯勞、可修理之由被下宣旨、然成其望之輩各來臨、見朽損破壞之處、互稱過差之由、輒雖出料物、敢又無致土木之功、然間破壞追日而增、顚倒之危難去、至于食堂

爵料

者、去治暦三年三月廿二日、官使來臨注損色畢、其後無左右仰、徒歷數年、破壞彌盛、殆欲顛倒、至于中門、有佛生會盂蘭盆會之間、諸司儲座、旁行事之砌也、而大破之至、難儲威儀、同阿闍梨房朽損、早不加修理、豈期全成哉者、權右中辨源朝臣師賢傳宣、權中納言源朝臣資綱宣、奉勅、宜給榮爵一人、且令修理大破所所者、

永保二年八月六日　　左大史小槻宿禰奉

〔醍醐雜事記〕請殊蒙天裁、因准傍例、被下宣旨、賜榮爵參人、以其叙料、修復鎭主清瀧社狀

右謹撿案內、件社者、當寺之鎭守也、謂其本覺、則舍那之法身、尋其化、亦觀音之垂跡、爰醍醐聖主、延喜年中、崇持神威、授以爵位之後、代々加階至正一位、而枌楡嵐烈、槐檀燋颯、屋舍之基巳壞、修復之功難加、自非霑澤之恩、何勵土木之力、望請天裁、因准傍例、被下宣旨、賜榮爵三人、以其叙料、修復彼社、且仰神事之崇重、且增佛法之興隆、仍勒事狀謹解、

大治元年閏十月十日　都維那法師慶寛　寺主大法師忠賀　上座大法師陽季　座主權律師法橋上人位定海　撿挍法務權僧正法印大和尙位勝覺

〔小右記〕長和五年六月十二日甲申、巳剋許、束帶參攝政殿、（道長〇藤原）即以奉謁、〇中攝政曰、木工寮可築垣、余（實資〇藤原）申云、木工寮力不可及、以爵料被充築垣料、忽可成歟、以勤公之者爲行事、極可佳、攝政曰、以四百石許可築、因歟、左大辨道方云、以築朱雀院垣之料、今准思、以爵料剩可充用者、

〔兵範記〕仁安三年十一月十三日庚午、今夕可被行國司除目、仍守（江〇近）基範（原〇藤）注申少掾所望交名七人、行事所擧三人、相加注擧狀、下官（信範〇平）參撿挍左大將（師長〇藤原）亭、奉覽、返給付藏人左衞門權佐經房了、大嘗會悠紀所望近江掾、

正六位上平朝臣盛成

正六位上中原朝臣盛資

賣官位

正六位上津守宿禰國光
正六位上中原朝臣成業
正六位上中原朝臣親賴
正六位上賀茂朝臣爲平
正六位上中原朝臣長盛
正六位上菅原朝臣秀長
正六位上中原朝臣實親
正六位上中原朝臣重成〇成重、續文作誠下
右爵料進納已畢、仍所請如件、
仁安三年十一月十三日
修理左宮城判官正五位下行左大史兼備前權介小槻宿禰隆職
正四位下行權右中辨平朝臣信範

盛成、盛貫、國光等、行事所擧、殘七人國申上、於行事所一紙成擧也、寬治按內覽、了付奉行職事、畢、國司注申中原重誠調實也、爲當時右府〇藤原實家名、仍議定之實、誠字又實也云々、

〔多武峯略記 下〕講堂
天祿二年二月八日甲午、壞卸舊堂、自同年三月廿八日、始造新堂、覺忍阿闍梨以佐伯祿雅文申成當國〇大和權大掾、以敍任料三百貫文、如是、

〔文獻通考 三十五 選擧〕貲選進納
漢文帝從晁錯之言、令民入粟邊、六百石爵上造、第二稍增至四千石、爲五大夫、第九萬二千石爲大庶長、第十八各多少級數爲差、

景帝二年詔曰、人不患其不知、患其爲詐也、不患其不勇、患其爲暴也、不患其不富、患其無厭也、其唯廉士寡欲易足、今訾算十以上廼得官、（服虔曰、訾萬錢、算百二十七也、應劭曰、古者疾吏之貪、衣食足知榮辱、限訾十算、乃得爲吏、十算十萬也、賈人有財、不得爲吏、）廉士算不必衆、有市籍不得官、無訾又不得官、朕甚愍之、訾算四得官、亡令（廉士無訾又不得官、故減訾四算得官矣、訾與貲同、）廉士久失職、貪夫長利、（○中略）

景帝時、上郡以西旱、復修賣爵令、而裁其價以招人、（裁謂減省）及徒復作得輸粟於縣官以除罪、（○中略）

靈帝光和元年、初開西邸賣官、自關內侯虎賁羽林入錢各有差、私令左右賣公卿、公千萬、卿五百萬、

山陽公載記曰、時賣官二千石二千萬、四百石四百萬、其以德應選者半之、或三分之一、於西園立庫貯之、

〔本朝世紀〕康和五年十一月一日丙子、今日除目入眼也、（○中略）武藏守從五位下源顯俊、（入萬石萬匹獻中堂食堂功、高階爲遠、○中略）筑後權守從五位下藤原貞時、（造尊勝寺行事所進九百匹功、）

〔中右記〕大治四年七月十八日甲午（十五日爲實云）法皇（白河○）御時初出來事　受領功萬石萬匹進上事

〔長秋記〕長承三年八月廿七日甲辰、園城寺前年爲山惡僧等燒亡、而公家以伯耆國募功修造也、大僧正請取二萬石、令寺僧造作云々、大僧正經營、仍自分不得布施、

〔兵範記〕仁安三年十一月四日辛酉、參內、（○中略）下官（○平信範）下左大將（○藤原師長）文、

左兵衛尉平道貞申請、大嘗會悠紀方進納私物萬疋、可拜任靫負尉事

仰依請、上卿返給下官結申、次下史了、此事雖无寬治例、卜食國无力之上、遇火災、彌可及闕怠、仍被仰成功也、　六日癸亥、參行事所、兵衛尉平道貞成功物、銀白鑞錦銅綾等進納、是卜食國司火災之間、被召靫負尉功中也、可進納准萬匹云々、

〔叡岳要記下〕橫川中堂

嘉應二年二月十一日宣旨云、可令左兵衛尉藤原行貞募左右衛門尉功、進納横川中堂金堂用途料准絹四萬二千八百十五疋者、

〔山槐記〕治承二年十月十九日己酉、宮〈○平徳子〉御祈、於新日吉有里神樂云々、入道大相國〈○平清盛〉沙汰也、藏人大進基親於宮殿上下宣旨五枚於予〈○藤原忠親〉、募成功進納宮御產用途料之輩也、三善信盛少監物功三千疋、藤原久高治部丞功三千疋、同則親刑部丞功三千疋、同致保八省丞功三千疋、內舍人粟田則良左右兵衛尉功七千疋等也、權右中弁親宗朝臣參會、仍下之、

〔源平盛衰記二十五〕西京座主祈禱事

西京ノ座主良眞僧正ヲ召テ被宣下ケルハ、臨時ノ御祈禱アルベシ、日時幷何ノ法ト云事ハ思召定テ遂テ被仰下ベシ、先兵衛尉ノ功ヲ一人召仕テ、今度ノ除目ニ申成ベシト仰含ラル、僧正勅命ニ依テ、成功ノ人ヲ召付テ貫首ニ申ケレバ、除目ニ會テ御成ニケリ、其比ノ兵衛尉ノ功ハ五萬匹ナリケレバ、是ヲ座主ノ坊ニ納置テ、日時ノ宣下ヲ相待進ラセケレドモ、日數ヲ經ケル間ニ、僧正參內シテ、成功五萬匹納置テ候、臨時ノ御修法日時ノ宣下、思召忘タルニヤト驚シ奏セラレタリ、

〔玉海〕文治二年七月五日庚辰、親經申、宇佐宮條々事、〈○中略〉次剋許、藏人弁親經又馳來云、肥前國司爲假殿成功、而可行三萬疋功之由官令申、當時可造營殿舍四字、〈細石三字、細石一字、〉准七千疋歟、所殘二萬餘疋、可割營正殿遷宮用途之由有沙汰、而件四字之外、其力不可及之由、再三固辭、事已違亂、然而樣々假言、所詮可進濟二萬疋之由所申請也、如何云々者、余〈○藤原兼實〉仰云、近代營國如無、隨又事急速也、則二萬疋功、余候公損歟、但可奏院〈○後白河〉之由仰之、親經申云、件官使明曉可下向、雖片時之可急下向、期日過之故也、今夜明旦輙難奏聞歟、爲之如何、仰云、此事一向可計沙汰之由有院宣、此條又不可有公損、若狹國二萬疋成功者、以之思殆可謂過分、仍恐仰此由、召取證文、〈國解也〉追可奏聞、於此條者、存神事早速之要、其遂可輕身、不爲苦、可仰下者、親經退出了、

〔吾妻鏡三十三〕仁治元年十二月十六日乙亥、今日於御所有評定、○中略御家人任官功錢事有其沙汰、隨納或百貫或五十貫令進上官庫、可取進返抄之由、可被仰六波羅云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年二月廿五日壬申、諸御家人任官間事、日來內々被經沙汰、今日於評議有治定之篇、所謂式部丞所司勵事、於侍所望者一向可停止云云、彼兩職成功事、先度准叙負尉、一萬疋之由雖被定、自今以後不可然云云、可爲二萬疋歟、

〔葉黃記〕寬元五年○寶治元年三月十一日甲子、參院、評定式日也、攝政、前相國、內府、吉田納言、予○藤原定嗣等參仕、條々有沙汰、○中略藏人方公事用途事、先日納言幷予可注進之由有勅定、來月御更衣以下事、被待此沙汰、仍今日各注進之、○中略

夏間藏人方恒例公事用途事○中略

御座

繧繝十二帖○中略

正治建仁之比、諸國所濟、猶依合期共不足、賜任官功、

正治元年四月、千疋藤原範遠、彈正忠功內、

同二年四月、千五百疋、左近將監藤原家任料內

建仁元年四月、千五百疋、右兵衞尉藤原仲淸功三千疋內

嘉禎之比、定嗣奉行之時、多御更衣總用途賜任官功三萬疋、而此兩三年、夏御更衣猶賜十三萬疋云云、十年之中、已過四倍之、陵遲以之可察歟、今一切止任官功、可被定充諸國歟、○中略

修理物

車三兩金作糸毛　金作檳榔　銀作糸毛

取物三具

唐鞍三具

建仁二年諸國雜召物濟等

河內〈六丈布二反　桂花一枚〉〇中略

巳上國絹六疋〈〇中略〉不足賜任官功准絹九十疋、

諸國所濟不足之間、賜任官功、年々功程、

建久九年、准絹七千二百疋、

正治元年、同三千疋、

同二年、同九千疋、

建仁元年、同九千疋、

嘉禎年中、賜任官功准絹五萬疋、先間賜十三萬疋云々、纔十許年之間、功程加增如此、暫止任官功、於調進物者、可被定充諸國歟、〈〇中略〉

一最勝講

御座七十間

於往古例者不改之、中古以來道場許新調之、近年元三御座不法之間及破裂、仍所々皆新調、建仁二年總數九十九間之內、諸國調進廿六間、其殘募任官功行事可調之、近年一向行事所沙汰也、但猶不念、先例嘉禎年中、伊豫上總信濃各調進一間了、然者猶可被定充諸國歟、

十六日己巳、參院、攝政參給、下名加任事有沙汰、予問答奉行職事弁官、多有申定、太過分有恐者也、近年任官成功、偏以見濟被宛勸定用途之間、行事官等任雅意取負尉功七八百疋、兵衞尉四五百疋、諸司八省丞纔二三百疋之由注進之、此事稱有許容、成功追日無實也、只可被定總數任官功程之由粗許申了、　七月廿二日癸酉、參院、殿下〈〇藤原兼經〉參給、神宮遷宮用途總數十八萬疋云々、於十五萬疋者

給用、今三萬疋可給任官功、就見濟可擧申之由被仰下之、假令靫負尉七八百疋、兵衞尉四五百疋云

云、此條太不便、成功永滅失之基也、只爲不法之功者、大概指計ニテ定總數之本可給之、可隨見濟之

由被仰下者、行事官擧任無量歟之由、予粗申之、尤可然之由有仰、頻有御感、

〔勘仲記〕弘安十年五月十一日辛丑、今日任官功員數事有評定、近年減少之間、有興行之御沙汰、

成功員數事

八省丞　七百疋 但民部丞千五百疋

諸司助　千五百疋

同允　五百疋

諸國權守　千五百疋

近衞將監　八百疋

靫負尉　千五百疋

兵衞尉　千疋

馬允　六百疋

叙爵　千五百疋

參仕人々

關白殿〇藤原家平　右大臣殿〇藤原師忠　土御門大納言　一條大納言　前源大納言　帥　中院大納言

追被定之

法眼　千五百疋

法橋　千疋

助國用

〔新抄〕弘安十年五月廿四日甲寅、今日成功員數事被定之、八省丞(七百疋、但民部千五百疋、)諸司助、(千五百疋、)同允、(五百疋、)諸國權守、(千五百疋、)近衛將監、(八百疋、)靫負尉、(千五百疋、)兵衛尉、(千疋、)馬允、(六百疋、)叙僧、(千五百疋、)法眼、(千五百疋、)法橋、(千疋、)如此、而行事官等以減功募申之條太不可然、向後永可停止、若有違犯之聞者、殊可有其沙汰之由、爲頭大夫信輔朝臣奉行、被下御教書於四位大夫秀氏宿禰、師員數注文同被下之、

〔勘仲記〕弘安十一年二月廿九日甲申、不出仕、傳聞、四位大史秀氏、并大外記師顯等依召參仙洞、官方用途有增減之沙汰、諸司諸衛等事聞有沙汰云々、官處人方用途召諸國受領功云々、

河内國(□御拜領、本民部卿知行、)二萬疋請之

加賀國(□內藏領、本吉田中納言知行、)萬八千疋請之

〔神宮舊記(神境紀談所引)〕大神宮正遷宮之事、任舊例、以役夫工米、可有其沙汰之處、當時諸國之儀、若不調備者、遲々之基也、雖爲新儀、及郡縣之事加候、依之付靫負尉兩人、此旨可被□知者、依天氣言上如件、

五月(永祿六年)十日　左中辨輔房

進上　中山大納言殿

就大神宮正遷宮之儀、禁裏御奉加之事、勅裁如此、准靫負尉功、貳萬匹被付之由被仰下之旨、中山大納言殿御奉行所候也、仍執達如件、

五月十日　左衛門尉判

慶光院

〔續日本後紀(十仁明)〕承和八年五月壬申、大和國人正六位上縵連道繼授外從五位下、以獻私稻四萬束助國用也、

〔三代實錄(三十二陽成)〕元慶元年十二月二日戊辰、授近江國蒲生郡大領外正六位上佐々貴山公是野外從五位下、以獻米二千斛穀三千斛助國用也、

〔扶桑略記醍醐二十三裏書〕延喜六年五月廿三日乙亥、播磨明石大領赤石貞根叙外從五位下、是進私穀五千石、依充諸司大粮也、

獻軍粮

〔續日本紀元正九〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〇中略用兵之要、衣食爲本、鎭無儲粮、何堪固守、募民出穀、運輸鎭可所〇可恐程道遠近、爲差委輸、以遠二千斛、次三千斛、近四千斛、授外從五位下、奏可之、其六位已下至八位已上、隨程遠近、運穀多少、亦各有差、語具格中、　七年二月戊申、常陸國那賀郡大領外正七位上宇治部直荒山、以私穀三千斛、獻陸奧國鎭所、授外從五位下、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜四年正月辛卯、授出羽國人正六位上吉彌侯部大町外從五位下、以助軍粮也、

〔續日本紀光仁三十六〕寶龜十一年八月丙午、授越前國人從六位上大荒木臣忍山外從五位下、以運軍粮也、

〔續日本紀桓武三十七〕延暦元年五月乙酉、下野國安蘇郡主張外正六位下若麻續部牛養、陸奧國人外大初位下安倍信夫臣東麻呂等獻軍粮、並授外從五位下、

〔續日本紀桓武三十八〕延暦三年三月乙亥、授外正六位上丸子連石虫外從五位下、以獻軍粮也、

〔續日本紀桓武四十〕延暦十年九月癸亥、授陸奧國安積郡大領外正八位上阿倍安積臣繼守外從五位下、以進軍粮也、

〔三代實錄陽成四十〕元慶五年十一月十七日辛酉、前出羽弩師從八位上秦忌寸能仁叙外從五位下、元慶二年、國遭賊亂、能仁以私穀助軍粮也、

運粮

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年二月丙午、勅、夫蓄貯者爲國之本、宜令募運近江國近郡稻穀五萬斛、貯納於松原倉、白丁運五百斛叙一階、每加三百五十斛進一階、有位每三百斛加叙一階、並勿過正六位上、　六月丙申、勅、去二月二十日、令募運近江國近郡稻穀五萬斛、貯納於松原倉、其酬叙法者、下勅既畢、而經旬月、未見一人運送、誠是階級有卑、人情不勸、宜運滿一萬斛者、超授外從五位下、

救飢饉

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年三月己未、勅曰、周急之言、義著緇衣、救飢之惠、道茂先修、頃年水旱、民稍餒乏、東西市頭、乞食者衆、念斯失所、情軫納隍、而聞彈正臺少疏正八位上土師宿禰島村、出己蓄穎、費養窮饉者壹拾餘人、其所行雖小、有義可褒、仍授位一階、自今已後、若有如此色者、所司撿察、錄實申官、其一年之內、貳拾人已上加位一階、五十人已上加位二階、但正六位上不在此例、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應養活疫病百姓者賜出身叙位階事

右得太宰府解偁、管九國三島、疫病氣方發、或擧家病臥、無人看養、或合門死絕、無葬斂者、被右大臣宣偁、奉勅、如聞、閭閻之間、疫病發則稱謂移染、曾不往來、近親之間、猶有斯忌、因茲水漿之資、不得適口、滋味之饋、不能從情、百姓夭折、無不由此、言念於此、深以矜歎、夫死生有命、脩短定焉、仁廉不匱、德必有報、豈行仁德、還罹其咎、黎民之愚、遂致斯惑、於事商量、理不合然、宜作〇作恐昨仰府官、重加約束、勸令醫療、酬彼勞効、其法養活病者卅人以上、白丁入於內考、自入色至初位、每十人加一階、初位至八位以上、每廿人加一階、外考入內考者減半、若養續此法者、錄名言上、量其形迹、授以五位、但養二等以上親者不在此限者、仍須委專當官、精加探訪、殯養訖則具錄言上、至于仲秋、總從停止、

弘仁十三年三月廿六日

太政官符

應輸私資物養飢百姓者賜出身叙位階事

右撿案內、去天平寶字年中、頻年水旱、百姓餒乏、爰有勅、出己私物養飢民者、仍加位階、今被右大臣宣偁、奉勅、如聞、太宰管內、比年不登、百姓屢飢、或至死者、在夫事若稽古、國則隆泰、政歸故實、家用康寧、是以唐帝光宅之績、漢主起畫一之歌、舂而言之、實可准的、宜仰府官、令被富室養此飢民、隨顯勞効、其法白丁輸稻一千束者、人於內考、自入色至初位、每階二百束、自初位至八位以上、每階四百束、外考入內

獻錢穀布帛等

考者減半、若費養越此法者、錄名言上、量其形迹、授以五位者、仍仰專當官、精加實錄、勿令相紊、存活已畢、其人夾名并所輸之稻、及被存人數具錄言上、但所養之限、至仲秋停、

弘仁十三年三月廿六日

太政官符

應養活疫病百姓者預出身敍位階事

右得陸奥出羽兩國解偁、自去年十一月所部之內、疫病流行、或擧家死去、無由葬斂、或躬頭痛苦、無人看養、雖勤鎭謝、有益無損、仍驗驛言上者、被左近衞大將從三位兼守權大納言行民部卿淸原眞人夏野宣偁、奉勅、如聞鄕閭之間、疫病發動則稱染著、曾不至問、因玆富豪之家、積穀猶餧、況乎貧乏之輩、有何生理、夫死生有命、修短稟天、嫌避而求生、觸就以致死者、事無所據、仁廉不酬、德必有報、豈行仁德、遂罹其咎、黎民之愚、遂致斯惑、宜仰國司重加誨諭、勸令醫療、酬彼勞劾、其養活病者卅人以上、白丁者預於內考、自入色至初位、每十人加一階、初位至八位已上、每廿人加一階、外考入內考者減半、若養越此法者、錄名言上、量其形迹、授以五位、但養二年〇年恐衍等以上親者、不在此限、若富豪之室、異輸私物、施氣病人、亦同報酬、其法白丁輸稻一千束者、預入於內考、入色至初位、每階二百束、初位至八位已上、每階四百束、外考入內考者減半、若費養之物、越此法者、量其形迹、授以五位者、仍須差專當官、精加採訪、撿養旣訖、具錄言上、至於仲秋、總從停止、

天長七年四月廿九日

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年五月丙戌、授白丁膳臣立岡正七位上、立岡若狹國百姓也、代窮民輸鹽五斛、庸米百五十二斛、准稻四千六百八束、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年五月戊辰、從七位上陽侯史令珍、正八位下陽侯史令珪、從八位上陽侯史令璆、從八位下陽侯史人麻呂、並授外從五位下、四人並是眞身之男、各貢錢千貫也、

〔續日本紀孝謙十九〕天平勝寶五年九月戊戌朔、无位板持連眞釣獻錢百萬、授外從五位下、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年八月甲申、讃岐國人外大初位下日置毗登乙虫獻錢百萬、授外從五位下、十月丁丑、散位正八位上民忌寸礒麻呂獻錢百萬稻一萬束、授從五位下、

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年正月庚午、正六位上伊吉連眞次獻錢百萬、授外從五位下、二月庚寅、外從八位下檣尸高志麻呂獻錢百萬、授外從五位下、九月壬申、攝津國武庫郡大領從六位上日下部宿禰淨方獻錢百萬檳榔一千枚、授外從五位下、十二月壬寅、因幡國博士少初位上春日戸村主人足獻錢百萬、因幡國稻一萬束、授其父從六位下大田外從五位下、人足從六位下、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年三月乙亥、常陸國新治郡大領外從六位上新治直子公獻錢二千貫商布一千段、授外正五位下、四月癸巳、伊勢國多氣郡人外正七位下敢礒部忍國獻錢百萬絹五百疋稻一萬束、授外正五位下、戊申、長門國豐浦團毅外正七位上額田部直塞守獻錢百萬稻一萬束、授外從五位上、任豐浦郡大領、八月庚子、散位正七位上秦忌寸眞成獻錢二千貫牛十頭、授外從五位下、十月癸巳、伊豫國宇摩郡人凡直繼人獻錢百萬、紵布一百端、竹笠一百蓋稻二萬束、授外從六位下、其父稻積外從五位下、

〔續日本紀聖武十七〕天平十九年九月乙亥、河內國人大初位下阿保連人麻呂錢一千貫、越中國人无位礪波臣志留志米三千碩、奉盧舍那佛智識、並授外從五位下、

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年九月丙寅、伊豫國人大直足山私稻七萬七千八百束鍬二千四百四十口、墾田十町、獻當國國分寺、授其男外少初位下氏山外從五位下、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年六月庚子、紀伊國那賀郡大領外正六位上日置毗登弟弓稻一萬束獻於當國國分寺、授外從五位下、土左國安藝郡少領外從六位下凡直伊賀麻呂稻二萬束、牛六十頭獻於西大寺、授外從五位上、

禁賣官位

〔類聚國史七十九政理一〕延暦十六年七月壬申、禁蓄錢以求爵、○延暦十六年七月壬申、日本紀略作十九年二月壬申、當從二月壬申四日也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷民蓄錢貨以求爵位事

右大納言正三位壹志濃王宣、奉勅、頃年納錢例叙五品、今聞殷富之民、多貯錢貨、蓄緡萬計、或至腐爛、是以官府倍力無暇於鑄作、京畿乏錢、未布於民間、其百姓納錢以求爵位、自今以後、嚴加禁止、更莫令然、

延暦十九年二月四日

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行○中略

一請停以贖勞人補任諸國撿非違使及弩師事、○中略

又縁邊諸國、各置弩師者、爲防寇賊之來犯也、○中略臣伏見陸奥出羽兩國、動有蝦夷之亂、大宰管内九國、常有新羅之警、自餘北陸、山陰、南海三道濱海之國、亦皆可備隣寇者也、而今件弩師、皆充年給、許令斥賣、唯論價直之高下、不問才伎之長短、故所充任者、未知軍器之有弩、況曉機弦之所用乎、假令天下太平、四方無虞、猶宜安不忘危、日愼一日、況萬分之一、若有隣寇挑死者、空懷此器、孰人施用乎、伏望令六衛府宿衛等、練習弩射之術、試其才伎、隨其功勞、充任件國弩師、然則人才適名、城戎易守、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事、

〔本朝文粹二意見封事〕一封事三箇條○中略

一請停賣官事

右量能授官乃理、擇材任職乃循、若不量而授、不擇而任、則人謂之謬妄、俗爲之衰亡、方今授任之道、非不正、黜陟之規、非不明、然時有以財官人矣、公家以爲助國用、衆庶以爲輕天工、於是功勞之

國用位記

補叙

臣自進、聚斂之輩爭進、至於令彼暴客猾民殉不義之富、彌深濫於貪殘、良吏胄子企無厭之求、更薄情於官學、望其化盛治中、不亦難哉、昔館陶公主爲子求郞、明帝不許、賜錢千萬、所以輕厚賜、重薄位者、爲其官人失才、害及百姓也、降逮桓靈之后、初開占賣之官、皇綱遂衰、王業已衰、歷訪漢家之典、略考皇朝之記、未有賣官而敦俗、黷職而安民者矣、伏望早改救澆時之政、令返於淳世之風、若憂國用、則每事必行儉約、若行儉約、則何因可乏貨財、欲利之源、從此暗滅、廉正之路、自然開、〇中略

天曆十一年十二月二十七日　　從五位上行右少辨臣菅原朝臣文時上

〔朝野群載〕二十二内記位記例狀

國用〇國用二字、政事要略作賑給物、動國用位記狀

肆勤南畝、盡力東渡、終傾家資、以助國用、不有褒賞、何能勸人、宜降及世之榮、俾申務農之勞、

〔小右記〕天元五年正月十日癸卯、秉燭後、召左大臣〇源雅信參御前、其儀如官奏時、召下官〇藤原實資被仰云、圓融寺中造作料爵、以大炊允三島豐運可被預榮爵之奏狀、爲遣大相府〇藤原賴忠可令定申者、被申云、〇〇〇國用位記臨時給例也、今叙位次又加叙何事□也、件事前日被下宣下了、今日近衞次將等不參、仍以中將正清被奉一院〇冷泉、下官被奉皇后宮、

〔中右記〕天永二年七月五日、今日藏人弁下宣旨、雀部元貞可叙從五位下者、是正覺院修理功二人之中也、則下知大内記之處、申云、件姓先例所叙外階也、但可隨仰者、内外之條、又尋藏人弁、尋例可叙也、但〇〇〇國用位記多叙內階者、又以此旨仰大内記敦光之處、返事云、先例於諸宮給者、不論姓之高下、賜内階位記也、至國用者、偏所隨臨時處分也、但於今度者、可給外階位記者、此事慥不知、仍所記置也、下姓國用位記へ、有國用仰、叙內階、不然者叙外階歟、

〔扶桑略記〕二十二宇多寬平八年九月廿二日、菅家秘記云、余寬平五年出爲備中介時、有賀夜郡人賀陽良藤者、頗有貨殖、以錢爲備前少目、至于寬平八年秩罷、居住本鄉葦守、

〔左經記〕長元元年九月四日乙未、從右府〈〇藤原實資〉被示云、連月大風、京畿外國多風損之由云々、豐樂院門等幷府廳顚倒、府廳可造立事、府力難及歟、申爵加府力欲作云々、又七日内御物忌云々、十三日欲修奏、取案内可示者、爵奏事等取案内、六日許可參啓之由令申了、　六日丁酉、早且參右府、被命云、依去二日大風、府廳顚倒、以府力早可難造立、可然爵以其獻者欲作、量便申大閤、〈〇藤原賴通〉可示案内者、又六奥守孝義懇申、前司則光任終年沙金事、前年上達部有定、其事未被一定、仍又被申其案内、御報云、爵事可被申請也、沙金事追可聞也者、

〔江記〕天仁元年十一月廿一日、敎宗朝臣前日來語云、行事所〈〇大嘗會〉之催、難堪事三、〈〇中略〉一銀千三百兩進了之後、更有三百兩之責、予後問行事辨、辨云、依寛治例、募榮爵一人所催也、依銀不足也、

〔玉海〕安元三年〈〇治承元年〉四月二日辛未、大夫史隆職注送云、去廿九日、宮司〈〇伊勢大神宮〉公俊給榮爵五人、修造離宮院、令重任、

〔今昔物語　二十七〕東人宿川原院被取吸妻語第十七

今昔、東ノ方ヨリ、榮爵尋テ買ハムト思テ、京ニ上タル者有ケリ、其ノ妻モ此ル次デニ、京ヲモ見ムト云テ、夫ニ具シテ上タリケルニ、〈〇下略〉

〔倭訓栞　前編十一〕ゑよゑやく　又榮爵といふ、今昔物語に、榮爵尋て買むと思ひてと見ゆ、民に爵を賜ひ、或は賣買する事、漢の故事の如くなるが、五位已上は位田あるをもて買むと欲するなり、

〔後奈良院宸記〕天文四年十二月廿二日己酉、入夜右大辨宰相〈〇藤原兼秀〉祗候、大内左京大夫〈〇義隆〉内々太宰大貳望之由申、今度日花門被取立、總用萬疋進上、爲其賞可申請之由也、　廿七日甲寅、大内左京大夫太宰大貳勅許、　廿八日乙卯、大内太宰大貳之事、旁以不可然之間、昨日出所之女房奉書取

返事也、

〔年々隨筆 三〕官をうらるゝ事は、いつよりかありそめけむ、皇綱のゆるぶもとゐにて、かなしきわざる也、本朝文粋にのせたる菅三品の異見三箇條の中に、請停賣官事といふ條ありて、方今授任之道、非不正、黜陟之規、非不明、然時有以財官人矣、公家以爲助國用、衆庶以爲輕天工云々とみえたり、これらはいかなる官をうられしにかあらん、類聚三代格にみえたる昌泰四年格に、播磨國解偁、調庸租税、國之大事也、此國百姓、過半是六衞府舍人、初府牒出國以後、□稱宿衞、不俑課役、領作田疇、又延喜二年の格に、河内、三河、但馬等國解偁、此國久承流弊、□多困窮、就中頗有資產可堪從事之輩、既帶諸衞府舍人云々とみえたり、さばかり諸國に衞府舍人（衞府舍人とは、近衞兵衞衞門府などいふ）の多かりけむは、賣れたる故ならんか、中ごろより諸國受領の政おとろへ、庄園多くなりて、公田減じ、調庸租税ややうに少くなりて、成功といふ事いできたり、成功とは、造宮造寺何事にもあれ、臨時の大事の公用ある時は、私物を以てその事を成し、功を立て官を申事なり、本朝文粋に、大江匡衡朝臣の美濃守を望申狀に云、匡衡爲尾張守之時、施民治國、致合期之勤、有功無過之由、諸卿僉議已畢、又依官符宣旨、修造國分二寺神社諸定額寺十二箇所、不申請官物、別造進伊勢豐受宮之料米五百斛、造宣陽殿料准穎十餘萬束、依官符宣旨、應人所召所交易進絹二百餘疋等、不立用公帳、皆是諸國吏之誇功稱績之事也、とあるをもておもへば、此事はじめは受領など、何となく土木の功をなしめさるる物たてまつり置て、かさねて熟國溫職など望むたづきにせし物なりしを、用度年をへて乏しく、造營日に逐て多くなりしかば、ことさらに、一分二分のともがらを催しても、募らるゝ事になりけむ、されど白河院鳥羽院などの御時までは、必闕によらるゝ事にて、朝野群載にのせたる申狀ども、みな其定なり、衞府尉諸司三分を無員數にして、成功を募らるゝやうになりしも、いつのほどよりならむ、いまだ考へず、もしは後白河院などの御おこたりにはあらざるか、一人二人づ

つやう〳〵に數まして、きはやかにいつよりといふ事はなきなるべし、文治のころは、無員數なる事勿論也、寬元の比になりては、猥なる事いふべくもあらず、寬元三年の平戶記に、十三度の除目の聞書をのす、その度ごとに、四府の尉おの〳〵十二三人づゝ任せらる、又治部丞五人一時に任せられし事などもみゆるは、あまりなる事也、かの記に靫負尉以下無量無數などいひ、公事毎度被行成功之口任、雖知末世之至、猶々可悲ともあるは、その比の有職も嘆かれし事ながら、これを除きては、生財の道なかりし也、さるは諸國に守護地頭をおかれしより、國々の賦役大かた无實になり果て、國役と成功とをもて、かつ〳〵臨時の事は行はれし也けり、任する人からも、朝野群載にみゆる申文どもは、諸大夫侍しかるべき人にて、望外の職に轉じ、次序を守らずして超越するなどやうの事なるを、かの无量無數の成功にいたりては、行事官より諸國に觸て、富豪の百姓に募りたる物なれば、きのふまで庄官里長の沓とりし者も、けふは正六位上左衞門尉となりて、弓やなぐひなど、勢たちありくは、いと〳〵みだりにて、やみがたき勢とはいひながら、かなしきわざ也、成功の數多くなれば、おのづから物も多くは出さぬやうになり、物多く出さねば、任人の數いよ〳〵增て、四府の尉、諸司の三分、天下にみち〳〵たり、（これ今時の俗名に、兵衞衞門多かるゆゑなり、）成功の物の事、靫負丞は八百疋、兵衞尉は四百疋、諸司の三分は二百疋に過ずといふ事、葉黃記にみえたり、錢の價は今時の百倍にも過たれど、されとなはあさましういさゝかの物めさゞるゝ也けり、元弘、建武の比よりの物には此事みえず、さるは天下たゞみだれにみだれて、皇威諸國に及ばず、かの豪富の輩、數代成功せしは、先祖のなのりしまゝに、某左衞門、某兵衞となのりし也、兵革やむ時なくて、さやうの事糺明せらるべき時世にあらねば也、

官所充

所充

所充トハ、諸所ノ別當等ヲ定メ、其行事ヲ分擔セシムルコトニテ、別當トハ本官ノ外ニ別ニ勾當スルヲ謂フナリ、太政官所充ハ、二月十一日列見ヲ行ヒ訖リ、其月十三日以後ニ至リ、朝所ニ於テ、位祿所王祿所等ノ別當ヲ定ムルヲ謂フ、其日饗アリ、後辨官ニ申シ、次ニ陣ニ於テ申文等ノ事アリ、又殿上所充アリ、藏人所修理職穀倉院等ノ別當ヲ定ム、而シテ攝政關白ハ三所ノ別當ト爲ル例アリ、又院ノ所充アリ、中宮ノ所充アリ、私第ノ所充アリ、院ノ所充以下並ニ八月ニ行フ、又屋充アリ、屋充モ所充ノ類ニテ、行幸ノ時ニ、其所ノ殿舍ノ裝束ヲ分掌スルヲ謂フ、

〔江家次第五二月〕官所充（官列見之後、有所充、中文、黄木書之云云、大臣於陣見之、所充文、加文見、中文之儀同、著陣時、大辨著横敷座中之、）

定所所別當事

位祿所

　右左少弁某姓朝臣某

王祿所

　右權左中弁藤原朝臣某

大粮所　厨家

　右左少弁大江朝臣某

造曹司

　一右左中弁藤原朝臣

位祿所　王祿所　元慶寺

　右左少史伴圖忠

大粮所　季祿所　東大寺
右右少史――
大膳職　木工寮　造曹司
右右大史――
大炊寮　仁和寺　圓敎寺
右左少史――
內膳司　造物所　嘉祥寺　金勝寺
右右大史――
左京職　右京職　東寺
右左少史――
厨家　廳院　主水司
右左大史――
年月
史生所充不申上、
二月十一日列見、件月十三日以後、於朝所行之、有饗、其後申弁官、次於陣有申文、副鈎文一通、申云云、
〔左大史小槻季繼記〕一官所充事
列見以後、於官朝所、厨家別當辨史著行之、
〔經信卿記〕治曆四年十二月廿八日、申剋許、少史維孝來云、今日可被有所充申文并位祿定、可參、依左大弁(○藤原實政)被申障、是內府(○藤原能長)被仰孝信宿禰許之故也者、示可參之由了、登時束帶、(依為行幸之日、著有文帶、)

先於宮內卿御許、申承之後參內、內府被著陣座、仍徘徊仗下、官人來告可著座之由、參著陣座、內府被命云、今日可有所充大粮等申文幷位祿定歟、件等事、若無越年例歟、申云、大粮不堪等、近承越年之例、至于位祿者所未承也者、內府使頭中將被奏事由、次上卿被示可見所充申文之由、僕起座著陣腋床子、右中弁同在床子、右少史維孝奉任等同以祗候、仰申文早可持來之由、奉任持申文、置前床子、亦展懸紙、次見文、(所充文、納文筥、)卷之取立文筥置前床子、僕起座(弁史置筥、立座歟、)著陣座、亦申云、依次史敵用不候、下臈所候申文也、被報云、於無人數者何爲乎、次小揖云、申文、上卿被揖、僕微音稱唯、目史、史跪向小庭、上卿被目、史稱唯昇候西緣、差寄文刺、上卿取文被被見、□卷懸紙返給、史置杖結文、(先納文結、知例、次所充文、凡謂云、所々別當宣)又申上と申也る事、上卿被與奪、(納文者可與、所充名無可許□)史稱唯去、了任上卿被見文、了聞被目、僕近來恐懼、弁入此他文如何、申云、件文已前皆申候文也、仍急難以候歟、上卿被示云、是非奏書、何事之有乎、但案之、件事象不申出顔所失也、次僕起座著床子、次仰位祿文可持來由、史生入文於筥、置前床子去了、次見之、(目錄一枚、歷名二卷、出納目錄文一卷、出納所司書出一卷、出納定文二枚、)見了把笏、史生來取去了、次起座著陣、史奉筥文於上卿、置硯於僕前、去了、次上卿一々見文、取落他文、入目錄一卷於筥、使頭中將被奏、御覽之後返給、被目僕、僕置笏書先書殿上前、(一枚)次書出納所司料、(置上卿歟、所書之)次起座奉之歸居、上卿披閱之後、召弁(座方)給之、弁結之出了、(座方)(結政不知歟、)次召史令撤筥等、

〔永昌記〕保安三年十二月廿六日辛亥、秉燭右府(○藤原家忠)參陣、今日所充申文也、下官(○藤原爲隆)於床子見文、弁官以下所充文相副鈎文、覽也、史取奏杖歸來、予於仗座稱申文、史行中(○中一本作仲)一持參結申云、所所別當定充申上卜申セル事、次結鈎文、

〔台記〕久安四年八月九日甲子、參內、令申所充文定位祿事議政(○藤原忠通)坐近衞頭辨參奏向之、亥剋退出、

〔玉海〕安元二年十二月十四日乙酉、晩頭隆職宿禰來、呼簾前問官奏及位祿施米等事、是內々事也、官

奏事、雖有光雅告、未蒙上催、又無一上讓、然而爲用意也、又所充申文、位祿定、施米定、大概申文等、今年未被行、近代多被付官奏之由、隆職令申、余(○藤原兼實)云、非一上讓者、被改上卿不能行之者、隆職云、參左府(○藤原經宗)可尋申官奏事、其次件等公事、何比可被行、伺形勢、若有被申旨者、可申案內者、抑元永元年、故殿(○藤原忠通)兩度候給吉書奏、若有由緒歟、依不審先日問隆職、今日注申云、後度吉書奏、改元之後奏也者、仍今度不可有吉書奏者、奏候之故也、又位祿、施米舊文書等、內々持來令見之、　十八日己丑、此日不堪荒奏也、(先有不堪申文、又付行所充大概等申文、大概式相副所充文、申云、依永萬元年例也、)申剋、右少弁光雅來、余出逢、光雅仰云、今日官奏、一定可被行、左府申、所勞可令參勤者、申承了由、(此次余示云、不堪奏者、依一上讓、巳次上臈候之、今度無其儀、又依上儀、面雖有內々仰告、未蒙其仰、仍觸遣不審、一昨日申可見參之由、爲申此事也、今已被仰下、勿論者、光雅云、仰旨可然、即故存可參諾由之間、依大弁遲々、及大事、院內殿下三方奔波之間、于今遲々、爲恐不少者、○中略)酉剋、隆職宿禰來、呼前仰今日可被仰行事等、申云、所充申文先被行之可宜、依永萬元年例、欲相副大概式申文如何、余諾、隆職即參陣了、戌剋著束帶(色目如除目日、)參內、依無便宜、不經床子座前、(去春依爲初度強經床子座前、後々不可必然、可隨便之宜也、)直著陣奥座、即左大弁俊經參著橫切座、(我坐程)余示云、先可有所充申文、(可副大概式也、)俊經申云、件式未持參、重遣召了、余云、若依其文可懈怠者、強不可待之、只可申所充文也者、俊經起座向床子座見文、余計程著外座、引直下襲、(其裾懸垂自長押、)以扇直沓、以官人令置軾、頃之左大弁著橫切座上頭、申云、申文、余目之、大丞稱唯、顧左、次左小史祐重捧書杖參候小庭、(西面、)余目之、史稱唯趨進、著軾奉書、余置笏、(奥)以左右手取文置前、(所充文(黃紙)一通、大概式(黃紙)一卷、此中卷籠別紙納社寺勘文白(紙)一通、巳上局籠一禮紙、無內外結緒、押申所充文許之時、先例必副鈎點文、相副大概式之時、不副鈎點文之由、隆職所申也、所習傳知此、隨又永萬例同之云々、)史揖、座定後、披禮紙押文於右、(展張如常、)先見所充文、(移持右手、至奥見之、)卷之置禮紙內左端、次取大概式披之、取所充加之、主稅寮勘文如本置禮紙內右端見大概式、(移持右手、至奥見如初、)訖置緣取所於前、(禮紙上也、)卷之置禮紙內左端、(所充文同所、)更取主稅寮勘文、端兩三枚披見、(不至奥、件文爲合文副之、不可必見盡之故也、)卷之取大概式、如本卷籠表紙中、置禮紙左端、如本卷加禮紙、乍置攬廻、指出置板敷端、史取之、開禮紙、先結申所充文、(其詞不覺、)余目之、史稱唯卷之文置禮紙左端、次結大概式、(其詞不覺、)余目之、史稱唯卷之、(不結申主稅寮勘文例也、)加

續紙、取副杖揖退出、余取筥、(史歟、疑闕也、)已上所充申文儀、

(禁秘御抄 中)一殿上人事

抑補所々別當事、殿上所充外、公卿侍臣補之、上古多頭仰藏人、所謂上古織部司、雅樂寮別當、可然侍臣也、或又公卿也、康保、中納言伊尹爲雅樂寮別當、又兼通爲天王寺別當、醍醐寺元興寺等皆補之也、

(左經記)寛仁四年閏十二月廿三日己巳、有召參關白殿、(○藤原頼通)次參内、頃之關白殿令參給、有奏可有仰、仍於陣腋見奏文云々、左府(○藤原顯光)被參、藏人弁云、可有殿上所充事、仍今日停止者、仍文見畢下史、事畢左府依御消息被參御宿所、(藏人弁承御書、實之北方云々、)右大弁同參、被定殿上所充、(先此弁承仰、仰史令勘所所別當闕、讀候、藏人闕、硯筆續紙等、各依召奉之、)定了藏人弁(章任)給定文下史、

(小右記)長元四年九月十三日戊午、右大弁(○源經頼)持來諸司諸寺所所等別當闕勘文幷定文土代、申關白(○藤原頼通)可令清書之由相示了、定申之由旨以之可爲備之料、天慶年中貞信公内々被定申、見故殿(○藤原實頼)御記、 十四日己未、所充清書事、間遣右大弁、報狀云、修理職穀倉院可充内府(○藤原教通)之由、昨日關白被命者、土代先關白、余(○藤原實資)報云、内藏寮修理職、穀倉二所、猶第一爲別當、就中攝政關白必爲二ヶ所別當舊例勘文等、指夾算送大弁許、承平七年例爲後寄、貞信公御例也、示送云、申案内關白被命云、依舊例可清書、亦以此由可示下官(○實資)者、件土代前大相國、先年所見給、彼時一定、今更被改可無便歟、示送如然趣充了、仍被從定申之旨、(○中略)人夜中納言來云、事觸關白、被命云、明後日所充事、早可定申、 十六日辛酉、參内、(○中略)頭弁召關白參御前、亦召下官、參入著御前圓座、余得關白氣色召男等、頭弁經任參入、仰可進諸司所所別當闕官文之由、納柳筥進之、(内々示仰)余取渡關白、關白披見進奏復座、御覽畢關白進、復座授余、余召男等、經任參入、仰可奉硯之由、藏人右少弁經季執硯參入、(加入續紙定文土代之文、仰右大弁令定書、件文令内覽關白先了、余依[]事由令加入也、)余候氣色、然後書諸司諸寺所所別當、大藏少輔爲資補率分所、大輔頼平有分憂之由、別功者也、仍強無件所所望云々、御書所作物所等藏人、今新有仰改土代文定

書之書、還渡關白、關白披見、進奏返給授小臣、取副於笏退下、下給頭弁、頭弁云、以下官爲藏人所別當之由被仰下者、余於射場殿以頭弁令奏慶、拜舞了參上、大納言能信、左大弁重尹、右大弁經輔候殿上、余小時退下著陣座、則退出、今日巳三剋參入、未剋退出、關白云、太早被參者、余答云、古者巳剋參入、清愼公〇藤原實賴巳終午初參入、見彼記、　十七日壬戌、昨日多被補數所別當、九ヶ所太所恐懼、可逢關白之由含頭弁、故殿天慶八年十二月十六日御記云、下官奏云、一度補數所、甚所恐也、奉仰云、雖數所是大臣奉仕所也、仍所補也者、尋前例、已有延喜九年贈太政殿下〇藤原時平官所、右大臣源卿〇光兼補其所、八所也、所謂東西延曆等、內記、內豎所、內藏寮、穀倉、陰陽寮等也云々、同九年五月六日、以小臣爲藏人所別當宣旨已下云々、彼所雜色以下爲慶賀來、　十八日癸亥、貞行宿禰書進所充文、

〔玉海〕文治三年八月廿日戊子、此日殿上所充也、乘燭相伴內府參內、一上必可候也、仍兼日以大夫史廣房相觸之、被申可參入之由、而昨日依脚氣不快、不參天王寺、仍不能參陣之由被申、右大臣又稱障、撿例之處、長曆天仁、巳次大臣候之、仍內府所催也、直廬裝束如敍位除目儀、

〔玉蘂〕承久二年三月廿二日、未剋右中弁賴資朝臣來、依召也、以人仰云、來廿五日可有殿上所充、諸司所々諸寺撿挍別當闕否可令勘申者、承由、此次申、件日不審、聊答畢、勘文以五位藏人可被召之由存之、畢以弁可召之、不可然之由答了、　廿三日、午剋頭經高朝臣來、仰殿上所充間事、口代或書通入硯筥、是承平長元等例也、或注折紙給執筆、是長曆例也、今度可依何例乎、經高申云、申關白之處、可隨御計之由有仰、予云、然者可依承平之例、退出了、　廿四日、入夜國宗宿禰來、依召也、明日殿上所充否勘文代々宸文案持來之、不審所々少々有之、仍問子細申誤由、任嘉承之例可成大間之由申之、退出畢明日所充一定歟之由、遣尋頭經高朝臣御許、返事云、明日殿上所充事、如當時朱必定候、就中依佳例今月必可令遂行之由、昨日御氣色候き、勿論候歟、彼奬學院別當轉大臣之時、先例取闕事無異候歟、而嘉應有沙汰、猶帶之候歟、以彼例正治又不取闕候歟、此二代之例如承候、一定候歟之由、相尋官候

畢、未申左右候也、且又如何樣可候哉、

御書所別當事、當時範時卿候也、而被儲公卿之例、古今之間未承及候、仍昨日奏事由候、未承分明御定候也、但正治只被補六位許也承候、一定候歟可令言上之由申遣官候了、未承左右候、此事雖治事候歟、何樣可候哉、

明日次第不審事等候、子細粗注進候、可被召文書間事、以弁定被召候歟、資經朝臣申障候、仍賴資朝臣可令參候也、件文書關否勘文舊定文等候歟、長元卿先仰弁可令儲候之由、被仰之畢、如此候歟、若如此儀者、於陣可被仰候乎、如何、○中略

召間事

主上出御、關白御著座、次依召可有御參候歟、出御之後、關白御著座、更無其召、即可有御著座候歟、先例不同候畢、但長元關白御著座之後、依召執筆著座候歟、如何、今度之儀、昨日伺殿下御氣色候、未承定候也、然而以事次令言上候也、

土代間事

子細申殿下候了、未承左右候、但大公卿所殿上四五位、內敎坊、近衛中少將、藏監等、北野等類、及藏人頭已下、可令補之所々定以勘定被決候歟、未落居候也、隨沙汰之體可言上候也、此間事、委內覽候畢、隨左右可令言上候也、以前不審等、只今欲言上候之間也、可令申定給歟、以此旨可令披露候、恐々謹言、

三月廿四日　　宮內卿經高

逐申

御書所別當事、殿上紀傳儒者候歟、上古必不被御侍讀之由候哉、而稱被儲公卿之條不審候、爲之如何、如此言上之間、令依召馳參內裏候畢、仍委不言上候、○中略

弊學院別當事、兩度之例、右近者定被致愁訴候歟、忽難被計申候、

御書所別當事、公卿之例、不分明歟、同難被計申候、被補六位計之例間相存云々、又必不限御侍讀歟、

定被決聖斷歟、

被召文書事

以弁召之無異儀、以件文書例文問否文入柳筥、無禮紙之由、見舊候歟、以藏人召弁之條無疑候、

被仰可具文書之由事

先例多彖日被仰之、仍一昨日被仰右中弁朝臣了、

御前召間事

出御關白御著座之後、依召大臣參上定例候歟、

土代事

隨被定仰下、且必可令注進給云々、

剋限事、

申剋可有御參內候

右條々、依內々敎旨執啓如件、

三月廿四日　　　　　　　　加賀權守兼康奉、

謹々上頭宮內卿殿嘉應信範記被補定房卿、

抑弊學院別當事、不被注之、今案正治國宗、聞嘉應有沙汰之由、許和謎、不被改補之由歟、仍無沙汰可闕其所之由、故內府示歟、嘉應雅通卿、召大臣帶之何不補別當可闕其所乎、爰知被改補大納言定房卿、彼院別當、依有其利執之云々、末代事謂而無益、仍不委子細、但先日經高朝臣入來之時、粗示此旨、而今堅固不達子細者、似予之僻事、仍聊爾達上、所充土代未被定下哉、弊學院別當事、官何樣令申哉、

哉、嘉應之例、被改補大納言定房卿之由見戚記、正治之例、不被改補云々、落居之樣、粗可示給也、又御書所別當事、如何、條々依不審內々所尋申也、努力々々、不可有口外之帖如件、

三月廿四日　左大臣

頭宮內卿殿

還申

土代一定之趣、必可承存也、先々不及秘藏歟、仍所令申也、

廿五日、昨日所遣經高朝臣許之兩通請文、早且到來、其帖云、條々可令存此旨候、昨日殿下仰旨等候き、今日可令言上候也、

勸學院別當事、官日來言上之趣、願相違候、然而任正治例可被闕其所之由、被仰下候也、

御書所別當事、不審尤多候歟、然而寛治正治之例、官注申候、仍可被補六位許候也、官中帖尤不審候也、必不可限御侍讀之由存候、然而近來皆以御侍讀被入之、仍沙汰候也、今日可令言上候、

土代事、官中帖、凡不分明候之間、猶被尋決候、及遲々候也、然而大概定候畢、只今可令進上候、以此趣可令申入給、恐々謹言、

三月廿五日　宮內卿經高〇中略

又云

今日所充土代事、今朝被尋仰下之時、言上子細候了、猶御不審事等候之間、被尋官候之處、自昨日于今不言上左右再三雖被責仰、未申上候、暫留御使雖相待候、未到候之間、大概先注進候也、是等依前被定仰候也、加押紙之所々、官未申上候之間、未定候也、然而大旨被定仰、人々注載候也、押紙所々被定仰下候者、於內裏可令言上候也、土代更不可及秘藏事候、勿論候歟、長元四年記錄、載其由候歟、往代猶如此、末代獨不及左右候也、只遲々之故候、以此趣可令洩披露給、經高誠惶頓首謹言、

三月廿五日　宮內卿平經高

經高重言上

所々撿按別當事、昨日朝隨大間到來內覽候、左右必可被決勅定之由被奏聞候、仍申上其由候、御不審事等、被尋官之間等候、如此于今不言上左右候也、然而內々於御前被定仰事等如此候、去夜夜半許內覽候也、爲御不審言上候也、弊學院事、大略可依正治例候、御書所別當事、雖及猶豫候、猶可待六位許候歟、文書可移入柳營候也、勘先例候之處、或召官營令進之時候歟、然而多移盛柳營候、仍用意候也、所詮又可在役弁之最候歟、此旨重可令申入給、恐惶謹言、

此日殿上所充也、申刻著束帶（蒔繪劍）參內、入化德門（臨使）參宮御方、則參內御方、頭宮內卿經高朝臣云、左大史國宗未參、文書未持參云々、仍遣人之所、依召參御所之由令申如何、予云、全以不遣召、重可遣人、此間於鬼間許定土代間事、國宗宿禰內々所送之大間、與付職事之大間文相違、仍問答之、予注文大略改直畢、又云弊學院別當事、任正治例不可被入別當、御書所別當不可被入四位入六位一人云々、此條猶不可然也、大臣以希代之例被補別當者、最可書內大臣也、大臣已載之、何限彼所可有議乎、無理不可載大臣別當之由者、任代々之例可被改補大納言也、御書所別當、又不被入御侍讀之例希歟、若不被始御書所之時、六位許補之歟可尋、予候大盤所、頭之關白被參、召經高朝臣被問事具否、國宗宿禰未參之由申之、此間與關白交談、問治曆五年、承保元年等事、命云、大殿御記不委細、勘文入營令奏之由不見、關白不參、仍內覽於殿上、召營入文被覽之、承保依爲大神寶日時定、上御使出陣被宣下也、頭之國宗宿禰參入之由、經高朝臣申之、仍被申行出御之由、予著殿上（長元四、小野宮右府先著陣、著殿上歟、仍申合依召著殿上、而大二條大殿、直松殿、可追近例之由有命、）次主上出御晝御座、（御引直衣）關白著廣庇圓座、（南面）次頭宮內卿經高朝臣奉勅入殿上上戶、經年中行事障子北、昇廣庇南妻、（先右宜恒說、經資子參上、家說用此道也、）參進、著御前圓座、（先跪東頭膝行著之、如例）引寄下襲正笏候、主上目給、予微唯召男共、藏人參上、仰可召弁之由、（先問其人、先例指名召之、不返答也、而問其人之時藏人退也、爲之如何、）右中弁

賴貢朝臣參候簀子、予仰云、諸司所々諸寺撿挍別當闕否勘文例文持參也、賴貢稱唯退去、向床子座、召取文書、(入筥置之、)弁取之移入柳筥持參之、(闕否勘文一通加續紙、先例多不加、)予置笏取文二通置前、(不從□、)取之覽關白云々、見畢返給、予取之、取副笏起座、(揖、)歩進跪右膝於長押、膝行、(左膝、)就御座前居定、(居、)置笏、(左、)取副文置御座上了、取笏逆退降候、長押下、(向西行足、)御覽了返給、予小息、外長押(先左膝、)膝行進寄置笏、給文取副副笏退降、向乾右廻列座、左廻著座、(揖、)置文於前、正笏候、次主上目給、予稱唯、正笏召男共、男共參上、仰可召五位藏人之由、藏人退下召之、則藏人春宮權大進宗國參上候簀子、予仰云、硯續紙、宗國退下、則持參硯續紙、予置笏取柳筥置座前、(闕否勘文例文等置硯左方、)正笏候、次主上目給、予微唯、置笏取續紙一卷、向座下方跪置之、自奥方卷返、横置座前、取笏候、次主上目給、予稱唯、置笏入水於硯、摺墨染筆返置、次取出土代披見置硯右、取續紙染筆、見合先文一々書之、其中事人司別當書落土代了、仍未被定仰別當、予取笏申此由於關白、關白云、可問官例、以男共召弁、賴貢參上、落事人司、其子細可問官之由仰之、賴貢朝臣退去、歸來申誤書落之趣、以此由申關白、關白奏聞、先例被補雜人故之由有仰、予披例文申之、依仰以左中將通信朝臣爲別當也、一々書了奥書年月日、放奥餘紙如本卷之、兩三度加覆勘卷調覽、關白關白見了返給、撤硯雜具置前方、(例文、闕否勘文、續紙同加之、)疊定文於柳筥、指笏參進奏之、小退拔笏候、長押下、御覽畢返給、升長押指笏給筥退去復座、置前拔笏、如本返疊雜具於柳筥、(勘文等置硯左、)取定文副笏揖起座、經本路退下於殿上端座、召大弁、左大弁家宣朝臣候小板敷給之、結申退去、次予退出、弁於床子座下左大史國宗云々、

定文書樣

定諸司所々諸寺撿挍別當

内藏寮
陰陽寮
修理職
已上關白
大學寮
太政大臣
木工寮
左京職
右京職
已上左大臣
内匠寮
右大臣
大舍人寮
内大臣
雅樂寮
大納言藤原朝臣公經
典藥寮
大納言藤原朝臣師經
内膳司
權大納言藤原朝臣良平

修理職
大膳職
木工寮
主殿寮
掃部寮
造酒司
已上左中弁藤原朝臣資経
大炊寮
内膳司
已上右中弁藤原朝臣顕資
縫部司
内蔵頭藤原朝臣保教
隼人司
左近衛権中将源朝臣通信
主水司
東市司
已上左衛門権佐藤原朝臣経業
西市司
右衛門権佐藤原朝臣光俊
内記所

內豎所
穀倉院
已上關白
弉學院
校書殿
大納言藤原朝臣公經
侍從廚
大納言藤原朝臣師經
一本御書所
權大納言藤原朝臣良平
內敎坊
權大納言藤原朝臣定通
大歌所
權大納言藤原朝臣教家
勘解由使
權中納言藤原朝臣定高
進物所
參議藤原朝臣公頼
穀倉院
校書殿

内豎所
内酒殿
已上宮内卿平朝臣經高
進物所
作物所
乳牛所
已上右近衞權中將源朝臣雅清
装束使
左中弁藤原朝臣資經加署
右近衞權少將藤原朝臣伊平
正藏率分所
右中弁藤原朝臣賴資加署
民部大輔藤原朝臣保綱
大藏大輔安倍朝臣忠光
大監物源朝臣光行
主計頭安倍朝臣孝重加署
勸學院
侍從厨
已上權右中弁藤原朝臣成長
施藥院

左少弁藤原朝臣宗房

女官

春宮權大進藤原朝臣宗嗣

典藥頭丹波朝臣長基

天下御書所

右少弁藤原朝臣光俊

神泉苑

左近衞權少將藤原朝臣盛兼

大歌所

右近衞權中將源朝臣資雅

內教坊

左近衞權少將藤原朝臣敎通

左近衞將監狛宿禰光眞

北野

左近衞權中將源朝臣師季

御書所

左衞門權少尉藤原康光

畫所

治部權少輔藤原朝臣定親

宮內權大輔藤原朝臣家光

御厨子所

内膳正藤原朝臣保敎

左衛門權少尉藤原康光

作物所

左衛門權少尉源盛貫

內酒殿

右兵衛權少尉高階知經

內豎殿

左近衛將監源盛忠

藥殿

右兵衛權少尉源仲親

延曆寺

圓宗寺

法勝寺

尊勝寺

最勝寺

延勝寺

已上關白略○中

承久二年三月廿五日

左大弁藤原朝臣家宣傳宣、左大臣宣、奉勅、件等人宜爲諸司所々諸寺撿挍別當者、

承久二年三月廿五日　左大史兼主殿頭小槻宿禰國宗奉

〔葉黃記〕寬元四年八月廿七日癸丑、乘燭之間參院、依所充奉行也、近代強不被行之、然而任寬治大治建久例、今度所被行也、土御門大納言、（顯定）土御門中納言、（顯親）左大弁宰相、（經光、以上院司也、）持參盃、（居折敷、）藏人憲說取瓶子、箸下、（居汁物、）次大納言執筆召藏人、仰例文硯事、藏人取硯（居御筥、大間例、今度土代等加入之、）置左大弁前、次藏人立切燈臺、（撤本燈臺居替之、）左大弁取例文并土代傳大納言、（自座次第取上之、）執筆見例文、左大弁氣色之後、摺墨染筆、卷返大間書文、氣色則被與奪、書了次第上之、大納言召藏人仰可進筥之由、即持參之、應儲之、執筆入所充文於筥、以大貳惟忠朝臣被奏聞、即被返下、執筆又返給、四位院司惟忠朝臣出東中門下、主典代舉、此間左大弁召藏人、令撤硯等、

大間書書樣

御祈願所

別當顯朝朝臣

御服所

別當基具朝臣

仕所

別當惟忠朝臣

別納所

別當隆行朝臣

米所

別當房名朝臣

寬元四年八月廿七日

中宮所充

院司交名廿七字、左大弁書入之、

例文

御新嘗所

別當親經朝臣

御服所

判官代通方

仕所

別當資實朝臣

別納所

別當經仲朝臣

米所

別當隆衡朝臣

建久九年八月八日

建久用寛治五年例文、今度依仰用建久例文、

大治二年八月廿二日、院所充之次、押分配、今度同可行之、然而無沙汰、近例也、

〔左經記〕長元元年八月廿八日庚寅、參宮(○藤原威子)御方、(○中略)於東廊定所充事、余(○源經頼)執筆、今夜余并權亮(○中宮)(○中略)候議座、權大夫(○中宮)(○中略)不被參入、(依重服、爲仁王會日者不被參入也、)又大進等各有障不參入、仍良任朝臣并少進基親進宮文硯等、爲違例乎、依御服間、有大夫宣、不讀奏、餘事如常、但明年不可被行大饗、仍不定其所々事了、九月一日壬辰、中宮屬爲信令申云、(○中略)夜部令覽宮所充文於關白殿、仰云、可下者、但權大夫身不參定所、加署名之旨如何、余申云、令屬見定文、而加署返之、依不可左右所、令御覽也、仰令見

私領所充

定文、尤可レ然、但不參加名、理不レ可レ然、

〔中右記〕長承三年八月廿八日、皇后宮所充、大夫大納言賴長沙汰之給云々、權大夫師俊有レ所レ勞不レ參云々、

〔執政所抄下 八月〕十六日

御所宛事

炊料の米八石　御封內

魚貝菓子、御庄々依レ例調進之、七月下旬申レ成政所御下文、下知之、年預下家司以レ長案內申行之、和泉、攝津、近江國之舍人、主殿所等宛レ魚貝、召之爲レ例、無レ令レ懈怠、年預下家司成レ下文、召レ仰番頭等、不レ令レ懈之、

〔執政所抄上 正月〕元日

御節供事

殿下御料朱器

懸盤六前　盤

打敷用レ書

菓子八坏

四坏　柘榴　棗　栢　松

四坏　甘子　橘　梨　栗

粉餅八坏

唐菓八坏 梅枝 桃枝 餲餬 桂心 黏臍 饆饠 鎚子 團喜

干物八坏 干鳥 楚割 蒸鮑 蛸燒 干鮭 干鯛 押鮎 白干

粉熟（加小角豆汁）

御盞

四種坏

御酒壺酒五升

已上家司御所課、舊年以御所宛買分、備中之處、請取御朱器、按調進之、朱器御倉開闔家司下、

年預

下家司

御殿油（毎夜納殿勤之）

北政所御料（臺盤所野錦器、以縁錦衣縁）

打敷一帖（六尺四幅　龜甲文）

折敷十二枚（赤同）

御箸

四種坏

粉熟（加小豆汁）

時菓子八坏（同前）

餅餤八坏（同前）

唐菓子八坏（青四坏　赤四坏）

干物八坏（同前）

件御料、居關土高坏供之、

女房衝重廿前

已上舊年以所宛旨重催申、所課家司令勤仕之、

御殿油（旬出納）

兩方御節供、四位陪膳、五位幷諸司官人役送、件事元三御裝束、行事所司令催之、

藏人所三箇日饗（諸國）

侍所三箇日、下姓五位六位遞役、

已上職事所司、舊年致沙汰令取奉、

御隨身所三箇日饗　　下家司重役

件饗去。年。八。月。御。所。宛。任遞役宛定畢

毎日廿前（深草四寸盤盛之）

追物廿種（備江濱魚、盛鮭乳烏）　交菓子二外居（盛時菓子、）　大鯉（二尺五寸、當時有不足、）

毛島　雜仕饗

所々三ケ日節酒

小舍人所　御厩　御車副　牛飼

件節酒、年預下家司任長案給下文也、

（中右記）長承二年八月廿九日、今夕家中（○内大臣藤原家忠）所充、

（台記）久安六年八月卅日癸酉、是夜家（○左大臣藤原頼長）所充、

久壽元年八月廿一日壬寅、今日家（○左大臣藤原頼長）所充、親隆朝臣已下參會、

（猪隈關白記）正治三年（○建仁元年）八月廿二日己亥、此日私家（○右大臣藤原家實）所充也、（政所、侍所、）

（勘仲記）弘安二年八月十八日癸巳、今夕內大臣殿（○藤原忠教）政所所充所參行也、家司信輔、予（○藤原兼仲）仲兼、仲親、親基、著行、自御所直所伴參近衞殿也、

〔兵範記〕仁平二年十二月廿六日丙戌、白川押小路殿有行幸、[illegible] [illegible] 御裝束始事、院司權大納言公教卿、大藏卿師行朝臣以下參仕、寢殿母屋庇引敷弘筵、南面御簾一間、敷御座疊一枚、次有屋充事、各向奉行屋々、令諸司官人奉仕之、下官〇平信範爲寢殿東北子午廊行事、可爲姬宮御在所云々、

古事類苑

政治部十九

上編

上日

上日ハ、番タツカムマツレルヒカズト謂ウタ、今世ニ謂ユル出勤日ノ事ナリ、即チ長上、番上ノ異アリテ、長上ハ日勤ヲ謂ヒ、番上ハ當番ノ日ニ出勤スルヲ謂フ、

凡ソ上日ハ、之ヲ計上シテ式部省ニ申送ス、其法五位以下ニテハ、毎月一日（正月二日）ハ、諸司ニテ見參セルモノ、、長上番上ノ前月ノ上日ヲ總計シテ簿ヲ作リ、主典ヲシテ式部省ニ送リ、錄其簿ヲ總計シ、輔丞ノ前ニテ之ヲ讀マシム、五位以上ニテハ、毎月二日（正月三日）ハ、諸司其前月ノ上日ヲ計ヘテ簿ヲ造リ、主典ヲシテ式部省ニ送ラシメ、式部省ニテハ專當ノ史生ヲシテ、其朝座ノ上日ヲ抄シ、及ビ集會請假等ノ簿ヲ竄點セシメ、丞ノ前ニ置ク、其日平旦、省掌本省ノ門外ニ於テ諸省ヲ計剌シ、輔以下座ニ就キ、省掌諸司ヲ引キテ入ラシム、諸司ノ錄、文ニ依リテ簿ノ文ヲ讀ム、若シ違フ所アレバ、丞勘問シテ輔ニ申シ、丞其判ニ隨ヒテ改メシメ、錄ニ命ジ簡ヲ其勘問セラレタル者ニ返サシム、又特ニ上日ヲ天皇ニ上奏スルモノアリ、之ヲ月奏ト稱ス、月奏トハ、毎月一日ニ少納言ヨリ内侍所ニ就キテ、去月ノ參議以上、及ビ少納言、外記、辨、史ノ上日ヲ奏シ、左近陣ヨリ出居侍從、内記ノ上日ヲ奏シ、藏人所ヨリ殿上藏人所、及ビ諸所諸陣ノ月奏ヲ進ムルヲ謂フナリ、蓋シ此等ノ官人ハ、多クハ顯要ニシテ、常ニ天皇ニ昵近セルヲ以テ、特ニ之ヲ闕下ニ奏センナルベシ、

日給簡ハ、清涼殿、臺盤所等ニ在リ官位姓名ヲ錄シ、名ノ下ニ紙ヲ貼シテ上日ヲ錄セリ、長上番上ノ功過ヲ考フルニハ、此上日ヲ計ヘ勤惰ヲ量リテ定ムルコトニテ、日數ノ滿タザル者ハ、考ニ預ルコトヲ得ズ、又季祿馬料等ヲ賜フニモ、上日ヲ計ヘテ賜フコトニテ、是モ定ムル所ノ日數ニ滿タザルトキハ賜ハザル法ナリシガ、後ニハ上日ノ數ニ依リ、上中下ノ等第ヲ立テ、賜フ事アリ、

休日ニ上日ヲ給セザル法ハ、平城天皇ノ大同四年ニ始テ立ツル所ニシテ、嵯峨天皇ノ弘仁二年、復タ之ヲ給スル事トナレリ、又後ニハ殿上人等ニ結番ト云フ事起リテ、一月ニ日直二十、夜直一十ヲ以テ法トシタリ、出デ、使スルモノニハ、見役及ビ往還ノ日數ヲ計ヘテ上日ヲ給ス、又無故不上ト云フコトアリ、官人故ナクシテ上ラザルトキハ、日數ニ隨ヒテ笞杖等ノ刑ニ處ス、而ルニ孝謙天皇ノ天平勝寶四年ニ、有位ハ外散位トシ、無位ハ本色ニ還スノ制ヲ立テタリ、又上日ヲ停ムルコトアリ、卽チ殿上籍ヲ削ルコトニテ、出仕ヲ停ムルヲ云フ、

名稱

〔伊呂波字類抄 都疊字〕上日ツカヘヒ　〔同 志疊字〕上日

〔塵袋 五人倫〕一上日ノモノト云フ如何

此ヲ詞ハ可尋ヌ、但シ上ノ字ヲバツカフトヨム事アリ、君仕ル心歟、マイリ次第ニ勞ヲタテ、ツカヘタル日ヲカゾフル義歟、

〔倭訓栞 前編 十六 都〕つかんまつるひかず　日本紀に上日をよめり、令に不上とも上本司とも見えて、奉公の日をいへり、思の儘の日記に、殿上人の奉公の上日によりて、皆官爵をさづけらるといへり、又音にて上日の者など見え、朝野群載に、月奏の條、四位五位六位の上日夜の數を記し、魚魯愚抄に、勤申瀧口三箇已上上夜事とも見ゆ、

〔有職問答 一〕一上日事

是は禁中に當番にて祗候の人の事にて候、小家に上日の者に仰てと語候、其人の召使輩に申付候と申事にて候、出仕被仰出候ヘ、何候ハ日ヲ十日ト申、宿直ヲ掛テ一夜ト申候、一年中ノ上日ノ數ヲ外記ヨリ注シテ奉リ事實ヲ檢也、是ハ殿上ノ所ノ職色ナド申候ヤ、是ハ藏人所ニ可有候、瀧口小舍人ナドニテ候ヤノ上日候也、其ヲ奉公ノ勞ニテノリテ、叙官ヲモ申ス、瀧口ニ瀧口ノ勞候ナドト申スモ、一年中ノ上日ヲシルシテ申ス候ニテ候、

〔官職難儀〕上日とは
上日と讀、關白をはじめ奉り、大臣公卿以下堂上堂下公人ごときまで、日々奉公の日を上と云、勞をたゞすゆへ、公卿の上日を勘ると申て月ごとの上日を記したるを月奏と申て、關白御拜賀の日も、先外記是を覽し侍る事あり、宮つかふるを上日と云、夜を上夜と云、除目の時、瀧口所衆などが勞帳も是を記たる物に侍り、大内家人に鍵鑰と申こうさいなる者、種々の事を諸家へ問侍るに、此上日事を三條西に尋て侍れば、禁中に伺候の日を上日と申、宿直し候を上夜と申由記しあたへ侍り、いまに寫して、問答抄とやらん銘を書て持たる人都鄙に少々あり、相違なく侍り、去ながら宿直するを夜と申せば、宿直とは一向夜の事計と聞え侍り、宿直とは晝夜の事也、令義解に、宿直の事を夜仕曰宿、晝仕曰直あり、勿論事也、若思あやまり記しけるや、是も儲のけつまづきにこそ、宿直はよるの事とのみ自然申貫、又もや侍らんと次を以て申也、又平家物語に、太政入道〇平清盛の上日のものを召つかひと侍る事、田舍人などの不審し侍る事也、是は太政入道帝外祖たるゆへ、准三后の宣旨を下されて、院宮のごとく上日の者を召仕たると申事也、此上日は、地下に所の職色など申やうの院宮にも召つかはるゝ物を仕たると申事にや、院宮とは、院は仙洞女院、宮は春宮后の事を申也、

〔運步色葉集 太〕當番

〔易林本節用集 太言語〕當番

〔書言字考節用集 八言語〕當番

〔律疏 職制〕凡官人無故不上、及當番不到、若因假而違者、一日笞廿、(下略)

〔延喜式 四十五 左右近衛〕凡毎月一日十六日、具錄當番近衛歷名、次官已上奏進、〈若無者判官亦奏〉

〔類聚符宣抄 六〕請印官符事

右官符、少納言外記加覆勘、後日捺印、而即日捺、頓不能勘、自今以後、宜入日細勘、後日捺印、當番案主亦宜知之、

延暦十三年六月十五日

〔日本後紀 二十二 嵯峨〕弘仁三年九月乙丑、右大臣從二位兼左近衛大將藤原朝臣內麻呂、中納言兼右近衛大將從三位勳三等巨勢朝臣野足等上表曰、〈○中略〉大同之年爲左右府、〈○近衛〉即停長直、一從番上、自玆上番下番遞去遞來、苟守當番之直、不顧長久之法、

〔中右記〕嘉保三年〈○永長元年〉正月十五日、予〈○藤原宗忠〉依當番供御膳、入夜退出、 廿三日、依爲當番宿仕、 廿四日、今夜依當番宿仕、 廿七日戊午、晚頭參內、依當番供朝夕膳、入夜白地參大納言殿、〈○藤原宗俊〉歸參宿仕、

〔山槐記〕永暦元年七月廿二日戊戌、申終剋參內、依陪膳也、今朝越後守邦綱朝臣送書札云、一日被聽還昇畢、今日可供膳也、朝膳欲供者、依爲予〈○藤原忠親〉當番所觸送也、承諾了秉燭彼朝臣參內、供朝膳夕膳、予供之退出、 八月四日己酉、未剋參內、依當番也、次參院即退出、

〔源平盛衰記 七〕成親卿流罪事

大納言〈○成親〉ハ、ナドカ我ユカリノ者ナカルベキ、世ニ恐テゾ出ザルラン、〈○中略〉鳥羽ノ御所ニ被候ゼシ時ニハ、非番當番シテ目ニカヽラン、詞ニカヽラントコソ振舞シカ、世アラタマリ勢ヒカワレバニヤ、ウラメシタモ云置ベキ事ヲキカジトマデ思覽ヨト口說給ヘバ、〈○下略〉

〔親長卿記〕文明三年十一月卅日、當番今日滿日也、爲名殘惜申出三十首勅題各詠之、被遊御題之時被召御前、題事等有御尋、子細少々申所存之間有被直事、次申云、同者可被御製一首可被遊云々、即

於御前三首進上之、若宮御方同一首進上了、其外於番衆所詠之人數、冷泉大納言(爲富)、新大納言(政秀)、予、園前中納言(基有)、源中納言(雅行)、勸解由小路前中納言(在盛)、中御門中納言(宣胤)、右兵衛督(雅康)、菅宰相、(長顯)[一][一]民部卿(代筆之)、取重之、裏書事了勘發了、

當直

〔令義解(七公式)〕凡内外百官司別量事閑繁、各於本司分番宿直、(謂、宿者夜宿、直者晝直、其長官、並判官以上、及別當、亦須宿直、其才員無判官者、亦得與寮也、)

〔日本紀略(十四後一條)〕長元六年二月十日丙午、今日停任左衛門官人等、依當直不參盜人禁中之過也、

宿番

〔親長卿記〕文明六年八月廿五日、祇候御所、實房番代也、不宿仕、當番許也、　十月十四日、臺閣番召進元長了、予宿仕、

不寢番

〔菅宰相爲川集(資入記)〕不寢番、

〔親長卿記〕文明六年八月二日、參内番也、依御用心有不寢番、　五日、參内、雅康卿番代也、去一日宣親番代雅康卿參仕之間、予今日參了、自六至五時予不寢番也、

請取番

〔親長卿記〕文明六年十二月十二日、參内、請取番也、

〔宣胤卿記〕文明十二年正月三日甲申、朝飯以後著衣冠參内、番也、(第二)請取通秀卿、相博實久卿、彼卿則退出、其後無參仕之人之間召殿青侍、申剋退出、此後姉小路三位基綱卿參云々、兼日已前歸參、通秀卿、余、基綱卿等祗候、近臣又兩三人列也、　十三日甲午、當番請取也、帥卿爲相博可參之由昨日約諾了、

十三年二月二日丁未、參内、番也、今日請取菅原和長、第二葉室前大納言、次余、次西川前宰相(顯之朝臣)、(番代)次右衛門督等所參也、

結番

〔禁秘御抄(中)〕殿上人事(公卿侍臣拜賀、上古大臣卿之、雖爲同例之、)

廿日十夜上日、代々有沙汰、上古猶雖叶事也、於末代更不可相應、尤見苦、有御志之輩、雖爲卅日可候、近代六番猶難叶、只吉程可有沙汰歟、好華族之輩、自弓場殿參歟、不居渡殿下侍、是近日事也、中古雖有比輩、近代之儀、不似上古、不著[illegible]賓、又人咲之、不可說儀也、又華族人不入結番云々、近太政入道

經實須辭、但又經宗兵衞佐時入番如何、更々不可依器事歟、非參議大弁或入或不入、幼少之人不入之、仍自然可然人被除、近代芳心也、更非華族之儀也、

〔蓬萊抄〕凡廿三十夜之勤、不可懈緩歟、凡殿上人之出入、不任雅意、觸障於藏人可左右之、

〔左經記〕萬壽五年長元元年三月廿八日癸亥、有殿上起請云々、當番陪膳二人可候宿、又五位一人、近衞司一人必可候、兼又任古例、每月日廿夜十可奉仕之由、右大弁奉仰、申關白殿藤原賴通令定下云々、

〔侍中群要三〕當番人可早參事

右日給時前參入、供奉御盥御膳、

朝式候番押二日記辛櫃蓋一、兼知之、

一番子卯午酉ゝゝ

二番丑辰未戌ゝゝ

三番寅巳申亥ゝゝ

今案件事、六位以下事也、以官次第注之、專不依上日次第、件事爲急速奏文也云々、假者飛驛馳驛天文密奏等耳、但布袴非藏人預件番、然而年來之例不布袴、只以宿衣勤之、當番日守次所役也、

〔延喜式左右近衞四十五〕凡看督二人、簡近衞性識强幹者充之、左右相交作二番、每日一番候內裏、一番巡察京內非違、

〔大夫尉義經畏申記〕可令向市塵大結番事

一番　康綱朝臣　久光　基廣　明基奉行　兼康

二番　兼綱朝臣　季貞　淸重　重成

三番　章貞　盛澄　信盛　資成　久忠

四番　仲頼　　信盛　資成　久忠

右市廛雜物沽價法、被定去八月卅日官符、然猶又高買之輩不恐嚴制、猶以違犯、宜令撿非違使等五箇日一度分番向東西市、可令勘糺違法之由、同九月十九日被下宣旨畢、仍任被宣下狀、爲令行向所令結番也、來卅日一番可行向也、又自件日又以前如此轉輪、健守結番行向市廛、可令勘糺件違法之狀、依別當宣所遣如件、

治承三年十月廿六日

(親長卿記)文明三年正月五日、早旦參御寺、當番也、自昨日被結番、予三番、左大弁宰相(親長)合番也、番帳昨日予書之、使人々命也、

定　御寺結番事

一番　日野大納言　　冷泉前宰相

二番　中院大納言　　督宰相

三番　按察　　左大弁宰相

四番　右衛門督　　春房朝臣

五番　兵部卿　　基仲朝臣

右守次第、無懈怠可令參候之狀如件、

文明三年正月四日

(宣胤卿記)文明十二年四月十七日丁卯、小番事、兩三人可相觸之處、逃案之、獨番頭申遣之條、叢室所存難測、且番始之間、旁爲覺悟、今日態遣人於叢室許(四辻)處、各在所無案內、所詮只余先可申遣條、口悅之由返答、仍三人分以一折紙相觸了、各付奉字、件折紙注左、堅固內々體也、

小番自來廿一日被結改了、爲第二番可有御參候、自叢室前大納言可申遣之處、遠遠之間、且馳申

結改

候也、

御方
冷泉殿　宜胤

松殿少將殿

東坊城殿

十三年正月廿三日戊戌、行勸修寺大納言許、對面、談合小番事、重而載狀遣之、子細見狀、○中略

小番事、雖爲窮困、於非無足輩者、各可爲裝束歟之由存候間、涯分存其旨之處、隨分之衆直垂候間、勵微力之條無其勇、殊此邊武家中之間、無僕歩行、爲公私見苦、於乘物者不事行、每度立寄御近所改著之條移刻旁其煩候、所詮如宜胤小分限輩、著裝束者、雖爲何樣之體、可構參候、不然間者可爲直垂分候、然知行所々押領、始終不可事行之由、最初申入候了、結句其後又不知行子細候間、彌迷惑仕候、可然之樣可得御意候、誠恐謹言、

正月廿三日　宜胤

勸修寺殿

〔親長卿記〕文明六年九月卅日、明日御番結改云々、予爲一番、自番頭(日野大納言勝光)可相觸、雖然日野大納言在因幡之間、予可相觸之由、廣橋大納言申之、申故障之由了、仍帥中納言觸之、十月一日、參內番也、自今日結改也、自今日至五日可祗候云々、日野大納言、(實綱)大炊御門大納言、(信量)予、帥中納言、(公光)右兵衛督、(雅康)民部卿、(忠富)公夏朝臣以量等也、

〔宣胤卿記〕文明十三年二月四日己酉、冷泉前大納言被來、禁裏小番自來十一日可被結改、余可爲第四番、可存知云々、彼前亞相四番番頭也、每度以一通所相觸也、今度不然、又結改子細者、新宰相中將遁去、一條亞相昇進以後加叙輩之上、中院一品此間三番頭也、叙一品之間爲一番頭、其外新衆新大納言、(公興)冷泉前大納言、(爲富、勸修寺以後、此間爲廣橋所參也、)子爲親朝臣、(此間爲近臣之處、違時宜、不知、不召御前、)家幸、(自去年不參也、但不入番帳之間、今度可加、)

十一日丙辰、禁裏小番自今日之結改云々、予組番四日一條亞相被來、一番通秀卿、公躬卿、資多卿、忠顯朝臣、守光、○中略
二、資綱卿 三、教忠卿 四、爲富卿 五、教秀卿 六、資世卿 七、高清卿 八、實久卿 九、實淳卿 十、政長卿

〔言經卿記〕慶長十二年二月廿日癸丑、禁中内々小番事、去十六日ヨリ闕改也云々、

内々小番之事

一番 爲勝卿 雅朝卿 俊昌朝臣 季房 多隆
二〃 基孝卿 實條卿 秀直朝臣 宣季 嗣良
三〃 言經 重定朝臣 實有朝臣 秀賢
四〃 永孝卿 之仲朝臣 季繼朝臣 宗信
五〃 光豐卿 實顯朝臣 教利 通村

小番之事

一番 子午 實益卿 盛長卿 有廣卿 爲親朝臣 康満 兼光
二〃 丑未 經賴卿 公廣卿 慶親卿 基任朝臣 菅原在通
三〃 寅申 光宣卿 顯宣卿 雅庸卿 爲満朝臣 源孝治
四〃 卯酉 輝資卿 資胤卿 竹丸 久修 大中臣種忠
五〃 辰戌 實[illegible]卿 兼見卿 爲經卿 隆致 宗勝
六〃 巳亥 季秀卿 時慶卿 實久朝臣 隆昌朝臣 共房

小番之事

一番 爲勝卿 雅朝卿 俊昌朝臣 季房 宣季

二〻　基孝卿　實條卿　秀直朝臣　多隆
三〻　言經　重定朝臣　實有朝臣　秀賢
四〻　永孝卿　之仲朝臣　季繼朝臣　宗信
五〻　光豐卿　實顯朝臣　通村　昌良

慶長十二年二月廿六日

相傳

〔親長卿記〕文明六年九月七日、德大寺大納言(實淳)在國(越中)、仍參內、番予代事令參者、可悅入之由被命、領狀、自今日可參也、但勸修寺大納言來十三四日番可相博云々、仍彼亞相候也、

〔宣胤卿記〕文明十二年二月十六日丁卯、今日實淳卿代、依相博晨朝參內、請取也、第二公興卿遲參、進靑侍之間退出、黃昏歸參、宣親朝臣參候之外無人、公興卿稱虫所勞不歸參、隆之不進代宿兩人也、廿六日丁丑、參內、相博之番也、今日請取第二人各不參、晝夜只一身祗候、希代事也、近臣季經卿、爲親朝臣、菅原長胤等祗候也、

番代

〔親長卿記〕文明四年十一月三日、廣橋猶不出仕參內、到今日源黃番代祗候了、　六年後五月二日、參內、自今日廣橋大納言番代祗候、

非番

〔書言字考節用集〕(九言辭)非番(ヒバン)

〔親長卿記〕文明三年正月四日、入夜參御寺、舊院(○後花園)御初七日也、依禁裏御衰日延引、夜居曉陀羅尼、人々相交僧衆誦之、(西方僧座、東方俗座)今夜參仕人々、帥、源中納言、坊城中納言、實隆朝臣、尙光朝臣、政顯、番衆十人、(○中略)每日事等番衆可承、非番之衆不可存知之由予定之、

上日制

〔令義解〕(公式七)凡京官皆開門前上、(謂第二開門鼓前也)閉門後下、(謂退朝鼓後也)外官日出上、午後下、務繁者量事而還、(謂是閉門後、而務繁者、事畢還家也、)宿衛官不在此例、

〔令義解〕(宮衞五)凡開閉門者、第一開門鼓擊訖、即開諸門、(謂擊鼓時節、可有別式、假如寅一剋擊第一鼓、卯之二剋可擊第二鼓也、諸門者、大門以外)

〈内外諸門也、〉第二開門鼓撃訖、即開大門、〈朝堂南門也、〉退朝鼓撃訖、即閉大門、會漏盡、閉門鼓撃訖、即閉諸門、

〔延喜式四十一弾正〕凡諸司官人、開門以後就朝座者、即加糺弾、但參議已上左右大辨八省卿弾正尹不在弾限、

凡諸司官人等、未閉門以前下去、宜嚴糺之、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿三年十二月丙午、勅、自今以後、左右大辨、八省卿、弾正尹、准參議已上、聽開門以後就朝堂、

〔九條年中行事〕申政時〈見貞觀式、〉

二月巳一點、自三月至七月辰三點、　八月巳一點、自九月至正月巳二點、

〔延喜式十一太政官〕凡辨官申政時剋、自三月至七月辰三剋、自九月至正月巳二剋、二八兩月巳一剋、

〔拾芥抄中末〕申政剋限、

二月八月巳一點、自三至七辰三點、自九至正巳二點、〈已上外記、〉

自二月至七月辰一點、自八月至正月辰三點、〈已上辨官、〉

自三月至七月辰三點、六月巳一點、自九月至正月巳二點、〈已上檢非違使、已上諸司政剋限、〉

自正〈三〇闕〉月至八月辰四點、自九月至二月巳二點、〈已上見藏人式、〉

〔洞院家部類十一〕結政初參〈○中略〉

休日〈六日、十二日、十八日、廿四日、晦日、〉

要日〈○五日、十一日、十七日、廿三日、廿九日、○休日朔日、晦日參着者侍闕日、〉

最要日〈○九月十一日、奉幣日、爲例幣、仍以奉幣前日爲最要日、伊勢奉幣、幷臨時奉幣等准之、此日參着得二日、六月十日、十二月十日、幷閏上、〇豐明大嘗會日、〉

〔中右記〕寛治八年〈○嘉保元年〉六月廿九日、早旦參結政所、是依爲要日也、　七月十九日、明日奉幣也、仍今日要日也、　廿三日、要日之上可有政者、仍早上參結政、　九月廿一日、從内退出之次、先依爲要

日參結政、廿八日、依爲要日、早旦參結政、

〔續日本紀二文武〕大寶元年五月癸酉朔、太政官處分、王臣五位已上上日、本司月終移式部、然後式部抄錄申送太政官、

〔續日本紀三文武〕慶雲四年五月己亥、兵部省始錄五衞府五位以上朝參及上日、申送太政官、

〔續日本紀十聖武〕天平二年六月甲寅朔、太政官處分、自今以後、史生已上上日數、每月讀申長官、如長官不參、讀申大納言、

〔類聚符宣抄十〕五位已上上日事

右右大臣宣、太政官所送五位已上上日、自今以後、宜通計內裏上日、勿獨點朝座上日而已、即日面召式部大丞藤原友人宣告了、

延暦十一年十月廿七日

一五位已上朝參上日、自今以後、宜式部兵部二省依例勘錄、即各收省、更不煩申、

一親王雖不就朝座、猶給上日、

一觀察使已上上日、宜每月奏聞、

右大臣宣、奉勅如件、

大同四年正月十一日

去大同元年十月廿九日上宣偁、參議已上不著廳座、雖侍內裏、莫給上日者、而頃年之間、漏此宣旨、依去延暦十一年十月廿七日宣旨、通計內裏上日行之、今被大納言正三位清原卿宣偁、見大同元年宣旨、有理遵行、自今以後、須就行事侍候內裏隨以行之、唯無行事者、依大同宣旨行之、

天長九年三月廿一日　大外記島田朝臣清田奉

〔延喜式十八式部〕凡諸司每月二日、送五位以上前月上日、其參議以上及少納言、並聽通計內裏上日、皆收

許省不可奏聞、

〔延喜式十九式部〕諸司申送朔日見參人數、

毎月朔日〔正月三日〕諸司總計見參初位以上長上番上、造簿各令主典申送省、〔縱使位階上亦同、但雜色解由使不在此限〕其日平旦、省掌於門外計列諸司、輔已下就座、省掌引諸司入、且稱容止、就版位、立定其中一人進申云、司司申久、刀禰〔毛〕數〔毛〕札進〔止〕申、丞命曰、進之、諸司共稱唯、隨簿多少、二三許人分取進置錄傍、復本列、錄總計其簿讀申、輔判命之、錄俱稱唯、丞亦命之、諸司俱稱唯、自上退出、省掌且稱容止、

諸司送五位以上上日、

毎月二日〔正月三日〕諸司各計五位以上前月上日、造簿令主典申送省、〔太政官上日下符於省、以下諸司准此〕令專當史生抄、諸司五位以上朝座上日、及遲參、點數、集會、請假等簿、置丞座前、其日平旦、省掌於門外計列諸司、輔已下就座、省掌引諸司入、且稱容止、就版位、立定其中一人進申云、司司申久、五位〔利乃〕已上〔乃〕日數〔毛〕文進〔止〕申、丞命曰、進之、諸司俱稱唯、以簿傳授、在最下一人總取、就錄後進之、復本列、諸錄分取、依文讀申、若有所違者、丞輔問申、輔隨判令改、命錄曰、返給、錄稱唯、命曰、參來、被勘問者稱唯、進受退出、讀申已訖、輔判命之、錄俱稱唯、丞亦命之、及省掌引退、亦同前儀、

〔延喜式十三大舍人〕凡毎月一日、官人前月上日、幷番上裝文〔大月料自來廿四解、但小月減二入外、〕上番門籍文申省、〔正月者二日、但朝拜止日知例、〕同日有衞府番奏、舍人叫門、其詞曰、番事申給〔止〕、左近衞少將姓名等門候〔止〕申、〔下番亦同〕

○按ズルニ省ハ中務省ヲ云フ、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡出居侍從及內記上日、於陣給之、其內記聽度常寢殿階下、

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、奉勅、少納言外記上日、隨其參人、注衞前衞後等之由、加少納言署、自今以後宜經奏聞者、

天慶九年十一月十一日　　大外記三統宿禰公忠奉

月奏

〔侍中群要一〕式抄得夕不得日事

齋院垣下、平野祭參、其中一人若歸參時剋相叶〻、給夕不得日、

不得夕事

御物忌中、夜參籠之人、及丑一剋昇殿、雖人日記宿侍不得夕、但近代皆得夕云々、又明日可有神事齋、而服者失而宿侍、理須退出、仍不給夕、〇中略

家抄明日可有神事齋而輕服人失宿侍、理須退出也、仍不給夕、

忌日可退出、仍雖候不給夕云々、

〔禁秘御抄 中〕一藏人所雜色

同衆員數廿人也、〇中略或給所々公役、又上日給之、

〔小野宮年中行事 正月〕元正太政官進參議已上上日事

弘仁太政官式云、毎月晦日勘錄、少納言來月一日進奏、又錄參議以下及少納言上日、送弁官、參議已上上日一紙、少納言外記上日一紙、少納言進付內侍所奏之、弁史上日官史生同進之、又左近陣錄出居侍從內記等上日、付內侍所奏之、校書殿進物所皆付內侍所奏之、

同日諸衞進當番歷名事

弘仁近衞式云、毎月一日十六日、具錄當番歷名、次官以上奏進、若無判官又奏、餘府准此、

〔延喜式 十一 太政官〕凡毎月晦日、太政官錄參議以上上日、少納言來月一日進奏、又錄〇錄下恐脫參議二字以下及少納言上日、送辨官、辨官總修符、二日下知式部、

〔延喜式 十二 中務〕凡侍從幷內舍人上日者、毎日丞錄率內舍人向侍從所給之、其籍者公卿未著座前置之、但雨泥休假等日、令史生注見直、

〔小野宮年中行事 正月〕三日奏去月月奏事

早朝藏人奏殿上及所陣々上日、他月皆效此、

〔年中行事秘抄 正月〕三日奏去月上日事

他月同之、近代官外記月奏、去年十二月、幷今年正月等月奏、二月奏也、

拾遺抄云、一日云々、(或注二四日一)弘仁式、毎月朔日錄鎰、少納言毎月四日進奏、又錄參議以上(日〇以下誤脫)(上日)少納言上日、辨官又參議已上一枚、少納言外記一枚、辨史一枚、(已上付內侍所、)左近陣進出居侍從內記上日文、(付內侍所、近代不進、)所々上日(殿上、藏人、所衆一結、)藏人奏之、(不下、納殿上)六陣、內御書所、御厨子所、(已上一結、近代御書所御厨子所二結、)小舍人內覽之後、下所衆所、御書所、(不進、近代也、)

〔西宮記 二月〕月奏

毎月一日、就內侍所、奏去月參議已上上日一枚、少納言外記一枚、辨史上日一枚、左近陣進出居侍從內記上日、(已上付內侍所、)殿上藏人所、及所々諸陣月奏、(已上藏人奏)

〔北山抄 一正月〕毎月一日奏去月上日事(外記結參議已上及少納言外記上日、少納言付內侍、辨官結辨史上日付之、左近陣結出居侍從內記等上日、校書殿進物所侍付內侍奏之、)

〔侍中群要 六〕月奏事

(家)藏人依籠奏之、或依臈次、或依舊次第、一勞所定也、當籠藏人仰出納小舍人、(又有藏次)令催成之、月朔三箇日以前奏之、但成奏藏人先加署、次從下臈加署名、又加署之時、慥可見、又等第文、(夏六月、冬十二月)當其月相並月奏所奏也、

殿上(加侍臣)　藏人所　御厨子所　瀧口　樂所(或無)　小舍人　六衞府　御書所(內外)等也、殿上陪膳、藏人所、瀧口、小舍人一結、御厨子所、御書所一結、六陣一結、合三結也、即取合一結、(天)入柳筥令持小舍人、先參關白殿內覽了返給、次參御所、(副文)奏覽了返給、若有仰ハ結申、(四位朝臣、五位以下只名而已、去月上日加侍云々、但不謂朔、當番藏人等署所云々、)近代多不結申、只奏了來殿上取裏紙、下給出納之、但奏覽之時、小舍人

上日ハ止之不奏、又別當不給署直下出納、

放紙事（家）

今月朔朝、去月放紙之時、計日夕注付之、但注官名耳、某人（日若干、夕若干、）若頭中將頭弁如此、皆注官名也、

裏書樣（上中下三枚也）

放紙上（年月日）　放紙中（年月日）　放紙下（年月日）　下殿放紙（年月日）　上放紙（年月日）　中放紙（年月日）

抑下於假文之人、若假殘猶在者、隨其數移付今月之放紙面了、

月奏事

殿上（加階）　藏人所　御厨子所　瀧口　樂所（或無）　小舍人　六衞府　御書所（內外）等也、

殿上陪膳藏人所瀧口小舍人、（一結）御厨子所、御書所（一結）六陣（一結）合三結也、即取合一結入（天）柳筥、令持小舍人、先參關白殿、內覽訖返給、次奏聞插文刺、參御在所奏、覽了返給、若有仰ハ結申、四位ハ某朝臣、五位以下某云々、右去月上日如件云々、但不讀別當頭藏人等署所、又小舍人上日ハ止而不奏、（直下出納、）又別當不給署云々、又月奏等奏下之時、取裏紙下給出納、

月奏

月奏藏人依巡奏之、或依臈次、或依簡次第、件事一臈所定也、當巡藏人仰出納小舍人、（出納小舍人又有巡、）令催成月奏、先加署名、後從下臈加名、加署名時、愼可見、月奏人々上日陪膳役供等度數、能々可見、人人署名了、後取加諸陣所々奏、奏聞、六月十二月加等第文奏聞、奏聞後、下藏司令催絹分給男女房、但近代男房料以返抄充行、女房料以返抄雖注成渡、藏人以返抄成副所牒、宣其國令催、出納小舍人等第文下穀倉院、抑女房等第文女史所進也、注上日不付等第、近代殿下令定等第給、雖無下等、至于女房有下等給、須皆有例數、諸陣所々月奏有紕謬失錯、能々可糺問之、

等第月（夏六月上等五匹、中等三匹、下等二匹、冬十二月上等六匹、中等四匹、下等三匹、男無下等云々、但藏人所下等三匹三丈、）

殿上藏人所內侍所等上日等第也、相並月奏奏下、（侍臣下、內豎、出納、小舍人下、[illegible]）

月奏事

藏人任御次、執當此事、出納御藏小舍人等各有其籍云々、六衞府、（左右近衞少將以上、以爲上下、左右衞門、左右兵衞、督佐以上、以爲上下、）

[illegible]上下、御厨子所、（[illegible]別當[illegible]、以爲上下、）一本御書所、（[illegible]上[illegible]別當、中別當、[illegible]所、以爲上下、）御書所、（[illegible]以下、）內御書所殿上、（[illegible]別當[illegible]之、以爲[illegible]、）

（以爲上下、）

巳上不奏所別當

陪膳、（[illegible]、及不[illegible]人[illegible]別當[illegible]之、以爲上下、[illegible]）小舍人、（[illegible]別當[illegible]藏人[illegible]所以別當[illegible]、不[illegible]所[illegible]）

凡了三日以前奏聞、但十二月六月[illegible]等第書奏之事、具見式幷所例、（在六月[illegible]）

〔侍秘御抄上〕一每月事（[illegible]事等外）

請陣月奏

御覽之外、無指御作法、（[illegible]月[illegible]人[illegible]之）

〔類聚符宣抄十〕史生日[illegible]鄕明

從二位行大納言兼民部卿藤原朝臣在衡宣、件人[illegible]式所、隨書寫之役、暫停參[illegible]本局、以從彼所渡上日、可入月奏者、

康保四年八月廿七日　　　　權少外記坂上望城（奉）

〔朝野群載（五朝儀）〕月奏

藏人所

正六位上行主計權助□□時明　上日尢　夜尢　――――　光榮　上日　夜

雜色正六位上　　重家（略）○中

治部少丞正六位上爲文（略）○中

蔭子正六位上〔○中略〕
蔭孫正六位上〔○中略〕
出納正六位上行縫殿權助卜部宿禰爲親
正五位上　惟宗朝臣光政
御冠師正六位上行右兵衞少志〔○中略〕
右從₂去七月一日₁迄₂于晦日₁卅ケ日、上日幷夜如₂件₁、
長徳元年八月一日　藏人蔭孫正六位上行橘朝臣――――
――――
――――
――――
――――
藏人頭――――
別當――――
藏人所〔闕口〕
內舍人―――――有延　上日　夜〔但廿九〕――――　――――
右――――如件
長徳元年八月一日　藏人蔭子――――
――――
――――
――――
藏人頭――――

別當――――

藏人所

小舍人

定額從七位上中臣朝臣時正　上日　夜〇中略

定外――――

右――――如件

長德元年八月一日　　出納正六位上惟宗朝臣

正六位上――――

別當右大臣從二位藤原――

藏人頭――――　――――

――――　――――

〔小右記〕寛弘八年七月十三日甲申、一本御書所月奏、一昨持來、而不署返給、依有所疑、時代改後、可有如舊之宣旨、召問案内、預事人正光書中云、一本御書所例不聞也、内御書所若有如舊之宣旨歟、仰尋例可申之由、今朝重參來、令申云、年々月奏案悉紛失、不能尋見、藏人致類差小舍人頻有催仰、爲之如何者、令仰云、依舊主之宣旨不可隨署、新主亦被下如元之宣旨之後可署歟、他事如之計也、所々別當宣旨相同歟、尋見前例可一定也、以大外記敦頼朝臣令問史等、宣理云、藏人所方事也、官中不知、但有新宣旨歟、諸寺諸司所々別當書一紙被下官底者也、何不知一所事哉、宣理似不知前跡、抑件定文撰出自文書中、代改之後、新有其定、下官之案適相見、亦見清涼抄、至今被下宣旨之後可署月奏、　十七日戊子、府生仲遠持來月奏、令申云、一日藏人致類仰府生亮範云、今月月奏不可敷直闕、依最初者亮範不申其由、然而依仲遠傳申、不付直闕、假加署了、

〔本朝世紀〕治暦四年四月卅日辛未、外記内覽月奏、關白〇藤原頼通仰云、暫可令候局者、□後諸卿參仗座、雖可有事定、空延引、

〔朝野群載五朝儀〕月奏

藏人頭修理左宮城使正四位上行左中辨源朝臣重資　上日廿七　夜廿

正四位下行式部大夫藤原朝臣正家　上日无　夜无

正四位下行太皇太后宮權亮源朝臣道時　上日无　夜无

正四位下行左馬頭兼中宮權亮源朝臣師隆　上日十一　夜七

藏人頭正四位下行右近衞權中將兼丹波權守藤原朝臣顯實　上日廿七　夜廿四

正四位下行左馬頭藤原朝臣兼實　上日无　夜无

正四位下行修理權大夫兼東宮亮尾張守藤原朝臣爲房　上日五　夜二

正四位下行兵部權大輔兼安藝守藤原經忠　上日一　夜一

正四位下行近江介藤原朝臣有家　上日无　夜无

正四位下行內藏頭兼播磨守藤原朝臣基隆、上日十一　夜五

正四位下行越前守兼中宮權大進藤原朝臣仲實　上日六　夜六

修理右宮城使正四位下行權中辨兼近江守中宮大進源朝臣時範　上日一　夜一

正四位下行左近衞權中將兼備中介藤原朝臣俊忠　上日廿　夜十七

正四位下行左近衞少將兼春宮權亮藤原朝臣實隆　上日无　夜无

正四位下行右近衞權中將兼美作權介藤原朝臣定輔　上日廿　夜十五

從四位上行木工頭源朝臣俊頼　上日十九　夜十五

散位從四位上藤原朝臣宗信　上日无　夜无

從四位上行右近衛權少將兼備中介源朝臣師時　上日廿八　夜廿四
從四位上行右中辨藤原朝臣長忠　上日十八　夜十一
從四位上行左近衛權少將兼近江權介源朝臣師重　上日十九　夜十四
從四位上行左近衛權少將兼備前介源朝臣顯國　上日廿一　夜十一
散位從四位下源朝臣成宗　上日十三　夜七
散位從四位下源朝臣有實　上日廿　夜十六
散位從四位下源朝臣家俊　上日廿五　夜十七
從四位下行侍從源朝臣師親　上日五　夜二
從四位下行加賀介源朝臣家定　上日十　夜六
從四位下行備前權介源朝臣顯重　上日一　夜无
從四位下行右近衛權少將兼美作守藤原朝臣通季　上日无　夜七
從四位下行右近衛權少將兼播磨介藤原朝臣信通　上日无　夜无
藏人右少辨正五位下兼行中宮權大進藤原朝臣爲隆　上日廿九　夜廿七
兵部大輔正五位下源朝臣雅兼　上日廿三　夜十四
民部大輔正五位下源朝臣行信　上日无　夜无
正五位下行刑部少輔藤原朝臣懷季　上日无　夜无
藏人正五位下行左兵衛權佐藤原朝臣宗能　上日十九　夜十四
正五位下行右衛門佐兼出雲守藤原朝臣家保　上日十九　夜五
正五位下行侍從藤原朝臣家隆　上日十　夜八
從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣實明　上日无　夜无

從五位上守民部權大輔兼備後權介藤原朝臣忠長　上日十一　夜七
左兵衛佐從五位上源朝臣能明　上日无　夜无
從五位上行侍從藤原朝臣忠宗　上日一　夜无
右兵衛佐從五位上源朝臣顯親　上日廿　夜十
從五位上守右近衛權少將源朝臣雅定　上日七　夜三
藏人正六位上行中宮權少進藤原朝臣仲光　上日卅　夜廿八
正六位上行左衛門權少尉平朝臣知信　上日廿七　夜廿五
散位正六位上大江朝臣廣房　上日廿七　夜廿五
正六位上源朝臣有忠　上日四　夜四
小舍人藤孫藤原朝臣忠通　上日无　夜无
右從去十二月一日迄于晦日卅ヶ日、上日幷夜如件、
　長治三年正月一日　藏人頭正四位下行右近衛權中將丹波權守藤原朝臣顯實
　　修理左宮城使正四位下行左中辨藤原朝臣重資
　　別當從一位左大臣源朝臣

〔台記〕久安三年六月十七日己酉、在仗座之間、參議書(定文)、召大外記師安朝臣於軾仰曰、(略)〇中奏去月上日不可遂三日事、(總繼)於太后(崇德居)〇(聖子)御在所、奏三藏人所例(當賀之後)召範家仰曰、(略)〇中近代奏去月上日及晦、緩怠之甚也、自今而後、必三日可奏之、
〔顯時卿記〕久安五年八月卅日乙卯、今來兩月不可奏月奏、侍所著到許可書之由被仰下畢、先例雖不分明、殿上始以前、以何可書月奏哉、且人々皆所被申也、
〔續修東大寺正倉院文書十六〕皇后宮職移圖書寮文(書生上日夕寫紙等)

皇后宮職移　圖書寮

大初位上船花張善　上日壹伯拾玖　夕肆拾

寫紙肆伯參拾張

少初位上安子見公　上日壹伯陸拾壹　夕伍拾

寫紙漆伯肆拾肆張

少初位下辛金綱　上日壹伯參拾漆　夕肆拾伍

寫紙陸伯壹張

少初位下秦豐竹　上日壹伯參貳　夕參拾漆

寫紙伍伯漆拾玖張

右起去年八月一日、盡今年七月卅日、上日夕并寫紙等如件、注状故移、

天平三年八月十日　正八位下大屬勳十二等內藏伊美吉

（續々修東大寺正倉院文書二十四帙五）皇后宮職移　式部省

少初位上[illegible]臣縄麻呂　上日肆拾伍　寫紙二百二枚、

右起去三月廿四日、盡五月十日、上日并寫紙等如前、故移、

天平十一年八月十四日　從七位上行大屬大藏伊美吉

從六位上行少進權左衛士大尉井上伊美吉

日給簡

（名目抄）日給簡

（侍中群要 五）定調　簡

（禁秘御抄 上）殿上

簡有袋

〔禁秘御抄階梯上〕按日給簡也、長五尺三寸、弘上八寸、下七寸、厚六分、袋表雨面、裏平絹、有大字銘、其下三堺書殿上人官位姓名、上四位、中五位、下六位、

〔禁秘御抄上〕臺盤所

三間、北間方朝餉敷黃端疊、東倚子、其南女房簡、入袋辛櫃、朱塗也

〔禁腋秘抄〕清涼殿

奧ノ疊ノ奧末ノ方ニフダヲ立、殿上人ノ名ヲ三段ニ誌タリ、上ハ四位、中ハ五位、下ハ非藏人ナリ、名ノ下ニ紙ヲ押テ上日ヲ付ク、放紙ト云、夜ハ帋ニ入、晝ハ帋ヲタヽミテ机ノ下ニ置、

〔空穗物語初秋〕中將の朝臣きのくにの緑には、むすめをこそはえたれとて、御まへなるひ。た。ま。ひ。の。ふ。だ。に、內侍のかみになすよしかゝせ給て、それがうへにかくなん、

めのまへのえだより出る風の音はかれにし物とおもほゆるかな

〔侍中群要一〕日給事

日給雖不奏文書、隨先達示可注之、貫首被候ハヽ、縱雖不被逢日給、必可奉之、正剋限時、至于貫首者奉稱、自餘人可隨氣色、

辰巳雖當日次第、至于少字書傳也、假若干之數隨假文恐申人不日給、至于出仕之日引垂、已丑如此、新任人□已假使十日補人、前九日引垂日給也、假令バ以二十日假文出廿日假、十引垂、放紙之時注假文、次月一日又注之、後參者給日、不參者可注不、皆可引垂也、

假人假十日平、半減時不改十字、引垂五日日給、放紙時注五、遣假者不書不日給、只引垂、參入之後可書日不、

未三點封之、上古說、未二剋云々、此以前參人皆預日給、但供朝膳人、隨時雖封後可直改不字歟、但竟上日藏人不直改ハ、不參人違波書不字、獻假文人ハ付假若干、滿日以墨引垂、恐申人不書不字、被免被召日給日、以墨引垂、但封後奈波耳明日可改不字歟、是不參時事也、凡簡封了ハ天入袋倚立壁、正月三箇日幷御物忌及晚封之、不入袋以面對壁立

之、諸節會行幸還御之後、封之入袋、仁王會御讀經御佛名之間、隨曉封之、又入袋、參籠御物忌之人、於殿上口乃立蔀邊令知參籠之由、新藏人未被免宿裝束以前ハ、束帶參籠及丑剋、并殿置給夕、不可入、日記宿侍紙、觸他所公役、可給日夕人、或差見參、或錄其事、後所給也、

可給殿上并所日事

侍永隨讀書者、日給朔限者、自正月至八月辰四點、自九月至十二月巳二點、今案殿上藏人把筆給之、所者出納於藏人所給之、○中略

日給事

日給殿中之時、請無書左右空白紙而已也、有召之日、初給日許歟、空紙所口子也、

(式抄)日給事、未二點參宿侍給日、三剋封之、(二點參闕、又所)○中略

簡事

凡簡ハ、正月三箇日、及御物忌曉覽封之、不入袋、只打返立、(以面向壁立也)

又節會行幸之日、還御之後封了入袋、

又仁王會御佛名之間、曉覽封之入袋、

又移御他所之時、行幸之後、至其所封之入袋、○中略

日給從里第參上

日給從里第參上藏人不可封簡、猶從朝餉人退出、又無可封人、隨形可封、同簡日給又如此、御物忌中夜參籠、并候上宿等之類、雖知朔限之間不以候殿上人、可令開也、是又可隨形勢之、雖封後蒙召參人之人、必問日給、爲維摩勅使、弁歸參而奏見參等後、給日九夜七、(給節會日可准之)會參之人又如此、(但可尋見)

(祭日、勅使)春日祭參下氏人、又給日三夜二、(弁、氏人、勤公役、給、餘宮使不在此限)云々、他祭々入見參皆給、

(侍中群要六)故實

朔朝去月放紙了　注官名也、大略如此、ム人日若干夕若干　即裏書云、放紙云々、年月日上放紙年月日中放紙年月日下放紙上其年月有中下近代之說也、

放紙

朔日早旦、計去月日夜也、其後下給小舍人令押紙於簡日給

書體

〻〻〻〻頭中將日若干夕若干假五日及畫書其名、自餘書官也、其體如陪膳記、

裏書體

放紙上長曆三年二月三

有中下

又說放紙長曆三年二月三上

中下同前

假人縱廿五日請假、十日簡摩注十日、放紙注假六殘四可書今月簡也、

〔蓬萊抄〕殿上人、故實、殿上之簡封後、參殿上人、硯水未乾以前參入人給日云々、又簡封之後ナレドモ供膳人給日云々、夜陰之時、臥下侍不給之、若殿上長押用枕者給之、又遂御物忌外宿御使承人給日、

〔禁秘御抄下〕御物忌

不上小蔀裏近簡

〔日中行事〕上のおのこども、殿上にて臺盤をこなふ、あしたのほど日給よりさきは、皆とのゐ姿なり、○中略臺盤はて丶、おのこども各とのゐ裝束をあらたむ、藏人まちにおりてかへりまいる、御倚子のおほひをとりて榑の間にかく、日給の事有、袋に入たる簡をとり出て、もとのま丶に唐櫃のそばにたつ、袋はた丶みて簡のまたにしく、簡の三段に名の下にをしたるかみをはなちがみと

いふ、その簡に名の下にまいりたるものをば日をかく、午とも未ともかくなり、宿したるをばそのかたはらに夕とかく、藏人是をつとむるなり、〈○中略〉殿上の簡ふうず〈簡にいるゝをいふなり〉、此後とのゐすがたの人はゞかりなし、〈○中略〉

毎月一日は、藏人殿上の簡のはなちがみをしかへて、ふるきはなち紙のすゑ折かへしたるをのべて、ひと〴〵の上日の數をかく、三日前にまゐるして奏するなり、公卿ならびに少納言外記は大外記まゐるして奏聞す、辨官は史是をそうす、大かた朔日ならびに重日にはあしき事を奏せず、式に見えたり、

〔古今著聞集〈三公事〉〕一條院御時、京極にて殿上の日給にはあふべきよし、起請有けるに、堀川右大臣〈頼宗○原作宗頼〉殿上人にておはしけるが、片足に履をはきて、身をば殿上のまへの立蔀にかくして、履はきたる片足ばかりを指出て、藏人に見せられたりければ、かやうの事嘲哢に似たりとて、起請やぶられにけり、

〔殿暦〕嘉承元年正月九日壬寅、今日依吉日、侍藏人所分始、藏人簡新造、件簡袋上書、去年十二月廿五日定書之、〈内記如之〉本侍簡渡侍藏人所、障子上〈ニ〉立臺盤二、〈一四尺、一八尺〉依故大殿例也、藏人所四位職事、〈頼實、重資、頼隆〉侍所別當、〈顕隆、顕資、成實等也〉、各著束帶、申慶、

〔中右記〕天承二年〈○長承元年〉正月十三日乙巳、頭辨送消息云、去年比内竪所燒、於内竪私宅燒失畢、而相尋先例之所全不見也、但時簡杭紛失之時、上卿參陣被勘日時、仰内匠寮令作、御書所預能書人書其銘也、依件例被行如何、予〈○藤原宗忠〉返送事云、件事先例不見、仍難謚左右、但准使時杭例被行可無其難也、

十四日丙午、今日新中納言參仗座、被勘中内竪所簡可被試日時、〈今日〉右中辨奉行、召修理職材木、給内匠寮令作、少内記書之云々、雖無先例、准時杭云々、

〔台記〕久安三年六月十七日己酉、入和德門、著左仗外座、○中略藏人勘解由次官範家來、傳勅曰、補藏人所別當者、余拜之、○中略不付殿上簡事、（後日範家語曰、藏人所別當事、範家以內侍宣仰出納、依近例不書下也、）藏人所別當可付殿上簡之由、見寬平遺誡、而勘小一條大臣（師尹、康保四年十二月、）御堂（長德元年九〈九一本作四〉月）京極殿（治曆四年六月、此三人皆藏人所別當、）日記、不記付簡之由、勘二代御記、貞信公、吏部王記、無所見、西宮十六卷載寬平遺誡、同十卷同之、但經賴注云、近代不付、北山抄無所見、一昨日使監憲問伊通卿、曰、（件人多見我朝古記、）察人所行、不從近例、好行正法、是故欲從遺誡之文、而未詳付簡之人、爲之如何、卿報曰、雖有遺誡之文、無其文者不可付歟、就中康保四年初參殿上日記頗委、而不記付簡以之案之、古者雖有遺誡之文、不從用歟、余從此命、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉

擇申可被造女房日給簡日時

　今月十九日丁酉　　時申

可被書日時

　同日丁酉　　時申

久安六年正月十九日　　雅樂頭安倍泰親

擇申可被造侍日給簡日時

　今月十九日丁酉　　時申

可被書日時

　同日丁酉　　時申

久安六年正月十九日　　雅樂頭安倍泰親○中略

二番

一番

會議所日給

子丑寅卯辰巳

蔭子正六位上源朝臣行子、少將、
蔭子正六位上藤原朝臣信子、大夫、
蔭子正六位上藤原朝臣忠子、少納言、
蔭子正六位上藤原朝臣顯子、近江、
蔭子正六位上藤原朝臣憲子、越後、
蔭子正六位上藤原朝臣資子、丹後、
蔭子正六位上藤原朝臣保子、弁、
蔭子正六位上源朝臣成子、北殿、
蔭子正六位上源朝臣伊子、中將、
蔭子正六位上藤原朝臣口子、信乃、
蔭子正六位上藤原朝臣經子、大進、
蔭子正六位上藤原朝臣範子、筑前、
蔭子正六位上藤原朝臣盛子、肥後、

午未申酉戌亥

蔭子正六位上藤原朝臣實子、洞院、
蔭子正六位上藤原朝臣能子、大納言、
蔭子正六位上藤原朝臣敎子、堀川、
蔭子正六位上藤原朝臣賴子、右衞門督、

臈子正六位上中原朝臣達子、平度女乃、
臈子正六位上藤原朝臣兼子、佐々礒石、
臈子正六位上藤原朝臣知子、松加江、

久安六年正月十九日

侍所日給

簡入兩面袋

散位從五位下藤原朝臣顯方
刑部少輔從五位下藤原朝臣賴方
散位從五位下藤原朝臣盛憲
散位從五位下藤原朝臣憲親
散位從五位下藤原朝臣經憲
勾當蔭子正六位上藤原朝臣憲賴

裏書樣

散位従五位上藤原朝臣爲經
正六位上行治部丞中原朝臣親賴
正六位上内藏少允藤原朝臣忠親
正六位上行左兵衛少尉源朝臣行實
長
藤子正六位上源朝臣滿義
藤子正六位上藤原朝臣仲賴
藤子正六位上宮道重能
正六位上源朝臣宗隆
正六位上紀朝臣口綱
正六位上高階朝臣定家
正六位上藤原朝臣光吉〇吉一本作言
正六位上紀朝臣久光

久安六年正月十九日

（兵範記）仁安二年九月卅日甲午、早旦陰陽頭在憲主税助時晴參藏人所、仰藏人文章得業生光綱、令勘定臺盤所御倚子女房簡等日時、次藏人持來勘文、〈貴主不着藏人所、令侍六位也、〉次下官持參殿下、〈○藤原基房〉覽之、御歸參下、給藏人、令下知出納清重、即令造始之、

女房簡板召木工寮、令內匠寮令造調之、寸法如殿上簡、女房位階姓名等篆文用本體、其外少々不審中、女房、以民部大夫三善爲雅令書之、銘兩面並裏紺等召內藏寮、於藏人所令造調之、寸法同殿上、大字銘爲雅同書之、晩頭每事調此、置大內臺盤所了、

（山槐記）治承四年二月廿一日癸卯、今日有讓位事、〈○中略〉殿上藏人所臺盤所簡作改之、頭弁兼內々仰舊主〈○高倉〉藏人通業、出納盛俊等、木工寮可造進之由下知之、後令召設[illegible]內藏寮、召民部大夫爲雅、令書簡、

（三長記）建久九年正月十一日己酉、今日有御讓位事、〈○中略〉今夜付簡女房、

掌侍從五位上高階爲子　正六位上藤原憲子

命婦正六位上藤原公子　正六位上藤原孝子　正六位上平　忠子

正六位上藤原則子　正六位上源　清子　正六位上藤原親子

正六位上藤原光子　正六位上高階清子

藏人正六位上藤原繁子　正六位上藤原爲子　正六位上賀茂重子

正六位上賀茂貴子　正六位上源　俊子

裏簡

正六位上藤原宅子　正六位上藤原保子　正六位上平　統子

正六位上藤原尋子　正六位上藤原貞子　正六位上源　貴子

正六位上源　順子　正六位上藤原滿子　正六位上藤原諸子

正六位上藤原彙子　　正六位上藤原行子　　正六位上藤原長子

女房簡書樣　面書樣也

臺盤所日給

一番　子寅　典侍、、、　命婦、、、

辰午　掌侍、、、　藏人、、、

申戌　、、、、、、、、、、

二番　丑卯　上﨟女房等付裏也　正六位、、、

巳未　、、、

酉亥　、、

年號月日

〔藏人盛良記〕承元四年三月廿三日辛亥、今日陰明門院（○土御門后藤原麗子）殿上始也、予未剋著束帶初參、暫候下侍、殿上人被參集、殿上簡先可入押敷紙也、而未書出之間、遲々不敵也、放紙料尋常紙兩三枚所懷中也、召小舍人令押之也、殿上饗主殿司居之、申剋右大將以下人々著參、（中略）○次主典代持參吉書、相具硯筆、院司取之召藏人、予參進別當ノ前、可持參之由被命、仍染筆相具持參右大將前、加判返給、著座公卿別當次第加判、了返給主典代了、次立簡、（今度如此簡書違之故也、件簡舞踏以前可立之也、）入袋持參、予取之持袋立之如常、次公卿可日給之由被仰、仍予令日給、其儀如簡封歟、而准日給之作法、横敷居、先召主殿司、二音硯ヲ寄取簡日給、但物忩之間不押放紙、仍氣色許也、如本立之起座了、件放紙如元可令押也、今度次第違亂不可說也、（中略）○抑不簡封一﨟ノ失也、但古主殿司簡ハ不封之由云々、臺盤如常、事了簡封了、其後改裝束上伏也、以合子爲枕者直臺盤、主殿司存知也、今日儀大概如此存知之間、依有子細、有次第違亂等之間、每事有失遺恨々々、

〔令義解 四祿〕凡在京文武職事、及太宰、壹岐、對馬、皆依官位給祿、謂計以任日、給時祿、然則未給之閒、以理去官者、雖滿限日、不在給例也、自八月至正月、上日一百廿日以上者、給春夏祿、○中略秋冬亦如之、

凡兵衞、六月內、上日夜各八十以上者給祿、有位准大初位、無位准少初位、授刀舍人亦准此、

〔令義解 考課〕凡內外初位以上長上官、計考前釐事、不滿二百卌日、分番不滿一百卌日、若帳內資人不滿二百日、並不考、

〔延喜式 十一太政官〕凡諸司時服者、起十二月盡五月、計上日、一百廿以上、及番上八十以上、各給春夏料、○中略秋冬准此、

凡諸司馬料者、起正月盡六月、計上日、一百廿五以上給春夏料、○中略秋冬准此、

〔延喜式 十二中務〕凡女官人、自八月至正月、計上日、一百廿以上者、給春夏祿、初任上日、不滿三分之二者不在給例、其女王時服、不計上日、

本司各具錄人數及祿物色目、二月一日申送於省、○中略藏部給之、乾錄遣申給訖狀、諸司以次退去、秋冬准此、○中略

時服

神祇官卜部廿人、宮主、卜長上、量宮主、卜部在此數內、○中略

右雜有定員、侍本司解明知見定、然後給之、其自十二月一日至五月卅日、上日長上百廿以上、番上八十以上給春夏時服、秋冬准此、但木工寮、修理職、飛驒工者、春以三月、秋以九月爲限、四月十月給之、其計夜者、侍從次侍從限四十以上、者並內舍人五十以上、六衞府官人已下舍人以上八十已上、兵庫左右馬寮五十已上、自餘不須計夜、其親王及參議已上者、不在給限、

〔延喜式 二十八兵部〕馬料

從三位官廿五貫○中略

八位官二貫五百文○中略

右自正月至六月、上日上夜各一百廿五以上者給春夏馬料鍵、秋冬准此、(其事夏七月十日、秋冬正月十日與中務式部共申太政官、)

〔小野宮年中行事 六月〕三日奏侍臣幷出納夏等第文事

藏人相加去月上日奏之、但侍臣下内藏寮、出納下穀倉院、小舍人等第文、藏人直下穀倉院、又出納小舍人等夏衣服文、同直下内藏寮、(色目見所例也、)

〔西宮記 七月〕一日有官政、此日上官著官結敷、

二省(○式部、兵部、)進補任帳外記幷藏人所、給出納等第、(承和例、夏等第自正月一日至六月三十日、上日百六十日、給二十匹、百三十日已上十匹、)

〔侍中群要 六〕等第文事

案

夏六月　上等五匹　中等三匹　下等二匹　冬十二月　上等六匹　中等四匹　下等三匹

但藏人所下等三匹三丈云々、殿上藏人所内侍所(所謂大盤所也)等上日等第也、奏了男女房料下内藏寮、進匹絹分給、但近代以返抄充行、女房料以返抄成副所牒令催下文、出納小舍人料下穀倉院催給之、抑女房等第文女史所進也、注上日不付等第、近代執政人令定等第給、侍臣無下等、女房有下等、充給之、皆有例數、

〔日本書紀 持統三十〕四年四月庚申、詔曰、百官人及畿內人、有位者限六年、無位者限七年、以其上日選定九等、四等以上者、依考仕令、以其善最功能氏姓大小、量授冠位、

〔類聚國史 八十四 政理〕大同五年三月戊辰、諸國稅帳大帳貢調等使上日、令民部省勘給、若上日不滿三分之二、即奪公廨、兼不預考、其所奪公廨錄數言之、(○又見類聚三代格、政事要略、)

〔朝野群載 五 朝儀〕等第勘文

藏人所

勘申殿上多等第事

藏人頭正四位下行修理大夫兼備左中弁周防權守藤原朝臣經成
上日百七十三　夜百十一
藏人正六位上行式部少丞橘朝臣爲仲
上日百七十四　夜百六十一
正六位上守大膳亮藤原朝臣資綱
上日百七十六　夜百七十二
正六位上行左近衞將監藤原朝臣秀房
上日百七十六　夜百六十八
雜子正六位上藤原朝臣行房　□□
右依例所勘申如件
永承二年十二月一日　　出納正六位上中原朝臣義則
〔朝野群載五 朝儀〕月奏
內侍所
勘申殿上女房上日夜事
一番上
正四位下藤原朝臣芳子　少將典侍
上日六十三　夜无　上等
從五位上源朝臣繁子　源典侍
上日卅七　夜卅七
從五位下藤原朝臣顯子　宰相典侍

上日无　夜无
從四位下源朝臣義子　小馬掌侍
上日七十九　夜六十一　中等
正五位下藤原朝臣業子　小將掌侍
上日七十九　夜六十七　中等
正六位上平朝臣親子　侍從內侍
上日六十三　夜五十七　下〇下一本作上等
從五位上藤原朝臣義子　小大輔命婦
上日百七　夜十三　上等
從五位下藤原朝臣善子　宮內命婦
上日无　夜无

二番上
正五位下藤原朝臣經子　宰相御乳母
上日廿日　夜廿四　上等
從五位上藤原朝臣親子　式部御乳母
上日无　夜无　上等

一番下
從五位上藤原朝臣孝子　小將命婦
上日百六　夜百六　上等

二番下

正六位上紀朝臣忠子　式部　上日无　夜无
右從去六月迄于十一月上日幷夜如件、
永承二年十一月五日　　女史從五位上安部朝臣長子
今案等第法、夏上等四匹百廿日、中等三匹八十日　下等二匹卅日　多上等六匹　中等四匹　下等三匹　或書
云、御乳母幷三位各五匹、
博士命婦　得選五位三匹六位二匹女史謂之博士命婦、
〔除目大成抄八〕藏人所　勘申所衆三勞已上上日幷夜事
正六位上源朝臣俊貞上日四千六百六十九夕四千六百六十九、
正六位上藤原朝臣範忠上日三千五百七十一夕三千五百七十一、
正六位上藤原朝臣爲康上日三千六百夕三千六百、
右勘申如件、
元永三年正月廿七日
安元二大膳少進正六位上中原朝臣榮重藏人所
藏人所　勘申非藏色三勞已上夜勞帳事
正六位上中原朝臣榮重上日二千六百十夜二千六百十、
正六位上中原朝臣友長上日二千百十二夜二千百十二、
正六位上大江朝臣公久上日二千廿二夜二千廿二、
右勘申如件、
安元二年正月廿九日　　出納安倍賴元
闕左馬少允正六位上藤原朝臣爲元藏人勞

太政大臣上日

藏人所　勘申瀧口三勞已上上日夜勞帳事

正六位上藤原朝臣爲元、上日二千六百十、夜二千六百十、

正六位上藤原朝臣康房、上日二千六百十、夜二千六百十、

正六位上藤原朝臣宗員、上日二千六百十、夜二千六百十、

右勘申如件

安元二年正月廿九日　　出納安倍頼元

〔台記〕仁平元年二月十日辛亥、先日問大外記師業曰、太政大臣(非執政○藤原實行)毎月給廿五上日否、申未詳先例之由、今日召師業仰曰、經頼記曰、長和三年三月十六日有列見事、申見參之間、上卿答云、先例大臣被陣之時、被行彼參陣、上達部預見參、而今日大臣不被參之由云々、而何參陣之公卿載此見參哉、大夫外記敦頼申云、先例有太政大臣之時、雖不被參陣、被引彼參陣公卿預見參之列、然者當時左府、是雖不有太政大臣、作里第毎月給廿五日上、准太政大臣不異、仍准舊例所載申也者、事理相叶、仍不被重難、比據此記者、給廿五上日歟、今日師業申曰、勘外記日記承平元年十月九日記云、官奏事、在左大臣里第、仍給上日、天暦三年五月一日記云、昨日太政大臣召外記正經(○經一本作緣)仰云、年來雖不隨例務、有給上日、其意如何、申云、撿先例、天長御代(○淳仁)九條大臣(緒嗣)爲大納言之時、依病不參入間、於曹司、奉行政務、有時議問法家者、上日依彼例所奉上日也者、宣云、今不見官奏、又不行他事、何准彼例乎、稱有關白詔、猶與上日、是不甘心事也、加之今年既上致仕表、須自來月停止之者、正經奏聞此旨、仰云、雖上致仕表、已以不許、上日依舊猶可給者、正經以勅詔旨、申太相國了、彼天長元年十二月九日記云、大納言緒嗣有身病、久蟄愛宕第、今年春有勅語、令近侍宮城邊、行政務、自四月五日遷曹司居住、在太政官廚家西町、令給上日云々、雖決、仍六月問明法博士敏久、答云、雖不出官廳、在曹司、聽政事、與上日、於事無妨者、自爾一月之內、以廿五日爲上日限、是其故實也、又承平元年十月九日記云、官奏之事、在

左大臣私第(今大相府也)仍大臣給上日者、件記甚省略也、安和元年二月一日記云、去月九日大外記菅野
正統朝臣、參大相國第之次、令家司布瑠千門宿禰申云、承平元年十月九日記云、官奏事在左大臣私
第、仍大臣給上日云々、今聞食官奏、又有關白詔、依舊例、一月內可准廿五日御上日者、仰云、可進覽其
例文、即以進覽、重仰云、依舊可行者、仍自去月、每月准廿五上日、據此記者、非執政太政大臣不給已明、
加之寬治([illegible])保安([illegible])月奏注曰、太政大臣上日无、然則不可給之由所存也、仰曰、外記日記意不可
給實明、隨又先例不給之、日記月奏已以相合、所存可然、但正曆(二年)治安(元年)月奏可勘申、後日大外
記師業使少外記師直申曰、往年圖書寮營工竊取外記局文書、正曆治安月奏在其中乎、所不求得也、

(延喜式十一太政官)凡參春日祭幷興福寺最勝會及興福寺維摩會王氏藤原五位已上六位已下見役之
外、給往還上日四箇日、參大原野祭藤原氏給上日二箇日、其散位五位以上、外記錄見參歷名下式部
省、

(延喜式十八式部)凡參興福寺維摩會官人已下、幷散位五位已上、給上日五箇日、廣瀨龍田祭使亦同、參春日
祭幷維摩最勝會、散位五位已上准此、但待太政官所下名簿乃給之、

(侍中群要一)給祭使及御前等日事
家抄
諸司祭使及檢司役日不給、但內藏寮給之云々、

(侍中群要八)祈雨使事
家
藏人登向大和國丹生河上雨師社(〇中略)往還之間、給上日如恒、

(類聚國史八十四政理)大同五年三月戊辰、諸國稅帳大帳貢調等使上日、令民部省勘給、若上日不滿三分
之二、即奪公廨、竟不預考、其所奪公廨、錄數言之、

(類聚符宣抄十)史生鎌部良直
右中納言藤原山蔭卿宣、件良直執事遣使宣、始自今月五日、追給上日者、

仁和二年九月廿三日　大外記大藏善行奉

史生巨勢有野

右被大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣云、件人遣後院使、經使之間給上日者、

寬平六年六月廿二日　少外記多治宗範奉

史生石上邦雄

被大納言源卿宣云、件人遣後院使、宜給上日者、

寬平七年九月七日　少外記多治宗範奉

召使粟田太永

右被右大臣宣偁、件人就事遣使、宜准見仕給上日者、

寬平八年二月廿五日　大外記多治宗範奉

〔類聚符宣抄十〕史生秦興亮

右大臣宣、件人就事遣播磨國、宜准見仕給其上日者、

延喜六年十一月廿五日　少外記紀延年奉

〔類聚符宣抄十〕上召使異變部常雄（去年十月一日遣使、今月十五日歸京）

右大納言藤原卿宣、件人宜給以往當番上日者、

延喜十三年二月廿六日　少外記伴久永奉

上召使長背遠滿

右中納言兼左衞門督藤原定方卿宣偁件人就事遣使、還向之間、宜給本番上日者、

延喜十六年十月九日　少外記小野美實奉

缺役給上日

上召使藤原恒典

右彼中納言藤原扶幹卿宣、件恒典爲少事、發向太宰府、宜還向之間准見仕給上日者、

永平六年八月廿七日　　少外記三統公忠奉

史生大私留支

右中納言藤原師尹卿宣、件人依事遣使、宜給八十四箇日上日者、

天暦十年十二月五日　　大外記安倍衆與奉

〔侍中群要一〕依公役向途所

家抄

付公事向他所之人、雖經日數、歸參之時計日給上日夕、遣使者得夕不入宿侍、又御物忌爲御使退出、歸參候直廬、雖給夕不記宿侍云々、

〔類聚符宣抄十〕史生賀茂結鑑

右彼權大納言菅原卿宣云、件人依事令役其身、宜准見仕給上日者、

寛平九年七月十日　　少外記島田房年奉

〔類聚符宣抄十〕史生道島益麿

右大臣宣、件益麿還事役其身、宜准見仕給被役間上日百十六日者、

延喜十六年正月七日　　大外記大鹿具明奉

左大臣宣、史生大友鹿庶依事役其身、宜准見仕給上日者、

承平八年二月廿九日　　大外記菅野朝臣清方奉

〔類聚符宣抄十〕史生美努興香

右大納言藤原卿宣、件人依事令役其身、宜准見仕給上日者、

天德三年五月七日　　大外記大江遠兼奉

不參猶給上日

〔百練抄 五後三條〕延久二年十二月廿六日、供養御願圓明寺、有行幸、　三年三月十八日、行事弁以圓明寺之上日、可用結政上日之由被宣下、

〔類聚符宣抄 十〕上宣、承前月、休日雖不參、猶給上日、而自去大同四年、不聽給之、宜自今以後依舊行之、

弘仁二年六月卅日　　少外記大春日朝臣穎〇穎一本作雄歟奉

〔類聚符宣抄 十〕權中納言藤原朝臣宣、奉勅、大納言藤原朝臣〇守三雖身不參、猶賜上日、不可更收假文者、

承和二年四月廿五日　　少外記秋篠朝臣五百河奉

權中納言藤原朝臣宣、大納言藤原朝臣〇守三上日者、改四月廿五日宣旨、計參日給、但不收假文、尙同先宣旨者、

承和二年　月　日　缺失

早參

〔夕拜備急至要抄 上正月〕一元日節會

首巳下早參

元日節會可令早參給、仍上啓如件、

遲參

〔禁秘御抄 下〕召人

侍臣遲參、或稱障不參之時、或遣實撿使、稱病侍醫遣之、凡殿上人召使、藏人瀧口、藏人已下或馬部、康治節會少納言不參、以外記使部召之、藏人方馬部也、馬部召藏人有邁、乍著水干、別立參殿上口、希代珍事也、

〔類聚符宣抄 六〕大納言淸原卿宣、申政之時、少納言不參、匪侍之狀、舉申已訖、比及請印後乃參來、須先申其由、後令參入、而專輙參入、事涉不遜、自今而後、不得更然、

天長八年十二月十七日　　少外記高村宿禰武人奉

〔本朝世紀〕承平五年六月三日丙寅、上卿遲參、仍無政、

(類聚符宣抄 六)左大臣宣、少納言輔中、故障、依以遲參、請印之政常闕、本公之勤自疎、事有終始、何無隄防、弘仁十年八月七日宣旨偁、少納言不會政時、准延暦年中并弘仁九年六月例、除新勞五箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者其怠特重、宜追勞十箇日者、宮今商量、可有小懲、宜改前例、昨日直者、除勞七箇日、自餘四箇日者、然則闕直之輩、先例已重、若不改張、奈將來何、闕直之人、宜追三箇日者、

康保四年四月卅日　大外記雀部有方奉

(延喜式 十一太政官)凡興福寺維摩會者、藤原氏行事大夫、點定氏中無障之輩、即付外記、外記申大臣令參、事畢之後、取見參歴名奏聞、若有不參者、下式兵二省、五位已上不預節會、六位以下官人、奪季祿、王氏參梵釋寺最勝會亦同、

(延喜式 十二中務)凡親王以下次侍從以上、闕追儺陣者、不預元日節會、

凡供奉十二月大祓之公卿者、不可從追儺陣之不參、

(延喜式 十八式部)凡內記并內藏內匠縫部等寮、莫責諸節會不參、

凡諸節會五位以上年七十已上者、不論參不、直入見參簿、其身見參者、從便門參入、

凡諸節會可取標點定、前一日申太政官、若被點不參者、不賜當日祿、

凡內膳司解由使齋院司、莫責神祇等不參、

(延喜式 二十八兵部)凡正月十七日、五月五日、七月廿五日、三度節不參名簿移送式部、五位已上莫預新嘗會節、六位已下奪季祿、(但兵庫寮、不在此限、)

凡典藥官人并侍醫、莫責五月五日節不參、

(新儀式 五臨時)諸司諸所人不上事

若有不上人、本司本所奏聞其由、仍解却其職位補替人、但如藏人所等所々、待宣旨論申之、或殊加敉驗、有隨徵怨、

〔續修東大寺正倉院文書三十一〕砕硯繩麻呂謹啓

不參狀

右緣小兒病治、當番不參、仍具事狀、申送如前、謹啓、

天平十一年十二月一日

〔續修東大寺正倉院文書十九〕文部新成解　申不參過狀事

右依宮仕不爲進上布一端、件物進上如前、以解、

寶龜二年閏三月廿日　正八位上物部白麿

〔貞信公記〕天慶元年四月十三日、參入欲行擬階奏事、而式部輔不參、皆在如意寺、　十四日、外記公忠申云、大納言令申云、昨闕公事、式部省可被勘責之由、候氣色者、卽仰可早勘狀、

〔中右記〕永久二年七月二日、府生二人有貞、經則、常稱所勞不出仕、仍可進辭書之由、下知之處、從一日已以出仕候也、仰云、尤可然人不出仕、尤不便也、

〔本朝世紀〕天養元年正月七日己未、白馬節會也、內大臣以下參入、先權中納言重通卿被行位記請印、左少辨光忠、右少辨行通朝臣爲左右馬頭代、大臣仰外記云、少納言藤成隆、中務少輔同敦良、宜停任者、是昨日位記請印延引、今日少納言各申故障不參仕之故也、少納言師國師敎依寄書令參仕、（件兩人今度叙四位）

〔台記〕仁平元年三月廿一日壬辰、藏人資能（○能一本作長）來云、臨時祭舞人公光、陪從邦綱、申疾甚由、仰可遣實檢使之由、（藏人檢公光、出納檢邦綱、）

〔山槐記〕永曆元年七月廿二日戊戌、賴保（人○編）讀云、近日殿上番有其沙汰、不仕人五人、依院宣除籍、所謂周防守隆輔朝臣、中務大輔長重、民部大輔雅長、若狹守隆信、散位季信等也、又被問不仕之子細人四人、所謂上野守重家朝臣、大藏卿長成朝臣、式部大輔永範朝臣、左中辨雅賴朝臣等也、其沙汰尤理

也、但或依職忩劇、或朝夕祗候女院、願可有會釋之沙汰歟、只於二月以後上日、以不足十箇日、被行罪科云々、不拘多年之風儀、可依六月之上日歟、有含忿之輩云々、

〔律疏職制〕凡官人無故不上、及當番不到、若因假而違者、一日笞廿、三日加一等、過杖一百、十日加一等、罪止徒一年半、(謂官人以下、雜任以上、並同、)邊要之官加一等、(謂在邊緣要害之所、無故不上以下、各加罪一等、)

〔唐律疏議九職制〕諸官人無故不上、及當番不到、(雖無官品、但分番上下、亦同、下條準此、)

疏議曰、官人者、謂內外官人無故不上、當番不到、謂分番之人、應上不到、注云、雖無官品、但在官分番者、得罪亦同官人之法、下條準此者、謂之官限滿不赴、及官人從駕稽違、及從而先還、雖無官品、亦同官人之法、

若因假而違者、一日笞二十、三日加一等、過杖一百、十日加一等、罪止徒一年半、邊要之官加一等、

疏議曰、官人以下雜任以上、因給假而故違、並一日笞二十、三日加一等、二十五日合杖一百、三十五日徒一年、四十五日徒一年半、邊要之官、謂在緣邊要重之所、無故不上以下、各加罪一等、

〔令義解四封祿〕凡食封者、一品八百戶、(○中略)正一位三百戶、(○中略)其五位以上、(○以下略)(四位)不在食封之例、正四位絁十匹、(○中略)其無故不上二年者、則停給、(謂職分封祿之例、其職封者、不入此例、但以理解官者、職及病假之後、無給不上一年者、滿二年假令停給、其在任之官、不上百廿日者、亦不給也、)

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年十一月壬子、勅、諸司無故不上者、令放還本貫、其有位者爲外散位、无位者還從本色、(○又見類聚三代格)

〔類聚三代格八〕太政官符

諸司無故不上者放還本貫事

右奉今月五日勅、無故不上還本貫者、先已處分、如聞、省司失旨、例申散位寮者、自今以後、不得更然、放還本貫、有位爲外散位、無位還從本色、

天平勝寶四年十一月十六日〇又見續日本紀

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月庚子朔、是日百官及僧綱詣朝堂上表、〇中略詔報曰、〇中略其依先格、放却本土、無故不上之徒、悉還本司、

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、少納言無故不會申政之時、一日取前勞五日、自今以後、永爲恒例、

延暦廿四年七月廿日

弘仁九年六月十日、弁官申政之時、少納言不參、仍上宣、無故不會之徒、宜准延暦年中宣旨除前勞五箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者其怠特重、宜除勞十箇日者、大納言藤原朝臣宣、奉勅、行幸之日、少納言闕請鈴、自今以後、追前勞十五箇日者、去弘仁九年六月十日宣旨偁、少納言無故不會政時、宜准延暦年中宣旨除前勞五箇日、其昨日直者、必可會今日政、而不會者其怠特重、宜除勞十箇日者、當今商量可有小恕、宜改前例昨日直除勞七箇日、自餘四箇日者、

弘仁十年九月七日　少外記高丘宿禰潔門奉

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、奉勅、如聞比來公卿等、或不申故障、或不進假文、因茲外記之政、常致闕怠、宜申此由事會重然者、

仁和二年六月二日　少外記紀有世奉

〔河海抄二夕顏〕亥一剋侍臣名對面、起自延喜元年同亥一剋侍臣奏之後、瀧口武士名對面事、延喜九年正月廿日藏人源揚宣旨云、候瀧口輩、三ケ夜已上無故不參、早預著到、宜待後仰矣

〔貞信公記〕天慶元年十二月十八日、中使信明來云、去十日夜、殿上侍臣之中、五位以上一人不候事可勘者、當番無故障不參入、准扶好古等、可勘責之狀奏聞、

〔朝野群載五朝儀〕陪膳番

陪膳

一番子辰申〈行任朝臣以下四人略〇〉　二番丑巳酉〈國成朝臣以下四人略〇〉
三番寅午戌〈保家朝臣以下三人略〇〉　四番卯未亥〈顯國朝臣以下三人略〇〉
右依御所定如件、但先闕女房、若有闕怠、守次勤仕、無故三度闕怠之輩、不可昇殿者、
寛徳二年正月十六日　　　　　　　檢非違使左衞門少尉藤原以親　同兼任
　　　　　　　　　　　　　　　　府生秦成陸　右衞門少尉藤原成國
〔朝野群載〈十一廷尉〉〕解官　宣旨
右大臣宣、奉勅、件等人々宜令解官者、
永承四年九月五日　　　　　　　大外記兼周防介中原朝臣長國奉
件四人、去四月廿八日闕入感神院、追捕嫌疑者、仍院内法師、首甚申非例之由、爲令辨申其旨、雖推召、稱病不參、仍下勘罪名於法家所亂行、
〔類聚符宣抄〈六〉〕太政官
史生十人
數五人〈冷泉二人、闕家一人〉　依病不上一人　見直四人〈依召不參一人、違宣旨所一人〉
右數幷見直如件、因註欠番幷長案一切不堪、寫填仍請處分、
天長八年五月二日
中大納言清原卿即宣、請名病蓋無期、宜請權史生贖罪、亦闕其人、申之者、仍御沙汰申之、
同月五日　　　　　　　　　大外記島田朝臣清田奉
〔貞信公記〕承平二年二月十四日、藤原清平、源典國、島田公豫、多治命各、可令候藏人所之由、付中明令奏、被勘文關付、是前御時〈○醍醐〉藏人所人々也、源脩、平忠孝、藤原爲忠等合七人、是上日千日以上者也、

〔春記〕長曆二年十一月三日乙未、藏人所衆定成、先年依非道事被停上日六箇月、是俊家宰相爲藏人頭之所爲也、彼年爲大歌召人、而十二月日弓場始雜役可勤之由有其催、但不入廻文之內、爲大歌召人之者不勤雜役云々、仍定成不參入、因之被止云々、件事不安、可返給件上日之由、注申文令愁申也、予（〇原作實房）申關白殿（〇原作卿進）殿下命云、免給有何事乎、但事之子細先可問彼宰相者、予又問彼宰相、所答叶定成所陳也、仍去朔日申此由於關白殿、早可免給、不可必奏事也者、仍朔日可給彼上日六箇日之由、仰出納爲圖已畢、

〔今昔物語三十一〕大藏史生宗岡高助傳娘語第五

今昔、大藏ノ最下ノ史生ニ、宗岡ノ高助ト云フ者有キ、（〇中略）家ハ西ノ京ニナム住ケル、（〇中略）然テ此樣ニ微妙ク傳ケレバ、上日ノ者、宮ノ侍、可然キ諸司ノ尉ノ子ナド聟ニ成ラムト云セケレドモ、高助目ザマシガリテ文ヲダニ不取入サセザリケリ、

〔台記〕天養元年七月一日庚戌、上日職事散位藤孝能（才士）許致仕、依滿五十也、

久壽元年十二月卅日戊申、別記、義長（〇義長、原作義、時爲二條中納言右近衞大將皇后宮權大夫）上日、

正月大　一日節會　二日參內　三日同　四日著陣　五日敍位　七日節會　八日御齋會初

九日法林寺修正　十日同　十二日同　十四日御齋會竟　十五日兵部手番　十六日節會

十八日射禮　廿一日除目初　廿二日同中　廿三日同入眼　卅日奏日上卿進發

二月大　一日春日祭上卿　二日歸京　四日新年祭上卿　五日參內　七日同　八日（新年穀奉幣宣命奏）

九日參內　十日（新年穀奉幣上卿）　十一日列見　十四日釋奠　十六日參內　十七日同　十九日位記請印上卿　廿日仁王會　廿一日（圓宗寺最勝會）　廿三日著座

三月小　一日著座後政始　五日臨時祭　七日參內　九日同　十日同　十一日同　十四日同

十五日同　十六日同　十七日同　廿六日同　廿八日直物

四月大　七日縣所奏上卿　八日灌佛　九日參內　十日同　十一日政上卿　十七日參內　廿日御禊前驅定上卿　自廿一日至八月四日、依見病不出仕、

八月小　五日參內（[illegible]）　六日釋奠上卿　八日大嘗會宣旨　十八日任大將　廿一日慶申

九月小　七日政上卿　廿六日定考上卿

十月大　一日著陣　十二日軒廊御卜　十四日參內　廿四日大嘗會　廿五日同第二日　廿六日同第三日　廿七日同第四日　廿八日同覺并改元定

十一月小　一日御暦奏上卿　二日改元後政始　七日參內（公卿勅使）　十二日臨時除目　十五日大原野上卿　十八日新嘗祭上卿　十九日節會　廿四日臨時祭　廿八日復任除目上卿

十二月大　四日不堪申文　十一日月次祭上卿　十九日（荷前使并御佛名）　廿七日觀音院灌頂上卿　廿八日除目　廿九日下名上卿　卅日[illegible]并追儺上卿

〔平家物語 六〕こうえうの事

あんげんの比ほひ、御かたたがひの行かうの有しに、（中略）や、まんかうにおよんで、程とをく人のさけぶこゑしけり、くぶの人々はき、も付られず、主上（高倉）は聞し召て、たゞ今さけぶは何者ぞ、あれみて參れと仰せければ、うへぶしまたる殿上人、上日の者に仰て尋ぬれば、有つじに、あやしの女のわらはの、長もちのふたさげたるが、なくにてぞ有ける、（下略）

〔源平盛衰記 十二〕安德天皇御位事

三月（治承四年）十九日春宮位ニ卽セ給、安德天皇ト申、（中略）春宮位ニ卽セ給ケレバ、外祖父、外祖母トテ、太政入道（平淸盛）夫婦トモニ、三后ニ准ル宣旨ヲ蒙テ、年官年爵ヲ賜テ、上日ノ者ヲ被召仕ケレバ、繪書花付タル侍ドモ出入テ、院宮ノ如ニテゾ有ケル、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年（〇文治元年）四月十五日戊辰、關東御家人、不蒙内擧、無功多以拜任衞府所司等官、

各殊奇怪之由、被遣御下文於彼輩之中、件名字載一紙、面々被注加其不可云云、

下　東國侍内任官輩中

可令停止下向本國、各在京勤仕陣直公役事

丶　副下　交名注文一通

右任官之習、或以上日之勞賜御給、或以私物償朝家之御大事、各浴朝恩事也、而東國輩徒抑留庄園年貢、掠取國衙進官、不募成功、自由拜任、官途之陵遲已在斯、○中略若違令下向墨俣以東者、且各改召本領、且又可令申行斬罪之狀如件、

元暦二年四月十五日

〔吾妻鏡六〕文治二年四月八日乙卯、二品○源頼朝幷御臺所御參鶴岡宮、以次被召出靜女於廻廊、是依可令施舞曲也、○中略近日只有別緒之愁、更無舞曲之業、由臨座猶固辭、然而貴命及再三之間、憖廻白雪之袖、發黃竹之歌、左衞門尉祐經鼓、是生數代勇士之家、雖繼楯戟之基、歷一臈上日之職、自携歌吹曲之故候此役歟、

宿直

内外諸司ハ、事ノ繁閑ヲ量リテ、毎日番ヲ作リ、本司ニ於テ宿直シ、其名簿ヲ錄シ辨官ニ進ル、宿トハ、夜宿シテ事ヲ行フヲ云ヒ、直トハ、閉門ノ後衆人退去ノ後、留リテ事ヲ執ルヲ云フ、宿モ直モ倶ニトノヰト訓ジテ、殿居ノ義ナリ、或ハ夜直ノミヲ謂テ宿直トモ云ヘリ、而シテ宿直スベキニ宿直セザルトキハ罪アリ、

上宿ト云フハ、天皇御寢ノ後ニ鬼間ニ候スルヲ云フ、亥一刻ニ内豎宿簡(トノヰフダ)ヲ奏ス、是ヲ宿奏(トノヰマウシ)ト

云ヒテ宿侍者ノ姓名ヲ奏スルナリ、若シ失シテ奏セザルトキハ、先勞ヲ蒙フコトアリ、左右近衞ノ宿奏ハ、亥子丑寅ノ四刻ニ於テス、又侍臣等ノ名謁アリ、是ヲ名對面ト云フ、瀧口ノ名對面ハ時ニ之ヲ闕略トモ云ヘリ、並ニ各自其姓名ヲ唱フルヲ謂フ、又日奏ト云フ事アリ、每日ニ昨夜ノ宿直人ノ姓名ヲ奏スルヲ謂フナリ、

宿衣ノ事ハ冠服部冠服總載篇ニ、宿物ノ事ハ器用部坐臥具篇ニアリ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔類聚名義抄七〕直〔除力反 トノヰ〕

〔伊呂波字類抄止人事〕直〔トノヰ〕

〔運歩色葉集登〕宿直〔トノヰ〕

〔易林本節用集止言辭〕宿直〔トノヰ〕

〔塵添壒嚢鈔五〕一宿直ト云フハ心如何

宿ハトノヰ、直ハ候也、トノヰシタサブラフベキモノ也、直廬ト云フモサブラフイホリ、宿直モヤドリ候、宿直ノ直モ同心也、宿直人トカキテ、トノヰウド、ロムベシ、ソレヲ略シテ、トノキド、云フ、今ハフヤ〳〵弓箭ナドモモタズ、イマ〳〵シキ人ヲモサゾ云メル、

〔增補雅言集覽登九〕とのゐ〔宿直をいふ、殿居の意也、夜のいふ、〕古言梯、和訓栞、〔などにとのゐとせるは誤り也、寢るにはあらず、寢居夜居などいへる語也、〕

〔倭訓栞前編十八〕とのゐ　日本紀に宿、萬葉集に侍宿をよめり、殿居にあらず、宿直も同じ意に直といひ、夜に宿といふ、文選注に、直は謂宿禁中以備非常也と見ゆ、殿寢の義也、寢をいとよめり、

〔日本書紀皇極二十四〕三年正月乙亥朔、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三島、于時輕皇子患脚不朝、中臣鎌子連曾善於輕皇子、故詣彼宮而將侍宿、〔トノヰ〕

宿直例

〔萬葉集二挽歌〕皇子尊宮〇草壁皇太子舍人等慟傷作歌
外爾見之、檀乃岡毛、君座者、常都御門跡、侍宿爲鴨、
〔今昔物語二十五〕源頼信朝臣男頼義射殺馬盜人語第十二
然ラバ今夜ハ御宿直仕リテ、朝見給ヘムト云テ留ニケリ、
〔平家物語六〕小がうの事
比は八月十日あまりの事なれば、さしもくまなきそらなれ共、主上は御なみだにくもらせ給ひて、月の光りもおぼろにして、御らんせられける、や丶よんかうにおよんで、人や有、人や有と召れけれ共、御いらへ申者もなし、や丶有てだん正の大ひつ仲國、其夜しも御とのゐに參りて、はるかにとをふ候ひけるが、なかくにと御いらへ申す、
〔今昔物語二十七〕美濃國紀遠助値女靈遂死語第廿一
今昔、長門ノ前司藤原ノ孝範ト云フ者有キ、其レガ下總ノ權ノ守ト云ヒシ時ニ、關白殿ニ候ヒシ者ニテ、美濃ノ國ニ有ル生津ノ御庄ト云フ所ヲ預カリテ知ケルニ、其御庄ニ紀ノ遠助ト云フ者有キ、人數有ケル中ニ、孝範此ノ遠助ヲ仕ヒ付テ、東三條殿〇藤原兼家ノ長宿直ニ召上タリケルガ、其宿直畢ニケレバ、暇取セテ返シ遣ケレバ、〇下略
〔今昔物語三十〕中務大輔娘成近江郡司婢語第四
今昔、〇中略近江國ヨリ長宿直ト云フ事ニ當テ、郡司ノ子ナル若キ男ノ上リタリケルガ、〇下略
〔令義解七公式〕凡内外百官、司別量事閑繁、各於本司分番宿直、謂雖是假日、亦須宿直、其主典宿直、事有期限、及臨急判者、雖無判官、亦得與事也、
大納言以上及八省卿、不在此例、謂尋常時、
〔延喜式十一太政官〕凡諸司毎日作番宿直、各錄名簿進辨官、
〔令義解一職員〕神祇官

大監一人、掌、糺判官内、略○中、知宿直、檢校宮人事、

〔令集解職員二〕穴云、知宿直者、公式令云、内外百官司別量事閑繁、各於本司分番宿直、注云、謂尋常時者、即須何官勘逾宿直夫節耳、又問、有不宿直色哉、答、依公式令、大納言以下及八省卿不在此例、問、宿直一歟二歟、答、夜仕曰宿、晝仕曰直、又問、雜官人晝不仕、答、依公式令、京官皆開門前上、閉門後下者、依此文、閉門之後即皆可退、而作大節令直耳、私案、縱長官以下俱居廳坐、仍定直官耳、故職制律、在官應宿不宿、應直不直、各笞二十之條、

〔令義解職員一〕太政官

左大弁一人、掌、管中務式部治部民部、略○中、知宿直、謂、檢校諸司宿直也、當司宿直者、自依時職大例也、假令京官開門前上、閉門後下、宿衛官不在此例、謂衛府宿衛官等、不入諸司宿直之例也、

左大舍人寮右大舍人寮准此、

頭一人、掌、左大舍人名帳、分番宿直、謂大舍人是供奉之人、故其官宿直、又宿直官人宿直者、自依時職官之例、問、内舍人亦供奉之官、當番宿直、又宿直乎、答、内舍人是其上之官、故依常例、例官知、又宿直也、假使容儀事、

〔令義解五宮衛〕凡宿衛人、謂兵衛及衛門衛士也、屬當上番、而有故不得赴、謂赴至也、言不得至本府也、不及下番、須一日程以上行者、謂其計程者、依公式令計、下、從本府起計也、皆於本府申牒、具注所行之處、若不滿一日程者、聽暫往還、

〔律疏職制〕凡在官應直不直、應宿不宿、各笞廿、通晝夜者笞卅、謂依令、内外百官應分番宿直、若應直不直、應宿不宿、晝夜不相續、各笞廿、通晝夜者、不直者笞卅、若點不到者、一點笞十、謂内外官司應點檢者、或數度點、點取二點爲坐、謂一日之内、點檢雖多、只據二點、點數不到、若全不上、計日以無故不上科之、又二日以上、日別常直、官司點檢、每點不到、若入科二點不上、即是日別常直、若只一點不上、若二日以上、有十日之内、日別皆來、每點不到者、依點科之、其任之人、自餘雖全不上、即是已點不上、若點數多、不坐點不到、計日不上科、日多者從計日、

〔延喜式十一太政官〕凡鎮魂新嘗等諸祭之日、略○中、致齋之日、諸司各宿本司、仍錄名申官、至夜左右史生等分頭巡檢、若有不宿、依法勘當、官掌亦行、事畢錄名准此、

上宿

〔延喜式十二監物〕凡宿直者、大監物以下、少監物以上二人、

〔延喜式四十五左右近衛〕凡毎月一日十六日、具録當番近衛歷名、次官以上奏進、若無次官、判官亦奏、其宿衛者、日別録見宿數、次官以上一人署名申送、闈司總取奏之、餘府准此、

〔延喜式四十三春宮〕凡十一月中卯日、大宿官人歷名申辨官、

〔延喜式五十雜〕凡諸司官人、或率娼女及馬宿於曹司、忽有疾病、不速出却、以穢宮中、隨事重科、

〔類聚符宣抄六〕上宣、少納言、自今以後、宜定日別二人、若有闕直者、錄名申之者、

大同四年七月廿五日

召使職掌、祗候廳下、隨召進止、爲專其事、分爲二番、凡十人分上下番、而頃月或一人不候、或承仰多怠、此不加懲勸之所致也、權大納言藤原朝臣宣、自今而後、有如此之輩、必奪先勞三日、令愼將來者、

貞觀八年七月十九日　大外記菅野助道奉

〔侍中群要四〕上宿事

入御夜御殿之後、隨女官告、參宿鬼間、仰殿司以殿上疊令敷件所、以履置殿司庇、臥時北枕若東枕也、脫衣許、以袍加冠、〇中略

檢非違使具劔云々

近代依召候二間之上宿、闕具疊、或候二額間邊、可用心歟、

〔日中行事〕御とづまりの程に、殿上の臺盤を校書殿のかべのもとによせかけさせて、た〻みよせてをの〳〵ふしあへり、和琴をとりて枕などにす、束帶の人はうはてをはづす、うへぶしうけたまはるくら人は、鬼の間にた〻みをしきて侍る也、

〔日中行事略解〕うへぶし　上臥にて、鬼の間などに上宿するをいふ、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕いづれの比の事にか、大宮右大臣〇藤原俊家殿上人の時、南殿の櫻盛りなる比、

うへぶしより未だ裝束も改めずして、御階の下に、ひとり花をながめられけり、

〔平家物語二〕少將こひうけの事

たんばの少將なりつねは、其夜しも院の御所法住寺殿にうへぶしして、いまだ出られざりけるに、○下略

〔辨内侍日記〕建長元年九月八日、までの小路大納言、ひろ御所に夜ばむしにゆくをとしてさぶらひ給しに、きくにつけて、少將内侍、

雲のうへにをきゐる露も有ものをたれいたづらにねてあかす覽

返事、大納言、

九重の雲のうへぶし袖さえてまどろむ程の時のまもなし

〔宣胤卿記〕文明十二年正月十三日甲午、當番請取也、○中略乘燭以前著衣冠參内、番衆實久朝臣、〈勸修寺代〉余、基綱朝臣、〈代官〉雅久等也、被出天酒、一黃門余兩人候鬼間、直廬兩人宿下侍、亂後裝束不叶衆可候此在所定也、不出殿上不食上分也、不可說、近臣實隆朝臣、〈三條西宰相中將代〉言國朝臣、元長、〈甘露寺中納言代〉令參會、天明退出、一黃門令同道、

十三年二月十四日己未、食後參内、番也、請取冷泉前大納言、余參入之後退出、晩西川前宰相〈名代〉參、余不退出候宿、召寄夕飡了宿、源住山大納言〈代官〉參、〈侍從朝臣〉其外番人數也、余一人著衣冠候鬼間、殘衆直廬下侍番所也、與侍從中納言終夜校合狹衣、依仰也、

〔源氏物語一桐壺〕おぼしやりつゝ、ともし火をかゝげつくしておきおはします、○中略右近のつかさのとのゐ申のこゑ聞ゆるは、うしになりぬる成べし、人めをおぼしてよるのおとゞにいらせ給ても、まどろませ給ことかたし、

〔北山抄九羽林要抄〕宿申〈トノヰマウシ〉

亥子時、左陣毎刻夜行、丑寅時、右陣勤之、若有闕怠、次將召勘直官人等、丑刻物節一人來申宿申候之

名謁

由、（殿上及宿所、尋上問大將在所、中之、）次將問之、（讀乍臥興事、左右於一所申者、後申之者、不必問之、依已知左右也、）即申姓名、仰曰、申（サセ）、稱唯、告府生、府生所度以寢聲示候由、問曰、阿誰（アタソ）、（此度緩有咸儀、之、然猶緩音也、）間　府生以下稱職姓名、即申宿侍之人畢、仰曰、縦之、（申大將者、）（府生申候由、將曹申之、即申中將以下、申於中將者、申少將以下、申少將者、申將監以下、）

〔延喜式四十五 左右近衞〕凡行夜者、內裏官人一人、近衞一人、（起亥一刻、迄子四刻、但右起丑一刻、迄寅四刻、）大藏近衞二人、內藏近衞一人、（起戌一刻、迄亥一刻、但右起亥二刻、迄子二刻、）

〔侍中群要 二〕日中行事

亥一剋內豎奏宿簡事（付内貢簡、奏人之事、）

內豎所式云、宿。奏。亥一剋奏之、闕怠者奪先勞五日者、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜二年十一月癸卯、御太政官院行大嘗之事、○中略 內藏頭從四位下阿倍朝臣息道、助從五位下阿倍朝臣草麻呂、奏諸司宿侍名簿、

〔倭訓栞 中編 十七〕なだいめん　北山抄に名對面と書り、東鑑に名謁をよめり、延喜元年に始る、同籍とも稱籍ともいへり、花鳥に亥一剋に內豎時のふだを奏す、其後侍臣の名謁ありとす、一書に主上の御前に出て、直に諱を稱する事也といへり、

〔侍中群要 二〕日中行事

亥一剋、侍臣名對面事、宿奏之後、案侍臣名對面、起自延喜元年之比、

亥一剋、武士名對面事、（侍臣奏之後）

某年初世此武士之名對面乎、不分明、

延喜九年五月廿日、藏人源揚宜云、候瀧口陣、三ケ夜已上無故不參、莫預著到、宜待後仰者、

〔侍中群要 四〕名謁事（亥二剋御了）

（舊）雖不奏文宿侍三箇日以後、隨上臈氣色進止、侍（天）次稱姓名、但自問時、傾進自本座、突膝（天）問之、（其間）

云々、次第至天自稱姓名、各名謁了、經簀子敷、入自南第二間、上孫廂長押上、還東天北行、（經自東第三枚疊前）行、（瀧口名謁有官）令於見明障子許（從殿下上戶）時瀧口衆列居於御前、次藏人先咳、次瀧口鳴弦二度、問（嘆々如件）一々名謁、三人已上候時問之、不足三人時不問、（不足之由、瀧口陣申）殿上名謁亦復如此、若御格子乃內（藏）人候時ハ可待其人乃問云々、但至于瀧口名謁者、在外藏人事至天問、若名謁間乃燈消ハ、以後殿上侵直其燈後或暫居高欄云々、或用脂燭、

名對面事

名謁之時、御前ニ人候ハ、其人問云、（誰ソ）、外人ハ不問云々、殿上人謁了、元問人更出自御前、問瀧口衆云々、仍外藏人等不必問、瀧口可待後人之問歟、或云、瀧口ハ猶候外藏人如例可問云々、

被問內御書所見參事（同所同事）

渡御承香殿之時、被問內御書所衆見參ハ、藏人奉仰天、御書所（衆）誰々（候）侍ゝ、衆一々稱名了、若其由不違御所ハ、藏人傳、

（家）御讀經時、不名謁云々、

（家）若渡御承香仁壽殿、同介同御書所人時、於東殿東方問云、御書所誰（々）侍（哉）、對御前問之、

（家）名謁時、主上若御東方、御前候侍臣候（御前之體）面對限之至、如例居小板敷矣、候御前人問之、一々名謁、問人立御前問瀧口人、必藏人不問云々、四位一人、若五位一人、六位合三人以上時名謁無五位四位時不問、（略）○中

見參

（式）被問候陣王卿之時、向陣召官人等問之、或於宜仁門邊偶見歸參奏之、

親王（某官乃御子某官親王可奏）大臣（左右內大臣東宮傅某君）太政大臣（大伊東宮傅某君、大臣不奏兼官）大納言中納言三位宰相三位已上（某官乃某姓朝臣、非參議ハ可申某官）四位宰相（某朝臣、參議名也）

殿上人四位（名臣朝）五位六位（名）上達部候殿上間可奏之、有被問藏人所見參之時、（大略如殿上、但藏所見參調樂之時、）有仰、遣小舍人、書奏之也、渡御承香殿之時、有被問內御書所參時云々、藏人承仰問之、（內之御書所雜々加侍、或聞所可尋、東渡殿云々、）

一々稱之、（御所遠、其音不達天聽、藏人可奏歟、）

〔大槐秘抄〕たきぐちのもむじやく、左右近衛のとのゐ申までも、ふるきあとにたがはずこう行せらる、

〔貫首秘抄〕瀧口問籍事　應務不申、本所、鼓舞不憚之、弓場始賭射等御出之中間ニモ問籍不憚之、經宗卿可憚之由案之歟、射場始之間有問籍、件亞相所爲頗奇也、

予〇藤原後鑒（原）申內府云、惟方頭時候小板敷、藏人光經申云、瀧口令申問籍者、許容之後申之、予六位之時、此事然之由不覺悟之何、被答云、件由全不知、不覺悟事也云々、

〔禁秘御抄上〕問籍事

瀧口於北陣申之、參御湯殿北、次於殿上口申之、有公事之時不可申之、

〔日中行事〕亥の時に下格子御簾をたれて、第二の間のとうろを内にとり入てつりがねにかく、〇中略下格子の後、殿上のなだいめんの事あり、藏人頭まごびさしの南のはしにゐりをかく、殿上人は上の戸のくち、六位はかべのもとに候す、瀧口北の戸より入て前庭にたつ、六位藏人上首のまへにすゝみてたそといふ、その〳〵なのりす、六位は姓をくはふ、六位藏人一人孫庇を北へあゆみゆきて、二間の前のはしより第三の板敷の上にひざまづきて、誰々か侍るといふ、瀧口つるうちして、その〳〵名のりをとなふ、瀧口のとよりまかりいでゝ、もんじやくのさきおひ北の陣よりはじめて、所々のもんじやく、御湯どの、はざま、殿上の口などにて申めぐる、殿上には、貫首や小板敷に伺候したるやとたづぬれば、さなきよしを主殿司こたふ、貫首あれば、めんきよにつきてひざまづきて申なり、かへりあそびに歌うたふ、

〔布衣記〕一殿上の小庭にて、もんしやくと申て、瀧口祝言に歌うたふ事あり、其時床木に腰かけながら、瀧口の云、主殿つかさ〳〵殿上の小板敷には貫首の御座候やと申、主殿司答云、いやさもさぶらはずと申、其以後瀧口歌うたふなり、

そよや祝なれば、松の枝には鶴こそすそばくへ、岩ほが上に龜あそぶなり、やれかとつとう、

如此うたひて、まこうするなり、一反うたひて、なを申候へとあらば、又うたひ候なり、三度まではうたひ候也、うたひはて、、後、もんしやくのさきのげざんといふ也、是は見物の人をはらひのけたる詞なり、内裏にても本家にても、門前出入時も、見物集せきあひ候時可申詞也、

〔源氏物語四夕顔〕この院〇河原院のあづかりのこ、むつましくつかひ給ふ、わかきおのこ、またうへわらはひとり、例の隨身ばかりぞありける、めせば御こたへしておきたれば、しそくさしてまいれ、隨身もつるうちしてたえずこはづくれとおほせよ、人ばなれたる所に、心とけていぬるものか、惟光の朝臣のきたりつらんはと、とはせ給へば、さぶらひつれど、おほせごともなし、あかつきに御むかへに參るべきよし申してなんまかで侍ぬると聞ゆ、このかう申すものは、たきぐちなりければ、ゆづるいとつき〴〵しくうちならして、ひあやうしといふ〳〵、あづかりがざうしのかたへにいぬるなり、内をおぼしやりて、なだいめんはすぎぬらん、瀧口のとのゐまうし、いまこそとおしはかり給ふは、まだいたうふけぬにこそは、

〔花鳥餘情三夕顔〕なだいめんはすぎぬらん、たき口のとのゐ申は、いまこそはと、　亥刻に内豎時のふだを奏す、其後侍臣のなだいめんあり、なだいめんとは名謁を云、殿上に御とのゐせる侍臣、たがひに名を問れてなのる事也、此つぎに瀧口のとのゐ申あり、とのゐ申といふも、名謁もおなじきなり、瀧口は二十人ある物あり、いづれも亥の刻の事なれば、いといたくもふけぬにこそはとかけり、

日奏

〔枕草子三〕殿上のなだいめんこそ猶おかしけれ、御前に人さぶらふおりは、やがてとふもおかし、あしをとどもしてくづれ出るを、うへの御つぼねのひんがしおもてに、みゝをとなへてきくに、しる人のなのりには、ふとむねつぶるらんかし、又ありともよくきかぬ人をも、此おりにきゝつけたらんは、いかゞおぼゆらん、なのりよしあし、きゝにくゝさだむるもおかし、はてぬなりときくほどに、たきぐちの弓ならし、くつの音そゝめきいづるに、藏人のいと高くふみこぼめかして、うしとらのすみのかうらんに、たかひざまづきとかやいふゐずまゐに、御前のかたにむかひて、うしろざまに、誰々か侍るととふほどこそおかしけれ、ぼそうたかうなのり、また人々さぶらはねばにや、なだいめんつかふまつらぬよしそうするも、いかにととへば、さはることども申に、さきゝてかへるを、まさひろはきかずとて、君達のをしへければ、いみじうはらだちしかりて、かんがへて、たきぐちにさへわらはる、

〔玉海〕治承五年六月十日乙卯、辰剋許、參女院御所、此日、自閑院亭、行幸賴盛卿八條亭、爲避來十四日祇園御靈會路也、○中略今日行幸、無閑司奏、鈴奏等、又不仰邦綱云々、但於八條亭有名謁、是皆先例也、

〔三長記〕建久九年正月十一日己酉、今日有御讓位、○後鳥羽事、○中略次藏人日給、内豎奏、時瀧口問籍、（但於殿上口不中之、背先例、於御殿南庭名謁三ヶ日、如此云々、可尋、）神祇官奉仕大殿祭、次下格子、次有名謁、（後聞、於殿上名謁云々、此事奇也、於御殿簀子名謁先例也、）

〔後鳥羽院宸記〕建保二年四月一日乙未、亥剋名謁如例、　三日丁酉、子二點名謁如例、　四日戊戌、亥三點名謁如例、

〔伏見院宸記〕弘安十年十月廿三日庚辰、酉剋侍集、著臺盤、入夜殿上名謁、職事藏人等也、

〔侍中群要二〕日中行事

内侍奏内藏寮日奏事

内侍司式云、内藏寮進日奏、内侍臨東檻令進、（允以上一人、昇自東階進之、）若於便所進之者、在露處令進、若不御南殿、

封附内侍令進之者、

〔知信朝臣記〕保延元年二月十七日辛酉、大將殿〇藤原賴長 始可令著陣給、〇中略 今日吉書、忠清進二通文、

右近衞府

合中將已下府生已上

正四位下行權中將兼皇后宮權亮藤原朝臣忠基、從四位下行權少將兼伊與介藤原朝臣忠顯、正六位上行將監橘朝臣景遠、正六位上行將曹清原眞人遠兼、正六位上行府生惟宗朝臣忠清、正六位上行府生近江守宿禰重元、正六位上行府生身人部宿禰貞近、以前今月十六日宿直如件、

長承四年二月十七日　正二位權大納言兼大將皇后宮大夫藤原朝臣

以此文、翌日奏、令著陣給之後、令加御名二字給者、大臣時朝臣云々、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年閏十月廿日丙寅、南殿、見在禁中五位以下及諸衞府宿直者、賜綿有差、

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年正月廿九日庚寅、晦、右近衞宇保眞主宿直仗下、頓得病死、或稱氣絕於宮中、或云、出於宮外而命絕、來月上旬、應祠新年大原野春日等神、仍是日大祓於建禮門前、

〔本朝世紀〕天慶四年九月十五日壬申、亥剋太宰府飛驛使大宰有道宗形貞仁到來、更官人皆悉罷出、宿直司人擬先申官人、大雨頻降、一時無晴、因之今宵不遂先申、

〔台記〕久安三年六月十七日己酉、令書外記日記事、〇註略

在仗座之間、〇略 召大外記師安朝臣於獻仰曰、近代外記日記絕不書、後世何以知朝家之事、自今日後記之可、無闕怠、師安言曰、上古當直史生記之、中古以來、依無俸祿史生不直、是以六位外記書之、至于故織部正通景書之、其後絕不書、仰曰、雖須令史生書、其俸祿非上卿之力所及、任中古之例、可令六位外記書也、師安言曰、是尤最末外記之役、令書之如何、仰云書矣、

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕戀夫君歌一首

飯喫騰、味母不在、雖行往、安久毛不有、赤根佐須、君之情志、忘可禰津藻、

右歌一首、傳云、佐爲王有近習婢也、于時宿直不遑、夫君難遇、感情馳結、係戀實深、於是當宿之夜、夢裏相見、覺寤探抱、曾無觸手、爾乃哽咽歔欷、高聲吟詠此歌、因王聞之哀慟、永免侍宿也、

〔新撰六帖 一〕あした　左京權大夫行家

殿守のとのゐやつれの庭だちに妻かしこきあさきよめかな

休假

凡ソ在京諸司ハ、六日ゴトニ休假一日ヲ給フ、即チ毎月六日、十二日、十八日、二十四日、三十日(小盡ノ月ハ二十九日)ノ五箇日ニシテ、其日ハ宿直ノ人ノミ上ルナリ、六日ゴトニ休假スル故ニ之ヲ六假ト云フ、但シ休假ノ日ニテモ、上ラント欲スル者アレバ禁ゼズ、促迫ノ事等アルトキハ、假日ト雖モ下ルコトヲ聽サズ、中務宮内供奉諸司、及ビ衞府ノ官人ハ、毎月一度ニ假五日ヲ連給ス、又田假ト云フコトアリ、是ハ稻ヲ種エ禾ヲ穫ルガ爲メニ設ケタル者ニテ、五月八月ニ分チテ兩番トシテ各十五日ヲ給フ、然レドモ風土宜シキヲ異ニシ、種收等カラザルヲ以テ、四月七月若シクハ六月九月等ニ分チテ給ハルコトモアリ、又文武ノ長上官ハ、父母畿外ニ在ルトキハ、三年ゴトニ一タビ定省ノ假三十日ヲ給フ、但シ田假ノ内ニ往還シテ、父母ニ對見スルコトヲ得ル者ハ、別ニ定省ノ假ヲ給セズ、又公使タルニ縁リテ家ニ經過シタルハ、家ニ還リタル日ヨリ計ヘテ、三年ノ後ニ至リテ假ヲ給スルナリ、

此餘ニ假ヲ請フトキハ、衞府ノ五位以上ノ三日以下ヲ請ヒ、京官ノ三位以上ノ五日以下ヲ請ヒ、五位以上ノ十日以下ヲ請ヘルハ、皆本司ニテ直ニ判シテ之ヲ給フ、若シ此限ヲ過グベ

キト、畿外ニ出デント欲スルトハ、奏聞シテ後ニ之ヲ給ス、但シ六位以下ハ、本司ニテ判シテ給スルナリ、

外官ハ、拜命シテ後ニ裝束ノ假ヲ給ス、任所ノ遠近ニ隨テ日數ノ差アリ、

文武官三位以上ノ人、奏聞ヲ經ベキ假ヲ給ハルトキハ、去ル二事辭シ、還ル二事見ス、又大學生、國學生ハ、毎年五月ニ田假ヲ給シ、九月ニ授衣ノ假ヲ給ス、

凡テ六假ノ外ノ假ハ、文官ハ式部ニテ掌リ、武官ハ兵部ニテ掌ルナリ、而シテ喪假、改葬假ハ延喜式部服忌篇ニ、神祇官觸穢篇ニ載セタレバ、宜シク參看スベシ、

〔和名類聚抄人一〕假〈唐韻、イトマ、イトマアリ、閑也、〉 〔同二〕暇〈和名イトマ、イトマアリ、〉 〔同二〕暇〈下同イトマ〉 〔同六〕情〈音同イトマ〉

〔伊呂波字類抄人〕暇〈イトマ〉 假 遑 偟 遙 閑 閒 居 隙 閒〈已上同〉 〔同疊字〕休假

〔令義解九假寧〕假寧令第廿五〈謂、假者休假也、寧者歸寧也、詩曰、歸寧父母是也、凡二十三條、〉

〔倭訓栞伊前編三〕いとま 暇字をよめり、出る間の義なるべし、外に出るの休暇なり、令義解に依るに事而歸寧爲假と見えたり、假も暇に通へり、服忌令に暇といふは、俗にいふ忌なり、所謂父母服一年暇五十日の類なり、伊勢にて遠慮日をいとまのひと訓ずる是なり、

〔令義解九假寧〕凡在京諸司、毎六日、並給休假一日、〈謂、大學國學及雅樂寮等、各依其學令、不依此例、〉中務、宮內、供奉諸司、及五衞府、別給假五日、〈謂、五衞府、不依此例、凡諸司休假、六日一給、不依百官之例、云別給五日、〉不依百官之例、五月八月給田假、分爲兩番、各十五日、其風土異宜、種收不等、通隨便給、〈謂、其土宜不等、有早晩、若依一法、恐有損功、故量事通融也、〉外官不在此限、〈謂、外官者、在京官職、在外任者、不在此限、〉

凡請假、五衞府五位以上給三日、京官三位以上給五日、五位以上給十日、以外〈謂、若過此限者、不得直聽、皆奏聞乃給、〉及欲出畿外、奏聞、其非應奏、及六位以下、皆本司判給、應須奏者、並官申聞、〈謂、二官中、官中聞也、〉

〔令義解七公式〕凡詔勅、及事有促限、〈謂、促限、急速也、〉幷請給過所、若除受官物者、不在假限、〈謂、不在下限、是假日、〉

假文

〔令義解一職員〕左大舍人寮右大舍人寮准此

頭一人掌左大舍人名帳、略○中假使容儀事、

式部省

卿一人掌內外文官名帳、略○中假使、謂假者、除六假外皆是也、本司判訖、卽申式部也、使者如遣蕃賑四使之類是也、

兵部省

卿一人掌內外武官名帳、略○中假使、

〔洞院家部類十一〕結政初參略○中

休日六日、十二日、十八日、廿四日、晦日、

〔日本書紀持統三十〕三年四月己酉、詔諸司仕丁一月放假四日、

〔續日本紀文武二〕大寶元年五月己卯、勅一位已下賜休假、不得過十五日、唯大納言已上不在此限、

〔本朝世紀〕承平五年六月六日己巳、此日休也、　十二日乙亥、休日也、　十八日辛巳、休日也、　廿四日丁亥、休日也、

〔延喜式十二監物〕凡官人請暇文、有見直五人以上者、得互判許、若不滿此數、請省處分、

〔北山抄四拾遺雜抄〕請假事

請假三箇日、

右爲治身病所請如件、

年　月　日　官位姓名

進殿上治病假文如此、公卿假文皆奏、而近例唯奏大將假文、自餘不奏、說也、或請二箇日、又假內病愈者卽參入云々、然而未見請二日例、又非召不參入、衞府或請五日云々、衞府幷供奉諸司無休日、別給五日之由見假事令、殿上人可准之然又未見其例、但或云、顯忠大臣爲大將之時、請治病五箇日假、藏

人稱無例返之、後日召勘、問其由云々、

請假三箇日、

右爲治身病所請如件、以解、

年　月　日　　某解

出外記假文如之、〈謂[illegible]從出本陣、昇官出[illegible]政、又同之、〉

近例、未著座人不出外記、此事不可更然、若未著座人所帶昇殿者、雖有親喪及觸穢等、不可請歟、仍

尋舊例、未著座人皆出假局、其假文多在日記裏、

請假日、

右依其穢所請如件、

年　月　日

觸穢假文如之、若日數不足者、右狀加觸字、但雖當所之穢、夜中見之、後朝奉假文者、雖日數不足不

可有此字、又雖他所之穢、當日觸者、雖日數足、可有此字、依可定乙丙也、而猶依日數書此字、爲還一

端之謬歟、失火穢假不見其例、內穢之人觸事假文、無神事日有召參入、或不請之、有神事日不參云

云、

五體不具死穢、日數不定、能相定其數、可請觸穢之假、不可必注五體不具由歟、

請假日

右依其親喪所請如件、

年　月　日

親喪假文如之、隨親疎有日數、能尋案內可請也、祖父母、外祖父母假卅日、〈祖父母服五月、外祖服三月、但依可觸忌、卅日假云云、仍令減、不可忍之、〉伯父、〈謂父兄、〉叔父、〈謂父弟、〉姑、〈謂父姉妹、〉兄弟姉妹廿日、〈服三月、不聞假名、无假云々、可尋、〉舅、〈謂母兄弟、〉姨、〈謂母姉妹、但異父无假、本服外祖父

之子云々、異父兄弟姉妹十日、服一月、姪、謂兄弟子、姪女、謂兄弟女、從父兄弟姉妹、兄子謂從父兄、弟子謂從父弟、姉妹如之、或依年齒云々、法家不用此說、三日、服七日、大略如此、此外雖有種々假、近代或不必請之、但不能出仕、有二假時、依重請之、至輕此内可滿、服又如此云々、改葬之假、皆有其法、爲父母廿日也、其穢可有卅日、然則子不可觸父母改葬歟、或法家云、奉公之人、不能自由我身、雖父母事任法請假、不可觸穢云々、今案、件穢事、初載貞觀式、往代無之、具見彼本符也、制令之日、依無此穢、其假不及卅日也、今定爲穢之後、子何不觸其穢乎、近代例、爲養父母爲重喪、爲本生父母如輕服、此事大違法式、養父母假卅日、服五月、已有其限、但隨其志、可有心喪、本生父母、雖爲他養子、不可改其體、而如輕服只爲心喪、不知法意也、但其傍親就養父母之族、可有其假、至于本生之族、不可有假、但可有心喪、具見記、親喪之假、或半減召之、

請假日、

右依聞其親喪、所請如件、

年　月　日

聞遠所喪假文如之、其日數可半減、但三日之假可請二日也、或無聞字、唯減日數云々、

請假日、

右依其人御喪、所請如件、

年　月　日

天曆八年、大后於禁中崩時、令法家勘之、御傍親公卿皆奉假文、其狀如之、或依崩云々、攝故關白人遭親喪之時、皆奉假文、即日召之、而近代不被奉云々、不知其是非耳、

〔二中歷十二書禮〕假文

請假若干箇日

牒、依某事、所請如件、謹牒、弁官出納者以牒致、

年月日　官位姓名牒（公卿以下外記牒也、不論所署處、皆出外記、）

請假若干箇日

謹依某事、所請如件、（爲治病之人者、爲治病云々、）

年月日　官位姓名

今案、殿上王卿以下出藏人所様也、一院諸宮同也、（但初昇殿人者、先出大死假文、後出實假文、是例也、）

請假若干箇日

右依大臣（若某親）病悩、所請如件、

年月日　官位名（外記本牒例如例）

今案、院宮崩御之時、御傍親人如此出假文様也、

〔侍中群要九〕假文事

家

上卿假文可奏也、或中大臣大將等假文必奏、是上代之事也、御覽了後、文結書奏果二字、下給出納、令續納之、但近代不必奏之、結書奏果二字云々、又上卿假未滿之間、爲行公事被牢其假召之云々、自餘假文見了之後、闕官之次、付假若干入日記辛櫃、但服暇穢氣之間、至于假文不爲續云々、他文書枚數續並之時可爲續書、不可留置之、

又假未滿之中、有召參ハ、翻而不削假之殘數、後人見爲假中召之由云々、但月終盡日〇日字原無、今據下文補、之時可除假殘也、又尋常放紙之時、若有假殘之人ハ、計日數注付今月放紙、宿侍之時、若臥殿上下侍得夕、臥小板敷不得夕、是計上日之時事也、尋常不然、

事、假文書、

上卿以下假文事

上卿之假文者可奏、其中大將及大臣之假必可奏也、奏覽了後書奏果二字、下出納、令續納之、

自餘人假文ハ、見了開簡之次、付假若干、了下出納、或入日記辛櫃、

上卿假未滿之間、爲解陣、減半其假召云々、○中略

上卿假文

上卿被獻假文時、出納付藏人、藏人雖不奏其端書奏畢二字返給、上代大臣幷大將假文、必經奏聞、云々、然而近代必不奏、殿上人假文留殿上、

公卿假文

大臣以奏云々、納言以下不奏、假文乃端書、奏畢ト書天下出納云々、殿上人乃假文ヘ、日給簡書假歟いくとく注付天、簡封セハ明日可封之件假文入日記唐櫃云々、不論上卿及殿上四位五位六位、理須奏聞也、而近代例唯奏上卿假文、其中最者大臣及左右大將也、奏聞之後、書奏了二字、下給出納令續納、

奏假文不避御衰日（天延二年六月七日甲申、依被進基奏、上臈及侍臣多奉假文、或者云、上古既奏治病假文者、猶避御衰日、況於我乎、仍奏、內裏此事無忌、但奏者避之云々、左兵衛督濟時、左大弁保光等被示云、皇（皇上恐脫上字）御時事無忌之、右大弁爲輔朝臣被示云、朱雀院御時、爲事因准延喜御時、其時有定、不可被忌云々、仍其時不忌云々、但時中示云、大納言說云、可忌歟云云、又至于召者可避也、）

召假文事

家　奏召之、但日給不言時刻、只隨參入不參給不、又給日時、不削假數、後人見覺召由、抑月終疊日時、除假幾日云々、又豪召御物忌參者、當日給不至于夕、依新制隨明日陪供膳給、（四位裝束之後給之、）不給日者、依不昇殿也云々、

家　殿上上卿依近親喪進假文之、而半減召時、藏人奉仰、召內豎遣之、但大臣遣所衆若雜色、除重復御衰日奏、地下上卿外記申於上遣召使云々、

〔類聚符宣抄六〕大納言淸原卿宜、中納言已上請假之牒、須預申之、何者傍人知意、應無所怠、而當日進

定省假

之、於事不便、自今以後、不容更然、若有如此、外記等返之、又若新任之道者、差使令申知之、

天長八年五月九日　　大外記島田朝臣清田奉

〔日本紀略三十上〕天曆二年十一月廿二日丁卯、新嘗祭、天皇幸中院、今日小忌、宰相之外、諸卿或觸穢、或治病、或物忌事、暇文不參、

〔令義解九假寧〕凡文武官長上者、父母在畿外、三年一給定省假卅日、[illegible]除程、若已經還家者、計還後年給、[illegible]

〔類聚符宣抄十〕上野使泡原安房誠惶誠恐謹言

請殊蒙鴻恩、被許身假之狀

右安房老母居住上野國、其齡及八十餘、千里之遙程、朝夕難知、望請被恤許身假、且訪衰老之母、且知孝公之貴、安房誠惶誠恐謹言、

永平七年四月十一日　　上野使泡原安房

權大納言藤原扶幹卿宣、件安房其母請申身假、宜急向之國、准見仕、給當番上日者、

同月廿五日　　少外記三統公忠奉

祭神假

〔續修東大寺正倉院文書二十〕安宿廣成謹解　申請暇事

合三箇日

右爲私神祭祀、請暇如件、以申、

寶龜二年四月十五日

法師奉榮

美努石成解　申請暇事

裝束假

學生假

合五箇日

右依可私氏神奉假所請如件、仍注狀謹以解、

寶龜三年十月廿八日　上眞繼

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁止五位以上及孫王輙出畿內事

右大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅、〇中略大和國春日社二月十一月祭、興福寺三國忌齋會、同寺十月維摩會、藥師寺三月最勝會等、應參氏人、及散位諸司五位以上、其人有限、臨期直參、又諸人氏神多在畿內、每年二月四月十一月、何廢先祖之常祀、若有申請者、直下官宣、如此之類、往還有程、不得任意留連、經日遊蕩、其違越者錄名言上、處違勅罪、

寬平七年十二月三日

〔令義解九假寧〕凡外官任訖、給裝束假、近國廿日、中國卅日、遠國卌日、並除程、其假內欲赴任者聽之、若有事須早遣者、不用此令、舊人代至亦准此、謂、雖是舊人、亦准勅任、給裝束假、其舊人任官、及不任官者同、但任官者、不待收田苗、即須赴職、若舊人見有田苗、應待收穫者、待收穫訖遣還、

〔延喜交替式〕凡外官任訖、給假裝束、近國廿日、中國卅日、遠國六十日、並除行程、舊人代至、亦准此、但長官除裝束行程之外、百廿日爲交替限、在京諸司限六十日、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十九日庚午、撤去悠紀主基兩帳、天皇御豐樂殿廣廂、宴百官、〇中略諸司官人五位已上有雜怠、及諸國司就事入京、并新除外吏、過裝束程未向任之輩、皆預之、但未得解由者、不在預限、

〔令義解三學令〕凡學生請假謂、緣身及父母患、臨時請假之類、其休假及田衣等假、不在此限、者、大學生經頭、國學生經所部國司、各陳牒量給、謂、學生陳牒、所司量給也、

病假

凡大學國學生、毎年五月放田假、九月放授衣假、（謂九月霜始降、婦功成、可以授冬衣、）其路遠者、仍斟量給往還程、

〔令義解 三學〕凡學生、先讀經文、通熟、然後講義、毎旬放一日休假、

〔運歩色葉集 牛〕病假

〔續修東大寺正倉院文書 十九〕鳥浄濱解　申不參事

右以去九月廿八日、依病臥三箇日暇日請既退、病彌重立居不便、仍更五箇日暇請如件、以解、

天平寶字二年十月一日　付使尾張日足

〔續修東大寺正倉院文書 二十八〕坂合部濱足解　申請依病不參向狀事

右比日之間、冷病發起、身體羸疼、不便立坐、辛苦侍、依此患、請暇五箇日、不得參向、仍注日還息狀、謹以解、

寶龜元年十月十日

〔貞信公記〕延喜十一年十月十四日、依病請假三ヶ日、

承平元年十月八日、久永宿禰云、民部卿云、依病不上、遞其限、宜奉諭奏、

〔本朝世紀〕天慶四年十一月四日庚申、此日參議從三位行治部卿兼播磨守藤原當幹卿薨於八坂寺東院、（春秋七十）件卿月來沈病不勤公務、仍以去二月十二日公卿事諭奏、而有勅被免不上也、然而其病猶重、移宿件寺、遂以薨也、

灸治假

〔春記〕長久元年四月十五日己亥、今日請六箇日假、（爲詣二嶋籠山）寄渡間、身力已屈了、本性裏尫弱之故也、仍聊爲消遣氣所請也、

〔山槐記〕仁平二年九月六日丁酉、申剋著束帶參關白殿、申實長朝臣灸治暇事、次參內、左府被聞食了之由有仰、

請假赴溫泉

〔朝野群載 二十大宰府〕太政官符　太宰府

應聽往還某姓某丸向某國溫泉事

右得某人解偁、云々者、某宜奉勅依請者、府宜承知、依宜施行、府到奉行、

辨　史

年　月　日

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國天平九年正稅帳

依病下下野國那須湯從四位下小野朝臣、上一口、從十二口、六郡別一日食爲單柒拾捌日、上六口、從十二口、

看病假

〔續修東大寺正倉院文書二十〕美努人長謹解　申請暇日事

合三箇日　以十八日參

右爲療親母之胸病、請如件、謹以解、

天平寶字四年九月十六日　美努人長

判史生下道朝臣福麻呂　領賀茂朝臣馬甘

息長常人解　申請假事

合五箇日

右爲母病見治、所請假如件、以解、

天平寶字六年七月十二日

喪假

〔令義解九假寧〕凡職事官、遭父母喪、並解官、〇中略自餘（謂非重服者）皆給假、夫及祖父母、養父母、外祖父母卅日、三月服廿日、一月服十日、七日服三日、

〔續修東大寺正倉院文書十九〕史戶赤麻呂謹解　申不參向事

右以今月十七日姑死去、仍請三箇日暇、欲看治、今錄狀謹解、

以廿一日夕參

天平寶字四年九月十八日

判史生下道朝臣福麻呂　領賀茂朝臣馬甘

(貞信公記)延喜九年閏八月八日庚午、依服請假、

(權記)正曆四年三月二日庚寅、請假三箇日、產穢遷昇之後、未奏假文、初奏因事假文、有憚、仍今日產穢所奏也、　六日甲午、請假十箇日、依穢也、

(左經記)寬仁元年七月十四日、早旦觸產穢假文、〈三日〉々事、內幷結政所等、今上〈〇後一條〉御即位之後、未奏假文、依中將實事假文也、而最前事、觸事假文於奏有憚、仍先奏產假文也、

(小右記)寬仁二年四月十三日丙子、請給實假、〈廿日〉々書樣、〈請假廿ヶ日、右依服所請如件、年月日、〉

(台記)久壽二年十二月廿二日乙未、師長著高陽院〈〇鳥羽后藤原泰子、師長叔母、〉御服、即參福勝院、觸穢云々、又出假文云々、

出殿上樣〈東宮同之〉

請假廿箇日

右依高陽院服所請如件、

久壽二年十二月廿二日　從二位行權中納言兼左近衞權中將藤原朝臣師長

出外記樣

請假廿箇日

雖依高陽院服所請如件、謹牒、

久壽二年十二月廿二日　從二位行權中納言兼左近衞權中將藤原朝臣師長牒

出本陣樣

請假廿箇日

改葬假

牒、依高陽院崩所請如件、以牒、

久壽二年十二月廿二日　從二位行權中納言兼左近衛權中將藤原朝臣師長牒

假文書樣據西宮臨時記也、據公式令、皇后平出、中宮闕字、今案指其身平出、指其居闕字、若然書太皇太后、皇太后、皇后之時平出也、書太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮、中宮之時闕字也、至于高陽院者、指身指居不能異文、探其意可分別平出闕字、今指其身、故平出也、

〔令義解九假寧〕凡改葬、一年服給假廿日、五月服十日、三月服七日、一月服三日、七日服一日、

〔宇槐記抄〕久安七年(○仁平元年)九月廿二日、故小河殿(○藤原忠實母、藤原師實室)御骨、月來避王相方忌、御西法華堂、今日奉埋木幡、則是改葬也、仍余(○藤原賴長)有十日假、三長(○賴長子兼長、師長、隆長)有七日假、依公家御衰日不獻假文、　廿三日、三長獻假文、(余依衰日不獻)兼長隆長獻本陣殿上、亦師長獻外記本陣、(兩所書樣同)

殿上

請假七ヶ日、

右依改葬曾祖母所請如件、

仁平元年九月三日　從二位行右近衛權中將皇后宮權大夫播磨權守藤原朝臣兼長

師長　隆長(同之、仍略之、)

廿五日壬戌、範家來申、雖請假之限內、可奉仕除目執筆者、報答云、今日重、明日後假、出仕非無其憚、明後日御物忌難參籠、加之依有所勞、難久候座、右大臣(○源雅定)四代居丞相之任、具習其儀法、令彼奉仕、尤可宜歟、　廿六日、範家來、傳法皇(○鳥羽)命曰、明日御物忌可被破、必可參入、又參議師長朝臣假半減召之者、報奏承由、

〔兵範記〕久壽二年五月廿日丙寅、左府(○藤原賴長)一族出假文、(文書樣)

請假廿日

右依ㇾ改ㇾ葬ㇾ母、所ㇾ請如ㇾ件、

久壽二年五月廿日　　從一位藤原朝臣賴―

請假十箇日

右依ㇾ改ㇾ葬ㇾ祖母、所ㇾ請如ㇾ件、

久壽二年五月廿日　　正二位權中納言兼右近衞大將皇后宮權大夫藤原朝臣兼―

中納言中將新中將假文、同前可ㇾ准ㇾ知之、殿上分、藏人高忠書ㇾ寫送之、

忌日假

〔權記〕長保四年九月八日庚子、大内記宣茂朝臣忌日不ㇾ參、

〔山槐記〕永曆元年九月一日丙子、向ㇾ觀音寺、今日先考御遠忌也、〇中略雖ㇾ爲ㇾ路頭番、依ㇾ遠忌ㇾ不ㇾ可ㇾ參内之由、先日示ㇾ藏人兼光ㇾ畢、

〔楢嶼要用日記〕文化八年四月十二日

一勸修寺家へ走出如ㇾ此、本書四行、御湯殿上也、　賀手也、取ㇾ次逢ㇾ水右兵衞尉、

賀茂祭出御可ㇾ令ㇾ早參ㇾ處、依ㇾ正忌ㇾ令ㇾ不ㇾ參候、宜ㇾ御沙汰希入候也、

四月十二日　　俊矩大江〇

藏人左少弁殿

拜墓假

〔朝野群載雜文二十一〕太政官符　陸奧國司

右兵衞少尉源致節

右人爲ㇾ拜ㇾ亡母墳墓ㇾ向ㇾ彼國ㇾ、某宜ㇾ承ㇾ知、宜ㇾ聽ㇾ往還ㇾ者、國宜ㇾ承知、依ㇾ宜行ㇾ之、路次國々宜ㇾ准ㇾ此、符到奉行、

辨　　史

年　月　日

觸穢假

〔貞信公記〕延喜十年五月八日、依ㇾ犬死ㇾ請ㇾ假、

〔台記〕久安三年正月廿一日乙酉、昨日家中犬死、今朝聞之、因之使下家司（衣冠）送暇文於藏人所及外記局、（藏人所者付出納）院宮同可献之由見西宮文、而見年々前二條關白記、及寛弘元年行成卿記、東宮之外不献他院宮、因之不献矣、暇文近代絶不奉、余（頼長○藤原）任舊例奉之、（今日初奉之）使聞先例、無所見、案事理使下家司奉之、尤可尋知先例、

請暇四箇日

右依犬死穢、所請如件、

久安三年正月廿一日　　内大臣正二位藤原朝臣頼長

送藏人所如此、

請暇四箇日

右依犬死穢、所請如件、以牒、

久安三年正月廿一日　　内大臣正二位藤原朝臣頼長牒

送外記局如此

犬死穢五箇日也、而昨日有穢、故請四箇日也、（此旨見北山抄）

〔本朝世紀〕久安三年七月六日戊辰、今日内大臣（頼長○藤原）令進假文於殿上給、（犬産穢假二ケ日）藏人源經光奏覽之後、納日記辛櫃云々、假文事、近代絶畢、今始有此事、

〔宇槐雜抄〕仁平二年四月十四日、件三長（○藤原頼長子兼長、師長、隆長）詣土御門、（高陽院御所）自一昨日有乙穢、仍每門立簡、余及三長奉暇文、成雅成隆等朝臣使通同奉之、（余以下皆丙穢也）

出殿上書様

請假二十八箇日

右依觸死穢、所請如件、

仁平二年四月十四日　從一位行左大臣藤原朝臣賴長

出外記書樣

請假

請假二十八箇日

右依觸死穢、所請如件、以解、

仁平二年四月十四日　從一位行左大臣藤原朝臣賴長解

給假使見

〔令義解 六假寧〕凡文武官三位以上假使者、(謂三位以上者、散位不在此例也、餘者無給之例也、)去皆奉辭、還皆奉見、

請假解

〔東大寺正倉院文書 十九〕謹解　申過限日事

以今月十三日、國內卒有故、屋舍破壞、修理之間、限日可過、更請四箇日、仍錄事狀、謹解、

廿二日參

天平寶字四年九月十五日　山部吾方麻呂

過假限

〔延喜式 雜 五十〕凡國司等數使、及請暇入京、過限未還者、錄名申送、若隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、

〔日本後紀 十四 逸文〕大同元年五月己丑、勅、公使之故、既立程限、私假之期、必有日數、如聞諸國牧宰之輩、或就使入京、公務已畢、或緣事歸、給假日方滿、而經過宮闕、留連閭里、晏飲景迄、不可不責、又上下殊等、所掌各別、若長官出行、須佐職留守、而或有掾已上官、共離任所、付印主典、事甚之至、一復如此、其事使過限者、給山中之假、滿未來者、錄名聞言、若隱忍不告者、事覺之日、准狀科附、不得阿容、

出畿外

〔延喜式 太政官 十一〕凡太政官下諸司諸國符、隨事請內外印、(略)○中 新任國司、并諸司在外國者赴任、五位以上出畿外、(略)○中 並請內印、

〔貫首秘抄〕給上日事　二三百夜モ有給之人、不穩之例也、不勤上日ヲ給人、天令超人之條、尤不穩便、事也、然而爲例事云々、給假令城外之條、又奇怪第一事也、還口一切不可、城外云々、各借給夜ト云事ヲシタ、二三十日城外事也云々、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勘五位已上任意到來事

右案假寧令云、五位已上欲出畿外奏聞、然則自非經奏不可出外、今右大臣宣、奉勅、如聞或就私事恣赴畿外、或被遏迹、良乖憲法、從今而後、非賚內印不得輙出、若有違犯錄名申上、或國司阿容不申者、相共科違勅罪、

大同二年二月一日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制孫王任意出入畿外事

右得美濃國解偁、此國停關之後不制往來、由玆東海道諸國牧宰五位已上、任意枉道、亦孫王擅以出入、人民騷動、郡部〔部恐誤〕內不靜、雖加禁止、積習不遵、望請、特下嚴制、令愼將來、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、宜五位已上依法禁制、但至于孫王、未施此制、自今以後、同以禁止、自餘諸國、亦宜准此、若有違犯、錄名言上、

仁壽三年四月廿六日

太政官符

應禁止五位以上及孫王輙出畿內事

右大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅、五位已上及孫王不出畿外之制、先建憲章、從行尙矣、今如聞、畿內百姓、愁歎無極、公事私業、或失其勤、試遣使者、略問部內、所申雖多、其尤甚者、權貴雜居、動爲煩苦、宜禁止件輩輙出、稍慰民意、唯高年送老之徒、痼病就醫之地、各量穩便、可有處分者、仍須七十以上并宿病尫弱、或逢療治之便、或立終焉之謀者、申牒國司、依實修解、被報符後聽住居住、國司若不據實處之科責、曾不寬宥、但山城國內、東至會坂關、南至山

給與波泉河等北限、西至攝津丹波等國堺、北至大兄山南面、不在制限、大和國春日社二月十一月祭、興福寺三國忌齋會、同寺十月維摩會、藥師寺三月最勝會等、應參氏人及散位諸司五位以上、其人有限、臨期直參、又諸人氏神多在畿內、每年二月四月十一月、何廢先祖之常祀、若有申請者、直下官宣、如此之類、往還有程、不得任意留連、經日遊蕩、其違越者、錄名言上、處違勅罪、

寬平七年十二月三日

〔大鏡〕八ある人、城外やし給へるといへば、遠國にはまからず、和泉の國にこそ貫之のぬしのみえんにくだりて侍りしか、ありどをしをば思ふべしやはとよまれて侍りし、

〔尾張國解文〕申請官裁事

一請被裁斷當國守藤原朝臣元命三箇年(自寬和二年、至永延二年、)內責取非法官物幷濫行橫法卅一箇條愁狀 ○中略

一請被裁斷守元命朝臣自京下向每度引率有官散位從類同不善輩事

五位一人天文權博士 惟宗是邦 內舍人二人橘理信 藤原重規 同孝忠 同朝佐 大原弘範 良峯松林 伴兼正

右五位以上諸司官人以下、輙出畿外、禁遏已重、而嗜今日之温潤、競爲當任之國吏、各無歸京、而皆有留國、在京之日、猶名於上官、過承之時、交情於下列、亂入如雲、騒動同風、暗求方術、地搜土產、如此間、人物共費、狼戻劇烈、將來 ○下略

〔本朝世紀〕正曆元年十月十七日己未、左大臣(源雅信)召大外記中原致時朝臣仰云、諸司諸衞官人等、無故畿外者、宜仰本司令勘申者、

〔左經記〕長元四年六月廿七日癸卯、參殿(關白藤原賴通)○中略 申雜事、及深夜退出、○中略 今夜又被仰云、諸司諸衞不仕城外官人可解却見任歟、將先誡可解見任之由、兼仰下向國司早可追上之後、重不可令下向之

請假

由不憚其誡之時、可解却歟、令諸卿定申者、彼此被申云、先被誡仰之後、無其憚歟、被解却歟、右府被奏此旨之後、奉宣旨被仰下云々、

〔朝野群載八別奏〕主水司

進供御氷無庫事

右從去四月一日進樣之後、隨召備進之間、室々申上无庫已了、仍任例注奏如件、

康和五年八月十日

正六位上行令史佐伯朝臣 未到

正六位上行令史賀茂朝臣

正六位上行令史上野宿禰

正六位上行佐菅原朝臣 未到

正六位上行佐大江朝臣 ○城外○

從五位上行正菅原朝臣昭季

〔本朝世紀〕康和五年十二月一日丙午、頭弁仰云、○中略依不仕城外停任例可注申者、

〔中右記〕嘉承元年九月十七日、或人談云、左大弁基綱相具但馬守仲章、密々下向任國了、此事如何、公卿無指故出畿外、未聞事歟、就中身帶大弁、官中文書已以逗留歟、事奇怪歟、仲章因緣坐以可然哉、末代作法、又無其咎、公卿出城外、何事之有哉、

〔百練抄五鳥羽〕天仁二年二月廿九日、前美濃守義綱勘罪名、配流佐渡國、背朝憲赴城外之故也、令諸卿定申之、

〔續修東大寺正倉院文書二十〕大原國持謹解　謹請暇日事

合伍箇日

右請穢衣服洗爲暇日、如前、以解、

天平寶字二年十月廿一日　　　　　　　　　　巨勢村國

謹解　申請假日事

合三箇日

右依私齋食欲請假如件以解

天平寶字四年十二月十三日

判許（異筆）　主典安都宿禰

（續修東大寺正倉院文書二十八）合三箇日以廿四日參

右依親父老人衣具可進退攝津職三嶋上郡仍具注狀申送以解

天平寶字四年十月廿二日

判聽　　　　　　　主典安都宿禰

史生[illegible]麻呂

古事類苑

政治部二十

上編

定考 小定考挿入

名稱

考期(八月一日ヨリ翌年七月三十日マデノ間ヲ限トス)終リテ後、八月一日ニ、少納言辨外記史等別當シテ、太政官ノ考選文ヲ勘抄シテ案ヲ成シ、十一日ニ至リ、長上ノ考文ヲ執リ、太政官廳ニテ、考ニ預レルト、考ニ預ラザルト、考セザルト(有大臣以上)等ヲ定メザルト(五位以上)ノ人數、若シクハ上日ノ數ヲ大臣ニ申ス、既ニシテ宴飲ノ座ニ就キテ酒アリ、祿アリ、黄白菊花等ヲ大臣以下ノ冠ニ插シ、見參ノ簿ヲ進ムル等ノ事アリ、是ヲ定考ト云ヒ、倒讀シテカウヂヤウト唱フ、因テ又ハ考定ト書ケリ、

定考ノ翌日、太政官ノ東廳ニ於テ、少納言、辨、大夫外記、史等、太政官ノ番上以上ノ考ヲ定ム、是ヲ小定考ト云ヒ、コカウヂヤウト唱フ、後日ニ又使部ノ考ヲ定ムル事アリ、

凡ソ定考ハ、諸司諸國ニモ各、コレアリト雖モ、其儀太政官ノ如クニハ備ハラズ、宜シク考選功過ノ二篇ヲ參看スベシ、又太政官ノ定考ニハ、太政大臣ヨリ以下直丁ニ至ルマデ祿ヲ賜フヲ例トス、事ハ封祿部節祿篇ニ載セタリ、

〔名目抄 恒例諸公事〕定考(カウヂヤウ)(逆讀之例也)

〔倭訓栞 前編加六〕かうぢやう 定考と書て、かへさまに、かうぢやうと唱へ來るを故實とす、六位已上の加階にある事にて、選叙令にくはし、二月十一日に諸司の璽、藝能あるを撰み出すを定

定考儀

考とし、式部兵部の兩省、諸司の定日撰成するを列見とし、それを書集めて奏するを擬階の奏といふ、

〔九條年中行事 八月〕十一日定官中考事

〔儀式 十〕八月十一日太政官廳定考儀

前一日、所司裝飾院内、并設床席、當日早旦、辨官申政、訖考選少納言辨以下列立西廳南端、少納言辨先入就版、訖史二人太政官史生一人入就後版、（執短策筥史在東、執永籍并紙文史在西、執硯筥史生在執短策史後、）立定、大臣宣喚、少納言辨大夫共稱唯、（史以下不稱、）升自西階就座、訖史二人升自西側階、立西第一間兩楹之間、（北面東上、）史生進立西階西頭、執短策史東進至東第四間、北折當大臣座、更折至机前三許尺跪、膝行數步、以筥置地、取短策置机上、取筥復本所、北面跪置筥於堂廉、取史生所持硯筥、進置机上、（史生取短策筥、却就西廂、）是間執永籍并紙文史、就少納言辨後、以永籍授少納言、以紙文授辨、訖兩史依次退而候西廊、少納言讀申云、太政官長仕乃某年（爾）應預考并不預考、合若干人、就中（爾）考（爾）不預賜（留）若干所、不定等（留）若干人、中乃上等若干、其大臣奉仕給（留）月數若干、（不中行事、）大納言姓卿奉仕給（留）月數若干、增減去年若干、辨讀申云、奉仕（留）政若干條、增去年若干條、（已下准此、）少納言申、中納言姓卿奉仕（留）日數若干、增去年若干日、辨申云、奉仕（留）政若干、增減去年若干條申賜（止）申、大臣宣、縦、少納言辨共稱唯、辨召執短策筥史名、史稱唯、共進立兩楹間、如前立定、一人（執筥史、）趨至大臣机前、跪取硯筥、復本所、召史生名、史生稱唯、捧筥西趨立階下、史跪以硯筥置堂廉、受史生所持筥、趨至大臣机前、跪置筥、撤短策入筥、史一人至少納言辨後、受永籍并紙文、依次下自西側階退出、史生退、次少納言下自西階退出、次大臣以下退出、

〔延喜式 十一 太政官〕凡太政官考選文者、八月一日少納言辨外記史等別當勘抄、成案、畢長上考文、十一日申大臣、其儀大臣已下就曹司廳、考選史持短冊筥、又史一人持札并紙文、外記史生一人持丹硯筥、少納言辨大夫俱率就版位、大臣宣喚、少納言辨稱唯、昇自西南階就座、史昇自西側階、立第一間、史生立

史後擿下持短册、史進跪居筥於地、執短册置大臣前机上、執筥而退還、當階而立、史安筥於砌上、執硯筥進、亦置机上而還、史生執筥西却出候之、持札幷紙文、史進授札於少納言、授紙文於辨大夫、訖兩史共西却出候、少納言讀申曰、太政官長仕(某官)某年(某)應預考幷不預若干、此中(某)考(某)列(某)不在(某)若干所、不定第若干、中上若干、其大臣仕事(日數)若干、增減去年若干、(不中行事)納言姓卿仕事(日數)日數若干、增減去年若干、辨大夫讀申曰、仕事(日數)若干、增減去年若干條、([illegible])申給申、大臣宣、縱之、少納言辨大夫共稱唯、([illegible])辨大夫召考選史名、史共稱唯、俱入立如前、一史進執硯筥、還立階下、召史生、稱唯走至史前、受取硯筥而立、史執空筥進入、短册而還、一史又進執札幷紙文而還、訖史生先却出、次史相列退出、次少納言辨降殿、版拔而退出、次參議以上著朝食所、少納言辨大夫等候之、廚家儲酒饌、次大臣已下史已上謝座著宴座、(大臣入自北戸、納言已下入自西廊、列立南廊、但六位在之堂下、昇自西階、)三獻訖、參議已上出著東座、頃之入自北戸、更著穩座、少納言辨候南縁、盃巡三巡之後召史生、史生列立庭中、謝座著座、([illegible])次召內記及近衞諸司、([illegible])次雅樂寮作音樂、此間雅樂寮奏、次事見參議事、訖退出、(事見儀式、)其番上考者、十二日少納言辨大夫外記史等定之、使部考亦後日定之、

〔延喜式 三十大藏〕太政官二月十一日列見、八月十一日定考日饗饌、

〔江家次第 八八月〕考定([illegible])

儀式畢、少納言以下立版位、(少納言一人、辨一人、史一人、史生一人、[illegible])

上卿召す、少納言以下稱唯昇著座、([illegible])次置短册硯筥、授紙書、([illegible])

([illegible])

讀申([illegible])了、

上卿仰云、(與之)少納言辨同稱唯、(此間辨巻文把笏)共復座、辨召一史名、(兩史於壁外稱唯、立定一史如初、趁進撤硯筥、還本所、召史生名、史生稱唯、排空筥出自軒廊、立壇下、史跪置硯筥於地、史生授空筥、取硯筥立、史排空筥、如初、趁進取短冊入筥、退還之間、二史趁進撤少納言後、插笏先取紙書、次取笏相從、降西階、經西廊前、退出、史生相從、)少納言辨退、(如中文儀)上卿以下起座、(至造曹所、設饗)

〔公事根源八月〕定考　十一日

是は昔、六位以上の加階をする人は、かの藝能行跡恪勤をえらびて、榮爵を給けるなり、上卿、官の東の廳の座につきて事を行ふ、次に朝所に就て三獻の儀式あり、次に宴穩の座につく、又おのおの三獻有、かざしの華を上卿以下の冠にさす、大臣は白菊、納言は黄菊、參議はりうたん、其外はみな時の華をさす、つくり華にあらず、大かたは二月の列見に同じ、式兵の兩省より、諸司の輩の上日を選成する事を列見といふ、それをかきあつめて奏するを擬階の奏といふ、此人々をえらび出してさだめ侍るを定考とは申也、定考と文字にはかきて侍れど、考定とさかさまによみ侍るが、口傳にて侍るなり、選叙令にくはしき事はのせたり、其儀しきなどは、次第にみえたり、十二日は、また小定考とて、大辨以下の人、東の廳に著て行ふ事有、

○按ズルニ、定考ハ太政官ノ官吏ノ行能功過ヲ定ムルコトニシテ、列見擬階奏トハ自ラ別アリ、公事根源ノ説ハ誤レルニ似タリ、

〔壬生家文書一〕定考饗事

注進

□勤列見定考所所饗饌事

一外記方年預史生勤

朝所

非參議大辨中少辨少納言料(外記史生設之)

非參議料（四尺黑漆臺盤居之）
中少辨少納言料（八尺黑漆臺盤居之）
粉熟餅餤居之
開波佐閇
上官料（外記食盤役之　八尺黑漆臺盤居之）
□熟餅餤居之
西廳座
辨少納言肴物（外記史生役之　明盤居之）
粉熟餅餤居之
西廊南內西廳北
上官肴物（居机之　外記食盤役之）
粉熟餅餤居之
東廳
檯盤一前（居机　官掌料）
外記（寓主殿）
宴座朱器臺盤三前□□舖
上卿料（四尺漆臺盤居之）納言　參議（八尺朱漆臺盤居之）
辨少納言（八尺朱漆臺盤居之）　上官（同漆臺盤二脚居之）
樂人舞人臺廿前
檯盤一前（居机　官掌料）

一官方左年預勤

朝所高座

大臣二前 四尺朱臺盤二脚居之

納言三前 八尺朱臺盤一脚居之

參議三前 同一脚居之

粉熟餅餤居之

穩座

肴物 居ゝ机之 公卿料

粉熟餅餤居之

樣饗一前 居ゝ机之 官掌料

一右年預史生勤饗

外記史生　官史生　官掌　上召使　官文殿　辨侍下宿

樣饗一前 居ゝ机之 官掌料

一官案主勤

晉止饗

樣饗一前 居ゝ机之 使部中

餅餤分配雜物等

一朱器預

列見　一番　二番　定考　三番　四番

右大略注進如ゝ件

承元二年二月　日

〔三代實錄　清和六〕貞觀四年八月十一日丁未、釋奠如常、○中略是日、於太政官曹司廳、定使暑之考、公卿相分行事、

〔日本紀略　朱雀二〕天慶五年八月十一日壬戌、風雨大發、屋舍損、木及數處、仍止定考、

〔日本紀略　村上三〕天曆元年八月十一日壬辰、定考、無音樂、依天下飢饉愁也、

〔日本紀略　村上四〕應和二年八月十一日丙申、定考、

〔日本紀略　冷泉五〕康保四年八月十一日丁卯、定考、

〔日本紀略　圓融六〕天延元年八月廿一日壬寅、定考也、式日依厨家穢延引、

〔日本紀略　一條九〕正曆二年八月十一日丁丑、定考、依諒闇、無成選儀、

〔百錬抄　一條四〕正曆三年八月、定考、上卿依輕服、從座退出事、見小右記、

〔本朝世紀〕正曆四年八月十一日、今日定考也、此度停止宴座、依左大臣〔源雅信〕薨也、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年八月十一日己亥、考定延引、依前齋頭左大弁服身也、右大弁有所勞、

〔日本紀略　一條十一〕寬弘五年八月廿八日丙辰、定考、式日依厨家中故障延引、

〔日本紀略　三條十二〕寬弘八年八月廿八日己巳、定考、但無音樂、依先皇○一周也、

〔左經記〕寬仁元年八月十一日丙子、午剋許參官、（東宮立坊、三ヶ日之間、服者不參內、仍參官、又令觸之、余依為服者之內、（內觸闕歟）定考也、）仍所〻參切之右大□□□參、及午終、侍從中納言被參云、相待□□之間也、已可及晚、且行申文等事之間、□□□參被着、仍右大弁着結政座、令結申文等、次少納言以下列立版位之間、左右兩大弁入自北戶、被着廳座、申文如常、次有請印、次考選申文、余被申云々、畢召史各一聲、畢進向列所、弁以下重列立東廂、仍進加列上、（今日右少弁資業、并余、少納言經長、外記、史、弁少納言外不參、）上卿以下一一揖着座、（侍從中納言、二位宰相、左右大弁之外不參、）盃飯如常、（四獻後召盃飯、）次申廳裝束畢由、弁以下列立廳邊□□□部下揖進廳列拜畢、各相分着宴座、如常、一

獻右大弁、(左大弁依輕服、從朝所被退出、)次余取右大弁少納言弁酌、(余輕服也、須從朝所退出、而右大弁被命云、弁多不參、仍無可取盞座酌之人、擬先例、輕服人著宴座後、經座之間退出者、仍留從此役也、)次右大史光貴取余弁史外記座酌、三獻、藍尾如恒、次二獻少納言惟光、(有定、依位階上臈作盞、右少弁取之也、)次三獻少納言廣政、(間有定、依爲上臈、又取酌也、)次立筋即拔之退出、(納言中戸、宰相四戸、上臈退出之間、少納言弁立座、余依輕服不逢穩座退出、仍不記後事等、今日依服用丸柄笏、人々云、可謂有丸柄巡方、)十二日丁丑、參大殿直廬、奉仕陪膳之間、大殿被仰云、昨日不穩座退出之旨不可然、先例上臈讓次人退出、於參議以下者、雖爲輕服更不退出者也、(但重服者非此限、)況於弁少納言哉、昔樂期持來插頭花之時、取入懷中、猶候本座者也、而左大弁□汝已退出、是不知故實也者、

三年八月十一日乙未、依考定參官司、右衞門督、左大弁參入、(自餘宰相依物忌不參)時剋申文請印如常、考所少納言弁史史生(用外記史生)等立版位、依召次第昇著床子、史等又昇立皆如例、(史生在□下)□之少納言讀申、(第一擬政、ウチノオホイマウチキムト讀、)欲讀大納言之比、余起座讀申如例、事了上臈已下著朝所、一獻左中弁、(上臈著左大弁□)二獻權弁、三獻余、(○源經頼)事畢著宴座、左大弁取酌入上臈盃、唱平、飲畢著南面座、次左弁取酌入左大弁盃、(有藍尾、)次第入登至于少納言座、又有藍尾、二獻權弁、三獻余、事訖、上□已下起座、次著穩座、一獻左中弁、(左大弁下座、傳盃權弁、)二獻相弁、次羞粉熟、次召史生、次近邊諸司、次雅樂奏舞、(各一曲)奉插頭、(上料左大弁取之、大弁料左中弁取奉之、中弁已下史生取之、)次餅餤、次見參、次史信賢獻盃、(左大弁取酌、作立大史盃、史獻盞、大弁酌給、史著座、上臈羞大弁、令受盃、下座傳左中弁、)事了上下分散、及戌終歸宅、上宰相各一人云々、例不見云、今年始有此事、是皆衆日定云、

四年八月十一日庚寅、參官司、(定考)中宮大夫、左大將、左大弁被參、申文請印定考等了被著朝所、上官列立如常、各座定一獻、(左大弁)二獻、(權弁)粉熟、(即食)三獻、(余自一獻有損、)飯汁、(今年暑氣殊甚、仍有御羞、水花(水花一本作氷瓜)等、)四獻、(左少弁)餅餤云々、著宴座、一獻、(左大弁、次酌權座史、)二獻、(余、次酌二座史、)三獻、(左少弁、次酌三座史、)上下立箸、即拔之、各退出著東廊、頃之著穩座、一獻、(左大弁)二獻、(權弁)上卿遙仰權弁云、依去天曆元年例、可停止舞樂者、依疱瘡也、權弁召史、仰可停樂之由、三獻、(余)召史生、(此間雨降、仍列立廊砌上、)次召近邊所司、次見參、(上宣會日、不召之、史生等除見參、○一、一本作二、)史信賢勸盃、(左大弁取□酒盞、上卿盃之後、著木座、請盃巡行、儀如常、又二獻之間、權弁進著上左大將御盃、歸本座巡行、)

長元元年八月廿一日癸未、參關白殿、〈○藤原賴通〉內宮等、次參官司、今日考定也、及午剋源中納言參入、申文請印如常、次有考定、〈少納言資通、左少辨經長、〉少辨申了著朝所、二獻粉熟、三獻飯汁、四獻餠餤、次申文、〈此等從事、〉此間著衙及衆儒上下退出、今朝宴穩座可有讀否之由申關白殿、仰云、釋奠日有考定、猶止宴穩座了、況今日不可有、其故者、先例大臣有病惱、若當日上卿輕服等之時、止音樂舞等、今年殿下御重喪之中、女院又如此、官中何行遊興事哉者、仰所申可然者、參官以此趣仰史擧光、又左大辨示大外記賴隆眞人云、今日見參史四人也、於官廳申文、史三人時有无如何、若又結政座无座頭史、午管立申文之例有哉如何、賴隆申云、其有此例等、此定之間、左少史紀爲資參入、仍座頭一人、申文四人、如法行之了、

（中右記）寛治五年八月十一日、考定之間、上卿二人、〈中納言、大夫、〉參議一人、〈左大辨〉辨二人、〈右中辨、〉少納言一人、〈…〉參仕云々、藏人少將、

永長元年十月廿七日癸未、巳時許參內、次參太政官、今日依可有考定也、〈八月式日、依女院御給、延引、又以九月之間、殿下不例、御物忌、延引、又以…〉左中辨師賴朝臣予、〈宗忠〉藏人少納言成宗、大夫史以下史五人、大外記以下四人參來、頃而左大辨俊參、仍列立北廊柱北、〈南上東面〉左大辨加立戸東間、〈西面〉此間少納言成宗申云、下臈少納言遲參之間、予來迎者、頗遲々事歟、右少辨時範來從列立之辨少納言後加、其列、〈左衞門督公實卿〉大辨命云、人々早可著座、仍先大夫史以下出從戸著結政座、〈西〉中辨以下渡南北、〈上〉其後左大辨後著座、隨辨侍示次第、中少辨少納言等隨位階著座了、此間少納言家俊來追加座、是爲迎予行向外記廳之處、史生遲參已懈怠也、予置机上、少納言成宗外記一人可著座之由相催、外記三善信貞著座、并外記史生一人同著座、少納言侍人官符於覽筥令見外記了後、史生起座取筥覽少納言成宗見官符了返給史生、史生取著本座、〈官符…文書也〉左大將殿、〈○藤原忠實〉今日爲令參考定給、夜前從宇治令歸京給由有風聞、〈○註〉而未令參仕給、仍對侍中之間、光景推遷、左衞門督〈公實〉被示送云、宴穩兩

座可有歟如何、左大弁被答云、宴遷先例如此之時多被止、仍夜前内々申殿下、〇藤原師通 處、大略可被止由有御氣色、但是内々之事也、弁官等不可沙汰、今日上臈上卿以外記重可令申請殿下給事也者、上卿差外記信貞被申請殿下云々、且又被止件座例、年々偕外記可申上者、〇中略 外記返來云、依先例可止宴穩座、〇下略

〔中右記〕保延三年閏九月一日庚寅、今年無考定、希代之例也、

〔玉海〕治承四年九月廿六日乙亥、大夫史隆職宿禰來、唯今自福原所入洛也云々、明日爲參定考所上洛云々、　廿八日丁丑、昨日定考、今日新年穀奉幣共以延引、諸國不濟料米及幣料等之故也云々、

建久二年八月廿三日己亥、此日官考定也、上卿内大臣、（藤原忠親）大臣上卿希代事也 中納言親宗、隆房、參議定長、公繼等云々、每事嚴重殊勝云々、裝束用損亡之古物、上卿被答云々、

〔明月記〕建仁三年九月十三日、中納言殿候權弁令向官廳給、予〇藤原定家 同參、考定事令習給、申時許歸家、　十五日、巳時許御共向入道大納言衣笠亭、考定事終日被仰合、在其座多以聽聞、日入之程令歸給、予自路歸家、　十七日、今日考定云々、弁用巡方帶、

〔玉蘂〕建暦元年九月廿三日、今日官考〇考下恐脱定字 云々、上卿土御門中納言定通卿、有勸酒云々、但勸盃有口氣不令飮酒云々如何、

〔吉續記〕文永十年八月十一日庚申、今日定考也、式日被行之 上卿已剋可參、可早參之由、藏人左衞門權佐忠世狀到來、午始參官廳、著東廊内南面床子、西上南面、經床下柱外也、入自當間、請著者之、揖如常、外記史動座、左中弁親朝朝臣、左少弁兼頼、少納言在綱、新大夫史秀氏、兩大外記良季、師顯等兼在床子、〇中略 朝所申文之時無直弁、且建久二三年之間、定考被停宴座之時、朝所申文之時、棟範朝臣予時右中弁 參仕之時、可候直之由雖被觸、朝所之時無直弁之由、習傳之由執申、彼時無直之由、右司郎中之、右大丞於常例者、有直弁之條不可諍、計凡弁具文之時、直仰史之條、先例不審、限朝所申文無直弁之儀、不弁可由之否、答之、上卿被示合左

職掌

小定考

大丞、左大丞、古今有例、或一說無直辨云々、就家例中所存許也、所詮可隨上宣之由、右司郎中之、就常例可有直之由有上宣、就中焉雖久三年者、被棟範朝臣不候、直有子細歟、(件年依無職事、如此被示歟、)上卿大辨等被尋之、二三兩年之間、分明不覺悟、上卿吉田大納言、大辨定長卿云々、吉田大納言所見若令覺悟歟之由、左大丞示予、申不覺悟之由畢、(中略)予參內、直辨有無事、檢見舊記之處、長治二年八月定考、坊城殿令參給、直辨無所見、

〔延喜式 十一 太政官〕凡每月廿日、太政官録參議以上上日、少納言來月一日進奏、又錄○(以下二字據)以下及少納言上日、建辨官、辨官總修、符二日下知式部、自餘考文季祿馬料亦同下知、

○

〔名目抄 恆例公事〕小考定(カウヂヤウ、是ハ讀ニアラズ)

〔江家次第 八八月〕小定考事

於官東廳行之、(但年大臣以下少納言等著、是例不然、晴時日者所用、史所著也、著紙方幷職事由、見敦方時記、近代不然、)辨入自東廳東面中戶、著座、(西面)史入自同南戶、著辨座以南座、(北面)外記史生一人、(先是著文書之間、史官掌也、)官史生一人、(持硯)自南砌經道、至西廂北第二間立、(東面)先外記史生覽考硯筥、亦進置辨前、次兩史生還本列退出、次辨執筆定考了、(近例不必執筆之)次史召史生名、外記史生進取史生等考筥退出、次官史生一人、齎考文筥進之辨前、(如初置)辨定考了、史又召史生名、官史生二人參入、徹考筥并硯筥等退出、次辨起座、座著東屋外床子、略如本用中戶、所司改座、(辨座如初、史北上西面)史生酌酒、唱平、三獻了亦著、史稟辨仰、召官掌、二官掌立西廂壇上、史仰云、史生召、官掌稱唯退召之、史生著座、(史座次北、東南面、上官西北上、下間東北面東上、)酒部所史生等巡酒、(唱平)一兩巡後、辨退出、

〔日本紀略 四 村上〕應和二年八月十二日丁酉、番上定考、

〔左經記〕寬仁元年八月十二日丁丑、著小定考所、作法如常、事畢退出、 三年八月十二日、及晚景著小考定、先著東廳壇上床子、事具畢人自東面中戶、著座、(西面)史入自南戶、著、(北上東面)次外記史生一人、取入考

文宮進來、膝行置辨前退歸、官史生取入硯宮進來、膝行置座前退出、次又取筒授史、以辨定考、史讀簡、事畢、上勞史召史生名、（學）史生等次第來、撤宮筒等、了立座著壁外床子、次改裝束居饗饌等、官掌申事由、卽著座、二獻、召史生、（史召仰官學入召之）三獻了、各分散、

〔台記〕天養二年（〇久安元年）閏十月八日己酉、齋戒、小考定、昨日、辨已下皆參、朝隆參加、但俊長、師安、不參云云、後日召問云々、俊長傳左大臣報命、彼訪仰喜悅不少、疾病也、今日、小考定參入人、皆巡方、少納言螺鈿劔云々、但右大辨成疑、用瑪瑙云々、今案用巡方是失也、可用丸柄蒔繪劔也、不可及論事也、官政猶用丸柄蒔繪劔、何況小考定乎、今日、法皇參籠天王寺、近臣七八人扈從云々、少納言成隆云、江次第云、可帶巡方之由、見致方辨記、因所爲也、今案、件說難依遵歟、

列見

列見トハ、二月十一日ニ長上番上ノ六位以下ニ敍スベキ選人ノ、太政官若シクハ式部兵部ノ二省ニ列立シテ、大臣若シクハ卿ニ見ユルヲ謂フ、是ヨリ先キ本司ニテ、前年八月一日ヨリ其年七月三十日マデノ間ノ功過ヲ考ヘ、八月三十日以前ニ校定シ、考ヲ計ヘ階ヲ結ビテ式部兵部ニ送リ、省ニテハ、十月一日ヨリ始テ、十二月三十日マデニ覆勘シテ太政官ニ申ス、太政官ニテハ、其翌年正月一日ヨリ二月三十日マデニ奏聞シ、本司ニテハ、其路程ヲ量リ選人ヲ發シ、十二月一日マデニ省ニ會集セシム、省ニテハ、選人ニ向ヒ敍階ノ高下ヲ唱示シ、及ビ選中ノ抑屈ヲ披訴セシメ、成選シテ敍位スベキ人數ハ、得考ノ人數ト同ジク、中務式部兵部ノ三省ヨリ二月十日ニ太政官ニ申ス、其日平旦、三省ノ輔各、其丞ヲ引テ太政官ノ版位ニ就キ、考選ノ目錄ヲ大臣ニ進ム、而シテ輔ハ考ノ目錄ヲ讀ミ、丞ハ選ノ目錄ヲ讀ム、其翌十一

日ニ至リ、掃部寮座ヲ辨官ノ南門ノ内ニ設ケ、式部兵部ノ輔、自ラ諸ノ主典以上ノ成選人ヲ將キテ大臣ニ列見ス、省掌預メ事當ノ官人若シクハ朝集使及ビ選人等ヲ計列シ、大臣乃チ宣シテ、選人等ヲシテ入テ廳下ニ集ラシメ、省錄簿ニ依リテ引唱ス、若シ缺シタル位ヨリ昇降スベキトキハ、筆ヲ執リテ點定ス、事訖リテ穩座ノ座ヲ設ケ插頭ノ事アリ、但シ番上ハ式部兵部ニテ列見シ引唱スルナリ、サテ列見ノ後ニ擬階奏アリ、而シテ列見ノ日、祿ヲ賜フ事ハ封祿部節祿篇ニ在リ、

〔名目抄 恒例諸公事〕列見(レツケン)

〔令義解 四 選敍〕凡應敍者、(謂六位以下也、)本司八月卅日以前校定、(謂計考校、與考同、若帶二官以上者、一官爲本、其遷代文、不須二官共造、其遷文之類、亦同也、)式部起十月一日盡十二月卅日、太政官起正月一日盡二月卅日、皆於限內處分畢、其應敍人、本司量程申送集省、(謂量程者、皆十二月一日前申送也、集省者、令集於式部兵部也、)

〔儀式 九〕二月十日於太政官廳申三省考選目錄儀

當日平旦、中務式部兵部三省輔、各引丞一人、進太政官、候於南門、(掃部寮預設床子、)辨官未申政之前、三省輔各參、丞(輔執目錄、丞執目錄、)自官掌前北向、辨官廳前、登自廳西側階、各當床子立、大臣宣召之、輔共稱唯、次丞共稱唯、以就座、式部輔先讀申、次丞讀申、次兵部、次中務、並同、式部訖大臣宣、三省輔共稱唯、次丞共稱唯、退出、

〔延喜式 十九 式部〕二月十日考選目錄申太政官

當日平旦、辨官未申政之前、中務式部兵部三省輔、各引其丞、就太政官版位、如辨官申政儀、輔讀申中內外諸司諸家考目錄、丞讀申選目錄、次兵部、次中務、並如式部儀、訖退出、(事見儀式)

〔本朝月令〕四月七日奏成選短冊事

弘仁官式云、凡諸司官人得考、幷應成選敍者、中務式部兵部三省、二月十一日申太政官、其成選應敍

位者、式部兵部二省、各率諸司主典已上列見大臣、二省依簿引唱、若當昇降者、親自執筆點定、(事見儀式)番上者於式部引唱、〇中略 貞觀官式云、凡諸司官人得考、并應成選數者云々、三省、二月十一日申太政官云々、(今案、改十一日為二十日、列見如西宮記、〇又見延喜式)

〔儀式九〕二月十一日列見成選主典已上儀

式兵二省、預前作考文、史生等注選人名、以授省掌、告示諸司、前一日、二省錄應列見狀、申太政官及辨官、諸司裝飾廳并所所、當日昧旦、掃部寮設二省輔已下座於南門外壇上、(式部在戸內、兵部在戸外)、輔已下就座、二省省掌預於南門外路、皆列諸司專當官人朝集使及選人等、(式部在東、兵部在西)、大臣就座、辨官申政、訖二省輔已下起座列立門外路、(式部北面西上、兵部北面東上)、于時選人以上、以次進而列立、爰大臣喚召使二聲、召使稱唯進就版、大臣宣、喚式部兵部、召使稱唯退出喚之、二省輔共稱唯、丞代之參入就版、(式部東、兵部西)、大臣宣、成選人等將參來、丞共稱唯退出、復列、式部輔先參入、次丞錄各一人參入就版、輔就前版、丞錄取諸司申文并別記就後版、次省掌擎版、率選人等、且稱容止、入屯立屏內、大臣宣召之、輔稱唯、次丞錄共稱唯、輔先登自西階就床子、次丞錄登自西側就床子、(輔就東面牀座、辨座最南、錄者丞錄就北面座)、在史生等捧硯并短策筥、自屏以西參入、登自西側階、立錄傍、轉授錄、錄受之授丞、丞受之轉授置前机、丞乖受硯筥、置亦同、訖史生退出候於屏西南頭、爰輔起座申云、式部省申久、司司長上乃其年爾選成留申給止申、訖丞一人捧硯筥、東進至東第四間、北折當大臣座、東折進置机上、復座、次丞一人捧短策筥、同趣至机前、跪置筥於地、取短策置机上、取筥復座、訖大臣宣命喚輔、輔起稱唯、更居喚丞名、丞起稱唯卻居、輔云、令置版、丞起稱唯、居喚省掌名、省掌稱唯、丞云、置版、省掌稱唯趨置、(自一版位南六許尺置之)、復列、輔云、召之、錄共稱唯、錄一人取第一別記讀申、(初錄開別記之時、省掌總就版位左、以微敎正進退)、依次唱之、其詞云、司司乃長上乃人等乃選成留并若干、就中三點(三字讀訓、點字讀音)、(下二點一點亦同之)、其官位姓名選人稱唯就版、(下二點一點亦同)每足十人、丞一人命云、令直立、省掌稱唯直立、選人共稱唯、北面直立於版東、輔命丞云、退給之、丞起稱唯、唱省掌名、省掌稱唯、丞命退出、省掌稱唯轉告選人

共稱唯退出、省掌一人且稱客止、選人出、一人留取版退出、丞一人取簡還取短箕納簡復座、又丞一人取硯筥史生等進就幄傍受筥退出、事亦如初儀、訖丞錄自上退出、訖輔更就版揖而退出、兵部省亦同、

(延喜式式部十九)十一日(〇二月)諸司長上成選人列見太政官

當日早朝掃部寮設座於辨官南門內、輔已下就座、省掌預計列專當官明集使及選人等、辨官申政、訖輔已下列立南門前、召使出召、輔稱唯、丞參入就版位、大臣宣率成選人等參來、丞稱唯出還本列、輔率丞錄各一人入就版位、省掌取版位、率選人等入屯立屛下、訖大臣宣召之、輔已下稱唯、幷就座如常、史生等執硯筥幷短冊筥授錄退出、錄傳授丞、輔起座中云、式部省申久、司司長上〈已上〉某年〈某〉選成〈留〉中給覽中、丞執硯筥短冊筥各大臣前案、及省掌置版位、錄唱選人名、有常儀〈見本式〉

諸司番上成選人列見省

諸國史生抄選人名、以授省掌、勝示諸司使、期會集、當日質明、省掌計列選人、輔已下以次就座、〈[illegible]〉史生各持短冊筥就座、〈[illegible]〉輔命丞令成選人等參入、丞稱唯命錄令召省掌、錄稱唯命史生、史生稱唯召省掌、省掌稱唯進就版位、丞命率成選人等參來、省掌稱唯退出引諸司專當官及選人入、且稱客止、選人屯立屛下、訖史生持第一筥進授在上錄、錄置筥案下、出取短冊置案上、執筥復座、輔命召之、錄共稱唯唱之、〈[illegible]〉選人稱唯進就版位、〈[illegible]〉每滿十人、省掌稱直立、選人共稱唯就直立位、每滿五十人、丞命省掌退之、〈[illegible]〉省掌稱唯傳告、選人共稱唯退出、唱畢丞召省掌名、省掌稱唯、丞命聽之、省掌稱唯告聽、選人依次退出、史生捧筥退出、輔已下以次退出、

(延喜式〈雅樂〉二十一)凡太政官列見定考日、官人率樂人等祗候、

(延喜式〈大藏〉三十)太政官二月十一日列見、八月十一日定考日、賜饌、

〔延喜式三十八掃部〕凡太政官二月十一日列見、八月十一日定考、立床子肆鋪設、

〔江家次第五二月〕十一日列見事

列見、十月一日以諸司畿內長上考選文外國十一月一日進弁官、番上考文直付二省二月下二省、〇式部兵部十一月卅日以前二省按定訖、以一最四善立等第、具于考課令、二月十一日諸司長上成選人列見太政官、二省申之、四月七日奏成選短冊、十五日授成選位記、奏授列授位記也官〇太政官北路春日小路也、大弁者入官北門、著西廳見申文、問諸司具否、其詞弁少納言二省參著廳大臣入東戸也、大臣著倚子西面、納言以下東上南面、但有太政大臣之時、左右大臣與納言同列南面也、申文弁少納言以下、入自西戸南方立版位、有四位弁者列立版位之時、弁巽四位在少納言下昇階之時、四位弁先進摩靴、不知由緒、或說云、以上宣令告史之由也、

諸卿著東廳、入自東門、召使一人進襄機、昇石階經柱外著兀子、若大弁同道之時、至于官北腋、[illegible]大弁有欲分之氣色、下在尻正笏揖之、召外記問諸司具否、外記來自東廳柱外、當廳戸間東柱邊揖立、

著廳諸卿立兀子、[illegible]各渡扉西面揖著座、[illegible]或上卿經扉東云云、

次有申文事少納言一人、弁二人、立前版、外記一人、史四人、立後版、上宣召、五位先問、六位次問青唯、次五位次第二先昇、昇自南面西階、入自西第二間、經砌屋西柱與床子之間、西入更北進、入自各床子間著、但最末人自前著、有四位弁者、自版可進歟、此間有三段揖、第一人昇階之揖、與第二人離版之揖、同時共揖、[illegible]第一人著床子揖、第二人昇階揖、第三人離版揖、同時共揖、[illegible]第二人著座揖、與第三人昇階揖同時共揖、[illegible]第三人對階之間、外記史共起自西間階、昇著第一間壁下床子、弁上臈先立、中云、問揖、乃中[illegible]或中給[illegible]上臈、無著、弁復座、第一史起座、搢笏開文、讀申、上宣給[illegible]弁少納言先起、摩靴、唯、復座、次外記并申文史等唯畢、卷文復座、次第二史同上、上宣同上、次第三史問上、上宣給、次第四史同上、上宣同上、兩唯等作法、每度同上、次外記史起座、下自西側階、經西廊前退出、次少納言弁、[illegible]次第退出、如進儀、[illegible]時、以廳北第二間為版位、少納言弁立前北上東面、外記史立其後、唯有二揖、退時亦二段、或不揖、

次有請印事少納言入自廳坤角、經第二間著南床子、外記捧宮、史生捧印盤、經南廊、外記入自中央間、東折到上卿前、置宮於前机退、史生置印於案退、外記經中央間就東第三間床子、上卿置笏、以右手見文、[illegible]見畢先見外記方、後以左右手推出宮、外記自第二間走入給宮、經中央間立印案東、召史生名、一史生如例參立案前、外記授宮、史生開文、置印盤上、以鐵尺鎭之、拔笏申云云、上宣判、[illegible]史生判畢、申云云、上卿先見遣於少納言方、仰云、給へ、少納言起座、唯如常、次史生捧印、外記捧宮、[illegible]退出、次少納言退出、覽文返給外記之時、若有難者、上卿懸指於宮、外記拔

(…)

列見(…)、召式(…)、上卿召唯使二人於(…)後唯、一人立南版(…)、上卿云、式乃省兵、乃省召(…)、召使稱唯、右廻退出召之、二省丞立南版(…)、上卿云、還政(…)人等(…)參來(…)其唯出(…)、式部輔丞二人録二人入立版(…)、上卿召(…)、輔唯、丞録唯、昇著床(…)、(…)硯短冊(…)、一輔起中云(…)、一丞置硯笥於上卿前、居插笏持硯入、自南西二間(…)、經母屋中央、至上卿前、膝行三度、置上卿前机上西端、退立、取笏右廻著本座、二丞置短冊(…)、上卿云、令召(…)、輔立稱唯、復座、召一丞名、丞立稱唯、輔云、膝乃木令置(…)、丞稱唯、復座、召省掌、省掌稱唯、丞仰云、膝乃木置(…)、省掌稱唯、(…)常版南、退立本列、輔云、召(…)、兩録立稱唯、唱文(…)、省掌立輪木下、(…)唱云、(…)、選人稱唯、舉録把笏居、二丞進家司短冊(…)家司短冊如初、(…)二録唱文如初、(…)短冊(…)、輔云、膝(…)、丞立唯復座、召省掌名、(…)稱唯、丞云、賜給、稱唯云、膝出、(…)選人等稱唯退出、省掌皆還本所、史生撤冊、六位退出、(…)輔自升版退出(…)、兵部參進如前(…)、上卿以下起出著(…)所(…)、弁少納言外記史列立(…)所東廂(…)上(…)、已上卿以下人自西戸(…)分著座(…)人(…)、弁少納言(…)納(…)、三獻食(…)居飯汁(…)五六巡之後居餅餤、官中士設魚鳥(…)、上卿以下各執箸取笏、弁已下下立南廂(…)、上(…)一一降揖右廻出(…)、官(…)、上卿入自(…)北戸(…)立東二間柱下(…)以下立南廂西三間以西(…)、共再拜、上卿著(…)、次々入著(…)弁以下各相分著(…)一獻(…)

(…)

(…)

(…)

（酌、二三獻無盞尾、今案、二獻左中弁勸盞、先勸上卿、次勸第二公瓶、北大夫勸第三公卿、而次弁盞流南、次少納言遞流北、無盞尾、）三獻（右中弁勸盞、先上卿、次奧端公卿、次弁少納言如二上獻一、無盞尾、每公度瓶、）（史勸盃、中弁、次及史外記、又無盞尾、史一人、又勸勸盃史、）上卿立著乚、即拔之立出（脫靴、逡巡、著）著東廊、（弁以下著廊內）史中裝束畢、（立右階東、脫靴著）（逡巡下、而穩座上、）穩座上卿已下著穩座、（日上西面、大南面東上、參議東面北上、）弁少納言著座、（入自東壁、東上北面、著後史生等居肴物、無机、）一獻、（居弁肴）（物、云云）二獻、（居餅物、相次居餅飯、或三獻餅飯云云、）三獻畢、（大弁以下遷盃、弁座轉盃、如常、納言輪盃者召上弁、盃）召史生、（大弁候氣色、上卿揖、大弁仰史令召史生、立庭中、二拜著）（西廊座、前日座前謝也、）召近邊諸司、（大弁候氣色、如初）內記及近邊諸司入自西廊、立坤壇、（東上北面）昇自西小階、著云云、宴座不撤、外記史座、為近邊諸司座也、（近代有座事不見歟）著召雅樂、（大弁候氣色、於門外發音聲、居各一曲、爾日正廳內、舞人位、）猶揷頭、（大弁以下執、上卿以揷）（左方、自給右方、）大弁見參、（由東壁外見之、大臣已上參內之時、外記中上卿入見參、大臣不參之時或入云云、）申文、（大弁申如常、史居廳北、庭東二間、上卿目如常、）史獻盃、（大弁候氣色、上卿許、大弁執酌、史執盃獻上卿、上卿飲盃、大弁以酌授史、史獻盃、大弁候氣色、云、官某ヲ以テカハラケヲマキラセン、）事畢各退出、朝所并穩座、（居餅飲汁之饌、史獻盃等）（時、大弁拔笏、正笏中上卿、上卿不拔笏、不把笏、唯揖之、召史生、近邊諸司及雅樂寮中文等之時、上卿亦拔笏、正笏揖之、）

列見　二月十一日

入自東門、著東廊、（召使敷疊、外石階、經柱外、著兀子、）召外記、問諸司具否、著靴、（諸卿立北廊外東上北面、列立著之、）著廳、（從西、日上從東、納言用中戸、參議用西戸、）申文少納言一、弁二、（著前座、）外記三、史四、（著後座、）上宣、召五位（先唯）六位（後揖）著座、（有三揖、）第一弁起座、結申史申文、（乃司申久、上宣與之、官乃內乃司申、上宣給戸、）畢各退出、（如遣儀）請印、少納言著、外記捧筥、史生捧櫃、外記置筥退就廊（史生置印退）上置筥、以右手曳筥、（以右手見之）先見遣外記方、（以左手推出筥）外記重給之、外記召史生、史生唯參、申云、枚文若干枚、印刻須、上宣判、史生唯申、印刻ツ、上先見少納言方曰、給、少納言稱唯出、列見（外記入自乾戸、置式取筥）上召、召使、（二人於後唯、一人立版、）上宣、式乃司、兵乃司召セ、召使唯出召之、二省丞立版、（入自西扉）上宣還成（讀留）人共（トモ）持參來巳、共唯出、（右廊）式部輔率丞錄立版、上宣召須、輔唯、丞錄唯昇著、（六位西階）置硯短冊、（史生錄置之、）輔起結申、一丞置硯上前、（西端）二丞置短冊、（東）上宣令召（與）、輔立唯復座、召一丞名、丞立唯、輔宣云云、丞唯復座、召省掌唯、丞仰云、省掌（唯置之）輔云、召セ、兩錄唯、唱文、省掌（万ヅ）錄居、二丞置家司短冊、第二錄唱文如初、撤硯短冊、（丞）輔云、罷給、丞唯復座、召省掌、一唯、丞云、罷給、唯、省掌還、史生撤筥、（六位退自西階）輔退出、兵部參進如前、上

以下一一立、（自上臈）上達部司設座、入自朝所西戸、（少弁以下取笏）上卿於中階揖、（参議）弁少納言著、一獻、（大弁取）二獻、（自西戸経座北方著）[illegible]座、（大弁入自中戸向上）著下、三獻、飯汁物、四獻、餺飩、官掌申云、弁以下下立、上以下次第降揖、於廳北壇上著靴、上入自廳後中戸、立二間（東）東柱下、坤首、納言以下列立南廂西三間、（六位下）立定共再拜、上著西廂座、公卿（入自中央間）、弁少納言（入自三間）、六位（入自一間）、一獻、（大弁勧盃）二獻、（中弁）三獻、（次弁）上卿以下下、著即披之、一一紙、（取北二戸）於北壇脱靴著東廊、史申讀東舉之由、上卿以下入自後戸著穏座、（四間）納言、（南面）弁以下、（經南廂）著、（北面上）一獻、（大弁）居弁肴、（次盃）二獻、居餺飩、三獻、居餺飩、（四獻）大弁中史生召、（史生[illegible]）史生参入、大弁中丞遣諸司召、大弁中[illegible]諸司召、参入、（[illegible]）大弁以下[illegible]、（上卿）左大弁出[illegible]外、（少弁）見見参遷候氣色、史申文（[illegible]）二上見畢返給、次盃四獻、大弁中史某丸勧盃、上揖不取笏、以四通一度給史間一紙、中史勧盃、（入立）[illegible]事畢公卿自後戸出、

著朝所

弁少納言以下先列此所著座、此間或先給粉熟餅餤等、上卿以下於達官所脱靴、自西戸入、（[illegible]之、上於二間中戸）（東、自[illegible]）弁少納言以下列立於幄屋東庭地、弁少納言立於南一二間、（北上）外記史立於二三間、（南上、大夫外記四間、）（上、史[illegible]）上卿以下各於階下揖、弁以下答揖、日上用中階、以下用南階云云、次非参議大弁入自西戸著、次弁少納言著、（西上北面、小[illegible]）次外記史歸入於北[illegible]內、（[illegible]）

次一獻、（[illegible]）

次二獻、（[illegible]）四位不

執[illegible]、（[illegible]）五位取之、居粉熟、（[illegible]）弁参議大弁前物史居、（[illegible]）著下、（[illegible]）

三獻、（[illegible]）居飯汁物、（[illegible]）以此折敷撤粉熟、大弁執笏候氣色、上卿揖許、著下、

四獻、（[illegible]）居餺飩、大弁披著執笏候氣色、上卿不披著不執笏揖許、（[illegible]）

（於戸外[illegible]）

餘宴穩座時、於此所見參云云、（三獻後可見之、中文三獻可候、其後可並餅餘、而承曆五年更有四獻、盞餅餘、此事違例、依有事停宴穩座、何可過三獻乎、三獻外調之無算、此時遊宴之甚也、此時可停歟、）大弁起座出於西壁外、著床子、史持文來奉之、歸入於北戶內、頗進立、（中弁以下候時無自床子、）大弁見了置床子、史來執之退入、大弁起座著本座、候氣色、上卿揖許、此間史頗臨柱南立云云、大弁顧面、史進持文、立於西庇南一間西邊、（中央、）上卿顧眄、史高聲稱唯進文、上卿自右取文見之、（其作法如南所、）史下立可稱唯歟、事畢官掌立南庭西二間中央、申云、裝束畢、（入自西戶中之、進於東北壁外、）上卿以下降座、弁少納言降立、立於南壇下、當庇西二間、（西上北面、）非參議大弁同下立云云、（西一間、）上卿以下一一揖出、（納言以下步三儀南面揖、右顯出、參議於香殿下揖云云、）到造曹司著靴云云、（近例上卿於北壇、以次公卿於西廊中戶外東、弁以下於西、故右府御次第日、上卿以下於西廊著靴、廳納言爲上卿者於廳北壇上著靴云云、）

宴座

上卿以下於造曹司著靴、（當日上卿於東廊著、以下於西廊著之、）上卿入自廳北面中戶、（大臣用東戶、）立於母屋東二間中央、（北面西上、）納言以下自西廊戶經廳南廂西面妻列立如恒、（東上北面、）納言以下參議以上立南廂西第三間以西、弁少納言立其後、（第一人當第一間、東進立、）外記史列立壇下、（當日立壇上、）相共再拜、上卿先著、（西面、）公卿入著、（入自母屋中央間、相分著、）（除第一著者外、第一人著南面座、爲飲盃也、參議大弁可著北面、然上卿外唯左右大弁候時、左大弁著北、右大弁著南、延久三年參議座經信時例也、上卿外唯有大弁一人著南、經長卿日、左大弁獨可著南云云、）（雖未著座、大弁著此座云云、參議大弁有著例、云云、）弁少納言著、（入自西第三間著、北面、少納言南面、）外記史著、（入自西第一間著、外記南面、史北面以上弁參議大弁大夫外記史不著云云、）一獻、（酒部所在西三間南、）左大弁起座、一史又起座、到酒部所酌酒、（史生酌酒授史、傳奉大弁云云、）大弁搢笏取杓、到上卿座南邊、入酒於白銅盞退、唱平、上卿飲之、次第西行勸之、入自公卿座末北行、勸最末人、次第東行、到北面第一座人、頻勸三度、（以上皆每度唱平、聞之盡盃、）畢授酌於史復座、次左中弁起座到酒部所、史生授酌取之、到左大弁勸盃、（唱平、）次到弁座勸之、次第西行、入自弁少納言座末北行、勸最末少納言、次第逆上、到北面第一少納言、頻勸三杯畢、返酌復座、次左大史起座、到酒部所取酌勸左中弁、次到史座、次第勸之、自座末北行、勸最末外記、逆上到第一外記、頻勸三度畢、返酌復座、次第二史起座、到酒部所取酌勸左大史、畢返酌復座、參議大弁勸酌時勸公卿座、後又勸弁少納言座云云、二獻（以後無盃酌、無右大弁行酒儀云云、）權左中弁勸公

卿座、次勸弁少納言座、巡復座、第二史勸於行酒辨幷史外記座、巡復座、第三史勸於行酒史、三獻、第五弁(少納[illegible])勸公卿座幷弁少納言座、第三史勸行酒弁幷史外記座、第四史勸行酒史、上卿以下立箸匕、([illegible])上卿起座退出、弁少納言以下相共起座、上卿退出、後更居、一一退出、(大臣時、納言以下皆起、)

上卿於東座脱靴、以次於西座取之、

公卿著東座、弁少納言著同座、內不敷座、有酒肴、大弁東面、([illegible])參議東面也、中弁以下北面、少納言南面、史北面、外記南面、([illegible])弁參議大弁經座上著北座云云、或不著座、經東舉後、史一人進立東庭北面石階東壇下、申云、設東舉、([illegible])兩儀立壇上云云、([illegible])寬治二年、參議右大弁通俊著東座內面座、([illegible])上卿以下更自座後隨座中戶著座、([illegible])弁以下著、([illegible])一獻、([illegible])坏盛行到參議座、參議下座轉於弁座、弁進自座上受坏、插笏取盃、歸還進於參議者召上弁於納言座東端盃云云、([illegible])居弁座肴物、([illegible])二獻、([illegible])大弁披書執笏、執氣色、([illegible])著下、三獻、居餠餤、([illegible])大弁披書執笏申云、史生召、上卿又披書執笏揖許、大弁召史生、史生等出自西廊南庭立庭中、上([illegible])再拜、([illegible])舉盞西廊座行、([illegible])大弁又執笏申云、近邊諸司召、上卿又披書取笏揖許、大弁召史仰之、內記及近邊諸司人自西廊立坤壇下、東上北面再拜舉、幷自西小階著、([illegible])召五位內記、令候弁座末、([illegible])史獻盃於件座、([illegible])大弁披書取笏申云、雅樂寮召、上卿正笏披書取笏揖許、大弁召史仰之、播部散序、雅樂寮於屏外奏參音聲、參入著座、([illegible])舞各二曲、([illegible])兩日於幄前舞、此間大弁以下獻插頭華、([illegible])日上料大弁取之、([illegible])史傳奉之、插冠左方、納言以下執之、納言插華、參議數多、插冠右方、([illegible])弁少

納言料史取之、(以二擲若時事一擬二冠後一)或此間以二肴物一折敷一居二諸卿前一、舞畢雅樂退出、(有二退出音聲一)大弁遷二出壁東座一、見二是參一、(少弁一人相從)史奉レ覽二見參一、(史、大夫史之外、第一人參二當座一歟、)一、史取、(不レ插二文杖一、出二於東座一、經二弁座末後等一、進二居大弁座下一、奉二文於大弁一云云、取之一一見畢、下レ史、史取之歸去、不レ結)貞信公御子孫大弁者不レ起レ座、於二穩座一見之云云、(件儀入條大將廉義公云云、文範有レ告、)申文七枚也、(一枚公卿、一枚少納言、弁一枚、史一枚、內記、一枚外記、一枚外記史生、一枚左右史生、一枚官掌召使、以上三枚續爲二一通一、但至二年月日一者在二最末一、公卿以下皆貫二重之一、)大弁歸二著穩座一、申云、申文、(四條記曰、近代唯候二氣色一、)上卿披奏正笏揖許、史插二文刺一、經二南砌一居二廳北廂東二間一、上卿目、史稱唯、著二膝突一覽二申文一、上卿見之、畢先給二表卷一、次見參七枚一度給之、(四條記)若大臣以下候レ內者、史先申二上其由一、入二見參一、執政大臣、太政大臣、幷七十以上公卿、雖レ不二參入一、可レ入云云、若大臣參時、史結申曰、見參文申上(止)申給(不)云云、納言以下史披レ文一枚(貫重故也)之候、上卿揖許如レ常、史退出、次四獻、居二餅餤一、(四條記、近代無二此獻一、)次大弁拔レ箸執レ笏申云、令二佐官某獻一レ盃、(奉、)厨家別當史可レ獻云云、(近代多用二擬國史一爲二別當一、亦今夜國史候二中文一、)上卿不レ拔レ箸不レ執レ笏、揖許、大弁召レ史令レ獻レ盃、次下臈史傳二奉酌於大弁一、大弁起レ座取レ酌、史取レ盃相二比大弁一、(西宮列見日著レ座云云、定考日不レ著レ座云云、可レ尋、)自二床子下一經二上一行步、史隨步進二居上卿前地一、大弁作立盛レ酒、史擬二上卿一、上卿揖、史稱唯飲之、酌レ酒奉二上卿一、上卿放レ盞之後、(大臣此間取レ笏、替給レ史、史退歸)云云、(先子孫弁少納言持來、中替、大臣藏二於衣下一云云、)大弁給二酌於史一退歸、史行酒云云、(至二參議座一云云)給レ祿、史此後下レ庭拜云云、事畢公卿自二後戶一退出、大弁先酌二史料一、次酌二上卿料一、次又酌、放レ盞之後可レ退歟、大弁不レ候、無二史勸盃事一、(寬和元年八月例)申文、(近代四枚、公卿一枚、弁少納言一枚、外記史一枚、外記史生官史生官掌召使一枚、闕白必入二見參一、公卿者不レ注レ名、大臣不レ注二朝臣一、)中弁以下奉仕、大弁代官時、史不レ加二懸紙一覽レ弁、若此時大臣以下被レ候レ陣者、外記進居二廳北廂東二間一、(中央)申云、被レ候レ陣上達部奉レ入二見參一、(奉、)上卿以レ仰曰、誰誰參給(留)、外記申二其人人一、上卿目、外記稱唯退出、大臣不レ被レ參レ陣時無二此事一云云、

〔公事根源 二月〕列見　十一日

上卿辨少納言外記史などまいりて、太政官にておこなへる公事なり、六位以下の藝能ある物をえらびて、式部兵部二省より率してまいれるを、上卿のそれをめしよせて、器量容儀をみる心也、朝所幷に宴穩座につきて儀式有、插頭の花を上卿以下の冠にさす、大臣は藤の花、納言は櫻花、參

議六位みなつくり花なり、弁參議以下は時の花をさす、くはしき事は定考の所にしるし侍べし、

(三代實錄四) 貞觀二年二月十一日壬辰、公卿於太政官曹司廳、列見文武官成選之人、

(日本紀略醍醐) 延喜十三年二月十一日、列見延引、依死穢也、 十七日、列見、

(日本紀略村上) 康保三年二月十三日戊申、列見、去十一日依弁官物忌延引、

(日本紀略冷泉) 安和元年二月十七日庚午、列見、無宴座穩座、去十一日依弁官不參延引也、

(日本紀略一條) 長保四年二月廿五日辛卯、列見、式日依故院御事延引、今日無宴座、

(法成寺攝政記) 寛弘五年二月廿三日甲寅、列見、着右丈座、召外記惟島雅親見參、上達部仰可入見參由、官候、

(日本紀略後一條) 寛仁二年二月十一日乙亥、列見、停止音樂插頭花等、依三條院崩也、但有宴穩座等、依花山院例也、

(左經記) 寛仁二年二月十一日乙亥、時々雪降、依列見參官、事儀如常、但無音樂并插頭、是依爲三條院御忌年之內也、又依雪降用雨儀、亂入夜月明雪晴、仍依上宣史生等列立庭中、再拜著座、及寅剋事了、

四年二月十一日癸巳、參官司、依列見也、加階之後、須參外記結政之後可著官結政也、而去六日慮外觸穢、仍前日申合侍從中納言云、雖可及十日、依爲十一日宜日、依列見參東官結政、仍不可參外記結政、爲之如何、被命云、結政吉日可著也、先著官結政之後、更擇日可著外記也者、仍所參入也、著西廳結政、少納言見請印文、次史於庭中床子結申文、一々渡南方、次外記一人渡南了、次余(○經賴)著座渡、(五位弁立中文、次少納言先可經版前歟、)次少納言基房立、次右少弁義忠立、次少納言還立版位、余、次右少、次外記史等立、後版上召、弁少共唯、次外記共唯、次余進著床子、次少納言、次右少弁(三條知則)云云了、次第退出、次請印、次二省列見云云、次著朝所、一獻左大弁、二獻右大弁、三獻左中弁、四獻余、次著宴座、一獻大弁大將、次酌左中弁、二獻右大弁、次酌余、三獻少納言信通云云、著穩座、一獻左大弁、二獻右大弁、三獻左中弁、肴

如常、

長元元年二月九日甲戌、今朝大夫史貞行宿禰來云、今朝關白殿（○藤原頼通）仰云、御心喪之間、列見宴穩座可有哉否如何、尋先例可申者、則尋先例、貞觀十四年列見無穩座、（去年九月皇母后崩給、御心喪未畢之間也、）

〔中右記〕長治元年二月廿八日、今日有列見、上卿治部卿、（俊實）左大辨、（基綱）右中辨、（長忠）少納言、（明實時俊）參入、一人不參之間、日漸欲暮、仍無申文、是長元長和之間有此例云云、朝所事及秉燭、頭辨重資朝臣追參加、頗不便也、他辨故障云云、予今日不參、與左大辨依位階上臈、互不參會如此座也、

今日列見、申日事、陰陽師等不用也、式日延引之後、諸事被用吉日也者、但大外記師遠申云、列見先例雖延引、猶二月中所被行也、三月例世間不吉、大事之時必被行也、至考定者雖無指事、九月例多存、列見超之例三月度、皆依凶事也、但去承德三年二月、著座參議保實一人也、而重病、仍被行三月也、其後又六月有凶事、至申日者、強不可忌、先例除目申日被行也、就中改元以後擇吉日被始政由、於今者何事之有哉、件日事、左右大辨相議、以右大史有時申左大臣、申殿下奏事由、仰云、不吉例甚可無便、今日可行者、件事叶愚案、仍今日俄被行之也、

〔百練抄 七 近衛〕康治元年六月十六日、未著座公卿准諸節會、參官外記廳、可勤列見定考政之由宣下、

廿二日、列見、未著座公卿八人參著云々、

〔台記〕天養二年（○久安元年）二月八日甲申、史來云、列見料米、近江國司如數辨濟了者、仰云、式日可行者、即可行列見事之由、仰頭辨資信朝臣、又可催二省及諸卿之由、仰大外記師安朝臣、（式日事不催仰、而近來多式日不行之、仍仰可催之由、又近來官掌催諸卿弁、仍仰外記使召使催之、令官掌催諸卿可無難歟、至大臣者史催之、）十一日丁亥、列見、辰剋參官、巳一剋著廳、午二剋就朝所、五獻後餅餤、次有圍碁、（東座、權右中辨朝隆朝臣、左少辨師能、西座、少納言成隆、同能忠、余已下相分爲念歟、）宴穩等座如常、舞（左春庭樂、承和樂、賀殿、右長保樂、延喜樂、納曾一人、）申四剋事了退出、自待賢門有出立儀、委旨在別記、

〔百練抄 七 近衛〕久安元年二月十一日、列見、有圍碁、依舊規也、

〔台記〕久安三年二月十三日己巳、一列參宮、〈已參入、可謂講〉列見如常、但依入道左閤服、無宴座、於朝所行申文、正暦四年七月廿六日左大臣出家、〈雅信〉廿九日薨、八月十一日定考、無宴座、用前例也、

〔山槐記〕仁安二年六月廿五日辛卯、今日列見也、〈近江國依未進、停式日、所延引也、〉

〔玉海〕治承三年三月廿九日丁亥、今日列見也、先著官廳、然先行申文、次列見、忠親、實綱、家通、長方等參勤云々、無宴穩座等、當院卜定所使亡之故也、康和四年八月十一日定考、依伊勢齋宮院屬候舍燒亡例也、

〔玉蘂〕建暦二年二月十日丁亥、列見也、〇中略傳聞、無宴座、依關白服儀事云々、　十一日戊子、此日列見也、上卿土御門中納言定通、被止音樂穩座等、不可然歟、子細見昨日記、

〔三長記〕元久三年二月十一日壬戌、今日被行列見、仍午刻許出土御門、先參內、謁女房、暫伺候、次參官廳、右大辨〈公定〉右中辨光親朝臣、權右中辨清長朝臣、右少辨資定朝臣、少納言長季等參、各候朝所、〈但權[illegible]〉〈[illegible]〉予〈[illegible]〉加座、上卿遲參、可奉仕之由、予仰、前家則當史成弘、相待上卿之間、人々閑談、臨時上卿二位大納言被參、右大辨以下列座、史奉結政座了、大丞以下又次第著座、申文儀等如例、史外記等過了、權辨左少辨先起座、次少納言長季起座、各到申文、大丞又被著座了、予右中辨結政座暫閑談、申文請印列見等儀如例、朝所四獻又如常、予右中辨權辨朝所事了早出、予參殿下、及深更退出、

〔葉黄記〕寶治二年十二月廿六日己亥、今日列見也、土御門大納言、新中納言、土御門宰相中將、皇后宮權大夫、左右兩大辨、右中辨〈顯朝〉權辨〈時繼〉右少辨經俊等參仕、親顯、時繼、經俊等、雖季顯朝臣、不可交衆之由、有巷說、其中親顯、經俊、皆猶云々、被是太見苦事也、資頼卿又可申被斑猶云々、事頗似物狂、予〈[illegible]〉內々加制止了、自院御所可有御沙汰之由有其聞、各有召、欲被聞子細之處、本自不存之由也、仍今日各出仕、

〔續日本紀〕〈二文武〉大寶元年六月癸卯、始補內舍人九十八人、於太政官列見、

宮內省列見

〔西宮記二月〕列見十一日
弘仁五年三月五日、於宮內省有列見云々、

擬階奏

擬階奏トハ、四月七日ニ成選人ノ考ヲ計ヘテ、位階ヲ擬定シタル短冊(短冊或ハ短策、短籍、短尺ニ作ル、)ヲ奏スルヲ謂フ、式部兵部二省預メ六位以下八位以上(是ヲ奏授トス)ノ擬階ノ簿ヲ造リ、四月一日ニ太政官ニ進ム、官卽チ勘會シ、更ニ奏文ヲ造リ、七日ニ至リ大臣タル人、參議以上ヲ率ヰ、紫宸殿ニ上リ、御前ニ於テ先ヅ奏文ヲ上リ、次ニ成選ノ短冊ヲ上ル、是ヲ擬階奏ト云フ、短冊ヲ奏シテ後ニ預メ位記ヲ書シ、太政官ニ進メテ請印シ、其月十五日大臣以下朝廳ニ就キ、二省ノ官人敍スベキ人ヲ率キ標位ニ就カシメ、辨大夫宣命シ、敍人再拜舞踏ス、二省乃チ其名ヲ唱ヘテ位記ヲ授ク、

名稱

〔名目抄恒例諸公事〕擬階奏(ギカイノソウ)

〔倭訓栞中編五〕ぎかい　擬階と書り、擬階奏といふ事見ゆ、二省以六位以下八位以上奏授階成選短冊上太政官、而後大臣奏之、謂之擬階奏と見ゆ、擬階奏連署之時といふ時は、階を擬し連署を奏すとよむべしといへり、

奏成選短冊

〔本朝月令〕四月七日奏成選短冊事
弘仁官式云、○中略凡式部兵部二省、進成選擬階短冊者、各預造簿三通(○通恐衍字)月內入外記、總造奏文、預申參議以上、其日大臣以下、共奉奏聞、(事見儀式)○中略貞觀官式云、○中略凡式部兵部二省、奏成選短冊、三月內云云、(今案四月七日奏之)

〔延喜式十一太政官〕凡式部兵部二省、進成選擬階短冊者、各預造簿、二月內入外記、總造奏文、請參議以上署、四月七日、大臣以下共牽奏聞、事見儀式、

〔延喜式十九式部〕四月七日奏成選短冊、諸司選人無故不到者特降已乾階、然短冊即依階及年以次經貫、乾丞錄各執、別記計會、盛宮納櫃、又造擬階簿、進太政官、官即勘會、更造奏文奏之、其日質明、二省以短冊櫃於宣陽門外候之、事見儀式、

〔內裏式中〕奏成選短冊式

四月七日、大臣率參議以上、大納言執奏文、若不在者中納言執之、入自日華門、就版位、式部兵部丞各持短冊櫃、與錄相扶、若親王任卿、及參議以上任大輔者不相扶、置櫃大臣後一許丈、丞等退出、錄跪侍立櫃後、勅曰、麻參來、參議以上共稱唯、升自東階、立床子後、置子數上、大臣升執擬階奏文、奉進御所、自同階、授備奏杖於外記、復本座、若親王任卿者、[illegible]御覽奏文畢、共著座、式部卿乃喚丞名、若親王任卿、及參議以上任卿大輔喚少輔、卿喚之、丞一人稱唯、兩丞參入、共開櫃執短冊侍授、卿退立櫃後、若親王任卿大輔者、輔授少輔、及參議以上、卿升殿進至御前、披候執冊、相逢置座、去御座二許丈、執侍跪竝立、若親王任卿、及參議以上任大輔者、少輔升殿授、少輔立階下、大輔跪、御覽畢、輔丞傳授、若親王任卿、少輔升殿授之、立階下、乾卿輔還本座、丞捧櫃蓋退出、次兵部亦如此、乾大臣宣式部省、卿稱唯、次宜兵部省、卿稱唯、更宜罷去、二省卿共稱唯、若親王任卿大輔稱唯、及參議以上任卿、喚丞名退如入儀、若親王任卿者、參議以上次就宣仁門、或有應進位階者、臨狀擇叙、兵部亦如此、若有不御覽短冊者、勅曰、短冊者、賜之、大臣即奉勅稱唯、宣罷去、其儀如上、不喚參議以上、

〔儀式九〕四月七日奏成選短冊儀

式兵兩省預造入位已上擬階簿、四月一日進太政官、官即勘會、更造奏文、當日平旦、輔已下省掌已上、齎納短冊櫃、候於宣陽門外、待大臣參入之後、齎之至宣陽門、錄代之齎至宣陽殿東南頭、參議已上大納言執奏文、若不在中納言執之、大臣[illegible]、入自日華門、就版、丞代之齎櫃、與錄相扶、若親王任卿、參議已上任大輔、不預、進置大臣後一許丈、

丞等退出、卿輔磬折立檻後、勅曰、喚(天)參來、參議以上共稱唯、升自東階、立床子後簀子敷上、大臣取擬階奏文奉覽、卽降自同階、授插文杖於外記、復本座、(親王任卿者、候陣邊、參議以上立定、升立床子後、其座在東第一間西柱北邊、參議已上未參入之前、仰掃部寮、令設床子、)御覽奏文了、就床子、式部卿若大輔唱丞名、(若親王任卿、及參議已上任大輔者、少輔唱之、)丞一人稱唯、兩丞參入、共開檻執冊筥授卿、退立檻後、卿升殿進至御前、置筥取冊相比置陳、取筥去御座二許丈、磬折而立、(若親王任卿、及參議已上任大輔者、輔理階、少輔升殿授、降立階下、)隨御覽畢、輔丞傳授、(丞至階下授輔、還立檻後、輔升殿授卿、還階下、)訖卿輔復還本處、丞掩檻蓋退出、次兵部亦如此、訖大臣喚式部省、卽稱唯、次喚兵部省、亦卽稱唯、更宣、喚(天)去(禮)、二省卿共稱唯、(若親王任卿、及參議已上任大輔者、座立少輔稱唯、)唱丞名、退如入儀、(若親王任卿者先退、次參議已上以次退、但出自宣仁門、)或有應階者、隨狀擢叙、兵部亦如此、若有不御覽短冊者、續大臣卽奉勅稱唯、宣、喚(天)去(禮)、其儀如上、(參議以上不候者座、)

〔延喜式 三十八 掃部〕七日(四月)○四奏成選短冊、紫宸殿設參議已上幷式兵二省卿座、

〔西宮記 四月〕擬階奏(第七日擬階奏、於東如旬、無出居、母屋東一間西柱北邊、西面北上、立卿座、)

二省候日華門外、(門左右立案、辛櫃、有蓋及協書、各輔丞一人、丞二人、錄二人、史生等候、延喜十二年、式部丞一人代官、)上卿令奏卿代事、(卿參時不奏、以參議爲代官、勅許了、)二省輔立日華門、天皇出御、公卿著靴、列立南庭、(出自日華門、二省輔立日華門外西面、式部北、兵部南、大臣當版位、大納言執奏杖、比至門外、外記下授奏杖之、)參議以上列(去版一丈、)兩省丞各二人、荷櫃懸肱也、不懸肩、兩輔相扶、(參議不扶、)入立大臣後一丈、輔等留立檻南、(五尺、)丞出了、勅、持參來(毛天字古末)公卿稱唯昇殿、(共昇東階、入軒廊東一二間、立南上、親王參入者、此間自階不可昇、)緣卿代分入、雙立座後、(在母屋東第一間西柱、北上西面、)大臣奏、(大臣揷笏、取奏杖、大納言又得、自廊東間直入、到御前、頭東、西面跪、膝行進之、)四天皇覽文、(天皇取之、御覽之間、大臣持書杖、逡巡左廻、自庭路東行、下自東階、於軒廊西一間、給杖於外記、跪給了、把笏、昇經公卿後、立本所、天皇覽、天皇置案上、延喜十二年四月七日記云、天皇此間勅曰、短冊者持退、諸卿稱唯、大納言召二省輔、唯、上卿宣勅語、輔丞稱唯、入徹櫃、或說云、御覽天後可有勅語云々、又覽擬文畢、勅云、短冊者、之大臣稱唯、宣持退、而不覽短冊時勅也、)與公卿著座、(卿代雖設別座、依次著加、)式部輔進短冊、(式部輔召一丞名、一丞唯、兩丞共入立檻下、一人、一人番立輔、一丞拔劫開蓋、丞取短冊筥授輔、輔丞退立、輔挿短冊筥經軒廊東一間至東階下、)兩卿代奏短冊、(式部卿代立座、出自母屋東一間至階上乾面立、輔昇階授之、卿自左、輔至降立階下、卿代取筥、自庭四行、至御座、不列、膝行五尺、膝行置筥、左方取短冊、置御座前机上、取空筥逡巡左廻、自御座南、進、北面、磬折立東額間柱下也、)卿代取短冊、天皇覽短冊了、(逡巡膝行、置筥、取短冊入筥、逡巡左廻、還立東階上緣、輔昇取筥歸下、輔代把笏立、一丞進來取輔持筥退、)二丞又取短冊筥相代、(兩丞相經過於庭、)進至

階下、〔[illegible]〕輔又進取揖奏〔[illegible]〕兵部奏聞、訖

儀〔[illegible]〕大臣召式部省輔、稱唯、又召兵部省、唯、大臣云、持參〔[illegible]〕、兩輔稱唯、各召丞名、丞入〔[illegible]〕、

〔[illegible]〕公卿下〔[illegible]〕著陣〔[illegible]〕

寬平七年四月七日、依兩輔立宜陽殿西庭〔北上[illegible]〕

延喜十二年、大納言仰外記、短冊各持參者、依例可行者、依宜下仰二省、〔[illegible]〕

不出御儀

上卿著陣、外記申擬階奏候由、上卿付藏人令奏聞、〔[illegible]〕上卿著外座、召外記、令進奏文、〔外記以文[illegible]〕

〔[illegible]〕

殿座、諸卿著宜陽殿座、藏人仰不出御給之由、次令敷座、上卿自陣所使奏宜陽殿、上卿仰外記、令召

二省輔〔[illegible]〕上卿乍座仰之云、式乃省〔々〕、唯、兵乃省〔々〕、唯、

仰云、短冊〔[illegible]〕省〔[illegible]〕兩輔稱唯、次第退、公卿著陣座、

〔北山抄一〕七日奏成選短冊事〔[illegible]〕

外記申二省〔[illegible]〕候由、仰可令候由、即令藏人奏擬階奏之由、仰云、不可出御、依例可行、〔[illegible]〕

仰召裝束弁若史、仰可令敷宜陽殿座之由、〔[illegible]〕次仰外記、令進奏文、見畢參御所令奏之、返給復

本座、〔[illegible]〕外記候小庭、上卿目召令退、次諸卿移著宜陽殿座、〔[illegible]〕次仰外記、令進奏文、召二

省、二省輔入自敷政門、立小庭、〔[illegible]〕

上卿召式部省、稱唯、次召兵部省、稱唯、共仰云、短冊〔[illegible]〕省仁持參〔[illegible]〕乃任仁行〔[illegible]〕

〔[illegible]〕

同音稱唯退出、公卿復陣座、〔[illegible]〕

延喜十二年四月七日、御南殿、奉覽奏文之道、自公卿座西直道跪御帳東、奉之云々、〔貞信公記〕

承平二年四月八日、昨依上卿不參、擬階奏停止、舊例後日奏之云々、召使來申、明日可參之由、

天暦九年四月七日、令奏候擬階奏由之次、令加奏去夜令候陣中之事、昨日今日御物忌、仍仰外記令傳也、

安和二年、上卿一人行之、（貞觀例也、寛平七年、承平五年、又有此例云々、）

〔公事根源 四月〕擬階奏　七日

これは、二月の列見の時の成選短冊を、二省（○式部兵部）よりもてまいれるを、大臣の奏聞する儀也、列見延引の時は、これものぶるなり、事はてぬれば、短冊をもとのごとくひつに入て、かきて退出す、さしたる事なし、

成選位記

〔延喜式 十一 太政官〕凡式兵二省請印准蔭成選等位記、先令印廿張已下、後更定日、參議於辨官結政所捺了、（所須丹膠等物、預先請受、）

〔延喜式 十二 中務〕凡宮人成選位記者、准男官叙之、其料物、十月廿日申官請受、

〔本朝月令〕四月七日奏成選短冊事

弘仁官式云、（○中略）凡成選應叙者、奏短冊後、式兵二省、預書位記請印、（所須丹膠等物、預先請受、）大臣就朝座、二省率應叙人就位、辨大夫宣命、二省唱名賜之、（○中略、事見儀式、）貞觀官式云、凡成選應叙位云云、（今案、四月五日授位記、）凡授成選位記、幷補任郡司、內記進宣命文、外記直進請其文、授宣命大夫、宣命畢、選人任人稱唯、再拜舞踏、（事見儀式、）

授位記儀

〔儀式 九〕四月十五日授成選位記儀

奏短籍訖、式兵兩省令史生等各寫其策、立位案訖、令書位記、丞錄共執位案別記等、令史生讀策、計會已訖、申進太政官請印、外記覆勘如常、前一日可授位記之狀仰諸司、其日早旦、二省錄各率史生省掌等、執官曹司廳各立標、自常版北進四尺、式部省置宣命版、自此南去二丈、東折五尺立輔標、南去一丈、立丞錄標四枚、（各列立、丞錄標一枚、相去四尺、以西爲上、）兵部輔以下標在西方、一准式部、（丞錄標三枚、）先是掃部寮設二省輔以

下省掌已上座於南門壇上、（式部在西戸外、兵部在東戸外、）輔以下書座、訖省掌令見參選人皆到、訖以六位已下初位已上位記各三枚分入四筥、（式部三筥、兵部一筥、筥別四枚、二省各十二枚、）訖省掌立於南路、（式部在西、兵部在東、）唱計諸司考選官并諸朝集使及選人等、（式部先唱、兵部後唱、）輔官申群常赦、訖大臣喚召使二聲、召使稱唯進跪、大臣宣、式部兵部省（乎）申刀禰參來（止）宣、（云云、）召使稱唯、初大臣喚召使之時、二省輔已下共起列立南路、（式部北面西上、兵部北面東上、）省掌東西對立、喚召使退出傳宣、二省輔共稱唯、輔左右相分參入立床子後、次丞錄參入立床後、次省掌左右相分各率考選官及朝集使并選人等參入、屯立屏內、（式部在東西上、兵部在西東上、但選人則立中官及朝集使後、）立定、辨大夫等起自座、依次降立、（北面西上、）次參議以上降立、（大臣謂明堂、大納言明堂中、參議已上明堂上、又降立於明堂下、自下始退、）訖辨大夫一人進就版宣命云云、選人等稱唯再拜、訖宣制云云、訖選人等拜舞、宣命大夫還本列、次參議已上還本座、次辨大夫還座、訖六位已下退出、（選人不出、）二省輔就座、次丞錄就座、訖二省史生各四人、左右相分捧位記筥、進入版前案、（立筥於案前、）退出、二省錄相目、共立開筥、自一筥始、互唱賜、其詞云、其位賜、（讀入、）其姓名、選人稱唯、趨就錄右而受、錄即讀授、次兵部錄唱賜如前、二省依次互唱賜、選人稱唯、受位記一拜退出、訖覆筥、二省史生相目、共執筥退出、訖輔丞錄自下退出、

〔延喜式太政官十一〕凡成選應敍位者、奏位簿、後預書位記、式部四月十日、兵部十三日請印、十五日大臣已下就朝座、二省率應敍人就版位、辨大夫宣命、（內記宣命文、外記請二省文、任部司亦同、）畢敍人稱唯再拜舞踏、（任郡司亦拜舞、）同二省互唱名授之、於曹司總行之亦同、（事見儀式、）若當賀茂祭、改用他日、

〔延喜式式部十八〕凡於朝廷宣命者、非官降座立堂前庭、（詔書、成選授位并任郡司、及宣命時宜、其事見儀式、）

〔延喜式式部十九〕十五日（四月）〇授成選位記

奏短冊、訖令諸曹各寫其冊、立位案、訖令書位記、丞錄共執位記案別記等、令史生讀冊、計會訖、申送太政官、十一日請印、外記覆勘印之如常、當日式部兵部引成選人赴官就座、宣命畢、即選人稱唯拜舞、其後唱授如常、若當賀茂祭日者、改用他日、（事見儀式、）

〔延喜式 三十八 掃部〕十五日〇四月太政官廳給成選位記之時、立床子、

〔西宮記 四月〕一請印位記事

十一日式部、十三日兵部、十五日式部、請印擬位記、

上卿著廳、外記式部丞錄立版、上卿召ス、丞錄稱唯、著床子、丞立申云々、復座、錄立讀申、上卿云、給倍、共稱唯畢、二省共申時、兵部錄讀申、了上卿與奪、次辨官申文、或無少納言外記丞錄入著、外記覽文儀如常、外記覽文、了以筥授史生、錄史生展位記申云々、上卿云、捺ヽヽ、史生稱唯、先踏位記、史生申云々、上卿云、給倍、少納言稱唯、史生就案目錄、錄進受筥退出、丞退、次史生捺官符、

位記召給官

上卿著東廳、二省不具時、外記申代官、上卿已下著靴著廳、於遣曹司著、面近代北屛北著、上卿或經屛東方入、申文請印如例、或無申文、内記奉宣命、入自西戸奉之、以空杖出、上卿見之置机上、外記置式、入筥、取替宣命出、以宣命付宣命使、宣命使著、宣命使著座、辨著西廳、著座辨者、少納言亦得、无上卿召召使、二、召使二人唯、一人經西廳後、經入自屛西妻、立上版、上卿云、式乃省ヶ、兵乃省達刀禰將來止宣へ、召使唯出、右邊輔以下入立、自屛東西、各立床子前、輔各一人、丞錄各四人、相對立、東西一度參、兩儀著東廳、省掌率選人等列立、北面東上、宣命使下立、少辨中階南廳、中辨同北廳、大辨北一階北廳、并北上東面、參議以上自下腐下立了、南日立座前、參議經母屋西二間、下西一階、南面揖、立西廳、上卿中納言立同階東廳、上臈經後立、登時經前登、大納言經母屋中央、下中階立東廳、大臣下東一階立東廳、下階人向南揖、宣命使就版、出自階南廳、又揖折北行、當宣命標、又揖、更東折行進立宣命標、揖披文左顧、宣制一段、省掌乎召止、先式部選人唯拜、次兵部選人拜、又宣制、省掌造召止、選人拜跪、宣命使歸、右廻北進揖、大臣以下自下本〇下一作上腐昇著座、下時先右足、昇時先左足、辨昇、二省共居、史生置位記筥、入筥東西執綠使、置筥前床子退出、二省錄遞召唱、作居共揖開筥、取位記立床子前唱、省掌造選人、執綠後跪、取筥蓋、取位記還立、隨召畢、錄復座、二省史生取筥出、省掌出、錄丞輔出、

上卿以下歸儀、同日無此儀、

外記史辨少納言出北門、左右相分列立官北路辻、上卿出門之間、辨少納言暫東西相向、上卿脫靴立、東門北腋、納言參議爲先、下腐出門北行、垂尻、納言爲上卿者、他納言暫相向立門内、參議出門、納言以

上東門壇行、(下略)大召使左右南行、少納言外記各一人、令賫印進北行、外記史立侍從所西門、少納言立門前、參議以上直入門、大臣就座、一拔、外記史列其北、

天暦六年五月廿七日、九記云々、行位記召給事云々、內記不候、仍外記代之、

〔續日本紀十武〕神龜五年三月丁未、制、選叙之日、宣命以前、諸宰相等出立廳前、宣竟就座、自今以後、永爲恒例、

〔續日本紀五明〕和銅四年四月壬午、(七日)詔叙文武百寮成選者位、

〔續日本紀元明〕靈龜元年四月丙子、(二十五日)詔叙成選人等位、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年四月七日壬辰、式兵二省奏擬階文、天皇不御南殿、大臣奉勅命、省行之、十五日庚子、公卿於太政官曹司廳、賜成選位記、宣制云、勅冒(止)宣大命(乎)衆聞食(止)宣、天安二年成選人等(爾)其仕事(乃)隨(爾)冠位上賜(比)治賜(久止)宣大命(乎)衆聞食(止)宣、

〔三代實錄清和六〕貞觀四年四月七日乙巳、式部兵部兩省奏文武官成選擬階簿、天皇不御南殿、大臣奉勅、令本省行之、十五日癸丑、公卿就太政官曹司廳、授文武官成選位記、宣制如常、

〔三代實錄清和二十三〕貞觀十五年四月十七日辛亥、公卿就太政官曹司廳、授文武百官成選位記、去十五日可行此事、而有常式祭、曰當賀茂祭、故遷之、非經也、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年四月七日己未、式兵部兩省奏文武官擬階短籍、天皇不御南殿、大臣奉勅、於仗下行之、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年四月七日壬申、式部兵部兩省奏擬階簿、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒奉勅、仰二省退去、於省家行之、十五日庚辰、公卿於太政官曹司廳、賜文武官六位已下成

還位記、策命如常、

〔三代實錄 陽成三十五〕元慶三年四月七日丙寅、式部兵部二省、奏擬階短冊、雨降滂沱、仍停常儀、

〔三代實錄 陽成三十九〕元慶五年四月九日丙戌、先是去七日、依例式部兵部二省、可奏成選短冊、公卿謝病不上、故其儀不行、是日、大納言源朝臣多召式部大輔藤原朝臣春景、兵部少丞大江朝臣玉淵、宣告於省可行之狀、　十五日壬辰、於太政官曹司廳、賜文武官主典以上成選位記、策命如常、

〔三代實錄 陽成四十一〕元慶六年四月七日己卯、式部兵部二省奏擬階短冊、天皇不御紫宸殿、右大臣源朝臣多奏、勅命二省、向省家、依例行之、　十五日丁亥、是日、依式於太政官曹司廳、可賜文武官成選位記、而中納言已上謝障不參、故停而不行、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜十年四月七日、擬階奏出、御南殿、被行之、　十二年四月七日、御南殿、依擬階奏也、
十六日、天皇御南殿、依成選也、

〔貞信公記〕延喜十二年四月七日、上闕〇醍醐御南殿、定擬階奏、但不覽短冊、其儀□執奏文、率公卿入自日□□列□二省從之、勅曰、將參來、稱唯昇立後□後立定、臣進奉、覽奏文、其道從公卿座西直進於御帳東、跪而奉□□文杖給外記、還本所、覽了、上曰、短冊從之、臣稱唯召式部、式部唯、召兵部、兵部唯、持退、二省唯召、各丞名、丞參入、荷書櫃退出、頃公卿退出、

〔日本紀略 村上三〕天曆元年四月七日壬戌、右大臣〇藤原實賴奏擬階奏文、　二年四月七日丙戌、奏擬階文、依大臣不參、天皇不御南殿、

〔日本紀略 村上四〕康保三年四月七日壬寅、擬階奏、無御出、

〔日本紀略 一條十一〕寬弘六年五月廿一日乙亥、擬階奏、而七日可被行也、而新任公卿擇吉日加署名之間、自以延引、

〔小右記〕長和四年四月五日甲寅、擬階奏持來、加署返給、依余〇藤原實資不署、下臈不署之由、史生申也、

七日丙辰、今日擬階奏、中納言俊實行之云々、

（左經記）長元八年四月七日庚申、外記史生持來擬階奏、納杖加署返給、○中略擬奏可參之由有催、稱障不參入、上卿一人奏行、古今有例也、

（中右記）承德元年四月七日、今日有政、○中略又新少史相忠初參、結政、役遂、參仗座之後、有擬階奏、左衞門督行之、

（玉海）治承三年四月三日辛卯、持來擬階奏、加朝臣返給、　七日乙未、此日擬階奏云々、上卿成範卿云云、

（吉記）壽永元年七月六日、外記史生季俊某某持來擬階奏、加署二字返給之、舊文杖也、

其書樣

太政官謹奏

令内外文武官當上已上、壽永元年成選仟陸佰拾壹人、

式部省

奏授九百卌九人

進三階五百七十九人　正六位上〻〻　從〻〻〻　正六位下〻〻　正七位〻〻　從六位上〻〻　正七位〻〻

進二階三百人　從七〻〻　正八〻〻　從〻〻　從〻〻

進一階七十人　正六〻〻　從〻〻　正七〻〻

右依令擬階

判授卅二人　外正〻〻人　外大初位下九人　外從〻〻人

兵部省

奏授四百卅人

進三階二百人　正〻〻人　從〻〻人
　　　　　　　八位人
進二階百五人　六位〻〻人　七位〻〻人
　　　　　　　八位〻〻人
進一階九十人　六位〻〻人
　　　　　　　八位〻〻人
　右依令外位幷內位初位判授
判授百九十人
進三階九十人　外〻〻人
　　　　　　　外〻〻人
進二階五十人　並初位
進一階五十人　並初位
　右依令外位幷內位初位判授

以前得式部大輔從三位藤原朝臣俊經、兵部權大輔從五位下藤原朝臣保能解偁、判授已上准還具件如前、謹以申聞謹奏、

壽永元年六月　日

攝政從一位藤原朝臣

從一位左大臣藤原朝臣

見任公卿廿五人〻〻

審選之〻〻

〔定能卿不入之如何〻〻

〔玉蘂〕建久四年四月七日癸卯、此日可被行擬階奏、而本局依不書儲奏文延引、未曾有也、大外記師直欲召怠狀之處、正下捺印了、與史生懈怠云々、師直無所遁、仍件史生可處罪科之由召仰了、

〔玉蘂〕建曆二年四月三日、外記持來擬階奏、插杖四通卷籠一禮紙也、加名二字返給、職事有長傳申之、

(明月記)文曆二年四月五日丁卯、平通氏朝臣已下多參入見參、敍階奏、按察實有卿勤仕云々、

(日本書紀持統天皇)十一年四月己巳、授滿選者淨位至直位、各有差、

(續日本紀文武天皇)慶雲四年正月甲午、(○正月無、二月甲午二十五日、)天皇御大極殿、詔授成選人等位、親王已下五位已上男女一百十人、各有差、

○按ズルニ、此二條ハ五位已上ノ位階ヲ授ケタルニテ、卽チ後世正月ニ行フ所ノ敍位ナリ、固ヨリ內裏式等ノ諸書ニ云フ所ノ敍階奏トハ異ナレドモ、滿選成選ノ字アルヲ以テ、姑ク此ニ收ム、

古事類苑

政治部二十一

上編

考選

官吏ノ考選ハ、文官ハ式部省ニテ掌リ、武官ハ兵部省ニテ掌リ、宮人ハ中務省ニテ掌ル、考トハ官吏ノ行、能、功、過ヲ考校スルヲ云ヒ、選トハ考滿ノ人ヲ選テ敍位スルヲ云フ、因テ此敍位スベキ人ヲ指シテ成選人ト云フ、行、能、功、過トハ善惡ヲ行トシ、才藝ヲ能トシ、職事ノ修理スルヲ功トシ、公務ノ廢闕スルヲ過トスルナリ、官吏ニハ内官アリ外官アリ、文官アリ武官アリ、長上アリ分番アリ、内官ハ卽チ京官ヲ云ヘルニテ、在京ノ諸司ヲ指ス、或ハ單ニ諸司ト云ヘルモ是ナリ、外官トハ國司郡司等ヲ云フ、武官トハ衞府軍團等ヲ云フ、武官ノ外ハ都テ文官ナリ、長上トハ每日官衙ニ上ルヲ云ヒ、分番トハ又ハ番上トモ云ヒテ、互ニ交替シテ官衙ニ上ルヲ云フ、蓋シ文武官ニモ並ニ内外アリ、長上分番ニモ並ニ内外アルナリ、其主典以上ノ官人、及ビ分番ノ人ノ年中ノ行、能、功、過ハ、八月一日ヨリ翌年七月三十日マデヲ考期トシテ、本司ノ主典每日實錄シ、八月一日以後、此紀注ヲ集メテ總錄シ、當司ノ長官タル人、此ヲ以テ據トシテ、次官以下ノ長上官ヲ考シ、其優劣ヲ議シ、（太政官ノ官人ニ限リテハ、八月十一日定考ノ儀アリ、）八月三十日以前ニ校定シ、京官畿内ハ十月一日ニ、其考文ヲ太政官ニ申送シ、外國（畿外ヲ云フ）ハ十一月一日ニ、朝集使ニ附ケテ申送ス、若シ注狀乖錯シ、及ビ其功過ヲ隱ストキハ罪アリ、而ルニ内外初位以上ノ長上官ハ、考期中ノ理務二百四十日以上、分番ハ一百四十日以上、帳内資人ハ二

百日以上ニシテ考ニ預ル、但シ功過灼然ニシテ黜陟スベキトキハ、日數滿タズト雖ドモ、別ニ記シテ省ニ送ル（省ニ送ルトハ、文官ハ式部ニ送リ、武官ハ兵部ニ送ルヲ云フ、下ニ省トノミアルハ皆之ニ倣ヘ、）分番ヨリ長上ニ入ル者アリテ、通計シテ考スルトキハ、分番ノ三日ヲ長上ノ二日ニ當ツ、長上ヨリ出デ、分番ト爲ルトキハ、仍ホ長上ノ一日ヲ以テ分番ノ一日トス、而シテ外長上ヨリ内分番ト爲リ、内分番ヨリ外長上ト爲ルトキハ、通計スルコトヲ得ズ、考文ノ集マル日ニ省ニテ勘校シ、内外長上分番等ノ色ヲ分チテ記ヲ爲リ、具ニ功過ヲ顯シ、一品以下三位以上ハ奏裁シ、四位五位ハ太政官ニテ量定シテ奏聞シ、六位以下ハ省ニテ校定シテ後ニ、考第ヲ唱示シテ太政官ニ申ス、凡テ其等第ハ官職ニ隨ヒテ異アリ、即チ内長上ハ最ヲ立テ、上上ヨリ下下ニ至ルノ九等トス、内長上トハ一品以下初位以上ノ長上官ヲ云ヒテ、國司ノ主典以上ハ外官ナレドモ内長上ノ例トシ、五位ハ散位ナリトモ猶ホ内長上トスルナリ、殿最ハ具ニハ善、最、殿、負ト云ヒテ、善トハ總ジテ其行ヲ稱スル事ニテ、德義、清愼、公平、恪勤ノ四善アリ、最トハ別シテ其職ニ就キテ賞スルコトニテ、神祇官ヨリ國司マデノ四十二最アリ、而シテ一最アリテ兼テ、四善アルヲ上上トスルヨリ、諂詐、貪濁ヲ下下トスルニ訖ル、殿トハ其選數ヲ殿スルヲ云ヒ、負トハ其罪名ヲ負フヲ云フ、罪ヲ犯シテ殿ニ附スルニハ、皆斷罪ノ案ノ已ニ成ルニ據リテ、贖銅ヲ納メ訖ルヲ待タズ、私罪ハ贖銅一斤即チ笞十ヲ以テ一負トシ、公罪ハ二斤即チ笞二十ヲ以テ一負トシテ、各、十負ヲ一殿トス、上中考ヨリ以下ハ、一殿ゴトニ考一等ヲ降ス、即チ上中ヲ上下トシ、上下ヲ中上トスルナリ、而レドモ上上考ヲ得タル者ハ、公罪ノ殿アリトモ降サズ、若シ公罪ノ殿失（公罪ハ、私ニ挾ミタル罪ニアラザレバ殿失ト云フ、）ニシテ降スベキト、當年ノ勞劇異常ナルトハ一殿ヲ減ズ、又過失殺傷シ、及ビ疑罪ニテ徵贖セラレタルトハ殿ノ限ニ入ラズ、又私罪ハ下中、公罪ハ下下ニ至レバ解官シ、法ニ依ルニ除免官當スベキハ考校セズ、並ニ當年ノ祿ヲ

奪フ、而シテ考解ハ、秩ヲ朞年ノ後ニ職ニ就クコトヲ聽ス、又内分番ハ、毎年本司ノ次官以上、其行能功過ヲ錄シ、上中下ノ三等ノ考第ヲ立テ、省ニ送ル、内分番トハ、大舍人、中宮舍人、東宮舍人、史生、伴部、（品部、雜戸部ノ類ヲ云フ、）使部、及ビ散位、又ハ貢人得第シテ未ダ職事ニ任ゼザルノ類、若シクハ兵衞衞門門部ヲ云フ、外長上ノ考ハ國司量リテ、上、中、下、下下ノ四等ヲ立ツ、外長上トハ、郡司及ビ軍團ノ大少毅ヲ云フ、其考ヲ朝集使ニ附シテ省ニ送リ、下下考ハ當年校定シテ卽チ解ク、外分番ハ國博士、國醫師ニシテ、其考ヲ上中下ノ三等トス、家令、帳内、資人ハ本主之ヲ考ス、而シテ家令ハ諸司ノ考法ニ準ジ、帳内資人ハ上中下ノ三考ヲ立ツ、又親以上及ビ内親王ノ家事ハ、宮内省ニテ其主ノ旨ヲ承ケテ、考第ヲ定ムルナリ、以上ハ是考課ノ大較ナリ、

次ニ選敍ノ事ヲ云ハンニ、内長上ノ中ニテ、六位以下初位以上ハ、皆六考ヲ以テ限トス、五位以上ハ國司ノ外ハ歷代セズト雖ドモ、猶六考ヲ以テ限トシテ、六位以下ト同ジク之ヲ計フルナリ、考トハ一年ニ一タビ行能功過ヲ考校スルコトニテ、六考ハ卽チ六年ナリ、而シテ中上以上ヲ上考トシ、中下以下ヲ下考トシ、中中ヲ初基トス、今其法ヲ詳ニスルニ、中中ハ卽チ初基ナレバ、六考中中ナルトキハ一階ヲ進メテ、從六位以下ノ人ハ從六位上ト爲ス、中上三考ハ一階ニ當リ、六考中上ナルトキハ二階ヲ進ムベキニ、初基ノ中中ヲ幷セテ三階ヲ進ム、卽チ中上以上ハ必ズ中中ヲ帶ビタリトスルナリ、上下二考ハ一階ニ當リ、六考上下ハ四階ヲ進メ、上中一考ハ一階ニ當リ、六考上中ハ七階ヲ進メ、上上一考ハ二階ニ當リ、六考上上ハ十三階ヲ進ム、若シ六考ノ中ニ、三考中上、二考上下、一考上中相雜ルトキハ四階ヲ進ム、餘ハ類推スベシ、而シテ四階ヲ進加スベキト、考ヲ計ヘテ五位以上ニ至ルベキトハ、奏聞ヲ經テ後ニ別敍ス、初基ト上考トハ位階ヲ進ムルコトヲ得レドモ、下考ハ升ルコトヲ得ズ、例ヘバ

五考中中ナリトモ、一考中下ナルトキハ、其位ヲ進メズシテ六考皆棄除スルナリ、考限未ダ滿タズシテ、理ヲ以テ解官スル者モ位ヲ進ムルコトヲ得ズ、又上中以上ハ、下考アリトモ上第ニ從ヘテ、一考上中、五考下中ナルトキハ、一ノ上中考ヲ以テ一階ヲ進メ、五ノ下中ヲ棄ルナリ、而レドモ公罪ノ下中以下、私罪ノ下上以下ハ、別ニ上下アリトモ仍ホ下考ニ從フ、卽チ一考下中五考上下ナルトキハ、下中ノ一考ニ從ヘテ上下ノ五考ヲ除クナリ、又上下考ヲ準折スル法アリ、三考中下、三考中上ノ如キハ、準折シテ六考中中ヲ得ルガ如シ、此法ハ中下ノ考ニ限ルコトナリ、又內分番ハ八考ヲ以テ限トシテ、八考中ナルトキハ一階ヲ進メ、八考上ナルトキハ三階ヲ進メ、四考上、四考中相雜ルトキハ二階ヲ進メ、四考上、四考下ハ準折シテ八考中トスルナリ、外長上ハ十考ヲ以テ限トシ、十考中ナレバ一階ヲ進メ、十考上ナレバ三階ヲ進メ、五考上、五考中相雜レバ二階ヲ進ムルナリ、外分番ハ皆十二考ヲ以テ限トス、十二考中ナレバ一階ヲ進メ、十二考上ナレバ三階ヲ進メ、六考上、六考中相雜レバ二階ヲ進ムルナリ、而シテ考限未ダ滿タズシテ、外官ヨリ內官トナリ、分番ヨリ長上トナルガ如キハ、前勞ヲ通計スルニ別ニ其法アリ、而ルニ此選敍ノ限ハ、大寶令ニ著ル、所ニシテ、慶雲三年ニ至リ、內外ノ長上分番、並ニ二考ヲ減ジテ內長上ヲ四考トシ、內分番ヲ六考トシ、外長上ヲ八考トシ、外分番ヲ十考トシタリ、其後沿革アリシカドモ、竟ニ慶雲ノ格ヲ以テ定トシタリ、而レドモ考滿チテ敍スベキ人ノ中ニテ、高行異才等アルトキハ、常條ニ拘ハラズ、不次ニ奬擢スルナリ、サテ六位以下ニ敍スベキ人ヲ本司校定シテ、八月三十日以前ニ、其選文ヲ考文ト共ニ太政官ニ送リ、十二月一日マデニ其人ヲ省ニ集ラシメ、而シテ後ニ列見アリ、擬階奏アリテ敍位スルナリ、又奏判任ノ人ヲ銓擬スルニ、德行ヲ先トシ、才用勞効ヲ後ニスルノ法アリ、猶ホ秀才進士等ノ事ハ、考選中ノ大ナル者ナレドモ、文學部試驗篇ニ收メ、國郡司ノ功過、及

ビ任限ノ事ハ、政治部功過篇任限篇等ニアリ、並ニ參看スベシ、
次ニ考選文ノ事ヲ言ハンニ、考文トハ、其行能、功過ヲ考校シタル文ヲ云ヒ、選文トハ、考滿ノ人ノ敍位スベキヲ選ビタル文ヲ云フ、諸司及ビ畿內國司ノ長上ノ考選文ハ、十月一日ニ辨官ニ進メ、辨官總計シテ目錄ヲ造リ、太政官ニ申シ、二日ニ式部兵部ニ下ス、其時太政官ノ考文モ亦同ジク式部ニ下ス、此日ニ諸司及ビ畿內ヨリ番上ノ考選文ヲ式兵二省ニ送リ、三日ニ諸家ヨリ家司幷ニ雜色人等ノ考選文ヲ式部省ニ進ム、而シテ後ニ專當ノ丞錄考文ヲ總計シ、分チテ十番トシ、神祇官ヲ以テ第一番トシ、六日以前ニ總テ校シ了リ、七日ニ考問アリ、其日朝堂及ビ南廊ノ內ニ舖設シ、輔以下座ニ就キ、式部ノ錄神祇官ノ番上長上ノ考文ヲ讀ミ、若シ爭失アレバ、丞其狀ニ隨テ勘問シ、本司ノ次官、判官、主典、各、其職ニ就キテ辨答ヲ爲シ、式部輔之ヲ判ジテ與奪ス、次ニ引唱アリ、省掌出デ、判官以下使部以上ノ考人ヲ引キ、中廷ニ集ラシメ、職事及ビ番上ノ考文ヲ唱ヘ、考人ヲシテ敍位ニ就カシメ、式部錄其上日ノ數、及ビ善最行事ヲ宣示シ、十人ニ滿タル每ニ、次ヲ以テ退カシム、自餘ノ諸司ハ、其日式部ノ省掌床疊ヲ曹司廳ニ設ケ、式部輔以下座ニ就キ、中務以下ノ本司、幷ニ所管諸司ノ六位以下ノ職事分番ノ考人ヲ考問引唱スルコト前儀ノ如シ、但シ番上ハ五十人ニ滿タル每ニ、丞ヨリ省掌ニ命ジテ退ケシム、但シ太政官ハ考問引唱ノ例ニ在ラズ、而シテ在京諸司、及ビ畿內國司ノ考ハ、其月三十日以前ニ校定シ了ル、又外國ノ長上番上ノ考選文ハ、十一月一日ニ朝集使ニ附シテ辨官ニ進メ、其月三十日以前ニ校シ訖ル、總テ十二月三十日以前ニ於テ、考選ノ目錄ヲ勘定シ、翌年二月十日ヲ以テ太政官ニ申送ス、而シテ考番ノ史生ハ、考ヲ別記ニ寫シ、選番ノ史生ハ、選ヲ別記ニ寫シ、竟テ短冊ニ書シテ後ニ、專當ノ丞冊ヲ執リ、錄別記ヲ執リ、史生ヲシテ案ヲ讀マシメ、失誤ナキコトヲ知リテ、以テ列見ヲ候ツ、是考選文ニ就キテノ梗概ナ

古代選敍

リ、

〔日本書紀 天武二十九〕七年十月己酉、詔曰、凡內外文武官、每年史以上屬官人等、公平而恪勤者、議其優劣、則定應進階、正月上旬以前、具記送法官、則法官按定、申送大辨官、然緣公事以出使之日、其非眞病及重服、輒緣小故而辭者、不在進階之例、

〔日本書紀 持統三十〕四年四月庚申、詔曰、百官人及畿內人、有位者限六年、無位者限七年、以其上日、選定九等、四等以上者、依考任令、以其善最功能、氏姓大小、量授冠位、

善最

〔令義解 考課四〕德義有聞（謂、德者得也、性得高行、義者宜也、裁制合宜、二者相須、乃得稱善、以下三善亦合准此也、假如黃霸守尹、瑞鳳集國、劉昆作宰、猛虎渡河之類、是德也、鮑永引車、哭於霍君、厥范下馬、同於窮使之類是義也、）者爲一善、

淸愼顯著（謂、淸者潔也、愼者謹也、假如楊震暗夜辭金、胡威歸路問絹之類、是淸也、孔光典機、不語溫樹、吳宏謹闕、無譯鍾語之類、是愼也、）者爲一善、

公平可稱（謂、背私爲公、用心平直、假如趙武擧以私讎、祁奚薦以己子之類、公平也、）者爲一善、

恪勤匪懈（謂、恪敬也、盡力曰勤、假如馮豹伏閤、夏馬從政、蘇晨居官之類、恪勤也、）者爲一善、

最條（謂、最總有卌二條、凡最者八字相須、乃得成最、假如玄蕃寮、雖蕃客不來、猶得僧尼合道、蕃客得所之最、擧一以言、餘准須知、其方術之最、以四字成、假如陰陽師最、占筮效驗多之類也、）

神祇祭祀、不違常典、爲神祇官之最、（謂少副以上、）

獻替奏宜、議務合理、爲大納言之最、

承旨無違、吐納明敏、爲少納言之最、

受付庶務、處分不滯、爲辨官之最、（謂少辨以上、）

侍從覆奏、施行不停、爲中務之最、（謂少輔以上、○謂以下五字據一本補、）

銓衡人物、（謂、銓衡者、銓量也、衡平也、人物者猶云人也、言詮選之於才能、猶銓衡之於錙銖、故謂言也、）擢盡才能、爲式部之最、（謂少輔以上、）

僧尼合道、（謂、合於佛道也、）譜第不擾、（謂、治部掌本姓、解部掌譜第爭訟、故擧以爲最名也、）爲治部之最、（謂少輔以上、）

戶口不濫、（謂、縱勘籍帳、令無脫漏及冒名也、）倉庫有實、（謂、諸國所支租稅雜稻、事息知法、令无懸欠也、）爲民部之最、（謂少輔以上、）

詮衡武官(謂[illegible])、兼充戎事([illegible])、爲兵部之最(謂少輔以上)、
決斷不滯、與奪合理、爲刑部之最(謂少輔以上及判事)、
謹於蓋藏([illegible])、明於出納、爲大藏之最(謂少輔以上)、
諸供食膳([illegible])、備府諸部([illegible])、爲宮內之最(謂少輔以上)、
訪察嚴明、糾擧必當、爲彈正之最(謂[illegible]以上及疏部)、
興崇禮教、禁斷盜賊、爲京職之最(謂亮以上)、
監造御膳([illegible])、淨戒無誤([illegible])、爲主膳之最(謂[illegible]以上)、
部統有方([illegible])、警守無失、爲衞府之最(謂佐以上)、
音樂克諧、不失節奏、爲雅樂之最(謂助以上)、
僧尼不濫([illegible])、蕃客得所([illegible])、爲玄蕃之最(謂助以上)、
支度國用、明於勘勾、爲主計之最(謂助以上)、
謹於蓋藏、明於出納([illegible])、爲主稅之最(謂助以上)、
調肥閑馬、不損飼丁([illegible])、爲馬寮之最(謂助以上)、
愼於曝涼([illegible])、明於出納、爲兵庫之最(謂助以上)、
朝夕當侍、拾遺補闕、爲侍從之最、
監察不怠、出納明密、爲監物之最、
勤於宿衞、進退合禮、爲內舍人之最、
職事修理、昇降必當([illegible])、爲大官以上之最、
揚淸激濁([illegible])、褒貶必當、爲考問之最(謂式部兵部丞)、

殿負

訪察精審、庶事兼擧、爲判官之最、

公勤不怠、職掌无闕、爲諸官之最、（謂、諸無最官、皆得此最、如主鈴典鑰及諸長上之類也、）

勤於記事、稽失无隱、爲主典之最、

詳錄典正、詞理兼擧、爲文史之最、（謂、詳者審也、典正者、綺而成章、豔而不汗之類是也、文史者、圖書助以上也、）

明於記事、不失勤旨、爲內記之最、

訓導有方、生徒充業、爲博士之最、（謂、方者道也、充者滿也、依學令、通中以上、是爲充業也、）

占候醫卜、効驗多者、（十得七爲多、）爲方術之最、（謂、陰陽曰占、天文曰候、療病曰醫、灼龜曰卜也、）

推步盈虛、究理精密、爲曆師之最、（謂、步猶尋也、推步位宿晦朔、以爲曆是也、盈虛者、日月行度之盈縮、及時序節候之進退也、）

市廛不擾、姧濫不行、爲市司之最、（謂、男女肆別、貨食區分、是爲市廛不擾也、姧盜及行濫之徒、不得其情、是爲姧濫不行也、）（謂佑以上、）

推鞫得情、申辨明了、爲解部之最、（謂、鞫者窮鞫也、了者了別之義也、）

禮儀興行、戒具充備、爲太宰之最、（謂、此唯得太宰府、及賓國、其管內諸國者非也、）（謂少貳以上、）

强濟諸事、肅淸所部、（謂、盜賊不起之類也、假令盜賊起、限內追獲、會亦須降其最也、）已爲國司之最、（謂介以上、）

无有愛憎、供承善成、（謂、太宰監亦得此最也、）爲國掾之最、

防人調習、戎裝充備、爲防司之最、（謂佑以上、）

譏察有方、行人无擁、爲關司之最、（謂、譏者問也、關司依軍防令、國司分當守固是也、）

〔延喜式十八式部〕凡雜師有生者、同博士之最、若無生及才伎長上、准諸官之最、

〔令義解四考課〕凡官人犯罪附殿者、皆據案成乃附、（謂、附殿者、殿其選數也、案成者、斷罪案成、不待贖銅納訖也、）私罪、計贖銅一斤爲一負、公罪、二斤爲一負、（謂、負者負其罪名也、依下條、官人犯罪、勅斷有輕重者、皆依勅斷附殿、卽彼條不限眞決徵贖、皆然附殿、然則收贖是輕、會亦附殿、眞決是重、理自須知、其分番計殿、亦皆准此也、）各十負爲一殿、當上上考者、雖有殿不降、（謂、若當上上考之人、雖有私罪殿公罪殿者、唯得以私罪降上上、其公罪殿不在降限也、謂非私罪、）自上中以下、率一殿降一等、卽公坐殿失應降、（謂、公坐成殿、元非挾私、故曰殿失、若公坐故者、不可減殿、何者、依律、盜決隄防者、杖八十、注云、有人盜決隄防、取水供用、無問、

[illegible] 若當年勞劇、有異於常者、[illegible]

凡官人有犯私罪下中、公罪下下、並解見任、[illegible] 即依法令除免官當者、[illegible] 不在考校之限、並奪當年祿、[illegible] 本犯不至除解、而特除解者、不徵其考、[illegible] 解者、亦年[illegible]叙、[illegible]

凡內外官人、准考應解官者、[illegible] 即不合從事、待符報即解、[illegible]

○中略

凡官人犯罪、解所有職事者、皆依勘斷附殿、[illegible] 若本犯不應殿、特令附考者、依本犯附考、[illegible] 即雖赦免、及會恩降者、並不入殿限、[illegible] 若本犯免官以上、[illegible] 及斷罪人已一[illegible] 恩前獄成者、[illegible] 仍以景迹論、[illegible] 既考案成、並依常法、即非除免者、不解官、[illegible]

〔令義解考課〕凡應考之官、犯罪業成者、考目即附考狀、若他司人、有功過者、錄牒本司附考、[illegible] 其在京斷罪之司、[illegible] 所斷

考校乘實

之罪、九月卅日以前、並錄送省、(謂雖不成殿、亦須錄送、其國郡亦准此、)

〔延喜式 式部十八〕凡長官次官並無者、判官主典亦考、但在身功過、具錄申官、其國目以上者不在者、史生亦錄上日行事申官、不得絓年、

〔令義解 考課四〕凡官人景迹功過應附考者、(謂官人者、主典以上、其分番亦准此也、景迹者、景像也、猶言状迹也、)皆須實錄、(謂一年之内、每日記錄、即至考校之時、集此記注、以爲總錄、是上條所謂具錄一年功過行能者也、此條不言能者、即人之才能、不可每日記錄故也、)其前任有犯私罪、斷在今任者、亦同見任法、(謂依下條、官人犯罪附殿者、皆據案成乃附、私罪計贖銅一斤爲一負、公罪二斤爲一負、各十負爲一殿、自上中以下、率一殿降一等、故前任犯私罪、斷在後任者、仍同見任、可附負殿、若前任犯公罪、斷在今任者、依律、官犯罪遇官事發、在官犯罪、去官事發、犯公罪流以下勿論、此即既得勿論、亦不可附負殿也、)即改任、應計前任日爲考者、(謂考中改任者、若考後改任者、皆在前任爲考也、)功過並附、注考官人、(謂長官也、)唯得述其實事、不得妄加減、不若注狀乖舛、褒貶不當、(謂景迹功狀高而考第下、或考第優而景迹劣之類、)及隱其功過、(謂主典也、言若長官昇降不當者、降長官考、若主典實錄不明者、降主典考、故云各准所失輕重、降所由官人考、假如降一等者、即降所由一等、降二等者、亦降所由二等之類、若降數人考者、唯依一重者降、即昇者亦准此法、其所由官者先奪最、後降考、餘官者唯奪其最也、問、依律、考校不以實者、一人笞五十、二人加一等、失者減三等、未知至於降考、故失有別耶、答、據律科罪、雖故失各異、在令降考、即故失無別、是律令義殊、未可混執、又問、降考之後、亦依律科罪以不、答、降考之後、更亦科罪也、)以致昇降者、各准所失輕重、降所由官人考、即朝集使褒貶進退失實者、亦如之、(謂長官所考合理、而朝集使不能辨答、仍不降朝集使考、若長官所考乖理、而朝集使亦不能辨答、唯降長官考、爲降所由官人考故也、)

〔律疏 職制〕凡貢擧非其人、及應貢擧而不貢擧者、一人杖六十、二人加一等、罪止徒一年、(非其人、謂德行乖僻、不如擧狀者、若試不及第、減二等、率五分得三及第者、不坐、謂貢者、依令、諸國貢人、擧者、若別勅令擧、及大學送官者、爲擧人、皆取方正淸循、名行相副者、若德行無聞、妄相推薦、或才堪利用、蔽而不擧者、一人杖六十、二人加一等、罪止徒一年、注云、非其人、謂德行乖僻、不如擧狀、若使名實乖違、即是不如擧狀、縱試得及第、亦退而貢擧、罪止如其德行無虧、唯只策試不及第、減二等、率五分得三及第者、不坐、試五得三、試十得六之類、所貢官人皆得免、如若貢五得二、科三人之罪、貢十得三、科七人之罪、但有一人德行乖僻、不如擧狀、即以乖僻科之、縱有得第者多、並不合共相准折、)若考校課試、而不以實、及選官乖於擧狀、以故不稱職者、減一等、(負殿應附而不附、及不應附而附、致考有升降者、罪亦同、考校、謂內外文武官寮、年終應考校功過者、課試、謂貢擧之人、藝業伎能、依令課試、有數者、其官司考試、不以實、及選官乖於所擧本狀、以故不稱職者、謂不習典憲、任以法官、明練經史、授之武職之類、各減貢擧非其人罪一等、負殿應附不附者、依令、私坐每一斤爲一負、公坐二斤爲一負、各十負爲一殿、校考之日、負殿皆悉附狀、若故違

[illegible]

失者各減三等、[illegible]承告不覺、又減一等、[illegible]如曲施行、與同罪、[illegible]

〔令義解考課〕凡官人因加戸口、及勸課田農、幷緣餘功進考者、於後事若不實、縱經恩降、其考皆從追改、[illegible]

〔續日本紀五元明〕和銅四年七月甲戌、詔曰、張設律令、年月已久矣、然纔行一二、不能悉行、良由諸司怠慢不存恪勤、遂使名充員數、空廢政事、若有違犯而相隱者、以重罪之、無有所原、

[illegible]

考課

〔令義解考課〕凡應叙者、[illegible]本司八月卅日以前校定、[illegible]式部起十月一日、盡十二月卅日、太政官起正月一日、盡二月卅日、皆於限內處分畢、其應叙人、本司量程申送、[illegible]

〔令集解十六考課〕釋云、量程、謂量十二月一日可到之程也、一云、可令十一二〇一月一日至耳、大寶元年十二月七日處分、除外國者、其首長一二人集、但致志不在集限也、

〔令義解考課〕凡內外文武官初位以上、[illegible]每年當司長官考其屬官、[illegible]應考者、皆具錄一年功過行能、[illegible]並集對讀、[illegible]議其優劣、定九等第、[illegible]八月卅日以前校定、京官畿內十月一日、考文申送太政官、外國十一月一日、附朝集使申送、考後功過、並入來年、[illegible]

及貶降者、仍郎附校、有功過違者、亦准此、無長官次官考、（謂判官主典、不在考限、唯注上日行事、中送於官、凡注考官人、不定自身考第、具録善最功過、中送管司、若無管司、中送於官、即式部兵部校定也、）

内長上考第

〔令義解四考課〕一最以上、（謂神祇少副以上、得神祇祭祀、不違常典、及職事修理、昇降必當、最之類、故云以上也、）有四善、（謂凡善者、必待衆知、然後乃得為善、即一得以後、其行不渝者、永得其善名、但恪勤者、不必天然、雖是凡庸、自強可得、故匪懈狀昇降、即在當年也、）為上上、一最以上有三善、或无最而有四善、為上中、一最以上有二善、或无最而有三善、為上下、一最以上有一善、或无最而有二善、為中上、一最以上、或无最而有一善、為中中、職事粗理、善最弗聞、為中下、愛憎任情、處斷乖理、為下上、背公向私、職務廢闕、為下中、居官諂詐、及貪濁有狀、（謂入字不相須、故隔句以及、其六贓一尺以上入己者、皆是貪濁、即盜不得財、亦為下下也、）為下下、若於善最之外、別有可嘉尚、及罪雖成殿、情狀可矜、（謂為人事尤、而遣追記罪者也、）或雖不成殿、而情狀可責者、（謂雖無其所犯、雖是輕罪、而情違不慎、數有愆失者也、）省校日、皆聽臨時量定、

内分番考第

〔令義解四考課〕凡分番者、毎年本司、（謂當司次官以上也、所以知者、昇降必當、為次官以上最故、）量其行能功過、立三等考第、小心謹卓、（謂高而不群、謂之卓也、）執當幹了、（謂執當者、執掌也、幹了者、幹強也、了曉也、言強幹曉了、自能堪事也、）者為上、番上無違、供承得濟、（謂得人指麾、承順成濟者也、）者為中、違還不上、執當虧失者為下、對定訖、具記送省、（謂送於式兵二省也、○中略）

凡家令、（謂書吏以上惣名、即文學亦本主考、其扶以上、及文學、得職官最、從得列官最、書吏得主典最也、）毎年本主、准諸司考法、立考、（謂以上、及内親王家事、謂宮内省、家事者、事在宮内、省承主管、定其考第也、）考訖申省案記、（准考課解者、同諸司法、○中略）

凡帳内及資人、毎年本主、量其行能功過、立三等考第、恪勤不懈、清廉稱主為上、祗承合意、（謂祗者敬也、承稟事也、）產業不怠為中、好請私假、數有愆失、（謂二事不相須、若有一者、亦為下、其相折之法、同分番條也、）為下、

〔續日本紀十武〕神龜五年三月甲子、勅、補事業位分資人者、依養老三年十二月七日格、更無改張、雖然資人考選者、總聽待滿八考始選當色、外位資人十考成選、並任主情願、通取散位勳位子及庶人、簡試後請、請後犯罪者、披陳所司、推問得實、決杖一百、追奪位記、却還本色、其三關、筑紫、飛驒、陸奥、出羽國人、不得補充、餘依令、

郡司上等第

〔令義解 四 考課〕凡國司、毎年量郡司行能功過、立四等考第、清謹勤公、勘當明審之類為上、居官不怠、執事無私之類為中、不勤其職、數有愆犯之類為下、背公向私、貪濁有狀之類為下下、其軍團少毅以上、統領有方、部下肅整為上、清平謹恪、武藝可稱為中、於事無勤、武藝不長為下、數有愆失、武用無紀為下下、毎年國司皆對定訖、具記附朝集使送省、其下下考者、當年校定即解、

博士醫師考第

〔令義解 四 考課〕凡國博士立三等考第、居官不怠、教導有方為上、教授不倦、生徒充業為中、不勤其職、教訓有闕為下、其醫師准檢驗多少、十得七以上為上、得五以上為中、得四以下為下、

任二官者考

〔令義解 四 考課〕凡任二官以上、各使官考、省考校日、總以功過相折、若一官上考、若一官上犯私罪應解者、則並解、若帶一官去任者、總計所累考、於見任官上論、

叙文武二位者考

〔延喜式 十八 式部〕凡軍士以上、重叙文位勳位者、除當年考、

神宮考

〔延喜式 十八 式部〕凡伊勢大神宮大内人、永預内考、

凡櫛田神宮舍人一人、大臣武内宿禰資人一人、預得考之例、

凡氣比神宮司考、隷神祇官、

不考

〔延喜式 十八 式部〕凡右大臣以上不在考例、止錄上日、其五位以上不定考第、具錄善最、

〔日本書紀 二十九 天武〕十一年八月癸未、詔曰、凡諸應考選者、能檢其族姓及景迹、方後考之、若雖景迹行能灼然、其族姓不定者、不在考選之色、

考人

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司諸家、去年得考人數、并可進新等數、勘定正月十五日移宮内省、並更總注考人色目及新敘進官、

凡給太政官考人者、左右大辨各廿人、少納言左右中少辨各十五人、外記左右史各十人、左右史生各四人、左右官掌各三人、

凡織部司雜色十人、縫部寮雜色五十人、與考、

凡木工寮長上工、木工七人、土工一人、瓦工二人、轆轤工一人、檜皮工一人、鍛冶工一人、石灰工一人、並與考、

凡修理職長上工、木工五人、檜皮工一人、瓦工二人、石灰工一人、將領廿二人、並預考、又工部六十人、待職移勘籍補之、同預考、

凡勘解由使雜使八人、以散位留省等色、定額之外與兵部省通計與考、

凡施藥院雜使十二人、以儲料考人內充之、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年三月甲辰、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣請返上職田職分資人雜色考人衞士、以避尸素之譏、助國用之費、不許、

〔儀式九〕二月十日於太政官廳申三省考選目錄儀

當日平旦、中務式部兵部三省輔各引丞一人進太政官、候於南門、(諸部寮預儲床子)辨官未申政之前、三省輔各率丞(輔執考目錄、丞執選目錄)自官掌前北向經辨官廳前、登自廳西側階、各當床子立、大臣宣召之、輔共稱唯、次丞共稱唯、以就座、式部輔先讀申、次丞讀申、次兵部、次中務並同式部、訖大臣宣、綴三省輔共稱唯、次丞共稱唯退出、

〔延喜式十一太政官〕凡庶務申太政官、(中略)其考選目錄、及請印六位以下位記者、中務式部兵部三省、不經辨官、直申太政官、

凡諸國考選文及雜公文、附朝集使、十一月一日進辨官、如諸司儀、(事見儀式)訖辨官總計、造目申太政官、及下式部兵部、亦同上例、其畓上考文、二日送省、

〔延喜式太政官十八〕凡考選文者、太政官長上番上、並作符下省、諸司長上者作解進官、官亦下省、諸司番上者作移送省、〈作引解〉其被管考選文、皆總官長官押署、便以司印印之、

〔延喜式中務十二〕凡長上及宮人考選文者、十月一日、輔率丞錄并所管諸司、共進辨官、〈諸司考選文、皆自押署、但以書印之、〉番上考選文者二日、輔亦率丞錄送式部省、其宮人考選文者、官即返下、然後校定、訖即造別記二通、一通留省、貳實、一通副考選短冊、正月十日、輔一人、丞錄各二人、率史生省掌等、進內侍、其副曰、宮人考選文進〈堂〉申、內侍執、置其殿、被奏實訖還給、即受退出、造目錄、與式部兵部共申太政官、

〔延喜式宮內三十一〕凡被管諸司考選文、并內親王家令已下考文、六年一度、

〔延喜式式部十九〕諸家考選文進省

十月三日平旦、諸家各以家司并帳內資人及定額雜色人等考選文、盛函會集、省掌計列於南、外、次以其主品位、訖引就版位、其中一人進申、丞命進之、家司俱稱唯、以文置函於錄前案、訖錄讀申目錄、輔判曰、籍之、錄稱唯、丞命喚之、家司俱稱唯、省掌引退出、宮內錄引內親王及內命婦二位以上家令、各執、其考選文函、進就版位、申之、丞命進之、宮內錄以下俱稱唯、諸家司以文置函於前案、錄讀申、輔判曰、籍之、錄稱唯、丞命喚之、家司稱唯、在先退出、丞亦命曰、緩之、宮內錄稱唯退出、

〔延喜式太政官十一〕凡諸司及畿內國司長上考選文者、十一月一日進辨官、〈事見本式〉訖同日辨官總計、造目申太政官、即下式部兵部、其太政官長上及番上考文亦便同下、諸司及畿內番上考文者、二日共集送式兵二省、

〔延喜式式部十九〕諸司畿內長上考選文進左辨官

在京諸司及五畿內國司等、進考選文、印署十月一日〈外國十一月一日〉進左辨官、〈事見本式〉

諸司畿內番上考選文進省

文官及畿內國司等、進番上考選文、十月二日〈外國十一月一日〉集省、省掌陳列、引就版位、令進並如長上

考文進官儀、立定、少輔命召五位以上、俱稱唯、隨色就座、錄讀申、訖、卿判曰勘之、錄稱唯、大輔命曰候之、諸司稱唯、以次退出、

〔延喜式 式部十八〕凡諸司考選文送官及式部兵部者、五位以上長官次官將送、若不在者、臨時聽處分、

凡諸司幷畿内司不進考文者、五位以上不預節會、六位以下拘留季祿、

〔延喜式 式部十八〕凡鑄錢司考文、附周防國朝集使、

〔續日本紀 元明四〕和銅二年十月甲申、制、凡内外諸司考選文、先進辨官、處分之訖、還附本司、便令申送式部兵部、

〔續日本紀 元明六〕和銅六年十一月丙子、詔、○中略 太政官處分、凡諸司功過者、皆申送辨官、乃官下式部、又○見令集解

〔三代實錄 清和十一〕貞觀七年十月七日乙卯、中務省言、被管諸司考文造三通、置於總省幷式部本司等、各爲常留、今案物情、式部本司、斷於事有用、常留之備、以是足焉、至于此省、雖有收置之勞、曾無充事之要、每至交替、非無其煩、望請准宮内省、三年一除、將省物情、太政官處分、被管諸司、長上考文留三箇年、番上留六箇年、依次撿除、

考選文例

〔政事要略 二十五年中行事〕太政官符　式部省

合職事、天曆五年預考幷不考、新附、遷任、卒、總參拾陸人事、

不在考例二所○右大臣以上不考

右不在考例、顯注如件、

預考十三人

不第四人○五位以上不定事第闕之不第

中上九人

右見日如件
不考七人
新附八人
遷任二人
卒一人
右不考、新附、遷任、顯注如件、
不在考例二所
左大臣從二位藤原朝臣（實賴） 上日百十七
右大臣從二位藤原朝臣（師輔） 上日百九十七
不第
中納言從三位藤原朝臣在衡 上日二百六十八
恪勤匪懈、獻替奏宜、議務合理、最、
右少辨從五位下藤原朝臣國光 上日三百廿
恪勤匪懈、受付庶務、處分不滯、最、
大外記從五位上多治眞人實相 上日二百六十六
左大史外從五位下海宿禰業恒 上日三百八
並恪勤匪懈、勤於記事、稽失無隱、最、
中上
大外記正六位上菅野朝臣正統 上日三百廿
右一人元少外記、今年正月卅日轉任、

少外記正六位上紀朝臣理綱 上日三百五十一
少外記正六位上春道宿禰有方 上日二百卅七
右一人元權少外記、今年二月卅日轉任、
左大史正六位上阿蘇宿禰廣遠 上日三百十一
右一人元右大史、今年二月卅日轉任、
右大史正六位上出雲宿禰蔭時 上日二百九十九
右一人元左少史、今年二月卅日轉任、
左少史正六位上栗前宿禰扶茂 上日三百十一
左少史正六位上淺井宿禰守行 上日三百十二
右一人元右少史、今年二月卅日轉任、
右少史正六位上山直文定 上日三百卅一
並恪勤匪懈、善、勤於記事、稽失無隱、最、
上件等人、起從去年八月一日、盡今年七月廿九日、計上日二百卅已上、依令爲考、具件如前、
大納言正三位藤原朝臣顯忠 上日九十九
大納言正三位藤原朝臣元方 上日九十四
中納言從三位源朝臣高明 上日百七十七
中納言從三位藤原朝臣師尹 上日二百一
少納言從五位上良岑朝臣統茂 上日二百七
少納言從五位上大江朝臣朝望 上日二百卅八
少納言從五位上橘朝臣甫金 上日二百九十九

右人上日不定、考限仍居、不考、

新附

權中納言從三位源朝臣庶明　上日百卅

右一人元左大辨、今年正月卅日轉任、

左大辨從四位上大江朝臣朝綱　上日二百卅七

右一人元左中辨、今年正月卅日轉任、

右大辨從四位上藤原朝臣有相　上日二百七十五

右一人元右中辨、今年正月卅日轉任、

左中辨從四位下橘朝臣好古　上日百五十九

右一人元民部大輔、今年正月卅日遷任、

右中辨從四位下源朝臣俊　上日百卅九

右一人元山城守、今年正月卅日遷任、

權右少辨從五位下藤原朝臣克忠　上日三十八

右一人元左衞門權佐、今年五月廿二日遷任、

權少外記正六位上文宿禰武並　上日百卅九

右一人元民部大錄、今年正月卅日遷任、

右少史　笠朝臣雅（○雅一本作稚）領

右一人元掃部權允、今年正月卅日遷任、

遷任

前大外記從五位下雀部宿禰是連

考問引唱

右一人今年正月卅日、任土佐守、

前左大史外從五位下物部宿禰廣連

右一人今年正月卅日、任豐前權介、

卒

左少辨從五位上藤原朝臣雅量

右一人今年八月廿七日卒

右前職事考課如件、省宜承知、依件行之、符到奉行、

從五位下權右少辨藤原朝臣克忠　　正六位上右少史山直文定

天暦五年十月一日

〔延喜式十九式部〕考問幷引唱

毎年十月一日、諸司畿內職事考選文進左辨官、二日下省、是日諸司畿內亦以番上考選文進省、三日諸家進家司幷雜色人等考選文、訖專當丞錄分史生位子、爲十番、按定考番別各有人數、長上選番上選、亦各有人數、總計考文、分配十番、其一番、先取神祇官考文、六日以前按了、七日質明、鋪設於朝堂幷南廊內、在會昌門以西、輔以下就座、史生預以功過簡置輔丞錄座前、神祇官副以下史以上、以次入自興禮門、就廊下座、丞命錄曰、令召候司、錄稱唯、轉告史生、史生稱唯、喚省掌、省掌稱唯、即命曰、令參上候司、省掌稱唯傳告、副先稱唯、次祐史俱稱唯、進就版位、立定丞命曰、召之、副先稱唯、祐史次之、副先登就床、祐史次之、座定丞命錄曰、申之、錄先披番上考文讀申、丞隨狀勘問、若無勘出、則丞又命長上申之、錄亦披考文讀申、若有乖失、隨即勘問、副及祐史各爲辨答、問各有其序、答亦有其詞、謂公文失錯、則先問史、次問祐、次問副、昇降乖理、則先問副、次問祐、次問史、若事緣判決、則先問祐、次問史、後問副、其事主者所過、從者所忽之類、自餘諸司及朝集使亦如之、總勘了、丞以狀申輔、輔判與奪、丞乃承傳、副先稱唯、祐史俱稱唯、昇降已訖、丞判命之、副先稱唯、次祐史俱稱唯、以次退出、退於曹司、引

唱考人、若有不應參者、史執其名簿、就版位申之、丞命追之、史稱唯就録後進、録讀申、輔判命之、（不參人數、不過三分之一、）録稱唯、丞判命之、史稱唯退出、省掌引始以下使部以上考人、且稱容止、考人屯中庭、立定輔命唱之、輔當録稱唯、先披讀事考文唱之、始以下隨唱稱唯、進就版位、（若有不到者、即當史讀代唱、唱上准此、）録宣、示日數幷書後、以次引唱、毎滿十人、省掌稱直立、考人俱稱唯、就直立位、並如常儀、讀事唱了、丞判命之、俱稱唯退出、録復披番上考文唱之、史生以下稱唯就版位、録亦宣示日數行事、毎滿十人、亦稱直立、唱了丞唱省掌名曰退之、省掌傳告、考人俱稱唯、以次退出、其不到者引唱之後、限以三日、如列見儀、逐不到者、判降考第、（謂此日也、）自餘諸司、不論前後、隨到隨了、其日質明、省掌鋪設床座於曹司廳幷省掌座東、其首北面、輔以下就座、訖中務輔丞録以次就省掌東座、丞命録令參上諸司、録稱唯命史生、史生命省掌、省掌承傳中務輔以下使、次稱唯退就版位、丞命召之、以次稱唯登就座、省掌命所管諸司、以次參上、所管進就版位、丞命召之、并就座、及丞命録讀申、並如前儀、若有不當即問其由、所管不辨、乃問中務、亦如前儀、輔判與奪、丞承傳、中務輔稱唯、二司六位以下俱稱唯、訖丞判命之、所管稱唯退出、所管諸司、以次考問、訖亦退出、省掌引中務幷所管諸司六位以下職事分番考人、人唱如前儀、職事唱了、丞判命之、俱稱唯退出、次唱番上、毎滿五十人、丞命省掌、且令退之、自餘諸司亦准此、但太政官不在考問引唱之例、其在京諸司及畿內國司十月卅日以前按定了、太宰及七道諸國司十一月卅日以前按定訖、十二月卅日以前勘定考選目錄、已訖以二月十日申送太政官、考番史生各寫考別記、選番史生亦寫選別記、被書短劄、專當丞執劄、録執別記、令史生讀案、共相計會、知無失誤、以候列見、

〔續日本紀（八元正）〕養老五年十月癸未、太政官處分、唱考之日、三位稱卿、四位稱姓、五位先名後姓、自今以去、永爲恒例、

〔續日本紀（九聖武）〕神龜三年二月己巳、太政官奏、諸選人於官引唱、不到者明日引唱、亦不到者後日引唱、不到者不在重引之限、當年者與上考、降爲中等、居中考被一年勞、卽被勞年亦居中等、更復被一年勞、

選敍順序

兩年考第、須注中等者、總除前勞、自今以後、永爲恒例、奏可之、

〔令集解十六選敍〕延暦十九年十二月十九日官符云、一諸司六位以下、考唱不到事、右得式部省解、偁養老二年十月十八日、太政官處分云、諸司預考之徒、必宜正身參對、若被追不起（○起恐赴誤）者、不須預考、自身被訴有理者、省未校以前聽人考例者、依一日怠除一年勞、准其勞怠、事須優恕、若徒降等、足以懲勸者、宜徒降等、以前被右大臣宣偁、奉勅如右、自今以後、立爲恒例、

〔延喜式十八式部〕凡選人長上於官引唱、番上於省引唱、若三日之內不到者、降一階敍、其諸國郡司及外散位於國引唱、具錄申省、不在赴限、

凡唱示考第者、京官皆赴集於省、若被唱不到過三日者、降考一等、披訴有理者、省未校前任判昇之、但畿內及諸國司不在集限、

〔延喜式二十八兵部〕凡諸司不進考文、幷有考問不參之司者、准式部行之、

〔延喜式十八式部〕凡考問之日有不參司、其五位已上不預節會、六位已下奪季祿、但一度加敎喩、諸國考問、一日一道、有不參國者、除使者最、

凡中宮內匠、內藏、縫部、木工、主殿、大炊、掃部、造酒、內膳、主水、采女、修理、勘解由、齋院等、職寮司使、官人已下番上已上者、勿責考問考唱不到、春宮坊舍人亦莫考唱、

〔令義解四選敍〕凡應選者、皆審狀迹、（謂考中功過、謂之狀也、履行善惡、謂之迹也、）銓擬之日、先盡德行、（謂此爲奏任立文、凡銓衡人物、必盡考績、部式部條、其德行才用之最、擇授五上、申太政官、官更銓擬奏聞、其判任者、式部銓擬申官、而乃補任也、）德行同、取才用高者、才用同、取勞效多者、○中略

凡考滿應敍之人、有高行異才、或尤達治體、（謂高行者、人所欽則、皆爲高行是也、異才者、才蓋超拔、異於人倫者也、治體者、治國之大體、有四、一曰仁義、二曰禮制、三曰法令、四曰刑罰之類也、）皆聽擢以不次、不須限以常條、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、○中略凡選任之人、奏任以上者、以名簿送太政官、判任者式部銓擬而送之、○又見令集解、

考限沿革

〔延喜式十八式部〕凡選任者奏任以上者、省注可用人名申送太政官、但官判任者、於省簡而申太政官、

〔令集解十七選敍〕慶雲三年二月十六日格云、初位以上長上官遷代、皆以四考為限、四考中中進一階敍、每二考中上及一考上下以上、各又進一階敍、一考上上進二階敍、其進加四階及計考應至五位以上、奏聞別敍、若考多者、准考累加、各依本法、考雖多、七考以來、但有一下考者、亦不在進限、其餘考者不得將充後任考、散後任復任、復有餘考者、通計成四考者、選日亦聽加階、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月庚寅、制七條事、准令諸長上官遷代、皆以六考為限、餘色得選、色別加二考、以十二考為選限、自官得選之限太遠、宜色別減二考、各定選限、〈一〉准令稱於人選、雖有出身之條、未明預選之式、自今以後、取蔭出身、非因貢舉及別勅處分、並不在常選之限、〈二〉

〔令集解十七選敍〕釋云、慶雲三年格、帳內以六考為限、職分資人亦同、

〔令集解十七選敍〕釋云、慶雲三年格、郡司軍團、皆以八考為限、其外散位者、以十考為限、分番二考、長上六考亦同、八考之例、若經三考以上者、並以九考為限、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年五月丁卯、勅曰、頃年選人依格結階、人人位高、不便任官、自今以後、宜依新令、

〔續日本紀二十五稱德〕天平寶字八年十一月辛酉、勅曰、依令長上官以六考為限、色別加二考、外散位以十二考成選、因慶雲年中、降恩改限、長上官以四考為限、外散位以十考成選、然頃者還依令條、於事不穩、宜自今已後、依格立限、使開進仕之途、用獎百官之勞、

〔類聚三代格五〕太政官符

應延陸奧國史生并弩師歷事

右按察使正四位下藤原朝臣縵麻呂奏偁、謹檢案內、太政官去大同二年十一月二日符偁、初位以上長上官遷代、皆以六考為限、又同年十一月廿三日符偁、史生不改此例者、〇中略臣請此一國、改史生歷六

年爲限者、右大臣宣、奉勅、准西海道諸國、五年爲限、弩師准此、

　大同五年三月一日

太政官符

　國司幷史生歷五年爲限事

右太政官今月十一日下陸奥出羽兩國符偁、中納言兼右近衛大將從三位行陸奥出羽按察使勳三等巨勢朝臣野足奏狀偁、謹撿案内、依太政官去弘仁三年十一月十五日符、件兩國史生歷任、五年爲限、而據去年七月十七日論奏、四年爲限、唯西海一道、五年如常、愚臣商量、邊要之設、東西是同、伏望、兩國司等、皆准西海道、五年相替、庶令忘遠路之疲、專邊守之勤者、右大臣宣、奉勅依請、

　弘仁七年正月十二日

〔延喜式十八式部〕遷内出入法

内長上四考　内分番六考　外長上八考　外分番十考

右長上分番、遷限各異、彼此出入遠近不同、内分番入内長上、經一考者、同四考例、經二考以上者、以五考爲限、（外長上入内長上者亦同）外長上入内分番、經一考者、同六考例、經二考以上者、以七考爲限、外分番入内長上、經二考者、以五考爲限、經三考以上者、以六考爲限、外分番入内分番、經二考者、同六考例、經三考以上者、以七考爲限、外分番入外長上、經二考者、同八考例、經三考以上者、以九考爲限、其有從近出遠者、亦准此法、（設如内長上出内分番、經三考者、亦同四考例、經二考以下者、以五考爲限之類、）

結階法

三階（中上中上中上中上）　二階（中上中上中上中中）

一階（中中中中中中中中）

右全（○全恐内誤）長上遷叙法、若四考上下以上、進五階叙、四考上上、進七階叙、

三階 上上 中中 上上 中　二階 中中 上中 中上 上

一階 中中 中中 中中 中中

右分番經一考入長上叙法

三階 上上 中上 上中　二階 中中 上中 中 下

一階 中中 中中 中 中

右分番經二考以上人長上叙法

○按ズルニ、此結階法ハ大ニ誤アルニ似タリ、宣州本ニ眞本ヲ擧ゲタレドモ、未ダ其誤ルベキヲ見ズ、因テ意ヲ以テ訂正スルコト左ノ如シ、

結階法

三階 中中 上上　中中 上上　二階 中中 中上　中中 中上

右內長上選叙法、若四考上下以上、進五階叙、四考上上、進七階叙、

三階 中中 上　中中 上上　二階 中中 上　中中 上中

一階 中上 中　中中 中中

右分番經一考入長上叙法

三階 中上 上　中上 上　二階 中中 上　中中 上

一階 中中 中　中中 中

右分番經二考以上入長上叙法

〔令義解一選叙〕式部省

卿一人、掌內外文官名帳、○謂、名帳者、官人名籍也、考課、謂考者校也、課者、課其職事、所以考校一年功過者、略、考課、必先課試、所以職之皆不一、故曰考課、又考課之令所謂課者、爲課試之義、此選叙、謂選者選官也、叙者叙位也、禮儀、謂朝廷儀式也、版位、勲績、謂勲者賞功也、不限文武、○中略、不得、重需課試之義也、○中略、大丞二人、掌同卿、考課、

中略〇少丞二人、(掌同大丞)

〔職原抄上〕式部省
周禮天官太宰之職也、國家典章、皆是此官所統也、本朝文官除授考選事、今猶掌之、

〔百寮訓要抄〕式部省　內外の文官の事をつかさどる、中略〇選叙といひて、昔は人の才能をえらびて官職をさづけし也、さやうの輩をも此省にて先試らるゝ也、

〔續日本紀六元明〕和銅六年四月丁巳、制、銓衡人物、擬使優劣、式部之任、務重他省、宜論勤績之日、無式部長官者、其事勿論焉、

武選

〔令義解一職員〕兵部省
卿一人、(掌內外武官名帳、考課選叙、)中略〇大丞一人、(掌准式部大丞、)少丞二人、(掌同大丞、)

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十一月丁未、太政官處分、武官醫師使部、及左右馬監馬醫帶仗者考選、及武官解任者、先例並屬式部、於事不便、自今以後、令兵部掌焉、但正身依舊在寮上下、

女官選

〔令義解一職員〕中務省
卿一人、(掌侍從、獻替、)中略〇(宮人(謂案後宮職員令內侍以下、十二女司是、其氏女、御巫、雜女、乳母等名帳、考課、位記、亦皆總掌也、)等名帳、考叙、)中略〇大丞一人、(掌宮人考課、(謂與式部兵部丞考問、簡閱也、))

〔延喜式三臨時祭〕凡御巫御門巫生島巫各一人、(其中宮東宮、唯有御巫各一人、)取庶女堪事充之、但考選准散事宮人、

〔延喜式十二中務〕凡女官考選目錄、申太政官、如式部儀、

內長上選

〔令義解四選敍〕凡初位以上、(謂一品以下也、)長上官遷代、(謂自卑官遷高官、此據六位以下考滿進選之人、其五位以上者、雖不遷代、亦皆以六考爲限、更始計也、)皆以六考爲限、六考中中進一階叙、每三考中上、及二考上下、幷一考上中、各亦進一階叙、(謂假令六考之內、三考中上、二考上下、一考上中者、合叙四階、若六考上上者、合進十三階、其一階者、是中中初基之階也、)一考上上進二階叙、其進加四階、(謂假如六考之內、三考中中、三考上中、或六考上下之類、其初位之官、應進四階、亦聽以六位所敍及計考應至五位以上、(謂其五位以上者、無結階之法、即以六位所得考第准計、應至五位以上者是也、假如從八位下、一考上上、…)階、但其位記、自合依例授式也、

内分番選

[illegible]依例叙、其考未滿而以理解[illegible]

[illegible]及考在中下以下者、不任進限、[illegible]

[illegible]若有上考下考、準折之外、仍有上考者、各聽依法加階、[illegible]

[illegible]即考未滿、從見任遷爲内外官者、並聽通計前勞、其六考之外、有餘考者、通充後任考、

[illegible]

〔令義解四考課〕凡散位、若見官無闕、雖有闕而才職不相當者、六位以下、分番上下、[illegible]

[illegible]有闕、各依本位、量才任用、其分番[illegible]

[illegible]

階叙、若考不滿八、而使還滿四周者亦如之、即有上考下考者、依前例、其以別勅及伎術直諸司長上者、

考限叙法、並同職事、

〔令義解四考課〕凡叙舍人、史生、兵衞、伴部、使部、及帳内資人、並以八考爲限、八考中、進一階、四考中、四考上、進二階、八考上、進三階叙、

外考

〔續日本紀六元明〕靈龜元年四月庚午、諸直丁經二十年已上者、預考選例、慰其勞也、

〔延喜式十八式部〕凡外考之人、未叙内位者、自非才藝殊擢、不得輙任把笏、唯任郡司軍毅者聽之、若有殊擢之選、依令待本主擧試訖、先叙内位、然後乃任之

〔延喜式十八式部〕凡諸外考者、經一選然後聽遷中宮職舍人、春宮坊舍人、其舍人違失者、案情補之、還補之

後、未經一選、无故及依病不上者、直還本色、

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年四月壬寅、公卿奏曰、大和國守從四位下藤原朝臣園人解偁、郡司之任、所掌不輕、而外考之官、不得貽謀、准於諸國、亦無潤身、是以擬用之日、各競辭退、郡務闕怠、率由於此、伏請居之內考、將勸後輩者、臣等商量、夫高爵以之彰勳、厚賞以之酬勞、所以勸勵士庶、任用得人者也、而畿內諸國、近接都下、驅策之勞、尤是殊甚、准於外國、不可同日、如今所申穩便、誠合進昇、伏望五國郡司、一居內考、許之、

外長上遷外分番遷分番入長上

〔令義解 四選敍〕凡敍郡司軍團、皆以十考爲限、十考中進一階、五考上、五考中、進二階、十考上、進三階敍、兼有上考下考者、准折並同八考例、其外散位者、分番上下、皆以十二考爲限、十二考中、進一階、六考上、六考中、進二階、十二考上、進三階敍之、(相折同郡司)其分番二考、長上八考、亦同十考例、若經三考以上者、並以十一考爲限、

六位入五位

〔延喜式 十八式部〕凡六位以下授五位者、頓除前考、但不除當年上日、

計考

〔令義解 四選敍〕凡計考應進、(謂准折之後乃知應進也)而兼有上考下考者、並得准折、毎一中下、得以一中上除之、(謂以一中上、除一中下者、得二中中考也、)毎二中下、及一下上、得以一上下除之、(謂以一上下、除二中下者、得三中中考、又以一上下、除一下上者、得二中中考、若三考上下、三考中下者、三上下爲三中上、三中下爲三中中、即結階二級也、)下上、(謂非私罪者、)上中以上、雖有下考、即從上第、(謂不用准折之法、直從上中以上考敍、假如一考上中、五考中下者、從一上中考進一階敍、其下中五考者、即皆除弃、既無中中基考、所以不敍二階也、)下考、(謂不重解官者、)(謂中下、下上、及公罪下中是也、)公罪下中、私罪下上、雖有上下、仍從下考、(謂假如一考下中、五考上下、即從下中一考、除上下五考之類、問、內外長上及分番出入、考限既有等級、未知上日若爲通計、答、內外長上、同以二百卌日爲考、內分外分番、同以一百卌日爲考、所以下條、以分番三日充長上二日、但帳內資人、以二百卌日爲考、此若與長上通計、各因分番之例、其分番、帳內資人者、分番一百卌九日、資人一日、若資人一百卌九日、分番一日、各通計一百卌日、即合得分番考、唯資人一百卌日、无分番日者、不可得考、又同、長上分番、各有上下考者、准折之法、謂何資歸者、假如以長上中上、折分番下者、得長上中中一、分番中一、以分番上、折長上中下者、得分番中一、長上中中一、以分番上二、折長上下上者、得分番中二、長上中中一、以長上上下、折分番下二者、得長上中中一、分番中二之類也、)

凡長上官以理解者、後任日聽通計前勞、(謂其分番亦准此也)其考解、及犯罪解者、不用此例、雖以理解、而無故停

私過一年者、亦除前勞、

〔令義解四 考課〕凡内外初位以上長上官計考前當年、不滿二百卌日、分番不滿一百卌日、若帳内資人不滿二百日、並不考、分番者、若日有[illegible]、[illegible]考、[illegible]上者、皆[illegible]計、[illegible]上者、[illegible]、其理不可、[illegible]也、[illegible]月[illegible]、[illegible]公使、[illegible]官者、[illegible]任、官[illegible]也、[illegible]日、[illegible]上、[illegible]使者、[illegible]使日、[illegible]在、[illegible]事故、若[illegible]人[illegible]使、[illegible]者、[illegible]官人[illegible]任者也、[illegible]使日、[illegible]計、其有功過灼然、[illegible]中以上考、[illegible]以下考、[illegible]功、[illegible]、[illegible]又分[illegible]也、既令[illegible]者、[illegible]不滿日[illegible]別記、其分番與長上通計爲考者、[illegible]入長上、[illegible]上分番者、不用此注、[illegible]上[illegible]、[illegible]分番[illegible]一日[illegible]之例也、分番三日、當長上二日、每年考文集日、省[illegible]按色別爲記、[illegible]上日[illegible]色[illegible]、[illegible]色[illegible]之[illegible]也、今具顯功過、三位以上、[illegible]一品以下[illegible]以上、[illegible]人、[illegible]也、奏裁、五位以上、太政官量定奏聞、六位以下省按定訖、顯示考第、[illegible]以下[illegible]文也、中、太政官若考當下[illegible]狀有不[illegible]、[illegible]上[illegible]、[illegible]上[illegible]定也、明量按雖明者附使[illegible]、[illegible]使也、[illegible]後年總定者、通考之後、訴理不伏、應雪者亦如之、[illegible]明也、

〔延喜式十八 式部〕凡選人雖有上考下考、而欲止計上考成選者、聽之、

凡據才被敍者、有位成選之日、通計前勞、无位[illegible]除前勞、若加級不及選階者、聽從一高、其別勅授位者、聽計前勞、

〔續日本紀五 元明〕和銅三年正月壬戌、制授位者、不得通計前勞、

〔令集解十七 選敍〕和銅八年〇靈龜元年四月八日、太政官處分、選人元有官位、據才敍位者、選日通計前勞、但无位據才用蔭敍位者、成選之日、不在通計前勞之限、但別勅授位者、聽計前勞、

〔續日本後紀十八 仁明〕承和十五年〇嘉祥元年三月辛巳、制自外國官遷任京官、未預考而更任外職、通計前勞、

〔令義解四 考課〕凡貢人、皆本部長官貢送太政官、[illegible]中大學舉人、具狀申太政官、與諸國貢人同試、試訖得第者、奏聞留式部、[illegible]才[illegible]、[illegible]上上中[illegible]、[illegible]中上、不[illegible]敍之例、[illegible]式部[illegible]乃敍也、

〔延喜式十八 式部〕凡白丁據才伎補諸司雜色、還更解退者、服闋復補、不得重聽留省更取白丁、但預把笏者、

不用此例、

凡親王已下五位已上、出家入道、其帳内資人考滿六年留省、若還俗并叙位、以舊人充之、舊人若遷他色、以新人充之、

凡職分資人、本主亡及以理去官者、不限年數、並聽留省、若有復任者、廼以舊人充之、舊人若遷他色、以新人充之、

凡不得業生、不解周髀者、雖得及第、不須叙位、但聽留省、

〔續日本紀（元明六）〕和銅七年六月甲戌、太政官處分、職分資人、若本主亡、并以理去官者、不限年遠近、并留省焉、如本主去官、亦有復任、以舊人充焉、

〔續修東大寺正倉院文書（三十六）〕造東大寺司移式部省

合參人（○中略）

大初位下佐太忌寸橘（上日廿五　寫紙一百七十五張）

右一人留省

以前人等、起去七月五日、盡廿九日、上日并行事如件、以移、

天平寶字二年八月十八日　　主典正八位上安都宿禰雄足

次官從五位下高麗朝臣

〔續日本紀（淳仁二十一）〕天平寶字二年十二月丙寅、以式部散位四百人、蔭子位子留省資人、共二百人、兵部散位二百人、爲定額、與考、自餘額外情願輸續勞者、一依前格處分、

〔續修東大寺正倉院文書（三十六）〕造東大寺司移式部省（○中略）

留省大初位下荊國足（上日八十二　夕八十一）　校紙六千五百張（○中略）

以前依大臣大禪師宣、自去八月十六日、迄十二月十七日、令奉寫御願大般若經、上日并行事、便附廣

謹以移、

天平神護元年正月十三日

主典他田

判官美努連

造東大寺司移式部省　合十六人○中略

留省大初位下秦國足○年卅七、右京人、中略

右件人等、依本寫勅旨大般若經、自去年八月十六日迄十二月十七日、供奉司家、仍九月十一日夜、寺司率參內裏、即依民部省解正四位下藤原朝臣繩万呂宣、還守司家、此依今年正月七日恩勅、可預上叙位之例、仍具事狀以移、

天平神護元年二月

（日本後紀 略二十一）弘仁二年四月甲戌、勅河內國、○中略課丁少數、無人差役、其散位位子留省之徒、不直本司常任郡里者、宜限三年補國中雜任、計其上日行事、與考言上、

（續日本後紀 一）天長十年二月庚午、留省无位尾張連豐山等賜姓忠宗宿禰、甲戌、攝津國人散位從六位上凡河內忌寸紀主、兄留省從八位上凡河內忌寸福麻呂、弟留省大初位下凡河內忌寸福長等三人賜姓清內宿禰、

（續修東大寺正倉院文書 四十七）紙背○二年月不詳

造石山院所解申、應預考人并進上考錢事、

合壹拾肆人 成選六人 進上考錢壹拾漆文

一長上船大宿奈万呂 成選錢四文

左大舍人能登忍人 非成選　三島豐羽 成選錢五文

右大舍人玉作子綿 非選

散位下道主（成選 錢四文）　上馬甘（身不得）　勾猪万呂（錢三文）

〔延喜式 三十八 掃部〕凡辨官收諸司考選文之日、設五位已上座、式兵二省收番上考選文亦同、

〔神皇正統記 後醍醐〕寛弘よりあなたには、まことに才かしこければ、種姓にかゝはらず、將相にいたる人もあり、寛弘以來は、譜第をさきとして、其中に才もあり德もありて、職にかなひぬべき人をえらばれける、世のすゑに、みだりがはしかるべき事をいましめらるゝにやありけん、七ヶ國の受領を經て、合格して公文といふことかんがへぬれば、參議に任ずと申ならはしたるを、白河の御時、修理のかみ顯季といひし人、院の御めのとの夫にて、時のきらならぶ人なかりしが、此勞をつのりて參議を申けるに、院の仰せに、それも物書ての上のことゝありければ、理にふしてやみぬ、此人は歌道などもほまれありしかば、物かゝぬほどのことにやはあるべき、また參議になるまじきほどの人にもあらせなれど、和漢の才覺のたらぬにぞありけん、白河の御代までは、よく官をおもくしたまひけりときこえたり、

〔延喜式 十八 式部〕凡上廳申政時者、外記立於辨官史上、八省丞亦立史下、但因考選事、被率日者、立式部下、

古事類苑

政治部二十二

上編

功過

官吏一般ノ功過ハ、定考考選等ノ篇ニ散見シ、而シテ此篇ニ載セタル功過ハ、多ク國司ニ係レルヲ以テ、此篇ニハ專ラ國司ノ事ヲ擧ゲタリ、

國司ハ百姓ヲ字養シ、農桑ヲ勸課スル等ノ事ヲ掌ル職ニテ、毎年一タビ屬郡ヲ巡行シ、風俗ヲ觀、囚徒ヲ錄シ、五教ヲ喩シ、農功ヲ勸メ、部司ノ能不ヲ察シ、百姓ノ疾苦ヲ問フヲ以テ例トス、因テ其治績ヲ論スルニハ、撫育スルコト方アリテ、窮民ヲ賑恤シ、差科スルコト法ノ如クシ、戶口增益スルトキハ、各見戶ニ準ジ、十分トシテ論ジ、一分ヲ加フル每ニ考一等ヲ進ム、卽チ四十戶ノ郷ニシテ增益シテ四十四戶トナレバ中上考トシ、四十八戶トナレバ上下考トスルナリ、增戶ハ課丁ヲ增スコトニテ、其正丁一口ハ一戶ノ法ニ同ジク、次丁ハ二口、中男ハ四口、不課口ハ六口ニテ、各正丁一口ノ例ニ同ジ、（令ニハ不課口ヲ增益スルヲ以テ功ト爲サズ）但シ析出生益ハ功ト爲サズシテ、招慰、括出、隱首、走還ヲ以テ功トスルナリ、析出トハ一戶ヲ分チテ二戶トスルヲ云ヒ、生益トハ人民生育シテ戶口ノ增益スルヲ云ヒ、招慰トハ蝦夷等ノ其招徠ニ因リテ戶貫ニ從フヲ云ヒ、括出隱首トハ浮浪無名ノ徒ノ自首スルト、官司ヨリ檢發スルトヲ云ヒ、走還トハ逃走セル者ノ過ヲ悔イテ還歸スルヲ云フ、生益ノ中ニテモ、心ヲ勞シテ產育ヲ遂ゲシムルハ功トスルナリ、若シ撫養スルコト方ニ乖キテ戶口減損スルトキハ、各增戶ノ法

ニ準ジ、亦一分ヲ減ズル每ニ考一等ヲ降ス、而シテ死損ハ過トセザレドモ、冤死ノ者アルコトヲ致ストキハ過トスルナリ、又戸口增益スレドモ別ニ破除アルトキハ相準折スルナリ破除トハ戸口ノ減損スルヲ云フ、但シ戸口自ラ逆黨ニ入リ、前帳虛注等ニ因リテ減損ヲ致ストキハ考ヲ降スノ例ニ依ル、前帳虛注トハ、前司ノ時死セル者ヲ存セリト注シ、逃レタル者ヲ在リト注セルヲ、後任ノ人之ニ循ヒテ改メザルヲ云フ、若シ勸農ノ勤情ニ因リテ豐歉ヲ致ストキハ、見地ニ準ジテ十分トシテ論ジ、二分ヲ加減スル每ニ考一等ヲ升降ス、總テ國司ハ各、通常ノ殿最ニ因リテ考第ヲ立テ、更ニ此法ニ依リテ其考ヲ升降スルナリ、例ヘバ中上第ヲ得タル者、一分ノ戸口ヲ增益スレバ上下第トシ、中中第ヲ得タル者、一分ノ戸口ヲ減損スレバ中下第トスルナリ、而シテ歷世ノ久シキ、國司タル人、損田不堪田等ヲ言上スルニ、實ニ依ラザル者アリ、公廨田ノ外ニ私ニ水田ヲ墾シ、或ハ墾田ヲ買フアリ、養鄙ヲ置クアリ、貢調ノ期ヲ過シ麁惡ノ物ヲ進メ、私宅ニ於テ稅帳ヲ造ルアリ、部内ニ交關スルアリ、舊館ニ住セズシテ新ニ館ヲ造ルアリ、擅ニ任所ヲ離レ、或ハ使ヲ奉ジテ罪ヲ犯スアリ、親屬ノ經過スルニ官物ヲ供スルアリ、所部ノ女ヲ娶ルアリ、服ヲ匿シテ職ニ從フアリ、此ノ如キ類極メテ多ケレバ、痛ク之ヲ折責シ、之ガ爲メニ或ハ條例ヲ設ケタリ、又國司ノ目以上、每年分番シテ朝集使ト爲リ、守以下ノ狀迹ヲ報ジ、因リテ功過ヲ量リ賞罰スルナリ、而シテ國司ノ殊功異行等アルトキハ、諸司ヨリ式部兵部二省ニ錄送シテ、特ニ之ヲ昇擢シ、除免官當ノ罪ヲ犯ストキハ考校セザルナリ、

敍位除目ノ時ニ、受領ノ功課ヲ定ムルコトアリ、受領トハ國守ノ事ニテ、國守遙任ナルトキハ介ヲ受領ト云フナリ、諸國ノ舊吏卽チ前任ノ受領タル人、公文ヲ勘セラレタル後ニ、自ラ其功課ヲ錄シ、加階遷官ヲ請フ文ヲ進ム、上卿吏ニ核實シ、主計主稅二寮ノ勘文ヲ以テ、中文

ニ結緘シテ奏聞ス、因リテ大臣ニ勘シテ、諸卿ヲシテ其功課ヲ議定セシム、勘文ハ所謂大勘文ニシテ、是ヨリ先キ、二寮及ビ勘解由使ヨリ諸國官吏ノ功過ヲ勘録シ、十二月二十日以前ニ、太政官及ビ藏人所ニ進メタルナリ、叙位ヲ議シ除目ヲ議スルニ方リ、上卿勘ヲ奉ジ、第一ノ納言ヲシテ受領功課ノ文書ヲ徴セシム、既ニシテ上卿某某國カアルト問フ、參議其名ヲ申ス、次ニ參議三人ノ内、一人不與狀ヲ讀ミ、一人ハ主計主税ノ勘文ヲ把リテ、勘解由ノ勘文ト申文トニ對照シ、前任ト前前任以往トノ功過ヲ比較ス、是ヲ多計久良倍ト云フ、一人ハ定文ヲ寫ス、不與狀ハ即チ不與解由狀ニシテ、解由トハ後任ヨリ前任ニ付シテ調庸未進等ノ欠負ナキニ由リテ、交代ヲ受タルコトヲ證スルノ書ナリ、而シテ前司任限中未進等アレバ、解ヲ付セズシテ其由ヲ列記ス、是ヲ不與解由狀ト云ヒ、略シテ不與狀トモ云フ、サテ不與狀ヲ讀ムニ就キテハ本頭ノ條アリ、本頭トハ國司貯積ノ總名ニテ、正税公廨、雜稲ノ出擧是ナリ、（政事要略ニ見ユベシ）不動ノ條アリ、不動ハ即チ不動穀ニテ、常ニ勘用セザルヲ云ヒテ、古委新委ノ二色アリ、委トハ委積ノ意ナリ、此二條ハ前任前前任ノ舉數ノ多少ヲ檢ス、編ノ條アリ、編トハ不動倉。ノ編ニシテ、不動倉トハ不動穀ヲ納レタル倉ナリ、是ハ餘ル所ノ多少有無ヲ問フ、格率分ノ條アリ、率分トハ分數ヲ云ヒテ、天長九年ノ格ニ依リテ、毎年公廨十分ノ一ヲ進メテ、實定交替ノ欠負ヲ塡償ス、因リテ是ヲ格率分ト云フ、神社ノ條、佛寺ノ條アリ、是ハ前任新委修理ノ數ヲ以テ、前任以往ノ無實破損ノ數ニ照スナリ、大垣ノ條アリ、大垣ハ大内ノ大垣ニシテ、當時國司ニ課シテ造營セシメタルナリ、是ハ役夫ヲ出セリヤ否ヤ、其工事ヲ助ケタリヤ否ヤヲ問フナリ、次ニ上卿ニ請益シテ定文ヲ寫ス、請益トハ指示ヲ請フノ謂ナリ、定文ヲ寫スニハ、調庸税帳等ハ合格不合格ト注シ、率分ハ無欠有欠ト注シ、齋院禊祭料ハ無未進有未進ト注シ、勘解由ノ勘文ハ無過有過ト注ス、サテ合格トハ幾年ノ調庸雜米ノ總返抄ヲ

得、及ビ幾年ノ税帳ヲ勘濟スルナリ、率分ハ公事物ニテ、調庸雜米十分二ヲ毎年別納シテ公用ニ充ツルヲ云フ、上ノ格率分トハ別ナリ、是ハ太政官ノ破立ノ勘文ニ依リテ作ルナリ、齋院祓祭料トハ、是モ諸國ニ課セシナリ、勘解由ノ勘文トハ、勘解由使ニテ其功過ヲ勘ベタルヲ云フ、而シテ私物ヲ以テ出擧シ、前ニ減ゼシ所ノ正税ヲ補塡シ、并ニ千町以上ノ田ヲ開墾スルハ大功トシ、交替文ヲ辨濟シ、四年以上ノ返抄ヲ得タル者ニハ褒賞ヲ加フ、上卿功過文書ヲ看訖リテ大臣ニ付ス、大臣因リテ諸卿ノ擧冊ヲ獻ジ、而シテ後ニ任敍ノ事アリ、猶ホ敍位、除目、考選ノ諸篇ヲ參看スベシ、

〔令義解一職員〕大國

守一人、掌祠社、戸口、簿帳、字養百姓、勸課農桑、糺察所部、貢擧、孝義、田宅、良賤、訴訟、租調、倉廩、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵驛、傳馬、烽候、城牧、過所、公私馬牛、闌遺雜物、及寺、僧尼名籍事、餘守准此、其陸奥出羽越後等國、兼知饗給、（謂饗食、并給祿也、）征討、斥候、（謂斥、逐也、言逐於非常也、）壹岐對馬日向薩摩大隅等國、惣知鎭捍、（謂捍、衞也、言鎭衞冦賊也、）防守、及蕃客歸化、三關國、又掌關剗、（謂依律、關者檢判之處、剗者塹柵之所是也、）及關契事、介一人、掌同守、餘介准此、大掾一人、掌糺判國内、審署文案、勾稽失、察非違、餘掾准此、小掾一人、掌同大掾、大目一人、掌受事上抄、勘署文案、檢出稽失、讀申公文、餘目准此、少目一人、掌同大目、史生三人、

上國

守一人、介一人、掾一人、目一人、史生三人、

中國

守一人、掾一人、目一人、史生三人、

下國

守一人、目一人、史生三人、

〔令義解〕 八 考課 凡國守毎年一巡行屬郡、觀風俗、問百年、錄囚徒、理冤枉、[illegible]詳察政刑得失、知百姓所患苦、[illegible]敦喩五教、勸務農功、[illegible]部內有好學篤道、孝悌忠信、[illegible]清白異行、[illegible]發聞於鄕閭者、舉而進之、[illegible]有不孝悌、悖禮亂常、不率法令者、[illegible]糺而繩之、其郡境內田疇闢、產業修、禮教設、禁令行[illegible]者、爲郡領之能、入其境、人窮匱、農事荒、奸盜起、獄訟繁者、爲郡領之不、若郡司[illegible]在官公廉、不及私計、正色直節、[illegible]不飾名譽者、必謹而察之、其情在貪穢、諂諛求名、公節無聞、而私門日益者、亦謹而察之、其政績能不、[illegible]及景迹善惡、[illegible]皆錄入考狀、以爲褒貶、即事有侵害、[illegible]不可待至考者、隨事糺推、

〔令義解〕 八 考課 凡國郡司、須向所部檢校者、不得受百姓迎送、妨廢產業、及受供給、[illegible]致令煩擾、

〔延喜式〕 二十六 主稅 凡大宰及國司巡行部內者、帥傔從十人、貳六人、監以下三人、史生一人、國介以上三人、掾以下二人、史生如前、

〔令集解〕 二十二 考課 和銅五年五月十六日格云、國司巡行部內、將從次官以上三人、判官以下二人、史生一人、並食公廨、日米二升、酒一升、史生酒八合、將從一人米一升、酒五合、〇[illegible]見續日本紀

〔令集解〕 二十二 考課 寶龜三年六月廿日格云、充新任國司公廨、宜停巡行之法、依公廨賜之、自今以後、永爲恆例、

〔延喜交替式〕凡國郡官司、親自巡觀、修固池堰、催勸耕農、若有田不耕、無力不營、以救急義倉等料廩給之、猶有不足、量借營料、令勤耕營、秋收之日、先納所借、其雖有田疇、而无人可治、亦以公力營種、所獲稻者、全納官倉、

〔延喜式主税二十七〕某國司解申收納某年正税帳事中略

巡行國司單若干人目已上若干人、史生若干人、從若干人、

食料若干束

飯料若干束目已上日若干升、史生日若干合、

鹽若干斗目已上日若干升、史生日若干合、

酒若干斗目已上日若干升、史生日若干合、

〔東大寺正倉院文書四十三〕薩摩國天平八年正税帳中略

國司巡行部内合玖度、總單壹伯肆拾捌人、上六十三人、從八十五人、食稻伍拾束漆把、上人別四把、從人別三把、酒伍斗叄升、目以上一十三人、人別一升、史生五十人、人別八合、

叄度正税出擧并收納一度守一人、從三人、并四人、七日、一度史生二人、從二人、并四人、六日、一度醫師一人、從一人、并二人、五日、單陸拾貳人、上貳拾肆人、守七人、史生一十七人、從叄拾捌人、壹度貢計帳手實守一人、目一人、醫師一人、從六人、并九人、一日、單玖人、上叄人、目以上二人、醫師一人、從陸人、

壹度撿按庸蔗醫師一人、從一人、并二人、三日、單肆人、上貳人、醫師、從貳人、

壹度撿按伯姓損田目一人、從二人、并三人、二日、醫師一人、從一人、并二人、五日、單壹拾陸人、上漆人、目二人、醫師五人、從玖人、

叄度賑給一度醫師一人、從一人、并二人、十九日、一度史生一人、從一人、并二人、五日、一度守一人、目一人、史生一人、從六人、并九人、一日、單伍拾漆人、上貳拾漆人、目以上二人、史生廿五人、從叄拾人、

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國天平九年正税帳中略

巡行部内國司漆拾人、守二日、掾九日、目六日、史生十日、從卌二日、一郡十二日食、守一日、目一日、史生一日、從六日、七郡別四日食、守一日、掾三日、

(史生十二日、従十三日、)七郡別三日食、(史生四日、従十一日、)三郡別三日食、(史生二日、従十一日、)七郡別二日食、(史生一日、従八日、)

七郡別一日食、(史生一日、従一日、)六郡別一日食、(史生一日、従一日、)并單壹阡參伯參拾人、(上十六日、史生廿八日、従廿四日、)食

稻肆伯肆拾玖束陸把、鹽貳斗貳升肆合捌勺、酒肆斛陸斗捌升捌合、(上四日、史生四日、従四日、四把、鹽二勺、酒一升、)

(合、従一日、稻二把、鹽一勺、酒五合、)

〔東大寺正倉院文書十四〕和泉監天平九年正税帳○中

監巡行部內單參伯參拾陸人、(官二人一百廿四人、史生二人一百十二人、)食稻壹伯壹拾貳束、(二百廿四人別三把、一百十二人別四把、)酒壹斛參升

捌合、(従七十一人一日、別人六合、)一升、料稻壹拾捌束壹把陸分之伍、

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國天平九年正税帳○中

國司巡行所部壹拾壹度、官人參拾捌人、將從伍拾玖人、合玖拾漆人、

延單壹佰玖拾伍日、(四日已上二日、以下一九十九人十日、史生四日、)

充稻陸伯捌束伍把、(史生一十九日已上十七日、五百日、日別四把、三把、)

酒陸斛壹斗玖升陸合、(史生十九日已上二十日、百九十八日、日別八合、一升、)

鹽參升肆合貳勺伍撮、(史生十九日已上十七日、五百日、日別一勺二撮、)

春秋貳度出擧官稻巡行官人、單參伯陸拾日、(史生十日已上五十日、従二十四百十日、六日、九)

(五日、合一人、三升四合、史生二人、従二人、從二人、日一人、將從一人、史生二人、將從十二人、合十一人、將十八日、)

(五日、合四斗、三升六合、給一人、升)

寫觀風俗并問百姓消息巡行官人、單壹伯玖拾捌日、(六日已上、將從百廿日、六日、史生)

(十守一、人、一人、將十八日、日別一給人、將一升二人、史生五合、酒一升、六合、二人、合)

勸催百姓產業巡行官人、單壹伯貳拾陸日、(六日已上、將從十七日、十二日、史生)

(十一人、將日別一給人、史生一升二人、將從二人、合七人、)

貢計帳手實巡行官人、單貳伯肆拾漆日目已上廿八日、史生五十七日、將從百五十二日、
守一人、將從三人、目一人、將從二人、史生二人、將從二人、醫師一人、將從一人、合十三人、經十九日、日別給米二斗二升、酒四升四合、
撿校田租巡行官人、單壹伯貳拾陸日目已上十八日、史生卅六日、將從七十二日、
爲穀穎稻巡行官人、單壹伯壹拾貳日目已上十六日、史生卅二日、將從六十四日、
目一人、將從二人、史生二人、將從七人、合七人、經十六日、日別給米一斗二升、酒二升六合、
撿校庸物巡行官人、單貳伯參拾壹日目已上廿二日、史生卅二日、將從百卅七日、
守一人、將從三人、目一人、將從二人、史生二人、將從二人、合十一人、經卅一日、日別給米一斗八升五合、酒三升六合、
收納當年官稻巡行官人、單壹伯捌拾玖日目已上廿二日、史生廿一日、將從百廿六日、
守一人、將從三人、目一人、將從二人、史生一人、將從一人、合九人、經廿一日、日別給米一斗五升、酒二升八合、

〔東大寺正倉院文書四十二〕豐後國天平九年正稅帳○中略

國司巡行部內、合壹拾肆度、總單壹伯壹拾捌人、上參拾捌人、目以上廿五人、史生十三人、從捌拾人、食稻參拾玖束貳把、上人別四把、從人別三把、酒參斗伍升肆合、目以上人別一升、史生人別八合、

參度、正稅出擧并收納、一度守一人、從三人、并四人五日、二度掾一人、從二人、并三人六日、單參拾捌人、上壹拾壹人、掾以上從貳拾漆人、

參度、賑給貧病人并高年之徒、一度守一人、從二人、一度掾一人、從二人、一度史生一人、從一人、并九人、並二日、單壹拾捌人、上陸人、掾以上四人、史生二人、從壹拾貳人、

壹度、隨府使賑給貧病人、守一人、從三人、史生一人、從一人、并六人三日、單壹拾捌人、上陸人、守三人、史生三人、從壹拾貳人、

壹度、蒔營紫草園、守一人、從三人、并四人二日、單捌人、上貳人、守從陸人、

壹度、貢計帳手實、史生一人、從一人、并二人三日、單陸人、上參人、史生從參人、

壹度、隨府使撿校紫草園、守一人、從三人、并四人一日、單肆人、上壹人、守從參人、

壹度、收庸、史生一人、從一人、并二人三日、單陸人、上參人、史生從參人、

壹度、検田熟不、(史生一人、將從二人、二日、)單肆人、上貳人、(史生、)從貳人、
壹度、巡察諸郡、(守一人、將從一人、二日、三人、)單捌人、上貳人、(守、)從陸人、
壹度、問百姓消息、(守一人、將從一人、三日、)單捌人、上貳人、(守、)從陸人、
(東大寺正倉院文書三十五)周防國天平十年正稅帳(○中略)
國司巡行壹拾參度、(守十度、史生十二度、)將從陸拾貳人、合玖拾漆人、單壹仟玖伯漆拾壹人、(日已上四百五十人、史生二百七十人、將從一千二百五十一人、)
食稻陸伯陸拾參束參把、酒陸斛陸斗陸升、鹽參斗玖升肆合貳勺、直稻陸束伍把壹分、(以一束充二六升、)
食法(史生已上人別日稻四把、酒一升、鹽二勺、將從人別日稻三把、鹽二勺、)
檢俵倉國司壹度、(守一人、史生一人、)將從參人、合伍人、廿日、單壹伯人、(守廿人、史生廿人、將從六十人、)食稻參拾肆束、酒參斗陸升、鹽貳升、
收納正稅國司壹度、(守一人、史生一人、)將從參人、合伍人、十七日、單捌拾伍人、(守十七人、史生十七人、)將從伍拾壹人、食稻貳拾捌束玖把、酒參斗陸合、鹽壹升漆合、
從迎神宮驛使國司壹度、(守一人、史生一人、一日、)將從伍人、合捌人、廿五日、單貳伯人、(日已上五十人、史生廿五人、將從一百廿五人、)食稻陸拾漆束伍把、酒漆斗、鹽肆升、
春夏二時、借貸并出擧賑給官稻、國司貳度、(守一人、史生一人、一日、)將從伍人、合捌人、將二日、單壹伯參拾陸人、(日已上十四人、史生二十人、將從二百一十人、)食稻壹伯壹拾參束肆把、酒壹斛壹斗漆升陸合、鹽陸升漆合貳勺、
賣斗實國司壹度、(守一人、史生一人、二日、)將從陸人、合壹拾人、廿日、單貳伯人、(日已上一百人、史生廿人、將從一百廿人、)食稻陸拾捌束、酒漆斗貳升、鹽肆升、
賑給義倉國司壹度、(守一人、一日、)將從肆人、合陸人、六日、單參拾陸人、(日已上十二人、將從廿四人、)食稻壹拾貳束、酒壹斗貳升、鹽漆合貳勺、

功過條例

檢田得不國司壹度、（掾一人、史生一人、）將從參人、合伍人、廿七日、單壹伯參拾伍人、（掾廿七人、史生廿七人、將從八十一人、）食稻肆拾伍束玖把、酒肆斗捌升陸合、鹽貳升漆合、

檢牧馬牛國司壹度、（掾一人、目一人、）將從肆人、合陸人、十二日、單漆拾貳人、（日已上廿四人、將從卌八人、）食稻貳拾肆束、酒貳斗肆升、鹽壹升肆合肆勺、

檢驛傳馬等國司壹度、（掾一人、目一人、）將從肆人、合陸人、七日、單肆拾貳人、（日已上十四人、將從廿八人、）食稻壹拾肆束、酒壹斗肆升、鹽捌合肆勺、

斂調庸國司壹度、（守一人、目一人、史生二人、）將從漆人、合壹拾壹人、十八日、單壹伯玖拾捌人、（日已上卅六人、史生卅六人、將從一百廿六人、）食稻陸拾陸束陸把、酒陸斗肆升捌合、鹽參升玖合陸勺、

推問消息國司壹度、（守一人、目一人、史生一人、）將從陸人、合玖人、十五日、單壹伯參拾伍人、（日已上卅人、史生十五人、將從九十人、）食稻肆拾伍束、酒肆斗貳升、鹽貳升漆合、

從遞察驛使國司壹度、（守一人、目一人、史生一人、）將從陸人、合玖人、十六日、單壹伯肆拾肆人、（日已上卅二人、史生十六人、將從九十六人、）食稻肆拾捌束、酒肆斗肆升捌合、鹽貳升捌合捌勺、

收納官稻國司壹度、（守一人、目一人、史生一人、）將從陸人、合玖人、卅二日、單貳伯捌拾捌人、（日已上六十四人、史生卅二人、將從一百九十二人、）食稻玖拾陸束、酒捌斗玖升陸合、鹽伍升漆合陸勺、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝、其薗地水陸之利、與百姓俱、又國司等在國不得判罪、不得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得騎部內之馬、得喰部內之飯、介以上奉法、必須褒賞、違法當降爵位、判官以下、取他貨賂、二倍徵之、遂以輕重科罪、其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪、若有求名之人、元非國造伴造縣主稻置、而輙詐訴言、自我祖時、領此官家、治

是郡縣、汝等國司不得隨詐便牒於朝、審得實狀、而後可申、又於閑曠之所、起造兵庫、收聚國郡刀甲弓矢、邊國近與蝦夷接境處者、可盡數集其兵、而猶假授本主、其於倭國六縣被遣使者、宜造戸籍并校田畝、謂、檢覈墾田頃畝、及民戸口年紀、汝等國司、可明聽退、仍賜帛布、各有差、

〔令義解 四考課〕凡國郡司、撫育有方、戸口增益者、[illegible]各准見戸為十分論、加一分、國郡司謂、掾及少領以上、各進考一等、[illegible]毎加一分進一等、[illegible]若撫養乖方、戸口減損者、[illegible]各准增戸法、亦減一分降一等、毎減一分降一等、[illegible]其勸課田農、能使豐殖者、亦准見地為十分論、[illegible]加二分、各進考一等、毎加二分進一等、[illegible]其有不加勸課、以致損減者、損一分降考一等、毎損一分降一等、[illegible]若數處有功、並應進考者、[illegible]亦聽累加、

〔令義解 四考課〕凡國郡以戸口增益應進考者、若是招慰、[illegible]括出、[illegible]隱首、走還者、[illegible]得入功限、新生者不合、[illegible]若戸口入逃、[illegible]走失、[illegible]犯罪配流以上、[illegible]注[illegible]及沒賊、[illegible]以致減損者、依降考例、[illegible]

〔令集解 二十考課〕義云、本戸計戸數、增戸依丁數也、假如本戸百烟、既十烟為一分、今有增丁十人者、為加一分、進考一等之類也、問、本戸合百九戸、若百十一戸者、作十分、既有欠乘、未知作分者為、或云、有百九戸、除九戸、有百十一戸、除一戸、合作十分、是无所據、但量情所歸者、例師說可云、然問、釋本戸者、以去年定數為本戸哉、或云可然、假如初年減一分、除一等、後年增一分、進一等耳、師同、問、計增益損減、

待附籍及除帳哉、或云、每年作增減分耳、不待除帳造籍、但考中逃還者不在入功過之限、何者戶口逃亡者、登年失徭役、又依律里長以上可科逃亡罪故、師同、問雜戶陵戶可總計哉、或云可然也、何者戶令云、以五十戶爲里故、然則一同百姓、師同、問戶口增減以何時可爲定、或云、計帳之時可定、然則與考限別也、問或云、增戶爲分、亦不令過十分、何者爲考不過上上故也何、義云、其國郡司各依行能功過立考第已訖後、更依斯條爲分昇降也、問是卽國司依加減之分可昇降耳歟、師說然也、

〔選敍令十五選敍〕諸州縣官人、撫育有方、戶口增益者、各准見戶爲十分論、每加一分、刺史縣令各進考一等、增戶口謂課丁率一丁同一戶法、增不課口者、每五口同一丁例、其有帳除者得相折、其州戶口不滿五千、縣戶不滿五百者、各准五千五百戶法爲分、若撫養乖方、戶口減損者、各准增戶法、亦每減一分降一等、謂課及不課並准上文、其勸課農田、能使豐殖者、亦准見地爲十分論、每加二分各進考一等、此謂永業口分之外、別能墾起公私荒田者、其有不加勸課以致減損者、謂永業口分之外、有荒廢者、每損一分降考一等、若數處有功、並應進考者、並聽累加、

〔令義解四考課〕凡官人因加戶口及勸課田農幷緣餘功進考者、於後事若不實、縱經恩降、其考皆從追改、謂雖已叙位、亦須追改也、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月辛巳朔、勅諸國朝集使曰、天下百姓、多背本貫、流宕他鄉、規避課役、其浮浪逗留、經三月以上者、卽土斷輸調庸、隨當國法、又撫導百姓、勸課農桑、心存字育、能救飢寒、實是國郡之善政也、若有身在公庭、心顧私門、妨奪農業、侵蛑萬民、實是國家之大蠹也、宜其勤催產業、資產豐足者爲上等、雖加催勸、衣食短乏者爲中等、田疇荒廢、百姓飢寒、因致死亡者爲下等、十人以上則解見任、又四民之徒、各有其業、今失職流散、此亦國郡司敎導無方、甚無謂也、有如此類、必加顯戮、自今以後、遣巡察使、分行天下、觀省風俗、宜勤敦德政、庶彼周行、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年四月乙丑、詔曰、凡貢調脚夫入京之日、所司親臨、察其備儲、若有國司勤加勸課、能合上制、則與字育和惠、肅淸所部之最、不存敎喩、事有闕乏、則居撫養乖方、境內荒蕪之科、依其功

過必從黜陟、又比年計帳、具言勸功、雜徭物數、足以撿身、然入京人夫、衣服破弊、菜色猶多、空著公帳、徒
延守勞務、其欺誑以遮其罪、國郡司如此、欺誑何任、自今以去、宜恤民隱、以稱〈[illegible]〉所委、仍錄部內豐
儉農桑增益言上、

（類聚三代格七）按察使訪察事條事

在官公平、立身清慎〈[illegible]〉
剖斷合理、獄訟無冤〈[illegible]〉
推檢皆實、戸口無遺〈[illegible]〉
蕃殖戸口、增益調庸〈[illegible]〉
勸課農桑、國阜家給〈[illegible]〉
在官貪濁、處事不平〈[illegible]〉
容縱子弟、請託公行〈[illegible]〉
嗜酒沈湎、放遊無度〈[illegible]〉
逋逃在境、[illegible]濫不[illegible]〈[illegible]〉
肆行姦猾、以求名官〈[illegible]〉
右按察使巡察管國訪察事條如前、〈略〉中

養老三年七月十九日

（續日本紀十五）天平十六年九月丙戌、勅頒三十二條於巡察使、事具別勅、

（類聚三代格七）勅、疫死多數、水旱不時、神火屢至、徒損官物、此者國郡司等、不恭於國神之咎也、又一旬
亢旱、致無水苗、數日霖雨、漂流田苗、此者國郡司等、使民失時、不修堤防之過也、自今以後、若有此色、自
日以上、宜悉遷替、不須久居勞擾百姓、更簡良材、速可登用、遂使拙者歸田、賢者在官、各修其職、務無民

憂、

天平寶字七年九月一日〇又見續日本紀

〔類聚三代格七〕勅、諸國所貢調庸支度等物、毎有未納、交闕國用、積習稍久、爲弊已深、良由國宰郡司遞相怠慢、遂使物漏民間用乏官庫、又其莅政治民、多乖朝委、廉平稱職、百不聞一、瀉民潤身、十室而九、忝曰官司、豈合如此、宜量其狀迹隨事貶陟、其政績有聞、執掌無廢者、亦當顯錄、擢以顯榮、所司宜詳沙汰明作條例奏聞、主者施行、

延暦五年四月十一日

〔類聚三代格七〕太政官謹奏

一撫育有方戶口增益　一勸課農桑積實倉庫

一貢進雜物依限送納　一肅清所部盜賊不起

一剖斷合理獄訟無寃　一在職公平立身淸愼

一且守且耕軍粮有儲　一邊境淸肅城隍修理

右國宰郡司鎭將邊要等官、到任三年之內、政治灼然、當前件二條已上者、伏望、五位已上者、量事進階、六位已下者、擢之不次、授以五位、

一在官貪濁處事不平　一肆行姦猾以求名譽

一畋遊無度擾亂百姓　一嗜酒沈湎廢闕公務

一公節無聞私門日益　一放縱子弟請託公行

一逃失數多克獲數少　一統攝失方戎卒違命

右同前非官不務職掌、仍當前件一條已上者、伏望、不限年之遠近、解却見任、其違乖撫育勸課等條者、亦望准此、

伏奉今月十一日勅、諸國調庸支度等物、毎有未納、交闕國用、又群官政績、多乖朝委、雖加戒論、曾無改革、仍不獲已、何以勸懲、所司宜作條例奏聞者、臣等商量所定具如前件、謹錄事狀奏聞、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

延暦五年四月十九日 ○又見續日本紀

(日本後紀十四平城)大同元年六月壬寅、詔曰、朕以眇虚、謬承先業、撫事不闇、寤寐政治、負扆春氷、取喩方馭、朽索比懼非難、伏惟先帝、經緯區宇、體天立化、布愛心而撫育、垂禹泣而哀矜、謹案延暦五年四月十一日詔、下者稱、諸國調庸支度等物、毎有未納、交闕國用、良由國郡司遞相怠慢、又在政治民、多乖朝委、宜量其狀迹、隨事貶黜、所司宜作條例奏聞、公卿仰依綸旨、上一十六條事、自茲厥後、既經年所、空設意章、未聞遵行、是則國郡官司不練之所致也、今爲行十六條、量置六道觀察使、道別一人、判官一人、主典一人、所以移風淳風、易俗澄俗、激濁揚清、黜陟幽明也、其事有大小、使有輕重、自非綱由曆典、取國政散、宜遣判官以下督察、宜從取所司清廉幹了、官達察論按廉富之詞、開諸先務、安集之路、在於其人、凡厥使等、副朕意焉、

(類聚三代格七)太政官符

合應下觀察使起請事十六條

一撫育有方戸口增益條

一勸課農桑積實倉庫條

右山陰道觀察使從三位行大藏卿兼左大辨菅野朝臣眞道奏狀偁、謹檢去延暦五年四月十九日所立十六條例、撫育勸課等奏狀八條下偁國宰郡司等、到任三年之内、政治灼然、當前件二條已上者、五位已上者量事進階、六位已下者擢之不次、授以五位、又云、其違乖一條已上者、不限年之遠近、解却見任者、今撿此條、頗稱增益、不限口數、至於減損、亦無分法、仍案考課令云、凡國郡司、撫育有方

戸口増益者、各准見戸、爲十分論、加一分、國郡司各進考一等、注云、謂掾及少領以上、又云、毎加一分、進一等、撫育乖方戸口減損者、各准増戸法、亦減一分降一等者、又云、國郡司勸課田農、能使豐殖者、亦准見地、爲十分論、加二分、各進考一等、毎加二分進一等、注云、謂熟田之外、別能墾發者、又云、其有不加勸課、以至損減者、損一分降考一等者、今令有進降之法、例無褒貶之差、而當道諸國時有此輩、既無限制、何以黜陟、又或前時荒廢、後人開發、或去年有荒、今年開營、如此之類、論功有疑、又或百姓各事墾發、或王臣家自多開墾、如此之色、取捨未詳、伏望、増益減損并定分法、待有滿限、擬議褒貶、又或殷富國郡積實年久、此非新人之功、或衰弊有漸、常多未納、不爲後過、若有弊國之舊物、別能積實、殷富之郡、還致空損者、乃始昇降以勵將來者、今使所奏上件二條増減分數、宜依令條、假令國司三考上中、褒擢之功於是顯矣、所謂三考之內、政治灼然者也、自餘並依考選之法、其戸口増益加三分、則進考三等、居上中第、又勸課田農加六分、則進考三等、亦居上中第、其前荒後開、及王臣開墾亦須爲功、同入分法、又或田租依實徵收、不必得七爲限、當時正稅全納無殘、舊年之物依格徵納、此並事緣勸農、可謂積實倉庫、若國司到任、三年之內、件二條中三考上中、及勸課條內、兼無此積實者、政治灼然、乃合擢進、其郡司歷無九等考、第三年之內増減分法、亦准國司、但所部稍小、歷任無限、褒擢之期、宜准還進、其下諸條限三年內、毎年計功、亦皆准此、

一貢進雜物依限送納條

右同前奏偁、今撿此條、事在勸勵、或當無未進之國、實非新司之功、久弊多殘之郡、乃知後人之能、伏望、能改前人之意、兼填舊時未進、始令進擢、實愜事宜、又准條例、至有違乖、即令解任、而案大同三年〇三年恐二年誤十二月廿九日格、調庸違期、依律科處、不必解任、伏望、調庸違闕者、即准律科處、自餘雜物者、依條例黜陟者、今依使奏、調庸是重、尙依罪之輕重、餘物是輕、亦宜依律科處、餘依使奏、

一肅淸所部盜賊不起條

右同前奏條今案此件既稱不能糾有一人並罪縣肅清伏望寧絕盜賊鄉縣一人鄉內清肅乃始褒進

又准條例若有違犯起發一人合解見任仍案驗盜律云鄉內有一人爲盜者里長笞卅鄉內一人笞廿縣隨所管鄉多少通計爲罪據盜者各加一等准據此律輕重具科而今一人爲盜即處解官求之人情恐近苛刻伏望准盜賊多少定科責輕重又所有盜賊背日內捕獲者亦望准據律條不入過例者今檢使奏須准律條鄉內有一人爲盜者即郡司處違犯之科其關若管二鄉者二人爲盜若管三鄉者三人爲盜若盜賊過此數關司即合解任餘亦依使奏

一剖斷合理獄訟無冤條

右同前奏條今案檢憲人無冤訴即合褒獎若有冤枉一人即入違犯之科仍案考課令處斷乖理爲下上降考下上隨有犯科處不必解官若今所冤事輕罪杖以下則解見任恐涉刻薄伏望定犯輕重以議褒貶若今宜絕無冤訴即令褒獎如有違犯准犯處罪並依使奏

一在職公平立身清慎條

右同前奏條今案令官人清慎顯著及公平可稱等各爲一善其一最已上有二善爲上下然則非有拔群之人何階超等之舉伏望若有此色具錄行狀推陳敷達之本末委觀遠近之推服乃始褒獎免叨濫一其違乖公清之科同下貪濁之條者今縱令當此一條即自有件二善者也或加恪勤之善自升上中之第始議褒獎依使奏

一在官貪濁處事不平條

右同前奏條今案令待居官諂詐及貪濁有狀降考即解見任而據令貪濁有一即解依例兩事相須始解伏望被人告言貪濁有狀臨時便解除此之外貪濁之科准考解却若有兩事共犯不可更論遲違者今宜居官貪濁者待考解任處事不平者須降考第

一肆行奸猾以求名譽條

右同前奏係、案職制律、內外諸司、實无政迹、遣人妄稱己善、申請於上者、杖一百、注云、雖有政迹、而自遣者亦同、夫謟求之事、濁途多端、所犯輕重、不可無差、伏望、量謟求事類、定科責輕重、但實有政迹、被衆推服、民共稱善、不入貶限者、今雖非求名、而行詐猾、惡之爲本、實既灼然、而使奏偏舉求譽之罪、不論肆猾之坐、宜不限輕重、並處解官、但罪重者、事發即解、犯輕者、待考乃解、餘依使奏、

一畋遊無度擾亂百姓條

右同前奏係、既稱無度、亦注擾亂、二事相須、然後合坐、伏望、雖畋遊無度、不致擾亂者、即存寬簡、不入科責者、宜依使奏、

一嗜酒沈湎廢闕公務條

右同前奏係、案考課令、官人背公向私、職務廢闕者爲下中、令解見任、今據令闕務、即令解見任、准例嗜酒、相須科處、伏望、嗜酒致廢務、則事發便解、廢務緣他事、則待考始解者、今宜嗜酒及緣他至廢公務、俱是一事、宜以考解、

一公節無聞私門日益條

右同前奏係、今案此條、身無公節之譽、家有潤家之益、則迹涉貪濁、自入貶黜、但或公節無聞、而私門不益、或潤家無枉、而公節有聞、伏望、如斯之徒、不入貶限者、宜依使奏、

一放縱子弟請託公行條

右同前奏係、案職制律、有所請求曲法之輩、罪處笞杖、本罪仍在、主司許者、亦與同罪、今恒科雖輕、條例持重、伏望、原情量狀、准例解任、又法家所論子弟者、是謂子孫弟姪、今雖非子弟、放縱親識、與民爭利、兼事請託、蠹民害政、事在難容、伏望、一准子弟、共處同科者、今宜不論輕重、同解見任、一依使奏、

一舉擢善政科責不實事

右同前奏係、今案條例、若有三年之內一年當條、或有三年之內每年當條、至于進擢、未審同異、又案、

令條所書多少,定考升降。又若數處有功,並應通考者,亦須累加。然則成當善狀三條已上,並于擢進,不可同等。伏望准此年而定等級,依條數而作高下,庶令人勉善政,論多實能。又考課令云:官人因加戶口及勸課田農,并緣餘功進考者,於後事若不實,縱經恩降,其考皆從追改者。伏望若有不實被擢,准法一准追奪者,今宜功過多少,依考課例六考高下,准此處法,又追奪之責,亦依令條。

一 准紀令解應停官等事

右,同前奏,伏准選舉八條總例,併同前,諸官不得擅棄職事,仍當前件一條已上者,不限年之遠近,解卻見任。其違平徑實勸課等條者,亦望准此者。今案考課令,准考應解官者,即不合當年,待報符即解。然則有紀令解,豈可報牒?而今所行,官人有犯,推斷合解,未報之間,猶預釐務,事乖法意,理須改正。又諸司上下,伯其合解,並案簿印,各論不同,若有此類,合準軌案。伏望量事立例,令易遵行者。今據令條,罪應解官者,雖云未斷,不得預政,宜依使奏。又違使訪察,諸司上下,共合解官者,具狀言上,待報之間,所有斂印,便白秩案。

一 善惡功過合釐准折事

右,同前奏,伏案考課令云:其雖成殿,而情狀可矜,或雖不成殿,而情狀可責者,省校日,皆聽臨時量定。又云:當上上考者,雖有殿不降。注云:謂在私罪還敘。令云:計考應進,而累有上考下考者,並得准折。上中以上,雖有下考,仍從上第;公罪下中,私罪下上,雖有上下,仍從下考者。今據此文,進降考第,雖聽准折,臨時斟酌,豈無折降?伏望一人兼有功過,酌量輕重准折者,宜依使奏。

一 例外狀迹隨事檢察事

右,同前奏,伏案考課令,善最之外,別有可嘉尚者,皆聽臨時量定。又案選敘令,考滿應敘之人,有高行異才,或尤達治體,皆聽擢以不次,不須限以常條。今諸司交替之事,格例不穩之類,比來處分,雖使勸中,准此論之,條例之外,所有狀迹,事須檢校,而非有處分,不敢輒行。伏望折中立例,以明舉措者。今宜

雖是條例之外、事緣國郡功過者、聽使撿察隨事褒貶、但交替之事、須官處分、

以前被右大臣宣偁、奉勅、使所起請事條、宜依前件、諸道使等、亦宜准此、

大同四年九月廿七日

〔三代實錄八清和〕貞觀六年正月廿五日壬子、是日頒下五畿七道諸國、不聽以不課口計戶口增益之功、先是主計寮言、撿案內、諸國之功、准據令條、以不課六人、准正丁一人、承前之例、行來尙矣、今疫死百姓、無國不申、因玆課丁減除、貢賦數少、而國司等偏執戶口增益、以不課男女、編附簿帳、或國一萬餘人、或國五六千人、空有增益之名、曾無一物之貢、撿之政途、甚乖公平、請自今以後、以不課人不入功口、太政官處分、依請焉、

〔延喜式二十五主計〕凡諸國所申戶口增益、不得以不課爲功、

〔延喜式二十五主計〕凡諸國言上疫死幷流死人數者、總計國所申、三分論之、課口一分已下、不課二分已上、以爲定例、若過此法者、執申返帳、

錄國司政績

〔令義解四考課〕凡每年諸司、(謂神祇官、治部、刑部等也、)得國郡司政有殊功異行、(謂功狀行迹、超倫拔萃、假如郡國興致、津罷倍租、驗是決灌、溉南陵水之類、殊功也、仇覽異篤、讓化鄉、卓茂寬惠、修德遵道之類、異行也、)及祥瑞災蝗、戶口調役增減、當界豐儉、盜賊多少、並錄送省、(謂殊功異行自辨官、祥瑞自治部、調役增減自民部、盜賊多少自刑部、並皆錄送式部兵部也、)

自陳功狀

〔本朝文粹六奏狀〕請被殊蒙天恩依遠江國所濟功幷成業勞拜任美濃加賀等國守闕狀

源爲憲

右爲憲、去正曆二年拜任遠江守、長德元年得替解任、去年正月依治國加一階、抑沿革隨宜、施張有時者、明王之憲法也、有法不行、自古而無矣、謹撿案內、去長德元年八月、下給諸國官符偁、受領之吏、不可殘滅任國、隨其狀迹、可明賞罰、同年十二月、重被下官符偁、去任之吏二箇年中、不究濟公事之輩、其子不得敘用者、朝議之興、爲公爲國、內誡緩怠之吏、外恤窮弊之民也、夫賞罰之道、本必相並、既下誡罰之

新令何無勸賞之殊恩哉、爲憲拜任之國、初其凋殘條國、治略遣令興復、是則前司任終年、國內作田千二百餘町也、爲憲任終年、見作三千五百餘町也、又件起請官符未出之前、任中正曆五年十二月、勘抄帳受返抄、先畢得替、長德元年十二月、勘稅帳受返抄帳、又畢、先後之勤、其叶時議、而去年春、及度々闕國拜除、舊吏遠七人、勘帳之期、皆無先於爲憲之人、撫民之間、共無及於爲憲之實、只依運之未及、忝似法之不行、其條僕起請勸公文者、兼以相加、若預先勸之人、被用後勸之吏、爲憲拜官亦期何年哉、運業非情、古之當良吏者、只合期見上、任國不亡之謂也、勤此二者、其身自不富、仍古而貧者、今只爲憲也、加之情勤延喜天曆二代之故事、用吏之道、先依功勞、若國又辨成業非成業之者、去年正月除目、道路嘉歎多矣、風化其中參河守藤原舉直、越前守同爲時、各任所望之國、是其一也、被爲時等、若以前進士例過採用者、爲憲同成其業、翔久辱遊㶚乎、若以舊藏人式部丞、自家寶舊者、爲憲皆歷其職、翔仕天祿之朝乎、既而興復任國之治術、人以自傳、勤濟公文之年月、帳簿既明、以一身兼三功者、去今年間、爲憲而已、若預今春之拜任、定贖去年之違歎、望請天恩、被任件闕、使當時後代仰、我后採吏之明鑑、爲憲誠惶誠恐謹言、

長和三年正月二十三日　散位從五位上源朝臣爲憲誠惶誠恐謹言

〔本朝續文粹六〕申受領

散位從五位上大江朝臣時棟誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、依安房國任中勘畢公文功、拜任丹後上野出羽國守闕狀

右時棟謹撿案內、當時諸國舊吏之所在、都盧八十餘人也、但此中勘畢公文者五十餘人也、謂請其主稅寮返抄帳之大納言藤原惟任、同惟憲朝臣、時棟三人者、加於彼五十人之上矣、件三人之中、若亦謂其國等近京熟國(本作熟國一)與遠處小國謂之吏途、可准專一之賞也、又伏尋延喜天曆之政途、新叙之外、可任舊吏之國、若有三箇國、先登用上功之舊吏三人者也、其外猶優數年沈居之吏、其餘強扶相違格

條之輩焉、何況今年舊吏所可任也、反六七箇國公家何以被誤其道理哉、近代度々被下宣旨之日、諸國舊吏依公文之次第可抽賞之由、重立起請明于竹帛、況亦安房國之爲體也、山重江複、路遠境遙、黔首之栖邊雲也、家草澤而類國越之俗、渡口之崑喩浪也、棹木道而過呂梁之危、因之延喜以來、彼國守所任、總卅四人之中、纔勘畢公文者、唯六人也、是則平公雅、大江遠業、小槻忠臣、源致節、藤原順時、及時棟也、彼五人者、去任三四年、乃皆以任要官、而時棟旁致殊功、既及五年、公家若重循良之吏、則時棟已當小國、而委納三千斛之見穀、若賞公文之勤、則時棟復致大功、而超越五十人之舊吏、公家若憐清貧之士、則時棟乏於黔婁、甚於原憲、公家若用勤學之輩、則時棟略窺書籍、徒疲眼精、抑好文之君、寶祚長矣、齊政之臣、運命久焉、漢武崇學之故、已保五十五年之帝位、周公抽才之故、自得九十九年之天命、就中時棟偏致丹螢之勤、更無金蛇之計、學路書業、久忍東膠之苦寒、吏途立功、唯待右隸之推薦、望請特蒙天恩、拜任件等國守闕、一誇稽古之貴、一知吏務之至、時棟誠惶誠恐謹言、

寬仁四年正月十五日

〔朝野群載二十八諸國功過〕正五位下行大炊頭兼大外記博士備後介中原朝臣師平、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、依淡路國所濟功、國勤賞狀

一勘濟公文

大帳四箇年

前司任終一年　治曆二年

當任三箇年　同三四、延久元年、

調帳四箇年　同上

朝集帳四箇年　同上

義倉帳四箇年　同上

穀帳四箇年　同上

出擧帳四箇年　同上

租帳四箇年　同上

封租抄帳四箇年　同上

右勘濟公文、請進返抄返却帳、既了、

一徵納給年分稻五千四百束

右件稻依格旨、每年徵納、言上既了、

一新發不動穀千二百斛

右依官符、當任四箇年、每年三百斛、發納如件、

一墾開田

治暦三年、一段百卅步、

同四年、一段百卅步、

延久元年、一段百卅步、

同二年、一段百卅步、

右每年開發付帳、言上既了、

一修造神社幷國分二寺、諸定額寺堂舍等、

右任起請旨、令勤修造、注載不與解由狀、言上既畢、

一不立用料、造進修明門一字、

右件門任宣旨之狀、造進既畢、

一中隔西面垣、起自南北行卅丈、

右延久元年六月二日宣旨、應忻停内裏中隔垣、築進高陽院北野以南西築垣一町内四丈者、任宣旨、造築件垣既畢、又依同三年月日宣旨、前後司相分卅丈内八丈、作料絹二百十六匹、米一百卅九斛、進納右宮城所、請返抄畢、

以前功課頗錄如右、師平治暦三年二月六日拜任彼國、莅堺之後、巡撿國内、素狹少最上之上、前司源朝臣經綱任終年、遭兵亂旱魃之難、民烟逃散、田畝荒廢、而招子來之民、開發荒廢、廻撫育之計、興復國内、調庸租税逐年進濟、仰勘畢公文、准之先輩、可謂殊功、望請天恩、依所濟功、關勘賞、彌致勤王之節、師平誠惶誠恐謹言、

延久四年十一月日　　正五位下行大炊頭兼大外記備後介中原朝臣

〔類聚符宣抄八〕應令勘申諸國受領吏功過事

右右中弁藤原朝臣邦基傳宣、右大臣〈忠平〉〇藤原宣、奉勅、諸國受領吏進解由之輩、宜仰主計主税兩寮、每年十二月廿日以前令勘申其功過、立爲恆例者、

延喜十五年十二月八日　　左大史錦良助〈奉〇又見政事要略、小野宮年中行事、〉

〔朝野群載二十八諸國功過〕主計寮

勘前丹波守正四位下源朝臣季房歷四箇年所濟功過事〈承和六年任〉

功

請調庸總返抄四箇年　前司任終一年　康和五

年輸調小許春羅、太皇太后宮職御年料二匹、中宮職御年料一匹、納官一匹、兩面錦、二條院御年料一匹、太皇太后宮職御年料一匹、納官三匹、一窠綾七匹、二窠綾、中宮職御年料二匹、納官三匹、七窠綾、太皇太后宮職御年料二匹、納官三匹、絲帛十匹、帛絹春季仁王會料卅匹、二條院御年料廿匹、中宮職御年料卅匹、納官百四十匹、白絹五十匹、庸韓櫃漆塗著鏁五台、白木卅七

合、米、修理職六十斛、木工寮百斛、中男作物黑葛百斤、黄度、二條院御年料七十斤、御服料七十一斤、納官二百五十九斤、漆三升、紙八百張、搗栗一斛四斗、平栗八斗、蜀椒子三斛、正税交易白絹十二匹、赤絹二、二條院御服料廿匹、太皇太后宮職御年料廿匹、中宮職御年料卅匹、賀茂齋院御禊料廿三匹、納官四百卅七匹、糸七百五十絇、鹿革十張、苅安五百圍、黑葛廿斤、生栗卅斛、干柏百十俵、油三斛、檜皮四尺三百圍、三尺二百圍、二尺五寸二百圍、年料別貢墨二百挺、掃墨一斛、苧麻百斤、穀麻七十斤、兵庫寮雜工戸米十八斛二斗三升三合、采女日置明子養白米四十斛、仕丁二人、修理職客作兒功絹五十匹三丈二尺、山國杣租稲四百束、民部省干柏卅俵、草藥典藥寮四十三種、施藥院卅六種、採藥師料絹、大學寮一匹九尺、典藥寮一匹九尺、官地子交易油三斛、絹九匹、墨十挺、黑米二百三斛、依永宣旨進納內裏御祈願料米三百斛、油四斛、勸學院佛聖供料、白米卅五斛、黑米卅五斛、正税交易油、法成寺一斛五斗、延曆寺、持明院七斗、法勝寺一斛五斗、尊勝寺一斛五斗、圓宗寺法花會料米五十五斛、油四斗、法性寺燈油一斛陸升、中宮職御服料綿六百九十六斤、作調庸中男交易雜物等、守季房依數進納、請總返抄已畢、

當任三箇年長治元二、嘉承元、

雜米總返抄五箇年、康和五、長治元二、嘉承元二、前司任終一年、康和五

當任四箇年長治元二、嘉承元二、

一勘濟公文

大帳十二箇年

前々司守源朝臣季房任終一年康和二

次守高階朝臣爲章任八箇年、永長元、承德元二、康和二三四五、當任三箇年、長治元二、嘉承元、

調帳十二箇年　同上

朝集帳十二箇年　同上

義倉帳十二箇年　同上

過

前司任終、康和五年、雜米抄帳事、

右民部省、天仁三年二月廿八日奉行偁、去天仁二年十二月廿三日宣旨偁、左大史小槻宿禰盛仲仰偁、右少辨藤原朝臣實光傳宣、權中納言藤原朝臣宗忠宣、奉勅、應免除丹波國去康和五年、雜米抄帳、除年料米之外、依請應免除者、

前々司守源朝臣季房、歷三箇年、寛治七年任

功

請調庸總返抄三箇年

前司任終一年寛治六

當任二箇年寛治七、嘉保六、

雜米總返抄三箇年寛治七、嘉保元二三、已當任

一勘濟公文

大帳十二箇年

前々司守藤原顯季卿、任終一年、應徳元

次守源顯仲卿任八箇年同二三、寛治元二三四五六、

當任二箇年同七、嘉保元、

調帳十二箇年　同上

朝集帳十二箇年　同上

續食料十二箇年　同上

造無

右官宣旨，件李男朝臣任中所濟功過，宜勘申者，檢文簿所注如件，仍勘申，

天永二年　月　日　平師[illegible]長

修理左宮城判官兼大外記助教播磨權介中原朝臣師遠　權少允紀　權少屬佐伯

〔江家次第四正月〕定受領功過事[illegible]

除目叙位等間，大臣奉仰，仰大納言令召受領功過文書，大納言召殿上辨仰之，殿上辨二人以硯筥置參議座前，備人之，又仰藏人令立切燈臺於參議座前，

上卿問參議曰，何國哉，參議申其國國，次相議令讀，或依人次第，或依道次第，參議三人奉仕件役，

一人[illegible]

一人[illegible]

一人[illegible]

不與狀國事[illegible]

本願條[illegible]

讀畢後上卿問曰，本願數如何，是前後司歟，本願數可問也，若當任數多者，上卿問曰，有當任加舉歟，

不動條[illegible]

讀畢後上卿問曰，不動數如何，是當任不動數可增於前司任數也，依有新委不動數也，但不設新委

不動之國十一箇國[illegible]

雜條[illegible]讀畢後問用殘之有無，

格率分條（格率分、北山抄云、有傷吏交替欠之國、以公廨十分一填、謂之格率分、分注見天長九年官符、天長官符入格、故謂格率分、率分者、分數也、）

讀畢問曰、數如何、是當任所遺之數、可減於前司任數也、依有當任之辨填也、割公廨十分之一填之也、

神社條

讀畢後問曰、數如何、是以當任新造之數、見合於前司無實之數、以當國修造之數、見合於前司破損之數也、十分之二三可新造若修造也、

佛寺條（十分之二三、長保四年宣旨云、十分之二三加修理、可關擣損云云、）

讀畢後、問曰、如何、同上、

大垣條、近代不讀之、（大垣、大内大垣、遣築之注充諸國也、）

次、書定文人、申請定文、請登於上卿、上卿令注調庸税帳等合格字率分欠（無）齋院禊祭料（無未進）未勘解由勘

文（無過）等字、（定文見合參議取二寮一使大勘文、讀上、使一人參議者定文也、讀了、亦上卿之命、注合格等字、）

某人（某國某人、某國五位名、四位加朝臣字、某國不加國字、合格、交替式云、凡諸國官長不受任中調庸總返抄者、返却解由、其任終年者、後司辨濟云云、）

請調庸總返抄何箇年（合格）

前司任終一年 ――――

當任三年 ――――

雜米總返抄何箇年

々々々々巳當任（交替式云、凡諸國受領官不受當任四箇年雜米返抄、返却解由、此三字不及上輸與前注加之、前司卒去國加前司任終一年、辨五箇年、故不注巳當任之字也、）

勘濟税帳何箇年（合格税帳、其由年年所濟之帳也、依主税勘文注之、）

前司任終一年

當任三年

新委不動穀若干斛（[illegible]）

（[illegible]）

率分調（[illegible]）

齋院禊祭料（無未進）

勘解由勘文（無過）

年月日

上卿見畢起座、付大臣、

〔北山抄 十 吏途指南〕定受領功過事

人名（[illegible]）

（[illegible]）四箇年（合[illegible]）

前司任終一年（某年）

當任三年（某年）

塡未進抄四箇年（合[illegible]）

其年々已當任（[illegible]）

（[illegible]）

雜濟稅帳四箇年（合[illegible]）

前司任終一年（某年）

當任二年（某年）

封租抄四箇年（同上）

（[illegible]）

新委不勤穀若干斛年別若干斛、官符、

若有別功、加維數、注云、若干斛、官符、年別若干斛、若干斛別功云々、近例任終年料不載付勘事候、

仍主稅寮勘文、雖注損未到由、就勘解由使申文勘文、如委細由、若有任中勘事之還、就申文雖載

維數、注任終年料無所見之由、勘文出時、顯其注也、　若有他別功、此間書之、

率分無欠　陸奥、出羽、西海道、無率分勘文、

齋院禊祭料无未進、或闕无之、

依宣旨、雖加進修理職勘文、不必書之、又有依宣旨召具司々勘文云々、

勘解由勘文无過　美濃依不申不與狀無之

年　月　日

諸國舊吏勘畢公文之後、叙位除目之間、勘所濟功課、進加階給官申文、即下給上卿、仰云、合否令勘、上卿下辨官、令二寮并勘解由使勘文、續申文端、付初人奏聞之、經叡覽重下給、仰云、令諸卿定申、先是二寮及勘解由使勘、徵諸國舊吏功過、十二月廿日以前、進官并藏人所、綱之大勘文若不入彼勘文者、追令進之、議始之後、大臣奏可、令定申受領功過之由、仰第一納言、納言仰弁、令奉調度文書、仰藏人、令奉續紙硯等、舊例如之、而近代以官職副勘文奉也、以參議一人見案所司勘文等、令一人書之、先取主計寮大勘文、見合申文勘文、件大勘文勘置前任功過、顯之多計久貫戶、前司若不勘公文者、雖任勘申勘事時例、主稅寮如之、但勘解由勘文不然、太宰管國无二寮勘文、以府解定之、申文只據勘解由勘文、若无其誤、注出諸國庸雜米總返抄之年限、調庸前司任終一年、當任三年、是爲合格、或有不重任終年、濟米之國、若中絕者、又自前司任終年勘之、雜米者不重任終年、當任勘濟、是合格也、但近前加賀國加調庸、前司事未濟或闕勘被任終年、至于我任終年、又必勘濟耳、次以主稅寮勘文、注勘濟稅帳封租抄等之年限、稅帳前司任終一年、當任三年、若有未勘舊籍之間、加被任四年、勘入前年爲合格、若不勘爲過耳、但過之多勘者、雖功不注合格、他可勘之、封租抄國調庸、次注新委不勤穀、官符別功明其色目、續別書之、若有別功、注付此次、申文多雖載別功、其中可爲功事注付也、當任交替欠、并少數塡納物等、更不注之、申過分不堪之國、有新開田、有舊交替欠之國、以公廨十分之一塡之、前之格率分、至已分差、可塡當任欠負未納、不可塡舊欠、如此雜事、能能案讀、若有事疑、申上其由、可隨衆

調、求見年分勘文、注無欠之由、求見當院納帳料勘文、注無未進之由、(寛平三年、延喜二年、之)書之、先讀調上卿無注合格等字、最後讀勘解由勘文、隨讀寛注過之有無、(缺、僅有無狀、矣注、多時公文尾、)宣明前後也、重勘之所、或讀云重勘云々、此設太事、爲論事目代之者、問之重勘之條、仍有此設歟、件勘文太宜爲知、僧國官物欠剰也、仍以前司交替時受領數、與分付後司之數定之、一條讀畢、更又見合前後物數等、申其趣議定後讀次條、然則雖不預數、還不勘公文、或依欠不勘狀任用實條帳、猶以前司時爲歷也、其本願條物數無增減、但有當任加舉者、加其數也、不勘條損新委并用途、其數不同、以前司分付數加當任新委除任中用途、所遺分付後司也、交替欠條有填納物者、減其數矣、用途條隨用途有增減、件條多致官物率難者也、此外雖不入本宣旨(寛平三、延喜不、可勘、)或致用條依爲勘國官物也、或又數地子條、又雖無符立用條、爲知用途之所須也、若雖不可數條、更不論之、長保以後新製、殺神社佛寺條、有當任新造者、隨減前任無實有修理者減損也、縱有數量修造者、致任中無實破損、雖是一屋、猶可爲過、官符云、國分寺等可修造十分之二三者、至于神社不見其法、大略可准寺歟、凡受領見物得替之時、致其欠失、或以里倉負名、分付後司、用不可用物、不填可填物、違背格式、準事之條、可爲過也、不論前任雖忘、故遺之吏、又可爲過、但相代填補者、非殊過耳、(後二合補代、)新司歸無實、前司陳有實之物、終於前司執狀者、爲有實、終於新司勘狀者爲無實、其受領有實、分付無實、前司爲過、後司填之、若不填者、後司又爲過、依可修本任舉放稻也、其以私物舉填減省正稅本穎、并千町以上開發、可爲大功、依爲代不朽也、填無直交易、又勘之後司不填者、不可成公文、官又不可許上、仍雖填不爲功、不填者可爲過、新委不勘爲欠功、指納倉還物也、非有聞用物、不用之已爲重色、後司不委者不爲過、但依可劣於前司、雖委之、仍前司則功者注所司勘文、而近代不注之、太不當也、往代交替欠雖填巨萬、不爲重功、多是以過用物勞成公文也、填定舉內無實本穎、不敢爲功、依無公益也、填當任交替欠、又不爲功、故遺前司之吏、依不可不填也、勘多年公文者、雖非無勤、又非殊功、若不勘之、不可勘後年帳、但至于稅帳、不中勘出、勘

之可爲功也、格云辨濟填納、取四年以上返抄者、抽於等倫、可加褒賞云々、依有往代交替欠、不受税帳返抄、受返却帳也、而填彼欠失、受其返抄者、尤可爲大功也、不得格意之人、以請八年返却帳、可爲殊功云々、雖不申勸出、猶不充格意、況申勸出勘濟者、爲何功乎、隨定畢、勾勘文外題、僉議畢、預議人々次第見之、至上卿前、若有事疑問之、相定畢奉大臣、事訖、調度文書下給外記（舊例如此、諸下給文依給外記也、而近代返給於官、并无便宜、）

〔二中歴七公文〕勘濟公文年限

當々國（伯耆、信濃、武藏、是總任以後申之、紀伊、仲實任以後、可置任終之由改申之、）

自餘諸國、置任終勘之、然而至于雜米者、當々濟々然而偶有置任終之例歟、

二箇年國（安房、相摸、上總、下總、常陸、手習、豆相武安總々常陸云々、）

三箇年國（石見、隱岐、）

歴年任限（本四年爲限）

五箇年國（陸奥、出羽、大宰管國、）

給復（損亡國隨申請被免之、或損郡中之、或舉國中之、被見調庸令濟他色、或又後年辨填之例、）

計歴（臨時拜除之吏、隨申請被免云、或作被載許、被下可濟五ヶ年公文之宣旨、或雖非臨時、有被之時被載許、或又雖臨時不載許歟、）

重任（付遷任）

鈎文國解（入奏外吉、雜宣官、不尋官符、）　籤符申文（内給尋取官符、國身下向、）

儀事申文（内給尋取官符、）　不堪佃田解文（付數田後、不堪每年申之、）

減省國解（付重減省、重々減省、白米減省、）　無直交易

流死交易（阿波國）　免除雜物

民部省米（近江）　駄賃（尾張已上入奏）

餉給代米（長門近江內給）　例用不足

神山堤同前　　擬名帳已上江内給

諸[illegible]内給明年料勘申也　　未納勘出上宣

勘出上宣例年[illegible]國中之　　返符上宣

[illegible]春米同上　　[illegible]給歷已上立上宣

承知已上[illegible]大[illegible]上宣主計　　合否申文内給

[illegible]立勘文成之主計　　率分勘文[illegible]國成之

納畢勘文[illegible]成之　　大勘文二[illegible]成之

大[illegible]成宣[illegible]抄之

已上勘濟公文被定功過之時備之合文

收納宮符民部成之　　官符民部官符并宣旨等[illegible]門

戸籍中務民部成之　　租穀帳

調帳　　義倉帳

調庸抄帳[illegible]丁[illegible]　　結返抄已上主計成之

返却帳　　封租抄帳已上主税成之

防河官符[illegible]之、[illegible]可[illegible]

功過別當

〔台記〕久安三年四月廿二日乙卯、早旦以長家[illegible]、實[illegible]名簿、申曰、爲功課別當者、予○藤原頼長

許之、返給名簿、[illegible]依吉日、初申也、

功過定例

〔小右記〕寛弘二年正月十九日戊辰、資平朝臣云、左府於陣可被定受領功過者、奉親宿禰云、明日可定、

過濟由被仰府[illegible]者、　廿日己巳、召使云、今日可有定者、答可參入之由、參内、左右内三府○左大臣藤原道長、右大臣[illegible]大臣[illegible]、大納言道綱、懷忠、中納言齊信、時光、俊賢、隆家、參議懷平、[illegible]忠輔、行

成、正光參入、左府候官奏、其後定申受領功課事、（伊賀爲儀任中濟事、尾張知光、遠江信通、武藏惟風、信乃濟政二ヶ年、能登則友、因幡惟憲任中濟事、豐後孝親、肥後爲忠任中濟事、阿波國平任中濟事、）子到定了、各々退出、時々小雨、時光、正光不定了退出、　廿四日癸酉、左馬頭朝臣觸腸轉任奏事、答云、御監有請申允之例、仍今年可請申、重轉任奏不可放給也、右中弁云、右府子内供平命尸解、仍相府不可參除目之由云々者、　廿五日甲戌、右府依假不可被參除目云々、召使云、自今日可有除目議云々、（○中略）未剋許參內、諸卿未着議所之間、藏人廣業朝臣傳召內豎所籍簡、未加別當署、仍不立議所、由外記申、左府云、臨欲參上之期、爲之如何、若於陣座加署如何、彼是云、更有何事者、仰大外記善言朝臣召籍簡、內豎所預內豎等執之加署返給、（一人持二奏文一、但箱二書杖一、一人持三枚一、一人持硯、）一次參上、大納言道綱入自軒廊戶間、更歸立執宮書、先例入自戶東間而已、下官（○藤原實資）右金吾禮部等執宮書、有受領功課定、亥二剋諸卿退下、今日見參上達部、左大臣、內大臣、大納言道綱、懷忠、中納言齊信、俊賢、隆家、參議有國、懷平、輔正、忠輔、行成、　廿六日乙亥、未終參內、諸卿參上後加著御前座、左府仰可定申受領功過之由、仍召文書、定申兩三國間、豐後守貴清有過、前司任終年、是新司初勤年、而彼年申府量勤出勤公文、仍爲過、衆之所許又不可然、（故兵部卿爲二大貳一之時、）子剋許諸卿退下、　廿七日丙子、參內、左大臣、內大臣、大納言道綱、懷忠、中納言齊信、俊賢、隆家、參議有國、懷平、輔正、行成參入、未剋許諸卿參上、（不レ著二議所一之間有レ喚、）懷忠卿諸卿參上後參入、稱衰老不執宮書、子剋有受領擧、依例出議所書、丑二剋議了、諸卿退下、（此間雨脚不レ止、）受領加階、撿非違使宣旨、（左平維輔、藤原扶忠、藤原輔信、右橘惟弘、）今夜未了間、左府招大納言以下於直廬差食、

〔法成寺攝政記〕寬弘二年正月廿日己巳、參左仗、（○中略）舊吏等有功過定九箇國、五ヶ國任中者五人、
廿二日辛未、物忌、右頭中將來仰云、廿五六日間可有除目、如何者、令奏云、廿五日宜歟、但今年參事有思給憚事、以他人令行給如何、但明日參可奏案內、　廿三日壬申、參內被仰云、除目必可奉仕、若不參非可行者、依恐仰奏可奉仕由、候宿申障事、是今年滿卅算幷大臣後十一年、不肖身有數年奉仕所申也、　廿五日甲戌、參內、長能勸出宣旨下後、有召不著議所、此間善言朝臣申云、內豎勞帳未判、是下別

言等、取名簿、亀卿仰召陣座加名簿等三人、取笏候射場等参、其後参上、亥時事了退出、 廿七日丙子、来時事初、丑時了、今年除目、初京官至於受領、被行道理治國者、三人加階、

〔小右記〕長和二年正月廿日壬子、召使申云、自廿二日可被行除目者、 廿二日甲寅、今日除目、仍参内、納言四、参議四、中納言諸卿不著議所、廳召、外記人内記依有召之、従陣参上、依南殿北廂列立射場、大納言以下列射場内、北面東上如例、外記持宣旨参南殿下、列立射場殿東南、大臣参上、次大納言道綱、予〇中略、斉信、公任、取宮寶、諸卿著座了、御覧候、左大臣〇中略内大臣[illegible]著座前開座云々、左大臣傳仰小臣云、可定申受領功過者、召納言令進文書被定申、[illegible] 摂津國[illegible]任終年不勤事、以主税寮申旨申、左大臣、[illegible] 亥四點諸卿退下、左大臣於仗所示卿相云、明日午剋可参入者、今日参入卿相左大臣、大納言道綱、予、斉信、公任、中納言俊賢、頼通、行成、忠輔、参議懐平、經房、實成、道方、頼定、 廿三日乙卯、参内、[illegible] 一陣[illegible]卿相、中納言俊賢、頼通、任左相府宿所、参議懐平、通任候殿上、頃之内大臣参入、其後左大臣著陣云、不著議所如何者、藏人左兵衛尉敦親召諸卿、大臣召大外記敦頼、仰可令持宮書之由、御外記四人持筥書入自日花門、立宜陽殿南第一間、第一人進寄立、次々人立、殿内[illegible]上次諸卿經南殿北廂向射場、上達部列立如昨、此間右大臣参入、佇立南殿、外記持筥經南殿下、如昨、左大臣云、是降雨之事也、如晴時可参入者、[illegible] 仍外記自南参入、立射場殿、外記若用晴儀亦可立晴歟、今日事殿白臨時宜歟、諸卿参上儀如例、但諸卿未著了之前、右大臣著御前座、列諸卿参上了、後参之人参上者也、卿相傾奇、三府廳召[illegible]下[illegible]、左大臣御事大臣仰可定受領功過之由、召文書定申、去夜不定了之美作事、[illegible] 次備前、[illegible] 但前司[illegible]事、依主税寮勘文定申了、甲[illegible]無過、亦摂津國[illegible]不勤事、依傍例之例、重不聞所司、亥二剋諸卿退下、左大臣云、明日諸卿可早参者、頭中將下給飛騨守為信申文、仰云、可定下、右中辨經理、為令勘解由二寮等勘文耳、 廿四日丙辰、参内、未剋、三先是左大臣、内大臣、及大中納言、参議等参入、未著議所之間、召諸卿、此間議所[illegible]不著議所、左大臣已下歴階下、参入、中納

言顯通列立射場、父丞相與子納言相對列立、似無便、諸卿參上之後、可加著御前座歟、予執硯筥、大納言齊信、公任、中納言俊賢取筥書、右大臣遲參、先著疊座、暫左大辨奉仰召之、大臣稱唯、著御前圓座、功過未定申之國々有其數、仍召文書硯等、其後遍取氣色於左相府、相府云、可定申者、先定和泉國事、(成方)有過、(解脫寺觀音寺等加擧本顯無所見、是當任加擧也、)次定紀伊國事、(惟能)之間、下給申外記史、式部、民部、左右衞門尉申文、予執內大臣後取之復座、件申文等見下自下撰上、又見下後令書一紙、相加撰申文奉之、左右叙負轉任幷故冷泉院主典代等申文、只結加奉之、不書入擧詞、左大臣退下宿所、予已下依有氣色向彼御宿所、食之、小選卿相退歸、相尋左大臣參上、右大臣內大臣諸卿向左大臣宿所之程、被候殿上侍所、諸卿復御前座、定紀伊國事、(光喜、)次定上野國事、(維衡、)未了之間、左大臣傳仰云、可進受領擧者、仍諸卿(大納言齊信、公任、中納言俊賢、隆家、行成、時光、經房、實成、道任、道方、賴定、但中納言忠輔、參議懷平、正光早出、不獻擧、)起座、向議所、注擧冊、復御前座、次第就左相府後獻之、上野國事不定了、依儀了、他國々定文見上了、予執之進左府後獻之、此間被卷大間、(丑剋)二明日當八卦愼日、仍不聞除目退出、小時資平自內退出、略談除目事、

寬仁三年正月廿一日己卯、今日除目儀如□、外記令申也、仍參內、宰相乘車尻、右大臣(○藤原公季)先參、諸卿又參、臨酉剋藏人左中弁經通著膝突、傳攝政御消息、大臣召外記、大外記文義參入、仰可候宮文之由、今日裝束議所、然而依日暮不著、外記取宮文列立軒廊前、大臣參攝政(○藤原賴通)御宿所、已次同參、除目議如恒、右大弁道方執筆、攝政云、可申受領功課者、以弁令召文書、按察大納言齊信卿、初承□貴重事等未定了、仍先可被定了之由相示了、仍以右兵衞督公信令讀也、可令資平讀者、余云、未讀之人初讀不讀歟之狀如何、按察云、可然事也者、仍以武德令讀、甚不便也、前肥前守俊遠申文事可定申者、件申文先令覽攝政、左中弁經通傳奉攝政命云、明日可定申□已了者、仍文書等(內位申文俊遠申文無注等申文、)返給經通了、先是按察初承之、前石見守保重交替損事弁申文、又定隨被申可無過之由定申候不□石見等定文、又注付無過了、大納言公任、中納言教通、不聞此議早出、公任卿云、大將今夕依可渡四條宮、

者、仍共早出者、丑剋許議了、攝政云、明日可早參候、今日參入諸卿、右大臣、大納言齊信、公任、中納言教通、經房、頼宗、能信、實成、參議兼隆、道方、公信、通任、　廿三日辛巳、昨可謂將監之事、以藏人頭左中弁經通令申攝政、已有許容、[illegible]、仍今日以後中文遺弁許[illegible]上、冒雨未終許參內、[illegible]、先是左右大臣已下被參、不著議所、酉剋有儀錄御消息、仍左大臣已下參攝政御宿所、依甚雨經仁壽承香常寧宣耀等殿廊參入、除目儀如昨、定議略[illegible]紀伊[illegible]等國事、無過也、內位進中文、以經通朝臣令覽攝政、返給云、諸卿定申者所進中原不得宣、經通朝臣云、使進消息狀名此授不與狀解由等、不與狀解由等名無相違、消息狀名字上點頭、先同書續云相閒、左少弁經輔史奉親等相共見者、即以此由令申攝政、無左右命、內位中文宅異增減等事、至今品後使遣消息狀、名實不可有一定、仍不定申、皆返給件內位中文、召經通朝臣大中臣奉親中文并氏人等奏狀下給也、神祇伯輔親已下著了、以大中臣氏不可被任官吏諸司諸國二分已下之由也、右大臣傳示云、申不可任外記之由者、然而奏狀不注外記、奉親中文云、大中臣朝明爲養子、朝明任外記之後、申給大字等事也、相加可擧申之中文等所下賜也、諸卿中云、外記爲二分之由、諸國無所見、朝明給大字、被同大中臣氏無所申、無儒者任外記、又有任卿相之例、以之認之、以大中臣被任外史可無難歟、相加擧國等事之、丑剋還、受領擧國也、於御宿所書之、有受領加階三人[illegible]、貴重事余所申也、撿非違使宣旨、藏人頭左中弁經通傳仰下、宣旨仰下間弁、[illegible]、叙位弁撿非違使宣旨以前、辭承相退出、有不叶御心之事等歟、章成朝臣任近江守、又請申將監藤原國永隨申請被任、今日見參諸卿、左右大臣、大納言齊信、公任、中納言教通、經房、頼宗、能信、參議道方、公信、資平、清書所中納言能信、參議公信、

(中右記)寛治八年〇嘉保元年二月廿二日甲子、除目入眼、酉時許事始、今日要書一院御物忌、治部卿〇源俊明爲中使、頻以催反云々、上臈依不參、中宮大夫〇源師忠事、功課定、及撿吏事了、清書、上卿右兵衞督〇源俊實受

領十三ヶ國中、無文章生、但安藝守藤有俊朝臣、重任已載除目、彼人大業名儒也、然者以件人被充歟、」又故陽明門院分、今年許難可被成、御卅九日中、依有憚被止歟、民部丞遥已漏受領列歟、

〔玉海〕建久三年正月廿七日庚子、入眼也、(中略)依任人甚少、功過定未終之間、除目已任了、然而受領擧之後、可奏大間、(當々仰之、是例也、)仍執筆空手候座、上野勘文進五代帳、長和以後多三代帳也、未有此例云々、而上卿云、雖爲新儀御定、無左右云々、余(○藤原兼實)難此言相尋之、御定之由如何、近日定無院宣歟、又微臣全不定仰此事、今風聞太奇事也、如此事於有難者、更不可被優、公事陵夷、職而在斯、早尋官可被究決是非也者、上卿以弁問官、官申云、此條未曾有例也、然而所司勘上非御定者不能返、然所進覽也、長和宣下之後、四代猶不詳、覽五代說者、上卿申上此旨、余云、凡吏途之事、曾不辨是非、只上卿仰合官、可被定行也、但有長和宣旨者、像官須請天裁事歟、乍存譽無音進文書、在尋問之時、申此旨、如何、此條頗似無思慮、抑被宣下之意趣如何、依彼趣可被左右歟、爰兼光卿在座、(卿知行彼國之人也、)申云、爲有煩所被下歟、如今上野國中間交他人、更還任之例、已未曾有、仍今度進五代帳給、必依彼宣旨哉者、上卿云、可有御定云々、余云、若只爲省煩、被宣下者、今勘五代、不可爲過歟、不著座了、公卿可著行列見定考外記廳之由、雖康治之宣下、其後有著座公卿以之不庶違勤、尤是爲例歟、上卿云尤可也云々、余重云、此事猶可被問官也、官若不甘心、此事之行可依所司之失錯哉、早返給文書、追可有沙汰、但官存趣未得其意、所以行者若如此之國司不可勘五代者、中間之宰吏可棄置歟、此條又未曾聞也、無宣下、爭棄一任哉、若不可棄者、又造五代之帳外如何、此條分明可辨申者、上卿以此狀問官、官申云、被棄一任之條、尤不可然者、五代帳之條、何有其難哉、只申上無例之由計也云々、此申狀太無所據、責存此由者、初向時可申此旨也、始處所司之失、今又歸道理、可謂前後相違、然而所詮無國司之過、早可定上之由仰之、即上卿被覽定文、少々有改直事、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月甲子、詔東國國司等曰、集侍群卿大夫、及臣連國造伴造、幷諸百姓等

咸可聽之、夫君於天地之間、而宰萬民者、不可獨制、要須臣翼、由是代々之我皇祖等、共卿祖考俱治、朕復思欲蒙神護力共卿等治、故前以良家大夫使治東方八道、既而國司之任、六人奉法、二人違令、毀譽各聞、朕便美厥奉法、疾斯違令、凡將治者、若君如臣、先當正己而後正他、如不自正、何能正人、是以不自正者、不擇君臣、乃可受殃、豈不愼矣、汝率而正、孰敢不正、今隨前勅而處斷之、　辛巳、詔東國朝集使等曰、集侍群卿大夫及國造伴造、并諸百姓等、咸可聽之、以去年八月、朕親誨(誨一本作誨)曰、莫因官勢取公私物、可喫部內之食、可騎部內之馬、若違所誨、次官以上降其爵位、主典以下決其笞杖、入己物者倍而徵之、詔既若斯、今問朝集使及諸國造等、國司至任、奉所誨不、於是朝集使等具陳其狀、穗積臣咋所犯者、於百姓中每戶求索、仍悔還物、而不盡與、其介富制臣(闕名)巨勢臣紫檀二人之過者、不正其上云云、凡以下官人咸有過也、其巨勢德禰臣所犯者、於百姓中每戶求索、仍悔還物、而不盡與、復取田部之馬、其介朴井連、押坂連(闕名)二人者、不正其上所失、而翻共求己利、復取國造之馬、臺直須彌、初雖諫上、而遂俱濁、凡以下官人咸有過也、其紀麻利耆拕臣所犯者、使人於朝倉君、井上君二人之所、而爲牽來其馬視之、復使朝倉君作刀、復得朝倉君之弓布、復以國造所送兵代之物、不明還主、妄傳國造、復於所任之國、被他偸刀、復於倭國被他偸刀、是其紀臣、其介三輪君大口、河邊臣百依等過也、其以下官人河邊臣磯泊、丹比深目、百舌鳥長兄、葛城福草、難波癬(闕名)龜(○分注四字、宮有闕字)犬養五十君、伊岐史麻呂、丹比大眼、凡是八人等咸有過也、其阿曇連(闕名)所犯者、和德史有所患時、言於國造、使送官物、復取湯部之馬、其介膳部臣百依所犯者、草代之物收置於家、復取國造之馬、而換他馬來、河邊臣磐管、湯麻呂兄弟二人亦有過也、大市連(闕名)所犯者、違於前詔、前詔曰、國司等莫於任所自斷民之所訴、輒違斯詔、自判菟礪人之所訴、及中臣德奴事、中臣德亦是同罪也、涯田臣(闕名)之過者、在於倭國、被偸官刀、是不謹也、小綠臣、丹波臣、是拙而無犯、(闕名○分注四字、宮本有丹波臣)忌部木菓、中臣連正月、二人亦有過也、羽田臣、田口臣、二人並無過也、(闕名○闕名、宮本作田口臣)平群臣(闕名)所犯者、三國人所訴有而未問、以此觀之、紀麻利耆拕臣、巨勢德禰臣、穗積咋臣、汝

等三人所怠拙也、念斯違詔、豈不勞情、夫爲君臣以牧民者、自率而正、孰敢不直、若君或臣不正心者、當受其罪、追悔何及、是以凡諸國司、隨過輕重考而罸之、又諸國造違詔、送財於己國司、遂俱求利、恒懷穢惡、不可不治、念雖若是、始處新宮、將幣諸神、屬乎今歲、又於農月、不合使民、緣造新宮、固不獲已、深感二途、大赦天下、自今以後、國司郡司、勉之勗之、勿爲放逸、宜遣使者、諸國流人、及獄中囚、一皆放捨、別鹽屋連鯯魚、(鯯魚此云之慮)神社福草、朝倉君、椀子連、三河大伴直、蘆尾直、(四人並闕名)此六人、奉順天皇、朕深讃美厥心、 八月癸酉、詔曰、(中略)○今發遣國司、幷彼國造、可以奉聞、去年付於朝集之政者、隨前處分、以收數田、均給於民、勿生彼我、凡給田者、其百姓家、近接於田、必先於近、如此奉宜、凡調賦者、可收男身調、凡仕丁者、毎五十戶一人、宜觀國國壃堺、或書或圖、持來奉示、國縣之名、來時將定、國國可築堤地、可穿溝所、可墾田間、均給使造、當聞解此所宜、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年十一月癸卯、太政官處分、巡察使所記、諸國郡司等、有治能者、式部宜依令稱擧、有過失者、刑部依律推斷、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年閏二月戊午朔、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂封七十戶、田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兄人、各進位階、幷從六位上伊福部君荒當賜田二町、以通吉蘇路也、

〔令集解 二十二考課〕古記云、殊功謂笠大夫作伎蘇道、增封戶、須芳郡主帳作須芳山嶺道、授正八位之類也、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年二月甲子、天皇御內安殿、詔召入文武百寮主典已上、左大臣正二位長屋王宣勅曰、比者咎徵荐臻、災氣不止、如聞時政違乖、民情愁怨、天地告譴、鬼神見異、朕施德不明、仍有懈缺耶、將百寮官人不勤奉公耶、身隔九重、多未詳委、宜令其諸司長官精擇當司主典已上勞心公務、清勤著聞者、心挾奸僞、不供其職者、如此二色、具名奏聞、其善者量與昇進、其惡者隨狀貶黜、宜莫隱諱、副朕意焉、是日遣使於七道諸國、巡監國司之治迹勤怠也、 三月乙亥、百官奉勅、上官人善惡之狀、 乙酉、

天皇御正殿，詔賜諸官人物，最上二〇一百匹，五位已上四十匹，六位已下二十匹，次上五位以上二十匹，六位以下一十匹，其中等不在賜限，下等皆解却焉，○十二月丁亥，先是遣使七道巡撫國司之狀迹，使等至是復命，詔依使奏狀，上等者進位二階，中等者一階，下等者破遣，其犯法尤甚者，丹後守從五位下羽林連兄麻呂，周防目川原史石庭等除名焉，

(續日本紀十二聖武)天平七年閏十一月壬寅，天皇臨朝，召諸國朝集使等，中納言多治比眞人縣守宣勅曰，朕選卿等任爲國司，奉遵律章，僅有一兩人，而或人以虛事求聲譽，或人背公家向私業，因此比年國內弊損，百姓困乏，理不合然，自今以後，勤恪奉法者褒賞之，懈怠無狀者貶黜之，宜知斯意，各自努力，

(續日本紀二十三淳仁)天平寶字五年八月癸丑，勅，美作介從五位下縣犬養宿禰沙彌麻呂，不經官長，恣行國政，獨自在館，以印公文，被假不請，隨抑買民物，爲守正四位上紀朝臣飯麻呂所告失官，

(日本書紀二十九天武)朱鳥元年二月乙亥，勅選諸國司有功者九人，授勤位，

(續日本紀二十三淳仁)天平寶字五年八月癸丑，勅曰，頃見七道巡察使奏狀，曾無一國守領政合公平，竊思貪濁人多，清白吏少，朕聞授非賢哲，萬事咸邪，任得其才，千務思理，此如國司一色，親管百姓，導其弊澆風俗，字撫黎民，特須精簡，必合稱職，其居家無孝，在國無忠，見利行非，臨財忘恥，上交違禮，下接多諂，施政不仁，爲民苦惱，差遣逃亡，詐稱病重，任使親賓，競致自非，閭敗義典，冒直損心，唯利是視，巧弄憲法，漸汙皇化，如此之流，傷風亂俗，雖有周公之才，朕不足觀也，自今已後，更亦莫任，還却田園，令勤耕作，若有悔過自新，必加褒賞，遂迷不返，永須貶黜，普告遐邇，俾知朕懷，

(續日本紀三十六桓武)天應元年六月戊子，勅曰，(中略)又其在外國司，多乖朝委，或未知欠負，且用公廨，或不畏憲綱，肆漁百姓，故今擇其尤甚者，貶秩黜官，未滿隨事貶降，自今以後，內外官人，立身清謹，處事公正者，所司審勘，授以顯官，其在職貪殘，狀迹濁濫者，宜遣巡察，探訪黜降，庶使激濁揚清，變澆俗於當年，安國撫民，追淳風於往古，普告遐邇，知朕意焉，

以官物供餉過銀罪

田宅有犯

〔令義解 雜十〕凡外官、有親賓客經過、不得以官物供給、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應依實言上損幷不堪佃田疫死百姓賑給飢民及破損官舍堤防等事

右案弘仁十年五月廿一日格偁、國司申政詐不以實、奪其公廨、兼處法律、又科懲郡司、一同國吏者、頃年諸國司等、不陳實數、浪致增加、格後漸曠既忘科責、被右大臣〈藤原冬嗣〉宣偁、奉勅、朝家篤論最在官長、選當清潔、寄重分憂、如今旣擇良牧、更加官使、屋下架屋、寔爲煩費、宜自今以後、官長親自巡省、子細撿定、依實申送、若所申過多、稍涉疑殆者、事不獲已、乃遣朝使、使者覆覈、或有乖違、准其所詐、論如前格、但奪俸科罪事以重酷、須宥其俸只如其罪、凡厥犯解之後、一切不復敍用、俾彼茲穢之徒、永絕榮進之望、其科決郡司、亦復准此者、但損田荒田言上之期、承前程限事爲促近、宜不堪佃者八月之內申、損田者預申損狀、十月內申、其遠國九月風水之損、通計行程、一依前格、庶幾專城之宰、宜厳犯論道之官、提綱易擧、

仁壽四年十月一日

犯用租調

〔日本書紀 二十九 天武〕五年五月庚午、宣進調過期限國司等之犯狀云云、

〔類聚符宣抄 八〕左大弁藤原朝臣邦基宣左大臣宣、調庸絹綿所進之日、若有麁惡、口色目收、可注其由之狀、下知諸司已了、今須勘申受領之官功過之時、麁惡絹綿之數、注載其勘文者、

延長六年閏八月廿八日　　左大史錦春陰奉

〔續日本紀 十 聖武〕天平二年四月甲子、太政官處分、畿內七道諸國主典已上雖各職掌、至於行事、必應共知、或國司等、私造稅帳、覺後取署、不肯署名、因此上下觸事相違、又大稅收納不得輕惡、進稅帳日、不問穎穀、倉別署主當官人名、又國內所出珍奇口味等物、國郡司藏匿不進、亦有因之少而不進、自今以後、物雖乏少、不限驛傳、任便貢進、國內施行雜事、主典已上共知、其史生預事有失、科罪亦同也、〈○又見二交替式一〉

〔延喜式 五十 雜式〕凡國司一任之內，不得所部交關，但聽買衣食，其私物運京者，除公廨外不得更加，若有違犯，依法科罪，

〔令集解 十三 賦役〕職制律云，凡監臨之官，皆不得於所部僦運調物，注云，僦謂客運是也，

〔續日本紀 十二 聖武〕天平八年五月丙申，先是有勅，諸國司等，除公廨田事力借貸之外，不得運送者，太宰管內諸國已蒙處分訖，但府官人者，任在邊要，祿同京官，因此別給仕丁公廨稻，亦請送之物，色數立限，又一任之內，不得交關所部，但買衣食者聽之，

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶六年九月丁未，勅，如聞，諸國司等，貪求利潤，輸租不實，舉稅多狀，由是百姓漸弊，正倉頗空，宜令京及諸國田租不論得不，悉皆全輸，正稅之利，舉十取三，但田不熟，至免調庸限者，准令處分，又覽去天平七年格，國司等所部交關，運物無限者，禁斷既訖，然猶不肯承行，貪濁成俗，朕之股肱，豈合如此，自今以後，更有違犯，依法科罪，不須矜宥，

〔日本後紀 十四 平城〕大同元年五月己丑，勅，公使之政，既立程限，私暇之期，必有日數，如聞，諸國牧宰之輩，或緣使入京，公務已畢，或緣事歸舍，暇日方滿，而輙過宮闕，曾違限畢，或徒淹延，不可不禽，又上下掾等所，掌各別，若長官出行，須佐職留守，而或有掾已上官共離任所，付印主典，委蓄之主，一旦如此，其奉使過限者，雖由中之暇滿未來者，假名聞奏，若隱忍不言者，事覺之日，准狀科附，不得阿容，

〔類聚三代格 七〕格，比年國司多娶所部女子為妻妾，自今以後，悉皆禁斷，國郡隔越，不得輒娶，若娶與郡司者，解却見任，百姓者准郡見任郡論之，但家妻妾聽自將去，

天平十六年十月十四日

太政官符

應嚴立科條令禁斷諸國司娶部內女子事

右撿格所起請偁，天平十六年十月十四日格偁，比年國司多娶所部女子為妻妾，自今以後，悉皆禁斷，

匿服從職

國、無隔越、不得輙娶、若嫁娶郡司者解却見任、百姓者准解見任罪論之、但家妻聽自將去者、今案格旨、嫁娶郡司殊處重法、娶國司不見科責、伏望、不論妻妾同解見任者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

（類聚三代格十二）太政官符

應勘當匿服國司及容許者事

右被大納言從三位兼行民部卿陽成院別當藤原朝臣冬緒宣偁、重喪解職、古今恒典、若有隱匿、卽處嚴科、比聞或貪榮匿服、逐待秩滿、同僚阿容、都無言上、或沒故之狀、預聞遠近、國解遲到、不得解替、此而可忍、焉用法令、自今以後、莫令更然、若致淹遲所由之人、除行程之外、計日科罪、

延曆十七年五月十一日

（類聚三代格十七）太政官符

應遠言上國司并史生等服解死闕事

右選敍令云、凡在官身死及解免者、卽皆言上者、今案此文稱卽言上、實是速申之義也、而在外官司滯其申解、或輙與其身、或僅附使人、經年涉月、乃到官家、因此解闕稽久、遷補失時、右大臣宣、宜仰諸國闕後五日之內、專遣脚兒申官、若有違犯、隨狀科處、其令條馳驛之色、自依前例、

嘉祥元年十二月十三日

（類聚三代格十七）太政官符

應早修造前國司時破損雜物事

解由

右被右大臣宣偁、奉勅、畿內七道諸國官舍正倉器仗池堰國分寺神社等類、隨破修理、各立條例、至有闕怠、拘以解由、今聞前後國司交替之日、檢按破損、載不與解由狀及交替帳等言上、自茲厥後舊人者

縁無其勢不堪修造、新司者稱非己怠、競由不預、稍經年月、彌致大損、此之爲弊、不可勝言、自今以後、交替之日、所有破損宜令後任早加修造、其料者作差割留前司主典已上公廨充之、如無公廨者、徵用私物、仍待修理訖乃許解由、又郡司之職、檢察所部、部中破損、須勤修理、若有破損、不勤修理者、作差徵物、亦同國司、但罪家破損者、一依延暦十九年九月二日格、應令前後共勤官物無損、

弘仁四年九月廿三日〇又見上政事部略

〔類聚三代格〕七太政官符

應國司申政許不以實、徵其公廨事〇中略

一許中官舍堤防等破損并許增支度數事

右檢交替式偁、官舍溝池等破損、年中所修、每年責國交替之日、依帳檢實、如有闕怠、仍停解由、太政官去弘仁四年九月廿二日符偁、前〇略以下、同前事時破損、後人作之、其料物者割前司公廨充之、如無公廨、徵用私物、待修理訖、乃許解由、其於郡司、作差徵物、亦同國司者、而或國阿容前人、不求其損、或國司交替、檢校闕而不勤、如此之類、修理之日、後人出料、依格可作、既隱前怠、巧爲後損、事乖公途、多失官物、又營繕令云、凡有所營造及和雇造作之類、所司皆先錄所須總數、申太政官者、其支度之數、依實須申、不實之罪、亦同上條、而今諸國所申支度、還使覆檢、多有不實、假令國中單功萬人、使人授實、亦此五千、如此之行、諸國不免、公廨之吏、豈其然哉、〇中略

以前事條具件如前、今被大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、奉勅、爲吏之道、須致忠貞、不實之事、理須懲革、宜准所許、徵其公廨、兼處法律、以懲將來、又郡司是自勤自申之職也、國司則總申覆檢之吏也、准量其過、不輕國司、宜亦論罪之方自依恒例、徵物之事、一同國司者、諸國承知、依宣行之、〇中略自今以後、立爲永例、不得疎漏、

弘仁十年五月廿一日

〔政事要略五十四交替雜事〕交替式云、太政官符、定官舍雜物破損大小事、
右勘解由使起請偁、太政官弘仁四年九月廿三日應勘符偁、諸國官舍、正倉器仗池堰、國分寺神社等類、隨破損、修理各立條例、至有闕怠、拘以解由、今聞、前後國司交替之日、撿挍破損、甚不與解由狀及交替帳等言上、因茲厥後留人者緣无其勢、不堪修造、新司者稱非己怠、弃而不顧、稍歷年月、彌致大損、此之爲弊、不可勝言、自今以後、交替之日、所有破損、宜令後任早加修造、其料者作差、割留前司主典已上公廨充之、如無公廨者、徵用私物、仍待修理訖、乃許解由者、今撿此符、直稱徵修理料、不顧破損大小、因斯內外百官遷替之日、雖是小破、猶拘解由、夫物非金石、不能无損、一向拘留、事恐刻薄、望請、中破以上依格徵料、小損之色、後任相承、以術修理、不勞言上者、左大臣冬○嗣藤原宣、奉勅依請、
天長二年五月廿七日○中略

交替式云、太政官符、應令後任之吏、償舊前司不作驛家破損事、
右勘解由使起請偁、撿案內、太政官去延曆十九年九月二日、下諸國符偁、被右大臣王○神宣偁、如聞諸國驛家、例多破損、國郡怠慢、曾不修理、若有賓客、便損國威、既乖公平、豈合吏道、自今以後、國司存心、常令全固、交替之日、分明付領、勿致損壞、如有損失、前人造了、然後放還、事緣勅語、不得闕怠者、今撿諸國不與解由狀、甲時破損、乙時不作、至於丙丁、猶稱前損、是則不立程限之所爲也、望請、前司修造、不改前格、新吏催督、更施新例、仍須言上不與解由狀之後、若不令任中造了者、得替之日、拘留解由、然則國威全存、公平自著、仍錄事狀、請天裁者、右大臣常○源宣、奉勅依請、
承和八年二月廿三日

〔政事要略五十四交替雜事〕交替式云、太政官符、應早修造前司時破損雜物事、
右去弘仁四年九月廿三日、下五畿七道諸國、應勘符偁、官舍正倉、器仗池堰、國分寺神社等類、隨破損修理、各立條例、至有闕怠、拘以解由、今交替之日、撿挍破損、甚不與解由狀、及交替帳等言上、因茲厥後

舊人者緣无其勢、不堪修造、新司者偏身已忘弃而不顧、稍歷年月、彌致大損、此之爲弊、不可勝言、自今以後、交替之日、所有破損、宜令後司早加修造、其料者作差割留前司主典已上公廨充之、如无公廨、徵用私物、仍待修理訖、乃許解由、又郡司之職、檢案所部、部中破損、須勤修理、若有破損不勤修理者、作差徵物、亦同國司、案天長二年五月廿七日符偁、中破以上、依格徵料、小損之色、以舊修理者、今被右大臣宣偁、或國事等、言上不與解由狀之後、寄事假符、遷下不勞任中早修、因茲中破者便爲大破、百功者殆及千功、又國內之館、國司所行、而偏身有時之事、遐取當時之煩、論乎定道、大乖公平、斯則積違格旨、不從修例之所致、宜甲時破損、乙加修覺、不得以乙之忘、轉於內者、猶不勤、更借料物、乙卽出之、又郡司出料者、准郡內破損者、諸國承知、依宣行之、立以爲例、

承和八年十月十九日〇中略

太政官符、應遣諸國司、廨立令後司辨濟前司時雜怠修例事、

一國分二寺、神社官舍驛家、館舍、及具器仗等、

右得解由使奏狀偁、謹檢仁和四年七月廿三日格偁、得太宰大貳從四位上藤原朝臣保則解偁、管內諸國、調庸未進、租稅未納、及所司勘出、種々雜怠、觸類繁多、前司分付之日、具注不與解由狀、言上、勘解由使勘判云、前司與任後任相共辨濟、待了放還者、而諸國凋殘、百姓窮弊、當時庶務、尙難營辨、往年雜怠、何暇究成、望請諸國司者、有任中雜務辨濟无闕者、特宜以往之怠、勿拘辨其身者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國亦宜准此者、今謹案交替式云、勘解由使起請偁、弘仁四年九月廿三日、騰勅符偁、諸國官舍、正倉、器仗等、隨破損修理各立條例、交替之日、檢校破損、戴不與解由狀言上、舊人者緣无其勢、不堪修造、新司者偏身已忘弃而不顧、稍歷年月、彌致大損、自今以後、交替之日、所破損分、令後任早加修造、其料者作差割留前司主典已上公廨充之、如无公廨者、徵用私物者、望請、中破以上、隨格徵料、小損之色、後任以舊修理者、又同式云、勘解由使起請偁、諸國驛家、例多破損、國郡怠慢、曾不修理、自今以後、如有

損失、前人造了、然後放還者、撿諸國不與解由狀、甲時破損、乙時不作、至於丙丁、猶稱前損、是則不立程限之所爲也、望請、前司修造、不改前格、新吏催督、更施新制、仍須言上不與解由狀之後、若不令任中造了者、得替之日、拘留解由者、如此者、前司之所怠、後任必可濟、而據仁和格、件式停廢、今撿諸國言上不與前司解由狀、官舍驛家、器仗戎具、破損无實之色、多少雖殊、无國不有、凡仁和格出之後、官物失者衆矣、何者無實者、總負前司、无煩後任、破損者、无所轉付、誰能辨濟、如此之事、若爲處分者、中納言兼左近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、前件雜怠、載不與前司解由狀言上、厥後舊人无勢、修理新司弃而不顧、彼此不勤、誰能濟事、仍承和八年十月十九日、須下嚴制、甲時破損、乙時不修、拘其解由、以懲將來、然而徒有科責之名、曾无辨濟之實、何則弘仁格偁、中破以上、前司輸料、後任修理、承和符偁、前司破損、後吏修理、爰後任依格徵料、前司曾无塡進、既无料物、何以修理、今須言上不與解由狀、後、新司具注支度、申請正稅、若无正稅不動者、省不急之例用、修造有要之官舍、不得稽延以致倍損、莫必待不與狀之報符徵官物之日限、縱新司修理辨濟无闕、若前司不輸料物、猶拘解由、

寬平九年四月十九日

〔政事要略五十四交替雜事〕應依式修造前司時破損、官舍驛家、器仗、池堰、國分二寺、神社事、

右交替式偁、交替之日、所有官舍、正稅、器仗、國分寺、神社、中破以上、及溝池堰堤五百功以上者、後任加修造、其料者徵前司、待修理訖、乃許解由者、而太政官寬平九年四月十九日符偁、今須交替之日、所有損物、言上不與解由狀後、新司具注支度、申請正稅、若無正稅□□不動穀者、省除不急之例用、修造有要之官舍者、左大臣宣、奉勅、宜改寬平符、依交替式行者、諸國承知、依宜行之、

延喜二年三月十三日

〔政事要略五十四交替雜事〕太政官符五畿七道諸國司

應早速修理池溝堰堤事

右勸督農業、吏政所先、義在格條、先後重疊、凡農務之要、尤在溝池、可決溝之可灌漑則灌漑之、雖遭水旱不致損傷、如聞牧宰等、習年來之無事、忘時運之非常、河堤棄而不修、池堰壞而无理、適有乖宜、先受其害、使之不良還傾公私、況四年之後、餘陸千可堪、若无其備、臨時仍爲、左大臣宣、奉勅、下知諸國、早令修治、仍須長官專當其事、巡檢部內溝池、農月以前、依數修了、即言上其由、若破損多數、不堪速成者、且修其至要、明來年了、同亦言上、遣使實檢之日、若有致損壞者、科長官以違勅之罪者、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

延喜八年十一月十七日

〔本朝文粹二 意見封事〕意見十二箇條　善相公清行 中略 ○

一請停止依諸國少吏并百姓告言訴訟差遣朝使事

右臣伏以、牧宰者分憂之寄、一方之委、守六條之紀綱、爲兆民之領袖、故漢宣帝云、與朕共理者、其唯良二千石乎、必須擇用其才、尊崇其職、重官威而服民心、赦小瑕而責大成、而比年任用之吏、或結私黨以誹告官長、所部之民、或嫌公事以愁訴國宰、或陳妄用官物之狀、或訴政理違法之由、此等條類千緒萬端、於是朝家收其告狀、發遣使人、使人到國、未問事之虛實、不辨理之是非、偏依使威、毎事准擬、頓其印鎰、嚴其禁錮、即以官長之貴、與小吏雖民、比肩連口、受其推鞫、若辭對之間、纖芥有違、則立加縲紲、使變牢檻、若夫稱告訴之旨、事皆不實、而威權已廢、政令不行、受國[illegible]姓、轉相見聞、即各輕侮其官長、不肯服從其政教、傷化之蠹、無甚於此、況亦理劇之任、庶務多端、晩夕偏促、猶有不逮、而今朝使推問之間、猶停政務、多歴旬月、空廢治政、縱雖免被虛之名、而猶成任中之怠、秩滿之日、遂拘解由、如此則多致公損、徒減良吏、助此姧人、假被私怨、惟前年阿波守橘秘樹爲清、所部庶慣、貴勤王之誠、當時第一、必須殊加賞擢、以勸後良、而依小民之誣告、降朝使之推問、雖事皆虛詐、告人逃亡、已而秘樹之身、亦爲廢人、如此則知職之士、誰肯爲吏乎、方今時代澆季、公事難濟、故國事之治、不能事々拘於正法、故或有枉尺

而直尋者、或有失始而全終者、昔者龔遂爲渤海守、奏曰、請勅丞相御史、且勿拘臣以文法、令得便宜從事、又本朝格云、國宰反經制宜、勤不爲己者、將從寛恕、無拘文法者、伏望、此等告言訴訟、除謀反大逆之外、一切停止朝使、尋附新司、若實有犯過者、具載不與解由狀、勘判之後、即下刑官、論其罪科、或難云、凡厥貪吏之盜官物、宜速加糺察也、若待其任終、恐倉庫無餘、答云、令假令有人告申吏盜贓、爰太政官郎馳輕騎、晝夜兼行、按過其訐者、事若可爾、而今訴人告狀、歷三審之程、得奏下之比、擇定使人之間、裝束行程之限、事自彌留、度歷年紀、其間若有心盜犯者、豈遑遣一粒乎、然則與彼附後司、有何分別、況此牧宰等、身出倉廩、志報朝恩、非唯求立績於明時、亦皆念垂名於後代者也、故比年陷此罪者、皆爲公謀功、未成之間、假被告言而已、未曾有自犯入己之人、焉静尋其意、誠是公罪也、伏望、暫妻天旋、照其可否、〇中略

　延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔尾張國解文〕尾張國郡司百姓等解、申請官裁事、

　請被裁斷當國守藤原朝臣元命三箇年内責取非法官物、并濫行横法卅一箇條愁狀〇中略

以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、抑良吏莅堺之日、虎負兒以却、蠹蝗忘風之時、螟虫振羽而集、而當任守元命朝臣、淫奢在心、不知黎民之菜色、厭膾餘所、猶失分憂之蒲鞭、昔依六王之誅戮、燼七國之災孼、今鑿一守之豐鋒、致八郡之騷動、因茲弃國欲逃、是如背皇命、越境擬過、亦似闕課役、僅過三年、不異多虎首、若於遂一任者、皆被容盡、仍事愁於腹内、則懷逃亡之想、聞責於處外、則忙離散之儀、今須郡司百姓、早停守元命朝臣不治之由、蒙官裁者也、〇中略　望請、停止件元命朝臣、被改任良吏、以將令他國之牧宰、知治國優民之褒賞、〇中略　仍具勒三十一箇條事狀、謹解、

　〔日本紀略一條〕永祚元年二月五日丙辰、定尾張國百姓愁申守藤原元命可被替他人之由、

〔中右記〕長承四年元年〇保延正月廿五日、大夫史政重、入來之次、問云、依寺門亂坂東八ケ國、濟二ケ年公

事者、然者件官得勘例中云、自本寺件官得官中不被免也、只国司任中遷替新例所被免来也、又同云、
任中二ヶ年済数勘例中云、当任一年前司任終一年、合済来也者、

古事類苑

政治部二十三

上編

任限

任限ハ、歷トモ秩限トモ云ヒタ、國司ノ主典以上ノ任限ハ、原ハ六年ナリシガ、其後屢〻沿革アリタ、仁明天皇ノ承和二年ニ、定メタ四年トシタリシヨリ後ハ、歷世改マルコトナシ、史生ハ、限ハ十二年ナリシガ、後ニハ主典以上ト同ジク四年ト爲ル而ルニ太宰府及ビ北管國幷ニ陸奥出羽ハ、中世ヨリ五年ト爲シタリ、又計歷ト云フコトアリ、秩限未ダ滿タズシテ解任シタル者、復任シタル時ニ、前歷ヲ通計スルノ法ナリ、例ヘバ前ニ備前國守ニシテ、在任二年ニシテ解任シ、後ニ備後守タルトキハ、在任二年ヲ以テ秩滿トスルガ如シ、而シテ解任ノ人、京ニ歸ルトキハ、諸般僞無ノ事アリテ、解飾ヲ獲スルヲ例トス、

〔令義解選敍〕凡初位以上長上官遷代、略○註皆以六考爲限、

凡略○中其外散位者、分番上下、皆以十二考爲限、

○按ズルニ、此時國ノ主典以上ノ任限ヲ以テ六年トシ、史生ノ任限ヲ以テ十二年トシタリ、

〔續日本紀文武三〕慶雲三年二月庚寅、制七條事、准令諸長上官遷代、皆以六考爲限、餘色得選色別加二考以十二考爲選限、百官得選之限太遠、宜色別減二考、各定選限、

○按ズルニ、此時ニ國ノ主典以上ノ任限ヲ四年トシ、史生ヲ十年トシタリ、

〔續日本紀聖武十〕神龜五年八月壬申、太政官議奏、改定諸國史生博士醫師員幷考選敍限、略○中以六考、

成選滿卽與替、(略)○下

〔萬葉集十九〕以七月(○天平勝寶三年)十七日、遷任少納言、仍作悲別之歌、贈貽朝集使掾久米朝臣廣繩之館二首、

既滿六載之期、忽値遷替之運、於是別舊之悽、心中鬱結、拭涕之袖、何以能旱、因作悲歌二首、式遺莫忘之志、其詞曰、

荒玉乃、年緖長久、相見氐之、彼心引、將忘也毛、

伊波世野爾、秋芽子之努藝、馬並、始鷹獵太爾、不爲哉將別、

右八月四日贈之

便附大帳使、取八月五日應入京師、因此以四日設國厨之饌於介內藏伊美吉繩麻呂館餞之、于時大伴宿禰家持作歌一首、

之奈謝可流、越爾五箇年、住住而、立別麻久、惜初夜可毛、

五日平旦上道、仍國司次官已下諸僚皆共視送、於時射水郡大領安努君廣島門前之林中、預設餞饌之宴、于時大帳使大伴宿禰家持、和內藏伊美吉繩麻呂捧盞之歌一首、

玉桙之、道爾出立、往吾者、公之事跡乎、負而之將去、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年十月甲子、勅、如聞、吏者民之本也、數遷易、則民不安居、久積習、則民知所從、是以服其德而從其化、安其業而信其令、頃年國司交替皆以四年爲限、斯則適足勞民、未可以化、孔子曰、如有用我三年有成、夫以大聖之德、猶須三年、而況中人乎、古者三載考績、三考黜陟、所以表善簡惡盡臣力者也、自今以後、宜以六歲爲限、省送故迎新之費、其傳至三年、遣巡察使推撿政迹、慰問民憂、待滿而罷、隨狀黜陟、庶令移易貪俗、悉變淸風、黎元息肩、倉廩有實、普告遐邇、知朕意焉、又勅、諸國史生遷易依格待滿六年者、望人旣多、任所良少、由此或有至於白頭、不得一任、空歸故鄉、潛抱怨歎、自今

以後、宜以四歲爲限、遷及解人、
○按ズルニ、此時國ノ主典以上ノ任限ヲ六年トシタリシガ、寶龜十一年ヨリ以前ニ、復タ四年トシタルナラン、下ニ引ケル所ノ續日本紀寶龜十一年八月ノ官奏ヲ觀テ知ルベシ、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年閏五月丙申、太政官奏曰、略○中天平神護二年四月二十六日格云、博士總國一依前格、醫師兼任、更建新例、其史生者、博士醫師兼任之國、國別格外加置二人、而今望者既多、官員猶少、因茲國無定准、任用猥亂、臣等商量、隨國大小、增減員數、大國五人、上國四人、中國三人、下國二人、其遷代法、一依天平寶字二年十月二十五日勅、以四歲爲限、其博士醫師兼國者、學生勞於業館、病人困於救療、望請每國各置一人、並以六考遷替、自今以後、立爲恒式、謹錄奏聞、伏聽天裁者、奏可之、

〔日本紀略 平城〕大同二年十月壬申、公卿議奏曰云々、頃年國司交替、皆四考爲限、宜以六歲爲限、許之、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應補陸奧國史生幷弩師等事

右被按察使正四位下藤原朝臣緒嗣奏偁、謹檢案內、太政官去大同二年十一月二日符偁、初位已上長上官遷代、皆以六考爲限、又同年十一月廿三日符偁、史生不改此例者、略○中

大同五年三月一日

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁六年七月甲午、是日復諸國司遷替、以四年爲限、 十二月乙丑、勅、諸國司等、各期六年之任、不慮四年之替、國內雜務、非唯一途、今新格忽行、心事相違、而去秋不稔、損害殊甚、定知遷替之人、必累拘留、宜須明春新舊交替之歲、依今年損所有未納、隨敗分付、勅令後任國司准延曆廿五年四月十六日撿納當年未納之格、每年徵收、附朝集使言上、但有遂擧虛納、欠負未納、而得公廨之類、准法科附、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

大宰任限

諸國守介四年爲歷事

右謹撿、還叙介、初位已上長上官遷代、皆以六考爲限、慶雲三年二月十六日改定四年、大同二年十月十九日更據令文、弘仁六年七月十七日復慶雲格、天長元年八月廿日令介以上別處六年之秩、夫吏者民之所歸、民者吏之所本、頃年良吏之風希聞、窮民之憂不息、臣等以爲、善人三年尙可勝殘、四凶九載難復致功、然則治之能否非年遠近、代之淸濁賢將不肖、伏望國司之歷、因循慶雲一用四年、但陸奧出羽太宰府等、僻在千里、去來多煩、寶龜十一、弘仁七、兩年格、事近便宜、不可改、至如廉節可稱、無心顧私之徒、不拘年限、殊待明詔、事貴變通、施期弛張、隨時之義大矣、臣等商量、具件如前、伏聽天裁、謹以申聞謹奏聞、

承和二年七月三日〈○又見類聚三代格〉

〔續古今和歌集九離別〕紀貫之、美濃のすけにてまかれりける時、わかれおしみてよめる、

躬恒

一日だにみねば戀しき君がいなば年のよとせをいかでくらさん

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年八月庚申、太政官奏曰、筑紫太宰、遠居邊要、常警不虞、兼待蕃客、所有執掌、殊異諸道、而官人相替、限以四年、送故迎新、相望道路、府國困弊、職此之由、加以所給厨物、其數過多、每守舊例、充給或闕、蕃客之儲、於事商量、甚不穩便、臣等望請、且停交替料、兼官人歷任、增爲五年、然則百姓息肩、庖厨無乏、伏聽天裁、奏可之、〈○又見類聚三代格、令集解〉

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月己未、增太宰府幷管內諸國官人歷以爲五年、停賜交替料、

○按ズルニ、是ヨリ先キ、任限ヲ定メテ、四年トシタリシ事ノアリシナラン、

〔玄々集〕有國卿大貳一首

任はて丶京にのぼるとき、香椎社にて、

五とせはまるしの杉につかへてき今年は梅の花のみやこへ

(後拾和歌集廿)大納言經信、太宰帥にて下り侍けるに川尻にまかり逢てよめる、

津守國基

六とせにぞ君はきまさむ住吉のまつべき身こそいたく老ぬれ

(類聚三代格五)太政官符

應延陸奧國史生并弩師歷事

右按察使正四位下藤原朝臣緒嗣奏偁、謹検案内、太政官去大同二年十一月二日符偁、初位已上長上官遷代皆以六考為限、又同年十一月廿三日符偁、史生不改此例者、而此國去京紗遠、公廨數少、在國雖經防戎、歸家既乏路粮、臣請此一國、改史生歷六年為限者、右大臣宣奉勅准西海道諸國五年為限、弩師准此、

大同五年三月一日

太政官符

應出羽史生并弩師歷五年為限事

右得參議從三位行大藏卿陸奧出羽按察使勳四等文室朝臣綿麻呂奏狀偁、被太政官去大同五年六月廿二日符偁、陸奧國史生之歷、宜准西海道諸國五年為限、弩師准之者、陸奧出羽俱是邊要、望請、件人等歷五年為限者、大納言正三位藤原朝臣園人宣奉勅依請、

弘仁三年十一月十五日（○又見日本後紀）

太政官符

國司幷史生歷五年為限事

右太政官今月十一日下陸奧出羽兩國符偁、中納言兼右近衛大將從三位行陸奧出羽按察使勳三

等巨勢朝臣野足奏狀偁、謹撿案內、依太政官去弘仁三年十一月十五日符、件兩國史生歷任五年爲限、而據去年七月十七日論奏、四年爲限、唯西海一道五年如常、愚臣商量、邊要之設、東西是同、伏望、兩國司等皆准西海道五年相替、庶令忘遠路之抜、尋邊守之勤者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁七年正月十二日

員外國司任限

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年三月丁巳、勅、比年員外國司、其數寔繁、徒有煩擾之損、彌乖簡易之化、永言其弊、理合廢省、宜仰所司、歷任五年已上、一皆解却、其未秩滿者、每滿五年、解任放上、不必待符、

計歷

〔延喜式 十八 式部上〕凡權任國司幷史生博士醫師等、一任之內、遷任他國者、通計前後歷、秩滿之由、年終申太政官、○中略

凡諸國司及史生博士醫師、秩限未滿任他國、及遭喪之徒、服闋復任者、並通計前歷、若任於京官、更遷外官、及從番上轉職事、如此之類、不計前歷、

〔北山抄 六 備忘略記〕計歷事 或云、外國人俸二人云々、

口傳云、人給二分已上、式部不知、仍書別紙給之、某國某掾某姓某丸、右自今年可計歷云々、本解可給外記也、今案、正員依得替解任之職、不給官符、只不可取闕也、仍不下官歟、權任者、以本解先下官、召返其文給式部云々、書別可給外記歟、近例不別正權、以本解下式部、書別正員給外記、權任給官外記云云、今案依可作官符、本解猶可下官、仍可從舊例歟、人給之者、未給任符之前、以給主申文申之、仍計歷由作載任符、副之計歷作、或云、此說非也、副官符給任符云々、蓄任之後、以國解所申也、受領官者不論正權下官給官符、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應自外官遷任京官未預考人通計前歷事

右得式部省解偁、撿式云、諸國司及史生博士醫師秩限未滿、或秩滿之後、未滿四年、更任他國、及遭喪

之後、應國復任者、並通計前歷、若任於京官、更遷外官、及從外官上轉京職、如此之類、不可通計前歷者、而今備前國守從五位下橘朝臣高雄、去年二月十一日遷左少弁、未預參間、更復本職、欲計前歷已出遷任內官之間、再爲新任、未有向京預參之勞、凡爲外國司、立其歷限、通計前歷者、計入功効、欲均勞逸、而偏依式文、更爲新任、實非立限之意、論之理數、甚無公平、又交替式云、遷代之人必付解由、然則非實放還、無須預參、論此官之、自非兼參之徒、何入新任之員、望請遷內官未兼參前、更任外職、通計前歷、其得放還入京兼參間新任、何須拘式文、如此則秩限自分、勞逸得均、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

承和十五年三月廿二日〇又見續日本後紀

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、〇中略遷任之人、其歷四年、並讓他人、全滿六年、今須計遷任歷令終限、

〔節用集 [illegible]〕讓職[illegible]

〔庭訓往來〕御任國之後、爲見廻檢注、不定日之間、願如寂往日之眼近、臨國御上洛之處、不預御傳候條、當年御甲斐國、心之至、誰存候哉、及御官職裝色如何、然西國土產鹿籠等云々、會點、日何比乎、當日登示給者、可止他行、

〔庭訓往來註 大任〕鹿籠籠とは鹿籠籠の名也、

〔本朝世紀〕天慶四年八月五日壬辰、新任上卿以下、著侍從所座、早朝參議伴保平宿禰、著件印鎰、請納言以下侍從以上、及外記史等之署、是近江守伴了、依今任、大納言藤原實賴卿、中納言藤原師輔卿遲參、著宜陽殿西廂座、不著件所饗座、因之消息卿二獻之後、不經幾程、參議移著宜陽殿座、即召侍從所饗所酒饌、但侍從者昨日於件所座飲之、于時有被出中紙二百帖錢三十貫文、誠書參議以上料、當日出之、錢者侍從外記史以下料、[illegible]

[illegible]

注八

〔平治物語　三〕經宗惟方被處遠流事同被召返事
新大納言經宗モ、阿波國ヨリ被召返テ、右大臣ニナル、人アハノ大臣トゾ申ケル、又大宮左大臣伊通公、世ニ住バ興アル事ヲ聞物哉、昔コソ黍ノ大臣有ケンナレ、今粟ノ大臣出來タリ、何カ又稗ノ大臣出來ズラント笑ハレケリ、大饗行ハルベカリケルニ、使者ニ、此左大臣請ジ奉リケレバ、使者ノ聞ヲモ憚ラズ、粟ノ大臣上テ旋龍振舞セラルヽナ、伊通ハ得參ラジトゾ被申ケル、

交替

外官ノ人ノ任所ニ赴クニハ、總テ親屬賓客ヲ將キルヲ得ズ、畿外ハ特ニ父、祖、伯、叔ト倶ニスルヲ得ズ、年二十一以上ナル子、孫、弟、姪ヲ隨フルヲ得ズ、又祖父母、父母已ニ老イ、（年六十以上）疾病シテ侍スル者ナキニ、之ヲ委ネテ赴クコトヲ得ズ、又任所ニ赴クニハ裝束スベキ程ヲ賜フヲ、其限ヲ過ギテ發程セザル者ハ罪アリ、大宰帥、大貳及ビ國守ハ、任ニ赴クニ當リテ、藏人ニ就キテ之ヲ奏ス、是ヲ罷申（マカリマウシ）ト云フ、而シテ帥、大貳ハ、殿上ニ於テ酒殽幷ニ祿ヲ賜フ、因テ能ク不虞ヲ愼ミ、管内ヲ興復セヨ等ノ勅語アリ、國守ハ、勅語ヲ賜ヒ祿ヲ賜フノミニシテ、酒ヲ賜フノ事ナシ、發途ヨリ前ニ總テ先使（サキツカヒ）ヲ任國ニ遣シ、宿所ヲ點定シ、在廳官人ヲ戒メ、路次ノ郡司驛長等ニ牒シ、預メ準擬シテ供給セシメ、境ニ入リテ後ニ神拜ノ事アリ、

赴任スルニハ、必ズ任符ヲ賜フ、任符ハ或ハ鎰符トモ云ヒテ、（鎰符ノ事ハ符ニ詳ナリ）此ヲ以テ證トシテ、前司ヨリ印鎰ヲ授カリ事務ヲ領スルナリ、諸國史生ノ他國ニ遷任スルニハ、本任ノ放還ヲ待タズシテ任符ヲ給シ、便チニ任所ニ赴カシメ、而シテ後ニ解由ヲ進ラシムルモ、官長タ

ル者ノ遷任スルニハ、解由ヲ進リテ後ニ任符ヲ給ス、而ルニ後ニハ國守モ本任ノ放還ヲ待タズシテ任符ヲ給セラル、者アリ、而シテ其任符ハ一タビ任ニ到リシ後ハ、永ク國廳ニ留ムルナリ、或ハ任符ヲ受ケテ任所ニ赴カズシテ返上スル者モアリ、

赴任スルニハ、京ニ近キ國ハ官ヨリ食馬ヲ給セズ、稍遠キ國ハ位ニ準ジテ食料ヲ給シ、海路ヲ取ル國ハ食ノミヲ給シ、極メテ遠キ國及ビ大宰帥、大貳ハ傳符ヲ給ス、又遷代スルニハ、役夫及ビ馬ヲ給ス、是ヲ交替料ト云フ、海路ヲ取ル者ハ夫ノミヲ給ス、陸奧出羽ノ兩國司ハ、秩滿解任ニハ夫馬ヲ給スレドモ、延任ノ人ニハ給セズ、蓋シ諸國ノ任限ハ四年ナルヲ、此二國ハ五年ナルヲ以テノ故ナルベシ、又土人ニシテ史生ト爲レル者等ニモ給セシヲ、唯其功物ヲ貪リテ、則ニ他ニ之クニアラザレバ之ヲ停メタリ、功物トハ役スベキ夫ヨリ錢穀ヲ取ルヲ云フ、又國司任所ニ死スルトキハ、其妻妾ニ食馬ヲ給シ、京ニ入ラシム、又國司ノ職分田ハ、交代前後ノ耕耨ヲ以テ、前後人ノ分ヲ定メ、幷ニ功直ヲ償イ、公粮ヲ給スル等ノ法アリシガ、後ニ屢、沿革アリ、〈職分田篇ヲ參詳スベシ〉

前後司交替シテ分付受領スルニハ、舊ハ其程期ナカリシヲ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニ、職事官疾病ニ因リテ、解官スルノ法ニ依リ、新任到任後百二十日ヲ以テ限トシ、此ニ違ヒテ停留スルトキハ、其情狀ニ依リ付領ノ官ヲ罪セリ、而シテ故アリテ延期スルトキハ、前後司共ニ署シテ太政官ニ請フ、但シ其請ハ再度ニ及ブコトヲ得ズ、其延期ノ日數ハ多クテ六十日トス、因テ交替ノ期ヲ併セテ百八十日ナリ、〈解由篇ヲ參詳スベシ〉

交替ノ欠負ニ就キテハ、前後司ノ爭執常ニ絶エザルコトナリ、故ニ前司ヨリ以往ノ雜怠ヲ以テ、後任ヲ拘絆セズシテ、唯租稅調庸ノミ事ヲ立テ、、毎年補塡セシメシ事アリ、或ハ舊年交替ノ欠數ヲ減ジタル事アリ、或ハ往年ノ欠ノ爲メニ擧出ヲ置キ、唯之ヲ簿籍ニ注シテ、辨

債ヲ要セザリシ事アリ、或ハ前前司以往ノ任中ノ雜怠ヲ起勘セシ事アリ、或ハ前司ノ京ニ在リテ付領スル人ナキヲ以テ、再ビ任所ニ赴カシメテ、付領セント請ヒシ事アリ、又前司任所ニ死シテ、付領スベキ人ナキトキハ、後司ヨリ官ニ請ヒ、前司同任ノ人ヲシテ任所ニ到ラシメテ、分付受領ス、是ヲ檢交替使ト云ヒ、又ハ單ニ交替使トモ云フ、而シテ其記錄セル帳ヲ檢交替使帳ト云ヒテ、令任用分付實錄帳ト共ニ、太政官ヨリ勘解由使ニ下シテ勘覆セシム、任用トハ、次官以下ノ事ニテ、次官以下タル人、分付ノ事ニ就テ、實ノ如ク記錄セル帳ヲ令任用分付實錄帳トモ、又ハ單ニ實錄帳トモ云フナリ、

赴任制

〔令義解十雜令〕凡外任官人、不得將親屬賓客往任所、謂其公式令、唯得子孫弟姪、此令、廣謂宗族賓客、情義不聞、故設二條、其家口者、非在禁限也、及請占田宅、謂空閑地者、自依常例、與百姓爭利、

〔令義解七公式〕凡外官赴任、子弟年廿一以上、謂子孫弟姪也、不稱父祖伯叔之類者、舉輕明重之義也、不得自隨、畿內任官、不在此限、其須親同者聽、

〔律疏職制〕凡祖父母父母老疾無侍、委親之官、○中略杖一百、

任符

〔令義解四選敍〕凡官人至任、若無印文者、不得受代、謂此爲主典以上立文、其雜任亦准此、

〔令集解十七選敍〕釋云、此條官人非唯長上、何者外國史生、郡司、軍團、被任之日、必有印文、此是舉重包輕之義耳、今時行事京官之中、武官有任文、文官无任文、古記云、問若无印文者不得受代、有限以不、答外國不限遠近貴賤、皆得印文、史生、主政、主帳等皆同耳、唯畿內不合、

〔延喜式十一太政官〕凡太政官下諸司諸國符、隨事請內外印、○中略新任國司幷諸司在外國者赴任、○中略請內印、

凡少掾轉大掾、少目轉大目之類、簽符連修一紙、大宰監典諸國郡領亦准此、

凡諸國一分已上、遷任他國、不責本任放還、直遣任所、若過限不進解由者、所司申聽解任之狀、但爲長

官者、待分付了、進解由、乃給鎰符、

凡諸國權史生博士醫師遷任、幷依讓相代之輩、其鎰符注所遷職、

凡諸國受業博士醫師補任解文幷鎰符、名下注各本貫、

凡諸國史生博士醫師鎰符、外記勘會補任帳、明知其補由、然後請印、

〔續日本紀十〕天平元年五月庚戌、太政官處分、准令諸國史生及傔仗等式部判補、赴任之日、例下省符、符內仍顯國司姓名、自非辨官、不合此類、自今以後、補任已訖、具注交名、申送辨官、更造符、乃下諸國、

〔類聚符宣抄八〕中納言藤原朝臣愛發宣、頃者、給新國司任符、多[illegible][illegible]釋、不守法制之所致也、自今已後、辨官入請印櫃之日、先具勘知、隨闕國解申、不可遺漏者、

承和四年七月廿七日　　少外記秋篠朝臣五百行奉

但馬介藤原朝臣忠憲(召名誤[illegible])

備中權介弓削宿禰秋佐(召名誤[illegible])

右民部卿中納言宣、件人等召名未改正之間、且印其任符、

仁和元年三月五日　　大外記高丘五常奉

〔類聚符宣抄八〕中納言從三位兼左衞門督源朝臣能有宣、奉勅、鎮守府權任官人鎰符、宜令注替人之姓名、自今以後、立爲恆例者、

仁和元年七月三日　　大外記大藏善行奉

右大臣宣、奉勅、能登權掾矢集安吉、去月廿九日召名、宿禰字誤注造、宜雖未刊正、且印其任符、

仁和元年十月十三日　　大外記高丘五常奉

能登權目從七位下日下部造好長

右被中納言在原朝臣宣偁、件好長去仁和元年八月廿九日召名、誤注正六位下日下部宿禰好長、改

正之間、宜依件令給任符者、

仁和二年二月十五日　　大外記大藏善行奉

中納言從三位源朝臣能有宣、奉勅、備前權守藤原朝臣諸藤召名、誤不注權字、而依有內裏穢、不得正召名、以仰式部省、宜彼任符在先請印者、

仁和三年六月十日　　少外記紀長谷雄奉

〔西宮記臨時八〕太宰帥大貳赴任事○中略

延喜七十一四、太宰府言上、帥友于朝臣任符、不注分付字、依請、

〔類聚符宣抄八〕越後守從五位下藤原朝臣遠成

右大臣宣、奉勅、件人雖未進本任解由、且任符入請印者、

延喜十六年七月五日　　大外記伴宿禰久永奉

右大臣宣、奉勅、但馬介從五位上橘秘樹不待本任放還、彼任符且請印者、元阿波守

延喜十七年三月十六日　　大外記伴宿禰久永奉

正五位下行武藏守藤原朝臣高風元常陸介

右從三位守大納言兼右近衛大將行皇太子傅藤原朝臣道明宣、奉勅、件人宜不待本任放還、且請印任符者、

延喜十七年四月十一日　　大外記小野美實奉

薩摩守正六位上藤原朝臣作則元大監

右中納言藤原朝臣扶幹宣、奉勅、件人奉去承平三年貢綿使入京、今依府解、遷任薩摩守、宜不待本任放還、任符入請印者、

承平五年六月十三日　　少外記內藏惟直奉

壹岐守正六位上菅原朝臣清鑒（天慶二年十二月任）

右中納言從三位藤原朝臣師輔宣、奉勅、件人爲大宰監之時、請承平六年貢綿使入京、而預事依貢濟了、宣不待本任放還、請印任符者、

天慶三年五月十日　大外記三統宿禰公忠奉

因幡守從五位下平朝臣清幹（先上野介）

右從三位守大納言兼行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣師輔宣、奉勅、件人本任解由進官既畢、國未下所司、宜且請印其任符者、

天慶八年五月十九日　大外記三統宿禰公忠奉

〔類聚符宣抄七〕太政官符大和國司（外）

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣、奉勅、件人宜補彼國擬弁進使者、國宜承知、依宜行之、其公廨准一分給之、符到奉行、

右大弁　左大史

天暦八年二月廿三日

〔類聚符宣抄八〕佐渡守正六位上朝原宿禰俊常

右左大臣宣、件人去正月任佐渡守、而召名誤宿禰字、注朝臣、改正召名之間、依先例、且可請印任符者、

應和三年三月廿五日　大外記兼主税權助備後介御船宿禰傳說奉

〔類聚符宣抄八〕太政官符出羽國司

應令介從五位下平朝臣兼忠勤行秋田城務事

右從二位行大納言兼陸奥出羽按察使藤原朝臣爲光宣、奉勅、宜差遣彼城、勤行警固、若無防禦、有所

請者、隨狀處分、寄事鎮衞、勿煩國務者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左中弁　右大史

天元三年七月廿三日

〔類聚符宣抄八〕太政官符太宰府内

從五位下□朝臣維叙

右去八月□日、任肥前國守畢、府宜承知、官物一事已上、依例令分付、緣海之國、亦宜給甎、符到施行、

弁　史

永觀元年九月十三日

太政官符近江國司内

正六位上文室眞人清扶介、去年七月廿日敍此、給食馬一疋、准國司例

右去年十一月卅日、任彼國少掾畢、國宜承知、至即任用、符到奉行、

弁　史

寬和三年二月十九日

〔類聚符宣抄八〕太政官符出羽國外

權掾正六位上藤原朝臣貞光

右太政官今日下彼國、件貞光任符、注傳符一枚四剋、而不給其實、國宜承知、依例行之、符到奉行、

弁　史

永延元年七月廿日

〔類聚符宣抄八〕太政官符陸奥出羽等國司幷鎮守府内印

正二位行大納言兼左近衞大將春宮大夫藤原朝臣朝光

右去正月廿九日、實任陸奥出羽等國按察使兼、國府承知、符到奉行、

辨　　史

永延二年二月十三日

太政官符攝津國司 内印

從七位上桑宿禰春友 從八位上日下部宿禰時 延賜替、修理之、

右去年十二月五日任、彼國史生兼、國宜承知、至即任用、符到奉行、

辨　　史

永延二年二月廿五日

太政官符但馬國司

從七位上多治眞人廣光

右去年十二月廿五日任、彼國博士兼、國宜承知、至即任用、路次之國、亦宜給食馬、符到奉行、

辨　　史

永延二年二月廿五日

〔類聚符宣抄八〕太政官符陸奥國司幷鎭守府 内印

從五位□藤原朝臣文傪

右今月三日任、彼府將軍兼、國府承知、至即任用、符到奉行、

左中辨在判　　左大史

永延二年十月五日

〔類聚符宣抄八〕請、殊蒙天恩因准傍例、不待本任放還給任符赴任國狀

右匡衡去寛弘六年正月任尾張守、十月廿八日著任、今年蒙殊私之朝恩、遷任丹波守、須先勤行前任

交替之務、而遷任他國之輩、不待本任放還、早赴任所、風跡多存、近則播磨守景舒任伊與守、伊與守清延任播磨守、各遷任之間、不待放還、又伴眞天暦六年正月任美濃守、同八年五月任播磨守、平貞盛天祿三年正月任丹波守、天延二年十一月任陸奥守、是皆殊被下宣旨、不待本任放還、赴任者也、以往之例不可稱計、望請殊蒙天恩、因准前例被裁許、不待本任放還、將赴任國、匡衡誠惶誠恐謹言、

寛弘七年六月八日

依請

〔朝野群載二十二諸國雜事〕依下名誤依本位申賜任符

上野介從五位下藤原朝臣家業誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩被下宣旨依本位賜任符狀

右家業、去正月除上野介、即賜鎰符、欲赴任國、下名誤注從五位上、仍不給任符、望請天恩、被下宣旨、依本位給任符、家業誠惶誠恐謹言、

治安四年七月九日

上野介

〔類聚符宣抄八〕從四位下行美濃守源朝臣頼信誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例不待本任放還給鎰符赴任國狀

右頼信、今月八日、遷彼國守、謹撿先例、分憂之吏如此遷拜之輩、不待本任放還、早給任符、赴任國之例、近則大江匡衡朝臣從尾張遷丹波守、藤原公則朝臣從同國遷河内守等是也、以往之例、不遑毛擧、望請天恩、被下宣旨、不待本任放還、給鎰符將赴任國矣、頼信誠惶誠恐謹言、

長元五年二月廿日

從四位下行美濃守源朝臣

〔朝野群載二十二諸國雜事〕申鎰符

從四位下阿波守高階朝臣成章誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准傍例不待本任放還給與符赴任國状

右謹檢案内須待本任放還給與符赴任國也而遣發在近相催無程望請天恩因准傍例不待本任放還被給與符將赴任國成章誠惶誠恐謹言

長久五年二月廿八日　従四位下行阿波守高階朝臣成章

今案任本任之人待其放還給與符赴任國至京官者不給而不行仍所申請也但諸道博士不預官物之類非責限又无本官之人不可申請式云自京官遷任畿内之人並不進本任解由向任國近江丹波等准之不申請與符之時任符所副宜旨未下之由敢不作上之故也

(朝野群載二十二諸國雜事上外國官人官符)

太政官符淡路國司

従七位上伴宿禰久永

右正月廿六日任彼國少掾畢國宜承知至卽任用縁海之國亦宜給驛符到奉行

正四位下行左中辨藤原朝臣

修理左宮城判官正五位下行大炊頭兼左大史竿博士小槻宿禰

寛治四年二月廿六日

(中右記)寛治八年〇嘉保元年九月六日中時許頭中納言通俊卿參仗座被行陣覽内文〇中略件内文依右府〇藤原俊家服暇御事諸事忘却之間彌不可行歟但伊賀守孝言朝臣不待任符且下向之間已右府被尤也雖然被奉行從途中令使者申請任符也仍尋先例被行歟諸國吏不賜任符不可著國廳之故也

(本朝世紀)康和五年十月八日甲寅晩頭有内印事是太宰權帥季仲卿任符也紛失由自西府被申上之故

(中右記)元永二年七月十日因幡守宗成今年九ヶ年不賜任符也仍今日令請印也且令參被國一宮

裝束假

來十四日下向也、件事依無本官不立申文、只官作上鎰符、令請印之由、大夫史所申送也、

〔朝野群載二十二 諸國雜事〕外國官人官符

太政官符越前國司

　正五位下行諸陵頭兼筭博士三善朝臣爲康

右正月廿八日、兼任彼國權介、畢、國宜承知、至即任用、符到奉行、

正四位下行左中辨藤原朝臣　　正五位下行左大史兼筭博士能登介小槻宿禰

　大治五年二月廿六日

〔朝野群載二十二 諸國雜事〕睨符

太政官符信濃國司

　正五位下藤原朝臣永平

右今月一日、任彼國守、畢、國宜承知、官物一事已上、依例分付、符到奉行、

辨　　史

　年　月　日

太政官符　伯耆國司

　從五位下平朝臣忠盛

右去三月廿日、任彼國守、畢、國宜承知、官物一事已上、依例分付、符到奉行、

造東大寺長官正四位下行左中辨藤原朝臣

修理亮宮城判官正五位下行左大史兼筭博士播磨介小槻宿禰

　年　月　日

〔令義解九 假寧〕凡外官任訖、給裝束假、近國廿日、中國卅日、遠國卌日、並除程、其假內欲赴任者聽之、若有

事須早遣者、不用此令、前人代至亦准此、謂前是前人、身遭喪任、被解職、其前人任官、及不任官而闕、但任官者、不待田苗、即便赴任、但前人見有田苗應待收穫者、待收穫訖遣還、

〔菅家文草〕予爲外吏、奉使内裏、發京之間、猶預公宴者、雖有舊例、又殊恩也、○下略

○按ズルニ、發京假ノ事ハ、休假篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國務條々事

一隨身不與狀幷勘畢税帳事

不與狀者、雖被解由主典請書之、雖申税帳者、取主税寮得意、判官屬書寫之、是皆寮々所寫取也、但以件帳等、爲後任勘濟公文也、

一赴任國吉日時事

新任之吏、赴任國之時、必擇吉日時可下向、但俗云、吉日世俗之說、降雨之日、尤忌之、出行亦改吉日、更出行耳、是任人情、亦有必定、

一出行初日、不可寄寺社事、

世俗說云、不食宗餅、不聽囚事、不寄寺中、不寄社頭云々、但今世之人、亦隨氣色耳、

一出京間、奉幣道祖神事、

出京之後、所宿之處、處々奉幣道祖神、即令新羅途中平安之由、

一制止途中闘亂事

新任之吏、赴向任國之間、郎等從類之中、或奪取人物、或闘亂同僚、仍郎等之中、擇定清廉勇士、令制止件事、

一前使立吏幹勇堪郎等一兩人、令點定夕宿所事、

追前途之間、自經日月、若無支度者、晩景則自有不合事、仍前立件郎等一兩人、可令點定夕宿、若有

不合事者、一人還來可申事由、卽有途中用意也、但點所々間、不可致隣里之愁、又隨形進止耳、

一擇吉日時入境事

在廳之間、未及吉日時者、逗留邊下、其間官人雜仕等、慮外來著、令申事由者、隨形召上、可問國風、但可隨形、專不可云無益事、外國之者、境迎之日、必推量長官之賢愚、

一境迎事

官人雜仕等任例來向、或國隨身印鎰參向、或國引率官人雜仕等參會、其儀式隨土風而已、參著之間、若當惡日者、暫返國廳吉日領之、

一擇吉日時入館事

著館日時、在京之間、於陰陽家令撰定、若卒去交替之時、或改居所耳、

一著館日、先令奉行任符事、

著國之日、先有此事、其儀式、先新司以任符授目、目召史生令讀覽、覽畢、長官以下、登時奉行、

一受領印鎰事

擇定吉日、可領印鎰、但領印鎰之日、卽令前司奉行任符、乃後領之、又著館日儀式、前司差官人、分付印鎰、其儀前司差次官以下、目以上一兩人、令賚印鎰、令參新司館、卽官人就座之後、鎰取書生以御鎰置新司前、其詞云、御鎰進上 新司無答、或云符云、與之、

一停止調備供給事

新任之吏、著國之日以後、三箇日之間、必有調備供給、如此之間、非無所部之煩、若可停止者、著國以前、通消息進止之、但隨國有例、若無指煩者、依例令行之、

一著館日、所々雜人等申見參事、

此日所々雜色人等進見參、然後一々申之、所謂税所、大帳所、朝集所、健兒所、國掌所等也、其儀政所兄部率書生等、列立庭

申一々申其職其位姓名申訖、皆再拜々訖、長官命云、(無之)是古說也、今不有此事云々、

一擇吉日著座事

到國之後、擇吉日良辰著座、此日不登高、不臨深、不聞凶言、不語害事、不會衆人、著座之間、尤制諠譁、是尤三ヶ日之間可愼、其儀也、著座之後亦有急速、宜用吉日、記曰、入境問風云々、非有公損、勿改舊跡、

一令尋老者申風俗事

外土之事、隨年遷變、代々遷遷、每任是改、仍可令高年者申舊事、還問故實、有舊政較、不可改舊風、

一神拜後、擇吉日時、初行政事、

右神寺、及池溝堰堤官舍修理等、

一尋常庶事例儀式事

長官著座之後、次官著訖、但出入之時、各有例道、鎰取御鎰匣案上、申云、御鎰進(止)申す、長官无答、次又鎰取申開御鎰封由、(又開云、舊封開、)長官喚史生、史生觸座騎唯、長官命云、令出印(與)、騎唯罷出、其後鎰取、以印櫃居印盤之外、(又上下有鑑、例鑑、)即申開印封之由、(又開云、印方封開入、)長官命云、開(令)、鎰取出印置印盤之上退去、其後膳部捺印、捺印之時、以判書帖置印盤之上、申捺印之由、(又開云、又書千枚印佐閇、)長官命云、捺印、(又開云、)鎰取騎唯、一々捺之、尋常之儀、大略如此、納印之時、其儀亦同、

一擇吉日始行交替政事、

神拜之後、擇吉日可始行之由、牒送前司、隨則送分配目代於新司許、行之、至于勘公文目代者、更不可論貴賤、用達其道之者耳、

一交替程限事

外官任訖、給假裝束、近國廿日、中國卅日、遠國卌日、除裝束行程之外、百廿日爲限、分爲六分、四分付

領之期、一分所執之程、一分爲轄寫署印之限、分付受領、過其定限、解却見任、幷奪俸料云々、

一擇吉日、可度雜公文由、牒送前司事、

所謂前々司任終年、四度公文土代、交替廻日記、前司任中四度公文土代、僧尼度緣、戒牒、國印、倉印、文印、驛鈴、鉤匙、鐵尺、田圖、戶籍、詔書、勅符、官符、省符、諸節圖、風俗記文、代々勘判、封符、代々不與狀、實錄帳案、交替日記、〔稅帳、大帳、租帳、出擧帳、調帳、官符帳、案、地子帳等、合文、諸郡收納帳案等也、〕自餘公帳、隨國例耳、次巡撿諸郡糒鹽穀穎及雜官舍五行器等、若有不動穀者、依丈尺高勘之、其動用穀者、簸棄土石、以實受領、次勘官舍、〔神社、學校、孔子廟堂、幷祭器、國學院、幷郡庫院、驛館、厨家、及諸郡院、別院、驛家、佛像、國分二寺、堂塔、經論等、〕

一可造國內官物相折帳事

國司到任之日、勘定公文官物之後、必先勘知官帳之物、與國內物之欠剩、若國內有剩、放還前司、

一可限內必定與不事

限內相定與不、可言上之由、前格後符、嚴誡分明云々、

一可旬納七日事

八月上中旬少徵、下旬九月上旬少增、中下旬十月上中下旬多徵、隨旬上下、起請符、若有其勤之郡者、抽加恩賞之勞、至于不勤者、可處譴責、但隨國古風土俗之例、可行無公私損之法、

一可以信馭民事

馭民之術、以信爲先、民若知之、則所仰之事、指掌易成、若以矯飾馭之、則人多疑心、

一爲政之處、必具官人事、

被置四等官、皆是爲政也、必可具其人、

一定政之後、不可輙改事、

爲政之道、以嚴爲本、仍議定之後、輙不可改定、若有改定、則百姓講○講恐謂誤輕之而已、

一不可輒補任郡司雜色人事
若有舊勞重可召仕、當加試補、但至于重犯、不在此限、
一可知郡司雜任等清濁勤惰事
勤仕公事之輩、以清廉者爲首、仍爲所清濁、必可知勤惰也、抽忠節之者、抽加恩賞、是勸傍輩之故也、
一不可輒昇進部內浪人并郡司雜任事、
百姓昇進、必聽實愚、內表廉潔、外致昇進、仍於公私務、自有紛議、但隨國體耳、
一國司入部、供給從省約事、
國司入部之間、非無事煩、仍可從省約、
一不可國司无殊病故、輒服灾五辛事、
國務之中、必有无止佛神事、仍不淨之間、皆致觸忌、无殊病故、輒不可服之、
一慎火事
火事是尤可慎、外土之人、不顧後災、偏結往時之怨、剩企放火之心、
一可仰諸郡令捕進無符宜輩并館人國人部內、好濫惡輩事、
新任之吏、臨境之後、奸徒黨類、多稱館人、突凌人民、掠奪人物、如然之輩、可捕進其身之由、早放符宜、
一不可令舊屬家子并無心郎等事、
自愚无止、剩成惡黨、加其誅、一切無憚、遂歸不行非法之由、還致萬姓謗議之詞、此事漸積、爲民嘲哢、凡奉公之實、是爲我身也、縱雖最愛之子息并郎等、若不憚制止、早以追卸、不請公事、得不治名之時、何子息郎等、相扶我者乎、一任空暮、各以分散、朝夕無從、更有何益乎、
一就內房事、不可一切與判事、
忽左道事之輩、動屬託內房、令出申文、就彼事與判之時、不治之名、普聞國內、仍不論理非、一切停止、

又不可用内房讒言、

一不可用讒言事

相從受領之讒、必有勝他之心、爲推傍人、動致讒言、若用之時、関假常表人短、其事漸積、遂成人害、不用之時、一切無爲、是殊勝千万也、

一不可分別舊人新人事

雖舊人有無益之者、雖新人有可用之者、若眞不用之舊人、則採用之、新人不致忠勤、只以當時採用之憂、令勵忠勤、況乎採用舊人、誰敢敵對乎、

一可以公文優長人爲目代事

諸國公文目代、必少優長、然則不論貴賤、唯以堪能人可爲目代、公文未練云々者、勘済公文之時、并前後司分付之間、極以不便也、事畢之後、掻首无益、

一不可用五位以上郞等事

五位有官郞等、是不治之根本也、雖張行惡事、依爲有位之者、强不能抑屈、内雖掻首、外雖强制、適雖令諫、知能無信受、縱雖近親、一切停止、此中有可顧之人者、別給出產物耳、

一可隨身能書者二三人事

能書之者、爲受領要須也、其用太多、不得忘却、

一可隨身堪能武者一兩人事

時勢之體、弓箭不發之者、皆號新武者、暫雖張武威、遂有何益乎、抑良吏之治、雖不可用武者、人心如虎狼、自非常之事、必以要須也、可備優國人、又无憚者也、

一可隨身驗者并智僧侶一兩人事

人之在世、不能無爲、爲國致祈禱、爲我作護持、

赴任儀

〔新儀式 第五 臨時下〕太宰帥并大貳奏赴任由事

太宰帥并大貳赴任參入、令奏事由、藏人以奏聞、率仰召殿上、賜酒肴、（或不召、只賜祿、或不賜酒肴、召御前、）飲畢之後、召御前、自右青瑣門參上、候孫廂南第一間、北面、御前賜仰及祿、（御衣一襲、或加賜御衣一領、召於御前、賜之、或殿上王卿候、召參上勸盃、其儀如常、但加賜御衣、又加賜御馬、）即於南殿壇下拜舞、自仙華門退出、

諸國受領官奏赴任由事（付藏人奏之、但於殿上、賜祿、）

諸國受領赴任之由、付藏人奏聞之、隨仰召御前、（藏人頭若藏人仰之、）召御前、自仙華門參入、候南殿壇下、傳宣仰旨、賜祿、（……）

〔西宮記 臨時八〕太宰帥大貳赴任事

藏人奏聞、依仰召御前、自青瑣門參上、給祿酒、給御衣一襲、諸卿參上、勸盃、諸卿座西面、（孫庇南三間、帥大貳座北面、）

（……）給祿後、下拜舞、出自仙華門、（藏人頭召之、）

延喜二年十八、大貳（……）於射殿賜酒盃、頭官橫朝臣依仰召、自青瑣門參上、勸盃之後、賜御衣并掛、拜舞退出、

〔北山抄 十 吏途指南〕國司下向早晚事

隱中事

付藏人令奏赴任國之由、即召御前、（給祿、……上之者、召之、）給祿之次、令仰隨勤可賞之由、或被仰任國業內并可令興復之狀、或人云、其仰詞云、增之等給へ、仍初任之國加階之者、下向第二國之時不仰云々、竊見天曆御記、不依加階之有無、皆被仰可勸賞由、若非唯加階、兼以給官、可謂勸賞歟、然則件詞非也、爾唯隨仰可傳仰也、

〔江家次第 二十〕帥若大貳赴任事（此事可在之、然依無公事也、）

定其日、觸頭藏人、藏人奉仰、令催近習公卿兩三人許、(或一人或四人、先例不定、但近例多三人、之內納言一人、必可召之、帥之上臈可宜、)當日殿上臺盤居酒肴、(不居小臺盤、無飯、是內藏寮所儲耳、)撤庇南第一二間、鋪緣端帖二枚、爲垣下公卿座、(御裝束、或藏申之後、依勅奉仕之云云、)同座西長押下中央鋪圓座一枚、爲帥若大貳座、(帥若鋪第二間、或當第二柱、大貳鋪第一間、非參議大貳者雖可候長押下、猶庇第一間南退鋪之、佐忠經平等時例也、但元名朝臣候南廂小板敷云云、)若臨暗者、御座左右幷公卿座上立燈臺、(長元七年記、立公卿座上下云云、)垣下公卿等參入候殿上、帥參入、(未昇殿之人、先是被聽之、)於無名門外付頭若五位藏人、令奏其日趣、任由被仰、暫可候殿上由、帥暫候殿上、(具著登自小板敷、待召間居小臺盤前、可尋之、)此間往年有盃酌、(近例不見、)主上出御、(御直衣、)召人、(藏人頭參入、先候小板敷、)奉仰出殿上、召公卿幷帥、(此事先例不定、或先召帥、勅語後復座、次召公卿、或先召公卿、次又召帥、或一度被仰可參入由、或日、帥者先召、被仰勅語、參入、大貳者後召、令納言傳仰勅語云云、此度說殊以有所據、先例又不定歟、康保三年非參議大貳佐忠先被召之故也、)公卿經賛子著座、帥自廣廂南方著座、(先居年中行事障子下、後遂若疑先有勅語之由歟、)殿上五位居衝重、(先帥前居座北、次公卿前居四、並升自庇南方役之、不經賛子歟、)次一獻、(藏人頭勸盃、六位藏人執瓶子、路如例、於帥南勸之、或五位執瓶子、經垣下公卿、)次二獻、(納言出自殿上執之、五位執瓶子、於座上從經賛子歟、復座、)次三獻、(次公卿執之、瓶子同上、)次主上目給、(或三獻以前被仰、或延久三年例也、)納言稱唯、(微音、)經賛子敷、自第四間入、候長押下、(逼南柱下、)勅語云云、(隨時不同、多是可能儀不廢、興復管內、勸可賞由歟、)或此次有恩賞、被叙一階云云、納言復座目帥、帥頻膝行進、卽傳示勅語、畢、次藏人頭執祿物給之、(御半臂下襲表御袴、內藏寮白大褂一重領也、或加給御袙、或加給綾羅御衣、)(隨人有殊常之恩歟、)其路入自鬼間障子、經母屋第二間庇第一間、出御屏風北妻、自大貳後方下孫庇、經頭、自殿上退出、次大貳下殿徒跣拜舞、(其路下自長押四第一間、經長橋中東行、經回東井石階、進出於河竹臺東北立、其臺五尺許舞踏、但於仙華門邊唯禮御中背於頭留、自餘御衣等、子旗取之、)此間引御馬、(近衛府生一人將曹引御馬入自瀧口戶、當矢竹臺西南暫留立、引返之、後給大貳傔從共人、永保二年例、御馬乘一人與府生、爲讀不可然歟、)大貳拜畢、自仙華門退出、(於仙華門外著履、自月華門退出、)

御物忌時例

天祿三年源國光朝臣於弓場殿被餞、以右近陣臺盤兩三脚立、召播部寮帖敷之、(東上對座、大貳南、頭以下北、)內藏辨備酒肴、自彼陣下主殿司幷小舍人役送、侍臣一兩巡以勸坏、兩三巡後、藏人遮度懸召參御前、取御衣一襲、(青色御衣、御半臂、下襲、表袴、)向弓場傳宣綸旨、次賜御衣、國光朝臣卽從座下於東庭拜舞退出、(弓場殿座前地、)但此

例無便宜云云、

(侍中群要九)受領罷申

家奏罷中不下、御覽之時、著給御直衣御冠云々、

受領罷申事

家參被陣腋、可被由於藏人、藏人出會、吏云、某日可罷向任國、宜奏事由者、卽以奏聞之、勅可之後、先召出納若小舍人、令取御鎰殿開殿出、對御任所、(又、衣)仰云、聞食了、給祿、(四位以上無止人者、藏人自取被之、)退出、

祿大褂或衾子等、若內裏有穢之時、不給祿、直退出、(不給祿、藏人奉)上古或召御前、藏人奉仰、先下東庭御簾、(藏人一人、上戶下、)了退出、告有召之由、吏經殿上前、(自下侍西戶前經上、可在庭中、)入自仙花門、經長橋南妻、先聞藏人取祿置小板敷邊、主上召藏人、藏人參進、(若藏人之時、先取祿、)跪、囘奏仰還、先取祿、帶吏前傳仰給賞、給祿還上、唯吏拜舞、(二步)再拜了、擧頭、拜舞、大小拜、擧頭退出、(自同門退去、月花門出、)

延喜十四年、鎭守府將軍利平令奏罷府之由、召階下給祿云々、先例給褂衣、諸國牧宰有給衾、而將軍給褂衣、依有物傾、藏人左近少將貴輔奏此由、依仰事、今亦給支子染褂一領、一方之儀其寄事實歟云々、貫材記寬和元年御記云、上總介國幹申赴任之由、令仰云、常陸部內、爲致豐稔、隨北勤狀將賞遣御給祿如例、同年阿波守爲生申赴任之由、令仰云、彼國久衰弊、若致興復、爲濟貢調事、又造宮事無其怠、隨狀可賞遣、給祿如例、

帥大貳赴任

家太宰帥大貳申赴任之由、若召御前者、東孫庇南第一間敷圓座、自青瑣門參上、或有給酒肴、事了給祿、下南廊壁下拜舞、自仙花門退去、陸奧守如此歟、然召者給祿如例、凡於御前堂上給祿人、大臣親王下自御橋拜舞、自餘下南廊壁下拜舞云々、但上卿已上出自長橋東、頓進庭前拜舞云々、

式凡太宰帥并大貳申赴任之由、藏人頭奏聞、依仰召殿上、賜酒肴、數巡之後召御前、自右青瑣門參上、候孫廂南第一間、(北面)即賜仰及祿、(御衣一襲、或賜白褂一領、)如若於御前賜酒肴、殿上王卿依召參上、勸盃、其儀御座如常、諸卿座在孫廂第一二間、帥若大貳座當諸卿座西方、北面設之、鋪所菅圓座、召酒殿御酒、內藏寮菓子、贄殿干物賜之、即於南廊壁下拜舞、自仙花門退出、

凡諸國受領官申赴任之由、即以奏聞、隨仰垂御簾、(藏人不必垂之、)任件官、召御前、自仙花門參入、候南廊壁下、傳宣仰旨、兼賜祿、(不召御前、於右近陣頭賜之、四位給紅染褂一領、五位支子染衾一條、六位襖子一領、召內侍所、但陸奧守賜御衣、或召殿上、賜御衣、自右青瑣門參上、候孫廂南第一間、賜御衣、即於南廊壁下拜舞退出、又鎮守府將軍出羽介等兼受領官、同召御前賜祿、)拜舞退出、

〔侍中群要十〕式令申慶賀并罷申事

罷申受領參藏人陣、以藏人令奏、出逢之儀如慶賀奏詞、某國守某朝臣、其日任國罷下之由令奏、召御前之時、出御之後依仰召之、(經殿上前、入自仙花門、候弓場內、)召人藏人參入、奉仰出殿上、取祿更出給之、其次有勅語、仰之、(藏人初拜之間、不下御簾云々、拜可隨仰之、)殿上受領召御前、可候年中行事御障子邊歟、祿於其所可給、(但從青瑣門可昇之、)近代只用殿上戶歟、不召御前之時、於殿上口給祿、仰勅語、殿上受領奏事之由後、蹔候殿上、至于祿、猶殿上口可給歟、又於殿上雖給有何等事乎、重服人不給之、內裏觸穢之時、受領於陣外奏云云、(不給祿、或有召御前之者云々、)帥大貳有儀、其儀見式、

〔禁秘御抄下〕帥大貳諸國受領赴國

帥大貳赴任、上古必參內、召弓場、賜酒肴歟、次召御前給祿、(藏人傳之、)件祿、白褂一領、御衣一襲也、(延喜興範友于如此、)或給御衣許、(天曆元、名如此、)彼時召南廊小板敷給祿、拜舞退出、又殊被加半臂下襲表袴、又袙給、(實成、經輔、重尹、例也、)寬治大貳長房赴任之時參內、(十一日參、廿七日可赴任、)以頭弁季仲申、來廿七日可赴任奏聞、次主上出御晝御座、(直御衣)暫移晝御座於南廂、(返二檀綱)孫廂敷疊二枚爲公卿座、其北敷圓座一枚爲大貳座、次召公卿、公卿著座、(雅實已下四五人、)次召大貳、大貳著座、殿上五位居衝重、(無飯、)先大貳前、次公卿前、次頭勸盃、(基子五位)二獻大納

胥勤盃大貳、大貳經御前、二獻如初、次主上目大納言、大納言進御前、奉仰復座、目大貳、大貳進、大納言前傳仰、是無定例、事府國事隨時也、次頭取御裝束給、長房下殿、半臂上袴加大掛一、大貳下長橋、拜舞踏、次給御馬、（小舍人引之、）頭經信取一領、他藏人遠時基綱取之、經信先於弓場以頭中事由、則著殿上、公卿以前召經信、是實上臈故也、拜舞入御、公卿平伏、匡房依爲重服、於殿上以藏人奏可赴任由、次於弓場給內藏寮大掛一領、藏人給之、次給御馬一疋、凡大貳赴任日、內藏寮殿上居肴物、依餞儀也、如宇佐使間之、受領赴任之時、其身參被陣、以藏人傳奏、召南殿給祿、（藏人給之）拜舞退下、若國司有可被仰事、其時近召事、仰隨喚、殿上受領召時不賜御衣、地下受領賜御衣、康和丹波守高輔赴任之時、被召御前、不賜御衣、止昇殿之後不昇殿故也、江御記、內裏燒亡時、國司於陣外中事由、仰聞食之由、不給祿、又御物忌時給祿、不召御前、（國司、伊與守、依爲仍赴任、）又有觸合事時、以藏人中事由、於陣給祿、不召御前、是流例也、康和依除目議不召御前、如此殊給御衣一襲、只內藏寮也、又依夜陰不召御前例也、（嘉保例）

〔西宮記臨時人〕受領赴任事

藏人奏參入由、出御簾、（若不出者、藏人召、）召南殿壁下、賜勅語、（藏人傳之）賜祿、或於陣給、四位染衣、五位六位襖子、諸軍監介同之、

〔神皇正統記後醍醐〕おなじき年（元弘三年）の冬十月に、先あづまの奥をしづめらるべしとて、參議左近中將顯家卿を、陸奥の守になしてつかはさる、代々和漢の稽古をわざとして朝家につかへ、政務にまじはる道をのみこそまなび侍れ、吏途の方にもならはず、武勇の藝にもたづさはらぬ事なれば、たび〳〵いなみ申しかど、公家すでに一統しぬ、文武の道ふたつなるべからず、むかしは皇子皇孫もしは執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大將にもさゝれしか、今より武をかねて藩屏たるべしとおほせたまひて、御みづから旗の銘をかゝしめたまひ、さま〳〵の兵器をさへ下したまはる、任國におもむくことも、たえてひさしく成にしかば、古き例をたづねて罷申

辭見

すの儀あり、御前にめし勅語有て、御衣御馬などをたまはりき、なほおくのかためにもと申うけて、御子を一所ともなひたてまつる、かけまくもかしこき、今上皇帝の御事なれば、こまかにはしるさず、彼國につきにければ、まことにおくの方さま兩國をかけて、皆なびきしたがひにけり、

〔日本紀略桓武〕延暦廿二年三月丁巳、是日造志波城使從三位行近衞中將坂上田村麻呂辭見、賜彩帛五十匹、綿三百屯、

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月戊辰、東山道觀察使正四位下兼行右衞士督陸奧出羽按察使藤原朝臣緒嗣、爲入邊任、辭見內裏、召昇殿上、令與侍從五位上永原朝臣子伊太比賜衣一襲被等、

〔續日本後紀仁明三〕承和元年二月庚子、伊勢守從五位上丹墀眞人淸貞之官、喚於殿上、賜襖子、令參議正四位下行彈正大弼三原朝臣春上傳勅語云々、拜舞退出、

〔三代實錄淸和十二〕貞觀十四年七月十三日辛巳、正五位下行陸奧守安倍朝臣貞行、詣闕拜辭、引升殿上、賜酒、酣醉之後、賜御衣物而罷、

〔三代實錄淸和二十五〕貞觀十六年二月十八日戊申、參議太宰權帥在原朝臣行平、詣闕拜辭、詔引殿上、賜御衣物、

〔三代實錄陽成三十七〕元慶四年六月七日己丑、從四位上行大貳安倍朝臣貞行、詣闕辭見、賜御衣一襲、拜舞而出、

〔西宮記臨時八〕太宰帥大貳赴任事

延喜二年十八、大貳與範朝臣申罷由、於射殿賜酒盃、頭菅根朝臣依仰召、自靑璅門參上、勅語之後、賜御衣幷掛、拜舞退出、(中略)

康保三年十月廿日、大貳佐忠申赴任之由、召前仰云々、畢仰即座、(東又庭南同菅圓座)一又令召公卿、(座同前、南一二同數疊、西面北上、)侍臣給肴、公卿侍臣遞行酒、五六巡之後、令中將元輔給御衣云々、

藏記云

天慶五年閏三月十九日、若狹守信明、令奏赴任之由、但近者內裏有觸穢事、仍於中重奏之、不給祿云云、

同日、參議太宰大貳清平朝臣、令奏赴任之由、右大臣藤原朝臣、依召參上候御前、次清平朝臣依召開候御前、藤原朝臣奉仰、傳仰清平朝臣、次賜酒肴云々、藏人頭相職朝臣奉仰、送身屋南一間障子、取御衣賜之、清平下殿出、御前拜舞出、

延喜五年八月一日、帥友于朝臣、令奏赴府狀、仰聽、幷殿又召殿上、左大臣奉勅宣云々、給酒祿云々、御記

東一閣、殿一閣、

天曆八年九月九日、大貳元名朝臣令申赴任之由、召御前、參上南廊小板敷、令大納言藤原朝臣傳仰賞、次給御襖一襲、[illegible]、元名拜舞退、

天德四年九月廿八日、大貳好古朝臣、申赴任之由、即召東庭侍所、令延光朝臣仰之云々、依穢所不召御前給祿云々、

(親信卿記)天延二年二月廿五日、若狹守弘嗣、紀伊守景齊、周防守元輔、各參殿障、令奏赴任由、給祿如常、依御物忌不召御前、

(日本紀略一十後篇)長德元年九月廿七日庚午、今日陸奧守實方朝臣奏赴任之由、於殿上給酒肴、於晝御座方給襖、叙正四位下、爲重賞者給餞送肴、

(權記)長德元年九月廿七日、戊刻陸奧守實方朝臣令奏赴任之由、先於殿上勸酒一兩巡、內藏寮儲肴物、依重實人、[illegible]其後出御晝御座、藏人信經奉仰召實方朝臣、朝臣應召候孫廂南第一間、次召藏人頭齊信朝臣、朝臣奉仰取祿、出自母屋南第一間障子戶賜之、女裝束一襲、件物下給[illegible]也、別給紅染御衣、用女子色、[illegible]有云々、別有仰詞、幷叙正四位下、給祿幷奉仰詞退出、依重喪不拜舞、

賜餞

〔中右記〕寛治五年閏七月十六日、常陸守敍一階、依赴任也、

〔日本紀略淳和〕天長五年二月甲寅、賜鎭東按察使伴朝臣國道餞、有御製、賜衣被及雜珍玩物、

〔日本紀略一十條〕長德二年八月二日庚子、今日於御前、餞太宰大貳在國、卽敍正三位、

〔古事談王道后宮一〕實政卿爲春宮學士之時、拜甲斐國守、赴任之剋、自宮賜餞別之詩歌、

州民縱爲甘棠詠、莫忘多年風月遊、

菅原伯受領下向之時、國民雲集、擧愁、伯下馬分憂、其所有梨木、曰之甘棠、仍受領曰分憂、毛詩曰、甘棠莫伐、邵伯所憩、○憩一本作宿、云々、

御歌

新古今別オモヒイラハ[illegible]

ワスレズバオナジ空トハ月ヲミヨ程ハ雲井ニメグリアフマデ○又見十訓抄

赴任發途

〔九暦〕天暦三年三月二日、伊豫介公輔朝臣來、示向任國之由、相逢次被物赤大褂𧜟、給物事被給之間、必不可被物、然而此大夫自本相語者也、仍所爲歟、

〔權記〕長保四年三月十日丙午、備前守來、示罷任國由、○中略今晩信乃守濟政朝臣來、示明日赴任之由、○中略但馬守道順朝臣來、示明日下向、

〔古事談二臣節〕播磨守經平下向任國之時、伊通卿曾祖道信卿祖父反閇晝逆鞍而厩司馬允憲行不令知人、爲誡披露、以件馬舍人等忽遣擬鞍國了、仍無知此事之人、彼之在國間更無其徵、經平任太宰大貳之後、憲行兄憲重語此事云々、

〔宇治拾遺物語十一〕これもいまはむかし、白川法皇鳥羽殿におはしましけるとき、北面のものどもに、受領の國へくだるまねせさせて御覽あるべしとて、玄蕃頭久孝といふものをなして、衣冠にきぬいだして、その外の五位どもをば、前駈せさせ衞府どもをばやなぐひをひにして、御覽あるべしとて、その〳〵錦唐綾をきておとらじとしけるに、左衞門尉源行遠心ことに出立て、人に

かねてみえなばめなれぬべしとて、御前ちかゝりける人の家に入給て、従者をよびてやうれ御前の辺にて見てことみせよ〇ことみせよ、原作ことみて、今從一本改、まいらせてけり、むごに見えざりければ、いかにかうはをそきにかと、たつの時とこそもよほしはありしか、さがるといふ定午未の時には、わたらんずらんものをと思て待ゐたるに、門の方に騒して、あはれゆゝしかりつるものかな〳〵といへ共たゞまいる物をいふらんと思ふほどに、玄蕃殿の國司姿こそおかしかりつれといふ、藤左衛門殿は錦をき給ひつ、兵衛殿はぬひ物をして、金の文をつけてなどかたる、あやしうおぼえてやうれとよべば、此みてことてやりつる男見えみていできて、大かたかばかりの見物候はず、かも候も物にても候はず、院の御桟敷のかたへわたしあひ給たりつるさまは、目もをよびさふらはずといふ、さていかにといへば、はやうは候ぬといふ、こはいかに、さてはつげぬぞといへば、こはいかなることにかさぶらふらん、まいりて見てことおほせさぶらへば、目もたゝかずよくみてさぶらふぞかしといふ、大かたとかくいふばかりなし、さるほどに行遠は進奉不參、返々奇怪なり、たしかにめしこめよとおほせくだされて、廿日あまり候ひけるほどに、このしだいをきこしめして、わらはせおはしましてぞ、めしこめはゆりてけるとか、

〔爲房卿記〕寛治五年八月八日甲子、讃州被申慶賀、淡路先使兼色是貞、先日差遣、余拜任兩州之時、兼度遣件男、

〔兵範記〕久壽三年（〇保元元年）三月十三日甲寅、今日發遣伊豫先使也、此間國司著衣冠、被出客亭、越後守下官（信範）〇中略、治部少輔等在座、（各束帶）陰陽頭憲榮朝臣同座、先戌日時勘文、（伊豫先使發遣日時、今月十三日甲寅、時未、不加申字、被賀茂、兼□續紙、）直獻國司、國司留座前、次召民部大夫盛政朝臣於庭、令齎廳宣、（注之、國司宣三箇條、各有之、右狀、注給事也、）次入覽國司、國司見了加判、（又例國云、宮内大倉□□□□□、）返給、次目代入文書結中、（注之、統三字也、）此間以右衛門尉永重召先使、先是申召人京重色等、具隨兵等、在門外、次先使守時（著白襖、正午、文冑、持□□、又帶弓箭、）入中門立前庭、

不居地上故實云々、次目代下對庭中、賜文宮、書國井在廳可進請文、日次等、注別紙副給也、次先使以召人雜色件宮傳給宮持、着白狩衣小袴、頭懸文袋、次先使召人等爲先、宮持出中門、次更渡南庭、先傳雜色、皆召人等云々、廿人許各騎馬、自東中門出西中門也、先例或步行也、今新儀也、次先使守時宮持在前、次隨兵廿人出西門三辻、召人等先行、制止僧尼雜人等云々、次國司被起座、今日於淀乘船、明日於川尻乘大船可進發云々、

〔平家物語一〕てんかののりあひ

入道〇平清盛小松殿〇重盛には、かう共の給ひもあはせずして、かたゐなかの侍の、きはめてこはらかなるが、入道の仰より外、世に又おそろしき事なしと思ふ者共なんばせのをを始として、つがふ六十よ人召よせて、きたる廿一日、殿下〇藤原基房御出あるべかんなり、いづくにても待うけ奉り、せんくみずいじん共が、もとゞり切て、すけもりがはぢすゝげとこその給ひけれ、兵共畏承てまかりいづ、殿下〇中略中のみかどを西へ御出なるに、いのくまほり川のへんにて、六はらの兵共、ひた甲三百よき待うけ奉り、殿下を中に取こめ參らせて、せんごより、一度にときをどつとぞつくりける、〇中略され共御車そひには、いなばのさいつかひ、鳥羽の國久丸といふおのこ、下らうなれ共、さかさか敷ものにて、御車をまつらひ乘奉て、中のみかどの御所へくわん御なし奉る、

新司宣

〔朝野群載二十大宰府〕帥大貳最初府宣

大府宣　大宰府在廳官人等

仰下　三箇條事

一神寶勘文事

右任代々例、可勘進之、

一可勤行神事事

右任恒例、殊可致謹愼之勤矣、

一可修造官舍事
右部府之例，或先官舍，或官舍之實，既在修造，宜下知諸國司等，早任恆例，令致修造之勤矣，
以前條事，所宜如件，在廳官人等，宜承知，府以行之，以宣，
保安四年十二月廿七日
從三位行修理大夫兼都督藤原朝臣
〔朝野群載 二十二 諸國雜事上〕初任國司廳宣
廳宣　加賀國在廳官人雜任等
仰下三箇條事
一可早速上神寶勘文事
右件神寶，或於京儲之，或於國調之者，且進上勘文，且可致其勤，又恆例神事，慥守式日，殊可勤行矣，
一可催行農業事
右國之興復，在勸農業，農業之要，務在修池溝，宜下知諸郡，早令催勤矣，
一下向事
右大略某月頃也，於一定者，追可仰下之，
以前條事，所宜如件，宜承知，依件行之，以宣，
延喜十年月日
初度 廳宣　但馬國在廳官人等
仰下雜事
一可勤仕恆例神事□
右國中之政，神事為先，事故如在之儀，莫須闕，部内之豐稔，一境殷富，乃貢島備，百姓安堵，費用已足者，

准擬牒

一可修固池溝堰堤事

右農務之要、尤在池溝、宜下知諸郡、早致修固也、

一可催勸農業事

右國以民爲本、民以農爲先、然則乃貢之備、尤在此事、早以勤行者、

以前條事所宜如件、宜知此狀依件行之、故宜、

年　月　日

守

〔兵範記〕久壽三年〇保元元年三月十三日甲寅、今日被發遣伊豫先使也、〇中略

裏書　新司宣　伊豫國在廳官人等

仰下　三箇條

一可勤行恒例神事事

右治國之務、爲先神事、仍守恒例之式日、可致如在之禮莫矣、

一可進上神寶勸文事

右首途在近、期日以前可進上件勸文之、

一可修築池溝堰堤事

右吏務中爲宗農桑、田畝之要莫過池溝、仍下知部內、早可修築矣、

以前三ヶ條所宜如件、宜承知、一一勤行、以宜、

久壽三年三月十三日

春宮亮兼大介藤原朝臣

〔朝野群載二十大宰府〕准擬牒二枚

某國司解　請大郡司職長等
　可准擬事
右以某月日、爲向任國、遂發、仍請彼郡司職長宣承知、依例准擬、故牒、
　　年月日牒
長官　　　　　　　　　　　　次官
牒、向太宰府請大國々郡司職長等可准擬事、
牒、去二月十六日、任大貳既畢、以月日出京、可著河陽館、仍可准擬狀如件、郡大宣承知、依例准擬、供給
雜事、莫從違約、故牒、
　　寛弘七年七月三日　　　　　從二位行太宰大貳平朝臣親信
(朝野群載二十二諸國雜事)送前司館書狀
某謹言、除目案內、定風聞候歟、御上道何程乎、可然者、於洛下、可奉侍候、謹近時執啓、謹言、
　月日　　　　　　　　　　　　加賀守某
謹々上　前司御館
　獻新司許書
某頓首謹言、被聞除書、被拜任當國、本意已足、喜悅亦深、幸甚々々、抑赴任之期何程許乎、偏承案內、可
參仕境間、但御頓料解文注別紙、謹以進上、伏賜恩納、所望也、某頓首謹言、
謹々上　新司殿 政所
　頓料解文
進上
　新司頓料物事

合若干

右依例進上如件

延喜十年　月　日　　前司藤原朝臣

新任申請

〔朝野群載 二十 太宰府〕帥大貳初任時申請雜事

權帥源基綱卿、申廿一箇條奏狀、永久四年月日、

今按、前代之都督、或申請十九箇條、而前大貳顯季卿之時、始申請廿一箇條也、

赴任驛傳食馬

〔延喜式 十一 太政官〕凡新任國司赴任者、伊賀、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等六國、並不給食馬、志摩、尾張、參河、美濃、若狹、越前、丹後、但馬、美作、淡路等十國、准位給食幷馬、山陽道備前以西及南海三道等國並取海路、給食如法、自餘諸國及太宰帥大貳皆給傳符、(謂還歸赴任准此、唯不給傳符、)

〔延喜式 二十三 民部〕凡山陽南海西海道等府國、新任官人赴任者、皆取海路、乃令緣海國依例給食、(但西海道國司到府郡乘傳馬、)其大貳已上乃取陸路、

〔令集解 十四 賦役〕和銅五年五月十六日格云、國司不乘驛傳而向下者、長官馬七匹、判官以下五匹、史生二匹、其遷代者、長官馬廿匹、夫卅人、以下節級給之、其郡司向京、關公事者並給馬夫、其取海路者、水手准陸夫歟、

〔續日本紀 九 聖武〕神龜三年八月乙亥、太政官處分、新任國司向任之日、伊賀、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等六國不給食馬、志摩、尾張、若狹、美濃、參河、越前、丹後、但馬、美作、備前、備中、淡路等十二國並給食、自外諸國皆給傳符、但太宰府幷部下諸國五位以上者、宜給傳符、自外隨便艤船、緣路諸國依例供給、史生亦准此焉、

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

應新任國司從海路赴任事

新任外官粮食職田

右得山陽道觀察使解偁、驛戶百姓遞送使命、山谷峻深、人馬疲弊、望請當道諸國新任司等、准西海道、一從海路令赴任所者、右大臣宣、奉勅依請、

大同元年六月十一日

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國司申改路次

請被給官符、因准前例被給官符於東海道准正道赴任國狀

從五位上行出羽守橘朝臣時舒解　申請官裁事

右謹檢案內、相自路次驛下向頃年之間、水陸自雙達行之理、道路多嶮、望請官裁、因准前例、給食馬官符於海道、將以發向、爰仍注事狀謹解、

天德二年四月五日　從五位上行出羽守橘朝臣

〔令義解田令〕凡外官新至任者、比及秋收、依式給粮、〈謂秋時至任、年內未收穫、故比及秋收、量給公粮、假如中國守、職田二町、准稻當二千束、新任守、六月至任者、准計內得二月粮、給稻五百束之類也、〉

〔令義解田令〕凡在外諸司職分田、交代以前種者、入前人、〈謂入納官以上、職分田、亦准此例、〉若前人自耕未種、後人酬其功直、闕官田用公力營種、所有當年苗子、新人至日、依數給付、〈謂公力者、雜徭也、當年者、自正月至十二月也、假令新人後年正月到任者、當年苗子、不可給也、〉

〔延喜式二十六主稅〕凡志摩國新任國司給食十日、但國不在此限、

〔令集解田令十二〕養老八年正月廿二日格云、凡新任外官五月一日以後至任者、職分田入前人、其新人給粮、限來年八月卅日、若四月卅日已前者、田入後人、功酬前人、即粮料限當年八月卅日、〈又見二交替式一、養老八年正月廿三日格云、作延喜式、〉

〔日本後紀十五〕延暦十六年三月甲午、勅、畿內國司新至任者、皆限八月卅日、依式給粮、今停職田、割租爲料、收租之後、須得其分、宜改舊例、限十一月卅日、

新任國司公廨

〔令集解十二田〕大同三年六月六日格云、停止給新任國司等公粮事、右西海道觀察使太宰帥從三位藤原朝臣繩主奏偁、准延暦廿五年三月廿四日令旨、新任國司初到任所、未給公廨、資用乏少、宜各准公廨四分之一借貸正稅者、然則新任之用、以此足矣、而依舊給粮、於事重疊、望請當道公粮〇公粮、日本後紀作交替料、永從停止者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸道、亦宜准此、

〔令集解十二田〕貞觀三年六月廿日格云、充新任國司公廨、宜停遙行之法、依公廨賜之、自今以後、永爲恒例、

〔類聚三代格八〕太政官符

應還新任國司借貸正稅事

右被右大臣宣偁、奉令旨、新任之司初到任所、未給公廨、資用乏少、宜各准公廨四分之一借貸正稅者、諸國承知、依宣行之、但處分公廨之日、不論存亡、先填所貸、縱未及得分、有遷替者、填納後任、若過限數、依法科處、

延暦廿五年三月廿四日〇又見日本後紀

〔交替式〕太政官符國司交替付領過限、准狀科罪事、〇中略

一太政官去天平寶字三年三月十五日符偁、凡公廨物者、先塡欠負未納、次割國內之儲、後以見殘作差處分者、然則未知欠負、理難分得、又交替之程、明立法文、而今諸國司等、一任之內、猶云未捨官物、不進稅帳、且用公廨、不塡欠負、寄事前人、規避後慮、自今以後、如是之類、不給公廨、沒爲官物、

一延暦元年十二月四日勅書偁、公廨之設、先補欠負、次割國儲、然後作差處分、如聞諸國曾不遵行、所有公廨、且以費用、至進稅帳、處注未領、因茲前人滯於解由、後人煩於受納、於事商量、甚乖道理、又其四位已上者、冠蓋既貴、榮祿亦厚、授以衆國、佇聞善政、今乃苟貪公廨、徵求以甚、至于遷替、多無解由、以此不責、豈曰皇憲、自今以後、國司解替、滿百廿日、未得解由者、宜奪位祿食封、以懲將來、

以前勘解由使奏偁、謹撿明法曹司案文幷前後格勅、或限科其罪、不論公私、或偏奪封祿、無論其罪、雖設條例、猶歸未明、違法之徒、無知罪科、斷罪之官、科猶有疑、故今明陳格令、顯示科條、謹案考課令云、官人有犯私罪下中、公罪下下、並解見任、即依法令除免官當者、不在考校之限、並奪當年祿、注云、本犯不至除解、而特除解者、不徵者准此、而論遷任國司及新任之人、分付受領、過百廿日者、解却見任、幷奪俸料、其解任之人、及代之國司過限者、科公事稽留之罪、亦奪俸料、就中欠負官物、留連不付、及知情許容、限內無償者、依法科罪、即徵其贓、但五位以上、未得解由者、一依勅文、重奪位祿食封、其新人拘留、致奪封祿者、以故入人罪論者、權中納言從三位壹志濃王宣偁、奉勅依奏、

延曆十七年四月七日

新任國司儲設

〔延喜式二十三民部〕凡新任國司到任者、皆給儲設、以正稅備儲、但太宰府帥已下傔仗已上、以調庸中男作物充、並一給之後、不可更賜、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年五月丙寅、詔、諸國司等不住舊館、更作新舍、又到任一度須給儲設、而雖經年序、更亦（不〇亦恐脫）給之、

限滿不赴淹留不還

〔律疏職制〕凡之官限滿不赴者、一日笞十、十日加一等、罪止徒一年、即代到不還、減二等、（謂依令之官、各有裝束程限、限滿不赴者、一日笞十、十日加一等、罪止徒一年、又官人已到、淹留不還者、減二等、不赴任之謂二事、又有違限、依令解任、仍坐其罪、）

〔三代實錄三十九陽成〕仁和二年二月三日癸丑、左右大臣（〇左大臣源融、右大臣藤原基經）奉勅、於左仗下、召問拜除之後未赴任吏、攝津守從五位上多治眞人藤善、伊勢守從五位上藤原朝臣總蔭、甲斐守從五位下藤原朝臣當興、安房守正六位上當麻眞人安氏、上總介從五位上小野朝臣國興、隱岐守正六位上伴宿禰有世、紀伊守從五位下伴宿禰春雄、肥後守正五位下藤原朝臣時長、豐後守從五位下橘朝臣長茂、對馬守正六位上紀朝臣縣業等、不進發之狀、或誤發期、或謝依病淹留之由、　五月十八日丙申、是日勅、肥後守正五位下藤原朝臣時長、攝津守從五位上多治眞人藤善、豐後守從五位下橘朝臣長茂、甲斐守從

新司空歸

五位下藤原朝臣當興等四人、並降位一階、下知左右京職、追其告身、時長等拜官、經年不赴任國、仍有此勅斷也、

〔貞信公記〕承平二年正月廿七日除目、筑後守雅文過期不向任國事、令諸卿定申、左右衛門督〔〇左衞門督藤原恒佐、右衞門督藤原當幹〕左大弁〔〇藤原扶幹〕等申云、雅文所申雖不詳、代々宇佐使有遷官處、此度殊免給、宜就私事、不可准申此例者免給、

〔中右記〕天永二年六月五日、出羽守光國不赴本國、又不歸京都、在途中美濃國送年月、早其沙汰可有事也、　十五日、出羽守光國、不赴任國事奏了、依此沙汰三箇度往返、　七月廿九日庚寅、頭弁以詞仰下云、出羽守光國、棄任國在途中美乃國、已送二ヶ年、何樣可被行哉、人々被申云、或可被成改、左大弁〔〇中略〕以上五六人許、猶先可被尋問由定申、予〔〇藤原宗忠〕同之、早被問子細後、隨申狀可被量行由申了、〔〇中略〕　頭弁來仰云、出羽守光國、先可被問之由、先度定申了、而何樣可被問哉、重可定申者、人々被申云、早遣使召上京都、可被問子細者、付頭弁被奏僉議旨、　十月十日、又出羽守光國、去年上道事、被尋問陳狀事、人々被定申云、陳申之旨非無理致、然者差副官使、重可被追下歟、但內大臣〔〇藤原實忠〕民部卿〔〇源俊明〕可被改替之由被定申、左大弁皆書定文、　十一月十九日、頭弁以詞仰下云、出羽守光國、任國亂之由遁言也、罪已會赦、於今者可下遣歟如何、可定申者、人々多可下遣由被定申、但予申云、本國亂逆、并不言上罪、共會赦、任限不滿、人々如被定申、早可下遣也、猶差副官使、可被下歟、左兵衛督〔〇源能俊〕內大臣定申云、件事勘定者、以詞欲被奏之處、頭弁參院了、仍令新宰相書給官人、被退出了、〔以詞被仰下事、又以詞被申由、多不書定文、然而依課更相讓、令宰相書、相具被出了、但有先例歟、〕頃而頭弁歸來、下罪名勘文等於民部卿云、任勘文可行者、

〔爲房卿記〕寬治五年九月四日己丑、賀州下向廷引、仍定下收納使、〔書生良正爲使〕內撿之上、加一把半利、

〔扶桑略記〕〔二十九後冷泉〕康平五年壬寅春月、高階經重爲陸奧守、依源賴義任終也、經重進發下向、人民皆隨前司指揮、經重歸洛、

同官同年秩滿遷任

〔延喜式太政官十一〕凡諸國主典已上、除二一員之職一同年秩滿相代者、據到任先後次第相代之、若前司二員、同日到國下馬之人、先須相替、餘國司、太宰、鎭守等府、亦准此、

秩滿

〔延喜式太政官十一〕凡國司秩滿者、式部錄歷名、正月一日進太政官、外記覆勘、乾進大臣奏聞拜除、事見儀式、自餘解闕、臨時奏補、

〔伊呂波字類抄知事〕秩滿 外國官人朝年闕、又云官、式云、國○司○秩○滿○者、式部錄歷名、正月一日進太政官、外記覆勘、了進大臣、奏聞拜除云々、

交替期限

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年九月丁丑、先是國司交替、未有程期、仍令明法博士論定、明法曹司言、遷任國司、向京期限、依倉庫令、倉藏及文案孔目專當官人交代之日、並相分付、然後放還、但今令條雖立分付之文、律內無科淹滯之罪、因茲新任國司、不肯受領、舊官人提延歲月、遂使數年爲煩、還到居官、於事商量、甚乖道理、宜案違敕令云、凡職事官、患假百廿日、不堪者、解官者、准是而論、官符到後、百廿日內、付了歸京、若過限者、申官請裁、違此條僞、約然合解、就中欠負官倉、留連不付者、論實是罪人也、知情許容限內無領者、准法是同罪也、何者、職制律云、凡有所請求、主司許者、與同罪、據此而言、舊人提求延日者、所謂請求也、新司受囑、所謂主司也、新舊兩人、並皆有罪、如此之輩、同合解官、但實無欠負拘令解官者、原情可責、罪在新人、准律以故入人罪論者、自茲以後、爲例行之、

〔交替式〕太政官符國司交替付領過限准狀科罪事、

一明法曹司去天平寶字二年九月八日解偁、國司交替官符到後、百廿日內付了歸京、若過限者、申官請裁、違此條僞、約然合解、就中欠負官倉、留連不付者、論實是罪人也、知情許容限內無領者、准法是同罪也、新舊兩人並皆有罪、若此之輩、同合解官、但實無欠負拘令解官者、原情可責、罪在新人、准律以故入人罪論、中略

延曆十七年四月七日

交替延期

〔延喜式太政官十一〕凡諸司諸國交替延期狀、前後人共署、進其解文、申訖即下式部、武官下兵部、唯聽一度、不得

再申、

凡遷替之輩、緣申交替延期、引及給位祿限、不在給例、

〔延喜式十八式部〕凡諸司諸國、交替分付、若應過限者、具狀申官、官即判下省

〔延喜交替式〕凡被官寮司交替延期狀、不改本解、據省押署、陸奧押署鎮守府延期狀、太宰府押署管內諸國延期狀准此、

〔類聚三代格五〕太政官符

諸國所申交替之政延期解文事

右承前之例、前件解文、收於辨官、即仰於省、今被大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、宜自今以後、辨官判下於省、

弘仁九年六月十三日

〔類聚三代格五〕太政官符

應聽交替一度延期事

右國司交替、不論大小、皆定百廿日、令終其付領、是乃朝章畫一、牧宰奉法之意也、而前後司稱有病、故申延期狀、事不獲已、時聽所請、國宰偏馮申請之被許、遂忘交替之有限、途使五六箇度頻經言上、論之公途、理不可然者、左大臣宣、奉勅、若有申請、須聽一度、在京諸司亦宜准此、

延喜二年三月十三日

〔類聚符宣抄八〕播磨國司解　申請官裁事

請被延交替程限外陸拾箇日狀

右新司守從四位下藤原朝臣共政、〇政一本作致今年二月廿日著任、交替程限、可滿今月廿二日、須限內勘定言上、而前司守從四位上大藏卿源朝臣泰清、頻煩身病、動不從事、途旬日、不能弁究、因茲程限之內、

交替匝署、望請官裁、准傍例、被延程限外限拾箇日、許署交替政、仍録事狀、謹請官裁、謹解、

天元四年六月二日

〔交替式〕太政官符

一應科徵新任國司撿物違法事

右交替付領、過限淹留限、隨事科罪、先下符訖、今遷替國司、不免欠負、新人依例言上不與解由之狀、或乃屢改先解、追加欠數、頓煩下符、更成淹滯、遂令遷代之輩經月負累、欠負之物淹年不塡、因茲前後之徒爭訴辭上、檢勘之司決斷無期、先是初經許容、終稱遺漏、或廻後意、追煩前人、並皆事違憲章、理合科責、今須交替之日、欠負之物、令細撿勘、一度申了、若有遺漏、事須覺舉、一舉之後、不許更申、如猶不請、責三度中、此乃受領之後、更致欠損、仍須物徵後人、罪同前格、

一應科責國司放還不知官物事

右國司上下、相共勘知監守官物、歡任格律、理須遵行、法意無有遺漏、而或好求事使、無預出納、或稱非官長、不肯論知、遂乃遠至終任、近二三年、規避欠負、巧遂罪累、並是在官之日、徒貪俸料、去任之後、巧訴解由、既乖憲法、深合懲革、今須此等國司、任中所有欠負未納、並合同預、若不改俊、猶事規避、量情科罪、更不寬宥、

以前勘解由使奏偁、諸國司等違犯多端、不設條例、何以懲肅、謹錄事狀、伏聽天裁者、右大臣宣、奉勅依奏者、諸國承知、立爲恒例、

延曆十九年九月十二日

〔類聚三代格〕八太政官符

應作差法令塡未納雜官稻幷欠物事

右得河內國解偁、前介從五位下藤原朝臣綿繼雖偁任中未納雜官稻顏色有數、望請、當時國司史生

已上、共作差法、各塡己分、且給解由者、國依牒狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國、亦有此類
者、宜亦准之、立爲恒例、

弘仁三年二月廿三日

〔三代實錄六清和〕貞觀四年三月十九日丁亥、從五位上行上總介伴宿禰龍男、到任交替、稱官物多欠、禁
固前司介從五位上和氣朝臣豐永訟冤、太政官處分、遏其禁、

〔類聚三代格五〕太政官符

應行雜事二條

一應不依前司以往雜事未辨濟拘絆後任人事

右得太宰大貳從四位上藤原朝臣保則解狀偁、管內諸國調庸未進租稅未納、及所司勘出種々雜
怠、觸類繁多、前司分付之日、後司具注、不與解由狀言上、勘解由使勘判云、前司後任相共辨濟者、謹
案勘判旨、雖以往之怠在各時吏、而勘判之例、延及後任者、爲令後任之吏兼濟以往之事也、而今當
時庶務實雖營辨、往年雜怠何暇究成、靜尋事理、知吏難堪、何者或國司忘身徇國、無有闕致、然而去
任之日、猶絆前事、遂使勤惰相混、功過不明、良吏沈滯、職此之由、或國司到任之初、見舊累難可販、已
發勤王之節、還成顧私之慮、望其濟愼、亦不可得、今反覆事意、討論利害、與其空責以往之怠、不如先
勸當時之績、望請、國司若有任中雜務弁濟無闕者、特寬以往之怠、勿令拘絆其身、但調庸租稅、國之
大事、其租稅者、元有徵率之例、調庸未必有例、重望准租稅徵率、以爲當時之務、又若有當時之外更
濟舊事、及過徵率分者、隨其功効、將進爵級、○中略

以前左大臣宣、奉勅依請、自餘諸國、亦宜准此、

仁和四年七月廿三日

〔朝野群載二十六諸國公文〕山城國司解　申請官裁事

請依例被拘留省前々司藤原朝臣守仁任正暦五、次守藤原朝臣爲保任長徳元、次守藤原朝臣時明任同二三、次守藤原朝臣宣孝任同四、長保元二、當任同三、并八箇年間、每年正税公廨雜稲貳拾玖萬肆仟捌佰伍拾束除犯玖分參毫玖厘状、

正税六万六千九百束、公廨十四万三千束、修理池溝料二万二百束、救急料五万四千束、文殊會料千百束、交易雜物直八千束、修理驛家料千束、

右謹検案内、從三位修理大夫兼守平朝臣親信、去七月十三日任、同廿六日官符、八月七日着任、此國式數出擧、正税公廨雜稲廿九万束、本稲無實、其來尚矣、其實注載度々朝集使實錄帳、代々不與前司解由状、言上先了、爰代々宰吏申請、未蒙裁許、頻以卒去、重檢前跡、卒去吏任中之減省、當任申請、古今之通例也、望請官裁、件八ヶ年間、每年被減省件數、爲省公文勘濟之煩、仍勒事状、以解、

長保三年月　日　　正六位上行目

從四位下行守藤原朝臣　　從五位下行介

(類聚三代格八)太政官符

應前司入部徵官物事

右得前近江權介從五位下藤原朝臣廣業、少目從七位上刑部氏雄等解偁、一任之中、兩年不熟、任中官物、未進多數、然解由廻、入部欲徵、前司無力、望請賜官符、與當時吏相共入部依件勘納、謹請官裁者、被右大臣宣偁、年不熟、患在國司、雖亙官物、不可不徵、宜與收納國司共入部勘納、不得因此令妨濟當年事、

承和六年十月一日

(三代實錄三十六)元慶三年十月十三日己巳、勅、令太宰府庫物之代、砂金六百三十三兩、水銀百七十五斤、注附官帳、先是府司申請、每唐人來、爲貨物直、借用庫物、交關畢後以砂金准官給絁、擬計返納、其

砂金一兩、充綿十六屯、絹一疋、充綿十四屯、府司不能勘行來尙矣、今當交替之日、新司論曰、物非其實、相違官帳、仍不受領、而太政官去年八月四日符、只免唐人崖鐸之時、返上砂金三百六十一兩、望請准據彼例、被許注帳、從之、

〔類聚符宣抄 八〕應差勘出勘濟前司任中未辨濟稅帳公文批糅雜怠事

天慶元年勘出無返抄採銅鉛料穀穎萬漆仟佰參拾玖束參把四分六毛六厘

穀仟伍佰玖拾斛肆斗玖升壹合

穎仟佰肆拾肆束肆把三分六毛六厘

天慶貳年勘出無返抄採銅鉛料穀穎萬漆仟佰參拾玖束參把四分六毛六厘

穀拾肆斛玖斗壹升參合伍勺漆撮

穎萬陸仟玖佰玖拾束壹分玖厘

天慶參年勘出

不舉塡修理國分寺料伍佰束〔例減書入 万束内〕

無返抄銅鉛料穀穎萬漆仟佰參拾玖束參把肆分陸毛陸厘

穀仟伍佰玖拾玖斛肆斗玖升壹合

穎仟佰肆拾束肆把參分陸毛陸厘

無符立用兵粮不動穀穎肆萬肆佰參拾束貳把

穀參仟玖佰參拾捌斛貳斗

底敷穎仟伍拾束

天慶肆年勘出

不舉塡修理國分寺料伍仟束〔例減書入 万束内〕

不堪納過分不堪佃田三分之一租穀貳仟佰肆拾貳斛伍升伍合肆勺貳撮

無符兵粮不動萬玖仟伍佰陸拾肆束捌把

穀仟捌佰捌拾參斛捌斗捌升

底數稻捌佰貳拾陸束

無符立用兵粮稻參佰斛

無符往年未納雜稻捌萬仟伍佰束

公廨稻伍萬貳仟束（本四万束 息利二千束）

救急料稻萬參仟束（本万束 息利三千束）

國分寺料稻陸仟伍佰束（本五千束 息利千五百束）

右得長門國天慶六年二月十六日解偁、謹撿案內、守從五位上橘朝臣奉風、去年七月十一日到任、初行交替之政、爰前司任中天慶元年以後、至于同四年、未勘因度公文、其數繁雜也、爲事繁多、爰前司守從五位下物部宿禰本興辭云、以去承平七年六月十三日著國、而前前司守藤朝臣昭任、經承平六年以來、國弊民衰、不勤農業、因之每年戶上不堪佃田并異損、或年不堪三千七八百町、或年異損一千八百町、徵納租稅、隨而不濟、正稅例用不足常多、可填正稅在例者、內可返負租穀、無辨徵之民、然而存公平、年料例二千五百十六斤十兩二分四銖、紛千五百十六斤十兩二分四銖、承平七年以往、殊勵方略、依數究納、請返抄已了、至于天慶元年以後年料、僅總計、僅辨濟之間、從同二年春初、因賊亂盛、往還不輒、加之官符頻下、只催警固、進官國庫、雖濟公文、總以拋棄、不勤濟、又無符立用兵粮料不動穀稻事、依機急且以充下、且以言上、待候裁許之間、得替解任已畢、身患也、具數不與解由狀、言上先了、方今勘公文、道非無其次第、不論前司任中公文、何及當任哉、重撿傍國例、雖不遭賊害、而爲濟往年公文、如此雜怠、皆中下宜旨也、況乎當國遭賊徒之侵害、燒亡官舍、掠奪官物、其色目分明也、望請官裁、因准諸

國例、被下宣旨、徵之勘出、勘濟往年公文、將省負累者、右少弁菅原朝臣在躬傳宣、中納言藤原朝臣元方宣、依請者、

天慶八年三月八日　左大史御船審江奉

〔類聚符宣抄八〕右中弁藤原朝臣有相傳宣、右大臣宣、奉勅、諸國交替欠物可令辨塡之狀、具在去承和十二年十月廿二日格、差分起自任用、推請及於官長、此則物少欠負、人無巧術之時也、而今如聞、頃年諸國受領之吏、稱塡己分之差、放還前司之後、以其任中雜怠物、皆申宣勘出、且勘公文、漸爲流例、所塡不幾、其遺猶多、徒有勘濟公文之名、曾無塡納欠物之實、事乖憲法、寔多公損、自今以後、放還前司之國、申請當任交替欠之解文、若載不動動用穀穎稻米之類、宜從返却者、

天曆二年八月廿三日　左大史海宿禰業恒奉

應督監勘出勘濟公文天曆六年交替欠留國官田地子稻塡納遺十四万八千六十一束二把三分

七箇二條事

右得前和泉守從五位上菅原朝臣雅規去八月三日解偁、謹檢案內、件地子稻代々宣勘出、勘濟公文、其來尙矣、而今勘去應和三年帳之日、主稅寮稱不塡納、勘判報符所徵、去天曆六年交替欠留國官田地子稻十六万六十一束餘、不勘公文、重檢案內、件報符、是依前前司守藤原朝臣後連卒去之替、次守源朝臣濟、檢交替使刑部少丞藤原守正等言上實錄帳、勘解由使所勘判也、次守藤原朝臣定忠、同陳忠并雅規等也、吏經四代、年及二八、件符色雅規何唱塡納乎、今驚主稅寮勘發、欲勘塡納數十年以往十餘万官物、去任國司怨難塡納、又案貞觀新定交替式、天長九年十二月十七日官符、率公廨本穎可塡舊年未納欠物、此國公廨本穎八万束也、減省定擧二万六千束、雖然率彼本數八万束、每年所當二千四百束、前司任終一年、當任四年、并五箇年料万二千束、適致忠勤塡納已了、望請殊蒙天裁、被下宣旨、且以所塡勘會公文、且以其遺、暫徵勘出、將勘濟公文、然則官物漸有塡納之期、公文自無勘濟之煩、

者、左少弁平朝臣惟行傳宣、左大臣宣、奉　勅依請者、

康保四年十二月一日　右大史吉志宿禰公胤奉

應返抄未下間暫勘出勘濟寛弘元二三四并四箇年租帳事

右得攝津國解偁、謹檢案内、此國依田損口帳、合期勘造進官、先了、隨則請官省外題又了、更被勘拘之間、所司勘返云、返抄未下國租帳、非蒙宣旨、難勘濟者、雖拿拋公文、徒年累、望請官裁、任先例、被下宣旨於所司、返抄未下間暫勘出、勘濟件年々租帳者、右中弁藤原朝臣重尹傳宣、權大納言藤原朝臣齊信宣、依請者、

寛弘八年十二月廿六日　右大史竹田宿禰宣理奉

應被留兼勘會公文前司藤原朝臣方正任中寛弘元二三四并四箇年減省符返抄宣旨等事

右得攝津國去閏十月廿五日解偁、謹檢案内、前司守從四位上藤原朝臣方正、去寛弘二年六月十九日任、同六年正月廿八日得替解任、而任中公文、于今未勘、頗難加其催、去四箇年不依所制、無心勘濟、但守爲義朝臣、當任國府雜物、任格合期勘以進納、勘濟公文、任中致勤、今依前司之懈怠、何失當任之勤節、望請官裁、因准傍例、早被下宣旨於所司、被留勘彼任稅帳、兼又其勤者、今依宣旨、欲勘濟彼任租出舉帳等之處、件年々減省官符返符宣旨等、民部史生村主忠茂、爲成省符請預之間、去夏之比、其身死去、仍觸彼家、尋求之處、已無其實者、相副國省史生佐伯信賢所進中文、言上如件、望請官裁、被官符宣旨留案、被下宣旨於所司、勘濟件帳、將致奉公之節者、左大弁源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉　勅依請者、

寛弘九年十一月廿九日　左大史但波朝臣奉親奉
少錄内藏是隆奉同十二月二日

〔類聚符宣抄八〕太政官符民部省

應越勘攝津國前前司藤原朝臣正輔任中税帳事

右得彼國前司正四位下行春宮亮源朝臣正濟今年八月廿三日奏狀偁、謹撿案內、正濟、去正曆元年七月廿八日任攝津守、同十月廿八日著任後、尋問年々四度公文勘不之由、書生等申云、前前司源朝臣相規任、天祿元年以來、代々之吏、專不濟事、或卒去、或出家、數代公文、多以擁積者、而正濟殊存公平、欲勘濟任中以往公文之處、前前司正輔朝臣、身適雖存、徒送數年、任中四度公文、無期勘濟、謹案事情、如此之國、先當任公文勘、次可勘前司時帳之例具存、去寛平九年六月十九日格、詳注其由、申請國々、已蒙裁許、越勘公文、其例存近、不可勝計、望請天裁、被下宣旨於所司、越勘正輔任中税帳租出擧帳等、殊竭勤節、將省累年之煩者、內大臣宣、奉勅、税帳依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

右中弁高階朝臣信順　　左大史多米朝臣國平

正曆五年十二月廿九日

太政官符民部省

應越勘下野國寛弘元二三四幷四箇年租帳出擧帳税帳事

右得前司守正五位下安倍朝臣信行、去十月廿八日奏狀偁、謹撿案內、前前司守源朝臣滿扶、藤原朝臣亮明、大江朝臣佐理、不勘公文、頻以卒去、次守多治眞人守忠、雖有其身、未勘公文、次守安倍朝臣有親、不終任限、又以卒去、爰前司藤原爲元、因准美濃守源朝臣賴光、淡路守藤原朝臣能通、丹後守但波宿禰行衡、周防守菅原朝臣爲理等之例、越守忠、可勘濟公文之由、早經申請、即依有蹤跡、蒙裁許之官符、徒送日月、曾無其勤、因之信行殊廻微計、勘濟前司任終一年、當任三箇年大帳調帳義倉帳、同請四箇年調庸返抄先了、欲勘租帳出擧帳税帳之處、被拘留前吏之懈怠、未勘畢當任之公文、不蒙越勘之宣旨、何顯勤皇之優劣、望請天恩、因准傍例、被下宣旨所司、將越勘件租出擧帳等者、從二位行權中納言兼皇太后宮權大夫侍從藤原朝臣行成宣、奉勅、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行左中弁兼但馬權守藤原朝臣朝經　右大史正六位上直宿禰是氏

寛弘七年十二月二日

(類聚符宣抄八)太政官符民部省

應越勘伊賀國當任長元三四五六并四箇年公文事

右得彼國去月十九日解狀偁、謹撿案內、前司光清、去萬壽元年二月十九日拜任、長元三年十二月廿九日起請已了、而彼任中公文、無期勘濟、爰國是殊難、雖計任中、爭合期遂濟、適受日敗、欲勘濟公文之處、所司確執、不許越勘、仍諸國公文勘畢之期、前後重疊、憲法不輕、恐依前吏之不勤、徒可失當任之勤節、今撿寬平九年格云、先勘當任公文、次勘前司時帳者、然勘公文例、據前年帳、勘後年帳、若以未勘帳之遺、用徵當任帳之損(損益)、則徵誤增減、當致物疑、須具未勘之由、詳注徵彼帳、勘舊帳之日、若有勘出、直用徵新帳者、望請天恩、被殊許、因准傍例、越勘前司光清任中帳、勘濟始自當任帳、將致至公之節者、正二位行權中納言兼宮內卿源朝臣道方宣、奉勅、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少弁源朝臣　左大史惟宗朝臣

長元七年七月十五日

(左經記)長元七年七月廿三日庚戌、不能行、成者云、依伊賀守顯長申、可越勘前司光清帳之由、有宣旨云々、越勘事、前司帳合期不勘之時、依後司申請所被下也、光清蒙罪配流、專不可被求彼任中官物、准己人、可申勘出云々、

(類聚符宣抄八)太政官符民部省

應越勘長元元二三四并四箇年公文事

右得出雲國去七月十三日解狀偁、謹撿案內、前司守橘朝臣俊孝、去長元五年九月之比、坐事配流、仍未勘公文、爰新司守藤原朝臣登任、殊勵忠節、欲勘濟公文之處、所司稱發云、先勘前任帳、次可勘當任

帳者何依前吏之不勤、徒可失當任之勤哉、抑越勘之例、格條已存、前蹤不可勝計、望請官裁、因准傍例、早被下宣旨於所司、越勘件年々帳、彌勵忠節者、右大臣宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

右中弁兼和泉守源朝臣　　　左大史菅乃

長元九年八月卅日

前司不付領

〔朝野群載二十大宰府〕申下遣越度上道吏令行交替政（知前司解狀）　豐後守外從五位下宍太宿禰愛親誠惶誠恐謹言

請殊蒙天裁被下宣旨下遣前司丹波朝臣奉親令行交替政狀

右去二月五日件奉親來謁、申云、除目之後、雖及旬日、提携病者、不能早參、能上之旨、甚雖非常、不堪大貳藤原朝臣苦責、逃亡入京者、愛親乍豈須早言上事由、然而竊待太宰府解狀之間、暫所遲引也、而件解狀、于今未聞、爰可首途之期、在今月十日、仍言上如件、謹撿案內、彼國人民離散、官物紛失之由、已有其聞、就中未交替漸經二三代云々、況前司逃亡之間、官物牢籠、尤多端乎、望請天裁、被下宣旨、下遣件奉親、將行交替之政、愛親誠惶誠恐謹言、

長保三年三月四日　　　豐後守

前豐後守外從五位下丹波朝臣奉親解申進申文事

辨申未畢任國事、暫參上狀

右、左大史小槻宿禰奉親仰云、右大弁藤原朝臣行成傳宣、右大臣宣、奉勅、豐後守宍太宿禰愛親、言上被下遣前司守丹波朝臣奉親、可勤行交替政之由、宜且召問能上之由、且下遣令勤交替政者、謹撿案內、奉親者、長德二年八月五日、拜彼國守、赴任蕃國之後、巡撿部內、凋弊殊甚、然而爲勤王之節、任中調庸租稅、逐年辨濟、擬致究濟之間、去年十一月比、親父前土佐守行衡、久煩病痾、命在旦暮之告、忽以馳來、仍且觸事由於大府、暫所參上也、今須罷歸辨以勤仕、仍勒事狀、謹解、

長保三年四月二日　　　　　　　前豐後守

〔類聚符宣抄八〕備後國司解　申請官裁事

請被下宣旨於前司正五位下藤原朝臣理明勤行交替政狀

右新司正五位下藤原朝臣季衡、今年正月卅日任、同年六月三日着任、交替之政、須早始、而前司理明、身任京都、曾不赴國、唯遣相傳□□、國並權限欲過、交替不行、官物官舍之類、欲請受領、納官封家之期、依何勤知、望請官裁、被下前司理明、勤行交替之例務、受領應在之官物、仍錄事狀、謹請官裁、謹解、

長保五年九月三日

〔朝野群載二十六諸國公文〕爲勤交替中前司

從四位下行陸奧守藤原朝臣朝元誠惶誠恐謹言

請殊蒙天裁下遣前司守從四位上平朝臣孝義令勤仕交替政狀

右朝元謹檢案內、交替之政、前吏爲本、分付官物文書爲先、朝元正月廿四日拜任、七月十四日首途、孝義朝臣同月廿六日參洛已了、朝元早赴着任、相會雜人、檢知官物、沙汰公文、仍望請天裁、被下遣孝義朝臣、令勤仕交替政、兼令分付官物、朝元誠惶誠恐謹言、

長元二年八月二日　　　從四位下行陸奧守藤原朝臣朝元

〔朝野群載二十大宰府〕管國吏越度上道時被追下宣旨[illegible]

應令前豐後守三善朝臣國經辨申不行交替勝上道子細事

右得太宰府去五月十五日解狀偁、謹檢先例、管內諸國之吏、任國之間、勤濟公文、預放還、所歸京也、而件等人、或雖濟公文、不預府押書、或不相會新司、猥以上道、凡管國之任、不預府押書、越度上道之輩、格制猶重、罪科不輕、而乍守憲章、已犯法式也者、右少辨藤原朝臣伊家傳宣、權中納言源朝臣經信宣、奉勅、件子細宜仰彼朝臣、早令辨申者、

交替奮惡稲

權任長官交替

交替料

永保元年七月廿四日　　　左大史小槻宿禰奉

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年三月十日乙丑、先是紀伊國介外從五位下興道宿禰春宗解偁、去貞觀十五年交替、不用惡稲五萬七千九百四十一束、既爲蠹芥、不更出計、請准未納率、廻成全物、至是許之、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十一月十一日丙午、勅、〇中略諸國權任長官、待受領之人、得相替焉、

〔延喜式五十雜〕凡國司遷代者、皆給夫馬、長官夫卅人、馬廿疋、六位以下長官并次官夫廿人、馬十二疋、判官夫十五人、馬九疋、主典夫十二人、馬七疋、史生以下夫六人、馬四疋、其取海路者、水手之數准陸道夫、太宰帥七十人以下、少貳以上五十人以下、判官以下卅人、史以下史生十人以下、並量事給之、不必滿數、但依犯解任之輩、不在給限、

凡陸奥出羽兩國國司并鎭守府官人已下、給遷替料夫馬、但延任之輩、不在此限、

凡鑄錢司官人已下、准國司、給遷替料夫馬、

〔延喜交替式〕凡不歸故鄕國司并博士醫師、不給交替丁、

〔政事要略五十九交替雜事〕交替式云、國司遷代者、皆給夫馬、長官夫卅人、馬廿疋、六位以下官長夫廿人、馬十二疋、判官夫十五人、馬九疋、主典夫十二人、馬七疋、史生以下夫六人、馬四疋、其取海路、水手之數、准陸道夫、但依犯解任之輩、不在給限、

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月甲申、初定國司巡行并遷代時、給糧馬脚夫之法、語具別式、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年二月乙亥、太政官奏、遷替國司等赴任之日、官給傳驛、入京之時、何乘來歸、望請給四位守馬六疋、五位五疋、六位已下守四疋、介掾各三疋、目史生各二疋、放去、若歷國之人者、依多給不給兩所、緣犯解却、不入給例者、勅許之、

〔政事要略五十九交替雜事〕交替式云、太政官符、應給遷替官人夫馬事、

右撿和銅五年五月十六日格偁、遷替官人給夫并馬者、今有在任一年而得替者、若爲處分者、不論年

敍替者令給、

天平八年閏月七日

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年八月庚申、太政官奏曰、筑紫太宰、遠居邊要、〇中略臣等望請、且停交替料、兼官人歷任增爲五年、〇下略奏可之、

〔政事要略 五十九交替雜事〕交替式云、太政官符、應停給諸國司歷任五年解退交替料夫馬事、

右太政官去大同二年十二月一日符偁、五畿內、東海、東山、山陰、山陽、南海等道觀察使奏偁、謹案、去和銅五年五月十六日格偁、諸國司等遷代之日給充夫馬、令還故鄕、因循爲例、于今未停、但太宰府、依太政官去寶龜十一年八月廿日符、增相替年五年爲限、停交替料、以省民弊、而今諸國司等秩滿之期、一依令條六歲爲限、然則交替之料事須一例、望請延分之靈、准府停給、但未滿秩限遷代之徒、及在任身宍〇宍任身死、或本身亡誤之家口、自非依犯解任之色、亦請仍舊給之、又案新格、博士醫師八年爲限、至于史生任限四年、仍須博士等料因從停止、史生之分依舊給之、亦太政官去天長元年正月廿日符偁、得上野國解偁、謹案太政官去弘仁六年七月廿五日符偁、國司遷代、依慶雲之格四考爲限、其博士醫師六考爲限者、然則慶雲之格既有交替料、而至于弘仁、更立年限、不具交替料事、遷代之人愁申不少、遂行有疑、誠■■許、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、宜任舊給之、令還故鄕者、今案此等格、西海道府國史生已上五年解退者、不給交替料、自餘道國博士醫師秩滿六年遷替、依舊預給、普天之法彼此抵梧、自今以後、守介及博士醫師、歷任五年解退者、停給交替料、大納言正三位兼行右近衞大將良峯朝臣安世宣、奉勅、依件行之、

天長五年十月十一日〇又見貞觀交替式、

〔三代實錄 七淸和〕貞觀五年四月廿一日癸丑、是日勅、准陸奧國例、給出羽國司交替料夫馬、

〔政事要略 五十九交替雜事〕貞民格云、應停給不歸故鄕國司幷博士醫師交替丁事、右得越中國解偁、謹撿和

國司從者食馬

偁五年五月十六日格偁、諸國司等遷代之日、宛給夫馬、令送故等者、承前國宰偏依格、浪人便任史生以上、及土人被拜博士醫師之輩、宛給件丁、其來尚矣、夫交替丁者、既作送歸之資、非是輸物之備、而不熟格旨、歷世給來、因玆貧人求苛勘功物、凋弊之民、舉門逃亡、求之政途、蠹害最甚、望請被從停止、濟此窮民、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國、亦宜准此、

貞觀八年十月八日

〔類聚符宣抄〕八太政官符下總國司

應令入京故守藤原朝臣有行從家事

右右大臣宣、奉勅、件從家宜給食十具馬十疋、令入京者、國宜承知、依宜行之、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

右少弁　　　　左少史

天曆七年六月十日

檢交替使

〔延喜式〕四十四 勘解由 凡勘內外諸司所進、不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、撿交替使帳等者、辨官外題下於使局、〇中略

奏式

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事檢交替使幷實錄等帳准此注之

前官位姓名年月日任幷到來年月日解

合若干條

一某物若干

右寺司國官位姓名等年月日解寺以代解偁云云、交替帳注云、撿交替政使位姓名等年月日解偁云云、

實錄帳注云、國官位姓名年月日解偁、被太政官月日符偁云云、

以私事條所勘知件、謹以申聞、謹奏、

年月日

長官位姓名

次官位姓名

次官位姓名

檢校

官位姓名

官位姓名宣奉　勅依奏

年月日

〔延喜式四十四勘解由〕凡諸國所進檢交替使并實錄帳等所載國內雜物者、依奏文日、只載欠失之類、不注見在之物、但新勘附公益之色目等、不省除之、在京諸司准此、

〔延喜交替式〕凡檢交替使帳及令任用分付實錄帳等、准不與解由狀、限內言上、

〔北山抄十吏途指南〕前司卒去國申停交替使事

往年之例、先令諸卿定申、隨其申旨所裁許也、成敗前司之時、以多官物時例可爲定數之由被定下也、飛驒國依無國任任用、有以舊生令行交替之例矣、

天曆之間、無前司之國司、來赴任之眞、如申不動倉鉤匙可申請交替使之由、有起請、隨則撰遣堪事之者、稱國官物多致公益者也、而近年之間、爲失官物、申請國司、申定得意者、雖多公損以之爲殿、不爲國司之過、然則申停時、無事定、被裁許、還有公益歟、

延喜三年三月二日、阿波國言上、前守連松卒去、無人分付、請遣交替使、受領官物、仰以權守兼假令分付云々、國史抄、事不傳、裏

〔將門記〕貞盛秀鄕等、弃身命而力限合戰、爰新皇著甲冑疾駿馬而躬自相戰、于時現有天罰、〇中略便自

下野國副解文、以同年〇天慶三年四月廿五日其頸言上、但常陸介維幾朝臣、幷交替使幸遇理運之遺風、

便以十五日歸任國舘、

〔朝野群載〕二十六諸國公文〕某國司解　申請官裁事

請殊蒙官裁被下遣撿交替使實錄官物狀

右謹撿案內、前司從五位下守某朝臣姓名卒去已了、因茲新司著任之後、任式條欲始行交替務之處、

無人分附、不能受領、望請官裁、被下遣朝使、令撿交替之務、將致受領之勤、仍勒事狀、謹請官裁、謹解、

年月日

申交替使文中一上奏　無續文、

天曆七年六月十三日宣旨云、前司卒去之國、待後司之申請、有遣撿交替使、而申請之間、早晚任意、

所請只在前司同任、空送年月、如忘朝憲、官物依其暗減、公損爲之自成、論之政途、理不可然、宜准申

不動倉鉤匙之例、拜除之後、在京之日早令言上、定遣詔使、自今以後、立爲恒例者、

申前司同任國司解文

令停遣撿交替使、任前々司守某朝臣姓名受領定數、令前司同任分付受領、合官物若干數狀、

太政官符　備前國司

應停遣撿交替使、依前司藤原朝臣景齊受領定數、令同任國司分付受領雜官物事

右得彼國去治安二年十一月廿三日解狀偁、新司守從四位下行源朝臣經相治安二年正月廿八日

任、同年三月五日著任、依例欲勤行交替政之間、前司權守從四位上藤原朝臣景齊、白地請身假入京、

相待下向之程、同年六月十一日、依身病忽以出家、國內官物無人分付、徒送年月、方今撿諸國之例、可

令任用之官人勤行交替政之由、裁許近在、望請官裁、因准諸國例、令前司同任權介行信等任景齊朝

臣受領定數、分付受領國內官物及神寺官舍等、解由、後任之輩舍者、右大臣宣、奉勅依請者、國宜承知、

依宣行之、符到奉行、

右中辨源朝臣　　左大史大宅眞人

萬壽二年五月三日

物吉

〔朝野群載二十六諸國公文〕以前司同任官人中實錄國內官物等河內國司解申請官裁事

請因准前例、不給檢交替使、任前司從五位下菅原朝臣□受領定數、以前司同任官人實錄國內官

右謹檢案內、前司從四位上菅原朝臣爲政、不勤交替左右遷之間、其身既卒、无人分付、須任先例申請遣

交替使、而此國凋弊、雖治第一也、檢交替使下向之時、供給繁事、輸事多煩、以前司同任實錄官物、前例

多存、望請官裁、因准先例、不給件使、以前司同任官人、實錄國內官物、解舍等內之煩、仍注事狀謹請官

裁、謹解、

長久四年七月八日　　目闕

從四位上行守藤原朝臣在京不參　　正六位上行大掾大中臣朝臣

〔類聚符宣抄八〕諸使

檢國々交替使主典

遠江國　宮內少錄國五耕

飛驒國　卞生若櫻部嘉風

下野國　中務少錄依智秦時範

康保元年十月十四日

左大弁橘朝臣好古傳宣、左大臣宣、件等人宜差遣檢彼國々交替使主典者、

康保元年十月十四日　左大史物部宿禰安國奉

依請

〔日本紀略 五冷泉〕康保四年十一月七日辛卯、被定諸國交替使、

〔日本紀略 八花山〕寛和元年五月十六日庚申、被定國々交替使、

〔明法肝要抄〕太政官符　越前國司

應爲使前權守從五位下中臣丸良用令造立氣比太神宮寺一院事

七間檜皮葺講堂一宇 ○中略

右得彼國去年四月廿七日解偁、前司守從五位上藤原朝臣景康、去三月八日入境、同九日始事、幣彼太神宮、次依例事、件寺、受前交替帳所注堂塔房舍佛像經論資財寶物無有一色、○中略

正四位上左中辨兼備後權守藤原朝臣兼忠

天元五年五月廿八日

左大史正六位上牟久宿禰忠陳

〔萬葉集 四相聞〕太宰帥大伴卿被任大納言、臨入京之時、府官人等、餞卿筑前國蘆城驛家歌四首、

三埼廻之荒礒爾縁五百重波立毛居毛我念流吉美、

右一首筑前掾門部連石足、

解由

解由トハ、得替、遷任、遺喪等ノ事ニ因リテ解任スルトキ、見任ノ人連署シテ、前任ニ付スル文書ニシテ、前任ノ人ハ、此ヲ齎シテ官ニ進リ、任中ノ無怠、即チ調庸未進等ノ事ナキヲ證スルナリ、吏事指南ニ、考滿職除曰解、歷其殿最曰由ト云ヘルハ、其大概ヲ擧ゲタルナリ、解由ニハ、

式解由アリ、式代解由アリ、己分解由アリ、會赦解由アリ、式解由トハ、式ニ據リテ作レルヲ云ヒ、式代解由トハ、前司以往ノ闕怠ハ、向ニ不與解由狀ニ注シテ言上シタレドモ、當任ニハ闕ノ犯失ナキヲ以テ、解由ヲ與フルヲ云フ、己分解由トハ、史生以上差ヲ立テ、各己ガ塡スベキ分ヲ塡スルニ由リテ、解由ヲ與フルヲ云フ、會赦解由トハ、任中ノ闕怠アリト雖モ、常赦非常赦等ノ赦ニ會ヒテ免サル、ニ因リテ解由ヲ與フルヲ云フ、會赦解由ニハ、解由ノ外ニ會赦帳アリテ、其闕怠ヲ詳錄スルナリ、凡テ解由ハ、太政官ニ進メタル後ニ、太政官ヨリ之ヲ式部、民部幷ニ勘解由使ニ下シテ勘覈セシム、解由ヲ授受スルニハ、各、日限アリテ、國司ハ百二十日、京官ハ六十日トス、限滿タルマデ未ダ得ザル者ハ罰アリ、而ルニ宇多天皇ノ寛平七年ニ至リ、其日限ヲ六分ニシ、四分ヲ付領ノ期トシ、一分ヲ所執ノ程トシ、一分ヲ繕寫署印ノ程トシタリ、付領トハ、所職事務引繼ナリ、所執トハ、解由ノ與不ヲ互ニ相爭執スルヲ云フ、又解由ヲ得タリトモ、調庸雜物ノ未進アルトキハ、所司之ヲ返却ス、而シテ未得解由ノ人、擅ニ京師ニ歸レル者アルヲ以テ、痛ク之ヲ禁ゼシニ、却テ管內ニ留住シテ、百姓ヲ侵漁スルヲ以テ入京ヲ聽シタリシガ、其後舊ニ仍リテ之ヲ禁ジタリ、凡テ未得解由ノ人ハ、元日ノ朝賀ニ預ルコトヲ得レドモ、時官ニ侍ルヨリ外ハ、宴ニ預リ祿ヲ賜ハルコトヲ得ザルナリ、又不與解由狀ト云フコトアリ、新司タル人、前司ニ解由ヲ與フベカラザルノ狀ヲ錄シ、前司後司並ニ署シテ、勘力ニ附シ太政官ニ進ルヲ云フ、而シテ辨官ヨリ外記シテ、勘解由使ニ下シテ、其是非ヲ勘判セシメ、大臣奏聞シテ、後ニ使ヨリ之ヲ頒行ス、而シテ前司逃避シテ其狀ニ署セザル者アリ、後司非理ヲ執リテ前司ニ解由ヲ與ヘザルコトアリ、解由ハ原ト外官ヨリ起リテ、京官ニ及ビ、遂ニ宮司、神主、諸國講讀師、諸寺別當、三綱ニ至レリ、而シテ遷任ノ國司、及ビ大學ノ諸博士、若シクハ公文ニ預ラザル諸司ハ、解由ヲ責メズ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕〔計 疊字〕解由

〔倭訓栞〕〔前編 計 九〕げゆ　解由と書り、日本紀竟宴の歌にとくるよしともよめり、癸辛雜識に、陳壽爲學正、滿替、往廉司取解由と見えたり、

〔西宮記〕〔臨時 二〕竟宴事〔○中 略〕

元慶六年〔○中 略〕講博士伊豫介善淵愛成、序者大內記菅野惟肖、得土倉未得解由者、前三河守菅野高松、其詞日本紀竟宴、各分史得土倉阿彌古、

前三河守菅野高松

土倉能(フクラノ)、綱尼賀(アミコカ)、々令(レヲ)流(ルハ)、鹿狎野(カセヤ)、緊絆手(フカキホダシテ)、无解由(トクルヨシナシ)、

〔癸辛雜識續集〕〔下〕陳壽捣油

陳壽字古直、號埜水、嘗爲越學正、滿替、往婺之廉司取解由、歸途偶憩山家、有長髯野叟、方捣柏子作油、見客至遂少輟、相問勞曰、君亦儒者邪、持盃茶飲之、遂問今將何往、陳對以學正滿替、欲倒解由、別注他缺、野叟忽作色面起曰、子自倒解由、我自捣柏油、遂操杵曰、不復再交一談、陳異而詢於隣人、云此傳秀才隱者也、恶君言進取事故耳、陳心甚愧之、因賦詩云、忽過深山避世翁、居然沮溺古人風、老來一出爲身計、不滿先生一笑中、

始見

〔續日本紀〕〔十一 聖武〕天平五年四月辛丑、制、諸國司等相代向京、或替人未到以前上道、或雖交替訖、不付解由、因茲去天平三年、告知朝集使等已訖、然國司寬縱不肯遵行、仍遷任之人不得居官、無職之徒、不許直歸、空延日月、豈合道理、國宜知狀遷替之人必付解由、申送於官、自今以後、永爲恒例、〔○又見交 替式〕

○按ズルニ、解由ノ二字ハ、史籍中ニ於テ始テ此ニ見エタレドモ、其文ヲ玫フルニ、其起レルコトハ此ヨリ前ニ在リシナリ、

制度

〔延喜式〕〔十一 太政官〕凡內外諸司解由者、總令進二通、其程限者官長任用、若依受領勘知之程、並申畢、即下

民部省幷勘解由使、若不過二通者、返却不下、〈謂國司與前司、謂今前二箇解由是也、〉

〔延喜交替式〕凡國司遷替、便解由申官、

〔延喜式十八式部〕凡諸司諸國解由、長官署名、判官主典或病或假、一二許人不加署名、及不知遷任誤稱解任之類、勿更返却、

凡判事解由、大判事以下、屬一兩人不署、更勿申返、〈內記監物准此〉

〔延喜交替式〕凡受領官遷任後、待替人及後司解由與不之狀、

凡公文官舍公廨等、年終作帳申官、自餘雜官物、可預解由、色亦准此、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十一月庚辰、制、與解由曰、受領之官、署名已畢、任用之人、依假不署、如此之類、式兵兩省、依例勘返、判官主典或假或病、不加署名、權量其理、公私無妨、自今以後、勿更返却、

○按ズルニ、受領ハ長官ヲ云ヒ、任用ハ次官、判官、主典ヲ云フ、

〔類聚三代格五〕太政官符

應收解由事

右太政官去大同四年八月廿九日下式部省解由條云、得替解任、遷任、遭喪、卒死等類、若非遷者、必擬返却者、頃年省勘、一守此格、今檢案內、諸國司等任符之例、只錄後司、不注前人、因茲在外之官、不知前宰之遷、至於解由、猶注解任、責以違錯、遂從勘返、改正之間、徒移日月、曠廢職緣、今被右大臣宣偁、務崇簡易、古今通論、宜諸司遷他職、及京官之人解由者、解遷兩字相通收之、

弘仁七年五月十五日

〔類聚符宣抄八〕太政官符五畿內七道諸國司

應進解由三通事〈解由三通之內、以一通下民部、仍今官不勘、唯主計主稅兩寮、〉

右解由可進二通之狀、式條已存、一通下式部省、一通下勘解由使、爲勘據之備、而今造進前司塡納己

式解內

分差帳二通、可下民部省解由等省使之狀下知已了、右大臣宣、奉勅、宜仰諸國、解由令進三通、其一通下民部省、令所司知塡差分、若放己分解由不附其物、拘留稅帳、必令塡納者、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

右中辨藤原朝臣有相　　左少史御立宿禰維宗

天曆三年六月十三日

〔日本後紀十七平城〕大同四年閏二月丁酉、勅、越前國氣比神、豐前國八幡大菩薩宮司等、遷替之日、准國司與解由、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十月戊子、令諸國神社神主相替之日、與解由、

〔延喜式十八式部〕解由式在京諸司准此

某國司解　申與前司解由事

官位姓名

右件人某年月日因事得替遷任遭喪等類解任、仍與解由、即附某名申上、謹解、

年月日　　大目位姓名

守位姓名　　大掾位姓名

介位姓名　　少掾位姓名

少目位姓名

右主典以上解由如件、其史生以下、皆造以解申官、官符下省、但京官史生直移省、

〔朝野群載二十六諸國公文〕式解由

土左國司解　申與前司解由事

守正五位下

右去年月日任、同年閏月日官符、同年月日着任、同年月日得替解任、更依無殊怠、與解由、付某、前司名也申上如件、謹解、

長元元年五月五日　　　正六位上行少目

從五位上行守　　　正六位上行掾

從五位下行介　　　正六位上行掾

件解由請留之處、近代不爾、今案二寮抄云、美濃飛驒兩國放件解由云々、但飛驒多是己分解由、

但權遙任式代也、不與狀歟、己分並使、宜爲己分歟、

〔朝野群載二十六諸國公文〕式代解由[illegible]

土左國司解　申與前司解由事

守從四位下藤原朝臣季任

右去萬壽三年二月七日任、同年二月三日官符、同年八月七日着任、長元三年六月九日得替解任、更前司以往雜怠、注載不與解由狀、言上先畢、而依無當任之怠、與解由、即付季任、申上如件、以解、

長元三年十月五日　　　正六位上行大目

從五位下行守佐伯朝臣　　　正六位上行掾

從五位下行權守菅原朝臣

正六位上行權介曾我部宿禰

奉行　　　少錄大江某申長元四年十二月十七日

大輔菅原朝臣　　　少丞菅原――

權大輔大江朝臣　　　源――――

凡式解由、式代解由、所進二通也、一通下式部、一通下勘解由使、近代式三通、

已分解由

〔類聚三代格 八〕太政官符

應作差法令填未納雜官稻并欠物事

右得河内國解偁、前介從五位下藤原朝臣總繼牒偁、任中未納雜官稻、觸色有數、望請當時國司史生已上、共作差法、各填己分、且給解由者、國依牒狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國如有此類者、宜亦准之、立爲恒例、

弘仁三年三月廿三日

太政官符

應欠損官物作差填納事

右准交替式、國司交代付領官物、明立程期、若有欠損作差令填、或依公廨之差、或准法律之級、然則欠損之徒、填納己分、且與解由、卽須放還、而頃年諸國所申不與解由之狀、總注欠損之數、共煩遷替之人、遂令一中之後未聞補填、空過歲月、訴訟公廷、非唯乖違式例、抑亦虛耗官倉、爲吏之道、豈可如此、今被大納言正三位藤原朝臣園人宣偁、奉勅、填納官物、非無課條、宜鄭重下知莫令更然、若不悛革、論刑如法、

弘仁三年九月廿三日

〔貞觀交替式〕應國司郡司共作差法填納交替雜官稻欠事

右得前越前守從四位下藤原朝臣嗣宗解偁、太政官去弘仁三年三月廿三日符云、河内國解、前介從五位下藤原朝臣總繼牒偁、任中未納雜官稻、觸色有數、望請國司史生已上、共作差法、各填己分、且給解由者、國依牒狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國、如有此類者、亦准之者、須謹依符旨、國司等作差填進、而件欠稻、雖國司不勤撿校之怠、而郡司及稅長相共所致之欠也、廐庫律云、庫〇庫上當有倉字、財物安置不如法、若曝涼不以時致財者、〇財者、恐當作損敗等、計所損敗坐贓論、減二等、注云、皆以官長爲首、以

下節級爲從者、舊說云、國司郡司共科同罪、其備償之法、中分其物、半分國守以下作差塡之、半分者郡領以下作差塡之者、望請同預口差分、令共塡、遣國司各塡已分、且給解由、然則奸盗之源自絕、官物之損無有謂闕官裁者、右大臣宣、奉勅依請、自餘國亦宜准此、

承和十二年十月廿二日

應遷代之吏隨塡差分且放解由事

右蒙兵司佑大宅清岑解偁、清岑任西市司佑時、所欠失物、觸色有數、望請准弘仁三年三月廿三日下諸國格、且塡已分、被給解由者、右大臣宣、奉勅、朝章所施、內外須一、宜在京之官、史生已上、遷代之日、若有欠失隨塡已分、且放解由、自今已後、永爲恒例者、諸國承知、依宜行之、

貞觀二年九月廿五日

〔類聚三代格　五〕太政官符

應依舊遷替吏隨塡交替欠差分放解由事

右得河國解偁、太政官去年七月十一日符偁、任用之吏、政無自由、而其不與解由狀、載國中前後諸案、細諸事、詳檢事意、皆無公害、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣良相宣、奉勅、自今以後、宜諸國任用之吏被申不與解由狀、只令載其預事及身犯、但至犯用官物、則一人有犯、餘官同坐、仍如格式、又受領卒死之國、任用行事、若有自情判署、犯用之色者、後司進實錄帳之日、不待犯人解退、細錄且狀、直以申官、其待放之間、莫預雜務者、謹案交替式云、任中未納雜官稻、觸色有數、國司史生以上、共作差法、各塡已分、且給解由者、又職制律云、財物安置不如法、若曝涼不以時、致損敗者、計所損敗、坐贓論減二等、注云、皆以官長爲首、以下節級爲從者、又云、舊說云、國司郡司共科同罪、其備償之法、中分其物、半分國守以下作差塡之、半分郡領以下作差塡之者、今如官符、任用之吏、非有預事及身犯者、皆可與解由、至于未納官稻損敗財物、總可負官長一人、若所負數多則塡進無期、官物自失、望請前後

未辨濟事、依新制而可免、多少交替欠物、存舊與以不改、然則紆避之輩自絶、官物之損無有、謹請官裁、者、左大臣宣、奉勅依請、諸國准此、

寛平八年九月五日

太政官符

應立拘放諸國任用吏解由例事

右、勘解由使奏狀偁、謹撿太政官去寛平七年七月十一日符偁、諸國任用之吏、被申不與解由狀、只令𢿙其預事及身犯、但至犯用官物、則一人有犯、餘官同坐、仍如格式者、又去年九月五日符偁、得駿河國解偁、今如官符、任用之吏、非有預事及身犯者、皆可與解由、至于未納官稻損敗財物、可負官長一人、望請前後未辨濟事、依新制而可免、多少交替欠物、存舊與以不改、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、諸國准此者、謹案交替式、調庸雜米未進、逃亡、官物官舍器仗破損者、奪國守以下公廨、調庸麁惡違期者、亦長官以下、節級抵坐、然則除預事身犯、一人有犯、餘官同坐、塡交替欠差分之外、猶有此累、載式之事、或存或停、至于拘放、當致疑殆、又貞觀十四年七月廿九日格云、所欠之物、相共塡納、所坐之罪、獨科其身者、而新格云、一人有犯、餘官同坐、仍如格式者、交替式與貞觀格、其趣是殊、而今如格式、當有一定、若爲處分者、同宣、奉勅、前後之格、指歸不同、雖多變改、未究情實、何則雖延暦立一官犯用、餘官同坐之格、而貞觀有欠物共塡、罪科犯人之符、至于寛平七年、不詳改張之由、更引延暦之符、今須復貞觀格行之、不可依寛平符坐之、加以出擧收納、計帳調集之政、非獨長官之所行、皆遣僚下、分頭遥撿、租税雜米官舍驛家之類、不是受領之自爲、各差任用爲之專當、粗擧大綱、自餘可知、然則一爲專當之官、預分頭之務、四度公文雖避失錯、一國雜怠豈得免脱、況乎在任之日既得公廨、秩滿之時何許負累、而寛平七年符唯擧預事與身犯、同八年格偏指交替之欠負、調庸雜米未立其制、爲政之道理不合、然今須若申不與解由狀者、注載雜怠、莂留公廨、一如前例、若與解由者、唯令所司勘申專使專當之怠、何則與解由時、

會赦解由

將其國忌請復公廨假用私物至于不取返抄不請公文則專在長官實非任用故也立此一例以明受領任用之別

寛平九年四月十九日

〔朝野群載二十六諸國雜事〕已分解由

因幡國司解　申與解由事

前司守正五位下行侍從藤原朝臣宗成

右人天永二年七月廿九日任同年八月日官符同年十月日着任元永三年八月九日得替解任受任中以往雜怠注載不與解由狀言上先畢而今依遁己分差與解由仍付宗成申上如件謹解

元永三年十一月廿二日　從六位上行目秦宿禰氏吉

守從五位下藤原朝臣時遠　正六位上行大掾田口朝臣重圀

修理右宮城使從四位上左中辨藤原朝臣　正六位上行少掾紀朝臣

已上諸解由若無介者必申一上有介者申大納言已下辨申解由之時先下主稅寮令成續文以二寮續文加解由進知加延曆寺返三寶返抄中七辨上卿下諸司也省官解由會赦解由等勘實畢

凡式解由二枚一枚下式部一枚下勘解由使式代解由三枚式部二枚加己分解由可下也今案猶可有三枚已謂前司以往雜怠限內勘錄之上當任無怠云々然則以往雜怠之內有交替欠壞納稻率分主稅寮可知勘也至式代無前司以往雜怠故可有二枚也

〔延喜式勘解由〕凡不與前司解由狀并令任用分付實錄帳及檢交替使帳等未勘奏之前前司雜怠會赦不會之由不可勘申

凡諸國租舂米未進者雖會免租稅未進之恩赦不可原免

〔享祿本類聚三代格十七〕詔、百城煙峙、振綱紀者歸乎牧、千里風行、班章條者存乎宰、是以懸衡御辨、握鏡臨圖、欲廣此甚黜之功、必資循良之吏、朕以虛寡、恭惟帝績、剖圭符以責成、分憂之望所憑、紆銅墨以推最、求瘼之寄斯在、而朝章難副、國憲易虧、躬不率正、私願之累方滋、職乖恪居、公方之節已墜、單父之民未感絃歌、蒲河之吏屢陷徽墨、勤狀叠闕已溢、斷文載車不勝、近緣大行天皇聖躬不豫、敷暢鴻恩、洗滌罪穢、而有司執奏不在赦限、朕悲夫春枯之樹、雷蟄之虫、或身歸農野、撫花髮而惕慮、或志在名節、望榮路而絕思、此之可愍、嘗于案懷、宜承和九年八月廿七日以前、外吏秩滿、未得解由者、已言上未言上、咸悉原免、其未言上輩所有欠負并自借判署之類、後司據實造會赦帳、前後官司共署言上、及未請返抄者、亦同令辨申、且專宥前人、還累後吏、論之治道、誠非平適、其承和二年以往雜米穀及五年以往雜交易等之未進、並皆停留、莫責輸貢、但其本物隨色輸納國司實錄別自言上、朕聞於舊事、訪之遺塵、恩難數、漼赦亦有限、而今日之所行、先皇所不赦、既不依舊業、豈須貽孫謀、後代之論者、亦將知乎此、誠念欲令一顧之恥更屬足於長途、再汚之婦復無心於佳會、布告遐邇、俾知朕意、

承和九年八月廿七日

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年七月丁酉、是日勅、會去年七月十四日、八月廿七日兩度恩赦、諸國未得解由之輩、或訴諸司、偏緣洪恩、只放解由、至于造會赦帳、令加其名、寄事彼此、拒以不署、此則乖詔旨所指、復似謬舊旋、須後帳進官之後乃與解由、但後司所勘事有不平、准不與解由狀、加所執、亦前該放許之類、許遁不署、依解言上、其未署之間、五位已上〇上原作下、據類聚三代格改、不論京官外任及散位、總奪位祿、六位已下同沒季祿公廨、無職之人、不預敘用、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月十三日庚午、太政官頒下今月七日詔書於京畿七道諸國云、今稽詔旨、天安二年十一月七日以前內外未得解由之輩、不論已言上未言上、准承和例、其身所犯莫以拘責、但未言上者、後司造會赦帳、前後共署言上、亦如先格、又當年備責、不可更免者、後年總復、不如明詔、敢

有乖違者、雖處重責、不甘寬恕、○中略 並是權時之恩宥、非將來之可恃、慣此風途、不務再然、自餘事宜、一依舊貫、

〔朝野群載二十六諸國雜文〕會赦解由

周防國司解　申與前司解由事

正六位上行介周防宿禰正遠

右人、去某年月日任、某年月日、得替解任、而任中雜怠、會某年月日赦、仍與解由、如件、仍付正遠申上、仍注事狀、謹解、

天德三年　月　日

守――　少目――

介――　掾――

〔三代實錄六清和〕貞觀四年七月十五日壬午、下知五畿七道諸國、進會赦帳程、准不與解由狀之期、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應遭會赦帳程期准不與解由狀事

右撿案內、去承和九年八月廿七日詔書偁、外吏秩滿、未得解由者、已言上未言上咸悉原免、其言上○言上恐衍未言上所有欠負幷自餘犯累之類、後司據實造會赦帳、前後官司共署言上者、然則名是會赦帳、實則不與解由狀、內外諸司須各守其期、造進件帳、而稽引不進、多致物累、因茲太政官承和十年十月二日下勘解由使符偁、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣、奉勅、勘解由使勘申、牧會赦帳可立程限之狀、事是有理、實協規憲、而天安二年十一月七日恩赦之後、諸國或致違期、今被右大臣宣偁、可行不行、事皆可然、宜遣下知以聞來路、○以聞來路恐有誤

貞觀四年七月十五日

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年十二月七日丙戌、是日太政官頒下詔書於文武百官及五畿內七道諸國、符偁、今月四日詔書曰、○中略、未得解由之徒、不論僧俗、同皆放免者、今須准承和天安之例、已言上未言上、原其身犯、不得拘責、但未言上者、後司造合敕帳、前後共署、限內言上、一如貞觀四年七月十五日格、

〔政事要略五十四交替雜事〕勘申內外諸司官舍无實會赦否事

去二月廿四日詔書偁、今日昧爽以前、大辟以下罪无輕重悉從免、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在免限者、

詐僞律云、詐欺官私、以取財物者、准盜論、注云、詐欺百端皆是、若監主詐取自依盜法、

延曆四年七月廿四日格云、其國司如有一人犯用、餘官同坐、贓物令共塡納、不在免死逢赦之限、

天長二年五月廿七日格偁、內外諸司所申不與解由狀、式皆名交替欠、不顯欠失緣由、事涉詔詐、科附虛實、宜欠損犯用色目具錄載申、不得隱漏、

大同四年十一月十五日格云、在京諸司紛失公文、不揀孔目、或館舍破損公廨欠失、自今以後、遷替之人、宜責解由、其件三色之物、分付受領過限等類、准狀科罪、一同國司、

勘解由使勘例云、今撿件官舍无實破損等未備之怠、前司會赦、須見任以其料物修理、若其料物遂无實者、申請料修理、莫拘前司、无實者失由不明、事涉盜詐、須令前司同任吏及主守人等備塡待了放還、

私案、件勘例存上件格律意、免爲國司所勘料也、諸司欠損依大同格、責其犯失、亦同國司、然則所謂無實、若不顯欠失緣由者、尤是失由不明之色也、恩竊辭及但顯緣由者、既指失由、不造立之怠、事在恩前、須見任量其要否申官造除、仍勸申、

延長八年四月一日　主計助兼明法博士惟宗公方依官宣勘申

解由期限

〔政事要略 五十四交替雜事〕諸國解由使勘判抄

一器仗戎具事 勘文改判放讀

无赦判云、无實者失由不明、事渉盜犯、須令前司幷同任及主守人等備塡、待了放還、

伊賀　前司源明

又云、失由不明、事渉盜犯、須徵前司所塡彼分、其遺者令彼同任吏部司主守人等塡償、若在國庫欠失者不可責部司、破損者式不注損色、依式爲全、式雖注而是少破也、見任以備修理、

承平四年判

伯耆　前司橘家明（○家明一作實明）

常赦判云、无實者失由不明、事渉盜犯、須令前司幷同任之吏守守人備償、待了放還、

承平七年判

但馬　前司藤原師範

非常判云、无實者失由不明、然因事經赦令、須見（○見下恐脫任字）量其要否、申官修理、

承平七年判

〔延喜式 十八式部〕凡諸司諸國進解由者、諸司長官六十日、文官以下及史生卅日爲限、諸國長官百廿日、任用六十日爲限、但長官任用同時解任者、交替了後、與長官共署上其與不之狀、其諸國除裝束行程之日、若任他司者、依任日始計限內、雖竟務、其季祿位祿、皆依給例、亦雖預諸節會、若限滿未得解由者、具狀申官、其伊勢大神宮、豐前宇佐宮、越前氣比神宮司、諸神主亦責解由、但遙任及陰陽大學典藥等諸博士、諸司不預公文之類、並不責解由、

〔延喜交替式〕凡任用之人、國司除裝束行程之後六十日、京官除目之後卅日之內、依限勘知、若有欠損、與官共署限內言上解由與不之狀亦同、但受領任用、同時去任者、交替畢後、相共言上、

〔續日本紀 桓武 三十七〕延暦元年十二月壬子、詔曰、〇中略自今以後、遷替國司滿百二十日、未得解由者、宜奪位祿食封、以懲將來、〇又見交替式

〔類聚三代格 五〕太政官符

應申預釐務未得解由人解任事

右得式部省解偁、撿案內、被太政官去弘仁十三年八月廿八日符偁、得省解偁、去天應二年二月五日左大臣宣、諸司官人兼帶國司、解國司任之後、百廿日內不進解由者、不得預釐務、又未得解由人任諸司官、有宜許釐務者、釐務之後、百廿日內不進解由、宜申送之者、自爾以來、未得解由之輩、申官解文注云、應停釐務、今案交替式云、遷任國司及新任之人、分付受領、過百廿日、解却見任、并奪俸料、但五位以上、未得解由、一依勅文、重奪位祿食封者、先宣後格、輕重不同、事須准式文申解任、但未得解由新任職者、更計百廿日、猶須從前宣、謹請官裁者、右大臣宣、依請者、謹案前解、頗有不盡、何則新任遷任未得解由之輩、省申解任之後、彼若有所執、未勘定之間、官告知此狀、告知之後、國司百廿日、京官六十日、過此程限、猶不報下者、更解任、是承前之例也、因茲每過程限、重申解任、并官線非格旨、即從拆却、若不覆申、恐乖公平、望請猶從前例、以爲後式、謹請官裁者、正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、依請、

天長三年十月七日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應內外官交替限內量付領并所執寫署程事

右交替之政、式文具存、分付受領、前後無爭、而頃年人心多岐、進行失旨、或新司造不與解由狀、限日促近、乃示前司、前司無程所執、不進其署、因茲爭論自發、經年成煩、人多愁訴、政致擁滯、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、自今以後、宜六分交替之程、四分爲付領之期、一分爲

所執之料、一分爲繕寫署印之限、然則彼此無濫、公事不滯、

　寬平七年七月十一日

勘解由

〔朝野群載 二十八 諸國雜事〕主計寮

　勘前山城守從五位下藤原朝臣致遠解由事

　請調庸總返抄二箇年

　前司任終一年 天仁二　當任一年 天永元　雜米總返抄二箇年 天永元二

右官宣、件致遠調庸雜米總返抄請否之由、宜勘申者、檢文簿、調庸總返抄已畢、仍勘申、

　永久二年十一月日　　　　算師淸原

修理左宮城判官兼大外記助教但馬權介中原朝臣　　權少允紀

　　　　　　　　　　權少屬佐伯

不實解由

〔類聚符宣抄 八〕近江史生丸部安澤解　申請藏人所裁事

　請被召仰式部省、早令申補任之狀

右安澤依日次供御所勞、去延喜十二年任伊勢史生、雖任之後、去年被遷任件國史生、而式部省稱不進本任國解由、未申補任、謹檢案內、安澤任伊勢史生之時、勤事供御、不向任國、仍去延喜十二年二月廿一日預京官將下國先了、然則遷任之人、何拘解由、望請所裁、被召仰彼省、早令申補任、仍錄事由、謹以解、

　延喜廿年六月十九日　　　　近江史生丸部安澤

過限不與解由

〔類聚國史 八十四 政理〕天長二年五月庚午、冀卒五位已上大學諸博士、停責解由、

〔三代實錄 五 淸和〕貞觀三年二月二日丙午、從陸奧國守從五位上坂上大宿禰當道、介從五位下伴宿禰春宗及掾已下記事以上公廨、以前守從五位上文室朝臣有眞解由不與、過程限也、前守有眞、記事爲

木種主等、科公事稽留罪、以程限之內、不分付官物也、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月十五日戊申、太政官處分、沒紀伊國司守從五位上並山王公廨、以前司介從五位下山口伊美吉西成放還不與之狀、過限不言上也、

〔延喜式十一太政官〕凡諸國雜米有未進者、返却其官長解由、知無未進、然後令下、

〔類聚三代格五〕太政官符

應行雜事二條〔○中略〕

一應進解由吏有任中調庸雜物未進者返却解由事

右同前〔○大宰大貳藤原保則〕解狀偁、貢進調庸、旣有程限、支度國用、最爲大要、因茲違期愆惡等之責、載在格條、而或國司頻致未進、動闕國用、至于遷替遞被放還、承前之例、所以知其有怠、猶收解由者、爲令後任之吏相代辨塡、然而當任之務、每多擁滯、以任之事、不遑營濟、是以調庸未進、逐年猥積、公家支用臨事闕乏、論之政途、理須乖例、望請國司進解由之日、若有任中調庸雜物未進者、返却解由、令愼將來、

以前左大臣宣、奉勅依請、自餘諸國、亦宜准此、

仁和四年七月廿三日

太政官符

應勘却不受調庸總返抄國司解由事

右太政官去仁和四年七月廿三日、下五畿內七道諸國符偁、國司進解由之日、若有任中調庸雜物未進者、返却解由、令愼將來者、而諸國或偏進調庸二色、未必貢例進雜物、或僅勤納官料物、遂無勞封家調庸、如是之漸積習成常、論之政途、理不可然、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅、不受任中調庸總返抄、諸國官長解由、自今以後、宜從返却、但前司任

終年遂抄者、依去寬平二年九月十五日符、令後任之吏辨濟受取、

寬平八年六月廿八日

〔延喜式 式部十八〕凡賀正之日、内外諸司五位已上解任之輩、未得解由、（但責會不盡聽、五位四司亦聽、）諸司雜色人、略○中皆聽朝拜、

〔類聚國史 政理八十二〕延暦廿一年十一月庚申、太宰府言、國制之設、本絶奸僞、解由之事、爲全官物、而或國司未得解由、私歸過闕、欠負未納、無由糾實、若有此輩、到京之日、殊處刑科者、許之、

〔類聚國史 帝王二十八〕天長二年十一月丙申、奉賀太上天皇五八之御齡、略○中有勅、未得解由大夫等、皆預陽燕之例、

〔續日本後紀 仁明十二〕承和九年八月丙子、太宰大貳從四位上藤原朝臣衞、上奏四條起請、略○中二日、交替了吏、未得解由、五位之徒、寄事格旨、留住管内、常好農商、侵漁百姓、巧爲奸利之謀、未復填納之物、望請交替了吏、早從入京、報曰、依請許之、但勘條不與解由之日、欠負官物、灼然合填、見贓在身、家令填償、其所填之物、具錄言上、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

應停止未得解由五位以上入京事

右得勘解由使解偁、被太政官去年十二月十三日符偁、太政官承和九年八月十五日下太宰府符偁、大貳從四位上藤原朝臣衞奏狀偁、交替務畢、未得解由之徒、寄事於符旨、留住管内、常好農商、侵漁百姓、巧爲奸利之謀、未復填納之物、望請交替畢吏、早從入京者、右大臣宣、奉勅依請、但勘條不與解由狀之日、欠負官物、灼然合填、見贓在身、家令填償、其所填之物、具錄言上者、今撿案内、太政官弘仁十三年八月廿五日符偁、右大臣宣、奉勅、諸國司等在任之吏、只拘解由、無意徵物、去職之人、自推難填、不恐拘留官倉解空、職此之由、今須交替之日、租用欠負損失之物、隨即徵物、役身勿更延引、物填役畢、仍聽放

還者、然則欠負之輩、未得解由之間、不可輙得入京、若爲處分、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、宜停止後符、依前格行之、但情樂留住、不塡欠負、所行乖憲、爲物所患、具狀言上、隨即處分、

承和十五年五月十四日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應斷未得解由人所犯本罪事

右撿交替式、未得解由內外官人、犯用借貸可依法斷罪、天長二年五月廿七日條制已立、而垂制之後、寬縱不行、官物減耗、大槪由斯、今諸國不與解由狀所載負累、彼此不同、或欠失千計、物既入己、或無實萬數、皆在民身、尋其犯過、輕重相殊、而俱拘解由、不許叙用、論之公途、實乖折中、左大臣宣、奉勅、宜仰諸司、依式行之、令彼負累之倫、自知廉耻之節、者、事須內外諸司所申不與解由狀勘解由使勘判訖、刑部省待使局送、斷其犯罪、然後更付使局、令奏、其餘微物衆祿等皆如舊例、

寬平六年十一月卅日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁五位以上前司留住本任國幷輙出畿外事

右案、承和十五年五月十五日格偁、得勘解由使解偁、太政官去承和九年八月十五日下大宰府符偁、大貳從四位上藤原朝臣衞奏狀偁、交替吏畢、未得解由之徒、寄事於格旨、留住管內、常好農商、侵漁百姓、巧爲奸利之謀、未覩塡納之物、望請交替畢吏、早從入京者、右大臣宣、奉勅依請者、今撿太政官去弘仁十三年八月廿五日符偁、右大臣宣、奉勅、諸國司等在任之吏、只拘解由、無意徵物、去職之人、自推難塡、不愁拘留、官倉罄空、職此之由、今須交替之日、犯用欠負損失之物、隨即徵物役身、勿更延引、物塡役畢、乃聽放還者、然則欠負之輩、未得解由之間、輙不可入京、若爲處分、謹請官裁者、同宣、奉勅、宜停止後符、依前格行之、但情樂留住、不塡欠負、所行乖憲、爲物所患、具狀言上、隨即科處者、中納言兼右近衞大

時從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、夫五位以上資俸稍寬、故不入無財之限、役身折庸、世同六位、自今以後、被中不與解由狀、依承和九年格、早從入京、不得留住本國輒出畿外、若有違犯者、所在官司具録言上、隨狀科責、

寛平七年十一月七日

（類聚符宣抄八）被右大臣宣偁、未得解由者、不可叙用之由、法式既存、不可違失、但五位已上者、事是分明、更無所疑、至于六位、難體詳知、若遷任內外諸司者、內官者可執申事由、外官者作上任符之日、慥能尋勘、莫圖請印、事依勅、不可疎漏者、

延喜十八年十月廿一日　大外記伴宿禰久永奉

（日本紀略醍醐）昌泰二年七月一日壬辰、諸國未得解由之者、總有五十八人、被太上皇〇宇多擇其窮困者十一人、各給白米一斛、

（延喜式十一太政官）凡諸國史生已上解退之後、不待解由與不、身去他處、及逗留不署不與解由狀、科公事稽留之罪、其狀直下、所司令勘奏、不許申請者新司不載前司所執、徒引旬月、致令愁訴、亦科公事稽留之罪、奪其俸料、（諸司准此）

（延喜式四十四勘解由）凡勘內外諸司所進不與前司解由狀、令任用分付官舍帳、檢交替使帳等者、辨官外題下於使局、即集解文紙數、令本司本國進料紙、（文料紙、凡請加署四紙、雜一紙、勘知紙、[illegible]、但諸司不進）諸國七通、（上紙五通、奏并內案、[illegible]、二通、[illegible]）諸司五通、（上紙三通、[illegible]、二通、[illegible]）先書其草案、而隨解文所載事條、召緣事所司、令勘申之、（[illegible]）主典已上次官已下次第勘判、其後長官閲彼此之所決、定勘判之得失、即書黃紙、長官已下共署、還捨按覆勘、既訖捺使印、爲長案、更書奏文并內案及解文等、（在京諸司不［illegible］）次官已下相共按議、覺則加署、（儀式在左）大臣奏聞之後、錄奏了狀、副解文進官、（解文捺使印）其奏文踏印訖、下外官（[illegible]）、內官（[illegible]）之官符、史下使局、（[illegible]）使局受取頒行、（[illegible]）

雜事付之、

奏式

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事撿交替使并實錄等帳准此注之、

一前官位姓名年月日任并到來年月日解

合若干條

一某物若干

右寺司國官位姓名等年月日解寺以牒代解偁云云、交替帳注云、撿交替政使位姓名等年月日解偁云云、

實錄帳注云、國官位姓名年月日解偁、被太政官月日符偁云云、

以前事條所勘如件、謹以申聞、謹奏、

年月日

長官位姓名

次官位姓名

次官位姓名

撿挍

官位姓名

官位姓名宣奉　勅依奏

年月日

內案式

勘解由使謹奏

勘某國不與解由狀事

前官位姓名年月日任、即以其年月日遷、

右、國官位姓名等、年月日所言上、

一、前司可補塡

某物若干

一、後司可補塡

某物若干

一、前後司共可補塡

某物若干

一、可從免除

某物若干

以前事條、所勘如件、謹以申聞、謹奏、

年月日

署名同上

長案式

勘解由使

勘某寺某司某國不與解由狀事

前官位姓名年月日任、即以其年月日遷、

合若干條

一、某物若干

右、寺司國官位姓名等、年月日解〈中略〉偁、云云、

以前事條所勘如件、

年月日

主典位姓名

長官位姓名　　判官位姓名

次官位姓名　　判官位姓名

次官位姓名　　判官位姓名

主典位姓名

主典位姓名

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事

前官位姓名年月日任并到來年月日解

合雜事若干條

色目云云

以前事條所勘如件、謹以申聞、謹奏、

年月日　　署名如上奏式、

官位姓名宣奏　勅依奏

年月日

右奏聞了日、於長案後紙記之、

凡不與解由狀并實錄帳等、依次勘奏、但零小事小、勘判易決、及所司勘申無稽擁者、不必據次、特以勘奏、

凡責上不與前司解由狀幷實錄帳之後，前司之間任相爭解任本條，不與解由狀，言上，所爭事及所執不同者，令後一人狀，不再俱奏聞，但其除奪之狀，詳注奏文，若前後之狀，色目所執相違，事不獲已，可共報下，不讀文讀，一度勘奏，

凡內外官人，或自內官遷於外官，或來歸外任，隨狀內實，其不與解由狀，內官卅日，外官六十日內，不論前後，起次勘奏，若可過限者，任可勘內官之色目，卌日已前，且以申官，

凡諸寺諸司諸國遷替之人，或不待與不任，直歸散，或所執無道，不加署名，如此之輩，不與解由狀，隨下直以勘奏，

〔延喜交替式〕凡前司任解年月日，與不與解由狀，論交替使帳，令任用分付帳亦同，

凡內外官責上不與解由狀內，若有借貸費用之物，者錄下符官令勘問，

凡內外官責上不與解由狀，論交替使帳，令任用分付實錄帳，名交替欠不，闕欠失無由，事涉詐，科附罪責，其欠損費用色目，具載中之，不得漏脫，

凡被責上不與解由狀官人，不得給位祿季祿馬料，其官考勘定之後，所執有理，追給追者，但未交替之間，不在此限，

凡被申不與解由狀之輩，如有遷解由者，仍須狀，不更勘決，

〔類聚國史八十四〕延暦十九年十二月癸未，越前守從五位上高橋朝臣祖麻呂免，以執非理，不與前司解由也，

〔類聚三代格五〕太政官符

應前後國司共署不與解由狀事

右得山陰道觀察使近衞中將從四位下安倍朝臣兄雄解偁，國司交替式例具備，能決付領之煩，以斷新舊之諍也，而比年諸國司等交替之時，彼此相論，各是己實，申請延期，或歸新任之官所論乖理，解任

之人、尙被抑屈、或稱分付受領是非其任、同時之官託言一人、如此之類、觸途繁多、聽訟之官、時勞鞫鞠、成衆之吏、徒煩刀筆、若殊不立例、濫訴難遏、今須交替對撿之日、情有不穩、顯錄所執、載不與解由之狀、前後共署限內言上、不得彼此遞各申請、然則是非之端已明、判斷亦無稽擁、望請下知當道、依件令行、如慣常不悛、尙致違犯、責之恒典、不可寬宥者、被右大臣宣偁、依請、其餘道幷五畿內亦准此、

大同二年四月六日

太政官符

應前後官人共署不與解由狀事

右太政官去大同二年四月六日、下五畿內七道諸國符偁、交替對撿情有不穩、顯錄所執之旨、載不與解由狀、前後共署、限內言上、不得彼此各遞申請者、今被右大臣宣偁、諸司准此、

弘仁六年十月四日

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十一月十一日丙午、勅、在京諸司、不與解由狀、依理不盡返却者、十日之內、便令改辨、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略諸國司已下解退之後、不待解由與不、身去他處、及遷選、不署不與解由狀、科公事稽留之罪、其狀直下所司、令勘奏、不許申請、若新司不載前司所執、致令愁訴、亦科公事稽留之罪、奪其俸料、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年十二月廿二日丙子、制、在京諸司官人、解替之後、不待解由與不、任意歸散、新司稱前司所執無理、弃而不載、互相申請、徒引日月、如此之蠹、並科公事稽留之罪、奪其俸料、一同貞觀十二年十二月二十五日顯行五畿七道之格、

〔政事要略二十八年中行事〕延喜十五年十二月八日、奉勅、宣旨云、諸國受領吏、進解由之輩、宜仰主計主稅寮、每年十二月廿日以前、令勘申其功課、立爲恒例者、○又見小野宮年中行事、類聚符宣抄、

應勘申諸國不與解由狀實錄帳事

右左中辨小野朝臣好古傳宣、右大臣宣、奉勅、諸國受領吏遷替解由之爭、其不與解由狀實錄帳所注正稅不動穀并雜物等之欠、宜下知勘解由使、毎年十二月廿日以前勘申之、立爲恒例者、

天慶八年正月六日　　左大史御船傳江奉

右中辨藤原朝臣文範傳宣、奉勅、諸國受領吏遷替解由之爭、可令主稅主計兩寮、毎年十二月廿日以前、勘申勘濟之狀、去延喜十五年十二月八日、仰下先了、又不與解由狀并實錄帳所注、正稅不動穀并雜物等之欠、可令勘解由使十二月廿日以前勘申之狀、天慶八年正月六日、仰下了、隨即仰解由下、各勘申往年、是例當例、勘過定後、起也、而遷解由之爭、亦必依期以前、或及歲闌之末、或臨議定之日、二官〇[illegible]勘申、因何更有公家議定、於事有煩、抄狀今所解由、來下、使寮依先例勘畢、解由下日、乃以進實錄帳勘畢、不可闕怠者、

天德三年十二月四日　　左大史我孫有□奉

(類聚符宣抄八)左中辨藤原朝臣文範傳宣、大納言藤原朝臣在衡宣、奉勅、紀伊國申請、不與前司橘朝臣雅文解由狀、雖過不與之期程限已過、依前解文、爲對問召前後司、而新司藤原朝臣爲光雖參上、前司雅文稱病故障、以不參會、又無有弁申、仍件遷替不與前司雅文狀一紙、申文一枚并新司爲光□文三枚等、宜任去天曆元年四月十一日宣旨、下勘解由使令勘奏者、

應和四年二月二日　　左少史井原連秩奉

(類聚符宣抄八)左中辨藤原朝臣雅通傳宣、左大臣宣、奉勅、前□□守菅原朝臣通雅、不與解由狀、遷替不等之間、其身卒去、宜任式條、直下所司者、

長和四年十月廿六日　　左大史但波朝臣奉親奉

(朝野群載二十六諸國公文)因幡國司解　申進上不與前司解由狀事

合壹紙

右不與前司守正五位下行侍從藤原朝臣宗成解由狀、限內勘錄、附脚力秦成安進上如件、謹解、

元永三年十一月九日

從六位上行少目秦宿禰

守從五位下藤原朝臣時通

正六位上行大掾田口朝臣

正六位上行大掾紀朝臣

覺擧解由違濫

〔延喜交替式〕凡覺擧違濫程限、京官卅日、外國六十日、前後人共署、限內言上、

〔類聚三代格五〕太政官符

應內七道諸國司解由狀事

右案公式令云、官人判事、案成自覺不盡者、聽擧牒追改、又名例律云、公事失錯、自覺擧者、原其罪、因茲准量、雖前司既得解由、後人若有不盡、而覺擧者、無妨追返、頃年所行、良無法意、而撿去延曆廿二年勘解由使所奏交替式云、新任國司、撿物違法、今須交替之日欠負之物、令總複勘一度申擧、若有遺漏、事須覺擧、一擧之後不許更申、如猶不盡再三追申、此乃受領之後、更致欠損、仍須徵物後人、罪同前格、以此觀之交替之日、須一覺擧、與解由後卒不可擧、然則使奏之日已破法意、破法之後何乖式旨、今被右大臣宣偁、奉勅、隨時制宜、古來攸同、自今以後、覺擧之事、一依式例、若與解由之後、猶有遺濫雜事、卽罪署人、兼令塡償、其前任勘付新司受領、務從精細、勿致疏略、

大同四年二月二日

京官解由

〔延喜式十一太政官〕凡內外諸司任用之輩、新到任後、未勘知前、不得輙注未勘知申、前司解由與不狀、但到任之間、有遷替人、可過程期者、乃聽注之、

〔延喜式十一太政官〕凡史生已上解任遷替與解由者、先修案文、少納言外記並署名、與解由狀、送辨官、令下符式部省、左右以上品〈○以上二參議官職[?]〉准此、但參議已上不在此限、

〔延喜吏部式〕凡大學寮人兼諸博士、判事任刑部之類、同責解由、

凡施藥院別當用藤原氏一人外記一人、兼替時不責解由、

〔類聚三代格〕五太政官符

應進解由事

右撿右大臣宣偁、奉勅、如聞、在京諸司、或失公文、不論孔目、或館舍破損、或公廨欠失、自今已後、遷替之人、須責解由、其件三色之物、分付受領、過限等類、准狀科罪、一同國司、自今以後、永爲恒例、

大同四年十一月十三日○又見政事要略五十三

太政官符

應立依理不盡返却京官不與解由狀程限事

右得解由使解偁、太政官去承和九年八月廿二日下諸國符偁、案交替式、凡國司交替、官符到後百廿日內付領歸京、若違此停俸料、然令解又雖交替訖、未得解由、遷任之人、不得居官、無職之徒、不許直寮、今諸國所進不與解由之狀、依理不盡返却、或國寄事辨申、經年不進、或國僅雖進之、理亦不盡、因茲前司未免拘屈之愁、後司漸移四年之秩、右大臣宣、自今以後、除行程外、限廿箇日、早令辨申、若過限不進、罪同前格、又任无職人、同立格文、而曾不遵行、若今此後、同致其愆、五位則奪位祿、六位則奪公廨三分之一者、今格嘗立外國之例、未見京官之科、糾彈所施、內外何異、望請、在京諸司、十箇日內辨令辨申、若過此限者、不論上下、奪其季祿、謹請官裁者、中納言從三位兼行左近衞中將藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀九年十一月十一日○又見三代實錄十三

太政官符

應立依理不盡返却京官不與解由狀程限事

右太政官去貞觀九年十一月十一日下諸司符偁、得勘解由使解偁、太政官去承和九年八月廿三日、下諸國符偁、案交替式、凡國司交替、官符到後、百廿日內付畢歸京、若違此停留、灼然合解、又雖交替訖、未得解由、遷任之人、不得居官、无職之徒、不許直寮、今諸國所進不與前司解由之狀、依理不盡返却、而或國寄事辨申、經年不進、或國僅雖進上、理亦不盡、因茲前司未免抑屈之愁、後司漸終四年之秩、被右大臣宣偁、自今以後、除行程外、限廿箇日、早令辨申、若過限不進、罪如前格、又在无職人、同立格文、而曾不遵行、若令此徒罔致其愁、五位則奪位祿、六位則奪公廨三分之一者、今格雖立外國之例、未見京官之程、朝章所施、內外何異、望請、在京諸司十箇日內卽令辨申、若過此限者、責同外國、但六位奪其季祿者、今檢撰格之日、頗有增損、若過此限者之下、刪除責同外國之句、添奪其季祿之上、改作不論上下之辭、雖一句半辭改易是少、而解官奪俸、科責不同者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宜、奉勅、宜依彼本符、更令改行、

元慶四年十月七日〇又見三代實錄

〔續日本紀 三十九桓武〕延曆六年閏五月癸亥、左右京二職所掌調租等物、色目非一、或不勤徵收、多致未納、或犯用其物、遷替之司、貽累後人、於是始准攝津職、與解由放焉、

〔類聚國史 八十政理〕延曆廿年二月辛丑、令左右京職官人准諸國責解由也、

〔續日本後紀 十一仁明〕承和九年三月丁酉、勅、女官別當雖非職員、所掌之物不異諸司、宜准侍從厨四年爲限、遷代之日責解由狀、

〔三代實錄 十八淸和〕貞觀十二年四月廿八日庚戌、制責侍從厨預解由、立爲恒例、〇中略　十二月廿五日壬寅、制、〇中略　內記監物解由狀、一准判事、

〔延喜式 十一太政官〕凡被管諸司解由、及不與解由狀、總官押署進之、大宰管內、陸奧鎭守府、諸國講讀師等准此、

〔延喜式 十八式部〕凡被管史生解由、造以解進總省、總省押署送省、其署一准移式、

○任ズルニ、被管トハ者ノ下ヘアル官司ヲ云フ、總官總當トハ、其寮司ヨリ官省ヲ指シテ云フナリ、

遷任解由

〔延喜式 太政官 十一〕凡自京官遷任畿内之輩、無未進本任解由、且聽向國、遷任外國准此、

凡諸國一分已上、遷任他國、不責本任放還、直遣任所、若過限不進解由者、所司申請解任之狀、但其官長者待分付了、責解由乃給新符、

〔延喜式 式部 上 十八〕凡内外官人、或自内官遷於外任、或未終外任、遷於内官、其不與解由狀内官者廿日、外官六十日内不進、論前後、總計日數、若可過程期者、注可進狀、旬之色、日期日已前且以申官、

公帳

〔延喜式 式部 上 十八〕凡諸國所進擬受替使并貢調使等所、載國内雜物者、准奏文日、只載欠失之類、不注見在之物、但新舊解由公帳之色日等、不省除之、在京諸司准此、

凡諸官所下諸司解文者、判官主典各一人加署進之、若事緣繁劇官物者、得上宜、乃移中、式官以上一人署同無異、○中略

凡諸解由并年終帳等事、任得召仰諸司、文官一人錄之、一日受事、二日令申、雖云多箇、不過五日、造先錄質問責過狀、以進官、若依稱不進、及不進召者、錄其人、以錄申官、錄用要劇馬料季祿等、其身爭還例中之錢可追給狀、更亦申官、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年五月丁未朔、先是雖工有貢進之年課役俱免、至于逃亡而不役、何異調庸之未進、自今以後檢進抄、拘解由、一同調庸、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應定造大輪田泊使遷替年限事

右被大納言正三位兼行左近衞大將民部卿清原眞人夏野宣偁、奉勅、件使一任永用既得成功、自今以後六年遷替功過灼然、量事褒貶、其遷替之日、宜責解由、

天長八年四月廿一日

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年六月乙丑、勅定、遣大井寺使員、判官二人、主典二人、歷限者以四年爲期、但使及算師已下員幷責解由、一同前例、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年三月廿日戊子、詔五畿七道諸國、責醫師博士解由、先是從五位下行下野介伴宿禰河雄奏言、年中輸貢調庸雜物、色數非少、而民弊人訴、未進猥積、實是綱丁盜犯、使者懈緩之所致也、今在任博士四人、醫師三人、皆非練道受業之輩、空費俸料、無益生徒、請一准史生、差充綱領、若不請返抄、責其解由、令償欠負、凡非業之輩、皆責解由、但只責身犯、不關他怠、從之、

〔土左日記〕ある人あがたのよとせいつとせはてゝ、れいのことゞもみなしをへて、げゆなどとりてすむたちよりいでゝ、ふねにのるべきところへわたる、

古事類苑

政治部二十四

上編

辭官

官ヲ辭スルニハ、初ヨリ辭シテ其官ニ就カザルアリ、一旦其職ニ就キテ後ニ辭スルアリ、居ル所ノ官ヲ擧テ辭スルアリ、兼官ノミヲ辭スルアリ、辭スレドモ命ヲ得ザルアリ、再三頻リニ辭スルアリ、上官ニ因リテ辭スルアリ、而シテ其法ハ致仕ノ例ト同ジク、五位以上ハ上表シ、六位以下ハ太政官ニ申牒シテ奏聞スルナリ、又其表ヲ收ムルト收メザルト、皆詔アリテ之ニ答フ、其表ト詔トハ、多ク時ノ文章ニ名アル者ニ命ジテ作ラシム、其表ヲ上ラントスルヤ表ヲ作ル人ト詔ヲ作ル人ト預メ相通スルナリ、或ハ表ノ作者ト詔ノ作者ト一手ニ出タルコトモアリ、其文ハ皆駢儷ニシテ、倭漢ノ故事ヲ引用セリ、

高官ニ昇ル者ハ、其任ニ堪ヘタル者ナリトモ、再三固辭スルヲ以テ定例トス、サレバ百計シテ求メ得タリトモ、必ズ辭讓スルナリ、故ニ初度ノ上表、第幾度ノ上表ノ言アリ、而シテ辭官ヲ謂テ直ニ上表トモ云ヘリ、上表スルニハ必ズ日時ヲ擇ビ、儀ヲ設ケテ之ヲ行フナリ、

又近衞大將ヲ辭シテ允サレタル者ハ、多ク勅シテ帶劍ヲ賜ヘリ、是レ文官ノミヲ有スルトキハ、護衞ノ儀ニ乏シキヲ以ナリ、猶ホ致仕篇ヲ參看スベシ、

〔伊呂波字類抄 志疊字〕辭書 辭讓 辭表 辭狀 上表

〔下學集 下態藝〕上表 [illegible]

上辭表儀

〔名目抄 雜事〕上表（レウヘウ）大將大臣亦辭退之狀ヲ獻ズルヲ云也

〔夜鶴庭訓抄〕一御表、關白攝政大臣などのつかさを辭する事を申、草ははかせにつくらせて、手書の書也、大事也、公卿の座のすゑ、もしは藏人所のかみ、東三條殿にては二棟の廊の東面などにて書也、裝束は衣冠、はかせは束帶衣冠おもひ〳〵也、料紙は檀紙かならず三枚、御名注例によりてかく、祿ある度あり、祿あれば拜あり、（二拜）

〔有職問答 二〕一當官辭退事

參議或大中納言に任候人、其官を辭して、八省卿（參議大中納言當官ニテモ可兼帶ノ官ニ候間、辭退之後兼帶之儀勿論候、）又諸司のかみなどに下り候て任事も候哉、其（是ハ參議ナドハ、兼任ハナキ候、）子細如何候、具得上意度候、縱ば冷泉黄門、今は民部卿と申候歟、此類等御事候、

〔新儀式 五臨時〕五位已上上表事 付致仕

上表之儀、具載内裏式幷儀式也、但不御南殿、中務丞以上一人、先就内侍司申其由、上表狀内侍以聞、傳宣、中務丞以上四人舁机到内侍所、内侍執函詣御所奉獻之、（或不經中務省、内侍司子姪中、若有五位以上昇殿者、付其人奏之、）覽畢遣中務、（大臣於第宅）於第宅告申請之許否、或返其上表不許、或令内記作勅答遣之、新任大臣辭表、第一二度只返其表、第三度遣勅答不許之、

〔西宮記 臨時 一〕表

新任大臣三度獻辭表、（又有辭封戶表、第三度有勅答、無勅答者、直寧賜内記云々、）第一表、家司四人舁表案進中務、（函下机以文佐木立、以錦爲縫立、以物作高机、有數物、以鏤貫紙、書以一枚、表紙一枚、書之入函、以二枚重、上、又以一枚、）省官付内侍、（加花足、内侍奏、）以近衞將返賜、（取函入函、以紙等以紙一枚卷表上、以紙一重、返上函、）二度以下付子姪奉上、（不加花足、以紙裹函上、以紙一枚、又卷裹紙上、乃端手挿、以紙一枚、上件一枚、）太政大臣攝政表毎度有勅答、（返表、於殿上遣取勅、參内、或付上卿奏之、唯勅答古不云々、近代給上云云、但不加花足、）第三度、賜勅答、（上卿下勅答、仰内記令作勅答、上卿奏之、後仰例、）中使亞里第、付家司賜之、（納言以下表、或辭狀不許時、中使口勅、之時、初度使中納言、用少納言、）授勅答、中使人或主人取函於便所開見、了中使就倚子、（有地敷、）主人出庭中舞踏、未畢中使逐下、跪候階下、（共可拜歟、）主人仰家司撤倚子敷平座、

[illegible]、小中使著堂、次四位若子姪取祿二[illegible]、授主人、主人取以授中使、中使下殿、主人立座際、
中使再拜退出、主人有隨者、上﨟子姪代拜、殿人到來時、可隨便宜有祿、
(北山抄[illegible])上表事
任大臣初度表、以家司五位四位人進中務省、[illegible]一宮官付內侍、內侍取副[illegible]奏聞、第二三度并辭時所上之表、不必進省、令爲近臣之
子姪奉之、[illegible]敘位之後、下給上卿、若直可返給、先給內記[illegible]令寫、寫返上本表、即入本函、
二[illegible]差近衞次將、令返給中使、與里第、先令家司迎于中門、主人下迎、相逢中使、中使授表函、傳口勅、即令
就堂上倚子、二[illegible]表函授人、[illegible]進庭中拜舞、未畢中使下殿、又令奉平敷座、[illegible]
一[illegible]上[illegible]主人又著座、一[illegible]子姪家司四位等同取祿物、[illegible]授主人、主人取之、中使下殿之間、主人
起座降立、中使再拜退出、第三度有勅答、中使直到、先進室內、相逢時授勅答、[illegible]先披見之、拜舞
如常、若賜酌者、被餘拜舞、宿德人并所勞事之時、子姪代拜舞、若以子姪爲使返給者、更不令著
倚子、直被給、由降時、或無拜舞人、夜時有乘燭者二人、[illegible]
[illegible]
辭大將狀人、只拜舞等、偏如上表、但賜無勅答例云々、
(北山抄[illegible])勅答事[illegible]
上卿上表之時、可返給者、[illegible]頭藏
人奉勅、召內記下給、令寫、寫返上本表、即入本函、[illegible]差近衞次將、令返給、可有勅答者、上卿奉仰、
下給內記、令草勅答、[illegible]參上奏聞、[illegible]清書後
又奏聞如常、東宮并一品內親王上表辭停封戶之時、以納言返勅答、[illegible]
僧綱上表之時、以侍從返給、[illegible]

辭大將狀入筥、拜舞等儀如上表、但狀無勅答之例、其被收時、以近衞次將仰遣事由、(其函給藏人所)

〔北山抄 九羽林要抄〕返諸臣表事

爲中使返王卿表及賜勅答者、卽到其第、(表函令持隨身、達中入、勅答不見前例云々)、先令家司達事由、主人下地、勅使進授表函、傳口勅、(主家王記曰、親受所喚云々、勅使相讓可授、但此事前例無所見)、卽令著堂上倚子、主人拜舞未畢起下跪地、又令著平敷座、主人授祿、再拜退出、給勅答又如之、但或令家司卽傳其函、(前例或以侍從遣之、又用兵衞佐云々)、

〔侍中群要 九〕上表勅答事

家其人差子姪、(若弁官爲子姪、直不遣藏人、兵同云々)、上表奏聞後、藏人奉仰給上卿、(藏人出陣給、但取表傳授是宮也)、上卿召內記令作勅答草、參弓場令奏、奏覽之後令淸書、重奏、藏人召近衞次將遣其第、(以往從紙給之、今代入本宮給之云々)

無勅答事

上表奏覽之後、藏人奉仰、召近衞次將返遣上表、(如本入筥云々)、藏人仰出納、令書二通、一通召內記給之、一通納置紙御厨屋云々、

〔柱史抄 下雜事〕辭讓表事

當日堪能文之儒者之草進、其間作者內々告大內記、許者例也、勅答有無隨時儀、無勅答之時、職事召大內記、(令參六位書人、先例也)、參藏人所、通案內職事、於弓場殿授內記云、令書留案文、正文可返上者、內記於藏人所書寫之、於紙者用紙屋紙若白紙、書寫了、於正文者返上職事、於案文者懷中退出、(六位書之者遣之、大內記許之)、件正文留案紙、正文上卷一枚入本函、遣執政第云々、有勅答之時、職事前日送書狀云、明日可有攝政御上表也、所請不許、勅答任先例可被用意者、其後內々行向表作者許、見表草、又令見勅答草、蓋故實也、當日參陣、上卿著仗座、(件上卿大中納言之間、撰文之人多以勤之)、內記參軾、上卿下給御表、仰云、攝政辭表不許、勅答可作進者、內記稱唯持參草、內覽奏下、如恒、次淸書、(用黃紙也、無御畫日)、復奏之時留御所、上卿口陣座內記退出、

大臣表事

近代大臣無三讓之表、臨時被獻之時、非執柄之外無別勅答、(古昔有之、近代無之、)返給之時、召內記被書儲案文、被納之時、被下正文、有勅答之時、必被下正文也、

〔中右記〕大治四年五月七日丙戌、裏書云、表案長二尺五寸、高二尺二寸、弘一尺三寸、表函長一尺二寸、弘三寸、高三寸、以朴作之、有蓋、

八日、今朝謁大納言殿、被仰云、立表案事、一條院御時立御所、後一條院御時、成西廊□□□間所、鳥羽院御時立南殿西廊也、此事不審者、

〔陔餘叢考二十六〕授官表讓

古人授官例有讓表、劉寔崇讓論、本意爲謙讓、與陶之遺意、文心雕龍曰、昔晉文受冊、三辭從命、是以漢末讓表、以三爲斷、曹公稱爲表不必三讓、又勿得浮華、所以魏初表章、指事造實、今按、曹植等三讓公封表、羊祜讓開府表、庾亮讓中書監表、任昉有爲齊明帝讓宣城郡公表、爲范尚書讓吏部封侯表、皆傳、於世說王述轉尚書令、事行便拜、其子文度曰、故應讓、述曰、汝謂我不堪耶、文度曰、何爲不堪、但克讓自是美事、述曰、旣云堪、何爲復讓、宋書王華傳、宋世惟華與劉湛不爲飾讓、得官卽拜、以此爲常、北史李彪傳、魏孝文以李彪爲散騎常侍、彪固讓之、孝文曰、欲昨擬授人一官、非曰、豈容讓一行而有讓表、會沈約曰、此自應有讓表、與其讓徒欲得授一官、須臾起有啓曰、伯石辭卿、子產所惡、臣欲之已久、不敢辭讓、帝嘆美曰、卿之忠誠、李彪正辭、使朕不能自決、遂不使李彪讓官、又李文愛爲延除官曰、假爲作三讓表、將拜、又爲作謝表、寇準傳、有一貴人初授官、寇準與賓客具在座、謂主人託己爲讓表、主人乃命他作人、謂其不悅、可見古人每授官必作讓表、雖是虛遜之意、然沿習日久、遂僞成風、授職及於唐宋、益襲爲故事、在上者旣授之以官、必不因其讓而收回成命、在下者亦明知其辭不允、特借一辭以鳴高、觀唐宋諸人集中、內外制詞、多有批答不允、及兩表章不允之詔、上下相率以僞、徒費筆墨、甚可笑也、本朝(國朝)之制、凡三品以上遷官者、但有謝恩、無僞爲辭讓之事、於以見朝

讓攝政

廷尋殿、風氣敦實、遐軼前代萬萬矣、

〔夕拜備急至要抄下〕一大將辭退出納親事中闕

依例（並官任例）　依請

自本所以使（年預）進辭狀、件辭狀置殿上臺盤上、職事取之、進入御所之外無別事云々、

〔三代實錄（三十陽成）〕貞觀十八年十二月甲辰朔、右大臣某經抗表辭攝政、〇中略不許矣、　四日丁未、右大臣重抗表、〇中略遂不許、

〔本朝文粹（四表）〕爲昭宣公（基經）〇藤原辭攝政上太上皇（清和）〇第一表　菅贈太相國（道眞）〇

臣基經言、伏奉去月廿九日傳國詔命曰、少主（陽成）〇未親萬機之間、臣基經攝行政事、如忠仁公（良房）〇藤原故事、臣某（中謝）伏惟、忠仁公德崇功大、仁義兼資、況先帝（文德）〇之親舅、陛下之外祖、人望皆歸、官爵既貴、陛下知其元老、專倚攝政、天下萬民、僉以爲宜、今臣年出不惑、性猶貪饕、職致大臣、効無匡濟、朝夕流汗、責深罪重、夫代天治民者、人君也、尊君從天者、人臣也、而詔命曰、比年災異仍見、此復重臣罪責也、漢代以災異免三公之官、臣所尤可懼也、臣平生備員之日、陛下猶引過於一人、臣非常受寄之時、今上何明德於四海、蹇驢既疲坦途、況雲巖不知遠近乎、短檝無利夷濟、況淵水不測邊涯乎、任重道悠、不知所處、今公卿大臣在位者多、皆是有德良人、陛下審而用之、亦亡叔忠仁公臨終之夕、重託扶持、陛下莫忘始終之敎、臣今緣詔命、離去仙洞、攝事朝廷、進恐失軌、退恐違命、臣始歸穆遊之轉翠華、誰知變心之脫黃屋、臣將隨陛下、爲雲中之吠犬、何更歸城闕、爲華表之鳴鶴、臣之至誠、既其如此、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

貞觀十八年十二月一日　右大臣從二位兼行右近衞大將臣藤原朝臣某上表

同第二表　菅贈太相國

臣基經言、中使右近衞權中將藤原朝臣山陰至、奉傳勅旨、抑遏臣請、不知懇款之乖、塞懷更疑微誠之

遂天聽.臣基經誠惶誠恐頓首頓首.死罪死罪.臣位貴官重.皆是陛下之私恩.雖厚封高.亦復陛下之絶

賜.雖似推引.日月彌重.身不宜.然命乍降.處以重寄.縱令陛下責臣以有一割之刃.而殿臣亦.陛下以

無再全之鉛.不獨.身亦難思議.以臣思議之處.欲報主之情.陛下擁蔽之.責重臣罪.臣以爲事蒼

夏長.實是一天.朝廷萬事.內外未.日伏惟臣心不離.今上臣子之志.臣身常侍仙階.不失亡叔

臨終之命.臣讓帥.上天.陛下親政.幼主卽位之時.或有太后臨朝.陛下君寶.社稷

愛思.幼沖.臣公之可.於陛下.萬事之煩.行.有又.令於.然則天下有文

實之治.思臣.之.臣.其.不.之.以聞.臣基經誠惶誠恐頓首頓首.死

罪死罪.謹言

貞觀十八年十二月日　　右大臣從一位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

(公卿補任[illegible])延長八年

[illegible]　正二位藤忠平 [illegible]

(本朝文粹[illegible])爲貞信公[illegible]辭攝政第一表　　後江相公[illegible]

臣忠平言.伏奉去月廿二日先帝[illegible]讓位詔命陛下[illegible]未親萬機之間.臣[illegible]保輔聖躬.攝行政事者.

寵保身.出.且外戚.思之如.其身任臣[illegible]臣初蒙綸言.回顧辭表.未.懷之入.參議.安置

之赴.九條.山陵事.踰旬.行.自過.臣身.是以.本職以.之身.承業重之

實.之首.以遂.之山.之實.其.之.之高.保.

不過尺寸.以遂花.之下.臣已自知.況於物.史.少.大后臨朝.於.和.之

跡不.故實於.之例已明.伏願陛下.思宗社安全之謀.莫道微臣允

滿之儀.不任.之至.謹奉表陳讓以聞.臣[illegible]誠惶誠恐頓首頓首.死罪死罪.謹言.

延長八年十月十三日　　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

同第二表　後江相公

臣忠平言、中使左近衛中將從四位下藤原朝臣實頼、至臣第、返臣章、丹魂所祈、盡於前表、白日不照、改以何詞、臣某中謝臣聞、君猶天也、死生無逃命之義、臣是水也、方圓有隨器之誠、然而分過涯、盈而易溢、身不足用、進而難堪、以臣翻之、不其然乎、臣無才無藝、非舊非勳、應對易迷、汗浹於周勃之背、陰陽難理、牛喘於丙吉之前、況當四海改觀之朝、荷百官總己之任、尋古思今、心迷魂褫、昔周公旦之大聖、未免流言、霍子孟之英雄、難避謗議、或親或賢、招咎如此、雖愼雖畏、塞責若何、猶以社稷之重、強託庸昧之質於公危多、爲私辱至、不曾思微臣忘身之憂、彙恐損先帝知人之德、伏願陛下、曲賜允容、指北辰而拈肝、非東里之潤色、無勝悾款屏營之至、謹奉表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十月十六日　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣某上表

同第三表　後江相公

臣某言、頃者上表、再抽中懷、去十六日、左近衛權中將從四位下藤原朝臣伊衡至、奉宣口勅、抑遏臣請、一乘膠船而泛暴浪、取朽索而奔險途、用韋之心、高略不足、臣某中謝伏惟、恩切者嫺結之趣愈深、事急者發言之旨彌懇、臣謹訪故實、貞觀初、忠仁公〇藤原良房元慶間、昭宣公〇藤原基經保輔幼主、攝行政事、親賢衆茂、才德具高、或追蹤於伊尹、以其君不及堯舜爲恥、或合契於夷吾、以其化不如皐陶作愧、一人待彼雅訓、四海催爲富仁、如臣者德重寄於微身、負大任於小材、性之少知、動而多過、已覺階天之難及、彙恐控地之易墜、思國贓身、一夜九歎、又危蓄牧貴、棹扁舟而逃名、謝安辭功、騁孤雲而養志、是皆擢寵光於既盛、愼禍胎於未萌者也、人心不同、臣顧願異、何則税重載於頹輪、免其覆覆之悔、忘再實於散木、除以傷根之憂、皆全斷質拜、遣日初昇之光、更洗愚心、欽明時中興之化也、伏乞鴻慈、殊賜哀許、得令臣待罪於止足之下、莫令臣招謗於銷骨之中、蒼天白日照此血誠、無任誠懼之至、謹重表以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十月九日〇九上恐脱十字　　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

〔本朝文粹四上表〕爲貞信公辭攝政表　　後江相公

詔書忽宣,異神龍之傳於公臣,伸理既極,陛下高讓,近取諸身,則兩目之左股,遠喩於國,則萬里之長城,故先皇寄以股肱,付以朝政,既授冬寶,無解巨[illegible],況公之於股也,名爲君臣,志如父子,何嫌何疑,以盡以征,方今聖問之身,少未行道,重開三讓之高,古典猶存稍之謙,今上思先帝託付之託,下知少子抱題之情,凡厥攝行,一無資深[illegible]方來於公以,何下從責於股肱之耳,

延長八年十月二十日

〔貞信公記〕承平八年〇天慶元年八月十三日,辭攝政表,使藤尹上,十四日,中使藏方朝臣賜勅答,被物如例,

〔本朝文粹四上表〕貞信公天皇〇朱雀元服後辭攝政表　　後江相公

臣忠平言,臣聞,虞舜垂拱,未蒙許讓,假以師範,文武並興之重,既成所讓,無休,遭貴仁之家,款曳,臣某中謝臣聞宗,小臣[illegible]受重任,誠所足之勝,歷代大臣,前蹤難才,非儒卒之豈何也,曠官之責,非力所堪,臣坐臥焦心,遠近譏遶,聞公旦者,文王之子,武王之弟,自知其貴,忠仁公〇良房者,皇后〇明子之父,皇帝〇清和之祖,猶懷其仁,然猶思王事之久攝,獻皇綱之歸,治實顯功,成退於有國之主,加以輔,遂身於無何之鄕,顧臣以庸朽之質,濫叨官貞觀之職,是可恐也,不可恐也,方今陰陽不和,災異無息,天字之責,已在臣躬,曾以水旱薦臻,大尉猶防之志可致,實地[illegible]辭官,長孫無忌之謝任,聽致任,何務之勤,猶成引咎之禮,況當非常之任,未知過罪之方,伏願陛下,歸上天之反[illegible],下愍之不移,令臣纔行早隨停罷,社稷既足,皇風自寅,不任[illegible]懇之至,謹拜表陳請以聞,臣某誠惶誠恐,頓首頓首,死罪死罪,謹言,

天慶元年八月十五日　　太政大臣從一位臣藤原朝臣某上表

〔貞信公記〕天慶三年五月廿七日,使□侍上辭攝政表,廿八日,中使藏方朝臣來賜勅答,授祿如例,

（本朝文粹四）貞信公辭攝政准三宮等表　後江相公

臣某言、頃辭劇職、寸誠未達、起伏慙怖、心待哀矜、臣某中謝、臣聞用方騁力、奉上之規自存、易務求功、御下之調既謬、何則冶鎔金而成器、鎔範之工足觀、構散木而爲材、制圖之美何在、取喩於臣、何遠之有、臣病臨老倦、衰逐日加、事與心違、同於反鑑之取容、冒過物戾、類於倒裘之求領、爰攝籙之勤、兼四海而未免、官爵之貴、准三宮而難當、昔五湖泛浪、蓋遁珥蟬之榮、萬鍾拋恩、更返屠羊之肆、是則讓功不居、辭賞無受、被猶若此、矧於愚臣、縱招臣身違旨之咎、寧遺吾君妄施之名乎、況邊鎭不閑、重門有驚、隴頭秋水、白波之音鬪聞、邊城曉雲、綠林之陰不定、仰恐先朝寄託之重、俯乖聖世康和之風、豈非委任失材致此災變乎、朝懸夕惕、寢與無聊、仰魁首將門、獸心人面、結黨聚徒、公行剽劫、狂謀不悛、猶同朱髮之賊、野心彌熾、不異白額之貪、陛下註〇本 皇威遠振、玄德潛通、鈇鉞之誅未及、神明之戮先加、凶類合冤、身殞於一箭之前、遐邇同歡、首傳於千里之外、開闢以來、帝王之蹟、夷凶息暴、未有如當今速者也、微臣筋骨衰羸、犬馬之力雖展、陛下聖德鼎盛、日月之光彌新、以此施化、無思不服、伏願曲廻如綸、俾此匪石、早停不堪之攝行、亦收無功之重賞、天地覆載之仁、弼襟懷而化下、春秋生殺之令、決叡慮而撫民、樵夫野老、謗議自停、餘燼遺孽、逆心長滅、不勝悚懼屏營之情、謹重拜表陳讓以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天慶三年五月廿七日　太政大臣從一位臣藤原朝臣某上表

（本朝世紀）天慶四年十月卅日丙辰、今日被奉太政大臣忠平〇藤原辭退攝政之表、使左近中將藤原師氏朝臣也、　十一月八日甲子、大納言藤原實賴卿參入、被行可給太政大臣去十月廿日被奉辭攝政表之勅答并詔書等事、件勅答詔書、以今月三日召大外記橘直幹被仰可作候之由、今日被奏聞、即勅答者、自殿上爲使、藏人頭左近衞中將藤原師氏朝臣、被遣彼第太政大臣之第也、詔書者、召中務大輔源國淵朝臣賜之、件輔、入自日華門賜之、但詔書之趣、依太政大臣固辭、止攝政之號、但萬機巨細先可關白之由也、具由有

辭攝政表

寛治元年八月廿三日壬寅、攝政師實上表、辭攝政事、

臣師實言、臣聞、[illegible]三合之明、無石[illegible]、[illegible]之[illegible]分知、是中[illegible]、[illegible]於耳[illegible]、自□□□鳴不寄止[illegible]、自五言[illegible]重被[illegible]、臣誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、臣聞、[illegible]赤縣之君、先[illegible]佐[illegible]、[illegible]生之主、必[illegible]良[illegible]、[illegible]臣合[illegible]不[illegible]、[illegible]乎、臣[illegible]餘之可取、才非[illegible]之所[illegible]、[illegible]化[illegible]見[illegible]多、[illegible]□□之至[illegible]、[illegible]之所[illegible]也、[illegible]於[illegible]、[illegible]左[illegible]之元老、[illegible]之化者[illegible]右[illegible]之重臣、非[illegible]之事者不[illegible]之其名、[illegible]之[illegible]物、有何一[illegible]斯高[illegible]、夫高[illegible]者[illegible]之[illegible]也[illegible]之[illegible]不□□[illegible]子[illegible]於史[illegible]居、[illegible]任而[illegible]公[illegible]於[illegible]石之任[illegible]子[illegible]之好[illegible]之[illegible]水[illegible]之[illegible]□□臣者[illegible]不[illegible]名於[illegible]下、何必[illegible]心[illegible]於貞[illegible]、[illegible]思苦、[illegible]一門[illegible]有[illegible]仁[illegible]之[illegible]人以[illegible]名[illegible]天[illegible]知之先[illegible]以[illegible]不高[illegible]□家之[illegible]之[illegible]陛下、[illegible]石之[illegible]之重名、又內[illegible]人近[illegible]以令[illegible]不任[illegible]之至、[illegible]以聞、臣某誠[illegible]誠[illegible]頓首頓首、死罪死罪、謹言、

寛治元年八月廿三日　攝政從一位藤原朝臣上表

作者若狹守政家朝臣

清書　公[illegible]

詔[illegible]此[illegible]以[illegible]之[illegible]知公[illegible]古之任、神[illegible]大[illegible]不[illegible]年之[illegible]任、輔佐[illegible]己之心[illegible]之[illegible]代[illegible]二朝之[illegible]之一門、父[illegible]之[illegible]是以朕[illegible]任[illegible]於[illegible]、

委繁務於貞成、則國之理亂在公之心懷、而四岳之議、三讓彌苦、非唯謝外祖貽孫之謀、爭奈何上皇託朕之義、矧早辭劇司、無列補闕之職、縱掌讓假、豈有持滿之憚、偕惟公攝籙之寄、暫代朕負扆之儀、宜致憂國之思、以施濟世之仁、又至于隨身兵仗者、向此象魏之闕庭、壹備武衞之士卒、尙依前勅、勿貴後章、

寛治元年八月廿三日　　　作者　大内記在良

〔本朝續文粹二勅答〕富家殿（○藤原忠實）辭攝政第三勅答　　　敦光朝臣

勅、省表具之、自古受鳳圖膺麟籙者、莫不藉鹽梅以理皇綱、委良弼以安王室、故周卜殷夢、遐謀於廟堂之上、參天配地、垂拱於巖廊之中、君臣之道、今古攸同、而公更懼充滿於連山之雲、屢謝徳鏡於清川之浪、寸丹不移、尺素頻至、披而讀之、憮然動思、匂彼范蠡之乘扁舟、許由之携仙藥、或成一時之功、遂逃厚賞、或□三徵之命、長養高情、公永累葉輔佐之元功、居燮李陰陽之重任、偏依寄託之義、專翊幼冲之身、若夫匪石之心不轉、則金礪之用爲施、指河之誓無憚、亦魚水之契何忘、縱有貴詞、朕不敢收許、又隨身兵仗既存前規、雖欲無用、豈可得容乎、悉遂前勅、勿煩上疏、

天仁元年二月廿五日

〔兵範記〕仁安二年五月廿八日乙丑、早旦參東山、申殿下（○攝政藤原基房）御上表間事、院（○後白河）仰云、御所程遠、不可持參、任例可致勅答沙汰者、未剋參殿下、今日攝政第二度也、于時御座五條坊門南高倉東泰通少將家、此間別當（隆）權中納言（家）右大弁（實）被參會、殿下出御、式部大輔永範朝臣持參御表草、殿下召人、家司勸解由次官光盛參入、奉仰令陰陽頭在憲朝臣勘申日時、插文杖覽之、依無覽筥云々、次召作者永範朝臣（衣冠）於御前讀申之、卽進上退去、次召光盛下給中宮權大進朝雅、令清書云々、光盛持參之、相副檀紙并筥等、次手自令裹覆給、其儀如例、置御前召右近少將通能朝臣爲使、被上之、（納朴筥、以檀紙二重裹之、薄中、上下押、合、紙小机云々、）通能朝臣取之、於中門令持隨身參內、下官（○平信範）同參內、表使於殿上以筥置大盤上、下官爲居其座取之、使退去、次下官奏聞之、不持參上皇、依今朝仰也、此間權大納言定房卿被參、右仗、下

官□□取出御表、撤表紙□紙等、更加□紙一枚、出御座下給、大納言卿云、不許由令作勅答、上卿被結
申官、次召大内記允親給表、令作勅答草、之大納言於西中門被奏勅答草、下官奏聞、重被奏清書、〈御所〉
返給覽〈内覽之後〉、次以勅答〈□□〉、人々本宮以陵紙二重押裹、上下押合不結中、於殿上給左近中
將藤定朝臣、爲中使、經敷政門、於中門令持隨身參向了、前妻召迎内記、下官隨身爲持參院、亀〈〉參
殿下、謁殿南庭西面□、中門上起□、四尺屛風、其前立倚子、勅使中將於
中門以家司光盛申事由、次□□出御中門□上、〈〉□令、受取勅答給、殿下入御、次令光盛被示勅使可
著座之由、勅定朝臣昇自中門廊著倚子、次殿下下立庭中令拜給、此間勅使立避使所、次殿下令昇給、
次四位大夫盛倚子中敷設座、〈〉次殿下出御召勅使、
勅使參上著座、右大弁取白大褂被傳獻殿下、殿下取之給中使、中使給之、拜降自中門廊、退庭中、〈〉二
拜退入歸參内、次從御從直衣、次殿下出御西面御座、公卿被候座、左少弁爲親申官方吉書、〈〉
次下官申藏人方吉書、〈〉次光盛申政所吉書、此間下官退出、

勅、重省上表、知中懷、公德冠家冕、器惟國華、扶我基崇、寶數字宙成和、納大麓而彰功、秉衡而董戎、既
知天緒之有屬、何忘地德之默識、誠請之旨、雖未甘心、緘黙比時、於軒冕何不顧、用於身、權被大望
之時、寶祚得風后之佐、況小子〈〉○次幼沖、宜顧當籍之才、公輔理萬機、貧寶一日、又隨身兵仗者、是
作爲鎭禦、敵纛咸、繼續、夢是虎賁、宜守之、以繼其誠矣、

仁安二年五月廿八日

○按ズルニ、辭職ヲ辭スル事ハ、官位部辭職條ニモアリ、宜シク參看スベシ、

〔扶桑略記〈二十二〉〕仁和三年十一月廿六日乙未、關白太政大臣藤原基經上表云々、勅答云、社稷之臣、
非朕之臣、宜以阿衡之任、爲卿之任、〈〉時人譏之、

〔公卿補任〈光孝〉〕仁和三年〈丁未〉

關白太政大臣　從一位藤基經 五十二 十一月廿一日詔、關白萬機、去八月宇多院受禪、同廿六日關白上表、勅答云、社稷之臣、宜以阿衡之任、左大弁橘廣相卿作、

〔政事要略三十年中行事〕太政大臣辭攝政第一表 紀長谷雄

臣基經言、伏奉去月廿一日詔書、萬機巨細、關白於臣者、臣再三攬己、遂知不堪、臣基經誠恐誠惶、頓首頓首、死罪死罪、臣性固庸疎、器亦濩落、期以早退、如秋葉之待風、顧而自危、譬春氷之向日、況亦老隨老及、病乘衰侵、筋骨難支、驚空穴於虎嘯、行步易失、苦平地於羊腸、然臣猶扶殘喘、未敢乞骸、將爭載營之暫留、以効乃心之不貳、今季逢無爲之代、庶作少事之臣、何忘昧暮之身、更濁明時之政、臣雖欲自勉、力難隨心、無如水流不塞而保、伏願陛下、特賜允許、及汗寵章、慰微臣流汗之意、垂恩苦請、免微臣叨恩之譏、无任懐懇之至、謹奉表陳請以聞、臣基經誠恐誠惶、頓首頓首、死罪死罪、

仁和三年閏十一月廿六日

答太政大臣〇藤原基經辭關白勅〇橘廣相作

勅、太政大臣藤原朝臣、中務省昨進表函、披而讀之、有辭攝政、撫然方寸、不知所爲、卿自天成德、惟岳降神、風儀冠時、忠貞衛國、受從貞觀、化讃嘉會、洎乎元慶、寄重周霍、爾來三代攝黙、萬邦用能、崇宗極於隆平、驅蒼生於仁壽、先帝承揖讓之拜、是卿之功、朕辱翼室之延、亦維之力、伏案先帝詔命、今以爲卿勳効之高、古今未有、將議其賞、答其勞、卿素履謙光、常懷撝挹、受寵有憂色、臨勞有退情、若其讓章勅答、比相往還、恐一日萬機、或致積壅、故言不及實、心在分憂、況朕愚未學政、孝何改道、卿秉鈞奕世、佐命受遺、所謂社稷之臣、非朕之臣、宜以阿衡之任、爲卿之任、先帝右執卿手、左撫朕頭、託以父子之親、結以魚水之契、宛如在耳、豈而忘乎、援筆哽咽、言不多及、

仁和三年閏十一月廿七日

〔貞信公記〕天慶九年九月四日、辭關白表、使備前守上大內、　五日、賜勅答、使爲善朝臣來、被免關白事、

〔本朝文粹四〕貞信公〇藤原忠平辭關白第三表　後江相公〇大江朝綱

臣又聞，功成退身，五千之玄誡，位極年衰，自一之素論可。謂誠是天道之有常，何在人事而可忘，臣某（中略）臣幾以愚昧之身，久忝論道之職，計其星霜已踰十載，求其誠節未得一端，陛下（○村上）登極，更蒙寵命，巨細關白於臣，臣謝錄我家，懼其不堪，昔聞武子之多疵，事五君而竭節，晏平仲之一心，歷三代而輔政，如臣者何敢，老至衰臨，日加白日之影已斜，春秋之徐景過，智刃鋒鈍，何分五教於堯朝之始，情理殊朽，顧德義隨於漢朝之時，論古鑒今，獨自謝懼，方今聖德日新，叡哲玄覽，桃山爲心，高卑共仰，如雲之化，孫爲成景，遠邇爭慕，舜禹之勤，則決事重圖可求，皇風之遠宣，何煩病臣，而更致王事之曹擁乎，爲世爲身，有諸何益，伏願陛下曲照愚丹於一寸，早停關白於萬機，然則津達歆伏，臥秋月而照夢，我閑抽毫，爲蘇國（中略）忠老不勝悚懼之至，謹拜表陳請以聞，臣某誠惶誠恐，頓首頓首，死罪死罪，謹言，

天慶九年九月　日　　太政大臣從一位藤原朝臣某上表

菅三品（○文時）

〔本朝文粹　二勅答〕答關白公（○忠平）（中略）辭關白表勅答

勅，得表具見退讓之懷，公臣輔功積，化導已高，前朝之聖明，待公增輝，今朕之愚昧，賴誰被喉，面先朝面命者，尤病以陳情，何慕石之要實，唯須霞之永敦，何淡其於四海之朝露，欲使歸於五湖之春煙乎，雖牧實且數人矣，爲朕相，顧不成，因念遂成以功實，勿因公三國之子，斯乃朕之二八之臣也，天既與其賢，敷責欲其實亦何言，從何言歟，若何心懷，性花月，且遊林園之間，猶恐棄風雲，不離桃秋之上，宜體此意，莫煩陳章，

天曆二年二月二十七日

〔日本紀略　六村上〕貞元二年十月廿三日庚辰，關白左大臣（○藤原兼通）上表，召大内記菅原資忠，作不許之勅答，中使左近少將藤光昭，

〔日本紀略　十一一條〕長德元年二月廿六日壬寅，關白（○藤原道隆）上表，有勅答，

〔本朝文粹　四表〕爲入道前内大臣（○藤原道隆）辭關白表　　江匡衡

臣道隆言、先寫丹情之底、敢沾玄覽之前、祗渙未收、蠲歎逾切、謂其殊獎之平重、供私之寵深、譬猶挾纊嵩而壓累卵、傾渤澥而注孤燈、若不重陳、恐涉飾讓、臣某中謝臣聞王者之御天下也、承天建官、象地分職、所選失道、則泰階不平、所受乖仁、則列岳爲異、臣伏撿家譜、列祖先臣之秉鈞柄者、多是老年耆德、莫不奇才大功、而今壯年而早昇、不才而妄進、三十餘初攝政、四十餘猶關白、位在三公之上、目眩易迷、身疲萬機之間、手繁難理、況女則入椒房、同體乎垂衣之化、男亦居蓮府、增秩乎弱冠之齡、功淺賞隆、徒修車丞相之軌、父榮子貴、自齊呂大宰之譏、夫然則股戰非可久立、顏厚非可寄居、重載之舟不犀、那堪濟川之用、再實之樹有蠹、未免待風之危、伏願陛下憐臣辭病、允臣遁名、縱復履冰赴熱、懇往日於虛無、唯將廉月占雲、養餘年爲己有、不勝荷懼屏營之至、某誠惶誠恐、頓首頓首、謹言、

正曆六年○長德元年二月五日　　關白正二位臣藤原朝臣某上表

關入道表　　江匡衡

臣某言、淸唳頻聞、常惜之聽隔雲、綸綍猶垂、青泥之鱗出浪、雖知詔命之難違、不堪心顏之罔厝、臣某中謝臣聞輔佐之臣者、君之腹心也、上代天工、下執人柄、四海由之而理亂、三台由之而弛張、故擇不言親疎、任不言貴賤、高祖納陳丞相、天下不謗用其仇、文王舉周公旦、天下不爲私其子、如臣者匡○匡恐誤德虛受、寡實濫居、性頑而多關政、惡西門豹之佩韋、才淺而少綸言、謝東郭牙之前席、夫高秩厚祿者、天譴○下恐脫之字緣也、異賞殊私者、鬼瞰之本也、臣寵最深、而病又深、齡不盛而魂更惑、鬢浮榮於夕露、華髮薄而簪纓慵、扶微力於春風、傳歷竊而錙銖重、然猶所以强出入于紫闥之中、常徘徊于金屋之下、不獨貪高秩、不獨誇異賞、顧仰少年之天顏、是則難背先父之素意、夕對長秋之月色、亦猶不舍愛兒之玉音矣、方今陛下春秋已長、飾首之儀早成、微臣筋力先衰、止足之思彌切、臣之所請、雖謂不忠、但去官職而無名、縱不改關白之稱謂、歸機務以任意、只欲翫城東之風光、伏願陛下廻大陽之皇睿、照小量之懇衷、特垂愍謹、親此政事、然則逃鳩鼎於微躬、闕求甘露延年之藥、任鵡鞋於叡指、長傳薰風理世之歌、不任惶迫之

之事、謹重上表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

(本朝續文粹四)辭關白表　　實綱朝臣

臣聞、通言任重能輕者、得譏不稱、而自牽、誠謂守分者、其氣不殆、衝先去明然之理、玄鑒尤明、臣某中略臣屬謂叢寶近臣聖朝、抗表辭官職之者、或計休退、聊忠盛言強仕以乞身、誠是退食避職於未兆、違天鑒於無形、今臣之所謂、皆豈異彼、而臣者以病以辭、夏涼履薄、心猶渉危、肝腸寄巧、數疾、由被觀難已衰、啟國家政事、不能關白自臣、去歲十于今秋、上章請、及因五衰動無次、以給短闕、既辭、權君郡之勝吾焉在寸御未成、若子雲之筆札、異邦諸之美、歌鸞不德、貴讓先之忠實也、家政俯以不過二十歲、今欲臣之處昧也、就皇綱以致、及五十歲、有何一能、惡其先賢倫思、歷代輔弼之重、還爲晩節沈淪之媒、伏乞陛下、曲照聖衷、斷懷舊年之紛擾、早聽捨己之愚誠、又隨身兵仗各付本府、不勝懇惻戰懼之至、謹重拜表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

康平七年七月八日　　關白從一位臣藤原朝臣上表

(本朝續文粹四)關白第二表　　實綱朝臣

臣某言、去年十二月廿八日、中使至、四位下行右近衛權中將兼丹波介藤原朝臣某忠重、傳綸命、抑臣苦請、雖仰鑑讓之懇為、未蒙被陳之懇切、臣某中略　臣聞寸草接水、豈有霑萬頃之流、尺木短梯、都無登千年之蘭、近知以身之微將、不能報網紀之大位、於藩籬以低遠、未知如山之雲花、有重載以恐思、如凌龍尚之峻、幾乘雲之任、心難問措、況復強仕之齡未、於權貴之威既極、長女之備后妃也、春教齊令之芳儀、外孫之爲皇子也、紹圖降誕之慈、還倩從家門之位處、何翻父祖之遺蹤、榮幽之過分、雖能人間之耳目、尤論之招得罪、遇蝋之明戒、方今陛下新履乘之圖籙、及五紀之星霜、俗反淳素、栄陸之風遠、風德作威黃、栄中之際、自開勞見朝野之宿、消豈亦福之利用哉、臣之退、蓋在斯時、昔范蠡之改名姓也、徘徊於五湖之波、張仲之鳥鵲翔也、初是念於一閑之月、欲臣所見彼二子、非偏逐肥遁於先賢、唯

欲弭謗論於陋質、伏願乾𡗗曲垂矜憐、早寢絲綸之神聽、更罷博陸之崇號、不勝荷懼屏營之至、謹拜表以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

承保三年五月十日　關白從一位行左大臣藤原朝臣上表

同第三上表　美作守匡房

臣師實言、去五月十日、中使從四位上行左近衛權中將兼備前介藤原朝臣公實至、宣勅命、不許所請、龍環難返、五雲之衛彌高、鶴唳未休、九皐之聲欲竭、雖觸徑尺之鱗、何堪方寸之惑、臣某中謝臣聞以蠡測海、雖窮萬里之煙浪、令蚊負山、豈舉千峯之雲岩、物已有之、人又宜然、臣德非周南、智異魏丙、謬入斗筲之小量、早升台鉉之上班、榮分既足、久佩山玄之靈珍、寵光更臨、忽荷關白之重寄、厚恩所窮、無水而沈、衆毀所歸、不塞而候、臣謹訪故事、自貞觀以來二百餘載、居攝錄之者十有三人、或朝之重臣、國之元老、維岳降神、或渭陽之親、海表之材、自天成德、故遂補袞職、退叶民望、一人在昔頼其慶焉、四深于今受其賜矣、如臣者、能不及前賢、纔積五七於夏曆、地非在外戚、隔桑賓於漢朝、覆餗之誠恐〇誠恐疑誤雖通、何謂大漢之鹽梅、曲轅之材易沈、豈堪巨川之舟楫、方今陛下鍾千年之昌運、俊百王之逸觴、化高黃炎、吹篤之鳳韶、響道被白水、宿草之靈讓名、臣値聖明文思之朝、忝啓沃統理之任、譬猶迎日月之清輝、揚爝火之照、對雲雨之渥澤、施浸灌之功、論無用、不豈然乎、況亦比屋之民、封賞可期、多士之代、隱逸何絕、張子房之去漢闕、跡人赤松之風、綺里季之歸商山、貌悉蒼花之雪、求而用之、天下幸甚、伏冀停非據之職、更掄有職之倫、上節恐主妄授之名、下免微臣充滿之責、不堪荷懼征營之至、謹重奉表陳謝以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

承保三年六月七日　關白從一位左大臣藤原朝臣上表、

〔本朝續文粹二勅答〕大殿〇藤原師實辭關白表勅答　在良朝臣

勅、忽省表翰之所陳、更有沖襟之懐越、夫居王室者、先掄棟梁之材、體帝範者、必專股肱之任、故鳳紀之

代、良佐爲社官之羽儀、[illegible]之助、輔相傅說之賢、賢任庶職無、理況於小子哉、加之風存淳朴、俗受澆漓、不[illegible]公輸納之道、誰宣朋友之宜、化成由仁、[illegible]而[illegible]言成仰、[illegible]而[illegible]妖氣、須俟致清鑒之明法、豈以爲今道之卜筮、又今如[illegible]川之釣瀨水、仲達之避斜[illegible]、雖[illegible]遁[illegible]於異域之風、空[illegible]鑑覆於戚里之[illegible]、何過賢祖之[illegible]陰、徒求[illegible]之任、[illegible]周[illegible]之[illegible]、宜施齊民之德、

寛治七年十月十日

(永昌記)嘉承元年七月廿六日乙卯、臨曉自[illegible]〇〇日有召、仍[illegible]參、[illegible]羽、被[illegible]衣、并有[illegible]消息事等、歸參內裏之後參殿下、[illegible]仰[illegible]廿九日可有[illegible]上表由[illegible]答可[illegible]、大內記敦光依敦基[illegible]有[illegible]、依先例文章博士可[illegible]仕敕答、[illegible]士內記[illegible]官等可奉仕敕[illegible]、[illegible]云々、[illegible]日有上表、如何者、[illegible]更[illegible]事、　廿八日乙巳、依召參殿下、明日[illegible]上表不[illegible]引[illegible]何、文章博士[illegible]仕[illegible]答、其例[illegible]、凡諸家[illegible]吉例、[illegible]可[illegible]定者、[illegible]食之由有仰、　廿九日戊午、今日殿下有[illegible]上表事、[illegible]自初度表也、大學頭敦宗朝臣草之、知實書之、文章博士實[illegible]朝臣草敕答、[illegible]大內記敦光[illegible]也、

(本朝續文粋[illegible])爲家[illegible]〇〇[illegible]自[illegible]第二表　　　敦宗朝臣

臣忠實言、去七月廿九日、[illegible]宮[illegible]表、[illegible]章[illegible]、[illegible]日中使正四位下行左近衞權中將兼[illegible]中納言[illegible]原朝臣[illegible]忠[illegible]奉宣[illegible]旨、還臣上表、[illegible]無力[illegible]之山、在[illegible]高[illegible]、[illegible]國之石、承步[illegible]、臣某中[illegible]、臣聞上天[illegible]高日月以光、其[illegible]明[illegible]乎、[illegible]佐以[illegible]其功、故九臣[illegible]、[illegible]正德化之冠、四友[illegible]官、則文[illegible]仁之[illegible]、[illegible]以人[illegible]、伏惟陛下、代[illegible]之上、[illegible]有序、[illegible]之[illegible]、實[illegible]無私、而今所以不[illegible]之[illegible]、[illegible]自之重[illegible]者、[illegible]之[illegible]、[illegible]有[illegible]用之餘[illegible]也、然而臣無才可取、無行可[illegible]、[illegible]、於[illegible]天之不可[illegible]功[illegible]於[illegible]、[illegible]厚地之不可[illegible]、自知非[illegible]、[illegible]仁、且夫君子[illegible]、[illegible]臣[illegible]分[illegible]、今日[illegible]之助主也、[illegible]公侯之封、石[illegible]相之[illegible]、君也[illegible]賢者之[illegible]、是[illegible]先於[illegible]於[illegible]於方來者也、豈於[illegible]乎、休退之念、[illegible]在[illegible]、[illegible]己、臣何改、

夙夜在公之節、縱難避大名、臣豈忘忠謙傳家之誡、若有一言之利於行、則披腸心而應陳、若有一事之叶於宜、亦竭肝膽而欲達、陛下以理世爲宗、須行善政、以善政爲思、早擇賢才、彼秋霜八旬、商洛山之月用老、暁波一道、傳巖澗之水聲寒、殊有粥迎、何無賢哲、伏望天慈、停臣安授、持滿者心所懼也、請守知足而先全身、恭勤者性所承也、請遂微班而永奉國、無勝悚迫屛營之至、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

嘉承元年九月十八日　　關白右大臣正二位臣藤原朝臣上表

敦光朝臣

〔本朝續文粹四表〕辭關白表

臣忠通言、去年十月廿三日、中使正四位下行左近衞中將兼美作助藤原朝臣宗輔、出自紫閣、奉宣綸旨、愛曦傾心、專候宸光之曲照、陳露瀝懇、更驚温喩之逾深、臣某中謝臣聞、天地者運寒暑以成功、君王者因輔佐以致治、隆周當統、旦奭作四墉之維、大漢受圖、蕭曹爲百司之冠、蓋知節賢挺才、則上下具瞻、履義執忠、亦中外是賴者也、伏披國典、倫撿家譜、掌樞機之巨細者、多朝廷之元老焉、雖云太早、猶及壯年、偶曾祖父康平大相國、少而攝帝籙、尚以過臣齡、況德叶辰象、著徽行於景鐘、氣凝風雲、垂佳猷於方策、臣盧頊而居鼎鉉之任、幼弱而承柱石之基、譬猶寫大虛於寸管、辨以九野之分、託重載於尺舟、涉其三峽之危、器之乖用、不亦然乎、彼陳蕃一榻、職使徒馳于徐孺子之門、魏文十徵、鶴書空飛于管幼安之巷、斯皆高尚養性、肥遯樂情、如臣者、職備台衮、非無補闕之誠、身飽皇恩、長有報國之志、唯是尸祿之謗不免、贊襄之勤難抽而已、伏願陛下殊察微衷、請弭博陸之名、將守充滿之誡、不堪懇款悚懼之至、謹重奉表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

保安三年五月十七日　　關白内大臣正二位臣藤原朝臣上表

〔兵範記〕保元三年十二月十八日甲辰、今日關白藤原基實初度上表也、〇中略臣某言、伏奉今月五日詔命、萬機巨細百官總己、皆先關白於臣、然後奏下、一如舊典者、又去八月十一日勅賜左右近衞府生各一

人近衛各四人、以爲臣隨身兵仗者、[illegible]臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹[illegible]茂典
於往[illegible]、[illegible]於本朝[illegible]子[illegible]始起[illegible]之嘉名、[illegible]昭宣公[illegible]、永[illegible]奕代之芳[illegible]、以來、[illegible]
[illegible]之者、多是[illegible]之外[illegible]、又[illegible]之[illegible]臣[illegible]共[illegible]全[illegible]、[illegible]中
台之[illegible]下[illegible]之[illegible]、方今[illegible]之[illegible]、[illegible]白之[illegible]、柱石[illegible]、何[illegible]於王室、[illegible]
[illegible]化於天[illegible]、況乎[illegible]古來[illegible]、在小[illegible]大任[illegible]今[illegible]家之[illegible]
[illegible]之不[illegible]、[illegible]之[illegible]、寸[illegible]中[illegible]之[illegible]之[illegible]可知、伏[illegible]下[illegible]
[illegible]外[illegible]己之任[illegible]、守[illegible]止足之分、又[illegible]身兵仗各[illegible]本府[illegible]、不[illegible]
之至、謹奉表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

保元三年十二月十八日　　　　關白右大臣正二位藤原朝臣上表

作者式部大輔永範朝臣

淸書宮內少輔伊行

日下御名被入御筆

狀中三箇所淸書人直書入之

〔吉記〕治承四年二月十八日庚子、今日關白殿[illegible]第三度御上表也、[illegible]時中使右中將隆房朝臣持
參御表、[illegible]之、入上戶[illegible]取御表[illegible]上、[illegible]予[illegible]取作[illegible]、付少納
言內侍奏聞、覽御覽了返給之、[illegible]之、予給御表加[illegible]紙一枚、[illegible]出御於[illegible]座、仰三條
大納言云、不許所讓令奉勅答、[illegible]次上卿[illegible]外座、召文章博士光範朝臣、被仰草事、[illegible]
[illegible]
[illegible]、以少內記[illegible]次內覽、但令[illegible]二通、以一通[illegible]殿下、以一通進弓場、被奏之、[illegible]
[illegible]予奏之、御覽了返給、仰云、令淸書上卿不[illegible]、取[illegible]勅答淸書被奏之、予又奏之、次又以內侍返給

辭大臣
辭太政大臣

覽筥、(予以藏人、)次下給勅答、(納本筥、主上令御覽下給之、尤參入也、近代職事給之歟、以二枚裹之、其裹紙知給歟、以紙下押付上歟、件裹紙兩說歟、予所々所見、先押合之體也、)予取之置小臺盤下緣上、(筥以外方、)次召中使左中將泰通朝臣、參進從殿上下方取之、退出參向、(今度被返保安例、第三度勅答、二三度同人可勅之由、見祖父御記、返件例、今依抄也、)

〔諸家傳 九 鷹司〕尚忠公

安政五年九月二日　辭職(○關白)

依省略儀、無上表作法、

同月四日　辭内覽

同年十月十九日　勅答不許

頃日依所勞辭職之事、雖被願申、未及老年、尤補佐委任之器、保護早可有出仕旨、被仰下候事、

〔諸家傳 二 二條〕齊敬

慶應二年九月四日　辭職(○關白左大臣)

辭職甚切、其旨難黙止、頻年國家多事、宸憂殊深、内外執務、抜群勵勤、被安叡慮、今爲辭職者、被失股肱、早遂出仕、倍可盡忠節、依之被召留、

同月八日　辭職(度二)

同日　勅答不許

同三年四月十九日　辭職(度三)

同月廿七日　勅答不許

〔文德實錄 九〕天安元年二月辛卯、是日太政大臣正二位藤原朝臣良房抗表曰、臣良房言、臣年髮已衰、羸病彌積、仍比陳表、乞停所職、祇奉還詔、未蒙矜許、重欲上誠、伏伺(○伺字上下、疑有脫文、)陳、何謂塵造無聞、殊弊更加、不以臣之不肖、委以大臣、非分之榮、已出慮外、骨驚毛竪、轉增憂懼、(中略)臣聞、太政大臣者、君人取則、

至德位闕、無其人則闕、誠有以也、實恐臣[illegible]、先臣升此位者、屈指皆以體隔於人、任疑闕於身、然而今
德不肖古今[illegible]尤甚、[illegible]虎[illegible]未下、如履水面、所[illegible]更衰、危命增危、伏願曲照、
丹心、[illegible]々之化、[illegible]於[illegible]、[illegible]々之[illegible]免於[illegible]、則[illegible]序[illegible]經克全、豈臣輕[illegible]、[illegible]所、
得預不[illegible]丹懷之[illegible]、謹拜表以陳聞、勅答不許、　丙申、是日、太政大臣重表曰、臣良房言、[illegible]上聞、既具
[illegible]事、何在由[illegible]、[illegible]高[illegible]、[illegible]不敢[illegible]危、[illegible]託、中略臣[illegible]丘
山、[illegible]命[illegible]、何時不[illegible]、[illegible]中[illegible]於自[illegible]、未有今日之甚矣、[illegible]臣之[illegible]、當是陛下之殊恩、
先父之[illegible]上[illegible]下[illegible]已、[illegible]於其[illegible]乎、[illegible]不次[illegible]非常、[illegible]火而
[illegible]不[illegible]允[illegible]之[illegible]老馬無休[illegible]之先[illegible]、伏願曲留[illegible]分[illegible]其
[illegible]之[illegible]以知足之分、[illegible]心[illegible]以扶[illegible]以持[illegible]、然則生涯之分、於臣
已足、[illegible]身[illegible]九[illegible]由[illegible]生[illegible]、不任[illegible]之至、[illegible]左兵衞佐從五位上臣藤原朝臣
良世奉表陳聞、[illegible]伏[illegible]不許之、　三月辛丑、太政大臣重表曰、臣良房言、臣聞、[illegible]高[illegible]
日[illegible]天地[illegible]三省[illegible]間[illegible]、中略臣[illegible]自[illegible]才[illegible]
此[illegible]不及[illegible]古今[illegible]之[illegible]賀來有[illegible]位高[illegible]臣之比、是以[illegible]而[illegible]、
上[illegible]下[illegible]己身[illegible]之[illegible]臣不敢[illegible]之[illegible]命、
[illegible]之[illegible]升之[illegible]太[illegible]之化、伏願[illegible]此[illegible]高之[illegible]之
[illegible]之[illegible]水之[illegible]不任[illegible]之至、重奉表以陳聞、重表[illegible]不[illegible]
允許、

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月十五日甲午、正二位守太政大臣藤原朝臣基經上表曰、伏奉今月
四日[illegible]命、以臣爲太政大臣、[illegible]如故云々、伏願[illegible]收新命、許歸初服、帝不許、遣左近衞少將正五位下
兼行[illegible]院長官近江權介藤原朝臣遠經、賜太政大臣[illegible]宣口勅曰、此職、太上天皇陽成之所拜授、

豈是朕之可自由乎、加之諒闇在時、戒愼勿懈、須早親職、攝理如舊、　廿日己亥、太政大臣重上表、　廿一日庚子、遣右近衞少將藤原朝臣清經、就太政大臣枇杷第、齎墨勅、諭旨曰、勅太政大臣、省表悉之云云、宜敬乃職、用副朕懷、時一如前詔、莫復辭焉、

〔三代實錄 三十九 陽成〕元慶五年正月三日壬子、太政大臣抗表、　六日乙卯、勅曰、先帝託六尺之孤、寄四海之命、之本情乎、三讓雖高乎、萬機多權、宜屈獨善之心、俯諧百官之願、　十九日戊辰、太政大臣抗表云云、伏以今月十五日、豪授從一位云々、勅答曰云々、宜上奉先皇帝之聖旨、下叶予一人之悃懷、欽承往命、用斷後章、縱雖百上、不欲一從、公宜悉之、　四月廿五日壬寅、太政大臣抗表曰、停臣新職、復臣舊班、帝優詔不聽、遣左近衞少將藤原朝臣有實於枇杷第、返表申旨、

〔本朝文粹 四 表〕爲貞信公〇藤原忠平辭太政大臣第三表　　後江相公〇大江朝綱

臣忠平言、竊不知、鐘背應猶催九乳之響、水無入柱、絲波暗驚七絲之音、空抱懇誠、丹款須馨於寸地、更混飾讓、玄聽未通於上天、雖增悚越、何不被陳、臣某中謝 臣聞、經邦之道、圖唯德是務、御俗之恒範、非賢勿居、臣位重才輕、器小任大、雖愚短翅、豈愧九萬里之搏風、井蛙淺心、忽迷三千尺之激浪、而聖詔重降、褒諭彌倍、雖知違繡之難犯、遁忘踞尾之爲憂、夫臣子之間、忠孝惟一、或有違而得道者、或有順而失義者、既能進臣官、增臣榮、是遂先皇之命也、今復哀臣新許臣讓、勿滿衆庶之唇也、夫然、故君臣之美兩盡、上下之疑應觀、不然君猶自稱孝子、臣何得爲忠臣、況膏粱之味非不美也、過度則心腹必受其病、雨露之施非不甘也、涉旬則草木不勝其澤、故蕭相國登封之朝、邵平致弔、孫叔敖受拜之日、老父誠弘、縱彼無實、事不僞言、方今陛下春秋方富、松栢之質、迎千年而彌堅、微臣齒髮既衰、蒲葦之姿、臨九秋而漸脆、謙退者、常存之藥也、謹愼者、不死之藥也、所以暫惜餘生、求全陋質者、返天下於無爲、先免敝朝提市之恥、期海內於有截、後爲堯年鑿井之氓、伏願陛下許此呼天之請、鑒以量力之誠、令一老臣展其報國、不任惶迫之至、謹重拜表以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

承平六年九月十五日　太政大臣從一位藤原朝臣〈忠平〉上表

(日本紀略〈九村上〉)康保四年十二月十九日癸酉、今日太政大臣〈實賴〉〈小野宮〉初度表、

(本朝文粹〈四〉)爲清愼公〈實賴〉〈辭〉〈職〉辭職五度第二表　菅三品〈文時〉

臣〈某〉言、賞疑從重、罰疑從輕、嗚呼、賞不止、伊尹展禽雖拜候、智哲明、伏臣暗昧、老僮欲逃、伏論巨細、更望臣某〈中略〉臣聞、備官者任重之所期也、其寄不輕、重職顯名者、積厚之所蓄也、其能不待我度、臣雖不敏、旨既騁、況亦今月十九日勅命、賜内舍人二人、左右近衞各四人、爲臣隨身兵仗、非私爲賞、朝恩之後、加臣之恩寵、有何實者、綸旨不虚之事、何臣有忠信之甲、何更任無窮之恩、爲臣分警衞之崇、猶有益於舊、既賢備野、於實矣、色、性之天然人物一致者也、臣名浮於行、誠成於衆、才華早欠、風塵之處更浪、遷拜最深、力寄之地惟越、非賤官之恩、非厭臣之命、唯此奔謁、未得歌休伏、願主上一曹停職、然則陛下謝德之明、臣匪躬之義自顯、無任懇之至、謹重上表陳乞以聞、臣〈某〉誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

康保四年十二月廿五日　太政大臣從一位臣藤原朝臣某上表

(日本紀略〈九冷泉〉)安和元年正月十六日庚子、立太政大臣〈實賴〉〈小野宮〉猶子此日上表、十七日辛丑、返表、二月廿九日壬午、太政大臣上表、使右近少將爲光、三月二日乙酉、今日太政大臣上表、勅答、六月廿一日癸酉、太政大臣上表、廿二日甲戌、左近權少將佐理來返大臣表、十二月廿五日癸酉今日太政大臣上表、

(本朝文粹〈四〉)爲忠義公〈兼通〉〈辭〉〈職〉辭職第一表　菅三品

臣兼通言、伏奉去月廿八日詔命、以臣爲太政大臣、恩越恒涯、事出望表、累日而立、進退失圖、撫心而思、永投岡谷、臣某〈中略〉臣伏惟、太政大臣者、有德之選也、調鼎之職重又崇、爲衆從此化、賢儀形之寄深彌大、四海由是風猜、昔祭丘作周、猶是七年之晚遇也、雷不居、非八旬之早貴乎、今臣性是用心多闕、餘

則知命未過、謬以無能之陋身、忽忝非據之重任、未知功臣苗胤、無賢無愚、必可至大位歟、且將成里枝親疎老壯少、亦可登清階歟、不然多士之例、得人之世、何由拋蘭蕙而不刈、十步之外採蓬、蘖鶉鷃而不招、一林之中驅雀鵲、是臣之所以忘寢止食、心寒而魂驚也、伏願宸波翅霑、叡景曲照、更降一切之新命、令返三司之朱班、不勝戰汗屏營之至、謹拜表陳讓以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天延二年二月十日　正二位守太政大臣藤原朝臣某上表

爲入道前太政大臣〇藤原兼家辭職并封戸准三宮第二表　江匡衡

臣兼家言、今月十五日中使權中納言源朝臣伊陟、勅至奉宣聖旨、抑臣上表、鳴鶴之聲空隔、卷龍之命不聽、惶惑失圖、心顏悶亂、臣某中謝臣聞貞觀之初、命忠仁公〇藤原良房爲相、三公當仁、百官總己、俗阜無貴于受崇封、德高有使于龍厚禮、陛下以今日天下准昔時、賦斂之虛耗萬倍、以貞觀故事比微臣、才用之懸隔千里、加以彼間公卿、其數纔十有三人、節儉變深、實封不饒、今當時所備者、上皇三院〇冷泉、圓融、花山、內主三宮〇太皇太后昌子內親王、皇太后藤原詮子、中宮藤原遵子、及公卿廿一人也、計其職邑、爲國煩費、而臣更擬三宮之儀、又居正台之任、若以前賢之末葉謂賢臣、則周邵之後、無登三事、若以左威之元老謂崇臣、則陰郭之家、不過九卿、臣扶帝道履政途以來、變異屢臻、論議無厭、剛六典則五既闕、論八柄亦七不堪、彼漢武聖主也、然不能乘輕舟而浮江湖、伊呂賢相也、然不能策驥馬而馳郊野、雖塞聖主賢相、未若越人與胡兒者、況愚臣哉、得持重籌以久濟巨川、假六轡以環陟象岳哉、方今陛下、秉展玄冕、新莅蒼生、百辟傾心、憺々然以待陛下之政、四夷傾耳、康々然以聽陛下之風、臣之休退今此時也、昔羊叔子之歸故里也、指二疎而爲吾師、鄭臣君之擧新材也、推五倫而遜其位、何以忘止足、猶欲側通蹤、伏願陛下、暫撤玉懸、幸照丹款、封賞衛卒、是素所辭、早停先勅、儀飾儀形、又新所退、必納後章、不勝戰汗屏營之至、謹重拜表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

永祚二年〇正暦元年三月十七日　太政大臣從一位藤原朝臣某上表

同第三表　　江匡衡

臣某言,頻獻表章,求[illegible]要[illegible],而[illegible][illegible]猶[illegible],[illegible][illegible][illegible]先[illegible],而[illegible][illegible]於臣某中臣伏惟[illegible]能授官,上[illegible][illegible]之[illegible][illegible][illegible]分[illegible],[illegible]任實由其全身,若[illegible]乎[illegible],其[illegible][illegible]如[illegible][illegible][illegible]於[illegible][illegible]之[illegible][illegible][illegible][illegible]於[illegible][illegible]之[illegible],者也,臣[illegible]先,[illegible]事[illegible]身已[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]力[illegible][illegible],[illegible][illegible]之[illegible]也,[illegible]馬先之,況[illegible]馬之[illegible]乎,[illegible][illegible]之[illegible]也,[illegible]夫[illegible]之,況[illegible]夫之[illegible]乎,凡[illegible][illegible][illegible]者必[illegible][illegible][illegible]之[illegible],[illegible]大[illegible]者,[illegible][illegible][illegible]之志,今臣所[illegible][illegible]於[illegible][illegible],夫事無[illegible][illegible],[illegible][illegible],[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]又[illegible]今[illegible][illegible]臣之[illegible]六[illegible]者可[illegible][illegible][illegible][illegible]多[illegible][illegible]兮[illegible][illegible]臣之[illegible]三公,者是[illegible][illegible][illegible],加以[illegible][illegible][illegible]上[illegible][illegible]不[illegible][illegible][illegible]之[illegible][illegible],以[illegible][illegible]矣,今上陛下[illegible]一不[illegible][illegible][illegible]之父,老實以外[illegible],[illegible]太[illegible][illegible][illegible]何爲子之[illegible]少[illegible][illegible],[illegible]有[illegible][illegible]之名,其外[illegible][illegible][illegible][illegible],多是臣之[illegible][illegible],二府九[illegible],年又臣之[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible],未有才[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]如臣者矣,是以[illegible]公[illegible][illegible],何更[illegible][illegible][illegible][illegible]招年死,[illegible]封[illegible]老[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]生臣[illegible][illegible][illegible][illegible]以[illegible]野[illegible],今[illegible][illegible]可[illegible][illegible]化,臣[illegible]明,[illegible][illegible]以先[illegible][illegible],位[illegible]亦[illegible][illegible],[illegible][illegible],方今[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible],[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]九十,[illegible][illegible][illegible]年之[illegible][illegible][illegible],今辭官[illegible]而至再三,則是[illegible][illegible]之[illegible][illegible]也,[illegible][illegible]十[illegible]何[illegible],一心伏[illegible][illegible][illegible],[illegible][illegible][illegible][illegible],臣[illegible][illegible]之[illegible],不[illegible][illegible][illegible]之[illegible],[illegible]臣[illegible][illegible]之心,自[illegible],[illegible][illegible]之[illegible][illegible]任[illegible][illegible]之[illegible][illegible][illegible][illegible]正四位下行右近[illegible]中[illegible][illegible]伊[illegible]守藤原朝臣[illegible][illegible][illegible],[illegible][illegible]乞以聞,臣某誠[illegible]誠[illegible][illegible]首[illegible]首,死罪死罪,謹言,

永祚二年[illegible]四月廿一日　　太政大臣從一位藤原朝臣[illegible]上表

同第四表　　江匡衡

臣某言,昨上[illegible][illegible],[illegible][illegible]其之[illegible],[illegible]臣[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]之[illegible],[illegible][illegible][illegible][illegible],[illegible][illegible]之[illegible]未[illegible],[illegible][illegible][illegible][illegible],呂[illegible]之[illegible]方[illegible],臣某中臣伏惟陛下[illegible][illegible]王業[illegible][illegible][illegible]先[illegible]出一言,不[illegible]日而[illegible][illegible][illegible],[illegible][illegible]一事,不[illegible][illegible]而安[illegible]民[illegible]臣[illegible]以凡[illegible][illegible][illegible][illegible]命[illegible][illegible][illegible][illegible]之天久[illegible][illegible][illegible]之[illegible][illegible]之[illegible],[illegible][illegible][illegible]未止,任之[illegible]已,[illegible][illegible]無[illegible],[illegible][illegible]且之[illegible][illegible]王[illegible][illegible][illegible],以王少未[illegible]也,[illegible][illegible]之代[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]以[illegible]老[illegible][illegible]也,陛下非幼非老,何[illegible][illegible][illegible]

於垂衣、微臣無藝無能、何忘亢滿於負扆、方今安不忘危、貪退知洞、歩榮路以迷止足、遙謝寵榮之塵、立翳莚以釣虚名、獨慙涓滴之浪、古稱人臣有三危、德少而寵多、材下而位高、無大功而有重賞、是也、此之三事、已在臣躬、況乎宿痾相侵、朝務自滯、肝家漸有衰葉、眼路鎮多亂花、華池變容、病鶴既戢凌霄之翮、獨坂壅耳、疲驢豈追絶塵之蹤、臣洛城之東開墅業、墅業之北構道場、養性仙方、將避野葵踏井跡、寄心佛事、欲結山椒風雲之朋、徘徊而立、唯思是俟、伏冀玄覽、照此赤誠、早停攝行之職、刊儀範之名、則天下幸甚、臣願足矣、不堪方寸懐迫之至、謹拜表重乞以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、謹言、

永祚二年〇正暦元年五月五日　太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔本朝續文粹四表〕入道殿〇藤原道長謝太政大臣并内舍人隨身第三表　式部大輔廣業

臣某言、二渇、方赤、重仰上玄、矜憐之恩無降、照臨之光難及、踏虎尾而失歩、觸龍頷而寒心、臣某中謝臣聞、受非常之寵者、爲衆所嫉、當希代之恩者、爲時所譏、是以其任嵩則塞頤流聲、其還乖則尊卑以目、非賢非能、無才無智、偏承餘慶於累葉、抽不次於群英、望者羅人之所羨、崇班者累家之所傳、而皆當還以昇、非猥所任矣、臣之在職、無一可堪、夫韋丞相之乞老、漢主許以百斤之金鍾、大傅之求休、魏帝賜以一束之菊、被既告歸也、臣只遁職也、雖藏君命難改、臨臣所請者也、況赤縱及一身衰邁之日、撫白髮以欲仰鳳扆、若當萬機餘暇之頃、向青瑣以欲見龍顏、嗣舊前章、何止新旨、伏願洪慈、曲反寵光、陛下若垂恩於臣者、早答允容於丹悃、微臣若有益於國者、何惜殘齡於皇恩、無任誠懼之至、謹重拜表以聞、臣某誠兢誠惶、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

寛仁二年二月九日　太政大臣從一位藤原朝臣上表

〔定家朝臣記〕康平五年正月十日戊午、殿下〇藤原頼通太政大臣有御上表事、去五日、被仰大學頭作表草、覽之、於二寢殿南階之、内府源大納言俊、御前給、召内匠頭兼行令清書、午刻被立使者、春宮大進俊經、皇后宮大進爲仲、敍位家記上不叩五年、代圖書頭實任等也、先立案於對西庇南戸中、白木、以生絹爲面、先例以支左木、作單、去長元九年不押、云々、一大居表函、□□物足□□花足以白物爲料立井數物、次以生絹覆之、三幅單也、

事了、召諸大夫自中門廊戸參入、昇出之、召下家司四人於中門下昇出之、於中門邊、家司參著付之、給作者共當行職事、付內侍所令奏云々、晩頭□新中納言爲中使參入、奉表函、右大將於中門受之、被獻御前、殿下出御西面、納言被參上、明之內府取祿令出給、御被奉報狀云々、

貞觀元慶寬仁例、最初無勅答、□大入道殿御時有勅答云々、仍依貞觀等例、今日無勅答也、公卿以

中使例、新儀貞觀云々、

〔兵範記〕仁安二年五月十七日甲寅、今日前太政大臣幷兵仗等辭表也、此間春宮大夫、同權大夫、大貳、右兵衞督、被參、下官後之、時剋頃在束帶、中上表日時、次家司安藝守能盛持寬之、此間權中納言、新三位、六角宰相、平宰相、被參會、作者式部權少輔敦綱參入、主人出給、家司能盛申表持參由、次召作者、作者敦綱持參表草、於弘庇讀申了、參進獻主人、主人取之置座前、作者退去、次召能盛、給表草、傳給清書人、次伯耆守親宗於同所令清書、此間卿相多以退出、春宮大夫以下兩三輩被候、中剋許清書了、能盛置折敷持參之、主人御表能盛持退、折敷次能盛持參表筥、檀紙八枚結緒一筋、次主人開表函、書人御名字、常陸之裹紙一枚先重壽之、次懸紙二枚、其上又一枚常陸之納、筥中以四枚裹筥上、被結其中、右兵衞督奉仕之、獻置主人座前、式部敦綱召、少將有房參進、於主人前給筥、取表筥退去、出中門車寄戸、令持隨身參內、下官起座同參內、

先是表清書之間、於中門廊給作者祿、大褂一領、家司能盛傳取之、作者賜頭、於中門內再拜退出、次清書伯州同預祿、下建再拜、給中儀、左少將有房於西中門、下官相逢取表筥、少將退歸了、下官依御物忌不參、持參殿下、內覽之、次可持參院、作法如例、次歸參內、於小板敷被出表、引裹紙等加懸紙一枚、出陣座、賜源大納言雅通卿云、兩事依請、中令作勅答、上卿稱唯、下官

退去、次上卿召大内記光範、下給表、仰勅答趣、大内記覽勅答草、上卿於中門(殿作弓場殿也)被奏之、下官奏之御返給、仰令清書、次上卿歸著仗座、令少内記經長被内覽、依御物忌、先奏聞、次内覽也、次上卿重進中門被奏清書、下官傳奏、(清書黃紙、表牘加上之、)勅答幷表置御所、空宮返給上卿、上卿退出、次下官以勅答納宮、以牘紙四枚裹之押合上下、(不結中、)於小板敷賜左近衞少將雅長朝臣、遣彼亭了、本表明日可納日記御厨子由、仰侍藏人了、

非御物忌者、勅答奏了、主上出御晝御座、可賜近將也、

勅答向彼家之間、家督大納言重盛卿於中門請取也、次召昇平敷、大納言對座、給祿、拜於勅使、勅使下中門再拜歸參云々、

〔三長記〕建久七年十二月一日丙午、入夜自太政大臣殿(○藤原兼房)有御消息、明日可有御上表、可參立云云、可參由申了、　二日丁未、參關白殿、(○藤原兼實)申大相國上表之由、次參内、太政大臣上表勅、先例之處、多有勅答、近例永曆、(宗輔)長寬、(伊通)此兩度勅答不分明、此外度々例、皆以有勅答、仍上卿勅使次將内記等催儲之處、入夜太政大臣殿有御消息、可有勅答之由云々、然者今夜上表不可叶、不被用意云々、予申云、至左右丞相者、無勅答先例也、至太政大臣者、必可有勅答之由承及之上、舊例必御歟、隨上卿等催儲了、重御消息云、於今夜者延引了、無勅答之例等追可勘送、勅答之條、大臣進止雖有其恐、省略可宜歟云々、依及深更退出、歸路之次參向大相國御亭、令謁給、申存知之趣有其謂、然而勅答省略可宜之由有仰、頗不足言之事歟、　三日戊申、今日不出仕、自太政大臣殿有御消息、明日可有御上表云云、勅答猶省略可宜之由有仰、怪奇也、　四日己酉、參内、相待大相國御上表之處、入夜有御消息、忽延引之由也、數度延引尤奇也、深更歸蓽、　五日庚戌、參關白殿、去夜前右府申狀等(九條殿御時、被仰遣、度々返事也、)左大弁奏聞、件狀可申殿下之由被仰下、仍持參也、次參内、以弁章侍奏殿下、令奏之趣、文書等留御前、九日甲寅、參内、有太政大臣御上表事、使右少將經通盛表宮於切臺盤上、予奏之、御覽了返給、置日記

御辭了、卿有勅答也、子細去二日記了、自本所内々依被觸仰、無勅答也、先例驚事歟、

表筥高欄〇圖

以檀紙二枚、續之、引千鋤帖ヲ裹之、

參同紙、結中、左右端ヲ押合也、

表筥體〇圖

以朴木作之、長一尺一寸五分、弘三寸一分、身高一寸七分、足高一寸、以單文白綾物押、身内不押、蓋、

表續紙二枚書之、端一枚加裹紙、以同紙二枚爲禮紙、其上又裹一枚也、作者在茂朝臣云々、

十七日壬戌、關白辭表勅答、上卿大相國御辭、件表函可返之由被觸仰、表筥御所之時、返遣函之條不知先例、依無其例也、

〇按ズルニ、此書ニ載スル所ノ表筥圖ハ、表筥納辭表體ニ載セタリ、參看スベシ、

〔園太暦〕貞和六年三月十八日、卿今日予上太政大臣表也、是依所勞也、依病上表無勅答也、表草昨朝有範朝臣書進之、今朝聊示遣有合直事、其後令左少辨保實朝臣清書、被朝臣爲大夫將子之上、當時人未仁也、仍令書之、使侍以前令奉宮大夫奏之、入夜左少辨基秀朝臣來、家司光遠上表覧、日時勘文予覧之、次大夫取表置出客亭案、以光遠招使、使進來之間、授函了、使參内之間、申御使隨身等、令取入之、大相國者依異儀、大略上表有勅答也、而今度依病不可有勅答儀也、於家無其例、隨無全除病延命者不可有、其外於歟、公卿座上下中門廊以下常儀如例、其外不及別裝束也、上表勅答儀之例、并當家代々例、續左、又今日爲公家御衰日、先規相尋大外記師茂并陰陽頭觀宜朝臣等、同續左、

臣某言、功成名遂身退者、聖人之遺旨也、漏盡鐘鳴不休者、君子之深誡也、知足之分、見賢思齊、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、夫太政大臣者、象居長之上台、爲天子之師法、時無其人則闕、才

非其器則不居、蕭相國之重寄、漢皇賞第一等之功、李大師之盛名、隋帝封三千戸之祿、臣攀烈祖之餘慶、手追兩賢之大量、曾無燮理之材、猥忝調導之職、剩降絲綸風綸之詔旨、荐賜輦車牛車之寵恩、智小權大、愧貽鑠金之毀焉、任重德輕、懼有履氷之危矣、何況六旬正到、霜雪之色滿頭、頃日以來、霧露之氣侵躬、是以兢懐之思甚切、休退之望轉深、伏冀叡聽枉許、苦請、然則名韁一脫、縱遷相邦之綾班、匪石無私、豈忘報國之篤志、昔華陽隱君之樂幽閑也、詔使數入故山之雲、膠東董相之歸鄕里也、王臣猶訪陋巷之月、臣若保餘喘、蓋微忠不勝震惕之至、拜表陳讓以聞、臣公實誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

觀應元年三月十八日　　太政大臣從一位藤原朝臣上表

表函愚物於大炊御門文庫紛失之後、左大臣表之時、借用應司前關白物了、而今度觸穢、仍申請近衞前關白了、其裏樣如先々、於予前數調裹之、民部卿聊扶持也、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年九月丙子、右大臣從二位兼左近衞大將藤原朝臣內麻呂緣病上表辭職曰、臣聞無德而進、寄人誠其厲危、不才而尊、有識陋其非據、臣之庸薄、久冒殊私、儼切阽原、荷重岱岳、臣纜先緒、忝當朝端、龍辦時來、恩切封邑、誠當上調和四時、下遂理萬物、竭節投命、報効絲毫、空消日月、無益聖朝、尸素之譏臣爲其首、禮記曰、爲人臣者、殺其身有益於君則爲之、至如臣者、進不能統理衆務以犀持綱維、退不聞薦拔賢能而補裨時闕、陛下乘乾以育物之德、體江海含容之大、假臣光照之榮、優臣不貲之分、況復時屬昇平、世返淳朴、戮恩勵力、竊斯懸車、頃來渴病彌積、兼暗眼睛、兩脚强疼、行步失便、內自省量、既知不可、在於物議、更亦何疑、若猶事恭勤、豈遑止足、恐鼎不堪任、遂致覆餗、伏願辭罷官職、養疾私第、猶同散輩、朝夕傾心、仰乞曲留宸聰、卽垂矜許、然則陛下仍不失實、愚臣免不避賢、無任懇款覗懼之至、謹詣朝堂、奉表以聞、遣中納言正三位藤原朝臣葛野麻呂就第優詔不許、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年十二月丁酉、是日左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣年老病重、出入

紀綱或缺,臣引日徵處一紀,臣獨見天下官爵寵愛,彌濫用圓之,況今年不登,衣食其損,倉廩不實,何知禮節,
臣竊以爲,義黄之天地之初,上皇見之日,衆官者,不要之官,頗文章之費,而臣久沈,朝野奏請,屢蒙嘆,官之
實可謂其者,其文章者,歷代不朽盛事,豈曰其罪久,何職設,無以陰陽不調,責任臣子,伏望,停不當之職,
開實總之衆,然則天道無爲自作,中興舞政,逃天譯之榮名,餘之利,內侍宜,久,國老正五位下某臣某,坐,朝
夕救,謹不中納言,國家事,謹定中任,正五位,國今,謹辭中將,謹附,自今以後,如此,久,辭中將不得,止宜
疑,今,又忍實餘乞思行,然今悉謝齋非軌重,左近衛中將從四位下和氣朝臣眞綱,差使
遂給,止宜,

(續日本後紀仁明十八)嘉祥元年正月癸未,正三位守右大臣兼行右近衛大將藤原朝臣良房上表,請退大
臣職曰,臣聞,論道經邦,象天之道,燮理陰陽,遷非其人,則是知力所不逮,不可假之以名,才所
不逮,不可負之以劫,臣以庸材,本謝時事,幸屬明主,加其爵秩之恩,探其鉛刀之末,使位
爲鼎鉉,職參台衡,深恩難報,後悔無階,臣位忝在之端,未有一日忘心,不爾朝廷數覃,榮恩彌著,龍右之
重,忽委臣職,以台傅爲尊,三台任,朝官多士,例從當路,自非山岳難動,樂廣清規,則亦懼不克,矣況
於後中弾劾者乎,臣數諫說,期欲鎮令,調任觀身,然而思其榮恩,具騰失望,則鬼瞰得便,
人爾論善,伏願察臣丹懇,曲賜省察,以救所更擇賢才,則上有成物之榮,下無負乘之累矣,不任寛悚
之至,謹拜表以聞,天皇不許, 乙酉,右大臣重上表曰,臣良房言,臣聞衣稀,仰希宜察,而宜居沖遠,天
闕不偏,関遠鳥之道,首未知所稟,恩原之任,臣雖容自陥危,臣聞器小而滿,其覆不甚,位過而高,其陷必
疾,臣才能無紀,猶用罕聞,素沐鴻澤,累忝榮序,辰(一本下有誤之字)恩從積,涓埃之效蔑聞,常惹匪吹,若陷像
疑,況亦論道之任,總貳天下,苟非其器,則家國相累,於臣之爲漢,何用堪此職,臣猶知其不可,物其謂臣
如何,謹伏按之制,昔者於聖時,聖賢之非,亦出於昌運,臣雖不敏,竊讀天恩,庶幾丹愚,以象玄化,豈敢違
離行所,為讓實以寄分量力,非所克堪,伏願矜其不逮,察其深誠,特廻虚授之恩,賜許知足之分,則禍災

美、更便英賢、負乘之災、免備愚劣、不任惶懼之至、重拜表以上聞、屢黷旒纊、伏惶兢悚、天皇不聽、

〔文德實錄八〕天安元年正月庚申、是日右大臣正二位藤原朝臣良房抗表曰、臣良房言、臣聞、奔驥効駕、先驅於羸駘、翔集賀成、近遺於鸞鷗、臣輒感之、以悚以悲、中略臣材同擁腫、器謝弘通、徒以會遇時來、逮奉先帝、無翼而登霄漢、攀鱗而躡崇班、參贊王猷、日愼一日、頑頑禁闈、進不能退、臣之涯分、於是竟焉、陛下以光華之運、當遜於下〇下一作丁、恐下字誤、夢、而渭陽之和、尙任於疲頓、臣覩陰揭〇揭一作偈、恐當作偈、又影不敢遑寧、豈命險減、寮綱大道、而去歲以降、老病相仍、顧惟之髮早衰、鳩武之言有驗、斯固周旋已久、甲子自多、滿而招損、極而成變之所致也、臣位極人臣、正登十載、縱令都忘譏冒、不知止足、將恐不免在梁之譏、饑嬰職室之禍、所以中宵耿々、達旦呻吟、又臣奉宿衞職、廿五年于茲矣、警巡事重、士卒難調、而今臣志力俱廢、弓劍最非、豈可違妨折衝之任、久素韜鈐之委、伏請被退官職、願病戶庭、或屬痊平之時、趨陪階墀之外、在於老臣、良爲厚幸、無任懷懇之至、謹奉表陳乞以聞、不許之、　乙丑、重上表曰、臣良房瀝禮精誠、殷去官職、事非矯飾、庶蒙昭亮、而由衷靡徵、卑聽逾遙、震鳥情靈、銷灼腐貌、中略臣伏以、大臣是百寮之長、朝家理亂、本自繫之、大將爲七德之師、王室安危、莫不以之者也、臣叨以非據、久帶兩官、今屬老病、何得恒典、當陳執、退遂謝朝章、長歌歸來、達歸里第、是則微臣之自分也、但以流波出涌、禍成鳴咽、去鳥辭巢、非無顧戀、況臣身甚渭陽之戚、情異義合之臣、必須粉〇粉下恐脫骨字、答恩、死生致命、是以頻繁移病、不出朱城、時月扶羸强趨緯闥、此亦寄心所然、更復奚言、臣聞、負重致冠、易象表其終凶、福過生災、至人貽其炯誡、臣尙貪位祿、遂及傾敧、何以駐東岱之魂、視南箕之化、所以陳訴苦切、瀝繼之血、伏冀陛下、特留玄察、俯照丹懷、必降矜容之恩、俾臣文武之職、在於老憊、頓免謗咄、不任懇款祇懼之至、謹重奉表陳乞以聞、不許之、

〔文德實錄九〕天安元年二月戊子、右大臣從二位藤原朝臣良相上表曰、臣良相言、今月十九日、降軒臨之咫尺、拜徵臣於端右、爾來屈計、未及浹辰、日夜戰惶、興居戰蹐、中略臣聞、款段之駕、向千里而自疏、輪囷

之材、然臣學由來可以專經餘、度得貢士、燥應事、先舉世、議貴仕、重職、遂明責臨、展運會昌、時及顧問、寵榮超等倫、徒於常均之外、擢臣於樞要之中、臣忝纔爵聯紱、甲、恐使年未知命、位爲人臣、棄遺寵古爾無稱聖言、今蓋寧臣、伏以大臣者也、調和陰陽、燮理萬機之要、萬邦所歸、臣內求諸己、一無一○如一所一、爲何以助日月之光、輔天地之高厚、爲愚事乎、才力仍虧、紀綱未聞所以、於屬望、臣誣因於履薄、所以心繼閑者遭遇先聞、伏實天許、聽臣辭退、其教愚知之進路、必應舉之施化、俾臣先任、則庶倫戴德不任懇懼屛營之至、謹奉表陳乞以聞、勅答不許之、

〔文德實錄 九〕天安元年二月壬辰、左大臣從二位源朝臣信抗表曰、臣信伏見詔旨、以臣爲左大臣、天恩罔極、臣命靡所、精神惝怳、罔知攸措、中臣聞、人性不及者、聖賢未必強、器任非分者、庸愚皆知免、臣本以庸質、謬膺榮寵、從生之不等、託戴之甚深、常懼日夜、對山水而優游、時々恢養、爲薪陶意、自念綿微以來、未曾一日不懷勤退之志、先朝嘉其素性、賜以優游之寵、陛下假以餘恩、不責造勿之効、雖遇臨之隆非貪寵仁、前佐陛之望、常懷懼畏、自今假日、自陳任情、三台論道、衆務權衡、定品、豈是微臣所可克堪、臣任少壯之時、猶苦性體心神、何況於衰老、氣疲病纏、深乎、縱臣才國可爲、力解堪爲、而衛群衆官、志在靜退、則聖之國家未足爲微、伏望陛下其矯誠寡其危者、求備充理、奉賜寬宥、則性命之生○有下文於天朝、尸素之責免於具臣、職見古今、凡升高職者、例必兼三國職事、其任、曾有此事、今臣所請、只是冒冒、非敢僞飾、因國家繼上請之儀、不直傾拜表、謹守素情、冒以不敢、無任懼切、冒以陳請、勅答不許之、

〔三代實錄 十三〕貞觀八年十二月八日己卯、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相抗表、請解職曰、臣聞、日月麗天、未免虧盈、山河紀地、尙閑神鬼、玄功少通、理既必然、使違人倫、豈何可久、臣器業無取、謬忝貴器、辭讓莫厚、外馳文官武職、殊被寵榮、既辱恩養之寵、深懼冒尾之誡、未嘗一日一時不懷恬退之志、由是不避淸骨、欲報思羞忘危、偷安日月、上天降責、尨病常彌、去春罪劇、還留醫藥、經旬渉月、未及能外、中使頻臨、朝命屢下、乃力扶病巾、參入禁省、朝謁未竟、病更發動、猶留殘氣、命危如○

字恐衍 蕹露、誠是久妨賢路、長忍素飡之所致也、竊以、舟不輕載、無以免風浪之危、車仍重任、何得踰嶮難之患、聖主陛下、若能悲此積病、顧天冥譴、却臣重職、減臣高俸、許其抽簪養病、散髮飡和、則冀既遊之魂、返於傷損、其亡之壽、繫于苞桑、假使鬼瞰中休、天誅巳塞、幸預特進之殊品、久叨訪逮之篤恩、乃至還復舊任、何妨之有矣、伏乞、陛下枉廻聖聽、特賜哀察、俾夫乾坤之德施而彌新、日月之明照而更盛、不勝懽切之至、謹奉表以聞、優詔不許、　十一日壬午、右大臣藤原朝臣良相重抗表言、臣不任沈痾、陳表謝遜、天感未降、更賜敎弊、心顏相灰、精爽震越、臣聞、四時之序、功畢卽遷、兩耀之明、未恒其盛、謹云、在賢智之人、而持滿難久、何況於斗筲之器、任重年深乎、臣不才不敏、德薄才短、然猶頗覺利害之端、苟知止足之分、又素貪寵念、酷厭罪塵、所以久掌機要、侍偶禁省者、亦緣志憚孤恩、誠深報國也、卽欲長勤衆群之望、逢見深拱之化、而今褒患彌留、居諸荏苒、良醫上藥、未覺殊功、若臣天算有盡、則當早殞絕、而歷時送月、猶延視息、知是上天冥助、勵臣般勤、欲其覺悟去、盈保全餘年也、若能當于此時、解却職任、將必使上天收責、司命全算、若猶輕居權寵、無所謙損、則臣壞滯堅、非且則暮、假令愚臣暫延歲月之命、則於陛下尙納塵涓之効、若一旦無祿、則愚臣徒失深志、陛下亦失一臂、愚臣陛下共無所得、伏願照此深衷、悲其匪懈、以遂陛下好生之德、以全愚臣惜命之誠、不勝懇切之至、謹拜表以聞、不許、　十三日甲申、右大臣藤原朝臣良相重抗表言、臣前後表誠、雖蒙哀許、病中慙愧、精守間曆、臣聞、人心難齊、物性好偏、故唐堯盛德、不屈潁陽之高、漢祖中興、猶容富春之遯、臣自有知聞、涙恩能仁、年老齒衰、此意彌切、雖寄勿在公、而身俗心眞、刹那之間、禪念無怠、但以奕代承恩、塵涓尙淺、釋迦深戒、忠孝亦存、故勉勵驚抽、久濫樞要、見天使之頻來、耻出家之尙遲、而病深膏肓、命繫絲髮、實先無常之使、早殖出世之因、伏惟先皇陛下德○文慈起和墨、德跨飛行、普滿一切之願、今享萬乘之尊、何使臣坐權盈滿之累、失菩提之願、偏諸佛慈悲、帝釋隨喜、頹齡更駐、法衣在身、則至心專念、奮護聖朝、得其利益、決定勝於在俗之時、又縱生命有涯、不可更延、則臣尙得志於眼前、多福於身後、豈同懷詐而終生、尸祿而空死、伏望、陛下更入知實叩門、新題大

參議兼宮内卿之子貞臣雖作歸遊翁子、然則愚拙始終、懷深仔戒、豈嗤笑志樹、便隨女人之欲、常歸服事散、衆生之病既已歲、不静丹款之要請事表以聞、

(三代實錄十四)貞觀九年二月廿二日壬辰、左大臣正二位源朝臣信抗表辭職、勅答曰、省表委之、公實懷文武奇重、寂實先朝、又曾讓如其靈散之性、不責以爲佛之功、況自歲在青宮、年深保傅、以至今日、顧公翼贊往年、遺命早士曾人、深惟既全得其忠誠、何今頗此辭職、夫調絲竹以養眞、賦詩篇以忘老、自任眞性、其歲春未之時、莫曾之干木、偃息林泉、先事不忘、今者致仕、宜遵乃誠、莫重表請、

(三代實錄十八)貞觀十二年四月廿七日己酉、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗上表曰、伏奉恩詔、以臣爲右大臣之職、臣夙夜戰慄、以愛爲憂、止足之分、臣所宜守、臣聞無才爲人所嫌、圖受高官、則使才臣不進、功未著爲人所嫉、無功厚祿、則使勞臣不勸、今臣以庸鄙之質、增衰大之年、老耄之質、加負乘之責、何心可以安之、何力以可強之、方今邊鄙不安、外寇有聞、府藏空竭、公用乏絶、登庸在位者其職衆之事、況統理衆務、總攝群材、非臣所可支、行非臣所可支、家徒招謗於人識、必得罪於天譴、既不宅先賢、何更復避昇、伏望、若爲議朝廷之老、猶優居大納言之職、事君之道、未必富貴高貴之、惟誠在此、臣之所願、不敢違請、不遂丹款、謹以抗聞、不許、

(三代實錄二十二)貞觀十四年十月十三日庚戌、右大臣基經上表辭大臣職曰、伏奉恩旨、以去八月十五日任右大臣、仰思往昔、冢長臣以喪亡、爾時貯其撫養、臣雖貴極、寂寞骨、欲鐫先寵於吳、更懼於尸素、況乎之機仗、臣自未當其詞之卑、臣能未及其事、昔甘羅之一十餘二以多智不爲少年、今傲臣之三十有七以無才猶未早、伏願陛下、聽臣退、臣所官之、專門之地、不勝誠、上表以聞、優詔不許之、

(本朝文粹五)辭右大臣第一表　菅贈大相國

臣某言、伏奉今月十四日詔旨、以臣任右大臣、仰欽天慈、不知所措、臣某中謝、臣地非貴種、家是儒林、偶因、

太上皇往年拔擢之恩、自至諸公卿今日升進之次、無寢無食、以思以慮、人心已不縱容、鬼瞰必加睚眦、伏願陛下高鑒懇懇、早罷臣官、非唯不奪志於匹夫、亦復得從望於衆庶、不堪懇款屏營之至、上表以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

昌泰二年二月廿七日　正三位守右大臣兼行右近衛大將菅原朝臣某上表

同第二表　菅贈大相國

臣某言、去月廿八日、中使從四位上修理大夫兼行左近衛中將備中權守在原朝臣友于、至、奉宣恩旨返臣上表、天無不覆、爲臣何納其周、日無不臨、爲臣何縮其照、臣某中謝臣初擧秀才、後爲博士、頻遷不止、僞忝崇班、議者孫弘高第、章賢大儒、至其居專統、爲具瞻、則年已耆而學逾明也、以年言之、臣少於弘二十年、以學論之、臣不及賢千萬里、況復當時納言居臣下者、將相貴種、宗室清流、皆是臣抱書卷、遊學門之日、位望先貴、冠蓋自高、臣若不獲已、可就朝列、猶蹈爐炭以待燒亡、履冶冰而期陷沒矣、遠尋漢代、近計周行、上畏蒼昊、下耻黔庶、步不安步、何以授手於紀綱、心不據心、自然慙顏於瓊轄而已、伏願陛下追還寵命、聽解臣官、改授其人、俾賢得路、不任戰越兢惕之至、謹再奉陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

昌泰二年三月四日　正三位守右大臣兼行左近衛大將菅原朝臣上表

同第三表　菅贈大相國

臣某言、今月四日中使從五位上守右近衛少將源朝臣緒嗣、奉傳天旨、不聽懇請、臣戴恩惟重、海鼇之首難勝、漸感未休、阜鶴之聲欲竭、臣某中謝臣地望荒庶、僅以箕裘之遺業、天資淺薄、偏以螢雪之末光、不圖太上天皇拔南海前吏、寵主陛下、不棄東宮舊臣、吹毛之疵、逐參華以鋒起、鑠骨之毀、隨鑠銷以存焉、嗟乎、綬衣不追、星霜僅移十一、潤屋無限、封戸忽滿二千、臣自知其過差、人孰恕彼盈盜、顛覆急於流電、傾頽甚於龕機而已、伏望叡覽降鑒、宸衷曲察、削臣官以全臣福、指臣寵以保臣身、觀遲官祟、皆是不翅

之後罔象、身實謙退、豈唯聖明之德、孫寧不勝逮懼之至、謹以拜伏陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、

昌泰二年二月廿八日　　正三位守右大臣兼行右近衛大將菅原朝臣上表

（本朝文粹五）爲貞信公辭左大臣職表　　後江相公

臣忠平言、臣聞、殊寵偏加、益彰不肖之性、權職久處、則是招咎之媒、何人之處、不踏危殆、去官則是保身之兄、文武事非、象德相第二之子、忝蒙天恩、已知盈溢之門、況臣之庸暗、屢涉年序、官位荐加、寵榮漸積、而缺一日、職之所加自顧、愈慚、方今一片風燭、將熾尊卑之時、萬機煩劇、恐無補益之儀、歸心匪石、公何可、輒冀舊地中之山、以塞天下之望耳、

承平三年三月十六日

（日本紀略村上）天曆二年四月廿八日己卯、遣右近少將重光、返給去廿六日左大臣實頼上辭表、

康保三年二月九日甲辰、右大臣顯忠上表、中務省令內侍奏之、十日乙巳、令右近少將佐理返給右大臣表、一通寫給內記所、十六日辛亥、右大臣使右近少將爲光重上辭表、十八日癸丑、使爲光返給之、三月一日丙寅、今日右大臣令藤原兼光朝臣上表、給不許之勅答、

（日本紀略一條）長德四年三月十二日辛未、左大臣道長上表、大內記紀齊名作勅答、

（本朝文粹四）入道大相國謝官文書內覽表　　江匡衡

臣道長言、伏惟、聖朝求賢、許進納言、平衡秋臺之輪、方從調鼎之職、春木之華欲窮、臣某中謝、稟質淺薄、才地荒蕪、偏以外戚之親、不次昇進、因父祖之餘慶、屢蒙登用、徒聞周公旦之夕、見七十老、臣未曾一士、叔孫通之朝儀三千也、臣未能出一言、永辭寵祿、四顧于茲、天誠見職、眞念于懷、方今前鑑不遠、後悔可思、二兄負重而早夭、微躬倚舟於恩波、微臣繼跡而將辭、欲去害馬於政路、而兼部重降、衰鬢屬衆若從、論會以甘虞、則不異涸魚之吞鉤、若疑、則恩以寵玄鬩、赤族與偏娘之人、灯臣逐榮更衰、以

寵爲辱、雖霧氣而暇晴、空堆臺閣之章奏、賜霜杖而心寒、徒耀營衞之嚴威、愚臣每事難堪、不如早擇賢相、天子不奪人志、明王必遂物性、漢四皓雖出、惠曜獨留於淮陽之雲、堯三徵不來、許由長棲於潁水之月、伏望弘慈、曲降叡聽、臣所帶官、及內外章奏、觸臣宜行之事、忽從停止、又隨身近衞府生巳下十人、各付本府、令從歸歟、俾夫天地之德、施而彌新、日月之明、照而更盛、無任危懼謙退之至、謹重上表陳請以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

長德四年三月十二日　　左大臣正二位臣藤原朝臣某上表

同公重上表

臣某言、去月廿七日、仰帝閽而新恩、展衷襟而辭病、即日中使從四位下行左近衞少將兼美作守藤原朝臣重家、忽至衞門、不許鶴望、畏尾而逃、低頭而歎、臣某中謝臣伏惟、大臣職務不可久曠、是微臣藥石之初所固辭也、夫醫人者、常治無患之患、故無患、良醫者、常治無病之病、故無病、而臣啓沃悔於既往、攝理昧於方來、命之甚危、一至於此、加之陛下以賢才爲城郭、臣未專下帷宿學之人、陛下以儉德爲衣裳、臣纔存上表謙退之道、擇官授職之時、臣多過而僅太政官之雜奏、殿上禁中之事、臣少勤而謝藏人所之別當、彼周公旦之似正月、復辟以猶遜三讓、張子房之得選年、同仙以巳芥萬戶、何況臣病入膏肓、命在且暮、此之懇誠、豈無優恤、伏願天眷殊蒙、徼衷聽、臣槐鼎不且美乎、然則蓬萊望雲、戴皇恩而詠玄德、滄浪臨濤、卜閑居而逸素懷、不任揭焉之至、謹重拜表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

長保二年五月九日　　左大臣正二位臣藤原朝臣某上表

復重上表　　江匡衡

臣某言、臣再布腹心、苦請骸骨、當中使之不容、歎下情之難達、臣某中謝臣聞、易者圓而神、方而智、其上經曰、儉德避難、禮者極於天、播於地、其表記曰、愼以避禍、而臣奢侈不儉、愚昧無愼、寄重以病亦重、任危以命已危、殘燈置挑、待解印之恩光、朝露欲消、仰休身之惠澤、居槐庭而非用、庶幾松子於長生、竊鶴鼎而

是辭何計爲味於不死觸官三公之事哉、綱紀由本朝恩授一枚之龍、雖泉開而徒費、悔以不及五六年

職官之議、發以職錦、二十日出會之朝、伏願天鑒早解臣官、職金章紫綬、令歸何益、職布衣韋帶、身存

則幸甚、不任懇山之至、謹奉表以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、謹言、

長保二年五月十八日　左大臣正二位臣藤原朝臣某上表

〔定家朝臣記〕康平三年六月廿二日、殿下〇藤原賴通令上表給、早且承仰、召有行朝臣、令勘日時、

又召右少弁實仲、仰可草御表由、晚景持參表草、依御物忌堅固、令書宿紙覽之、以

內覽覽行於文殿、令書表、以…中…之、賴通藤原大臣也、被仰所云々、又依仰賜實仲

覽行事錄、

〔公卿補任〕康平三年

左大臣　從一位藤原賴通六十九　七月十七日辭左大臣

〔本朝續文粹二〕辭關白左大臣表　敦基朝臣

臣、左大臣…表、…具如…公…人可以…代天授職、與思以叶…況亦身執之…

臣…必…之…之沖…國…之用、王者…又…方今百官…內外

總己之…一人…左右小子之…之…引…以…之官、…道…

自之任、見來…何…內…之…之…實…而

辭朝政、…上…不受者…公之…二…守…於…之…令於…之章、又…身兵

仗之…相之例也、…何付本府乎、

承曆四年七月廿一日

同人辭職詔答　敦基朝臣

詔、…表…自古明…、…天下平、…左右之用、須…之良…故…月、…

入殷丁之夢、曲洛春風、遠傳周南之詠、予末小子、盍求賢能、朕庸昧而膺萬乘、甚於朽索之馭、幾、公德彩之及千里、掩乎明珠之照車、況亦登台衡、以仕三代、秉政柄、以總百官、予違汝弼、非公在誰、而濟川道悠、謙流性潔、遂厭東閣之塵、欲解左相之印、遜讓之禮更成、君臣之情難忤、許其歷丹之誠、愁從所請之旨、偏守子孟之前蹤、長翊宸極之洪化耳、

永保三年三月十九日

〔中右記〕寛治七年十二月十八日、今日右大臣〇藤原顯房之上表返給、頭弁先召大內記在良、書留草案之後、以檀紙二枚書表函、表具來紙一兩、自餘皆留之、又花足留之、於殿上賜使左中將國信朝臣、被朝臣向右大臣亭、依爲子姪、無拜賀儀云々、是自彼家被申請也、抑件表函具花足、或人難云、初任最初之表、付中務省時可具花足也、如此臨時辭表、差使被奏之時不具花足、是頗違例也者、可尋知事也、

〔台記〕久壽二年四月廿七日癸卯、上表儀、(今日公家御表日也、依例宇治殿攝政御度表、公家御表日被獻也、)巳剋許、家司日向守有成朝臣(束帶、依親隆朝臣遣參、用有成也、)覽日時勘文、(取副勘文、權陰陽頭泰親朝臣於侍所勘之、陰陽頭憲榮朝臣近日有子細不出仕、先是覽請印日時了、未行請印事、)余〇藤原賴長見了返給、此間家司文章博士茂明朝臣(束帶、青朽葉下襲、)持參表草、吉時午申也、既及午剋、須上表、而印遲鑄出、上表之後未返給之間、請印頗可有思慮、故請印後申剋可上表也、此間密々令淸書表、聊相加難者可書改、若無難者將早上也、申剋請印、了出居對南廂、(直衣冠、青鈍奴袴、其座如尋常、不敷臨時、硯筥請檀紙、其具等表淸書紙、)先是民部卿、(宗輔)右衛門督、(公能)藤中納言、(季成)右大弁、(顯業)右大弁、(朝隆)在座、(綺帽帶、冠直衣、)親隆朝臣(束帶)申文章博士朝臣持參表草之由、余仰可召之由、茂明朝臣參上(取副表草於笏、)獻之、(表草用檀紙、無礼紙、)余見了返給、令茂明讀、(於座前長押上讀之、)此間招寄右衛門督、右大弁、(文章生)於座邊令見表、余問曰、辭左大臣內覽隨身三事之表也、而將趁鳳闕之月之句如何、茂明答曰、諸職辭退表、皆有如此之句、稱前蹤所作也、朝隆朝臣申、先例有此句之由、余復問曰、如北山抄者、大臣後未獻辭大臣之表、如而無所擢賢才之句、如何、茂明答曰、先例不必作此句、即余取表、茂明退後、召親隆朝臣給表、仰可給淸書人之由、(宮內權少輔伊行淸書、衣冠、伊行者、定信法師之子、今度初勤、)親隆退去、須臾

持參御書案[illegible]次皇后宮少進藤原高敦位署忠[illegible]昇表案[illegible]一二尺、
[illegible]人中門廊南縁妻戸北行立對
南弘廂東一間[illegible]次家司知郷[illegible]持版[illegible]一[illegible]昇自闌路參上置
案上先開余小可持來表函之由於右大將、右大將起座取函[illegible]
[illegible]持來置余座前、便本座、先是余見表了、開硯筆取筆例[illegible]下、上表上、書名二字並
墨之間、使加裏紙一枚[illegible]次取裏紙二枚[illegible]其上、又取裏紙一枚裹其上了、開表函納之了、覆
蓋、次用彼函蓋下、召傳給表面[illegible]取階給取之、召家上[illegible]召皇后宮權大進高親[illegible]
[illegible]今[illegible]俱加覆結之[illegible]親給使俱與高親俱退下、次家司在遠廣事[illegible]家司散位知
郷職事皇后宮少進高敦位署忠、人自中門廊南縁妻戸北進昇案南行、降自中門廊南東、知家
事經保[illegible]同家事家主宗職[illegible]同國成[illegible]已上昇案出中門東行、出西足門[illegible]仕丁四
人[illegible]於門外昇案、向中御門大路自町北行、至二條南行、至西洞院北行、至郁芳門大路西行、入自同
門[illegible]國昇案、家司職事隨案在案後[illegible]
下家司四人職事昇在家司職事與案後[illegible]人知郷事經保持表筥[illegible]至宮如本座
表函於案上[illegible]下家司四人昇之立[illegible]次家司職事昇案付宮官[illegible]
[illegible]
南廂[illegible]次茂朝臣自南階[illegible]北向再拜、自中門退出、次諸卿退出、余
歸内裏[illegible]次對南廂[illegible]二枚[illegible]其上立
倚子之後立五尺屏風一帖、人使倚子左右[illegible]家司職事歸參、此中知郷進對東宮子中
付宮官了[illegible]闌宮官持參内裏付内侍所[illegible]取表函
[illegible]宮侍房子[illegible]取之奏覽了、給頭左中將光[illegible]朝臣、光[illegible]朝臣持參法皇[illegible]○鳥羽御所[illegible]

(留二內裏一、)御覽了持歸內裏、(自二九條一持參關白亭、而被レ留二九條一、不二持參一云々、)依召少內記大江成周令寫表、(光輔給之、依大內記遠明[illegible]、用少內記、)內記寫了返上、本表光顯徹裏紙懸紙、以檀紙一枚(用二裏紙一之間、)卷表上、納本函、以檀紙二枚裹函上、(其紙裹之、其檀紙二枚引重、縱二押之、一枚押下、令上下餘、不レ結レ中、不レ加二花足一、)置殿上臺盤上、中使左少將俊通朝臣(爲二此使一之[illegible])取之退下、令持隨身、(在レ後、)向東三條、(途中表函入袋、上口[illegible]歟、記之、)已戌刻許、俊通朝臣入東四足、(隨身持表、在後、)立東中門、家司有成朝臣(東帶、親經朝臣、俊行、明日[illegible])[illegible]事、早還也、[illegible])出逢歸入來、臥內申中使參入由、卽余束帶、([illegible])隨自中門廊南妻、(不著[illegible]、[illegible]取松明、[illegible])此間中使搢笏取表函、(今案、取二表函一之後、不レ可レ搢レ笏、但家司[illegible]歟、不主人、古記不レ詳、)余跪中使前指笏、中使亦授函、([illegible])余受之微音稱唯、(中使[illegible]口上之時、主人稱唯例也、而中使不揚口上、主人不稱唯、[illegible])自本所歸昇入、對東孫廂南向妻戶簾中、授表函於人、([illegible])此間隨身近衞二人(褐[illegible])取松明、立南庭、([illegible])余使有成朝臣召中使、中使入自中門廊南端妻戶、自中門廊北行、並對東廂西折、著倚子、([illegible])次余降自中門廊南妻、(隨身取松明前行、右大將[illegible]、[illegible]立、[illegible]朝臣二人[illegible]、)進南庭、(當對南階、[illegible])立北向、(在此間中使降對弘廂、[illegible]、北山云、拜舞了、中使下[illegible]云々、[illegible]不レ及二拜舞一、下殿、[illegible]云々、)拜舞了、(身拜舞之間不[illegible])右廻退入、自本所歸昇入、對東孫廂南向妻戶簾中、中使昇本階、經南簀子幷中門廊、居侍所障子上、次五位大夫(束帶)撤倚子土敷屛風灯臺、敷座於弘廂、(上敷四間、[illegible]土敷一枚、[illegible]疊[illegible]一枚、其上敷[illegible]、[illegible]主人座[illegible]北[illegible]灯[illegible])次仰有成朝臣召中使、了經中門廊及對南簀子候座後、余出著座、([illegible])示可著座之由於中使、中使居帖端、次右大將取祿(白大褂一重、[illegible]之、)就余座後獻之、余指笏取祿起座、([illegible])跪中使座前授之、拔笏復座、([illegible])中使取祿、(不[illegible]、但[illegible]記無二所見一、)今日經南簀子從南階(不著沓、此間余退入對東孫廂、)[illegible]中、渡紅欄橋、於同橋南頭北向再拜、了(今案、[illegible])自東中門退出、次五位大夫撤中使主人座幷灯臺弘筵、(弘筵[illegible]之後、)卷南廂簾、(南面四間、西面一間、)次余(束帶)出居南廂座、(用[illegible]、其座如常、但可中吉書也、)次右大將著座、(先例[illegible]束帶[illegible]、今度[illegible]不[illegible]之、)次有成朝臣申右中辨朝臣候由、次雅敎朝臣申伊與國年料米解文、次有成朝臣申顯辨朝臣候由、次光顯朝臣申內藏寮申臨時公用文、次有成朝臣申加賀國封解文、次參內、(束帶)於宿所有吉書、(無官方、[illegible]和四年例也、)有成朝臣申顯辨朝臣候由、了光顯朝臣申內藏寮申臨時公用

文、文章博士所充中文位殿定等事右大弁朝隆朝臣[illegible]右中弁雅教朝臣被之、因[illegible]被作、九條、
仍無内覧辭退御上表、其御中事、花是御所家々遣之、是先例也、任内大臣之人無三譲之
表、然而初度表猶付中務蔵之也、後日召茂明、問所稱替辭表有加詞闕所、
之趣、不作御中、御中一兩箇不儲、一昨日遣之時不作改中、有先例之由、今日無其儀、是以奇怪、敏
雖如御覧了、又問、大臣初度表無仮才句之間、中日御覚并人道殿初度表無此語也、披見之處、既如
所申、又問曰、内覧者世称之辭也、何故御賞度々被辭内覧之表、作其意不辭内覧、此表直辭内覧、是以
凡作者有遁避、茂明無所陳、此表既有二失、仍差于披表、今並先例臣作之、
伊行奉問字人、又問其由之處、陳曰、一字二字人之、至于三字以上者不入之、是父祖所傳之故實也、

擇申御上表日時

今月廿七日癸卯　　時午中

久壽二年四月廿七日　　權陰陽博士安倍泰親

臣頼長言、權衡誠難、不可欺以輕重之量、縄墨克正、不可誣以曲直之規、臣無錯譲、至稱奸詐、臣頼長誠
惶誠恐頓首頓首死罪死罪、伏惟臣保延之暦、任内大臣、久安之年、轉左丞相、職後之勞、二十餘、況
兼覧中外之文書、關執左右之武衛、勞跡則彌之顕露、希代之例、殊恩而任重、如延千鈞之石、
増誡於是多餘、神三誡之旗、甘退失多、則東前魂軟、中今雖危會可懼、是臣之恐也、近會變異存星、亦
謂符乎、若不謝朝野、誰責天職、吝忘金帯之誠、徒招衆庶之謗、我君縦優臣、豈由寧偏私、若奈衡衛之
反顧、徽臣縦依君恩、豈爲榮貴、若奈進路之以日、爲口何益、責已顧憂、伏乞皇鑒曲照、求斯避相位於台
司、返兵仗於本府、又改御勅、令罷内覧、安國貴性、憚退衛門之風、懇請竭誠、解趁鳳闕之月、不堪鯢面怵
進之思、謹上表以聞、臣頼長誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

久壽二年四月廿七日　　從一位行左大臣臣藤原朝臣頼長上表

〔公卿補任 近衞〕久壽二年乙亥

左大臣　從一位藤原賴長 卅六（藤氏長者、四月廿七日上表、辭大臣内覽兵仗等、不許、五月二日重上表、停兵仗、同十日重上表、三辭大臣、無勅答、七月止内覽、依天辭故也。）

〔任太政大臣記〕建仁四年（○元久元年）十一月十六日、今日上辭左大臣之表、（○藤原良經）承平大治皆自左大臣直任太政大臣給、而彼二代右大臣加冠、頗不快例也、仍今月可有任大臣事之由、内々有其議之上、自前大臣任太政大臣、依爲吉例、天永頃有御上表、仍今日上表也、作者四位儒士之中無其人、仍仰右少弁盛經也、稱關攝政三讓之表、親經卿爲五位弁草之例也、淸書伊經朝臣、使右少將公棟也、晩頭盛經持參表草、即著冠直衣出居賓簀、中納言中將（○藤原道家）左大弁宰相親經、宰相中將等在座、次長兼朝臣召作者、作者持參之、依仰讀申之退去、余取授中納言中將、各披表見之返上、余召長兼給表草、仰可令淸書之由、其間時剋推移、秉燭之後進之、長兼持參表函檀紙筆等、余年號奥署所下加名字、加裹紙禮紙（二枚上、又一枚）入函、次檀紙四枚裹之、結中如例、召使公棟授之、歸入相待勅使、及亥剋勅答使左近中將宗國朝臣來、中納言中將（束帶）出逢受勅答函、持來本公卿座、垂簾余在其中也、中納言就簾下授之、余披見、次召長兼仰勅使可著座之由、宗國朝臣即著座、件座寢殿南庇儲之、垂母屋簾、立四尺屛風、立倚子爲其座、中納言中將進南庭拜之、（舞踏）此間勅使避座立陰、次撤倚子、儲平敷座、（四敷余座、高麗端疊一枚、東勅使座、同疊上敷）（束帶、）余出居件座、（予猶束帶也、）次長兼召勅使、勅使著東疊、（南面）中納言中將取祿、（家司仲宣朝臣傳授）授勅使、勅使取之降南階、於庭中再拜、此間余入簾中、勅使退出之後、出居賓簀、（先是參陣、如常）見吉書、官方左中弁長兼朝臣、藏人頭亮親國朝臣、政所長兼、次改著直衣參内宿候、前驅衣冠隨身上臈冠、今日於九條亭有此事、路遠之間、上卿權中納言家經卿中請勅答、内覽難無理、隨宜免之、時剋推移之故也、

抑以人令拜勅使事、宿老人所爲歟、而勘先例之處、執柄解大臣之時、皆以子息親昵等人令拜也、仍申合入道殿、（○藤原兼實 良經父）以中納言令拜之也、

御堂(道長○藤原)辭左大臣給時　右大將賴通(藤原○賴通子)拜之給

宇治殿(賴通○藤原)辭左大臣　宰相中將家忠(藤原○師實孫)拜之

京極殿(師實○藤原)辭左大臣　大納言俊家(藤原○)拜之

知足院殿(忠實○藤原)辭右大臣　中納言中將忠通(忠實子○藤原)拜之歟

(園太暦)康永三年二月廿一日、今日予(公賢○藤原)上左大臣表狀也、康事去頃示付東宮學士在成朝臣、先日持來、覽之無殊子細、但此分加清書可進之旨觸了、一昨日進之、書樣常樣歟、(二枚續之)不加禮紙、(先例如何)本儀書高檀紙、可加禮紙也、但樣所又常事也、昨日進行尹朝臣許、令清書、高檀紙二枚切續也、一尺二寸也、今朝還取、本儀草清書共宰臨事仕定事也、持參之、(不加禮紙、不入筥)進之、退出之、次使仰、表函禮紙可持參之由、先被還持參之、予先々披見清書表、次銘寄見也、予與見了不審還、左寄書奥書銘事也、次引寄硯、開蓋取硯石、次入水、次取表染筆、書入名二字、次還蓋、次書表加禮紙、一枚表狀裏書、裏表二枚書、次取同檀紙二枚爲禮紙、次又取同檀紙一枚爲加禮紙、件表懷持左手、以右手開函蓋入表狀、覆蓋爽函、其間、雖家持持之、函檀紙上下ノ寸法見定置之、右紙ハ上ニ、左紙ハ下ニ重、各有二枚也、其後先取右紙右端引上タ寫函蓋上、件右端ヲ寫蓋左邊也、側計寸法之後、件上ノ紙ヲハ開之、次件紙ノ左方ニタ顯函也、次左紙ノ右端ヲ函ノ下ノ右ノ邊ニ寫ク、以件奥ハ顯函今度奥ヨリ端ザマニ顯也、次最初寸法寫定ツルヲハタヘ了、裏ヲ左ザマヘ引掩了、以帖紙結之、(帖紙也)、件紙弘サ六分、長サ二尺六寸五分、帖之、高檀紙ヲ切タ、中央ヲ結タ其上一結レタル物也、長サ寸法ハ結テ後ノ寸法也、皆是鏡尺之定也、件帖紙表函持參之時、函ノ内ニ入タ持來也、雖非本儀、正安相國御上表之時如此、開蓋時、最初取出之而歟、納持表狀了、次召光遠朝臣、光遠朝臣進寄、賀子手仰、中使可召之由、公世朝臣(藤原)

中門外、經實予也、進來指笏取、而予押出函授之也、右府退去、直參內、置臺盤上歟、中使退之後、予入簾中、上卿禮如出座之時、本儀諸卿先退、主人其後入也、而正安御上表之時如此、硯脇息并宿申簡等可撤之由下知了、抑職事不遣頭弁藏長朝臣之處、請文未到之上、遼遠無心、非無推察、仍就近々示遣頭中將基隆朝臣、傾狀了令執奏歟、

清書人書之

臣公實言、高丘無用之木矣、何比舟楫之材、蕪俗有類之石焉、豈混瑚璉之器、遠取諸物、近取諸身、臣公實誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、臣聞大臣者、協贊帷幄、儀刑簪紱、以翼以弼、鼎司當鹽梅之任、爲衡爲鈞、棟宇叶社稷之臣、是以高祖之興隆漢也、施皇明於蕭曹之功、太宗之弘巨唐也、得王佐於房杜之愛、圖之匡輔、寔因賢良者歟、如臣者岳降尠精、淵博闕智、唯稟家門之茂績、多歷文武之清要、變李切磋、三台三遷之運過分、短材位高、一喜一懼之心相半、於戲魏公二百餘事、有進而退之詞、周老八十一章、有盈而止之誡、就中三台之儀當于年、虛受之責在于天、云彼云是、不可不謹、且每思淳朴之道、彌欲謝伐檀之詠、方今陛下寶業布化矣、文思璽凰矣、祁姓姚姓之主、任庸璵者可馳厥名焉、五龍六龍之臣、預躬迎者何惡厭鱗矣、徽而象進、德廣所及也、伏羨乾慈、曲照宸鑒、然則安澤之纖難適、綖解鵲印於槐庭之月、猥闕之忠未忘、猶仰鴻化於蓬闕之雲、將避傍人之嘲、忝驅明君之恩、不勝方寸懷迫之至、謹奉表陳乞以聞、臣公實誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

康永三年二月廿一日

從一位行左大臣藤原朝臣公實上表（予書之）

被返表之儀事　被返表之時、撤裹紙并二枚之懸紙、加一枚之禮紙、納函、函上又以本檀紙二枚（二枚懸之）裹之也、而今度併如元被下、奉行職事未練之故也、

廿二日、今日可被返表云々、頭中將及晚送使者、御表可被返下、只今自仙洞賜之、參內、今日可被返之由有內々侍宜可參內歟之旨、今朝仰遣公世朝臣了、戌剋許、著束帶如例、今日不招引諸卿、實守卿兒

若車行之間、先可奏之旨示了、仍又一剋來、公世朝臣相副入來也、予出上達部座、家司永季束帶、召公世朝臣、公世朝臣持表函入、車寄妻戸際、賀予、家予出逢、歸其後答拜退之間、予目合青侍座、公顯座經疊座、加東京廂、眞給使座、公世朝臣着之、（割注不明）也、文實守節持祿一大褂、永季傳之授予、予傳答取被起座至公世座前、此間公世降座前、予授祿、公世纏頭、予取出爲復座後、公世起座、中門車寄戸下地於階下二拜退出、予公世朝臣下地之間、拔入座中了、　十二月十八日、歸予今日上左大臣表也、事在威朝臣、使者前宮内卿行尹朝臣也、中使右中將守實朝臣也、御々晩近人也、依御本事不及出座、於臥内授表函、頭左中弁宗光朝臣參内執奏云々、中使右中將守實朝臣、纏頭馬、鴨騎、經續地平緒隨身一人、童隨持之、表其入車參内下車之後、隨身持之、於陽明門外、取函入開門、昇小板敷、昇端座、函ヲ取直、以下方向奧、置傍各下緒（割注）、披經本路退出、使宗光朝臣家取參御所云々、表使經神仙門、是參賀家可然、暗可從例也、予易失不調、凡小板敷誤設也、

臣公賢言、去二月廿二日中使正四位下行右近衛權中將藤原朝臣公世出自中禁、遥以上啓、天高聽卑、猥惑於聽、顧年老力衰、何負重山於雲霄、臣公賢誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、臣聞、臣以君爲心、君以臣爲體、上體有闕、身何以全、臣昇三台之一座、者安設然、臣側聞、綱紀之貴、更無擇用之理、所謂三台者之職、不得其人、入棘槐之林、者未見棟柱之材之儀也、設其位者實修可受、求其人者固難可得、知臣者唐何取己、以爲國憂、愚溢餘身、不知所致矣、晨鼓夕儀、難往來、方今我君叡德古風、經緯天地、明德廣被、再拔大明於大難中、實才無譲、鹽梅遺實、於廟庭、鼎鼐西山月老、仁當殿之有、迎南國日長、高文通之不仕、職責委任、至于政獻、伏望寶聖早察丸容、不耐懇款之至、謹重拔表陳請以聞、臣公賢誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

康永三年十二月十八日　　從一位行左大臣藤原朝臣公賢上表（自筆書之）

辭內大臣

今日上表儀一向略儀也、神木動座時分也、上皇又御慎、旁無便、行其儀之上、初度剛其禮了、仍不招引賓客、不及出座、只於常居調之、日下加具名二字、自奧堅卷之、端投加裏紙一枚、次加禮紙二枚、次又加同紙一枚納函、(口ヲ下へ成テ納之、口傳也、)次裹宮、高檀紙四枚、(不切ツパサマへ引違、)其上置函、上下能見合裹之、右紙在上、左紙在下、裹了後右紙左口在函上、左端左紙右口函下右端ニ示之也、次以帖紙結之、(帖紙下結、)市ニ乎函ニ余紙上下取ヒシク也、件等儀去二月委記了、

四年正月十四日、予辭多上表、表函借申執柄、而可返進之由被示之間、昨日以消息付宗光朝臣可申出之旨示之、其狀裏書也、

舊年進上表函內々可令申下給候、辭表勅許之時、被召狀被返函候定事候、爲御心得內々令申狀如件、

正月十三日　判

頭左中弁殿

御表函事、內々伺申入之處、如此被仰下候、可爲何樣候哉、以此旨可令洩申給、宗光誠恐頓首謹言、

正月十四日　宗光上

〔本朝續文粹五〕二條關白(〇藤原教通)辭內大臣左近衛大將皇太子傅表　實範朝臣

臣教通言、楚鳳增價、事爲丹山之寶、商臣守分、誰勵黃河之濱、名已乖實、器以異途、臣某(中謝)臣竊訪皇朝之前規、伏檢臣家之舊諺、內大臣者、蓋儲早起自雛鳳、芳躅遙及于微臣、然猶當其仁、多是成一之上德、應其選、莫不牢千之英才、未有如臣朱愚白癡之陋質、偏以咸里之令胤、纔近三十年者矣、出不廻而登高、難登鷄刀於鵰刀之用、忘止足而戴列、還履虎尾於龍尾之行、况乎居羽林而掌禁兵、兼略俱疎、入宮闈而傅太子、訓導全闕、運實性頑、未辨玄壁於濟北之石、靜思魂亂、如吞壺角於河南之盃、臣有何一能堪此事哉、夫明主不敢虛授、忠臣不敢虛受、賞人必酬其功、爵人必執其德、故妄進之責、非獨集于臣躬、

夫事之論、莫不始于[illegible]實、若[illegible]天工、[illegible]私己、[illegible]人[illegible]不[illegible]實、[illegible]知其代常[illegible]之數、[illegible]代而[illegible]者也、臣

[illegible]命[illegible]長存、可以足[illegible]生[illegible]其何[illegible]伏[illegible]陛下、[illegible]若木之

[illegible]石之[illegible]三官之[illegible]百[illegible]之所[illegible]、然則天下[illegible]日[illegible]、[illegible]耳[illegible]之者、[illegible]以[illegible]

甚不[illegible]之[illegible]乞以聞、[illegible]

長久五年〇寛德元年六月廿日

内大臣正二位行左近衛大將皇太子傅臣藤原朝臣上表

(續日本後紀三仁明)承和元年七月甲戌、右大臣從二位兼行左近衛大將清原眞人夏野抗表、請罷官職、曰、臣聞守分有職、古之制、陳力就列、不能者止、臣才略无聞、度量有缺、往太上天皇〇嵯峨 受[illegible]、特[illegible]、[illegible]自[illegible]上[illegible]、九[illegible]于今、[illegible]之明、而陛下[illegible]行、无不[illegible]化、是則臣之一心、[illegible]身[illegible]力之[illegible]、[illegible]所以[illegible]不[illegible]任[illegible]也、夫近衛者[illegible]所[illegible]任[illegible]、[illegible]臣之[illegible]何可入[illegible]、若[illegible]下之[illegible]刀、[illegible]之[illegible]、自[illegible]多[illegible]云、[illegible]況乃大臣之[illegible]、[illegible]所[illegible]一官[illegible]食之[illegible]自[illegible]伏[illegible]允[illegible]則[illegible]中[illegible]任[illegible]臣[illegible]不許之、

(續日本後紀六仁明)承和四年三月戊辰、是日右大臣〇[illegible]上表、請[illegible]衛[illegible]職、曰、臣[illegible]心、[illegible]天[illegible]、[illegible]无[illegible]有[illegible]臣[illegible]二者、永[illegible]具[illegible]力[illegible]一者[illegible]臣文[illegible]武[illegible]衛、[illegible]二[illegible]三[illegible]〇[illegible]仁明[illegible]生[illegible]月[illegible]、夫近衛者、[illegible]王之爪牙、國家之扞城、守[illegible]不[illegible]義在[illegible]夜[illegible]老[illegible]任者也、所以[illegible]乞[illegible]任、陛下[illegible]、[illegible]令、於是[illegible]身、而[illegible]行[illegible]之[illegible]之[illegible]亦[illegible]力、夫[illegible]夕[illegible]況臣[illegible]行[illegible]手[illegible]力[illegible]己三[illegible]其一可、伏乞[illegible]免[illegible]衛之任、[illegible]兵於[illegible]將[illegible]守[illegible]之[illegible]于公[illegible]大[illegible]力之[illegible]臣知是、則免[illegible]之[illegible]不許、

〔三代實錄清和一〕天安二年十一月十一日戊辰、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁抗疏、請解大將曰、安仁材非九德、謬對七功、猥蒙先皇帝〈〇文德〉之恩、假以右將軍之節、辭不得命、僶俛從事、猶懷深衷、欲訴非據、而奄然崩殂、哀號無及、今聖上承緖、鴻化惟新、含臆懷肝、孰不仰屬、安仁委質先朝、雖無一介之善、歸誠今上、豈忘累葉之恩、所以鞠躬剗心、志思報効、而此職任當股肱、寄重爪牙、警衞動遙、事功夙夜、況復整烏合之衆、必資將力、統鷹揚之師、宜藉驍雄、安仁蒲柳秋衰、昏耄日追、雖欲自勉、力不從心、擁雲旗而慙威稜、佩霜劍而愧尫儒、恐老病潜發、坐〈〇坐上下恐有誤脫〉辱陣、乞收將軍之印綬、保殘生於桑楡、臣解此職、而所帶猶多、於効涓塵、豈謂無地、伏願曲垂優恤、察其所敢、即而許之、不任懇款之至、不聽、　十七日甲戌、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁重上疏曰、安仁近瀝情款、伏佇乾恩、而還旨冲深、未垂矜許、魂影震迫、無以自厝、臣耄年既及、慮散〈〇散恐肯〉命阽危、尙濫帶衆官、久辱彝議、而鴻恩未答、纖効無聞、居常罔己、未能控辭、竊以將軍之職、寄重責深、懼傳防非、唯力是視、假臣壯年、□猶尸素、況茲耄齡、禮同敗荷、是以抽丹瀝懇、冒瀆久遠、伏願天恩無偏、特垂寬許、則備方遐順、庸臣獲所、不任懇悃之至、許之、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年四月廿日庚午、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗上表、請解大將職曰、臣前年抗表、請解左衞門督、誠以器輿用違、官曠職闕、非敢徼軀是愛、實將負重致憂也、而天慈曲降、更加殊榮、武職文官遂轉時、〈中納〉臣才非歎譽、性是朱愚、叨蒙不測之恩、驟歷匪才之任、今復位當喉舌、寄忝爪牙、顧復餘而貽憂、想戰門而增懼、縱只鞠躬槐庭之中、兢惶不暇、何況兼寵蘭綺之上、志力那堪、加以桑楡陰短、犬馬齒衰、嬰羸病之昏昧、恐警巡之多闕、伏願皇情下照、丹款獲申、龍擁衞於八屯、專粉骨於一職、無勝競懷戰汗之至、謹奉表以聞、優詔不許、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年十一月廿九日庚午、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗抗表言、伏奉恩制、得備宿衞、光寵自天、催心無地、臣才非文武、智謝股肱、忝假納言之名、空竊大將之號、「以

罷於趨分、一以驅於奔驟、況乎身嬰疾病、曾無氣力、纔可隨縉紳之臣、何堪預職之列、仍先再度上表、
請解右大將、遂無聞天之聽、皇恩伏地之思、臣以爲、甲冑未必忠信、忠信自爲甲冑、請職解所帶之近衛
衛實臣戶幸可以陳臣懇丹、可以忠不勝愚款、抗表以聞、不許焉、　十二月廿六日丁酉、從三位守權大
納言兼左近衛大將藤原朝臣氏宗上表、辭大將曰、伏奉今月十六日詔旨、以臣爲左近衛大將、明命由
衷、皇恩過外、兢惶戰慄、伏惟陛下、徐臣自知、庸非三事朝行、無少建策、唯蔬章約近衛解右大將、至于再至
于三、聖恩更加、忽轉左近、兵官顯要、非老朽所堪、況中文分寸、始以錄墨、今將力已衰、雖堅守職、思慮
多虞、何論對斛軍旅、不曾勝是負實否、軍陣可畏、伏願乾照、特賜寶鑒、遷授中納
言藤原朝臣基經、任於讃朝允、須官才、在於衆議、既是請歟、無任懇款悲迫之至、謹上表陳讓以聞、不許、

〔三代實錄十四〕貞觀九年六月十五日壬午、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗上表、請辭
大將職、言、臣聞、養衰請老、左大將兼職、至于再、至于三、夫懸衡之政、積非官、老臣去年、病加前
日、背仲尼所言宅、豈是臣伏願早賜骸骨之壯年、臣始讓之時、自陳衰病、老臣陳辭之日、自顧忠
愚、今不許、仍職拜表、伏乞斷優詔不許、

〔三代實錄三十〕元慶元年正月九日辛巳、右大臣藤原基經抗表、請辭大將職、言云々、伏望補武弁於國家、專
忠於樞要、今上謹大納言兼朝臣年名、責此表事、太上天皇勅曰、表請之旨、理合容許、宜國重
任、請行其職、不可缺之以一職、但君子武備、嚴庭無安、關特賜御劍、嚴其儀形、仍金銀裝寶劍一、寄年名
遣奉之、今上詔曰以賜大臣、

〔三代實錄三十三〕元慶二年二月十四日庚辰、正三位行中納言兼右近衛大將皇太后宮大夫藤原朝
臣良世抗表曰、臣聞、塞暄代謝、牙角雖不暫天道、來節相違、人事何得兩立、臣功闕無聞、行能曾闕、徒日月
之未光、猶文武之有職、懼恐之志、匪須未曜、夫大將之職、所統非輕、任掌兵符、官領武士、警巡之務、晝夜
無間、縱在少年、猶難稱職、況今春秋衰邁、筋力殆盡、僅戶繼於喉舌、而思職官於爪牙、因茲向隅、乃憤、

伏待恩許、而多曠居諸、未蒙冲旨、伏請殊恩重察愚款、解臣大將之職、授以壯齡之人、則公私兼濟、物議自停、无任征營之至、拜表以聞、不許、

〔本朝文粹五表〕爲清愼公〔〇藤原實賴〕請罷左近衞大將狀　菅三品〔〇文時〕

右臣某竊以、近衞大將者、分閫之重任、絕席之崇班、殺氣過人、乃可率三軍之貔豹、威風振世、乃可掃萬里之煙塵、臣略非孫吳、職是周衞、謬以相將之風、叨歷左右之勤、帷幄無籌、何高枕於幕府、車甲難練、寧緩帶於轅門、顧鵝列而心慙、杖龍節而魂慴、是以苦凝丹析、頻上白疏、慰諭之旨、前後徒深、攜退之懷、歲月未遂、虛受差久、已逮秋霜之十八遍、妄授不休、無堪春冰之數百步、況齒髮早衰、筋力漸盡、餘遑之日蓋少、歸休之夕猶多、晉趙業庭、疲如遠征之卒、勤臥白屋、義非近仗之臣、人心曾不寬容、天變屢以譴告、雖欲永逸、其可得乎、夫仁者必勇、股肱雖非爪牙、賢人爲兵、冠蓋皆是介胄、復隴山雲晴、李將軍之在家、潁水波閑、蘇征虜之未仕、求而致之、我敢自理、伏願鴻慈、罷此武職、俾臣專優遊台司望苑之間、俾臣無留連星旄電戟之下、不勝悾款屛營之至、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天曆九年九月十七日　左大臣正二位兼行左近衞大將皇太子傅臣藤原朝臣上表

〔日本紀略六圓融〕貞元二年十一月三日己丑、左大臣〔〇藤原賴忠〕被辭左大將、上表留御所、即勅授帝劍、

〔本朝續文粹五狀〕二條關白〔〇藤原敎通〕辭左近衞大將狀　明衡朝臣

右敎通言、去寬仁元年任左近衞大將、貼焦履氷之恐、四十六年于茲、久仕數代之朝、漸近七旬之刻、佩雄劍而屢疲、三尺如債千鈞之石、整武冠而力屈、鵕尾似戴龍首之山、晉逸勤積、春風舊于細柳之營、辭歸心深、秋月老于大樹之傍、然間霜露相侵、周衞稍闕、攜三略以更訪十全之方、專丹棘以欲聽靑槐之影、彼往日無恙之比、頻上遜讓之章、況暮齒維病之時、豈遂休退之志、倩閱古史、靜尋前賢、送壯年而逃金印、耿建威之精銳長傳、屢治世而閑星嵐、劉太傅之露文大著、臣德薄而位尊、才謝而任重、族非山西、寧耀武略於日入之鄕、職隔閫右、無施智於月支之俗、不如隨老子止足之誡、運小臣保身之籌、伏冀聖

愚早歸蓬宮、過半簡於羽林、未堂職於鎧仗、不耐懐舊之事、謹狀以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死
罪謹言、

康平五年四月十一日　　從一位左近衞大將皇太子傅藤原朝臣

(永左記)永保二年十月廿七日己巳、別許依御消息參關白殿、[illegible]頃之右大殿[illegible]令參給、令申給云、
一日所被[illegible]仰、明宣公[illegible]、貞信公[illegible]等被辭大將之時、無勅答之由、被行成卿申宇治殿[illegible]
云々、而今依成人被件勅答被仰、有柱下羽林之由、被納言已古賢也、何見賢乎者、仍右大殿召件羽
林令引見給之處、貞信公件勅答誠如被納言之說、是今人見誤申歟、頗可謂奇事歟、抑今日殿被獻大將
辭狀、件表式部大輔實綱朝臣也、[illegible]令御覽件草於右大殿之後、令前少納言公經朝
臣清書之、[illegible]清書了、[illegible]入函、以紙二枚[illegible]裹、[illegible]結中、以左近權中將公實朝臣
被獻之、但公實朝臣歸參、令申獻了之由、[illegible]

(殿暦)康和四年七月五日戊子、試明許、權右中弁平朝臣時範來、仰被朝臣令勘上表日時、陰陽師主計
頭道言勘之、時範朝臣日時勘文持來、於出居見之、[illegible]此間淳直衣冠等出對南面、民部卿、權大納
言、新大納言、右大弁、左大弁、右宰相中將、新宰相中將被來、頃之時範朝臣進申、敦基朝臣持參表草之
由、則召敦基朝臣進表草於前令讀之、次定賓朝臣書之、清書了時範持來、則見授民部卿、見了又授余、
[illegible]此間敦基退居異室立對南面余等、表入函、其儀如常、召時範朝臣令取函令置案、裹之結中、次
召五位家司四人令舁之、[illegible]於中門廊南妻縣下案、可是中門內也、清書了以時範朝臣召敦
基朝臣以職事[illegible]人々退出、來則許重仲歸來、示付了者之由、大輔家光、丞邦
家等二人、次付內侍所、御覽之後持參馬副、即持返皮對許勅使來、[illegible]人、時範朝臣申勅使
來之由、余著束帶、於中門廊取之、退并於便所見之、[illegible]表二懸紙一枚
也、上時置一枚、次又置[illegible]第二枚、又以一枚帶其上、曲返給時懸紙一枚云々、以時範朝臣勅使示可著

座之由、勅使著座之後、余更下自中門廊、著沓出庭中拜舞、還昇撤倚子敷疊、勅使坐疊上、敷地敷其上、敷茵、余坐疊、勅使座西第二柱東、余座同間東柱、示勅使可著座之由、卽勅使著座、余又著座、宰相中將忠敎取白大掛授余、余插笏取之授勅使、余還著本座、勅使下自中門、於庭中拜退出、此間被來公卿、權大納言、新大納言、右大弁、左大弁、兩宰相中將、大藏卿也、民部卿依有障不被來也、其後申吉書、官方重實朝臣、藏人方顯實朝臣、家方時經朝臣等申之、次始文殿、列官時經朝臣、預重宗也、次依吉日入夜參內、　九月十七日己亥、今日上表第二度也、委旨見裏、從右大弁許送馬二疋、於東三條見之、依上表辰剋許渡東三條、午剋許新大納言經實、中宮權大夫能實、右大弁宗忠、宰相中將忠敎、大藏卿道良等來、前上野守藤原朝臣敦基持來表草、於出居開見之、彼敦基朝臣則退、召爲隆朝臣給之、仰云、可清書、爲隆申云、所召候清書人定實朝臣、右京大夫前兵衞佐顯仲、敦公經朝臣子等各申障不參、爲之如何、但職事信濃權守藤原朝臣知實所候也、余云、極有便、件朝臣兄弟知綱、并知家、故殿御時に皆清書吉例也、早可令書也、則退書寫間頗良久、酉剋許書了、爲隆持來、余開見、了人人見之、余仰民部大輔忠長取遣筆、則持來、并月之下、上表上、書名如例、入宮上裏以少將有家朝臣爲使、其後人々退出了、戌剋許勅使來、右近少將源朝臣師時、從四位上爲隆來示之、余出中門跪取之、表返給也、面上檀紙二枚をもて押裹上、還昇延勅使、余出庭中拜舞、改座同延勅使、次余出著、取祿授勅使、大掛一重右大弁宗忠朝臣取之授余、余取之授勅使、勅使下庭中、此間余立座隱、此間勅使拜退出了、次申文、先頭弁重資、官方頭中將顯實、藏人方泰仲朝臣、家方次著直衣參內、表後依吉日也、　十月七日戊午、辰剋許渡東三條、是依第三度上表也、今日內御物忌、雖然依有先例遣、長元九年宇治殿被遣、寬治七年故殿被遣、使少將有家、四位少將作者敦基不賜祿、是以前二度預祿之故也、故宇治殿御時如此、清書定實不賜祿、今日又前齋也、是又有先例、寬仁二年、新年齋前後有此事、今日第三度上表也、辰剋許渡東三條、著直衣冠等、未剋許於出居開見表、敦基持參、以爲召也臣於前讀之、左兵衞督、右大弁、左大弁、右宰相中將、左宰相中將、大藏卿等有此座、讀了敦基朝臣退、召爲隆給表、仰

云、早可清書、取文臺清書、御敎書內下國書出、爲隆持來、余加署、(以紙入懷中之、以下かのらして持參也、)檀紙一枚かさね書かけ紙二枚、其上又一枚を奉入哉、以檀紙四枚裹上結、中結か、召爲隆、召有家、有家參進、余給宣旨、退出參內、頭之盧辛云、付頭弁了、彼剋許大內記宣衡持來勅答草、職事宗仲申之、余開見了返給云、於清書者不可覺、勅答上卿中納言參仲書、宣衡勅答使、敎剋不來、其了勅答使、參仲朝臣申之、余於中門相逢、因取之歸、并於內出、筋開見了、(右大弁參所申之、)以參仲朝臣爲勅使、宣對職顧に、使座如先々、余下、自中門經宮勅使座拜、(下□六拜)事、改座開以參仲朝臣爲勅使、勅使著座後、余又著座授勅書、(宗仲取勅)勅使拜開余文座、次吉書、官方右少弁資賴、藏人方頭弁重賢、家方參仲朝臣、今日依吉日參內、後日無日次、仍所參也、參內、次向二條殿、於宮所有吉書、頭中將實朝臣申之、　十一月廿三日甲辰、酉剋許、以右大弁宗忠令奏云、先日所令申之大將辭狀、可隨身給事、明後日吉日候ば進候はび如何、先日院御氣色亦不承候、御令申給候歟、以事知中將忠敎示送、於院御許畢、　廿五日丙午、朝旦民部卿來云、被奉院御氣色內御定と候ば、太略何樣に可候事乎、但重以右大弁可奏申、仍以右大弁令申之處、被仰云、聞食了、自院はアナナレトハ不被仰、されば早其後御前、未剋許、以時範召遣敎基、(大將辭狀作人也、)次召公經子、(人名也、)申障不參、申剋許、敎基朝臣持來狀、於東面開見了、清書爲隆、是依無清書人也、書了時範朝臣持來、開見了、如例入函、其上、中將以宗輔遣了、頃之還來、示納給之由了、次召隨身給祿、(以下一疋、)次給隨身等祿事持來、(人內記取之、)時範申之、開見了則退出、參院隨身裝、(又ナこれハカタアソハ、)左府生敎時右府生重俊、(ノ者也、)左番長敎清右番長公種、(右ニ番長ニナルベキナリ、)人左二番長也、參清隆、於中門與事由、伊興守顯明申之、則還來、拜了召御前、先參殿上、次參御前南間、歸御馬、(ロヒ)起座カタハラノハシよりおりて、取綱一拜、了退出、參內、陽明門左衞門陣井左兵衞陣をとおりて、經敷政門軒廊二間、并陣下、於弓場殿拜舞了、著殿上內座、次參御前、則退了、參中宮井前齋院御方、(以上)如本下小板敷、經陣下并軒廊二間、自陣後出待賢門、自承香殿面道參中宮

納言以下辭官辭表

御方、次參齋院御方、下宿所、吉書、官方藏人方人々各退出、

〔中右記〕康和四年十一月廿五日、早旦爲御使參右大臣殿、〔忠實〕〇藤原文民部卿從院御使被參也、假可令辭中大將給也、是御堂入道殿例也、中時許、於東對東面、御覽大將狀、敎基朝臣仰之、權大納言、左大弁、宰相中將、大貳卿被參、藏人大進爲隆淸書、抑狀中年號下、御判之下ニ、上狀ト敎基朝臣書之、殿下仰云、故殿御記之中ニ、辭大將狀、上表ト年號之下ニ可書之由被記置也、仍上表ト可書之由有其仰、爲隆上表ト書了、此事甚能々可尋也、辭表之時ハ上表、書辭狀之時、上狀ト書、恒法也、但故殿御記ニ被書置儀、不論左右被付御記也、大將狀如表入宮事檀紙、以右中將宗輔朝臣爲使被進內了、入夜歸來、仰云、敎給者、

〔薩戒記〕永享五年八月九日、今日左大臣殿〇〔義敎〕足利令上右近大將辭表給云々、後聞、於對代南面〔公卿座〕有此事、吉時酉剋、〔實及家〕主人直衣、〔如日東面〕飛鳥井中納言、〔雅世北面〕日野中納言、〔兼鄕南面〕新宰相中將、〔實雅北面〕已上直衣下襲奉行家司頭右大弁忠長也、土御門三位有盛卿勘申日時、少納言爲淸朝臣〔大內記也〕草表、前宮內卿行豐朝臣淸書之、左中將雅永朝臣〔今朝來於所參大納言宿所之了〕爲使令奉表宮給時、依召新宰相中將參進、相共裹之、御表不及觀覽令裹宮之時、宰相中將依召參進、相共裹之、左中將雅永朝臣爲使、今朝來尋問進退大概示所存之旨了、草淸書綠不及賜之、若內々賜之歟、不及勅答云々、後聞、御表草書載內大臣、淸書又同前、依有他遺失、臨期書改之時忽見付之、兩人共仰天、此事左大臣殿不御覽付、可謂依僥幸運者也、

〔續日本紀〕〔淳仁二十四〕天平寶字六年七月丙申、散位從三位紀朝臣飯麻呂薨、淡海朝大納言贈正三位大人之孫、平城朝式部大輔正五位下古麻呂之長子也、仕至正四位下左大辨、拜參議、授從三位、病久不損、上表乞骸骨、詔許之、

〔日本後紀〕〔平城十七〕大同三年六月壬子朔、東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衛士督陸奧出羽按察

使臣藤原朝臣緒嗣言、伏奉去月廿八日勅、以臣爲任東山道觀察使、兼帶陸奥出羽按察使、臣以庸虛、謬□非據、負乘之責、年月彌積、今復兼職、重任方任、加授無所逃責、受納相交、臣聞量才官人、聖上之通規、量力受職、臣下之恒分、臣性識闇劣、久嬰疾病、政績之間、未曾所學、而遠授臣專委邊鎮、軍機多端、兵術非宜、若萬一有闕、事宜何謝、即身會微臣之死罪、還亦國家之大辱也、當今天下凶旱、亡殁殆半、丁壯之餘、猶未休息、是知民窮兵疲、固守不可止、縱有不虞、何用支防、又臣前勞邊事、雖成今當其位、豈知不堪、伏願陛下、曲照愚款、特罷臣之兼職、免有臨時之失、不任懇懇屏營之至、謹昧死奉表以聞、優詔〇□□□□□　宜遂所請、

(日本後紀二十一)弘仁二年二月壬午、參議正四位下行右衞士督兼美濃守藤原朝臣緒嗣言、臣材無足取、器實不達、病患纏身、久積日月、是以前日抗表、歷陳所帶之官、今陛下猶遣微臣、復參朝議、寵恩不測、謬叨高天、臣比者沈痾更發、病纏日深、不能朝參、大寧職事、實無可勤、伏望解所帶、兼疾私門、上除朝廷失位之譏、下遂愚臣辭賢之願、不任丹款懇迫之至、謹以病拜表以聞、不許、

(續日本後紀十二)承和九年八月乙酉、大納言正二〇按二□位兼行右近衞大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房抗表言、臣良房性愚魯、寡學聞、陛下不棄、故錄無遺、進先時恩、頻登清顯、未幾一歲、兼帶四官、臣以蒙先花之早春、仰南吹之餘暖、忝高明之職、兼蕃鎮之過、伏青襟而上陳、仰丹闕而懇訴、天未任輕、實約職組之花、則非飾身之地、輕佩之珮、誠是焦心之編、譬猶以虎豹之文、被犬羊之質、自知不可、謹回其實加之陸奥國新任守從五位下藤原朝臣大津、此良房之叔父也、雖忝家督儀、無有剛斷、由遙搶行事、不異同官、遞疑之間、實所可避、又三官以上、有司執聞、甚忌榮疑、一門寵歸一己、伏願停兼外官、猶守內官、然則使新聞於朝廷、止譏於與人、無任懇款之至、謹奉表以聞、不許之、

(續日本後紀十三)承和十年五月丙申、一品式部卿葛原親王、遣男從三位大藏卿平朝臣高棟、詣朝堂抗表曰、傳食知移、竹是反林之時、老馬傷職、亦爲投聚之日、遠取諸物、近驗於身、鳥〇□□　物之情、人亦

不殊、臣才識空虛、匪驥駑怯、猥以瓊樹之葉花、鍛演之涓滴、出宗室之先、位人臣之上、誠當傾德之期、生死無終、記恩之處、魂魄有遺、豈敢欲斯獨善、貪彼高冲、然而年隨日積、病與老和、一日伏枕、四支委廢、漸以過日、筋骨衰耗、縱有殘喘、知非全身、夫吏部者、人物之衡鏡、吏職之清要、填案盈几、何須析曠、伏願、還於天工、以利王職、臣謂、天道虧滿、人道惡盈、儻因一退、時得再生、則庶皆留泡露、重瞻闕庭、不許之、

〔文德實錄九〕天安元年六月壬午、中納言正三位源朝臣定上表曰、臣定言、臣聞選才授官、無効則黜、陳力就列、不能則休、(中謝)臣幸預磐石、頻忝寵位、非德擧、榮乃恩升、謬忝納言之職、已知身分有餘、而亦象以左兵衛府及勘解由使、愚心尚誠非宜、物議誰謂其可、然臣所以欽命不辭、忘謗無顧者、誠願先筋骨之未衰、竭犬馬之微効、是以勤身秩常、唯力是視、不憚風雨、養効塵涓、而隨職以降、數年空過、私責且彰、官跡行起、加之自去春末、疹疾纏身、五月以來、更亦殊劇、擧體虛羸、無階起居、膂痰無驗、日夜苦辛、計其能殊、當曠時月、竊以、兵衛府機警案務、史(〇史恐吏誤)士雖謂、勘解由使拘放多端、疑論難決、縱得其才、弗勤無益、縱有其勤、非才何用、而今臣不才之上、恪勤又廢、既同曠官、何免重責、至中納言者上有長官、傍多衆賢、國務行留、不繫一員、因顧唯帶此納言、早解彼兩職、授受惟宜、名器無濫、不敢辭劇求易、叨高嫌卑、唯要其有利於公、無損於私、伏望(〇望下恐有脫字)恩再造、朝議無偏、擇賢才以改授、矜愚性以全榮、然則在榮之議、外甚初停、負乘之憂、內懸永斷、不任悾款之至、謹奉表以陳聞、右大臣宜奉勅、抗表懇至、宜從來請、

〔三代實錄二十二淸和〕貞觀十四年九月卅日丁酉、右近衛大將大納言藤原朝臣常行抗表曰云々、拔臣爲大納言、伏願聽臣退讓之請、不許、

〔菅家文草十表狀〕爲大學助敎善淵朝臣永貞請解官侍母表

臣永貞言、(永貞)當年負笈、壯日成功、乃心於王室之前、叉手於黎民之下、臣母妾今年八十有五、盡風南吹、薄暮西夕、醫雖三世、榮雖萬金、蓋之遊魂、有何一効、臣聞、侍養之道、律令有文、子孫盡之、然後旁達、臣

實天慶所修鋼兄，典臣無少外記受成，身所學實才，亦可用，臣爲大學助教，十五年來，圖冠非中身之驟，爾文是選手之賞，不蠶皮成名，留賣金，夫人生於三學之曲，一居官以養親，於委親，然而君臣絶遐，愛敬不可兼全，豫自棘門之孝，何以使親，臣先是曾試之外，有一小園，茅屋數間，草棄三逕，樵蘇之費，不償力以何供養養之費，不假鳩鶴撒殿，此是區區之尺土，是持老母之餘年，而受成出爲親闈之臣，臣永貞入爲家闈之子，遂家成膝，共是王臣，伏惟聖朝爲民父母，以孝行治，敵不及且爲之人，願先遇期顯之老，昔令伯爲祖母，實於曾祖，不省實，臣今爲所生解侍陛下〈割注〉何敢徹違，級請臣去官，請察多士之居於臣貴謝臣，本求是求忠之心於臣門，若無施違藏鋼曾長歸，斂手足形，乃盡臣節而已，今不勝鳥鳥之情，昧死以聞，臣永貞誠惶誠恐，頓首頓首，死罪死罪，謹言，

貞觀十四年

〔三代實録〕元慶元年正月五日丁丑，右近衛權中將從四位下兼行備前守藤原朝臣山蔭重抗表，實慙山之下，既非多士之林，羽翮之前，自是群材之府，仍勅曾聽許之，事人臣至切，天從求請，伏願天皇假以稱賞，停臣中將入宅之職，歸臣外州四年之秩，則上有成功之慶，下無曠官之累，詔許之，

〔三代實録〕元慶元年閏二月三日乙寅，從四位下守右大弁兼行備前守藤原朝臣山蔭上表言，謹事，去月二十九日詔命，以臣任右大弁，心肝失圖，永谷增咎，臣業非文學，性無故事，本過簡蕪之包容，久倫錄位之過，況官儀樞要，盡其力者其利，臣未曾累臣白罪加之臣先上表狀，請罷右近衛權中將，盧無他貳，專志在侍太上天皇，〈割注〉誠恐誠懼違，竟將今當此重任，更追先請，人臣之節，貴其有終，犬馬之情，何爲默止，伏願非聖照覽，解所職，爲天聽臣懇款，不堪屏營之至，冒昧以聞，不許，

十三日乙酉，山蔭重上表云々，不省，

〔都氏文集〕〈割注〉請以所帶内記職讓與諸才者状

右良香，自任内記于今十年，准之往例，實爲過分，曾聞庶官能理，吏相讓於上，民不爭於下，盡其力者，

其分、指其人、讓其職、至于叔末、飾讓萌生、外辭其官、內惜其職、故梁奉朝請、吳均論之、以爲伯益辭士、堯朝義其風、范宣讓卿、晉國賴其治、皆降己避賢、非若今之讓者、却於魏世、但明謙去伐、未有推穀士林、良香在此明時、敬順陽禮、臣之寡資、莫過賈士、伏見伊勢大掾滋野良幹、權少掾藤原春香、出雲權掾高岳五常、土佐權掾大藏善行等、並文富春華、學斂秋實、若播筆翰閣、洗硯鳳池、則左右得人、起居傳美、盡辭不顧、釋氷口口謹言、

元慶三年二月一日　文章博士從五位下兼行大內記越前介都朝臣良香

〔本朝文粹五辭狀〕請罷藏人頭狀　菅贈太相國〇道眞

右臣某、伏奉昨日任藏人頭之勅旨、夢中之想、經曉猶迷、冰上之行、向春欲陷、臣謹撿近代之例、天安藤原良繩、貞觀藤原家宗、同山蔭、仁和平正範、藤原有穗、源元、當代藤原時平、同高經、源希等、或出自清流、或生於鼎族、其德也堪守之器之稱、其威也足牽蠻風之群、未有凡夫儒士之能當此任、以遺其名者矣、臣罷官南海、歸命北辰、枯骸更榮、死骨重肉、聊圖下而趁拜、分已無涯、列侍中以周旋、恩何不翅、古人云、服之不遑、身之災也、臣自謂、褐衣短弘、亦須慎之、況其職之乖人望乎、況其任之逢天譴乎、伏願聖主陛下、〇字一作停臣所掌、更選其人、勿俾致祥妄觸仙欄、窳鼠初汗禁省而已、縱使臣凌崩沒於龍頭、臣豈敢辭命、縱使臣斷跟途於虎尾、臣豈敢惜身、唯此非據之職、臣之所不知也、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、

寬平三年二月日　散位正五位下菅原朝臣狀

〔菅家文草九辭狀〕重請解藏人頭狀

右臣某不堪件職之狀、以去二月卅日、上奏、右少辨希傳勅旨云、事須先擧可替之人、然後辭退件職、又奉口勅云、早從職掌不得闕怠、自爾以來漸六十日、進退周章、莫不違禮、奉行宣下、皆斯失常、加以某去三月九日任式部少輔、今月十一日兼左中辨、此兩觸職、過分踰涯、況復直職口撰書之所、候御前侍讀

之職、所謂有二實所歸者兩役、虛器之才難可、爰我宿識特實非俗、爵降伴職、然則重光之中、有全俗類、思得之下、久實拙懶、不堪要務、重誇是分、謹言、

寛平三年四月二十五日　　藏人頭正五位下左中辨兼式部少輔某

〔日本紀略〕四十上　應和二年八月卅日乙卯、返給右衛門督藤原朝臣〇中[illegible]辭職状、

〔本朝文粹〕五　請被停職中務省卿状　　前中書王

右臣者、前朝〇[illegible]之寵、相也、不堪王宮之伯、聞謝山門、十餘年、今聖上〇[illegible]　幸、尚餘寵、辭以非常之寵、

思謬生涯、懐老長嗟已、然實謬之罪不遁、素飡之責更深、右所謂以朝衣錦、朽株也、臣昔列槐棘之時、

思辭爵辭官、以爲爲事、因退休生於西山之下、將結草庵、以爲送老之地、而本懐寧達、遲俱在被、今日

所謂者、是昔時之宿念也、伏願垂自天慈、賓於官職、然則上遵老子止足之誡、下遂少年汗朝之願、望明

恩、誠惶誠恐謹言、

寛和二年正月廿五日　　一品行中務卿状

〔續古事談〕二　公任、齊信、中納言左右衛門督ニテオホヤケニツカウマツルニ、齊信神社ノ行幸ノ

行事ヲ承テ、其賞ニテ加階シテ公任ヲ越タリケリ、公任ソノウレヘヲヤスメガタクシテ、中納言ノ

辭表ヲタテマツリテ、御門堀河左大臣ヲ勅使トシテ表ヲカヘシタマハス、思トコロアリテタテマツ

ルマツル表也、一階ヲユルシ給フ、モトノゴトクツカマツルベシトアリケリ、時ノ人云ケル、イマダ

昔モアラザル事也、コエラルヽ恥ヲ雪ノミニアラズ、カヘリテ先ヲナムマストゾ云ケリ、採用人ニ

スグレタルニヨリテ、君モワレミ給ナルベシ、ナラベコナレデアレカシ、

〔十訓抄〕八　四條大納言〇[illegible]　寛弘二年の頃月ごろうらみのありて出仕もし給はず、大〇大中納言

言辭退し申さんとせられけるに、匡衡を招て辭表を書らんと思ふ、時共、其名以言等に誂へしむ

といへども、皆心に不叶、其趣ばかりに書ひらかれんと思といはれければ、匡衡なまじゐにうけ

とりて、家に歸て愁歎の氣色あり、時に赤染衞門〈衞〇匡衡妻〉何事ぞとたづぬるに、かゝる事なり、彼輩は才學優長也、しかるをそれにまさりて書のべん事、きはめて有がたしと答へければ、赤染打案じて、彼人ゆゝしく嬌飾ある人也、わがみの先祖やんごとなきものにて有ながら、沈淪の旨をかゝざる歟、早く此旨を書べしと云、匡衡かの靈の草を見るに、實に其趣なし、尤しかるべしとて、打立に云、臣は五代の太政大臣の嫡男也、曩祖忠仁公より以來と云より、次第にかぞへあげて、我身の沈める由を書て持て行所に、感歎して悅べる氣色なり、仍是を用ひられけり、

〔本朝文粹 五辭狀〕爲四條大納言請罷中納言左衞門督狀　江匡衡

右臣公任伏以、納言者國之喉舌也、塞々數陳、金吾者王之爪牙也、孜々宿衞、一日不可退居、一夜豈空過警乎、臣幸出於累代上台之家、謬至過分顯赫之任、才拙而零落、槐葉雖刷前蹤、病重而栖遲、柳枝可生左臂、加之皇太后〈后〇圓融遵子〉去年春以還、露靈屢侵、口虧乖和、豪猶子之恩、兼爲長秋之監、菅藥之事、無人相讓、玉條非無充侍之文、竹帛又遺弘仁之例、皆辭被仙院之塵、偏宿此后園之月、臣子之道行、志一也、非敢掛冠而効二疎、欲亦知足而免三懼、伏請皇鑒、曲廻餘寡、皆罷文武之兩官、將懸刀火於一途、不堪中懇之至、臣陳乞以聞、死罪頓首謹言、

寬弘年月日　正三位行中納言兼左衞門督藤原朝臣公任狀

〔小右記〕寬仁四年七月廿八日丁丑、衞黃宰相來、〈略〇中〉宰相云、向右大弁〈朝〇藤原經通〉許、依有消息、呼入臥內、病太重、若有非常、少納言基房可猶子、又云、明日可辭納解由長官大藏卿、

〔本朝續文粹 五狀〕重請罷撿非違使別當職狀〈參議公成〉　明衡朝臣

右公成言、愚以愣智之身、猥居李法之任、刑書不明、更慙燭下之丹筆、心機易惑、事辨雨後之黃縷、職之過涯、惱惱而已、爰久纏疾病、漸送光陰、須訪鴻術於上池之方、何尋瑩字於左水之夢、仍去二月十九日修狀辭讓、而祈請無容、春風少溫和之聲、儉惕不止、秋露增危殆之思、然間露氣雖齊、病葉彌畏、棘林之

風霜共冷、誠勞來寒窓前雪之月、伏望儒骨累代之要明、照李遠之鬱陶、仰此術宗、授彼碩德、則翻書之文道、嘉運際會之事、自芳猷綿之法、無貧客化振之譏永絶、不勝懇懃之至、臣（一）誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、

長暦二年月日　參議正二位行中宮大夫兼左兵衞督備前權守臣藤原朝臣（一）上表

〔本朝續文粹五〕從四位上行大學頭兼文章博士藤原朝臣實範誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩被停止所帶大學頭文章博士職狀

右實範謹檢案内、大學頭文章博士、共是闡儒學、誘生徒之官也、實範文章奉試而無、翰林之職、材智未淺而不爲學館之宗、于朝于夕所慚懼也、然圖風霜相侵、壽命殆危、不如辭兩職、以守李老知足之文、加之三代以來爲氏吉口之貴、留請天恩被停件官職、鎔印於深淵之眞、同羊質於衞鶴之風、實範誠惶誠恐謹言、

康平五年十月　日

〔古今著聞集五和歌〕光方試對策にて、講獻座につきたりけるに、雨の降たりけるに扇をさしけり、晴日夕陽にむかひてこそ、さす事にて侍るに、思ひわかざりけるにや、父大納言見物しけるが、かへりて光方が對狀をかきて奉りけり、前途有まじき也とぞいはれける、はたしてとくうせにけり、

〔古今著聞集四文學〕高倉院の風月の御才は、むかしにもはぢぬ御事とぞ世の人申ける、されば〇むかし以下二十一字、據一本補、このみ御沙汰も有けり、治承二年六月十七日、延久のふるき跡を尋て、中殿にて御作文有けり、〇中略御今度の文人目出度えらびめされたるに、右大弁長方もれにける事、人々あやしみあへり、いかなる事にかおぼつかなき事也、右大弁此事を恨みて、病と稱して參議大弁兩職を辭申けり、實にはやまざりけるにや、天氣不快なりけるとぞ、

官人辭職

〔吾妻鏡十二〕建久三年三月二日甲戌、廷尉廣元書狀自京都參著、當職事、既上辭狀訖、其案文謹獻上云云、此事太相叶御意云云、彼狀云、

正五位下行左衞門大尉中原朝臣廣元誠惶誠恐謹言、殊蒙天恩被停所帶左衞門尉撿非違使職狀

右廣元、去年四月、任明法博士左衞門大尉、即蒙撿非違使宣旨、三箇之恩、一所不耐、是以同十一月五日、先遂李曹之儒職、然居棘署之法官、竊以累祖立身、雖趁北闕之月、一族傳跡、皆學南堂之風、而校尉者王之爪牙也、專爲警蹕之警衞、廷尉者民之銜勒也、宜致囹圄之手足、爰廣元性受暗愚、爭辨菽麥、而日之參、心非明察、宛隔棠棣三代之塵、不若辭榮於非分之任、竭忠於方士之職耳、望請天慈、曲照地處、然則內避瞰鬼之嘲哢、外須識人之衆口、難堪悚兢之至、廣元誠惶誠恐謹言、

建久三年二月廿一日　　正五位下行左衞門尉中原廣元

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年五月癸酉、妃二品朝原內親王辭職、許之、　癸未、妃四品大宅內親王辭職、許之、

〔都氏文集三〕爲尙侍源朝臣〈○全姬〉辭職第一表

妾某言、妾以貞觀之始、得忝尙侍之官、其後屢推精誠、苦求退去、而更降優旨、不聽自辭、所以勉勵亓心、從事於紫檢之下、顧當亓吝、積過於彤管之記、今妾老隨日至、病逐日侵、未成流芼之儀、誰助潤藻之禮、雖云婦人之事、處猶知筋力之難、強從增感衰、有損聖運、請解所職、待罪閭門、伏冀太陽必照、允照妾之本意、於是遂賢、不任悾款之至、謹奉表以聞、謹言、

〔本朝文粹五〕爲尙侍源朝臣全姬請罷職表　菅贈太相國〈○道眞〉

妾全姬謹言、妾先陳懇誠、請解所職、重年遠隔、單誓難通、一二年來、愈增厚顏、今妾位崇三品、齡迫七旬、將假脂粉以從事、棠園非扶杖之庭、欲俾綺羅以勤公、丹墀翠懸事之儀、妾不敢謙退、白日惟明、妾亦無

陳詞長天在上、伏願陛下曲垂照察、全高恩於實際、養殘氣於衡門、臣誠惶誠恐頓首頓首死

罪死罪、謹言、

元慶四年月日（〇又見菅家文草）

朝野鹿取辭官

（類聚國史九十九職官）弘仁十一年閏正月戊辰、兵部大輔兼右近衞少將正五位下朝野宿禰鹿取、以病上表乞解職、有勅許之、又所辭授從四位下、

源定辭職猶給封戸

（續日本後紀九仁明）承和七年八月辛亥、先是參議從三位中務卿源朝臣定、上表乞退所職、是日參議中務卿依請許之、但封給令食封百戸、

鎌子不就職

（日本書紀二十四皇極）三年正月乙亥朔、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三島、

（公卿補任元正）養老二年戊午

右大臣　正二位藤原朝臣不比等　六十（八月日辭職、勅不許、）

（本朝世紀）仁平三年五月一日己丑、今日大納言宗輔卿下、皇后宮權大進藤原顯實宣旨（下大外記云々件）人、留大進國通敍任權大進、仍歸本官辭申云々、

藤原伊通辭官

（公卿補任崇德）大治五年庚戌

參議　從三位藤原伊通　卅八（右衞門督、二月日任中宮權大夫、五月辭職、不許、）

（中右記）大治五年十月十日己卯、或人云、伊通辭申三官云々、（參議、右兵衞督、中宮權大夫、）是不被成中納言所恨也、

一旦雖有愛於辭官者、誠以不便歟、太略不云合人也、

（古事談二臣節）大治五年十月五日、參議四人、師頼、長實、（中納言）宗輔、（中納言）師時等任納言、（保安四年已任、伊通之兄師時子）（今按、任）于時伊通參議右兵衞督中宮權大夫、四人皆上臈也、然而不堪鬱結、翌日辭所帶等於大宮大路、積束車、白晝着緇色水干着布袴騎馬、被遣神崎遊女金許、又年來所被借置高盛弓返遣中院右府（雅定〇源）トヽ、

八トセマデ手ナラシタリシ梓弓返ルヲミテゾネハナカレケル

返シ

何カソレオモヒスツベキアヅサ弓又引カヘス折モアリケリ〇又見二十訓抄、千載和歌集一

〔諸家傳二 德大寺〕道平公 號二後光明照院一

嘉元三年閏十二月廿一日 十九歲 辭二兩官一閉門 〇權大納言兼右大將

前大納言實家、任二大臣一之故也、

因上表辭官

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年八月庚辰、勅、中納言多治比眞人廣足、年臨二將耄一、力弱就レ列、不レ敎二諸姪一、悉爲二賊徒一、如レ此之人、何居二宰輔一、宜下辭二中納言一以二散位一歸中第上焉、

〔古事談 一 王道后宮〕一條院御宇、源國盛任二越前守一、其時藤原爲時付二於女房一獻レ書、其狀云、苦學寒夜、紅淚霑レ袖、除目春朝、蒼天在レ眼云々、天皇覽レ之、敢不レ羞二御膳一、入二夜御帳一涕泣而臥給、左相府參入知二其如一レ此、忽召二國盛一、令レ進二辭書一、以二爲時一令レ任二越前守一、國盛家中上下涕泣、國盛自レ此受レ病、及二秋季一任二播磨守一、猶依二此病一、遂以逝去云々、

〔公卿補任 花園〕正和三年 甲寅

內大臣 從一位源具守 六十六 春宮傅、同日辭二兵仗一、十二月二日、爲二關白一、依二寒孝院仰一、被レ讓二大臣之由一、被二仰下一云々、 三月日辭二中內大臣一、寒孝院崩御一、重事、可レ辭二中內大臣一之由、被二仰下一云々、

〔諸家傳 二 鷹司〕光平公 後昌心院

慶安五年二月九日 辭退 〇右大臣

依レ仰辭レ之、前權大納言藤原經季所勞危急之間、爲レ被レ任也、

〔公卿補任 後冷泉〕文保三年 己未〇元應元年

關白 正二位藤內經 廿九 藤氏長者、左大將、正月五日敍二從一位一、五月廿八日辭二大將一、歸二隨身兵仗一、六月廿七日、依二院仰一辭二內大臣一、不レ及二上表儀一、〇三月 關白 辭退、

私去官

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年二月壬戌、散位從四位下勳七等大野朝臣眞鷹卒、左近衞中將從四位上

勤五等實錄之子也、〈中略〉淳和天皇踐祚天長之初、任右近衞權少將、以舊臣也、尋授正五位下、轉中將、九年授從四位下、天皇讓位閑居之日、獨侍賓塵、身於公家、是歳冬十一月、供大嘗會、隨舉自謝兵仗、與權中將藤原朝臣助私退去、隱于山寺、剃髮、辭讓不復出仕焉、

〔續日本後紀 仁明 二十〕嘉祥三年三月丁酉、是日天皇寵幸人頭、暫受僧戒、四品中務卿宗康親王、從四位上阿波守源朝臣多、同時入道、並天皇之愛子也、時人莫不哀之、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年三月丙午、左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞出家爲僧、宗貞先皇〈仁明〉之寵臣也、先皇崩後哀慕無已、自歸佛理、以求報恩、時人憫焉、

〔古事談 一 王道后宮〕花山院御出家、寬和二年六月廿三日事也、子時許、主上私令出御在所給、藏人左少辨道兼、天台僧嚴久候御共、〈中略〉向御花山、〈中略〉權中納言義懷、權右中辨惟成等、從朝尋參花山寺、同以出家、〈中略〉中納言法師云、御在位之間、偏任非理之朝威、今遇斜退之時、若改事從之誠、有本意相違歟、仍所出家也、本性朝市更無其益歟云々、惟成所陳同之云々、

〔古事談 一 王道后宮〕顯基中納言者、後一條院寵臣也、天皇崩給之後、忠臣不仕二君ト云テ、七々御忌之後、登天台横川、爲僧入道云々、發心之根源、天皇晏駕之期、於宮不供燈、問其由所、主殿司皆候新主之事云々、聞此事發心云々、

〔親長卿記〕文明三年四月廿八日、入夜右大弁宰相〈俊量卿〉來、年來所存之間、近日可遁世之由有稱申之、驚入之由種々加諷諫了、　廿九日早旦或者來云、萬里小路爲遁世出走云々、夜前之儀、且大方爲僧之由令申之時、令驚歎相尋之處、此事出走云々、伊勢守〈貞親〉同遁云々、驚入者也、先參內裏局、謁大納言典侍、勾當內侍等、人々只以舊交劍來、驚傷無極者也、

〔台記〕天養二年〈○久安元年〉六月十二日丙戌、先日遁塞人道覺宗云、明年當太一厄、前後年有其慎、又四五兩月當熒惑卯左□□右執法星、是大臣之慎也、就中今右大臣、內大臣〈○□□〉可准之、又道家之例引

勘之余、〈○中略〉以此旨中宇治、〈○頼長父忠實〉云、天變頻見、怪異重示、以不肖居大位之所致也、上表辭職如何、仰云、依天變上表之例、近代不聞、

致仕

主典以上及ビ雜任ノ人、其齡七十ニ至ルトキハ致仕スルコトヲ聽ス、五位以上ハ上表シ、六位以下ハ太政官ニ申牒シテ奏聞ス、而シテ判任以下ハ官省ニテ處分スルナリ、外官ハ其國ニ申牒シ、國ヨリ太政官ニ申ス、又參議以上ノ致仕スル者ハ、朝參等ノ時ハ本位見任ノ上ニ列ス、五位以上ニシテ致仕シタルトキハ、位田、位封、位祿ハ賜ヘドモ、季祿ハ賜ハズ、職封、職田ハ現任ノ半ヲ減ズ、而シテ其人畿內ニ在ルトキハ、其位階ニ從テ、或ハ每年或ハ每季ニ一タビ、內舍人ヲシテ安不ヲ巡問セシム、猶ホ辭官篇ヲ參看スベシ、

〔伊呂波字類抄〕〈知畳字〉致仕チシ

〔書言字考節用集〕〈八言辭〉致仕〈致、還也、仕官者告老還其職事於君、而來通曰致仕、曲禮所謂、大夫七十致事是也、〉

〔貴嶺問答〕年齡已餘七旬、奉公又六十年、於今者欲致仕、但件年何十以上哉、依不分明、所尋申也、謹言、

致仕事、官人年七十以上聽致仕、五位以上上表、六位以下辭官奏聞云々、選叙令所注如此、誠惶誠恐謹言、

〔左大史小槻季繼記〕一致仕事

七十以後ヲ致仕ト云、大臣并納言參議ノ七十ニ餘タル事也、別ニ致仕ト號事ハナキ事歟、致仕ニ至ル人、節會ナドニ不至ト云トモ、入見參祿ヲ給事也、上古ハ致仕大臣ト號スル事モ有、近代ニイタリ號スル事ナシ、

致仕年齡

（令義解[選敍令]）凡官人年七十以上聽致仕、[illegible]五位以上上表、[illegible]六位以下申牒官奏聞、[illegible]

（令抄[選敍]）致仕、一說云、白虎通云、臣年七十懸車致仕、懸車示不用也、古記云、問、聽致仕、任意以不、答、必令致仕、

但身才強幹、籍帳雖時有不衰耳、分當亦令致仕、

致仕者帶本官本位

（延喜式[十八式部]）凡前參議以上、致仕見參、及預朝參者、致仕者在本位見任上、以理解者在同位下、

（政事要略[九十九雜事]）式部省

勘致仕大納言文獻事

右致仕見任、明存式條、而續其座名簿之日、誤以致仕者置見任之下、須依實改正、

寬平元年七月十四日　大録香山弘行

大丞藤原

致仕者封祿

（令義解[祿令]）凡食封者、[illegible]太政大臣三千戶、左右大臣二千戶、大納言八百戶、[其見任解官、及致仕者減半、]

（令義解[田令]）凡職分田、[illegible]太政大臣四十町、左右大臣卅町、大納言廿町、

（續日本紀[二十仁]）天平寶字八年九月戊戌、御史大夫從二位文室眞人淨三致仕、丙午、勅、前大納言文室眞人淨三、先緣致仕、職分等雜物減半者、宜改先勅、依舊全賜、

（續日本紀[四十桓武]）延曆八年正月壬子、參議太宰帥正三位佐伯宿禰今毛人上表乞骸骨、詔許之、八月庚寅、先是參議正三位佐伯宿禰今毛人致仕、而賜其參議封戶、減半賜之、下知民部、以爲永例矣、

（日本紀略[一九]）正曆三年十月十四日庚戌、前權大納言源重光准致仕、賜職封、

諸司致仕者賞奉

（令義解[七公式]）凡諸王五位以上、諸臣三位以上致仕、身在畿內、[illegible]每季、五位以上每年、並令內舍人

致仕表

一遍聞、奏聞安不、

〔有職問答 四〕一致事表と申事、源氏物語に候は如何心得可申候哉、

禮記大夫七十而致事云云、其ツカサドル所ノ事ヲ、キミニカヘシイタスト云心ナリ、日本ハ致仕ト多ク書之候、仕フル所ノ事ヲ、君ニカヘスヨシヲ文章ニ書アラハシタルヲ表ト云也、源氏物語致仕ノ大臣モ、此心ナルベシ、

〔雲州消息 下末〕去月某日上遜職之表、七十而致事、禮有明文、況觸鬢綬風、難趁公庭、不如卜菟裘之地、偏全鶴髮之齡、漢朝二疎素所欽仰也、抽簪懸車其期漸至、嵯峨別墅可爲隱逸之棲居、鹿月明雲靜送餘生於其處、尋春花翫秋葉之日、吞任花軒於蓽戶、老之幸也、謹言、

八月日　老翁

謹上　皇后宮大夫殿

〔都氏文集 三 表〕爲主殿頭當麻大夫請致仕表

臣某言、臣以菲細久貪榮祿、無限之恩未酬、有涯之生垂盡、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、臣聞、斛籔屢移、蜂蟻致急湍之喟、螢爝假輝、終塞少長明之光、臣春秋七十、氣力無餘、四體不仁、一身失據、紅顏非昔、過京洛而無少年、白髮在今、寧御溝而悲衰老、即是傳家委子之時、含飴弄孫之日、縱令臣目能視五色、耳能聽五音、猶懷朽木之恩、須致懸車之請、今臣羸病歲積、蒙昧日侵、口得糜而乃食、身非帛則不煖、老之故也、所以臣欲棲遲於蓬蓽之門、赴遊於蘚蘿之徑者、計豈在爵朱丹藥燒白雲而稱宗乏乎、唯須讀老子而甑五千字、全覺知止之分、從王充以取十六篇、解亢頤神之術、如此而已、伏願陛下、焉臣餘年、矜臣殘喘、臣今日以後、不復夜行、猶表里而歸峨、顧形閑而淹泊、臨表哽咽、身去神留、無任懇懇之至、謹事表以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、謹言、

〔本朝文粹 五 表〕爲貞信公〇藤原忠平請致仕表　後江相公〇大江朝綱

臣某言、星轉漢廻、多過百年之半、花開葉落、纔逢七旬之期、心先車懸、涕與筆下、臣某中謝、臣聞、四時之運、

春多雖秋多思、一生之間、雖宜仕老宜退、四時更遞、遂計往事、寬平之始、雖鮮而避暑之宮、延喜之年、竊思蓋翼臨之慶、上奉登極之日、倚重任而爲衣冠、實轄開元之朝、戶部卿而食多代、歷四代、心是一心、雖爲少壯、以對日於綺羅之中、身雖無功、猶退身於江湖之上、實丹心猶在、方寸之灰難何、玄鬢化素、一代之纔在、何輸官仕素、消散之心已異、乘軒戴老歸泉之望自深、故去年雖獻狀、仰聞宸襟、未允抽而之請、猶纔收責之重、況官朝以之則難、如數事之勞、伏願聖慈、曲垂允容、罷臣官職、早許辭官之誠、合守止足之分、然則以往實身、雖片月於逃名之地、望風雲於終身之期、不勝明時辭退之情、謹拜表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天曆三年正月三日　　太政大臣從一位臣藤原朝臣上表

同第二表　　後江相公

臣忠平言、去正月三日、臣以老之疾、上請骸骨之表、翌日中使從四位上行右近衛中將兼內藏頭丹波權守良岑朝臣義方、重蒙優詔、猶謝撫、不許骸骨之聞、天臣某中略臣奉謝天恩、心猶難托、知綸旨之難遁、更念宏之不移、夫周公旦者、千年之大聖、金石比堅、司馬子者、三代之重臣、珪璋挺質、精爽不衰、興替之勢誠茂、氣力猶強、輔仁之朝猶備、以此爲比、尤所愧、臣性素愚鈍、重以疾病、心神疲損、營魂於瑶璣之色、觸氷先溶、臣恨於處鼎之缺敗、駐年懸仕之齡、早有歸田之歎、耕耘朽邁之日、猶帶布建之情、況去天慶七年以來、衛石不轉、行步已衰、朝天之驗空負、撥振中、向闕之車徒抛、且印綬上代、勞力衰、顧放鴻鳥於事外之草、獨訪志願、欲運殘身於故上之花、七十年前、懷既往來遊之資、三百篇裏、愧不歸於式微之詠、忘會思、俱則是累年累日之懷也、靜觀爲名、豈只一朝一夕之志乎、古語云、聖人以行不以言、聽天以實不以文、欲開退讓之門、以廻進賢之路、伏願早降陛下之玄鑒、曲照微臣之丹誠、將朝章於明文、俾佇行於昭實、然則臥閑雲、自他容膝之勝、家山作夢、應遂高枕之樂、傾筆詞極、臨紙汎瀾、不任誠惶誠恐之至、謹拜表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天暦三年三月十六日　太政大臣從一位藤原朝臣上表

爲清愼公〈藤原實頼〇太政大臣〉請致仕表　菅三品〈〇文時〉

臣某言、紅桀黄落、一樹之春色秋聲、結綬抽簪、一身之壯心老思、臣已老也、事無思哉、臣某〈中謝〉臣伏惟、功成不退、身者非智、年至不致、事者非賢、具誠在耳、玄道風聞、聚斂驚情、粉擇流連、臣名實不叶、德位相乖、舟檝之用無功、何辜久忝重載之任、鹽梅之和永闕、豈圖全至貳膳之期、方今肝葉始薄之後、秋風既二十廻、心花差衰之程、春日新七八箇、以年而念、禮制之車可懸、有時若徵、勅祐之發愛在、未死之際、唯命難辭、但恐闕庭一退、則娥月厭而不再迎、家山已歸、亦澗雲遠而難重出、又臣羸茶晴倍、筋骨不堪、珠砌禁嚴、曾非扶杖之地、蘭逕叢臺、欲爲掛冠之樣、伏願陛下、日月曲光、雨露廻潤、矜胡馬之風嘶、許遼鶴之雲望、任臣殘夢、令臣晏然、歸遂心留、肇涙俱下、無勝懇懼眷慕之情、謹拜表陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

安和二年正月八日　太政大臣從一位藤原朝臣上表

爲同公乞身表

臣某言、誠之至深者、其詞無詞、文之偏質者、其體少體、臣有懇懇、罔知所陳、臣某〈中謝〉臣天爵不貳、人位徒貴、寄賢路而錯毀穿耳、重寵澤而惑僞交智、才職全違、常迷岡山中蒼生之嗜、形氣早悴、唯思趁淮南道君之駕、及至秋景既過、夜漏漸永、老眼不寐、靜想微躬、生於昌泰之末、長於延喜之間、戴曉星、飲夕冰、所歷者四代之聖化、被霜凌、塊風積、漸迫于七旬之頽齡、於是毫隨年加、心覺求退、而忘進、病逐日劇、事皆昨是而今非、歎之最奇、靈泣軒雲之長斷、禍之獨崇、俛仰堯日之新昇、臣卽霸仁已被遐、無物不落潤、恩先施舊、是臣自遺逢、鳴吠可通、骸骨可賜、豈圖更尋家風於庭檝、還降關白之紫綬、驚以獻章、膽頻瀝而汗不反、懼之向闕、身強行而脚難支、是故戴天自惰、道民無功、縱有政敎之可急行、只當歸意、又有詔命之可固爭、何曾犯顏、治理之道、恐從荏苒、況雲物呈異、星怪尤甚、昔東漢末衰之世、權臣多因咎異而去

實今中實有犧之時，當須遣見賜告而食位，伏願陛下，殊察玄鑑，曲照丹誠，矜臣餘喘，且仕之情，尤臣穢靈永歸之請，斯乃國家所以上答天心，下協人望，豈遺於一旦，滿休於萬年，仍無勝惶迫懇悼之至，臣ㄹ誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言，

康保四年十月廿五日　　太政大臣從一位藤原朝臣上表

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶八歳二月丙戌，左大臣正一位橘朝臣諸兄致仕，勅依請許之，

〔公卿補任孝謙〕天平勝寶八年中略

左大臣　正一位橘朝臣諸兄七十三　二月日，上表致仕，辭之，實□年，廿九年，

〔日本後紀十三平城〕大同元年二月甲寅，從三位行皇太子傅大伴宿禰弟麻呂上表言，臣今歳已邁，耄甚見期，負薪之勞，伏帳于今，身有餘年，屢位昇三品，職參八座，又東宮之傅，忝當此選，顧門寧族，實愚難副，顧影循躬，頻懷慙赤，心固宜引退，年與病侵，生涯命短，餘家甘苑，而今年邁八十，進退不便，自恐老頭，前知失誠，凛儀力衰，素食貴貴，猶鳴儀雅，竹籬簡遂石，輸難顯宜天，飾匪影，歎木危幾，仰北闕而奉辭，謹露朝衷，伏乞以聞，以中納言從三位藤原朝臣内麻呂欽聞宜，許之，令奉勅請，

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年正月丙辰，參議從三位宮内卿兼常陸守菅野朝臣眞道上表致仕曰，臣聞，義行客足，身事之恆分，懸仕老休，禮制之通規，所以揚名事主，保身終命也，臣本庸品，才用無取，涉學辦於甲科，干祿朝於下士，從以早圖，多奉恩賀，先朝受自榮閑，拍無冥等，夙夜軒陛，雖歷官序，遂乃曲蒙口齋，厚思科曜，兼文武之儀，顯參中外之厚，荷以至今日，累沐天恩，尸素伏深，戰慄，但臣歷事三朝，當登七十，朝隨年積，志與身衰，霜露難耐，非無悔懺之心，雨雪夜行，恐乖止足之誠，伏願歸骸舊里，收迹林麓，養疾以存餘生，杜門閑居，終日無任，懇款之至，謹詣闕奉表以聞，許之，但常陸守如故，

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年四月辛巳，參議正四位下三原朝臣春上上表致仕，許之，

〔文德實錄九〕天安元年十月丙子，正四位下因幡權守南淵朝臣永河卒，○中略承和四年春，出爲備中守，

中略○十二年正月、敍正四位下、年登七十、致仕乞骸、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年閏十月十二日戊午、太宰府言、管豐後國權掾正六位上越智宿禰廣成乞骸骨曰、廣成齡及八十、筋力衰耗、空妨官職、無益公家、請罷官歸鄕以待終、許之、

〔三代實錄 三十一陽成〕元慶元年四月八日己卯、大納言正三位南淵朝臣年名上表致仕、言、臣聞、年滿致仕、人臣之禮也、氣衰聾病、人生之命也、氣衰年滿、臣既知之、知而忘之、不免重責、中略臣位昇三品、職至納言、前跋却愓、氷淵兢危、昨是今非、犬馬齒截、臣平生以爲、性雖愚蒙、止足之分、不敢踰矩、力雖喑息、貪進之閒、不敢從心、至于陛下卽位、春秋甚富、臣不忍遂孤雲以歸骸骨、苟且延數日、而報國家、豈圖心事不諧、困病乍發、渹沈未變、魂氣如離、臣自顧、茅土封高、皇天降鑒於陰騭、康衢漏盡、冥壑結罪於夜行、臣八百戸之恩、死而不朽、臣七十之春、生以變時、伏願陛下、賜臣放歸、優臣告老、以聞恩許、爲棄石之効、以豪勳術、爲招復之方、臣欲齎表而以奏闕下、起居不便、冠帶無由、故謹遣男從五位下內藏助南淵朝臣良臣、抗表以聞、○又見菅家文草、

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年四月十三日丙辰、大納言正三位兼行彈正尹藤原朝臣多緒致仕抗表曰、臣多緒言、臣懸車之期既過、歸阜之望彌深、累年抗辭狀、待謝叫、重閽而未通、叩層旻而无聽、臣舊无耆書○下恐有脫字之德、猥居獻納之官、少不如人、追慚燭武之語、老而彌耄、猶耻趙孟之譏、故流水不迴、空起歎於川上、漏箭已盡、豈犯罪於夜行、伏念、祿俸者、士之所貪求也、聖明者、代之所希出也、臣以八十年之殘息、過一千歲之催新、方當惜此下春之景、圖彼上庠之榮、養聽解羈、暫栖個於層軒之前、涼鶴辭巢、猶栖遲於廣廈之下、而月桐初追、氣力不隨、心識之內、邈如河山、手足之間、遠同楚越、仰北闕而隔遙拜、望東岱而係歸魂、撫躬懷厲、兢々於素飡之愧、揣分知歸、遑々於青蒲之請、伏冀、降油雲之澤、感匪石之祈、褫帶形閑、歸骸桑里、收龍章之宴寵、就皮服而待終、豈比掛冠都門、疎傳遁漢朝之榮貴、稱病擊壤野外、逸老樂堯年之餘生、无任懇々之至、奉表以聞、正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按察使在原朝臣行平

賜致仕几杖

重犯衆乞骸骨曰、臣行年云臣實累衰憊、況要病侵、惡疾纏迫、臣聞求國、進永宜治、懇誠率育之仁、敷布臣心、鳳敢被合之行、臣聞擧於舊例之中、執命於投棄之際、老之方至、誠呼命焉、況位望甚高、榮達之分有限、年毛已過、悲縫之生不常、竊願陛下愛食育哀之恩、聽臣不勝延拜、顧以臣尸位曠官之責、陛下必賜寬佩、臣供塵之誠、登事否於耕鑿、臣請歸之全骸、願見於林藪、伏願陛下、知臣赤心、察臣丹懇、裴寬矜於一日、勾當甞志於既夫、不任懇切悃々之至、謹死拜表以聞、詔遂許焉、

（公卿補任　朱雀）承平八年　改元天慶○天

大納言　從三位藤原扶幹　七十五　八月十五日上表、依病不許、　九日致仕、

（日本紀略　朱雀）天慶元年七月十日乙卯、致仕大納言正二位藤原扶幹薨、

（公卿補任　村上）天暦四年　庚戌

參議　正四位下伴保平　八十四　大藏卿、正月七日敍三位、十月十五日致仕、

（北山抄　十　吏途指南）致仕事　表請致仕者、又上表、給、之時、（以下細注）

天暦四年十月、參議保平致仕時、遣左少辨伊尹於彼第、仰許致仕之由、弘仁菅野眞道例也、以表下給上卿、上卿又給内記、仰弁令下、永知符於所司、

（日本書紀　持統　三十）十年十月乙酉、賜右大臣丹比眞人輿杖、以哀致事、

（續日本紀　二十　淳仁）天平寶字八年九月戊戌、御史大夫從二位文室眞人淨三致仕、詔報曰、今聞、汝卿一昨拜朝歸家、乃知年高餘車、欲請致仕、戰思此事、憂喜交懐、一喜功遂身退、能守善道、一憂氣衰力弱、返就田家、古人云、知止不殆、知足不辱、卿之謂也、丹懇難違、依其所請、仍賜几杖并新錢十萬文、請以弘益勝流、虞聞伴俗、因書遺意、指不多云、

（續日本紀　三十　光仁）寶龜五年七月戊申、大納言從二位文室眞人大市重乞致仕、詔、卿年及懸車、告老言退、古人所謂、知足不辱、知止不殆、此之謂也、思欲留連、恐非養老之道、體力明健、隨時節而朝參、因賜御

賜致仕授位賞子

杖、

（續日本紀三十六桓武）天應元年六月庚戌、右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂上表乞身、詔許焉、因賜几杖、

（續日本紀三十八桓武）延曆四年二月丁未、彈正尹從三位兼武藏守高倉朝臣福信上表乞身、優詔許之、賜御杖幷衾、

（續日本後紀十三仁明）承和十年正月辛丑、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣聞暮景側足黃泉、仰堯闕而待終、顧衰朽以知止、而孔光之杖、不聽遊於戶庭、廣德之車、不得懸於私館、此則聖皇叙恩無窮、議及胡耇、臣數年臥疾、不自支持、天命未除、免先泡露、然而氣力咸盡、恐公鼎之折足、恩流既登、悔廟器之致敧、乃再三表奏、生死在斯、陛下猶纓印綬而在位、因爲優老之賜、請釋朝衣而就第、將爲終焉之實、不堪蒙昧之至、頻觸天聽、　丁未、勅報曰、省表具之、深以悲感、朕自在大寶、兢矜迷塞、寧迫遺制、不能自勉、是以政無大小、聽于冢宰、然則恩信之勤、須倍常日、託委之情、當在此時、而愿意倦厭、致誠懸車、前後累上、確乎不移、殆將依請、則具瞻之寄、闕之於國、縱不違望、則高養之求、損之於公、畢景終宵、思服成病、然義不在衡、信終歸誠、或須抑沖衝、恐永係乃懷、故屈朕懇襄、申公讓退、望朝端而空座、辭宸階以生塵、徘個于此、心無所盾、但至道不隱、大忠无終、公家之有无、王室之利害、而言之不諱、議而不盡、復猶相累、幸勿金玉乃音、是卿所以相共終始之大望也、春寒想强加飡、指不多及、　庚戌、勅、左丞相藤原緒嗣、先朝元勳、而朕之舊德也、近功成名遂、老歸於第、朕以几杖禮優之、不敢負公之故、然致之責、實相猶病之待良醫、永言于此、繫慕彌深、夫鬼神有智、福淸儉者壽命永、賜祿無主、厥忠孝者子孫昌、正五位下右馬頭藤原朝臣春津、是公之孝子、特可授從四位下、以慰目前、

（三代實錄三淸和）貞觀元年七月十三日丙寅、從四位上行備前守藤原朝臣春津卒、春津者、左大臣正二位緒嗣朝臣之第二子也、○中略承和十年春、父左大臣抗表致仕、其第三表、以春津爲使、奉進內裏、勅曰、左丞相藤原朝臣、先朝之元勳、而朕之舊德也、近功成名遂、老歸於第、朕以几杖禮優之、不敢負、

[illegible]

公之故也、右馬頭事件、是公之季子、特授從四位下、以繼日貫[illegible]〕下

〔公卿補任 嵯峨〕弘仁十一年庚子

參議 從三位秋篠安人 六十八 備前守、正月十一日轉近江守、同月廿七日上表致仕、以朝臣爲[illegible]、

弘仁十四年癸卯

前中納言 正三位藤三守 四十九 十一月廿二日致仕

〔公卿補任 淳和〕天長五年戊申

參議 正四位下藤綱繼 六十九 兵部卿、正月七日叙正四位下、五月廿七日致仕、

〔公卿補任 仁明〕承和七年庚申

前參議 從三位藤是定 八十二 八月十五日致仕、中務卿、讃岐守、

〔小右記〕寛仁三年十二月四日丙戌、從實資卿辭退大納言、蒙官符有致仕者、有例歟、年齡未及致仕之制、後々人可爲例歟、

〔公卿補任 後一條〕寛仁三年己未

權大納言 正二位藤俊賢 六十一 治部卿、太皇太后宮大夫、十月廿日、辭納言、兼官、致仕、

〔公卿補任 後一條〕治安四年甲子〇萬壽元年

權大納言 正二位藤公任 五十九 按察使、十二月十日致仕、十二日官、辭官、許之、

〔朝野群載 十一 雜〕太政官符民部省

應停任正二位行權大納言藤原朝臣公任事

右正二位行權大納言藤原朝臣行成宣、奉勅、件人依病上表辭退既了、宜停任者、省宜承知、依宣行之、

符到奉行、

右少辨正五位上行文章博士藤原朝臣　　從五位上行左大史小槻宿禰

不聽致仕

萬壽元年十一月五日

〔台記〕天養元年七月一日庚戌、上日職事散位藤孝能(才士)許致仕、依滿五十也、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月甲午、正五位下守部連大隅上表(○上表下恐脫字)乞骸骨、優詔不許、仍賜絹一十疋、綿一百屯、布四十端、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十月丙申、先是去九月七日、右大臣從二位兼中衞大將勳二等吉備朝臣眞備上啓乞骸骨曰、側聞、力不任而强者則廢、心不逮而極者必惛、眞備自觀、信足爲驗、去天平寶字八年、眞備生年數滿七十、其年正月、進致事表於太宰府、訖、未奏之間、即有官符、補造東大寺長官、因此入京、以病歸家、息仕進之心、忽有兵動、急召入內、參謀軍務、事畢校功、因此微勞、累登貴職、不聽辭讓、已過數年、即今老病纏身、療治難損、天官劇務、不可暫空、何可抱疾殘體、久辱端揆、兼帶數職、闕佐萬機、自顧微躬、靦顏已甚、慚天愧地、無處容身、伏乞致事以避賢路、上希聖朝養老之德、下遂庸愚知足之心、特望殊恩、新於矜濟、不任懇款之至、謹詣春宮路左、奉啓陳乞以聞、至是詔報曰、昨省來表、即知告歸、聖忌未聞、懸車何早、悲驚交緒、卒無答言、通夜思勞、坐而達旦、不依所請、似違謙光、欲遂來情、彌思賢佐、宜解中衞劍帶、大臣、坐勉之閑、勿空朝右、時涼、想和適也、指不多及、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年二月癸丑、大納言從二位文室眞人大市上表乞骸骨曰、臣大市言、臣以愚質、幸逢聖朝、拖紫懷金、叨辱喉舌、貪榮負責、職過薄深、臣之如斯、不知所措、伏惟陛下、德洽仁厚、邦舊命新、維城之遇、千年終畢之儀一食、今臣滿柳向衰、桑榆方晏、病亦稍篤、垂畫無期、伏願辭官俊乂、賜老丘園、止足以遂餘年、返初而待終日、則上有成物之主、下無尸祿之臣矣、矜老存苦、有國嘉猷、天鑒曲垂、哲愍朽邁、不任前路之至促、謹詣明堂、奉表陳乞以聞、詔報省所上表、感念兼懷、宜隨力所堪、如常仕奉、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜五年十二月乙酉、右大臣正二位勳四等大中臣朝臣淸麻呂上表重乞骸骨、優詔不許、

〔三代實錄七〕貞觀五年正月十九日壬午、二品行治部卿兼常陸太守賀陽親王上表請致仕曰、臣聞、
力無所負、賜骸骨之義自遠、鳴騶盡敕、致退之誠所款、臣本自頑愚、素無紀律、忝天潢餘潤、幸得露命滋焉、
叨位之志已顯、臣夙夜之誠、後陪參議、分今元陛行將忽焉、代行之人、卽須慮首奏聞、當表閑退之請、
然而覬覦之慮猶有、身體勞頓、以去之期、身無伸御伏願、況臣多年、已作繼嗣之臣、一旦無戎丘園之老、
丈馬之情、猶主何已、故三品以下諸節會之日、能從資賢自制、賜今正月已闕、朝會漸隔、宜退影閑
靜、待時和暖、伏願曲察上天養年之恩、卒全微臣知止之分、許仍賜寢宸伏增感懼、不任下情之至、謹詔不
許之、

〔三代實錄五十〕仁和三年正月十四日戊子、正三位行中納言兼民部卿陸奧出羽按察使在原朝臣行
平上表曰、臣行平言、臣聞、年滿致仕、人臣之定節也、縣車歸閑、人君之恒規也、仰恒規於歸餘、肝膽自盡、
知足謝於止足、雖欲何為、臣謹稽時事、非雖有才、顧寵光之榮已極、猶於生涯、偏當之瀾甚深、過於涯分、今
臣齡登七旬、位高三品、涓水難多、遠戲鳴於使行、纔深谷鶯、（註）一恐將盡於陰累、嗚呼臣雖愚、
露從汗於歸路、老臣觀西當、聞觀於自昔、蘇達名建之時、行身退之道、臣本聞其當懸車之年、負職位之
責、臣所戮矣、伏願陛下、賜臣以骸所餘年、臣以歸於歸介、老有所終、食得所安、不勝懇款之至、謹拜表以
聞、勅答曰、卿中納言在原朝臣、齒率表請、所陳甚於納之貞、理其難更圖、每形於顏色、愛君无惜其背、
勵、由能屈伸有常、終始以禮、謙々懼古人之義、退々與大臣之號、知卿有懸誠、事使默无喉舌、卿其辨
知止、絕迹登輔、雖懷仍勤、問讓元陽之餞、議當卜後年、朕廣德之懸車、莫踐今日、　二月十四日戊
午、正三位行中納言兼民部卿陸奧出羽按察使在原朝臣行平重抗表曰、臣行平言、中使左近衞少將
藤原朝臣高藤至、伏奉綸旨、不聽臣致仕、仰退臣乞身、綸綍出而成文、恩漢飛露、宅毛羽而无効、首級高
山、臣尸素山失、妄濫尚存之宜、老色及其、未承未疚之任、熊思之憤已滿、將脫累於海泉、喉吻之餘不休、
闔鳳將於版圖、尙守職之戒、退迹遠名、而何取、況臣負職寄寶、伏枕慟魂、每歎濁柳之姿、風塵慘然（註）

葵藿之向、曰、誠切、莊鳥、欲表、戀越之聲、苦聞、鄭公、遂移、臥漳之病、今陛下優、臣、既以國士之分、臣許陛下、
豈以衆人之心、章云、羈游遂方、章云、寒温乖適、不忘奉身而退、猶甘量力而行、臣情見於辭、涙隨於汗、寛
嚴鑒實、恩許罷官、不任悃愊之至、重以奉表以聞、詔不許焉、

〔本朝世紀〕天慶八年八月廿日癸未、今日民部卿藤原忠文朝臣、以去十五日所奏致仕表、差左近少將
藤原季方返給、塞齡雖及致仕、朝廷不息、仍返給云々、

〔日本紀略三村上〕天曆三年正月三日丁未、殿下〇太政大臣藤原忠平獻上致仕表、　四日戊申、以右中將義方朝
臣、遣勅答於彼家、　三月十六日己未、此日太政大臣獻致仕表、　十八日辛酉、此日、以右中將雅信
朝臣、遣不許所請勅答於太政大臣家、

政治部二十五

上編

敍位

考期(八月一日ヨリ十月十日マデ[illegible])已ニ盡キ、其績ヲ校定シテ、從五位下以上、即チ勅授ノ位ニ敍スベキ人ノタメニ敍位ノ儀アリ、([illegible])[illegible]シテ五位ニ敍スルコトヲ敍爵ト云フ、

敍位ハ文武天皇ノ朝ヨリ以後ハ正月ニ行ヒタル事多ケレドモ、其日ヲ定ムルコトナカリシニ、桓武天皇ノ朝ニ至リテ始テ七日ヲ以テ期トセリ、其之ヲ議スルヤ、初ハ六日ニ在リシヲ、村上天皇ノ應和三年ニ至リテ始テ五日ヲ以テ行ヒシヨリ、以後或ハ五日ヲ以テシ、或ハ六日ヲ以テセリ、是ヲ敍位議ト云ヒ、或ハ單ニ敍位トモ云ヘリ、今江家次第等ノ諸書ニ據リテ、敍位儀ヲ考フルニ、初ニ諸卿議所(宜陽殿日華門ノ北ニアリ)ニ著キテ勸盃アリ、次ニ第一ノ納言ヨリ第三人マデ、次ヲ逐ヒテ筥文ヲ執リ、淸涼殿ニ昇リ進テ御前ノ座ニ著ク、其筥ニハ外記及ビ史ノ申文、五位以上ノ歷名ノ簿、式部民部ノ奏スル所ノ氏ノ爵ノ申文([illegible])等ヲ納レタリ、次ハ執筆ノ大臣([illegible])敍人ノ敍スベキ位ノミヲ續紙([illegible])ニ錄シ、次ニ式部民部ノ奏文ヲ讀ミ、勅許ヲ蒙リテ後ニ、其人ノ姓名ヲ位ヲ錄セル下ニ加フ、次ニ藏人、王氏、源氏、藤原氏、橘氏([illegible])、上宮([illegible])、外記、諸司ノ勞([illegible])、近衞將監、檢非違使、外衞([illegible])ヲ錄シ、次ニ諸宮ノ申文ヲ執リ其人ヲ錄ス([illegible])

（給ハリテ、其敍位ヲ請フ旨ノ文ヲ謂フ、）次ニ加階シテ入內（外位ヨリ內位ニ入ルヲ謂フ）スベキ者ノ中ニテ、其第一ニ居ル者ヲ錄シ、次ニ一ノ加階ノ者ヲ錄ス、（一ノ加階ノ者トハ、殿上ノ簡ノ中ニテ、第一ニ加階スベキ者ヲ謂フ、）是ヲ殿上簡一トモ、殿上一トモ云フ、次ニ其餘ノ者ニ及ブ、カク敍人ノ姓名ヲ續紙ニ錄スルヲモ直ニ敍位ト云フ、敍位畢リテ年月日ヲ其後ニ題シテ奏覽シ、大臣更ニ敍位ノ簿ヲ執リ、殿上（淸涼殿ノ內ニテ南ノ方ニアリ）ニ出デ、入眼ノ上卿ニ授ケテ後ニ入眼アリ、（入眼トハ、位階ノミ錄シタル位記ニ、姓名ヲ加フルヲ謂フ、）卽チ上卿議所ニ就キ、內記ニ命ジテ位記ヲ進メシム、內記乃チ敍位ノ簿ニ照シ、入眼シテ位記ヲ進ム、上卿檢察シ、射場殿（校書殿）ニ至リ、藏人ヲシテ奏聞セシメ、次ニ位記ニ請印ス、（請印トハ、太政官ヨリ內印ヲ請受シテ、少納言ノ請印スルヲ謂フ、）印シ訖リテ、上卿又檢察ヲ加ヘテ覆奏シ、式一、式二、兵一、兵二（式トハ式部ナリ、兵トハ兵部ナリ、）等ノ次序ヲ逐ヒ筥ニ收ム、上卿乃チ參議ニ命ジテ二省ニ給スベキ下名（オリナ）ヲ書セシメ、奏聞ヲ經テ式部兵部ニ付ス、（下名トハ、敍人ノ姓名ヲ書シテ、二省ノ丞ニ下シ賜フガ故ニ名ケタルナリ、）敍位ノ簿ニハ尻付（シリツケ）アルアリ、尻付ナキアリ、（尻付トハ、姓名ノ下ニ策勞、舊一、入內等ト注セルヲ謂フ、）而シテ辨少納言ノ如キ、年勞ニ由リテ加階スル者ハ尻付ナシ、又敍位ハ其姓ノ貴賤ニ隨テ內外位ニ敍スルコトニテ、朝臣ハ貴姓ナレバ多ク內位ニ敍スルナリ、故ニ朝外異內ノ稱アリ、（朝外トハ、朝臣ノ姓ノ人ヲ外位ニ敍スルヲ謂テ、車持ノ如キ是ナリ、異內トハ、朝臣ノ姓ニアラズシテ內位ニ敍スルヲ謂テ、歸化人ノ如キ是ナリ、）

氏爵ヲ敍スルニハ、其氏ノ長者タル者之ヲ薦ムルナリ、橘氏ハ中世其族大ニ衰ヘテヨリ、藤原氏コレガ是定トナリテ薦ムルコトヽナレリ、王氏ハ後世ニ至リ、更ニ天潢ノ流ヲ去リタレド、累世ニ神祇伯トナリ、仍ホ王氏タルヲ以テ、申文ニモ敍位ノ簿ニモ、寛和（花山天皇）四世ト記ス、

又巡爵ト云フコトアリ、年勞ノ者ヨリ次第ニ敍爵スルヲ謂フ、

女敍位ハ、中務省ノ掌ル所ニシテ、上世ヨリ多ク正月ニ在リシガ、其式日ハ定ラザリシヲ、嵯峨天皇ノ朝ヨリ八日ヲ以テ例トシ、隔年ニ行ヒタリシガ、後ニハ式日ヲ定メズ、吉日ヲ擇テ

行フヲトヽナリ、又臨時ニモ之ヲ行ヘリ、女敍位ニハ、小輪轉、大輪轉、切杌等ノ名目アリ、小輪轉トハ、闈司、水司、東豎子ニ限リ、大輪轉ハ、女司〈[illegible]〉ヲ主殿女官〈[illegible]〉御手洗女官、掌縫女官、闈司、主水、東豎子ニ限レルコトニテ、其勞効ノ年限ヲ計ヘ、輪次ニ之ヲ敍ス、而シテ外記ノ勘文ニ各司ノ年勞一人ヅヽヲ注進シ、當年巡回ノ者ヲ以テ第一ニ居キ、餘爵是ニ準シテ敍位セシム、闈司ノ如キ大小輪轉共ニ預ル者、若シ一司ノ中ニテ、二人同年ニ大小輪轉ノ巡ニ當ルトキ、一人ノ外ハ敍セザルナリ、其輪轉ヲ大ト云ヒ小ト云フハ、輪轉ノ遠近ニ由リテ名ケタル者ニテ、小輪轉ハ三司ナレバ、第三年ニシテ一周シ、大輪轉ハ七司ナレバ、第七年ニシテ一周スルナリ、切杌トハ、其男勞等二十年ニシテ、其女孺等三十年ナルトキハ、男ノ勞ト合セテ五十年トシテ敍爵ヲ請フコトニシテ、已ニ斬伐ヲ經タル木ノ再ビ萌芽スルガ如キヲ謂フナリ、而シテ女敍位ノ日、男敍位ノ相[illegible]ルコト亦其例アリ、

正月ノ敍位ノ外ヲ臨時敍位ト云フ、臨時ノ敍位ハ其事ヲ舉レバ、踐祚ニ由ルアリ、御即位ニ由ルアリ、朝覲行幸ニ由ルアリ、其人ヲ舉レバ、勞効ニ由ルアリ、戰功ニ由ルアリ、治國ノ政績ニ由ルアリ、賞功ニ由ルアリ、〈[illegible]〉一、人ノ讓ニ由ルアリ、而シテ六位ハ奏授ナルヲ、五位ニ進ムトキハ勅授トナリ、又位田位祿ヲ賜ハルコトナレバ、是ガ爲ニ或ハ上正六位上ノ位ヲ設ケ、或ハ一年ニ超授シ、或ハ試ヲ課シ物ヲ賜ヒテ位ニ換ヘタルコトアリ、總テ敍位ニ就キテ考ルニ、正一位ハ稀貴ノ位ニシテ多ク之ヲ贈位ニ用キ、生前ニシテ陞授セラレタルハ古來僅ニ五人ノミ、〈官位ノ事ハ一位ノ條ニ見ユ、〉又元服ナドノ節ニ敍位セラレタル人ハ、勅使其節ニ當リ敍位ノ事ヲ宣レ、後ニ位記ヲ授クルコトアリ、又敍留ト云フコトアリ、少納言ハ從五位下相當ナルヲ、四位ニ進ミ、左右中少辨ハ五位相當ナルヲ、四位ニ進ミ、六位ノ檢非違使判官五位ニ進ムトキハ、其職ヲ去ルベキヲ、仍ホ其官ニ居ルヲ謂フ、又推敍、直敍、越階

等ノ事アリ、宜シク官位部位階篇ヲ參看スベシ、

名稱

〔伊呂波字類抄〔ヨ〕疊字〕叙位

〔貞丈雜記〔四〕官位〕一叙位と云ふは、正月五日六日の比に行はる、是れは人々に位ヲ被仰付時ノ政事也、近代ハ叙位除目トモニ總テ行ハレズ、

〔名目抄〔恒例公事正月〕〕拜叙〔ハイジヨ〕位ニ叙スルヲ云也

〔伊呂波字類抄〔加〕疊字〕加階

〔大和物語〔上〕〕野大貳〔好古〇小野〕すみともがさはぎの時、うての使にさゝれて少將にてくだりける、おほやけにもつかうまつり、四位にもなるべきとしにあたりければ、むつきのかゝいたゝまはりのこといとゆかしうおぼえければ、〇下略

叙位儀

〔公事根源〔正月〕〕叙位　五日六日、近代五日、

其儀大臣以下、左仗の座に著て、先事を催給、次に議所に付て勸盃の儀式など有り、近比は此事絶て侍るにこそ、次に藏人して諸卿をめす、公卿射場殿にて宮文取て、次第に御前の座につく、關白ならびに執筆、めしによりて圓座にす、みてつく、執筆十年の勞をそうし、續紙をめし、位を次第に叙、王氏藤橘の氏の爵の申文、入内一加階の續文など、いふ事侍、さのみはくだ〳〵しければ記に不及、〇中略此叙位もとは六日にて侍しを、天德五年〇應和元年より五日に始て此義あり、曉などにおよべば七日節會の儀式なりとて、とりあげられけるにこそ、されば今に到まで五日にさだまれり、主上若は執柄などの衰日にあたれば、六日に行はるゝ事もつねの事なり、

〔内裏式〔上〕〕七日會式

其日平明、〇中略圖書寮立位記案於版位東西、〔自尋常位、南去四尺、東折一丈安親王位記案、又南去七許尺安三位已上案、又南去七許尺安四位已下案、兵部亦同、〕〇中略乘輿幸豐樂院後堂、賜可叙人歷名於內侍、內侍臨東檻授大臣、大臣喚内豎宜喚式兵二省、二

省録各一人舍人大臣喚舍人令召計近仗[注]上宣[注]已上[注]降殿下就西皇帝御紫宸殿内侍置位記筥於大臣之座前[注]○中略内記授宣命文於大臣若中納言以上大臣令内侍奏聞及還給[注]大臣喚内豎[注]内豎大夫進立左近陣西頭大臣宣喚式部兵部称唯出喚二省輔称唯[注]入自逢春門立左近陣西頭大臣宣喚式部輔称唯升殿賜位記筥復本所兵部亦同進各持位記筥置案上[注]相引退出[注]○中略式部兵部率可叙人立西分頭入立如常南面[注]

[注]大臣喚召宣命参議已上一人授宣命文受訖復本座皇太子立座東西頭文親王以下下殿東階[注]自左近陣南去三丈許西面北上立不昇殿者見在殿上者南三人下殿西相並候下[注]各立定[注]宣命大夫降自西階就版宣制云天皇我詔旨[注]勅大命乎衆聞食止宣皇太子先称唯次上下称唯訖皇太子再拝次上下再拝更宣云仕奉人等中尓其仕奉状乃随尓治賜人毛在又御意愛盛尓治賜人毛一二在故是以冠位上賜治賜久止詔天皇大命乎衆聞食止宣皇太子先称唯次上下称唯訖皇太子再拝次上下再拝[注]舞各復著座訖式部輔進叙之訖兵部亦同[注]已上訖二省共引退出次被叙人等相依舞踏拝舞[注]二訖退出諸仗共坐[注]二省丞入[注]自逢春承秋兩門執筥退出掃部寮参入撤案輿二省同新叙者群立庭上及堂上前被叙人退出之後各下立殿前拝舞訖各復本座[注]○中略治部玄蕃通事引客等参入比入門諸仗俱立[注]

文案於宣命位[注]各叙位客等拝舞式部少輔丞各一人入自儀鸞門立治部前掃部寮入自閤門置案上退位[注]式部録奉位記筥入自閤門置案上退出承輸者自左近仗東漸稍南進更西折十許丈南折進当勅使位西折即就位喚通事二度[注]通事称唯就承宣位時宣制曰天皇我詔旨[注]乃勅御命乎治海客人衆聞食止宣不[注]乃王[注]某等還度[注]天皇我朝廷乎拝奉留事乎矜賜比慈賜比冠位上賜比治賜久止勅天皇我大命乎

聞食〈止〉宣、通事稱唯、就承傳位、曰、有勅、客等稱唯再拜、訖通事傳勅旨、客等稱唯拜舞、通事復本位、承勅者退本處、時式部少輔進敍大使、次丞進敍副使已下、訖客等拜舞、輔丞錄退出、○下略

〔儀式七〕正月七日儀

前一日所司裝飾豐樂院、〈事見元日〉中務錄率史生省掌等、設宣命版於舞臺北四丈、南去一許丈尋常版、式部丞錄率史生省掌等立標、〈自顯陽堂北第四柱西去十五丈、南折二丈、一親王標、次太政大臣標、次左右大臣標、次大納言標、次中納言標、次三位參議、非參議三位、四位參議、少辨在此列、次大臣四位參議標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標、唯以一丈三尺爲間、〉次立敍位行立標、〈自舞臺東南角東去二丈、更南折一丈立親王標、次一位標、次二位三位標、次王四位五位標、次臣四位標、次五位標、次六位標、進以六尺爲間、〉次立位記案標、〈自尋常版南去四尺、東折一丈立親王案標、南去七許尺立三位已上案標、南去七許尺立四位已下案標、〉兵部省丞錄率史生省掌等立敍位行立標、〈自舞臺西南角西去二丈、南折一丈立親王標、次立一位標、次立二位三位標、次立王四位五位標、次立臣四位標、次立五位標、次立六位標、〉次立位記案標、〈自尋常版南去四尺、西折一丈立親王案標、南去七許尺立三位已上案標、南去七許尺立四位已下案標、〉當日寅剋掃部寮設式部座於興禮門以西壇上、〈南面西上〉輔以下就座、點檢五位以上、兼仰御齋會職掌、諸衛服上儀、〈佐以上仗檜、不帶器仗、〉平明、○中略掃部寮立位記案、辰剋式兵兩省丞各一人、齎闕可敍人簿、豫就東廊面候、所司辨備御儀、差群臣儀、時剋乘輿御清暑堂、賜可敍人歷名於內侍、內侍臨東檻授大臣、大臣喚內豎、內豎稱唯進立、大臣宣、喚式兵兩省、內豎稱唯、出而喚、二省參入、大臣賜歷名、丞受出自陽祿門、南行就豐樂門外東西列、〈輔已下列立相待、式部在東、兵部在西、其敍列之儀、式部輔留欲東、兵部座謝道敍西、〉立定、式部丞目錄、錄進受簿而復列、喚省掌名一聲、省掌稱唯、進受復列、錄命唱計、省掌稱唯唱計敍人等、〈不喚參議已上、無位孫王列六位上、若有不參者、預定其人代、〉稱唯列立、〈西面西上、兵部准此、東面東上、〉訖輔已下相分濟成崇賢二門、列立豐樂門內左右、〈式部北面西上、兵部北面東上、〉○中略于時乘輿御豐樂殿、內侍置位記筥於大臣之座前、○中略大臣喚內豎、內豎稱唯、內豎大夫〈元爲內豎者〉趨立左近陣西頭、大臣宣、喚式部兵部、稱唯出喚、二省輔稱唯、入逢春門立左近陣西頭、〈若多位記筥、丞錄輔副進、〉大臣喚式部、稱唯升殿受位記筥、降復本處、〈若筥有數、以次授、〉兵部亦如之、訖各擎筥退置案上、〈兵部度饌道置之、出自承秋門、〉訖各退出、○中略式兵兩省率可敍人東西相分入〈諸仗兵部〉就標、〈若不敍親王者、闕不申、其人代立敍人標、〉大臣喚堪宣命參議已上一人、授宣命文、受復本座、皇太子立座

東階西階次親王以下降自東階左近衛陣南一許丈東折一許丈更北折立(…)東西面、五位已上六位以下見親王以下南二人降殿西階下、(…)各立定、(…)宣命大夫降自東階就版宣制云、天皇(我)詔旨(良万止)勅大命(乎)衆聞食(止)宣、皇太子先稱唯、次五位已上稱唯、次六位已下稱唯、訖皇太子再拜、次五位以上六位已下共再拜、(…)更宣云、仕奉人等中(爾)其仕奉狀(乃)隨(爾)治賜人(毛)在、又御意愛盛(爾)治賜人(毛)一二在、故是以冠位上賜治賜(久止)詔(布)大命(乎)衆聞食(止)宣、皇太子先稱唯、次上下稱唯、訖皇太子再拜、次上下再拜、(…)各復著座、(…)訖式部輔進到案下、開宮執位記唱名、敍人稱唯、趨進跪受、一拜復列、(…)唱授訖、復宮復本列、(…)[illegible]兵部亦如之、訖二省輔丞錄相目退出、次敍人等相依舞踏拜舞、(…)訖退出、諸位共同(…)二省丞入自建春承秋門執宮退出、(…)掃部寮參入撤案、敍者被敍者殿上前後各降拜舞、訖復本座、(…)○(中略)若蕃客所司豫設御座如常、(…)○(中略)新敍者退出後、治部玄蕃通事率客徒參入、(…)比入門、諸位共起、客徒各就位、定共拜舞、式部少輔丞各一人入自儀鸞門、立治部前、掃部寮入自同門、立案於宣命位後、(…)式部進案位記筥入自東門、置案上退出、承勅者出自左近仗東頭、當南階更西折進十許丈向所就位、西折就位、承喚通事二譯、(…)[illegible]通事稱唯、就承宣位、承勅者宣、制云、天皇(我)詔旨(良万止)勅御命(乎)其客人衆聞食(止)宣、(不)國(乃)王(乎)君某等進度(志)天皇(我)朝廷(爾)拜奉(留)事(乎)於賜(比)悉賜(比)冠位上賜治賜(久止)勅天皇(我)大命(乎)聞食(止)宣、通事稱唯、就承傳位、申勅客徒、稱唯拜舞、通事復本位、承勅者復本座、于時式部少輔進唱叙大使、次副使、次判官已下、訖客徒拜舞、輔丞錄退出、次式部掃部寮宮却案退出、于時內藏寮錦綾寮入自延明門、執綱幣案宮南、預拜客止合衣、(…)人隨客徒員各執朝服、到客徒旁、北面賜之、客徒受之授本還如入儀、訖治部玄蕃率客徒出儀鸞門外、脫却本服著所賜服、更入列立如初拜舞、訖供食、勅

使就位、其出儀同承勅者、喚通事二聲、通事稱唯、就承勅位、勅使宣、客人(都安置)可座(而)侍(止)宣、通事稱唯、就承傳位、宣如常、客徒拜舞、

〔延喜式 太政官 十一〕凡正月七日、賜宴於五位已上、若有敍五位以上者、前二日大臣及參議以上於御所擇定應敍位人、即令書位記、仰之、(事見儀式)

〔延喜式 式部 十九〕正月七日敍位賜宴

當日質明、掃部寮設座於便所、輔以下就座、點檢五位以上、兼仰八日御齋會職掌、又丞錄率史生省掌立標退出、(錄位標立之)其後有喚、丞參入、(兵部共參)大臣賜可敍人歷名、其退出唱計、又輔依喚入、自逢春門立左近陣西南頭、(兵部共參、各位記筥一)即大臣喚之、稱唯昇殿、賜位記筥、置庭中案、先是省率四位已下刀禰等列立門外、于時少納言出喚、五位已上分頭參入、錄正容止、次六位已下參入、省掌正容止、最後者比到堂下、省官亦率敍人入立、宣命之後、敍訖省官先退、敍人拜舞退出、丞入自逢春門、撤筥而出、宴會訖大少輔及錄相分執札唱名、(事見儀式)

〔延喜式 兵部 三十八〕七日設座與元日同、(中略)○敍位以南左右相分立置位記筥案、敍位訖撤案、

〔西宮記 正月 中〕一五日敍位儀、(圍書、內豎進紙、續紙、筆硯、自敍人所可受、內豎進軸、王卿各具也、內豎進紙、縫錄、續事已上內記所受、取內記筆作儀)大臣以下著儀所、(自左近陣出日華門、一人大臣入南階、已下入自東分著、大臣東面南上、納言已下對侍從所設文硯、官立華子午廊、上官就北壁外、召使就上官坐東廊、少納言辨分立、大臣坐南邊壁、宮文硯、)內召(藏人頭宣仁日華門、入自南外記取筥、大臣仰召使召外記、令取筥文、外記入自南、居事、立人、大臣坐仁南日遣召還入代納、)外記取筥、(大臣仰召使召外記、令取筥文、外記入自南、少外記史生取居外記後、)公卿進射庭、(陣東廊下、北上、一一閣記、參入、立北面日東上門、外宣記錄立納言階下、南殿西階下、大臣立北廊下、西上、南面日殿上、公立射、一一記錄、有史生者居後、)(歸宣仁左京明中之下、公卿外記經南殿下、大臣內方知晴、上、)取筥文、(入人納言書、一取文、納言立次第立之、)(下戶北行、筥有文生取各左、南取自、貫六子位、書本座、不取公卿、等入自取上東戶、書御前座、)(戶自歸陣下、到射庭、日立、宣陽殿南上、西上北前外記等各出、自殿下、就陣、西立射場、會東階下、)大臣應召、(稱唯)候御前座敍位、(主上召大臣、大臣唯、經御前、召主上仰云、筥文、取入、十年勞、敍舉、給者、召、藏人、令、纏紙、抜紙、續一久、兩、)

[illegible]

[illegible]

[illegible]預敍位者[illegible]

[illegible]少納言[illegible]

近衞中少將[illegible]讀書博士[illegible]諸司長官次官依例一加階[illegible]

諸司勞二[illegible]一外記勞[illegible]一式部民部[illegible]藏人[illegible]近衞將監[illegible]内記大藏[illegible]

非違使[illegible]大[illegible]家令[illegible]自子[illegible]氏爵一世源氏[illegible]二世孫王[illegible]

[illegible]王氏[illegible]源氏[illegible]藤氏[illegible]橘氏[illegible]受領[illegible]院宮爵

[illegible]御即位大嘗會[illegible]且氏外有[illegible]敍位者已上例、大略依外記勘文敍位例、

（北山抄正月）五日敍位議事[illegible]

大臣着左仗座、議所裝束弁備畢、[illegible]大臣以下起座、出自日華門着議所、[illegible]

[illegible]入、少納言弁相從獻盃[illegible]藏人來召、[illegible]大臣[illegible]召外記、仰可取筥

文之由、外記還、相率參入、取筥文、列立南庭、大臣以下經階下、到射場、大臣立軒廊西二間、納言立

射場殿東砌、參議立南砌、[illegible]外記相從立東庭、畢大臣參上、着御前座之後、第一納言入自東間、立軒廊

戸間、外記進置納言前、納言取筥、入自右青瑣門、進自御座下、置大臣圓座西邊左繩、退自本道着

座、次々如之、[illegible]不取筥文之人、直進着座、[illegible]

[illegible]門、[illegible]大臣奉召、[illegible]自[illegible]子[illegible]圓座[illegible]取十年勞勘文、入筥、[illegible]行事[illegible]

中、杷[illegible]給之[illegible]可行之、仰、先[illegible]敍人一兩、杷[illegible]可取遺院宮御給名簿之由、勅許之後、召

參議仰之、[illegible]參議退出、仰近衞次將遣之、各持參後、參議進奉大臣、大臣不開封奏聞、議定畢、[illegible]

[illegible]奏下名、[illegible]返給取之退下、[illegible]納言以下撤筥文等、[illegible]

（江家次第正月）敍位

諸卿著左仗、次著議所、私云、議所在日華門北廊、勸盃弁少納言相分勸、典瓶、內豎取瓶子、勸盃、藏人傳召、大臣召外記、諸卿參上、大臣以下經日華門宣陽殿南壇上、入自西庇南面、出自同西庇南一間、自壇上北行、自石階下經階下、到射場庭、大臣立北廊下、西上南面、西三間也、納言立射場東砌、北上西面、參議立南砌、北面東上、外記立納言後南殿西壇下、史生若使部居後、執筥文、大臣先一一參上、先是關白先被候殿上、仍以次大臣皆候殿上、關白著御前座之後、一一參上、次第一納言、或曰、第一大納言不執實文、執硯筥參上、其儀掛膝列、立於軒廊西第三間、南面、其路卽入自西間、四條記入自東間、臣代無用、或說云々、撥、次顧關斷、外記進跪進硯、納言插笏、不敢傾身體、右手執、以左手攜、取平緒、取筥、當筥側持之、挿、諸卿共攜、入自無名門、外記不取硯、小板敷可取直之、於青瑣門先突右膝登、先右足、北進登小階、先右足、北進、以左膝御座之根、摩、到御前膝行進三度置之、以硯向大臣座方、膝行退二度拔笏、左廻到南第一間長押下、踞第一板、令有聲、露令知於次人也、件板往年不打、打、經簀子敷著座、件筥入硯筆臺、加筆二管、墨一廷、小刀、續飯、水濟器、外記史申文、辨少納言加階申文、次第二納言執筥文參上、開板敷、列、參議執當名、外記取、立、奉之、外記進筥之時、問十年勞帳有無歟、可尋、置於御前時、置硯筥南、無間置之、下同、件筥入五位已上歷名一卷、諸司主典以上補任二卷、上下、武官主典已上補任一卷、令外官一卷、諸國主典以上補任二卷、上下、十年勞帳一卷、次第三人取筥文參上、式部民部省奏、諸氏爵申文、件筥入諸申文等、各付短冊、次自餘公卿等一一參上、諸卿東面、各登殿上、其後進著御前座、參議以東爲上、主上引寄御簾覽、公卿座定否由、以參議著座露闕、仍召一人、者座畢覽、仰、不必待諸者、次被仰云、圓座方、上﨟大臣微音稱唯、撥起、經簀子敷、著御前圓座、撥、次大臣仰云、右、乃大以万不千幾見、右大臣參上如先、次又仰云、內乃大以万不千幾見、內大臣稱唯、參上如先、主上被仰云、早久、執筆大臣、關白外第一大臣、微音稱唯、小揖、置笏於左、先開見第二筥文、次第移之於第三筥、唯留十年勞帳、取畢件筥、推下硯筥以下於左方、關白座敷之時例也、關白不候者可右引、敷、於供揖之間、次置筥可推下之、置第二筥於其跡、更亦開見十年勞、了置之、插笏取筥、膝行進膝下、以左手寄御簾、以右手入筥於簾中、聊頗退、拔笏磬折候、寬弘抄曰、不正座云々、云、猶不到本座歟、主上覽畢返給、以令撥御簾受、給、氣歟、大臣搢笏、敢實者撥之、給之、退復本座、拔笏改直硯并自餘筥、如初儀、但文書不返置、三筥違者、以可撥寄、或下﨟大臣押寄、把、

召筥文臺主上披御云[illegible]　大臣召男共[illegible]　仰遣紙硯[illegible]　藏人歸於殿上、侍臣退還之間、自御前給中文勘文等[illegible]　大臣置筥及給之置硯所左方、撰取可叙中文置前、藏人參進[illegible]自執筆後進之、執筆執之置前、取筥授藏人、取筥退、　主上披仰云[illegible]　大臣置筥取紙一張書出之、置於座右、　次開匣[illegible]　次染筆先書位[illegible]　從五位下[illegible]　大臣取任氏二列之式部省奏、先置左披開見之、墨並中件奏可給示某丸之由、叙可許之後叙之下書、若有否奏勘者、奏事由以殿上辨令開外記、勘可許文准之、　藤原朝臣某[illegible]

入[illegible]　書畢後置筆於筆臺、取叙位簿中[illegible]　置勾於中文[illegible]　次叙民部[illegible]　橘朝臣某[illegible]　次大臣置紙取筥奉之、院宮御給[illegible]名簿取[illegible]遣之、　院不御之時可申宮宮、一宮御座時可申某宮、勘許之後、大臣召參議一人[illegible]　參議稱唯[illegible]起昔歸座參進[illegible]筥子敷紙、大臣權退押上、　大臣仰云、院宮乃御申文取[illegible]遣[illegible]、　被召者微出於殿上、召近衞次將仰其由[illegible]　次藏人[illegible]自御前以硯被仰、源朝臣某[illegible]人

次叙王氏[illegible]　次叙王[illegible]　若無王者叙四位、　次叙源氏[illegible]　源朝臣某[illegible]　次叙藤氏[illegible]　藤原朝臣某[illegible]　次叙橘氏、橘朝臣某[illegible]　次叙上官[illegible]　姓尸某[illegible]　若有下姓者、稱奏聞可叙、外所有勘許、後日改叙内位、儀亦如此、　次執筆開勘文一通見之、可叢被叙人數、　次叙諸司勞[illegible]

之[illegible]　姓尸某[illegible]　兵庫同此、　勘勾於勘文、　次叙左右近衞將監、　姓尸某[illegible]　次叙檢非違使、　姓尸某[illegible]　次叙外衞、　姓尸某[illegible]　馬允同此、　此間參議持參諸宮御申文[illegible]　早晩不定、置筥進申文了、取筥携右膝退去、若有不被進申文之人者[illegible]　其詞云、某所者自此[illegible]　[illegible]大臣取之進奏[illegible]取開於筥、進置筥奏之、推硯筥等如初、但叙位者皆可置硯筥之左、其進退大略如上[illegible]　主上覽畢返給[illegible]　大臣給之退本座　次一一叙之[illegible]　藤原

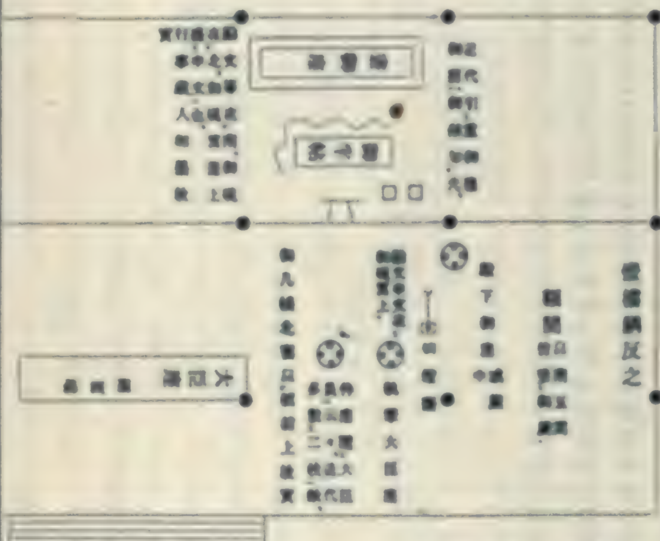
朝臣々々（二條院當年御給）　橘朝臣々々（太皇太后宮當年御給）　々々々々（皇太后宮當年御給）　々々々々（皇后宮當年御給）
々々々々（無品內親王當年御給）　々々々々（前女御藤原朝臣當年給）　々々々々（一品內親王當年御給）　々々々々（三品□子內親王當年御給）　々々々々（無品□子）
（內親王々々々々）　々々々々（前女御藤原朝臣當年給）　々々々々（前女御藤原朝臣當年給）
件等年給、隨時增減、次大臣召ニ
男共（參入國藏人）被ニ仰可ニ一加階入內一者候（不、）藏召人向ニ孔雀間、於ニ殿外一召ニ大外記、仰ニ其由、外記書立進
之、藏人取ニ之（不ㇾ入ニ筥）奏ニ之、奏事由叙ニ之（或不ㇾ奏、只叙之、）入內書ニ王次式部若藏人上、或書ニ於最末一云云、
凡叙位名簿者、乍ニ懸紙一押ニ寄、或取ニ懸紙一云云、若有ニ誤者一可ニ塵之、叙ニ從下一畢、書ニ從五位上、次叙ニ一加
階者ニ　姓尸某（一從下）　姓尸某（同上□藏人、令ニ□書之後叙之、一加階也、召ニ□）　次依ニ外記勘文、叙ニ他者等一、凡皆逐上叙之、
毎ニ階常闕所書之、依ㇾ有ニ追加者一設ニ其所一歟、叙位畢書ニ年月日於奥一、續紙有ニ餘者一放棄（入ㇾ筥）移ニ渡第
一筥文於第二筥（或□□又□□）入ニ今夜叙位一　撤ニ筥進ニ御簾下一奏ㇾ之（如ニ前十年勞□□□□）主上覽之畢返給之、大
臣進挿ㇾ笏取ㇾ之、復ㇾ座挾ㇾ笏、更置ㇾ筥返ニ上中文雜文等、（不ㇾ入ㇾ筥、□□□□之、）大臣副ニ叙位於笏、出ニ於殿上、授ニ於入眼
上卿云云、若關白被ㇾ候ニ里第之時、大臣復ㇾ座之後、以ニ紙一枚一卷ニ其上、以ニ紙捻一結ニ其中、其上引ㇾ墨、取ニ副笏、
給ニ入眼上卿、上卿令ニ外記內覽之云云、
書ニ叙位一儀例　□大臣□注ㇾ名（見ニ治安元、長元元年叙位、）
依ニ年勞一加階之人無ニ尻付一、辨　少納言　大監物　內藏助　侍從　八省輔　六衞府將佐　馬助
有ニ尻付一（□叙）策（或□勞）助教　音博士　明法博士　曆博士　曆道　天文博士　漏刻博士　陰
陽博士　陰陽道　醫博士　侍醫　醫道　主計助　主稅助　大藏　織部正　主水正　采女正
東市正　某大臣令（可ㇾ尋）
加階（有ニ尻付一）策（或加ニ勞字一）博士　助教　直講　陰陽博士　侍醫　明法博士　竿道　竿博士　漏剋
博士（天曆三年抽□之）
臨時　從下一（或第一）　次　治國　殿上從下書ニ筋一（天喜三年二月十一日御二）　造宮（造ニ其殿舍門一功）　人讓（某人讓、又某人某事一、明可ㇾ注ニ若某行事一）

實、臨時、諸宮御給、已上付、大内記、陰陽寮、齋院長官、齋國貢、造補貢、

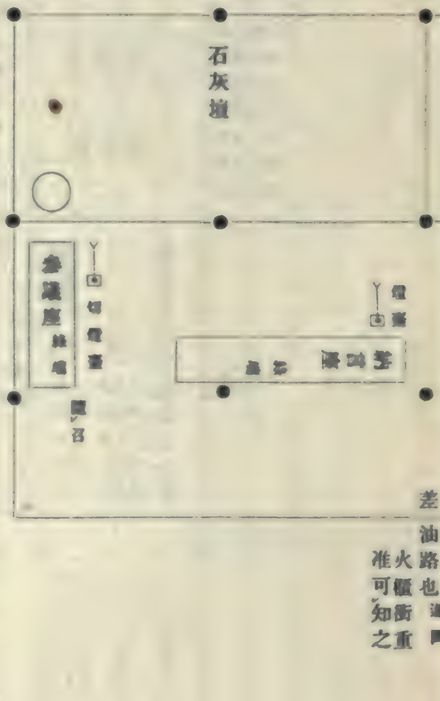
御即位、伴佐伯、御門、加叙、百濟王氏、

朔旦、加叙、諸道、諸博士、

〔官職秘抄 五月〕五日敍位議事



次執筆藏人經實子敷、往反弓場殿、召職事又問、於大臣奏重之時、往反大臣座下、續紙五位藏人持參之、置執筆大臣、



執筆

〔台記〕久安七年〇仁平元年正月六日戊寅、傳聞、今日關白〇藤原忠通使範家奏法皇〇鳥羽曰、執筆〇敍位誰人可奉仕乎、有可召左大臣〇藤原頼長之仰、天子〇近衛於鬼間召範家、仰可以右大臣〇源雅定爲執筆之由、範家奏曰、可召左大臣之由有法皇詔、上怒曰、朕命如此之由宜申法皇、範家詣法皇宮奏之、法皇大怒、仰必可召左大臣之由、卽法皇賜書禪閤〇藤原忠實、仰左大臣早可參内之由、於是余〇頼長不待召參内、秉燭程、院御書賜禪閤、唯今範家來云、於鬼間仰云、今夜執筆可召右大臣也、範家申云、院仰可召左大臣之由、事切候了云々、仰云、尙可申院也云々、御返事令申云、被召上﨟申障之時こそ次人ハ被召候へ、爭サル御事候はん、初度候、必可召左大臣之由令申了、以外事共也、不便承侍也、只今又以書狀令申侍者也、端書　左大臣敍位之時、院ニ申定事歟、ふと尋事不可候事也、被腹立侍歟、無由事也、亥時許、院御書

[illegible]内ニハ言[illegible]々令申了、かくのごときの非違事ハ、申行人の為にや、おろかなる事に候かやに候は、たれかおとり候ハんずると申侍のるなり、又執家より下臈一人ヲ遣ク、左大臣執筆事ハ仰つるハ早可仰也了、執家料早々不仰事ハやと思給有遺恨也、事態頗為面目、無術侍事也、[illegible]事失歟、遺恨候仕歟、奇怪事共也、

〔[illegible]宮記[illegible]月[illegible]〕一五日叙位儀[illegible]

入眼[illegible]

〔江家次第正月〕叙位入眼

叙位議畢[illegible]上卿令持下名於外記、[illegible]或上卿取副於笏云云

次參議收議所[illegible]所謂僕従[illegible]仰辨若史令敷座於陣[illegible]上卿令召内記、

内記參入、上卿仰云位記、内記退出、持位記料硯筥參入、著座、[illegible]宮等座

前[illegible]上卿給叙位簿、内記一兩人一一入眼、入筥進之、[illegible]九條年中行事云、

參議已上一筥、四位五位一筥、兵部一筥、總計三筥、由清慎公入一筥奏之、最後分入二筥、見天暦九例

且依和元起宮叙位記、上卿加檢察、位記狀式部兵部諸道博士治國等各異[illegible]令持

内記參射場、令奏聞[illegible]上卿歸本座、自軒廊東二間出入、或立射場殿内、近例多立軒廊西二間、

藏人二人奏之、返給仰云、令請印、内記置位記筥[illegible]上卿召近衛府[illegible]將監稱

唯、旋候庭中、上卿曰、印、掃部稱唯還出、更入自日華門、少納言主鈴等同入、此間掃部寮立位記案於內記後南方、少納言進就案南、主鈴置印、退立日華門外南腋、(許監立所、)上卿召中務省、輔稱唯參進、(輔不參者、以近衞少將代、殿上少將者令奏事由、中將爲大輔代之例、無外衞佐奉仕之例云云、)進給位記筥就案東、少納言踏印、(揆輔又一紙令踏之、押日、由見書記、)內記立加、隨踏畢、且授內記令卷結、畢、輔以筥置上卿前退出、(九條記、此間又召內記令分入、)上卿又加檢察、參上奏聞如先、仰云、令次第、(四條抄曰、令持內記二人、)返給復本座、給內記付次第入之、(位記并叙位儀付之、式一、式二、兵一、兵二等也、)分入筥筥、(各筥令以標之、)若有親王有四筥也、公卿者、雖武官入式部筥、兵庫官人多入兵部、成人式部、若有武官新叙三位者、可入式部、節會日不帶弓箭、可立式部列歟、可尋、案之帶衞府儀者等加階者、雖作式部位記入兵部筥、上卿仰外記令進硯續紙等、此間令參議書可給二省下名、(近例請印了、上卿書之、)書樣(四位五位書姓尸名、六位不書尸、依近例書其本位、無位一人、公卿不入下名、)

四位　源朝臣々々　橘朝臣々々　平朝臣々々

五位　藤原朝臣々々　高階朝臣々々　惟宗朝臣々々　清原眞人々々　三世無位　某々々(王氏)

(叙多者、可注二世某人、三世某人、四世某人、皆可注世、)　某々

六位　紀々々　長谷々々　中原々々

無位　源々々　年月日(書叙位議日、)

或記載三位云云、又近例或載之、尤不可也、參議以上不召、此由見任官式、又見儀式七日儀、九條年中行事等、其次第五位以上依本位、六位有官者依官次、(不論內外位、)無位依蔭、(兵部又如之、)至於位次無新叙不論有官無官、皆依父祖之蔭、殿上藏人所例上臈蔭孫列下臈蔭子下、而法家所判、雖蔭子至于下臈、可列上臈蔭孫下云云、內記所次第如之、內記覆蓋結筥畢、(筥上押件紙、內記所書也、又書樣式一、式二、兵一、兵二云云、)上卿給下名、令插式部一筥之緘并兵部筥上云云、卽令持內記等參進、付藏人、歸座、內記撤筥、掃部撤座、上卿退出、此次請印、臨時位記者、同筥橫置之奏聞、請印了不次第、撰留三位以上同位人、前叙者爲非參議或下職、後叙者爲參議以上或高職者、同日加階之時歟、次第可

揖之、從宣命、次謝、後日任關白之時、可復本次第云云、

(西宮記 臨時 一)敍位

敍位者、延長宣內裏敍、立列之[illegible]、召給唱、給位記、乍居小拜、復本列、[illegible]宣制了、共拜舞、退出、[illegible]不立列者、[illegible]二日中可申賜、於令中拜、僧家者、藏人奉手三拜、於官司者、依例可拜、[illegible]

(西宮記 五 正月)一女敍位

九記云、天慶七年十月九日、仰云、式部卿本康記云、太政大臣〈[illegible]〉讀式部卿〈[illegible]〉云、中務〈[illegible]〉宣家蛉藤氏已絕、久代尤可憐、今年為中宮敍位者、式部卿〇〈[illegible]〉以此旨告于〇〈[illegible]〉子卿起座、乍敍上再拜、此年預敍位、是則太政大臣勸之也、仍為中宮其由、後日參向藏司、相太閤行云々、從然還去、明親王中將知處返書御門子云、今日參入之間、為中宮家慶賀參向太閤、不座、不能申此由、從客之次、可申處之由、中將答云、太閤談話次、賞常忠仁公〈[illegible]〉賞、一世源氏預敍位日、參朱雀院令奏慶由、中太上皇勅云、本朝敍書慶賀何云々、予聞此旨大驚云々、此事先告御時奏聞、仰云、如此故實尤好可賀、但今依御慶賀、其失必奉賀者也、

(西宮記 五 正月)應和二年正月九日、右大臣藤原朝臣令延光申、女御芳子敍四位之喜、此日掌侍鮮子申女敍人、於南殿敍敍上、賜位記、女藏人永子以下貴拜、次各退還、

(內裏式)敍內親王以下式

皇帝御紫宸殿之前、掃部寮立案於南廂、〈[illegible]〉皇帝御畢、內侍置位記筥於大臣之座前、〈[illegible]〉訖、闈司奏、大臣稱唯升殿就座、大臣喚內豎二聲、內豎稱唯入立東庭、大臣宣喚中務、稱唯出喚、輔以上入自日華門、〈[illegible]〉立東庭、大臣宣參來、稱唯、輔先升受三位以上位記筥、置於案上退下、次輔升置五位以上位記筥於同案退下、次大臣退下、內侍率可敍者列南廂、北上東面異位重行、內侍臨東檻喚、

中務(入自宣仁門、候左近陣、)稱唯、輔先昇殿、叙之退下、(出自宣仁門、輔亦同、)次輔昇叙之退下、其被叙者隨叙北面東上、立書拜、引退、如入儀、訖掃部昇却案、

〔儀式 八〕正月八日叙内親王以下儀

皇帝未御紫宸殿之前、掃部寮立漆案於南廂、(當御座、)皇帝既御、内侍置位記筥於大臣之座前、(掃部寮預立案、)印臨東檻、喚大臣、大臣稱唯、昇殿就座、大臣喚内豎二聲、内豎稱唯、入立東庭、大臣宣、喚中務省、内豎稱唯出喚、輔以上(若實少、參議之、)稱唯、入自日華門、立東庭、大臣宣、參來、輔稱唯、卿先昇受三位以上位筥、置於案上、退下、次輔昇進、取五位以上筥於同案退下、次大臣退下、内侍率可被叙者、列南廂、東面北上、異位重行、卿先昇叙之退、(出宣仁門、輔亦同、)次輔昇叙之退下、其被叙者隨叙北面東上、立書拜、訖引退、掃部寮昇却案、

〔延喜式 十二中務〕凡叙内親王以下品位者、卿叙品及三位已上、輔叙五位已上、其授官人位、丞已下、知縫殿寮、(其六位已下位記者、申太政官請印、事見儀式、)

〔延喜式 三十八掃部〕八日(○正月)女叙位、紫宸殿南廂立漆案、

〔西宮記 正月中〕一女叙位(隔年、近代外記奉進勘文、預叙位者、親王、女御、更衣、内侍、乳母、女藏人、女史、采女、大臣家、内教坊、所所有勞者、一院、三宮御給、御即位時、執翳一者、并又預褰帳等叙之、)上卿一人依召參上、(入自敷政門、經宣陽殿、)仰殿上次將、召院宮御給名簿、(東宮無女爵、名簿中有后名返給、)事了就陣成位記、奏進如例、(親王、女御、乳母、又狀各異也、)請印了奉御所、(内侍賜位記、女史爲使、上臈位記以近衛將遣、)

〔雲圖抄 正月〕女叙位事(式日八日也、近代無定日、隔年行之、但除日以前行之、行事藏人無分配、依貫首之與奪、爲事之者奉行之、)

〔柱史抄 上〕八日女叙位(隔年行之、八日爲式日、或又擇吉日、)

次第一如男叙位、但有内親王女御等位記者、請印之後、内記不入宮奉、上卿、上卿別令持内記、以職事奏之、或又有内記持參本所之例、可隨時議也、

内親王位記俾日次不作例

應和元年十二月十九日御記云、右大將藤原朝臣令延光申云、依申日不作昌子内親王位記、以後

日令殿、

(年中行事歌合)七番　左　女叙位正月八日　為邦朝臣

春にあふあづま豎の心まで君が恵をさぞあふぐらん略○中

左女叙位は、正月八日女の位階を叙せらるゝ事にて侍也、其中に内侍司の掌官に、東豎と云者の有なり、行幸の時、御杖とて、をかしき馬に乗て、供奉する、是が事也、是は三子を用らるゝとかや申侍り、三子は天子の御守にてある由緒も侍にや、毎年に申文を出して、女叙位には必五位の位を給なり、略○下

(公事根源正月)女叙位隔年八日○

是は女房の位階を叙せらるゝ事にて隔年に行はる、其儀大かたは叙位に同じ、大りんてん、小りんてん、きりくゐの申文、うつぼ勘文などいふ物あり、[illegible]の申ぶみといふは、たとへば生年十一歳の女官四十年の労をもて叙爵する也、其故はかの十歳の女のは骨にもならば、其間の労をかんがへて、母の労年と女の十年とを取合て四十年の労になして、五位のまやくを申也、是をきりくゐの申文とはいふべし、又典侍、掌侍、命婦、蔵人、東豎子、はしくの物を叙する事あり、二位三位などさるべき人あれば叙せらるゝ、也、中にもあづまわらはと云は、内侍司の掌官にある物にて、行幸の時、御杖とて、をかしき馬に乗て供奉する、これが事也、是は三子をもちゐらるゝにや、三子は天子のまはりにて有よし、由緒も侍る故とかや、年毎に申文をいだして、必五位の位を給也、是はむかしよりおなじ名乗を相傳して、紀朝臣季明となのる、いとふしぎなる事にこそ、持統天皇の御宇正月に、内親王以下の位を給と侍るは、女叙位のはじめなるかし、

輪轉

(倭訓栞前編三十八)りんてん　輪轉也、大輪轉、小輪轉あり、女官もて相互に輪轉して叙爵せしむる義也、大小は多少のごとし、

切杌

〔江家次第 正月三〕女敍位 隔年行之、式日入日、近代撰吉日、

小輪轉

闈司　　主水　　東豎子

大輪轉

女司　　主殿女官　　御手洗女官　　掌縫女官　　闈司　　主水　　東豎子

〔江次第抄 正月三〕小輪轉　闈司、主水、東豎子、已上三人、年限違者輪轉敍之、對大輪轉而號小輪轉也、以外記勘文敍爵、彼勘文書進年勞者三人、以當年還者必書第一、執筆以是敍之、若大輪轉、小輪轉、同年當還、則依一方敍也、二人不並敍、

〔二中歷 七官職〕女敍位時、東豎子、水取、闈司等、依還敍爵、謂之小輪轉、依外記勘文敍之 至于大輪轉者 内教坊、采女、陪膳、掌入内女子、御手水取、掌縫、闈司、東豎子、女孺、 待還敍之、而近代絶而不敍、外記不進勘文、

〔侍中群要 五〕きりくひ　女敍位に切杭の中文といふ事あり、江次第に、切杭如樹杌生若生也と見え、公事根源に、たとへば生年十歳の女の母三十にもならば、其間の勞を考へて、母の三十年と女の十年とを合て四十年の勞になして、五位の爵を申也といへり、

〔江家次第 正月三〕女敍位 隔年行之、式日入日、近代撰吉日、

切杌

譬者生年十歳女官、以四十年勞申敍爵、是其母三十年之間奉仕公、仍母勞三十與我十相合、以此勞申敍爵、是名切杌也、

〔江次第抄 正月三〕切杌

如樹杌生若立也、所々女官等、母勞與我勞相幷申也、今案、女敍位有年給者、藏人御匣殿等也、有作還敍者、小輪轉勘文所載是也、有以勞敍者、以空勘文年限敍之、有臨時者、依小折紙敍之、

申叙文

(朝野群載八)女孺申爵

主殿女孺正六位上山宿禰清子誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例依年勞賜叙爵状

右清子謹検案内、身等已及五十餘年、職事勤仕女孺之後、已經十三ケ年、相殿補任當職之後、月餘年于茲、已仕四代之朝廷、及七旬之暮齡、爲傍支典蔵闕、身兼望請天恩、依年勞倍勤被叙爵、擬仰率公之貞、清子誠惶誠恐謹言、

康和三年十二月廿二日　　主殿女孺正六位上山宿禰清子

(江家次第五正月)女叙位

本朝文粹(二例、叙女爵例……)

(江次第抄五正月)切紙　今案(中略)本朝文粹者自後朱雀院御時、不被叙べきの之者、唯叙例計也、叙是外記不知可叙之者、唯依年限、加階叙爵例不載其闕日注之也、至男叙位者、知可叙之者、所被叙例并叙人也、

(玉海)文治五年正月九日庚子、此日女叙位也、(中略)次以定經仍執筆左大將參上、執筆作法有不審事、等不違其儀、(中略)……

家醫

(江次第抄五正月)家醫　以三子爲家醫、猶多以紀朝臣季明丹波宿禰友成爲其名、中古以來以季明定爲其名、不似尋常事也、

(朝野群載八)正六位上家醫紀朝臣季明誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例依格勤勞被叙一階状

右謹検案内、爲家醫之者、依其勞効預榮爵者、古今之例、蹤跡多存、望請天恩、因准先例給榮爵、方仰率公之勵、季明誠惶誠恐謹言、

於直廬行敍位

永保二年正月十一日　正六位上東[illegible]紀朝臣季明

〔江家次第二正月〕攝政時敍位事

藏人頭以下、於攝政直廬撰申文、本家家司爲識者一人相加撰之、短冊袖書目録等如恒、了奉仕裝束、南面東一二三四間放出之、垂母屋簾、上庇簾、第四間西邊重敷高麗端二枚、爲攝政座、後立四尺屛風、不及南柱五尺許爲攝政往反路、攝政座前置硯筥、反蓋仰置身上、其上置短冊申文、頭向東、其右置外記勘文、無懸紙、件勘文撰申文之前、外記所進也、硯筥北置十年勞帳筥、(上同)其東敷菅圓座一枚、爲執筆座、第三間北簾下敷高麗端一枚、爲大臣座、後立四尺屛風、第三四間敷同高麗端帖、爲納言參議座、(北南對座)北座後又立四尺屛風、無横切座、障子以東東庇又二行、敷高麗并紫端帖、爲公卿以下暫候座、(高麗公卿等、家司、職事、辨官座、)公卿著仗座、殿下出御、(束帶)若不出御時、布袴御簾中、以頭若五位藏人召公卿、(頭或傳六位令召之、故經信卿云、攝政自可召、更不可傳六位之由、宇治殿所被仰也云云、)召儀如恒、(但書云、攝政御簾不壓、著陣人人引此方云云、)次大臣召外記仰云、宮文候、外記取宮文列小庭并宜陽殿南如常、大臣以下起座、經承香殿後到凝華舍、(里內裏時、有經大路東入自小門被參直廬之例、)大臣以下次第昇著座、(先昇著庇座、殿上達部)辨以下留立舍東、(北上西面)辨官以下不足四人之時、殿上人相加取之、天仁元年大嘗會敍位時、藏人少將忠宗所立加也、辨插笏取宮拔、昇自簀子、行西第三間西柱東邊、膝行昇置宮於執筆座前、(硯北置三合、南重無障居之、)拔笏不揖退之、上官等懸東垣作片庇、以檜竿爲骨、葺苫如常、其下設辨并大夫外記史座、(辨座一列、大夫外記史一列、)座定畢後、攝政召大辨、(大辨參著外座、)大辨稱唯、經簀子著座、敍位事等在別記、爲秘事、仍不記、大略先覽十年勞、次召男共、五位藏人參入奉仰、退取續紙參入、先敍式部民部、次召殿上辨名仰、院宮御申文取遣、(使)次諸大夫居火櫃并衝重、若入夜者、執筆座右立切燈臺、納言座前立燈臺一本、若有功課定者、參議座中間又立切燈臺一本、(主殿大夫役也)次敍位、四位以下進上敍之、先敍從下五位、次敍從上之類也、多依勘文、但式部民部依省奏、藏人以詞被仰、王氏一氏親王舉、藤氏攝政以詞被仰、四家迄遞敍之、源氏一源氏公卿、(代代帝王子孫、其御後又遞、源氏敍從上四位、自餘敍從下五位、)一世橘氏依是定舉敍

之、件氏爵等中文在硯筥、外記史依上日叙之、(件中文入硯筥)入内並一加階叙位之間叙位下了後、今殿上辨召外記勘文、不入物進之、件事畢、問外記、請文給叙下姓叙内階、自餘依姓叙内外階、若有疑姓者、先叙外階、後日依愁叙内階、〔割注〕貫人、(?)公卿主寸首下平、猶蔭原位、皆用大中臣高階、用宮道已上不叙外階、必叙内階、叙畢入筥、奉執政、覽畢給後、大辨退、若有勘文者、藏人頭取叙又、召御前座中、於殿下賜之、外記第一人着殿下受之、執柄自殿下賜出、執柄召入殿上、叙位上卿召外記、召入之、向行入眼事、節目大略准之、

(中右記)寛治六年正月五日戊子、於殿直廬有叙位議、執筆左大弁〔割注〕大受領功課之定、行三國云云、大皇后宮〔割注〕、皇太后宮權大夫〔割注〕宣定文、見合之後、依參議、到當中納言〔割注〕被加之子、〔割注〕依中宮當年御給、叙正四位下、

(本朝世紀)康治元年正月五日己亥、於攝政直廬有叙位議、權大納言藤宗輔卿、權中納言同公能卿等參入、參議左大辨藤原顯業執筆、官執筆文、外記進之、其外參議不參、事畢、權中納言藤公能卿行清書事、右中辨藤原朝隆清書之、次有位記請印事、中務權大輔〔illegible〕少納言藤成隆、左近將監源仲盛供奉其事如常、

(玉海)建久三年正月五日戊寅、此日叙位也、巳刻著直衣參内、即於直廬内覽申文如常、

(百練抄十七四條)建長六年正月五日己卯、叙位議也、於直廬被行之、執筆參議實俊卿勤仕之、大納言良教卿已下參之、

(深心院關白記)建長八年正月六日、叙位議、於關白直廬安嘉殿被行之云々、

(薩戒記)永享五年正月五日庚申、叙位議、於攝政直廬被行之例也、予〔割注〕剋終參内、鶏鳴後事始、予〔割注〕執筆、今日作法皆用花山院〔割注〕説了、翌日天明之後、被入眼也、清書上卿中御門中納言、予又書下名、依他參議不參、弁官等遁避也、一身給骨不便也、　公卿　藤大納言〔割注〕　中御門中納言〔割注〕

臨時行敍位

[illegible]予

〔名目抄（臨時）〕臨時ノ敍位

〔延喜式（式部十八）〕凡依內侍宣敍位者、更經大臣乃應授、

〔西宮記（臨時八）〕恩賞事

寬平位記事、（天皇以黃紙書之、其位階人可爲位、年月日給上卿、令成御位記、）御遊次有勳恩賞者、（叙位給官職）上卿隨御氣色跪御座下、奉勅退出、還昇召其人於階下、仰勳旨、蒙仰者稱唯、拜舞後、上卿書除目奏聞下所司、（延喜二十年、臨時敍、醍醐中冷泉院例、）

有敍位者、上卿仰近衞府、以白紙於御前庭召唱、（後日給位記、）

延長三八廿九、御弘徽殿御遊次、敍中宮內侍少將伊衡、於中庭召唱、女位記不唱云々、

延喜二十一正二十五日、藤敎忠於殿上加元服、（右兵衞督藏人頭加冠、大納言）右少將伊衡以紙唱、敎忠又拜舞、

天慶六正廿四、內宴、重明親王敍三位、○（位品）中納言敎忠令成位記、左少將秀方昇殿、以位記授親王、親王舞踏、時人云、親王位記、中將可授也、

延喜十六五廿三、使右中將兼樹、就亭子院、授褒子位記於其身、（行幸日賞）

延喜七年十一月廿二日、御記云、敎實親王加元服、參入、殊敍三品、（自書給之）親王拜舞云々、

同廿三日、左大臣令奏位記可候狀、廿五日、位記請印、付右少辨淸貫給親王、

天慶三二十五日、邑上御元服日、殿上記云、降御筆可三品、太政大臣傳給授親王、親王改服舞踏云々、

〔名目抄（諸公事言說）〕爵（シヤク、凡謂位ノ總號也、但又初敍五位之時ヲ謂二敍爵、日本ノ法也、）

〔倭訓栞（前編十一）〕しよしやく　叙爵と書り、もと大臣に任ずるよりいふべき事なれども、最末の者をもて名目とする通例なるが故に、從五位下に敍するのみをいふ也、

〔倭訓栞（前編大）〕かうぶり（略）○中日本紀に爵もよめり、始て五位になるを叙爵とす、榮爵を買こと今昔物語にみえたり、日本後紀に禁斷民畜祿貨、以求爵位とも見ゆ、

叙爵

〔萬葉集十六有由縁并雜歌〕比來之吾戀力記集功爾申者五位乃冠、

〔榮花物語殿上花見〕かくいふは、はりまのかみのこの、くら人よりことしかうぶりえたるなりけり、

〔河海抄藤裏葉〕かうふり給とは、爵を賜也、〇中略初て五位に叙するを、叙爵とも冠給とも云也、

〔今昔物語二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第一

今昔大藏ノ丞ヨリ冠リ給ハリタル藤原ノ清廉ト云フ者有ケリ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、

○按ズルニ大夫ハ五位ヲ謂フ、

〔金葉和歌集九雜〕藏人顯隆がかうぶり給りて又の日つかはしける、　藤原公教

雲のうへになれにし物をあしたづのあふことかたにおりゐぬる哉

〔倭訓栞前編十一〕じよしやく　又叙爵といふ、今昔物語に、叙爵得て買むと思ひてと見ゆ、民に爵を賜ひ、或は賣買する事、漢の故事の如くなるが、五位已上は位田あるをもて買むと欲する也、

〔今昔物語二十七〕東人宿川原院被取妻語第十七

今昔東ノ方ヨリ叙爵得タ買ハムト思テ京ニ上タル者有ケリ、〇下略

〔春記〕長暦二年四月五日壬子、前藏人式部丞明隆令申、大盤所料雜用足、是大藏錄爲敬忠所出、藤原扶職叙爵謝人料也、依事叙爵公用之由所申也、

〔朝野群載〕中請替

前女御源朝臣基子家

正六位上行式部少丞大江朝臣匡時

望叙爵

右當年給未補所請如件、

長治元年四月廿九日　別當散位從四位上源朝臣行宗

(神宮嗣官位階款狀寫)皇太神宮權禰宜正六位上荒木田神主成長誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例預五位榮爵狀

右謹檢舊貫、太神宮嗣官等、預榮爵致御祈禱者、古今之通規也、爰謂成長祖考者、父權禰宜荒木田成正、祖父權禰宜荒木田成家、曾祖父權禰宜荒木田成澄、高祖父權禰宜荒木田成康等也、預榮爵之條、難謂非據乎、望請天恩、早預榮爵、致天下泰平國家安全之御祈禱矣、成長誠惶誠恐謹言、

天和三年二月　日　　權禰宜正六位上荒木田神主成長上

(吾妻鏡三十四)仁治二年八月十一日丙寅、駿河四郎式部丞家村、持參去月廿五日除書聞書、被覽彼日令敍爵之由申之、六月廿七日任式部丞訖、

(公名公記)嘉吉二年四月廿日、實遠敍爵事、以勾當內侍內々申入之處、可被仰付頭弁之由有勅答、尤以所自愛也、　廿六日、抑實遠爵事、先日申入之處、今日被宣下了、仍口宣案續左、行寬民部大輔同執申之處、勅許無相違者也、

(康富記)文安四年十二月三日辛酉、出局務文篤西誂、略○中予申云、養子康職、今春擧申敍官了、此歲暮可令申出仕也、三人○[illegible]拜趨難治也、予敍爵事、年內可申之由存候、乍去敍留事、可申入之由存候、可爲何樣哉、可計承、可隨指南之由令申之、不可有子細事也、權大外記敍留例々先人敍爵一級等々注付可被申候、可有何事哉之由有返答、尤悅存者也、須臾後歸畢訖、　九日丁卯、予敍爵并敍留事、令談合申局務之後、參傳奏中山彈正尹亭、令申之處、返答云、意得申候、忩以局務擧、可被付職事候、奏聞之後、定可被尋下者、得其意可申之由、松岡申候之間退出、即申局務取彼擧、持參頭左大弁[illegible]亭處、被出冷泉少將許之由、青侍申候間、直起向冷泉少將亭、喚出左大丞、此事付申被得其意、忩可致披露之由被返答了、予爵所望之折紙一、先例注進二枚也、見左、

申　從五位下

權大外記中原康富
權大外記五位下縣野宣威　貞觀元年十一月十九日、敍從五位上、二十八、時大外記六位也、
權大外記正六位上上毛野滋田　貞觀八年二月十二日、敍從五位下、二十八、時大外記六位也、
權大外記正六位上縣野恒範　貞觀九年二月十一日、轉大外記、同十年正月七日、敍從五位下、
高祖父康綱、曾祖父康隆、祖父重貞、英隆、補大外記、
亡父英隆　應永十八年十二月十四日、敍從五位下、同廿二年十一月廿日、敍從五位上、
十七日乙亥、今日備守之間、自坊城頭左大弁俊秀朝臣許、予敍爵并敍留事宣旨二通送給之、略○中
文安四年十二月十五日　宣旨
權大外記中原康富
宜敍從五位下、
藏人頭左大弁兼伊勢權守藤原俊秀奉

正六位上以上不在授限

(續日本紀四元明)和銅元年正月乙巳、武藏國秩父郡獻和銅、詔曰、略○中 諸國之郡司加位一階、其正六位上以上、不在此限、
(續日本紀七元正)養老元年十一月癸丑、天皇臨軒、詔曰、略○中 改靈龜三年、爲養老元年、天下老人年八十已上、授位一階、若至五位、不在授限、
(續日本紀十六聖武)天平十八年三月己未、詔曰、略○中 宜天下六位以下普加一級、孝子順孫、義夫節婦、及力田者二級、唯正六位上免當戶今年租、
(續日本紀二十孝謙)天平寶字元年四月辛巳、詔曰、略○中 內外諸司主典已上、及天下高年八十已上、中衞兵衞舍人、門部主帥、雜工并衞士仕丁、經仕三十年已上、加位一階、但正六位上以上、及不仕者不在此例、其在京文武官、職事正六位上已上、及月借社祇等、賜物有差、

恩敍一子

(續日本紀三十八桓武)延暦四年五月癸丑、先是皇后宮赤雀見、是日詔曰、〈○中略〉宜天下有位、及内外文武官把笏者、賜爵一級、但有蔭者、各依本蔭、四世五世、及承嫡六世已下王、年二十以上、並敍六位、又五位已上子孫、年二十已上、敍當蔭階、正六位上者、免當戸今年租、

(延喜式十八式部)凡臨時恩敍、若正六位上遷敍一子者敍嫡子、若六位已極者敍庶子、其六位上雖年九十以上、不得除簿、

(續日本紀十七聖武)天平勝寶元年四月甲午朔、從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、〈○中略〉六位已下〈冠〉冠一階上給比〈○中略〉正六位上〈冠讓〉子一人治賜夫、

(續日本紀二十七稱德)天平神護二年十月癸卯、勅、〈○中略〉宜可文武百官六位已下、及内外有位加階一級、但正六位上者、遷授一子、

(續日本紀三十六光仁)天應元年正月辛酉朔、詔曰、〈○中略〉改元曰天應、〈○中略〉其齋宮寮主典已上、〈○中略〉加位二級、自餘番上、及内外文武官主典已上一級、但正六位上者遷授一子、如無子者、宜量賜物、

(三代實錄四十一陽成)元慶六年正月七日庚戌、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、〈○中略〉宣制曰、〈○中略〉天下爲父後者、六位已下敍爵一級、唯正六位上〈冠讓〉遷授一子、無子者〈冠讓〉量賜物、

敍位年限

(二中歷七敍位)說云參議〈五年正四位下、七八年從三位、五六七年正三位、〉

中辨〈五年正五下、二三年從四下、五六年正四位、〉

少納言〈三年從五上、五年正五下、三年從四下、〉

辨監〈五六年敍位〉

侍從〈八九年從五上〉

大外記〈四五年從五上〉

民兵刑藏等輔〈四五年從五上〉

少辨〈二年從五上、五年正五下、〉

少將〈二年從五上、三四年正五下、三年從四下、〉

兵衞佐〈三年從五上、六年正五下、四年從四下、〉

大監〈七八年從五上〉

中務輔〈六年從五上〉

大舍人大學頭〈六七年從五下、八年從五上、〉

諸寮頭八九年叙五上　諸助馬頭助六七年叙五上
大膳大夫五六年叙五下、四年叙五上、七年叙四下、　大學頭陰陽頭六年叙五下、八年叙五上、
陰陽頭賀勞七年叙四下、五上、七年叙四下、四年叙四上、　式兵民大藏等丞五六年叙位
侍醫博士十七、八年叙位、五上、　内官三分十七八年叙位
外官十三年叙位

又云、四位參議任納言之時、必叙三位、仍重大國吏人從三位云々、少納言當官四位者、四年從四上、是依年爵例也、

今案、參議五年叙正四下、七八年アヤ叙從三、六七年アヤ叙正三、中將五年ニ叙正五下、又二三年叙從四下、又六七年アヤ叙正四上、少將二年叙從五上、又五年アヤ叙正五下、少納言三年ニ叙從五上、五年叙正四下、四年叙從三、中將二三年叙正四上、又二年アニ叙正四下、少將二年叙從五上、三四年叙正四下、四年叙從三位、余勘之、

〔台記〕保延二年十一月六日庚午、入夜參院中云、基範云、勅勘之由、從下五位之勞廿八年、齡過、强仕、位恥、遂敍、

〔玉海〕承安二年閏十二月二日丙寅、大外記頼業持來先日所下勘之神宮怪異解狀、中略此文頼業語云、中略又云、諸司者、經廿年、載勘文、外衞者、經十四五年、載勘文、而近年叶年限之輩、併載、院北面成楯門、仍各不載勘文、然囚諸事七八年之輩、皆載勘文、不從事也云々、又云、一加階者、外記相計可載勘文、者也、而近年自上被仰付、敍寺外記遂止云々、凡ハ除新敍之輩入勘文也、謂新敍者、可治愚者也、仍暫被割置歟、重將還夫藏人巡年諸大夫等之類也、經廿年入勘文云々、又云、大臣入勘文耶、外記之所習經十一年、入勘文云、土御門右府師房承保之比被敍之時、天暦御記、十年而可敍一位之由有所見、仍十年而猶不入勘文、以大臣勞被敍了云々、或又自第十二年入勘文云々、

〔朝野群載 四朝儀〕女官申文

典侍正四位下藤原朝臣師子誠惶誠恐謹言
請殊蒙天恩因准先例被敍一階狀
右承暦四年任典侍、永徳二年敍當階、典侍勞廿一年、當階後三箇年、竊閲傍例、正四位下歷二三年、敍三品例也、望請天恩、因准先例、被敍一階、師子誠惶誠恐謹言、
康和二年正月十一日　典侍正四位下藤原朝臣師子
今案、乳母御申文也、非乳母者不敍三位之故也、

掌侍正六位上高階朝臣業子誠惶誠恐謹言
請殊蒙天恩因准先例依當職勞被敍爵狀
右業子謹檢案内、依當職勞被敍爵之輩、古今之例也、就中掌侍者、是劇務無雙、何況勞積年積乎、望請天恩、依當職勞被敍爵者、彌竭奉公之節矣、業子誠惶誠恐謹言、
康和二年正月十一日　掌侍正六位上高階朝臣業子

采女從五位上小田朝臣幸子誠惶誠恐謹言
請殊蒙天恩因准先例被敍一階狀
右謹檢案内、居當職之者、經年勞預加級者、不易之例也、就中幸子出仕之後、有限行幸、節會供奉、并番一役敢不致闕怠、今治支換謹聞非據、望請天恩、因准先例、被敍一階、幸子誠惶誠恐謹言、
○番一本作本
康和二年正月十一日　采女從五位上小田朝臣幸子

大治二年六月廿三日、太宰府解、字佐宮申、女禰宜忠子敍爵事、右被尋問官并内外記之處、各勸申如此、康平直子歷八ヶ年敍爵、其外不分明、今年忠子、去大治二年補禰宜、其勞三年也、何樣可被行哉、可量申由、依御氣色、上啓如件、

子孫、此等六年限不可叙爵中、左右偏如此、此事請敍中請闕有叙爵、件忠子孫、及三ケ年、若是隨中請給
爵級、遺子之外、年限不拘、然者被叙爵有何事哉、早以此趣可令奏達給者、

(續日本紀 三十二 光仁)寶龜四年二月壬申、初造宮卿從三位高麗朝臣福信專知造作楊梅宮、至是宮成、授其男石麻呂從五位下、

(續日本紀 三十五 光仁)寶龜九年六月庚子、賜陸奧出羽國司已下征戰有功者二千二百六十七人爵、○中略其不預賜爵者、雖本有蔭、戰死父子亦依例叙焉、

(西宮記 臨時 一)請宣旨

定王氏爵事 [illegible]

定源氏爵事 [illegible]

定藤氏爵事 氏長者一人宣之

定橘氏爵事 [illegible]

(水左記)永保二年正月四日、下官○中略今年初學源氏爵、令別爵名簿、[illegible]付大外記
師平、須當日付也、而日次不宜之間、今日所付也、件名簿加封、是故右大臣[illegible]御記所見也、爰師平
云、今朝依召參關白殿、[illegible]仰云、王氏爵無沙汰之人、為當時上臈之親王直可擧歟、將又蒙別宣旨
歟、又橘氏爵同無是定之人、如何、師平申云、王氏者上臈親王蒙別宣旨所被擧也、近則故式部卿親王
王被蒙可擧王氏爵宣旨之時、師平擧之、又橘氏依氏人之擧、蒙是定宣旨之人擧之、於源氏爵者、氏長
者擧之、有別宣旨之由所不見也者、又云、王氏源氏名簿被加封、橘氏名簿不加封者、

(朝野群載 四 朝儀)中氏爵 [illegible]

王六位上源朝臣貞季

承和○仁明御後

右去承曆四年氏爵未敍、所請如件、

應德三年閏二月九日　左大臣正二位源朝臣俊房

橘。氏。

正六位上峯淸

右去嘉保□年給爵未敍、仍申請如件、

康和四年七月廿二日　從一位左大臣源朝臣俊房

橘氏

正六位上則綱

右當年給爵未敍、仍所請如件、

長治二年閏二月十七日　從一位行左大臣源朝臣俊房

氏爵

藤。氏。

正六位上某

右當年氏爵所請如件、

年月日官位

件文無人署名、表紙加封、長者書者、書名上字、

王氏者、右狀注某御後云々、元慶御後、仁和御後等之類也、

〔國篩八座抄〕白馬

加敍事下名書樣○中略

三世無位王。氏。敍。爵。皆注其世、近例多書四世、但三四共不叶時儀、寛平(宇多)長和(三條)等御後、巳以盡書、然而未見四世巳下字、近例皆書四世、

〔江次第抄〕二 叙位入眼

三世無位

今案二世爲五世王其蔭從五位下也、故同書無位字、注其世也、近代諸王寛和山□□御後、已過數十世、

猶注四世、甚不得其理哉、五世以後不預氏爵、故書五世以上也、

(本朝世紀)寛和元年七月一日壬寅、此日參議從三位行皇太后宮權大夫兼美作權守藤原朝臣公定

薨、○中略、康平三年正月七日、藤氏爵叙從五位下、

藤孫正六位上藤原朝臣守信誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例被叙式家氏爵狀

右守信謹撿案内、氏爵者、輪今春當式家巡、抑始祖二世參議正三位式部卿宇合男、三世清成男、四世

贈太政大臣正一位種繼男、五世刑部大輔正五位下山人男、六世民部大輔正五位下菅雄男、七世右

大辨從四位下佐世男、八世正五位下式部少輔文貞男、九世從四位上文章博士後世男、十世伊豆守

從五位下惟信男、十一世從五位下守義男、十二世守信也、望請天恩任次第被叙式家氏爵、將知氏族

之不絶矣、守信誠惶誠恐謹言、

康和三年正月六日　藤孫正六位上藤原朝臣守信

藤子正六位上藤原朝臣季永誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例叙京家氏爵狀

右季永謹撿案内、藤原氏爵者、南北式京四門之依次第被抽賞、古今不易之例也、爰京家之者、親父泰

俊給爵之後、殆及三十餘年、今春之運方當其仁、望請天恩因准先例預榮爵者、將知氏族之貴矣、季永

誠惶誠恐謹言、

康和三年正月五日　藤子正六位上藤原朝臣季永

給爵
未給爵

〔範國記〕長元九年八月廿二日、御即位（未書一校）叙位、預和氣氏爵者、彈正疏致孝也、而訶重國立道理愁申公底、先以申文下給、右府可召同氏人、關書頭相成、攝津權守致賴進申文、其申文、亦定世次、重被問云、作致孝、氏族之末胤、清原卿孫族歟、又先祖有奉仕件役者、令勘之處々無其例、又被問云、可召返致孝位記歟、將當唯可給氏爵於重國歟者、引勘代々例、二人相並無濫氏爵之例、仍召返位記、令叙重國、至于致孝可令載本職者、

〔朝野群載四〕皇太后宮職
請因准先例、停年々內外官未給、以正六位上平朝臣資經叙爵狀
去永保二年內官一人、去永長二年外國三分一人、
正月廿九日、以播磨貞信任播磨掾、（任符未出）
去承德二年外國二分一人
正月廿七日、以秦成任但馬大目、（任符未出）
同三年外國二分一人
正月廿三日、以具登正武任美濃大目、（任符未出）
右停年々內外官未給、以件資經可被叙爵之狀、所請如件、
康和二年七月六日　從四位下行亮源朝臣經仲
勘申皇太后宮職、申請返上年々御給、內官一人、外國三分一人、二分二人、以正六位上平朝臣資經、叙爵事、
內官
承保二年御給未補
外國三分

承徳元年御給同年正月以播磨盛信任播磨掾

同二分

承徳二年御給同年正月以秦盛任但馬大目

康和元年御給同年正月以秦友正武任下総大目

給爵

皇太后宮職、去承徳二年十一月、丸上内官一人外國三分一人、二分二人、以清原助道叙從五位下、

右文殊所注如件、仍勤申、

康和二年七月廿六日　　大外記兼博士主税助播磨介清原眞人定俊勤申

(朝野群載四)諸宮請奏

諸院

正六位上源朝臣良行

右當年給爵所請如件、

康和二年正月十一日　　無署

但封上書大夫之名一字云々、

中宮職

無位藤原朝臣顯子

右當年御給女爵所請如件、

康和二年正月十一日

(朝野群載四)諸宮未給請奏

無品禎子内親王家

□□位上藤原朝臣盛通

右去年給爵未敍、所請如件、

天永二年十二月廿六日　　別當正二位行權大納言源朝臣雅俊

今案、當年給有大夫名、只書下封之上、書名上字也、未給者、奥有大夫名、不封之、但注名之事、年號下若傍、是家之說云々、若當大嘗會御卽位朝旦等者、注某字、

童爵

〔朝野群載（朝四儀）〕諸宮請奏

某内親王家

正六位（某）姓朝臣（名）

右當年給爵、所請如件、

年　月　日　書位

今案、於童爵者、止正六位上四字、可書無位二字、但於凡人者、不事童爵云々、又於加冠人者、公卿凡人等子族、申文書樣無差別、又三宮者、書職字（某）、右狀者當年御給（也）書云々、又於未給者、別當加署、

童爵申文

某内親王家

無位（某）姓朝臣名

右當年給爵、所請如件、

年　月　日　書位

合爵合冠

〔除目抄〕一合爵台冠間事（院宮返上内官、并外國、未給、被中叙爵一人事也、）

内官一人、外國三分一人、二分二人、

已上返上未給、被敍從五位下之員數也、

内官二人

遂上内官未給二人之時、不入外國、

外國二分六人

遂上外國二分六人之時、不入内官幷外國三分、

内官一人、外國三分三人、

遂上内官一人、外國三分三人之時、不入國二分、

外國三分四人

遂上外國三分四人之時、不入内官、近代多如此、或又五人、

外國三分二人、二分四人、

已上此等ノ未給ヲ遂上シテ、被申叙爵之時ノ員數等、件未給、雖有其官之未給、隨時宜外記註出之、件年々被下所之勘申文、奏聞之後、被下納外記、且外記勘文、上卿又付職事、覆奏之後、上卿宣、下内記局、外記勘様見宣旨抄、

〔朝野群載四〕二合内官中、爵加給例勘文

二條院

請被因准傍例遂上年々内官一人、以正六位上傳朝臣助宣被叙爵状

永保元年

内官一人

同二年

内官一人

右遂上年々未給、以件助宣、可被叙爵之状、所請如件、

入内叙上階

承徳二年四月廿八日　別當從四位下皇太后宮權亮源朝臣經仲

勘申、二條院申、請返上年々御給内官二人、以正六位上伴朝臣助兼叙爵事、

内官

永保元年御給未補

同二年御給未補

給例

二條院去寛治七年十二月、返上年々内官二人、以醫博士丹波雅康叙從五位下、

承徳二年七月、返上年々内官一人、外國三分一人、二分二人、以大江實俊、叙從五位下、

右文簿所注如件、仍勘申、

承徳三年六月六日　大外記兼博士主税助播磨介清原眞人定俊勘申

〔中右記〕大治五年五月廿七日、左少史行忠依皇后宮合爵假給爵、上卿源中納言云々、但不參陣、只被下申文於里亭、給内記云々、此事如何、上官合爵上卿可參陣歟、

〔江家次第二正月〕叙位○中略

次大臣召男共頭若藏人

被仰可一○○○○加階入内者候不、

忠召人向孔雀間、於幔外召大外記、仰其由、外記書立進之、

藏人取之不入筥奉之

奏事由叙之、或不奏、只叙之、

入内書王氏式部若藏人上、或書於最末云云、○中略

叙從下畢、書從五位上、

叙一加階者

蔵人頭

蔵人頭[illegible]

〔本朝世紀〕康和五年八月十六日丙戌、従二位行権中納言兼右衛門督藤原朝臣忠通伝奏、中略、治暦三年十二月廿九日叙春宮殿上、四年四月十九日立太子、蔵人之日叙正五位上、康和久二年正月七日、依坊亮上臈一

二〇一十一、叙従五位上

〔職原抄〕雖行叙上は上三ヶ階に任ずる、官に任じ位を授くる、事なき

〔官職知要〕超叙　直叙

直叙は介叙を叙位之上、直に四位に叙せしむる、也又僧位にては、可叙法橋之上、直に叙法眼法印しむる也

〔殿暦〕天永二年十二月十日癸巳、今夜一品殿[illegible]初令叙従三位給[illegible]

[illegible]其儀[illegible]殿上[illegible]入余御前[illegible]

前従衛門一[illegible]数[illegible]其上数[illegible]一[illegible]勅使[illegible]対面[illegible]

近[illegible]余[illegible]作[illegible]為[illegible]実子余[illegible]勅使[illegible]中門[illegible]実子余小可[illegible]

由[illegible]三[illegible]之後[illegible]余小[illegible]勅使[illegible]去月廿五日[illegible]以余子可叙従三位、余謹承由奏

了余[illegible]色[illegible]中納言宗忠[illegible]出従中門之[illegible]勅使勅使下[illegible]拝退出、余

勅使下[illegible]拝之[illegible]入対[illegible]勅使出中門[illegible]一[illegible]殿[illegible]今夜[illegible]使大納言以下

五六人許上[illegible]来、

〔中右記〕天永二年十二月十日癸巳、申刻許参内、中略、予[illegible]依頭弁命[illegible]使[illegible]弁来仰云、依去

月廿五日御賀[illegible]原令子可叙従三位者[illegible]令下数[illegible]内記[illegible]少内記[illegible]来、

誄奏、予仰下件旨了、忽參東三條、一條殿、殿下共御也、如此臨時勸賞、强雖不書叙位、口宣仰下常事也、〇中略

一條殿年來未有御位也、而執柄之母堂、無位例、不聞也、仍有議、今夜令叙從三位給也、但初度三位例、是上東門院例也、長保元年二月十一日、著裳之後、三ヶ日有饗饌之次、以藏人頭右大辨行成、初叙三位之由被仰下也、

給女裝束、是今日例也、上東門院入内以前也、

御名全子 式部大輔在衡朝臣撰申也、

攝政母儀 此當一條殿歟、引與二

太政大臣母儀 從來不見、此一條殿初爲大相國母儀、爲一代之事、一家面目也、

〇按ズルニ、女叙、直叙、越階等ノ事ハ、官位部位階下篇ニ詳ナレバ、多クハ省略ニ從フ、

〔柱史抄 上 叙位〕天德五年〇應和元年正月七日御記云、左大臣實賴〇藤原申、送延光朝臣云、讃岐介子高前叙之、内記可被責由、昨日諸卿定申畢、而令執奏、宜申此由、仰依公卿定、令加叙、大臣令申云云、子高位記今日可令作、加位記所司已退出、令召之間、日漸欲晚、且始行節會、何令仰云、始節會之後、何作位記乎、須從日令作云云、八日左大臣令延光朝臣申云、今日可令作子高位記云云、

〔明月記〕建久十年正月九日、今日見一昨日加叙聞書、〇下略

〔平戸記〕仁治三年十一月十六日甲午、今夜節會如例、又被行加叙云々、

從四位上藤原家盛 散男有仲式部丞年叙　源顯良臨時　藤原忠基同

從四位下大中臣隆盛 父隆道臨大嘗會御前御新嘗會

從五位上源顯方臨時

寬元三年正月七日癸卯、白馬節會如例、有加叙云々、

從四位上藤成基 安嘉門院當年御給　從三位藤原敦良 左少將如元

〔貞丈雜記〕〈二官位〉一叙留と云ふは、官位ある人、位上る時は、位ばかり上りて、官ハ元の如くなるを云フ、位ばかりすゝみて、官へのぼらざる也、

〔職原抄〕〈上〉太政官

少納言三人〈相當從五位下○中略〉 先者叙四位者遷職、四位猶帶之、又常事也、

〔玉海〕承安三年正月六日己亥、師少納言藤原兼智叙四位、希代事也、古來補此職三人、皆是才能相兼之輩、華族英雄之人也、顯要之職、有能且儀式、身雖門非長、兼才學、無謬誤不偏、一能不學、片善足爲盡、東晉有學也、

〔職原抄〕〈上〉太政官

左右中辨二人〈上相當正五位○中略〉

左右少辨二人〈下相當正五位○中略〉

五位辨叙四位之日、去其職者也、近代多叙留、

〔水左記〕承曆三年正月五日、叙位儀也、〈中略〉藏人頭〈實政〉不給云事、計助爲長中四位、但雖叙四位、不可去主計助之由所申也、如何、然而可定申者、人人定申云、件事雖無其例、爲長爲奉公者之上、年已衰老、尤優恕可被者、隨爲長叙四位、實希代例也、

〔大夫尉義經畏申記〕一伊豫大夫尉義經例位畏申事〈某元二人檢非違使、左衛門少尉、元曆元年八月六日任、同九月十八日叙留、〉

〔吾妻鏡〕元曆元年十月廿四日己卯、因幡守廣元〈去八月六日任〉申云、去月十八日、源廷尉〈義經〉叙留、今月十五日聽院內昇殿云云、

〔職原抄〕〈上〉檢非違使

尉〈中略〉源平武士候尉大夫者、爲之大夫尉、叙五位者、猶爲昇殿廷尉云云、又六位尉叙五位時、多者去

之明法道者必敍留、其外獲依殊恩令敍留也、但近代何人敍留、違舊例乎、

(吾妻鏡二十三)建保六年十一月五日癸酉、大夫判官廣綱自京都進上書狀、是去月十五日、日吉社御幸之時、供奉之間有令刃傷舁當童、廣綱射留之詫、依被賞、同廿一日所令敍留也、朝恩之至、已爲無雙面目之由云云、

(康富記)文安四年十二月十一日己巳、參庭田羽林亭、奉謁之、予爵敍留事、自院御所內々被申禁裏給者、可設入候由令申之處、今日聊違氣也、加養性、可參申入候由返答也、　十二日庚午、自坊城頭左大弁(俊秀)有書狀、敍留一段所望事、注折紙獻被申文獻可付給候、先日之一紙者、唯敍爵所望折紙也云々、卽認進之、自庭田殿書狀之返事ニハ、予申旨事、今朝申入院御所候間、以兵部卿(永基)今日可被申候由被仰下云々、設入之由申了、傳奏中山彌正尹之許ヘハ、爲御使可能向之由雖被仰出、今日風氣未取直之間、不能向之由被示之、晚頭左大丞令立寄給云、予申旨事、今日能向傳奏(中山中納言)粗令談合之處、注進之一紙ニハ、先人敍爵例幷權大外記五位例、又自權大外記令敍爵候等例也、權大外記敍留例不見之、爲貴儀者如何、猶可被尋本人之由有返答、然者重一紙可注給之由被示候間、可注進之由申了、　十三日辛未、自頭左大弁被申書狀事注遣之、大外記敍留例幷權大外記五位例等副獻也、

被仰下候、權大外記敍留例別勘之處、無所見候、權大外記五位例、幷大外記敍留例注進候、彼是被准據可得御意候哉、康富敍留之一段、誠未得先規候上、雖望申過分之儀候、且被優數代奉公之相續、且致當時三人(師鄕、康富、康顯)之拜趨、爲殊給之恩、有勅許之樣申御沙汰候哉、康富誠恐々々、謹言、

十二月十三日　權大外記中原康富(請文○中略)

大外記敍留例

大外記高村田使　延曆十一年正月七日、敍外從五位下、同十四年二月十八日、遷大學助、(敍留以後、在官三箇年、)

大外記島田清田 天長六年正月七日叙従五位下、承和二年八月廿四日、遷宮内少輔、(叙留六年)

大外記山田古嗣 承和二年正月七日叙外従五位下、同十二年正月十二日、任阿波介、(叙留十年)

大外記清内御園 承和六年正月七日叙外従五位下、同八年月日卒、(叙留二年)

大外記朝原良道 嘉祥元年正月七日叙従五位下、同三年月日辭、(叙留二年)

大外記島田良臣 貞観十八年正月日叙従五位下、元慶六年二月十五日、遷加賀介、

大外記大藏善行 仁和三年正月七日叙外従五位下、寛平八年正月十五日、任治部少輔、(叙留八年)

大外記三統公忠 元慶二年正月七日、叙外従五位下、天暦三年月日卒、(叙留十二年)

大外記御船傳説 天暦十年正月七日叙外従五位下、康保四年月日卒、(叙留十一年)

大外記大中臣朝明 寛和二年七月十二日叙従五位下、永祚二年正月任長門守、(叙留四年)

此外依繁略之

十七日己亥、今日留守之間、自内藏寮左大弁俊秀朝臣許、予叙留并叙留事宣旨二通送給之、又上卿方下知状副給、可付遣綾小路中納言之由也、(中略)

文安四年十二月十五日 宣旨

従五位下中原康富

宜令叙留權大外記、

藏人頭左大弁兼伊勢權守藤原俊秀奉

宣旨二枚献上之、早可令下知給之状如件、

十二月十五日 左大弁俊秀奉

謹上 綾小路中納言殿

抑今度叙留一段事、勅許之事、昨日令身賀悦銘心中、權大外史者、而祖父以来所任来也、全加叙者、先

人之近例也、敍爵者勿論、於敍留者、一流未浴此恩、無其例、〇下略

敍位簿

〔令義解七公式〕凡任授官位者、(謂太政官任主典以上、及中務授五位以上、式部授六位以下之類也、)所任授之司、皆具錄官位姓名、任授時年月、貫屬年紀、造簿、(其任官簿、除貫屬年紀、)官人連署印記、若有轉任身死、及事故以理去任者、卽於簿下、朱書注之、其有考解及犯罪除免者、解免之司(謂解司者式部、免司者刑部、假如准考應解者、式部錄狀申官、待符訖乃造解簿、又犯罪應除免者、刑部斷定錄申官、與驗事、卽造除免簿之類、但五位以上、式部不得定、只考訖、若應考解者、亦太政官爲解司也、)亦錄解免之狀、准前造簿、仍錄報元任授、(謂式部錄報太政官、及錄報中務、刑部錄報式部也、)除注簿案、若除解人得敍用者、敍用之司錄報解處所司、(謂用司者、太政官、假司者、式部、假如考解之人、更復任用、及除免之人、限滿聽敍者、官錄報式部、式部錄報刑部之類也、)除簿、卽未敍之間、在本貫身死者、申刑部注除、(謂若未用之間、在本貫身死者、亦申太政官及式部、注除也、)其餘色、依職掌總造簿、(謂式部造位簿、兵部造帳內資人簿之類也、)及者、並准此、

凡授位按勳之類、應須總奏、而有勳當未奏者、隨見奏者奏之、(謂未奏、猶未勳事、此爲臨時立制、其選滿須敍者、令條既有期限、不可且勳且奏、)不得停待致令擁滯、

敍位例

〔日本書紀推古二十二〕十一年十二月朔壬申、始行冠位、　十二年正月朔、始賜冠位於諸臣、各有差、

〇按ズルニ、是ヲ以テ我國敍位ノ始トス、令制以前ノ位階ニ就キテハ、官位部位階篇ニ詳ナリ、

〔續日本紀文武三〕慶雲四年正月甲午、天皇御大極殿、詔授成選人等位、親王已下五位已上、男女一百十人、各有差、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆三年正月己卯、〇七日宴五位已上、授無位小倉王、石浦王、並從五位下、〇中略正六位上下道朝臣長人、丹比宿禰稻長、船連稻船、秦忌寸長足、並外從五位下、宴訖賜祿、各有差、　四年正月癸卯、〇七日宴五位已上、詔授正六位上多賀王從五位下、〇中略秦忌寸馬長、白鳥村主元麻呂、伊蘇志臣眞成、並外從五位下、

〔類聚國史職官九十九〕大同五年〇弘仁元年正月戊申、〇七日无位平野王授從四位下、從五位上多賀王正五位下、正六位上直世王、田口王從五位上、正五位下大伴宿禰久米主、藤原朝臣繼彥從四位下、從五位下

藤原朝臣貞繼、石川朝臣浄麻呂、多治比眞人今麻呂並正五位下、從五位下高村忌寸田使、紀朝臣咋麻呂從五位上、正六位上文室朝臣于川、藤原朝臣乙主、從六位下紀朝臣與須賀、正六位上石上朝臣眞宗豐、紀朝臣繼勝、從六位上三國眞人民人、正七位下布勢朝臣仲嶋從五位下、正六位上調連家繼、秦宿禰智奈理外從五位下、

天長四年正月癸未〈二日〉朝、天皇我詔旨良麻止勅大命乎衆聞食止宣、仕奉人等中爾、其仕奉狀乃隨爾治賜人毛在、又爲家使乃諭氏奉賜人毛在、御意乃愛盛爾治賜人毛一二在、故是以冠位進賜治賜波久止勅天皇我大命乎衆聞食止宣、授從四位上直世王正四位下、甲申〈二十日〉詔曰、天皇我詔旨良麻止勅大命乎衆聞食止宣、爲家使乃諭氏奉賜國國乃國司等中爾、其仕奉狀乃隨爾勤奉良毛冠位上賜治賜波久止勅天皇我大命乎衆聞食止宣、〈以下略〉

〔續日本後紀〈二〉〕承和元年正月庚午〈七日〉天皇御豐樂殿、宴群臣、詔授正五位下岑成王從四位下、正六位上助雄王從五位下、從四位上源朝臣弘正四位下、正五位上滋野朝臣貞主、紀朝臣深江、正五位下藤原朝臣貞川、藤原朝臣助並從四位下、從五位上安倍朝臣高繼、從五位下田口朝臣佐波主、並正五位下、從五位下眞苑宿禰雜物從五位上、外從五位下御船宿禰氏主、正六位上藤原朝臣衛〈○中略〉守、藤原朝臣諸氏、大中臣朝臣磯守、橘朝臣本繼並從五位下、紀朝臣國守外從五位下、正六位上清村宿禰豐存、宗達繼縄、朝書滿清主、秦宿禰貞仲、道能公永貞、風早眞人豐宗並外從五位下、

〔續日本後紀〈六〉〕承和四年正月庚午〈六日〉依例、內記今日預設明日可敍五位已上位記、而此般停之、廢元敍位事也、

〔文德實錄〈三〉〕仁壽元年正月甲申〈十一日〉正六位上長統王、藤原朝臣興數、紀朝臣永貞、坂上大宿禰常岑、橘朝臣數岑、丹墀眞人高主、伴宿禰三宗等並授從五位下、正六位上高丘宿禰百興、高狩忌寸浦貞、春

良宿禰樂麻呂等授外從五位下、

(日本紀略一醍醐)延喜六年正月六日庚申、叙位儀、　廿年正月六日己巳、叙位議、依右大臣(藤原忠平)大納言(藤原道明)不參停止之、公卿等退出云々、

(日本紀略三村上)天暦元年正月七日癸巳、今日無叙位、是依去年多叙位也、　三年正月六日庚戌、依雨無叙位儀、　七日辛亥、白馬宴、雖當御物忌、天皇御南殿、今日無叙位、

(日本紀略四村上)應和三年正月五日戊午、叙位儀、

康保三年正月六日壬申、叙位、

(左經記)萬壽三年正月五日癸未、及未剋被始叙位議、未及秉燭之前議了、左衞門督被奉行入眼事、但今夜中務輔不參、仍明日可入眼之由有仰云々、

(扶桑略記二十八後朱雀)寛德二年正月五日、無叙位、

(水左記)承暦三年正月五日、叙位儀也、從博陸殿(藤原師實)給書狀曰、家令爵申文有無如何、若有見事者可注給、令持外記之處無所見者、然者唯以詞令奏歟、尤不審也者、隨相尋之處無所見、仍不能申左右、酉時許參內、先參關白御宿所、示給云、彼家令爵事不獻請文、唯以詞可令奏、其故者、爲關白之人參入候座之時、氏爵不獻申文、以詞奏聞所給爵也、以之謂同事歟、下官答申云、件事不知給事也、不能左右、可在御定者、然者不被獻請文云々、內府(藤原信長)被申家令爵、於彼大臣者、被獻申文之由民部卿(執筆)所被示也、秉燭後事始、

(後二條關白記)寛治七年正月五日癸未、參高陽院、叙位間事被仰下也、被下給硯(紫色)以紙二枚裹之、上下推折、結緒無之、(緒一事二)立サ未ニ裹之、上下結之、酉剋參內、著右仗座、與起座之間頭辨來云、可參殿上方、殿下(藤原師實)被仰云、無大外記、可召六位外記、(眞清)且後著外座、令置膝突、頭辨仰召仰由、官方使仰頭辨了、召外記(眞清)置小庭、仰召仰事、稱唯起了、喚之又召外記置文等候(不)哉、申候之由、仰云、令候(世)、外記

殿上戶書總方間、人殿上聊授右衛門督下小板敷而退出了、實到事訖、裏紙懸紙表卷等卷、整面入置第二宮云々、成文不結、

叙位之時宮等

一宮（准后）硯（有蓋）外記中文等置硯下橫切云々、

二宮（五位已上歷名一卷、諸司主典以上補任二卷上下、武官主典已上補任一卷、令外官一卷、諸國主典以上補任二卷上下、以上有軸、十年勞一卷、無軸、）

三宮（中文等有蓋）

御裝束儀

當日早旦裝束南殿、撤倚子御帳、等東廂御座、自南第三間、鋪兩面端疊一枚、爲大臣座、第二間南行更西折、鋪繧繝端疊、爲納言參議座、當御座間、鋪所管圓座、爲大臣座、（壬午多少可隨大臣之數、）鋪三枚、臨黃昏燈臺二基立御前、（一基立大臣座北、一基立納言前、各有打敷、）

叙位儀

叢紙一帖（殿下給也、）

殿下昏尋問之處、□□故宇治殿（○藤原賴通）仰之、（○之云誤）土御門右府（○源師房）染筆注書口傳記也、

續紙束通帷（一卷書也、二卷入御筥獻之）

裏、當日召外記、下給硯墨筆等、（筆二墨一）袋紙結緒無之、文書儲可備設之由仰了、（可用達歟）著右仗奧移外座、量除實、（官人勤仕）召大外記問諸司具否等、宮文候哉、仰可令候由、起座、藏人來就膝著、召（寸）、予揖召外記、進跪小庭、令宮文候、（申）各取宮等連行步出、一列立也、予還座就弓場殿、大臣（西面北上）納言（北面東上）參議（東面南上）余揖昇殿上小板敷、殿下參御前、余參、置宮文等、了殿下仰云、內大臣（內乃大伊万不等也）深揖稱唯、著本座、（御座緣色）著一圓座、主上仰云、早久、小揖置笏、開見第二宮文、除十年勞之外移入他宮、取寄於前、更開見、了推遣硯宮於左方、（右腕之時推遣左方云々）搢笏取宮、進御座下、（以左手）奏之、御覽之間、拔笏不復本座、候御前、返給

問爲給之僞申使爲其後引爲殿下以本願、以六日二人、傳聞参進御、可進續紙之由承仰
行惡續紙二事取之八十枚也上早、取續紙後、與先書從五位下先式部民部書了、明之取
爲奉可取遣院宮御申文之由承仰之後、参議、常御可取遣院宮御申文之由承了起
座、入敍位議第一、事起關白、如本、不審也、

〔中右記〕寬治八年正月五日、今夜依例有敍位議、左大臣、有右衞門督給敍位、
參議之間、中將顯一人不參、參事由左少將有賢依仰勤仕、時代左右府、令敍從一位給、是
大臣參六ヶ年、人臣後是十年敍一位先例不相叶、已經十年也、　七日己卯、天皇出御、令近仗陣
賢陣內有異見了、內侍置位記筥、內侍臨南庇召人、內舍人副陣并見國公卿着外弁、次開門內弁
下立、內豎大內記置位記筥在具本、宣命、位記筥下如常、　次宣命使公實卿下、上付版位
宣制兩段、又宣命二段了、後公卿並令上東庇中、公卿或有不拜舞上之輩、是左大臣被立敍列
之間、依家禮歟、　御內有立御敍列儀、從後院以後年、元年正月七日、右大臣內大臣被敍從一
位、然而有障無參仕、其後又久經六ヶ年、今日有此儀、依爲事大略記之、
永長元年正月五日、內申時許參內、敍位儀也、　中宮職功并太神宮司功、先例二人中有兩功、然
者被兩事在議試中、今度爲造宮使觀長及當年五月所立之造三字也、其後觀仲補造宮使以來、數
十字、以私物修不日功、是可謂大功者也、仍敍正五位下、
〔本朝世紀〕康和元年正月六日己酉、敍位儀也、可依中日延引、
從三位源朝臣師頼
從四位下藤原朝臣有信
藤原朝臣教宗　式部少輔
源朝臣師時　左少將

正五位下源朝臣雅兼右衛門佐

從五位上源朝臣國房伊豆守、前信濃　源朝臣實明少納言　源朝臣顯國[illegible]一　藤原朝臣公通兵部少輔　賀茂朝臣家榮曆博士　安倍朝臣泰長陰陽博士　源朝臣顯重左兵衛佐

從五位下小槻良俊入內　藤業仲式部　紀宗兼民部　源盛家藏人　高階仲章藏人右近、七日追加、　藤敦光丞　三善信貞外記　淸原俊忠史　源資賢延喜御後、故時家男　藤實重顯實朝臣男、氏　良峯兼季二條院　橘敦良藏人　源顯親中宮、可申子、周防介、故光大藏卿、　若江繼任二品宮　橘輔忠給子內　藤原宗雅[illegible]　日置實時[illegible]　榎井定員[illegible]　安倍兼吉陰陽允　伴久宗國、　源光國右使　紀季本修理進　藤親定諸司　藤友季左京進　惟宗重實左馬允　藤重兼右馬允　村主經遠右近　小野行長右近

外從五位下卜部兼良宮主、神祇少史

〔中右記〕康和四年正月五日、戊剋許、左大臣俊房以下參集仗座、依叙位儀也、○中略爰有僉議事、大江公仲朝臣、藤原爲定、共前年有罪過、各流罪、而去年被復本位、件兩人依爲儒者、可浴策勞加階之恩由進申文、但可被免哉否條可定申、中略下人々被定申云、本罪甚重、一旦雖被復本位、忽難浴加級之恩者哉、又勅定或又被免何難之有哉者、雖然人々多不可被免旨議定、仍今度被止加階也、

天仁元年正月五日、今日無叙位儀、諒闇之年去年七月堀河崩先例除目之次、有叙位之故也、

永久二年正月五日壬午、申時許參內、叙位議初、於御前鳥羽被行者、○中略圓融院天延元年正月叙位、於御前被行云々、御年十五

一條院正曆五年正月、除目初、於御前被行也、

去四年朔旦冬至有叙位、同五年正月、不被行叙位儀也、御年十五、

後一條院寬仁五年正月、除目、於御前被行、叙位於關白直廬被行、御年十四、

堀川院寛治六年正月五日、於御前被行叙位、[illegible]

今上御年十一、叙位初於御前被行、是依去年有院叙位之行也、但初叙位於御前被行、是被用閑院御時例也、七日甲申、二省奏叙人等勘文、[illegible]内弁召宣命使、[illegible]給宣命、内府以下列立、[illegible]宣命使出置、[illegible]二省[illegible]位記筥、[illegible]宣命[illegible]指笏右廻、讀文、[illegible]讀之、右廻、讀二拜、又如初讀之、又二拜了、歸昇、人々復本座、二省召給位記了、叙人拜舞之間、威儀二拜、[illegible]揖、衆人喚之、

(殿曆)永久三年正月四日乙亥、晝時許、叙位儀初、左大臣[illegible]執筆、予[illegible]叙位儀了、次節會如常、今日王氏爵不被叙其人、不時得依也、

(中右記)大治五年正月六日己酉、今日叙位儀初也、御前[illegible]○中略被行也、○中略內府[illegible]作法無指失歟、初度右寶劍有其[illegible]、内府[illegible]朝廷事[illegible]所[illegible]見也、是依人道[illegible]太政大臣[illegible]被傳授也、家之餘慶尤欣感其[illegible]、內相府[illegible]之後[illegible]家之[illegible]也、年初廿八[illegible]執筆、是[illegible]事也、主上御年十三、初召叙位、[illegible]御時之例也、近代吉例、仍今年被行也、

保延四年正月五日、叙位議、執筆內大臣[illegible]予[illegible]叙從一位、由所聞也、是[illegible]院[illegible]御恩也、雖多年奉公勞、是院御恩也、[illegible]從我身已及子孫、[illegible]御恩、悦之思不可云盡、[illegible]祖父亡父希代勝事也、以七十七齡[illegible]如此、□□誠是不慮御恩也、故中大臣勞有十年所叙也、今年八年有此御恩、不可思議也、

(台記)仁平四年[illegible]正月五日戊午、午剋許、範家[illegible]内覽中文、戊剋、[illegible]以範家仰叙人事、此中右馬權頭[illegible]清天養元年任、當職久安四年叙正五位下、[illegible]今年請叙四品、[illegible]是[illegible]經[illegible]、[illegible]家[illegible]十八年[illegible]以[illegible]定[illegible]等[illegible]也、由外記[illegible]本不入[illegible]文、可叙[illegible]又大中臣[illegible]叙[illegible]清宣、公宣中加階[illegible]中三人以[illegible]宮[illegible]功可申也、[illegible]清宣父祭主清親可[illegible]宮使

賞也、(去年給親申曰、先例遣文使遷宮之後、預加階恩、敍任受領、而清宣不待遷宮、敍一階、其後有輕服、只以清親爲遣文使、遷宮了、清親預賞、其賞讓清宣也、余問曰、一度遣宮、兩度加階、有先例哉、清親曰、先例遣文使預加階受領賞、如階賞清宣不待遷宮敍了、清親讓曰、遷宮時、如預受領賞、今以其賞讓清宣、止受領申加階也、)此亦可敍否、申曰、說依官勞加階者、

論歷不論官、賞清歷已過輝資嫌定、尤可被敍、中氏四人加階、若有恩許、四人悉可有恩、若無恩許、

俱不許可宜歟、或賞或否、必有含怨者、仍召大外記師業給硯等、此次付橘氏名簿、亥時伴氏長師長參

內、仰廳人來召、次第如常、

〔玉海〕承安三年正月五日戊戌、今日敍位議也、六日己亥、被敍位聞書、○中略宗盛卿小童(四歲)敍從上、童

加階不聞事也、

建久六年正月五日辛卯、此日敍位議也、巳剋職事等來於外出居內覽申文、(余(藤原兼實)冠直衣)申剋著束帶參

內、日沒左大臣(○藤原實房)參陣、即有召、余著殿上、大臣已下列立弓場、此間秉燭、大臣著殿上、余參御前、大

臣同參著、(右大臣又參)次大納言定能、中納言通親、泰通等、齎置筥文、參議著座之後、依召余幷兩大臣著簾

下圓座、奏十年勞帳、返給復座之間、余賜御硯筥申文、大臣依仰召續紙、(長)摺墨敍式部外記筥、無省奏、

召宗賴被尋問、申云、省奏加申文畢云々、此事未曾有也、省奏者立籤入外記筥、付短冊、加硯筥之申文

事何例哉、然而更召省奏之條、依可懈怠、余撰出與執筆即敍之、次敍藏人、(余召之)次召院宮御申文、此間

敍王氏、持參御申文、(納言持之)合四通、大臣摺笏押筥奏之、返給敍氏爵、次敍外記史、次敍院宮給、次余與

外記勘文折紙申文等、次第敍之、此間依寒風、余參簾中之間、執筆召入內一加階勘文、即進之、(宗賴朝臣)大

臣摺笏進寄奏聞、(唯一通文可取副筥也、不如敍實歟)返給復座、皆敍畢之後、一度鈎勘文、又申文等更見合、一々懸勾入、

第三筥、敍殘申文幷外記勘文等、加入敍位奏聞、(先是敍位硯紙、長月日入一筥)奏聞、御覽畢、余卷之、勘文申文等不

可返給之由、余密々奏之、仍敍位一通入筥返給、大臣取之、取出敍位置筥左(上也)之後、替筥取移入、第

三筥之文書等、如本返入之後、取副敍位於笏、揖退下殿上、授入眼上卿左衛門督隆房云々、

〔平戶記〕寬元三年正月五日辛丑、今日敍位也、○中略後聞、今夜敍位之儀、三公已下公卿十人許參仕、左

女叙位例

大臣〇中略執筆云々、中略

這般儀已不知其數、皆以有〇〇事、皆不得其心、然本代之風無是非者歟、

（親長卿記）明應四年正月五日、叙位儀云々、本行右大弁俊名朝臣執筆左大臣〇中略中御門大納言

宣胤、菅中納言長直、三條中將實香、中御門大納言入眼本行云々、左府自元長卿亭出立云々、

（日本書紀二十九天武）朱鳥元年五月丙辰、宮人等增加爵位、

（日本書紀三十持統）五年八月丁酉、內命婦等給食封各有差、

〇按ズルニ內命婦ハ五位以上ノ婦人ヲ謂フ、由テ公事根源ニ持統天皇五年ノ紀ヲ以テ女

叙位ノ始トナスハ其紀事ノ正月ニ係レルヲ以テナランカ、

（日本書紀三十持統）五年正月癸酉朔、賜親王諸臣內親王女王內命婦等位、

（大日本史持統紀）公事根源曰、女叙位者始於此、按帝王編年記、天武帝十三年乙酉始授婦女位階、本

書所不載、未知何據、

（帝王編年記十天武）十四年乙酉始婦女授位階、

（續日本紀元明）靈龜元年正月癸巳、授二品氷高內親王一品、

（續日本紀元正）養老元年正月庚申、授從四位上縣犬養橘宿禰三千代從三位、

（續日本紀元正）養老七年正月丙子、授夫人正三位藤原宮子從二位、日下女王、廣背女王、粟田女王、六人

部女王、星河女王、海上女王、智努女王、島野女王並從四位下、他田舍人、直刀自賣正五位上、大宅朝臣

諸姉、黃文連許志並從五位上、大春日朝臣家主從五位下、

（日本紀略嵯峨）弘仁四年正月壬戌、〇八日女叙位、

（日本後紀二十四嵯峨）弘仁六年正月庚辰、〇八日正六位上石田王授從五位下、正五位下大原眞人淨子從

四位下、外從五位下凡直右刀自從五位下、從八位下百濟宿禰王四子、无位大網公廣刀自外從五位

下、

〔西宮記正月中〕一女敍位
應和四年正月十日、使左近中將重光朝臣、賜齋院內親王位記、令命婦照子取女敍位位記、今日內侍
不候、仍以代官令給之、

〔法成寺攝政記〕寬弘二年正月九日戊午、以左頭中將經房被仰云、(中略)今年可有女敍位年也、可被行
日申定者、令奏、明日許宜侍歟、　十日己未、參內、有女敍位事、女御義子正三位、尊子從三位、內府申由
敍人拜十六人、此次被定藏人右近少將雅通、文章生藤賴任、雜色源賴國等也、事了退出、(中略)戌時許、
左頭中將經房來云、有御來、物忌固、以人非可示者、雖物忌重、相會、被仰云、右大臣參入令奏云、弘徽殿
女御賜加階、可賜承香殿女御者、各所申二位、爲之如何云、令奏云、女敍位日、弘徽殿賜正三位、承香殿
又賜同階宜侍哉、唯任叡慮、他人何奏哉、從頭中將許消息持來被見、賜兩女御從二位者、右府申賀退
出云々、今恩賜各正三位宜哉、

〔小右記〕長和五年正月八日癸丑、今日有女敍位、其次以主計頭吉平敍從四位下、朝恩之至也、陰陽家
爲無比肩之者歟、又敍位源雅孝、大國充親、(雅孝、丹波守隆遠子、東宮、充親、元興寺河內堤功云々、)源中納言、(俊賢)自女敍位所參
入、事下、女敍位之聊也、被聊所讀也、今日參人公卿、大納言道綱、賴通、公任、中納言俊賢、行成、懷平、教通、
賴宗、經房、實成、參議兼隆、道方、通任、賴定、朝經、入夜資業來云、有女敍位、被補藏人、(補任好)

〔水左記〕承曆四年正月十日甲戌、早旦自大外記定俊之許、送女敍位勘文案、予(○源俊房)依可參□、今日女
敍位、內々爲見其體所遣尋也、(中略)未剋頭辨送書云、早可參入者、答唯今參入之由了、申剋著束帶參
內、先參關白御直廬、依被參御前、不賜對面、即參殿上、令頭辨實政朝臣申參入之由、此間時剋推移、已
及秉燭、大略所所御申文未出來歟、博陸出殿上、給下官開中不審事等、頃之歸參御前給、次御出、博陸
亦被候、實政朝臣來召下官、下官出自殿上上戶、經簀子敷、進圓座南邊候、依博陸被示、著圓座、依御氣

色召侍從藏人少納言基綱參來、[illegible]十帖紙而附紙可進之旨示仰之、退出、

(後二條關白記)寬治六年正月十一日癸巳、女叙位儀也、殿下[illegible]於御前所被行之、御裝束如除目、先著陣座、左大臣子[illegible]人藏人頭[illegible]當執筆、

(中右記)康和四年正月十五日、女叙位云々、執筆民部卿、[illegible]右大臣殿[illegible]給從三位藤光子、[illegible]此外別事不聞也、

大治五年正月八日、今夕有女叙位、御殿內御出、仍皆予數數參上、[illegible]殿下[illegible]執筆內大臣[illegible]藏人頭[illegible]中納言[illegible]關白殿之上[illegible]被叙三位、名宗子、[illegible]關白殿之上、今夜叙女御殿御方也、三位之後初令退出給、藏人頭兼官、仰參事宣旨、出車檳榔毛三兩、[illegible]右近權中將伊通參御事、[illegible]中將宗能[illegible]依人々[illegible]下道上御消息[illegible]三條為判小路宅也、殿下叙位之後[illegible]直衣、先令退出給、然而殿京極北殿所共令候內給之間、叙三位、退出之又、被仰藏事宣旨也、今夜付御傳行也、　廿六日己巳、關白殿之上、先日女叙位次被叙三位、也、件位記今日從內給也、御使少將[illegible]先立御所中門[illegible]左中將實光[illegible]實光召勅使少將持位記著座、右近權將伊通相具、取位記參廉中、付女房、伊通取祿給勅使、々又束少將下、庭[illegible]二拜歸參、件事後日聞之所書記也、

(玉海)文治五年正月九日庚子、先日女叙位也、[illegible]出著直衣參內、先參御前、奉行職事頭參之故也、秉燭向直廬、職事等參來奉行定所也、[illegible]中將[illegible]各來、中納言[illegible]出、今日直廬女除目、余[illegible]於直廬故實來帶出居、去年秋除目、今年叙位、[illegible]不出[illegible]今日非關人之上、女叙位簾中之例不詳、先是於休所職事等候中文了、家司權弁親經[illegible]簾中文了、余出居也、次以定經召執筆左大將參上、執筆作法有不審事等、不遑具錄、[illegible]奉行職事經[illegible]如此、余參內之後、忠尋披

中文、少々書直了、院宮御申文、使頭中將也、入眼上卿實宗卿也、事了改裝束退出、

建久五年正月八日庚午、此日女敍位式日也、雖可被行之、延引例太多、十一日宜之由勘申、仍後日可行之由仰也、今日雖無日次之障、五日以後連日出仕、上下有煩之故也、　十一日癸酉、此日女敍位也、〇中略余〔[illegible]〕著廣庇圓座召人、宗頼朝臣參上、〇中略余取集空勸文申文等、〔敍爵申文也、〕指遣之、大臣取之置前、〔御簾下置文、其[illegible]中文等、敍位室[illegible]文書置也、還退歸了、〕先敍藏人御匣殿、敍了奏事由、仰院宮御申文、〔忠季朝臣奉之、〕次敍內敎坊、〔本設中以[illegible]持參御申文、[illegible]敍了後[illegible]如例、〕次奏院宮御申文、〔是作法如官奏、敍位除目之間、不返給奏書之間、不反本座、是依無其程也、官奏文書御覽太久、仍歸著本座與敍〕位、〔與官[illegible]退[illegible]合作法不[illegible]、心花園設[illegible]〇中略〕次第敍了奏事由、召小輪轉勸文、〔被如小字如何、召宗頼所被仰也、又入內一、如階勸文事被問余、余云、近代不進歟、然而一〕〔召[illegible]可在[illegible]大臣先[illegible]、文事[illegible]仰了、[illegible]件[illegible]文[illegible]〕宗頼退下、其間敍女官等、小時宗頼持參小輪轉勸文、申兩勸文不候之由、大臣不被見件勸文、於余如何、即敍之、次余授加階申文三通、即敍之、皆敍了取笏候氣色、有御目、又被氣色、余々目之、即書年號月日、放與一枚、卷之置硯西、余云、可有男敍位、藤原範宗殷富門院御給也、以放紙一枚被書之、置二通於御前、〇中略如初起座奏聞、復座、御覽〔至畢〕了、又參上、賜之復座、如本置硯以下、取副敍位二通於笏退下、

〔猪隈關白記〕承元二年正月八日戊寅、今日女敍位也、〔六日〇中略〕先之奉仕御裝束、立屛風、敷疊、併同除目儀、仍不具記、

〔園太曆〕貞和二年正月八日、傳聞、女敍位執筆花山院大納言、〔長定〕入眼事、平大納言奉行云々、　九日、外記送女敍位聞書、續左、

正五位下和氣成子〔命婦〕

從五位上藤原春子〔典侍〕

從五位下橘　知子〔掌侍〕

神　信子〔藏人〕

藤原朝子 典侍

橘　光子 掌侍

藤原通子 掌侍

源　中子 内侍

紀　秀明

坂上幸子

外從五位下藤井嶋子 女孺

貞和二年正月八日

〔三代實錄 十四 淸和〕貞觀八年十二月八日己卯、天皇射手結、(略)正四位下行左近衛中將兼伊豫守藤原朝臣基經特加從三位、任中納言、

〔續日本後紀 仁明〕承和四年十月戊午、授從五位上百濟王慶仲正五位下、正六位上百濟王忠誠從五位下、先太上天皇(略)幸交野遊獵處、有調習、因所叙也、

〔續古事談〕一條院圓融寺ヘ御幸アリ、(略)中御遊ノ時、主上御笛吹キ給ニ、其音メデタクタヘナリケレバ、院感ジテ、御笛ノ師左衛門督高遠ヲ召テ、三位ヲ免サレケレバ、高遠拜舞シテ上達部ノ座ニ加ハリツキケリ、

〔西宮記 臨時 四 八〕恩賞事(中略)
御遊次有勸賞者、(略)有叙位者、上卿仰近衛將、以白紙於御前庭召喚、(略)
延喜二十一正二十五日、勸敎忠於殿上加元服、(略)右少將伊衡以紙喚、敎忠又拜舞、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶六年正月癸卯、天皇御東院宴五位已上、有勅、召正五位下多治比眞人家主、從五位下大伴宿禰麻呂二人於御前、特賜四位當色、令在四位之列、卽授從四位下、

宴其宅授位

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年五月乙未、天皇幸右大臣 諸兄 橘 相樂別業、宴飲酣暢、授大臣男无位奈良麻呂從五位下、

〔續日本紀 十七 聖武〕天平二十年八月己未、車駕幸散位從五位上葛井連廣成之宅、延群臣宴飲、日暮留宿、明日授廣成及其室從五位下縣犬養宿禰八重、並正五位上、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年八月甲寅、高野天皇 ○孝謙 及帝幸藥師寺禮佛、奏呉樂於庭、施綿一千屯、還幸授刀督從四位上藤原朝臣御楯第宴飲、授御楯正四位上、其室從四位下藤原惠美朝臣兒從四位下、

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年正月癸酉、幸右大臣 ○藤原永手 第、授正二位、其室正五位上大野朝臣仲智從四位下、

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲三年二月壬寅、幸左大臣 ○藤原永手 第、授從一位、其男從五位上家依從五位下、其室正四位下大野朝臣仲智並賜二階、癸亥、幸右大臣 ○吉備眞備 第、授正二位、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年二月戊辰、幸右大臣 大中臣清麻呂 第、授正二位、其室正五位下多治比眞人古奈禰正五位上、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年十一月甲辰、幸坂合部内親王第、授從二位、文室眞人大市正二位、四品坂合部内親王三品、乙巳、授大市妻無位錦部連針魚女外從五位下、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜八年三月戊辰、幸大納言藤原朝臣魚名曹司、賜從官物有差、授其男從六位上藤原朝臣末茂從五位下、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆三年閏九月乙卯、天皇幸右大臣 ○藤原是公 田村第宴飲、授其第三男弟友從五位上、

在外國者敍位

〔續日本紀 十二 聖武〕天平九年九月己亥、授 中略 正六位上中臣朝臣廣成 ○在唐未歸 中略 外從五位下、

〔續日本紀二十五〕天平寶字八年正月乙巳、以入唐大使正四位下藤原朝臣清河從三位、

〔本朝世紀〕[illegible]四年十一月廿一日庚寅、敍位儀也、右大臣內大臣以下參入

十一月廿一日大嘗會敍位

正三位藤原朝臣[illegible]

正四位上藤原朝臣[illegible]

正四位下源朝臣[illegible]

從四位上藤原朝臣[illegible]　藤原[illegible]實　源朝臣[illegible]

從五位上藤原朝臣[illegible]實　藤原[illegible]房

從五位下[illegible]　高階[illegible]成　藤原[illegible]

[illegible]原[illegible]　藤原公通　佐伯[illegible]

紀[illegible]定　源[illegible]　藤原基[illegible]

橘貞國

佐伯政輔　藤原能實

丹波宗[illegible]　多治助任　清井公俊

藤原[illegible]俊　[illegible]俊[illegible]　藤原俊[illegible]

藤原實定

藤原宣季

丹波忠康　高階[illegible]

藤原季房　源[illegible]通　藤原直家

[illegible]　大中臣貞[illegible]　秦倫定

藤原章經　橘季房　賀茂重平
藤原武忠　文室行元　源清經
藤原親貞　藤原願經(以上備中掾)
外從五位下伊岐泰政(宮主)　坂上十襲　各務明盛
石野則任　凡海貞通　小槻重任(以上近江掾)
栗秀類　丹波致成　山永輔
石野範季　石野範行(以上備中掾)

〔吉記〕元暦元年十一月十七日壬寅、今日被行大嘗會敍位議、公卿堀河大納言、(忠親)左兵衛督、(頼實)平宰相(親宗)等參仕、藏人弁定長仰召仰於堀河大納言、藏人少輔親經召諸卿、有宣文、左少弁基親、弁定長等候之、平宰相奉仕執筆、左大弁依輕服不被催云々、但有先例歟如何、殿下御隨身季經朝臣(殿上人)勤之、頭弁光雅朝臣奉仕勸盃云々、予可早參之由相存之處、向□□間風氣更發、且又洞酔及夜景云云、家別催之間也、可早進之由、□修理可參相存之間□□相待予參、留置簿逐電、令退出給云々、予遲遲不慮懈怠無職事之告故也、而不給簿於清書上卿、宜退出給、偏被貽違例歟、若□有奇恠也、可恐可恐、去々年大嘗會敍位之時、又以如此云々、巳爲流例可謂之歟、予無左右參御直廬、頭弁被直參進可給簿、予寄伺見之處、簿有御硯筥左□之退出於休所、召外記筥、外記云、筥當時不候、皆々在御所、其申狀不似、雖不當示頭弁、以藏人□障筥文、次持來其筥々、仍納給外記、次向仗座、直著端座、次外記進敍位筥、次召官人令敷軾、次召弁定長、上卿可令敷座之由、其次定長仰予云、左衛門尉平景秀可任、次掃部寮敷内記座、(兼座柱以南内敷之)次召官人、仰可召内記之由、次大内記光輔入宣仁門參著軾、予仰云、位記持參、内記奉仰退出、次大内記率少内記二人、令持位記筥參進著、(五位已下人別持一筥、硯一合)了各著座前、次予目光輔進寄、予取敍簿給光輔、光輔取之復座、令人獸、是任簿書人名字於位記、分式兵也、光輔之於宮

若無叙位儀下式兵二省仍不留之內侍奏聞不進之間人覽其由可仰不參也被問職事可仰沙汰歟

近例之趣上不使之由令之由聞不具其請將出之由局下部持參自身使授之[illegible]爲此儀者對人寫可持參歟次內記進叙位宣二枚[illegible]予加論事[illegible]次可內覽奉聞然而於內覽者近代多有先例可奉聞歟被問仍不參是付職事儀爲行也內記起座退入次予仰云近衞司下藏人頭喚參進小庭跪候更問云誰藏人頭官姓名次仰云召內豎內豎二人次誰司文書於軒廊內東第二間[illegible]次口宣頭人自日華門進就案下給叙位宣[illegible]次仰云中務少輔並藏人宜仁門著賦給位記宣取之就案下[illegible]少納言請印次請印畢並授進位記宣予又加論事[illegible]次又可內覽奏聞由被仰勘之次內記書事予給仰可令次第之由是文次第令高付藏人此間予以官人召外記長衞參進仰可令持參硯紙之由仍可有除目所召國可相具之由仰之次外記持參硯紙置參議座前內記次第□□留人位記於其座之次召右少弁定長[illegible]次定長著座予氣色定長進寄予取叙位簿次復座書下名二通書式部兵部不書一人書之但公卿不書之王四位無位之由書之[illegible]叙姓之輩叙內階依不審相尋內記之處於□內階之例間存之由之於有例者被所事歟自由之依然[illegible]叙爵者先例外階之由存之云云仍雖未可書之由也定長若是執筆失錯也又賀茂在憲書叙位字藤原保季書季保之由無疑殆之事等件簿介書直於叙位者不似除目入眼之外不可直之故也次書下名□□書除目[illegible]下書畢之□叙位下名二通除目一通取副笏束予座前授之乾削作復座予被見之取下名卷式部一卷上以紙結之以□可結而依不具用紙云々取除目入筥[illegible]

正二位

藤原朝臣家通

從二位

藤原朝臣隆忠　藤原朝臣頼實院御給　藤原朝臣忠良丹波權守

正三位

藤原朝臣經房近江守之讓

從三位

大中臣朝臣親俊縣主

從四位上

藤原朝臣盛實丹波守

從四位下

藤原朝臣能保　源朝臣兼忠近江權介　藤原朝臣範能

正五位下

源朝臣兼親父季長朝臣　中原朝臣師茂[illegible]外記勞年　藤原朝臣資康

藤原朝臣孝定　惟宗朝臣清直　安倍朝臣有親近江大掾

安倍朝臣在忠　丹波朝臣伊基　安倍朝臣廣基

安倍朝臣時光　安倍朝臣親長　安倍朝臣宗基

安倍朝臣資元丹波大掾

從五位上

源朝臣親行[illegible]下一　藤原朝臣季保父季經朝臣造國賞讓　藤原朝臣朝經

源朝臣雅親　高階朝臣泰貞

從五位下

信資王寛和御給　源朝臣有資藏人　高階朝臣泰能式部

姓號

三善朝臣長衡外記　　源朝臣憲行式　　藤原朝臣貲俊式
賀茂縣主成盛大皇太后宮御給　　源朝臣親時女御瑁子御給　　源朝臣通具
坂上宿禰定成諸司　　藤原朝臣成遠外衞　　藤原朝臣家能臨時
源朝臣盛久近江掾　　藤原朝臣貞久近江掾　　藤原朝臣時通近江掾
中原朝臣盛家近江掾　　中原朝臣爲清近江掾　　清科朝臣盛實近江掾
清科朝臣重義近江掾　　清科朝臣季永　　清科朝臣盛行近江掾
依智宿禰盛清近江掾　　安倍朝臣業行丹波掾　　中原朝臣盛房丹波掾
服部宿禰泰頼丹波掾　　藤原朝臣頼遠丹波掾　　惟宗朝臣盛季丹波掾
藤原朝臣能遠丹波掾　　大江朝臣宗弘丹波掾　　中原朝臣重行丹波掾
中原朝臣義盛丹波掾　　惟宗朝臣守俊丹波掾

元暦元年十一月十七日

〔中右記〕天仁元年十二月五日庚辰、今夕大嘗會女叙位也、〇中略今度御乳母二人、無沉付、或有又無、上階人、抑問大内記云、若女叙位中、有女上階時、可入別宮歟如何、答云、女叙位雖上階、只入宮也、於男位記者、依有次第入別宮、至女階者不次第、仍唯入同宮也、其理可然、

〔令義解七公式〕凡授位任官之日喚辭、謂、喚辭者、謂在御所面授任之辭、亦通於太政官也、三位以上先名後姓、謂假令喚云藤原麻呂宿禰之類、四位以下先姓後名、以外三位以上直稱姓、謂直稱藤原之類也、若右大臣以上稱官名、四位先名後姓、五位先姓後名、六位以下去姓稱名、謂直喚云麻呂、不稱官職也、授任之日及以外、亦皆准此也、

〔延喜式十八式部〕凡親王及諸王諸臣三位以上帶職事者、諸節會召名之時、以其官號加姓上稱之、尋常奏聞之詞亦同、但授位任官之日、並依常例、

〔玉海〕治承二年十二月廿四日癸丑、此日京官除目也、〇中略今夜頼政叙三位、第一之珍事也、是入道相

國〇平清盛奏請云々、其狀云、源氏平氏者、我國之堅也、而於平氏者、朝恩已普、一族威勢殆滿四海、是依勳功也、源氏之勇士多與逆賊、併當誅罰、賴政獨其性正直、勇名被世、未昇三品、已餘七旬、尤有哀憐、何況近日身沈重病云々、不赴黃泉之前、特授紫綬之恩者、依此一言被叙三品云々、入道奏請之狀雖賢、時人莫不驚耳目者歟、

〔源平盛衰記十六〕三位入道歌等附昇殿事
源三位入道賴政〇賴政ハ〇中略四位ノ殿上人ニテ、久ク世ニ仕エ奉ケルニ、述懷仕テ、
上ルベキタヨリナケレバ木ノ本ニ椎ヲ拾テ世ヲ渡哉
ト申タリケルニ依テ、七十五ニテ三位ヲ被免タ後、先途既ニ達ヌトテ、出家シテ源三位入道トモイハレケリ、

明治四十二年二月二十五日印刷
明治四十二年二月二十七日發行

神宮司廳

昭和八年十一月一日印刷
昭和八年十一月五日發行

（普及版古事類苑 全六十冊）

發行者 後藤亮一

發行者 川俣馨一

印刷者 和田助一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京 八九九六〇番
電話小石川(86) 一一〇五四番 三三六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所 製本）